

上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(7)

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 8分冊中の第7分冊。

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第38集 —

本 文 編

1992

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(7)

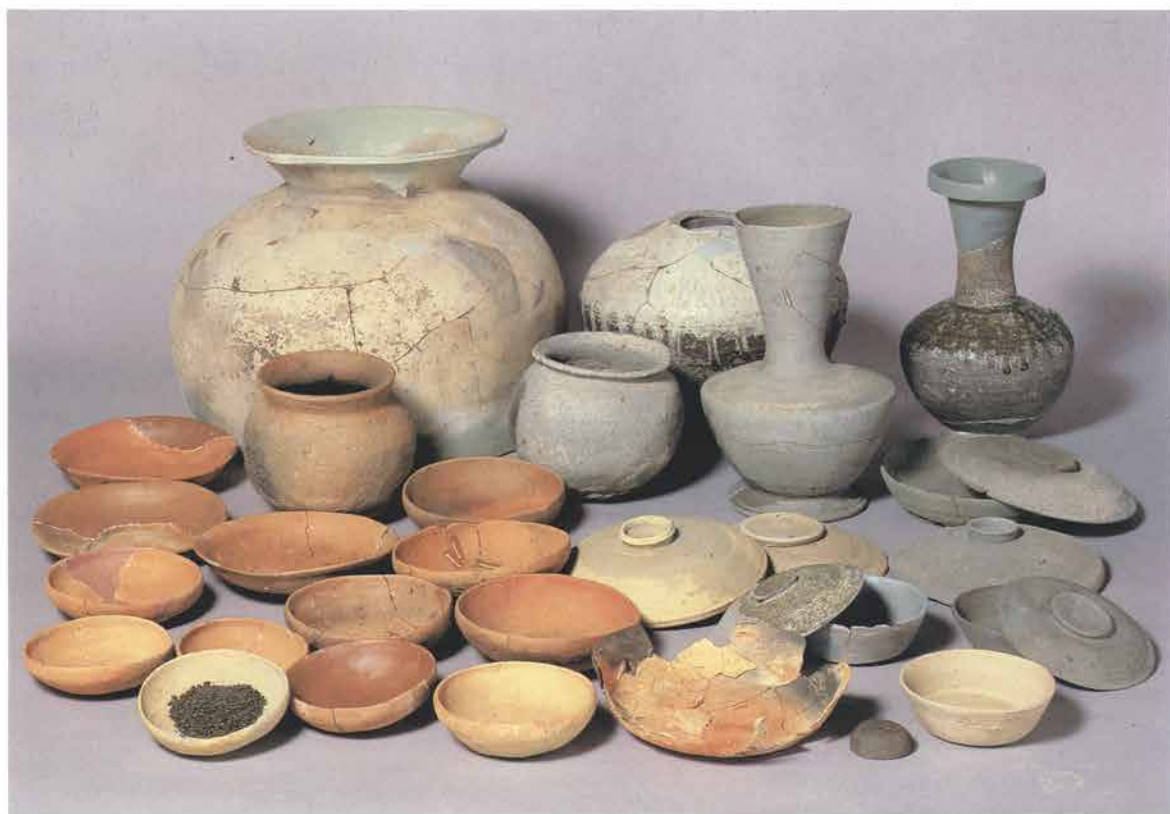
前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 8分冊中の第7分冊。

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第38集 —

本 文 編

1992

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 I区第211号住居跡出土遺物一括



2 I区第211号住居跡出土畿内産土師器杯



1 I区第58号住居跡出土畿内産土師器杯

2 I区第210号土坑出土鈴

序

関越自動車道新潟線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速自動車道として、昭和60年10月1日に開通いたしました。本道路の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が道路建設工事に先立って調査されました。本県でも70ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録されています。

本報告による上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡は、群馬郡群馬町東国分、前橋市元総社町に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和55年4月から昭和59年3月にかけて、当事業団が発掘調査しました。

ご承知のように本遺跡は、上野国分寺の僧寺・尼寺跡、上野国府跡、山王廃寺跡に隣接する遺跡として早くから識者の注目をあびていました。発掘調査によって縄文時代から奈良時代・平安時代・中世の国分僧寺・尼寺中間地域の歴史が明らかにされ、数々の貴重な資料が得られました。これらの資料は、昭和59年4月から8年計画で報告書作成のための整理作業が行われており、『上野国分僧寺・尼寺中間地域』として既に5冊の調査報告書が刊行されています。

今回I区についての整理が完了し、7冊目の報告書を作成することができました。本遺跡に隣接する史跡・上野国分寺跡では、現在県教育委員会により史跡整備事業が進められていますが、本報告書には国分寺創建前の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡、また、そこより多く出土した畿内産の土師器等貴重な資料が報告されています。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでに、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、群馬町教育委員会、地元関係者から種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りましたことに対し、深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告書が上野国分寺の創建及び本県の歴史を解明するための資料として、広く活用していただければ幸甚であります。

平成4年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い、記録保存のために事前調査された前橋市元総社町小見、群馬郡群馬町大字東国分小字村前・薬師道南・中道南・上野道南（植野道南）・高井道東地区に所在する「上野国分僧寺・尼寺中間地域」の埋蔵文化財発掘調査報告書8冊の内の第7冊である。
2. 委 託 者 日本道路公団東京第二建設局
群馬県教育委員会
3. 発掘調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調 査 期 間 昭和55年4月～昭和59年3月31日
5. 発掘担当者 佐藤明人・石井克己・石北直樹・徳江秀夫・木津博明・桜岡正信・麻生敏隆・関根慎二
※調査担当年度については、上野国分僧寺・尼寺中間地域（3）を参照。
6. 調査嘱託員 黒沢はるみ・間庭 稔
7. 事務担当者 邊見長雄・松本浩一・田口紀雄・佐藤 勉・神保侑史・住谷 進・岩丸大作・真下高幸・
国定 均・笠原秀樹・小林昌嗣・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・船津 茂
8. 整理事業は、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が昭和59年4月～平成4年3月までの8ヵ年にわたり実施するもので、本報告書は、平成1年11月～平成3年9月までの1年11月間に整理実施したI区の高墳時代（後期）～奈良・平安時代の検出された遺構・遺物を掲載した報告書である。
9. 整理担当者 桜岡正信・木津博明・友廣哲也
10. 整理補助員 黒沢はるみ（嘱託員）
安藤三枝子・金井さち子・木暮紀子・関口貴子・武永いち・角田孝子・中野秀子・萩原鈴代（50音順）を中心として以下の方々の協力を得た。鈴木幹子・長沼久美子（嘱託員）・今井サチ子・今井もと子・尾田正子・金子ミツ子・狩野君江・狩野フミ子・川原嘉久治・榊原浩美・佐藤美代子・篠原富子・嶋崎しづ子・下境マサ江・須田育美・高梨房江・高橋順子・高橋優子・高柳哲子・田村栄子・千代谷和子・角田みづほ・戸神晴美・南雲素子・生巢由美子・並木綾子・野島のぶ江・松井美智子・松井美智代・松下 登・八峠美津子・吉田恵子・吉田笑子・渡辺フサ江（50音順）
11. 遺物保存処理 関 邦一
北爪健二（嘱託員）・小材浩一
12. 写 真 撮 影 遺構 発掘調査担当者
遺物 佐藤元彦
13. 現場コンサルタント 並木秀行（三洋測量株式会社）
14. 出土遺物の鑑定及び一部遺構の分析については以下の方々に依頼した。（敬称略）
石材鑑定 飯島静男（群馬地質研究会）
掘立柱建物跡分析 石井栄一（世田谷区教育委員会）
15. 発掘調査及び本書を作製するにあたっては、群馬県教育委員会・前橋市教育委員会・群馬町教育委員会・同町都市計画課及び以下の方々の御指導・御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
上原真人・須田 勉・大川 清・大塚初重・新井房夫・池上 悟・斎藤孝正・吉岡康暢・平川 南・矢部良明・林部 均・前園実知男・本沢慎輔・大金宣亮・橋本澄朗・梁木 誠・田熊清彦・田代 隆・仲

山英樹・柳沼賢治・阿久津 久・瀬谷昌良・堤 隆・安田 稔・井口 崇・光江 章・高橋一夫・井上尚明・有吉重蔵・遠藤政孝・田崎通雄・種定淳助・岡崎正雄・松尾宣方・斉木秀雄・原 廣志・小林康幸・井澤洋一・増田 修・前原 豊・大塚昌彦・羽鳥政彦・宮崎重雄・玉口時雄

16. 発掘調査及び整理事業にかかわる業務委託は以下の通りである。

遺構実測(一部) 株式会社 測研

井戸跡調査 株式会社 原沢ボーリング (調査所見は同社有賀正明による)

胎土分析 群馬県工業試験場

17. 調査に至る経緯については、『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)』に詳述されているので、同報告書を参照願いたい。

18. 本書の編集は桜岡が担当し、執筆は以下の通りで、文責は目次に記した。

石井栄一・木津博明・桜岡正信・黒沢はるみ

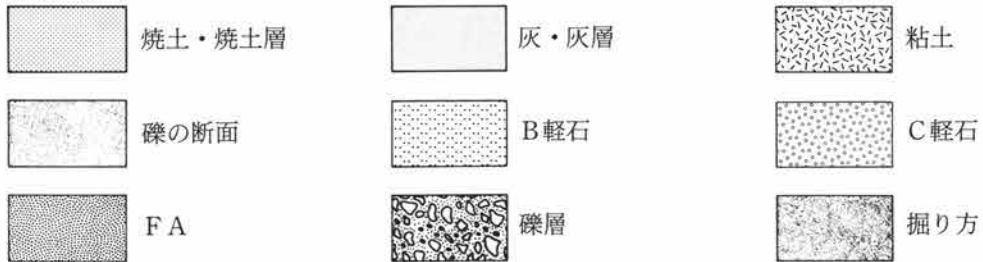
19. 発掘調査においては群馬町・吉岡町・榛東村・榛名町・渋川市・赤城村・前橋市・高崎市の多くの方々の御協力を頂いた。

20. 本遺跡の図面・写真・遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

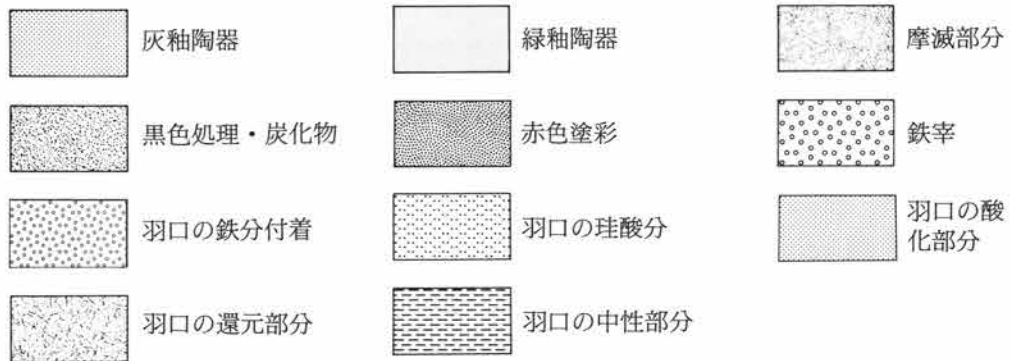
凡 例

1. 本書中に掲載した地形図は、国土地理院、1：25,000、群馬町・前橋市都市計画図、1：2,500を縮小し使用した。
2. 本書中の方位記号の方向は真北を指す。
3. 本書中の遺構実測図の縮尺は以下の通りである。
 竪穴住居跡 1：60 掘立柱建物跡 1：60 土坑 1：60 井戸跡 1：60
 溝状遺構 1：80 祭祀遺構 1：20 土壙墓 1：20 遺構配置図 1：500
 を基準としたが、この限りでないものについては明記した。
4. 遺構挿図中の等高線・断面基準線は海拔で表示し、断面基準線標高値はL=Wで示した。
5. 土層断面中のI～VII……………は、基本層序のI～VII……………を示し、覆土の層序は1～nとした。
6. 本書中にある火山灰は以下の通りに略記した。
 浅間B軽石(A s-B)→B軽石 浅間C軽石(A s-C)→C P 榛名山ニツ岳火山灰→F A、F P
7. 遺構挿図中に使用した遺物の記号は以下の通りである。
 土師器・須恵器・土師質土器 ● 灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁 ○ 石器 ▲ 金属製品 △
 紡錘車 ▲ 白玉 ◎ 土錘 □ 瓦 ■ 鞆の羽口 ★ 炭化物 □ 骨 ☆
8. 挿図中に使用したスクリーントーンは以下の通りである。

遺構実測図



遺物実測図



9. 遺構実測図中の遺物番号は出土遺物実測図の番号と一致し、挿図番号—遺物番号の順で記載した。
10. 遺物実測に当たっては、当事業団拡大整理委員会歴史部会で編集した「仕様書—遺物編」に準拠したが、すべてがこの限りではない。
11. 本書中の遺物実測図の縮尺は以下の通りである。
 土器・土製品 1/3 (大型品1/6、瓦1/5) 石器・石製品 1/3 (白玉1/1または1/2)

金属製品 1/3 (古銭1/1、鈴1/2) この限りでないものについては個別に明記した。

12. 遺物観察表中の () は完形品以外の推定値または復原値を表し、重さでは残存量を計測した。金属製品については錆等の除去後の数値である。また、出土位置の記述中、カマド及び床下土坑中の遺物は床面からの差を±で表示し、貯蔵穴及び柱穴内の遺物は各々の底面からの差を計測した。さらに、1個体の遺物が2か所以上から出土し、差が生じている場合は○～○cmと表示し、床直の遺物は±0 cmと表示した。
13. 遺物観察表中の「色調」は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色表監修1976年9月発行の「標準土色帖」を使用し記載したが、細部においては観察者の個人差がみられる部分もある。
14. 本文編・遺物観察表編を通して使用した土器の種別については、原則として轆轤使用・還元焰焼成のものを須恵器、轆轤不使用・酸化焰焼成のものを土師器として扱ったが、中間的なものについては判断を避けた表現をしたものがある。
15. 土器の器種については、原則として高台を付すものを「埴」、付さないものを「坏」、口径に比較して器高の著しく低いものを「皿」とし、その他「甕」「壺」等を使用した。文献にあたりたり、概念規定を明らかにした上で使用したものではなく、あくまでも整理上便宜的に使用した器種名称である。
16. 遺物写真は、古銭・白玉等は1/1、紡錘車・青磁破片・その他破片等は1/2、甕・羽釜・瓦等の大型品等1/6 (完形の瓦1/8)、それ以外は原則として1/4を基準としたが、この限りでないものもある。
17. 遺物写真の見出しは、各遺構名称と挿図番号を併記した。
遺構名称では、○—○住の始めが調査区を示し、後が遺構番号を示す。
挿図番号では、○—○は始めが挿図番号を示し、後が遺物番号を示す。
18. 遺物写真の見出しでは、遺構名称を以下のように略称した。
住居跡→住、掘立柱建物跡→掘立、土坑→坑、井戸跡→井戸、溝状遺構→溝、祭祀遺構→祭祀、土墳墓→土墳墓、住居状遺構・不明遺構→址。
19. 本遺跡出土遺物の注記は、「KK17」を冠し区名・遺構名称を記入した。始めのKは「関越自動車道」のKanetuのKで、次のKはKousokudouのKで、17は群馬県内で南から17番目の遺跡であることを示す。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
対照目次

第1章 調査経過	
第1節 調査経過	（桜岡正信） …… 1
第2章 グリッドと基本層序	
第1節 基本杭とグリッド	（ 〃 ） …… 2
第2節 基本層序	（木津博明） …… 3
第3章 遺跡位置	
第1節 遺跡位置	（桜岡正信） …… 4
第4章 検出された遺構・遺物	
第1節 調査の概要	（ 〃 ） …… 5
第2節 検出された遺構・遺物	
1. 竪穴住居跡	（ 〃 ） …… 6
2. 掘立柱建物跡	（石井栄一・桜岡正信） ……377
3. 土 壙 墓	（桜岡正信） ……408
4. 祭 祀 跡	（ 〃 ） ……409
5. 土 坑	（ 〃 ） ……412
6. 井 戸 跡	（ 〃 ） ……441
7. サク状遺構	（ 〃 ） ……459
8. 溝状遺構	（ 〃 ） ……460
9. 遺構外出土遺物	（ 〃 ） ……477
10. 追 補	（ 〃 ） ……485
第5章 ま と め	
第1節 検出遺構について	
第1項 北側（F～J区）の集落変遷について	（桜岡正信） ……488
第2項 I区検出の竪穴住居について	（ 〃 ） ……492

1. 重複関係について	（桜岡正信）	492
2. 主軸方位について	（ 〃 ）	494
3. 張り出しを有する住居について	（黒沢はるみ）	496
4. 特異な貯蔵穴について	（ 〃 ）	500
第3項 I区検出の掘立柱建物跡について		502
1. 建物の構造について	（石井栄一）	502
2. 掘立柱建物跡群の位置付けについて	（桜岡正信）	505
第2節 出土遺物について		
第1項 畿内産暗文土師器について	（桜岡正信）	511
1. I区の出土状況について	（ 〃 ）	511
2. I区第58号住居跡出土遺物の時期的位置付けについて	（ 〃 ）	512
3. I区第211号住居跡出土遺物の時期的跡位置付けについて	（ 〃 ）	513
第2項 I区の在産暗文土師器の出土状況について	（ 〃 ）	515
第3項 I区第126号住居跡出土遺物について	（ 〃 ）	516
第4項 刷毛を施した土師器甕について	（ 〃 ）	516
第5項 I区第217号住居跡出土遺物について	（ 〃 ）	517
第6項 I区の鉄器の出土状況について	（ 〃 ）	518

対 照 目 次

名 称	本 文 編					観 察 表	写 真 図 版	
	総 頁	遺構表	所 見	遺 構 挿 図 (番 号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
調 査 経 過	1		1					
基本杭とグリッド	2		2					
基 本 層 序	3		3					
遺 跡 位 置	4		4					
調 査 の 概 要	5							
検出した遺構・遺物	6			5				
I 区第 1 号住居跡	7~9	7	7	6	7・8	1・2	12	128・129
I 区第 2 号住居跡	9~11	9	9	9	10	2	12・13	129
I 区第 3 号住居跡	11~13	11	11・13	11	12・13	2・3	13	129
I 区第 4 号住居跡	13~14	13	13	14	15	3	13	129・130
I 区第 5 号住居跡	14~17	14	14	16	17・18	3・4	13・14	130
I 区第 6 号住居跡	17~19	17	17・18	19	20・21	4・5	14・15	130・131
I 区第 7 号住居跡	19~22	19	19・21	22・23	24・25	5・6	15	131・132
I 区第 8 号住居跡	23	23	23	26	26	7	16	132
I 区第 9 号住居跡	24・25	24	24	27	28・29	7・8	16・17	132・133
I 区第 10 号住居跡	26	26	26	30	30	8	18	133
I 区第 12 号住居跡	26・27	26	26	31	31	8	18	133
I 区第 13 号住居跡	27・28	27	28	32	32	8・9	18	133
I 区第 14 号住居跡	29~32	29	29・30・32	33・34	35・36	9・10	19	133・134
I 区第 15 号住居跡	32~35	32	32	37・38	39~41	10~12	19・20	134・135
I 区第 16 号住居跡	36・37	36	36	42・43	44	12・13	21	135・136
I 区第 17 号址	37・38	37	38	45	—	—	21	—
I 区第 18 号住居跡	38・39	38	38	46・47	47	13	21	136
I 区第 19 号住居跡	39・40	39	39・40	48	48・49	13・14	21・22	136
I 区第 20 号住居跡	41・42	41	41	50	51	14	22	—
I 区第 21 号住居跡	42・43	42	42	52・53	53	14	22	136
I 区第 22 号住居跡	43~45	43	43	54・55	55・56	15・16	23	136・137
I 区第 23 号住居跡	45~47	45	45~47	57	58	16	23	137
I 区第 24 号住居跡	48	48	48	59	59	17	24	137
I 区第 25 号住居跡	48・49	48	48・49	60・61	61	17	24	138
I 区第 26 号住居跡	49~53	49	50・53	62	63~65	17・18	24・25	138
I 区第 27 号住居跡	53~55	53	53・54	66・67	67	18	25・26	139
I 区第 28 号住居跡	56	56	56	68	68	18・19	26	139
I 区第 29 号住居跡	57	57	57	69	69	19	26	139
I 区第 30 号住居跡	58・59	58	58	70	71・72	19	27	139
I 区第 31 号住居跡	59・60	59	59・60	73	74	20	26・27	139
I 区第 32 号住居跡	60~62	60	61	75	75・76	20・21	27	140
I 区第 33 号住居跡	62~64	62	62	77	77・78	21・22	27・28	140・141
I 区第 34 号住居跡	64~69	64	64・65・68	79・80	81~83	22~24	28・29	141~143
I 区第 35 号住居跡	69~71	69	70	84・85	85・86	24・25	29	143・144
I 区第 36 号住居跡	71・72	71	71・72	87・88	88	25・26	30	144
I 区第 37 号住居跡	73~75	73	73	89	90~92	26・27	30・31	144・145
I 区第 38 号住居跡	76~78	76	76・78	93・94	94・95	27・28	31	145
I 区第 39 号住居跡	78~80	78	80	96	97	28	32	146
I 区第 40 号住居跡	81・82	81	81	98	98・99	29	32	146
I 区第 41 号住居跡	82	82	82	100	101	29・30	33	146
I 区第 42 号住居跡	83・84	83	83	102・103	103	30	33	146
I 区第 43 号住居跡	84~86	84	84・85	104	105	30・31	76	—
I 区第 46 号住居跡	86~88	86	87・88	106	107	32	34	147
I 区第 47 号住居跡	88~91	88	89・91	108・109	109・110	32・33	34	147
I 区第 48 号住居跡	91・92	91	92	111・112	113	33・34	35	148
I 区第 49 号住居跡	93・94	93	93	114	115	34	35・36	148
I 区第 50 号住居跡	94・95	94	94	116	116	34・35	36	148
I 区第 51 号住居跡	95・96	95	95・96	117	117	35	36	148
I 区第 52 号住居跡	97・98	97	97	118	119・120	35・36	37	148
I 区第 53 号住居跡	98・99	98	98	121	122	36	37	148・149

名 称	本 文 編					觀察表	写 真 図 版	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
I 区第54号住居跡	99~102	99	99・100	123・124	124・125	36・37	38	149
I 区第55号住居跡	102・103	102	103	126	127	38	38	149
I 区第56号址	102・103	102	103	126	127	38	38	149
I 区第57号住居跡	104~106	104	104	128	129~131	38~40	38	149・150
I 区第58号住居跡	106~110	106	106	132~134	134~136	40~42	39	150~152
I 区第59号住居跡	110~112	110	110・111	137	137・138	42・43	40	152
I 区第60号住居跡	112~114	112	112	139	140・141	43・44	40	152・153
I 区第61号住居跡	115~118	115	116	142~144	144・145	44・45	40・41	153
I 区第63号住居跡	118~120	118	120	146	147	45	41・42	154
I 区第64号住居跡	121~122	121	121	148	148・149	46	42	154
I 区第65号住居跡	122~125	122	122・123	150・151	152~154	46~48	42・43	154・155
I 区第66号住居跡	125~127	125	125	155・156	157・158	48・49	43	154~156
I 区第67号住居跡	128・129	128	128	159	159・160	49	43・44	156
I 区第68号住居跡	129・130	129	130	161	162	49・50	44	156
I 区第69号住居跡	131	131	131	163	163	50	44・45	156
I 区第70号住居跡	132	132	132	164	165	50	45	156
I 区第71号住居跡	132~134	132	132・133	166	167	50・51	45・46	156・157
I 区第72号住居跡	134~136	134	135・136	168	169・170	51・52	46	157
I 区第73号住居跡	136~140	136	136	171・172	173~175	52・53	47・48	157・158
I 区第75号住居跡	140・141	140	141	176	176	53・54	49	158
I 区第76号住居跡	141~144	141	141	177・178	179~181	54・55	49	158
I 区第77号住居跡	144・145	144	144	182・183	183	55	50	158
I 区第78号住居跡	145・146	145	145	184	184	56	50	158
I 区第79号住居跡	146・147	146	146・147	186	185	56	50	158
I 区第80号址	147・148	147	148	187	188・189	56・57	50	158・159
I 区第81号住居跡	148~153	148	148	190・191	192~195	57~60	51	159~161
I 区第82号住居跡	154~156	154	155・156	196・197	198	61	52	161
I 区第83号住居跡	156~158	156	158	199	200	61	53	—
I 区第84号住居跡	159・160	159	159・160	202	203	62・63	54	161
I 区第85号住居跡	161・162	161	161・162	204	205	63	54・55	161・162
I 区第86号住居跡	161~163	161	161・162	204	206	63・64	55	162
I 区第87号住居跡	163~165	163	163・164	207	208	64	55・56	162
I 区第88号住居跡	166	166	166	209	209	64	56	163
I 区第89号住居跡	167	167	167	210	210	65	57	163
I 区第90号住居跡	167~175	167	167・168	211・212	213~219	65~69	57・58	163・164
I 区第91号住居跡	176・177	176	177	220	220・221	70	58	164・165
I 区第92号住居跡	177	177	177	222	222	70	—	—
I 区第93号住居跡	178~181	178	178	223	224~226	70~72	58・59	165・166
I 区第94号住居跡	181~184	181	182	228	229~231	72~74	59・60	166・167
I 区第95号住居跡	184	184	184	232	232	74	60	167
I 区第96号住居跡	185	185	185	233	233	74	60	167
I 区第97号住居跡	186・187	186	186	234	235	74・75	60・61	167
I 区第98号住居跡	187~189	187	188	236・237	238・239	75・76	61	167・168
I 区第99号住居跡	154	154	155	196・197	—	—	52	—
I 区第100号住居跡	190~192	190	191	240	241・242	76・77	62・63	168
I 区第101号住居跡	192・193	192	193	243	244	77	63	—
I 区第102号住居跡	193~195	193	193	245・246	247・248	77・78	63	168・169
I 区第103号住居跡	195~197	195	195	249	250・251	78・79	63	169
I 区第104号住居跡	197~199	197	197	253	252・254・255	79・80	64	169・170
I 区第105号住居跡	199~202	199	199	256・258	257・260	80・81	65	170
I 区第106号住居跡	202~204	202	202・203	261・263・264	263・264	81	65・66	170・171
I 区第107号住居跡	204・205	204	204・205	265・266	267	81・82	66	171
I 区第108号住居跡	205・206	205	206	268	269	82	66・67	171
I 区第109号住居跡	206・207	206	207	270	270	82	67	171
I 区第110号住居跡	207・208	207	207・208	271	271	82・83	68	171
I 区第111号住居跡	207・208	207	207・208	271	—	—	68	—
I 区第112号住居跡	207・208	207	207・208	271	271	83	68	—
I 区第113号住居跡	209	209	209	272	272	83	68	—

名 称	本 文 編					観察表	写 真 図 版	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
I 区第114号住居跡	209・210	209	210	273・274	274	83	68・69	171
I 区第115号址	210	210	210	275	—	—	103	—
I 区第116号住居跡	211～214	211	211・213・214	276	277・278	83・84	69	172
I 区第117号住居跡	214・215	214	214	279	280・281	85	70	173
I 区第118号住居跡	215～217	215	215	282・283	284・285	85・86	70・71	173・174
I 区第119号住居跡	218・219	218	219	286	287	86・87	71	173・174
I 区第121号住居跡	220・221	220	220	288	288・289	87	71	174
I 区第122号住居跡	221	221	221	290	290	87・88	71・72	174
I 区第123号住居跡	222	222	222	291	291	88	72	174
I 区第124号住居跡	222・223	222	222・223	292	—	—	72	—
I 区第125号住居跡	223～225	223	224・225	293	294・295	88	72・73	174・175
I 区第126号住居跡	225・226	225	226	296	296・297	89・90	73	175
I 区第127号住居跡	226～229	226	227・228	298	298～300	90	74	175
I 区第128号住居跡	229	229	229	301	301	91	74	—
I 区第129号住居跡	230～233・235・236	230	230・232	302	304・306・307	91・92・95・96	74～76	176～178
I 区第130号住居跡	230～236	230	230・232	302・303	304～307	92・95・96	74～76	176～178
I 区第131号住居跡	236・237	236	237	308	308	96	74～76	178
I 区第132号住居跡	230～232・234～236	230	230・232	302	305～307	93・95・96	74～76	177・178
I 区第133号住居跡	230～232・235・236	230	230・232	302・303	306・307	95・96	74～76	177・178
I 区第134号住居跡	230～232・235・236	230	230・232	302	306・307	95・96	74～76	177・178
I 区第135号住居跡	230～232・234～236	230	230・232	302	305～307	93～96	74～76	176～178
I 区第136号住居跡	84～86	84	84・85	104	105	31・32	76	147
I 区第137号住居跡	237～239	237	237	309	310	96	76・77	178
I 区第138号住居跡	239～241	239	239・240	311・312	313・314	96・97	77	178・179
I 区第139号住居跡	241・242	241	241	315・316	316	97・98	77	179
I 区第140号住居跡	242・243	242	242	317	318	98	78	179
I 区第141号住居跡	243～246	243	244	319	319～321	98・99	78	180
I 区第142号住居跡	246・247	246	246	322・323	324	99・100	78	180・181
I 区第143号住居跡	248・249	248	248	325	325	100	78・79	181
I 区第147号住居跡	249・250	249	249・250	326	327	100	79	181
I 区第149号住居跡	250・251	250	250・251	328	329・330	100・101	79・80	181
I 区第150号住居跡	252・253	252	253	331	331・332	101・102	80	181・182
I 区第151号住居跡	253～255	253	253	333	333・334	102	80・81	182
I 区第152号住居跡	255	255	255	335	336	102・103	81	—
I 区第153号住居跡	211～214	211	211・213・214	276	277・278	84・85	69	172
I 区第154号住居跡	256～259	256	256～258	337・338	339・340	103	81・82	182・183
I 区第155号住居跡	256～260	256	256・258	337・338	341・342	103・104	81・82	183
I 区第156号住居跡	260・261	260	260	343	344	105	82	184
I 区第157号住居跡	261・262	261	261	345	346	105	82・83	184
I 区第158号址	262	262	262	347	347	105	83	—
I 区第160号址	244	244	244	319	—	—	83	—
I 区第161号住居跡	262～265	262	263	348・349	349・350	105・106	83・84	184
I 区第162号住居跡	45	45	45～47	46	47	16	84	137
I 区第164号住居跡	265	265	265	351	351	106	84	—
I 区第165号住居跡	265～267	265	265・266	352	353	106・107	84・85	184・185
I 区第166号住居跡	267・268	267	267・268	354	355	107	85	185
I 区第167号住居跡	268・269	268	269	356	356	108	86	185
I 区第168号住居跡	269～271	269	269・270	357	358	108	86	185
I 区第169号住居跡	—	—	—	—	—	—	87	—
I 区第171号址	271・272	271	272	359	360	108・109	87	185
I 区第173号址	250	250	250・251	328	—	—	87	—
I 区第174号住居跡	272・273	272	272・273	361	361・362	109	88	185
I 区第175号住居跡	265	265	265・266	352	—	—	84・85	—
I 区第176号住居跡	273～276	273	273	363・365	364～366	109・110	88	185・186
I 区第177号住居跡	276・277	276	277	367	368・369	110	89	186
I 区第178号住居跡	277～279	277	277	371	370・372	111	89	186
I 区第179号住居跡	279・280	279	279	373	373	112	89	186
I 区第180号住居跡	280～282	280	281・282	374	375	112	89	186

名 称	本 文 編					観察表	写 真 図 版	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番 号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
I 区第181号住居跡	280~282	280	281・282	374	375	112・113	89・90	186・187
I 区第182号址	58・59	58	58	70	72	20	90	139
I 区第183号住居跡	283~288	285	285・288	376~378	379・380	113~115	90・91	187
I 区第184号住居跡	283~285・288・289	285	285・288	376	381	115	91	187
I 区第186号住居跡	289	289	289	382	—	—	91	—
I 区第187号住居跡	289・290	289	289	384	383・385	116	91	188
I 区第188号住居跡	290~293	290	290	386・388	387・389・390	116・117	92	188
I 区第189号住居跡	294~296	294	294・295	391・392	393・394	117・118	92	188・189
I 区第190号住居跡	296・297	296	296	395	396	118・119	92	189
I 区第191号住居跡	297・298	297	297	397	398	119	93	189
I 区第192号住居跡	298・299	298	298	400	399・400	119・120	93	189
I 区第193号住居跡	299・300	299	299	402	401・403	120	94	190
I 区第195号住居跡	300~302	300	301	404	405	120・121	94・95	190
I 区第196号住居跡	302~304	302	302	406	407・408	121~123	95	190・191
I 区第197号住居跡	304~306	304	304・305	409	410・411	123	95	191
I 区第198号址	306	306	306	412	—	—	95	—
I 区第199号住居跡	306・307	306	306	413	414	123・124	96	191
I 区第200号住居跡	307~309	307	307・308	415・416	416	124	96	—
I 区第201号住居跡	309・310	309	309	417・418	419	124	96	191
I 区第202号住居跡	310・311	310	311	420	421	124・125	97	191
I 区第203号址	311・312	311	312	422	423	125	97	—
I 区第204号址	311・312	311	312	422	423	125	97	191
I 区第205号址	281・282	281	281・282	374	375	113	97	—
I 区第206号住居跡	313・314	313	313・314	425・426	425	125・126	97	191
I 区第207号住居跡	314~317	314	314	427	428・429	126・127	98	192
I 区第208号住居跡	318~324	318	320	431・432	433~437	128~132	98・99	192~194
I 区第209号住居跡	325~327	325	325	441・442	443・444	133・134	99・100	194
I 区第210号住居跡	328~330	328	328・330	445	446・447	134・135	100	194・195
I 区第211号住居跡	330~335	330	330・335	448・449	449~453	136~139	100~102	195~197・222
I 区第213号住居跡	335・336	335	335	454	454	139	102	197
I 区第214号住居跡	311~313	311	312	422	423・424	125	102	191
I 区第216号住居跡	336~339	336	336	455	456・457	139・140	103	197
I 区第217号住居跡	341~344	341	341・342	461・463	462・465・466	141~143	104	197・198
I 区第218号住居跡	341~344	341	341	461	464~466	141~143	104	198
I 区第219号住居跡	336・337・339~341	336	336	455	458~460	140・141	103・104	197・198
I 区第221号住居跡	344~348	344	344・345・348	467・468	469~471	143~145	104	198
I 区第222号址	348・349	348	348	472	472・473	145	—	199
I 区第223号住居跡	349・350	349	349	474・475	475	145	104	199
I 区第224号住居跡	350・351	350	350	476	476・477	146	105	199
I 区第225号住居跡	351~353	351	353	478・479	479・480	146・147	105	199
I 区第226号住居跡	354・355	354	354・355	481	482	147	105・106	—
I 区第227号住居跡	355・356	355	355・356	483	484	148	106	199
I 区第228号址	356・357	356	356	485	486	148	—	199・200
I 区第229号址	318~320・324	318	320	431・432	438	132	98・106	193
I 区第230号址	357~360	357	360	487	487~490	149~152	107	200・201
I 区第234号住居跡	360・361	360	361	491	—	—	107	—
I 区第235号址	361	361	361	492	492	152	107	—
I 区第239号住居跡	361・362	361	361	493	494	152	107・108	201
I 区第240号住居跡	362・363	362	362・363	495	495	153	108	201
I 区第241号址	363~365	363	363・364	496	497・498	153・154	108	201
I 区第243号址	365	365	365	499	—	—	108	—
I 区第245号住居跡	365・366	365	366	500	—	—	108	—
I 区第246号住居跡	223~225	223	224・225	293	294・295	89	108	175
I 区第247号住居跡	366~368	366	366	502	501・503・504	154・155	109	202
I 区第248号住居跡	368・369	368	368・369	505	505	155	109	—
I 区第249号住居跡	318~320・324・325	318	320	431・432	439・440	132・133	109	194
I 区第250号住居跡	369・370	369	369・370	506	507	155	109	—
I 区第251号住居跡	370	370	370	508	509・510	156・157	110	202

名 称	本 文 編					観察表	写 真 図 版	
	総 頁	遺構表	所 見	遺 構 挿 図 (番 号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
I 区第252号住居跡	314・315・317	314	314	427	430	127・128	110	192
I 区第253号住居跡	371～373	371	371	511・512	512・513	157	110	202
I 区第254号住居跡	373～375	373	373	514	515・516	157・158	110・111	202・203
I 区第255号住居跡	226～229	226	227・228	298	299・300	90	111	175
I 区第256号住居跡	226～229	226	227・228	298	300	91	111	175
I 区第258号住居跡	157～159	157	158	199	200・201	62	53・54	161
I 区 第 259 号 址	366・367	366	366	502	—	—	109	—
I 区第260号住居跡	375・376	375	376	517	—	—	—	—
I 区第261号住居跡	375・376	375	376	517	—	—	—	—
I 区第262号住居跡	376	376	376	518	—	—	111	—
I 区 第 263 号 址	376	376	376	518	—	—	—	—
I 区 第 264 号 址	199～201	199	199	256・258	259	81	65	170
I 区第1号掘立柱建物	378・379	—	379	520	520・521	158・159	112	202・203
I 区第2号掘立柱建物	379・380	—	379	522	522	159	112	—
I 区第3号掘立柱建物	380・381	—	380	523	523	160	112	—
I 区第4号掘立柱建物	381～383	—	381	524・525	525	160	112	203
I 区第5号掘立柱建物	384・385	—	385	526	526	160	112	203
I 区第6号掘立柱建物	385～387	—	385	528・529	527	161	112	203
I 区第7号掘立柱建物	387・388	—	388	530	531	161	112	—
I 区第8号掘立柱建物	388・389	—	388	532	532	161・162	112	—
I 区第9号掘立柱建物	389～391	—	389	533	534	162	113	—
I 区第10号掘立柱建物	391・392	—	392	535・536	536	162	113	203
I 区第11号掘立柱建物	392・393	—	392	537	537	162	113	203
I 区第12号掘立柱建物	393・394	—	393	538	538	162・163	113	—
I 区第15号掘立柱建物	394・394	—	394	539	539	163	113	—
I 区第16号掘立柱建物	395・396	—	395	540	540	163	113	—
I 区第17号掘立柱建物	396～398	—	396・397	541	542	163	113	204
I 区第18号掘立柱建物	398	—	398	543	—	—	113	—
I 区第19号掘立柱建物	398・399	—	398	544	544	163	114	—
I 区第20号掘立柱建物	400・401	—	401	545	545	164	114	—
I 区第21号掘立柱建物	401・402	—	402	546	546	164	114	—
I 区第22号掘立柱建物	402・403	—	403	547	—	—	114	—
I 区第23号掘立柱建物	403	—	403	548	—	—	114	—
I 区第24号掘立柱建物	403	—	403	549	—	—	114	—
I 区第25号掘立柱建物	404・405	—	405	550	550	164・165	114	—
I 区第26号掘立柱建物	405	—	405	551	—	—	115	—
I 区第27号掘立柱建物	405	—	405	552	—	—	115	—
I 区第28号掘立柱建物	406・408	—	408	553	555	165	115	—
I 区第29号掘立柱建物	406・408	—	408	553	—	—	115	—
I 区第30号掘立柱建物	406・408	—	408	553	—	—	—	—
I 区 第 7 号 土 墳 墓	408・409	—	409	556	557	165	115	204
I 区 第 1 号 祭 祀 遺 構	409～411	—	409	558・559	559・560	165・166	115・116	204
I 区 土 坑	412～440	—	412・419・422・440	561～570・572～584	561～585	166～175	87・116～123	204～207
I 区 第 1 号 井 戸 跡	441	441	441	586	—	—	—	—
I 区 第 2 号 井 戸 跡	441・442	441	441	587	588	175・176	123	207
I 区 第 4 号 井 戸 跡	442～446	442	446	589	590～592	176・177	123・124	207・208
I 区 第 8 号 井 戸 跡	446～449	446	446	593	594～596	177～179	124	208・209
I 区 第 9 号 井 戸 跡	450～459	450	450	597	598～606	179～184	124	209～212
I 区第1号サク状遺構	459	—	459	607	—	—	124	—
I 区第2号サク状遺構	459	—	459	607	—	—	124	—
I 区第3号溝状遺構	460	—	460	608	608	184・185	124	212
I 区第4号溝状遺構	461	—	461	609	609	185	—	—
I 区第5号溝状遺構	462	—	462	610	610	185	—	—
I 区第7号溝状遺構	462	—	462	610	610	185・186	125	—
I 区第9号溝状遺構	463	—	463	611	611	186	125	—
I 区第12号溝状遺構	463	—	463	611	611	186	—	212
I 区第13号溝状遺構	463・464	—	463	612	612	186・187	125	212
I 区第14号溝状遺構	465	—	465	613	613	187	126	—

名 称	本 文 編				観察表	写 真 図 版		
	総 頁	遺構表	所 見	遺 構 挿 図 (番 号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
I 区第15号溝状遺構	465・466	—	465	614	614	187	126	—
I 区第17号溝状遺構	466・467	—	466	615	615	187・188	126	—
I 区第18号溝状遺構	466・468～471	—	466	616	616～619	188～190	126・127	212・213
I 区第19号溝状遺構	472・473	—	472	620	621	191・192	—	213・214
I 区第20号溝状遺構	472	—	472	620	620	191	—	—
I 区第21号溝状遺構	474	—	474	622	622	192	127	—
I 区第22号溝状遺構	474	—	474	623	623	192	—	—
I 区第26号溝状遺構	475・476	—	476	624	—	—	—	—
I 区第27号溝状遺構	475・476	—	476	624	—	—	—	—
I 区第28号溝状遺構	475・476	—	476	624	625	192・193	108	214
I 区第29号溝状遺構	475・476	—	476	624	—	—	127	—
I 区 遺 構 外	477～484	—	—	—	626～633	193～204	—	214～222
追補								
F 区第 7 号溝状遺構	485・486	—	486	634	635	204・205	—	—
J 区第 1 号住居跡	487	—	—	636	636	205	—	—
I 区 遺 構 外 追 補	487	—	—	637	637	205・206	—	—

題 名	総 頁	挿 図 (番号)
検出遺構について		
北側調査区（F～J区）の集落変遷について	488～491	638・639
竪穴住居跡について	492～501	640～645
I区検出の掘立柱建物跡について	502～510	646～648

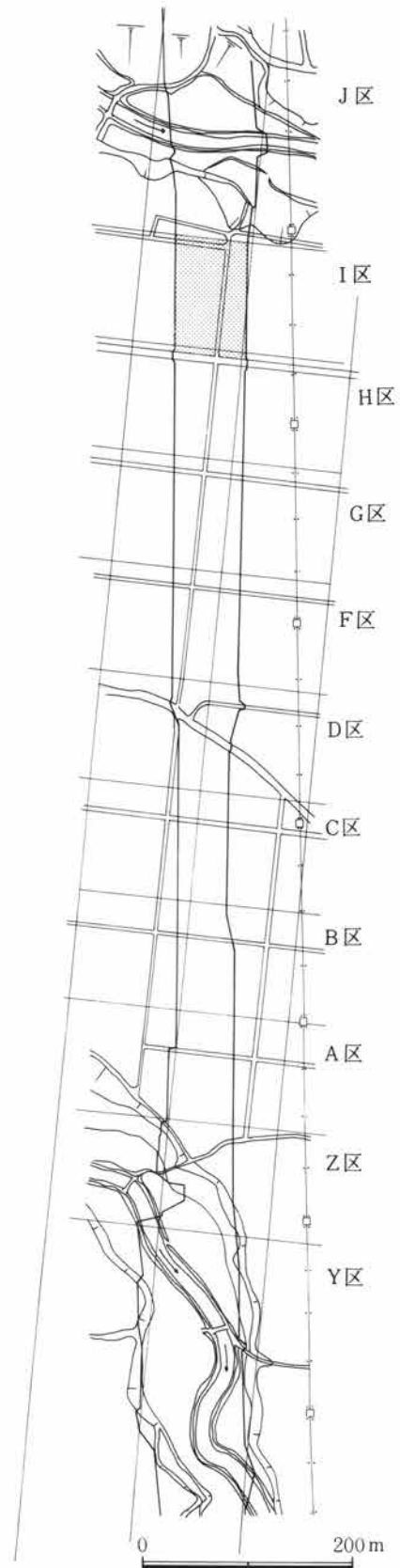
題 名	総 頁	挿 図 (番号)
出土遺物について		
畿内産暗文土師器について	511～514	649～653
在地産暗文土師器の出土状況について	515	654
I区第126号住居跡出土遺物について	516	655
刷毛を施した土師器甕について	516	656
I区第217号住居跡出土の灰釉陶器について	517	657・658
鉄器の出土状況について	518～520	659

第1章 調査経過

第1節 調査経過

当遺跡の調査経過及び体制については、『上野国分僧寺・尼寺中間地域（1）～（3）』の例言等に詳しいので、ここでは簡潔に触れることにしたい。当遺跡の調査は、昭和54年度後半に群馬県教育委員会事務局文化財保護課によって実施された、遺跡の遺構密度を把握することを目的とした試掘調査と、この試掘調査結果を踏まえて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が昭和55年5月から昭和59年3月までの約4年間実施した本調査に分けられる。本調査は、当初調査区を南北に分けた2班体制（南側＝I班、北側＝II班）で開始したが、昭和57年度以降は、調査体制が2班から1班へと縮小され、調査方法の迅速化が要求されると共に、本線と側道及び工事用道路の分割調査が実施され、調査最終段階まで継続した。

本報告書に掲載したI区は、『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』に掲載した北側調査区であるJ区の南に接する調査区である。調査は生活道路として利用されていた調査区内の南北及び東西農道部を除いて、昭和55年10月からII班（石井・桜岡）が調査着手し、翌、昭和56年4月からは担当に徳江を加え、昭和57年3月まで継続調査した。農道部以外の部分の調査がほぼ終了したのは昭和57年5月であり、一部平行してH区等の他調査区の調査を実施したものの、第1次の調査には約1年8ヵ月を費やしたことになる。南北農道及び東西農道下を対象とした第2次調査は、調査体制が1班（木津・麻生・桜岡）に縮小された後の昭和58年8月以降に実施し短期間で終了した。I区における細部の調査工程は、南北に調査区を縦断する農道を境にして西側部分（広面積部分）を先行調査した。これは、当初から本線西側に工事用道路（西側道）が予定されていたことによる工事工程との調整の結果である。この西側部分がほぼ調査終了した段階で、東側部分の北半の調査を実施することによって排土置き場を確保後に、西側部分南半の調査を行った。農道下の調査は、先行調査した両側部分を完全に埋めもどし、西側道部に農道を切り換えた後に調査を実施した。第1次調査と第2次調査との間に時間的隔たりがあるのは、調査体制が1班に縮小されたことから、調査主体が南側調査区に移らざるを得なかったことによる。I区の南端には「山王線」と呼ばれている舗装道路が東西に走っているが、関越自動車道のカルパートによって現状変更を伴わないため、調査対象とはならなかった。



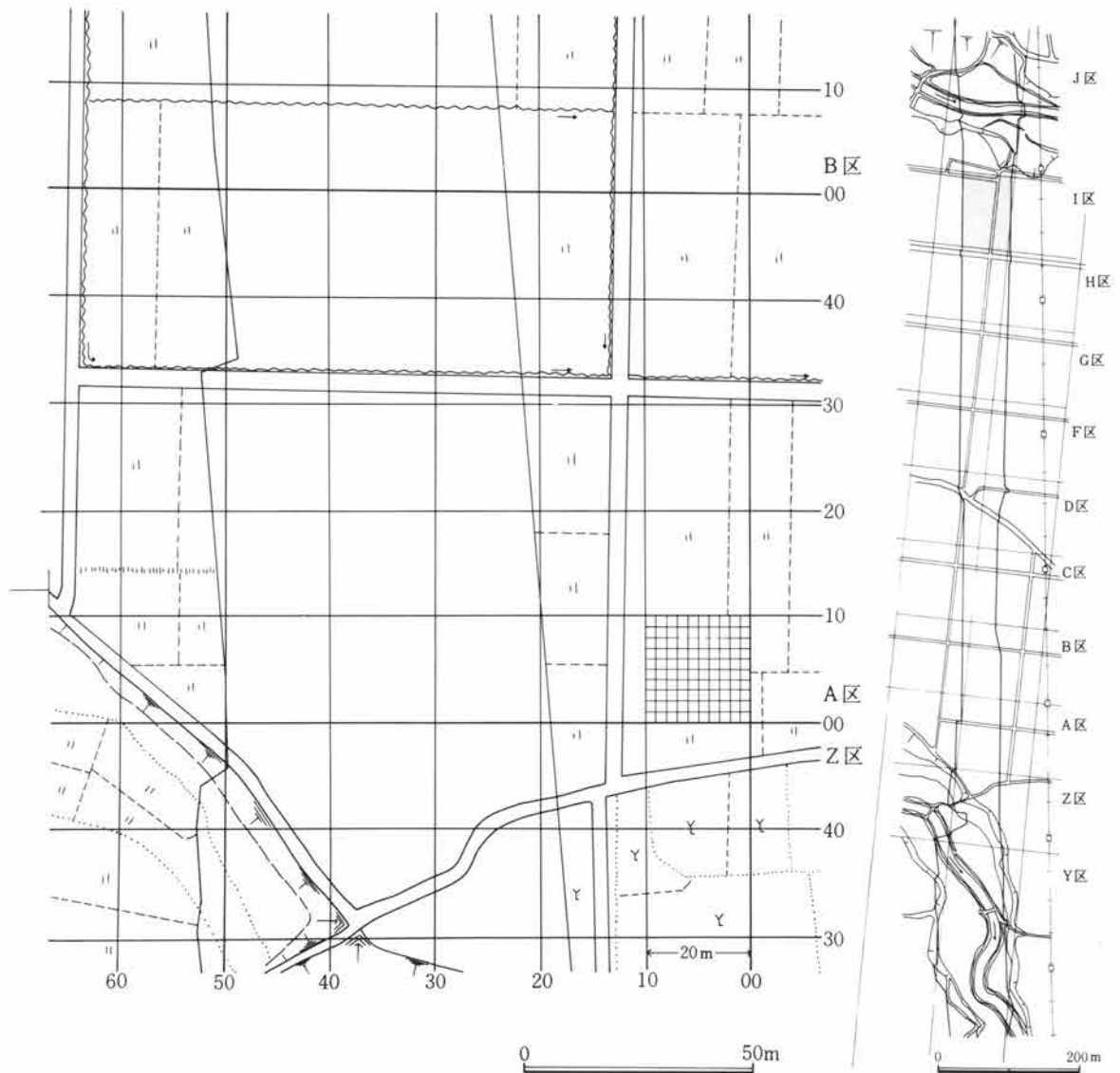
第1図 調査経過概念図

第2章 グリッドと基本層序

第1節 基本杭とグリッド

調査区のグリッド設定は、史跡上野国分寺跡の保存整備事業との関連も考慮して、国家座標を使用した。基準としたのは、調査区南の染谷川左岸に位置するIX系X=43400、Y=-72100である。この位置を00として南北100m、東西200mを大グリッドとして南からY（河川敷）・Z・A～J（Eを除く）の11区を設定した。また、大グリッド内は、南東コーナー部を基準として北方向に0～50(50=次大グリッドにおける0)、西方向に0～100の数字を与えた2m×2mの小グリッドに区分した。杭の設定は、調査の便宜上10mごとに行い、必要に応じて増設した。

小グリッド名称は、大グリッド同様南東コーナー杭名称をもって呼称することとし、(X軸上の数字)－大グリッド名－(Y軸上の数字)として表記した。



第2図 基本杭とグリッド

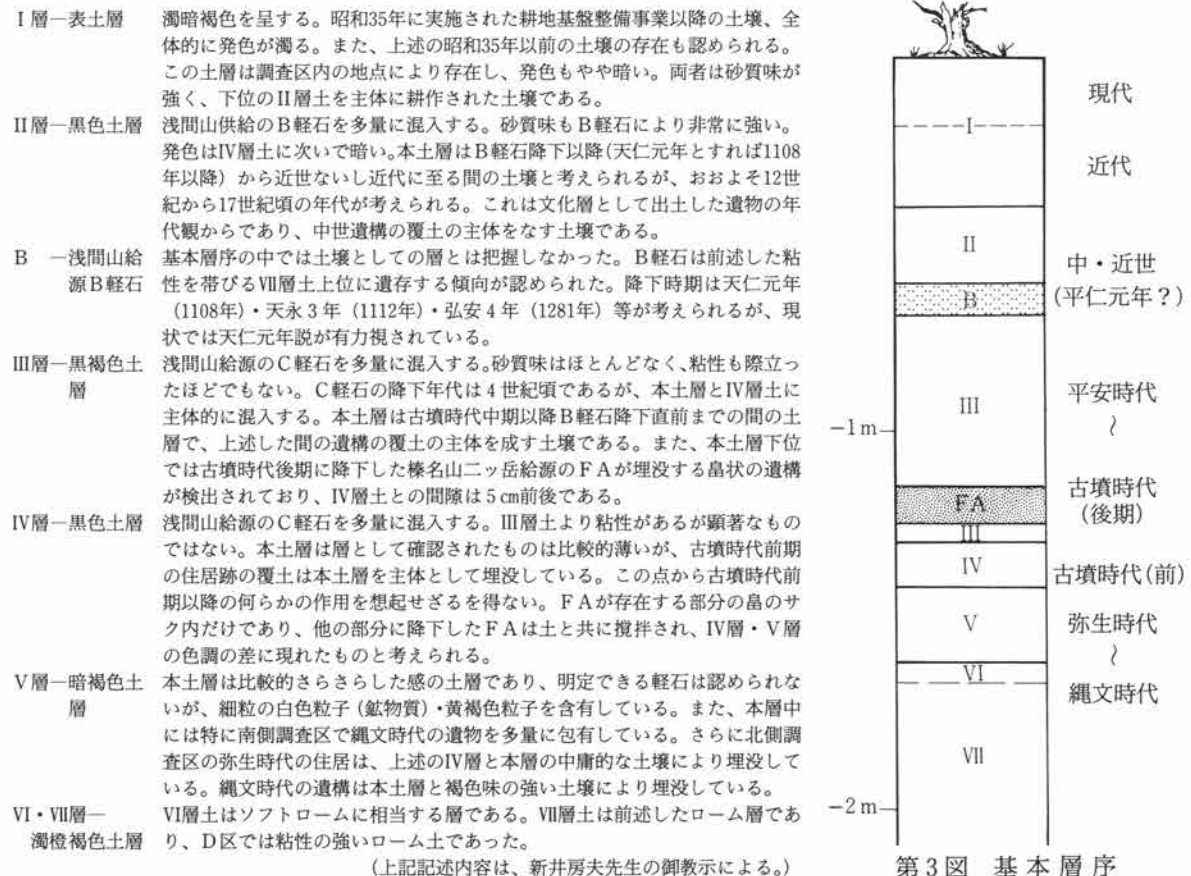
第2節 基本層序

当遺跡は榛名山東南麓・浅間山東方に位置し、両山の火山活動の痕跡は土層中において顕著に認められた。基本層序は上述の火山活動時に噴出された「火山灰・軽石」を含有するもので、その種類の含有等により分層できる。基本層序は第3図に示したとおりであるが、各調査区の地点により層厚等差異が認められるが、おおよそ図示した状況であり、図はD区での状況を模式図化したものである。

上層は7層に分層できる。地山はローム土層であり、同層下位は火山系のシルト層でその粒子・色調によって分層できるが、ここではローム土層を地山と呼称し、ローム土層下位の土層については井戸跡の断面図を参照されたい。ローム土層は堆積時の状況により2分される。これは黄褐色を呈する部分と濁橙褐色を呈する部分である。前者は比較的乾燥状態での堆積で、後者は水性ないし水の流路部であった可能性が指摘されている。さらに前者は砂質味を帯びる部分等も認められ、後者は粘性に富んでいる。これらの状況は、両者が調査区内を横断する様に認められる点で、地形の傾斜方向に沿うと考えられる。また、この両者のあり方は上位の層にも影響を及ぼしており、前者の上位層のIV・Vは粗粒質土であるのに対し、後者の上位層のIV・V層は比較的微粒質で粘性に富んでいる。

このローム土層の堆積した段階では地山の起伏が著しく、上位層はこの起伏を埋める様な状態で堆積しており、おおよそ平坦になったのは奈良時代に至っての頃と考えられる。また、調査区の部分によってはV層土の層厚の変化が著しいが、倒木痕の調査によりV層土は調査区全体に均一的に堆積していたことが判明した。

基本層序

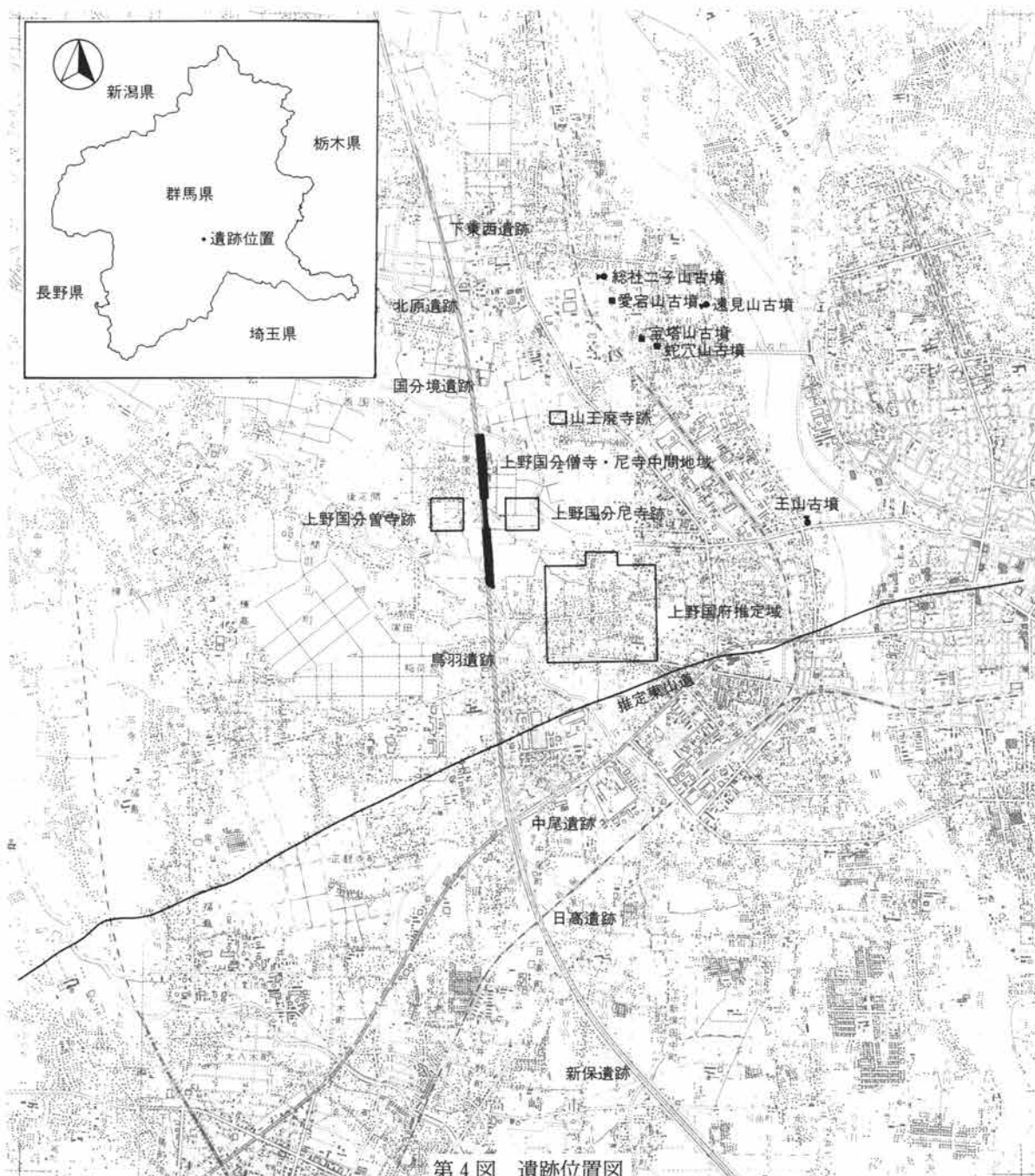


第3図 基本層序

第3章 遺跡位置

第1節 遺跡位置

当遺跡は、群馬県のほぼ中央わずかに南寄りに位置しており、南流する利根川右岸の、前橋市中心部から西へ4km付近の前橋市元総社町および群馬郡群馬町東国分の両地区にわたって所在している。遺跡立地は、北側を牛池川に、南側を染谷川によって開析された前橋台地と呼ばれる平坦な洪積台地上である。当遺跡からは縄文時代前期から中世までの遺構が多数検出されており、周辺に関連する多くの遺跡が点在している。これらの遺跡立地や周辺遺跡の詳細については、『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)～(3)』を参照願いたい。



第4章 検出された遺構・遺物

第1節 調査の概要

当報告書に報告したI区は、古代から中世に及ぶ遺構が多数検出されているが、縄文時代～弥生時代及び中世以降の遺構・遺物については既に『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)(2)』に報告したので、当報告書では古墳時代後期～平安時代の遺構・遺物を対象として報告する。

I区は、調査経過でも述べたとおり、調査区を南北に走る農道を境にして東西に調査区が分けられている。この農道は、生活道路として利用されていたことから容易に撤去することができず、農道下の調査は必然的に両側部分を埋めもどし、農道を付け替えた後に二次調査を実施した。このため農道下とその両側の遺構確認面には微妙な相違が生じ、一次調査で確認調査されていた遺構が二次調査では明確に確認できなかったものもあるため、遺構平面がうまくつながらない部分が生じている。

当報告書に掲載した古墳時代後期～平安時代の遺構の確認は、中世以降の遺構確認面と同様に基本的にはIV層中で行った。さらに確認困難な部分については順次VI層土まで確認面を下げることで対処した。

調査区内の調査順序は、南北農道の東側調査区北端→西側調査区全面→東側調査区南側→農道下という順で実施した。また、遺構別の調査順序は、竪穴住居跡を主体的に調査した後に掘立柱建物跡や土坑等の調査へと移行した。当調査区で主体となる遺構は竪穴住居跡と掘立柱建物跡であるが、これらの遺構は他の遺構との重複が激しく、単独で調査できたものはごくわずかである。このため重複部分の新旧関係については、調査段階で土層断面の観察等を通して十分にその把握に努めたが、把握しきれなかったものも多い。

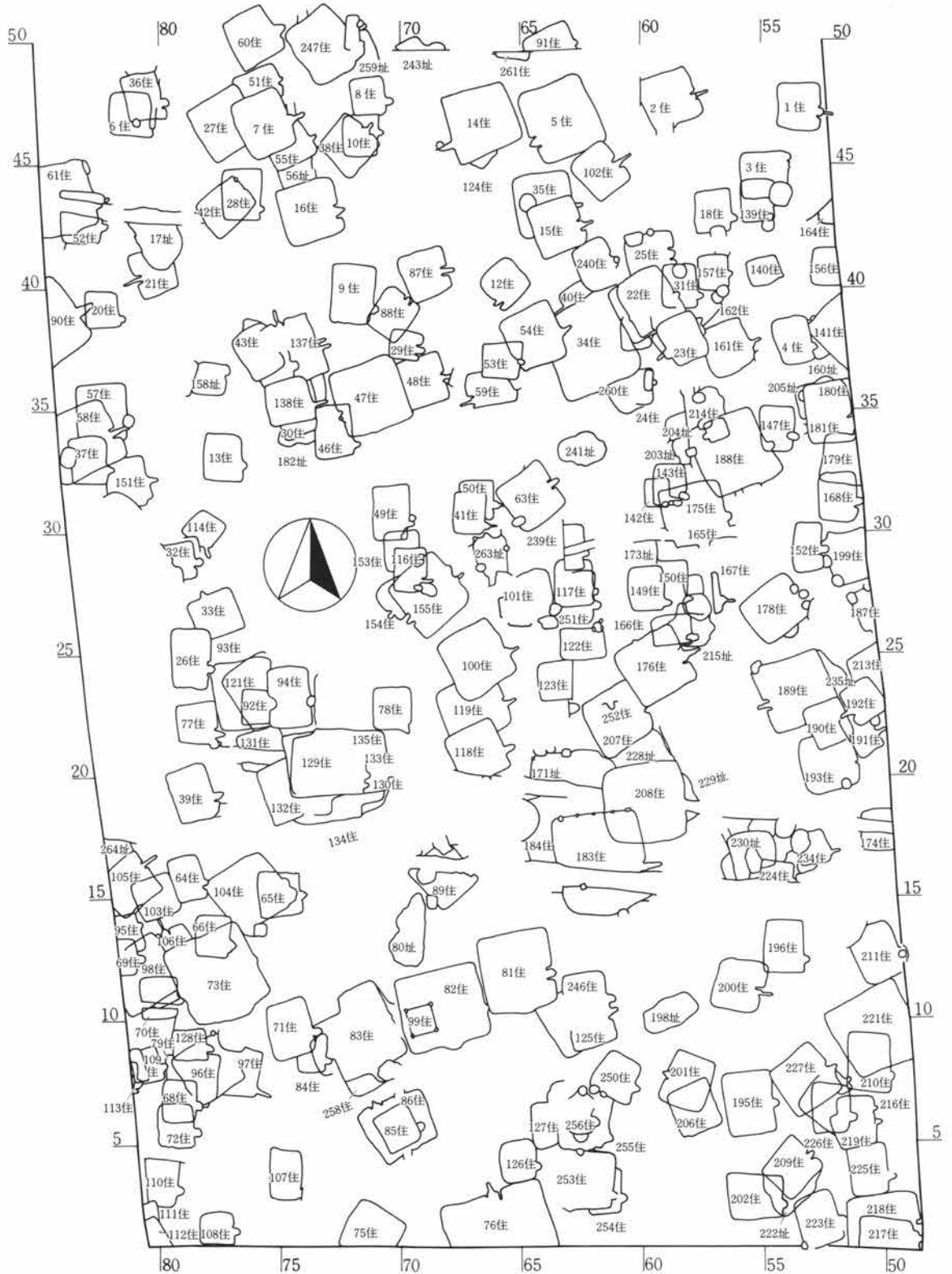
以上のような状況で検出調査した古墳時代後期～平安時代にかかわる遺構は、竪穴住居跡(址を含む)236軒、掘立柱建物跡28棟、土壌墓1基、祭祀遺構1基、土坑237基、井戸跡5基、サク状遺構2本、溝状遺構17本である。これらの検出遺構は、H区やJ区の遺構配置との関係からも明らかなように、H区の北半からJ区まで密集する遺構群の中央部に位置している。また、検出住居跡の中には大型で壁の一部が半円状に張り出す特異な形態の住居跡が数棟含まれている。さらにこれらの特異な住居跡と時間的に重複すると思われる数期にわたる掘立柱建物跡群が検出されている。特に掘立柱建物跡の群在する様相は、他調査区には認められない特徴であり、当調査区が遺跡北半の遺構群の中央部に位置するだけでなく、中心的位置付けのできることを意味している。

これらの遺構から出土した遺物は、検出遺構の時期を反映して多種多様なものが見られる。当調査区で出土した破片を含めた遺物総数は約103,474点に上り、当報告書にはこれらの遺物の中から遺構に伴う残存状態の良好な資料を主体に、約3,800点の遺物を実測掲載した。

掲載遺物の種類は、土製品・石製品・金属製品の3種に大別することができる。土製品には、土師器坏・鉢・甕・皿、須恵器坏・埴・皿・蓋・甕、灰釉陶器埴・皿・瓶、羽釜、瓦等である。石製品には砥石・磨石・敲石・白玉等があり、金属製品には鍛造された刀子・釘・鎌・鍬を始め、金銅製鈴、皇朝十二銭の一つである「神功開宝」等がある。これらの出土遺物の主体をしめているのは、土師器・須恵器の坏や甕のような調理具・供膳具であり、器種等の構成を総体的にみれば他の遺跡から際立ったものではない。しかし、そうした中に、黒笹14号窯式期の灰釉陶器や数器種に及ぶ畿内産暗文土師器等わずかではあるが、他の遺跡にはあまり出土がみられないような、当遺跡を特徴付ける遺物の出土も認められる。

第2節 検出された遺構・遺物

1. 竪穴住居跡



第5図 I区竪穴住居跡配置図

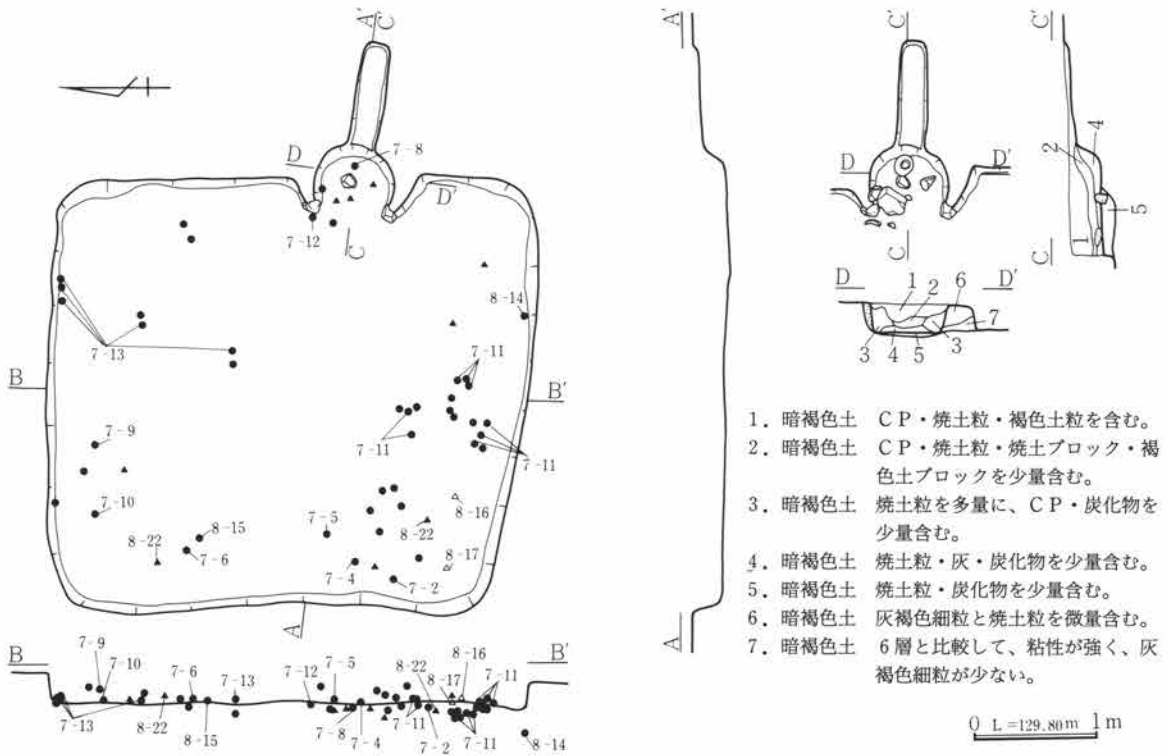
0 10m

遺構名称	I区第1号住居跡		位置	46~48-I-52~54グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.36m×3.80m	主軸方位	東-6度-南	残存深度	約30cm程

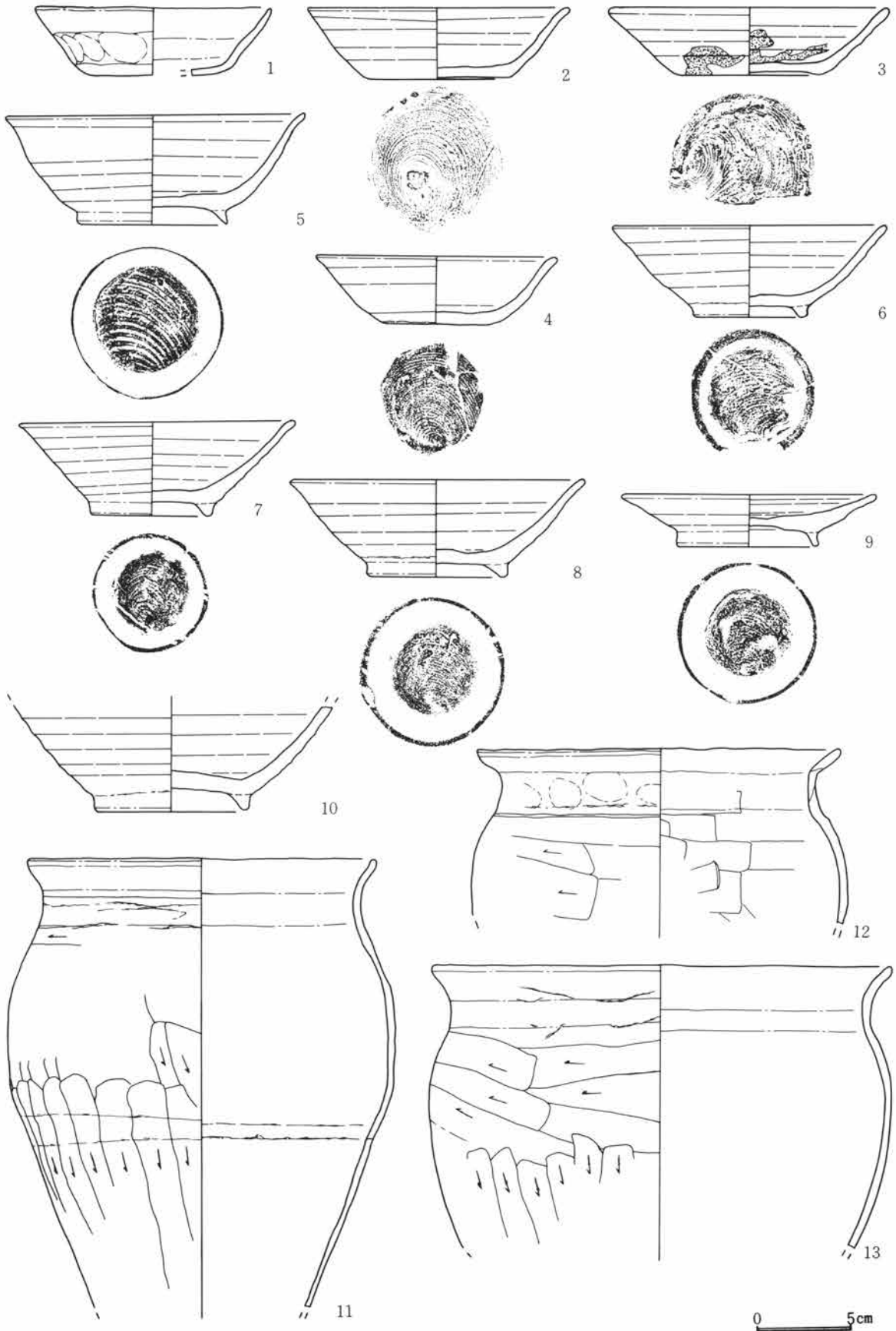
(所見) 当住居跡はIV層で確認したが、明瞭に捉えられたわけではなく、掘り下げていく段階で北側の平面プランの違いに気付いた。床面は、弥生時代の第146号住居跡と重複しているために、覆土との区別がつかず床面下まで掘り下げてしまった。結果的には遺物の集中する面として捉えることができた。柱穴・貯蔵穴・壁溝は、床面の掘り過ぎのため検出することができず、掘削の有無についても確認できなかった。

カマドは東壁中央やや南寄りに検出した。主軸方位は東-10°-南で、住居主軸よりわずかに南に振れている。平面形状は、両肩の丸まった凸字形を呈している。両袖共に40cm前後住居内に突出し、先端部には左側が自然礫、右側が地山から切り出したような角礫状の袖石が据えられていた。燃烧部は、径55cm程の半円状で、壁外にごくわずかに掘り込まれ、左側壁に焼土化した面が残存していた。燃烧部中央には、角錐状に面取りされた支脚が据えられていたが、先端部は折れて右側燃烧面に落ちていた。煙道は燃烧面から一段上がって、下幅約18cm、長さ約80cmの規模で水平に掘り込まれていた。掘り方は、燃烧部やや屋内側が約10cm掘り下げられていた。

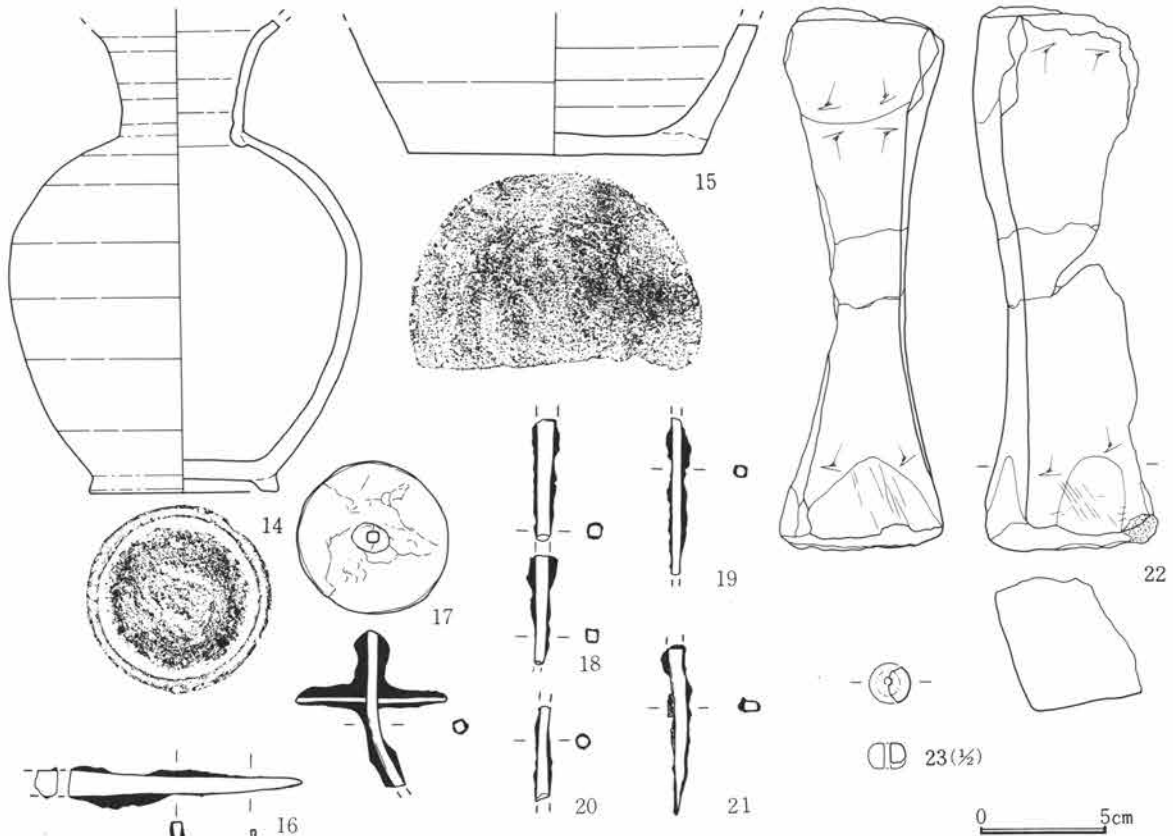
遺物は住居南側に比較的多く検出され、特に南西コーナー付近からは第7図2の完形の須恵器坏と共に、第8図17の鉄製の紡錘車が出土した。また、カマド燃烧面からは、第7図8の須恵器碗が伏せられた状態で出土した。第8図14の須恵器瓶は、南壁ややカマド寄りの壁に接する位置で、しかも明らかに掘り過ぎと思われる深さから出土している。しかしこの位置では同時期の住居跡との重複はなく、重複する土坑も確認されていないので、当住居跡に伴う遺物と判断した。



第6図 I区第1号住居跡実測図



第7図 I区第1号住居跡出土遺物実測図(1)



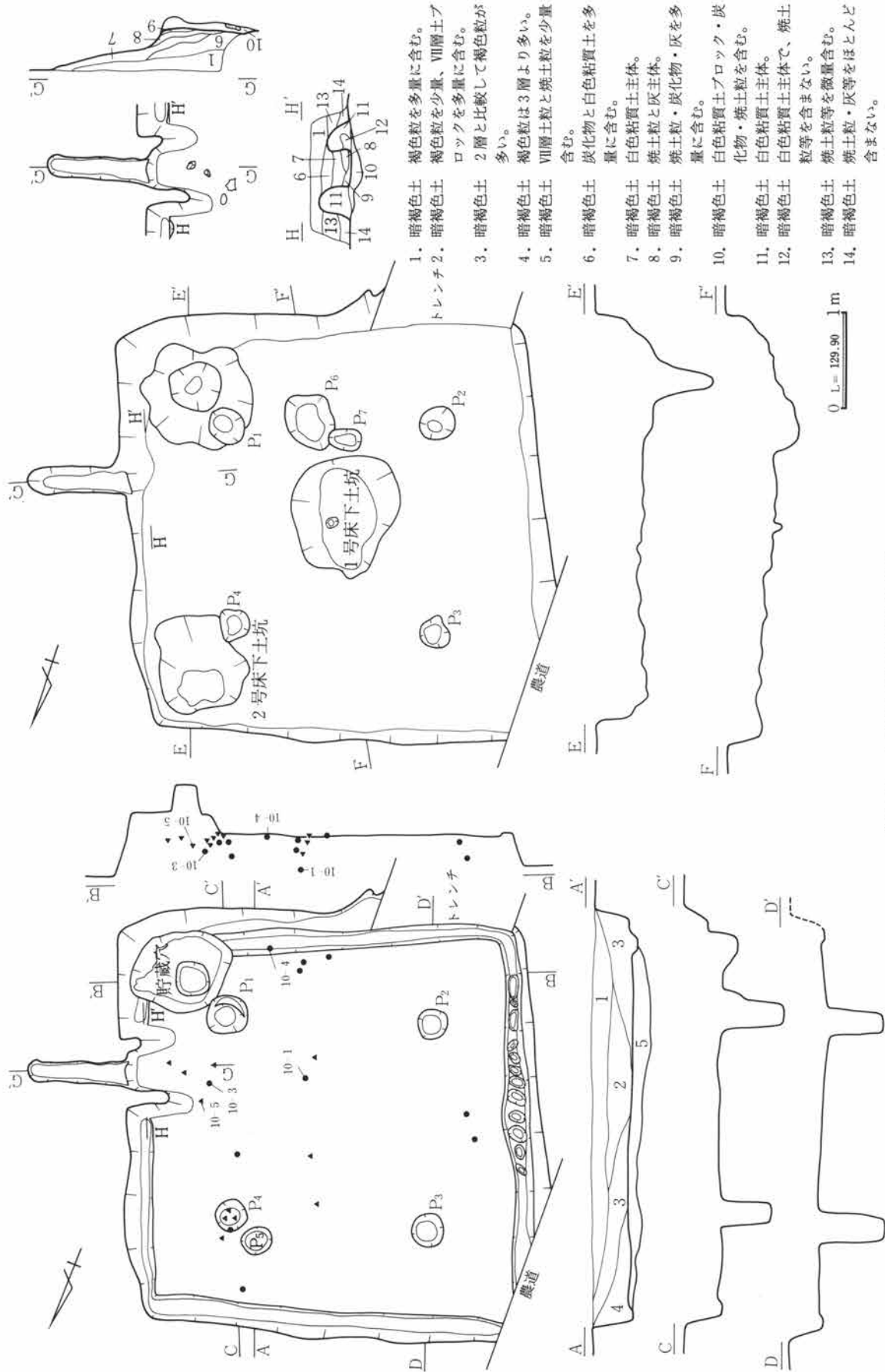
第8図 I区第1号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第2号住居跡		位置	46~48-I-57~60グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.25m×4.35m	主軸方位	東-19度-北	残存深度	約40cm程

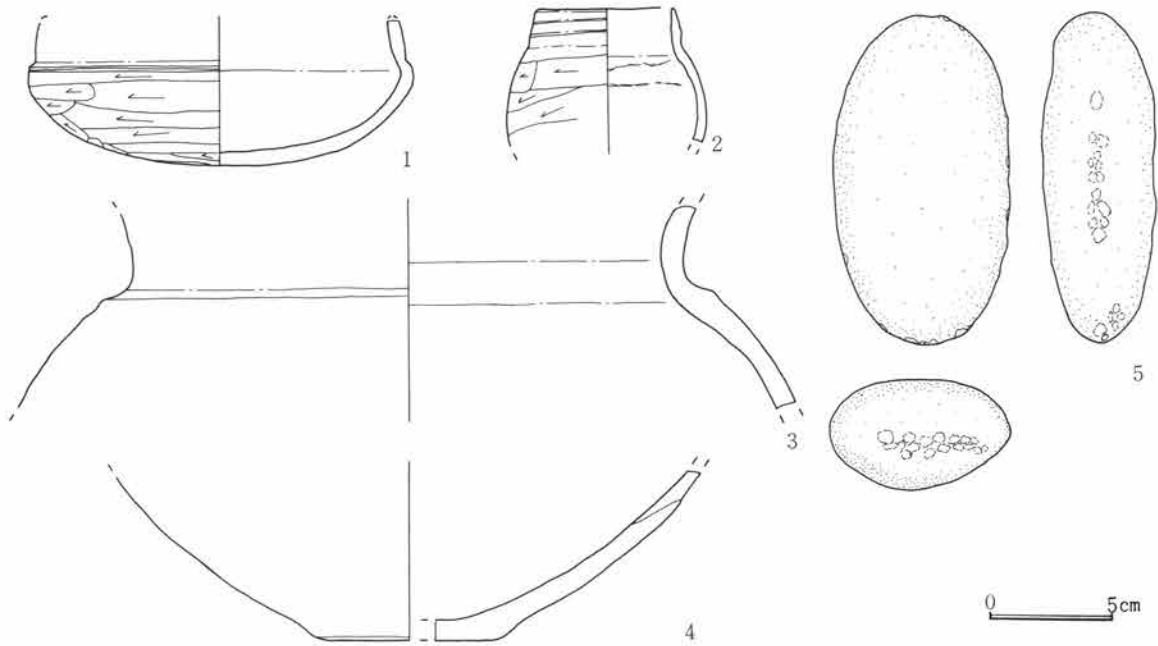
(所見) 当住居跡は、西コーナー部が調査区を南北に縦断する農道下にかかっていたため、二度の調査を実施したが、農道下の調査でコーナー部を明瞭に捉えることはできなかった。確認はIV層上面で行った結果、平面プランは明瞭に捉えることができた。床面はVII層土主体の貼床であり、顕著な硬化面は観察できなかった。柱穴はP₁~P₄(径約30~40cm、深さ約54~67cm)の4本であり、柱穴間の距離はすべて約2.1mである。P₅は、他の柱穴と比較して浅く、対応する位置に類例がないことから柱穴とは考えられない。貯蔵穴は東コーナー部で、約85×90cm、深さ約20cmの隅丸方形を呈する掘り込みの西寄りの位置から、さらに径約35cm、深さ約30cmの円形に掘り込まれている。壁溝はカマド部分を除いて全周検出した。規模は下幅約5~20cm、深さ約4cmであり、西側壁溝部底面には長軸約10~20cmの楕円形の浅い窪みが12ヵ所程認められた。壁の残存状態は比較的良好であるが、南壁は他の壁に比較して傾斜が緩く、崩落があった可能性もある。掘り方は全体に5~20cm程掘り下げられており、西コーナー部及び中央部にわずかに窪む程度の浅い土坑が認められた。

カマドは、東壁中央やや南寄りに位置し、主軸方位は東-23°-北である。煙道は壁外に約1m掘り込んだ後に、白色粘質土で袖を屋内に造り出している。規模は、残存全長約1.75m、煙道幅約23cm、燃焼部幅約37cmであり、袖は左袖の残存状態が比較的良好で、約70cmが確認できた。燃焼部底面には焼土粒や灰を主体とした層が約10cmの厚さに堆積していたが、袖部内面や燃焼部底面に焼土化した面は認められなかった。

遺物は石が主体で、カマドを中心として住居東側に多く出土した。特にP₄内中位から比較的大きな礫が3個出土しており、住居廃棄時には柱材が抜き取られた可能性を示唆している。



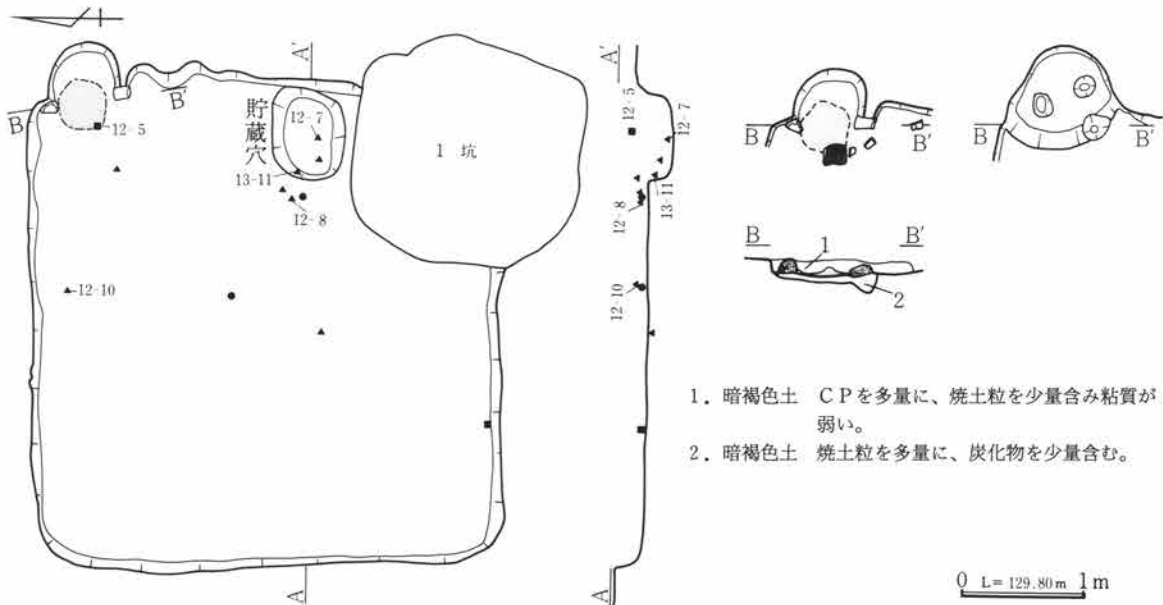
第9図 I区第2号住居跡実測図



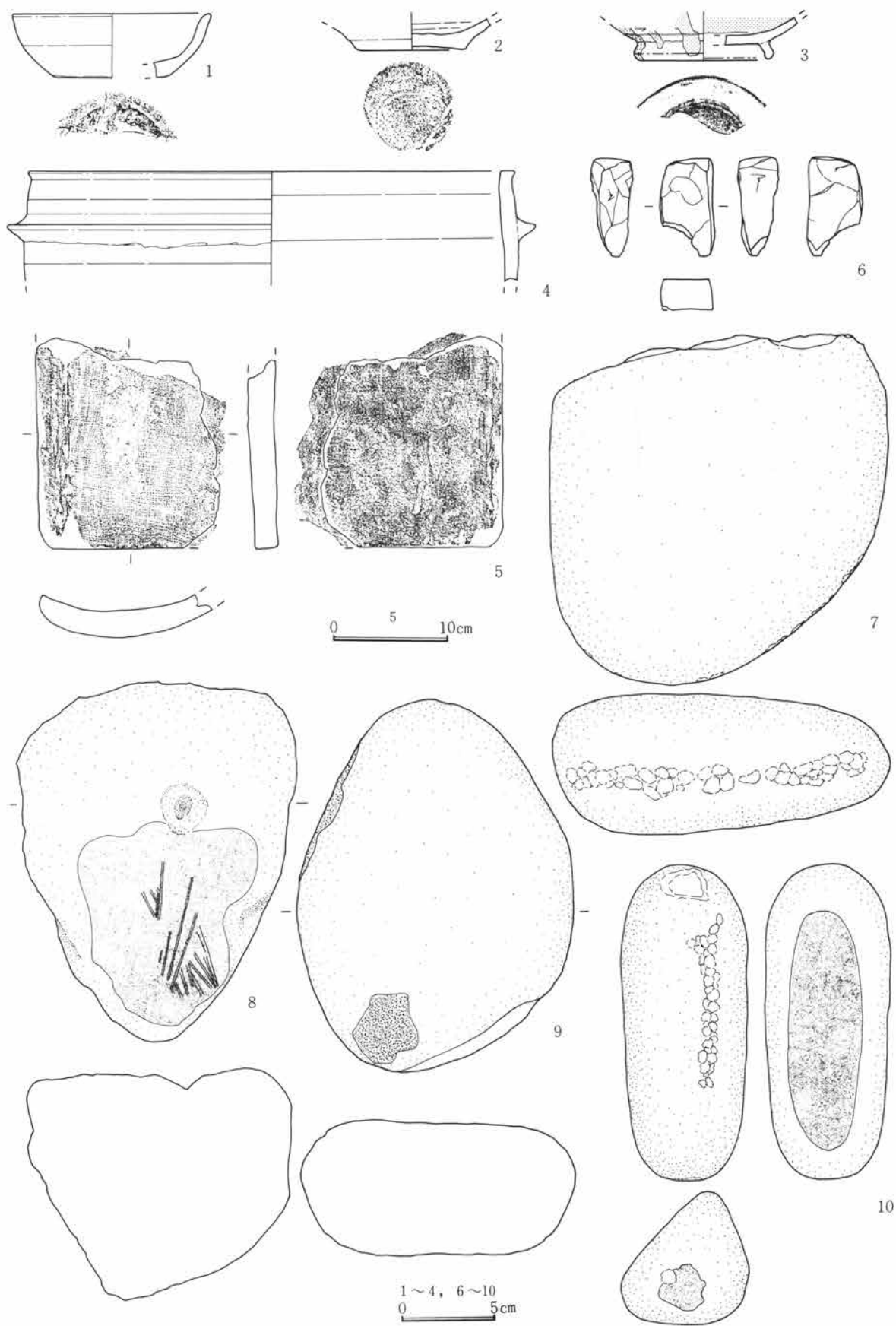
第10図 I区第2号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第3号住居跡		位置	43~45-I-53~55グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.90m×3.70m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約13cm程

(所見) 当住居跡は、南東コーナー部で第1号土坑と重複し、さらに南側で第139号住居跡と重複している。前後関係は、セクションでは明確に捉えることはできなかったが、IV層上面での確認状態から当住居跡→第139号住居跡→第1号土坑の可能性が強い。床面は平坦であり残存状態も良好であるが、部分的な硬化面も認められない。柱穴やその他のピットは1本も検出されず、当住居跡には掘り方も無いことから、当初から掘削されなかったものと考えられる。貯蔵穴は、東壁中央部に長軸を接するように検出した。規模は長軸約72cm、短軸約59cm、深さ約18cmで、楕円形を呈しており、底面近くから石が出土している。

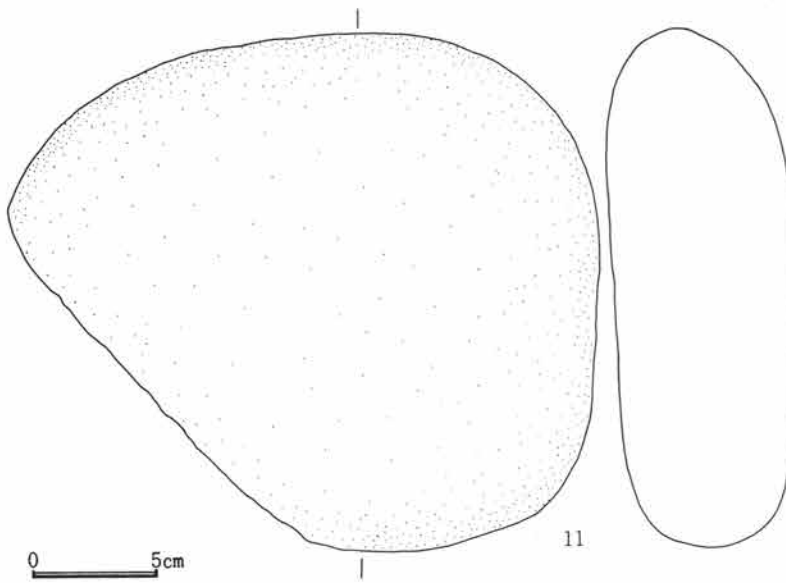


第11図 I区第3号住居跡実測図



第12図 I区第3号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



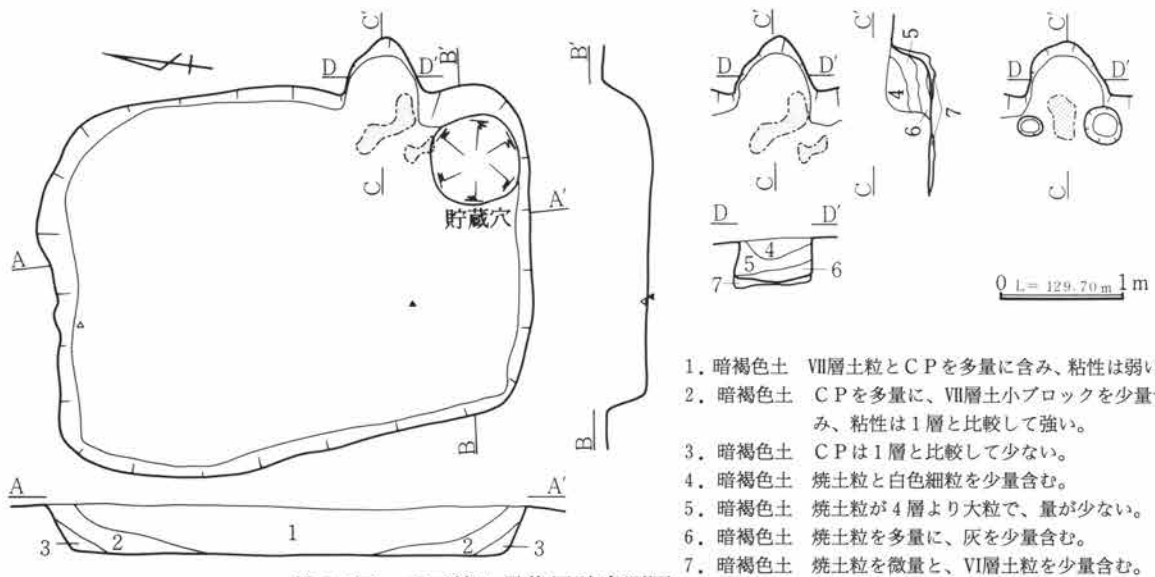
第13図 I区第3号住居跡出土遺物実測図(2)

カマドの主軸方位は西-11°-北であり、北東コーナー部に接するような位置に検出した。燃焼部は壁外に馬蹄形に掘り込んで構築され、袖は左側に自然礫を、右側は切り出した角柱状の石材を用いており、右袖のみがわずかに屋内に突出している。燃焼部中央には径約20cmの範囲に灰面が認められた。掘り方の調査では燃焼部に対になる小ピットを検出したが、位置的に判断して袖石の据え方ではなく、双脚の石製支脚の据え方の可能性が強い。

遺構名称	I区第4号住居跡	位置	36~38-I-52~54グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×3.84m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約33cm程

(所見) 当住居跡の平面プランは、IV層上面で明瞭に確認することができた。東壁の一部が第141号住居跡と接するように重複しているが、確認状態から第141号住居跡→当住居跡と判断した。住居の残存状態は比較的良好であるにもかかわらず、住居平面形が不整形である。柱穴・壁溝は検出されなかった。貯蔵穴は南東コーナー部で、径約70cmの円形を呈するわずかな窪みである。

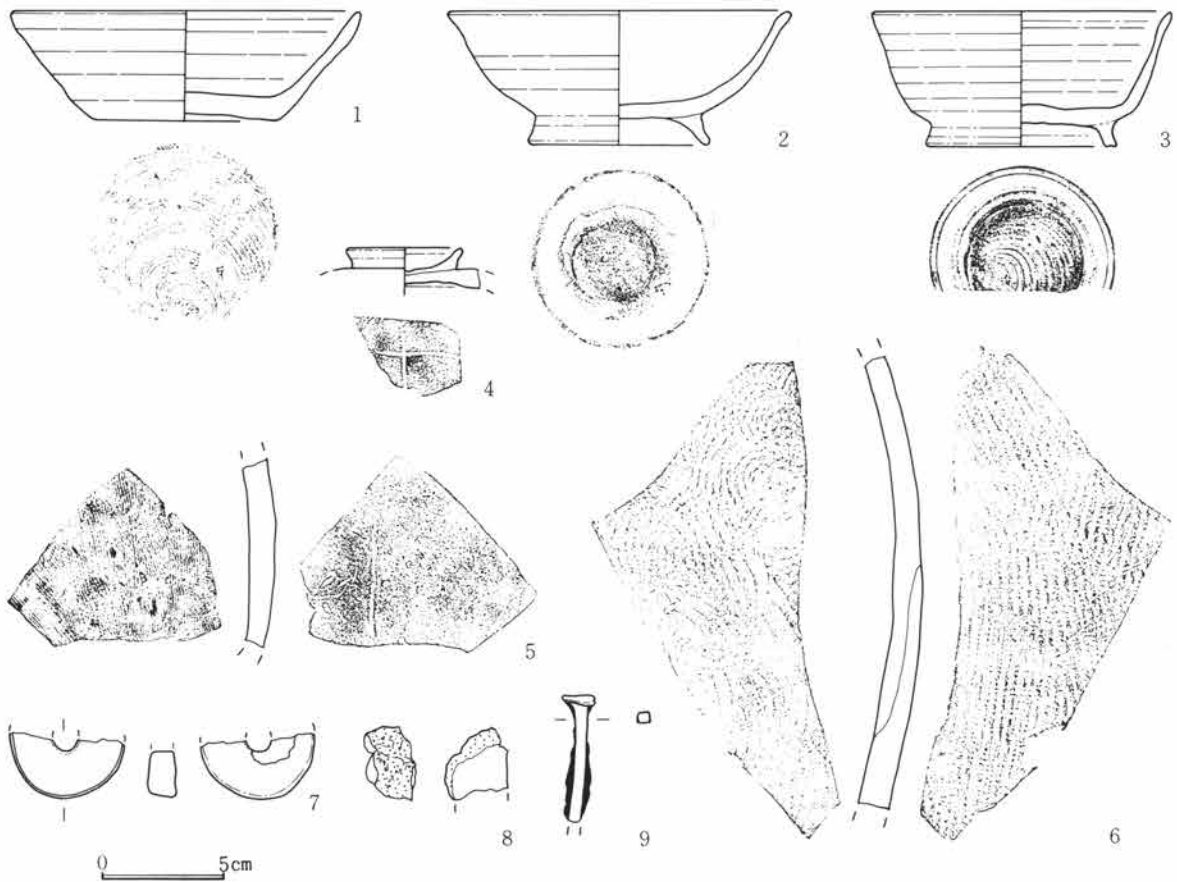
カマドは東壁南寄りに設置されており、主軸方位は東-5°-北である。平面形は五角形状で、壁外に掘り込んで構築されている。袖石は残存していないが、掘り方で一対のピットが検出されていることからわずかに屋内に突出するように袖があったものと考えられる。燃焼部幅は約55cmで、中央部から焼土面が、右寄りの位置から灰面が検出されている。遺物はごくわずかの出土であるが、第15図8の羽口破片が注目される。



第14図 I区第4号住居跡実測図

1. 暗褐色土 VII層土粒とC Pを多量に含み、粘性は弱い。
2. 暗褐色土 C Pを多量に、VII層土小ブロックを少量含み、粘性は1層と比較して強い。
3. 暗褐色土 C Pは1層と比較して少ない。
4. 暗褐色土 焼土粒と白色細粒を少量含む。
5. 暗褐色土 焼土粒が4層より大粒で、量が少ない。
6. 暗褐色土 焼土粒を多量に、灰を少量含む。
7. 暗褐色土 焼土粒を微量と、VI層土粒を少量含む。

第4章 検出された遺構・遺物

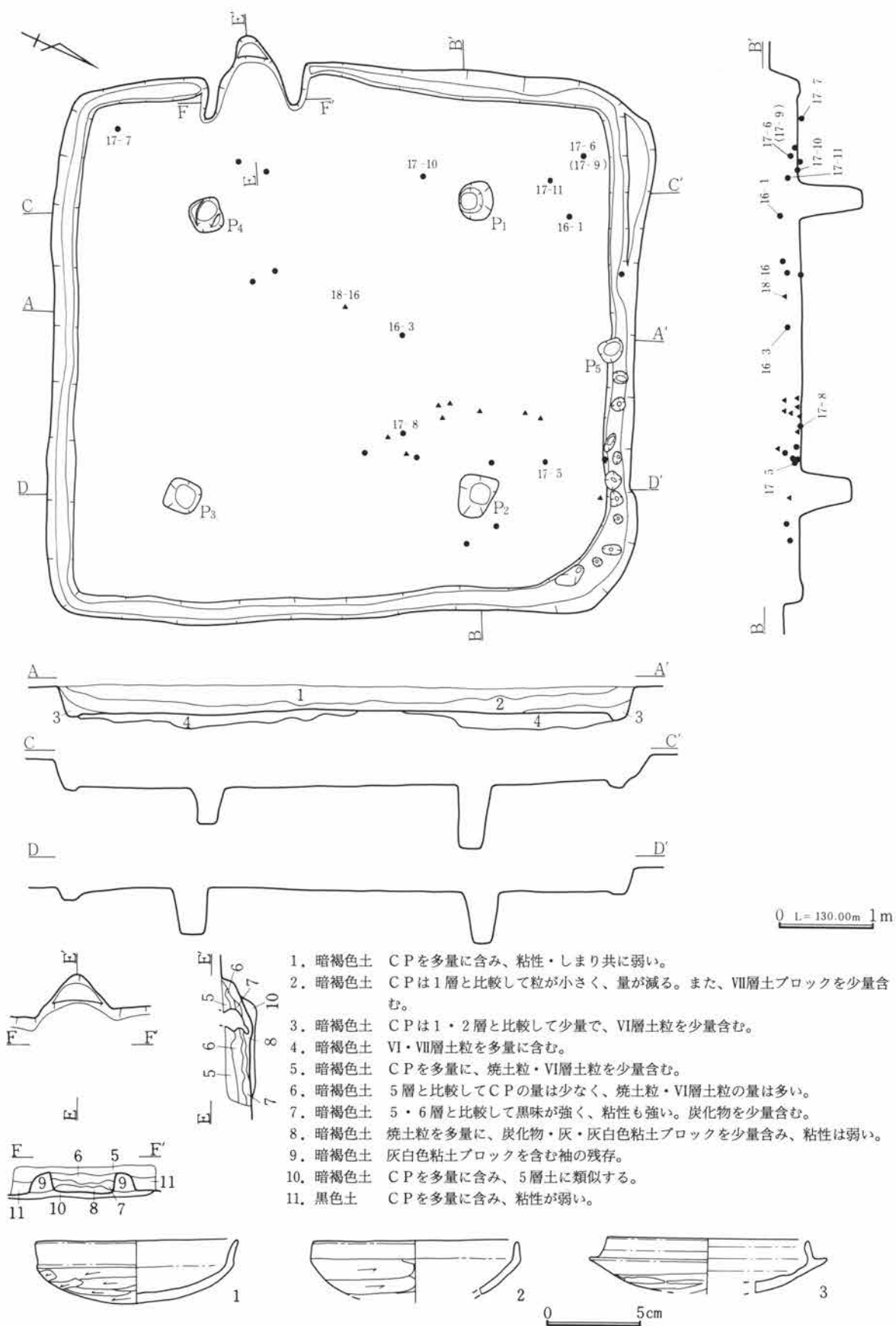


第15図 I区第4号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第5号住居跡		位置	45~48—I-61~69グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.65m×6.03m	主軸方位	西-20度-南	残存深度	約27cm程

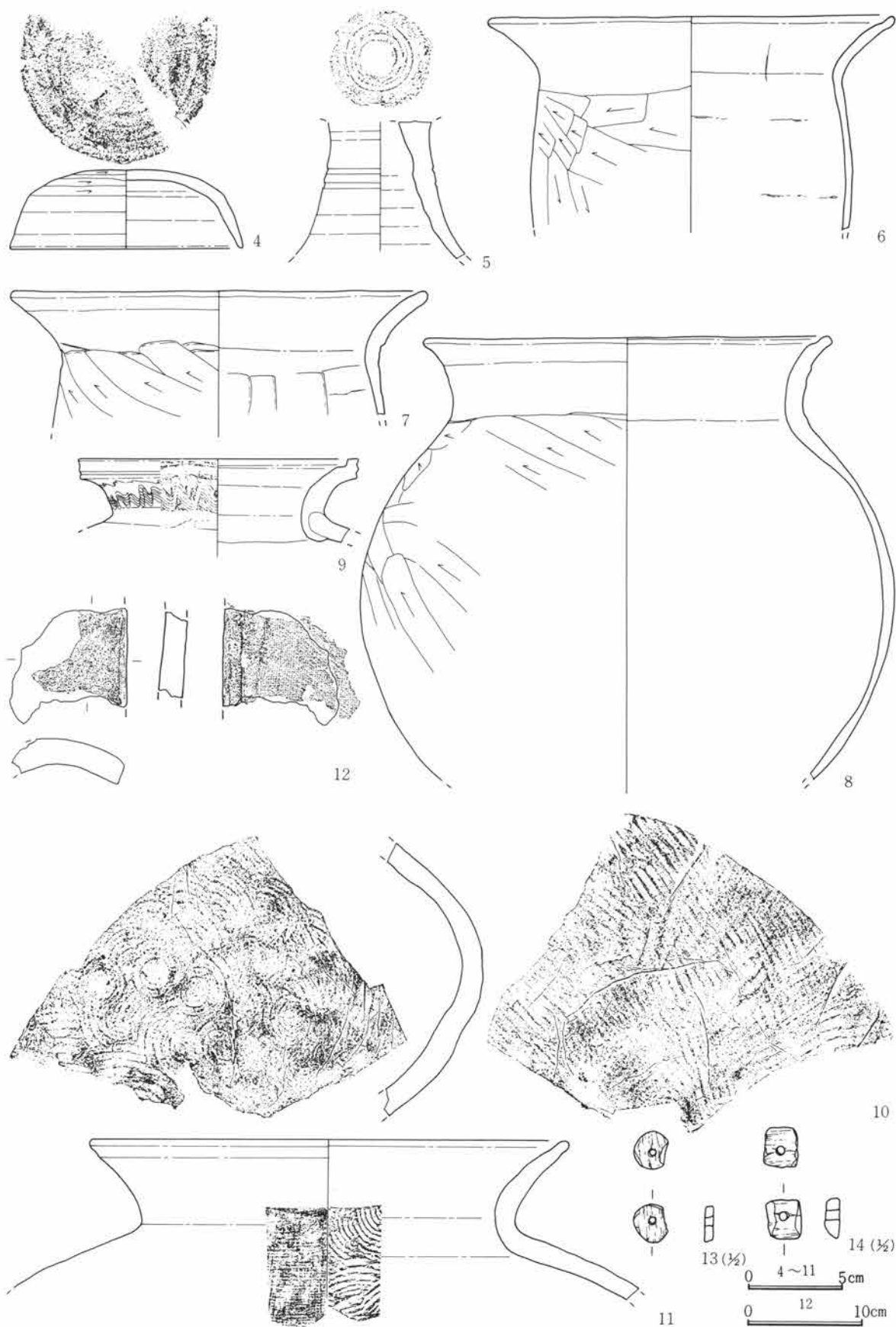
(所見) 当住居跡は、東コーナー部が農道下にかかっていたため、二次の調査で全体像を明らかにすることができた。確認はIV層上面で行った。当住居跡は第8号掘立柱建物跡と重複しているが、この掘立柱建物跡の柱穴は遺構確認段階では当住居内に検出することはできなかった。また、同様に床面の精査段階では、結果的に第8号掘立柱建物跡の柱穴の一つが当住居跡のP₁と重複していたにもかかわらず、当住居跡の柱穴だけが確認されている。以上のような検出の経過であるが、結果的に新旧関係は判断できなかった。住居の埋没状態は、おおよそ3層に分離できるいわゆるレンズ状堆積である。壁は比較的良好な状態で残存しており、住居平面形も整っている。床面は平坦で残存状態も良好であったが、他の住居跡同様に硬化した面としては捉えられていない。壁溝は、カマド部分を除いて全周検出された。規模は、下幅約5~30cm、深さ約5cmであり、南コーナー部から南東壁溝には第2号住居跡で検出されたような小ピット状の窟が11ヶ所程みられた。柱穴はP₁~P₄の4本であり、規模は径約35~40cm、深さ約37~65cmで、方形に近い平面形状をしている。また、柱穴間の距離はP₁とP₄間が約2.7mであるのを除いて、他は約3.0mである。

カマドは西壁南寄りに検出し、主軸方位は西-27°-南である。残存状態はあまり良好ではなく、平面形は凸字形を呈しており、煙道の伸びはわずかに20cm程である。袖は灰白色粘土を使用して構築しているが、約50cm屋内に延びているのが確認できた。燃烧部は下幅約55cmであり、底面付近に焼土や炭化物を主体とした層が認められた以外に、燃烧面や袖側面に焼土化したような部分はみられない。

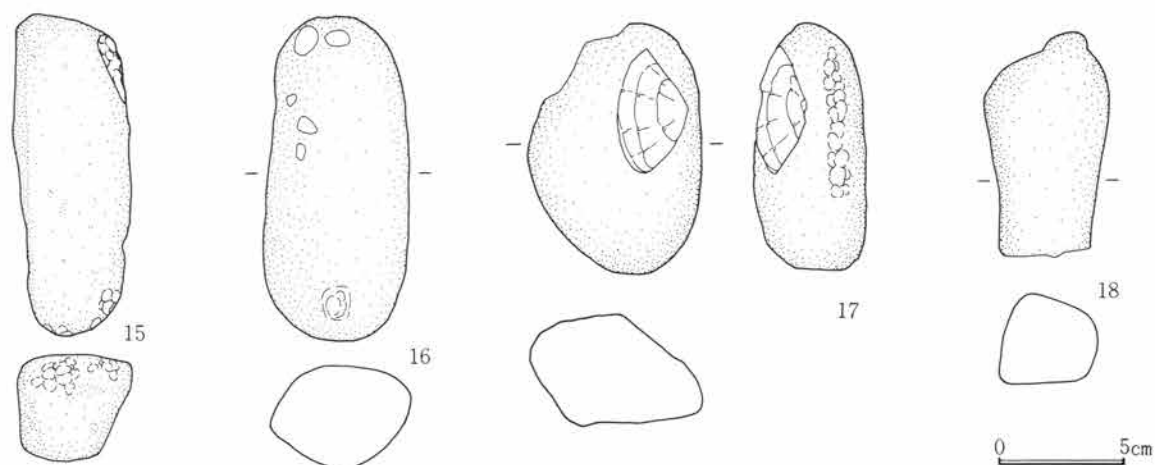


第16図 I区第5号住居跡・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

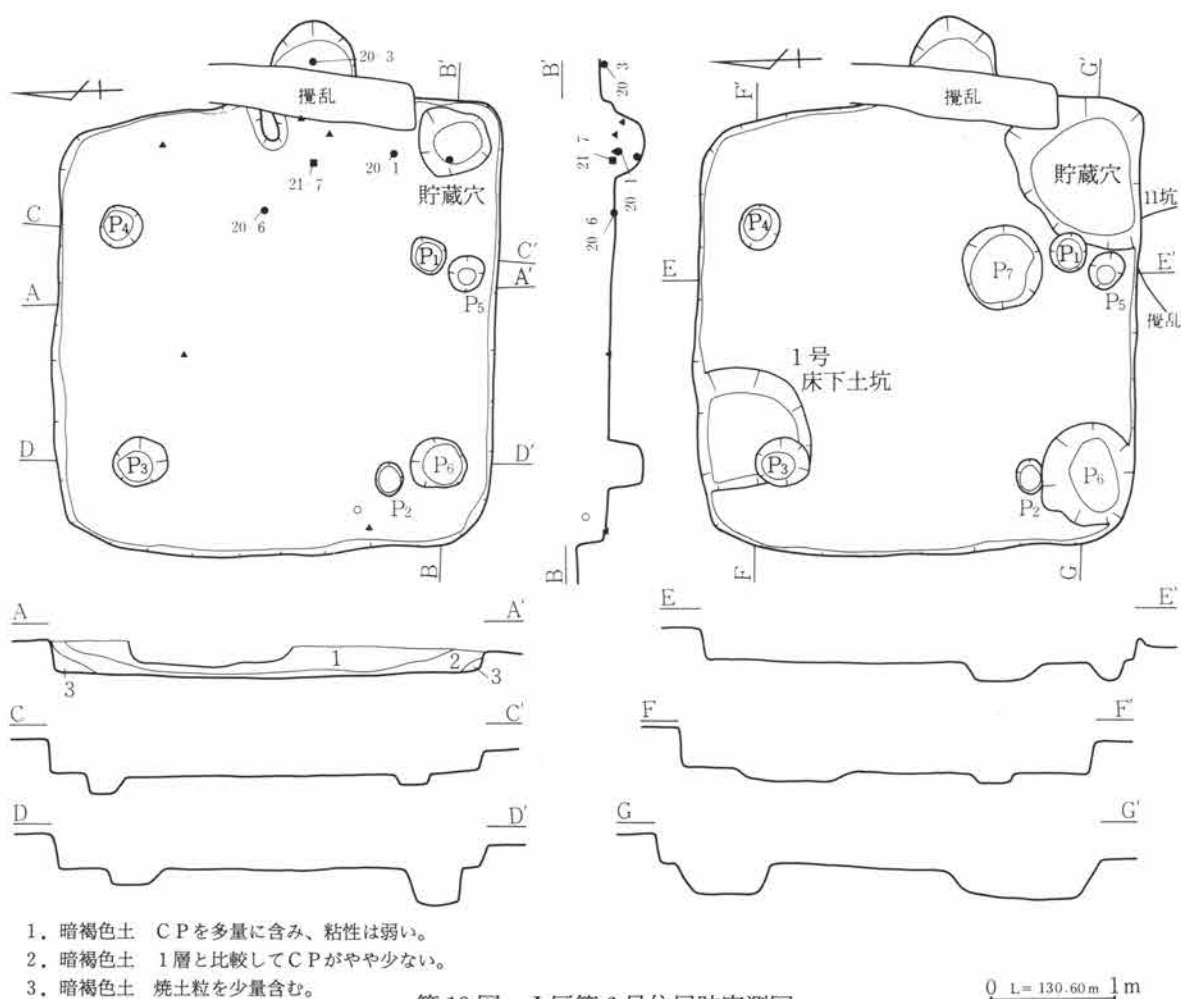


第17図 I区第5号住居跡出土遺物実測図(2)



第18図 I区第5号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第6号住居跡	位置	46~48-I-79~82グリッド内
平面形態	隅丸方形	規模	3.53m×3.46m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約25cm程



1. 暗褐色土 CPを多量に含み、粘性は弱い。
2. 暗褐色土 1層と比較してCPがやや少ない。
3. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

第19図 I区第6号住居跡実測図

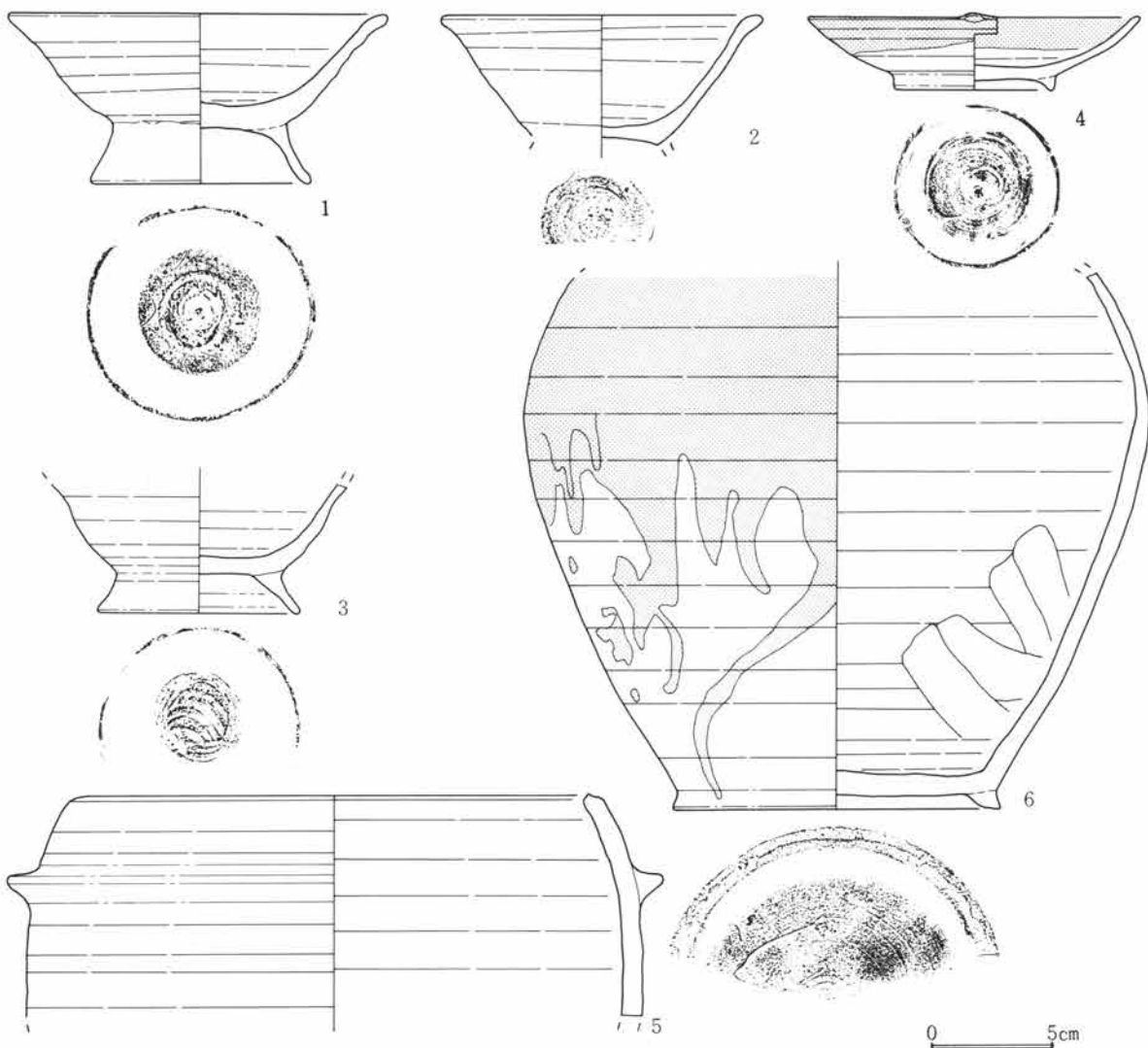
(所見) 当住居跡は調査区北西隅付近で検出したもので、第36号住居跡と重複している。この2軒の新旧関係は、遺構の確認状態と出土遺物の比較から、第36号住居跡→当住居跡であるのは明らかである。この前後関

第4章 検出された遺構・遺物

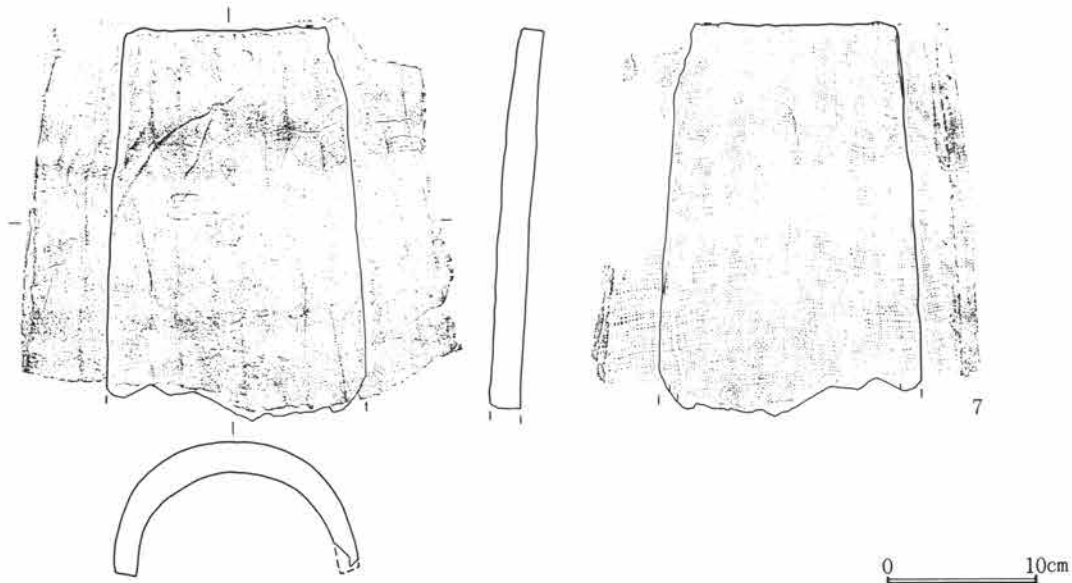
係は、当住居跡の覆土の堆積状態が第19図の土層断面図からもわかるように、周辺からの自然な埋没状態を示し、第36号住居跡の影響を全く受けていないことから証明されている。

当住居跡の確認はVI層上面であり、壁はほぼ全周確認したが、残存状態は良好ではない。床面精査の段階でP₁～P₆までの6本のピットを検出した。そのうちP₁～P₄の4本が柱穴の位置に当たる。規模は、P₁(径約28cm、深さ約7cm)、P₂(径約23cm、深さ約9cm)、P₃(径約39cm、深さ約11cm)、P₄(径約32cm、深さ約16cm)であり、ピット間の距離は、P₁とP₂間が1.8m、P₂とP₃間が2.0m、P₃とP₄間が1.9m、P₄とP₁間が2.5mである。このP₁～P₄のピットの配置には住居平面と微妙なズレがみられ、しかも平面規模及び深さ共に不均一であることは、柱穴として機能したものでない可能性を示唆している。同様にP₅・P₆のピットについても機能は不明である。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出した。径は約55cm、深さは約22cmの不整円形であり、底面付近から土器片が出土している。また、この貯蔵穴は、掘り方段階の調査で当初は径1m近い掘り方を有していたことが確認できた。同様に掘り方の調査では南西コーナー部に径約75cm、深さ約25cmの楕円形の掘り込みを、北西コーナー部近くに一辺約90cmの方形で、深さ約9cmの掘り込みを検出した。

カマドは東壁ほぼ中央に検出したが、ちょうど燃焼部に当たる部分に溝状の攪乱が入っており、左袖の一部と奥壁以外残存していない。実測可能な遺物の大半はカマド前面の床上から出土している。



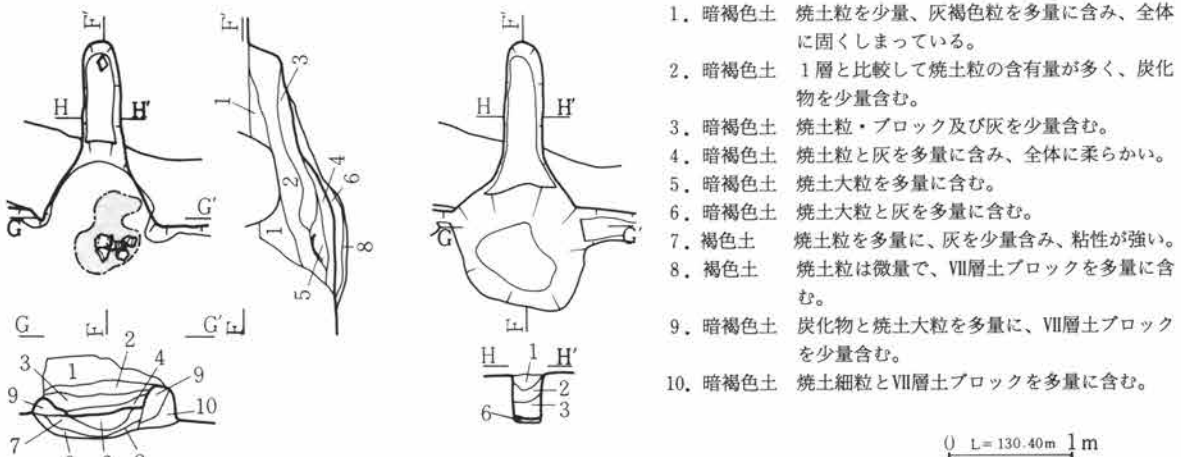
第20図 I区第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第21図 I区第6号住居跡出土遺物実測図(2)

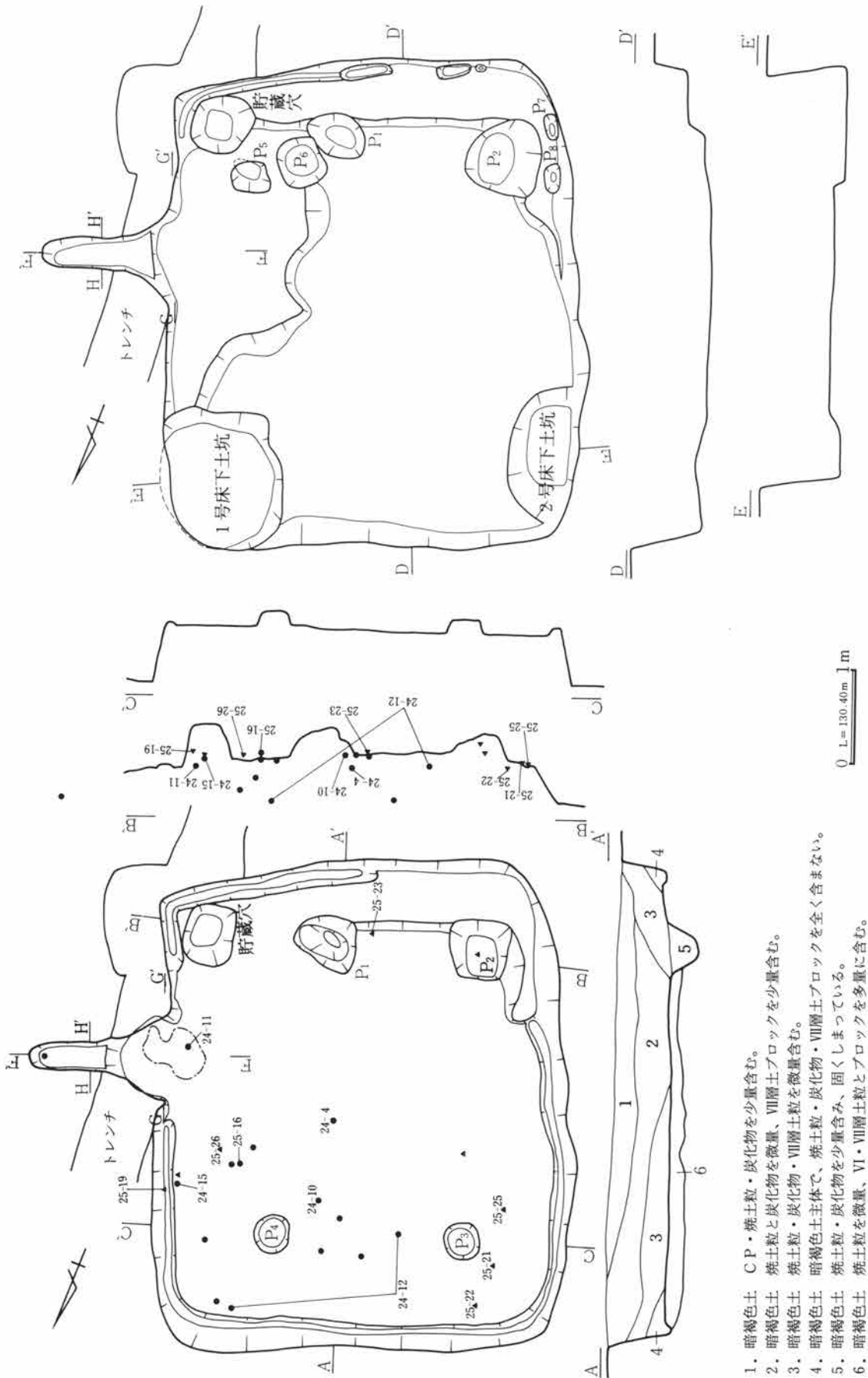
遺構名称	I区第7号住居跡	位置	45~48-I-73~76グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	4.32m×4.95m	主軸方位	東-28度-北	残存深度	約55cm程

(所見) 当住居跡は、第27・51・55号住居跡と重複しているが、各遺構の検出状態と遺構の残存状態などから第27・51・55号住居跡→当住居跡という前後関係が想定できる。壁の残存状態は比較的良好であり、全周明瞭に捉えることができた。床面はほぼ平坦であるが、南コーナー部付近にわずかな段差が認められる。この床面の段差と北西壁までの距離は約4.3mであり、ちょうど主軸方向の辺の長さとも一致している。この一致や貯蔵穴との位置関係から、当住居跡が当初は一辺が約4.3mの隅丸正方形を呈する平面形で造られた後、南側に50cm程度の拡張をしたのではないかとと思われる。壁溝は南コーナー部とカマド部を除いて検出され、規模は下幅約5~10cm、深さ約10cmである。柱穴はP₃とP₄が位置的には可能性があるが、対応するはずのP₁とP₂は西にズレた位置にあり、また、特にP₂は平面形が方形であり貯蔵穴に類似している。貯蔵穴は東コーナー部に位置しており、方形を呈している。規模は約63×50cm、深さ約43cmである。掘り方の調査では、北及び西コーナー部に土坑状の掘り込み(1・2号床下土坑)を検出した。また、南コーナー付近に捉えた段



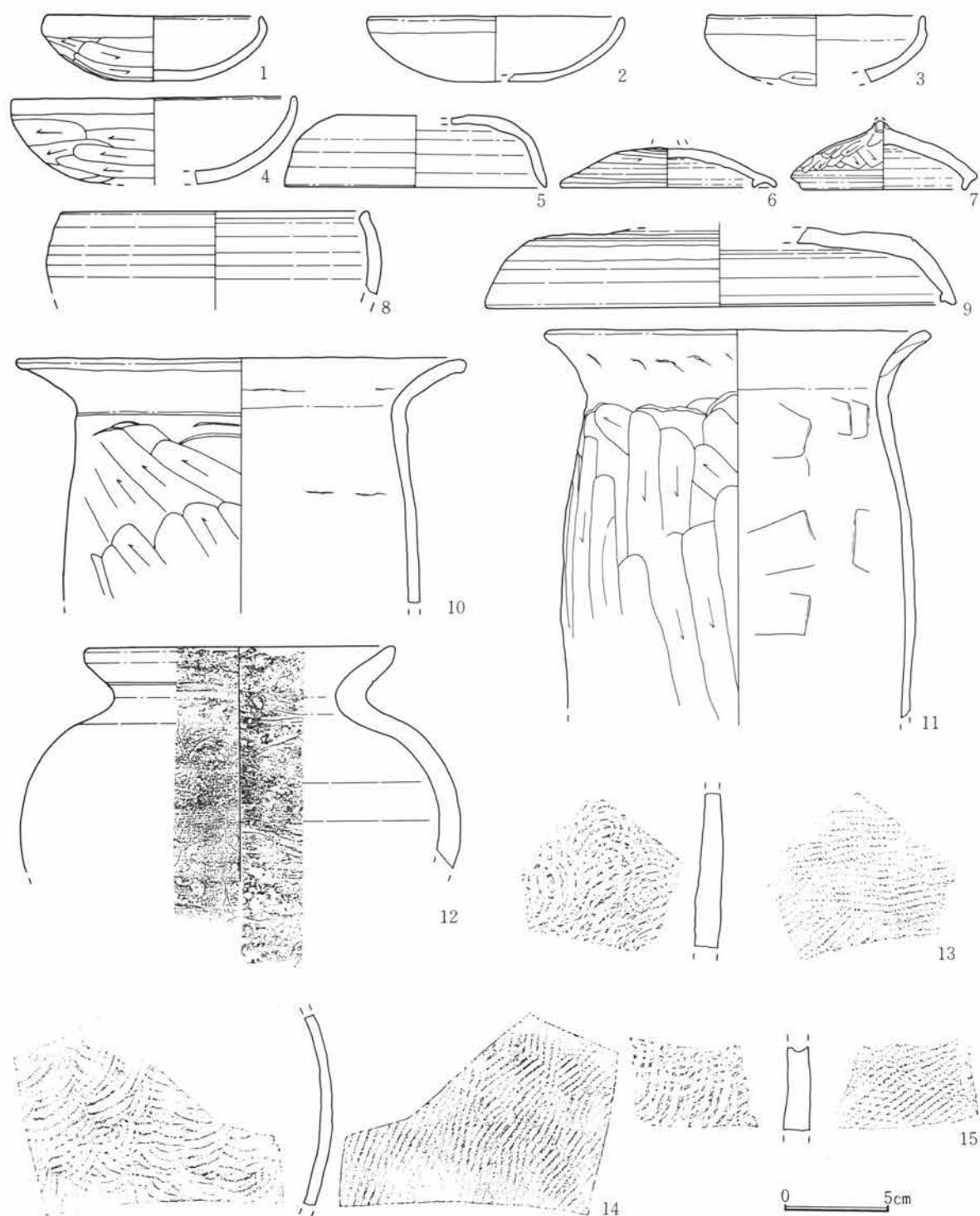
第22図 I区第7号住居跡実測図(1)

1. 暗褐色土 焼土粒を少量、灰褐色粒を多量に含み、全体に固くしまっている。
2. 暗褐色土 1層と比較して焼土粒の含有量が多く、炭化物を少量含む。
3. 暗褐色土 焼土粒・ブロック及び灰を少量含む。
4. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含み、全体に柔らかい。
5. 暗褐色土 焼土大粒を多量に含む。
6. 暗褐色土 焼土大粒と灰を多量に含む。
7. 褐色土 焼土粒を多量に、灰を少量含み、粘性が強い。
8. 褐色土 焼土粒は微量で、VII層土ブロックを多量に含む。
9. 暗褐色土 炭化物と焼土大粒を多量に、VII層土ブロックを少量含む。
10. 暗褐色土 焼土細粒とVII層土ブロックを多量に含む。



第23図 I区第7号住居跡実測図(2)

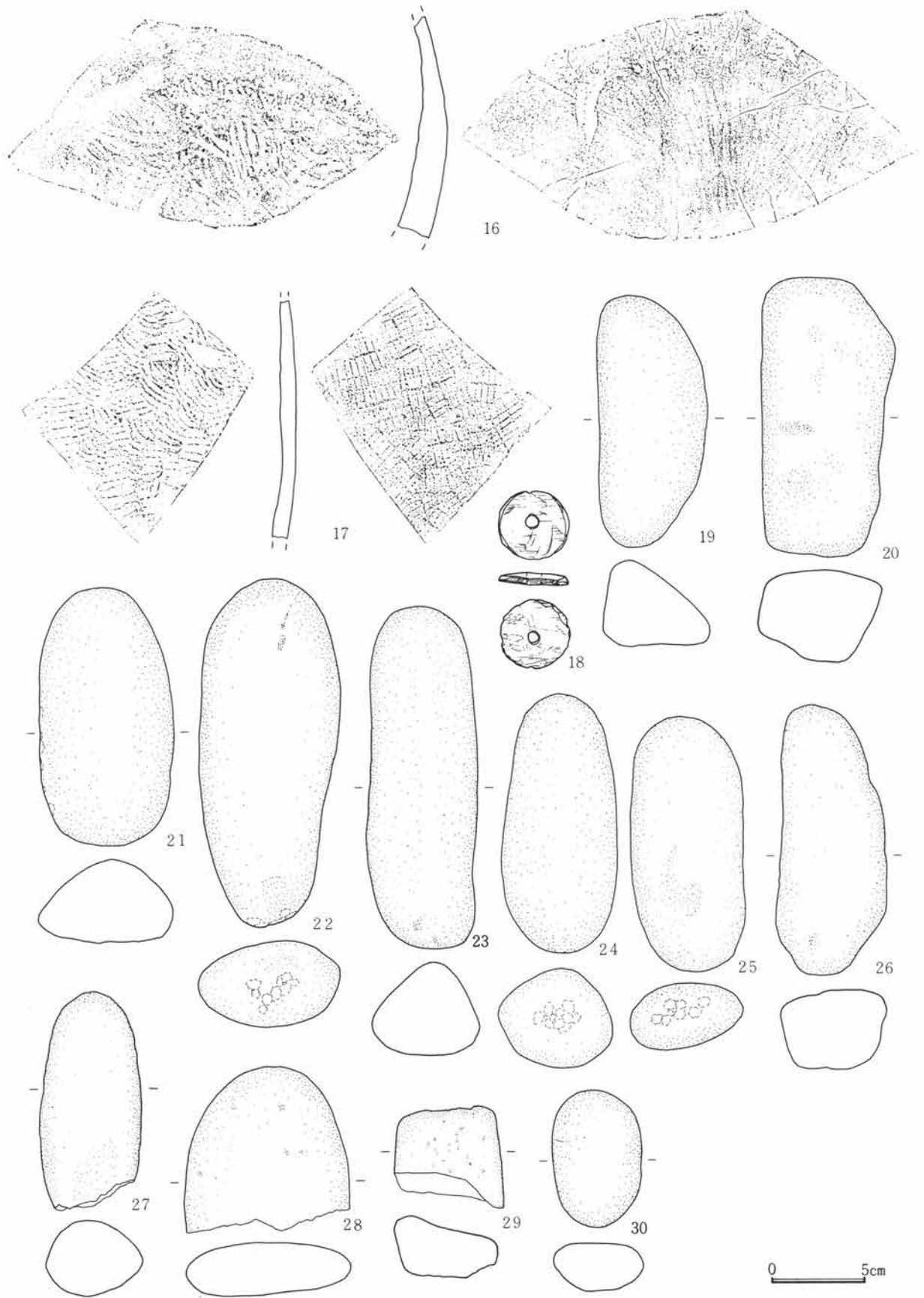
第2節 検出された遺構・遺物



第24図 I区第7号住居跡出土遺物実測図(1)

差はより顕著な形で現れ、約20cmの段差となって東コーナー部へと連続している。

カマドは北東壁中央やや南寄りに位置しており、主軸方位は東-24°-北である。袖はわずかな痕跡以外検出されず、壁から約50cm掘り込んだ部分が燃焼部となっている。燃焼部の幅は約75cmであり、底面やや右寄りの位置に灰面を検出した。また、燃焼部は灰と焼土主体の土で埋没しており、径約1mの掘り方を有している。煙道は燃焼部から段を有して約110cm壁外に延びている。幅は約24cmあり、底面近くは燃焼部同様に焼土と灰主体の土で埋没している。

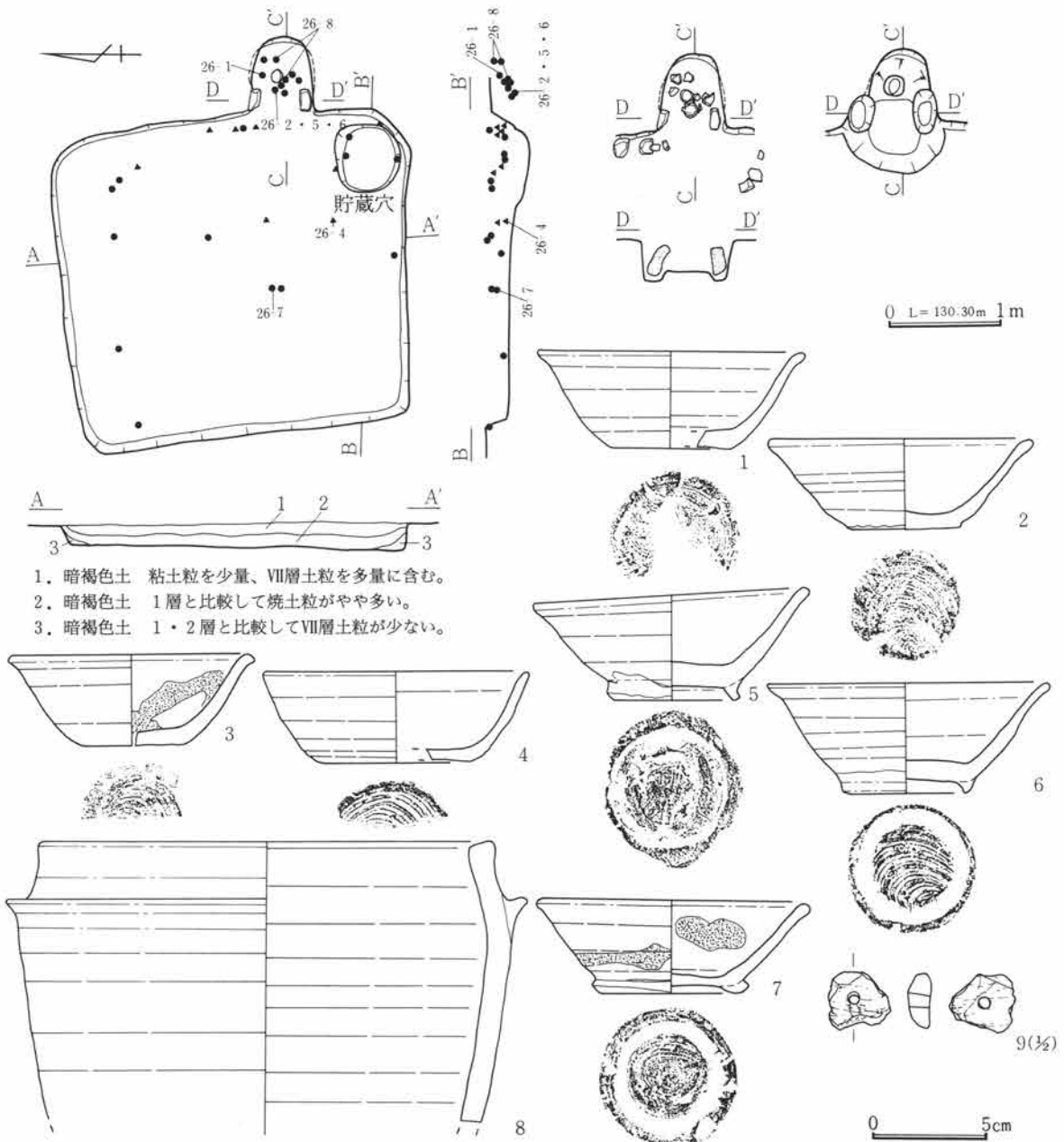


第25図 I区第7号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第8号住居跡	位置	47・48-I-70~72グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	2.58m×3.03m
		主軸方位	東-5度-北
		残存深度	約20cm程

(所見) 当住居跡は第10号住居跡と重複しており、遺構の検出状態から第10号住居跡→当住居跡と考えられる。壁・床面共に明瞭に確認できたが、壁溝・柱穴は検出されておらず、当初から掘削されなかったものと判断した。貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、径約55cm、深さ約10cmの円形を呈している。

カマドは東壁南寄りに位置し、平面形態は馬蹄形を呈している。袖は住居内に突出することはなく、壁との接合部に角柱状の截石を据えている。支脚も同様の材質で作られている。カマドの方位は東-0°-北で、規模は全長約70cm、燃烧部幅約40cmである。支脚前面からは第26図2・5・6の須恵器坏境が重なった状態で出土している。



1. 暗褐色土 粘土粒を少量、VII層土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 1層と比較して焼土粒がやや多い。
3. 暗褐色土 1・2層と比較してVII層土粒が少ない。

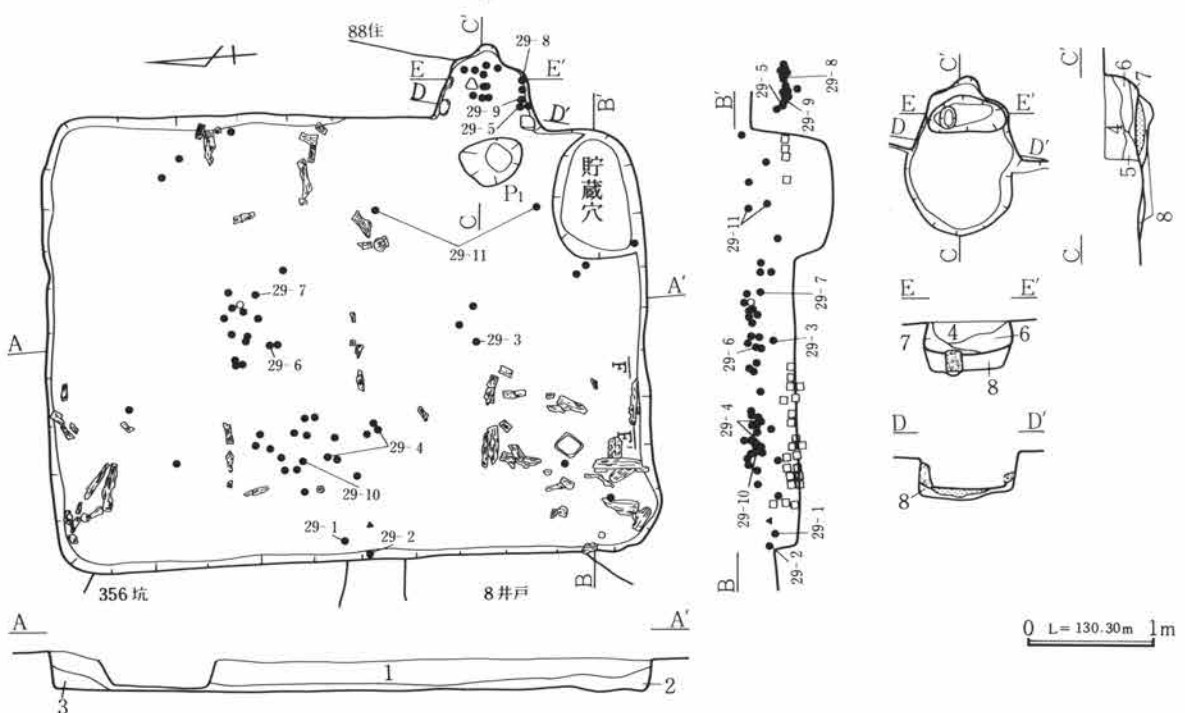
第26図 I区第8号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第9号住居跡		位置	38~41-I-70~72グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.53m×4.73m	主軸方位	東-7度-南	残存深度	約25cm程

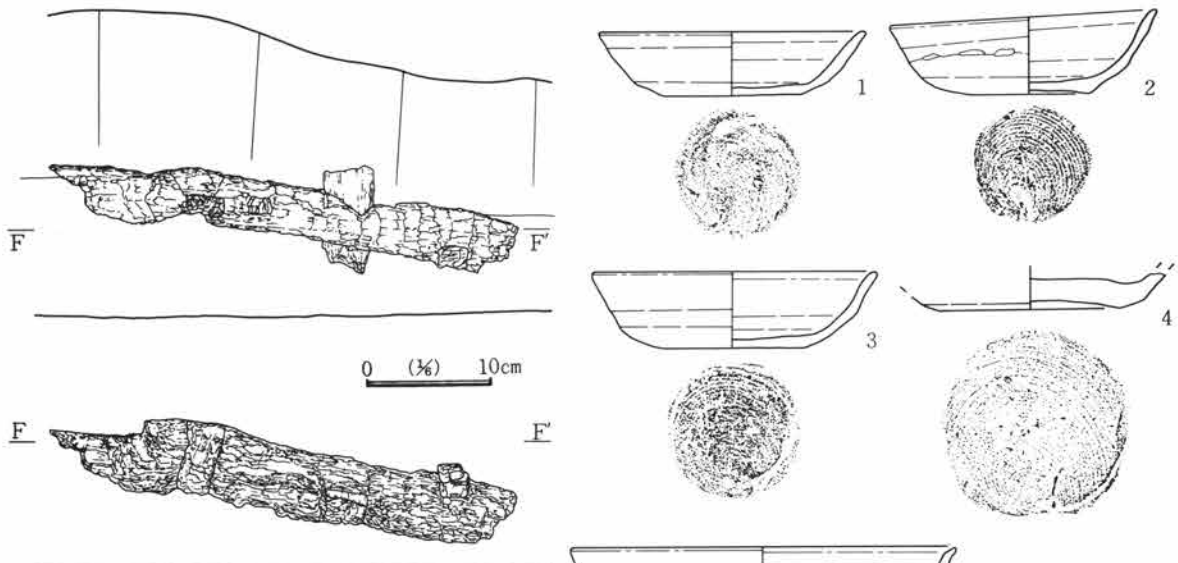
(所見) 当住居跡はカマド部分で第88号住居跡と重複しているが、遺構の確認状態から第88号住居跡→当住居跡という関係であるのは明らかである。当住居跡は、壁がほぼ全周焼土化して検出されており、確認は非常に容易であった。住居内の調査では、床面が壁面と同様に焼土化し、所々に硬化面を形成していた。この硬化面の精査によって、住居内から検出された施設は貯蔵穴だけである。壁溝・柱穴は痕跡すらも検出されていないことから、当初から掘削されなかったものと判断した。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、約100×70cm、深さ約30cmの楕円形を呈しており、内部から遺物の出土はみられない。当住居跡は上述のように壁面及び床面が焼土化している。また、覆土中には焼土や炭化物を多量にふくんでいる上に、炭化材の破片も多数検出されている。このような状況から当住居跡が消失しているのは明らかである。この消失は、住居内の炭化した茅や住居部材と考えられる炭化材の検出状況から、茅等の屋根材を含めた上屋が残っている段階であり、しかも、完形遺物の少なさなどから判断して廃棄段階であろう。炭化材中注目されるのは、南壁の西寄りから検出した第28図に提示したものである。残存状態は良好ではないが、3ヵ所にほぞ穴が穿たれそこに細い部材が差し込まれた状態が看取できよう。これが何に使用されたものであるかは不明である。

カマドは、東壁南寄りに検出され、主軸方位は東-10°-南である。平面形は煙道がわずかに突出する凸字形であり、規模は全長約70cm、燃焼部幅約60cmである。袖は住居内には突出せず、壁との接合部に角柱状の截石を据えている。支脚は袖部材と同様の材質で作られ、中央左寄りに設置されていた。

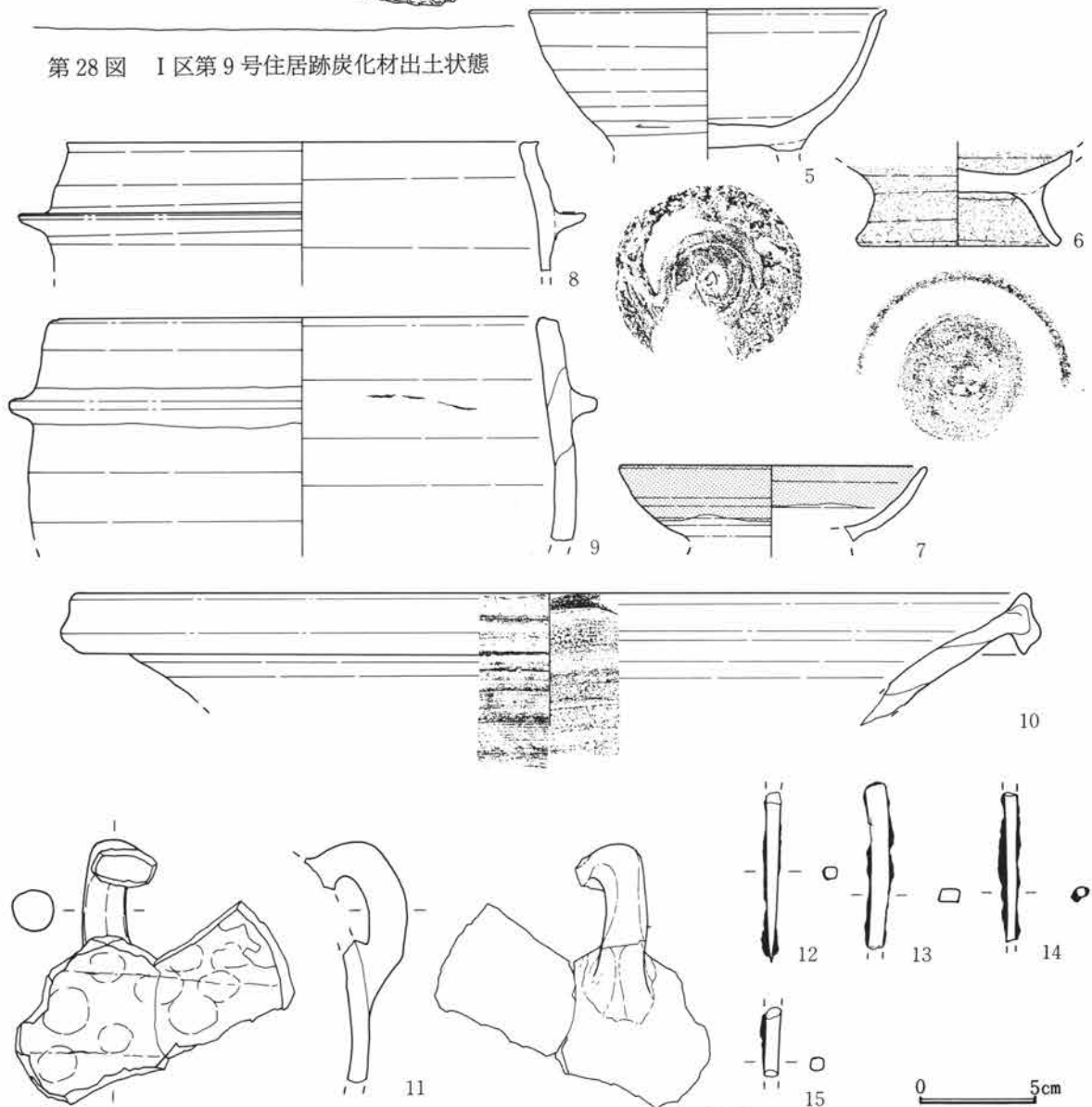


- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. 暗褐色土 灰白色粒を少量、焼土粒・炭化物を多量に含む。 | 5. 暗褐色土 4層と比較して焼土粒を多量に含み、粘性が弱い。 |
| 2. 暗褐色土 1層と比較して、焼土粒の量が増し、粘性が強い。 | 6. 暗褐色土 炭化物はやや多く、焼土粒は少ない。 |
| 3. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を少量含む。 | 7. 暗褐色土 焼土粒を少量と、VI層土をわずかに含む。 |
| 4. 暗褐色土 焼土粒を少量と、炭化物を微量含む。 | 8. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量含む。 |

第27図 I区第9号住居跡実測図



第28図 I区第9号住居跡炭化材出土状態



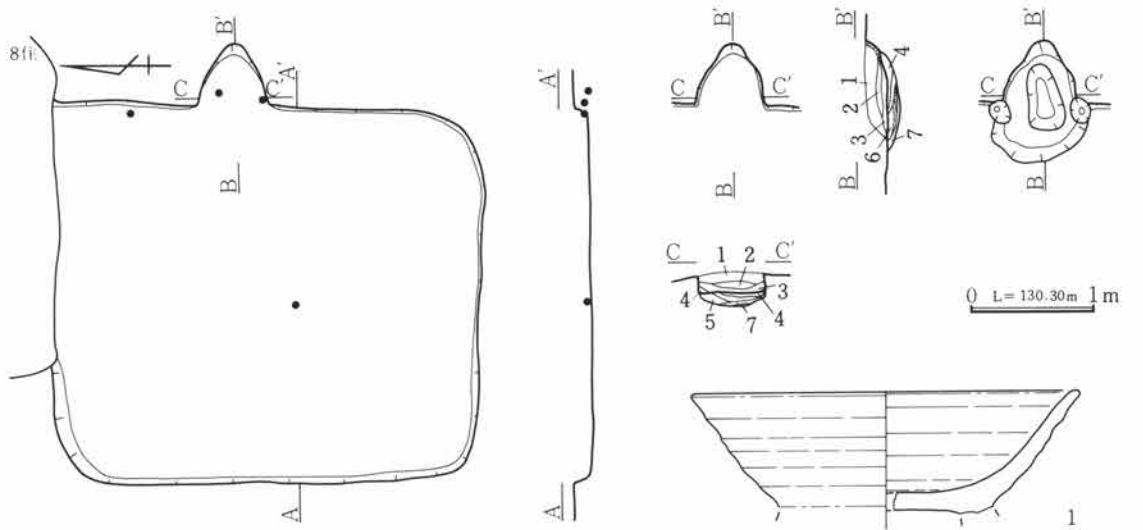
第29図 I区第9号住居跡出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第10号住居跡		位置	45～47—I—70～72グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.93m×3.35m	主軸方位	東—0度—北	残存深度	約10cm程

(所見) 当住居跡は、第8・38号住居跡と重複している。これらの前後関係は検出の状況から第38号住居跡→当住居跡→第8号住居跡と考えられる。壁は第8号住居跡との重複によって失われた部分を除いて全周検出した。住居内の施設は、第38号住居跡との重複で判別しにくい面があるが、貯蔵穴を含めて検出することはできなかった。遺物の出土もきわめて少なく実測に耐えるものは図示した須恵器塊1点である。

カマドは東壁ほぼ中央で、主軸方位は東—0°—北である。平面形は煙道がやや突出する砲弾形を呈しており、全長約55cm、燃烧部幅約50cmである。カマドには袖材や支脚は残存していないが、掘り方段階の調査ではそれぞれの据え方と思われるピットが検出されていることから、本来は設置されていたものであろう。



1. 暗褐色土 焼土は微量で、黒褐色粘質土ブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土 焼土粒は2層と比較してやや少なく、粘性は強い。
4. 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含み、粘性は弱い。
5. 暗褐色土 灰を多量に含み、焼土粒をほとんど含まない。
6. 赤褐色土 焼土ブロックと粒を多量に含む。
7. 暗褐色土 焼土粒を微量含む。

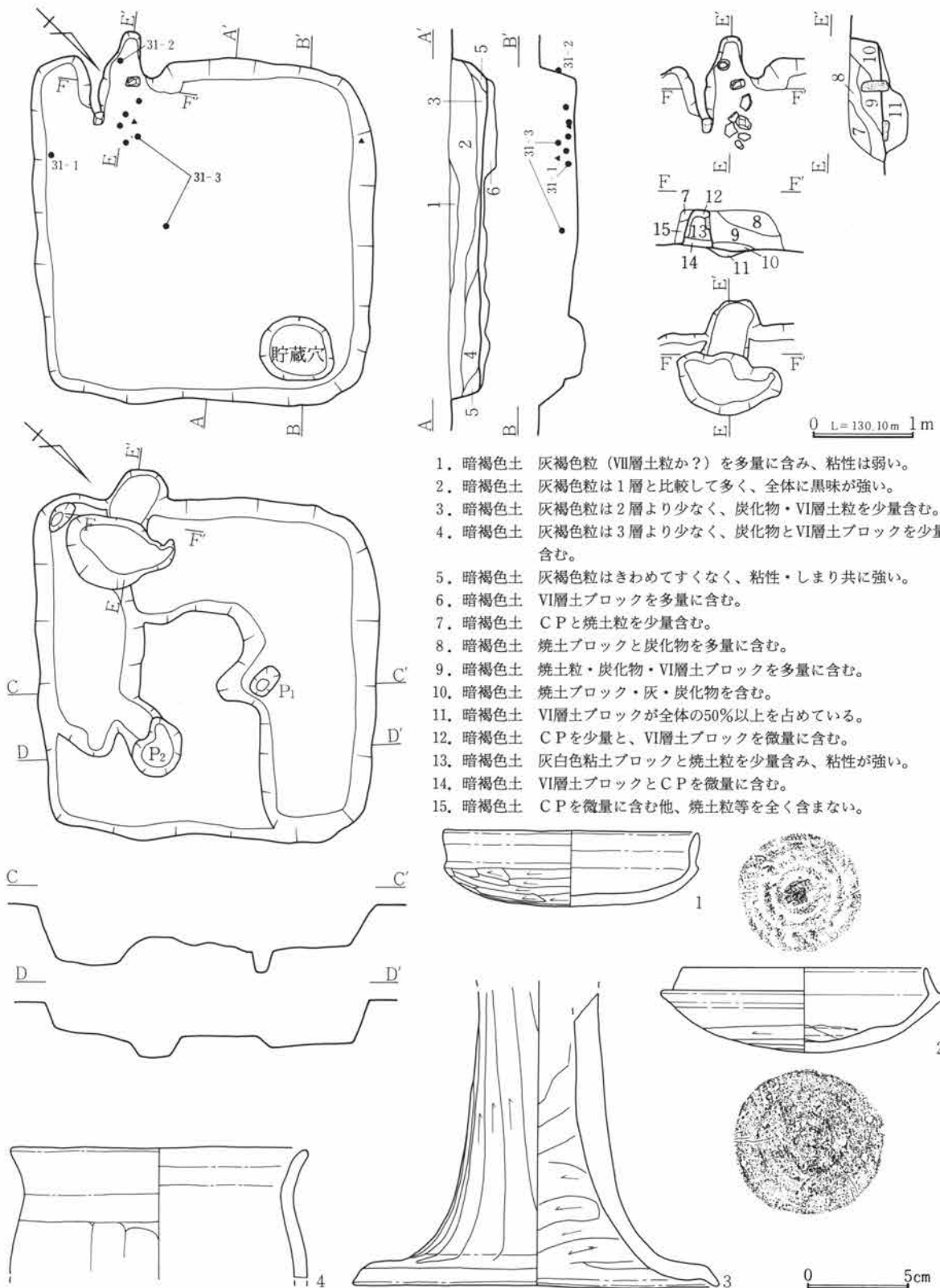
第30図 I区第10号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第12号住居跡		位置	39～41—I—64～66グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.30m×3.32m	主軸方位	西—40度—南	残存深度	約30cm程

(所見) 当住居跡は、弥生時代の第74号住居跡と重複する以外に同時期の遺構との重複はみられない。確認はIV層土中であるが、平面プランは比較的容易に確認することができ、壁・床面共に残存状態は良好である。柱穴と壁溝は掘り方の調査においても検出されていない。貯蔵穴はカマドと対角線の位置に当たる北コーナー部に検出した。平面形は円形を呈し、規模は径約65cm、深さ約15cmである。掘り方は東コーナー付近から中央部にかけて床面が残る以外壁に沿って幅約110cm、深さ約10cmの範囲が掘り下げられている。

カマドは南西壁の南寄りに位置し、主軸方位は西—37°—南である。袖は左袖が残存しており、先端部には角柱状の截石を部材として据えている。支脚は袖石と同様の材を燃烧部右寄りに据えていた。煙道は壁から約40cm外に延びている。実測遺物のほとんどがこのカマド周辺から出土している。

第2節 検出された遺構・遺物



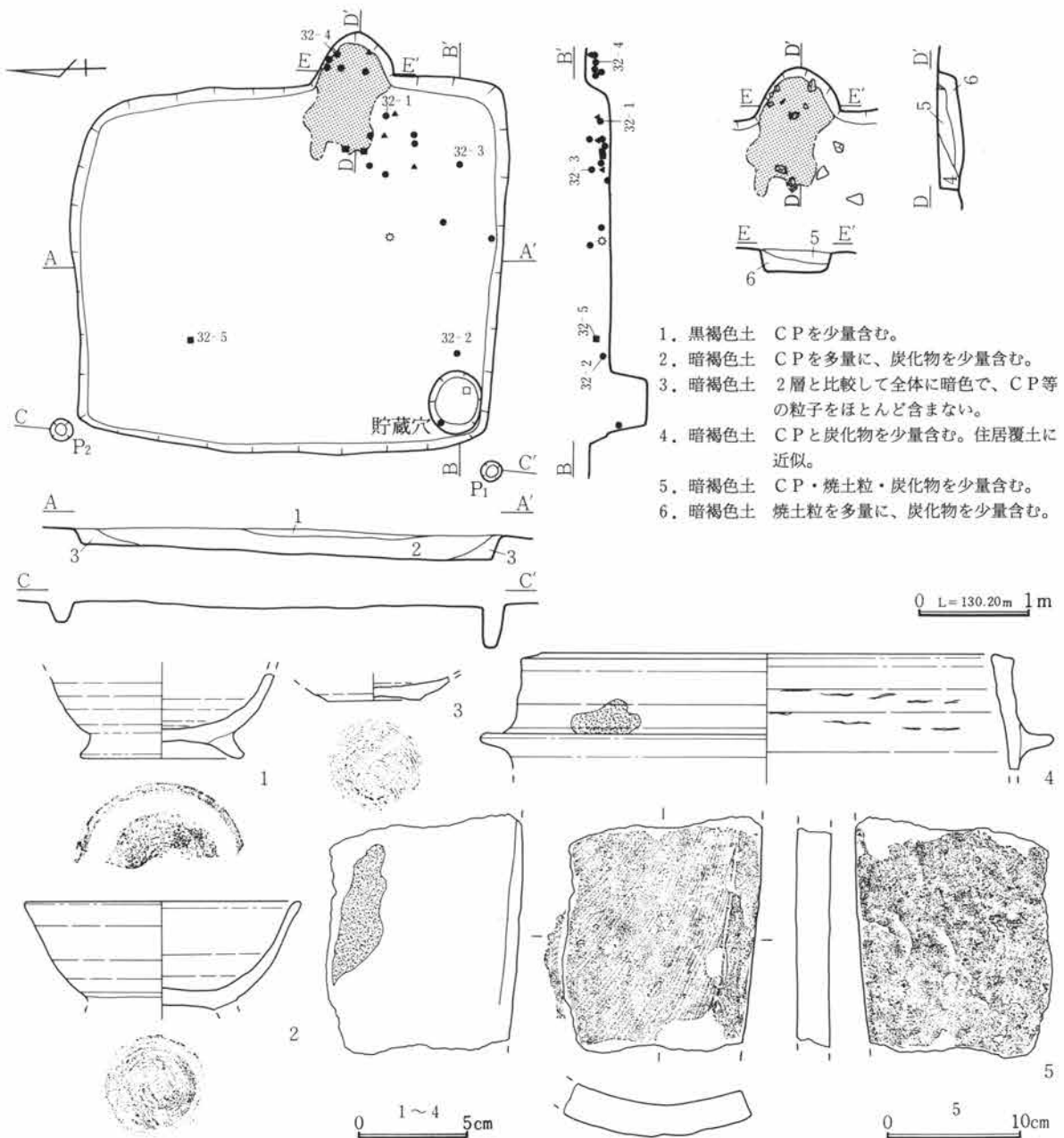
第31図 I区第12号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第13号住居跡	位置	32~34-I-76~78グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	3.23m×3.83m	主軸方位	東-3度-南	残存深度	約20cm程

第4章 検出された遺構・遺物

(所見) 当住居跡は、第15号掘立柱建物跡と重複している。この前後関係は遺構の検出状況から第15号掘立柱建物跡→当住居跡であるのは明らかである。壁は全周明瞭に捉えることができ、床面も平坦な面として検出したが硬化面は捉えられていない。柱穴と壁溝は床面の精査によっても検出されていない。当住居跡には掘り方がみられないので、掘削されなかったものと考えられる。ただ柱穴に関しては、西壁の壁外に検出したP₁(径約20cm、深さ約35cm)とP₂(径約20cm、深さ約20cm)の2つのピットが、柱穴的な機能を有していた可能性がある。貯蔵穴は楕円形を呈し、南西コーナー部に位置している。規模は約45×55cm、深さ約32cmと、比較的しっかりとした掘り方を有している。

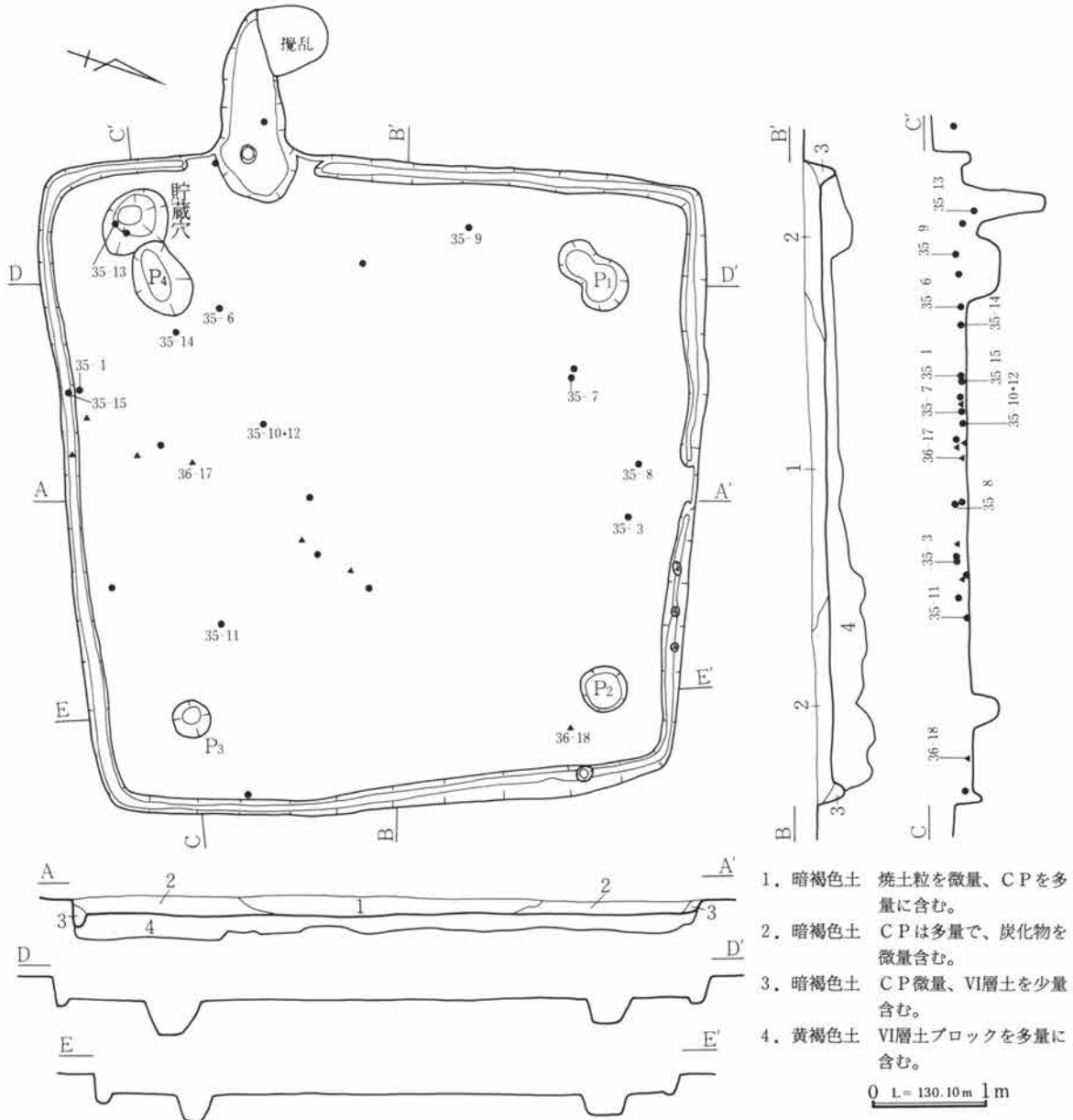
カマドは東壁南寄りに位置し、主軸方位は東-5°-南である。袖は検出されていないが、燃烧部に瓦の出土が認められることから、瓦を部材として使用していたものかもしれない。規模は全長約40cmと短く、燃烧部幅は約60cmである。この燃烧部から屋内左寄りの位置にかけて明瞭な灰面の広がりが見られた。



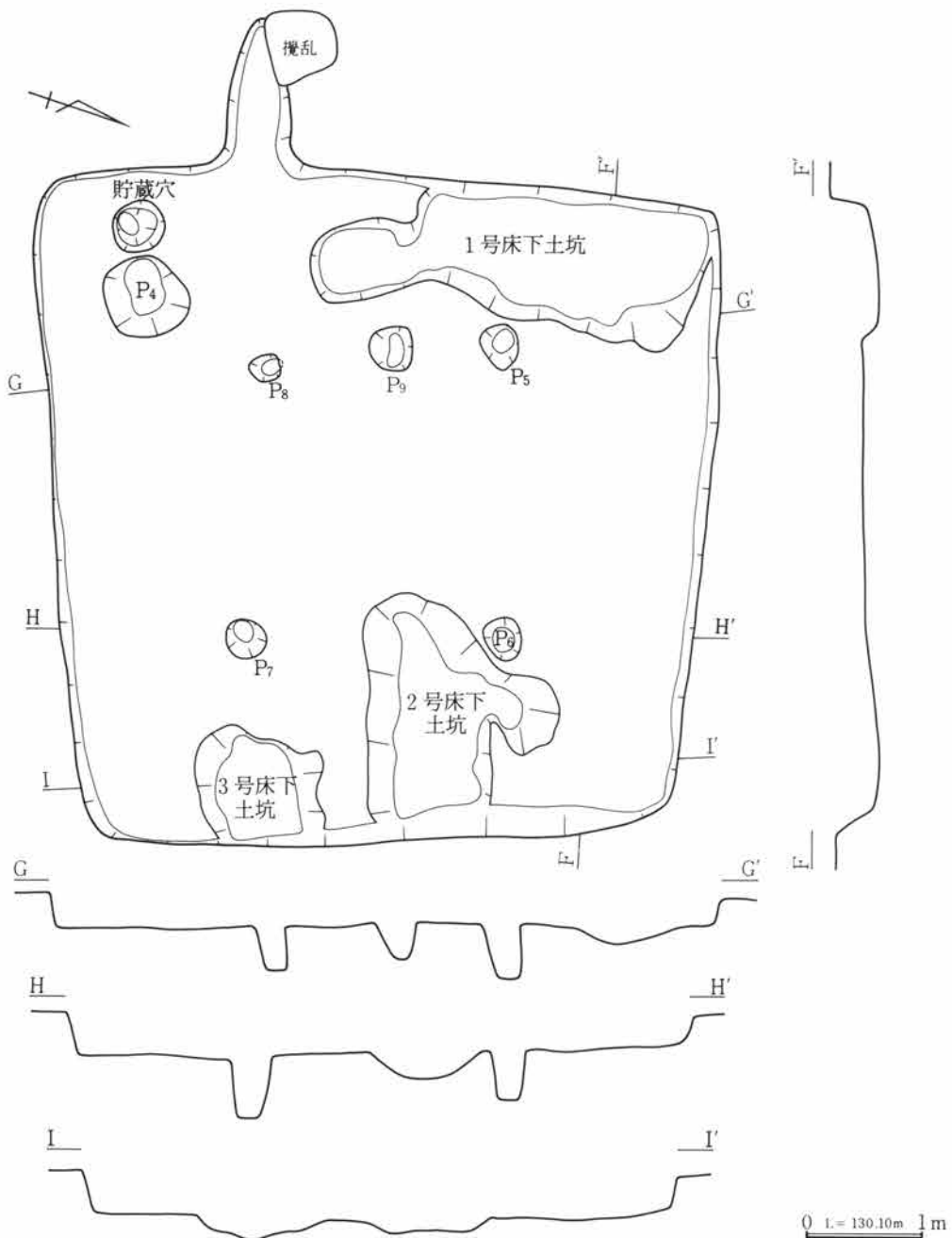
第32図 I区第13号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第14号住居跡		位置	45~48-I-64~68グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.55m×5.50m	主軸方位	西-18度-南	残存深度	約12cm程

(所見) 当住居跡は南側で第124号住居跡と重複しており、確認状況から第124号住居跡→当住居跡と考えられる。確認はIV層土中で行ったが、遺構は浅く残存状態は良好ではない。床面は平坦であるが硬化した面は全く確認されていない。壁溝は、下幅約4~10cm、深さ約5~11cmの規模を有し、カマド部分と北西壁中央部を除いて全周検出した。柱穴は、床面精査の段階ではP₁~P₄(径約34~50cm、深さ約14~28cm、柱穴間距離 P₁~P₂間約3.5m、P₂~P₃間約3.6m、P₃~P₄間約3.7m、P₄~P₁間約3.8m)の4本を検出している。この内P₁とP₄には外側に柱穴の掘り替えと考えられるピットの重複がみられる。これに対して、掘り方の調査においてP₅~P₈(径約23~33cm、深さ約32~48cm、柱穴間距離 P₅~P₆間約2.5m、P₆~P₇間約2.2m、P₇~P₈間約2.2m、P₈~P₅間約2.0m)の4本の新たな柱穴を検出している。また、P₅とP₈の間には、柱



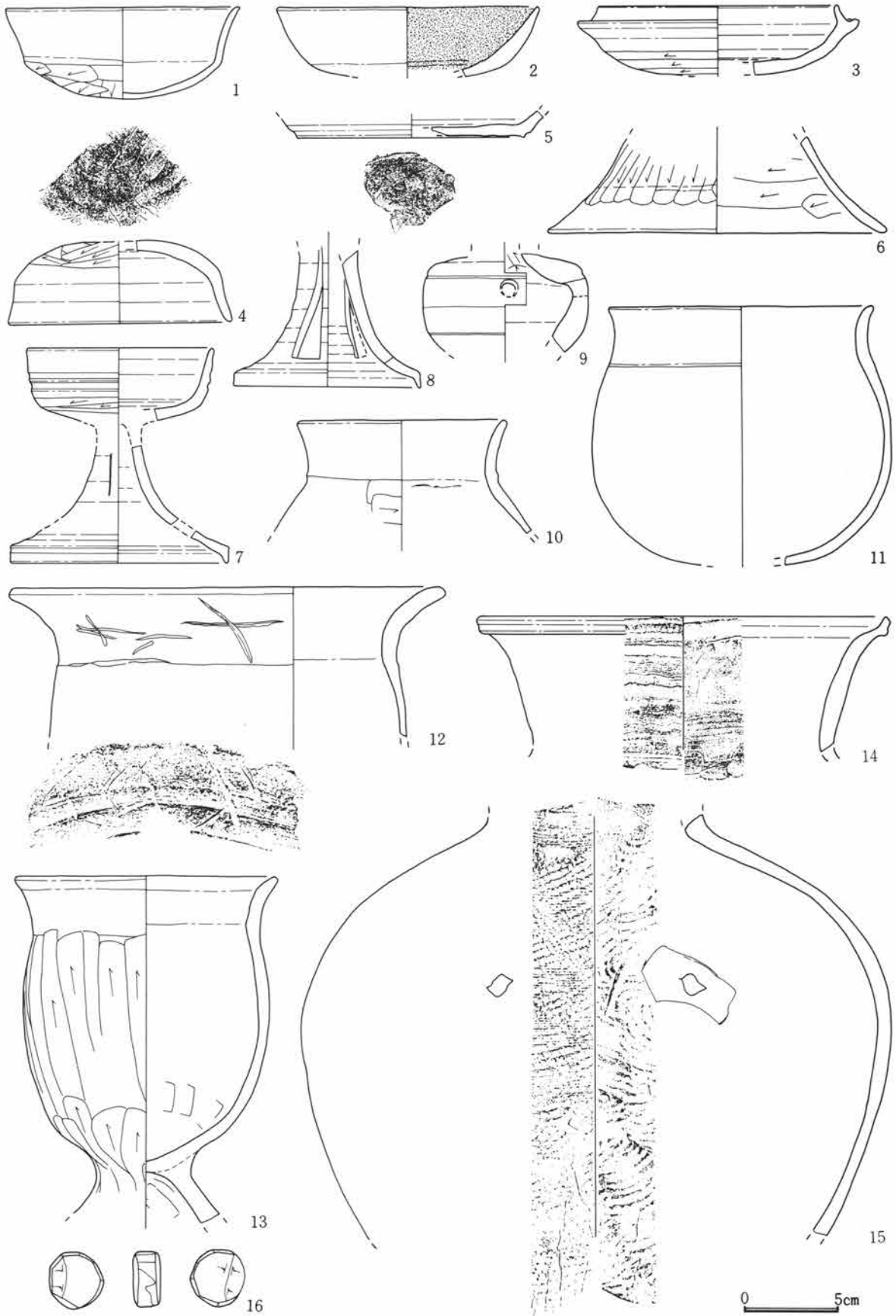
第33図 I区第14号住居跡実測図(1)



第34図 I区第14号住居跡実測図(2)

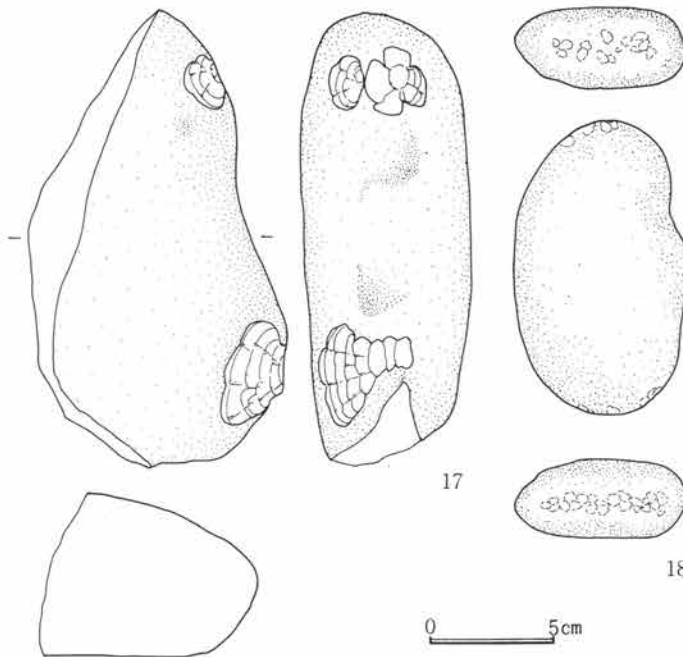
穴とほぼ同規模のP₉(径約36cm、深さ約30cm、柱穴間距離 P₈~P₉間約1.1m、P₉~P₅間約0.9m)が位置しており、これも一連のものである可能性がある。このP₅~P₉の柱穴は、当住居跡の平面との齟齬はないが、これまで検出されてきた柱穴を有する住居跡の平面と柱穴との位置関係と比較すると、明らかに柱穴間の距離は短くバランスが悪い。また、この5本の柱穴と考えられるピットは、床面精査の段階では全く検出することはできなかったものである。以上のような状況から判断すると、当住居跡は全体の拡張を伴うような建て替えが行われている例と考えられる。つまり、掘り方の段階で確認したP₅~P₉→P₁~P₄という関係なのではないだろうか。この場合P₁~P₄の柱穴に対応する貯蔵穴は、南コーナー部に検出した径約45cm、深さ約73cmの円形プランのピットであり、P₅~P₉の柱穴に対応する貯蔵穴は、掘り方段階でP₄と重複して検出した約67×70cm、深さ約25cmの方形に近いプランを有するピットではないかと考えている。

第2節 検出された遺構・遺物



第35図 I区第14号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



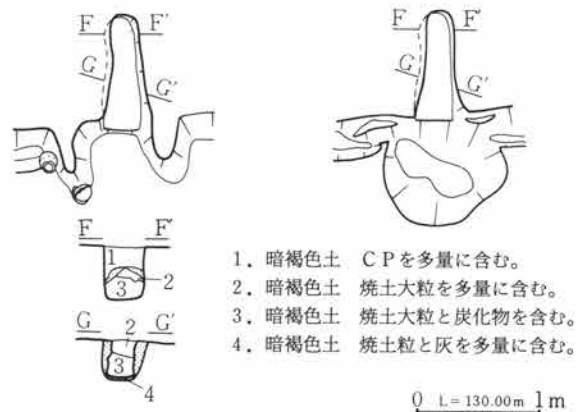
カマドは南西壁の南寄りに位置しており、主軸方位は西 29° 南である。煙道の先端部は後世の土坑によって攪乱され残存していないが、その他の部分の残存状態も良好ではない。残存部分での全長は約165cm、燃烧部の掘り方の幅は約70cm、煙道部幅は約35cmである。袖は、カマドの平面形態から判断して屋内に長く延びていたはずであるが、袖材の据え方を含めて痕跡も確認されていない。支脚は、部材の残存は認められないが、燃烧部中央やや左寄りの位置に径約14cmの円形のピットが検出されていることから、この位置に据えられていたものと思われる。

第36図 I区第14号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第15号住居跡		位置	41~43—I-61~64グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.95m×4.30m	主軸方位	東 15° 北	残存深度	約50cm程

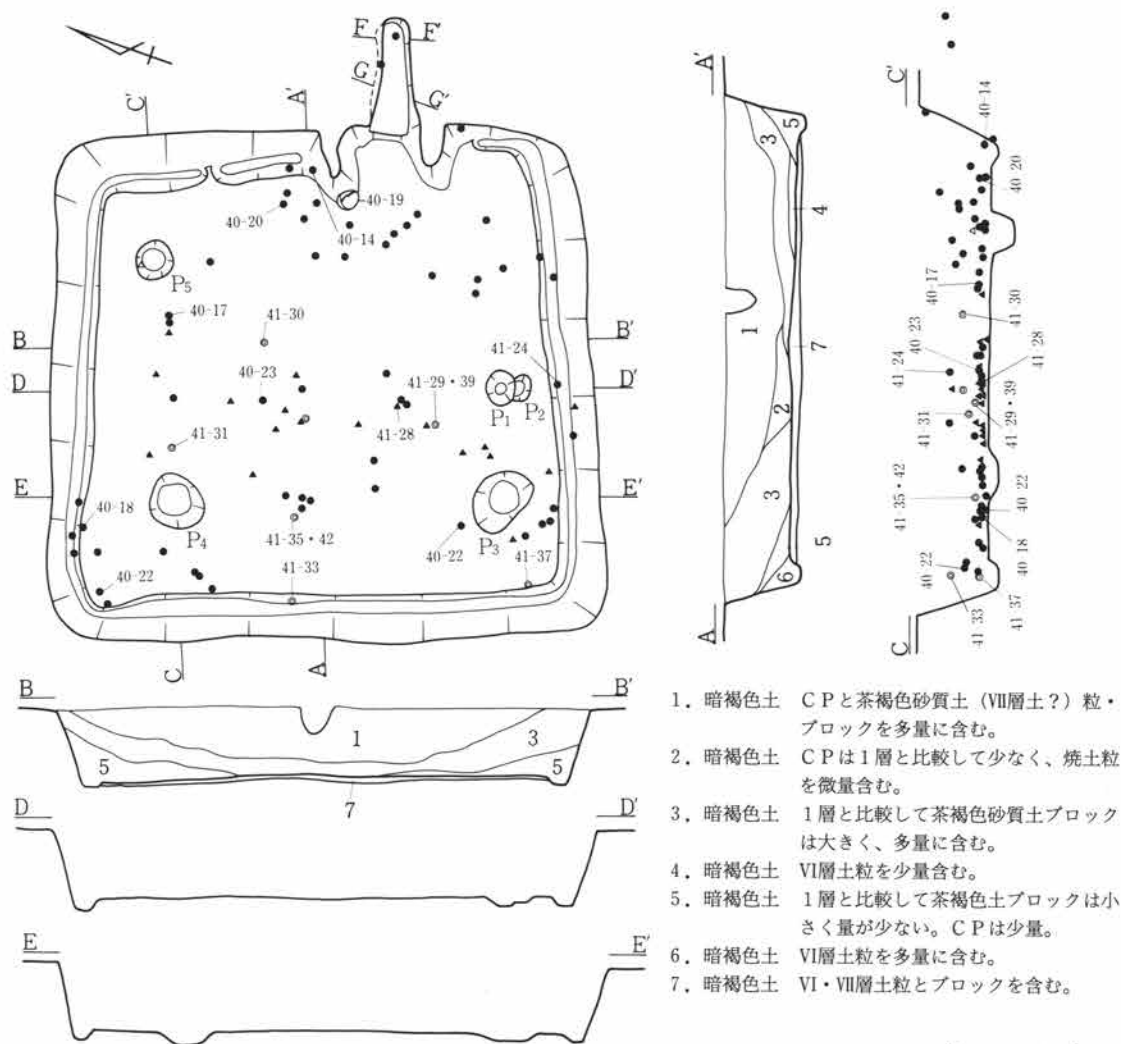
(所見) 当住居跡は北側で第35号住居跡と重複しているが、遺構の検出状況と残存状態から判断して、第35号住居跡→当住居跡という前後関係が想定できる。この関係は相互の出土遺物の比較からも概ね問題がないと考えている。当住居跡はカマド部分が南北農道下にかかっており、2次の調査で全体像を明らかにしている。確認はほぼIV層中であるが、壁はVI・VII層を貫いて掘削されており、残存状態は極めて良好である。住居を充填している覆土は、周囲から埋没した状態を典型的に示している。壁溝は、下幅約5~15cm、深さ約5~10cmの規模で、北東壁の一部とカマド部分を除いて全周して検出されている。この壁溝を充填していた土層は、住居の第1次埋没土と全く同じ要素で構成されており、層として区別することはできなかった。床面はVII層土中に構築されており、VII層土の性質を反映して非常に硬くしまっている。この床面の精査によって5本のピットを検出したが、一般的な柱穴の位置にあるのはP₁(径約40cm、深さ約5cm)・P₄(径約42cm、深さ約10cm)・P₅(径約30cm、深さ約19cm)の3本である。しかし、4番目のピットが掘削された痕跡はなく、また、深さがあまりにも浅いことなどから判断すると柱穴でない可能性が強い。

カマドは北東壁の南寄りに検出され、主軸方位は東 15° 北である。袖は約60cm屋内に延びており、残存状態の良好な左袖先端部には、第40図19の土師器甕が伏せた状態で据えられており、右袖も同様であったと考えられる。燃烧部は両袖間から奥壁までの空間で、幅は約45cmである。煙道は長さ約92cm、下幅約27cmの範囲が検出され、天井部の一部及び両壁が焼土化して残存していた。



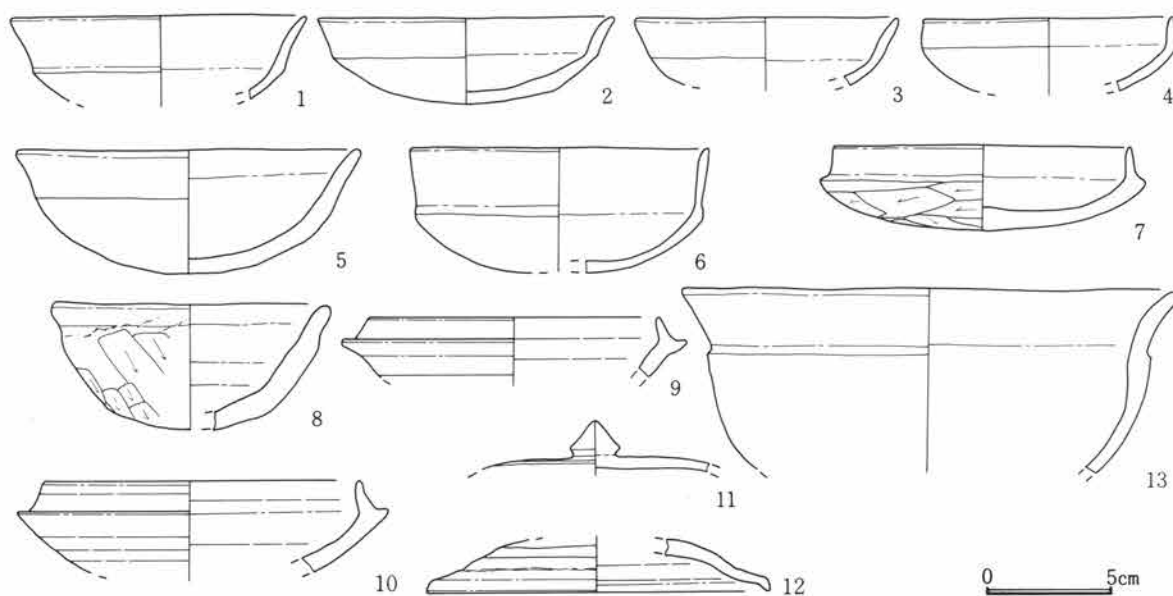
1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 焼土大粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 焼土大粒と炭化物を含む。
4. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。

第37図 I区第15号住居跡実測図(1)



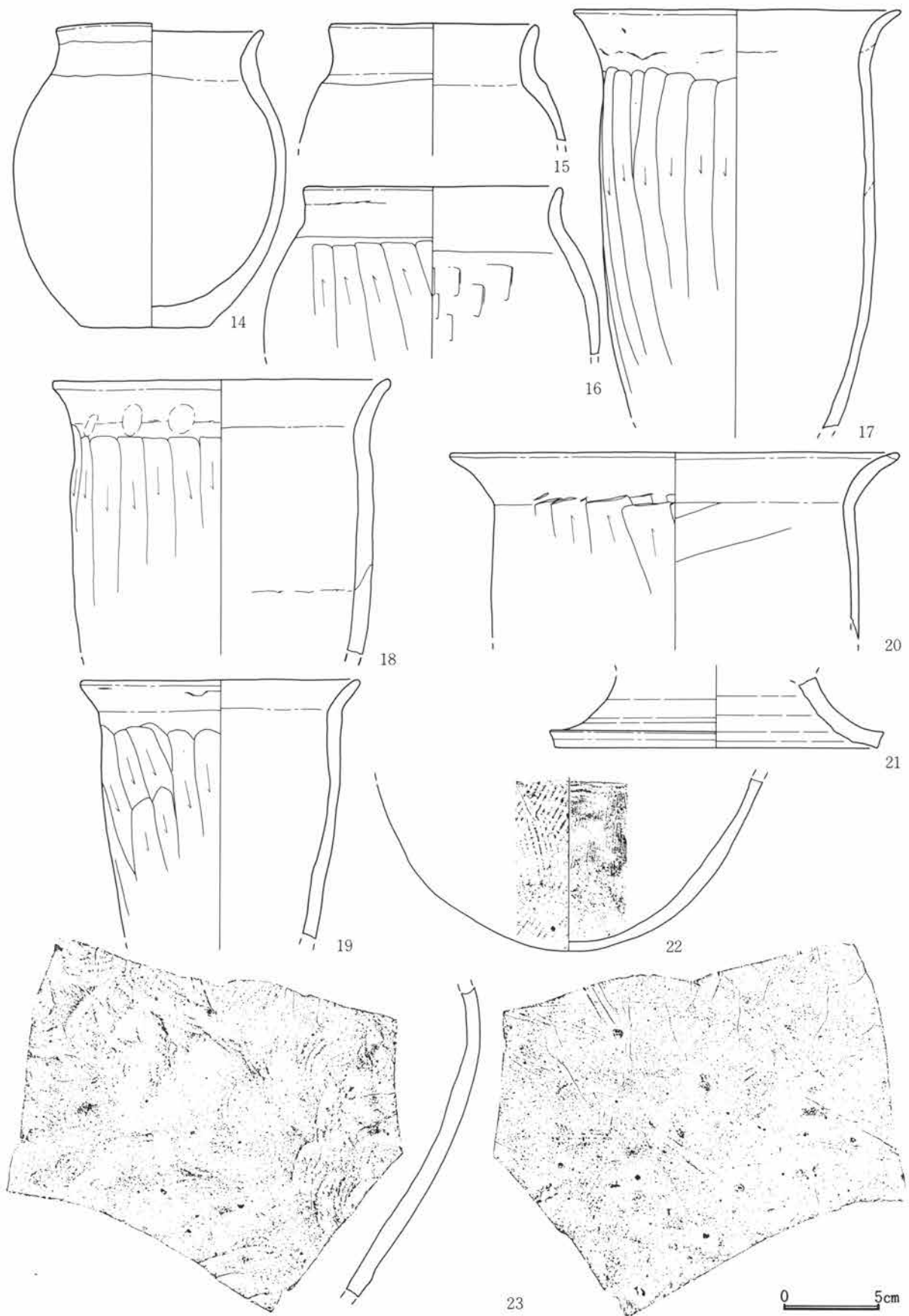
第38図 I区第15号住居跡実測図(2)

0 1=130.00m 1m

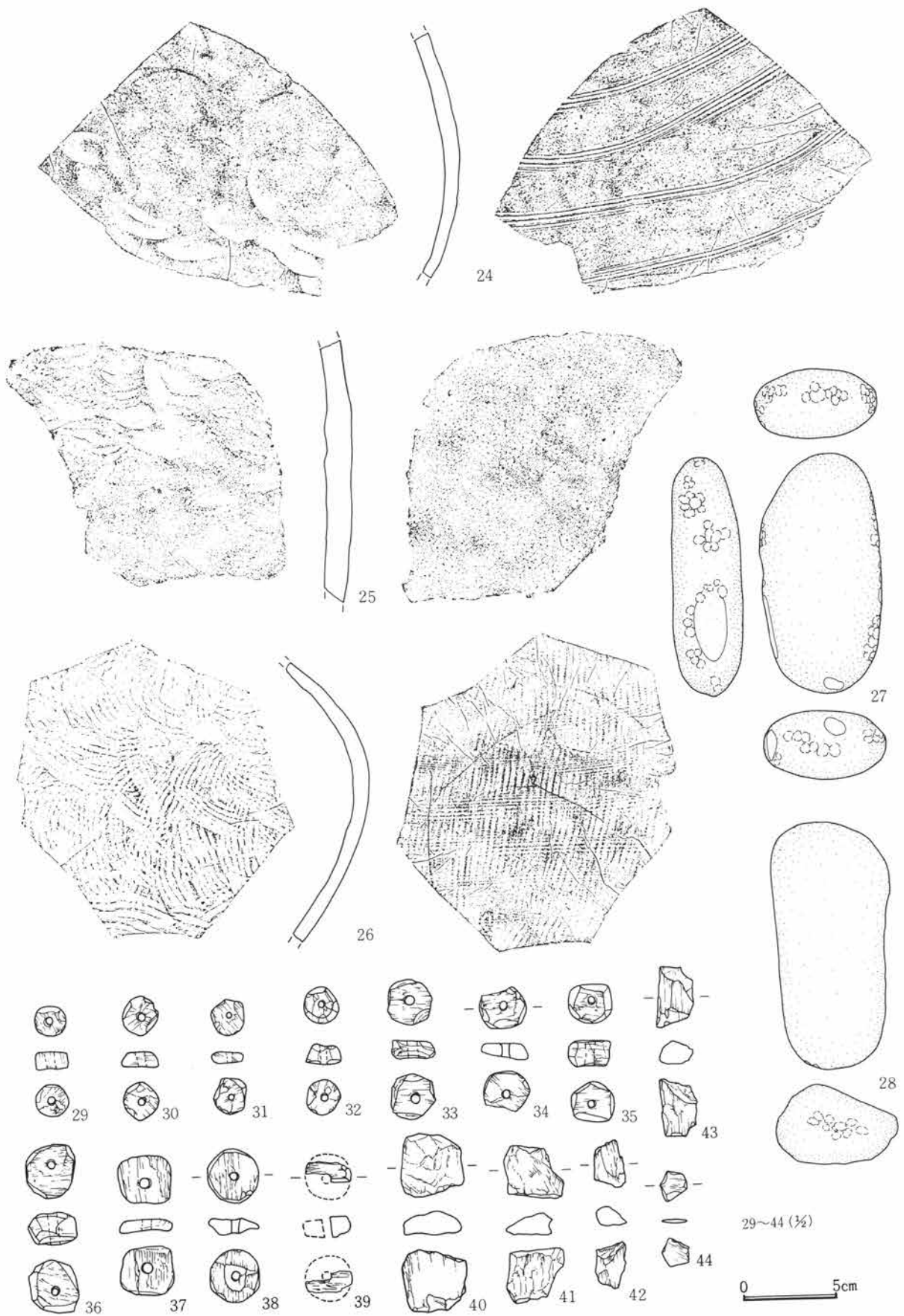


第39図 I区第15号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第40図 I区第15号住居跡出土遺物実測図(2)



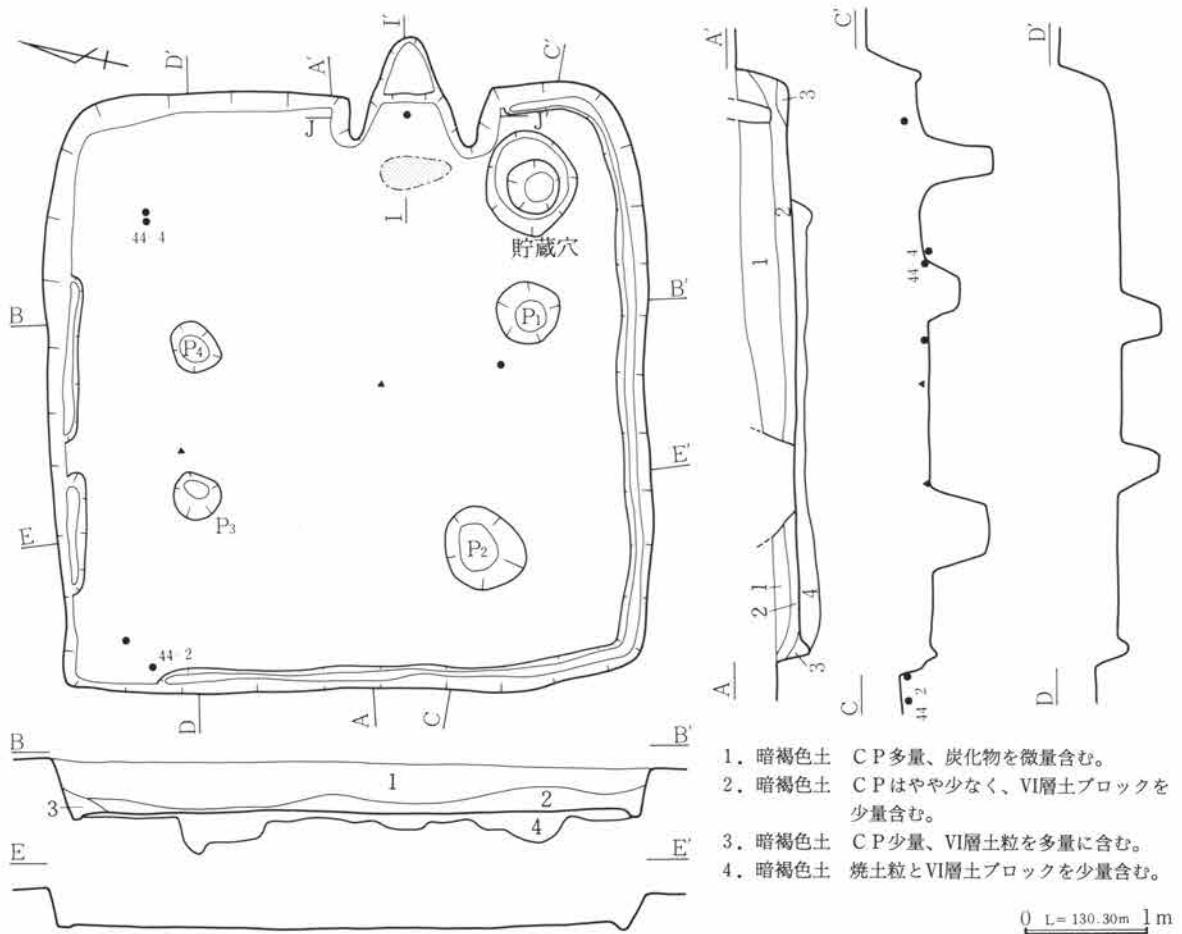
第41図 I区第15号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第16号住居跡	位置	41~44-I-72~74グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	4.75m×4.72m	主軸方位	東-14度-北	残存深度	約40cm程

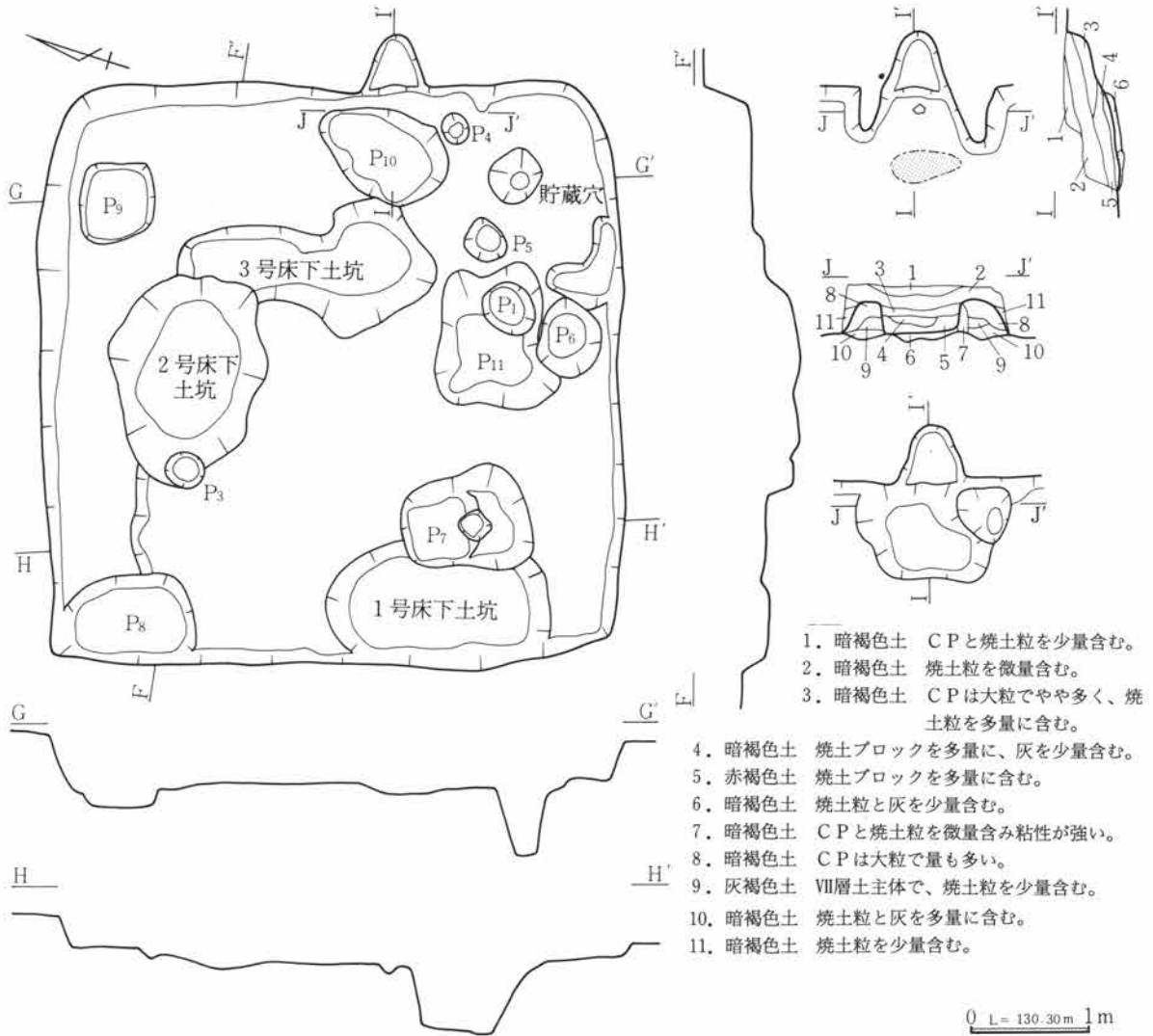
(所見) 当住居跡は北側で第56号址と重複しているが、検出の状況や遺構の残存状態からは明確に判断できないため、出土遺物の比較をすると当住居跡→第56号址と考えられる。確認はIV層土中であり、重複部分以外は明瞭に確認することができた。壁溝は南東コーナー部から北西コーナー部付近までは連続して検出されているが、住居北半については北壁中央部に2ヵ所、部分的に残存したにすぎない。床面は、VI層土と焼土粒を含む土の貼床であり、平坦であるが硬化面は全く検出されていない。ピットは床面精査によってP₁(径約50cm、深さ約25cm)・P₂(径約60cm、深さ約45cm)・P₃(径約37cm、深さ約30cm)・P₄(径約36cm、深さ約33cm)の4本が検出されている。これら4本のピットは、全体の配置としては柱穴間距離のバランスが悪い。しかし、その中においてP₃とP₄は規模的にもほぼ同一で、しかも北壁に平行するような規則性のあるような配置がみられることから、柱穴として機能した可能性は否定できない。貯蔵穴は南東コーナー部に検出し、二段の掘り方を有している。一段目は径約75cm、深さ約5cmの円形で、その中央やや西寄りに径約41cm、深さ約53cmの円形の掘り込みが位置している。

カマドは、東壁やや南寄りに位置し、主軸方位は東-14°-北で住居跡の主軸方位と一致している。右袖は約45cm、左袖が約35cm残存していたが、壁から約60cm屋内の位置に焼土面がみられることから、ここが燃焼部であったものと考えられる。

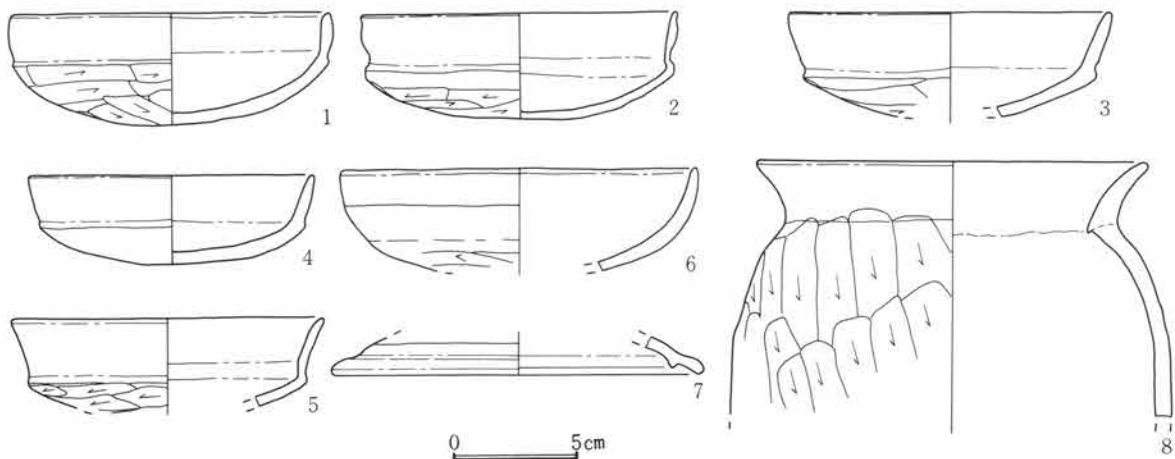


第42図 I区第16号住居跡実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



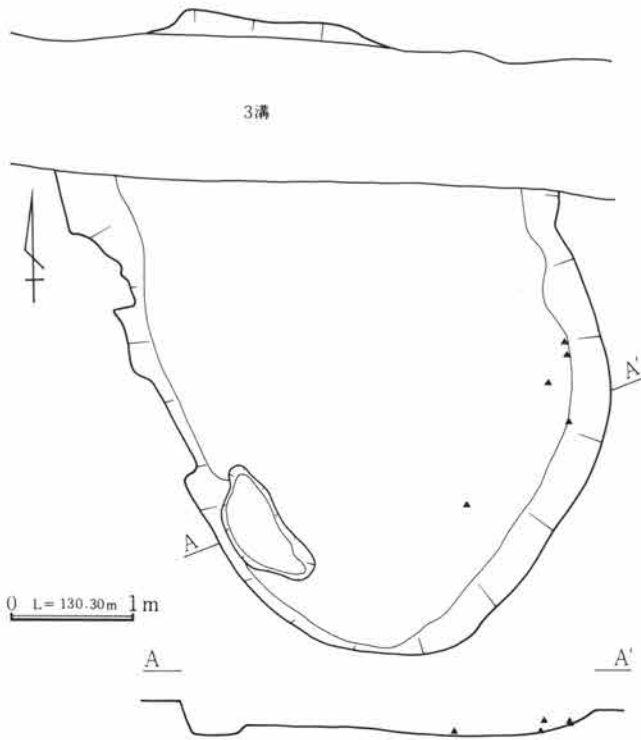
第43図 I区第16号住居跡実測図(2)



第44図 I区第16号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第17号址		位置	40~43-I-78~81グリッド内			
平面形態	楕円形	規模	5.03m×3.40m	主軸方位	北-8度-西	残存深度	約14cm程

第4章 検出された遺構・遺物

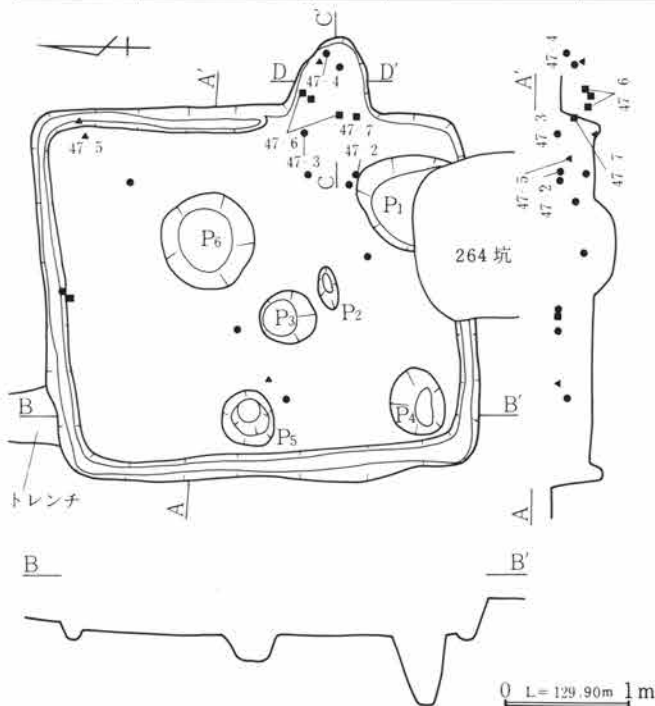


第45図 I区第17号址実測図

(所見) 当址は北側を中世以降に属する第3号溝状遺構に削平され、南側で第21号住居跡と重複している。第21号住居跡との前後関係は、遺構の検出状況から第21号住居跡→当址と考えられるが、当址からは時期を特定できるような遺物の出土がみられないため、それ以上の検証は不可能である。当址が古代の遺構であることは、当址を充填していた土層が他の住居跡を充填していた土層に類似したものであることからほぼ確実である。平面形は比較的整形であるが、住居としての条件は全く満たしていないため址として扱っているが、独立した1基の遺構であるかどうかについても不安な要素がある。つまり土坑の集合体である可能性が否定できないような壁の状態が認められる。

遺物は西側の壁際から数点の礫が出土しただけである。

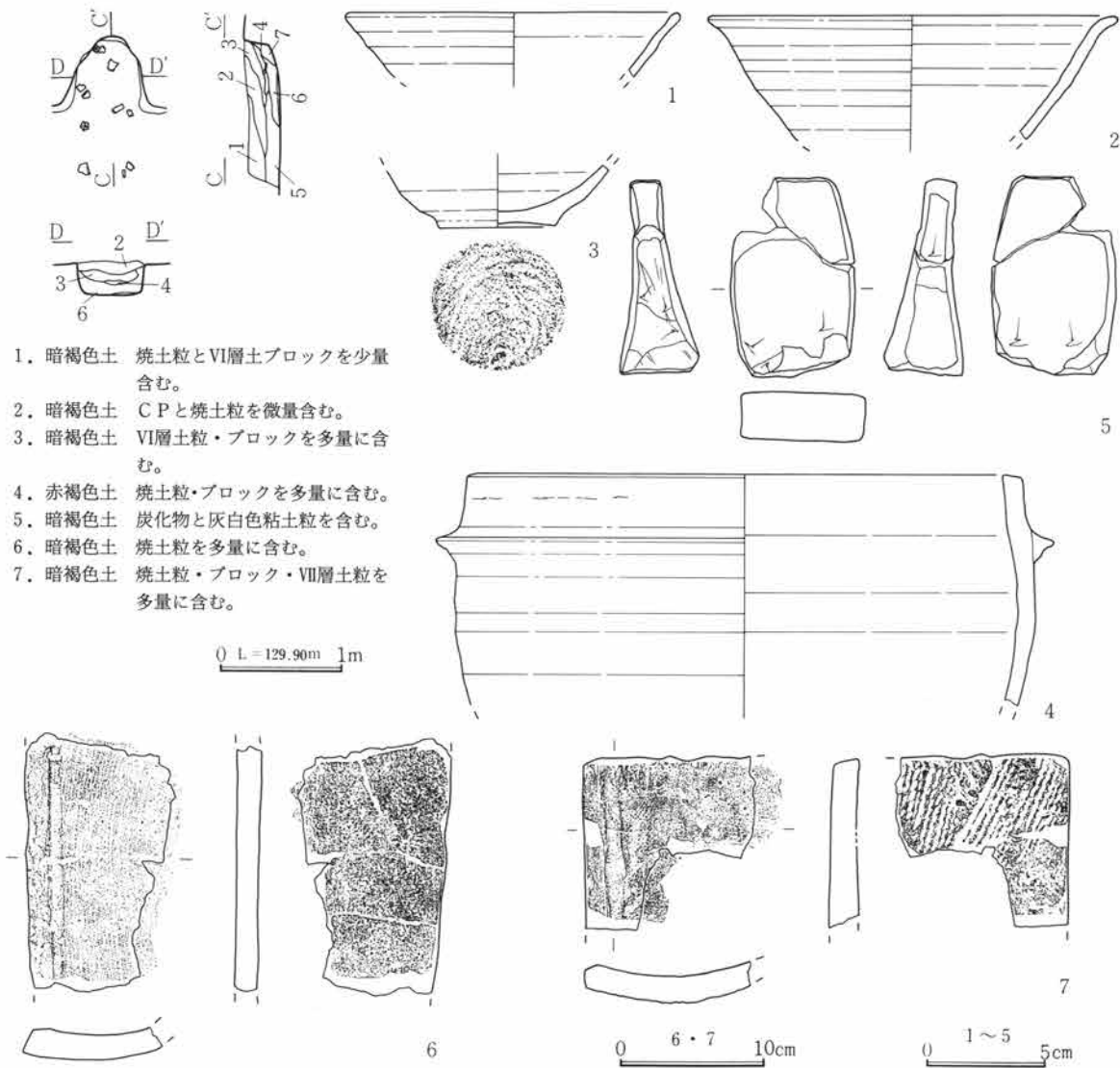
遺構名称	I区第18号住居跡	位置	42・43-I-55~57グリッド内
平面形態	隅丸方形	規模	2.93m×3.40m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約28cm程



第46図 I区第18号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は、南壁の一部が中世以降に掘削されたと考えられる第264号土坑によって削平されている。平面プランの確認はIV層土中でおこなっている。当初、床面は遺物の出土面として捉えたが、実際にはさらに下位のVII層土中に壁溝をともなって明瞭に捉えることができた。壁溝は南東コーナー部を除き全周検出された。下幅は約5~19cm、深さは約4~7cmである。床面精査の段階で6カ所のピットを検出したが、配置に規則性を看取することはできず、柱穴と認定できるものはなかった。また、P₁(残存部径約76cm、深さ約9cm)とP₆(径約74cm、深さ約16cm)は、他住居でも検出されるケースの多い床下土坑と同じものであろう。貯蔵穴は位置的にはP₁とも考えられるが、一応南西コーナー部に検出されたP₄(約44×55cmの楕円形、

深さ約53cm)を想定しておきたい。カマドは東壁の南寄りに検出され、主軸方位は東-0°-北である。袖石・支脚等は痕跡も残っておらず、詳細は不明である。



1. 暗褐色土 焼土粒とVI層土ブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 C Pと焼土粒を微量含む。
3. 暗褐色土 VI層土粒・ブロックを多量に含む。
4. 赤褐色土 焼土粒・ブロックを多量に含む。
5. 暗褐色土 炭化物と灰白色粘土粒を含む。
6. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
7. 暗褐色土 焼土粒・ブロック・VII層土粒を多量に含む。

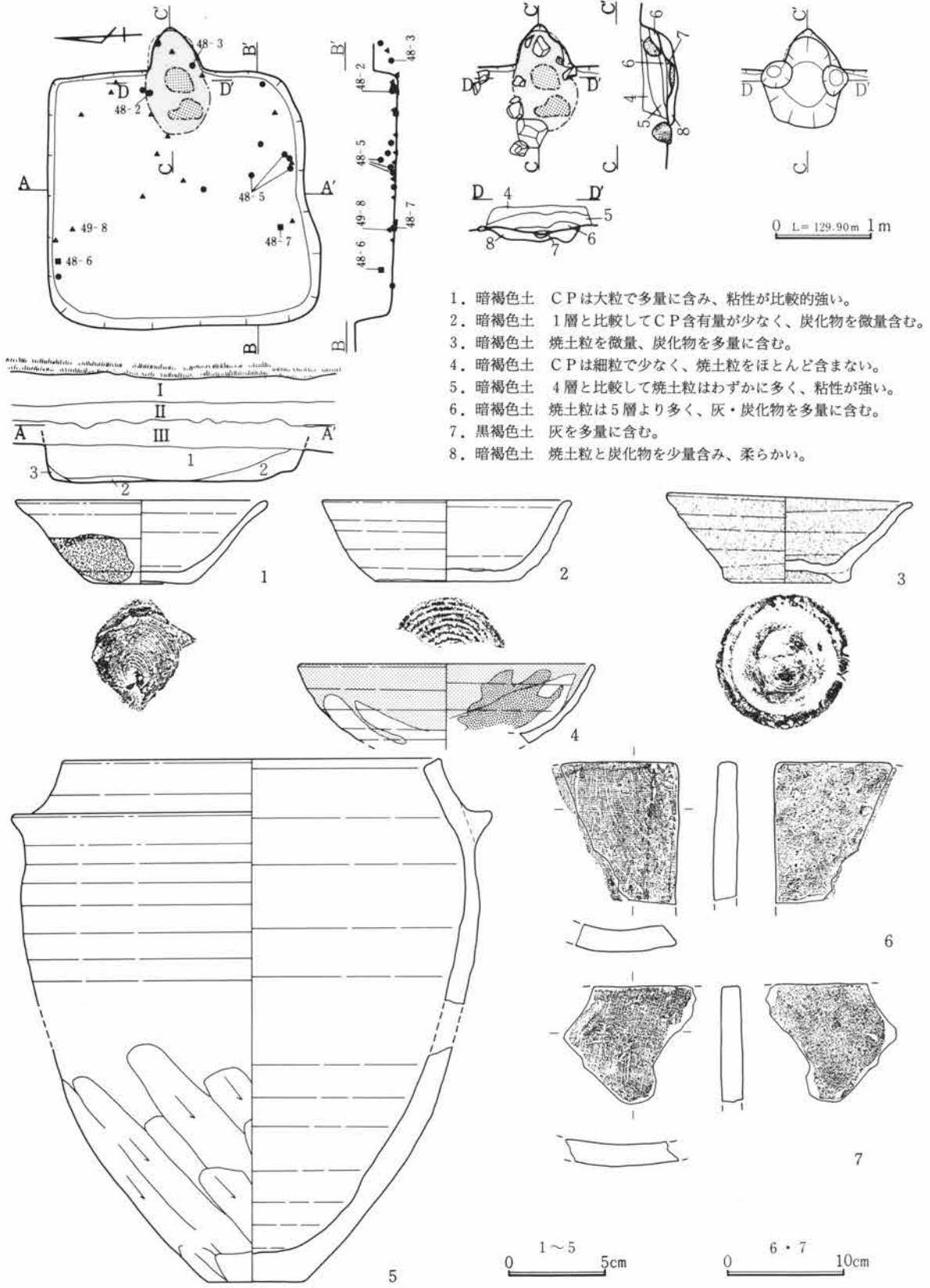
第47図 I区第18号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第19号住居跡		位置	37・38—I—59・60グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.55m×2.60m	主軸方位	東—0度—北	残存深度	約33cm程

(所見) 当住居跡は、西側の半分が南北農道下にかかっていたため、カマド側を先行調査し、反対側は2次の調査で検出したもので図面の上で合成している。当住居跡の占地する場所は、時期を異にする住居跡の密集する部分にあたり、南壁の一部を除く各部分で第22・34・162号住居跡と重複している。これらの前後関係は、検出の状況から判断して第22・34・162号住居跡→当住居跡と考えられる。住居の掘り込みはIII層土でおこなわれているはずであるが、III層土の断面観察から明らかにすることはできなかった。床面は他住居の覆土中に構築されているため、明瞭に捉えられず、同様の理由から壁溝・貯蔵穴等の検出もできなかったものと考えられる。

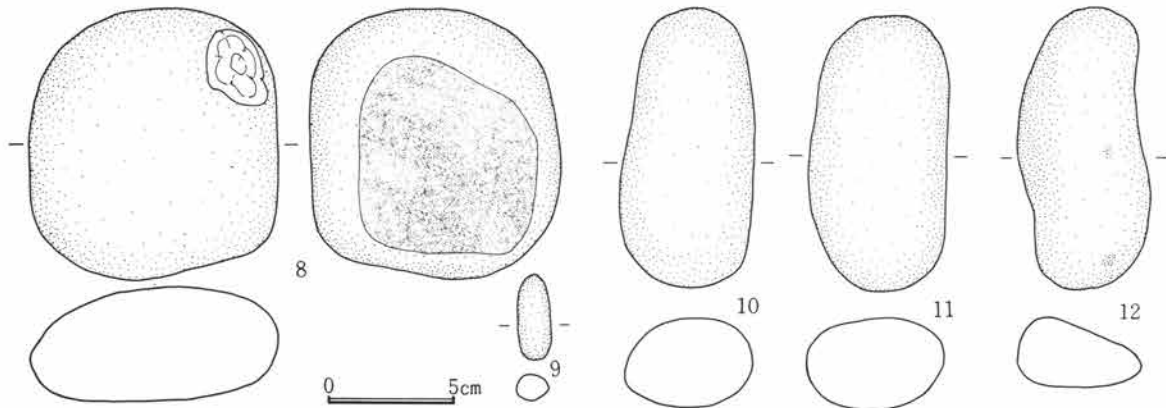
カマドは東壁の中央部に検出し、主軸方位は東—1°—北であり、ほぼ住居跡の主軸方位と一致している。カマドの残存はあまり良好ではなく、袖石・支脚の残存はみとめられない。しかし、掘り方の調査では壁との接合部に径約25cm、深さ約16cmの円形のピットが一对検出されており、この位置に袖石等の部材が据えら

第4章 検出された遺構・遺物



第48図 I区第19号住居跡・出土遺物実測図(1)

れていたのは明らかである。また、このピットの間には焼土面が、さらにその屋内側からは灰面が2面検出されており、この部分が燃焼部であったことがわかる。

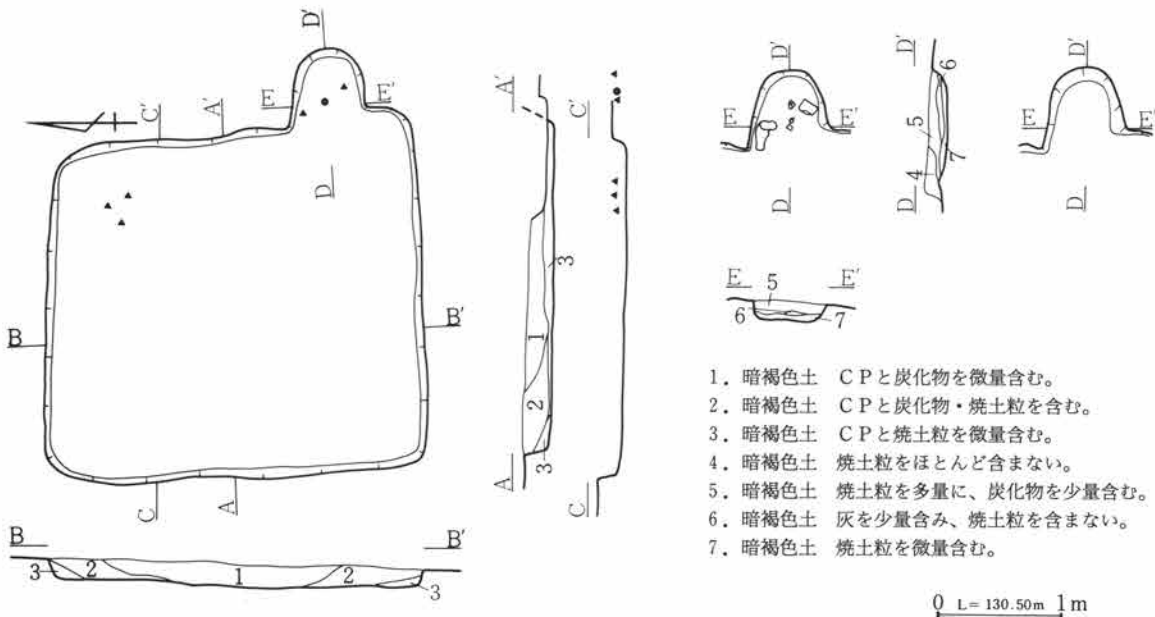


第49図 I区第19号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第20号住居跡	位置	38・39-I-81~83グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	2.75m×2.95m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約18cm程

(所見) 当住居跡は西壁で第90号住居跡と重複するが、遺構の検出状況と残存状態から第90号住居跡→当住居跡と判断した。住居の検出はIV層土中で行った結果、平面プランは容易に確認することができた。壁の残存は浅く良好とは言えないが、平面プランに不整な部分は認められず、崩れ等の痕跡はみられない。床面はVI層土中に構築され、貼床がみられないことから比較的堅くしまっている。この床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴等の内部の施設は一切検出されていない。前述のように床面はVI層そのものであり、ピット等の掘削が行われていれば、明瞭に捉えることができるはずであることから、これらの施設は設けられなかったものと思われる。

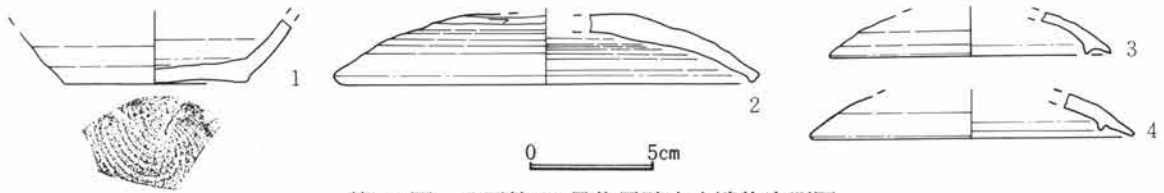
カマドは東壁の南寄りに偏って検出され、主軸方位は東-0°-北で、住居の主軸方位と一致している。平面形態は馬蹄形であり、袖等が屋内へ伸びる可能性はない。規模は全長約45cm、燃烧部幅約50cmである。燃烧部には底面からやや浮いた状態で袖石として使用されることの多い砂質の石が2個出土している。残存が良くないため袖石か支脚かの区別はできなかった。



第50図 I区第20号住居跡実測図

1. 暗褐色土 CPと炭化物を微量含む。
2. 暗褐色土 CPと炭化物・焼土粒を含む。
3. 暗褐色土 CPと焼土粒を微量含む。
4. 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まない。
5. 暗褐色土 焼土粒を多量に、炭化物を少量含む。
6. 暗褐色土 灰を少量含み、焼土粒を含まない。
7. 暗褐色土 焼土粒を微量含む。

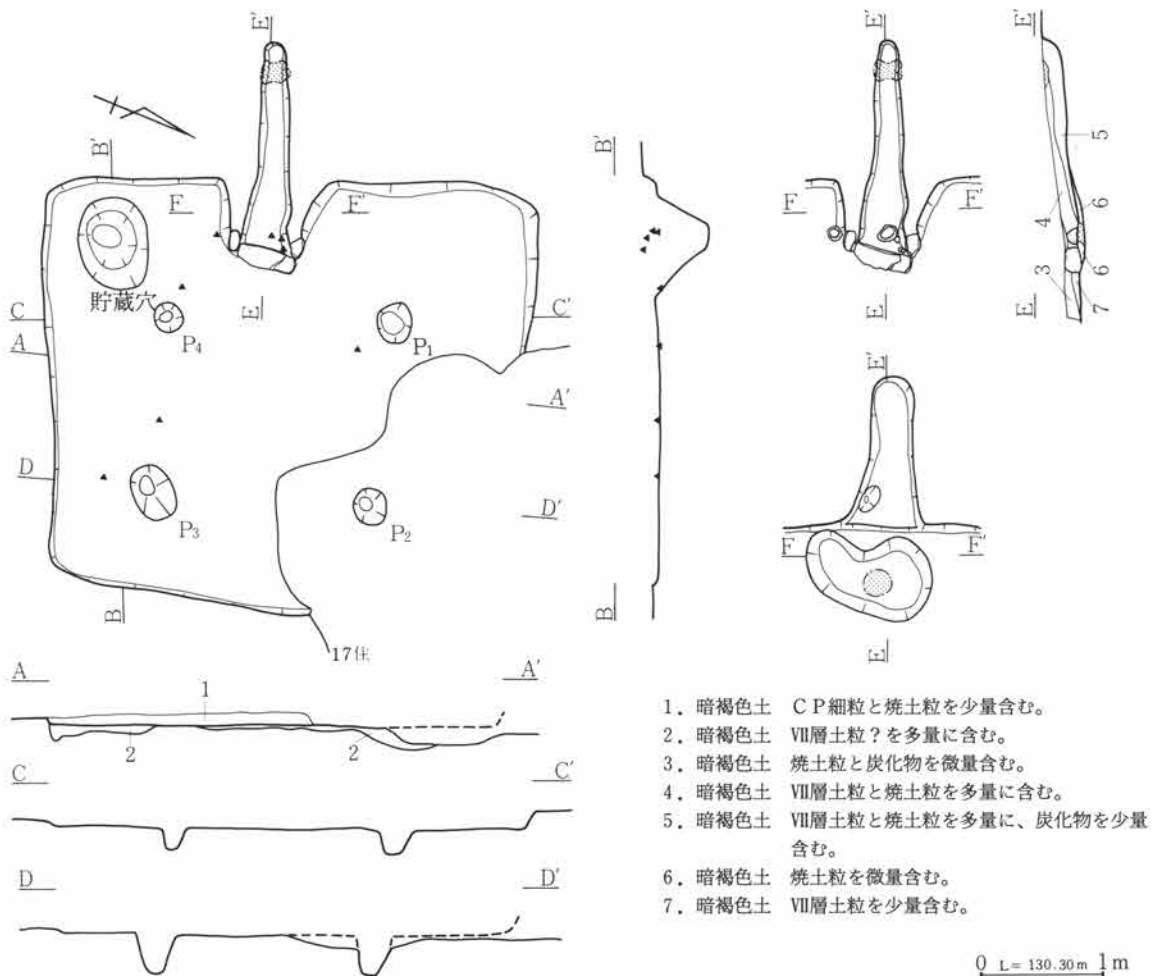
第4章 検出された遺構・遺物



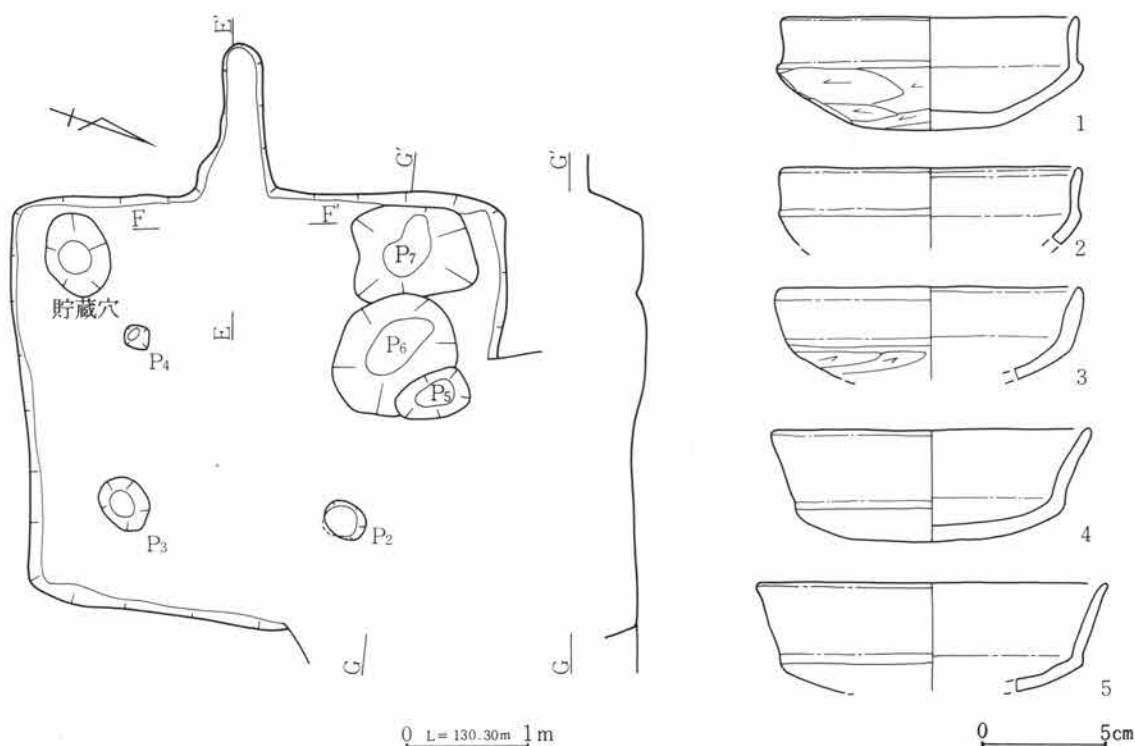
第51図 I区第20号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第21号住居跡		位置	39~41-I-79~81グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.30m×3.78m	主軸方位	西-18度-南	残存深度	約7cm程

(所見) 当住居跡は、北コーナー部で第17号址と重複しているが、遺構の検出及び残存状態から当住居跡→第17号址であろう。床面には部分的に掘り方がみられるが、精査によってP₁~P₄(径約22~30cm、深さ約11~30cm、柱穴間距離P₁~P₂間約1.45m、P₂~P₃間約1.75m、P₃~P₄間約1.35m、P₄~P₁間約1.80m)の4本の柱穴を検出した。貯蔵穴は南コーナー部に検出したピットで、約75×55cmの楕円形で深さ約43cmである。カマドは南西壁のほぼ中央に位置しており、主軸方位は西-19°-南である。両袖共に約60cm屋内に延び、先端には角柱状の截石が据えられていた。さらにその前面の床面からは長さ約50cmの截石が出土していることから、袖石上部に乗せられていたものだろう。燃烧部幅は約27cm、煙道部の長さ約110cm、下幅約16cmで、全長に比べて燃烧部空間が非常に狭い。



第52図 I区第21号住居跡実測図



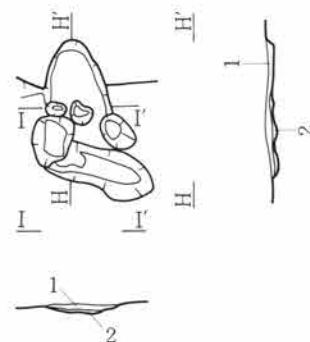
第53図 I区第21号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第22号住居跡		位置	37~40—I—58~61グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.83m×4.80m	主軸方位	東—30度—北	残存深度	約22cm程

(所見) 当住居跡は、調査区北寄りの住居の最も密集する部分に位置している。重複する遺構は、第19・23・25・31・34・162・186・245号住居跡である。当住居跡は西半が南北農道下であったため、2次の調査をおこなっており、前述の重複住居との新旧関係について十分な観察はできていない。しかし、遺構の残存状態から第19・23・25・31号住居跡が当住居跡よりも新しい時期のものであることはほぼ確実である。壁は先行調査した東側では残存していたが、農道下にかかっていた西側は全体に削平を受けている。壁溝は上幅約25cm、下幅約10cm、深さ約5cmで、西側に顕著に検出されている。特に南西壁から南コーナー部にかけて検出した壁溝には、平行して約50cm内側にも同規模の溝が認められた。

柱穴はP₁~P₄(径約25~35cm、深さ約42~56cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.6m、P₂~P₃間約2.5m、P₃~P₄間約2.5m、P₄~P₁間約2.6m)であり、外側の壁溝に対応するものであることは明らかである。内側の壁溝は、その平行する関係から重複を示しているのではなく、P₅・P₆・P₉・P₁₁等を柱穴とした住居であったことを表しているのではないだろうか。つまり、内側のプランの住居から外側のプランの住居へと建て替えが行われた例とみることはできないのではないだろうか。貯蔵穴は東コーナー部に検出した長方形を呈するもので、規模は約49×38cm、深さ約60cmである。

カマドは北東壁南寄りに検出し、主軸方位は東—43°—北である。残存状態はきわめて不良で詳細は不明である。

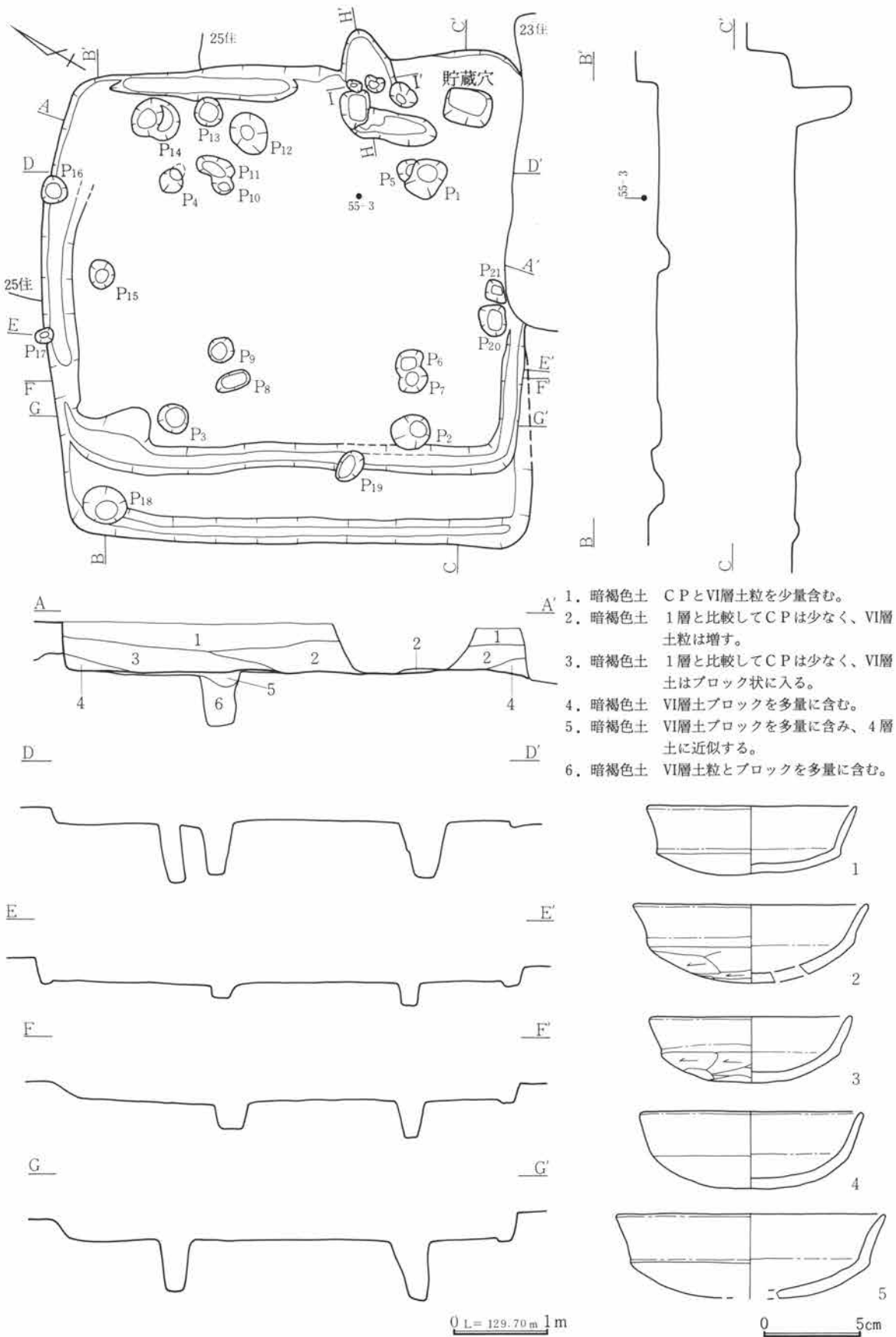


1. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。

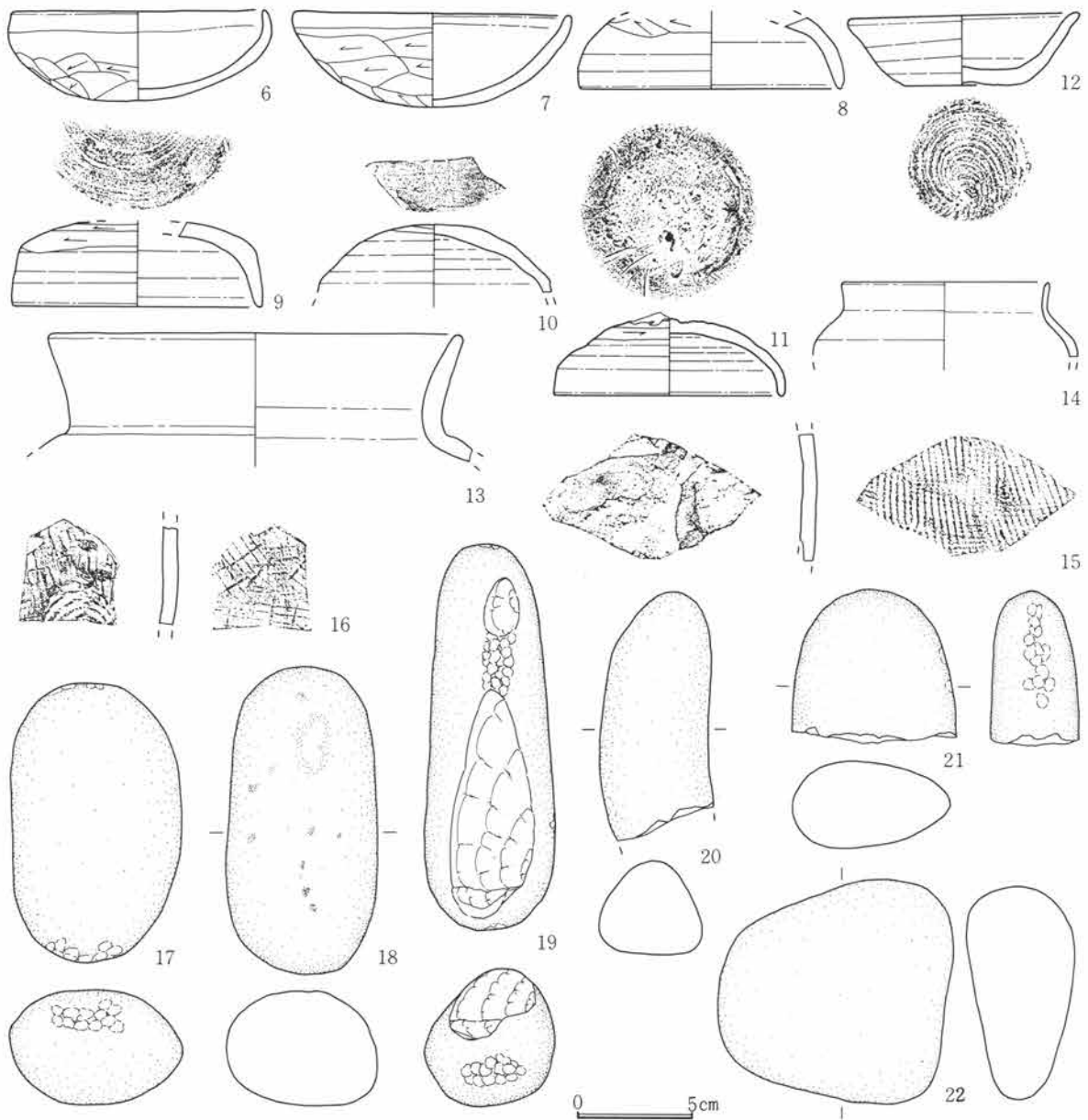
0 L= 1.29.70m 1m

第54図 I区第22号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



第55図 I区第22号住居跡・出土遺物実測図(1)

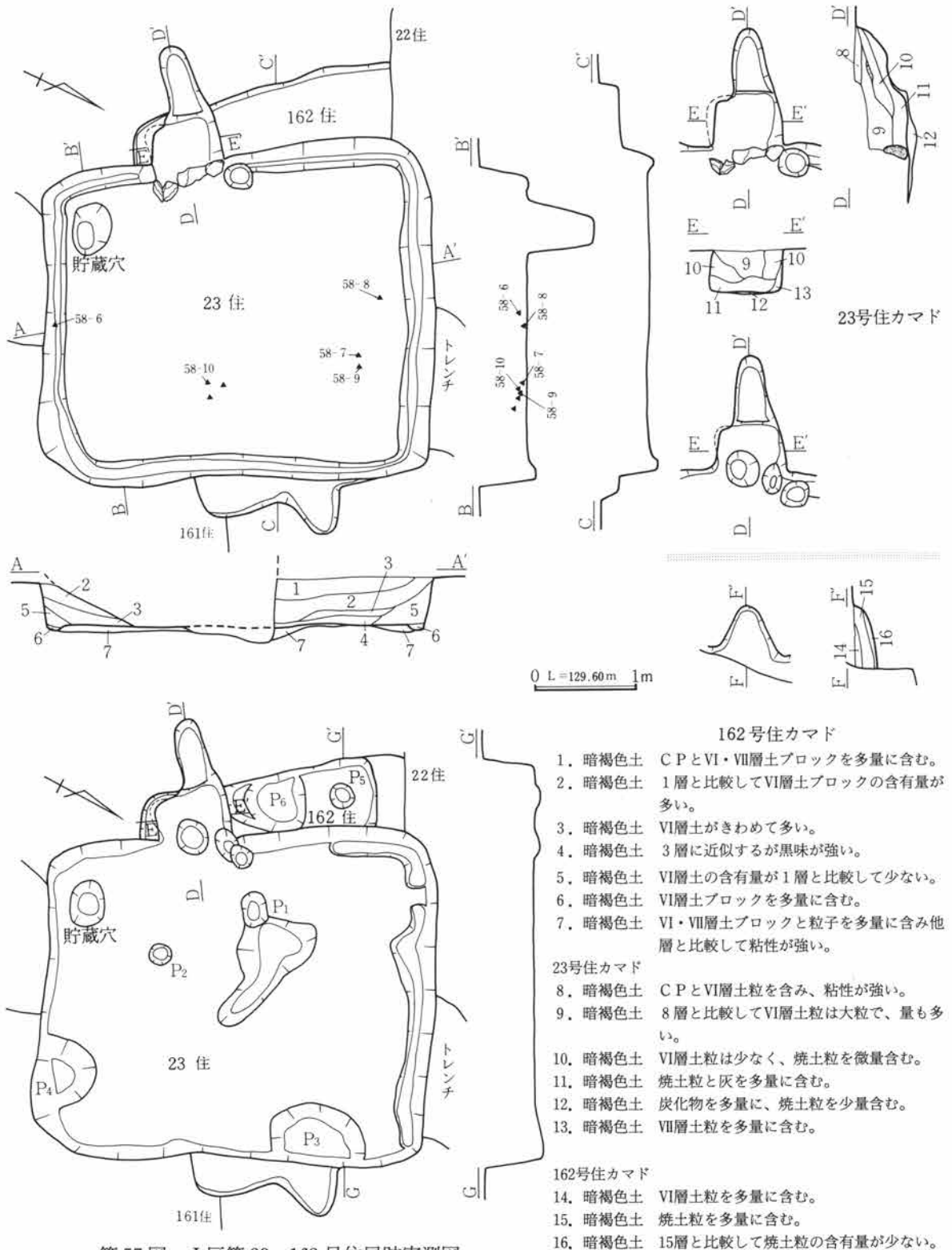


第56図 I区第22号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第23号住居跡		位置	36~38-I-57~59グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.37m×3.86m	主軸方位	西-28度-南	残存深度	約50cm程

遺構名称	I区第162号住居跡		位置	37~39-I-57~59グリッド内			
平面形態	隅丸長方形?	規模	4.02m× -m	主軸方位	東-40度-北	残存深度	約50cm程

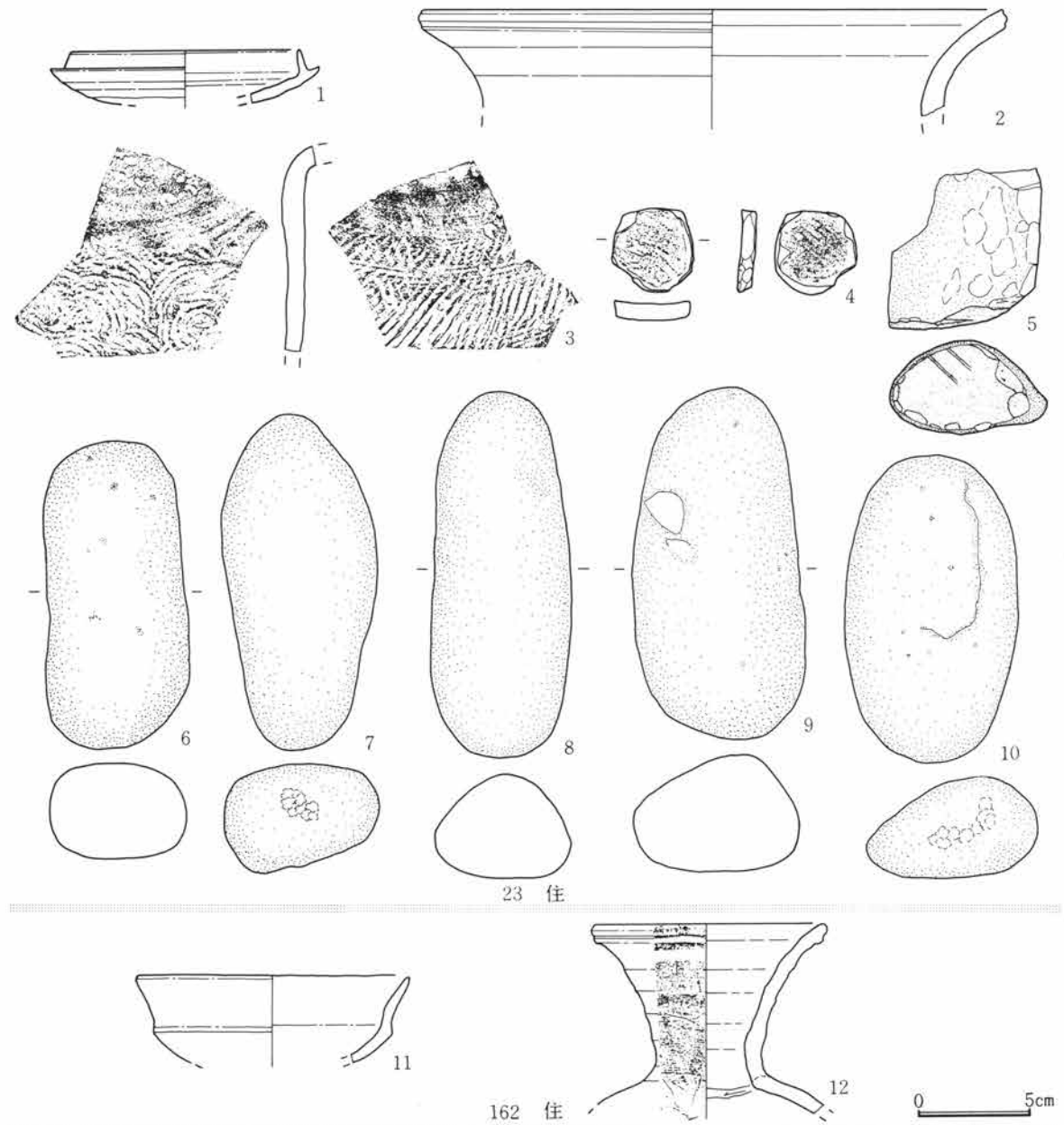
(所見) 第23号住居跡は、第161・162・186号住居跡と重複している。これらの新旧関係は検出状態及び残存状態から当住居跡が最も新しい時期のものと考えられる。特に当住居跡のカマドの検出状況から、第162号住居跡→当住居跡であるのは確実である。平面プランの確認はIV層土中で、壁の一部及び床面はVI層土に達しており残存状態は比較的良好であるが、東コーナー部付近の形態に不整な部分が認められることから、一部壁の崩落が考えられる。壁溝はカマド部分を除いて全周して検出されており、規模は下幅約3~14cm、深さ



約5～8cmである。貯蔵穴は南コーナー部に検出された、長方形に近い楕円形を呈するものである。規模は約50×38cm、深さ約65cmで、しっかりとした掘り方を有している。柱穴は床面精査時には検出されず、掘り方の調査においても検出することはできなかったことから、当初から掘削されなかったものであろう。掘り方の調査ではピットが数カ所で検出されているが、機能の判明するような例は皆無である。カマドは南西壁

の南寄りに検出した。主軸方位は西 -38° 南であり、住居の主軸とはかなりズレが認められる。平面形態は、本来は凸字形を呈するものと考えられるが、右肩部が突出しておらず不整形である。住居壁との接合部には右袖石が痕跡的に残存しており、これに接して天井石と思われる截石が認められることから、袖が屋内に張り出すタイプではないと思われる。規模は、全長約135cm、燃烧部幅約60cm、煙道長約70cm、煙道部下幅約21cmである。掘り方の調査では、燃烧部中央やや左寄りに径約33cm、深さ約7cmの円形のピットを検出した。これは位置的に焚口に近すぎるきらいはあるが、支脚の据え方と考えられる。

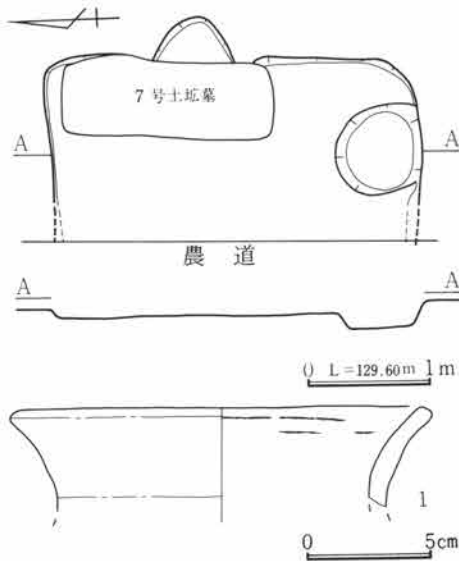
第162号住居跡は、第23号住居跡と第22号住居跡との重複によって主体部分は失われている。第186号住居跡との新旧関係は、遺構の残存状態から第186号住居跡→当住居跡であろう。第161号住居跡との関係は明確に捉えることができなかった。カマドは北東壁の南寄りと考えられる位置に検出したが、残存状態はきわめて不良であり、主軸方位が東 -38° 北であることを除いて詳細は不明である。



第58図 I区第23・162号住居跡出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

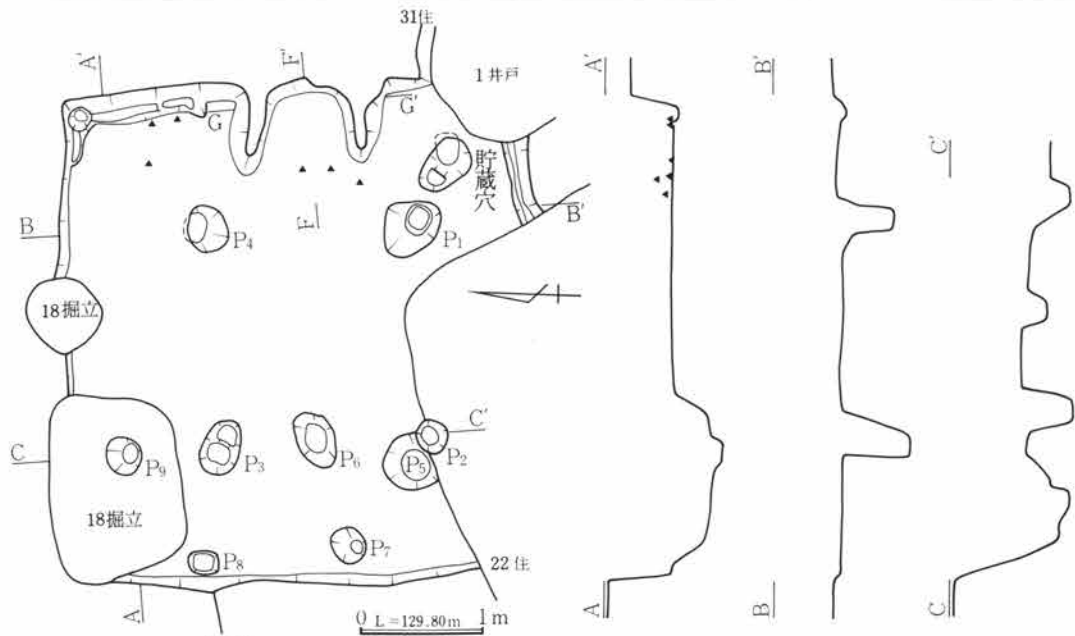
遺構名称	I区第24号住居跡		位置	35・36-I-59グリッド内			
平面形態	—	規模	—m×2.94m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約6cm程



第59図 I区第24号住居跡・
出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は、住居西半分が南北農道下にかかっていたため二次の調査を実施したが、当住居跡の掘り込みが浅かった上に、農道部分では確認面を深く設定してしまったことにより、西半の検出ができなかった。当住居跡の検出部分においては、第7号土壇墓(第298号土坑)と第1号祭祀遺構(第355号土坑)と重複している。これらの新旧関係は、検出状態から第1号祭祀遺構→当住居跡→第7号土壇墓であるのは明らかである。壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴も南壁に接して検出した径約70cm、深さ約10cmの円形ピットであるか判断できない。カマドは東壁やや北寄りに検出し、主軸方位は東-4°-南と考えられる。袖部などの構造は、第7号土壇墓との重複によって失われているため不明であるが、カマドの平面形から壁との接合部に袖石等を据えた、屋内にカマドの張り出さないタイプである可能性が高い。

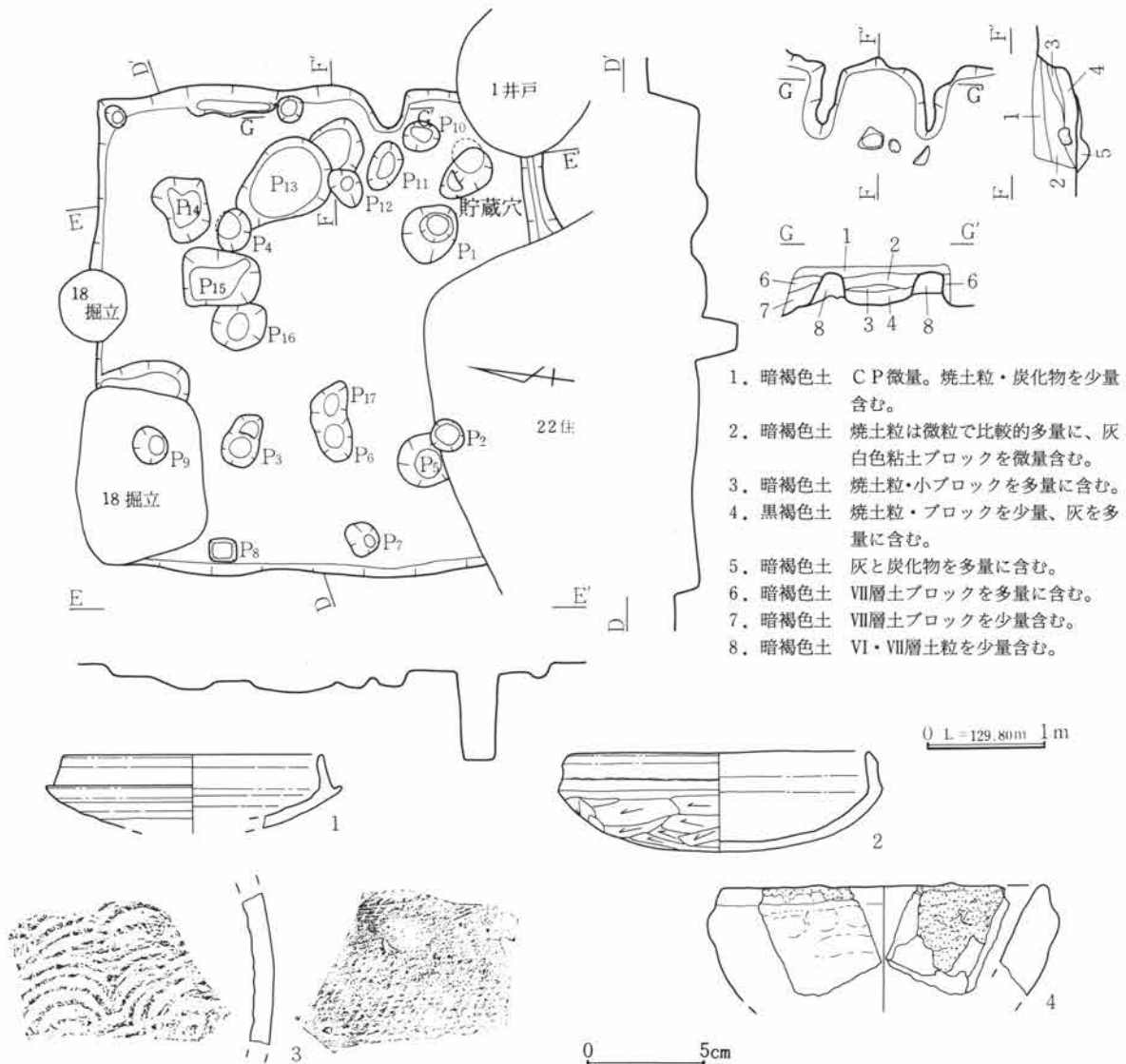
遺構名称	I区第25号住居跡		位置	40~42-I-58~60グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.00m×3.78m	主軸方位	東-10度-北	残存深度	約8cm程



第60図 I区第25号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は西半分が南北農道下にかかっていたため、二次の調査で全体を明らかにした。その結果、第22・31・245号住居跡及び第18号掘立柱建物跡と重複していることがわかったが、遺構の検出状態及び残存状態から当住居跡が最も先行する遺構であると判断された。遺構の確認は他遺構同様IV層土中で行ったが、他遺構との重複により必ずしも残存状態は良好ではない。壁溝は南壁及び北東コーナー部の一部で検出されて

第2節 検出された遺構・遺物

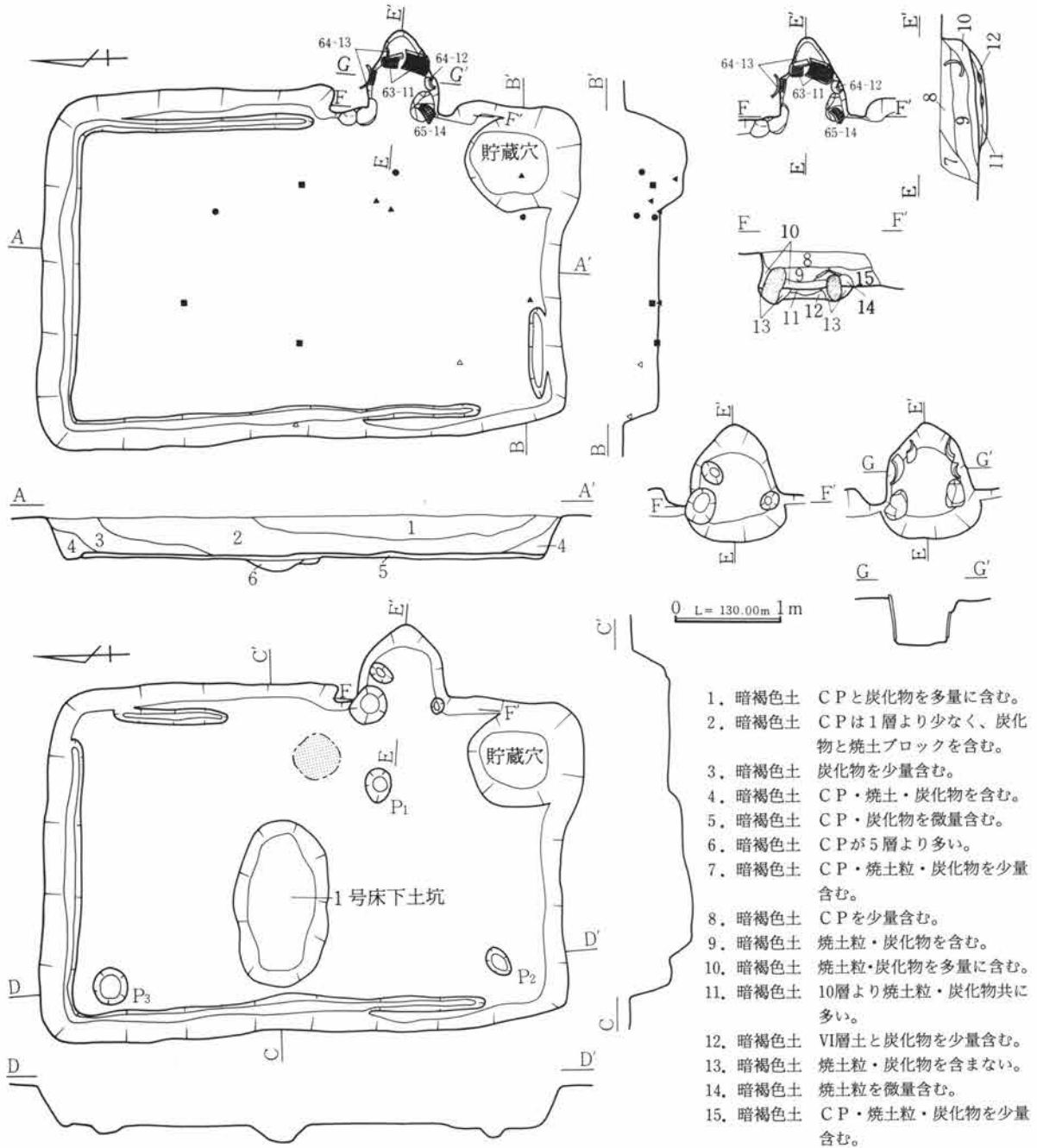


第61図 I区第25号住居跡・出土遺物実測図

いる。規模は下幅約4～8cm、深さ約4cmである。柱穴は床面精査時に検出した9本のピットの内の、P₁～P₄（径約26～43cm、深さ約31～52cm、柱穴間距離P₁～P₂間約1.75m、P₂～P₃間約1.70m、P₃～P₄間約1.80m、P₄～P₁間約1.75m）と判断した。P₂とP₃の間にあるP₆は深さが約21cmとやや浅いが、柱穴的な機能を有していた可能性がある。貯蔵穴は南東コーナー部に検出した楕円形のもので、約47×32cm、深さ約74cmであり、中段を有すると共に西に傾いて掘削されている。掘り方の調査では多数のピットを検出しているが、住居平面に対応するような配列を示すものが他に一組認められる。それはP₁・P₅・P₉・P₁₄であるが、P₁とP₉を除いて深さが12cm程度と、他と比較して浅く一連のものとは考えにくい。カマドは東壁ほぼ中央に検出し、主軸方位は東-11°-北であり、住居の主軸方位とほぼ一致している。両袖共約70cm屋内に張り出し、約65cm幅の燃焼部空間を作っている。この燃焼部奥壁は壁のラインと一致していることから、煙道が一段上がった位置から屋外に延びていたものと考えられる。

遺構名称	I区第26号住居跡	位置	23～26-I-77～79グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	3.15m×4.75m	主軸方位	東-0度-北
				残存深度	約35cm程

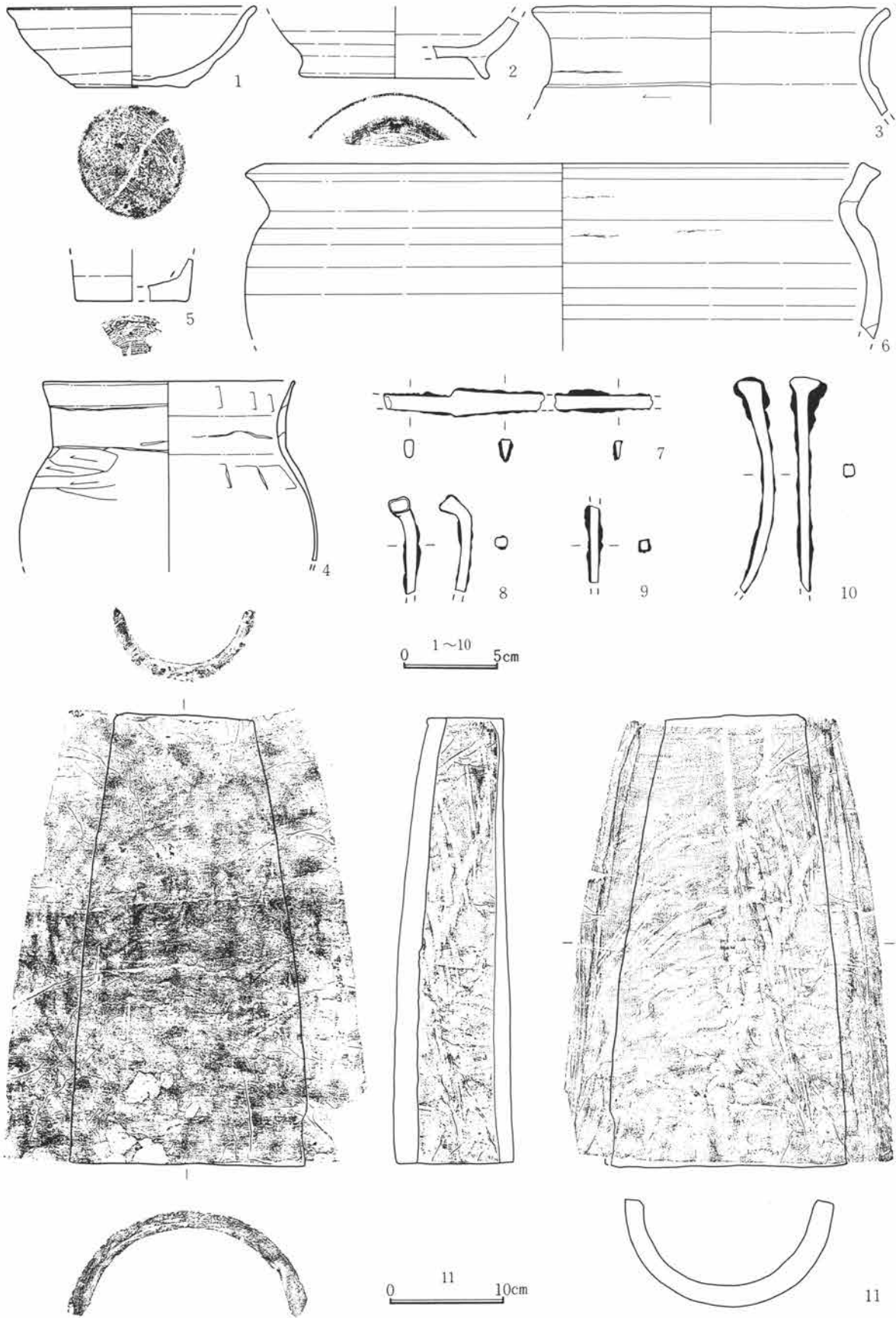
第4章 検出された遺構・遺物



第62図 I区第26号住居跡実測図

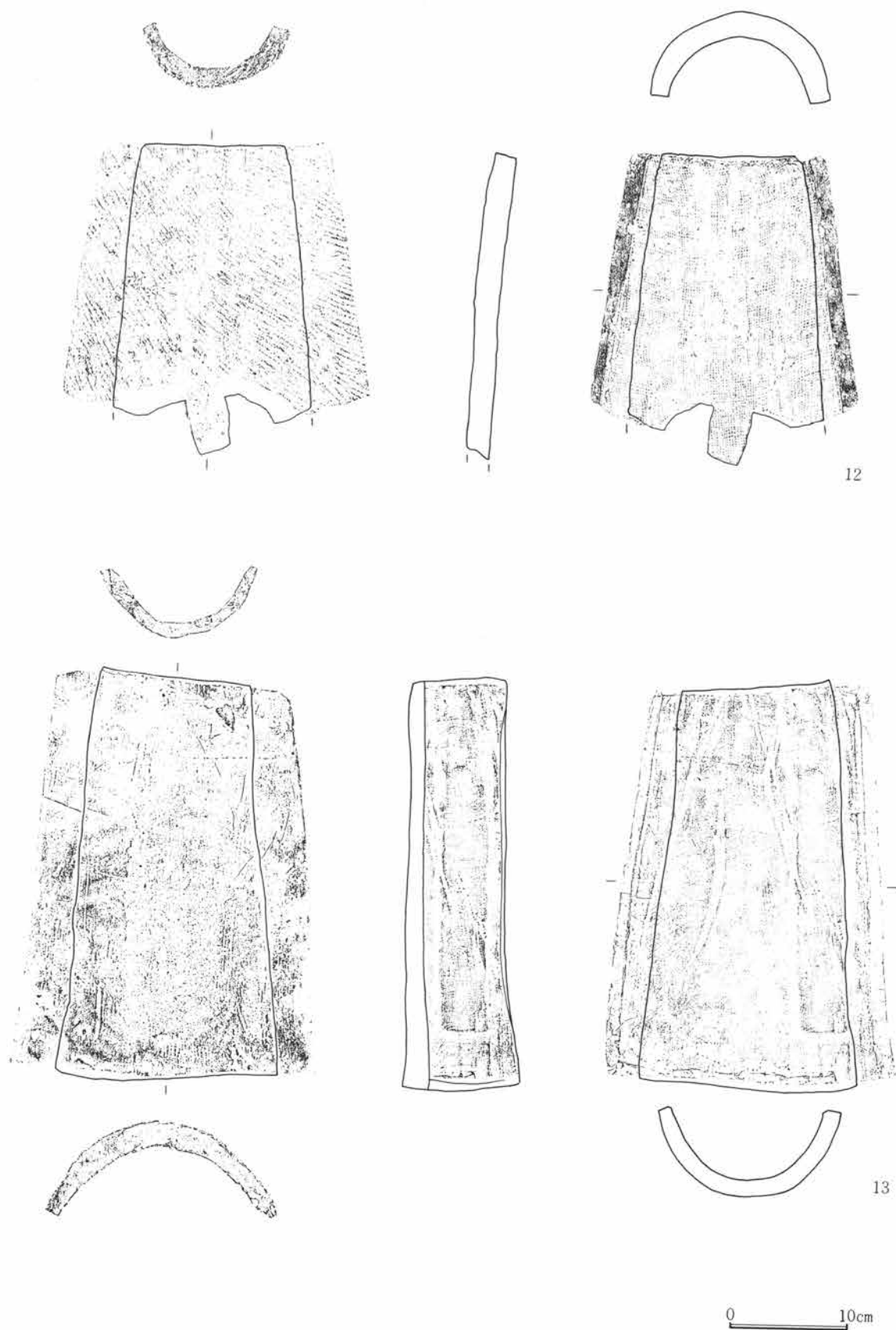
(所見) 当住居跡は第33・93号住居跡と重複しており、遺構の検出状態等から当住居跡が最も新しい時期のものと考えられる。遺構の確認はIV層土中で行ったが、覆土中の浅間C軽石と炭化物の含有量が多いことから、容易に検出することができた。平面形は整形な隅丸長方形であるが、貯蔵穴の位置する南東コーナー部が南にわずかに張り出すのが特徴である。床面はVI層土中に構築されており、5cm程度の貼床がされているものの、全体的に比較的堅くしまった面となっている。壁溝はカマド部から南壁中央までの間を除いてほぼ巡って検出されており、下幅約5~14cm、深さ約7cmの規模を有している。柱穴は床面の精査時及び掘り方の調査においても検出されていない。掘り方で検出された3本のピットについては、コーナー部に検出したP₂とP₃の位置が示唆的であるが柱穴としては捉えなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出した径約95cm、深さ約25cmの円形の土坑状の掘り込みである。底面はほぼ平坦で径約60cmの広さを有している。

第2節 検出された遺構・遺物

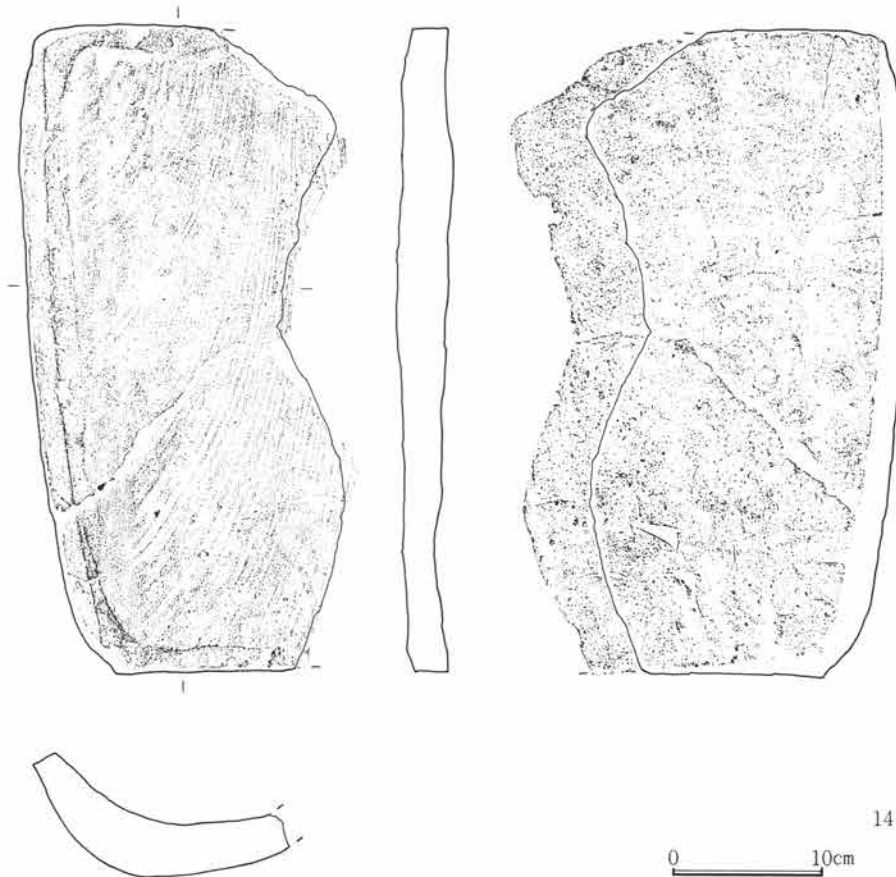


第63図 I区第26号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第64図 I区第26号住居跡出土遺物実測図(2)



第 65 図 I 区第 26 号住居跡出土遺物実測図 (3)

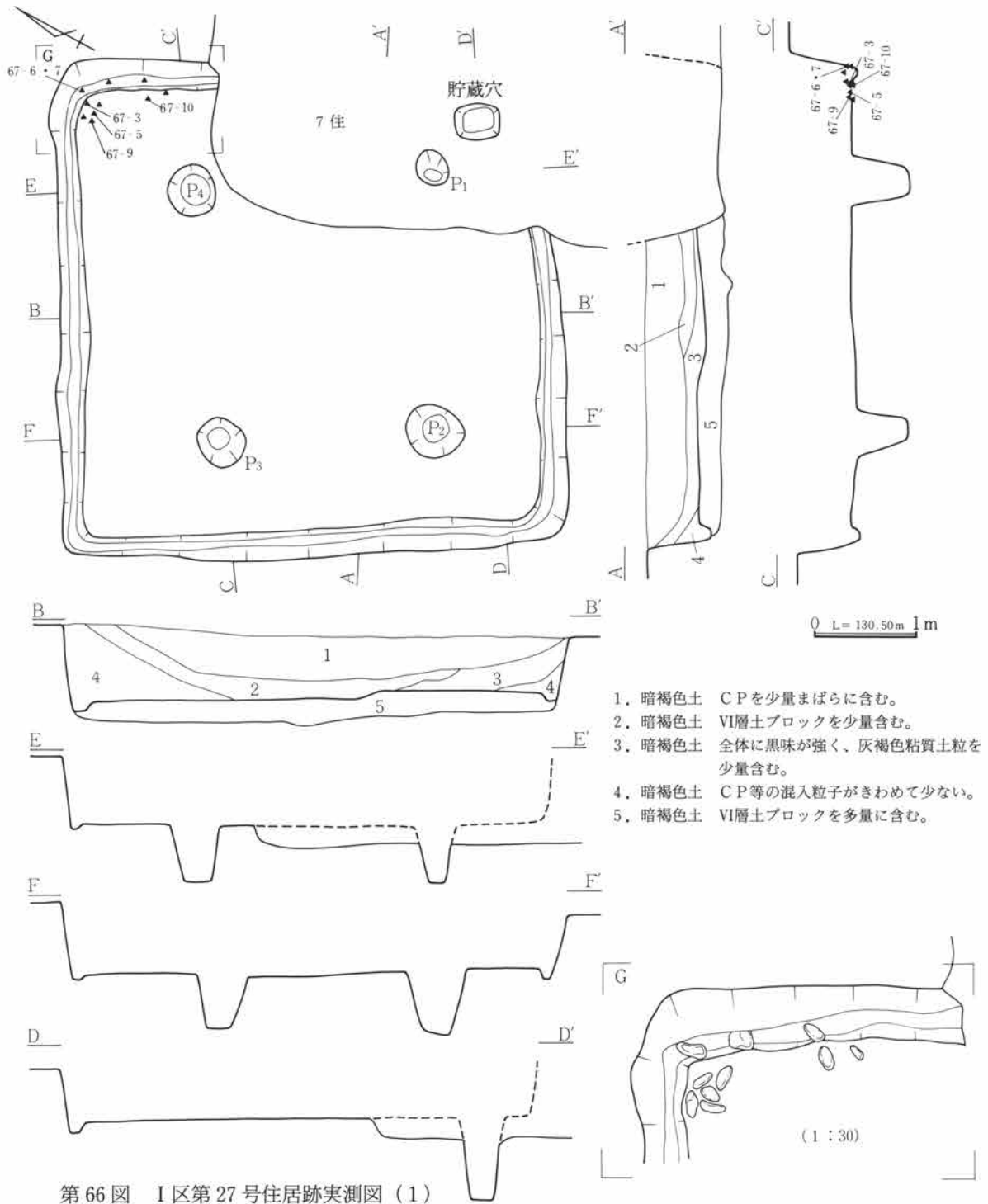
掘り方の調査では、前述のように小ピットが3本検出された他、住居中央部西寄りの位置で1号床下土坑と命名した約152×86cm、深さ約13~20cmの規模を有する楕円形プランの掘り込みを検出した。また、同じく中央部東寄りに偏った位置の掘り方面に、径約45cmの範囲で焼土化した部分が検出された。この焼土部分は、位置関係からカマドの作り替えによって形成されたものではなく、また、出土遺物中に鍛冶関連の遺物もみられないことから、鍛冶の炉跡とも考えられない。住居を建てるに際して何らかの祭祀行為が行われた痕跡であろうか。

カマドは東壁の南寄りの位置に検出され、主軸方位は東-4°-南である。平面形は砲弾状で、規模は全長約75cm、燃焼部幅約50cmである。袖は屋内に張り出すことはなく、壁との接合部に河原石を据え付けて構築されている。また、燃焼部は両壁共に第64図12・13に示したような男瓦を壁材として使用していた。また、第63図11の男瓦は奥に据えられた壁材に渡して乗せられていたと考えられ、燃焼部の天井部材として機能していたものであろう。

遺構名称	I 区第27号住居跡		位置	45~48-I-76~78グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.75m×4.80m	主軸方位	東-30度-北	残存深度	約50cm程

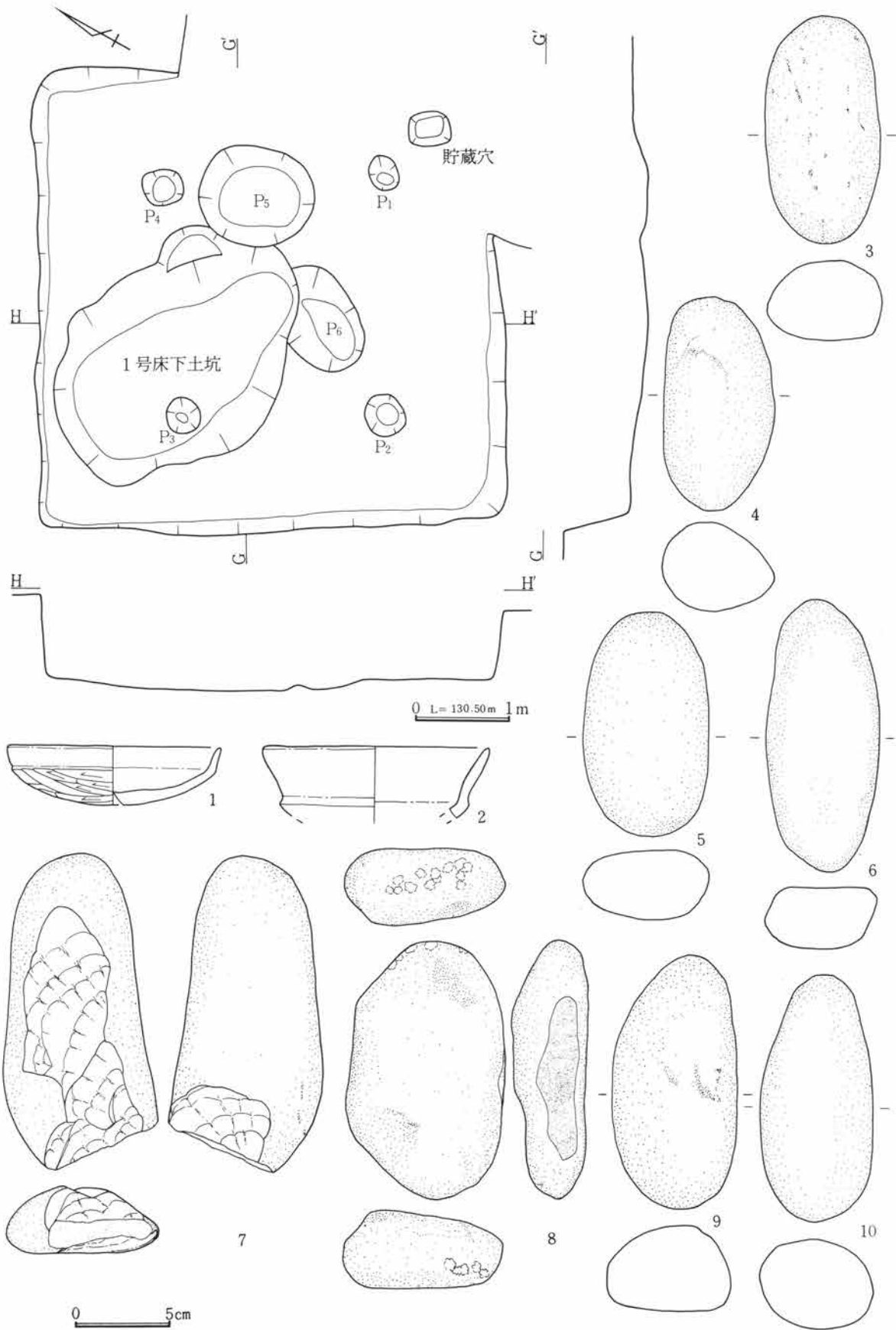
(所見) 当住居跡は、第7・51号住居跡と重複して検出された。この新旧関係は遺構の検出状態等から第51号住居跡→当住居跡→第7号住居跡と考えられる。壁は第7号住居跡との重複によって失われた北東壁から東コーナー部以外、比較的残存状態は良好である。床面は全面にVI層土を主体とした貼床がされており、平坦であるが顕著な硬化面は検出されていない。柱穴は床面で確認されたP₁~P₄(径約30~50cm、深さ約53~57

第4章 検出された遺構・遺物



第66図 I区第27号住居跡実測図(1)

cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.4m、P₂~P₃間約2.1m、P₃~P₄間約2.4m、P₄~P₁間約2.3m)である。掘り方の調査でもこの4本の柱穴以外には検出されていないので、柱穴位置の変更を伴うような建て替えは行われていない。貯蔵穴は東コーナー部に当たる位置に検出した長方形プランのピット状の掘り込みである。重複部分であり、完全には残存していないが平面規模は約45×35cmで、床面からの深さを復元すると約79cmとなる。カマドは第7号住居跡との重複によって削平されているため、痕跡すらも残存していない。遺物の出土は少なかったが、第67図に示した礫が北コーナー部に集中して出土したのが顕著である。



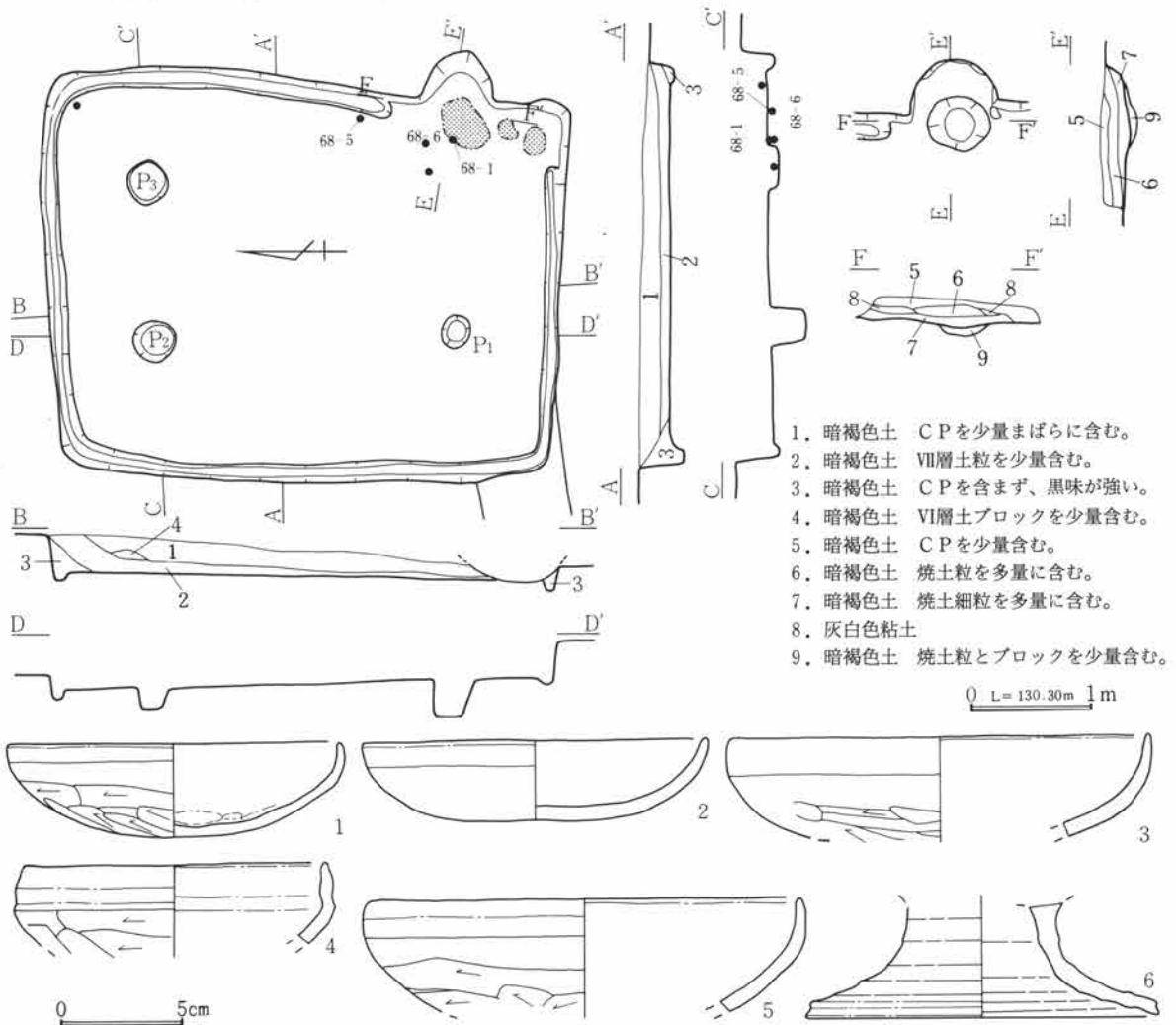
第 67 図 I 区第 27 号住居跡 (2)・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第28号住居跡		位置	42~45-I-75~77グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.25m×4.11m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約23cm程

(所見) 当住居跡は第42号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第42号住居跡→当住居跡という関係と考えられる。確認はIV層土中で行った結果、明瞭にプランを検出することができた。壁の残存はあまり良好ではないが、崩落などによる平面プランの崩れは認められない。壁溝はカマドから南東コーナー部にかけて掘削されていない他全周している。規模は下幅約3~10cm、深さ約5~8cmである。床面の精査によってP₁~P₃(P₁—径約23cm、深さ約16cm、P₂—径約32cm、深さ約28cm、P₃—径約33cm、深さ約8cm)の3本のピットが検出されているが、P₁とP₂は西壁と同一軸線に乗り、しかも深さも比較的事あることから柱穴の可能性はある。しかし、P₃については他のピットよりも明らかに浅く、P₁に対応する位置のピットが検出されていないことなどから柱穴とは考えなかった。

カマドは東壁の南に偏った位置に設置されており、主軸方位は東-12°-南である。規模は残存している部分でみると全長約44cm、燃焼部幅約45cmである。両袖共に残存していないが、壁との接合部に袖石を設置するタイプであろう。支脚も残存していないが、掘り方で中央にピットが検出されており、この位置に据えられていた可能性がある。また、燃焼部中央と南東コーナー部に灰面が検出されている。

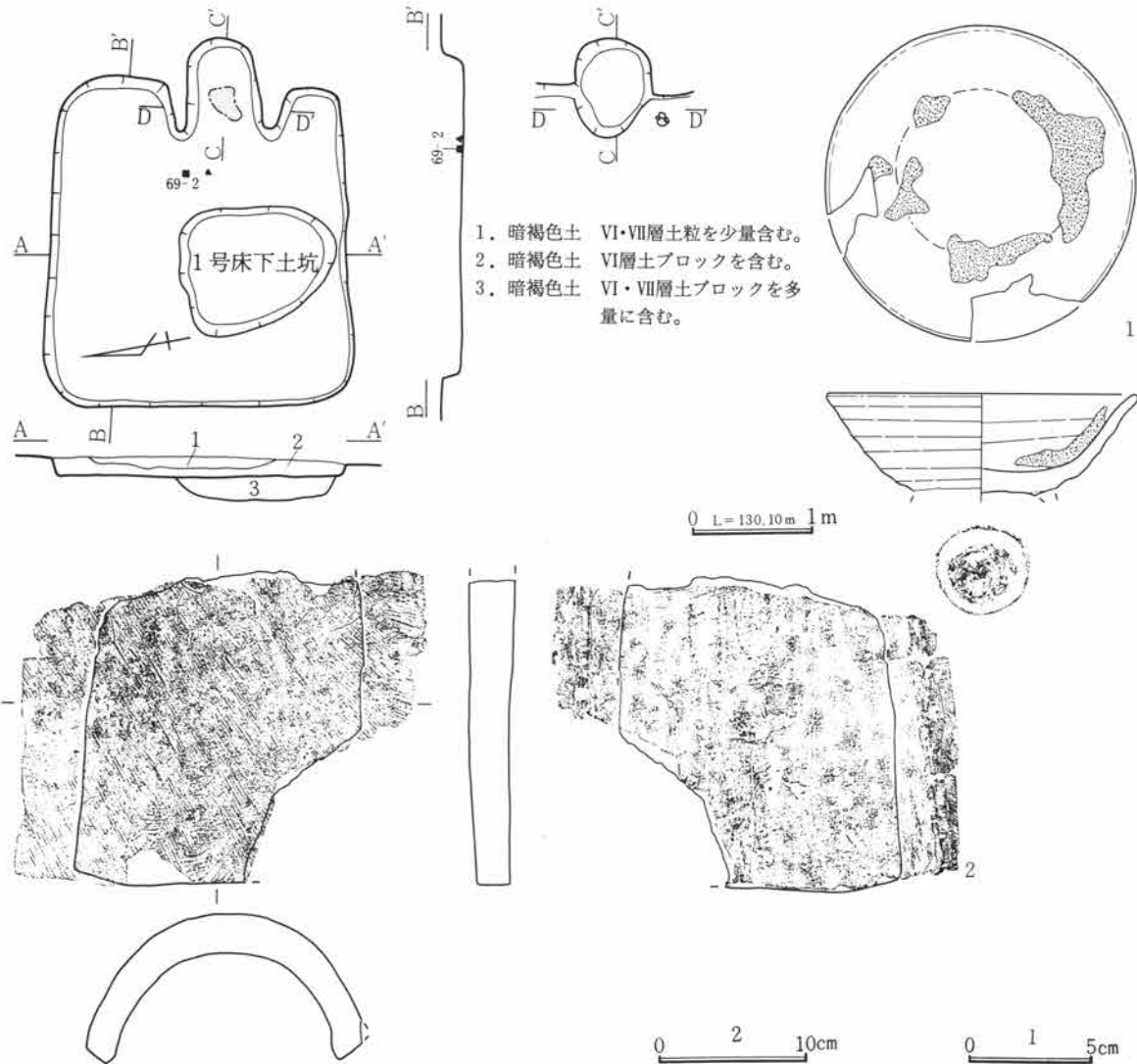


第68図 I区第28号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第29号住居跡		位置	37・38—I-68~70グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.64m×2.40m	主軸方位	東-18度-南	残存深度	約15cm程

(所見) 当住居跡は、第48・88号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第48・88号住居跡→当住居跡という新旧関係が考えられる。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、容易に平面を捉えることができた。壁は残存部分が最下半であることもあり、全く崩落などの痕跡のない状態で検出されている。したがって平面プランにも不整な部分は認められない。壁溝・柱穴・貯蔵穴は痕跡すらも検出されていない。当住居跡には床面全体に及ぶような掘り方は認められないので、これらのものは当初から掘削されなかったと判断される。掘り方は前述のように床面全体に認められるものではなく、住居中央部から南壁に接する規模の1号床下土坑(約130×100cm、深さ約18cm)と命名した掘り込みが検出されている。

カマドは東壁ほぼ中央に設置されており、主軸方位は東-4°-南の砲弾状の平面形である。袖は両袖共約40cm屋内に張り出しており、これを含めた全長は約70cm、燃烧部幅は約50cmの規模を有している。袖の構築には石などの部材を使用した痕跡は認められず、また、支脚を設置した痕跡もない。燃烧部中央底面にわずかに灰面が検出された他、焼土化した部分などは検出されていない。

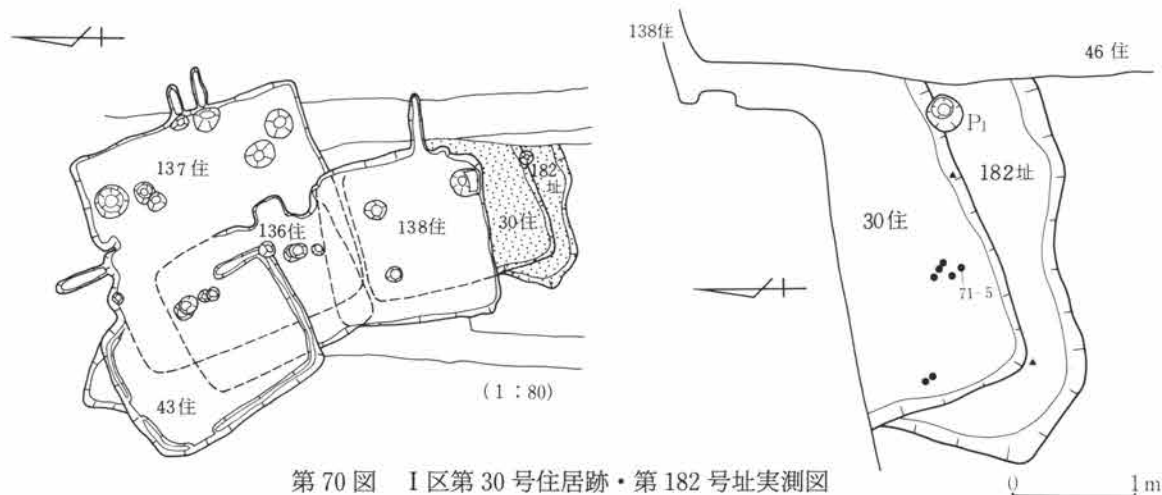


第69図 I区第29号住居跡・出土遺物実測図

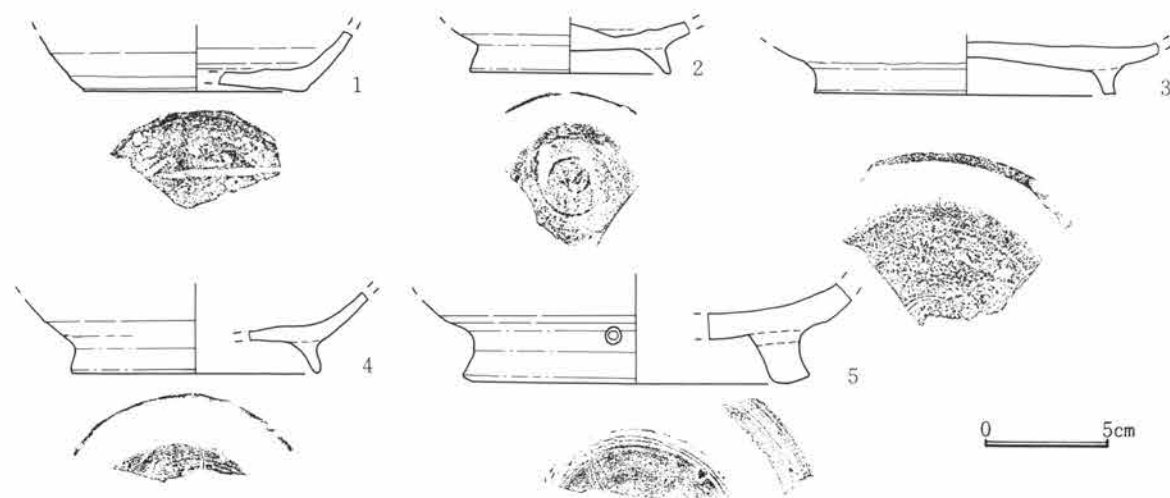
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第30号住居跡		位置	33・34-I-73・74グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	東-25度-北	残存深度	約24cm程

遺構名称	I区第182号址		位置	33・34-I-73・74グリッド内			
平面形態	不整形	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約10cm程



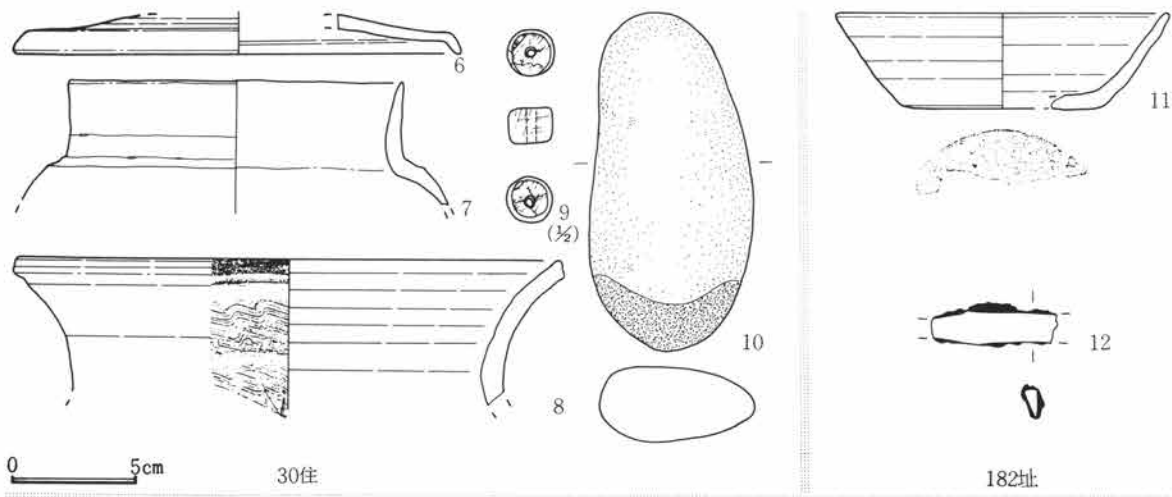
第70図 I区第30号住居跡・第182号址実測図



第71図 I区第30号住居跡出土遺物実測図(1)

(所見) 第30号住居跡は、第46・138号住居跡と第182号址と重複している。この4遺構の新旧関係については、第46号住居跡が検出状態等から最も新しい時期のものと判断された以外、その他の3遺構については、調査段階から捉えきれず、結果的には第138号住居跡の平面を重視することによって、当住居跡は南側1/3程しか残存しなかった。しかし、それぞれの出土遺物の比較をすると、第138号住居跡よりは当住居跡の遺物の方が新しい要素があり、第138号住居跡→当住居跡であったと考えられる。また、第182号址との関係については、検出時の状況から第182号址→当住居跡であろう。カマドは北東壁に設置されていたと考えられるが、第46号住居跡等との重複により、痕跡すら検出されていない。

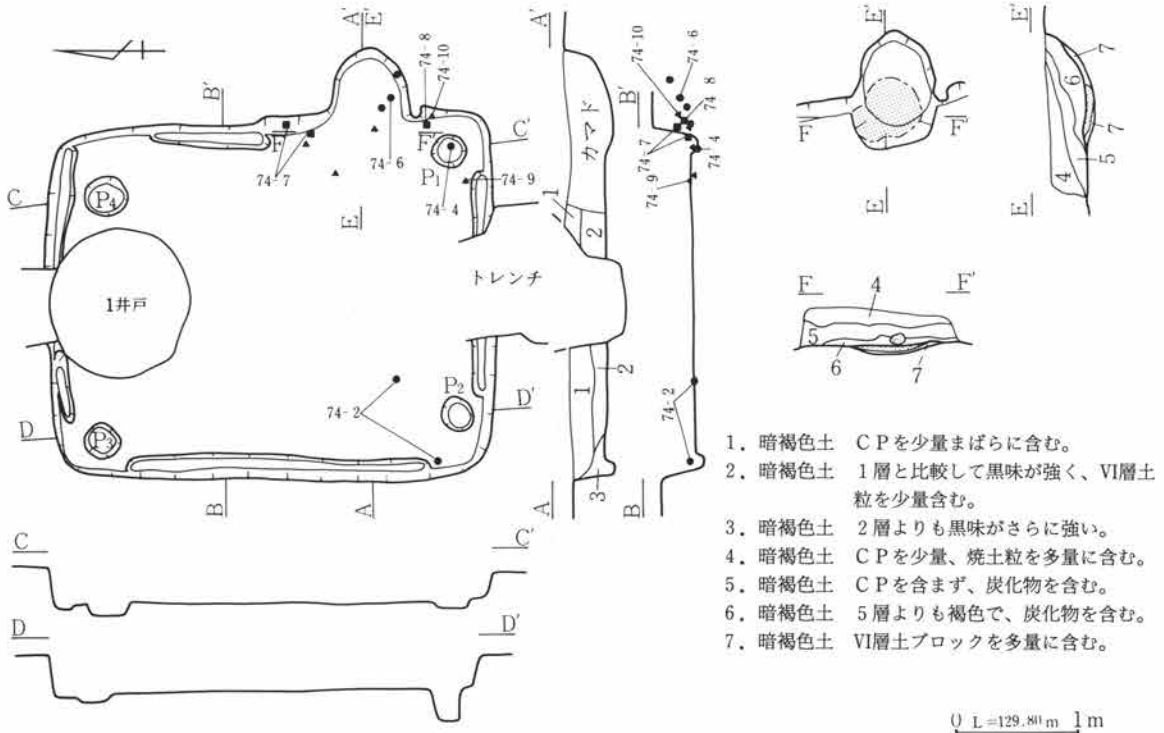
第182号址は残存部分がわずかで、全体形状を把握することはできなかったが、残存部分において平面形が不整であることによって、住居とは考えなかった。



第72図 I区第30号住居跡出土遺物実測図(2)・第182号址出土遺物実測図

遺構名称	I区第31号住居跡	位置	39・40-I-57・58グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	2.85m×3.52m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約30cm程

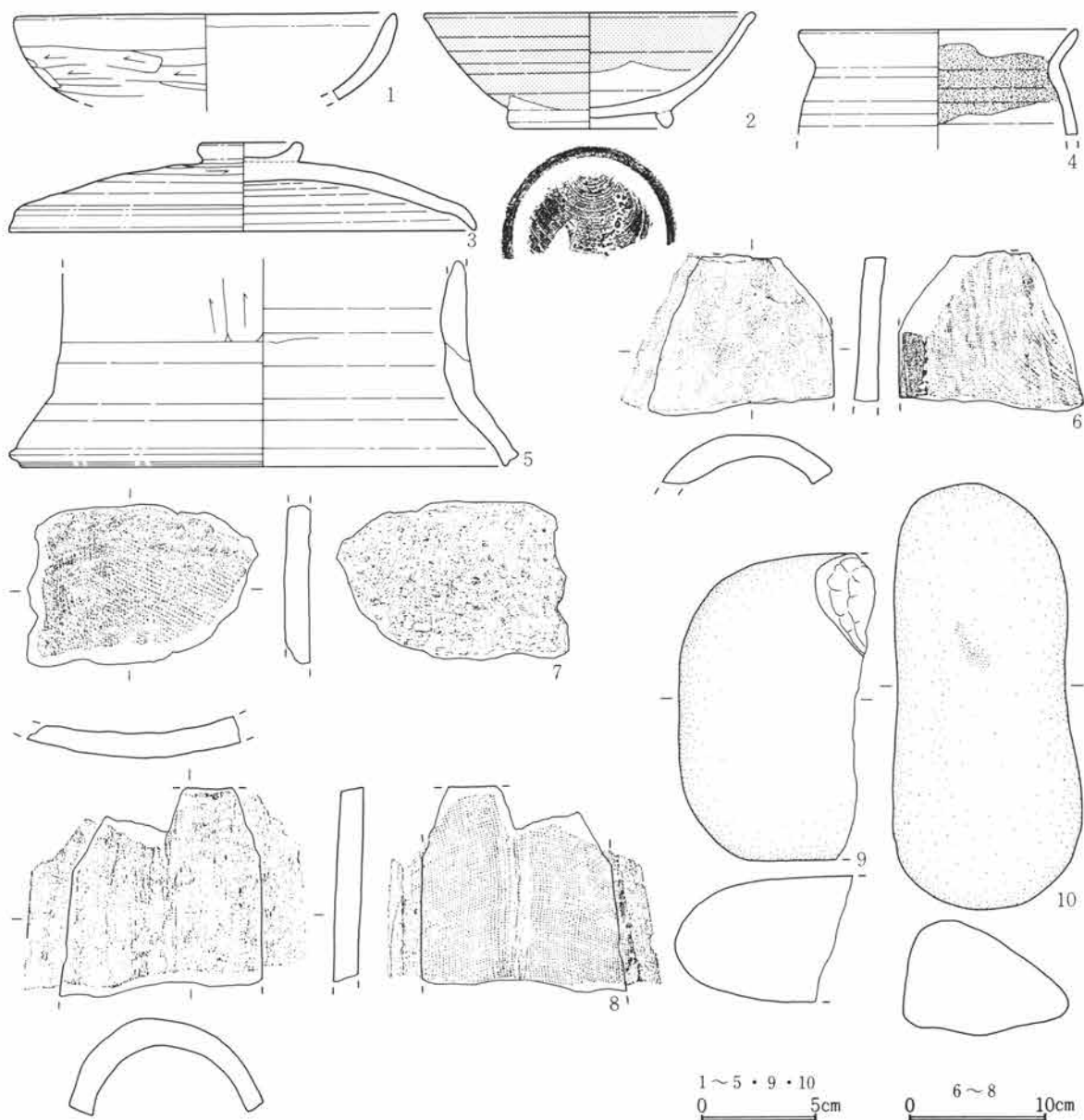
(所見) 当住居跡は第22・25・186号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も新しい時期のものであるのは明らかである。また、当住居跡の中央北側の部分は、中世以降の第1号井戸跡との重複によって失われている上に、遺構確認段階に設定された南北トレンチが走っており、遺構の残存状態はあまり良好ではない。しかし、他の遺構と重複しているにもかかわらず、残存部分の平面プランの確認は比較的容易に捉えることができた。壁は前述のように南北壁の中央部がトレンチによって失われている。壁溝はカマド部分と各コーナー部を除いて検出されている。規模は下幅が約5~10cm、深さが約3cmである。床面



第73図 I区第31号住居跡実測図

0 L=129.80m 1m

第4章 検出された遺構・遺物

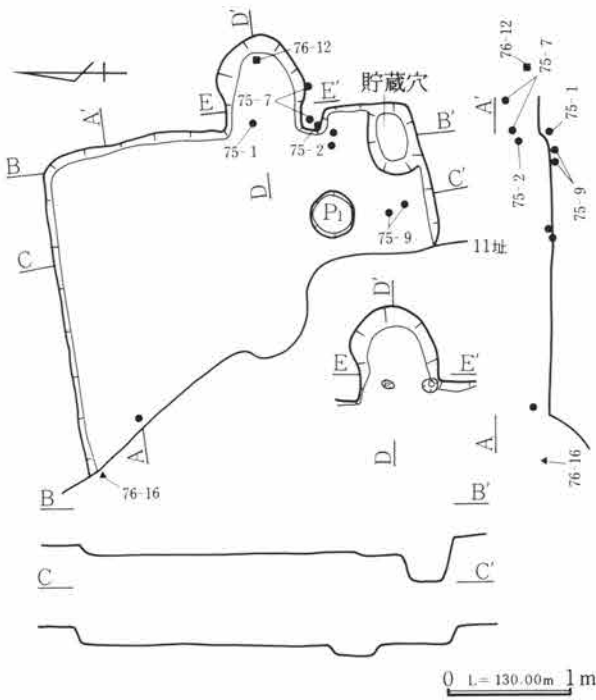


第74図 I区第31号住居跡出土遺物実測図

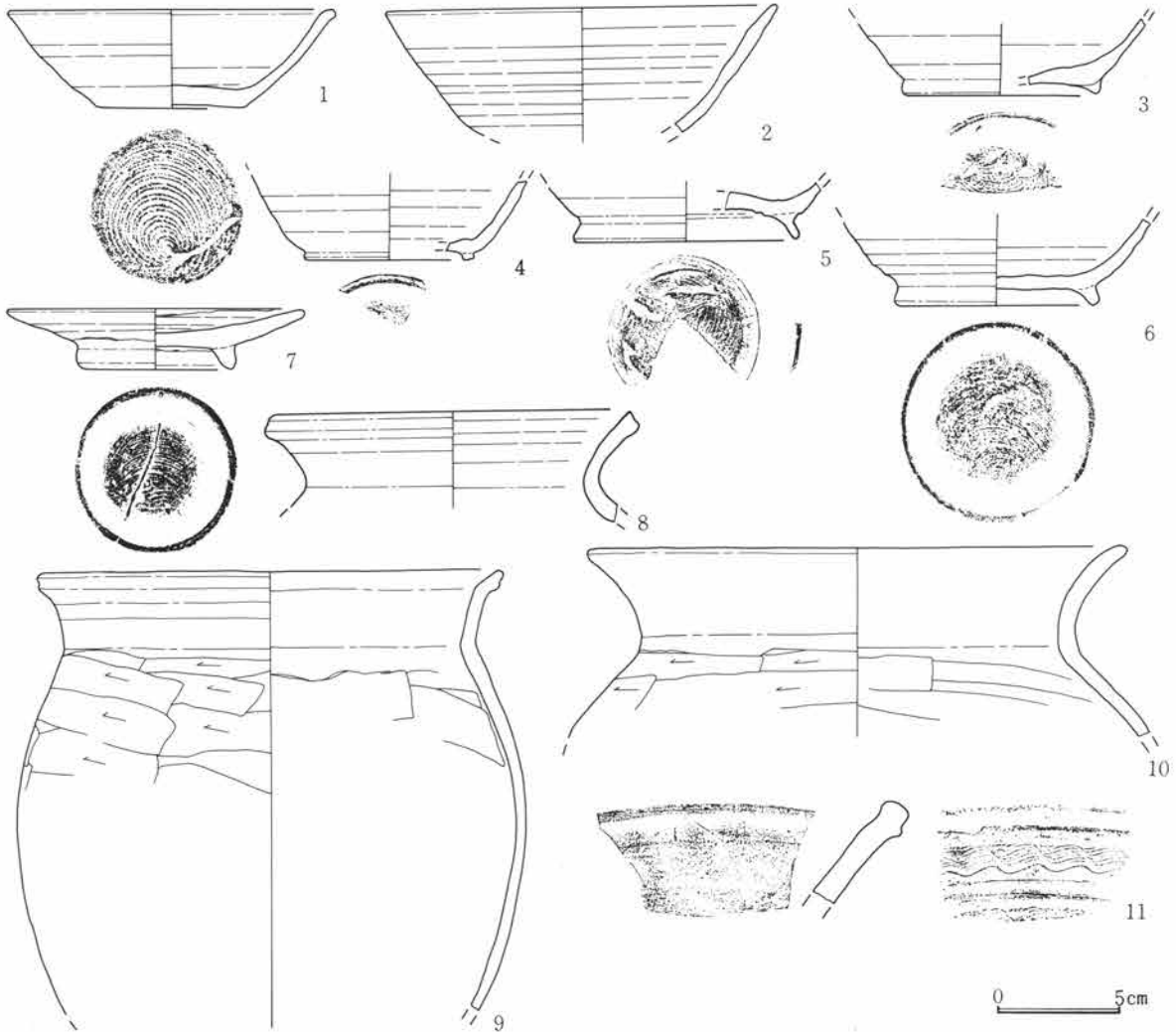
は特に硬化した面としては捉えられず、他遺構との重複もありやや曖昧な面である。この床面の精査によって各コーナー寄りの位置からP₁~P₄(P₁—径約26cm、深さ約8cm、P₂—径約26cm、深さ約27cm、P₃—径約28cm、深さ約6cm、P₄—径約32cm、深さ約10cm)の4本のピットが検出されている。これらのピットは配置に規則性があるが、P₂のように必ずしも同一の規模でもないことなどから、柱穴としては捉えなかった。

カマドは東壁の南に偏って設置されており、主軸方位は東-0°-北で住居の主軸方位と一致している。平面形は砲弾状で、袖の張り出さないタイプと考えられる。残存部の規模は、全長約60cm、燃烧部幅約55cmであり、袖石等の構築材は認められない。また、掘り方の調査においても、袖石や支脚を据えた痕跡はみられず、構造は不明である。その他、壁との接合部を中心に径約50cmの範囲で焼土面が検出されている。

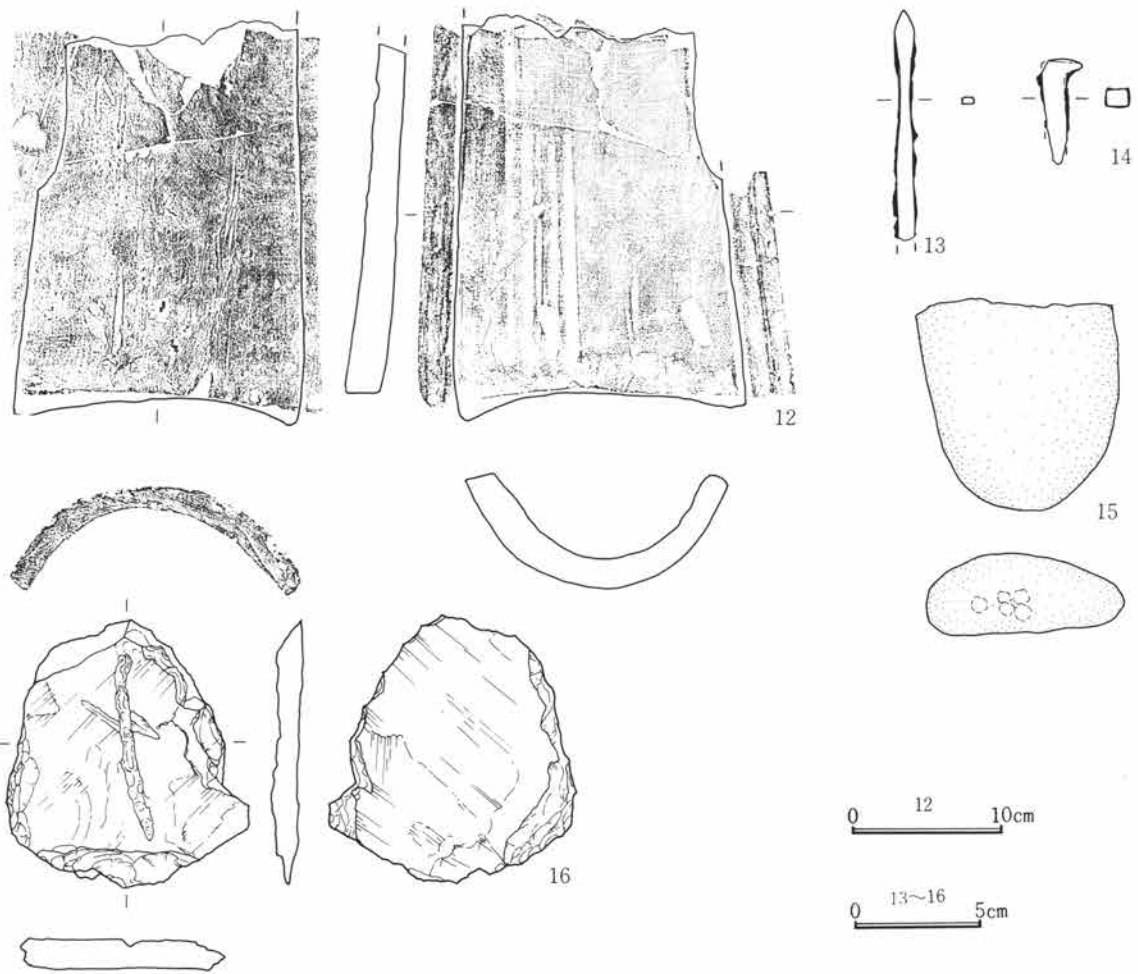
遺構名称	I区第32号住居跡	位置	28・29—I-78・79グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×3.05m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約15cm程



(所見) 当住居跡は西半を中世以降の第11号址との重複によって失っている他、近接する時期の遺構との重複は認められない。確認面が深かったため壁の残存は悪く、床面はVI層土中に構築され比較的硬くしまっている。この床面の精査で、カマド前面にP₁(径約37cm、深さ約8cm)を検出したが、他に対応するピットはなく柱穴とは考えられない。貯蔵穴は南東コーナー部に検出した楕円形プランの掘り込みで、規模は約60×40cm、深さ約20cmである。カマドは東壁南寄りで、主軸方位は東-3°-北である。平面形態は馬蹄形で、右袖がわずかに屋内に張り出しているが、先端に袖石等の構築材は認められない。規模は全長約70cm、燃焼部幅約47cmである。燃焼部奥壁から第76図12の男瓦が出土しており、壁面の部材であった可能性が強い。



第75図 I区第32号住居跡・出土遺物実測図(1)

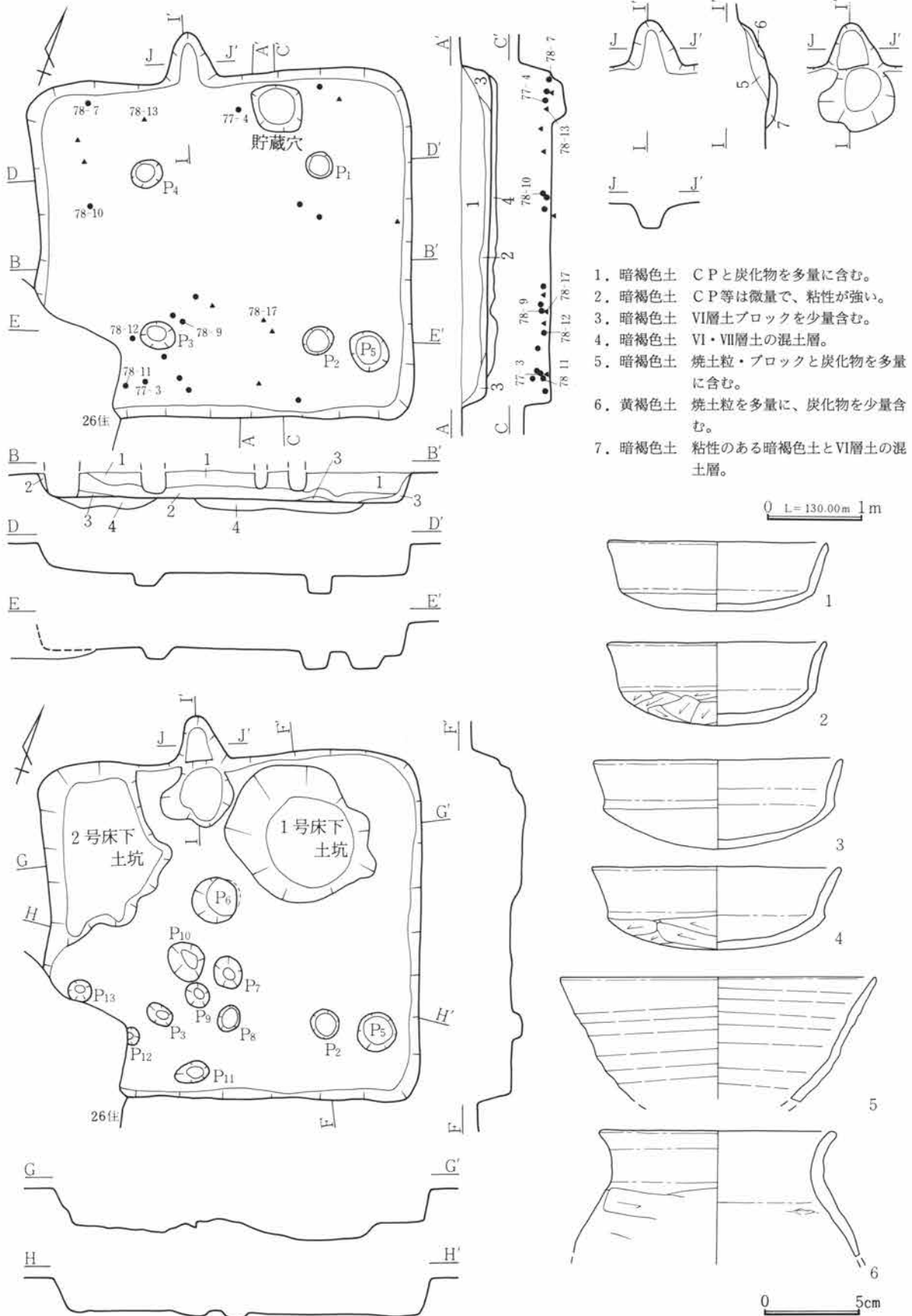


第76図 I区第32号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第33号住居跡		位置	25~27-I-76~78グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.53m×3.85m	主軸方位	北-19度-西	残存深度	約28cm程

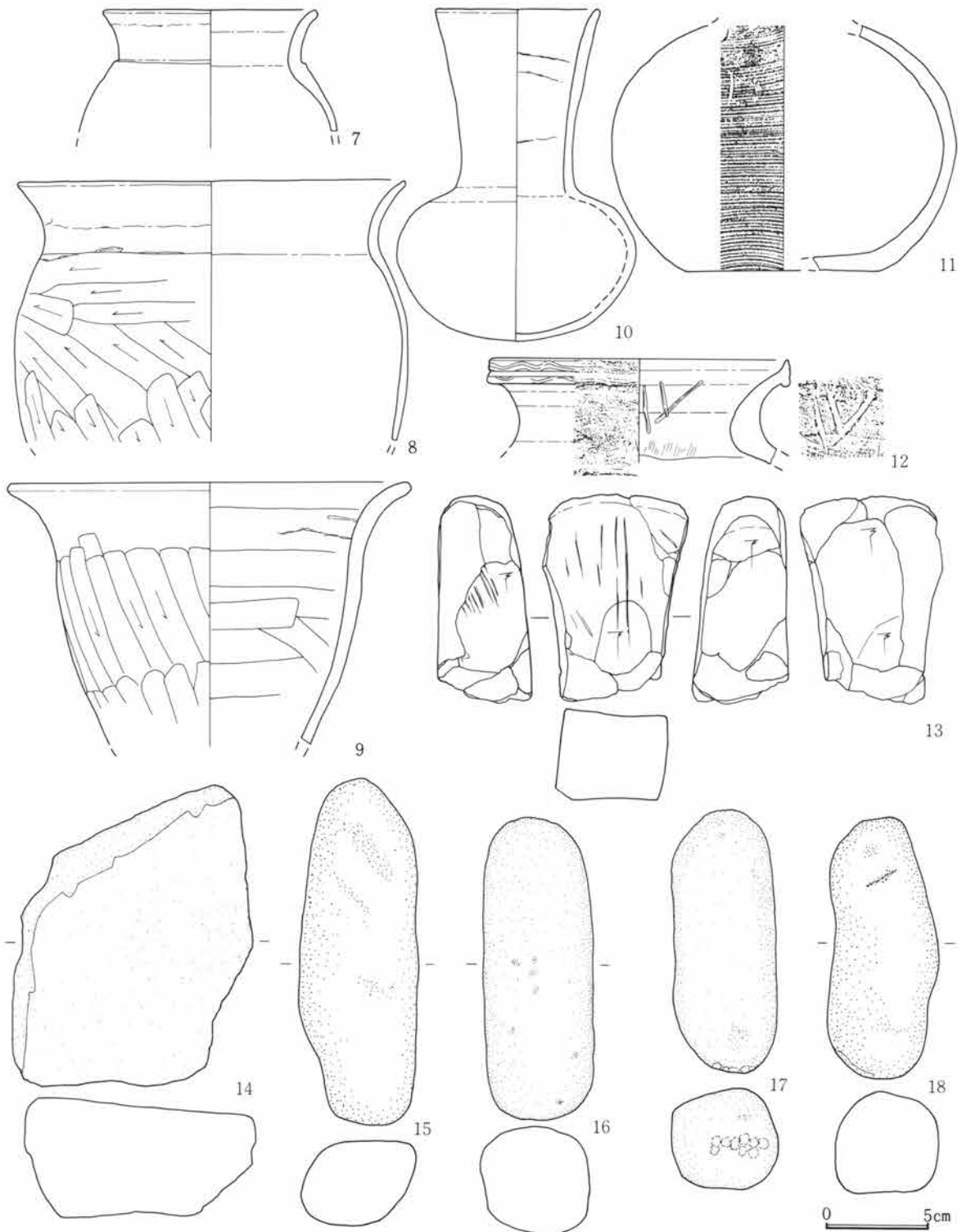
(所見) 当住居跡は、主軸が北西方向を向く当遺跡においては珍しい例であり、南側で第26号住居跡と重複している。この2遺構の新旧関係は、遺構の検出状態から当住居跡→第26号住居跡であるのは明らかである。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、覆土中の浅間C軽石の含有量は多く、比較的容易にプランを確認することができた。壁は下半はVI層土中に達して構築されており、崩落も少なく良好な状態で残存していた。壁溝は掘り方の調査を通して検出されず、当初から掘削されなかったものと判断した。柱穴は、床面精査の段階で検出したピットの内のP₁~P₄(径約28~30cm、深さ約13~19cm、柱穴間距離P₁~P₂間約1.8m、P₂~P₃間約1.7m、P₃~P₄間約1.7m、P₄~P₁間約1.8m)の4本である。東コーナー部に検出したP₅は、径約40cm、深さは約16cmで、柱穴としたピットよりは大型である。貯蔵穴は北西壁に接してカマド右側に検出した隅丸方形の掘り込みで、約50×48cm、深さ約15cmの規模を有している。掘り方の調査では、2ヵ所の土坑状の掘り込みと小ピットを検出した。カマドは、北西壁の中央やや西寄りに設置されており、主軸方位は北-25°-西である。残存部の全長は約60cm、燃焼部幅は約20cmである。掘り方の調査では屋内に径約80cmの掘り込みがみられ、この位置が燃焼部であった可能性が高い。つまり、残存はしていなかったが袖が屋内に長く張り出すタイプであったはずである。

第2節 検出された遺構・遺物



第77図 I区第33号住居跡・出土遺物実測図(1)

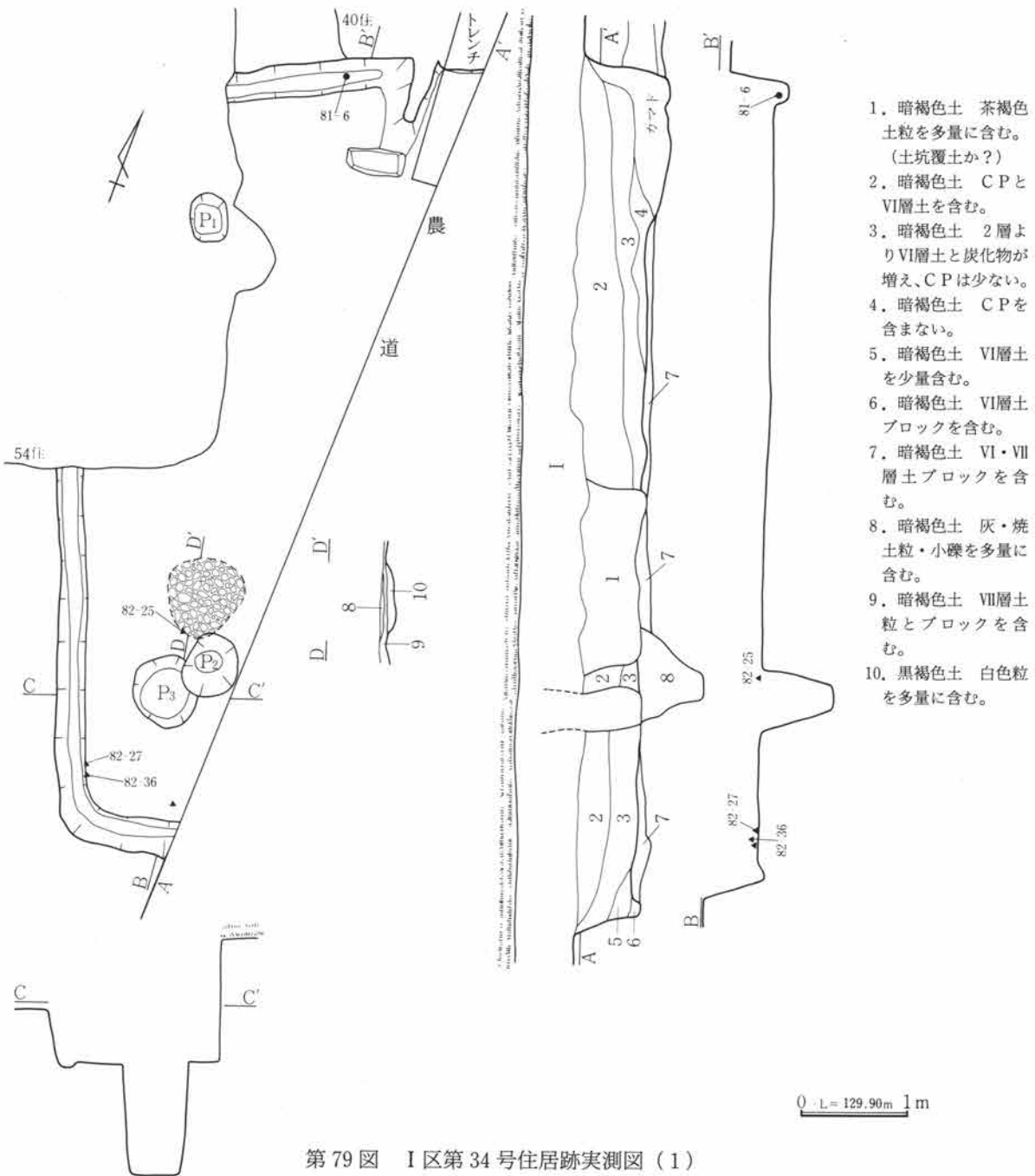
第4章 検出された遺構・遺物



第78図 I区第33号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第34号住居跡		位置	35~39-I-59~63グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	7.25m×6.88m	主軸方位	北-23度-西	残存深度	約47cm程

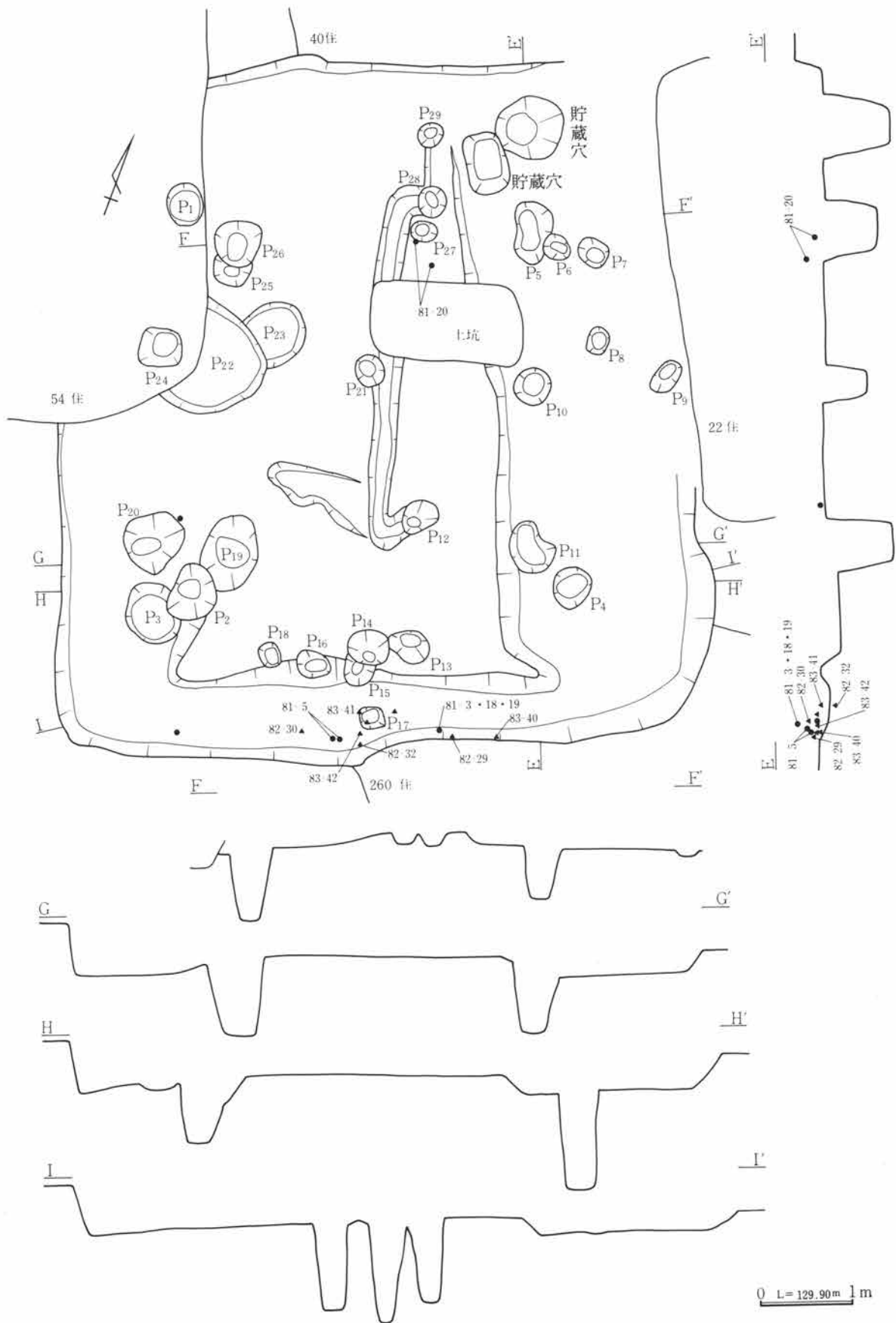
(所見) 当住居跡は東半が南北農道下にかかっていたため二次の調査を実施したが、農道下の調査では床面を捉えることはできず、全体を把握できたのは掘り方段階であった。また、当住居跡は重複が多く、第19・22・



1. 暗褐色土 茶褐色土粒を多量に含む。(土坑覆土か?)
2. 暗褐色土 CPとVI層土を含む。
3. 暗褐色土 2層よりVI層土と炭化物が増え、CPは少ない。
4. 暗褐色土 CPを含まない。
5. 暗褐色土 VI層土を少量含む。
6. 暗褐色土 VI層土ブロックを含む。
7. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックを含む。
8. 暗褐色土 灰・焼土粒・小礫を多量に含む。
9. 暗褐色土 VII層土粒とブロックを含む。
10. 黒褐色土 白色粒を多量に含む。

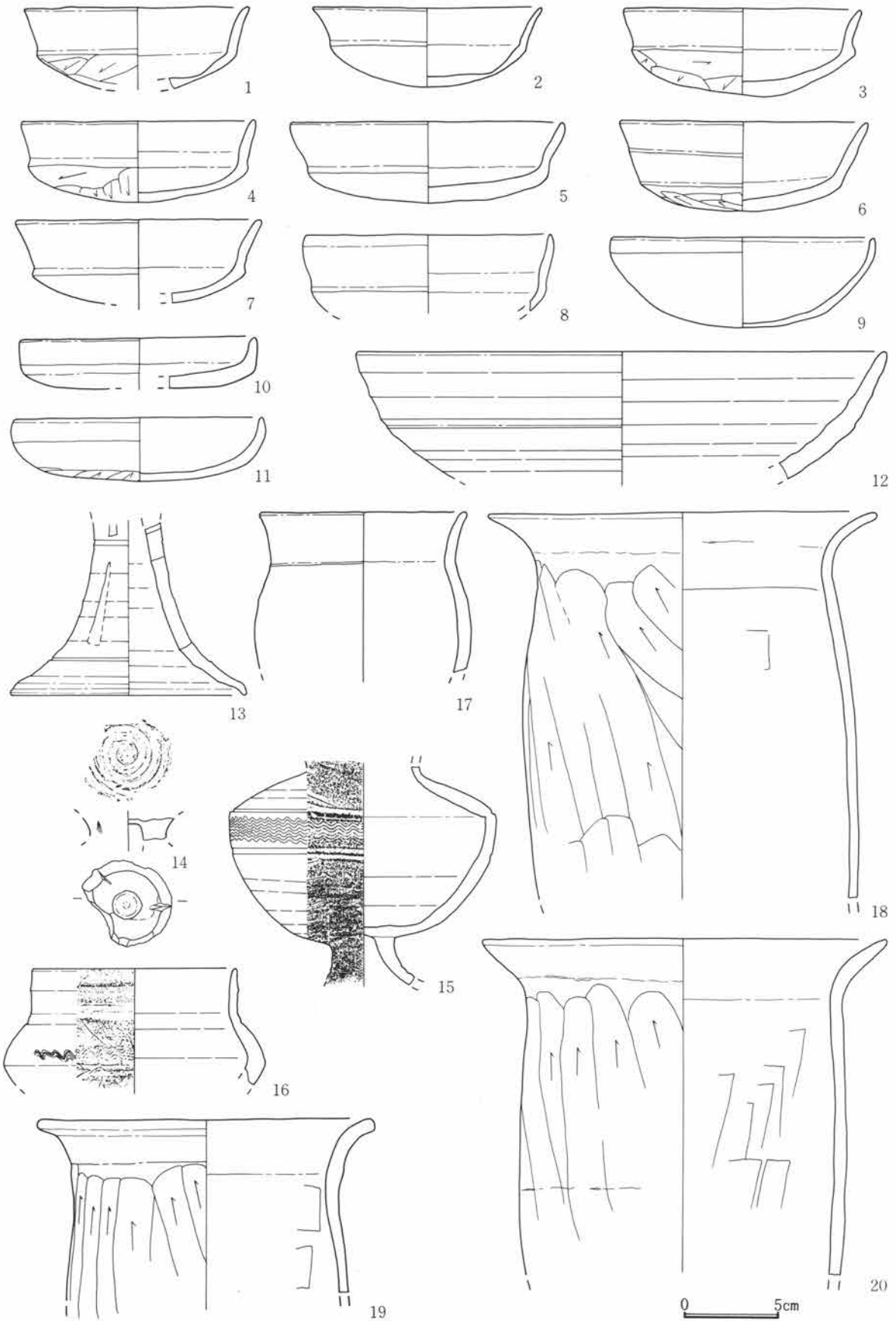
40・54号住居跡と重複している。これらの内、遺構の検出状態から判断して、第19・54号住居跡の2軒は当住居跡よりも新しい。第22・40号住居跡との関係は、出土遺物の比較から判断して当住居跡→第22・40号住居跡であろう。検出状況の良好だった西半でみるかぎり、壁溝は下幅約6~15cm、深さ約5cm程度の規模でカマド部分を除いて全周していたものと考えられる。柱穴は、第80図に示した掘り方段階の平面図をもとに判断すると、P₅(約65×40cm、深さ約51cm)・P₁₁(約55×40cm、深さ約75cm)・P₁₉(約70×60cm、深さ約81cm)・P₂₆(約50×45cm、深さ約67cm)で、柱穴間距離はP₅~P₁₁間約3.2m、P₁₁~P₁₉間約3.1m、P₁₉~P₂₆間約3.2m、P₂₆~P₅間約3.1mの4本と考えられるが、他にもP₁・P₂・P₄を始めとして配列に規則性の認められるピットや、P₁₃・P₁₄・P₁₆のように深さが約90~110cmにも達するものが連続する例もあり、数度の

第4章 検出された遺構・遺物

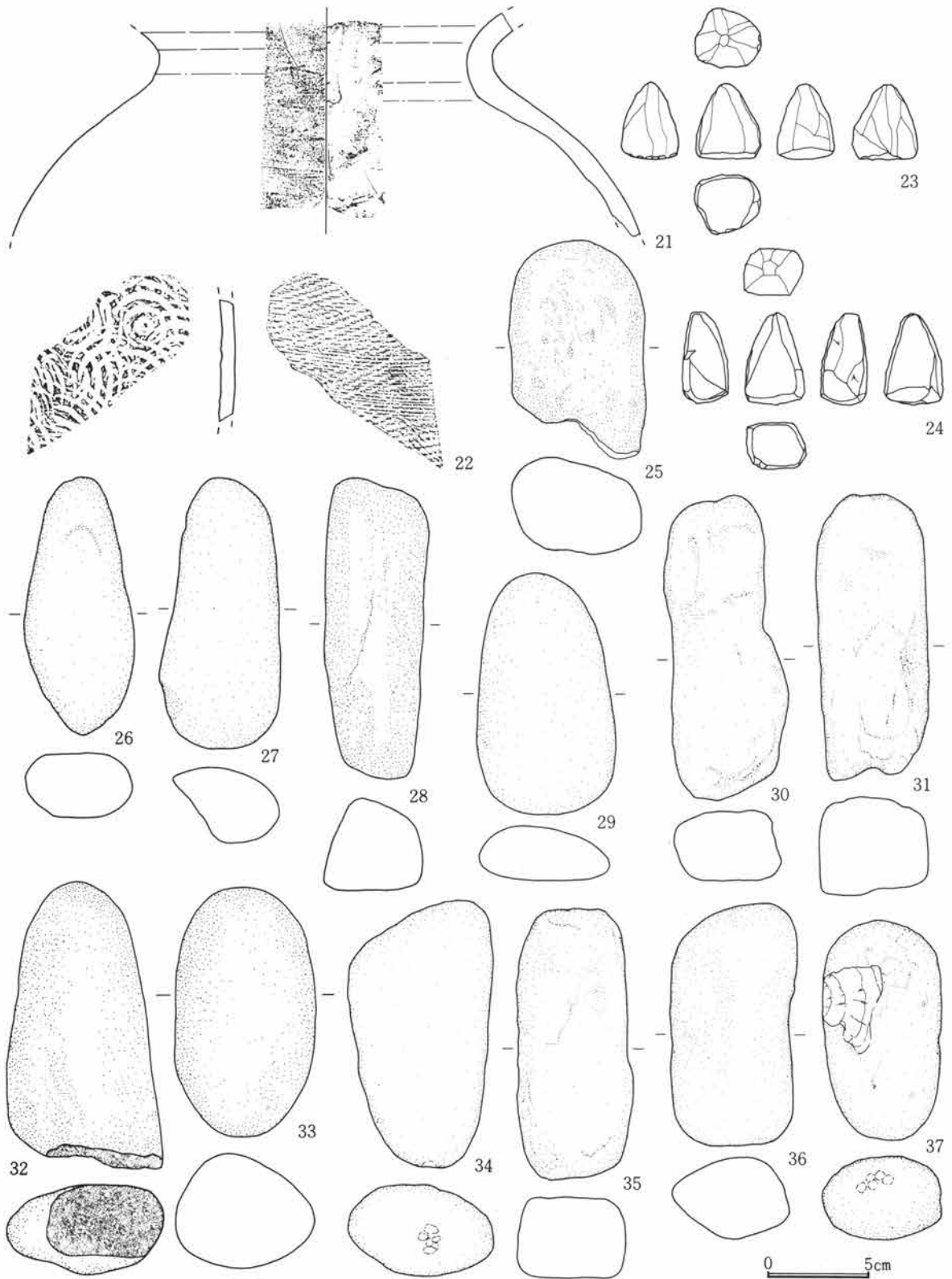


第80図 I区第34号住居跡実測図(2)

第2節 検出された遺構・遺物

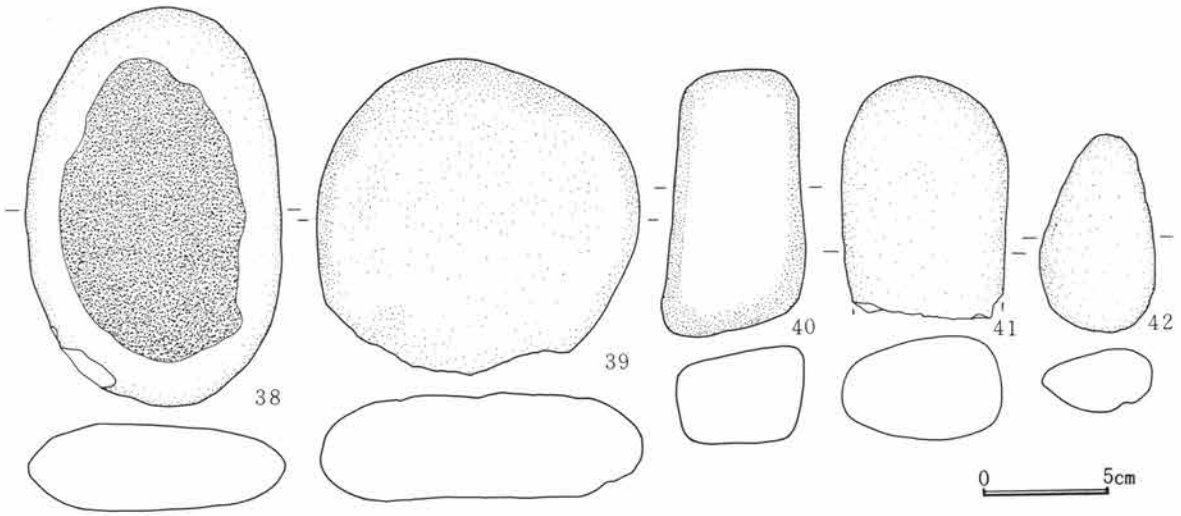


第81図 I区第34号住居跡出土遺物実測図(1)



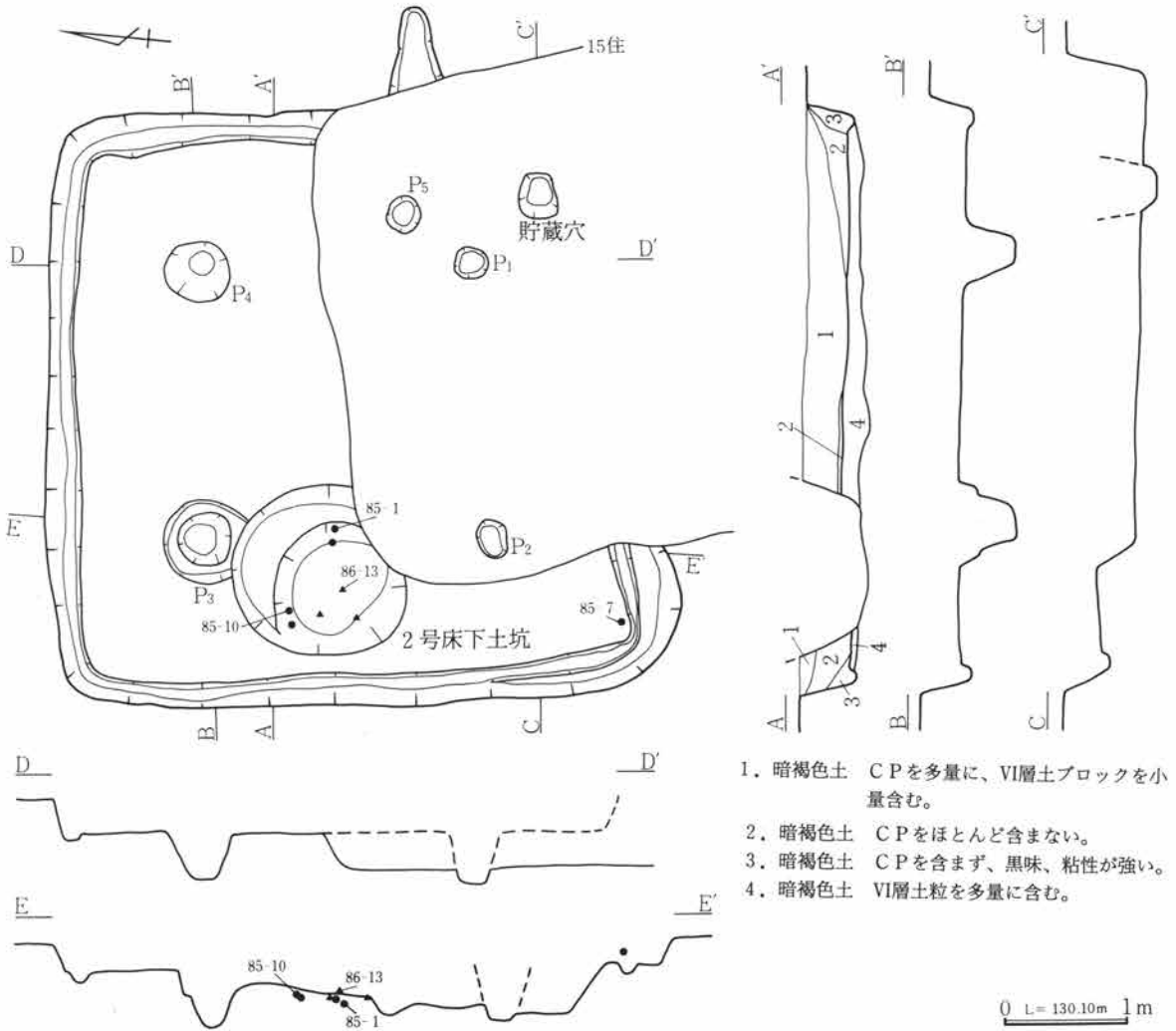
第82図 I区第34号住居跡出土遺物実測図(2)

建て替えを想定しなければならないかもしれない。貯蔵穴は北西壁寄りに検出した約65×40cm、深さ約62cmの規模を有する長方形のピットと考えられる。また、これに接するように径約65cm、深さ約70cmの円形プランの掘り込みがみられ、これも貯蔵穴の可能性が高い。



第83図 I区第34号住居跡出土遺物実測図(3)

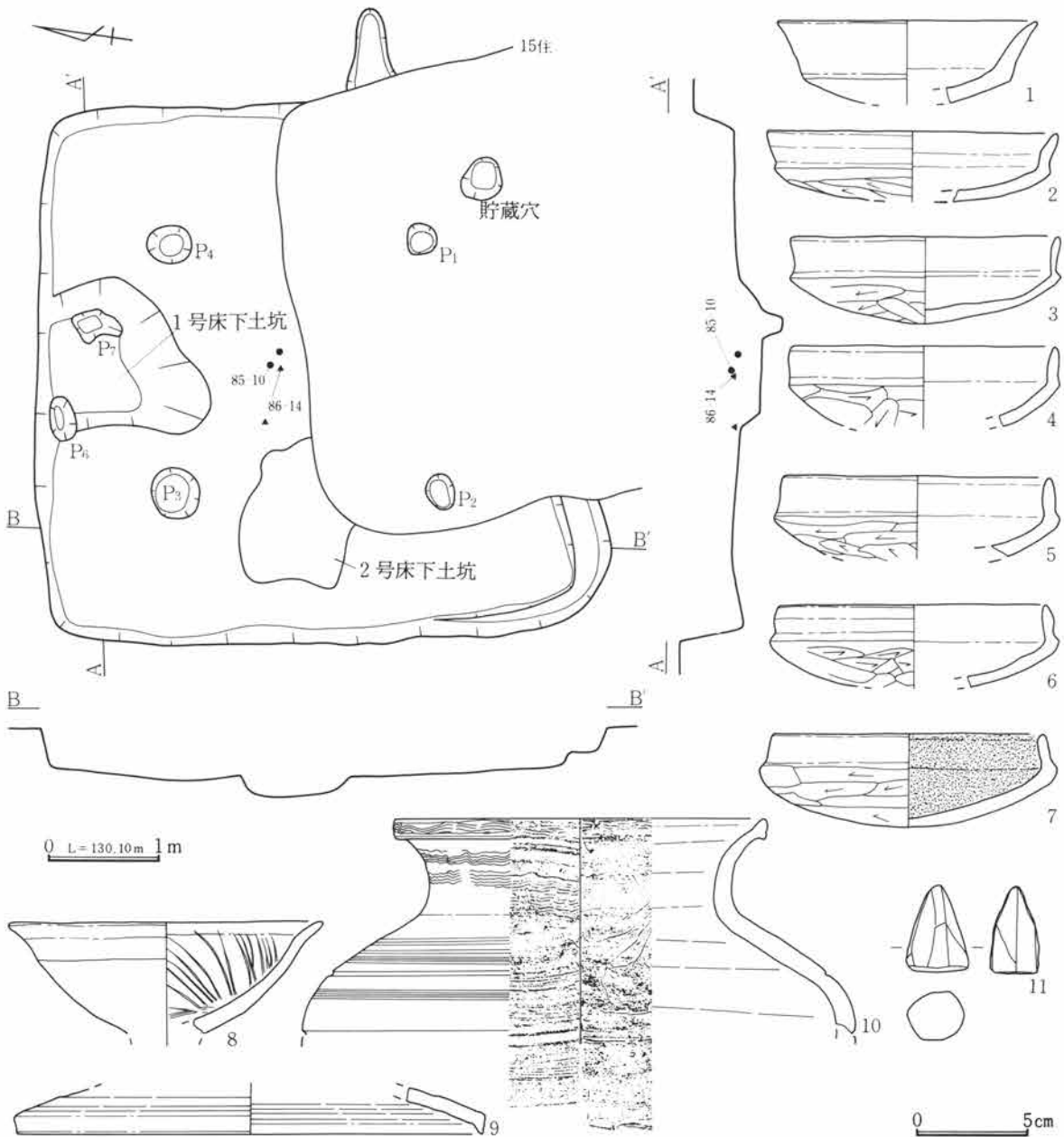
遺構名称	I区第35号住居跡	位置	42~44-I-62~65グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	4.68m×4.95m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約33cm程



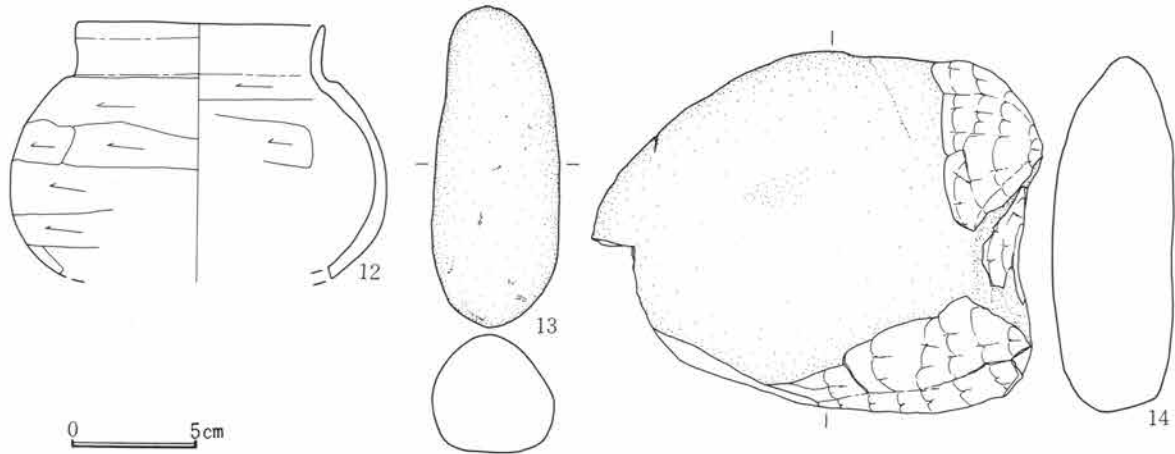
第84図 I区第35号住居跡実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

(所見) 当住居跡は第15号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡→第15号住居跡と考えられる。この重複によって当住居跡はカマドの主体部から南東壁にかけて失っている。壁溝は残存部においては、下幅約3~13cm、深さ約5~9cmの規模で巡らされている。柱穴はP₁~P₄(径約25~52cm、深さ約38~45cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.2m、P₂~P₃間約2.3m、P₃~P₄間約2.2m、P₄~P₁間約2.2m)の4本であり、掘り方段階でも新たな柱穴配列は検出されていない。貯蔵穴は東コーナー部に当たる位置に検出した長方形プランの掘り込みで、規模は約35×30cm、推定床面からの深さ約35cmである。この床面の調査でP₃に接して浅い掘り込みを検出した他、掘り方の調査でも浅い掘り込み(1号床下土坑)を1ヵ所検出している。カマドは北東壁のやや南寄りに設置されていたが、第15号住居跡との重複によってほとんどが削平されており、煙道の一部が残存しているにすぎない。遺物は、床面から掘り込まれていた土坑内と、掘り方段階の中央底面付近に集中して出土している。



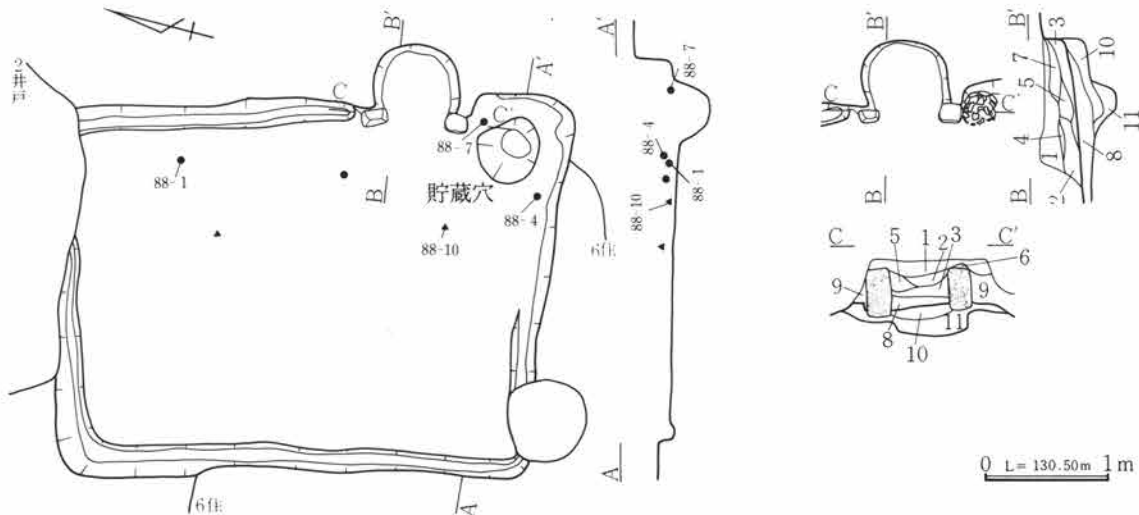
第85図 I区第35号住居跡(2)・出土遺物実測図(1)



第86図 I区第35号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第36号住居跡		位置	46~48—I—79~81グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.92m×3.80m	主軸方位	東—10度—北	残存深度	約20cm程

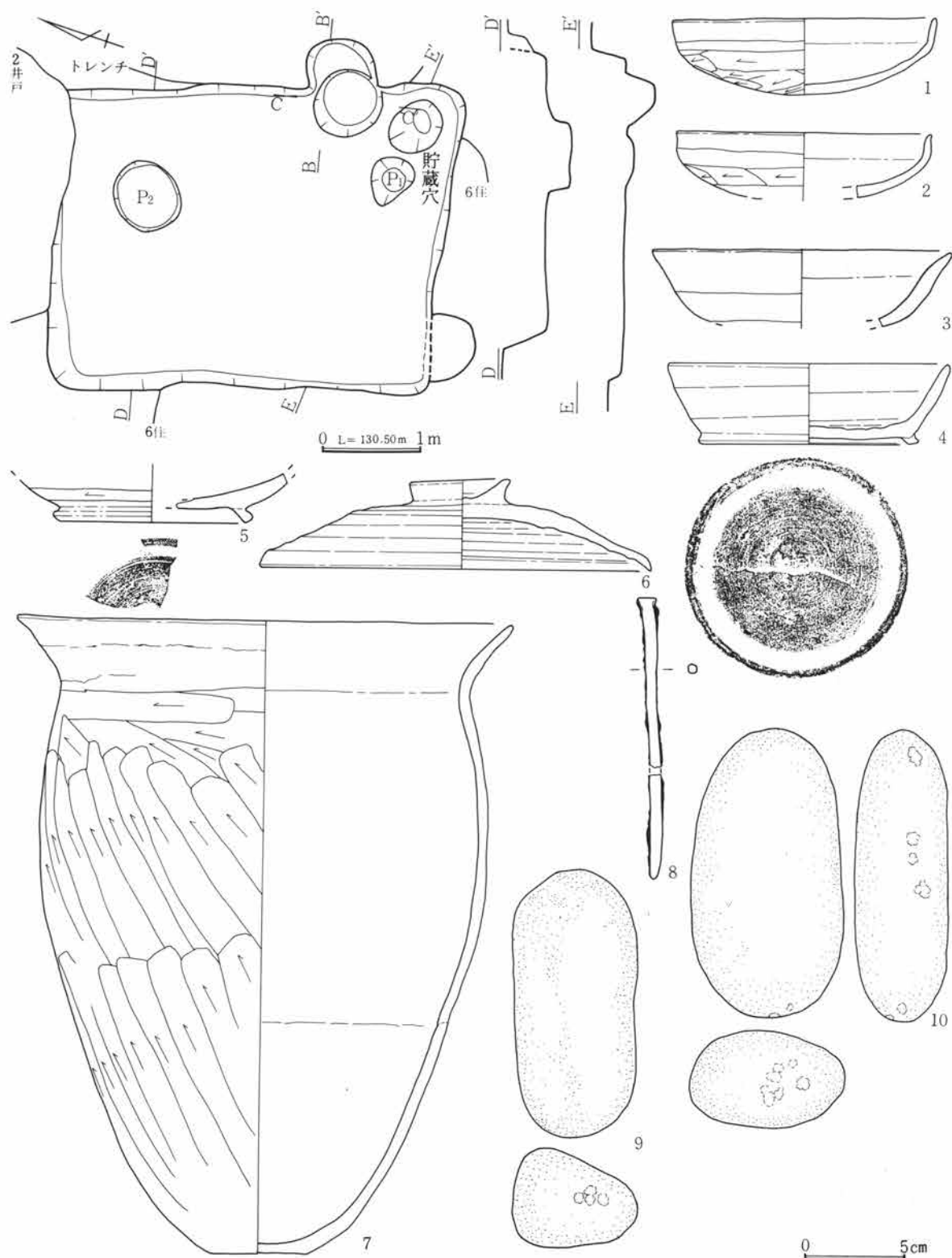
(所見) 当住居跡は、第6号住居跡と第2号井戸跡と重複している。第6号住居跡との新旧関係は遺構の検出状態から当住居跡→第6号住居跡と考えられ、第2号井戸跡は出土遺物の比較から当住居跡よりも古い時期の遺構と判断した。平面プランでは東コーナー部がやや張り出していて不整形であるが、壁の状態から崩落等によるのではなく、当初からこのように掘削されたものであろう。壁溝はカマド部から南東壁中央部まで認められない他、全周していたと思われる。規模は下幅約4~10cm、深さ約4cmである。床面は平坦であるが硬化面は認められず、精査によっても柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は東コーナー部で円形を呈し、径約50cm、深さ約30cmである。掘り方の調査ではP₁(径約40cm、深さ約8cm)・P₂(径約63cm、深さ約19cm)と2本のピットを検出しているが、位置関係から柱穴とは考えられない。



- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1. 暗褐色土 CPと褐色土粒をまばらに含む。 | 7. 暗褐色土 焼土粒・ブロックと灰白色土粒を多量に含む。 |
| 2. 暗褐色土 1層よりもCPが少なく、全体に黒味が強い。 | 8. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を少量含む。 |
| 3. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。 | 9. 暗褐色土 1層よりもCPが少なく、粘性が強い。 |
| 4. 灰白色土ブロック 袖の崩落か？ | 10. 暗褐色土 焼土微粒とVI層土粒？を少量含む。 |
| 5. 褐色土 褐色土(VI層土?)をブロック状に含む。 | 11. 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、VI層土粒が主体。 |
| 6. 暗褐色土 袖石の剝離したものと褐色土粒を少量含む。 | |

第87図 I区第36号住居跡実測図(1)

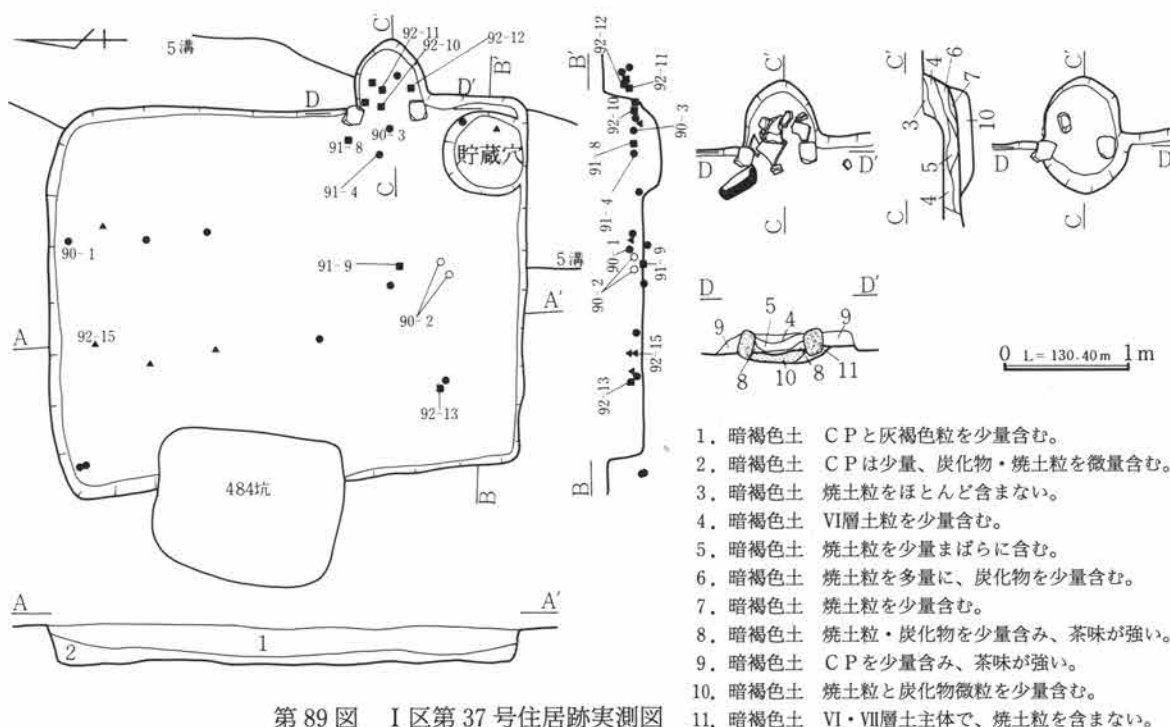
第4章 検出された遺構・遺物



第88図 I区第36号住居跡(2)・出土遺物実測図

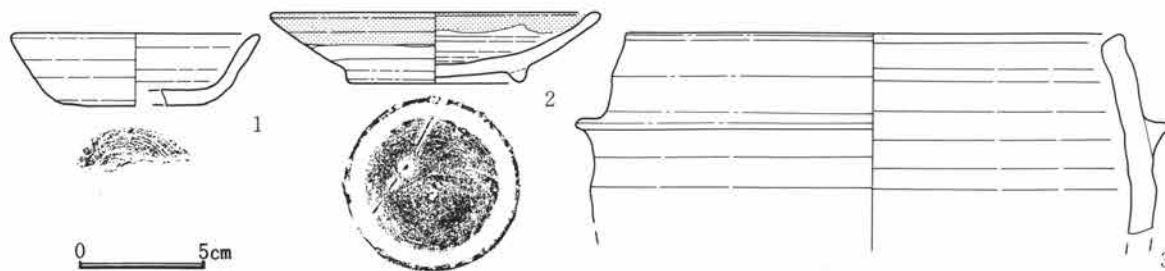
カマドは、北東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東 -10° 北である。平面形は馬蹄形を呈し、規模は全長約65cm、燃烧部幅約50cmである。壁との接合部には角柱状の截石を据えて袖を構築している他、支脚や天井石等の構築材は検出されていない。遺物はカマド周辺から多く出土しているが、特に第88図7の土師器甕がカマド右袖脇から伏せた状態で出土したのが特筆されるものである。

遺構名称	I区第37号住居跡		位置	32・33-I-81~83グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.92m×3.77m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約30cm程

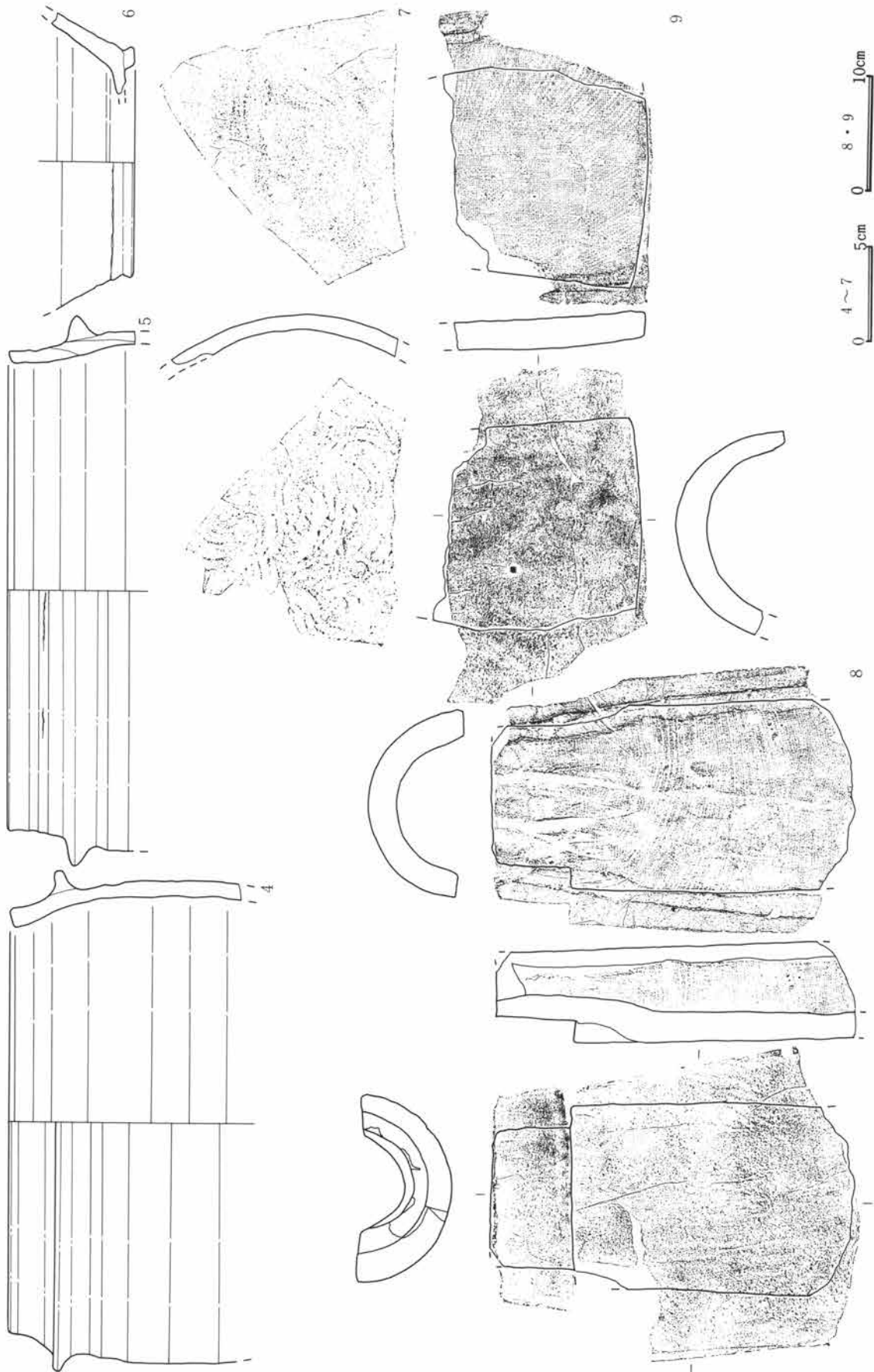


(所見) 当住居跡は第57・58・151号住居跡と重複しており、遺構の検出状態から当住居跡が最も新しい時期のものとして判断した。また、西壁の一部は中世以降の第484号土坑との重複によって失われている。平面プランは北側がわずかに広がっておりやや不整であるが、この広がった部分からも遺物が出土しており、崩落等によったものではない。壁溝・柱穴は床面の精査によっても検出されておらず、また、当住居跡には掘り方が認められないことから、当初から掘削されなかったものであろう。貯蔵穴は南東コーナー部に検出した円形プランの掘り込みである。規模は径約65cm、深さ約14cmであり、底面から浮いた位置ではあるがカマドの支脚と考えられる面取りされた截石が出土している。

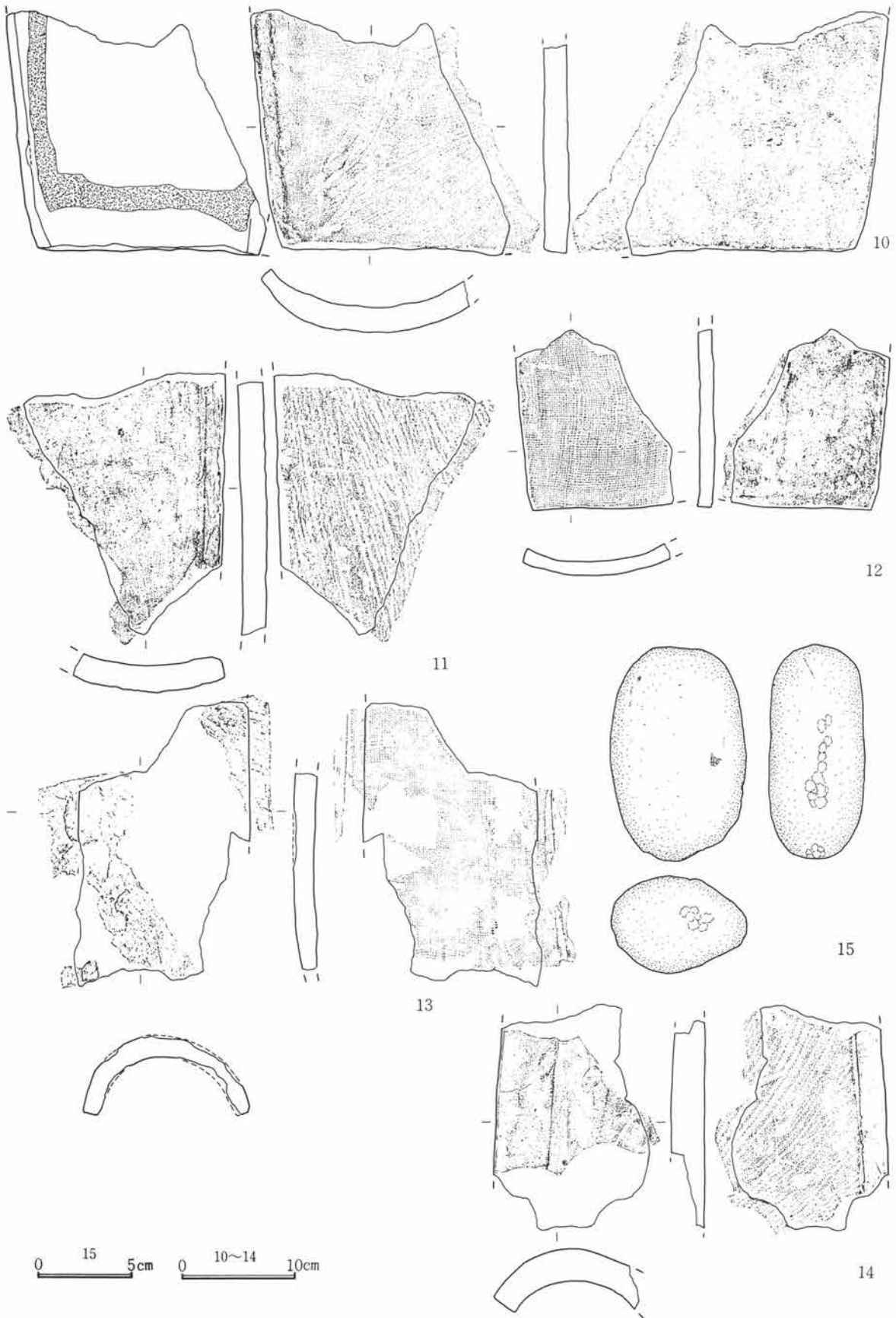
カマドは東壁の南寄りに設置されており、砲弾状の平面形で主軸方位は東-3°-北である。規模は、全長約65cm、燃焼部幅約50cmで、右袖石がやや内側に入っており、焚口の幅が燃焼部に比較して狭くなっている。壁との接合部には角柱状の截石を袖石として据えており、燃焼部中央左寄りの位置に面取りした截石を支脚として据え付けている。貯蔵穴から出土している支脚部材はこの支脚と接合しないので、双脚の支脚の可能性が高い。また、カマドからは瓦が多数出土しており、これらも部材として使用されたものであろう。



第90図 I区第37号住居跡出土遺物実測図(1)



第91図 I区第37号住居跡出土遺物実測図(2)

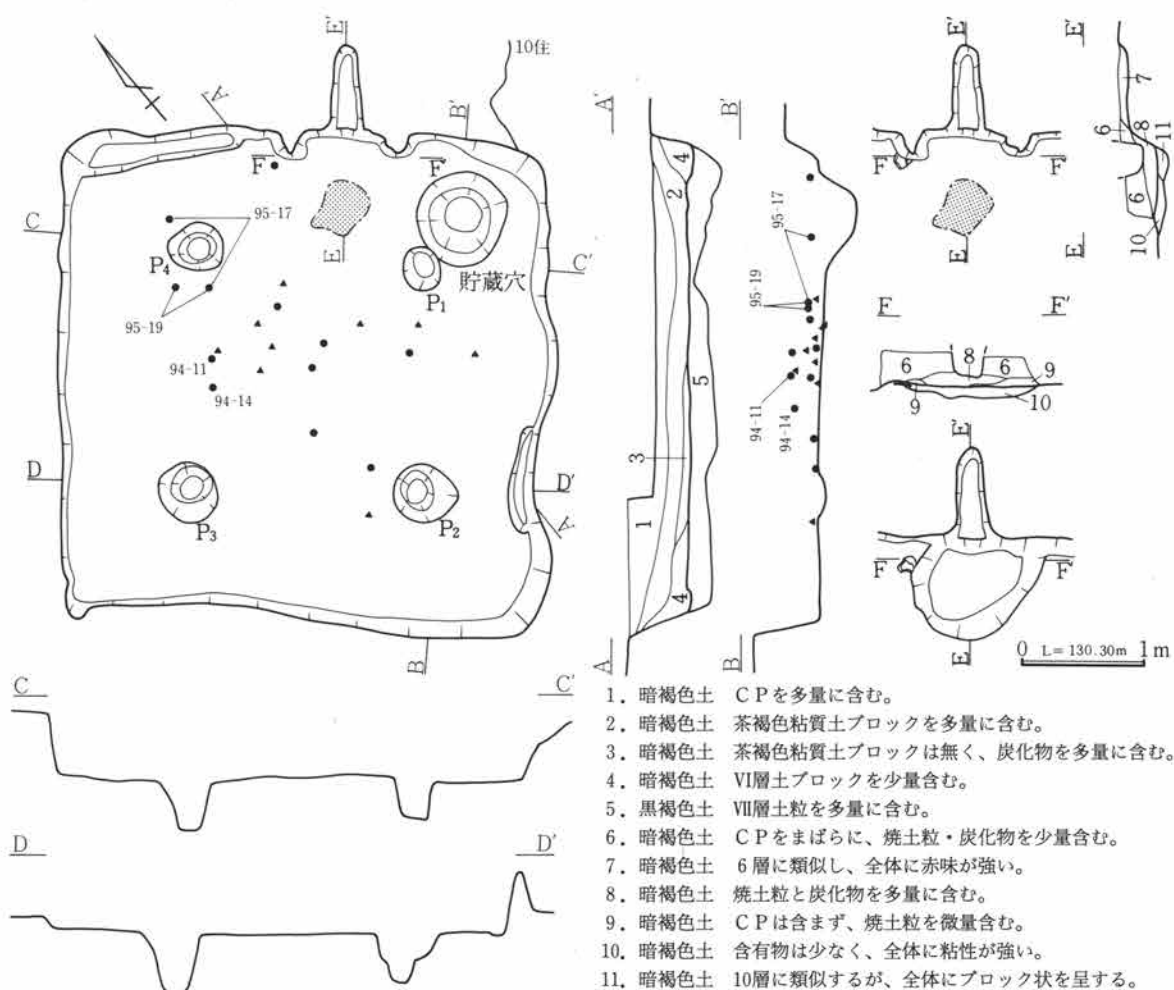


第92図 I区第37号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物

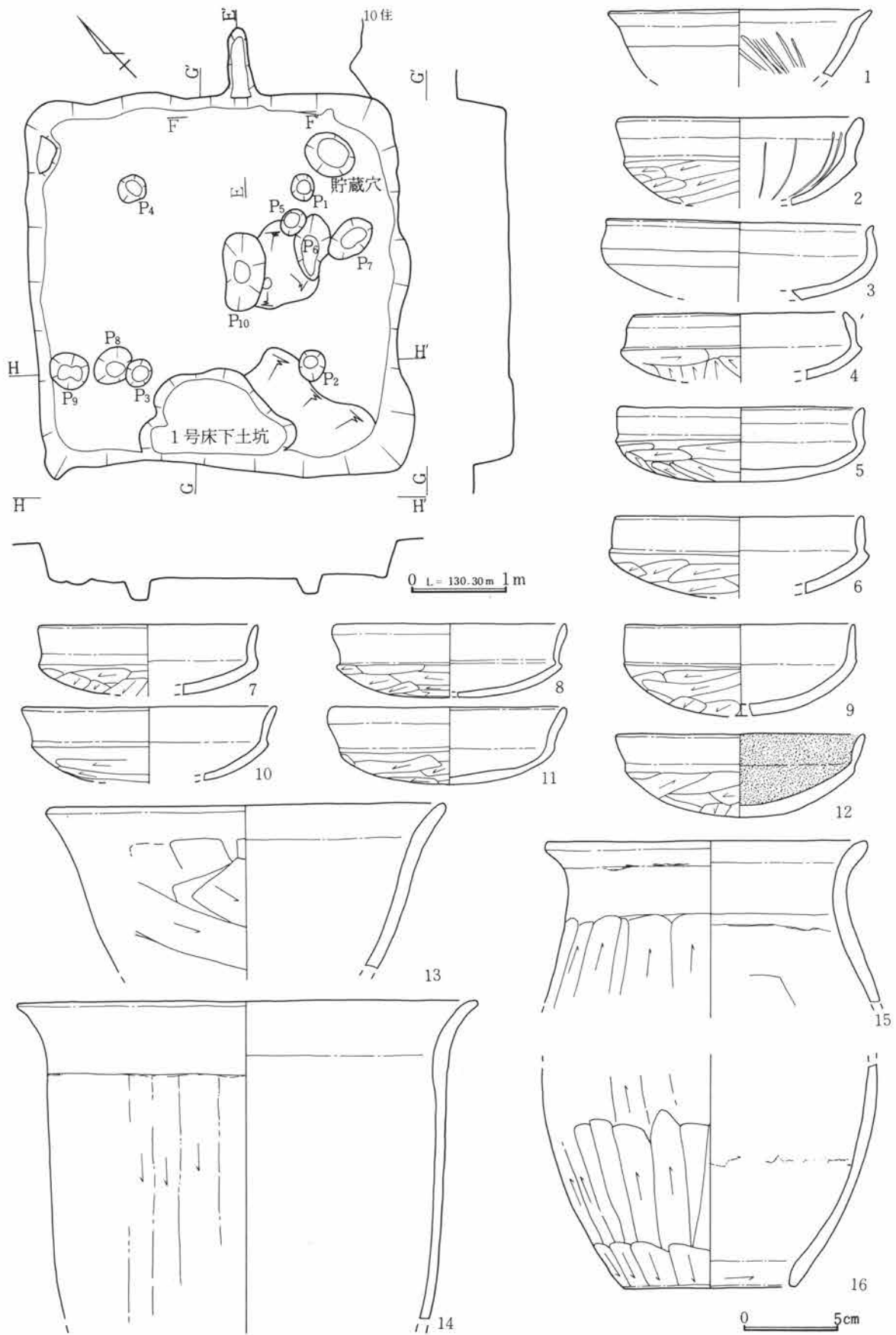
遺構名称	I区第38号住居跡		位置	44~47-I-70~73グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.95m×3.97m	主軸方位	北-43度-東	残存深度	約45cm程

(所見) 当住居跡は第10号住居跡と重複しており、遺構の検出状態から当住居跡→第10号住居跡であるが、第10号住居跡の掘り込みが比較的に浅いため、当住居跡は比較的良好な残存状態であった。南壁は崩落によるものか凹凸が認められる。床面はほぼ平坦であり、この面の精査によって南東壁と南西壁の一部に壁溝を検出した。しかし、床面の捉え方は曖昧な部分もあるため、カマド部分を除いて全周していた可能性が高い。柱穴は、床面精査によってP₁~P₄(径約30~50cm、深さ約35~45cm、柱穴間距離P₁~P₂間約1.8m、P₂~P₃間約1.8m、P₃~P₄間約1.9m、P₄~P₁間約1.8m)の4本の柱穴を検出している。この柱穴の内、P₁を除いた3本が上半で径の広がる漏斗状を呈していたことが特徴であり、下半の径で比較すると約30cmであり4本共に同様の規模となる。また、掘り方の調査によって他に6本のピットを検出しているが、P₈が柱穴P₃と重複する以外柱穴位置のピットはないので、前述の柱穴配列以外の柱穴配列はない。したがって当住居跡には柱穴配置の変更を伴うような建て替えは行われていないことがわかる。貯蔵穴は東コーナー部に検出した円形を呈する掘り込みで、規模は径約70cm、深さ約30cmである。掘り方は床面全体に及び、約20cmの貼床がされていたことがわかった。その他掘り方の調査では、南西壁に接して3cm程の浅い掘り込み(1号床下土坑)を検出している。

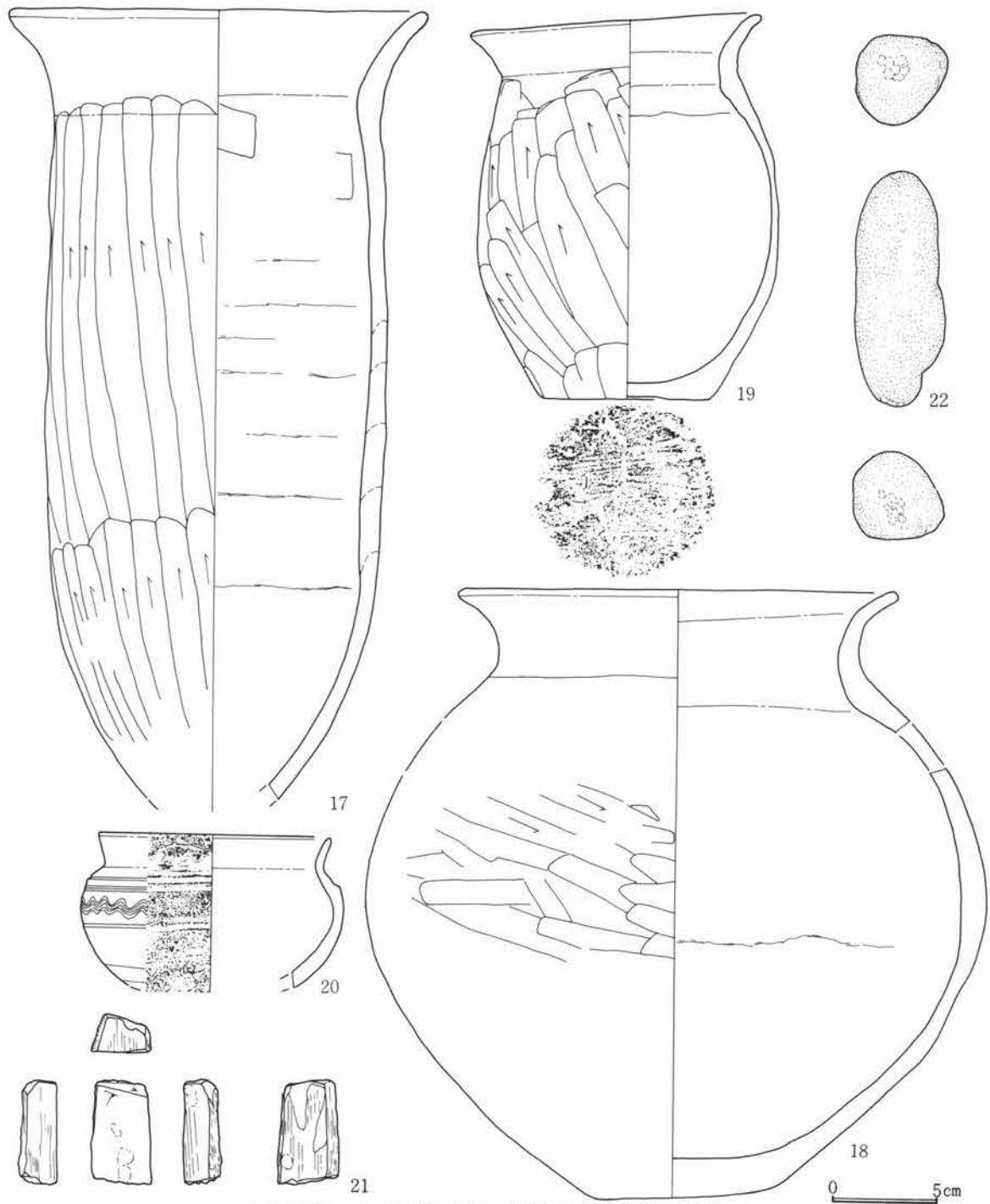


第93図 I区第38号住居跡実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



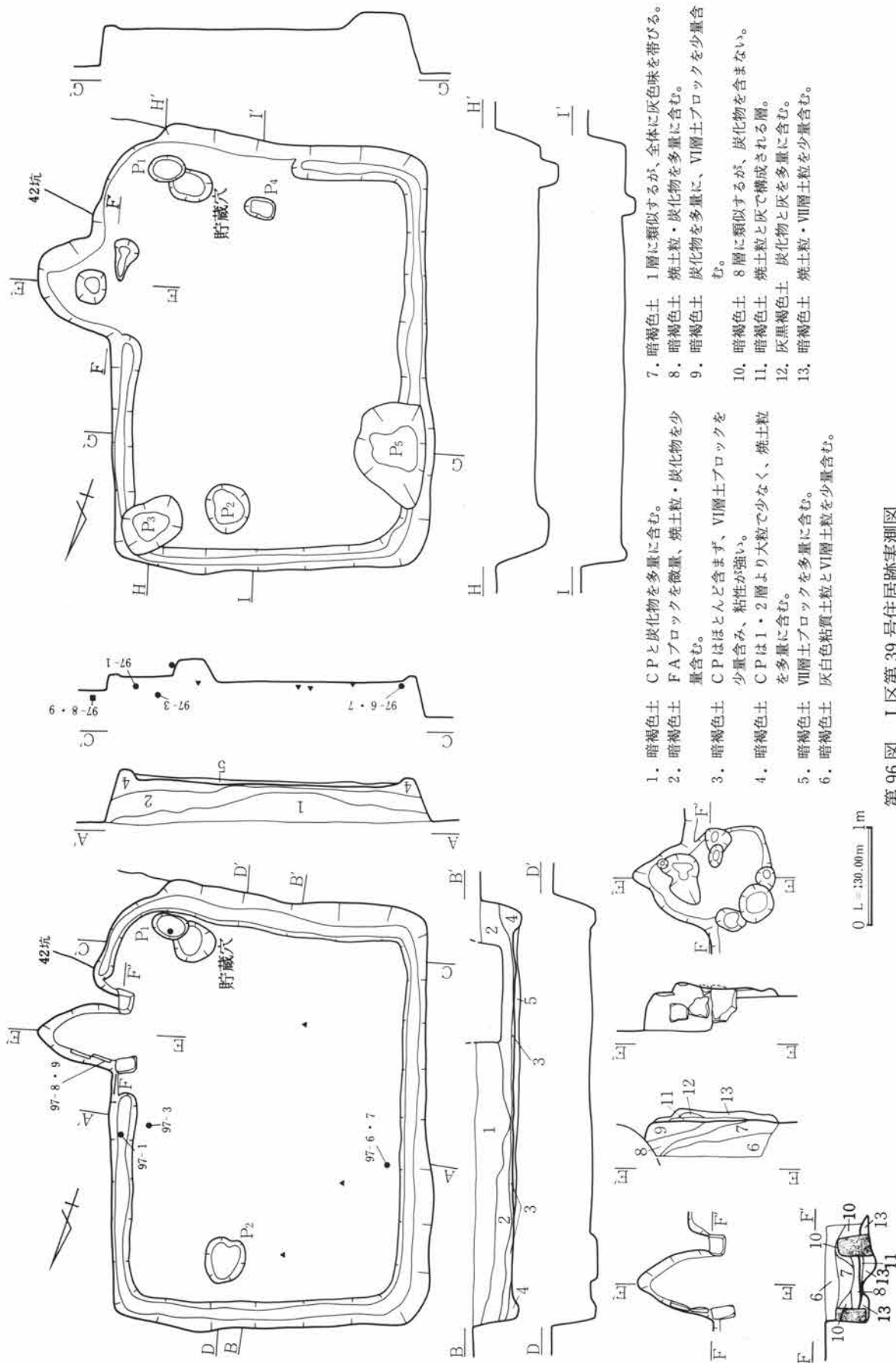
第94図 I区第38号住居跡(2)・出土遺物実測図(1)



第95図 I区第38号住居跡出土遺物実測図(2)

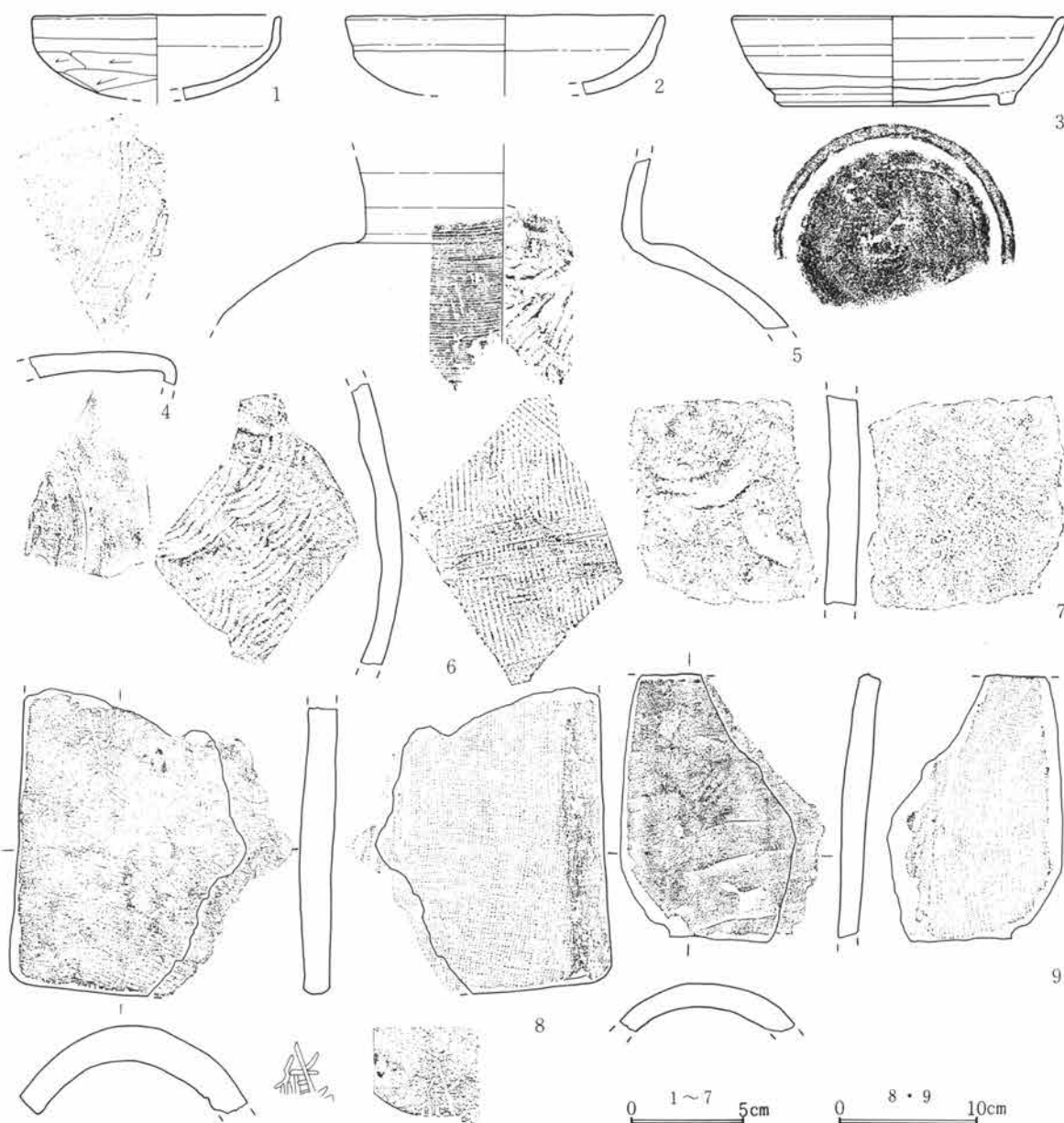
カマドは北東壁中央わずかに南寄りに設置されており、主軸方位は東-50°-北である。検出時袖の痕跡が20cm程残存しており、本来は凸字状を呈していたものと判断できた。残存部の規模は全長約90cm、燃焼部幅約60cm、煙道長約65cm、下幅約14cmである。カマド前面の壁から約60cmの部分を中心に40cm程の範囲に灰が検出されており、この位置がカマドの燃焼部または焚口であったのであろう。

遺構名称	I区第39号住居跡		位置	18~20-I-77~79グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.28m×4.46m	主軸方位	東-15度-北	残存深度	約40cm程



第96図 I区第39号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

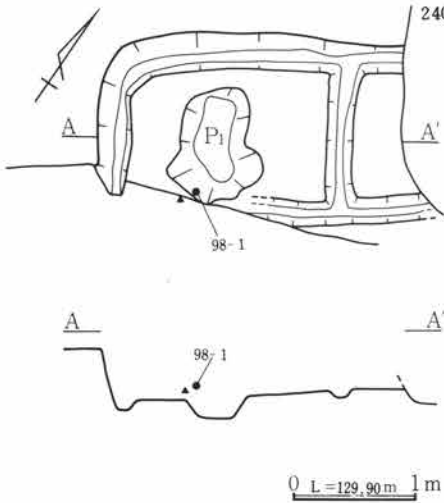


第97図 I区第39号住居跡出土遺物実測図

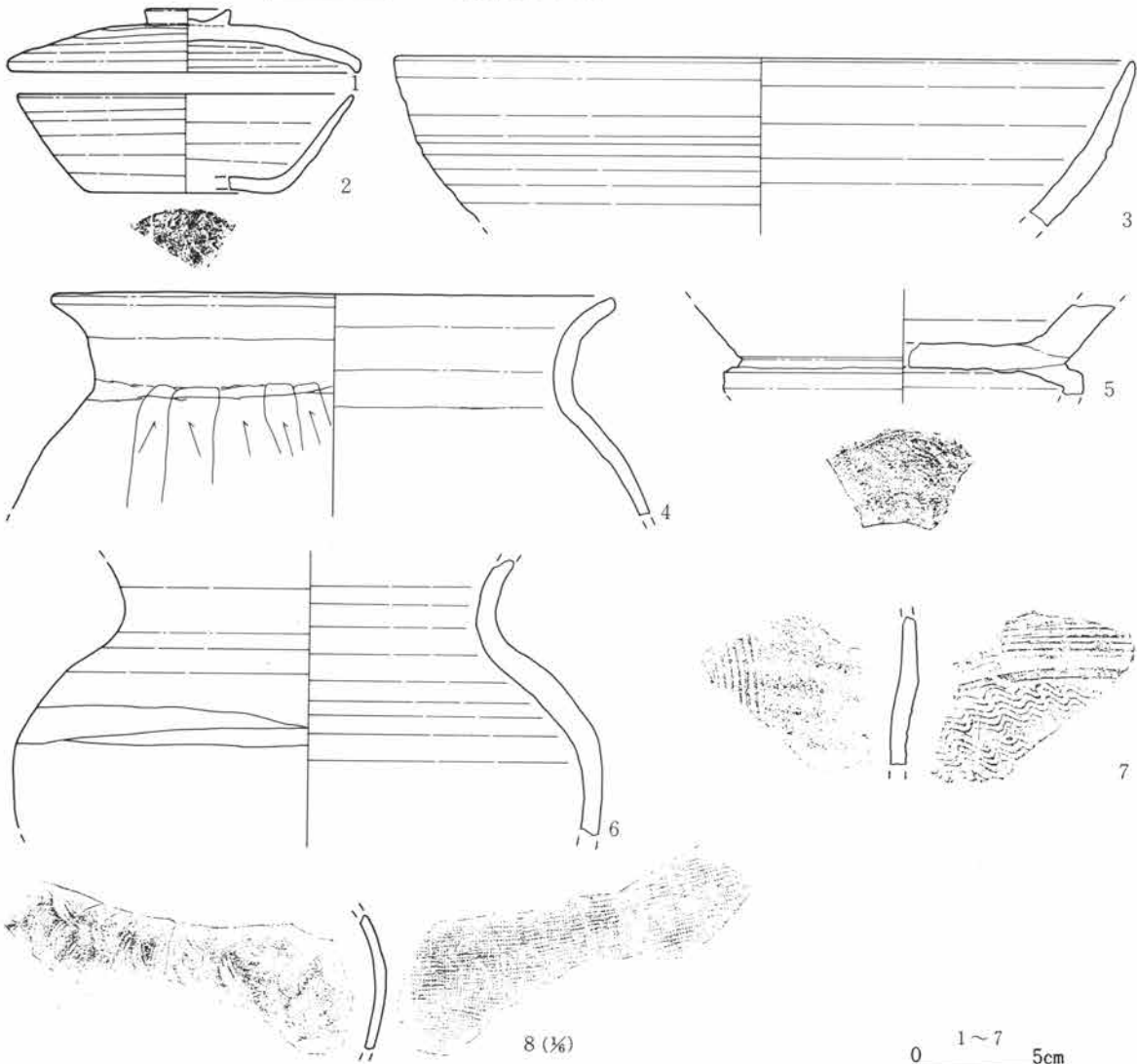
(所見) 当住居跡は当該時期の他遺構と重複せず、単独で検出したものである。平面プランの確認はIV層土で行った結果、明瞭にプランを捉えることができた。壁の残存も良好であるが、やや上半部に崩落の痕跡が認められる。壁溝はカマド部分を除いて全周検出され、規模は幅約5~17cm、深さ約3~10cmである。床面の精査によってP₁(径約25cm、深さ約19cm)・P₂(径約40cm、深さ約9cm)の2本のピットと貯蔵穴を検出した。この2本のピットは位置と規模から判断して柱穴とは考えられない。貯蔵穴は東コーナー近くに検出した円形プランの掘り込みで、規模は径約45cm、深さ約18cmである。

カマドは北東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-15°-北であり、住居の主軸方位と一致している。平面形態は砲弾状で、全長は約100cm、燃烧部幅約50cmである。袖は両袖共角柱状の截石を部材として使用しており、壁との接合部から屋内に張り出すように据え付けられている。燃烧部左壁部には第97図8・9の瓦を張り付けるようにして壁の補強をしていた。残存はしていないが右壁部にも補強がされていたものと考えられる。掘り方の調査で燃烧部中央右寄りに小ピットが検出されており、支脚の存在が示唆される。

遺構名称	I区第40号住居跡	位置	39・40-I-61~63グリッド内		
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—
		残存深度	約40cm程		

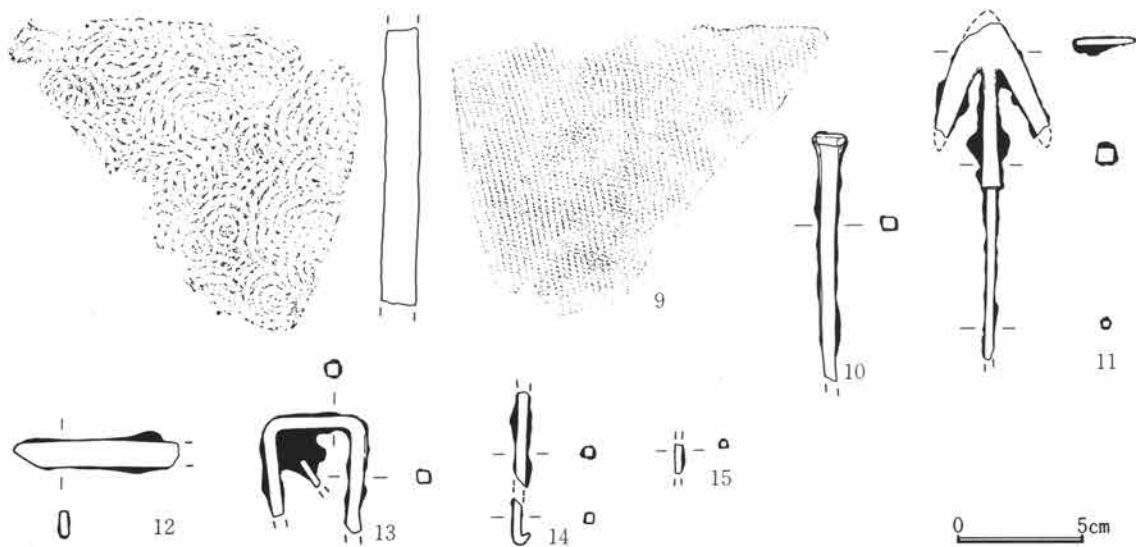


240住 (所見) 当住居跡は第34・240号住居跡と重複しており、遺構の残存状態等から当住居跡が最も古い時期のものだと判断した。検出された部分は西コーナー部を含むごく一部分であり、全体形は捉えられない。残存部分の壁には崩落等は認められず、比較的良好な状態である。床面はVI層土に達して構築されており、P₁(約95×75cm、深さ約16cmの不整形)以外、掘り方は認められない。壁溝は、壁に沿って全周していたと考えられるが、特異なのは同様の溝が北西壁溝から直角に屋内に1m程延び、さらに北西壁溝に平行して掘削されていることである。これだけの限られた範囲の調査から即断することはできないが、更なる重複または建て替えの可能性もある。



第98図 I区第40号住居跡・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

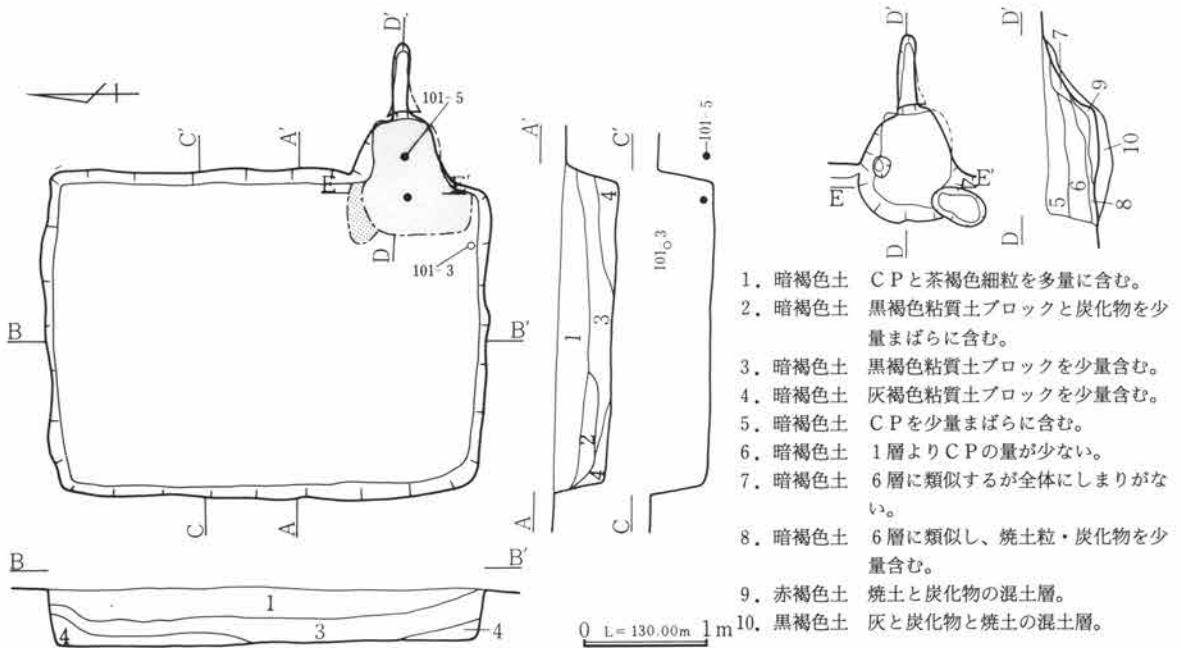


第99図 I区第40号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第41号住居跡		位置	29~31-I-65~67グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.60m×3.52m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約42cm程

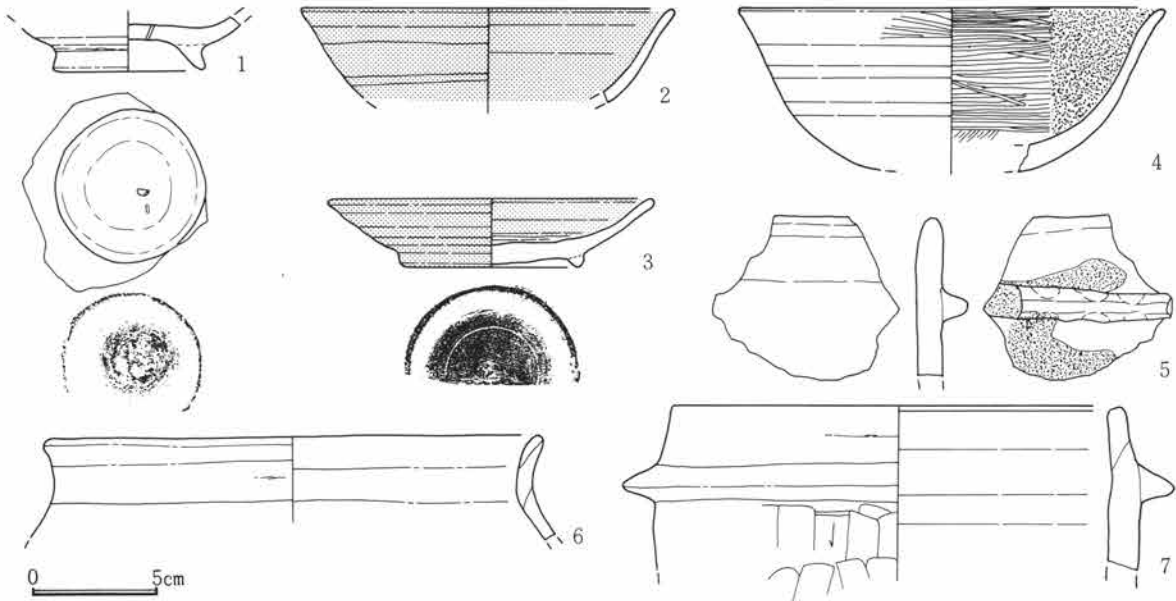
(所見) 当住居跡は第50号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から第50号住居跡→当住居跡と考えられる。壁は崩落の痕跡はなく、整形でコーナー部は丸味を持たない。床面は平坦で残存状態は良好であるが、床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴は全く検出されていない。

カマドは東壁の南寄りに偏って設置されており、主軸方位は東-0°-北で住居の主軸方位と一致している。平面形は凸字形で、規模は全長約120cm、燃焼部奥行き約55cm、燃焼部幅約55cm、煙道長約55cm、下幅約10cmである。袖は構築材等の残存はないが、屋内に張り出す構造とは考えられない。燃焼部から屋内にまで広がって灰面があり、また、左袖の前面の位置には焼土が認められた。



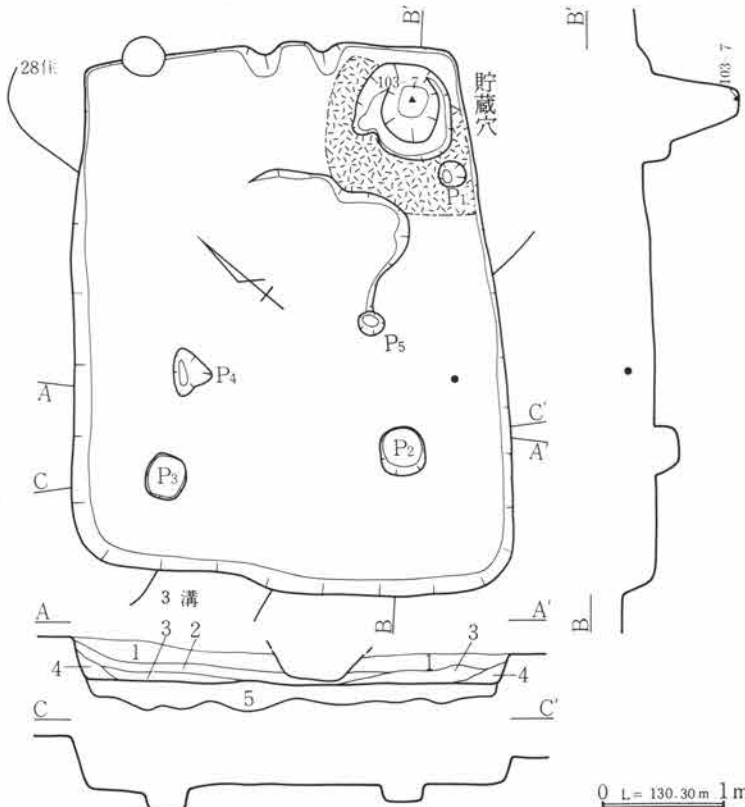
第100図 I区第41号住居跡実測図

第2節 検出された遺構・遺物



第101図 I区第41号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第42号住居跡	位置	42~44-I-75~78グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	4.32m×3.35m	主軸方位	東-40度-北	残存深度	約23cm程

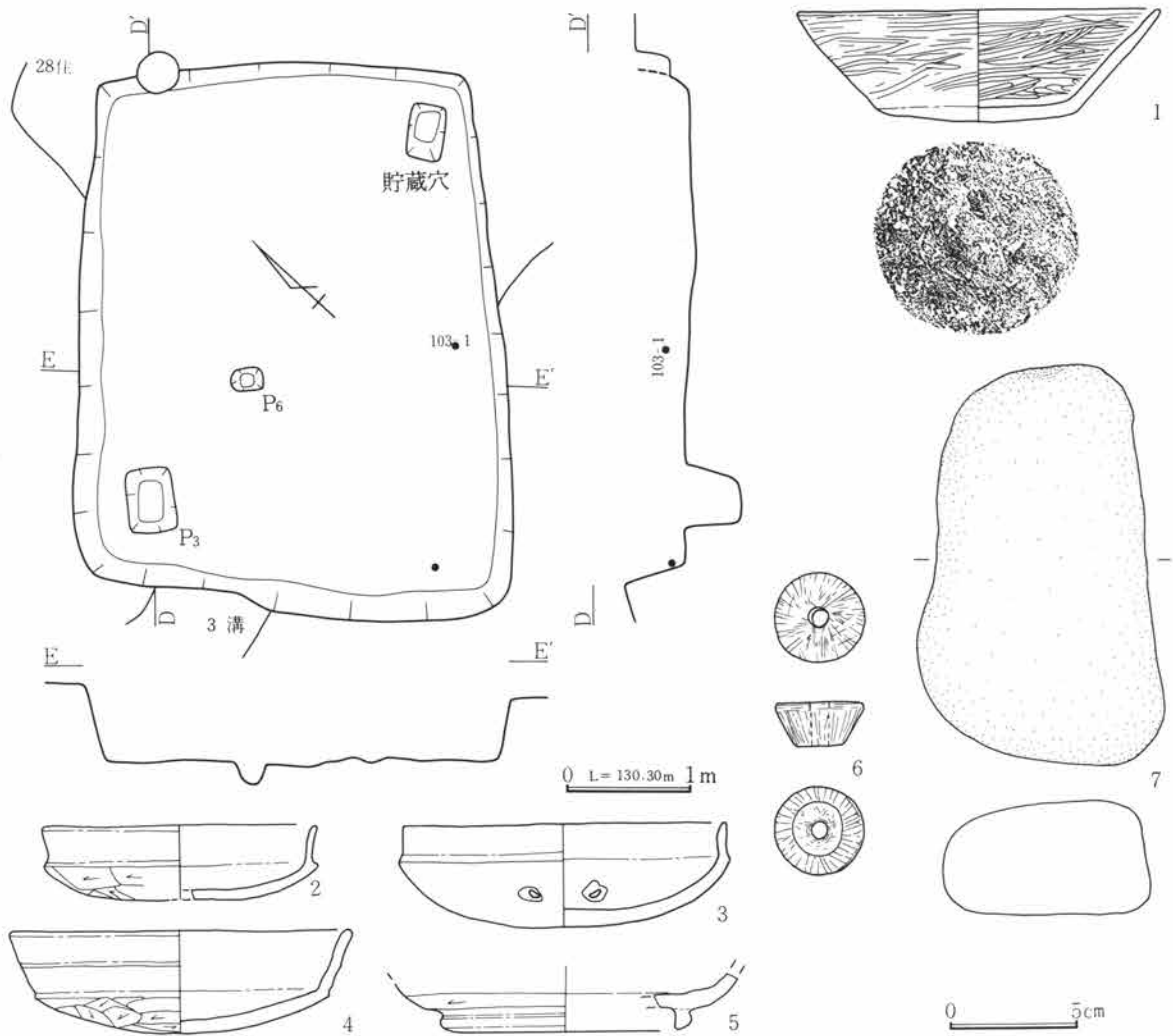


1. 暗褐色土 CPを少量まばらに含む。
2. 暗褐色土 1層よりCPは細粒で、全体にしまりがあり、茶味が強い。
3. 暗褐色土 茶褐色土(VI層土?)ブロックをまばらに含む。
4. 暗褐色土 黒味が強くしまりがある。
5. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックを含み、粘性が強い。

第102図 I区第42号住居跡実測図(1)

(所見) 当住居跡は第28号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第28号住居跡であるのは明らかである。壁の一部は第28号住居跡との重複によって失われており、床面は全面に貼床が施されている。この床面の精査によって、6本のピットを検出したが、配置に規則性は認められず、柱穴とは考えなかった。貯蔵穴は東コーナー部に検出し、規模は約80×60cm、深さ約80cmで、長方形を呈している。この貯蔵穴の周辺を取り巻くように約20~40cmの幅で白色の粘土が床面に貼り付けられていた。掘り方の調査では西コーナー部にも約52×38cm、深さ約41cmの長方形プランの掘り込みを検出した。これは形態からみて貯蔵穴と同じものであり、住居跡の建て替えを示している可能性が強い。カマドは北東壁中央で袖の痕跡だけの検出で、詳細は不明である。

第4章 検出された遺構・遺物

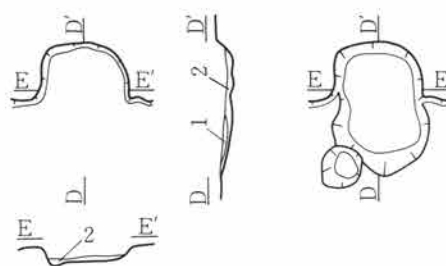
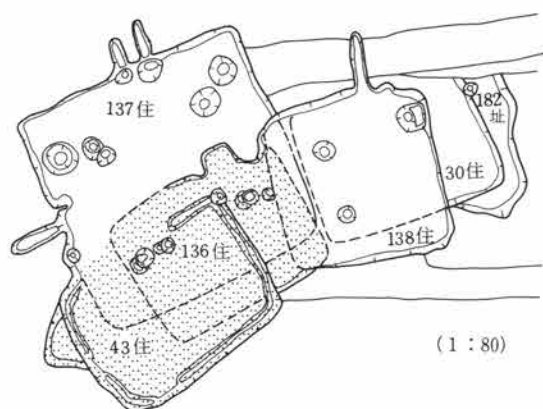


第103図 I区第42号住居跡(2)・出土遺物実測図

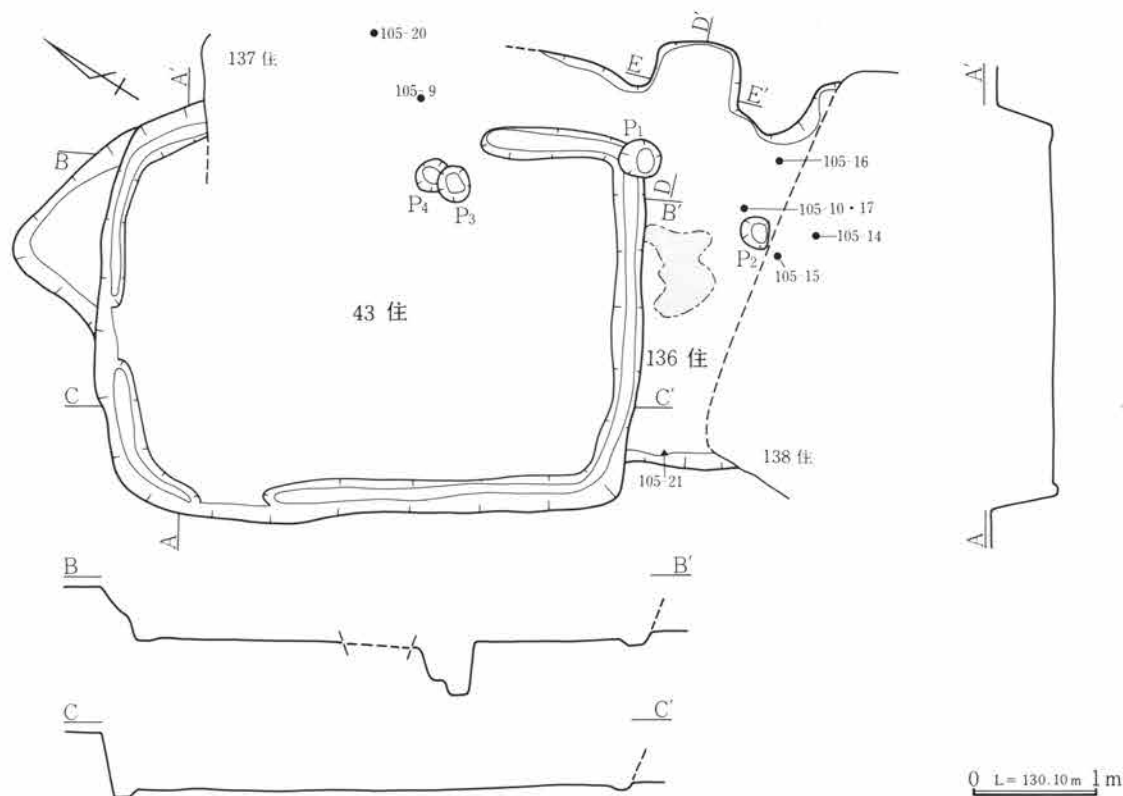
遺構名称	I区第43号住居跡	位置	36~38—I-74~76グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.27m×4.34m	主軸方位	東-26度-北	残存深度	約47cm程

遺構名称	I区第136号住居跡	位置	35~37—I-74~76グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.97m×—m	主軸方位	東-30度-北	残存深度	約6cm程

(所見) 第43号住居跡は第136・137号住居跡と重複を示し、遺構の残存状態から判断して、当住居跡→第136号住居跡であるのはほぼ確実であるが、第138号住居跡との関係については、間に第136号住居跡が介在しているため明確に捉えられない。床面は第136・137号住居跡とレベル差はなく、一面的に把握した。この床面の精査によってP₃(径約26cm、深さ約43cm)とP₄(径約26cm、深さ約25cm)の重複する2本のピットを検出したが、位置関係から柱穴とみることはできない。その他、柱穴と考えられるようなピットの検出はなかった。また、貯蔵穴も同様に検出されていない。壁溝は2ヵ所ほどで途切れているが、ほぼ全周していたとみられる。規模は下幅約5~15cm、深さ約3~5cmである。カマドは周辺の状態から判断して北東壁に設置されていたと考えられるが、灰面等も含めて痕跡は認められない。このカマドが失われていることについては、第136号住居跡との重複によるのか、第137号住居跡によるのかの判断は現状ではできない。当住居跡の北コー



1. 暗褐色土 灰と焼土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 C P細粒と焼土粒を多量に含み、固くしまっている。



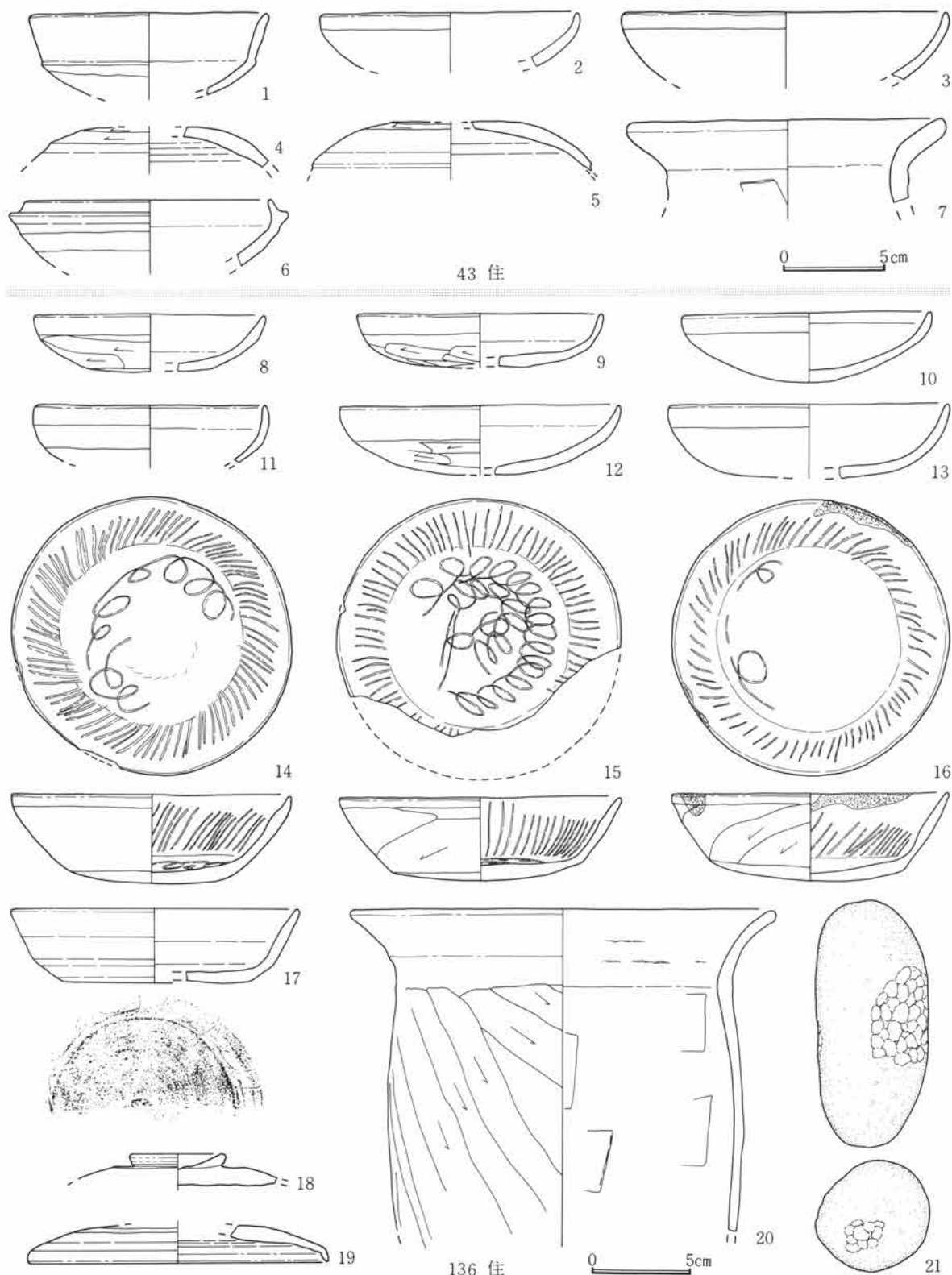
第104図 I区第43号・136号住居跡実測図

ナ一部付近には三角形の掘り込みが認められる。これは当住居跡に伴う付属施設と判断したものではなく、他の土坑等が重複している可能性が強い。

第136号住居跡は、第43・137・138号住居跡と重複しており、調査段階で一軒毎に分離できずに調査を進めたため、遺構の残存状態は極めて不良である。当住居跡のプランとして残存したのは、カマドを含む北東壁と南西壁のごく一部であるが、出土遺物の比較から第43・138号住居跡→当住居跡という新旧関係が想定できる。当住居跡の範囲内で検出したピットは、第43号住居跡で扱ったP₃・P₄の他にP₁(径約30cm、深さ約54cm)とP₂(径約25cm、深さ約31cm)である。この2本のピットにも規則性は認められず柱穴とは判断できないが、P₁~P₄が一連のピットであるとすれば、柱穴的な機能を有していた可能性は否定できない。

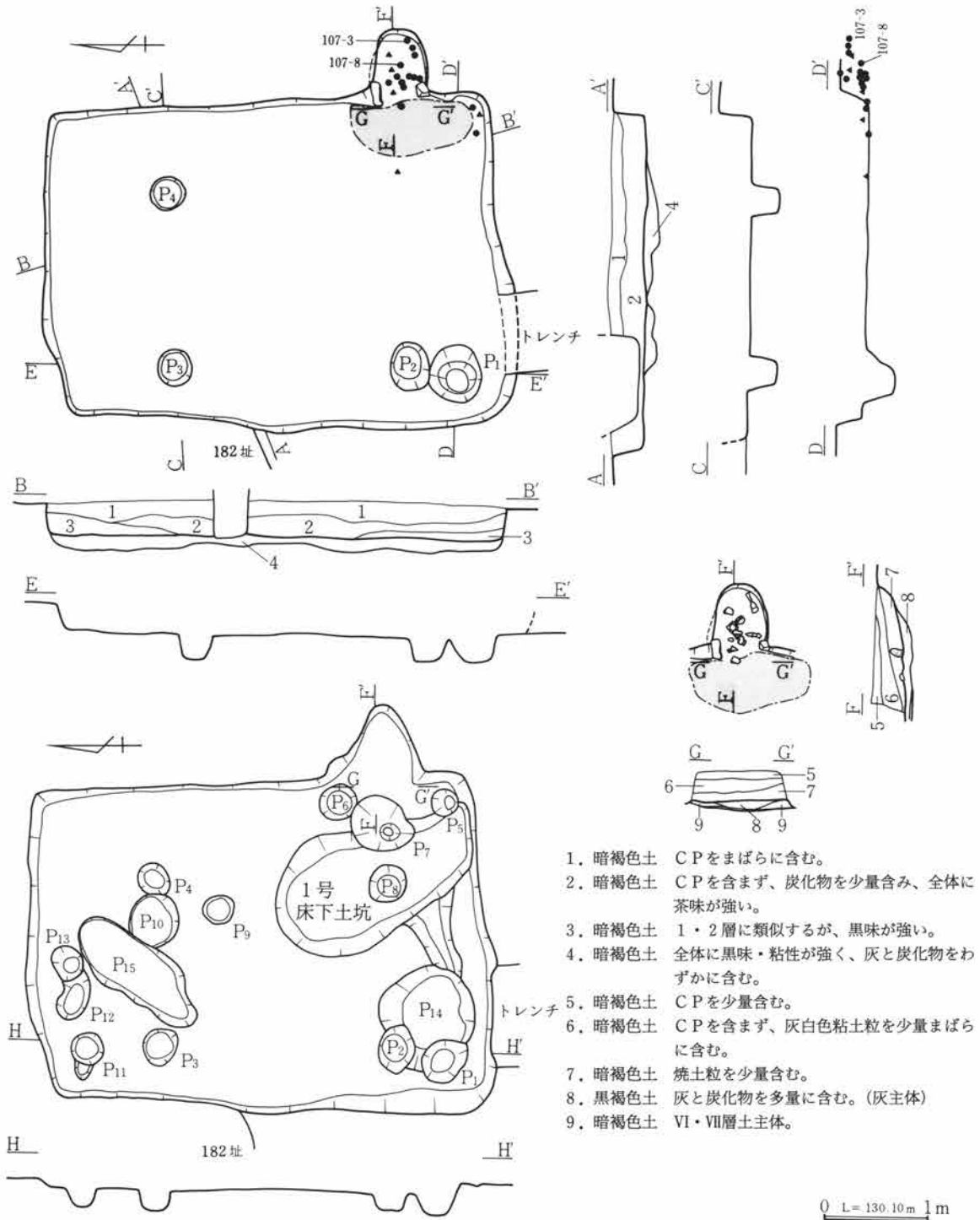
カマドは北東壁の南寄りに位置すると思われ、主軸方位は東-26°-北である。底面付近だけの残存であり、全長約55cm、燃焼部幅約60cmである。形態的特徴から本来は凸字形の掘り方を有するタイプと考えられる。床面中央部に検出した灰面はカマドからの掻き出しによるものであろう。

第4章 検出された遺構・遺物



第105図 I区第43・136号住居跡出土遺物実測図

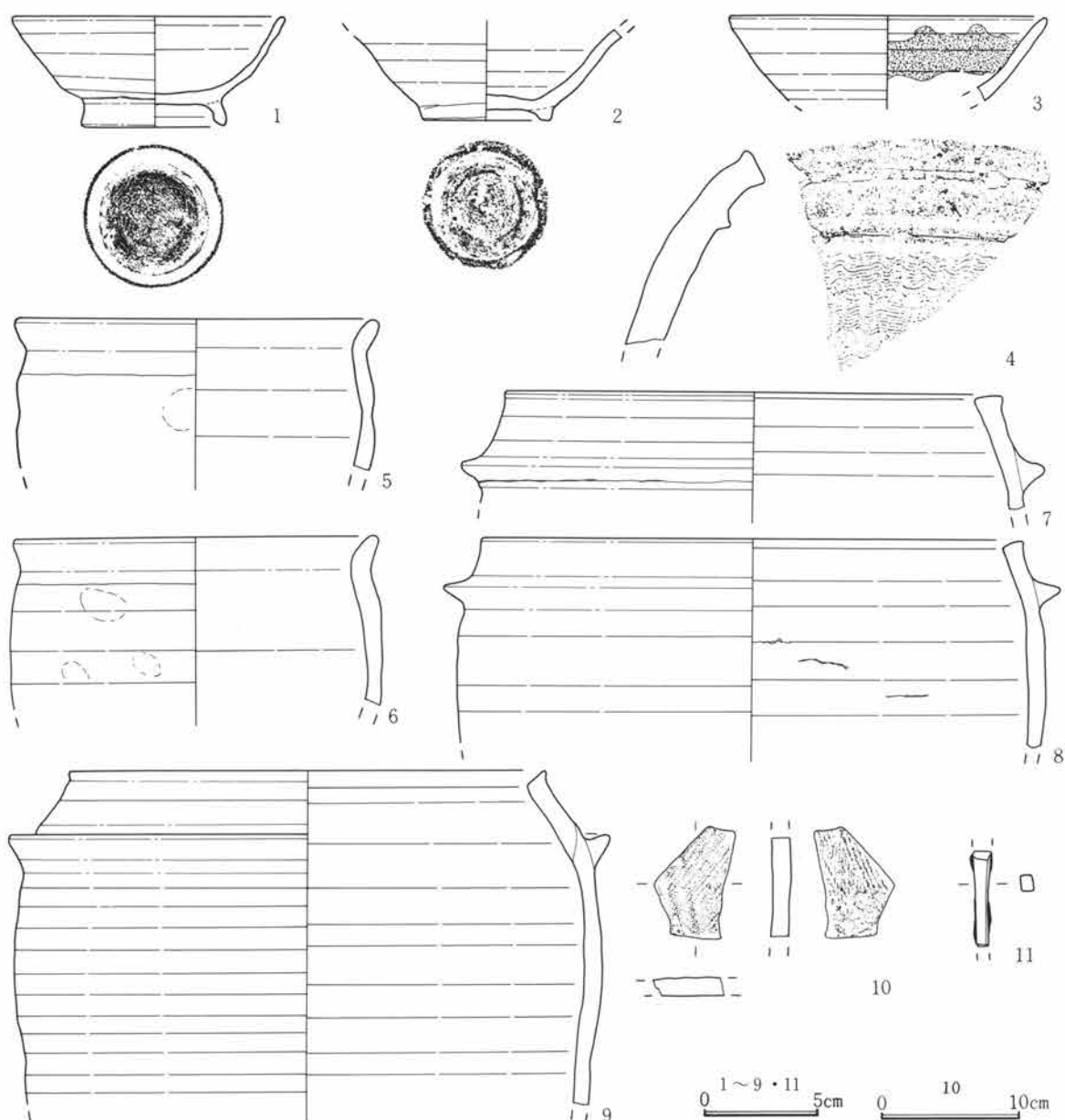
遺構名称	I区第46号住居跡	位置	33~35-I-71~73グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.05m×4.30m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約33cm程



第106図 I区第46号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は、第30・47号住居跡と第182号址と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡が最も新しい時期のものであることは明らかである。平面プランはIV層土中で確認したが、南西コーナー付近に壁の崩落があったためか、この部分がやや張り出したように不整形となっている。床面はほぼ全面にわたって貼床が施されている。この床面の精査によってP₁～P₄の4本のピットを検出した。この中でP₁(径約54cm、深さ約25cm)は、他のピットと比較して平面規模がやや大きく、位置関係から貯蔵穴の可能性が強い。P₂(径約38cm、深さ約24cm)・P₃(径約33cm、深さ約24cm)・P₄(径約33cm、深さ約36cm)の3本のピット

第4章 検出された遺構・遺物

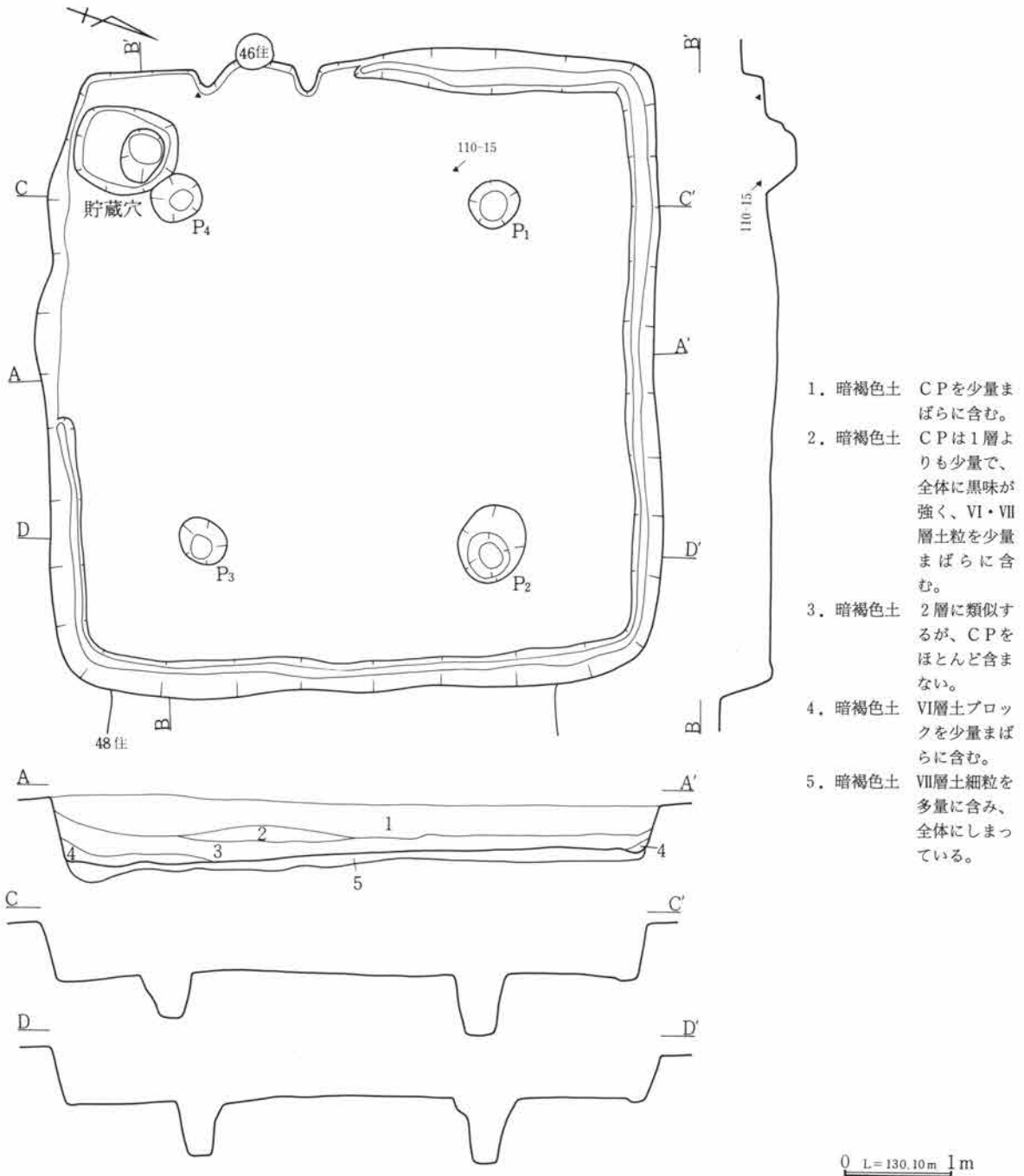


第107図 I区第46号住居跡出土遺物実測図

は、規模的には平均しており、配置にも規則性が認められることから柱穴を想定した。この時点で欠落していたP₃と対角線の位置のピットは、掘り方の調査によって検出したP₈(径約37cm、掘り方底面からの深さ約17cm)と考えられ、結果的にはP₈~P₂間約1.5m、P₂~P₃間約2.2m、P₃~P₄間約1.6m、P₄~P₈間約2.2mという柱穴間距離を持つ柱穴配列を確認することができた。

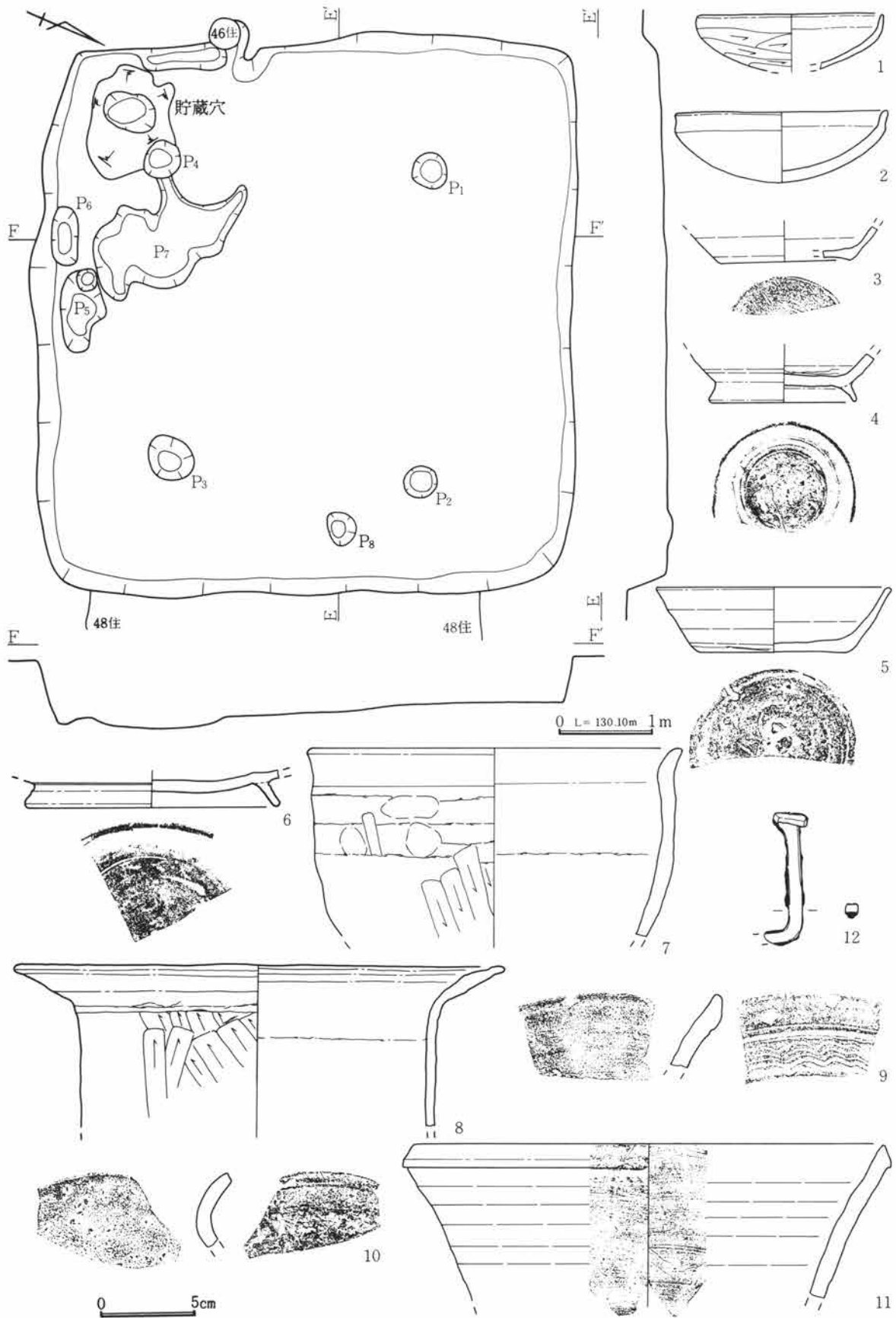
カマドは東壁の南寄りに偏って設置されており、主軸方位は東-0°-北であり住居の主軸方位と一致している。全長約70cm、燃焼部幅約50cmの規模をもつ馬蹄形の平面を呈する、袖が屋内に張り出さないタイプである。袖は両袖共に壁との接合部に角柱状の載石を据え付けて構築されていた他、支脚等は検出されていない。灰面は燃焼部には残存せず、カマド前面から検出されている。

遺構名称	I区第47号住居跡		位置	33~37-I-69~72グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.78m×5.62m	主軸方位	西-20度-南	残存深度	約44cm程

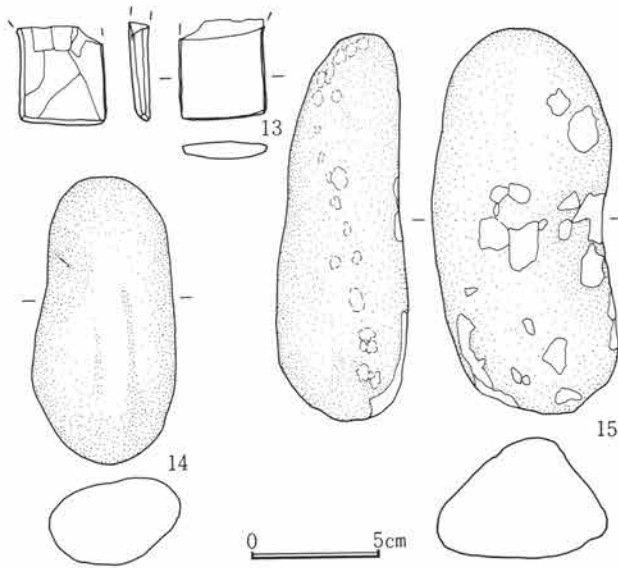


第108図 I区第47号住居跡実測図(1)

(所見) 当住居跡は第46・48号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から判断して第48号住居跡→当住居跡→第46号住居跡と考えられる。第46号住居跡との重複によってカマド部分の残存が不良であった他は、遺構の掘り込みが深かったため、比較的良好な残存状態を示している。床面はほぼ全面にわたって10cm程度の貼床が施されている。壁溝は南東壁中央部から南西壁中央部までの間に検出されていない。規模は下幅約5~15cm、深さ約4cmである。貯蔵穴は南コーナー部に検出した掘り込みで、約95×80cm、深さ約17cmの隅丸長方形の掘り込みの北寄りの位置から、さらに径約38cm、深さ約14cmの規模で円形に掘り込む特異な形態をしている。柱穴は、貼床面の精査によって検出したP₁~P₄(径約47~60cm、深さ約40~60cm、柱穴間距離P₁~P₂間約3.2m、P₂~P₃間約2.6m、P₃~P₄間約3.2m、P₄~P₁間約2.8m)であり、掘り方の調査によ



第109図 I区第47号住居跡(2)・出土遺物実測図(1)



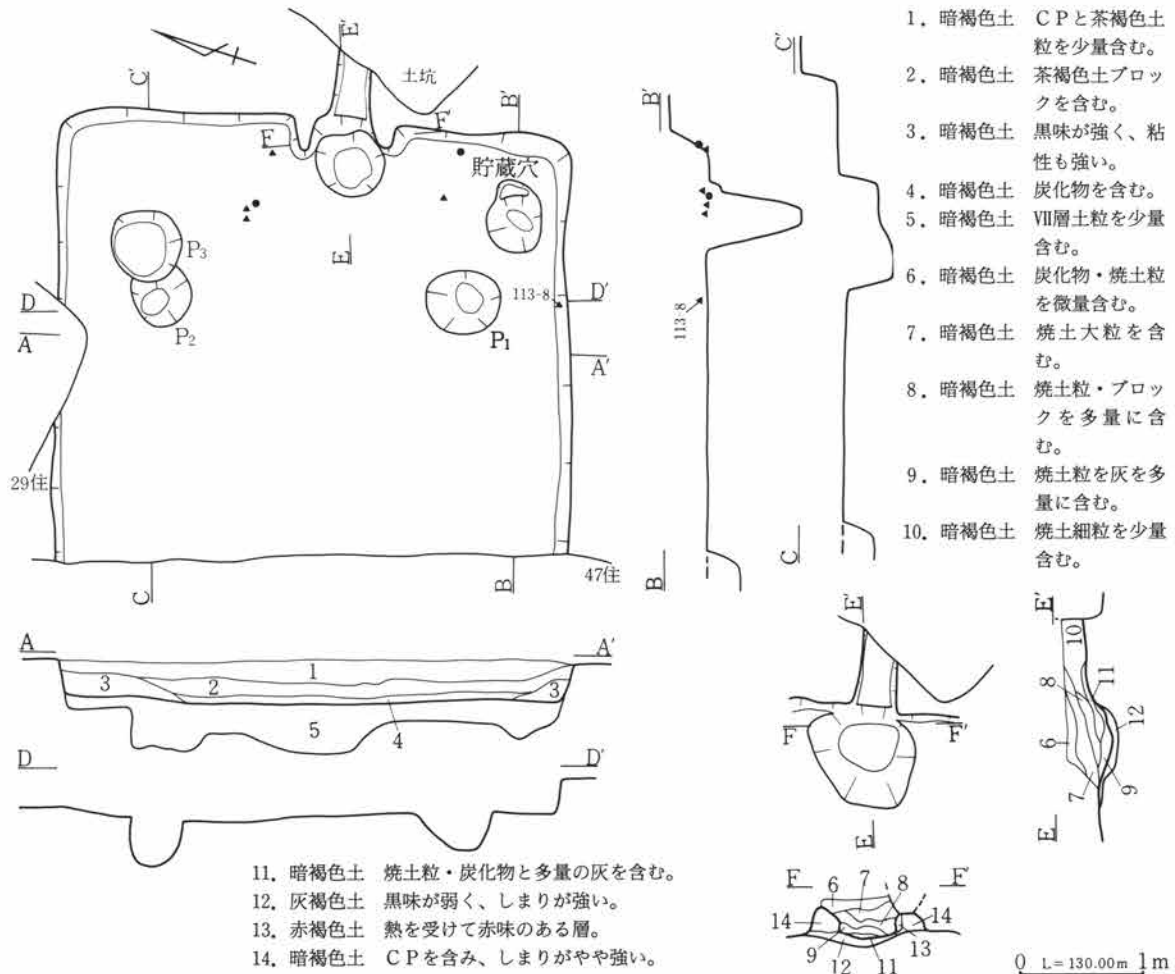
第110図 I区第47号住居跡出土遺物実測図(2)

でも新たな柱穴の配列は検出されていない。

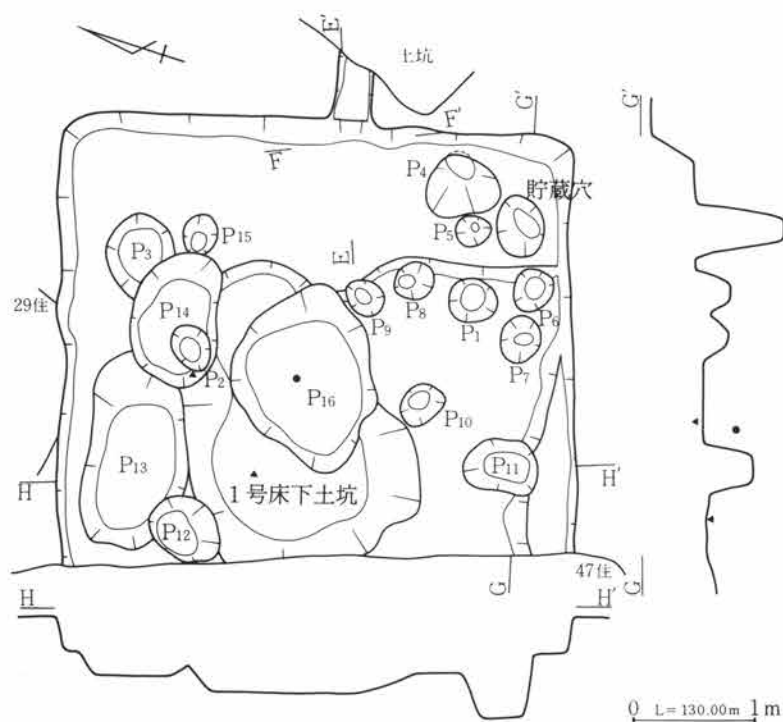
カマドは南西壁の南寄りの位置に設置されていたが、上半は第46号住居跡によって削平され、わずかな部分しか調査できなかった。この残存状態からカマドの軸方位を出すことはできないが、ほぼ住居の軸方位に一致していたものであろう。屋内には袖の痕跡がわずかに残存していたが、本来は煙道が屋外に長く延び、両袖が屋内に張り出す凸字形の平面形を有する、比較的規模の大きなカマドであった可能性が強い。

掲載した遺物は大半が覆土中から出土したもので、総体的出土量はあまり多くない。

遺構名称	I区第48号住居跡	位置	35~37-I-67~70グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×4.05m	主軸方位	東—19度—北	残存深度	約33cm程



第111図 I区第48号住居跡実測図(1)

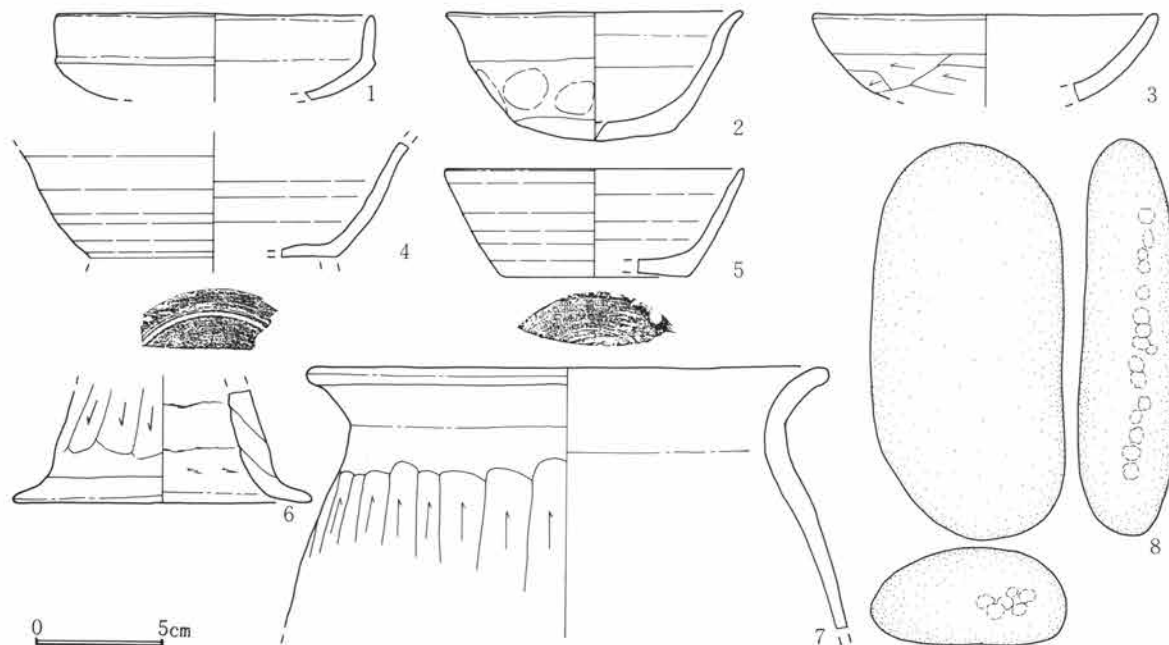


第112図 I区第48号住居跡実測図(2)

(所見) 当住居跡は第29・47号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態から当住居跡→第29・47号住居跡であるのは明らかであり、南西壁は第47号住居跡によって削平され、全く検出できなかった。その他カマド煙道の先端は近世以降の攪乱によって検出できなかった。床面はほぼ全面にわたって約10~15cmの貼床が施されていた。壁溝は床面精査によって検出することはできなかった。柱穴は貼床面で検出した3本のピットの内のP₁(径約51cm、深さ約33cm)とP₂(径約47cm、深さ約40cm)であり、掘り方の調査で検出したP₁₂(径約47cm、掘り方底面からの深さ約

13cm)がこの柱穴配列に属すると考えられ、P₁~P₂間約1.8m、P₂~P₁₂間約2.5mの柱穴間距離を有している。貯蔵穴は東コーナー部に検出した円形の掘り込みで、径約45cm、深さ約75cmの規模を有しており、東側に弱い段が認められた。掘り方の調査では多数の小ピットを検出した他、住居中央部に1号床下土坑と命名した約25cmの深さを有する掘り込みを検出している。

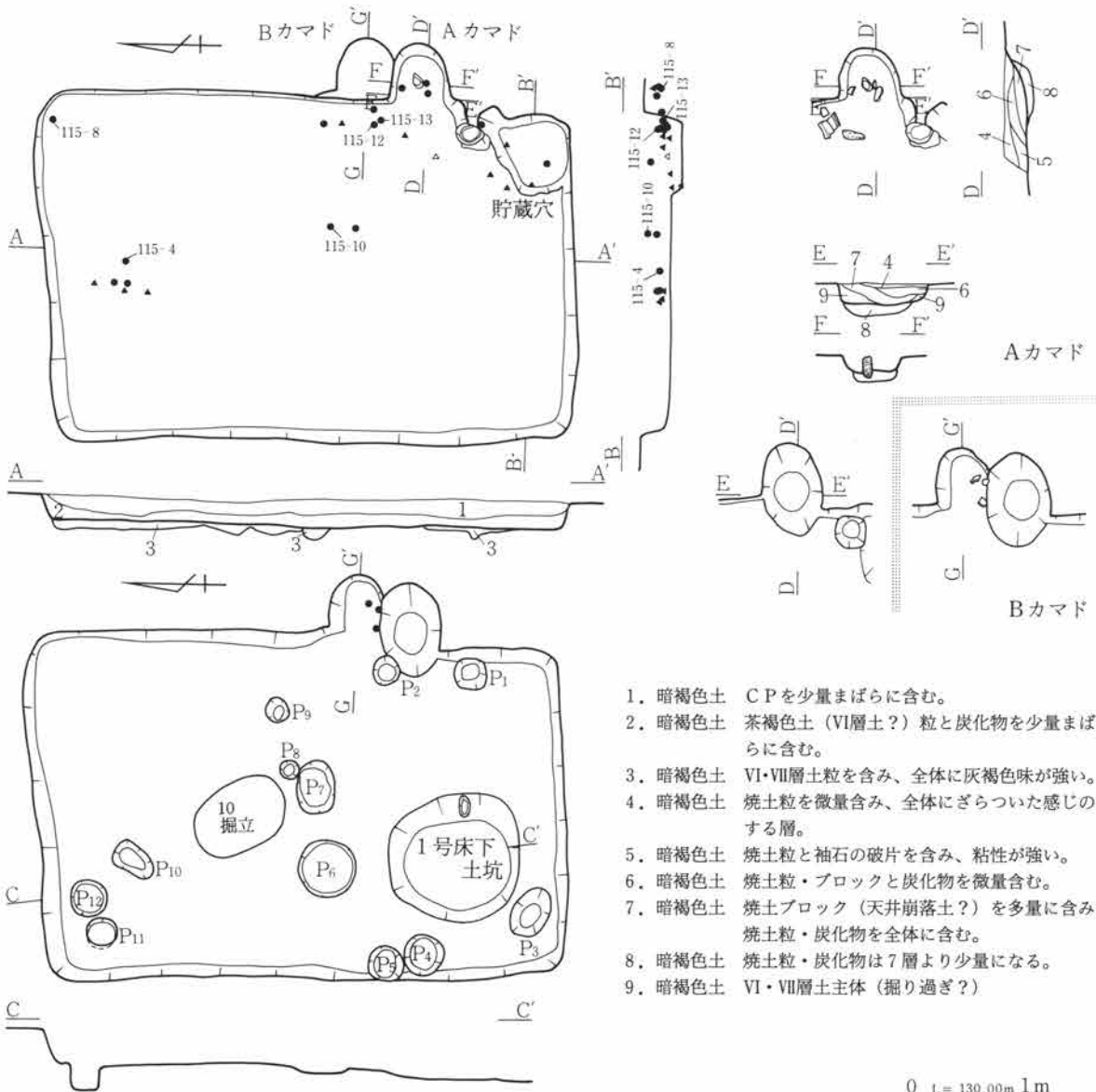
カマドは北東壁のほぼ中央に設置されており、主軸方位は東-14°-北である。袖は35cm程屋内に張り出して残存していたが、本来はさらに長く張り出す凸字形を呈するタイプと考えられる。



第113図 I区第48号住居跡出土遺物実測図

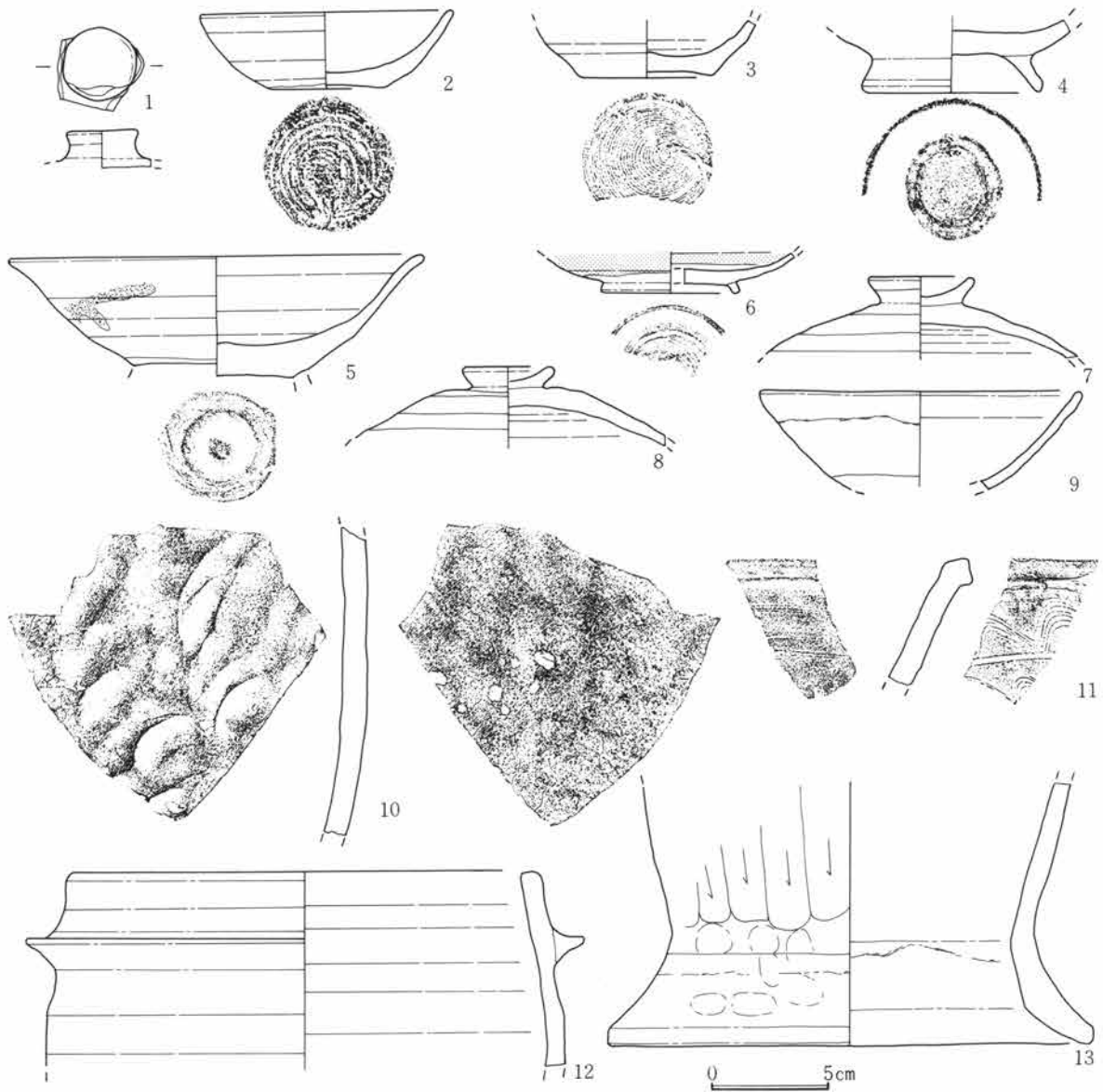
遺構名称	I区第49号住居跡	位置	29～32—I—69・70グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.92m×4.48m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約23cm程

(所見) 当住居跡は第153号住居跡と第10号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡が最も新しい時期のものとして判断した。壁は北東コーナー部がやや突出する傾向があり、不整である。床面は部分的に5～6cm程度の貼床が施されている。壁溝・柱穴は掘り方の調査によっても検出されず、当初から掘削されなかったものと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部で、約70×60cm、深さ約10cmの隅丸長形状を呈している。カマドは新旧2つのものが検出されている。いずれも東壁の南寄りに設置されたもので、残存状態から新段階のものをAカマド、旧段階のものをBカマドとして記述を進める。Aカマドは全長約50cm、燃烧部幅約40cmの馬蹄形を呈するもので、燃烧部中央左寄りの位置に面取りされた載石を支脚として据え付けていた。BカマドはAカマドによって壊されており、残存部の規模は全長約55cmであり、平面形はAカマドと同様である。このBカマド内からは支脚等の構築材は検出されていない。



第114図 I区第49号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



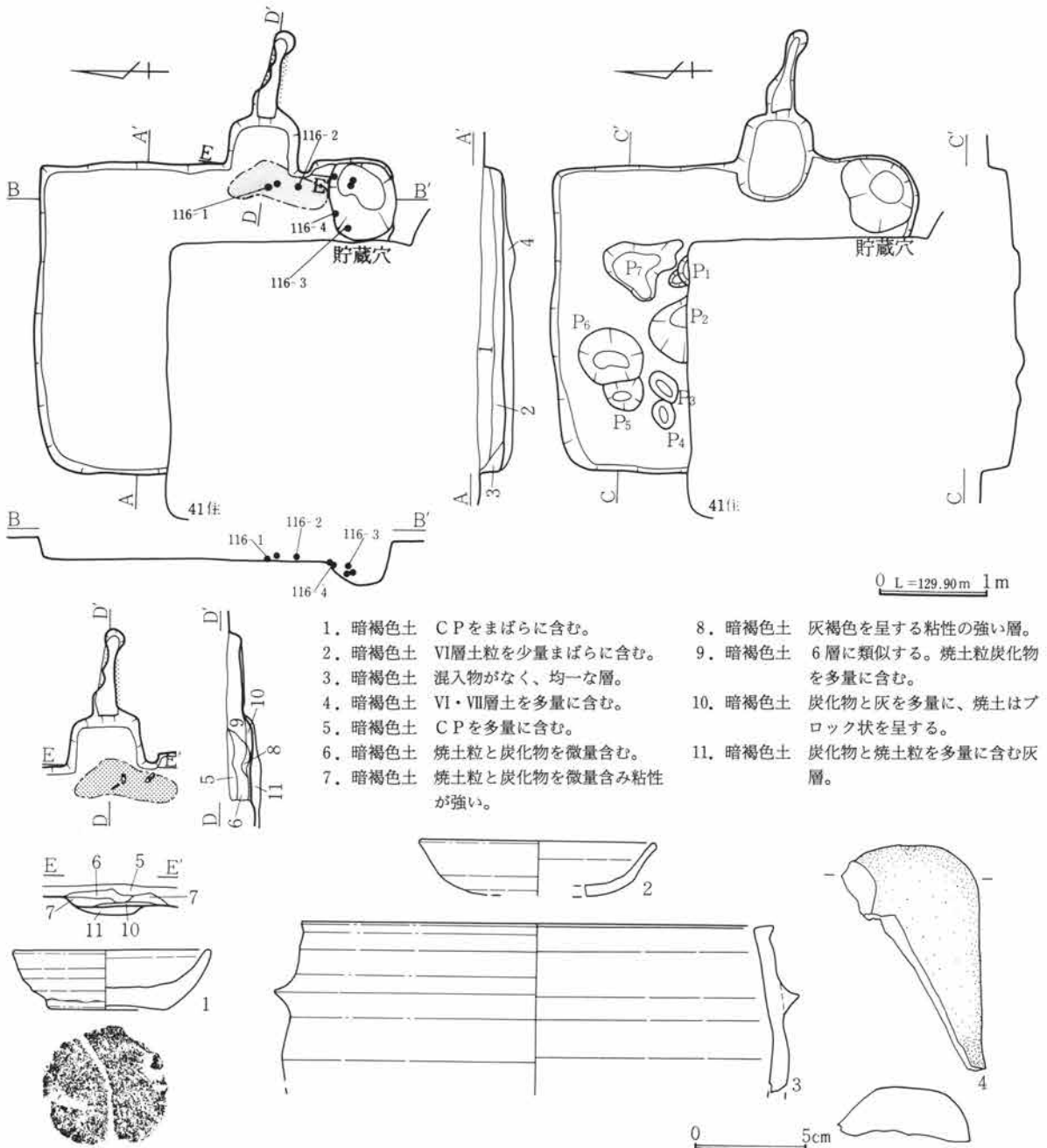
第115図 I区第49号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第50号住居跡		位置	30～32-I-65～62グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.80m×3.20m	主軸方位	東-4度-南	残存深度	約23cm程

(所見) 当住居跡は第41号住居跡との重複によって、南西側の約 $\frac{1}{3}$ を失っている。床面は全面にわたって7cm程の厚さに貼床が施されている。この床面の精査及び掘り方の調査で壁溝・柱穴は検出されておらず、当初から掘削されなかったものと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており、不整の楕円形を呈している。規模は約70×60cm、深さ約21cmである。

カマドは東壁やや南寄りに設置されており、主軸方位は東-4°-北で住居の主軸方位と一致している。平面形は凸字形を呈し、規模は全長約130cm、燃焼部奥行き約42cm、燃焼部幅約52cm、煙道長約78cm、煙道幅約18cmである。袖は屋内に張り出した痕跡はなく、袖石等の構築材も残存していない。また、燃焼部には掘り方段階でも支脚の据え方は検出されず、設置されていなかった可能性が強い。煙道は燃焼部から一段上がった位置から南に振れてトンネル状に掘削されたものと思われ、天井部の一部が残存していた。

第2節 検出された遺構・遺物



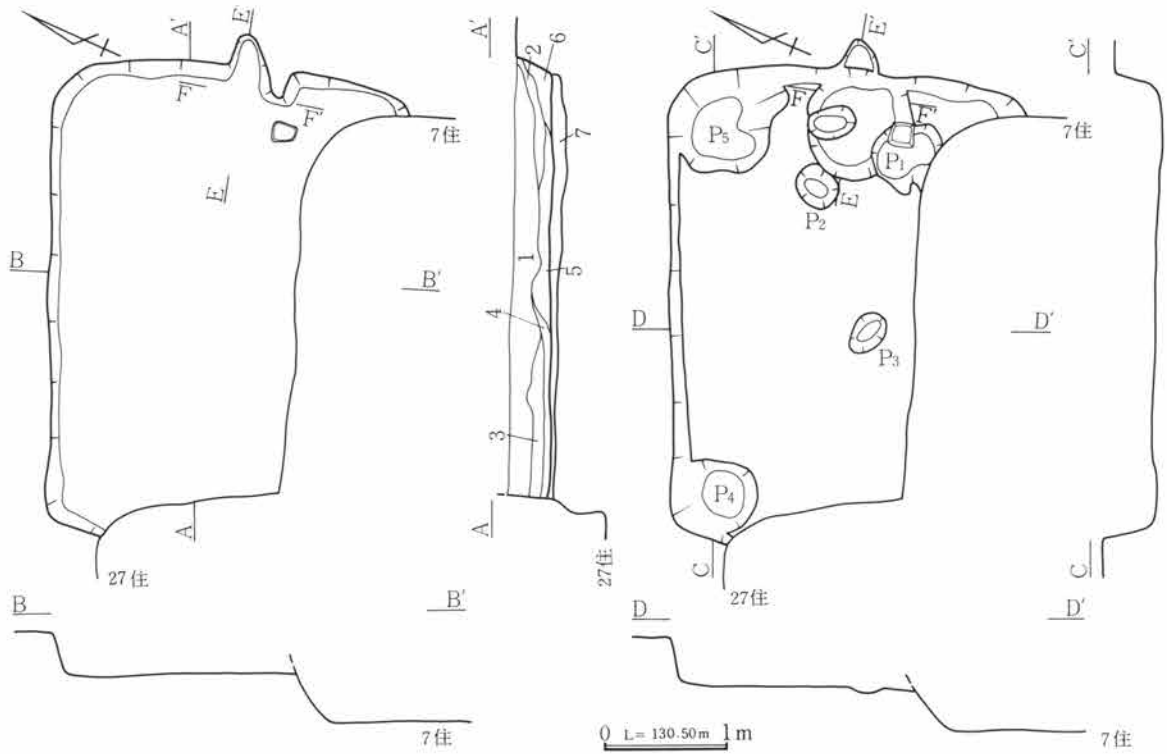
第116図 I区第50号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第51号住居跡	位置	47~49-I-74~76グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.72m×2.82m	主軸方位	東-20度-北	残存深度	約30cm程

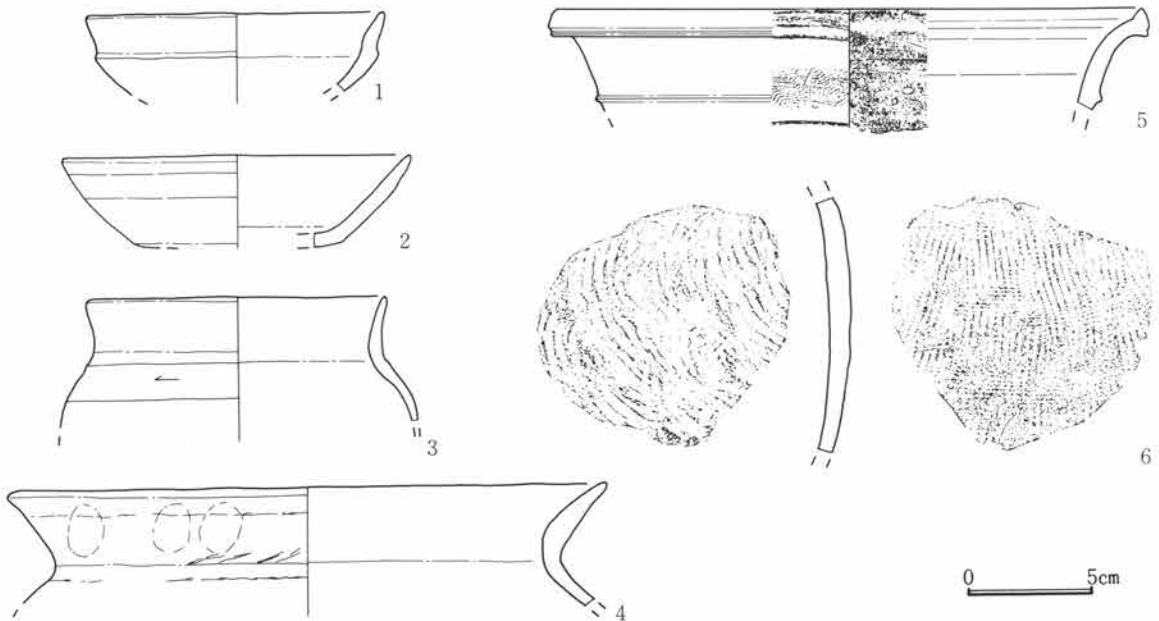
(所見) 当住居跡は第7・27号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態から当住居跡が最も古い時期のものと考えられる。確認はIV層土中で行った結果、他遺構と重複していない北側部分については明瞭にプランを捉えることができた。検出部分において壁の崩落はみられず、比較的整形な隅丸長方形を呈している。床面は全面にわたって約5~10cmの厚さに貼床が施されている。この段階では壁溝・柱穴・貯蔵穴はいずれも検出されなかった。掘り方の調査では、北及び西コーナー部にごく浅い掘り込みを検出した他、中央部から小ピットを2本検出したが、どちらも柱穴とは考えられない。

第4章 検出された遺構・遺物

カマドは北東壁のほぼ中央に設置されており、主軸方位は東 -20° 北で住居の主軸方位と一致している。この段階ではカマドは完全に壊された状態であり、わずかに右袖の痕跡として壁から50cm程屋内に角柱状の截石が残存していた。左袖は掘り方の段階で袖石の据え方を確認している。以上のことから本来は袖が屋内に張り出し、煙道が長く屋外に延びる凸字形の平面プランを有するカマドであったものと考えられる。

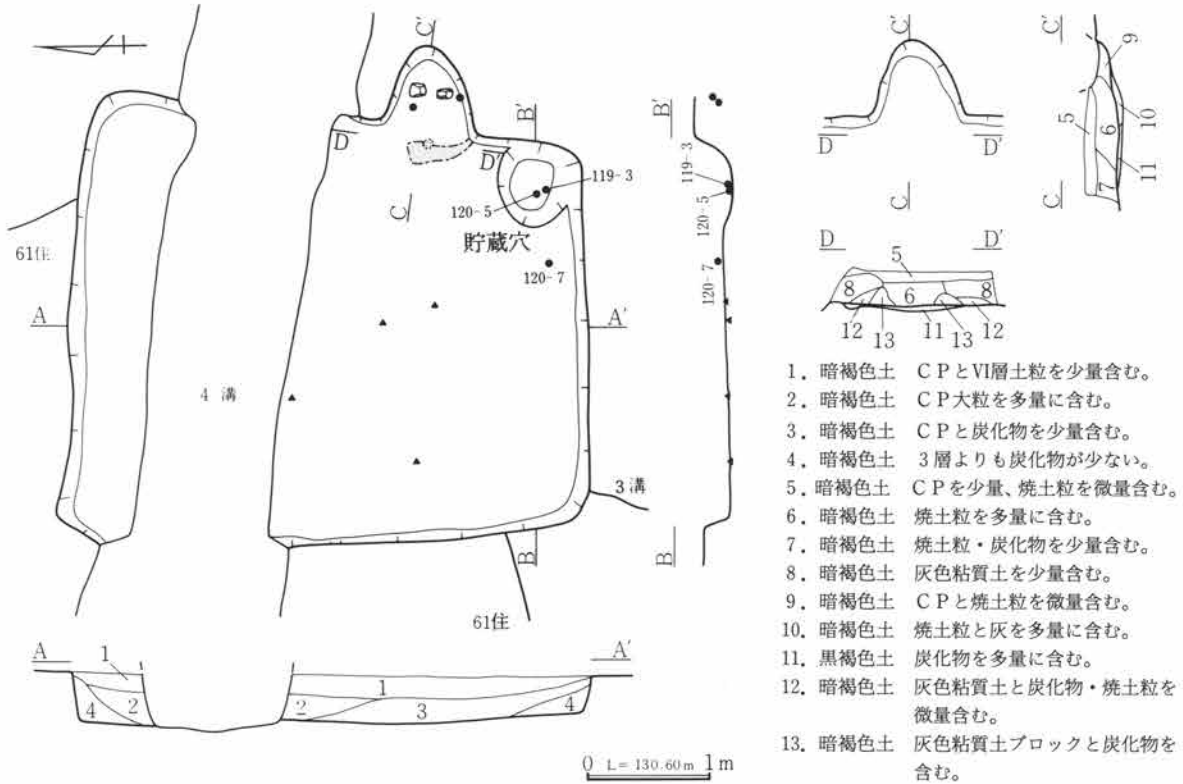


- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| 1. 暗褐色土 CPとVI層土粒?を多量に含む。 | 5. 黒褐色土 茶褐色土粒を少量含む。 |
| 2. 暗褐色土 茶褐色粘質土ブロック(VI層土?)を多量に含む。 | 6. 黒褐色土 茶褐色土(VI層土、壁の崩落?)を多量に含む。 |
| 3. 暗褐色土 混入物はごく少量で、黒味・しまりが強い。 | 7. 暗褐色土 茶褐色粒を多量に含み、粘性が強い。 |
| 4. 暗褐色土 黒味が強く、茶褐色粘質土ブロックを少量含む。 | |



第117図 I区第51号住居跡・出土遺物実測図

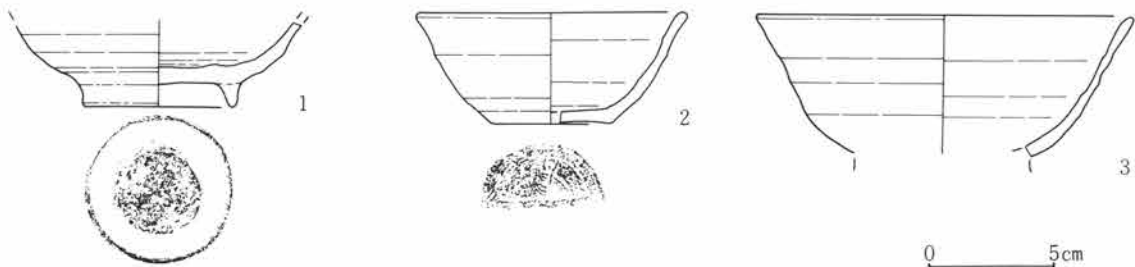
遺構名称	I区第52号住居跡	位置	41~43-I-82・83グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	3.36m×4.10m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約36cm程



第118図 I区第52号住居跡実測図

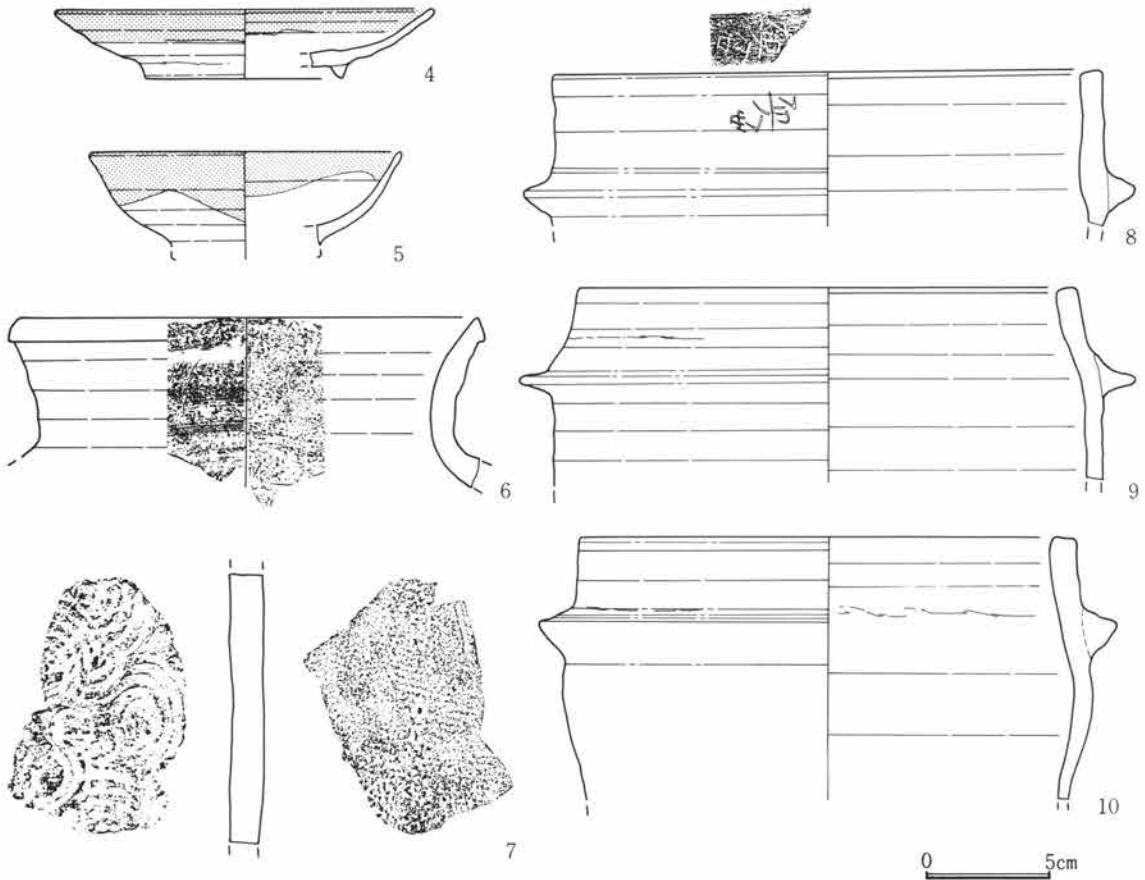
(所見) 当住居跡は第61号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第61号住居跡という新旧関係である。また、当住居跡の北側約1/4は、中世以降の第4号溝状遺構との重複によって失われている。平面プランの確認は、IV層土中で行い明瞭に捉えることができた他、第4号溝状遺構の壁面で当住居跡の掘り込みを観察することができた。床面には貼床は全く行われておらず、この面の精査によって壁溝・柱穴共に検出できなかったことは、当住居跡にはそれらが掘削されなかったことを示している。貯蔵穴は南東コーナー部に検出したもので、径約60cm、深さ約9cmの円形を呈し、底面からは第119図3の須恵器壺と第120図5の灰釉陶器壺が出土している。

カマドは東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-2°-南である。平面形は砲弾形を呈し、袖が屋内に張り出さないタイプと考えられる。残存部の全長は約70cm、燃焼部幅約60cmで、焚口に当たる部分にわずかに灰面がみられた。燃焼部奥には角柱状の截石を横並びに据え付け支脚としていた。



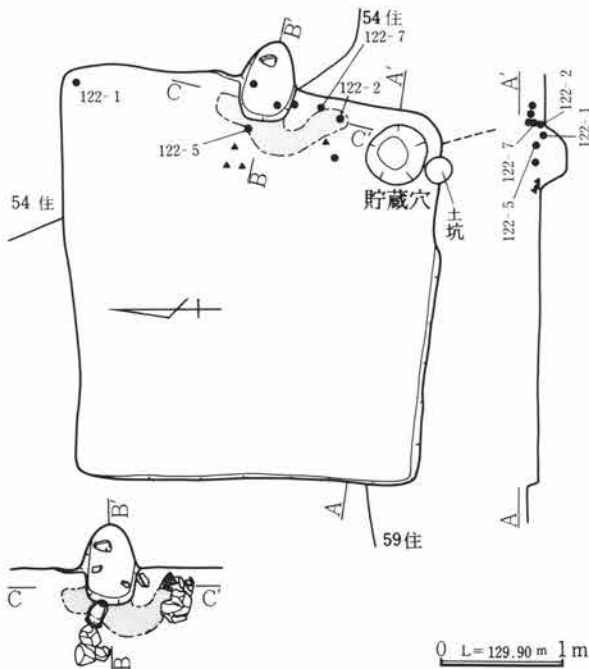
第119図 I区第52号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



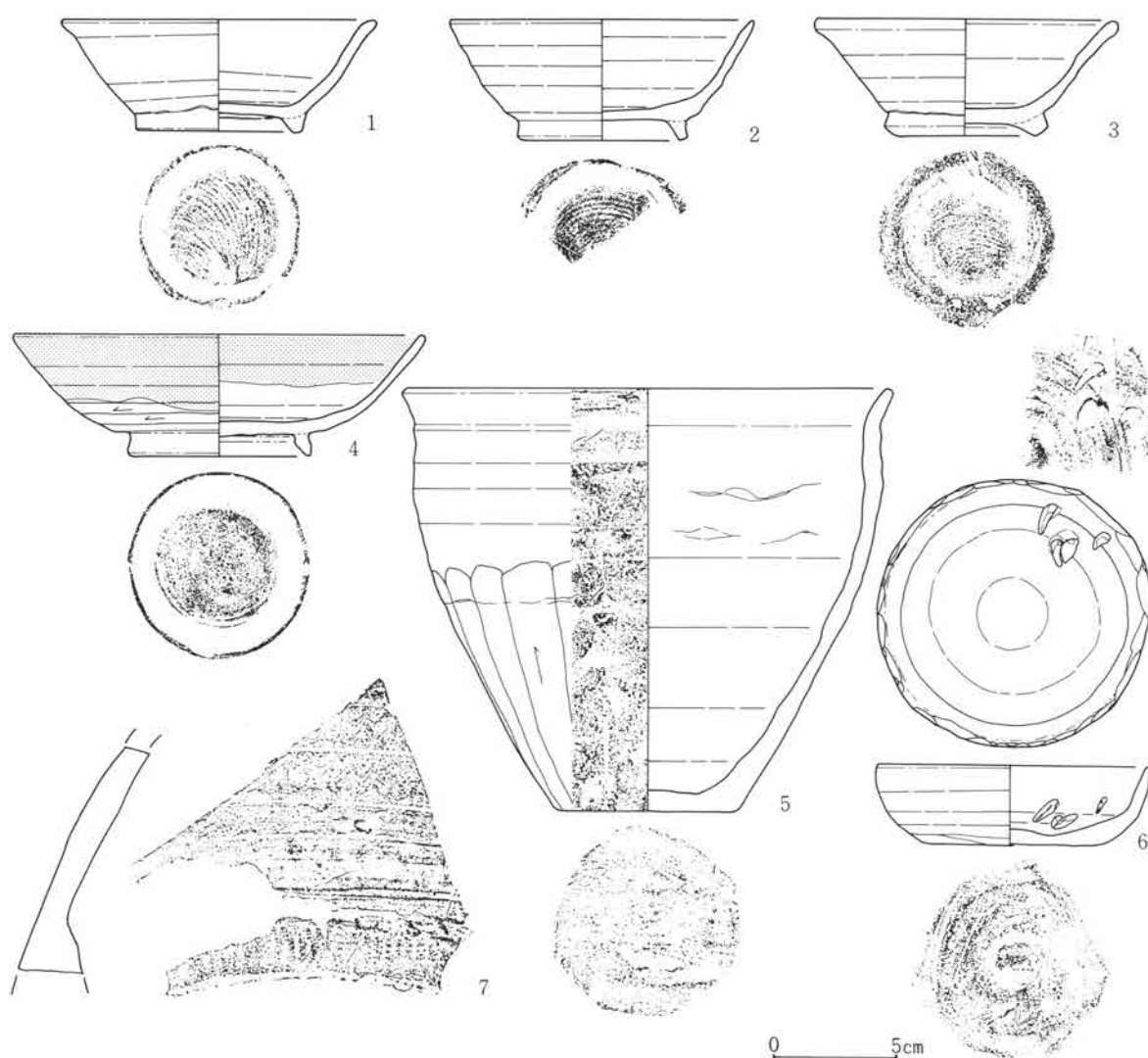
第120図 I区第52号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第53号住居跡		位置	36・37-I-64~66グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.20m × 1m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約7cm程



第121図 I区第53号住居跡実測図

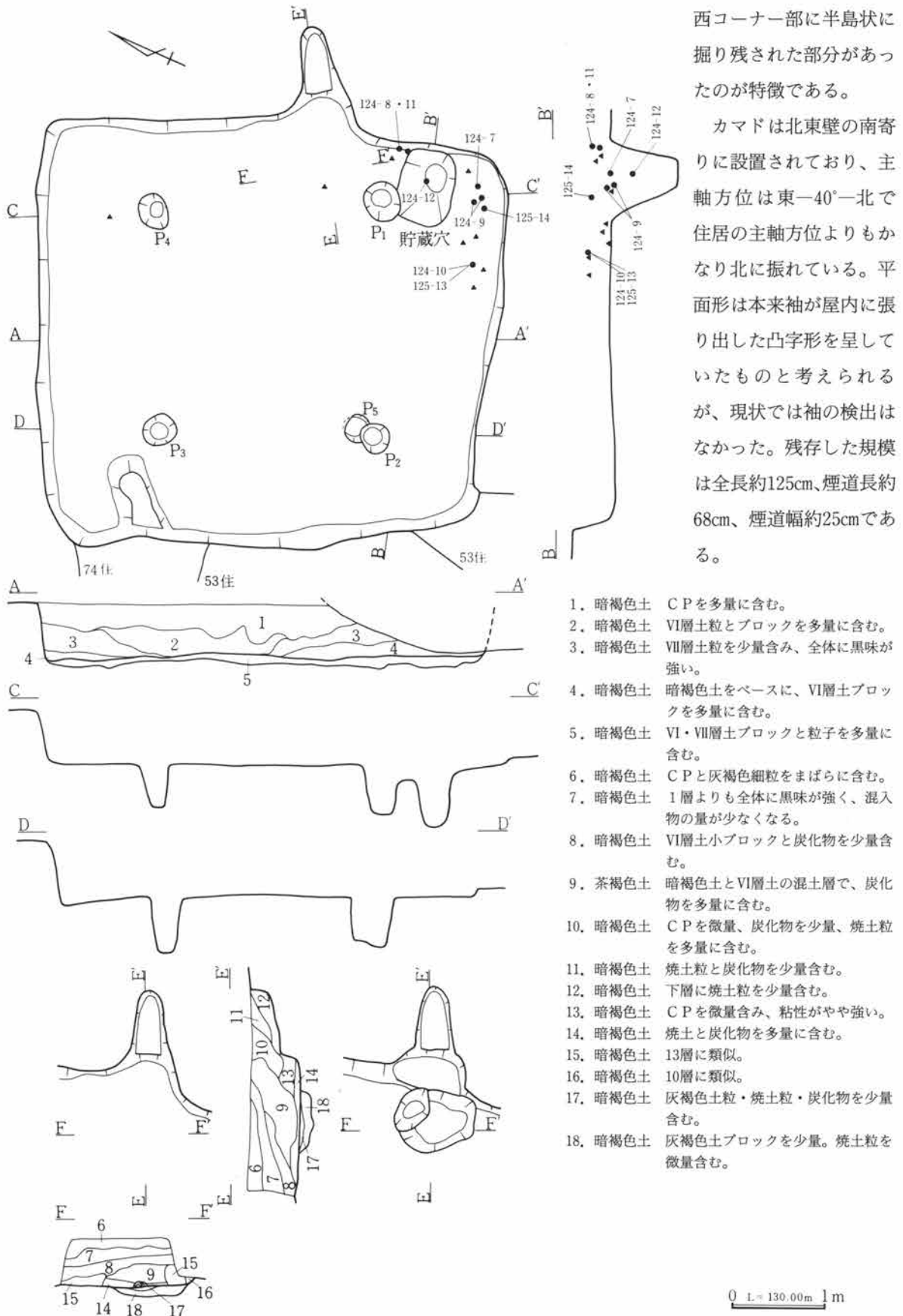
(所見) 当住居跡は第54・59号住居跡と重複しているが、出土遺物の比較及び遺構の検出状態等から判断して、当住居跡が最も新しい時期のものである。遺構の掘り込みがやや浅いこともあって、遺構の残存状態は不良である。床面に貼床はおこなわれておらず、この面で壁溝・柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南東コーナー部で、径約50cm、深さ約23cmの円形を呈している。カマドは、灰面等のあり方から東壁のほぼ中央に設置されていたものと判断したが、痕跡だけの残存であり平面形も明瞭には捉えることはできなかった。また、このカマドと推定される部分からは自然礫の他、第122図5のロクロ甕が出土している。第122図6・7の2点は当住居跡の主体的出土遺物と時期的に齟齬があり、重複している第54・59号住居跡のいずれかの遺物である可能性が高い。



第122図 I区第53号住居跡出土遺物実測図

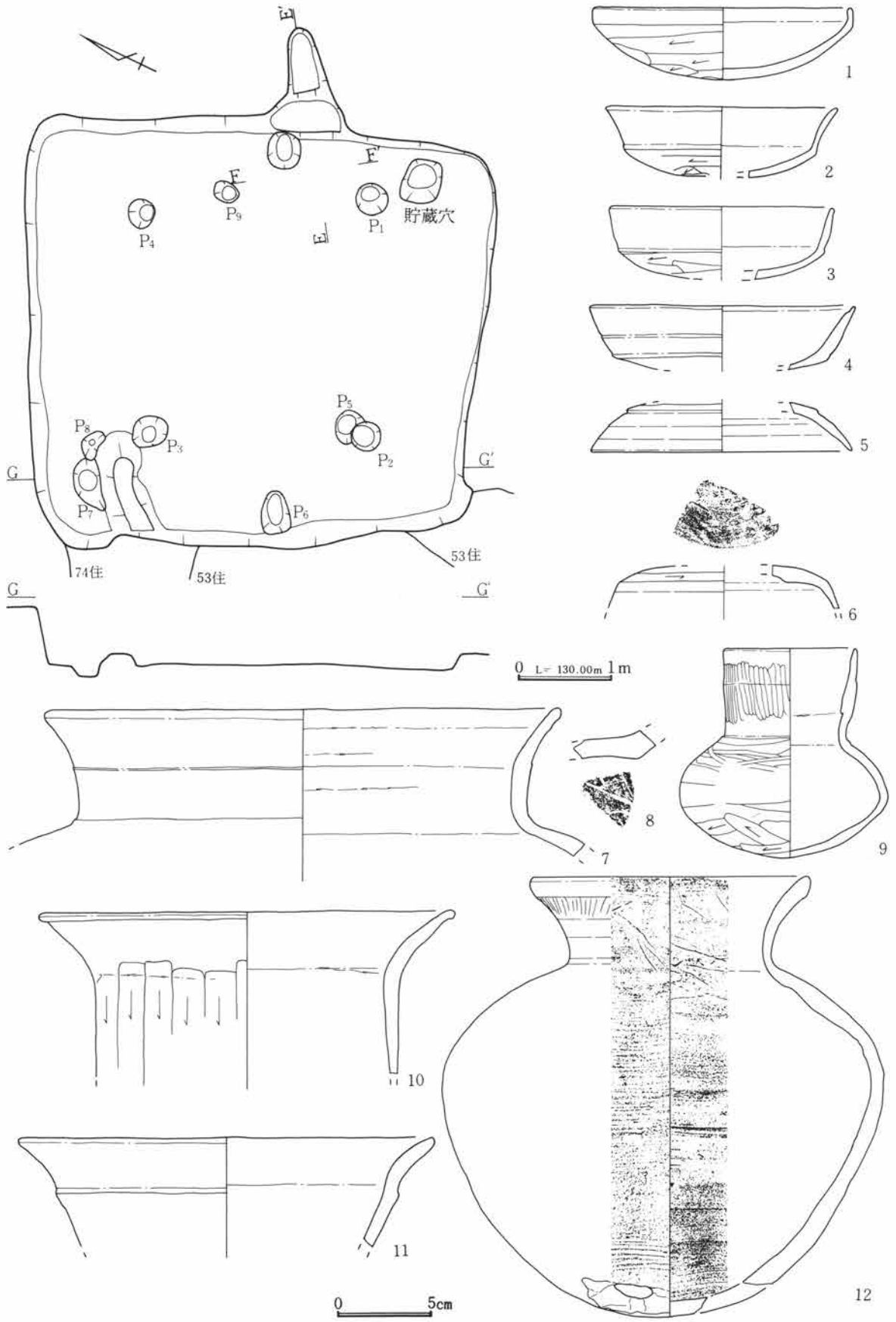
遺構名称	I区第54号住居跡		位置	36~39—I-62~65グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.45m×4.82m	主軸方位	東-27度-北	残存深度	約53cm程

(所見) 当住居跡は第34・53号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第34号住居跡→当住居跡→第53号住居跡という新旧関係と考えられる。床面はほぼ全面にわたって貼床が施されており、平坦であるが顕著な硬化面は捉えられていない。壁は南側が乱を受けていたこともあって、南側ほど残存状態は悪い。壁溝は、床面の精査及び掘り方の調査で検出することができなかったことから、当初から掘削されていなかったものと考えられる。柱穴は P_1 ~ P_4 (径約33~38cm、深さ約44~58cm、柱穴間距離 P_1 ~ P_2 間約2.5m、 P_2 ~ P_3 間約2.3m、 P_3 ~ P_4 間約2.3m、 P_4 ~ P_1 間約2.4m)の4本である。 P_2 と重複している P_5 (径約30cm、深さ約45cm)は、規模的には他の柱穴と遜色ないが、掘り方の調査によっても、この P_5 と組み合わせになるような柱穴配列は検出されなかった。つまり、当住居跡においては上記の P_1 ~ P_4 の柱穴配列が唯一のものである。貯蔵穴は東コーナー部のカマド寄りに偏在して検出された。規模は約80×58cm、深さ約62cmで、隅丸長方形を呈している。遺物は、特に貯蔵穴付近から集中的に出土しており、第124図12の須恵器甕が貯蔵穴上面から西に口縁を傾けて出土したのが特徴的である。掘り方はほぼ全面にわたって平坦に掘削されていたが、



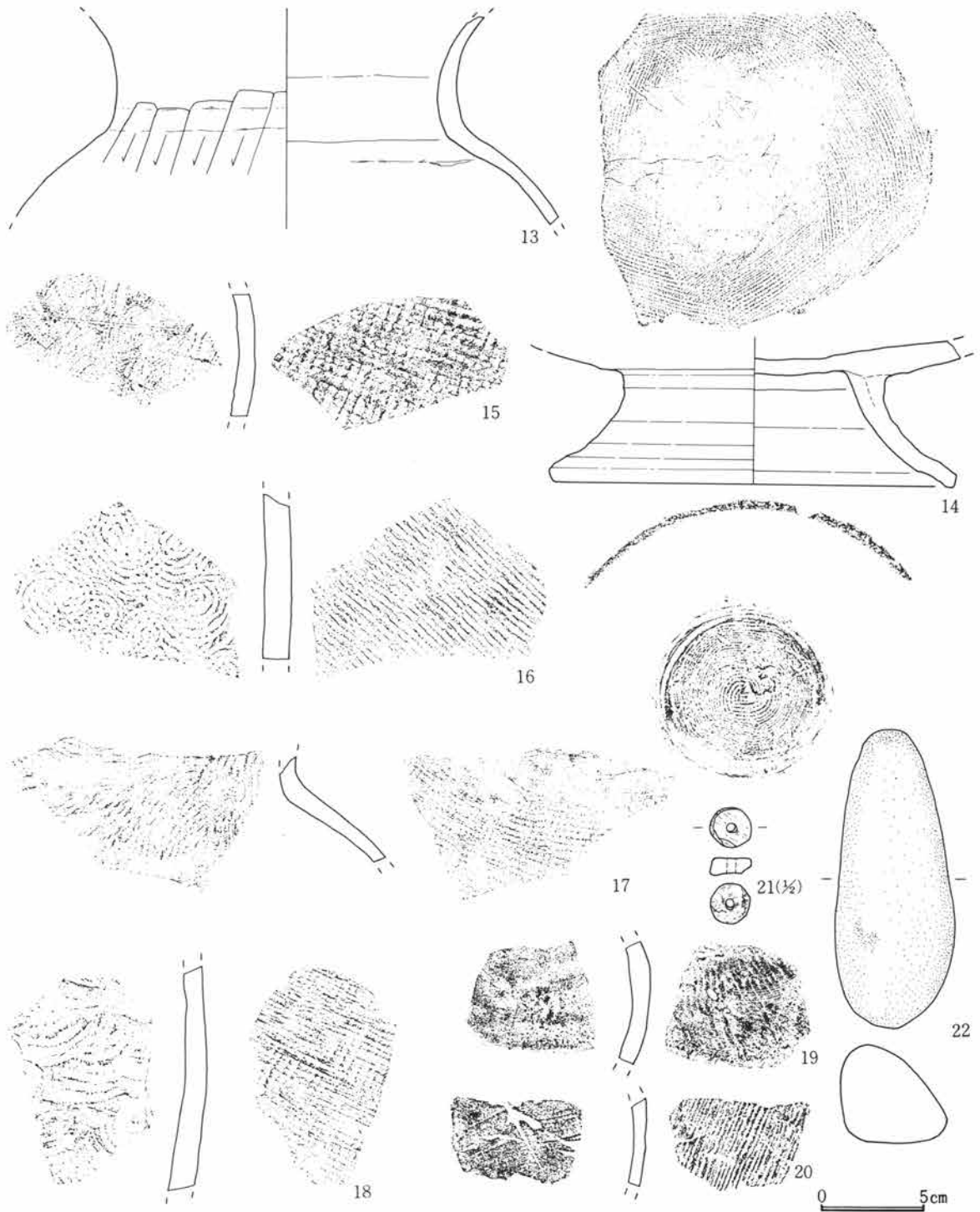
第123図 I区第54号住居跡実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



第124図 I区第54号住居跡(2)・出土遺物実測図(1)

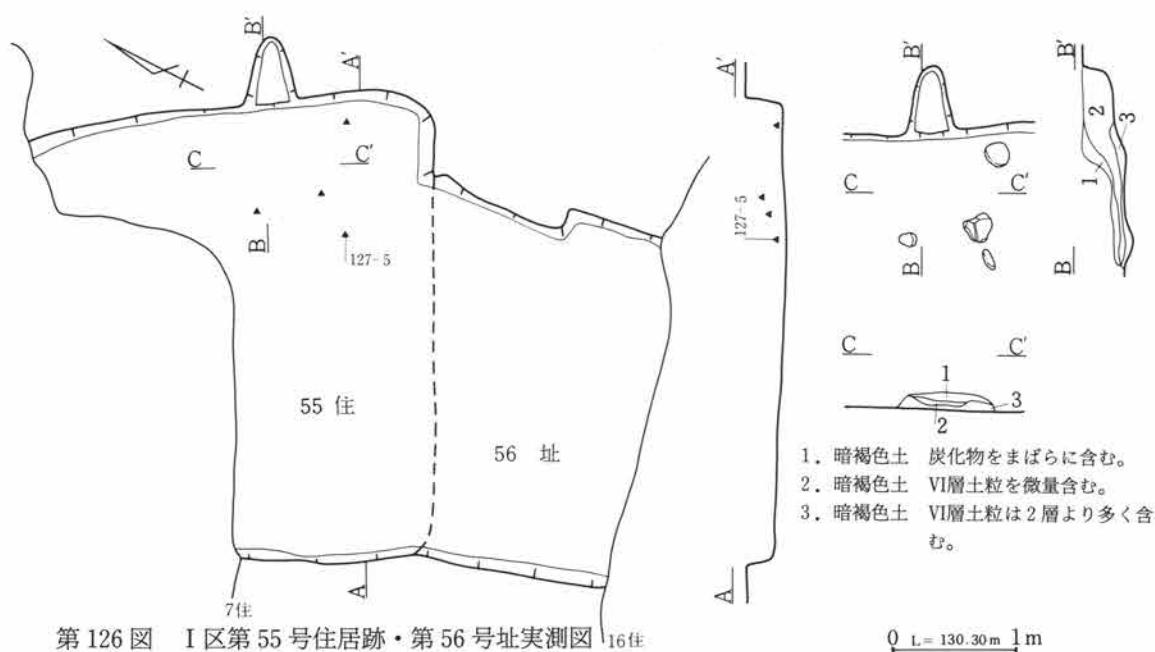
第4章 検出された遺構・遺物



第125図 I区第54号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第55号住居跡	位置	44~46-I-73~75グリッド内				
平面形態	—	規模	3.72m × —m	主軸方位	東—30度—北	残存深度	約28cm程

遺構名称	I区第56号址	位置	43~45-I-73・74グリッド内				
平面形態	—	規模	—m × 2.90m	主軸方位	—	残存深度	約12cm程

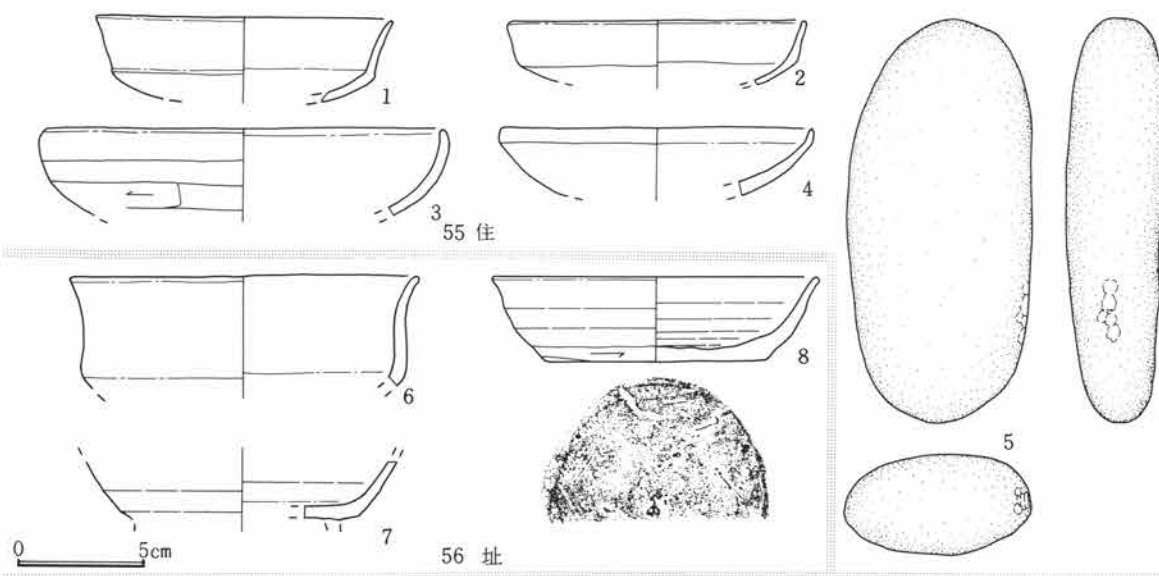


第126図 I区第55号住居跡・第56号址実測図

(所見) 第55号住居跡と第56号址は、相互に重複すると共に第7・16号住居跡とそれぞれ重複している。これらの新旧関係は遺構の残存状態や出土遺物の比較等から、第55号住居跡→第7号住居跡、第16号住居跡→第56号址であり、第55号住居跡と第56号址との新旧関係は出土遺物の比較から第55住居跡→第56号址と考えられる。第55号住居跡は壁の大半と床面の約半を重複によって失っているが、残存床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴いずれも検出されていない。当住居跡には掘り方は認められないので、これらの施設は当初から掘削されなかったものであろう。

カマドは北東壁の南寄りに設置されているが、屋内側は全く残存せず、構造は不明である。わずかに残存した煙道から主軸方位をみると、東-30°-北であり、住居の主軸方位と一致している。煙道の規模は長さ約52cm、下幅約25cmである。

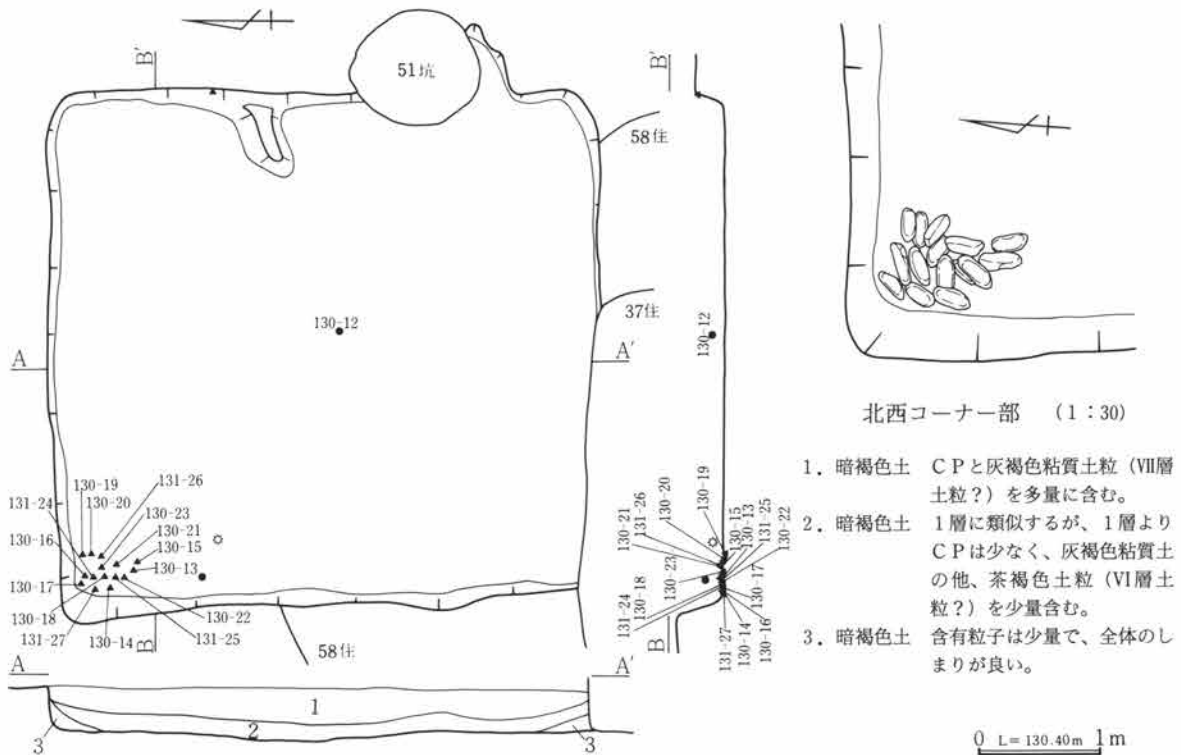
第56号址は東壁がクランク状に屈曲しており、カマド等の施設もなく性格不明の遺構である。



第127図 I区第55号住居跡・第56号址遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

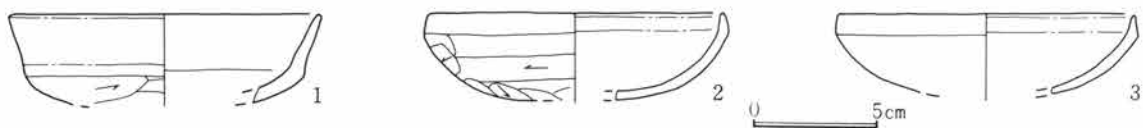
遺構名称	I区第57号住居跡		位置	33~36-I-81~83グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.05m×4.35m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約35cm程



第128図 I区第57号住居跡実測図

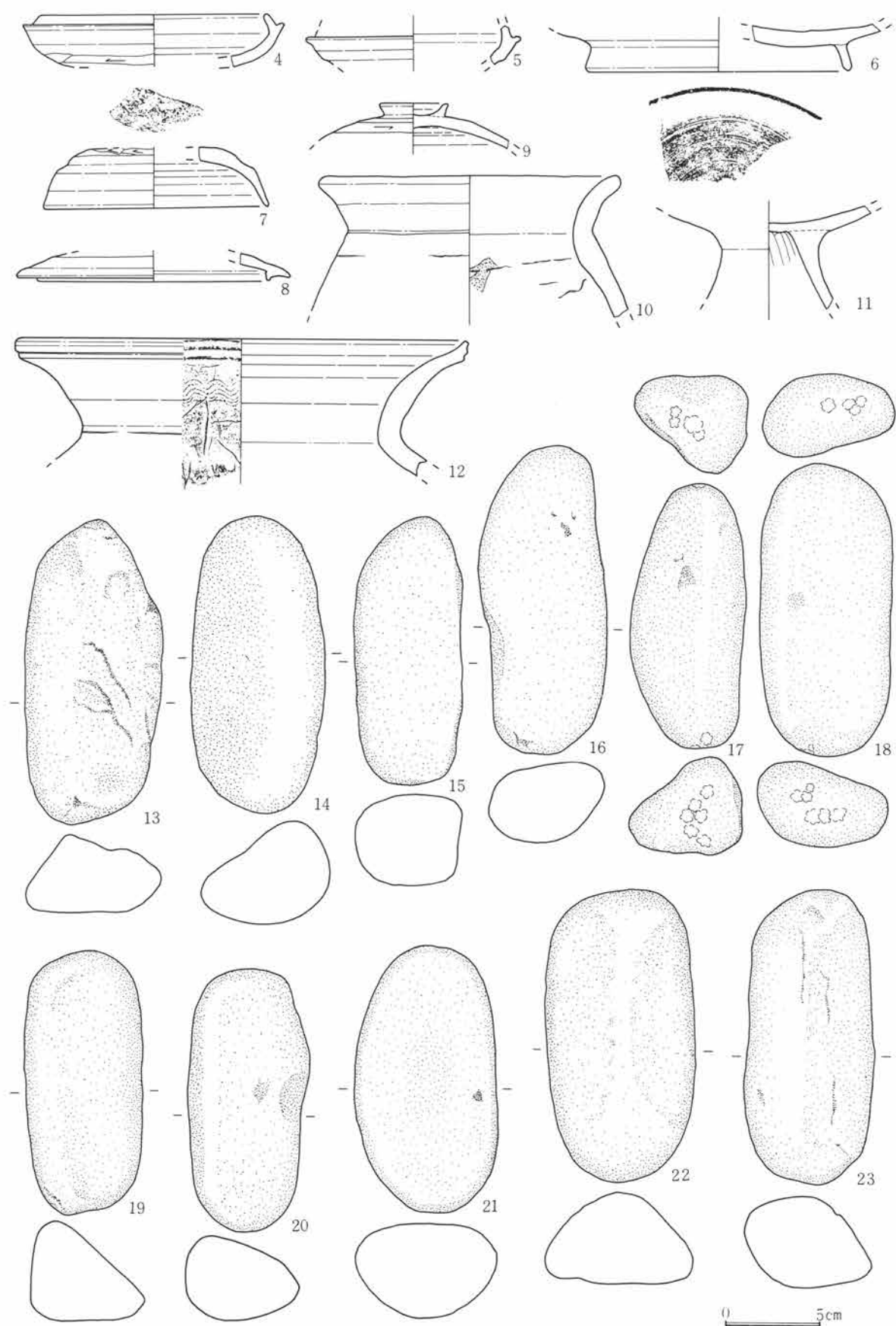
(所見) 当住居跡は第37・58号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態や出土遺物の比較等から第58号住居跡→当住居跡→第37号住居跡と考えられる。また、カマド部分は第51号土坑によって大半が失われている。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、他遺構との重複の認められない北側部分に関しては、特に明瞭にプランを捉えることができた。住居覆土は浅間C軽石等の含有量から基本的に3層に分層することができたが、その堆積状態に不自然さは認められなかった。壁は第37号住居跡との重複によって失われた南壁の一部を除いて、全周検出することができ、崩落によるプランの崩れもほとんど認められなかった。東壁の中央やや北寄りの位置に半島状に70cm程IV~VI層土が掘り残されていたが、カマドからも離れており袖の残存とは考えられない。床面はVI層土中に構築され、貼床は施されていないので、比較的強く締まっている。この床面の精査によって、壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。つまり、当住居跡にはこれらの施設が掘削されなかったことを示している。カマドは東壁の南寄りに偏って設置されており、主軸方位はほぼ住居の主軸方位と一致するものと考えられる。平面形は凸字形を呈するものと考えられ、袖は屋内に張り出さないタイプである可能性が強い。残存している規模は、全長約65cmであり、燃烧部の幅等は計測することができない。

遺物で特徴的なのは、第130・131図に示したような礫が、北西コーナー部床面にまとまって出土したことである。



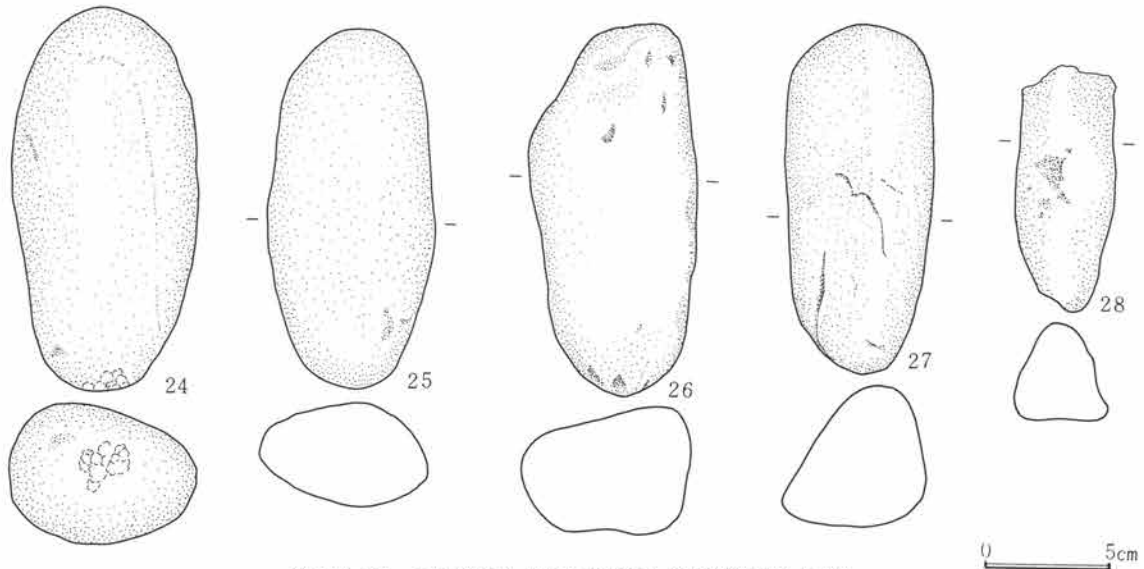
第129図 I区第57号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



第130図 I区第57号住居跡出土遺物実測図(2)

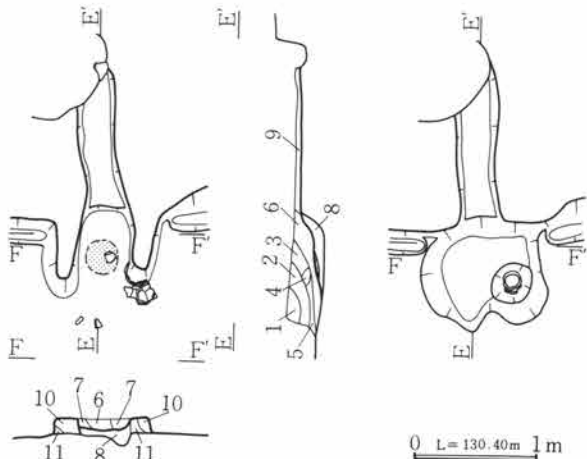
第4章 検出された遺構・遺物



第131図 I区第57号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第58号住居跡		位置	32~35—I—81~84グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	5.88m×5.32m	主軸方位	東-25度-北	残存深度	約44cm程

(所見) 当住居跡は第37・57・151号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態等から第151号住居跡→当住居跡→第57号住居跡→第37号住居跡と判断した。また、当住居跡は調査区の西端に位置しているため、西コーナー部が調査区外にかかり、全体を調査することができなかった。確認は基本的にはIV層土中で行ったが、完全に平面プランを捉えたのは、第37・57号住居跡の調査が終了した段階である。住居の掘り込みが深いため、他の遺構との重複によって壁の一部が不明になることはなかった。床面は、ほぼ全面にわたって5cm程の厚さにVII層土を主体とする貼床が施されていた。壁溝は、カマド部と北コーナー部と南東壁の南コーナー寄りの一部が途切れていた。他は、全周していたものと考えられる。規模は下幅約5~15cm、深さ約4~7cmである。柱穴はP₁~P₄(径約32~41cm、深さ約52~80cm、柱穴間距離P₁~P₂間約3.2m、P₂~P₃間約2.7m、P₃~P₄間約3.1m、P₄~P₁間約2.8m)の4本で、掘り方の調査でもこれ以外の柱穴配列は検出されていないので、当住居跡は柱穴配置を変更するような建て替えは行われていないことがわかる。貯蔵穴は東コーナー部に検出したもので、約44×35cm、深さ約67cmの楕円形を呈している。遺物は多量に出土しているが、その中で第134図10の土師器杯は、飛鳥・藤原京の調査で杯C IIIと分類されている飛鳥IIIの時期の畿内産暗文土師器であり、この時期に搬入されたものと考えられる。

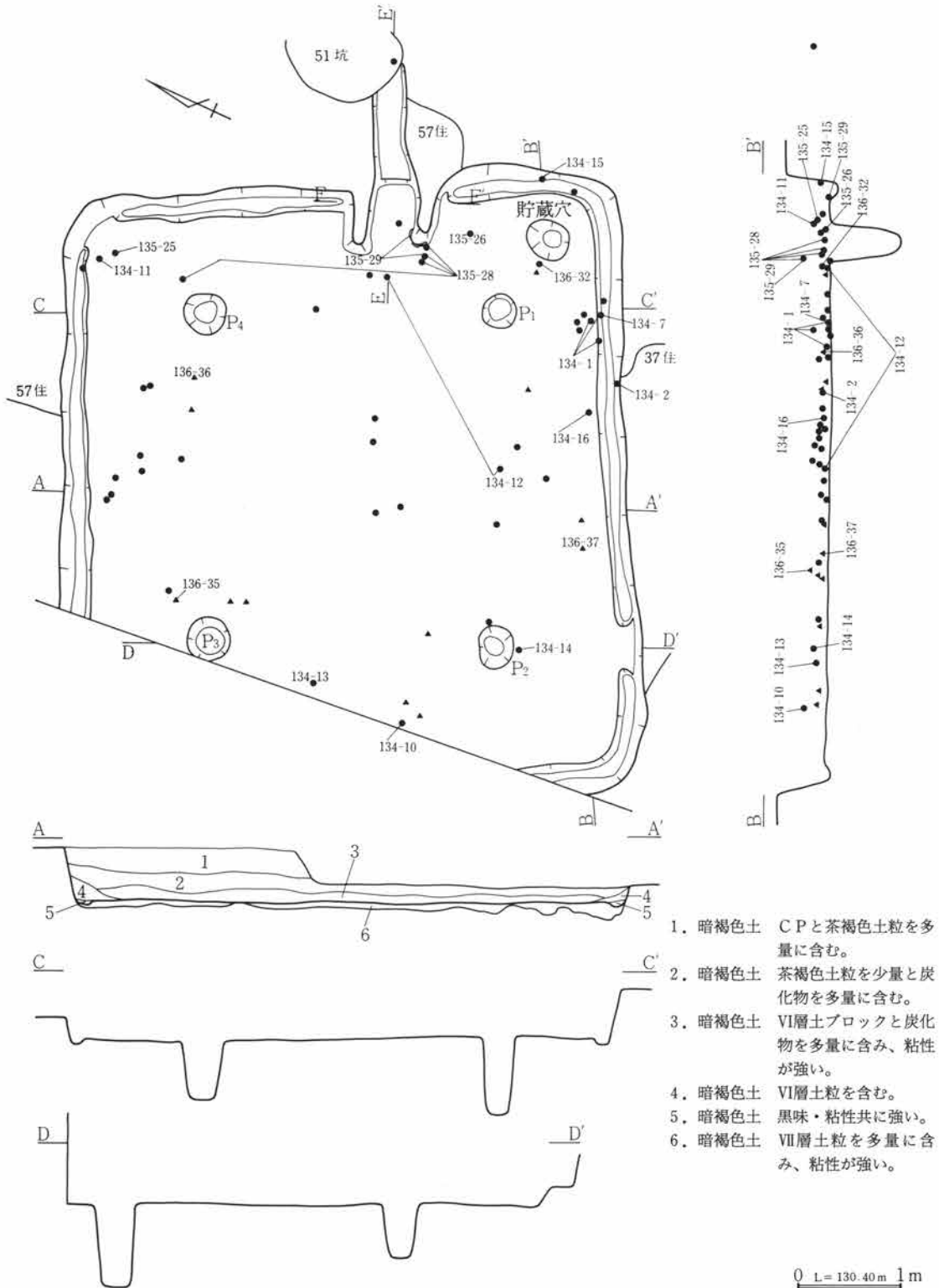


1. 暗褐色土 CPを少量含む。
2. 暗褐色土 炭化物を少量含む。
3. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
4. 赤褐色土 焼土粒と炭化物で構成される混土層。
5. 暗褐色土 炭化物を多量に含む。
6. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を多量に含む。
7. 暗褐色土 焼土粒を全く含まず、全体に黒味が強い。
8. 暗褐色土 VII層土を主体として、焼土粒を微量含む。
9. 暗褐色土 焼土粒を少量まばらに含む。
10. 暗褐色土 9層よりも焼土粒の量が少なく、粘性が強い。
11. 暗褐色土 9層よりも焼土粒の量が多く、粘性が強い。

第132図 I区第58号住居跡実測図(1)

第134図10の土師器杯は、飛鳥・藤原京の調査で杯C IIIと分類されている飛鳥IIIの時期の畿内産暗文土師器であり、この時期に搬入されたものと考えられる。

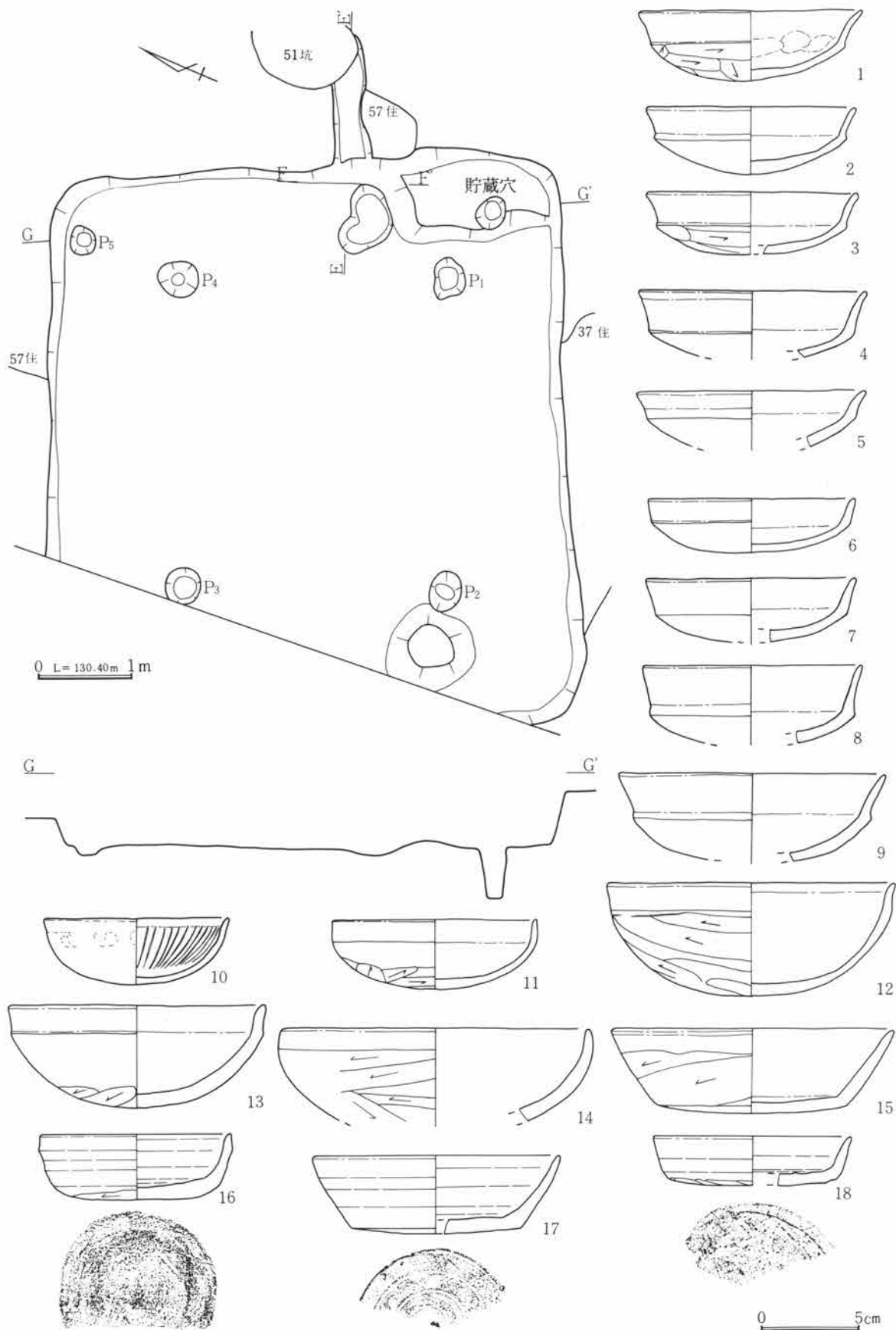
第2節 検出された遺構・遺物



第133図 I区第58号住居跡実測図(2)

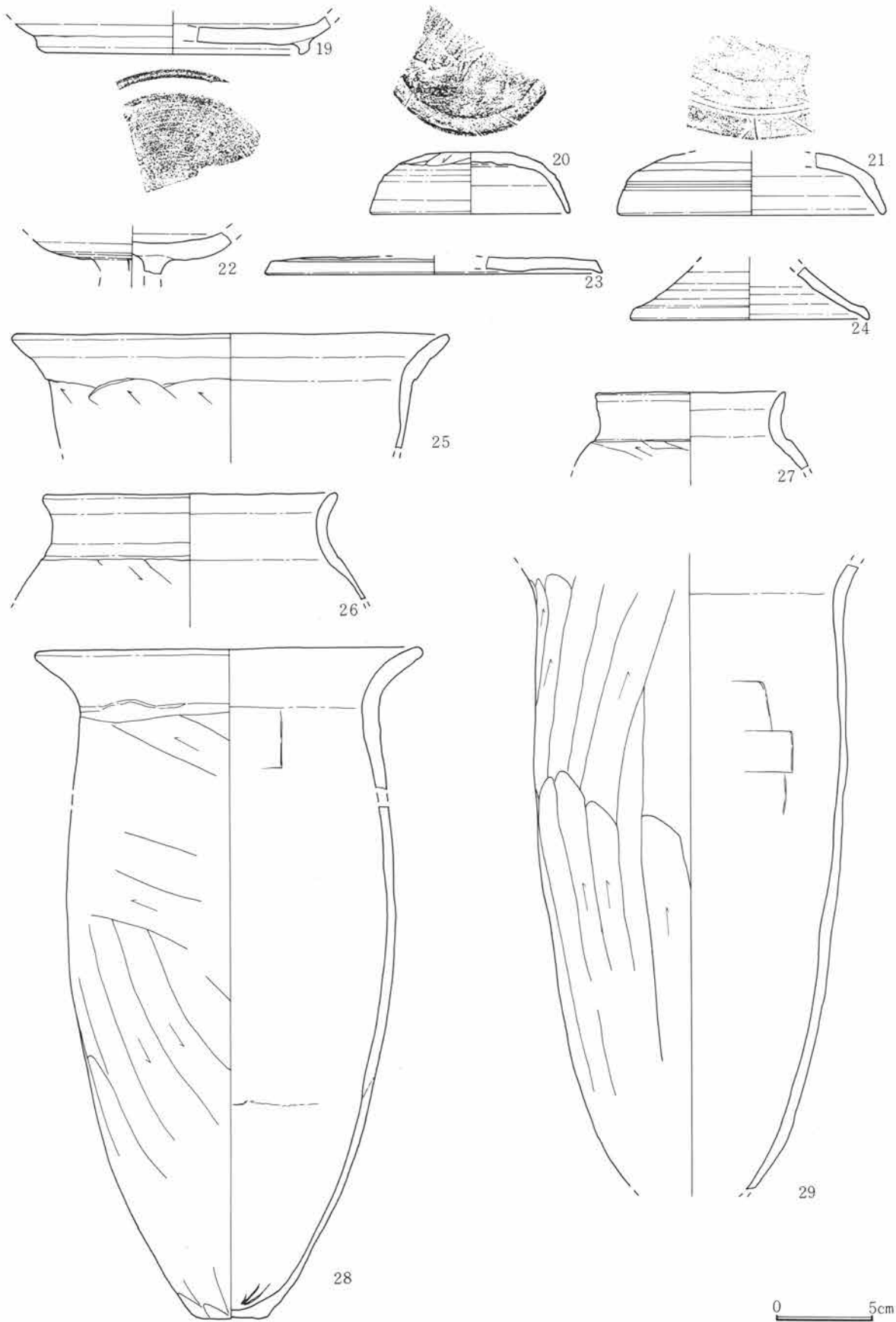
カマドは北東壁中央やや南寄りに設置されており、主軸方位は東 -27° 北である。平面形は両袖が屋内に張り出した凸字形である。残存部の規模は、全長約178cm、袖長約60cm、燃焼部幅約38cm、煙道幅約22cmである。袖は焼土粒をわずかに含む暗褐色土で構築されており、右袖先端には構築材として第135図29の土師器甕が逆位に据えられていた。燃焼部中央には径約25cmの範囲の焼土が検出されている。

第4章 検出された遺構・遺物



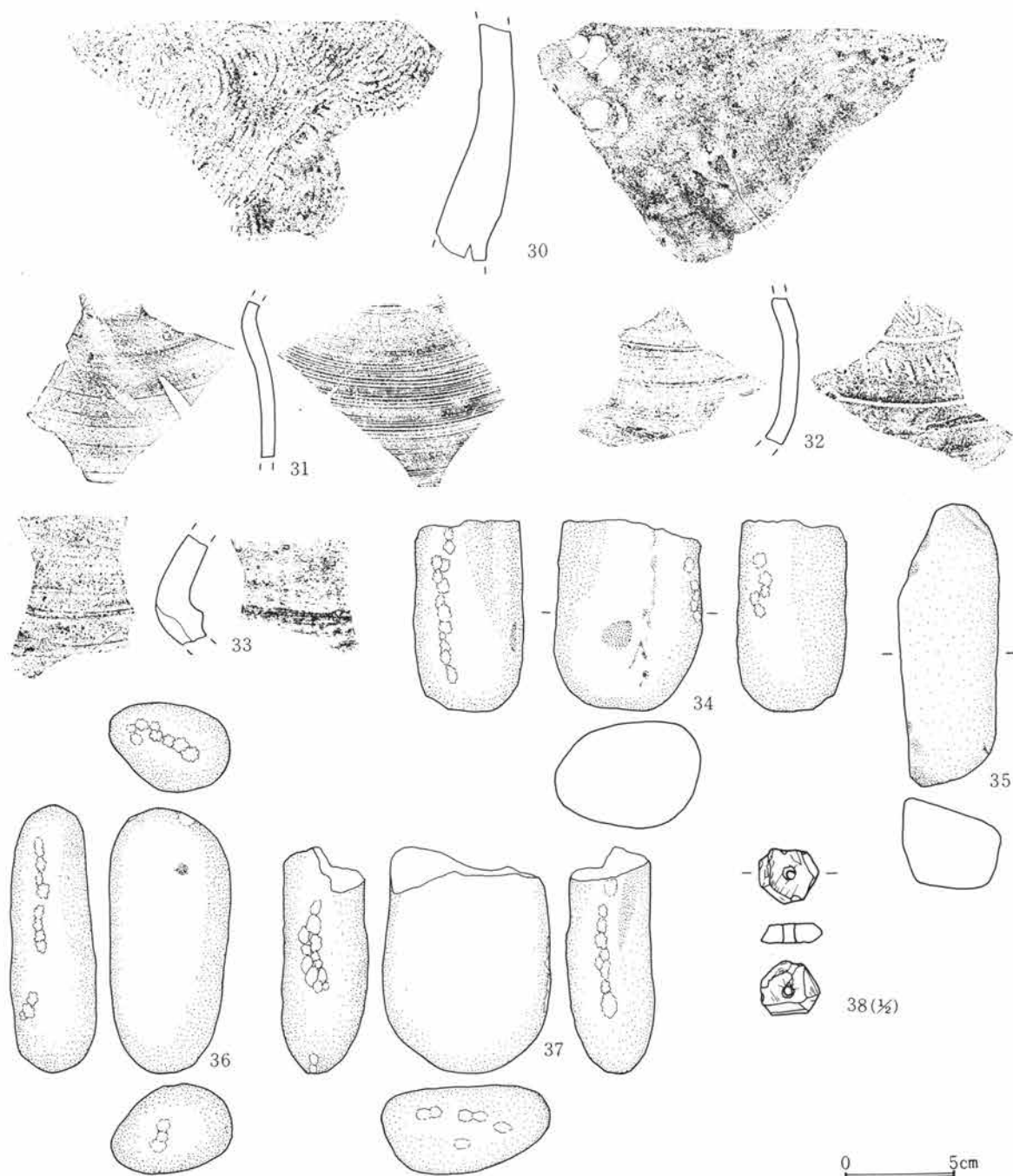
第134図 I区第58号住居跡(3)・出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



第135図 I区第58号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



第136図 I区第58号住居跡出土遺物実測図(3)

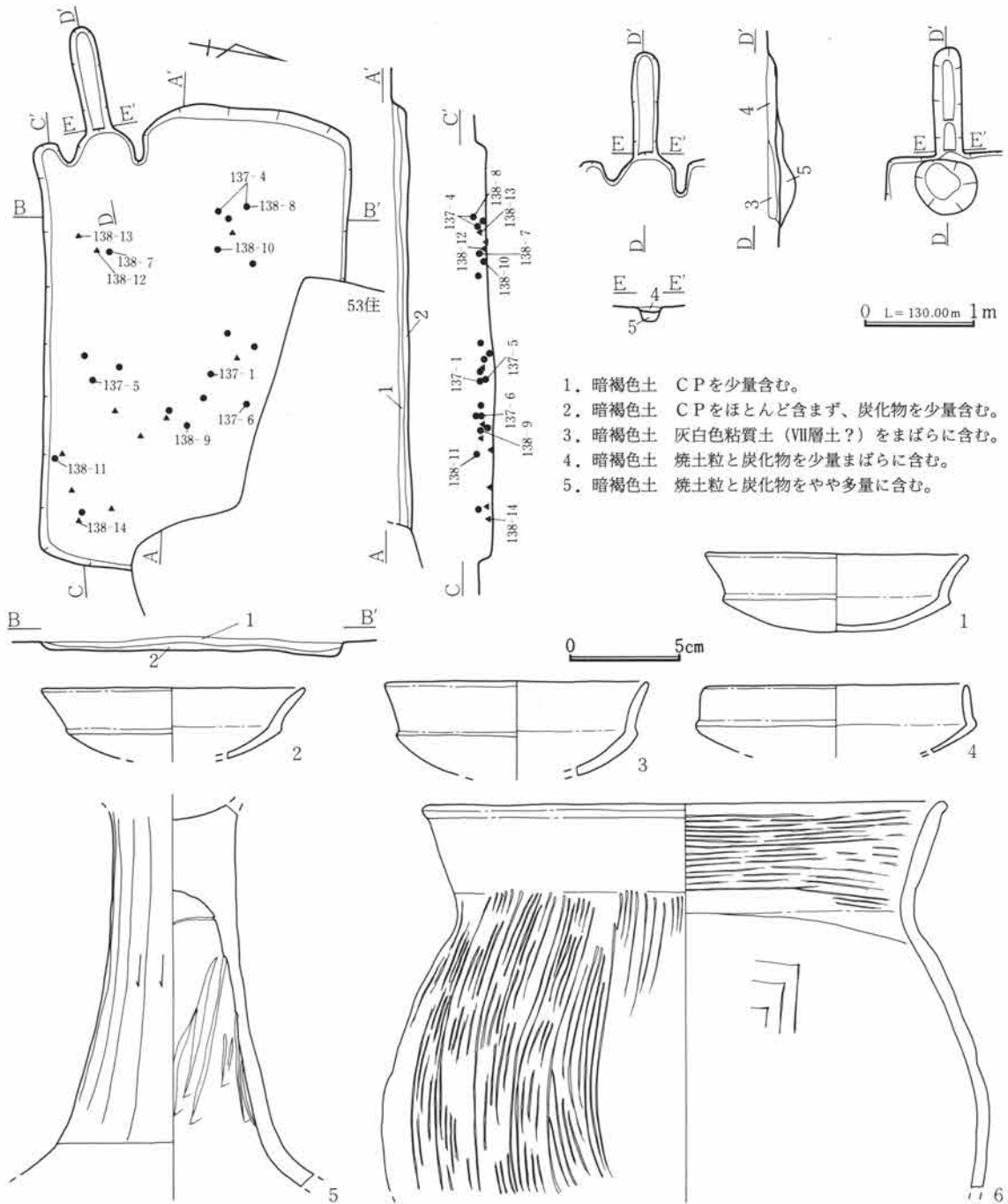
遺構名称	I区第59号住居跡		位置	35・36-I-65~67グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	4.07m×2.71m	主軸方位	西-7度-南	残存深度	約10cm程

(所見) 当住居跡は第53号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第53号住居跡と考えられる。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、当住居跡の掘り込みが浅かったために、残存状態はあまり良好ではない。壁は第53号住居跡との重複で失われている部分以外は検出されているが、カマドに接続する部分で南にわずかに張り出している。床面に貼床は施されておらず、VI層土面に構築されている。この面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴のいずれも検出されていない。貯蔵穴に関しては、第53号住居跡との重複部

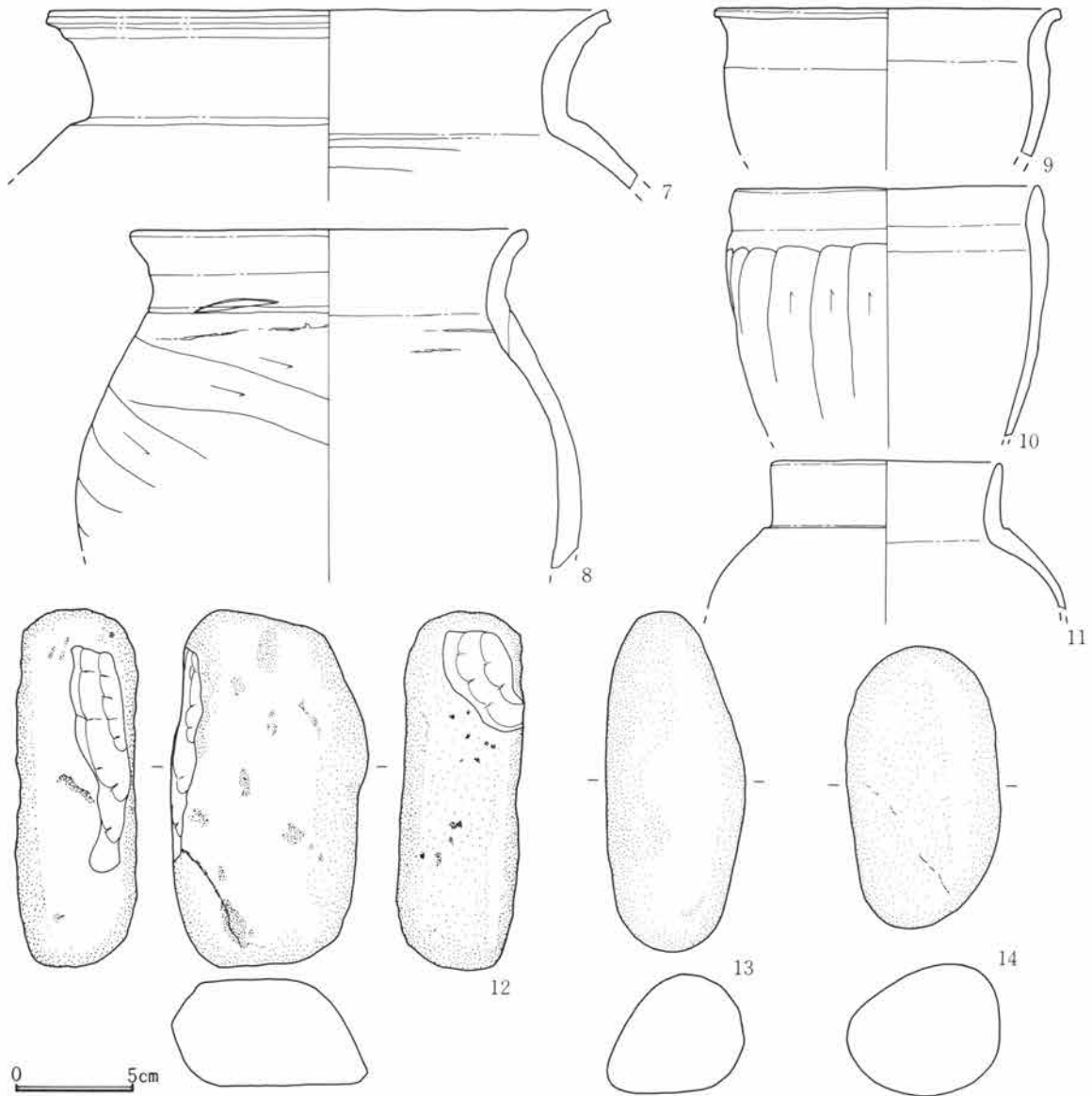
分にあった可能性は否定できないが、当初から掘削されなかったものと思われる。

カマドは南西壁の南端に位置しており、ちょうど平安時代後半に盛行するコーナーカマドに近いものである。平面形は、両袖が屋内に張り出した凸字形を呈しており、主軸方位は西 -22° 南で住居跡の主軸方位よりかなり南に振れている。規模は全長約130cm、袖長約35cm、燃焼部幅約50cm、煙道長約92cm、煙道幅約19cmである。燃焼部に焼土・灰面は検出されず、また、カマドに充填していた土層内にも焼土粒・灰等はあまり明瞭に残存しておらず、カマドとしては貧弱な印象をもった。掘り方の調査では燃焼部の位置に径約50cm、深さ13cm程の円形の掘り込みを検出した。

遺物は、ほぼ床面に接するような位置から比較的多く出土している。



第137図 I区第59号住居跡・出土遺物実測図(1)

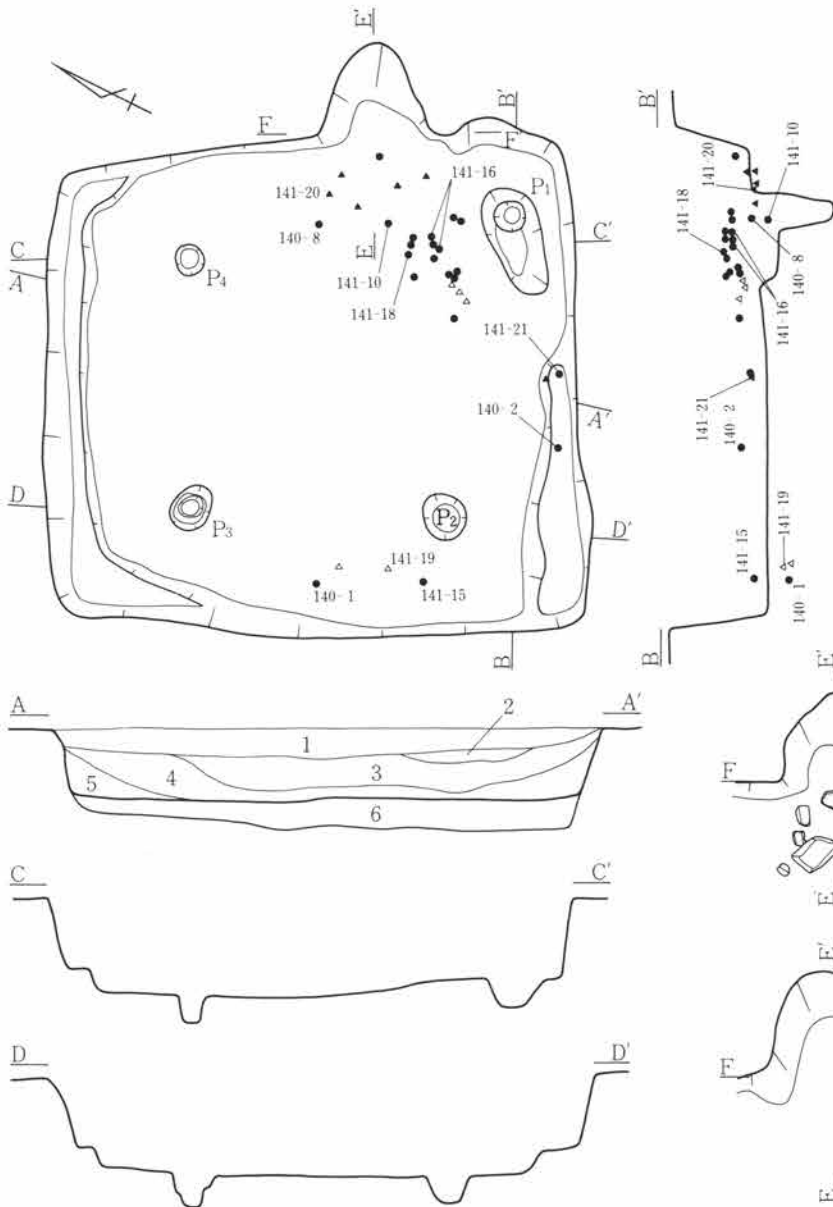


第138図 I区第59号住居跡出土遺物実測図(2)

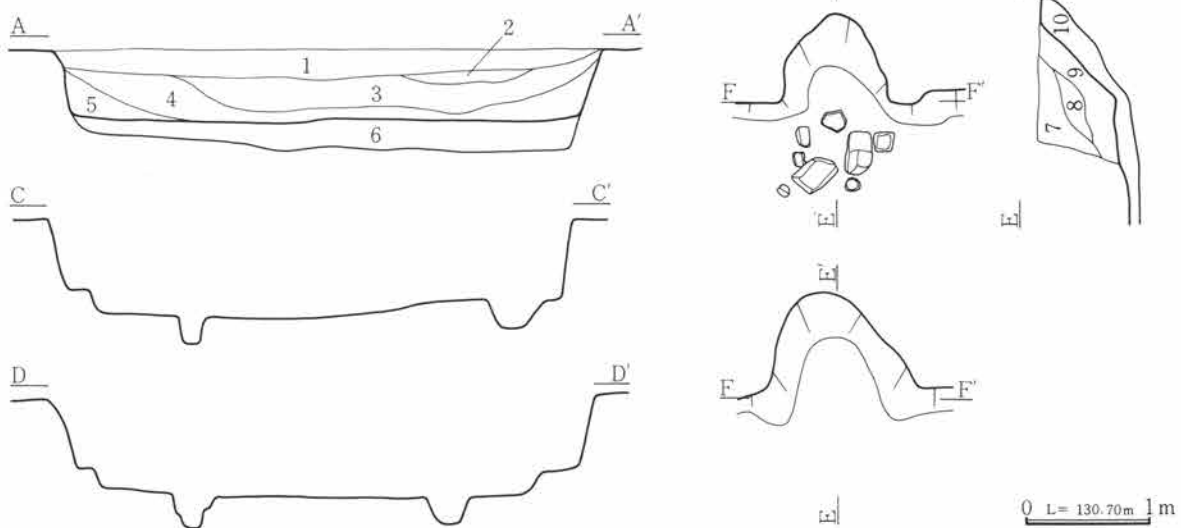
遺構名称	I区第60号住居跡		位置	48-I~1-J-74~77グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.94m×4.21m	主軸方位	東-17度-北	残存深度	約55cm程

(所見) 当住居跡はJ区とを区画する東西農道下にかかっていたため、2次の調査を実施している。掘り込みは深く、壁の残存状態も良好である。床面は全面に20cm程の貼床が施されており、平面図に示した北西及び南東壁に沿ったテラス状のものは、この掘り方段階に掘り残されたものであろう。壁溝は床面の精査によって検出することはできなかった。柱穴は $P_2 \sim P_4$ (径約24~35cm、貼床面からの推定の深さ約22~48cm、柱穴間距離 $P_2 \sim P_3$ 間約2.1m、 $P_3 \sim P_4$ 間約2.0m)の3本である。東コーナー部に検出した P_1 (径約25cm、深さ約67cm)は前記の柱穴配列からはやや外れ、深さは他の柱穴と比較して明らかに深く、また、約90×43cm、深さ約20cmの楕円形掘り込みから更に掘り込まれていることなどから、貯蔵穴と判断される。つまり、当住居跡には柱穴が3本しかなかったものと考えられる。カマドは北東壁の南寄りに位置し、主軸方位は東-17°-北である。残存は不良で燃焼部の位置から構築部材である角柱状の截石が検出されている。

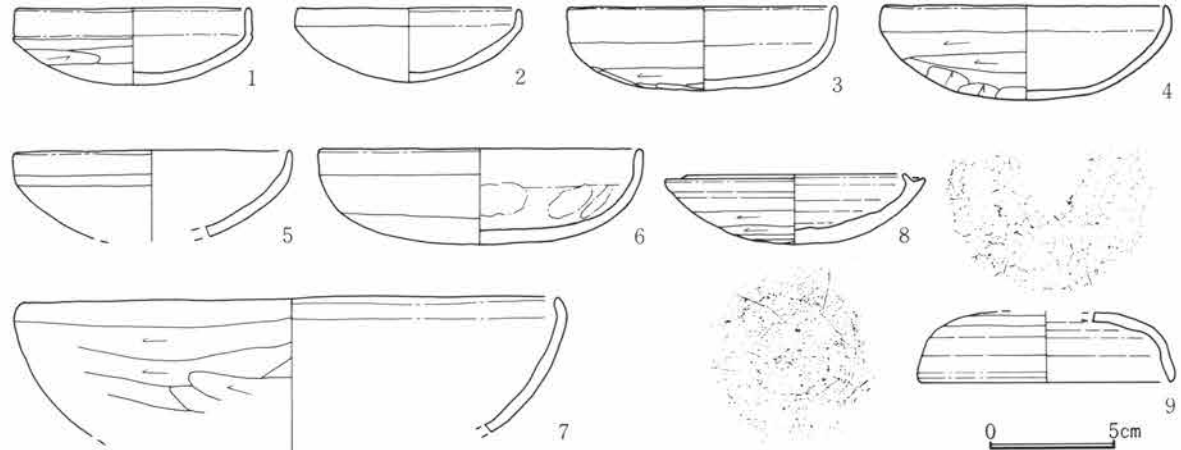
第2節 検出された遺構・遺物



1. 暗褐色土 C Pを多量に、炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土 C Pを多量に、炭化物とVI層土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 C Pを少量、焼土粒を多量に含む。
4. 暗褐色土 C PとVI層土ブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 C P少量、VI層土粒を多量に含む。
6. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。
7. 暗褐色土 C P少量、焼土粒を多量に含む。
8. 暗褐色土 C P少量、焼土ブロックを多量に含む。
9. 暗褐色土 焼土ブロックと灰を多量に含む。
10. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。

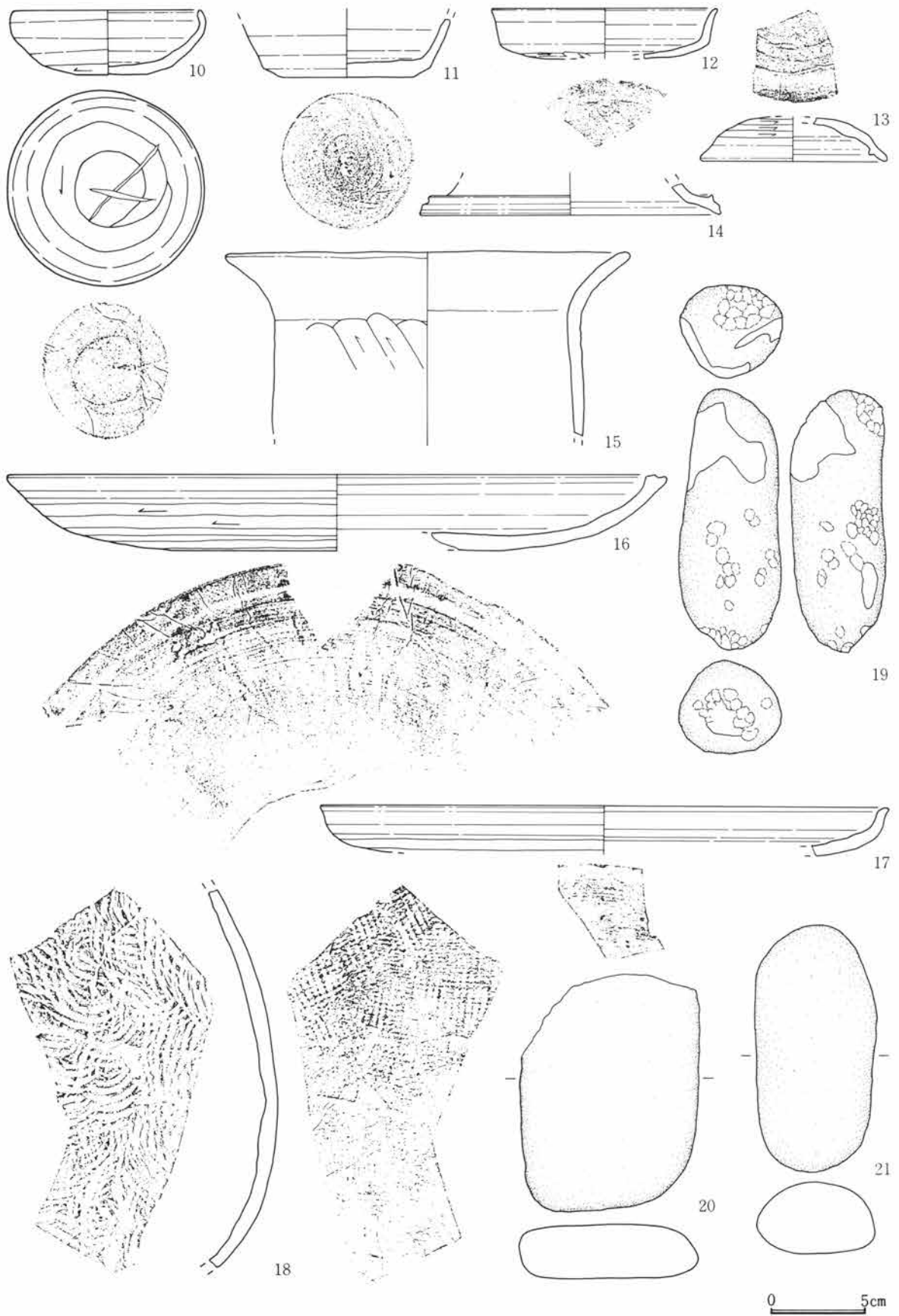


第139図 I区第60号住居跡実測図



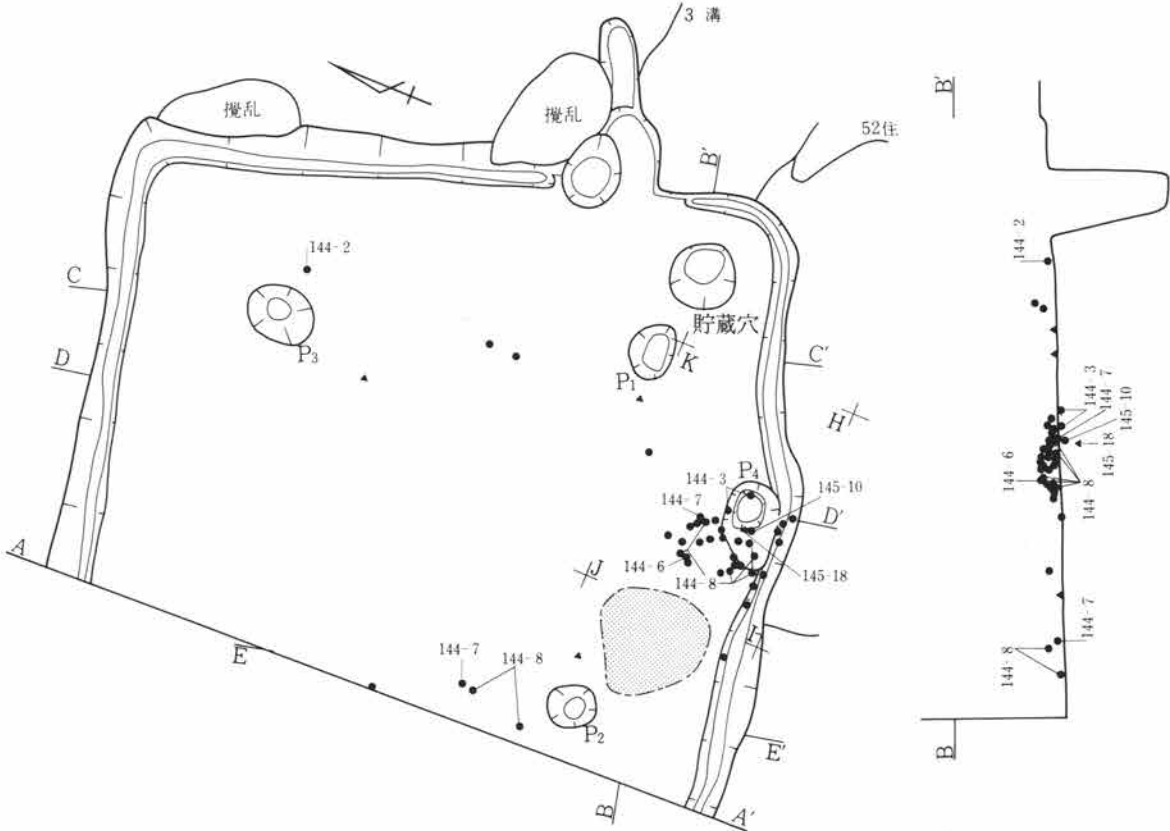
第140図 I区第60号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

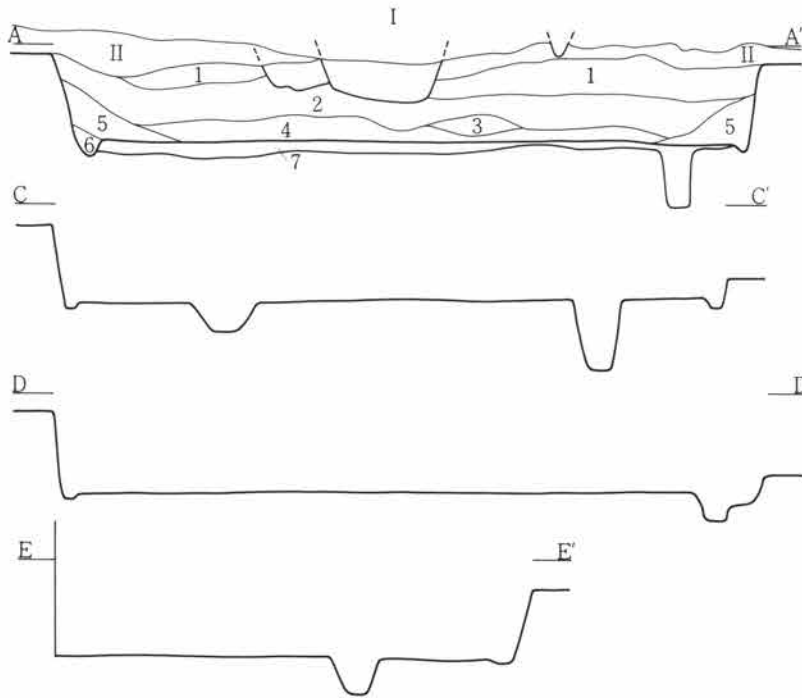


第141図 I区第60号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第61号住居跡	位置	42~45-I-82~85グリッド内
平面形態	隅丸正方形?	規模	—m×5.76m
		主軸方位	東—17度—北
		残存深度	約55cm程



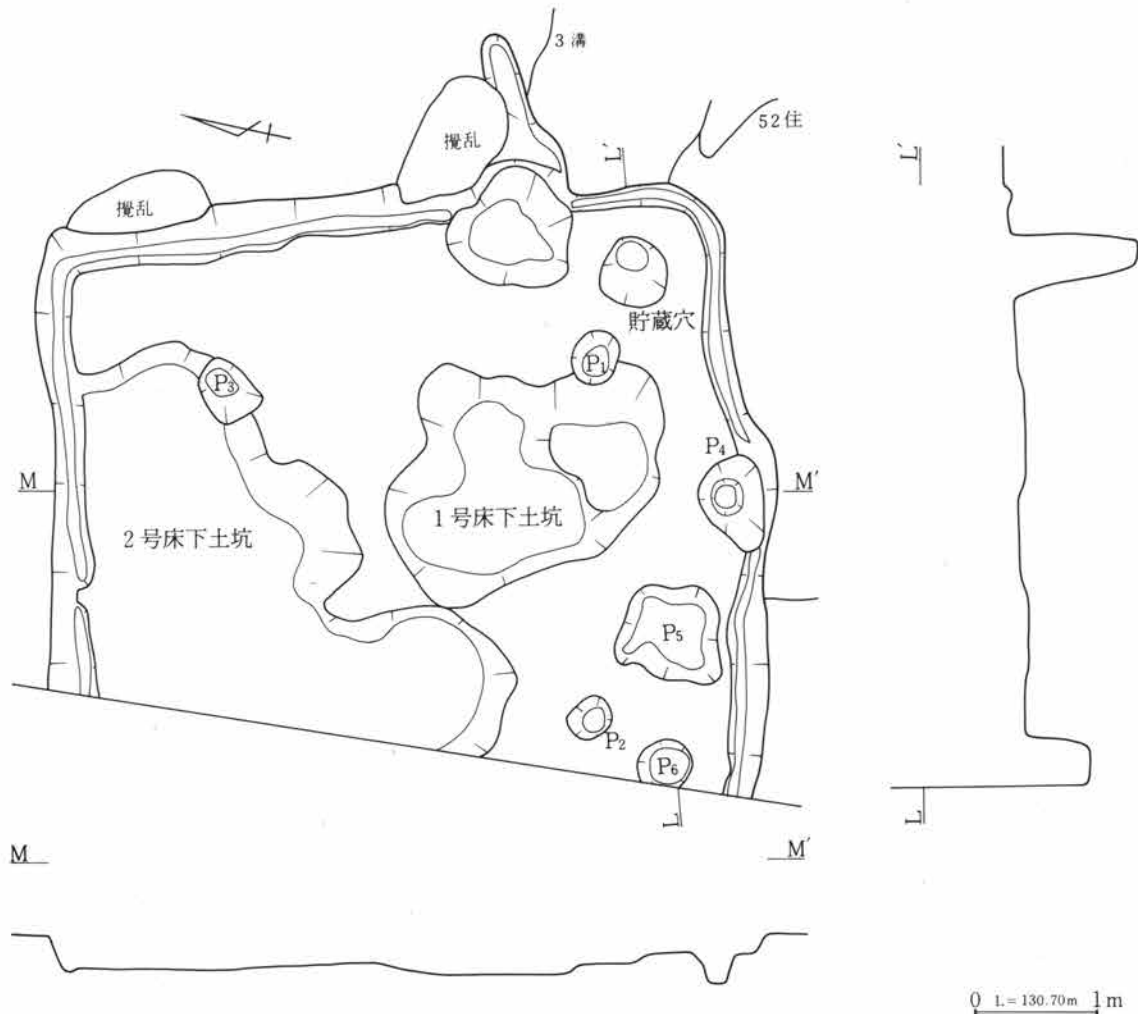
Archaeological plan view of the I-61 residence site, showing various features and section lines.



1. 暗褐色土 CPと茶褐色土粒 (VI層土粒?) を多量に含み、全体に茶味が強い
2. 暗褐色土 CPを含まず、茶褐色土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 2層に類似する層で、茶褐色土を含まない。
4. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量まばらに含み、全体に黒味が強い。
5. 暗褐色土 黒褐色粘質土ブロックをまばらに含む。
6. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。
7. 暗褐色土 暗褐色土ベースにVI・VII層土ブロックを多量に含む。

0 L=130.70m 1m

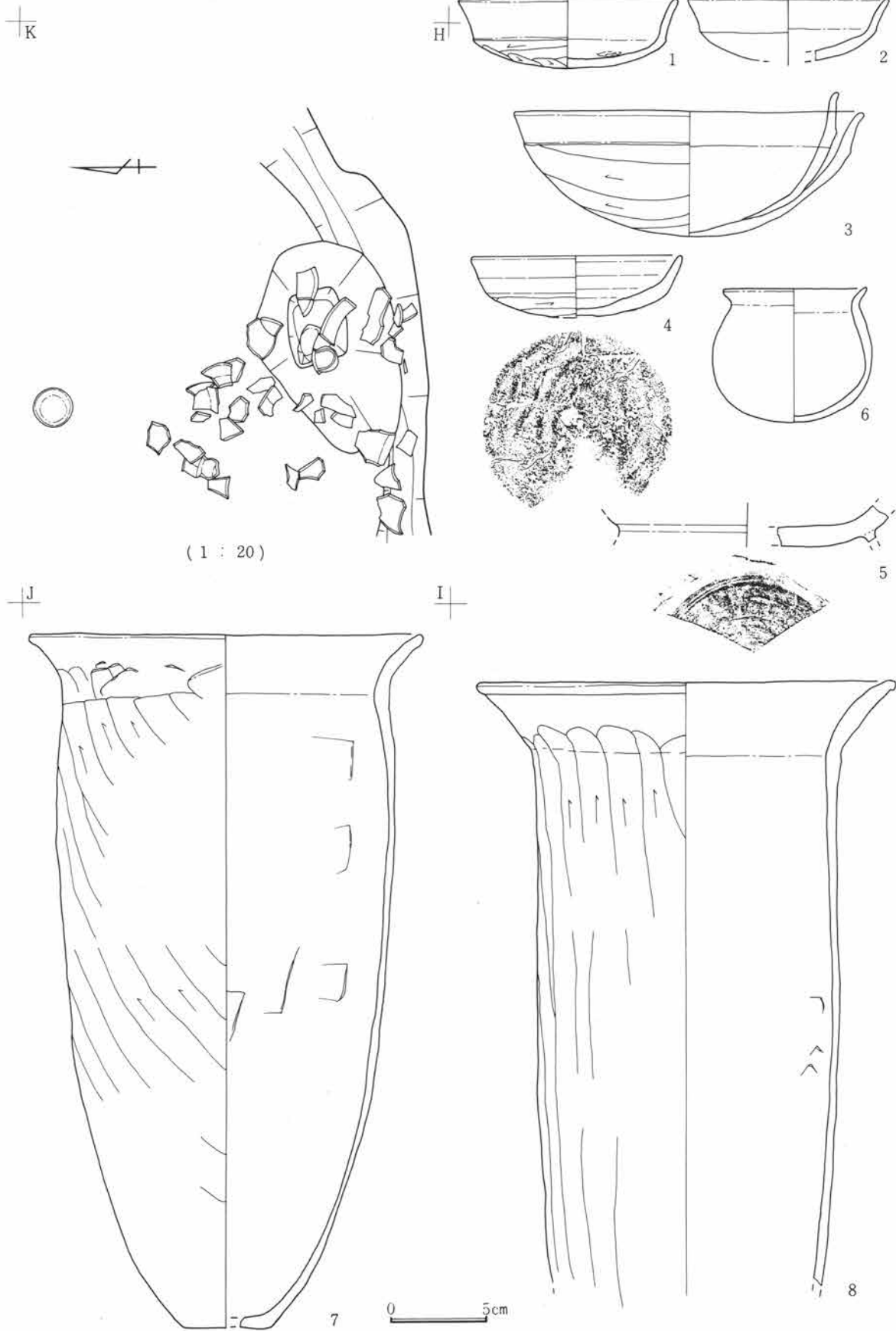
第142図 I区第61号住居跡実測図(1)



第143図 I区第61号住居跡実測図(2)

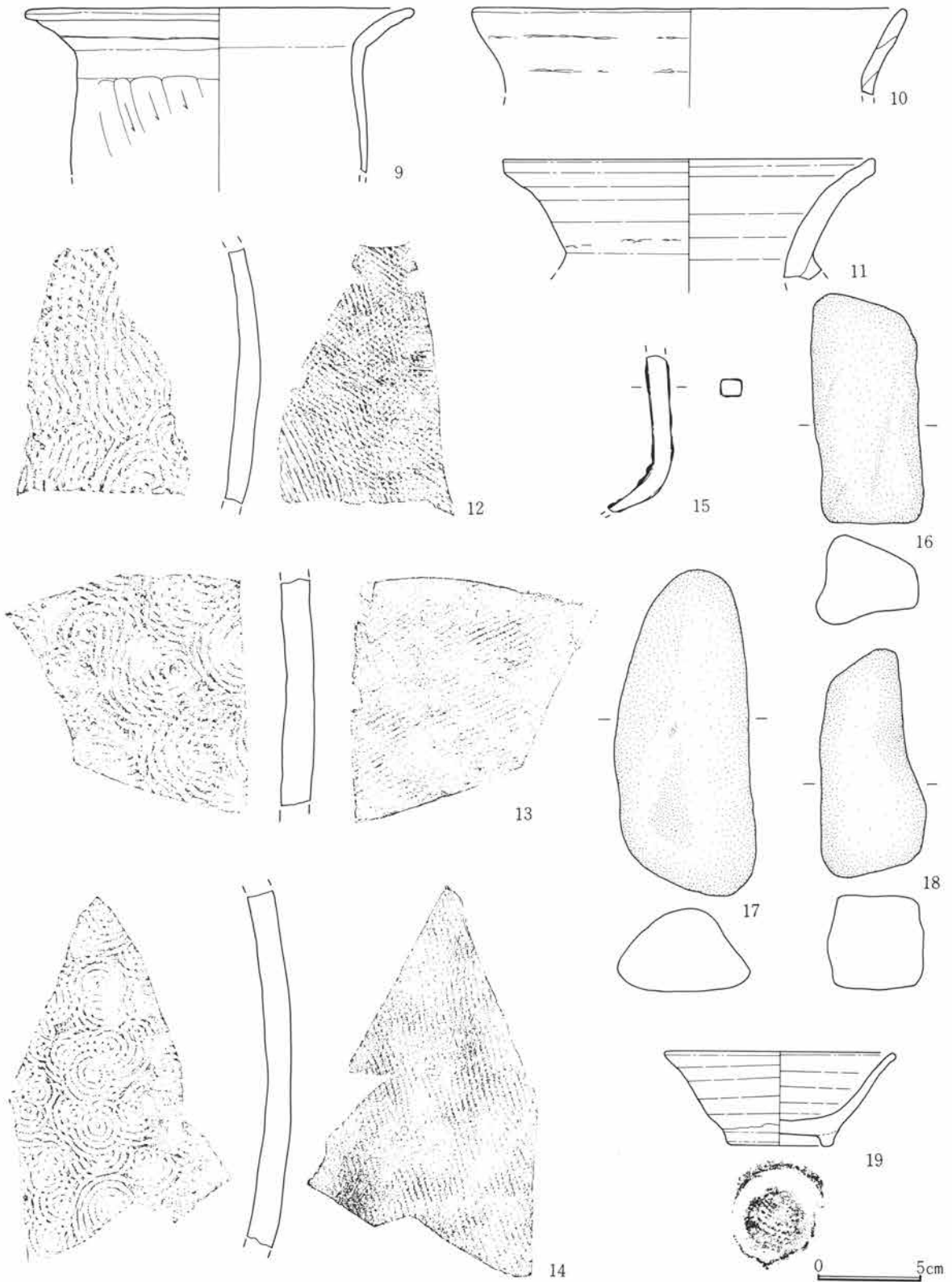
(所見) 当住居跡は調査区の西端に位置しており、西側約1/3は調査区外で未調査である。また、第52号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第52号住居跡であるのは明らかである。平面プランの確認はIV層土中であり、比較的良好に捉えることができた。平面プランは基本的には隅丸方形であるが、南東壁中央部に弱い張り出しを有する特徴的な形状をしている。覆土の埋没状態は、周囲からの埋没であることを明瞭に示しており、不自然さは感じられない。また、当住居跡は表土からの土層観察ができた数少ない例であるが、I・II層の乱によって掘り込み面の特定は不可能である。床面はほぼ全面にわたって、5～12cm程の厚さで貼床が施されている。壁溝はカマド部分を除いて全周していたものと考えられ、規模は下幅約5～10cm、深さ約6～12cmである。柱穴はP₁～P₃(径約35～45cm、深さ約26～55cm、柱穴間距離P₁～P₂間約2.9m、P₃～P₁間約3.0m)の3本を検出した。残りの1本は調査区外に位置すると思われる。貯蔵穴は東コーナー部に位置する円形の掘り込みで、規模は径約54cm、深さ約92cmである。その他、張り出し部には約70×40cm、深さ約10cmの不整楕円形の掘り込み中に、更に径約25cm、深さ約14cmの円形ピットが検出されている。この上面には第144図3・7・8のような遺物が集中して出土している。また、この遺物集中部の南側床面に径80cm程の範囲に焼土が検出されている。カマドは北東壁の南寄りに偏って構築されており、主軸方位は東-29°-北である。平面形は、本来両袖が屋内に張り出す凸字形であったものと考えられる。残存部の規模は全長約140cm、燃焼部奥行き約63cm、煙道長約70cm、下幅約17cmである。

第2節 検出された遺構・遺物



第144図 I区第61号住居跡(3)・出土遺物実測図(1)

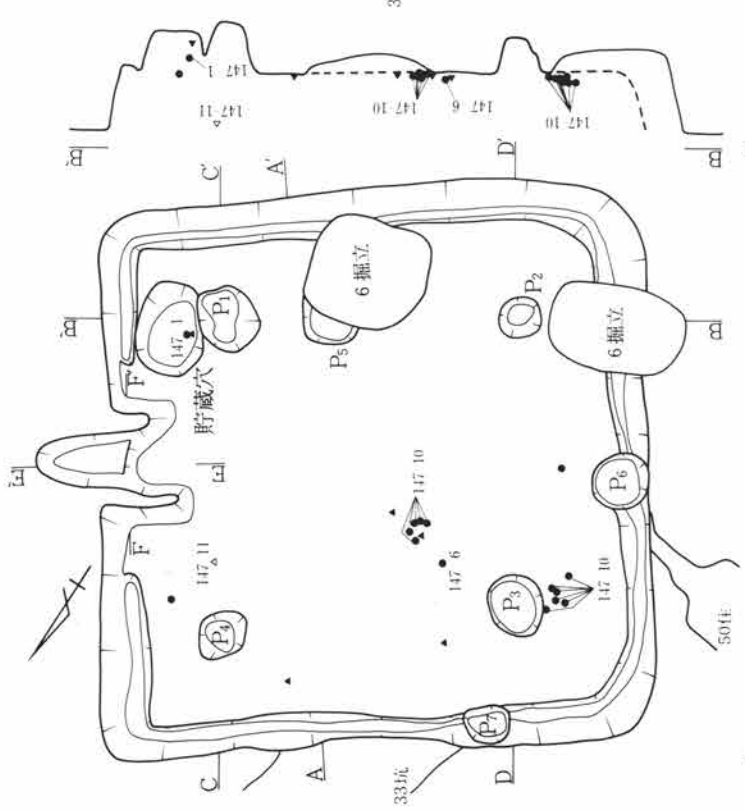
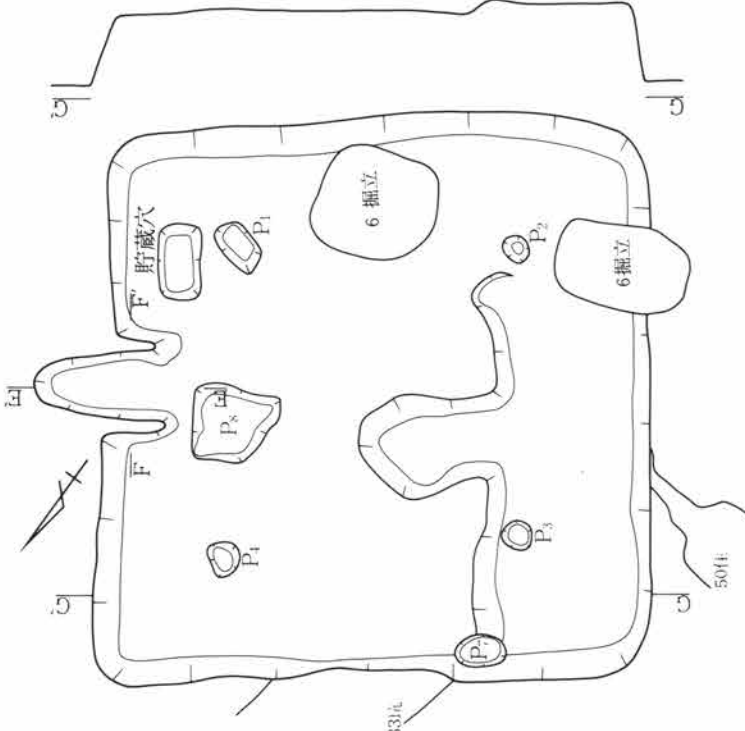
第4章 検出された遺構・遺物



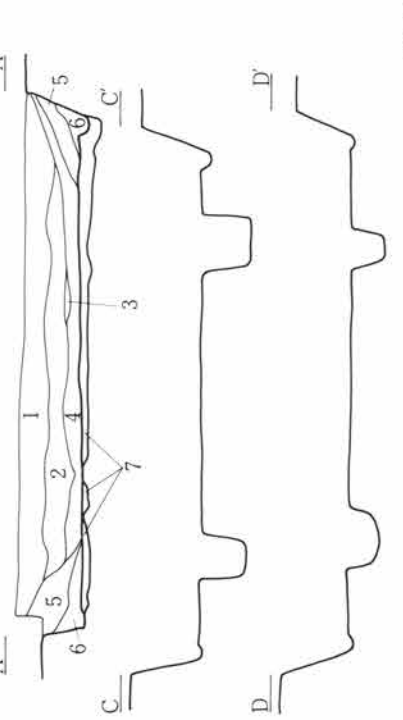
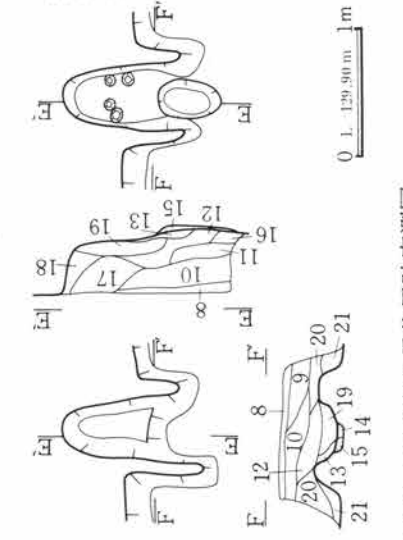
第145図 I区第61号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第63号住居跡		位置	30~33-I-63~65グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.32m×4.32m	主軸方位	東-38度-北	残存深度	約45cm程

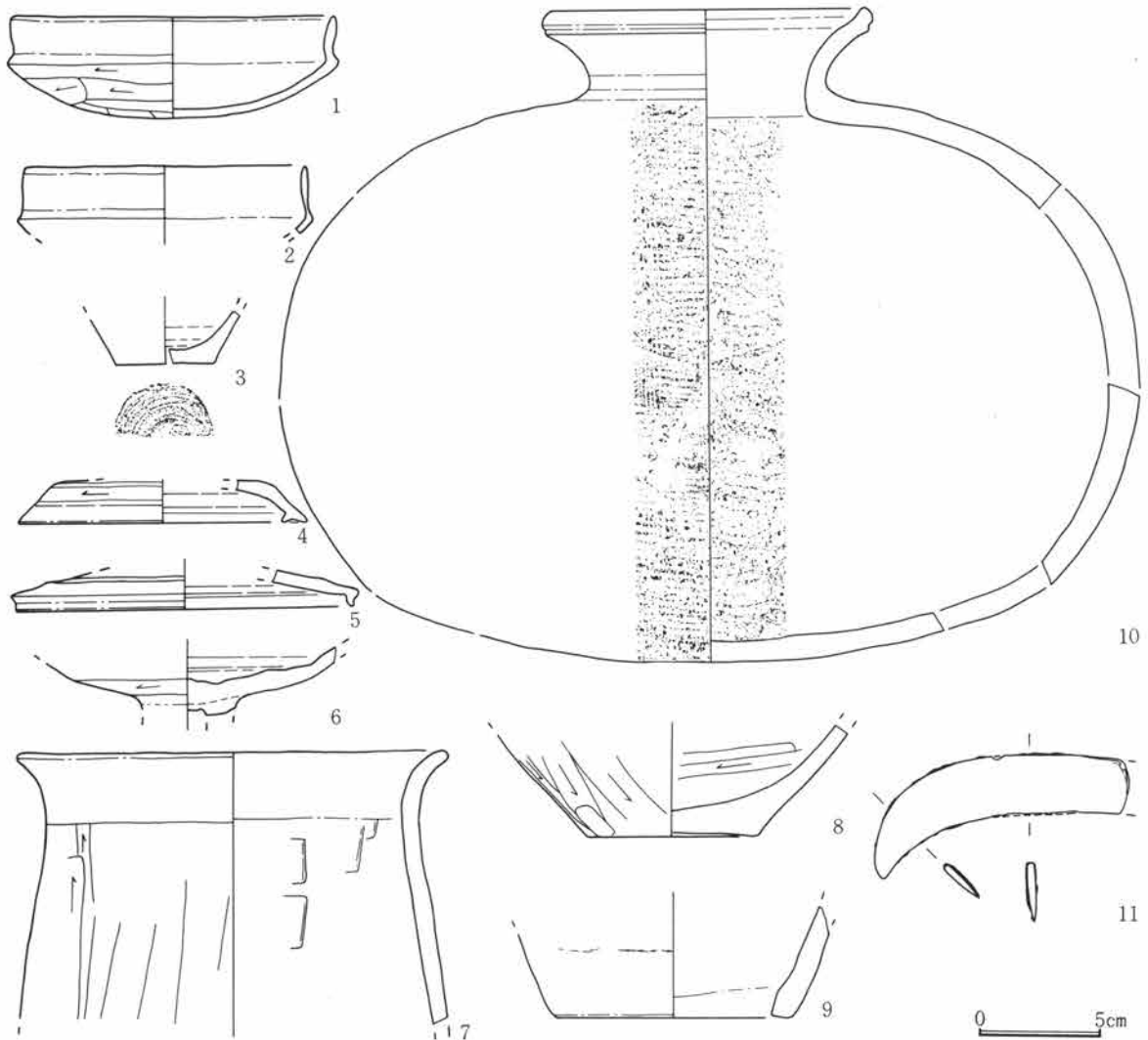
1. 暗褐色土 CPを多量に含み全体に茶味を有する。
2. 暗褐色土 VI・VII層土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 VI層土粒を含む。
4. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。
5. 黒褐色土 粘質土。
6. 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に含む。
7. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックを少量含む。
8. 暗褐色土 焼土粒を微量に含む。



9. 暗褐色土 灰粘土と焼土粒を少量含む。
10. 暗褐色土 CPと少量の焼土粒を含む。
11. 暗褐色土 灰粘土を少量、焼土粒を多量に含む。
12. 赤褐色土 焼土粒を多量に含む。
13. 灰褐色土 VII層土を多量に含む。(袖の崩落土)
14. 灰褐色土 灰白色土ブロックと炭化物を少量含み、焼土粒は少ない。
15. 灰白色土 粘土主体の層。
16. 暗褐色土 11層よりもCP量が少ない。
17. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量含む。
18. 暗褐色土 焼土粒・炭化物は17層より少なくなる。
19. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を多量に含む。
20. 暗褐色土 CPを少量含み、焼土粒は微量で粘性が強い。
21. 暗褐色土 CPと褐色細粒を微量含む。



第146図 I区第63号住居跡実測図



第147図 I区第63号住居跡出土遺物実測図

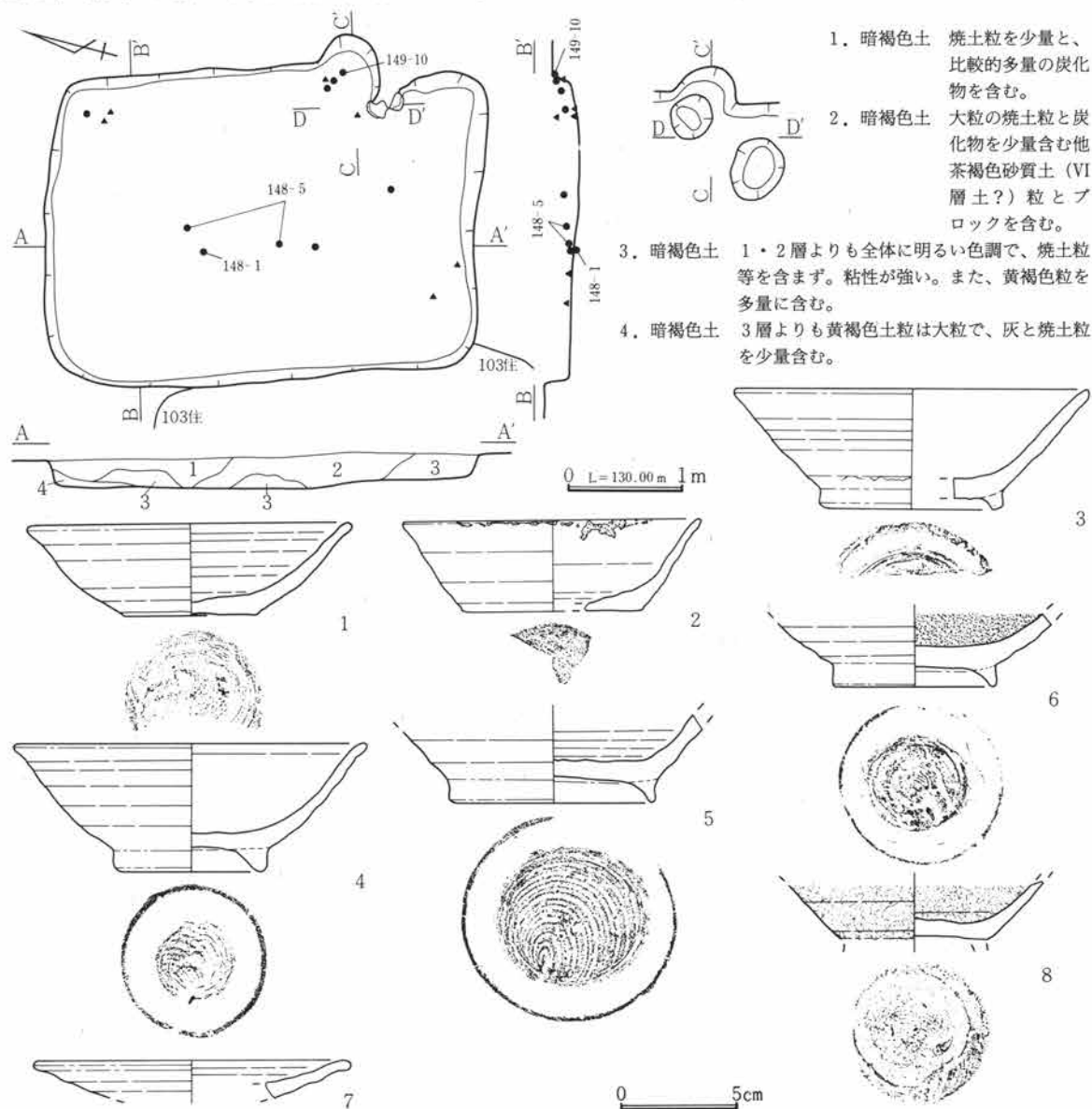
(所見) 当住居跡は第50号住居跡及び第6号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態等から当住居跡→第50号住居跡・第6号掘立柱建物跡であるのは明らかである。壁は第6号掘立柱建物跡の柱穴との重複によって失われた南西壁の一部を除いて全周検出し、残存状態も非常に良好である。覆土の堆積状態は図示した通り、不自然さは感じられないものである。床面はほぼ全面にわたって5~10cm程の貼床が施されている。この床面の精査によって貯蔵穴と7本のピットを検出したが、柱穴と考えられるのはP₁~P₄ (径約35~45cm、深さ約24~38cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.4m、P₂~P₃間約2.3m、P₃~P₄間約2.4m、P₄~P₁間約2.5m)の4本である。P₅ (径約46cm、深さ約10cm)・P₆ (径約46cm、深さ約14cm)・P₇ (約36×30cm、深さ約30cm)の3本のピットには規則的配置は認められない。貯蔵穴は東コーナー部に検出したもので、貼床面の調査では約75×55cm、深さ約32cmの楕円形として捉えたが、掘り方の調査では約60×35cmの整形な長方形の平面を捉えることができた。

カマドは北東壁のほぼ中央に設置されており、主軸方位は東-35°-北である。平面形は両袖が屋内に張り出した凸字形を呈している。袖は両袖共にVI・VII層土の掘り残しであり、構築材等を使用した痕跡は掘り方の調査でも検出されていない。残存部の規模は、全長約125cm、燃烧部幅約45cm、煙道長約70cm、下幅約23cmである。

遺構名称	I区第64号住居跡		位置	14~16-I-78・79グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.65m×3.65m	主軸方位	東-18度-北	残存深度	約20cm程

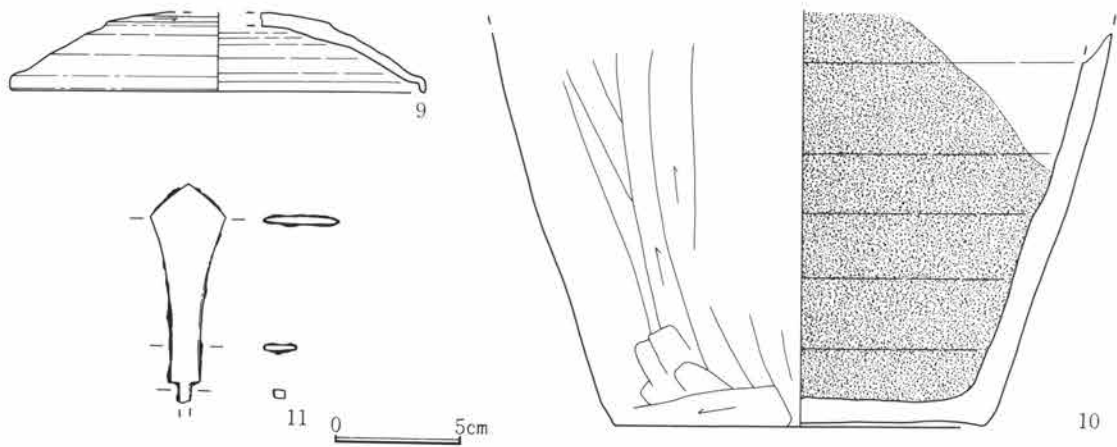
(所見) 当住居跡は第103号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態等から第103号住居跡→当住居跡と判断した。当住居跡の占地する場所は、VI・VII層土が黄褐色を呈するローム質であり、平面プランの確認は容易であった。覆土の堆積には不自然な状態が認められ、埋め戻しが成された可能性がある。壁には若干の崩落があるものとみられ、平面形が整形でない。床面に貼床は施されておらず、この面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴のいずれも検出されていない。つまり、当住居跡には当初からこれらの施設は掘削されててなかったものと考えられる。

カマドは北東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-7°-北である。平面形は馬蹄形を呈し、右袖のみ先端の袖石を含めわずかに屋内に張り出した状態で残存していた。残存部の規模は、全長約70cmであり、燃焼部の幅等は残存が不良で計測不可能である。



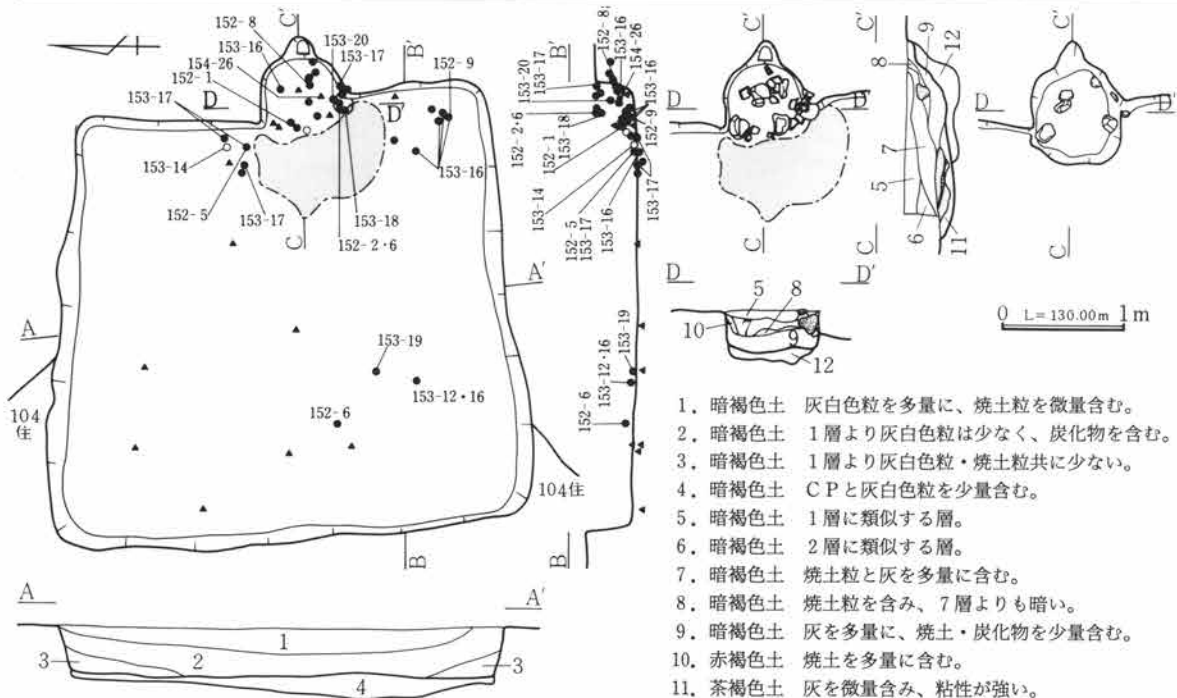
第148図 I区第64号住居跡・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第149図 I区第64号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第65号住居跡	位置	14~16-I-73~75グリッド内
平面形態	隅丸方形	規模	3.48m×3.60m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約35cm程



第150図 I区第65号住居跡実測図(1)

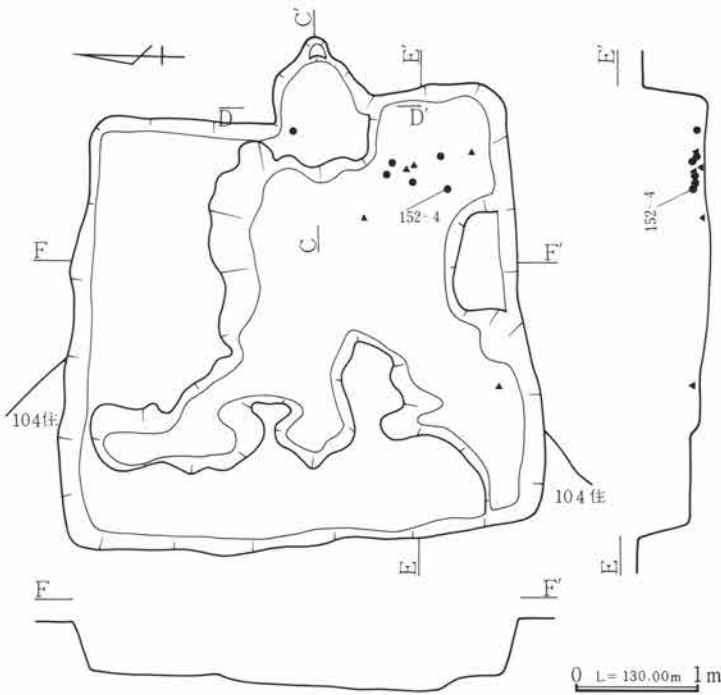
(所見) 当住居跡は第104号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から第104号住居跡→当住居跡であるのは明らかである。平面プランの確認は、第63号住居跡同様比較的容易であった。覆土の堆積状態から壁の崩落はほとんどないことがわかるが、西側がやや南北に張り出し不整形である。床面は全面にわたって5~20cm程の貼床が施されている。この床面及び掘り方の調査によっても壁溝・柱穴・貯蔵穴等の施設は検出されず、当初から掘削されなかったものと考えられる。掘り方は南東側から中央に向かって複雑な形態に掘られており、床下土坑のような独立した掘り込みとしては掘削されていない。

カマドは東壁中央やや南寄りに設置されており、主軸方位は東-0°-北で住居主軸と一致している。平面形は凸字形で、袖が屋内に張り出さないタイプである。袖には自然礫を構築材として使用しており、左右共

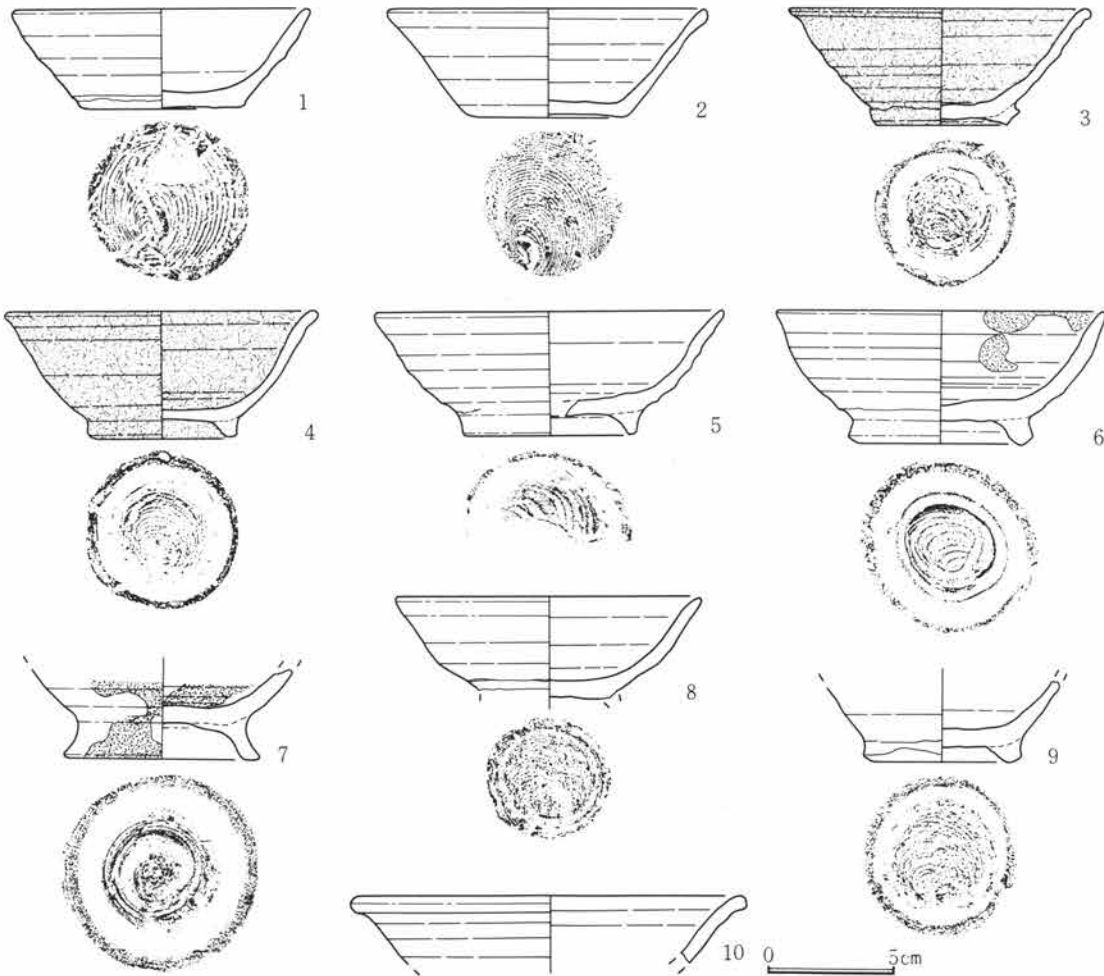
第2節 検出された遺構・遺物

に2段に積み上げていた。残存部の規模は、全長約78cm、燃烧部幅約58cm、燃烧部奥行き約55cm、煙道長約15cm、下幅約10cmである。燃烧部内からは他にも自然礫が数個検出されていることから、支脚や燃烧部側壁等にもこれらの石材が使用されていたものと考えられる。袖の前面床面上には100×60cm程の範囲に灰面が検出されており、更に下部に焼土面と灰面が各1面づつ検出された。この部分は丁度焚口に当たり、この場所に掻き出されたものと考えられる。

遺物は大半がカマド内またはその周辺から出土したものである。

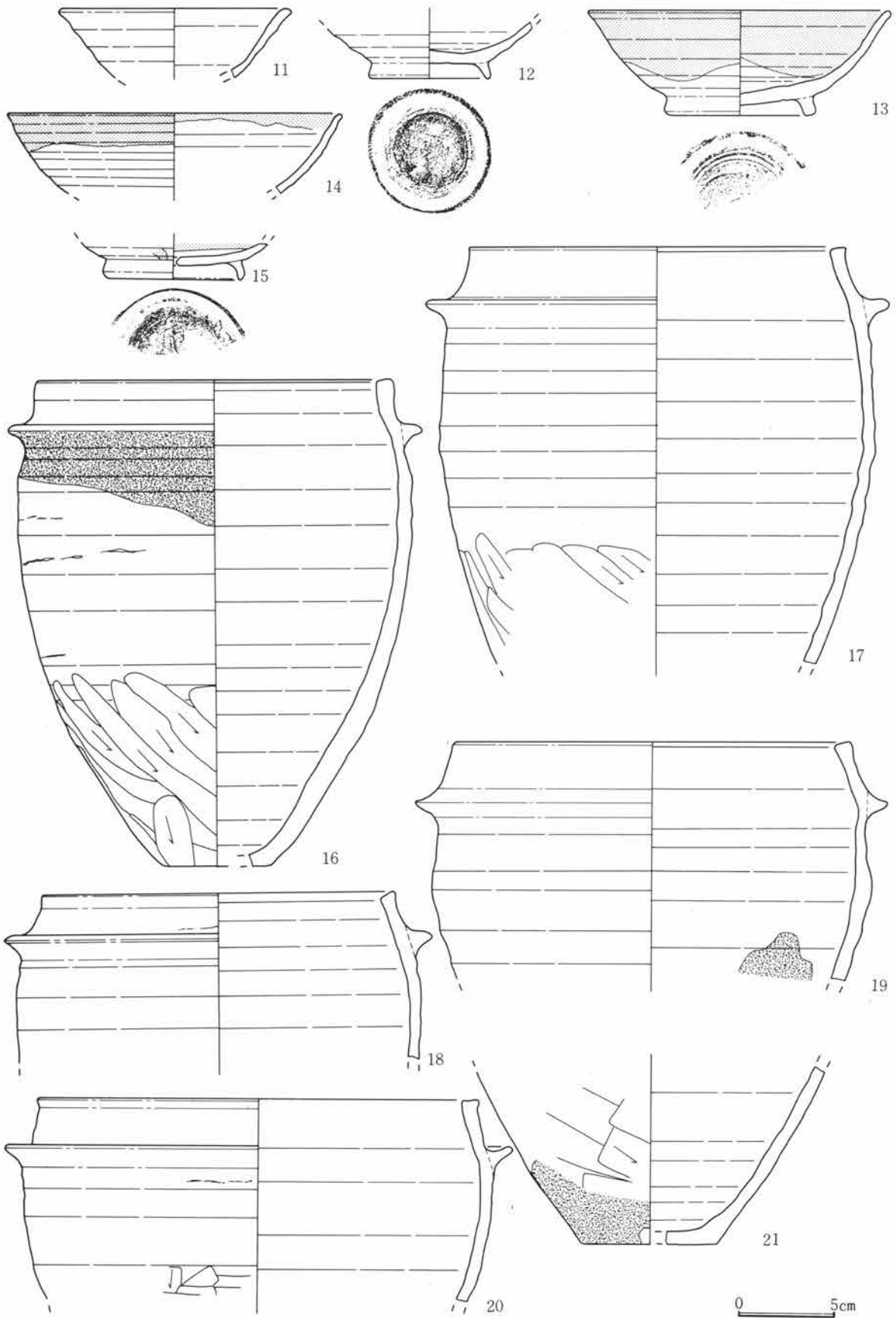


第151図 I区第65号住居跡実測図(2)

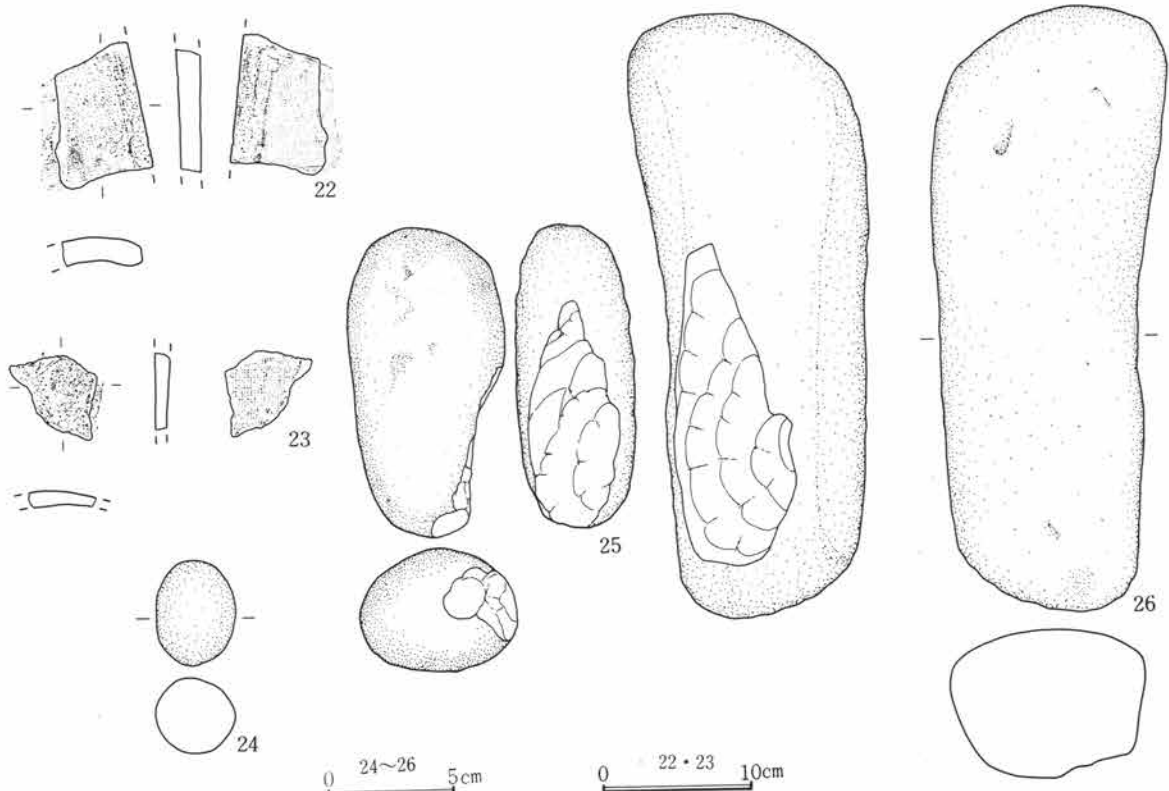


第152図 I区第65号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

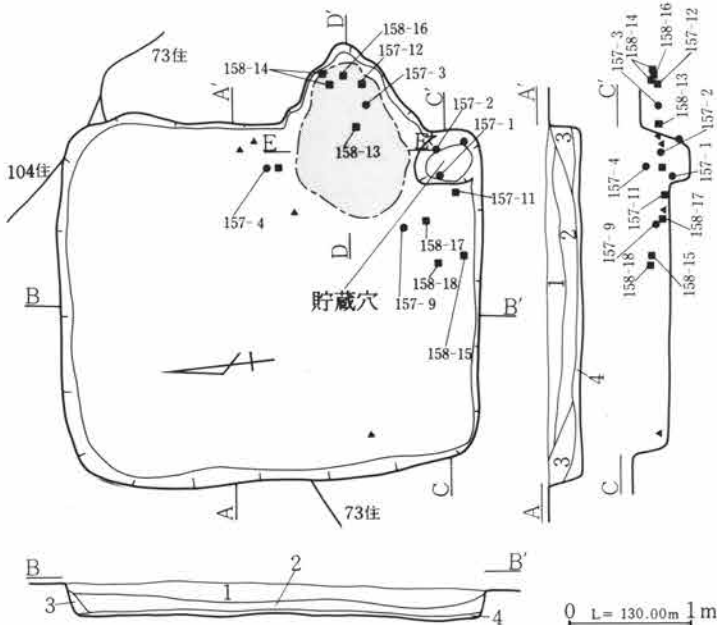


第153図 I区第65号住居跡出土遺物実測図(2)



第154図 I区第65号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第66号住居跡		位置	12~14-I-76~74グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.80m×3.34m	主軸方位	東-6度-南	残存深度	約25cm程

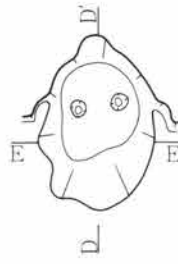
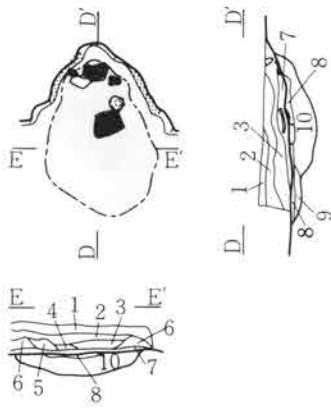


1. 暗褐色土 CPを少量、茶褐色土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 1層に類似し、茶褐色小ブロックをまばらに含む。
3. 暗褐色土 1・2層よりも黒味が強く、粘性が強い。
4. 暗褐色土 茶褐色小ブロックとⅦ層土粒を多量に含む。

第155図 I区第66号住居跡実測図(1)

(所見) 当住居跡は第73・106号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡が最も新しい時期のものである。床面の精査で南東コーナー部に径約44cm、深さ約18cmの不整形の貯蔵穴を検出した。カマドは東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-6°-南である。平面形は凸字形を呈し、規模は全長約76cm、燃焼部幅約95cmと住居規模と比較して大型である。燃焼部から屋内側まで広範囲に灰面が広がっており、凸字の肩に当たる部分は焼土化していた。また、燃焼部内からは瓦が数点出土しており、構築材として使用されていた可能性が高い。掘り方の調査では燃焼部に径約13cmの小ピットが2本検出されており、双脚の支脚の存在を想定できる。

第4章 検出された遺構・遺物

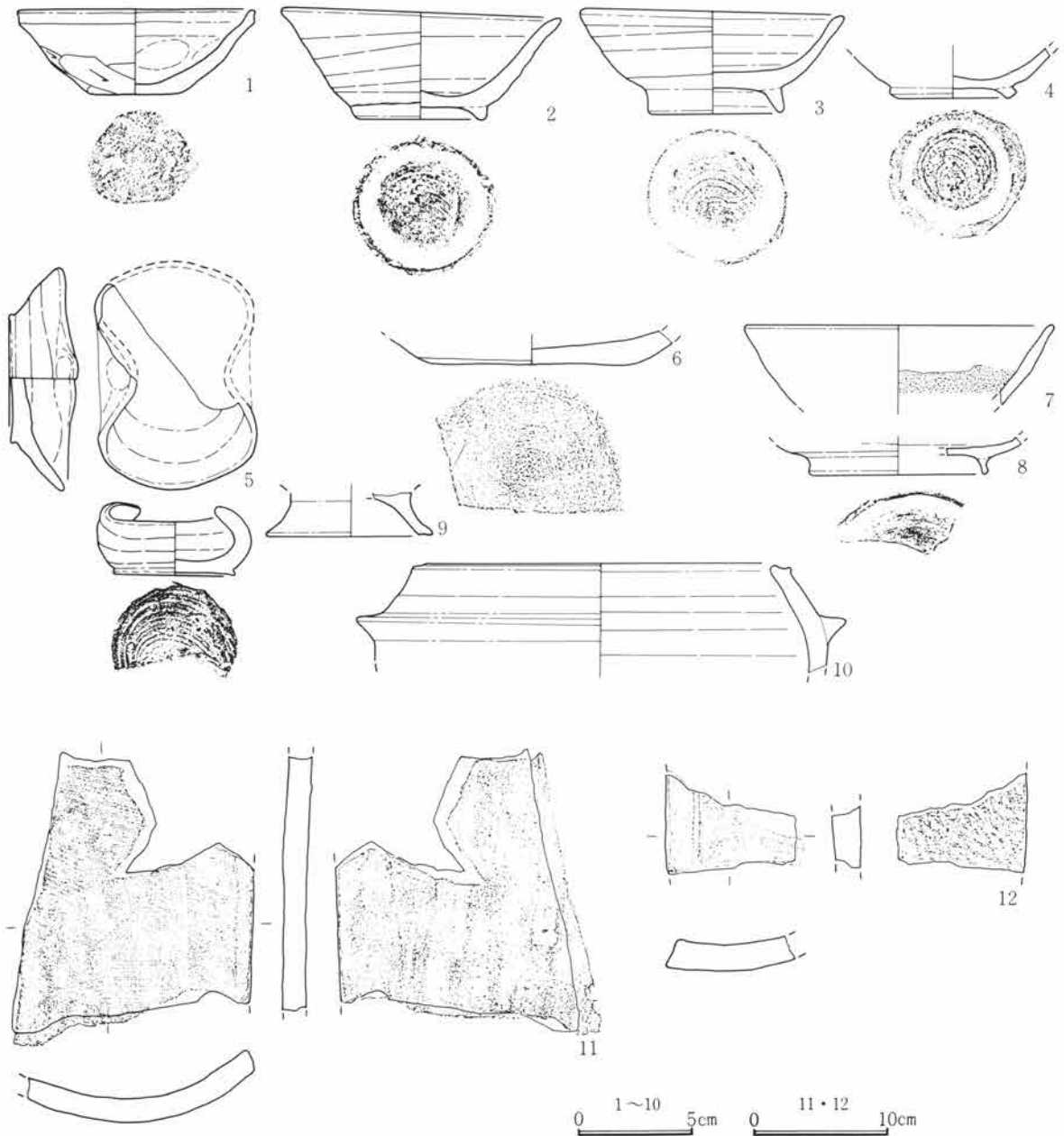


66号住 (カマド)

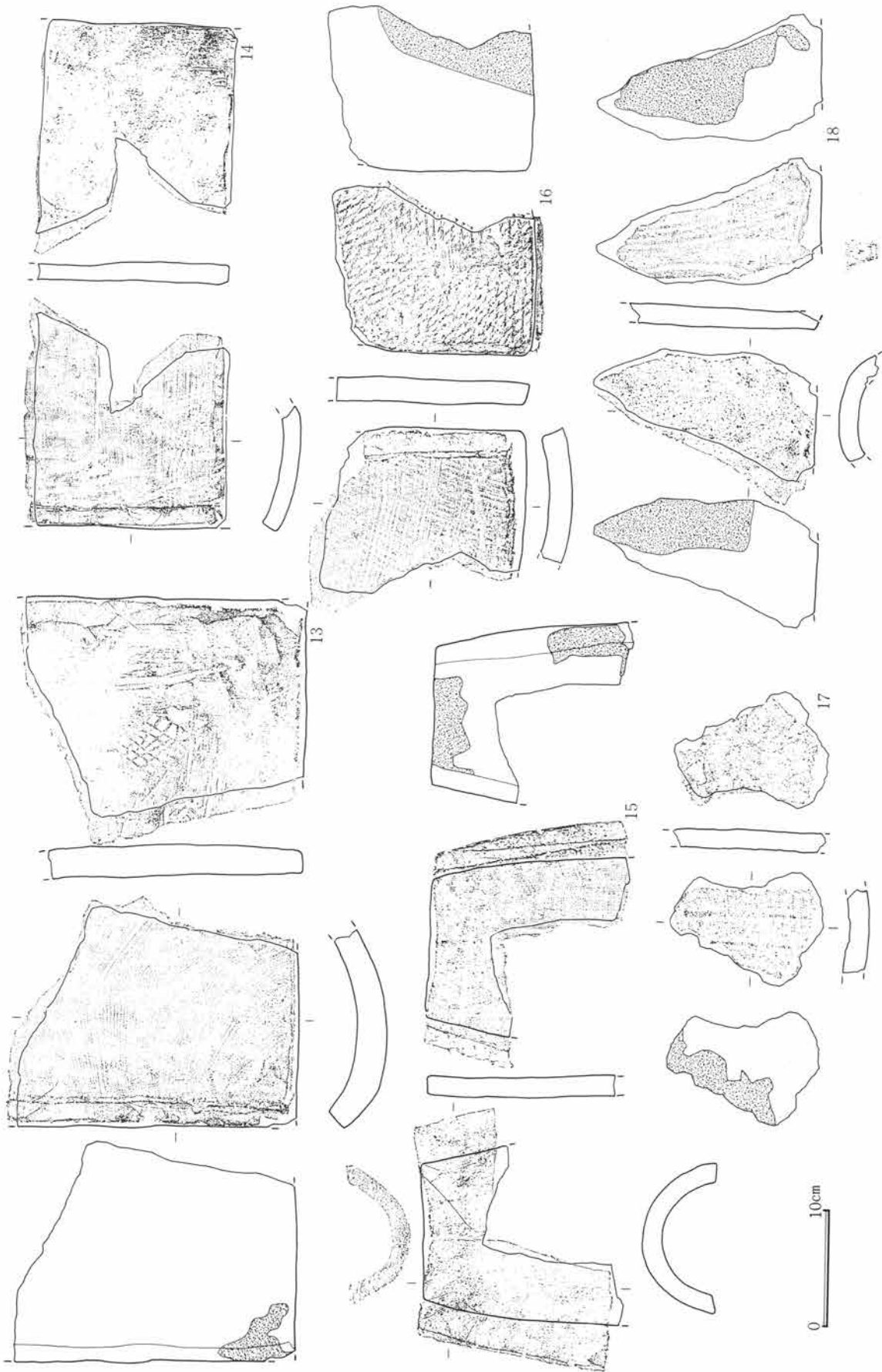
1. 暗褐色土 CPを少量含む。
2. 暗褐色土 茶褐色粒 (VI層土粒?) を少量含む。
3. 暗褐色土 灰褐色粒 (VII層土粒?) と炭化物を少量含む。
4. 暗褐色土 焼土ブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 焼土細粒を多量に含む。
6. 暗褐色土 2・3層に類似するが、含有物が少なく、全体に明るい。
7. 暗褐色土 焼土粒を少量と、炭化物を多量に含む。
8. 灰褐色土 灰を多量に含む。
9. 暗褐色土 10層よりも焼土粒の量が多い。
10. 暗褐色土 CPと焼土粒を含む。

0 1 = 130.00m 1 m

第156図 I区第66号住居跡実測図(2)



第157図 I区第66号住居跡出土遺物実測図(1)



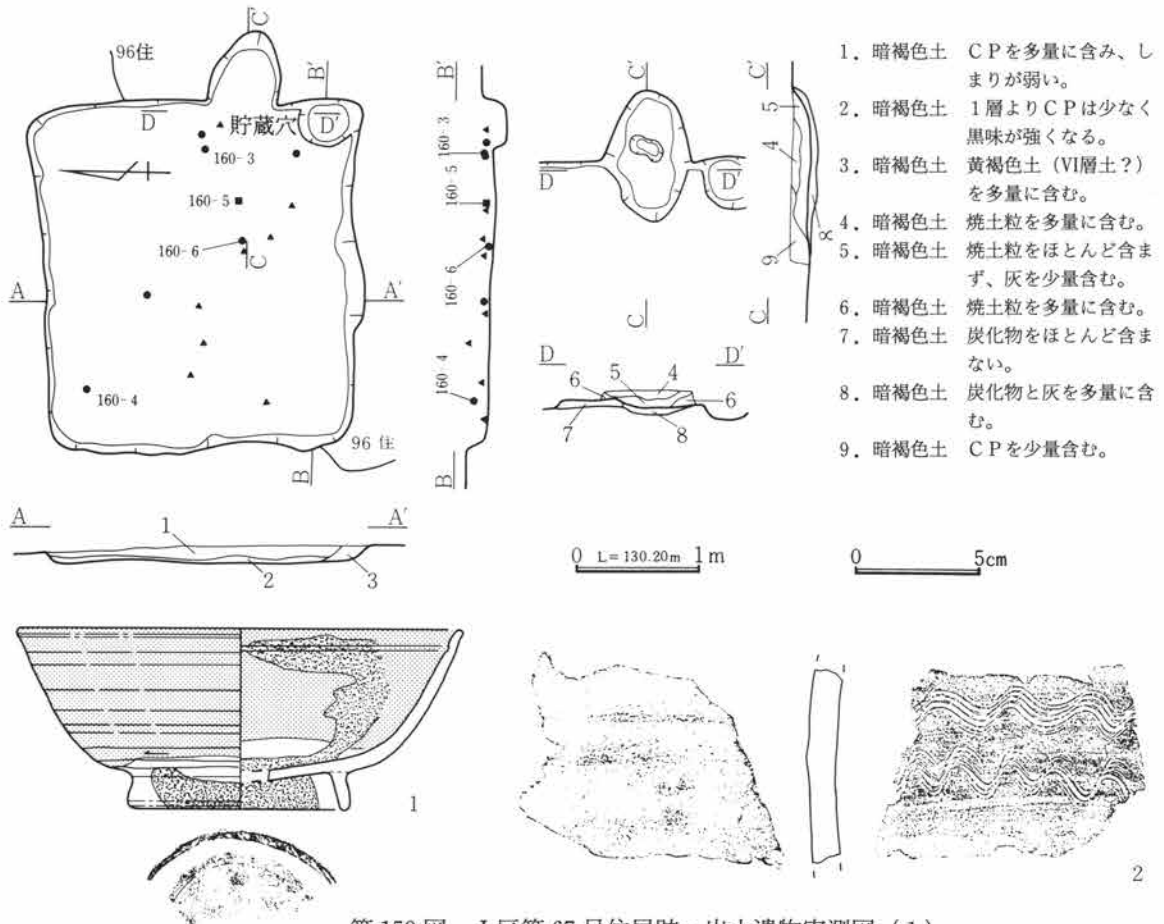
第158図 I区第66号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第67号住居跡		位置	8・9—I-77~79グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.78m×2.52m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約12cm程

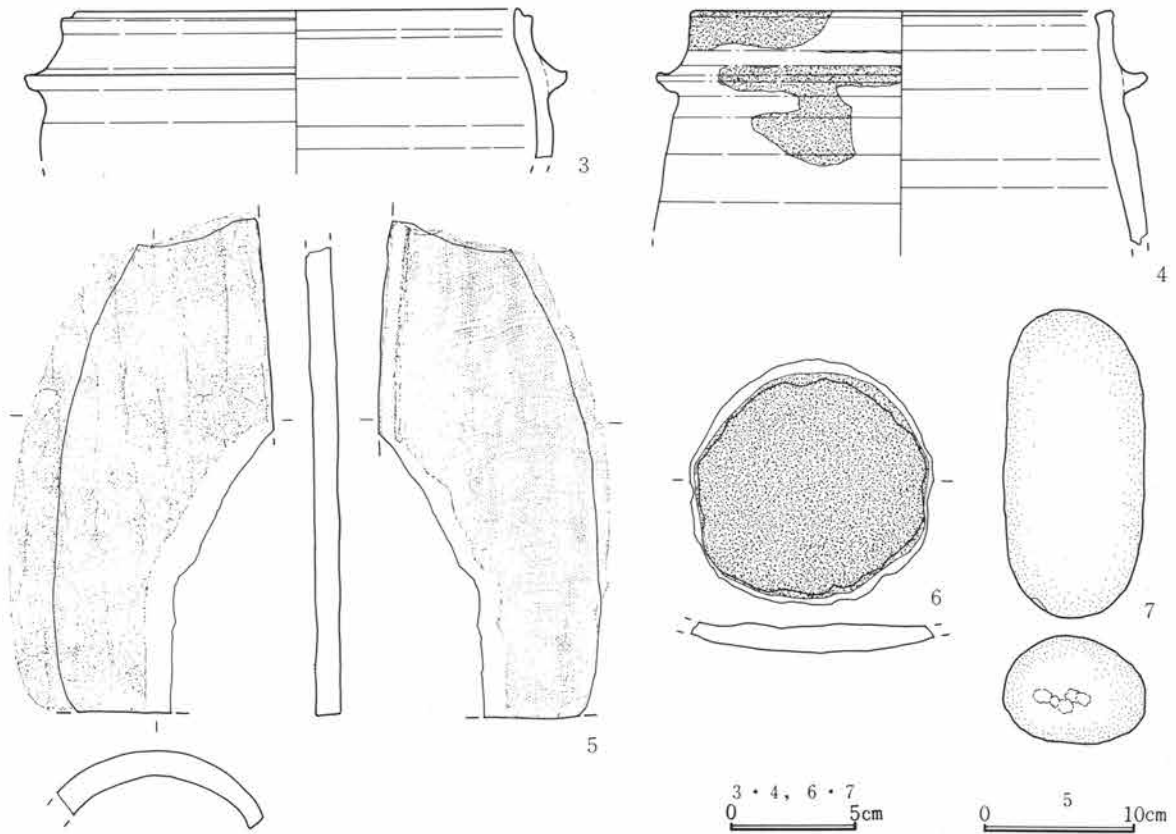
(所見) 当住居跡は第79・96・128号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡が最も新しい時期のものとして判断した。平面プランの確認は黄褐色のローム質のVI層土中で行ったので、重複部分以外については容易に検出することができた。しかし、確認面が下がったことと当住居跡の掘り込みが浅いことの相乗効果によって、当住居跡の残存状態はあまり良好ではない。他住居跡の覆土内及び軟質なVI層土中に構築された壁には崩落が認められ、平面全体に不整な感じが見受けられる。床面に貼床は施されていないが、他住居跡との重複部分に構築されているため、明瞭に捉えられたわけではなく遺物の出土レベルで押えた部分もある。この床面の精査によっても壁溝・柱穴は痕跡すらも検出できなかった。このことから当住居跡には当初からこの施設は掘削されなかったものと判断した。貯蔵穴は南東コーナー部で、径約39cm、深さ約13cmの円形を呈している。

カマドは東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-10°-南で住居跡の主軸方位からかなり南に振れている。平面形は砲弾形を呈しており、袖が屋内に張り出さないタイプである。残存部の規模は、全長約60cm、燃烧部幅約47cmである。燃烧部や屋内側に灰面や焼土は全く検出されず、貧弱な印象を受けた。掘り方の調査では、当カマドが105×65cm程の楕円形の掘り方を有していることが判明すると同時に、中央に約30×12cmの不整楕円形の小ピットが検出されたことから、支脚が据えられていた可能性がある。



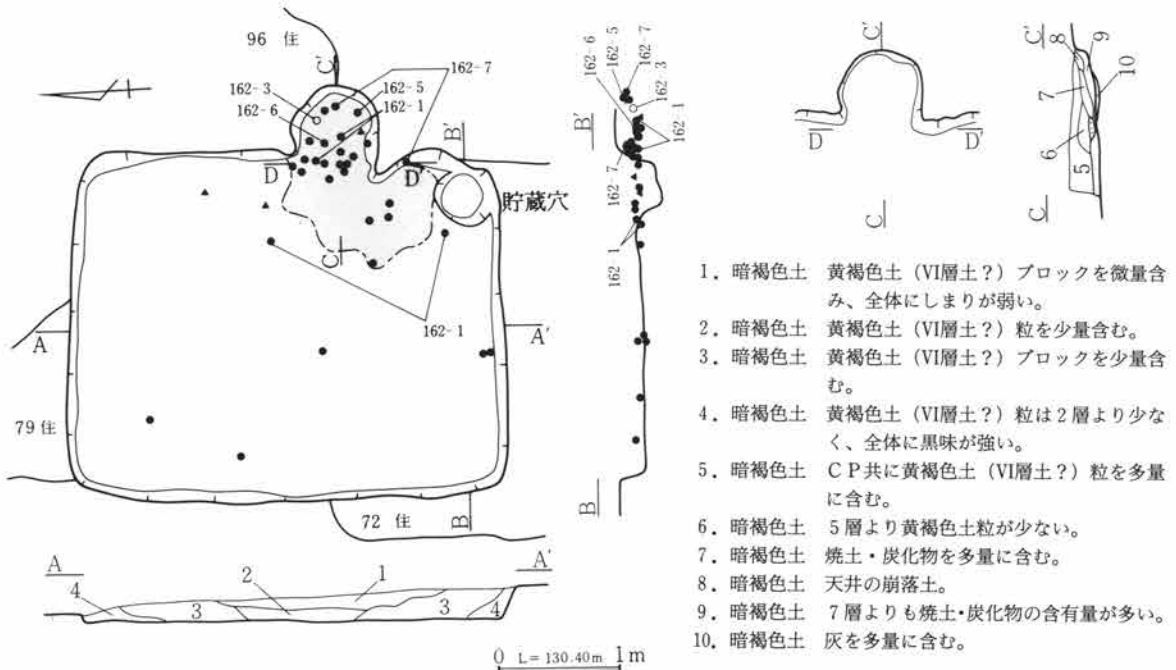
第159図 I区第67号住居跡・出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



第160図 I区第67号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第68号住居跡		位置	5~7-I-78~79グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.80m×3.45m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約18cm程



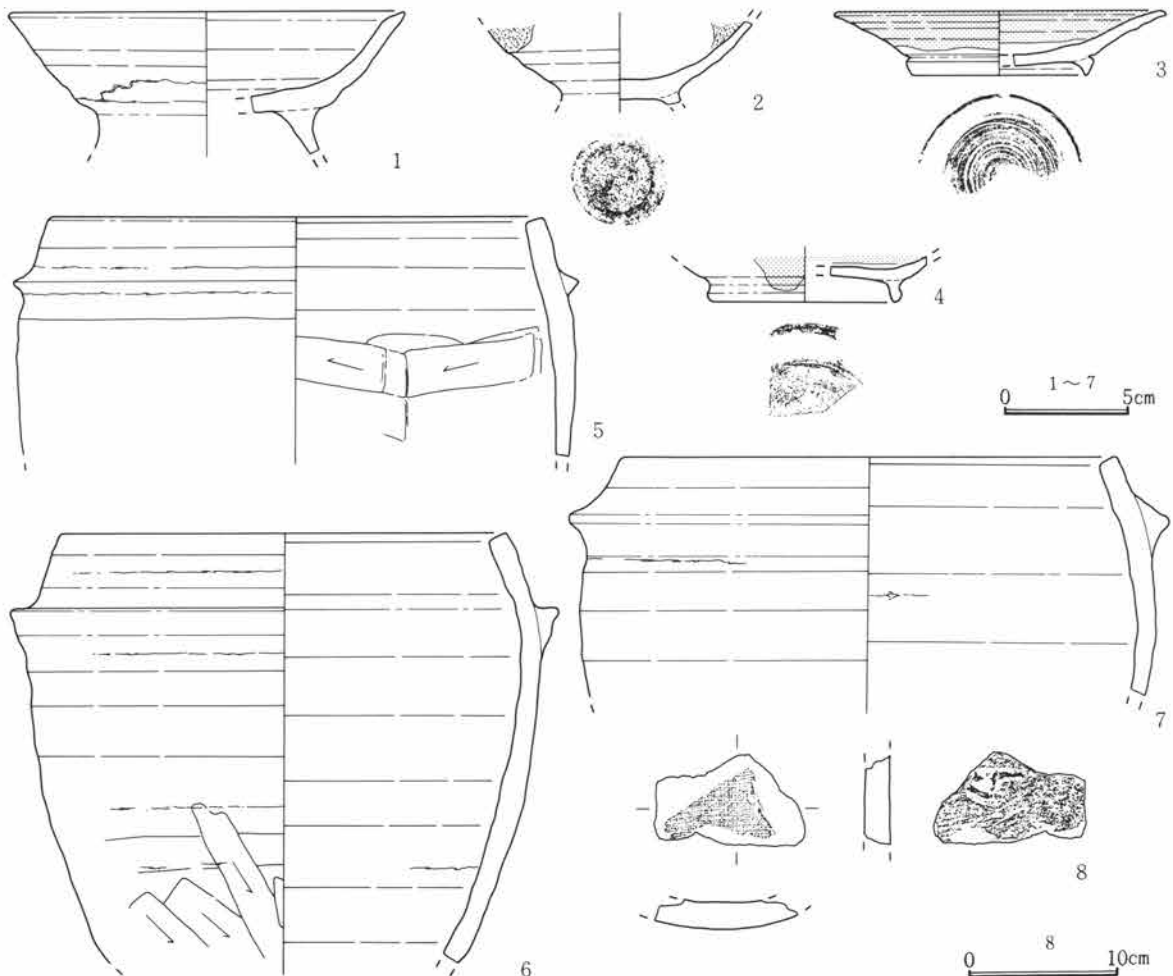
1. 暗褐色土 黄褐色土(VI層土?)ブロックを微量含み、全体にしまりが弱い。
2. 暗褐色土 黄褐色土(VI層土?)粒を少量含む。
3. 暗褐色土 黄褐色土(VI層土?)ブロックを少量含む。
4. 暗褐色土 黄褐色土(VI層土?)粒は2層より少なく、全体に黒味が強い。
5. 暗褐色土 C P共に黄褐色土(VI層土?)粒を多量に含む。
6. 暗褐色土 5層より黄褐色土粒が少ない。
7. 暗褐色土 焼土・炭化物を多量に含む。
8. 暗褐色土 天井の崩落土。
9. 暗褐色土 7層よりも焼土・炭化物の含有量が多い。
10. 暗褐色土 灰を多量に含む。

第161図 I区第68号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

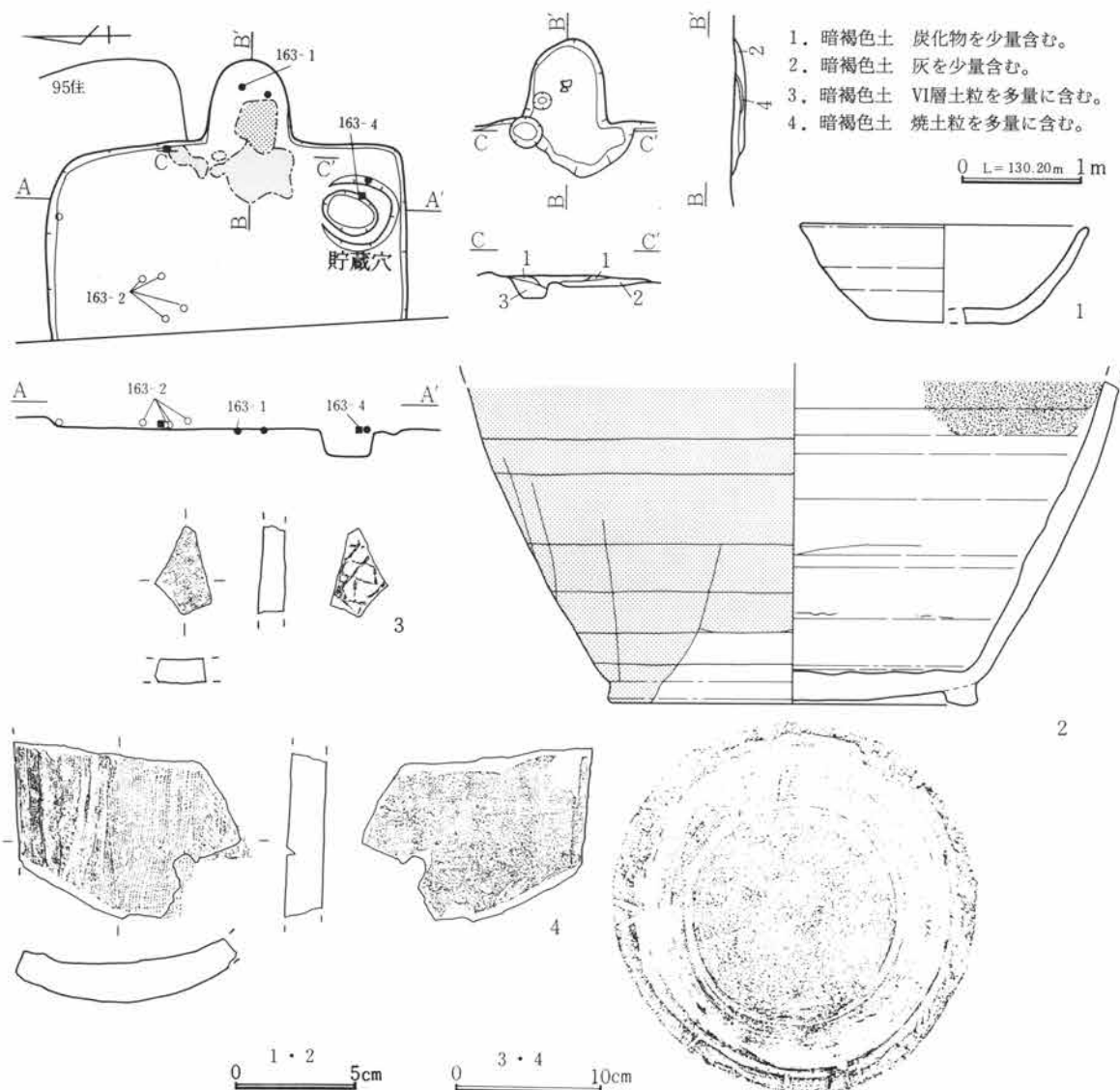
(所見) 当住居跡は第72・79・96号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態から当住居跡が最も新しい時期のものと考えられる。平面プランの確認はVI層土中で行ったが、他遺構との重複部分についても比較的明瞭に捉えることができた。第67号住居跡同様確認面が下がったことから壁等の残存は浅く、あまり良好ではないが、平面プランに不整な部分は認められない。覆土の状態は残りが浅いため明瞭に把握することはできなかったが、壁側からの埋没を示しており不自然さは感じられなかった。床面には貼床は全く施されておらず、他の住居跡の覆土中に構築されている。この面の精査で壁溝・柱穴は検出されなかったが、平面プラン・規模・時期等から判断して、柱穴等の施設が掘削されていないタイプとみて差し支えなさそうである。貯蔵穴は南東コーナー部に検出した円形の掘り込みで、規模は径約46cm、深さ約24cmである。

カマドは東壁中央やや南寄りに設置されており、主軸方位は東 -5° 南で住居跡の主軸方位と一致している。平面形は馬蹄形を呈しており、残存部の規模は全長約75cm、燃烧部幅約52cmである。左袖は全く認められなかったが、右袖が痕跡的に残存していたことから、本来は両袖がわずかに屋内に張り出すタイプであった可能性が強い。袖の構築材は残存していなかったが、掘り方の調査で壁との接合部両側にピット状の掘り込みが認められたことは、袖石等の構築材が据えられていたことを予測させるものであり、燃烧部から出土している自然礫等が使用されていた可能性もある。燃烧部から屋内右側にかけての範囲には、広範囲にわたって灰面が広がっており、燃烧部中央には灰面上に焼土も検出されている。また、この燃烧部の灰面上には第162図に提示した土器群が破片の状態で散在していた。



第162図 I区第68号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第69号住居跡	位置	11~13—I-80・81グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×2.95m	主軸方位	東—0度—北	残存深度	約5cm程

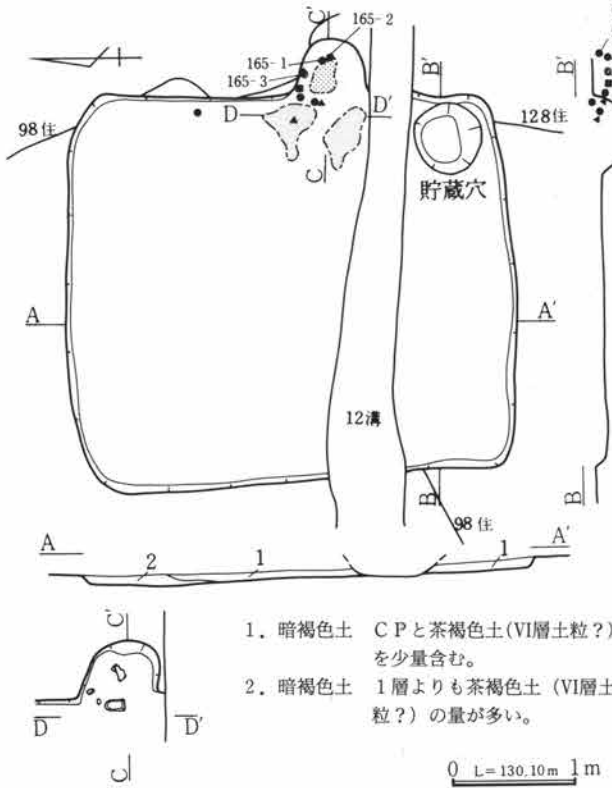


第163図 I区第69号住居跡・出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第95・98・106号住居跡と重複するが、遺構の検出状態や残存状態から当住居跡が最も新しい時期のものと考えられる。また、当住居跡は西半が調査区外にかかっているため、全体の調査は不可能であった。遺構の確認面はあまり深くないにもかかわらず遺構の残存は非常に悪く、特にカマドを含む東壁などはわずかにプランがわかる程度であった。したがって壁の状態については言及できない。床面は他住居跡の覆土中に構築されているため、遺物の出土レベルで捉えた。この面に硬化した部分等は全くなく、壁溝・柱穴は検出することはできなかった。貯蔵穴は南東コーナー部のやや西寄りに検出され、規模は約47×36cm、深さ約20cmの楕円形を呈している。この貯蔵穴周辺はわずかに周堤状に高くなっており、貯蔵穴周囲に粘土の貼られた例と共通する要素なのかもしれない。

カマドは東壁ほぼ中央に設置されており、主軸方位は東—0°—北で住居の主軸方位と一致している。わずかに底面が残存しているだけであるが、燃焼部に焼土面を、その前面に灰面を検出した。

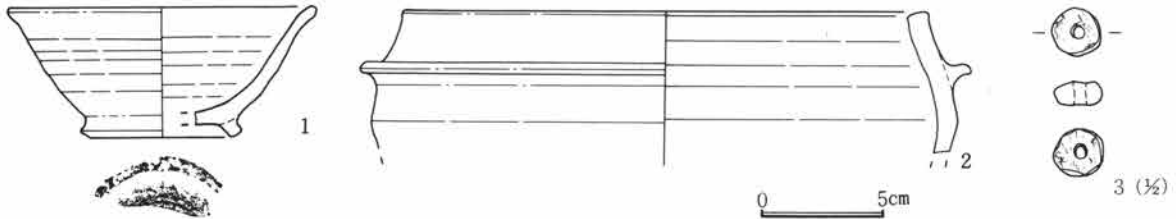
遺構名称	I区第70号住居跡		位置	10・11-I-78~80グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.06m×3.56m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約8cm程



1. 暗褐色土 CPと茶褐色土(VI層土粒?)を少量含む。
2. 暗褐色土 1層よりも茶褐色土(VI層土粒?)の量が多い。

第164図 I区第70号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第73・98・106・128号住居跡と第12号溝状遺構と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態から第73・98・106・128号住居跡→当住居跡→第12号溝状遺構と考えられる。当住居跡は大半が他住居の覆土中に構築されているため、壁・床面等を明瞭に捉えることはできなかった。また、同様に曖昧な床面の精査によって壁溝・柱穴を検出することはできなかったが、住居形態・規模から類推して、これらの施設は掘削されなかった可能性が高い。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、規模は径約53cm、深さ約18cmである。カマドは東壁中央やや南寄りに設置されており、主軸方位は東-0°-北である。残存状態は極めて不良であるが、灰面の広がっている位置などから、両袖共屋内に張り出さないタイプと考えられる。その他、支脚等の残存はなく、燃烧部中央から焼土面を、その前面2ヵ所から灰面を検出した。

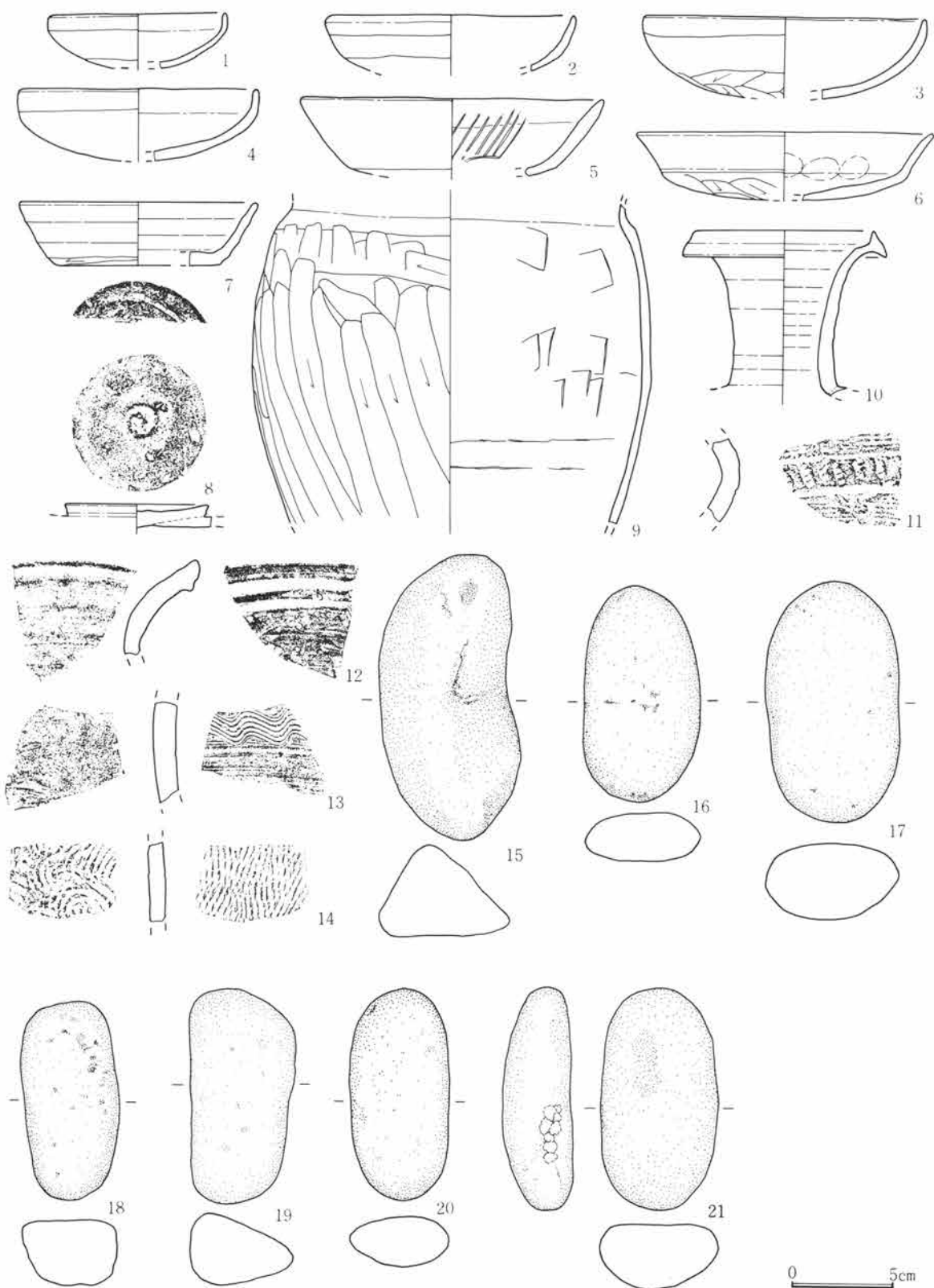


第165図 I区第70号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第71号住居跡		位置	8~11-I-73~75グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.55m×4.65m	主軸方位	東-10度-北	残存深度	約40cm程

(所見) 当住居跡は第84号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態等から第84号住居跡→当住居跡と考えられる。平面プランの確認は黄褐色のローム質のVI層土中で行った結果、重複部分以外のプランは容易に検出することができた。壁は南側程崩落によると考えられる、平面形の崩れが顕著である。壁溝は部分的に途切れるものの、カマド部分を除いてほぼ全周検出した。規模は下幅約4~10cm、深さ約3~6cmである。床面にはほぼ全面にわたって貼床がほどこされている。柱穴は床面の精査によって検出されず、また、掘り方の調査でも柱穴と考えられるピットは認められないことから、当初から掘削されなかったものと思われる。貯蔵穴は東コーナー部で楕円形を呈し、規模は約61×53cm、深さ約13cmである。この中央部底面から第167図9に示した口縁部と胴部下半を欠いた土師器甕が出土しているが、ちょうど頸部が床面と同じレベルになってお

第4章 検出された遺構・遺物

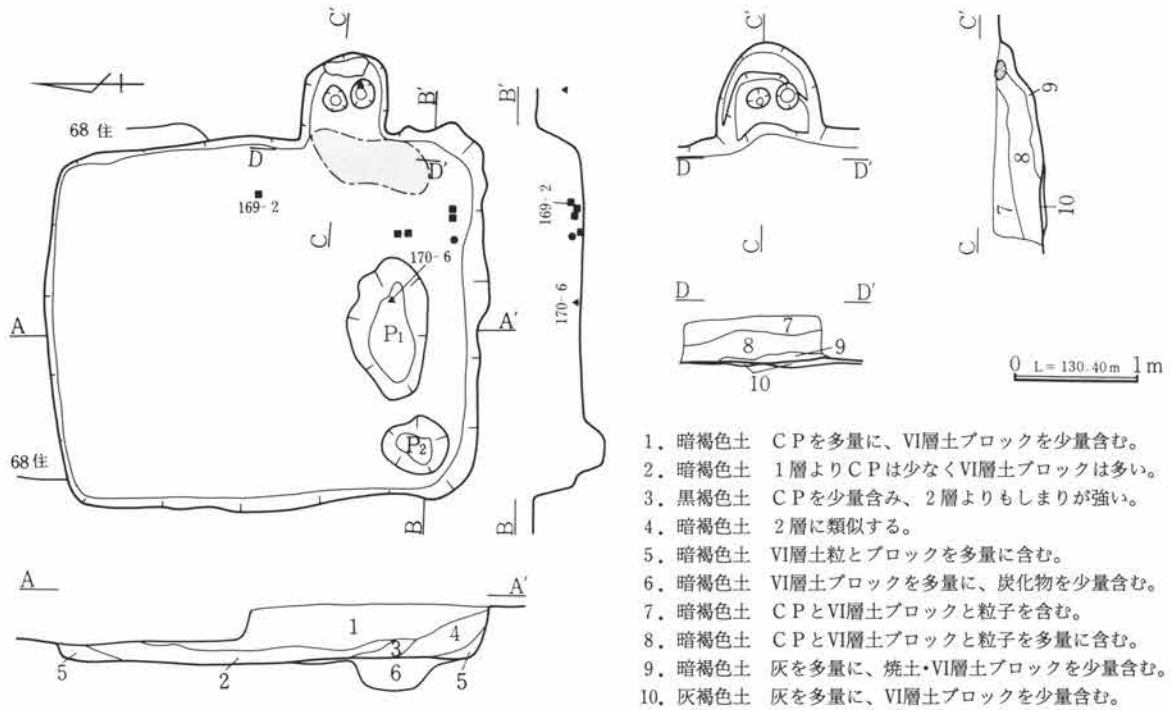


第167図 I区第71号住居跡出土遺物実測図

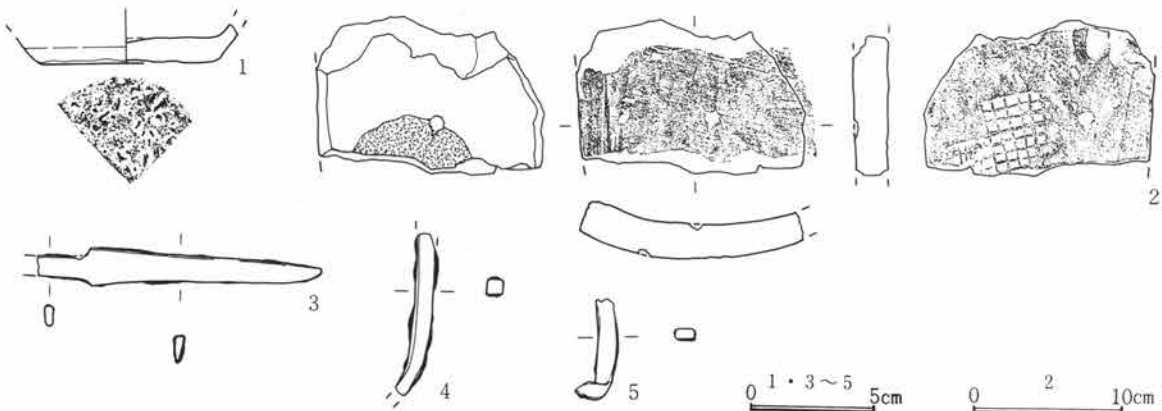
遺構名称	I区第72号住居跡		位置	4～6-I-78～80グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.98m×3.45m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約47cm程

(所見) 当住居跡は第68号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第68号住居跡と考えられる。平面プランの確認は黄褐色ローム質のVI層土中で行ったため、重複部分以外は容易に捉えることができた。覆土の堆積状態は図示した通りであり、周囲からの埋没過程を示しており不自然さは感じられない。壁は、全周比較的明瞭に検出することができたが、特に南側のプランに不整な部分が認められることから、この部分の壁が崩落している可能性が高い。床面は、中央南寄りに検出した掘り込み(P₁)部分を除いて、貼床は全く施されていない。つまり、VI層土をそのまま床面として使用していたことがわかる。この床面の調査では壁溝・柱穴共に、痕跡も検出されなかったことから、これらの施設は当住居跡には掘削されなかったものと判断した。前述のように、P₁には貼床が施された痕跡があり、住居使用当時は埋没していたと考えられる。この掘り込み中からは第170図6の敲石が出土している。P₁同様に床面の精査段階に南西コーナー部に検出したP₂は、位置や規模等から判断して貯蔵穴と考えた。この掘り込みの規模は、約53×47cm、深さ約20cmで、平面形は不整形円形を呈している。この貯蔵穴内部から遺物の出土は認められなかった。

カマドは東壁南寄りに設置されており、主軸方位は東-0°-北である。平面形は両袖共屋内に張り出さな

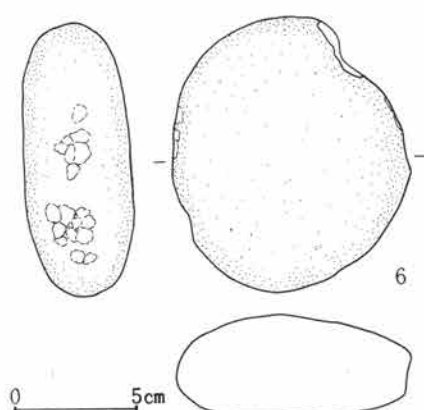


第168図 I区第72号住居跡実測図



第169図 I区第72号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第170図 I区第72号住居跡出土遺物実測図(2)

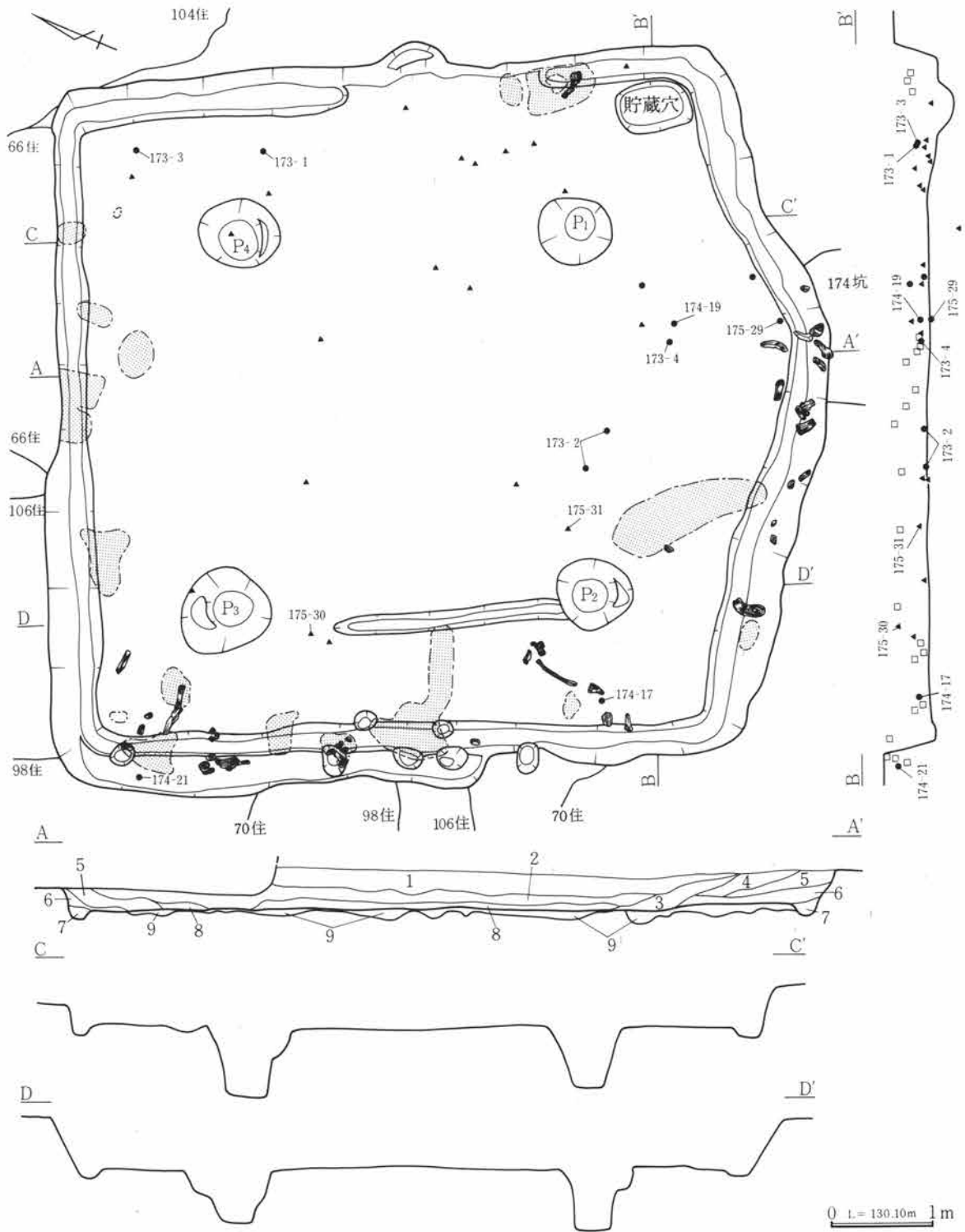
い馬蹄形を呈している。残存部の規模は、全長約77cm、燃焼部幅約55cmであり、焚口に当たる部分には広範囲に灰面が検出されている。燃焼部奥壁に当たる位置から浮いた状態で出土の長さ35cm程の自然礫は、偶然に入り込んだようには見えず、カマド天井部などの構築材として使用されたものと思われる。掘り方の調査によっても袖石や支脚等の構築材は検出されなかった。しかし、燃焼部には径18cm程の円形小ピットが、2本並列して検出されたことから、これを据え方とする双脚の支脚の存在が予測される。

遺構名称	I区第73号住居跡		位置	9～14—I-75～79グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	6.80m×7.38m	主軸方位	東-21度-北	残存深度	約42cm程

(所見) 当住居跡は、第66・70・98・104・106・128号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態から判断して、第98・104・106・128号住居跡→当住居跡→第66・70号住居跡という新旧関係と考えられる。この関係は出土遺物の比較からも大きな齟齬は来さないことがわかる。平面プランの確認は、黄褐色ローム質のVI層土であったため、重複部分以外については容易に検出することができた。重複部分についても、第66・70号住居跡は先行調査しており、遺構確認の障害とはならなかった。平面プランは基本的には隅丸方形であるが、南東壁中央部が張り出すことによって五角形状を呈する特異なものである。当遺跡の類例としては第61・81～83号住居跡などがあり、同時期の他形態の住居との関係が課題となる。覆土の埋没状態は、多くの層に分層されたことを除いて、これまでの調査例との相違はみられず、不自然さも感じられない。壁は全周欠けることなく検出され、遺構の掘り込みが深かったために壁の残存状態は全体に比較的良好である。しかし、張り出しのみられる南東壁は、傾斜が他の部分と比較して明らかに弱いことから、壁が崩落していることが予想される。床面には全体に5～10cm程の貼床が施されていたが、貼床面での顕著な硬化面は部分的にも観察されなかった。この床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴等を検出することができた。壁溝はカマド部分を除いて全周検出され、規模は下幅約10～25cm、深さ約9～12cmである。柱穴はP₁～P₄(径約70～80cm、深さ約51～65cm、柱穴間距離P₁～P₂間約3.5m、P₂～P₃間約3.5m、P₃～P₄間約3.5m、P₄～P₁間約3.3m)の4本であり、この内のP₂～P₄の3本に中段がみられた。また、南西壁に沿うように検出した小ピットは、他の住居跡にも類例がみられ、補助的な柱穴である可能性を考えている。その他、P₂からP₃に向かって、上幅約20cm、下幅約5～9cm、長さ約2.3mの規模で、間仕切状の溝が掘削されていた。貯蔵穴は東コーナー部に検出した隅丸長方形の土坑状の掘り込みで、規模は70×48cm、深さ約18cmと比較的貧弱である。壁溝上面から床面にかけて、上屋の部材と考えられる炭化材や焼土の広がり認められた。また、覆土中の壁側の層中にも多くの炭化物が含まれていたことが土層断面観察から捉えられた。これらの状況から、当住居跡が焼失した可能性が高い。しかし、柱材に燃え落ちた痕跡がないことや遺物の残存が良くないことなどから失火による焼失ではなく、故意によるものであろう。

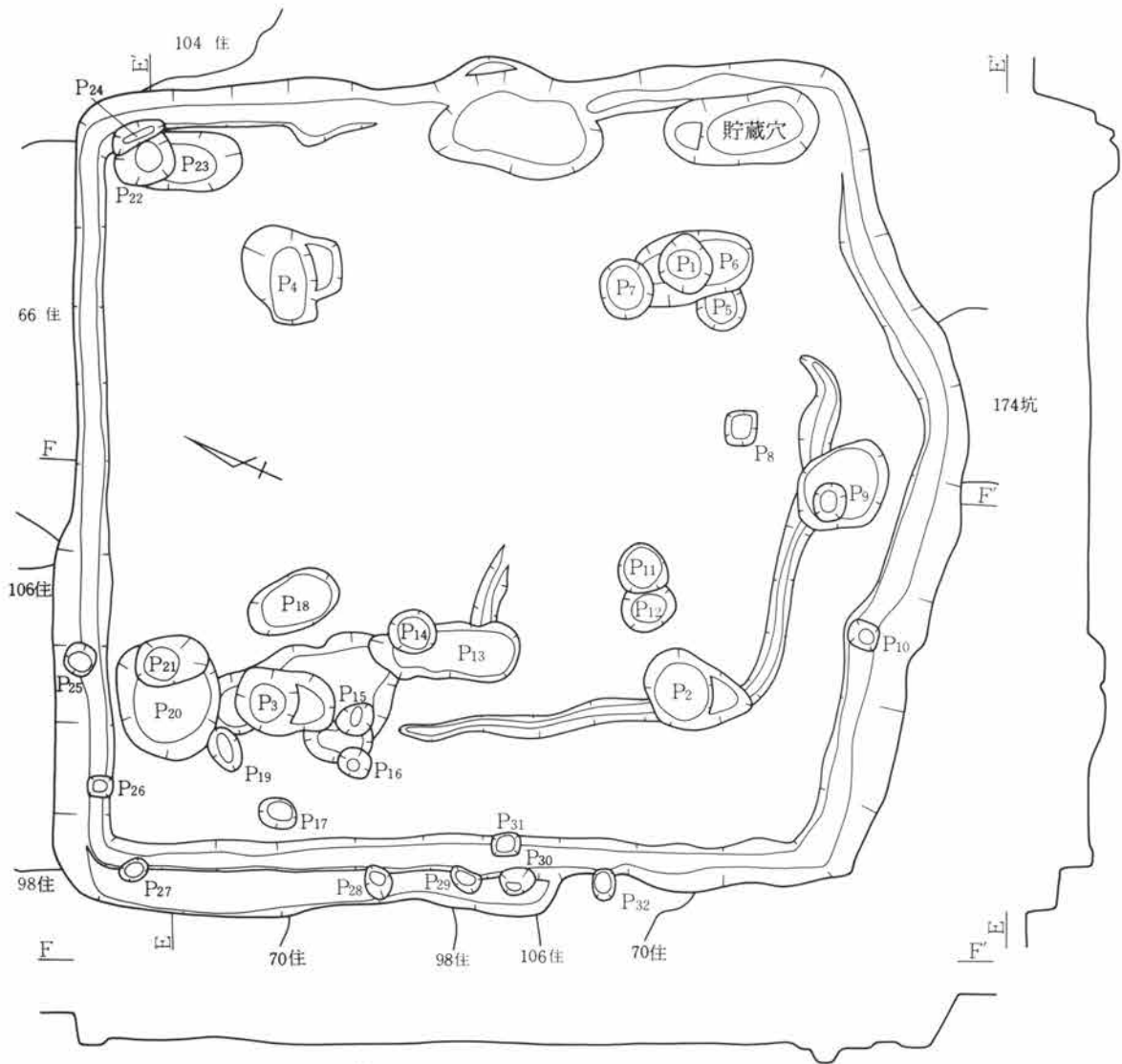
カマドは北東壁のほぼ中央に位置しているが、わずかに壁が掘り込まれた程度の残存であり、平面形態などは全くわからない。

遺物は床面付近から多く出土したが、完形のものではなく廃棄された状態を示していると思われる。

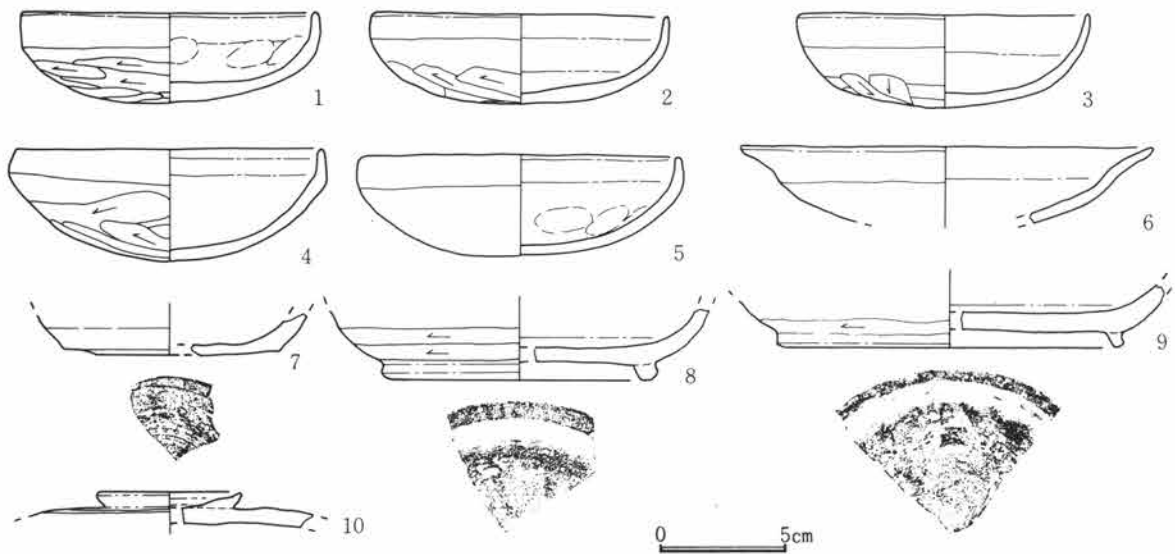


- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| 1. 暗褐色土 C PとVI・VII層土粒を多量に含む。 | 5. 暗褐色土 VII層土粒を少量と、炭化物の破片を多量に含む。 |
| 2. 暗褐色土 含有物の全体量は少なくなるが、VII層土粒の量が多い。 | 6. 暗褐色土 炭化物は大破片となり、全体にしまりが弱い。 |
| 3. 暗褐色土 1・2層に類似するが、炭化物が少量含まれる。 | 7. 暗褐色土 焼土粒を多量に含み、しまりが弱い。 |
| 4. 暗褐色土 3層に類似するが、焼土粒・炭化物を少量含む。 | 8. 暗褐色土 C Pを多量に含み、全体に黒味が強い。 |
| | 9. 暗褐色土 焼土粒を微量含み、粘性が弱い。 |

第171図 I区第73号住居跡実測図(1)

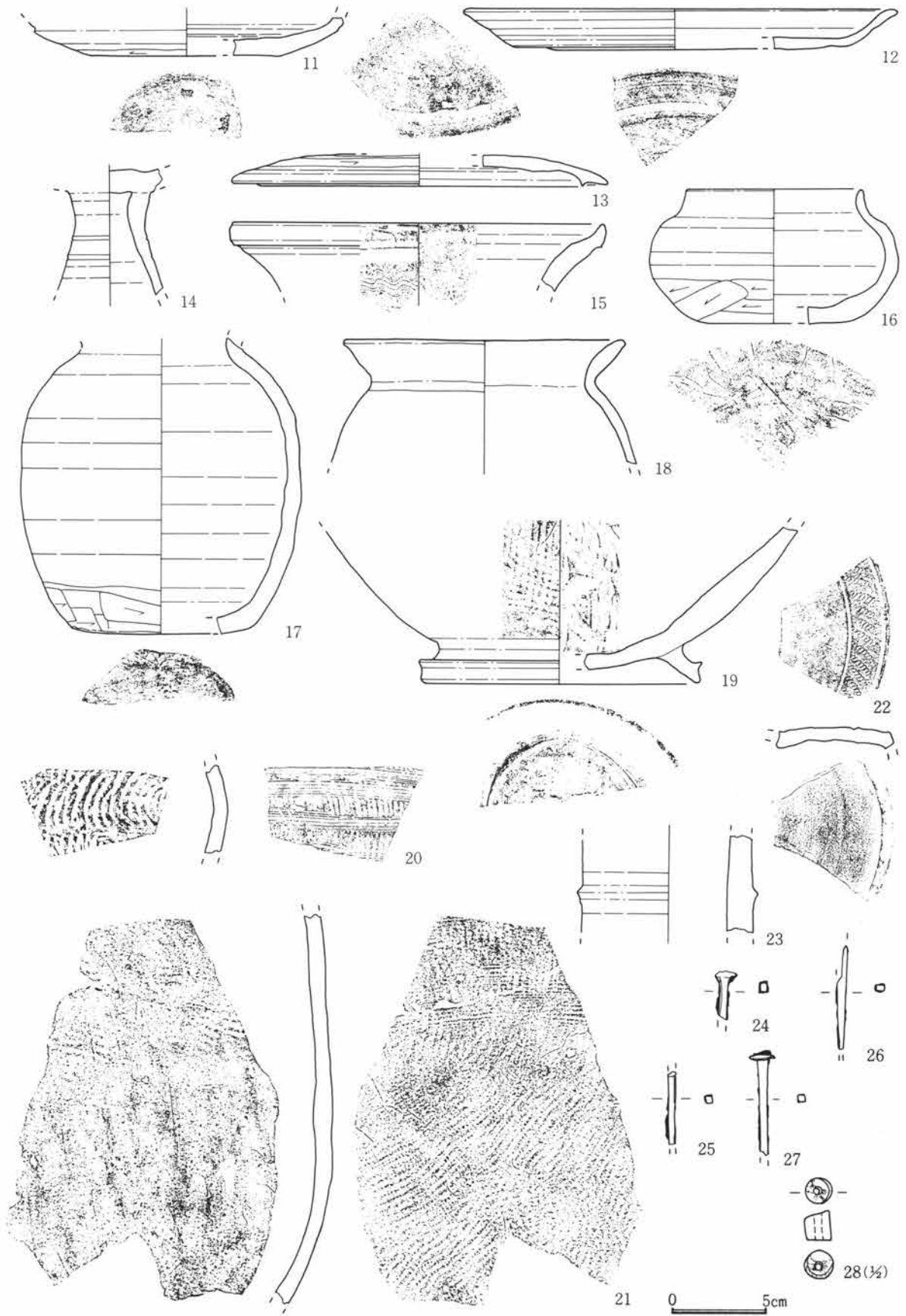


第172図 I区第73号住居跡実測図(2)



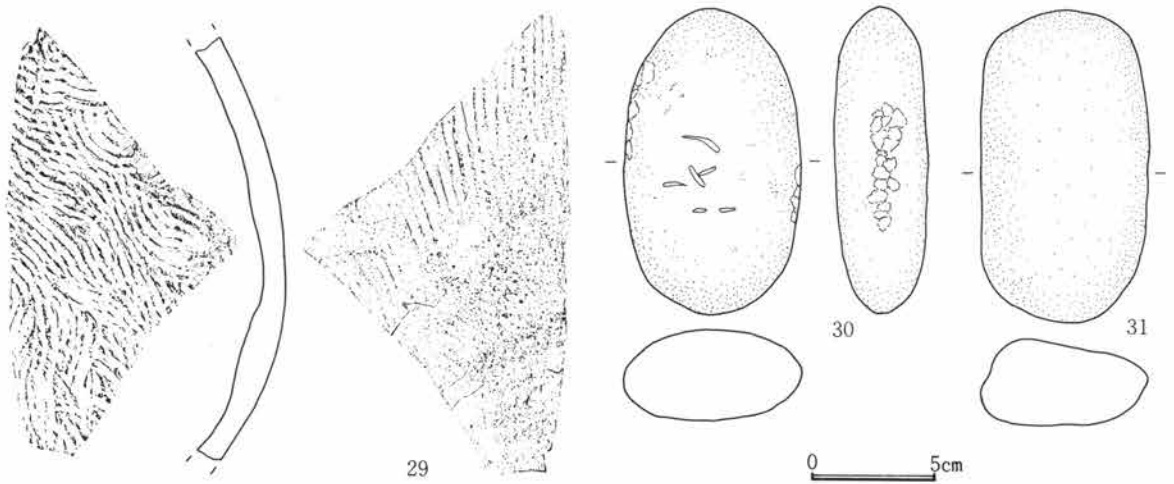
第173図 I区第73号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



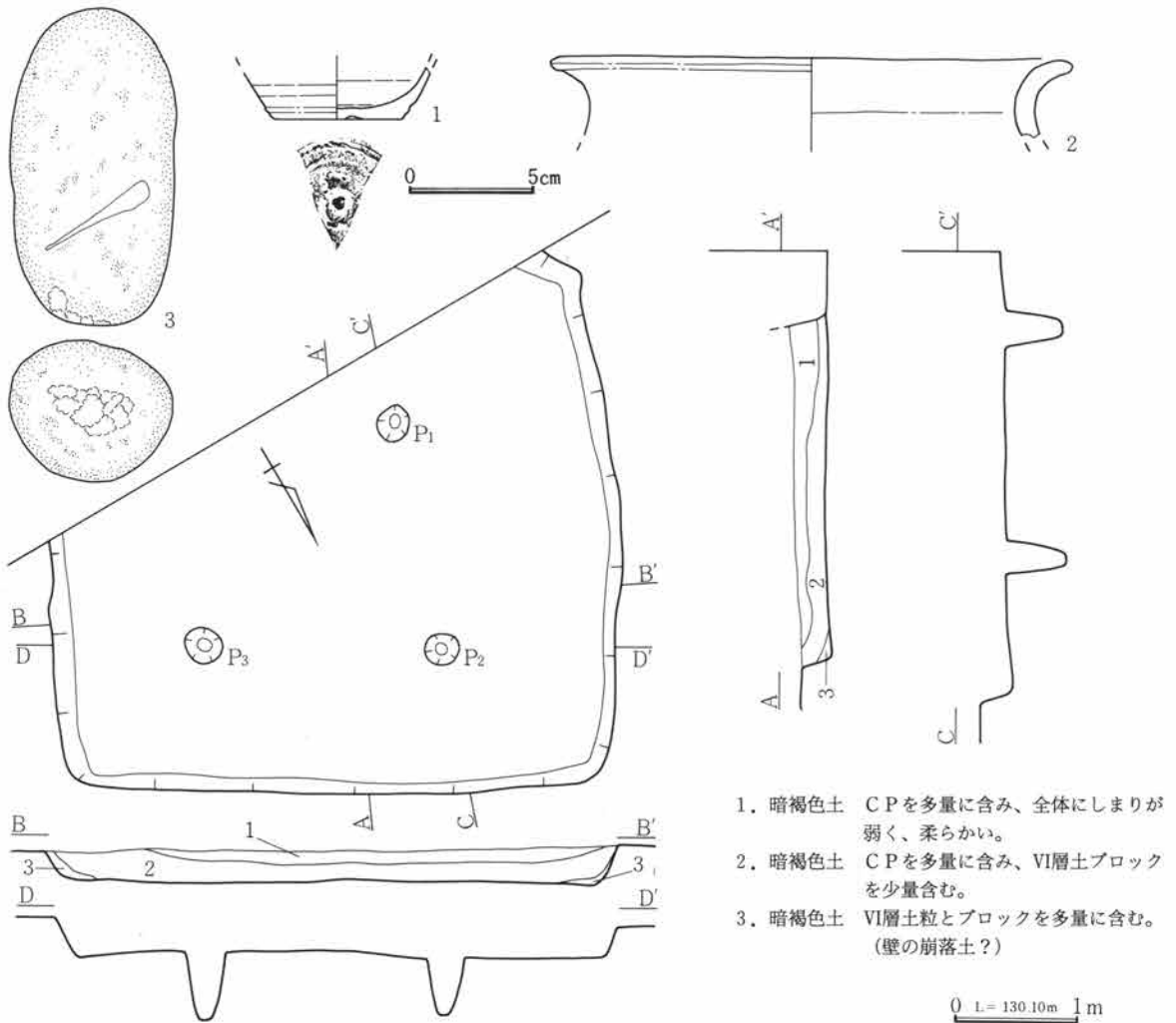
第174図 I区第73号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



第175図 I区第73号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第75号住居跡	位置	0～2-I-69～72グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	1m×4.55m	主軸方位	南-30度-西	残存深度	約25cm程



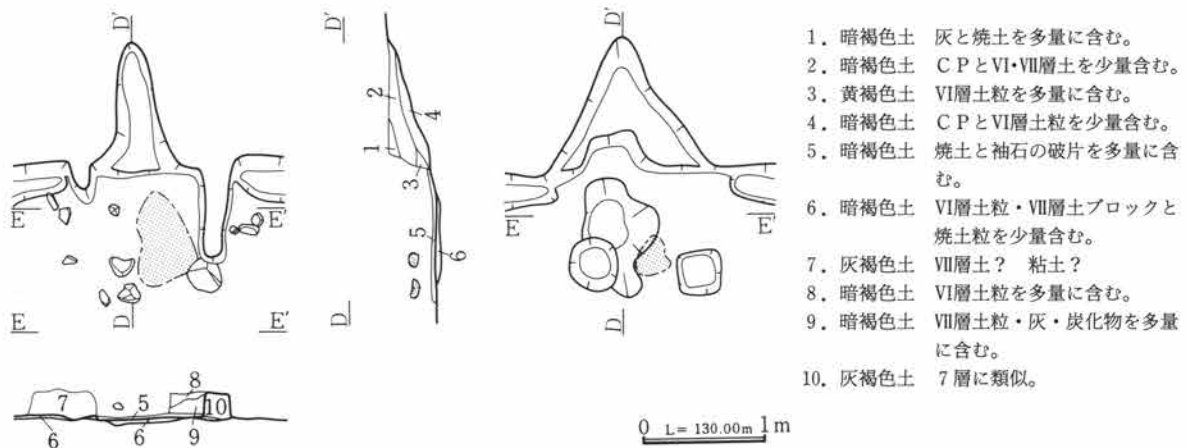
第176図 I区第75号住居跡・出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は南側が山王線と呼ばれる舗装道路下にかかって検出したため、カマドを含む部分の調査ができなかった。壁の残存は比較的良好であり崩落によると思われる形態の崩れはみとめられない。また、床面には貼床は部分的にも施されていない。壁溝は検出されず、柱穴はP₁～P₃(径約25～30cm、深さ約44～54cm、柱穴間距離P₁～P₂間約1.8m、P₂～P₃間約1.9m)の3本を検出した。貯蔵穴及びカマドは南東壁から南コーナー部にかけた位置に設置されているものと考えられる。

遺構名称	I区第76号住居跡		位置	1～3-I-63～68グリッド内			
平面形態	—	規模	—m×8.50m	主軸方位	北—18度—西	残存深度	約45cm程

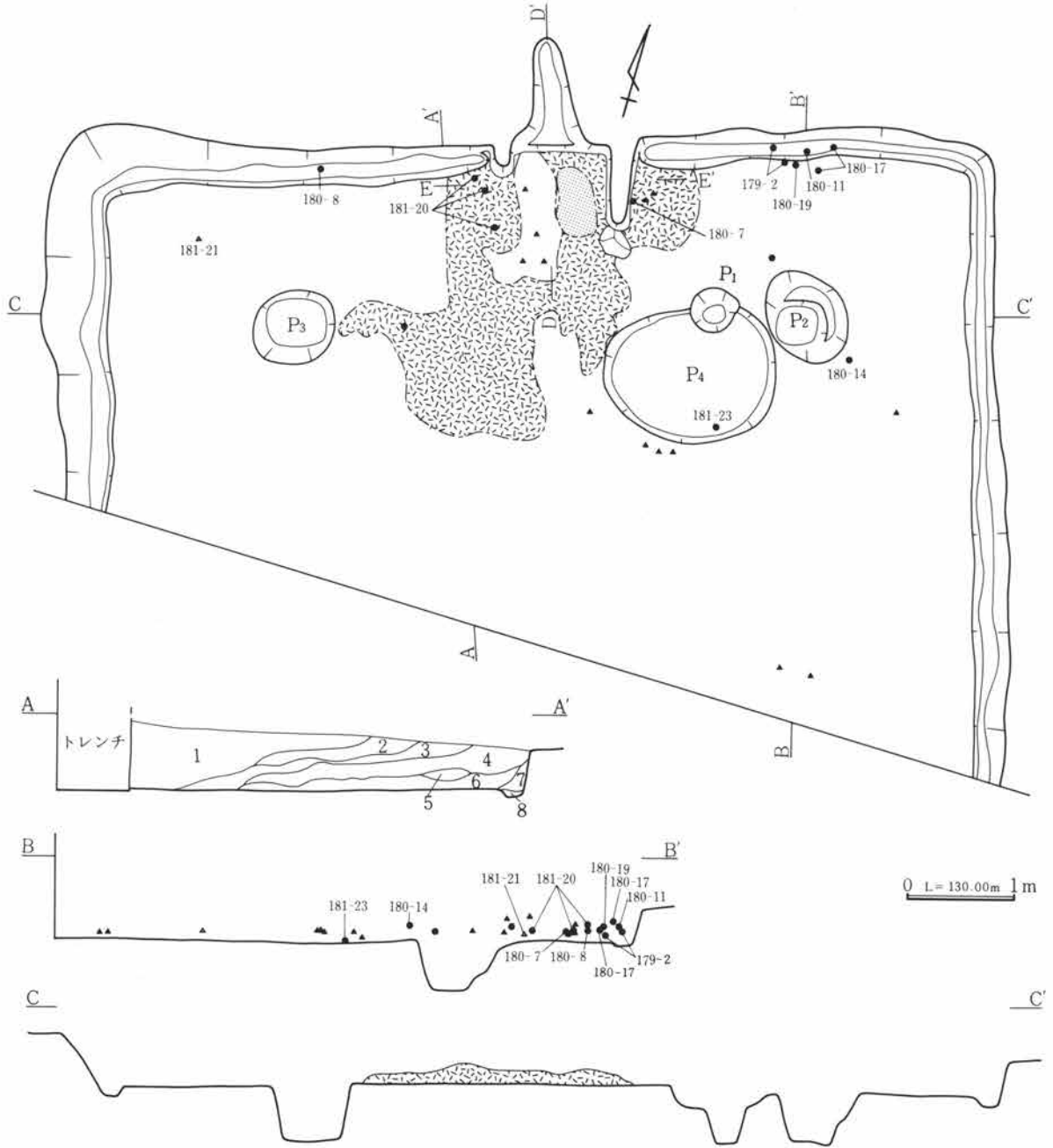
(所見) 当住居跡は南側半分が第75号住居跡同様に山王線下にかかっており、全体の検出は不可能であった。北コーナー部付近で第126号住居跡と接するような重複をしているが、出土遺物の比較から当住居跡→第126号住居跡と考えられる。当住居跡の規模は表中にも掲げた通り、一辺が8.5mにも及び当遺跡検出の竪穴住居跡の中では最大規模のものである。覆土の埋没状態に関しては、掲載した土層断面図からもわかるように、当住居跡においても壁側からの埋没過程が看取できる以外に不自然な堆積状態は認められない。壁の残存は比較的良好であったが、西コーナー付近の壁に崩落の痕跡が窺える。床面には貼床は全く施されておらず、状況的にみて未検出部分についても同様と思われる。したがって当住居跡の床面はVII層土中に構築されており、比較的硬くしまっていた。この床面の精査によって壁溝と4本のピットを検出した。壁溝は調査部分については全周検出した。規模は下幅約5～15cm、深さ約3～7cmであり、壁の崩落の痕跡として捉えた南東壁部分がやや幅広の傾向が認められる。柱穴は4本検出したピットの内、位置や規模からP₂(約90×70cm、深さ約47cm)・P₃(約75×66cm、深さ約51cm)の2本で、柱穴間距離は約4.5mである。P₂に接するように検出したP₄(約156×122cm、深さ約16cm)からは第181図23に示した黒色土器塊が出土していることなどから、当住居跡には伴わない土坑である可能性が強い。

カマドは北西壁の中央に設置されており、主軸方位は北—18°—西である。平面形は両袖が屋内に長く張り出した凸字形を呈するものと考えられるが、左袖部はほとんど残存していない。残存部の規模は、全長約200cm、燃烧部幅約80cm、煙道長約97cm、下幅約15cmである。残存した右袖先端には角柱状の截石が出土しており、構築材として使用されていたことが窺える。また、カマド部から屋内の広範囲にわたって、最大約17cmの厚さで白色の粘土が検出されている。これはカマド本体がこれらの粘土を用いて構築されていたものが崩壊したものと思われる。



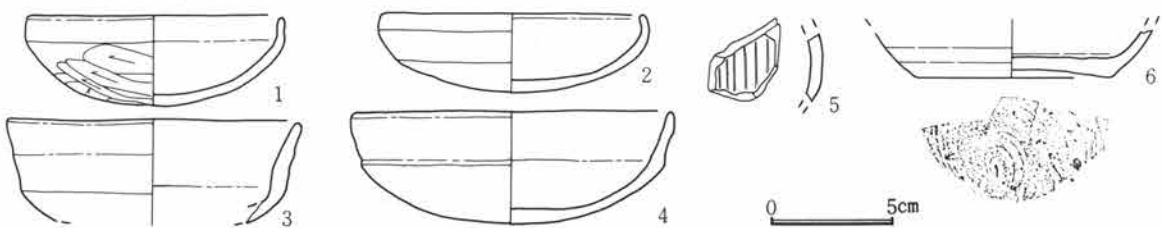
第177図 I区第76号住居跡実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

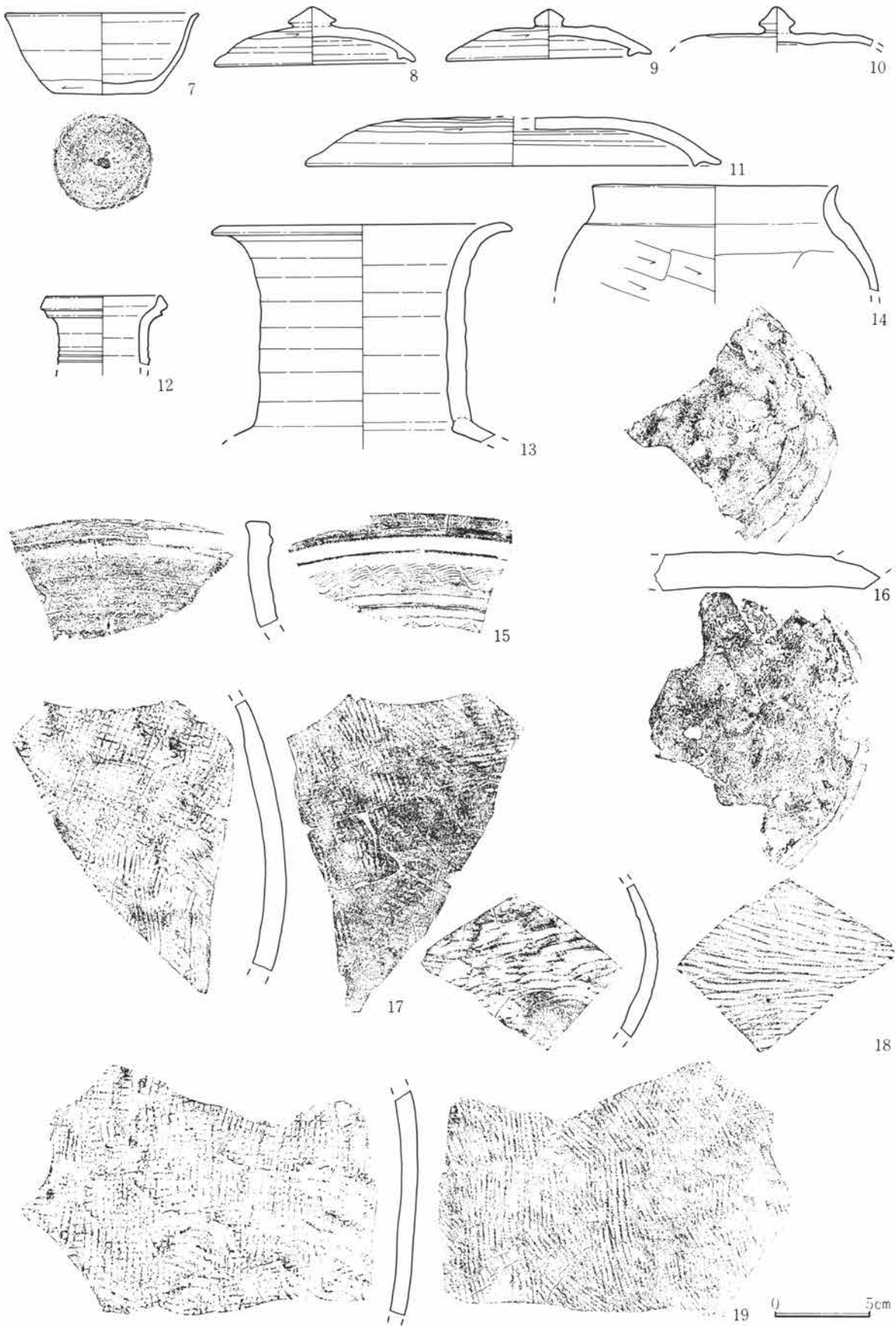


- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1. 暗褐色土 灰褐色土 (VII層土?) ブロックを多量に含む。 | 5. 暗褐色土 灰褐色土 (VII層土?) ブロックを少量含む。 |
| 2. 暗褐色土 1層に類似するが、茶褐色土粒を全く含まない。 | 6. 灰褐色土 暗褐色土を少量含む。 |
| 3. 暗褐色土 灰褐色土 (VII層土?) と暗褐色土との混土。 | 7. 暗褐色土 茶褐色土 (VI層土?) を含む。 |
| 4. 暗褐色土 灰褐色土 (VII層土?) 粒とCPを少量含む。 | 8. 暗褐色土 茶褐色土 (VI層土?) をブロック状に多量に含む。 |

第178図 I区第76号住居跡実測図(2)

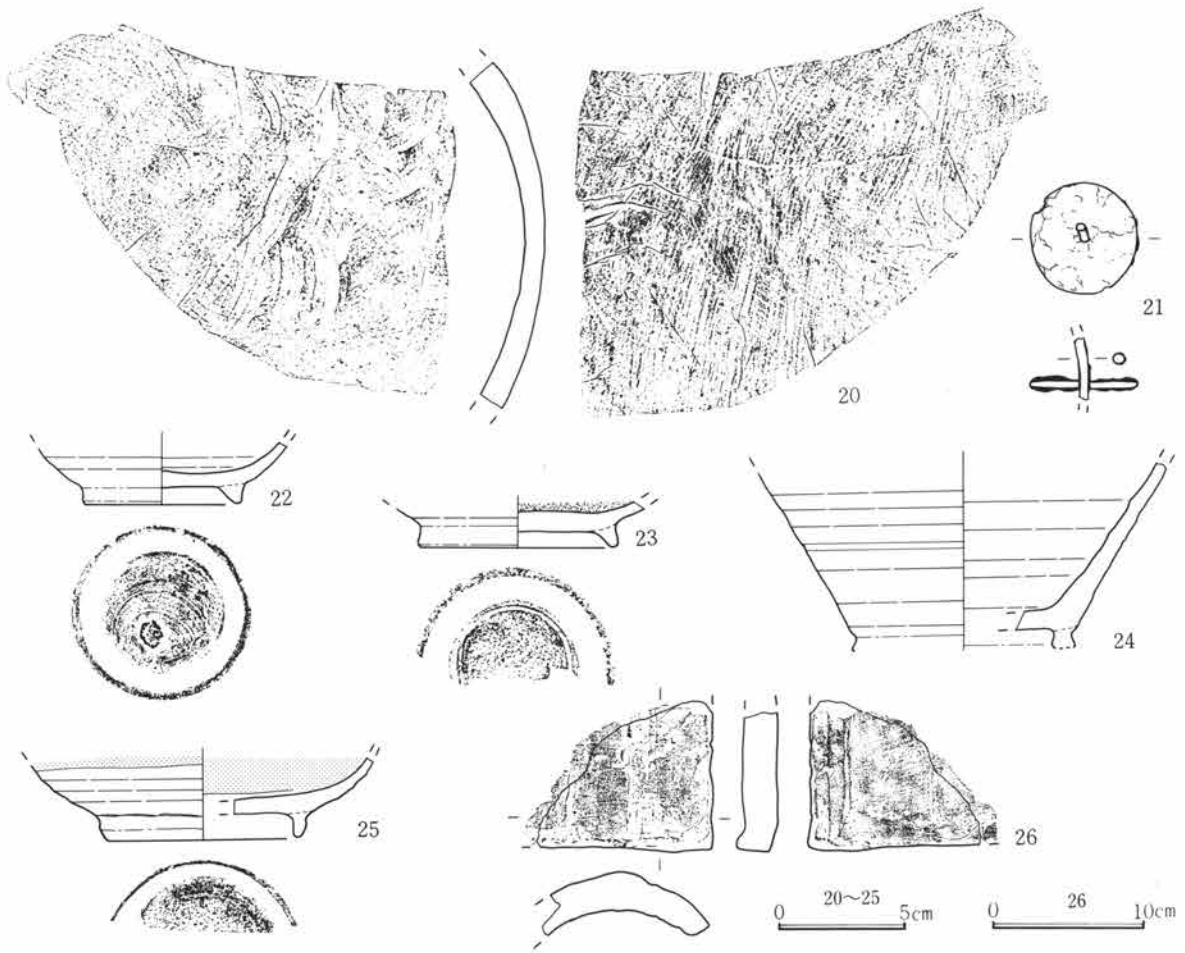


第179図 I区第76号住居跡・出土遺物実測図(1)



第180図 I区第76号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

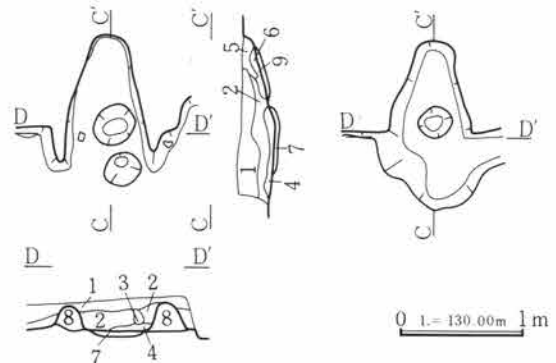


第181図 I区第76号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第77号住居跡	位置	21~23-I-77~79グリッド内				
平面形態	隅丸長方形?	規模	3.28m× -m	主軸方位	東-3度-北	残存深度	約28cm程

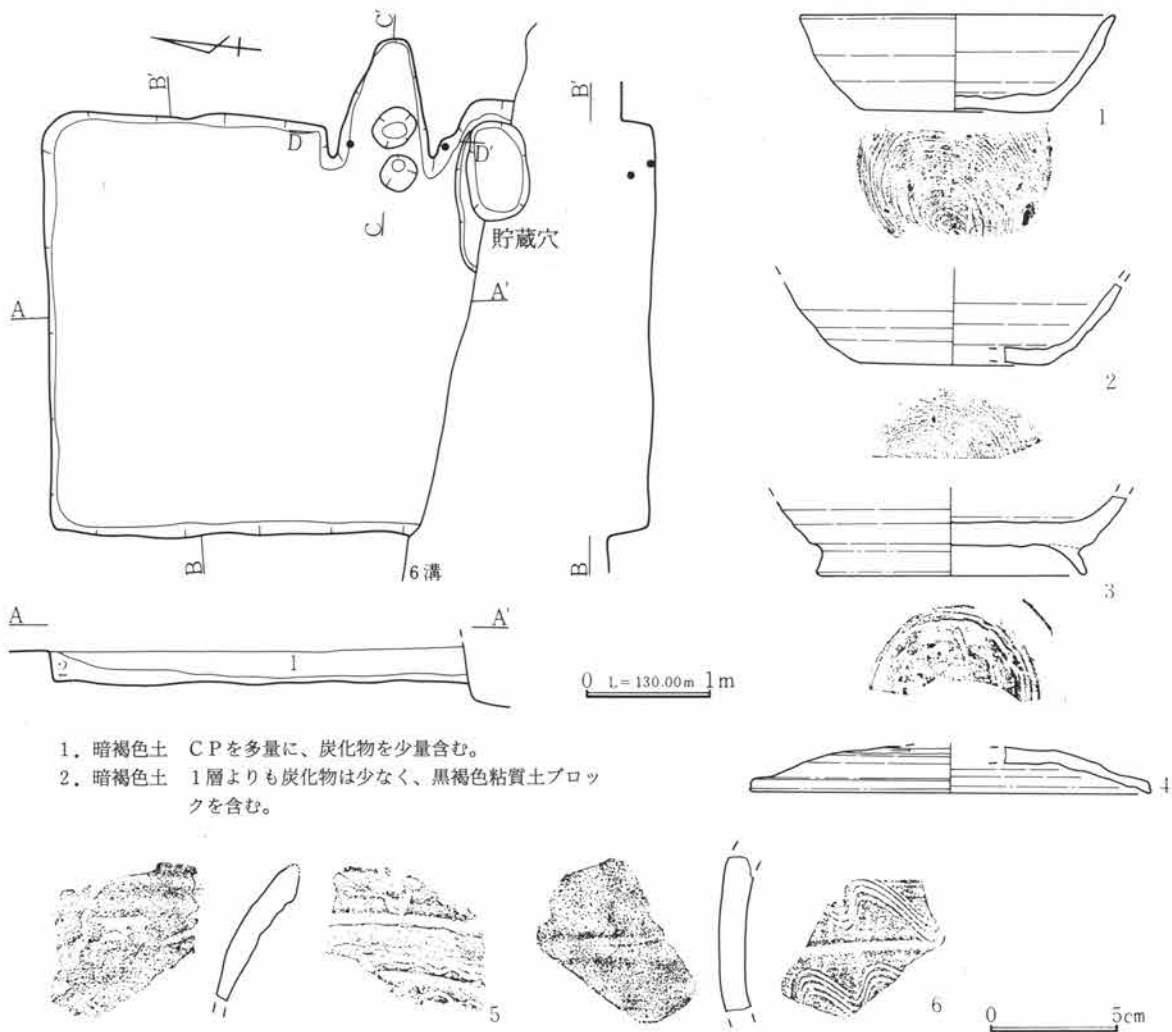
(所見) 当住居跡は、南壁部が中世以降の第6号溝状遺構によって削平消滅している。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、当該期の遺構との重複もないためプランの検出は比較的容易であった。壁の残存は良好で、床面に貼床は全く施されていない。この床面の精査によって壁溝・柱穴は検出されず、南東コーナー部に楕円形の貯蔵穴を検出した。規模は約78×48cm、深さ約27cmであり、周辺がわずかに掘り窪められていた。

カマドは東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-0°-北である。両袖がわずかに屋内に張り出すタイプで、残存部の規模は全長約107cm、燃烧部幅約60cmである。燃烧部等に焼土や灰は残存していない。また、燃烧部に径約30cmの円形小ピットが2本検出されており、支脚が設置されていた可能性がある。



1. 暗褐色土 CPを多量に、炭化物・焼土粒・茶褐色土を少量含む。
2. 暗褐色土 1層よりもCPと茶褐色土粒が少ない。
3. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
4. 暗褐色土 灰を多量に、焼土粒・炭化物を少量含む。
5. 赤褐色土 焼土を多量に含む。
6. 暗褐色土 3層に類似する。
7. 暗褐色土 灰と焼土粒を多量に含み、粘性が弱い。
8. 赤褐色焼土 ブロックか?
9. 暗褐色土 7層に類似する。

第182図 I区第77号住居跡実測図(1)



- 1. 暗褐色土 CPを多量に、炭化物を少量含む。
- 2. 暗褐色土 1層よりも炭化物は少なく、黒褐色粘質土ブロックを含む。

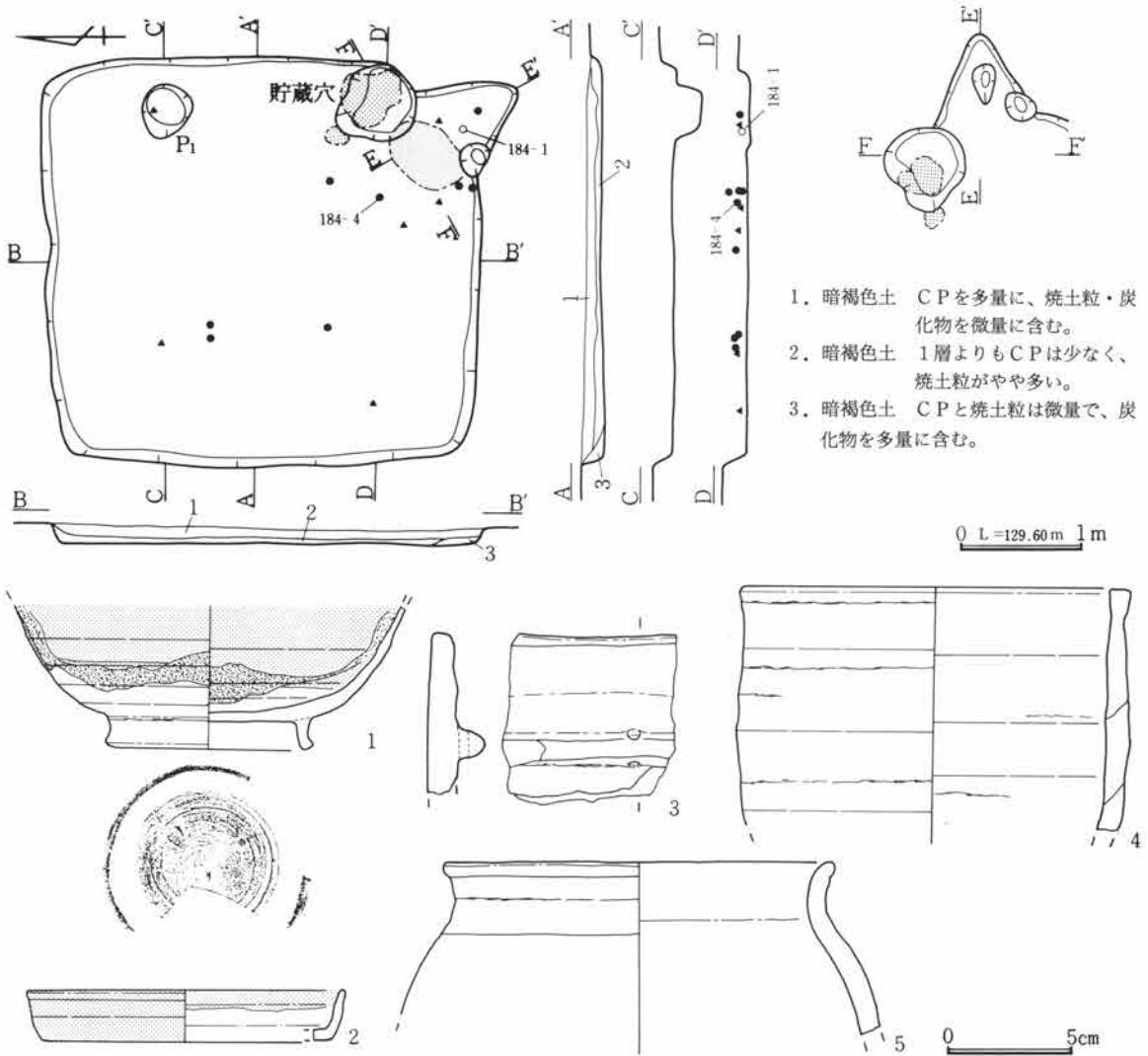
第183図 I区第77号住居跡(2)・出土遺物実測図

遺構名称	I区第78号住居跡		位置	21~23-I-69~71グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.25m×3.48m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約14cm程

(所見) 当住居跡は、南西コーナー部でわずかに第129~135号住居跡と重複するが、新旧関係を捉え得るような状態ではない。出土遺物の比較からみると明らかに当住居跡が新しい時期のものである。平面プランの確認はIV層土中で行った結果、比較的明瞭に検出することができた。壁は掘り込みが浅く、残存状態はあまり良好ではなかった。床面はVI層土中に構築されており、貼床は全く施されていない。床面の精査によって、貯蔵穴とP₁(径約40cm、深さ約22cm)を検出したが、壁溝・柱穴は痕跡も検出されておらず、当住居跡においてはこれらの施設は当初から掘削されなかったものと思われる。貯蔵穴は南東コーナーに当たる部分に検出した径約60cm、深さ約3cmの円形の浅い掘り込みである。この貯蔵穴はカマドに接するような位置にあり、上面及び北側には焼土面が広がっていることなどから、カマドの掘り方の一部である可能性もある。

カマドは南東コーナー部に位置するいわゆるコーナーカマドである。主軸方位は南-32°-東であり、残存部の規模は全長約70cm、燃焼部幅約70cmである。平面形は三角形状を呈し、袖が屋内に張り出していた痕跡は認められない。袖の構築材等も調査によって検出していないが、カマドと南壁との接合部には径約20cmの円形小ピットが検出されており、袖石の存在が示唆される。また、焚口部には灰面を検出した。

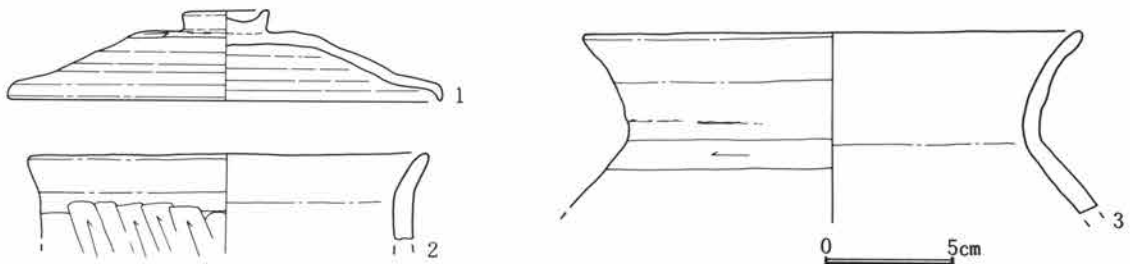
第4章 検出された遺構・遺物



第184図 I区第78号住居跡・出土遺物実測図

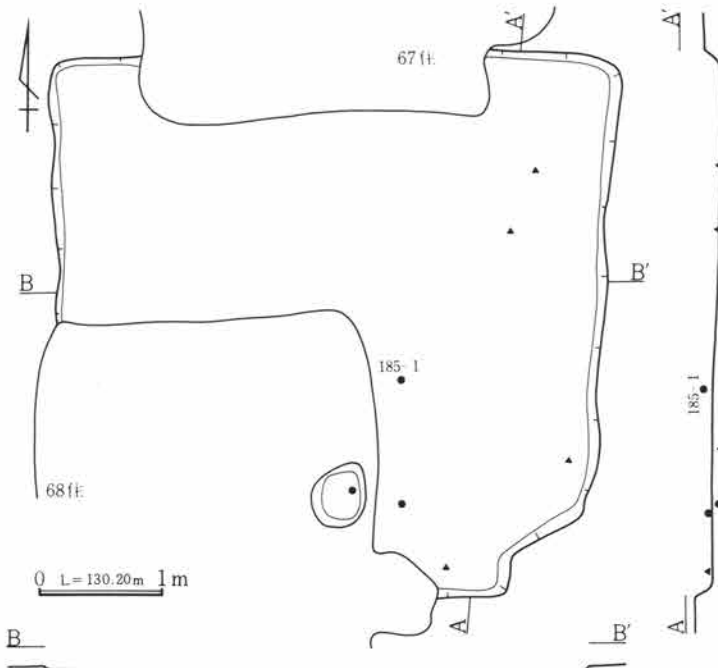
遺構名称	I区第79号住居跡		位置	7・8-I-79グリッド内			
平面形態	隅丸方形?	規模	4.30m×4.32m	主軸方位	—	残存深度	約11cm程

(所見) 当住居跡は、第67・68・96・97・109号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態等から第96・97・109号住居跡→当住居跡→第67・68号住居跡という新旧関係が考えられる。平面プランの確認は黄褐色ローム質のVI層土中で行ったが、大半は他遺構との重複部分であり、また、第67・68号住居跡との重複で失われている部分も多く、明瞭に捉えられたわけではない。壁で検出できたのは全体の1/2程度であるが、



第185図 I区第79号住居跡出土遺物実測図

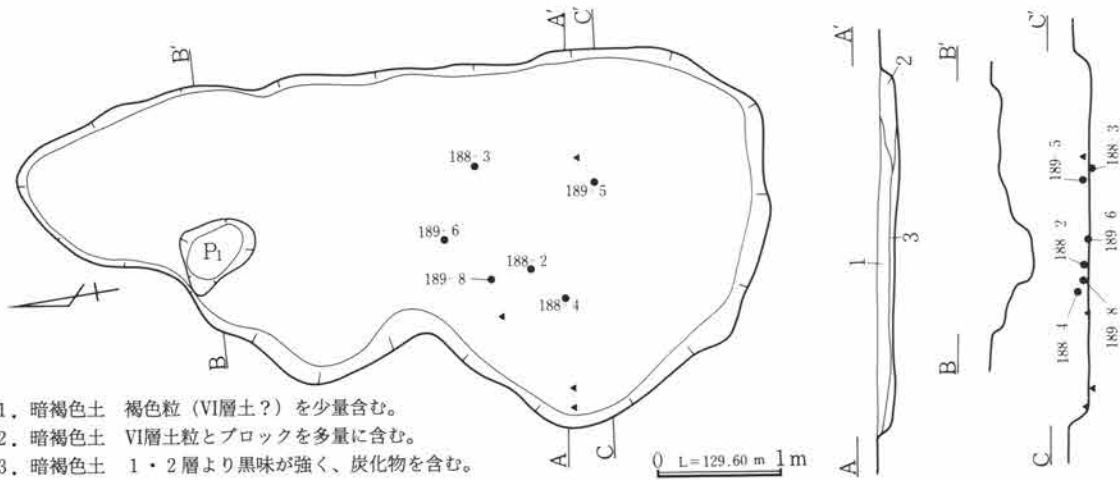
第2節 検出された遺構・遺物



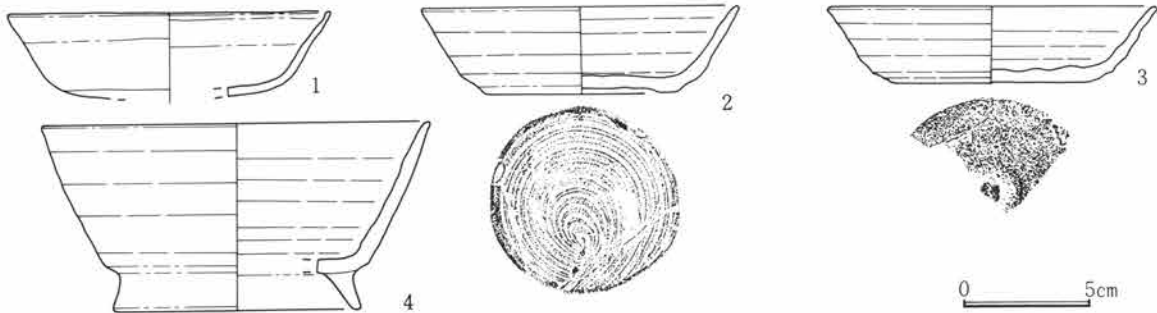
第186図 I区第79号住居跡実測図

これから類推して隅丸方形の平面プランを有するのはほぼ確実であろう。床面は大半が第96号住居跡の覆土中に構築されているため、はっきりとした面としては捉えられなかったが、遺物が一面的に出土していることを根拠として捉えた。また、調査時の状況から判断して当住居跡床面に貼床は施されていないと考えられる。この床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴等の施設は全く検出できなかった。カマドについても焼土等の残存も含めて検出できなかったが、北東・北西コーナー部と比較して南東コーナー部が不整形となっており、この部分にカマドが設置されていたのではないだろうか。

遺構名称	I区第80号址	位置	12~15-I-68~70グリッド内				
平面形態	不整形	規模	6.00m×2.95m	主軸方位	北-10度-東	残存深度	約12cm程

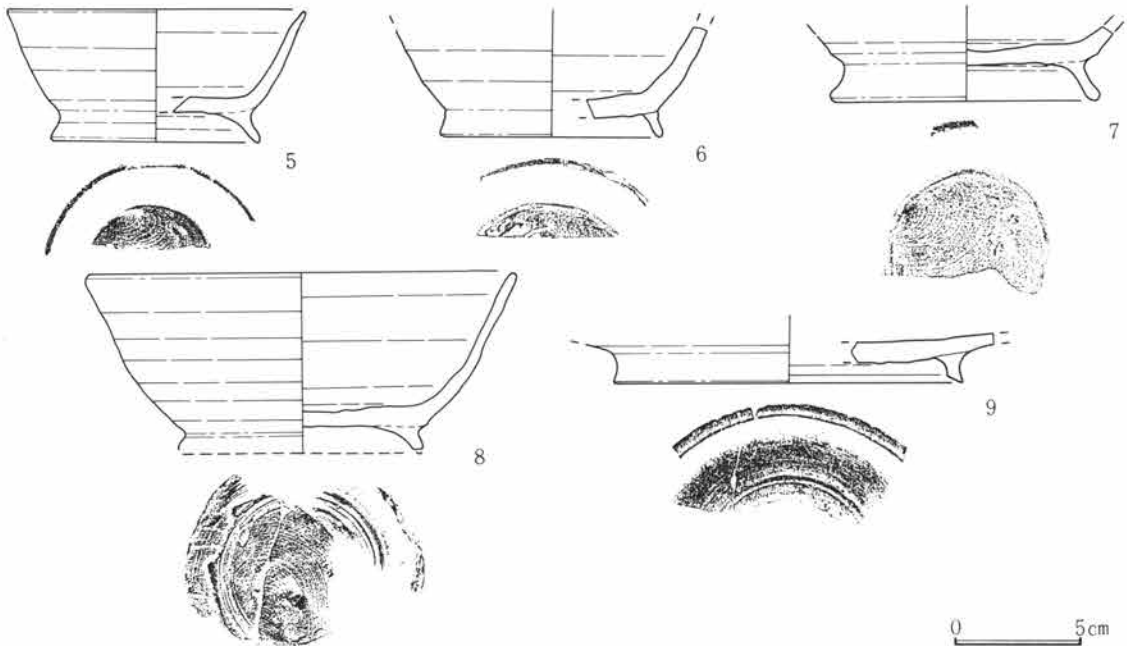


第187図 I区第80号址実測図



第188図 I区第80号址出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



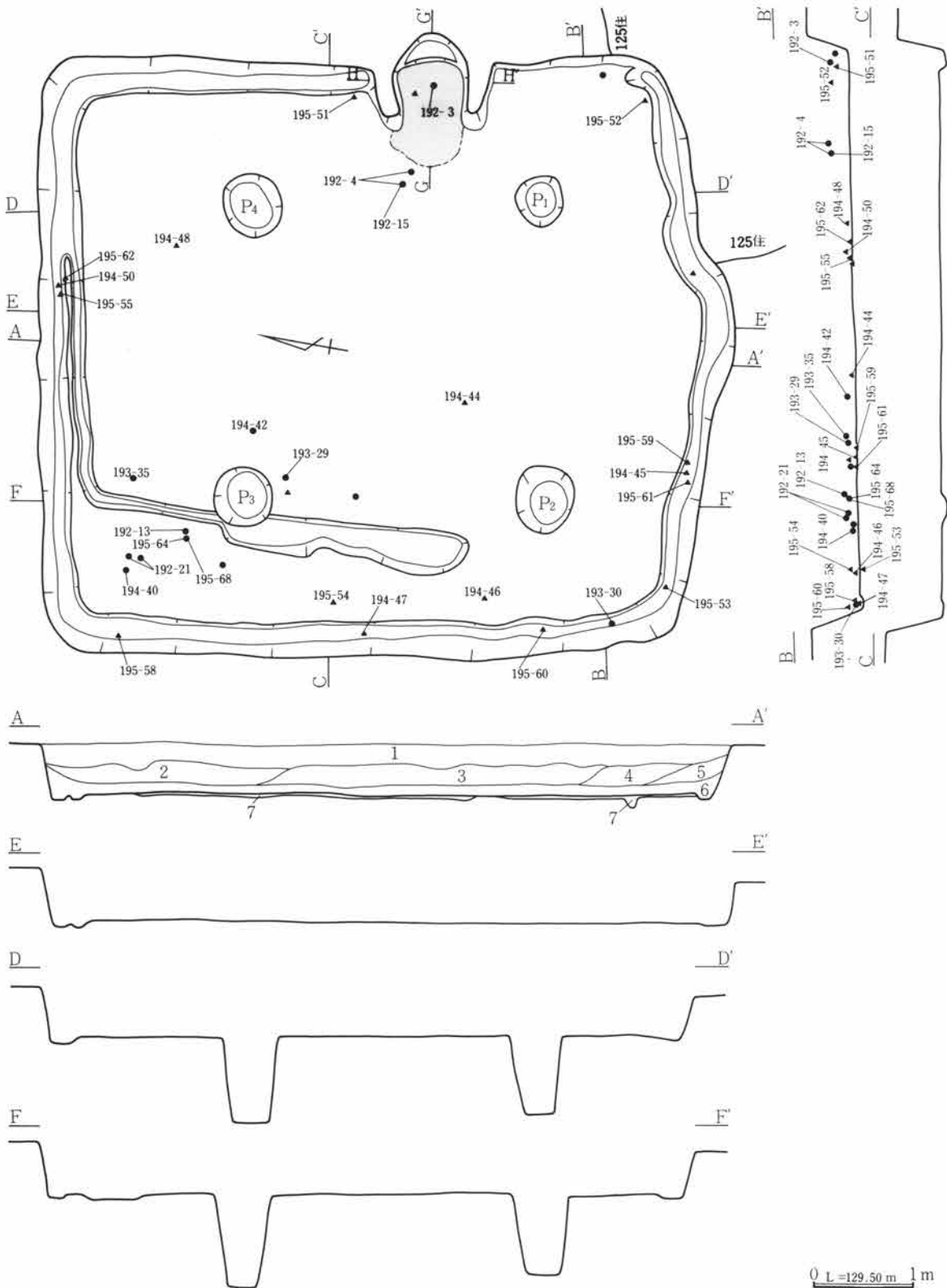
第189図 I区第80号址出土遺物実測図(2)

(所見) 当址は第2号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態から当址が新しい時期のものと考えられる。掘り込みはしっかりしているが平面プランは不整形であり、住居でないことは明らかである。覆土の堆積状態は周囲からの一面的埋没を示しており、当遺構が土坑の集合体でないことがわかる。底面は平坦であり、遺物はこの底面付近から大半が出土している。この底面の精査によってはP₁(約65×45cm、深さ約25cm)が検出されただけである。

遺構名称	I区第81号住居跡		位置	10~13-I-63~66グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.80m×5.80m	主軸方位	東-11度-北	残存深度	約45cm程

(所見) 当住居跡は第82・125号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態等から当住居跡が最も新しい時期のものと考えられる。当住居跡の平面プランは前掲の第78号住居跡等と同様に、南東壁中央部がわずかに張り出した特異な形態をしている。壁はVI・VII層中に掘り込まれているため、残存は良好で崩落したような部分は認められなかった。床面には部分的に4cm程の貼床が施されていたが、この床面の精査によって壁溝と柱穴を検出することができた。壁溝はカマドから東コーナー付近までを除き全周検出できた。規模は下幅約5~22cm、深さ約4~8cmである。北西壁溝と南西壁溝に平行して検出した壁溝状の溝は、柱穴との位置関係から、この溝を壁溝とする住居は想定することができないことから、間仕切状の施設と考えておきたい。柱穴はP₁~P₄(径約50~64cm、深さ約75~93cm、柱穴間距離P₁~P₂間約3.0m、P₂~P₃間約3.0m、P₃~P₄間約2.9m、P₄~P₁間約2.9m)の4本であり、掘り方の調査でもこれ以外の柱穴配列は検出されていない。当住居跡の張り出し部には第61号住居跡にみられたようなピットや顕著な遺物出土はみられなかった。

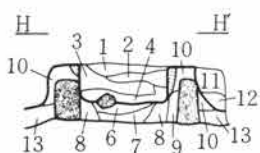
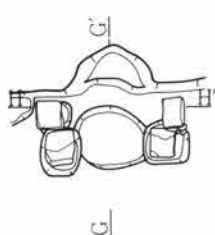
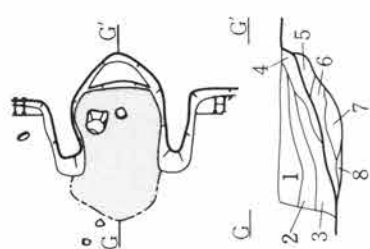
カマドは北東壁の中央やや南寄りに設置されており、主軸方位は東-10°-北である。両袖共角柱状の截石を2個づつ構築材として使用していた。平面形は砲弾状で、全長約95cm、燃烧部幅約60cmの規模を有している。燃烧部の両側壁部には焼土面が認められた。煙道は一段上がった部分から屋外に延びていたものと考えられるが、現状では残存していない。遺物は多数出土したが、中に第195図63~68のような明らかに時期の違う遺物が含まれており、覆土内において土坑等との重複があったものと考えられる。



- | | |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1. 暗褐色土 CPを少量まばらに含む。 | 5. 暗褐色土 全体に黒味が強く、茶褐色粒を含まない。 |
| 2. 暗褐色土 茶褐色粒とブロックを含む。 | 6. 暗褐色土 炭化物を少量含み、全体に黒味が強い粘質土。 |
| 3. 暗褐色土 1層よりCPは少なく、茶褐色粒が多い。 | 7. 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に含む。 |
| 4. 暗褐色土 2層に類似するが、茶褐色粒とブロックが少ない。 | |

第190図 I区第81号住居跡実測図(1)

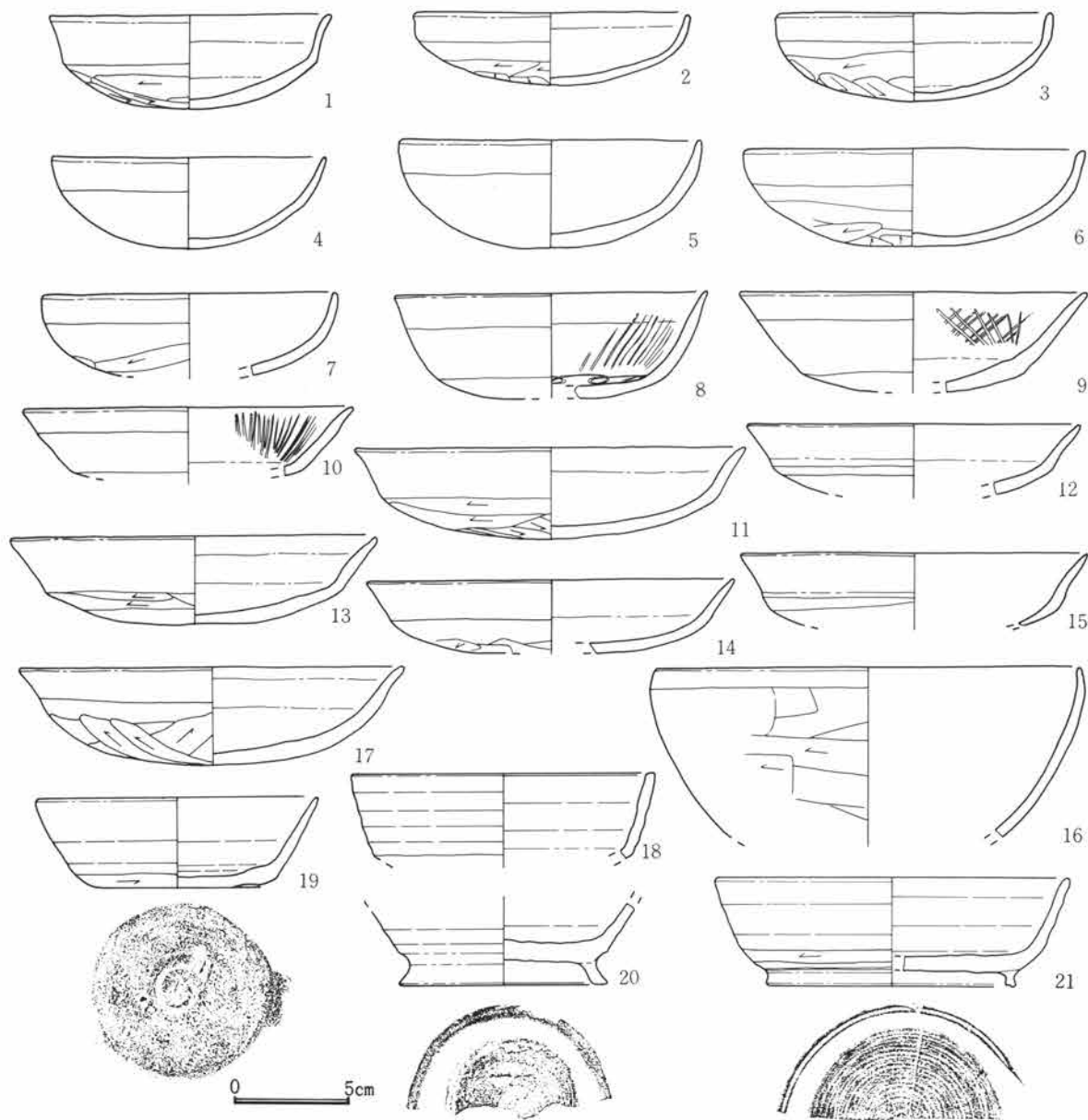
第4章 検出された遺構・遺物



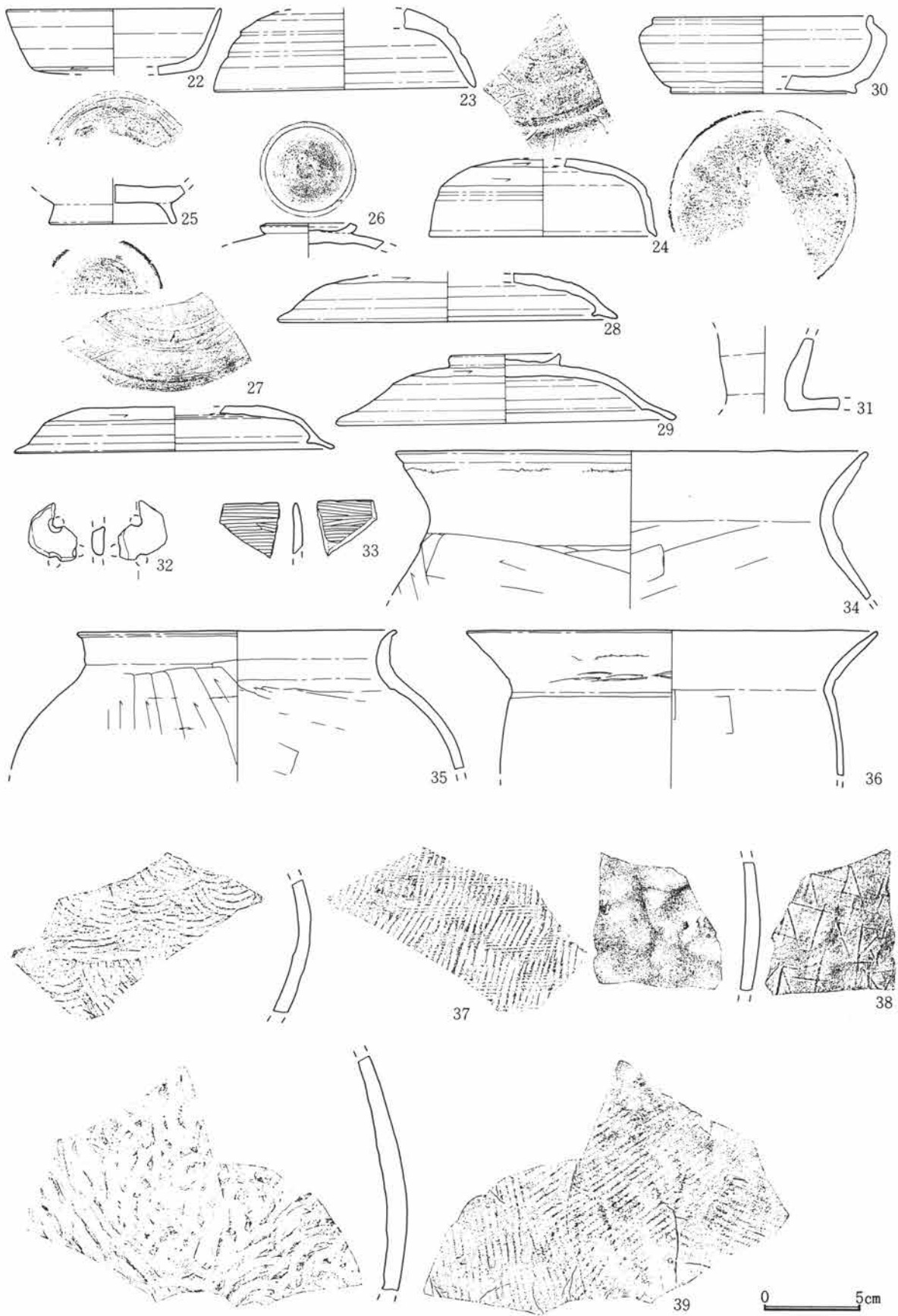
0 L=129.50 m 1m

1. 暗褐色土 焼土ブロックと炭化物を多量に含む。
2. 暗褐色土 焼土ブロックと、VI層土ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 焼土・灰・炭化物を含む。
4. 黒褐色土 灰を主体とし、焼土粒を少量含む。
5. 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に含む。
6. 黒褐色土 灰を主体とし、焼土粒を微量含む、4層に類似。
7. 暗褐色土 VII層土を多量に、灰を少量含む。
8. 暗褐色土 灰と焼土粒を多量に含む。
9. 暗褐色土 焼土粒を微量含み、粘性が強い。袖?
10. 暗褐色土 CPを微量含む。
11. 暗褐色土 焼土粒等を全く含まない。
12. 暗褐色土 焼土粒を含まず、炭化物を多量に含む。
13. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・VII層土粒を等量含む。

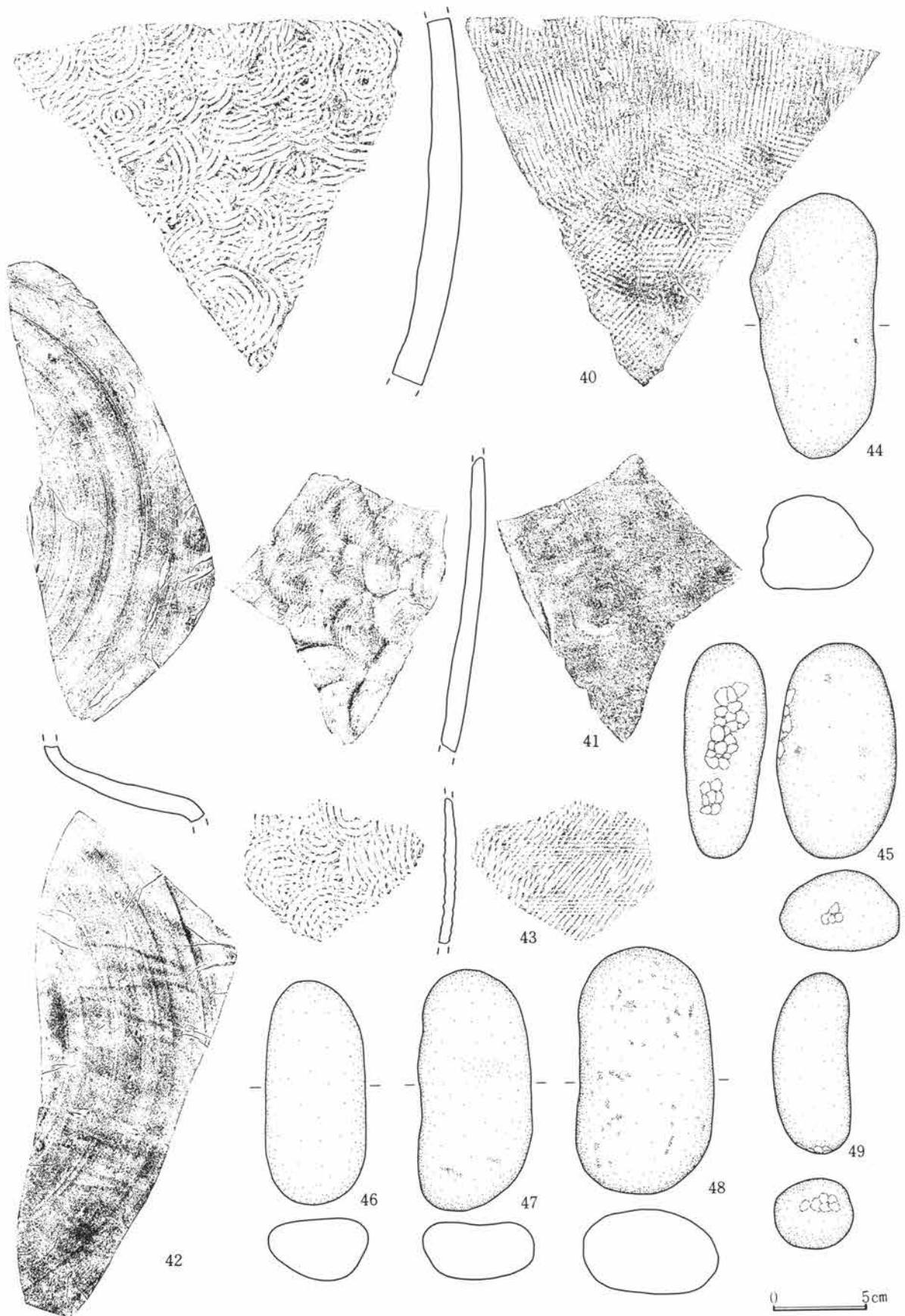
第191図 I区第81号住居跡実測図(2)



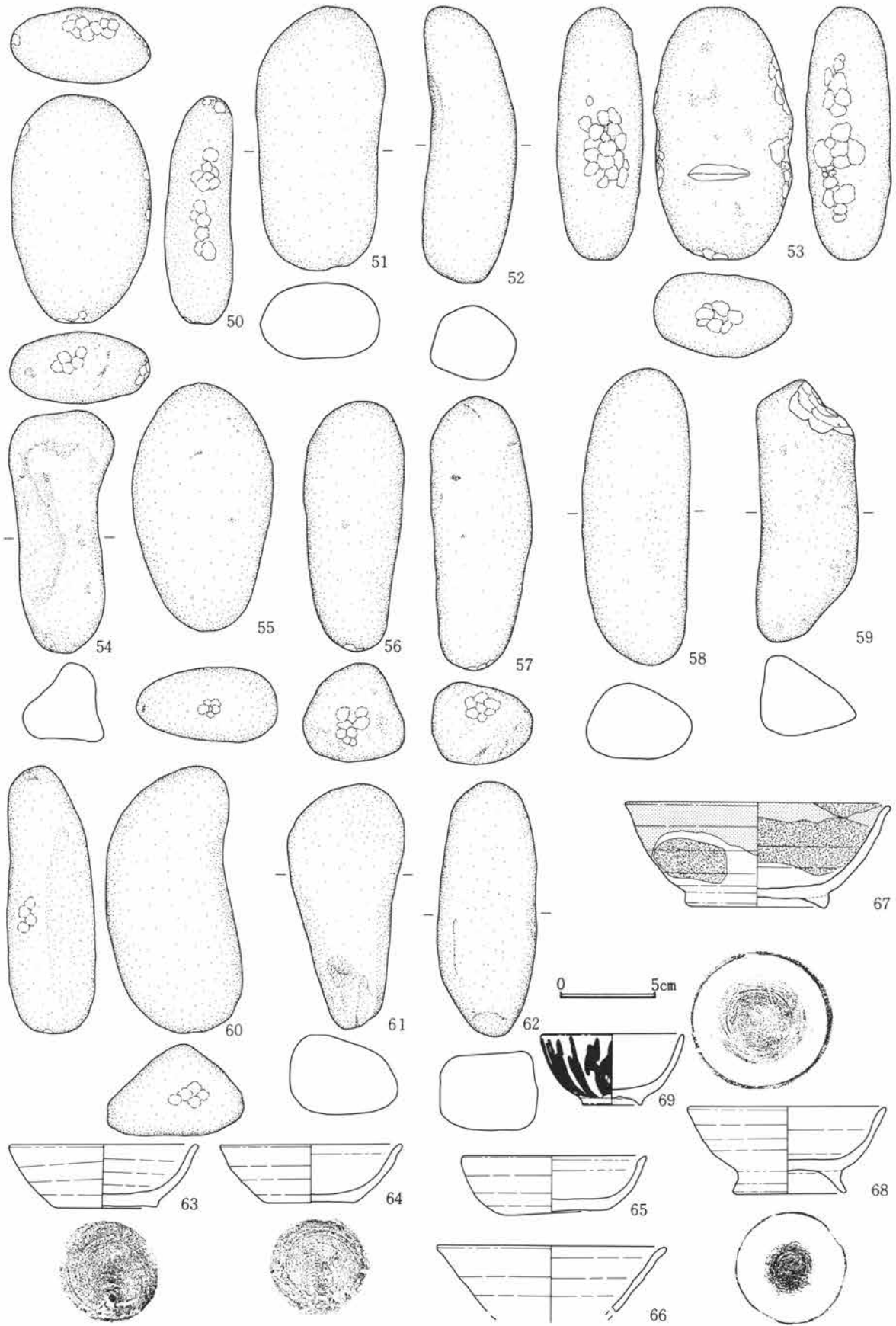
第192図 I区第81号住居跡出土遺物実測図(1)



第193図 I区第81号住居跡出土遺物実測図(2)



第194図 I区第81号住居跡出土遺物実測図(3)

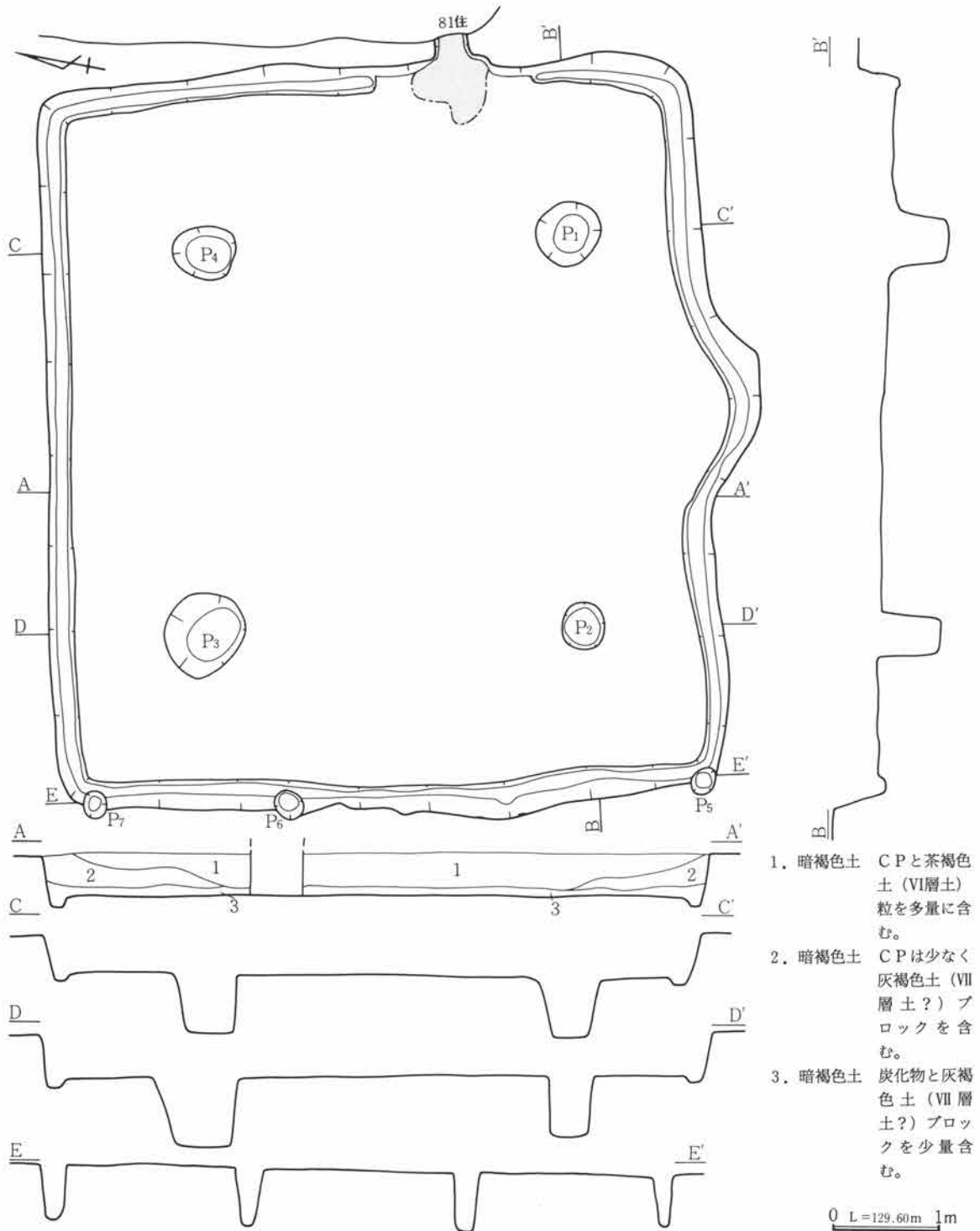


第195図 I区第81号住居跡出土遺物実測図(4)

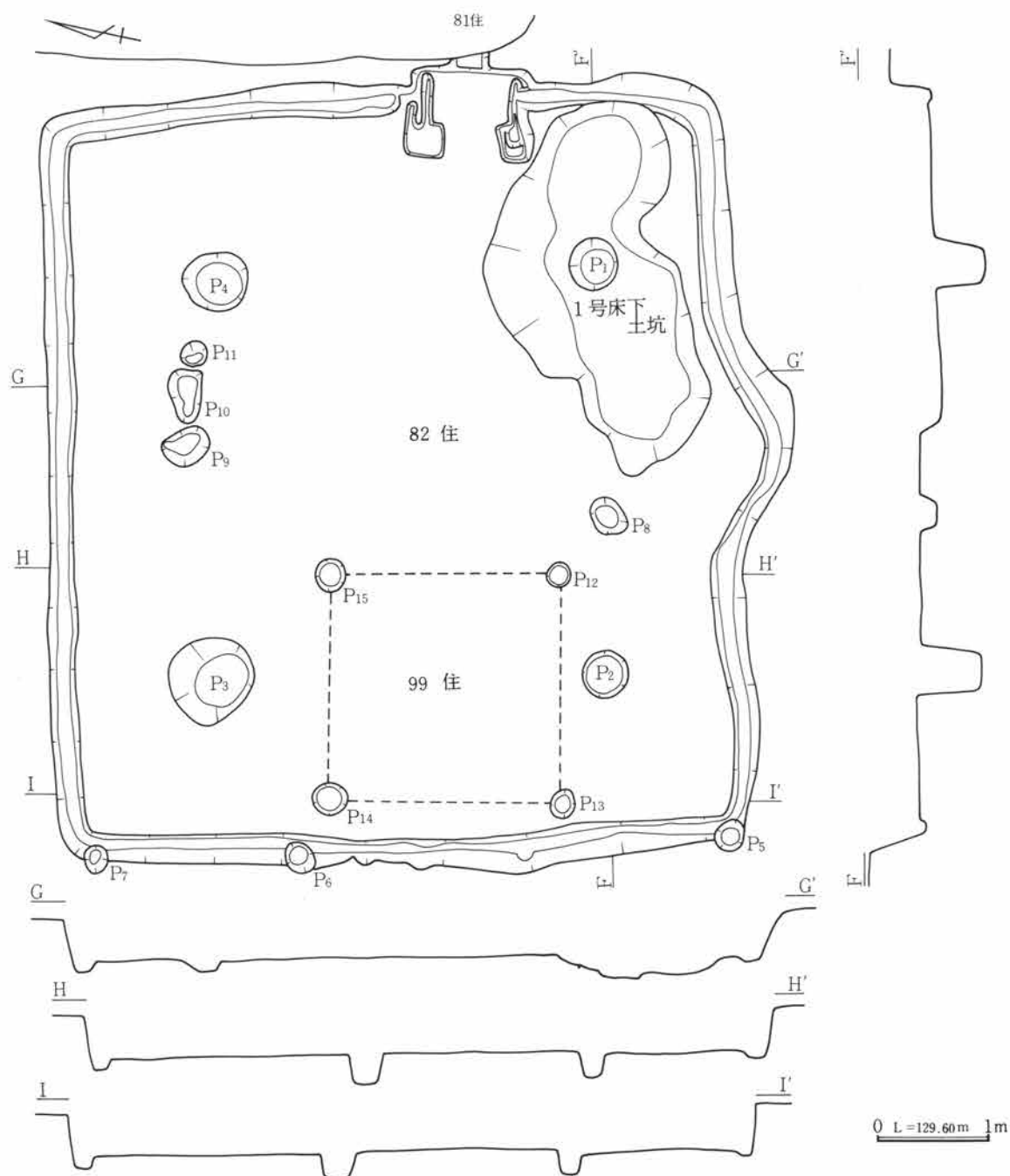
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第82号住居跡		位置	8～12-I-66～70グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	7.00m×6.75m	主軸方位	東-12度-北	残存深度	約37cm程

遺構名称	I区第99号住居跡		位置	9～11-I-68～70グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	—



第196図 I区第82・99号住居跡実測図(1)



第197図 I区第82・99号住居跡実測図(2)

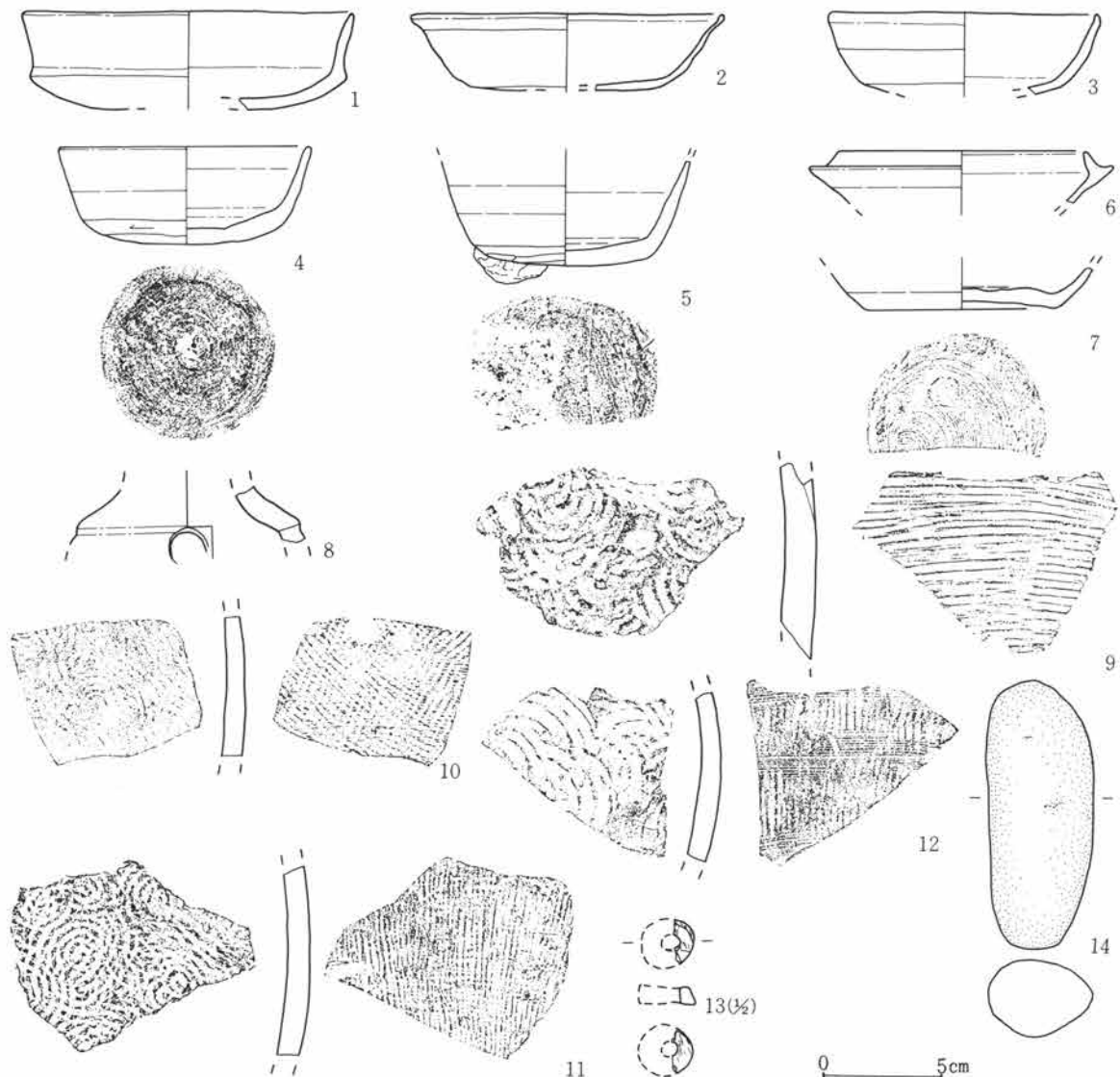
(所見) 第82号住居跡は、第81・83・99号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態及び残存状態から第83・99号住居跡→当住居跡→第81号住居跡と考えられる。当住居跡も前掲の第81号住居跡等と同様に南東壁中央が張り出すタイプである。壁はVI～VII層土中に掘り込まれているため残存は良好で、全周明瞭に検出することができた。床面は1号床下土坑部分を除いて他に貼床は全く施されおらず、VII層土が直接に床面を構成している。この床面の精査によつて壁溝と柱穴及び小ピット・床下土坑を検出した。壁溝はカマド部を除いて全周しており、規模は下幅約5～15cm、深さ約7～10cmである。柱穴はP₁～P₄(径約45～73cm、深さ約57～66cm、柱穴間距離P₁～P₂間約3.7m、P₂～P₃間約3.5m、P₃～P₄間約3.6m、P₄～P₁間約3.5m)の4本で、間に検出した小ピットには規則的配置が認められないので、他の柱穴配列は考えられない。また、南西壁に

第4章 検出された遺構・遺物

検出したP₅~P₇(径約23~30cm、確認面からの深さ約45~61cm)の3本の小ピットのP₅とP₆間には、ピットの痕跡が認められるので、本来は1.9m程の等間隔で4本のピットが並んでいたものと考えられる。同様の施設は第73号住居跡にもみられたものであり、補助柱穴的な機能であったものと思われる。床下土坑は東コーナー付近に検出したもので、不整形を呈している。

カマドは北東壁の南寄りに設置されており、煙道は第81号住居跡との重複によつて失われている。主軸方位は東-18°-北で、残存部の規模は燃焼部幅約70cm、燃焼部奥行き約75cm、煙道下幅約21cmである。カマドの残存状態は極めて悪く、床面での調査では灰面だけの検出であった。掘り方では袖石の据え方が明瞭に捉えられたので、屋内に袖の張り出す凸字形を呈するカマドであったものと思われる。

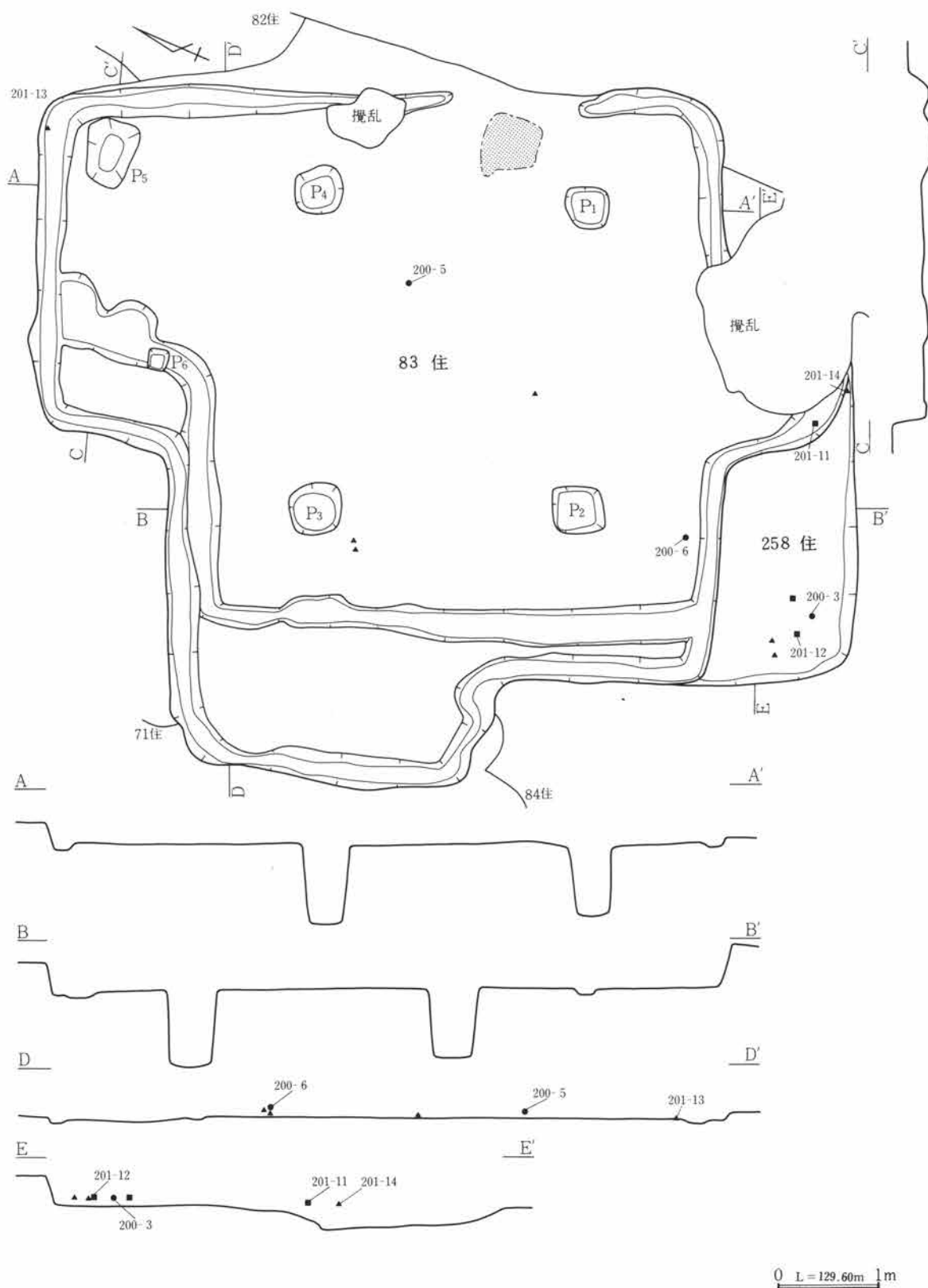
第99号住居跡は第82号住居跡の床面精査時に検出したもので、P₁₂~P₁₅(径約24~30cm、第82号住居跡床面からの深さ約22~26cm、柱穴間距離約2.1m)柱穴4本を調査した。



第198図 I区第82号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第83号住居跡		位置	6~11-I-69~73グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	6.75m×6.85m	主軸方位	東-24度-北	残存深度	約30cm程

遺構名称	I区第258号住居跡		位置	6・7-I-70~72グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約30cm程



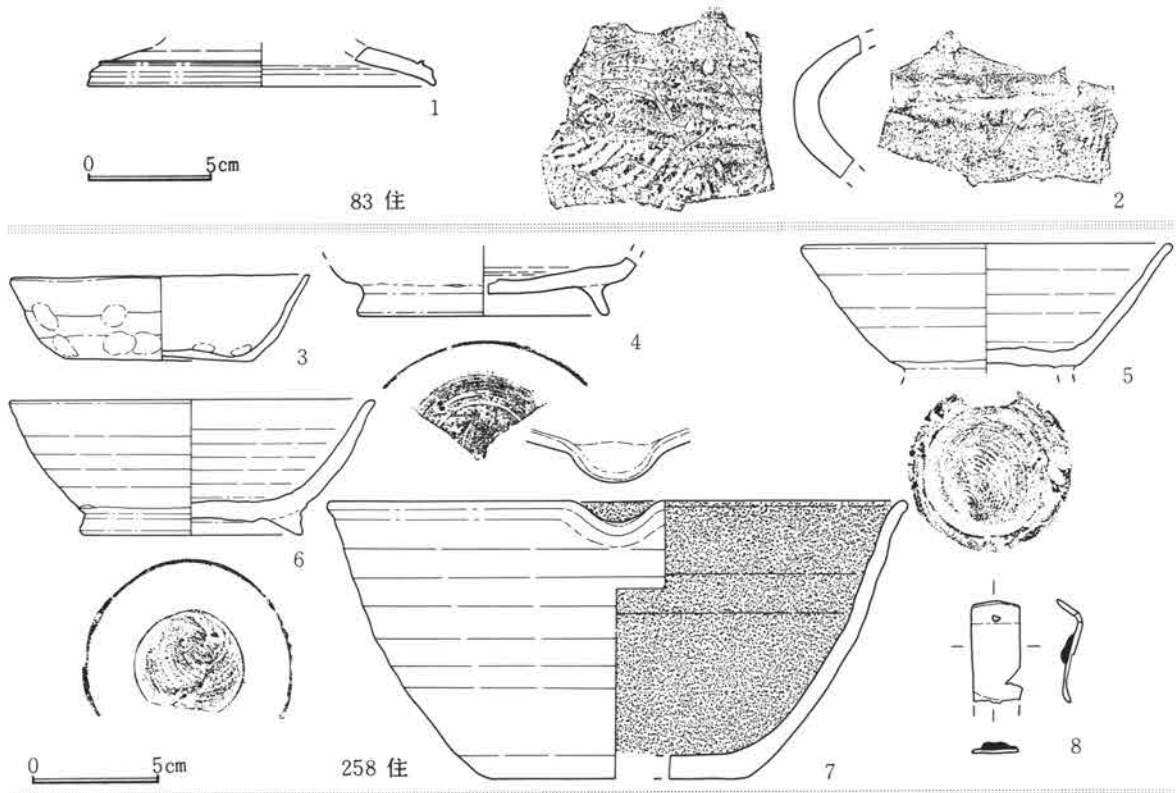
第199図 I区第83・258号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

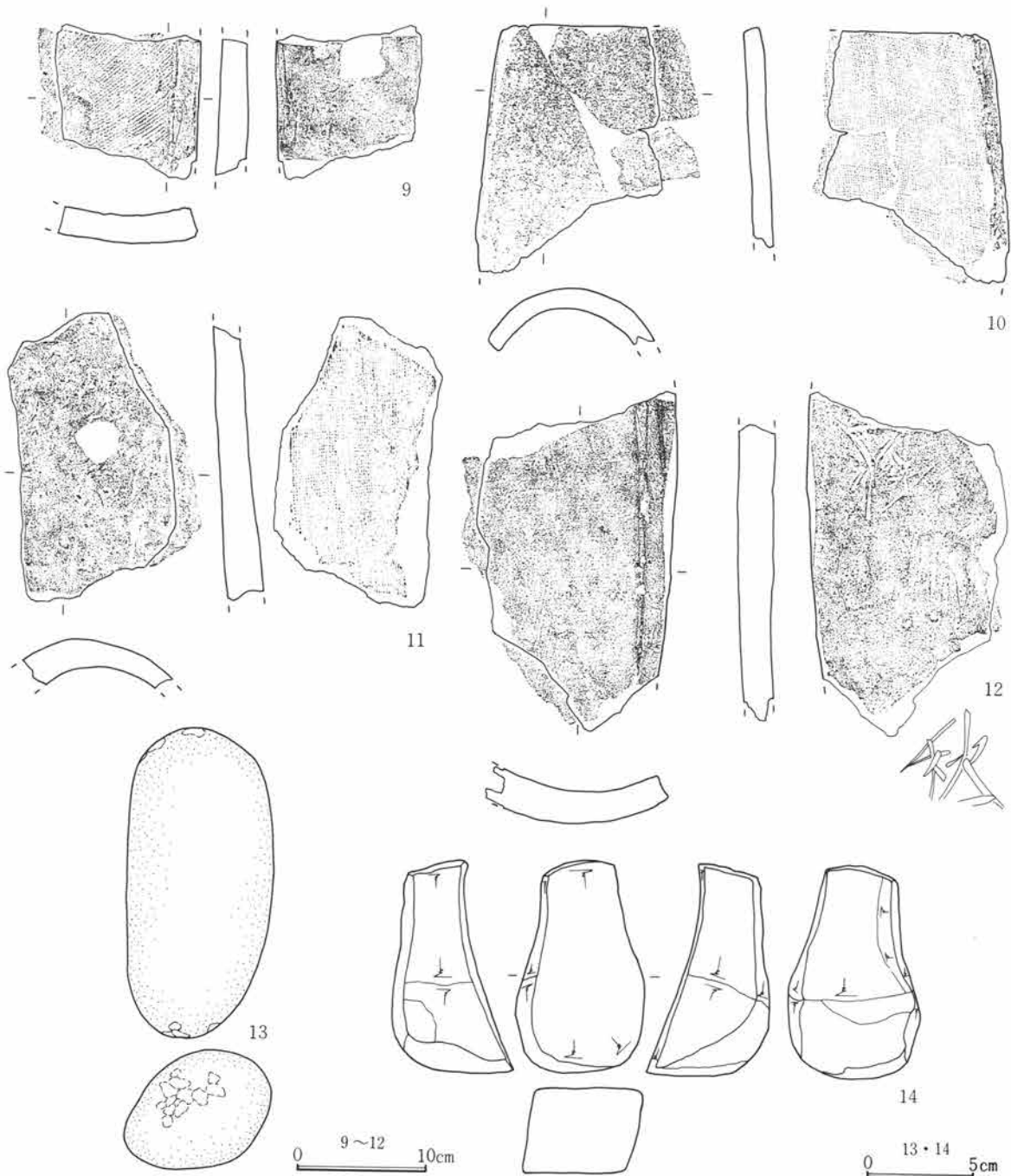
(所見) 第83号住居跡は、第71・82・84・258号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。平面プランは複雑で、隅丸方形を基本として北西壁及び南西壁が約1.2×3.3mの規模で方形に張り出し、さらに南東壁中央部が第81・82号住居跡の例同様に張り出している。壁はVI～VII層土に達しているため状態は良好であるが、他の遺構との重複や攪乱によって失われている部分もある。床面は貼床は全く施されておらず、VII層土を床面として構築されていた。この床面精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴を検出した。壁溝はカマド部を除いて下幅約5～20cm、深さ約5～7cmの規模で全周して検出されている。また、方形の張り出し部の内側にも溝状の掘り込みがみられることから、当初はこの溝を壁溝とした平面プラン(約5.5×5.4mの隅丸方形)であり、後に張り出しが付加された可能性が強く、基本的には南東壁に張り出しを有する第82号住居跡タイプのもので、設計変更されたものではないだろうか。柱穴はP₁～P₄の4本で平面形が方形状を呈するのが特徴である。それぞれの規模は、P₁(約45×40cm、深さ約67cm)・P₂(約53×47cm、深さ約62cm)・P₃(約53×52cm、深さ約77cm)・P₄(約50×46cm、深さ約77cm)、柱穴間距離はP₁～P₂間約3.0m、P₂～P₃間約2.7m、P₃～P₄間約3.1m、P₄～P₁間約2.7mである。貯蔵穴は張り出し部北コーナー部に検出したP₅(約70×55cm、深さ約10cm)が該当するのではないだろうか。

カマドは北東壁の南寄りに設置されていたが、第82号住居跡との重複で完全に失われており、床面に焼土面を検出したに止まった。この焼土面を燃焼部と仮定すると、両袖が屋内に張り出した凸字形のタイプが最もふさわしいものであろう。

第258号住居跡は、平面的には第83号住居跡の南コーナー部から南東壁中央張り出し部にかけて検出したに過ぎず、残存は極めて不良である。しかし残存した整形な南コーナー部の形状等から判断して住居であることは確実と考えられる。時期的には第83号住居跡よりも新しい時期であり、遺構残存に不審な点は残る。遺物は残存部の床面からまとも出土したものである。



第200図 I区第83・258号住居跡出土遺物実測図

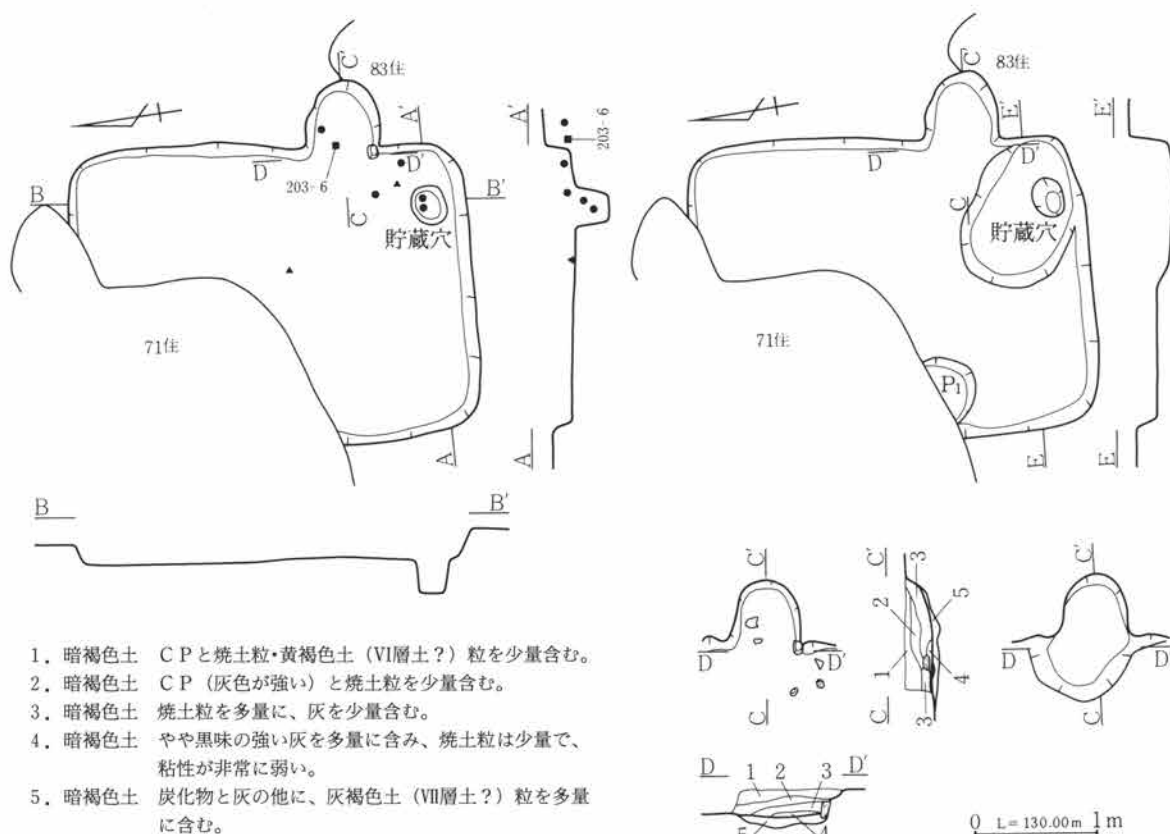


第201図 I区第258号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第84号住居跡	位置	7～9-I-72～74グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.28m×3.14m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約20cm程

(所見) 当住居跡は第71・83号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第83号住居跡→当住居跡→第71号住居跡と考えられる。壁と床面の北西側約¼は、第71号住居跡との重複で失っている。壁の残存はあまり良好ではなく、床面は第83号住居跡の覆土内に構築されているため曖昧である。床面の精査では、南東コーナー部に貯蔵穴を検出した他、壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は楕円形で、規模は約32×26cm、深さ約28cmである。掘り方は全体にみられたものではなく、貯蔵穴の周辺が約125×85cm、深さ約10cmの楕円形

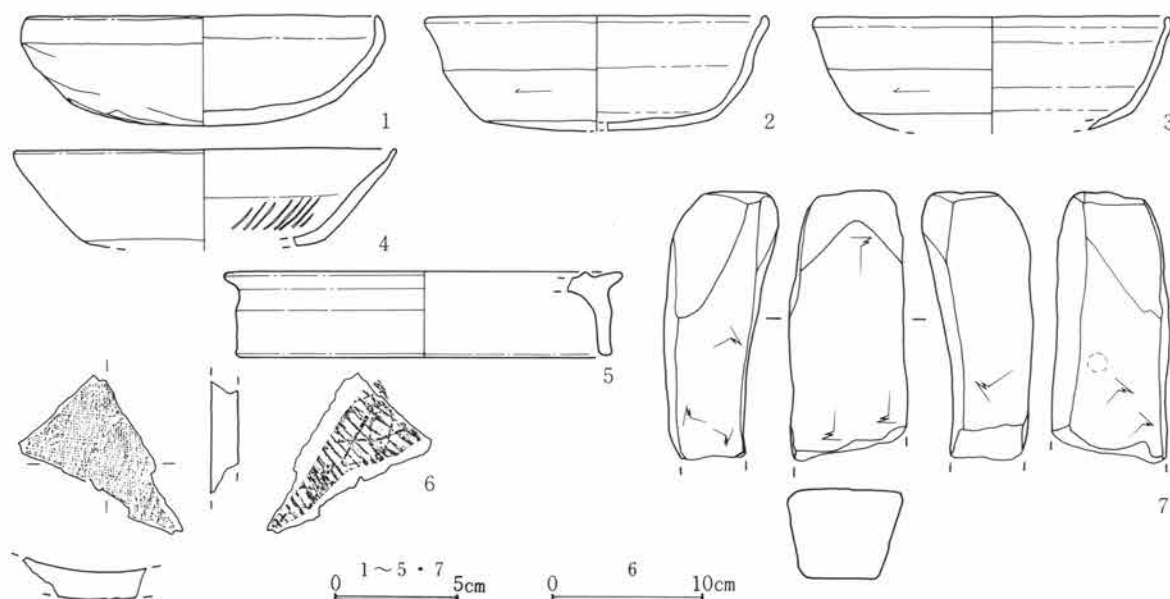
第4章 検出された遺構・遺物



第202図 I区第84号住居跡実測図

に掘り窪められたものである。その他西壁中央に接するようにP₁(径約55cm、深さ約13cm)を検出したが、対応するような位置に他のピットは検出されず、柱穴とは考えられない。

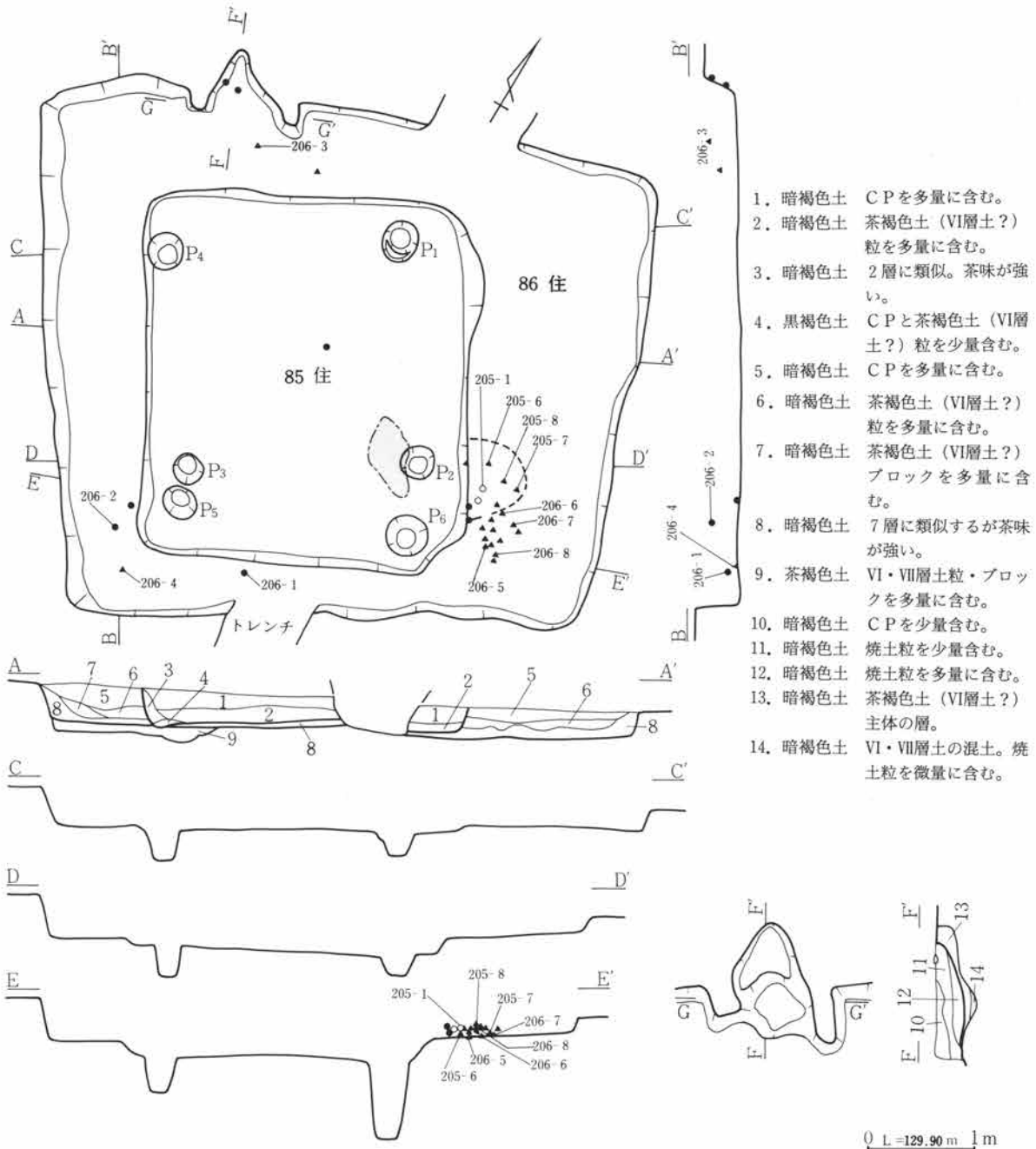
カマドは東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-8°-南である。平面形は袖が屋内に張り出さない砲弾形を呈し、残存部の規模は全長約63cm、燃烧部幅約45cmである。袖は、右袖が角柱状の截石を据えた状態で残存しており、左袖についても同様であったはずである。



第203図 I区第84号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第85号住居跡	位置	4～6—I-69～71グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	2.93m×3.35m	主軸方位	東-30度-北
		残存深度	約15cm程		

遺構名称	I区第86号住居跡	位置	4～7—I-68～71グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	4.60m×5.46m	主軸方位	北-33度-西
		残存深度	約30cm程		



第204図 I区第85・86号住居跡実測図

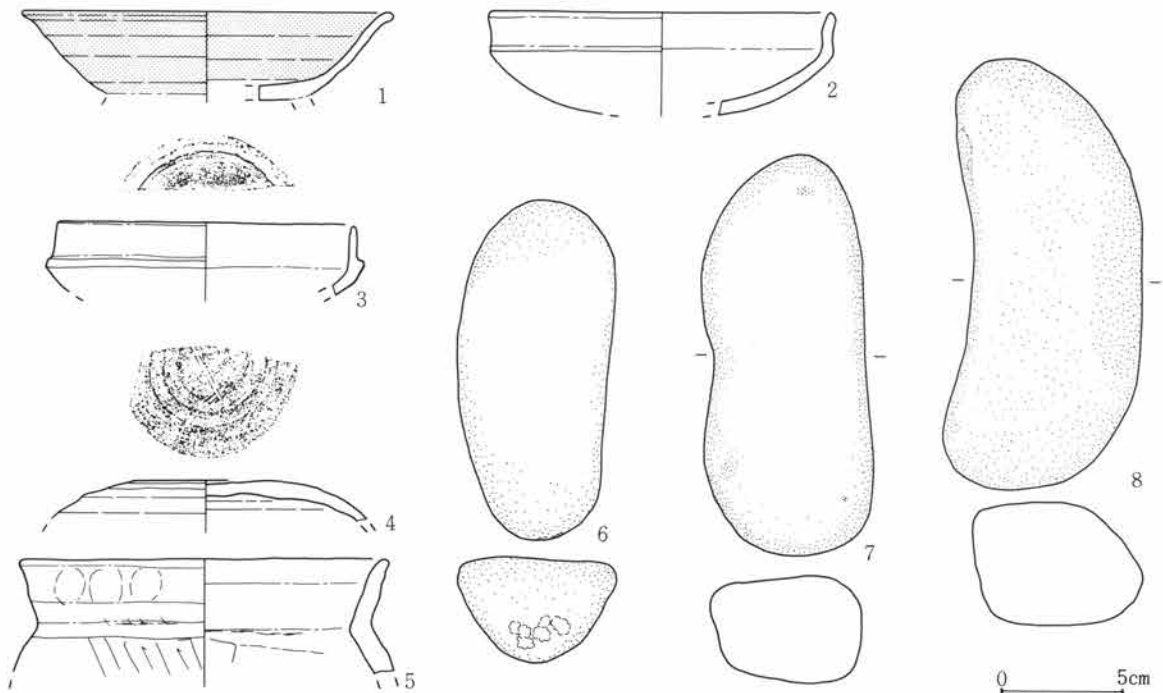
(所見) 第85号住居跡は第86号住居跡と完全に重複しており、覆土土層断面による堆積状態の観察から第86号住居跡→当住居跡であるのは明らかである。平面プランの確認は、第86号住居跡の覆土内のため当初は明瞭に捉えることはできなかったが、カマドの痕跡を検出したことによってその存在に気付いたものである。し

第4章 検出された遺構・遺物

たがって周囲もかなり掘り下げた段階での検出であり、壁の残存は非常に不良である。床面は第86号住居跡の床面とほぼ同レベルであり、壁同様明瞭には捉えられていない。第204図に示した平面図中で当住居跡内にあるピットの中で、P₆（径約37cm、深さ約92cm）を除いた他のピットは、第86号住居跡に属するものではないかと考えている。P₆については位置から当住居跡の貯蔵穴に当たるのではないだろうか。

カマドは北東壁の南寄りに設置されていたものと思われるが、前述のように調査時に壊してしまい、満足な調査を実施することができなかった。したがって最終的には床面における、灰面と若干の遺物の出土を捉えたに過ぎない。

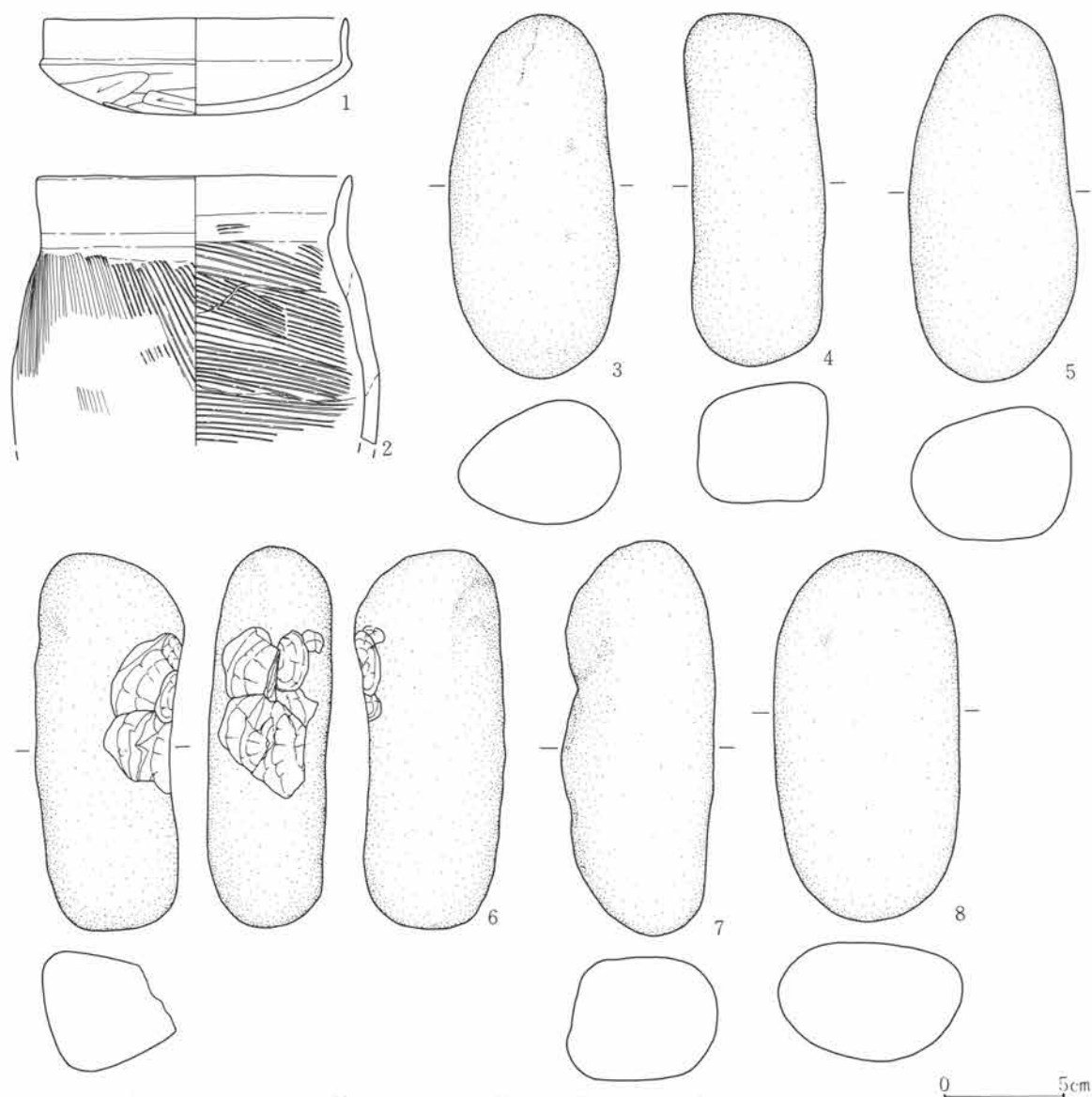
第86号住居跡は上記のように第85号住居跡と重複する他、第258号住居跡とわずかに重複している。遺構の検出状態等から新旧関係を判断することができなかったため出土遺物の比較をすると、当住居跡→第258号住居跡という関係が考えられる。平面プランの確認は黄褐色ローム質に近いVI層土中であり、比較的明瞭に捉えることができた。床面は西側にわずかに貼床が施されていた以外掘り方はなく、VII層土を直接床面としていた。床面の精査によっては壁溝・貯蔵穴は検出されず、ピットを6本検出したに過ぎない。この内P6については前述のように第85号住居跡の貯蔵穴と判断した。残りの5本のピットの中でP₁～P₄（径約28～38cm、深さ約28～36cm）の4本は、位置関係から柱穴と考えられる。それぞれの柱穴間距離は、P₁～P₂間約2.1m、P₂～P₃間約2.1m、P₃～P₄間約1.9m、P₄～P₁間約2.1mである。この柱穴配列に対して住居の南東壁は変



第205図 I区第85号住居跡出土遺物実測図

形しており、東-20°-北の主軸をもつもう一つの遺構が重複しているようにも感じられるが、調査段階では何らその確証は得られなかった。また、P₅（径約30cm、深さ約46cm）は、規模的に柱穴と同程度であり、P₃の配置の変更が行われた可能性もある。

カマドは北西壁の西寄りに設置されている数少ない例の一つである。主軸方位は北-28°-西であり、平面形は三角形を呈している。両袖共に屋内に張り出していたものと思われるが、現状では両方共痕跡程度である。残存部の規模は、全長約79cm、燃焼部幅約52cmである。カマド先端は細くなっており、上のレベルで煙道が長く屋内に延びていた可能性が強い。



第206図 I区第86号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第87号住居跡		位置	39~41-I-67~69グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.75m×3.95m	主軸方位	東-18度-北	残存深度	約43cm程

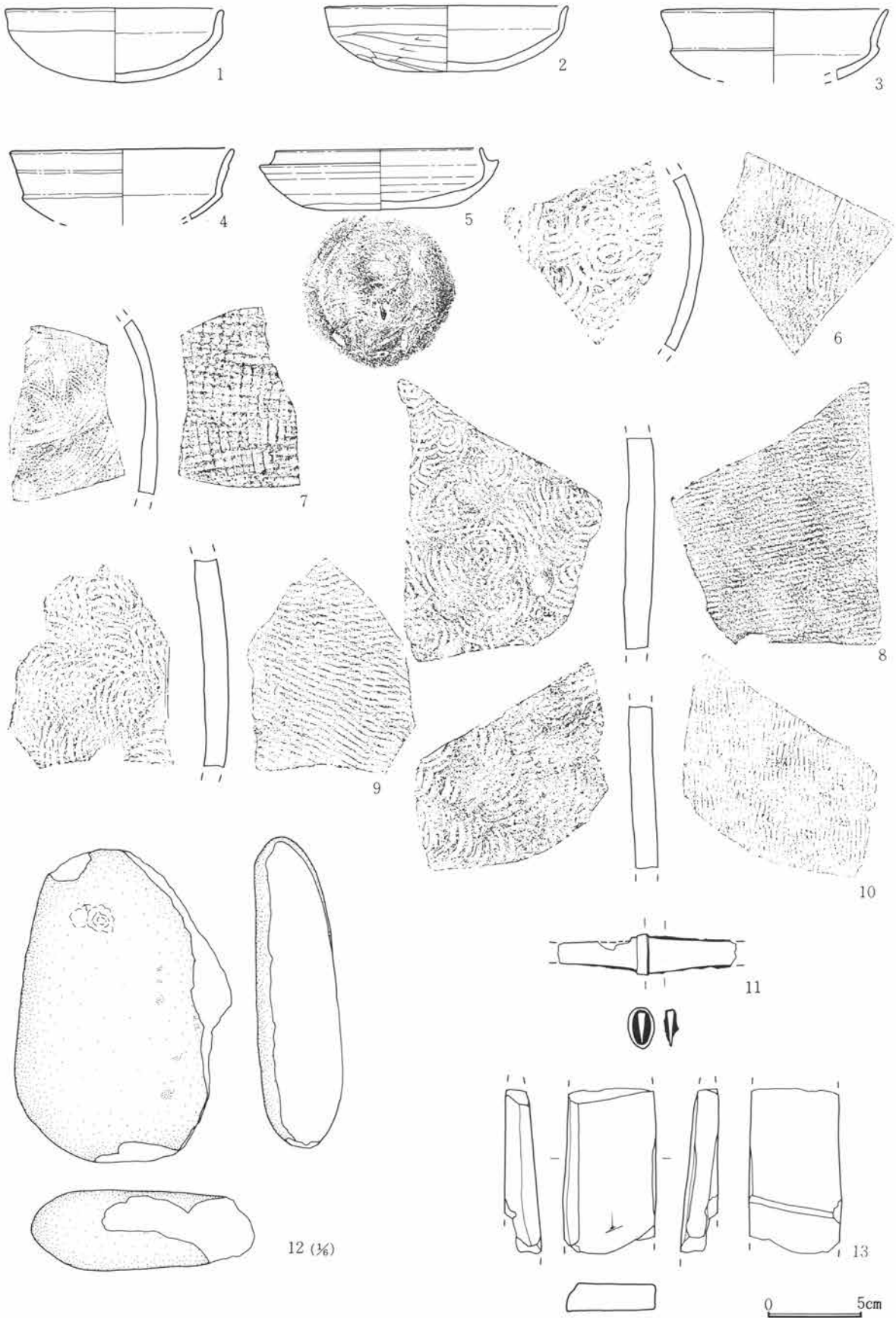
(所見) 当住居跡は、当該期の遺構との重複のみられない数少ない例の一つである。平面プランの確認はIV層土中であり、全体に残存状態は良好である。覆土の堆積状態は壁側からの堆積を示しており、不自然さは感じられない。壁は大半がVI・VII層中に構築されているため状態は良好であるが、北西壁上半に崩落が認められる。床面は、中央部を除いてわずかに貼床が施されていたが、遺物が一面的に出土していることや、比較的硬くしまった面として構築されていたこと等から、明瞭に捉えることができた。この床面の精査によって壁溝と貯蔵穴は検出したが、柱穴は掘り方段階でも検出されておらず、当初から掘削されなかったものと思われる。壁溝北コーナー部から南東壁中央部までの範囲に掘削されていた。規模は下幅約5~10cm、深さ5cm程度である。貯蔵穴は東コーナー部に位置しており、径約43cm、深さ約69cmの円形を呈するしっかりとしたものである。掘り方は住居中央部を南北に帯状に掘り残し、両側を掘り下げた特異なものである。



第207図 I区第87号住居跡実測図

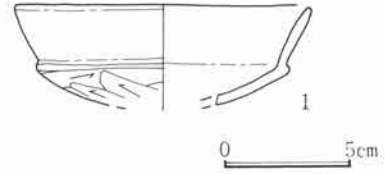
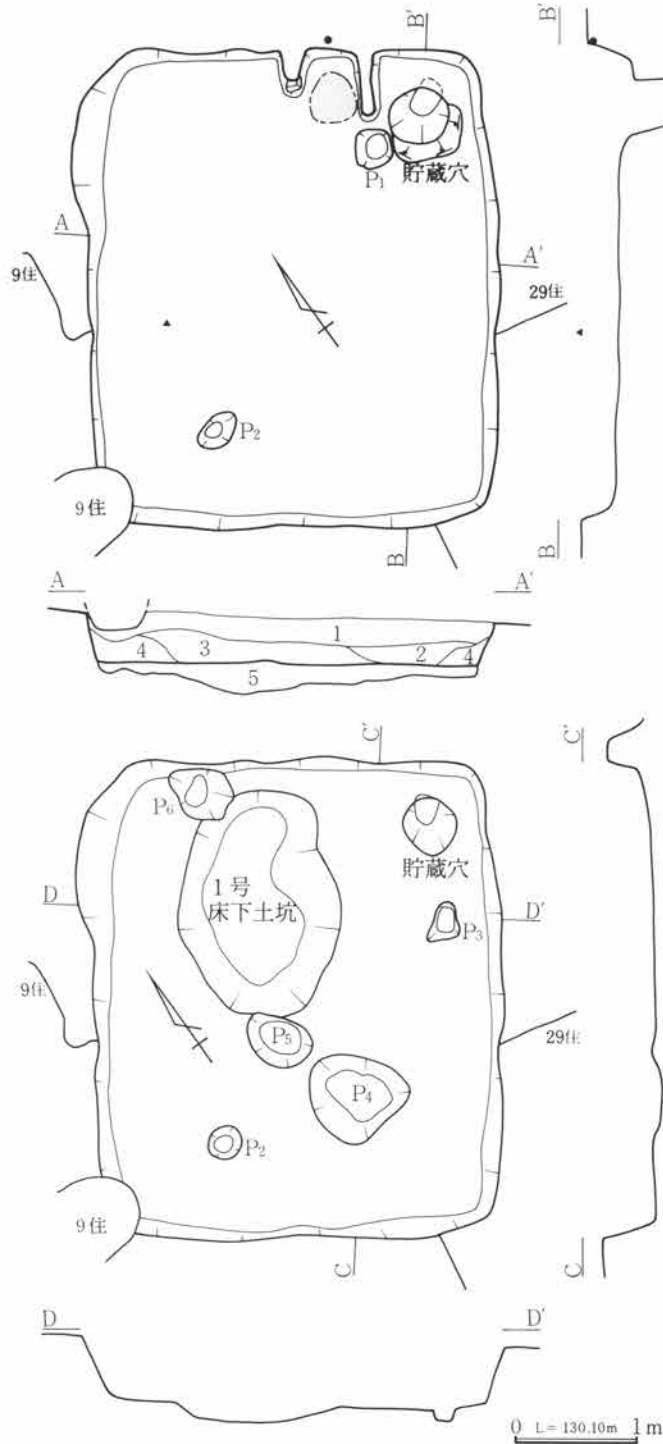
カマドは北東壁のほぼ中央に設置されており、主軸方位は東-11°-北である。平面形は両袖が長く屋内に張り出した砲弾状で、残存部の規模は全長約130cm、燃烧部幅約33cm、煙道長約65cm、煙道下幅約29cmである。袖は両袖共に灰褐色の粘質土を用いて構築しており、右袖先端部には礫が据えられていた。左袖はこの段階では検出できなかったものの、掘り方の調査で径約30cmの据え方内から礫が検出された。

第2節 検出された遺構・遺物



第208図 I区第87号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第88号住居跡		位置	37~40-I-69~71グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.80m×3.25m	主軸方位	北-40度-東	残存深度	約35cm程



(所見) 当住居跡は第9・29号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡が最も古い時期のものと考えられる。平面プランの確認はIV層土中で行った。壁は第9号住居跡との重複によって失った西コーナー部を除いて全周検出した。残存の状態は比較的良好であったが、北コーナー付近に崩落が認められる。床面は全面にわたって8cm程の貼床が施されている。この床面の精査によって貯蔵穴とピットを2本検出した以外に、壁溝等は検出されなかった。貯蔵穴は東コーナー部に位置し、円形を呈している。規模は径約44cm、深さ約74cmであり、全体に北東方向に傾いて掘削されていると同時に、南西側開口部がわずかに掘り窪められていた。2本のピット(P₁・P₂)は規模も小さく、また、配置にも規則性が認められないこと等から柱穴とは考えられない。掘り方の段階で検出した他のピットについても同様である。

カマドは北東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-40°-北で住居の主軸方位と一致している。現状では壁から両袖が屋内に張り出して残存したに過ぎないが、本来は住居の壁を燃焼部奥壁として、一段上がった位置から煙道が屋外に延びる凸字形を呈するタイプと考えられる。残存部の規模は、燃焼部奥行き約50cm、燃焼部幅約40cmである。左袖の先端部には構築材として礫を使用していたが、右袖には構築材に関しては痕跡も見られない。

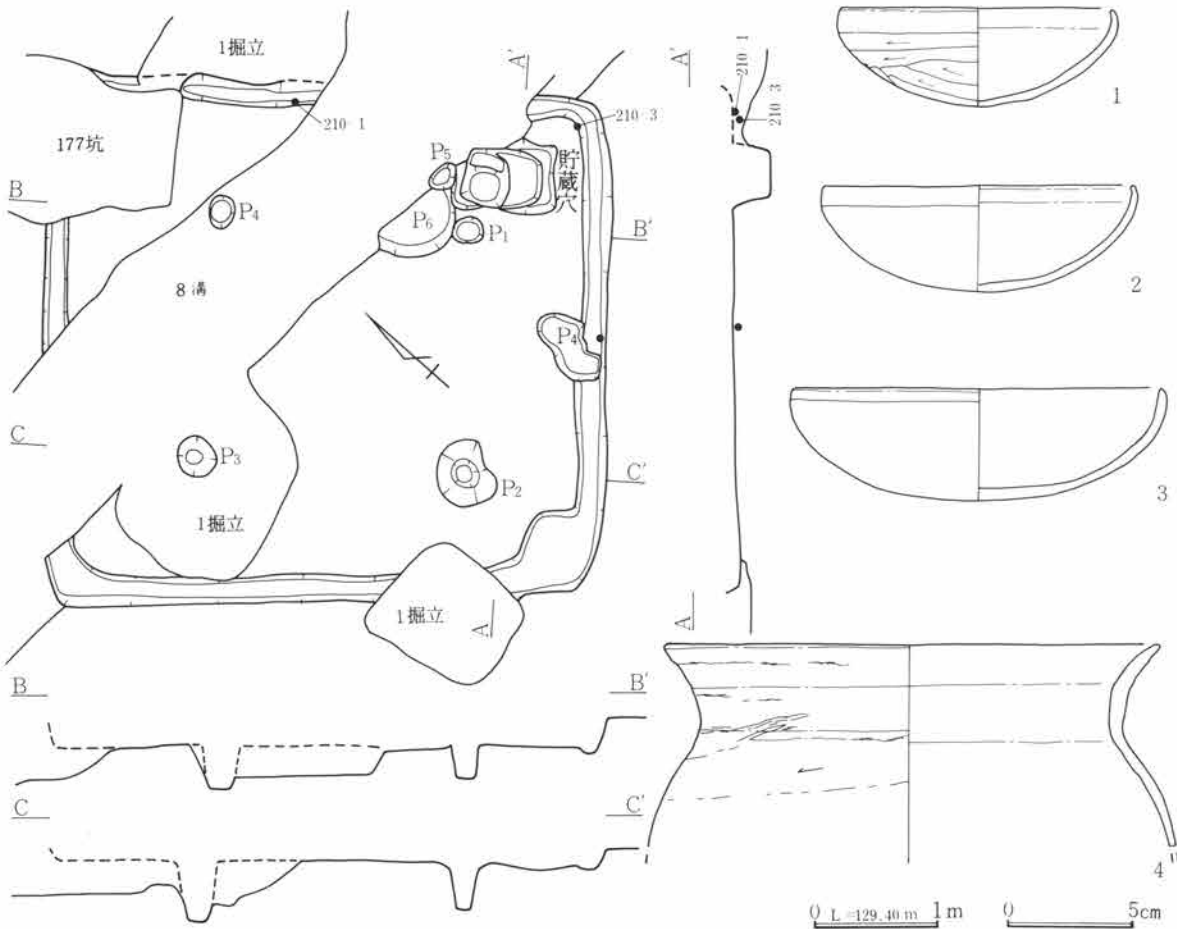
遺物の出土はごくわずかである。

1. 暗褐色土 CPと茶褐色土(VI層土?)粒を少量まばらに含む。
2. 暗褐色土 CPは少量で、茶褐色土(VI層土?)を多量に含む。
3. 暗褐色土 CPは1層よりも少なく、VII層土粒?を少量含む。
4. 暗褐色土 茶褐色土(VI層土?)ブロックを多量に含む。
5. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックを多量に含む。

第209図 I区第88号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第89号住居跡		位置	14~17-I-66~69グリッド内			
平面形態	隅丸方形?	規模	4.10m×4.45m	主軸方位	東-40度-北	残存深度	約23cm程

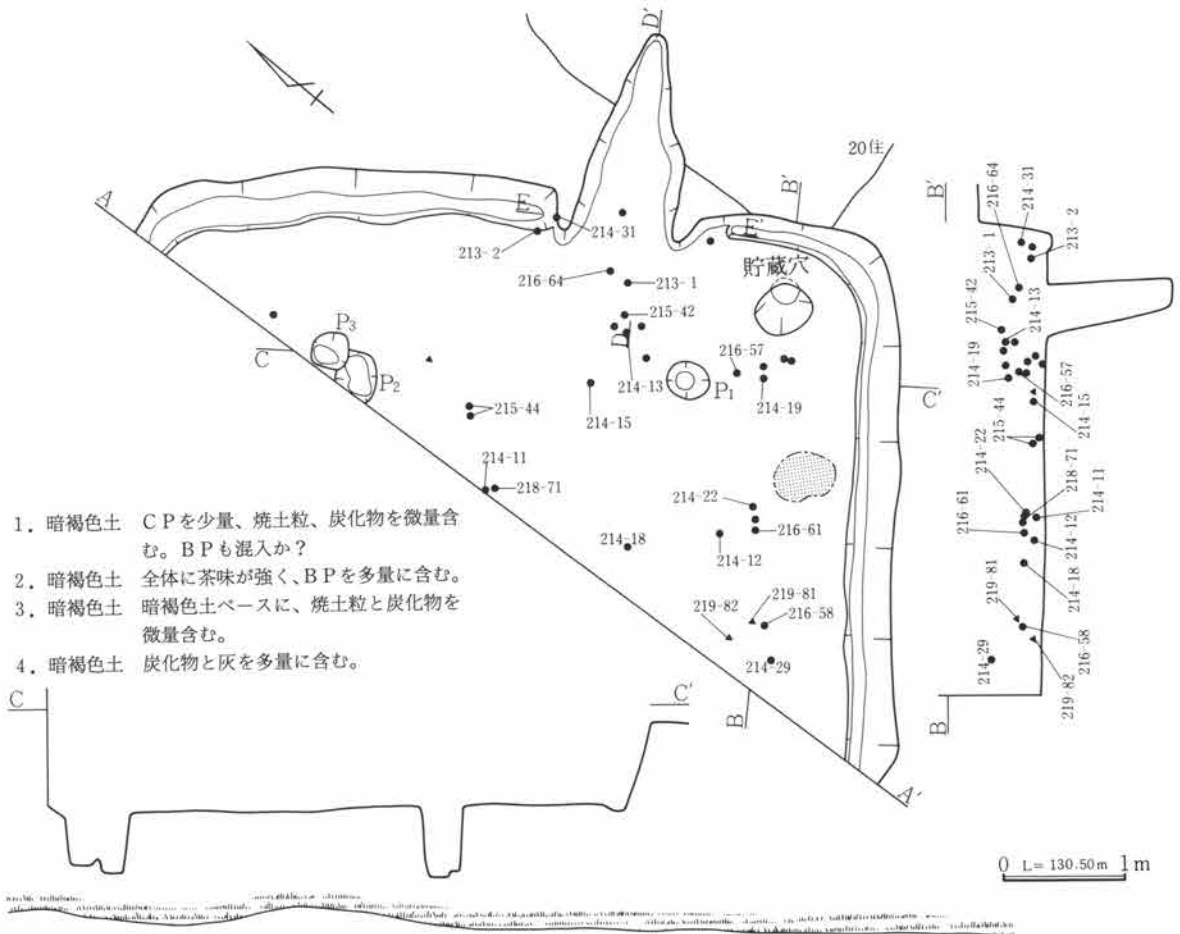
(所見) 当住居跡は第1号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第1号掘立柱建物跡と考えられる。また、中世以降に属する第8号溝状遺構との重複によって、カマドを含む一部が失われている。残存は全体に不良で、床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴を検出した。壁溝は全周したと思われる、下幅約7~20cm、深さは5cm程である。柱穴はP₁~P₄(径約20~50cm、深さ約26~48cm、柱穴間距離P₁~P₂間約1.9m、P₂~P₃間約2.1m、P₃~P₄間約1.9m、P₄~P₁間約2.0m)の4本である。貯蔵穴は東コーナー部で、約80×60cm、深さ約6cmの長方形の掘り込み内に約60×45cm、深さ約19cmの長方形の掘り込みがあり、さらに約40×35cm、深さ約24cmの貯蔵穴が掘削されている。



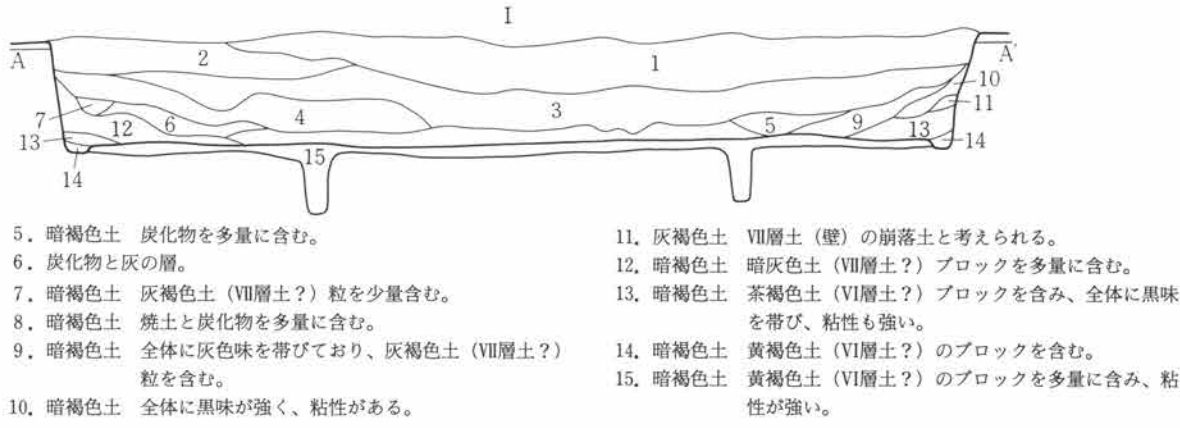
第210図 I区第89号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第90号住居跡		位置	36~40-I-82~84グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	東-35度-北	残存深度	約65cm程

(所見) 当住居跡はカマド部分で第20号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第20号住居跡と考えられる。住居跡の西側の大半は調査区外にかかっており、調査が不可能であった。平面プランの確認はIV層土中で行った結果、明瞭に捉えることができた。壁は全体に残存状態が良好であるが、南東上半部に崩落の痕跡が認められる。床面は全体に10cm程の貼床が施されており、硬くしまっている。壁溝はカマド



1. 暗褐色土 C Pを少量、焼土粒、炭化物を微量含む。B Pも混入か？
2. 暗褐色土 全体に茶味が強く、B Pを多量に含む。
3. 暗褐色土 暗褐色土ベースに、焼土粒と炭化物を微量含む。
4. 暗褐色土 炭化物と灰を多量に含む。

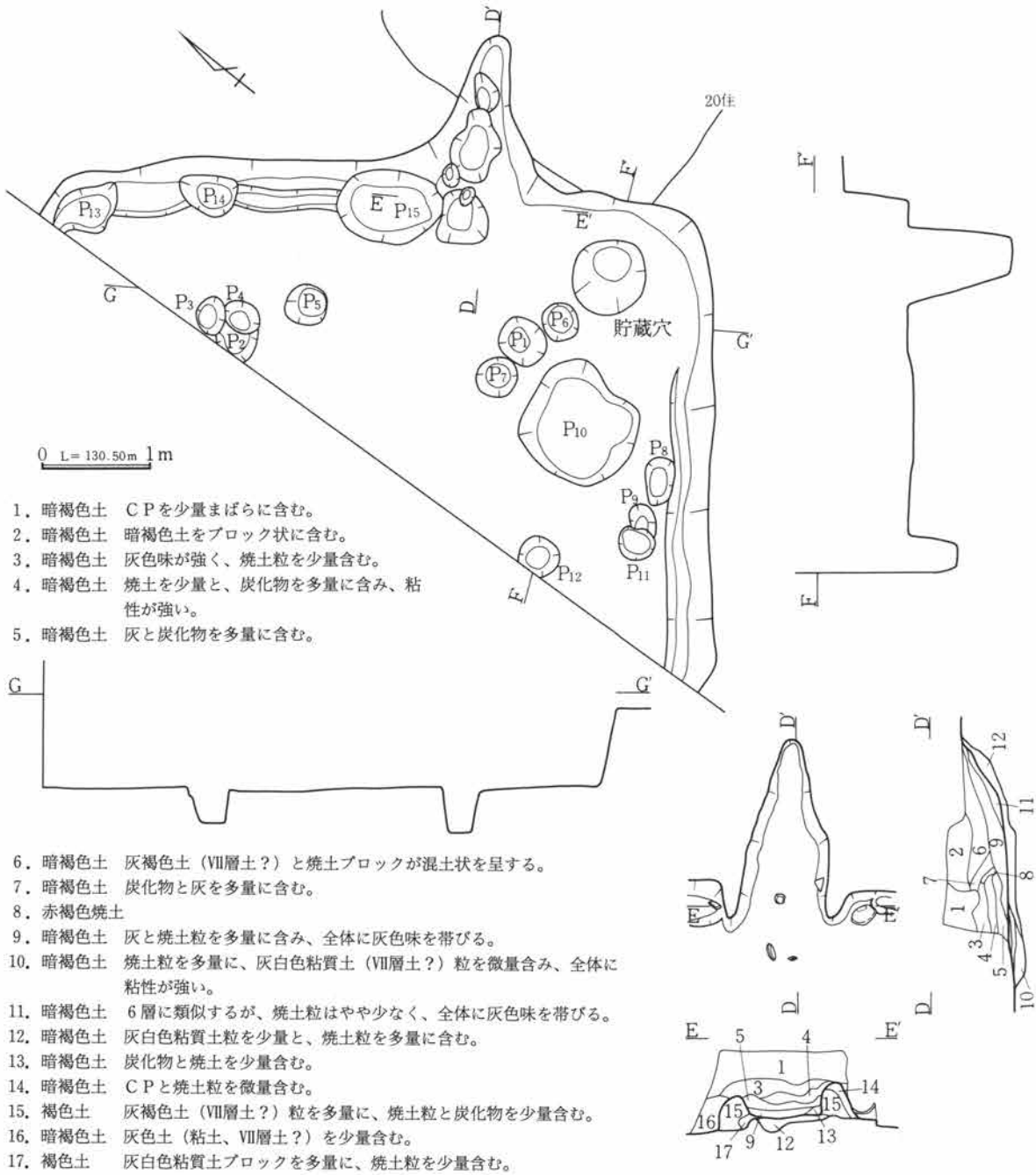


- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 5. 暗褐色土 炭化物を多量に含む。 6. 炭化物と灰の層。 7. 暗褐色土 灰褐色土 (VII層土?) 粒を少量含む。 8. 暗褐色土 焼土と炭化物を多量に含む。 9. 暗褐色土 全体に灰色味を帯びており、灰褐色土 (VII層土?) 粒を含む。 10. 暗褐色土 全体に黒味が強く、粘性がある。 | <ol style="list-style-type: none"> 11. 灰褐色土 VII層土 (壁) の崩落土と考えられる。 12. 暗褐色土 暗灰色土 (VII層土?) ブロックを多量に含む。 13. 暗褐色土 茶褐色土 (VI層土?) ブロックを含み、全体に黒味を帯び、粘性も強い。 14. 暗褐色土 黄褐色土 (VI層土?) のブロックを含む。 15. 暗褐色土 黄褐色土 (VI層土?) のブロックを多量に含む、粘性が強い。 |
|---|--|

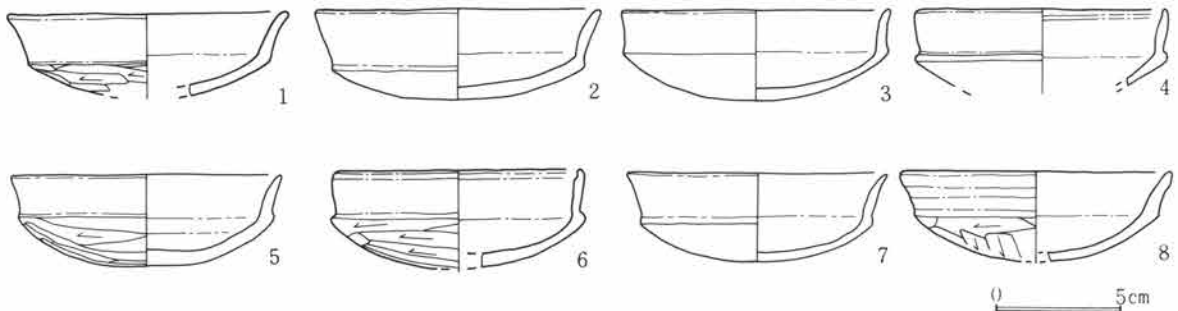
第211図 I区第90号住居跡実測図(1)

部を除いて全周しているものと思われる、検出部の規模は下幅約8~22cm、深さ約4~7cmである。柱穴はP₁ (径約30cm、深さ約56cm)・P₂ (径約33cm、深さ約50cm)の2本であり、P₁~P₂の柱穴間距離は約2.6mである。その他、掘り方で検出した多くのピットの中には他の柱穴配列がある可能性もある。貯蔵穴は東コーナー部に検出した円形の掘り込みで、規模は径約45cm、深さ約98cmである。遺物は床面から浮いた位置から多量に出土している。

カマドは北東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-31°-北である。平面形は両袖が屋内に張り出した三角形状を呈し、残存部の規模は全長約170cm、燃焼部幅約60cmである。

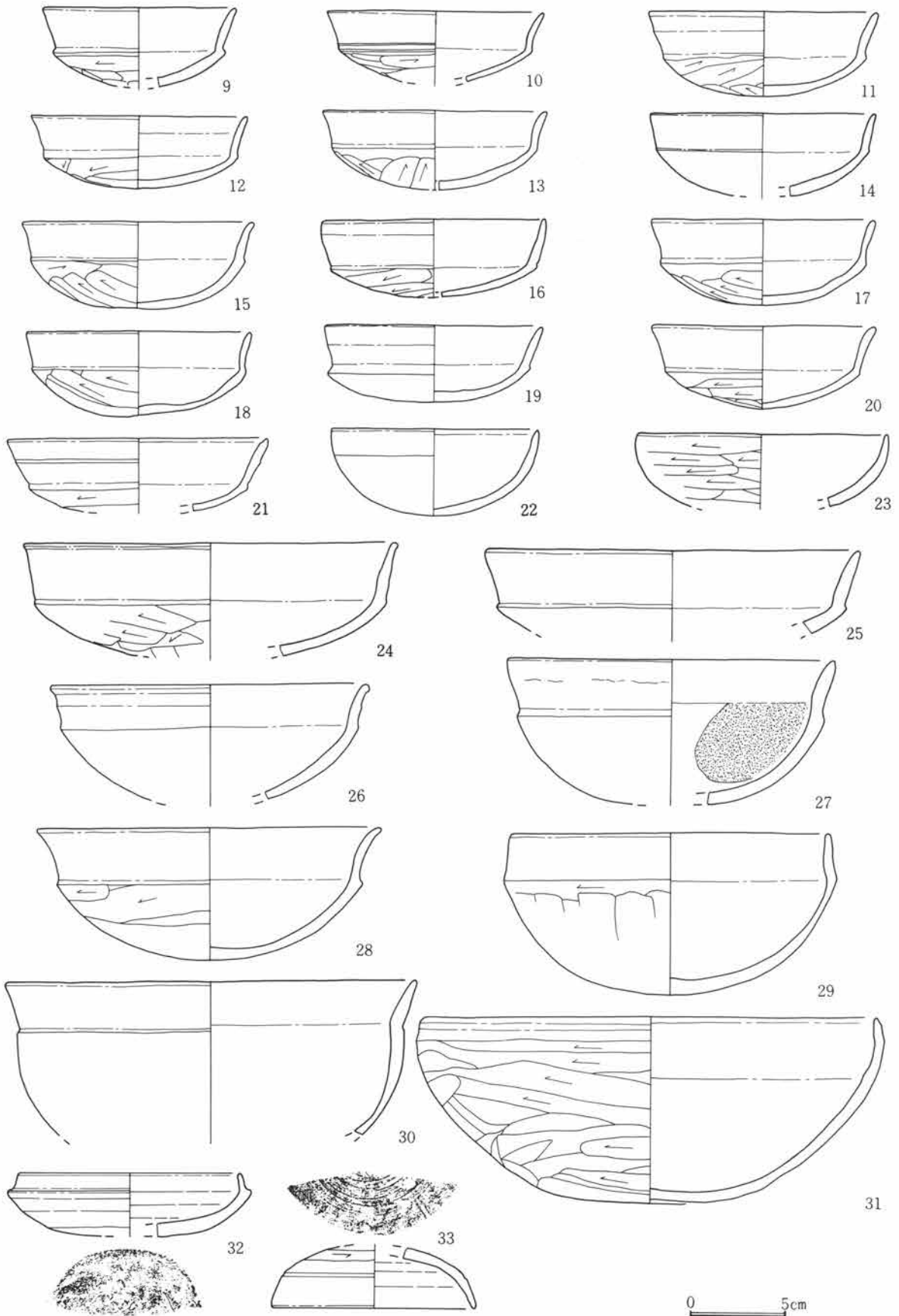


第212図 I区第90号住居跡実測図（2）



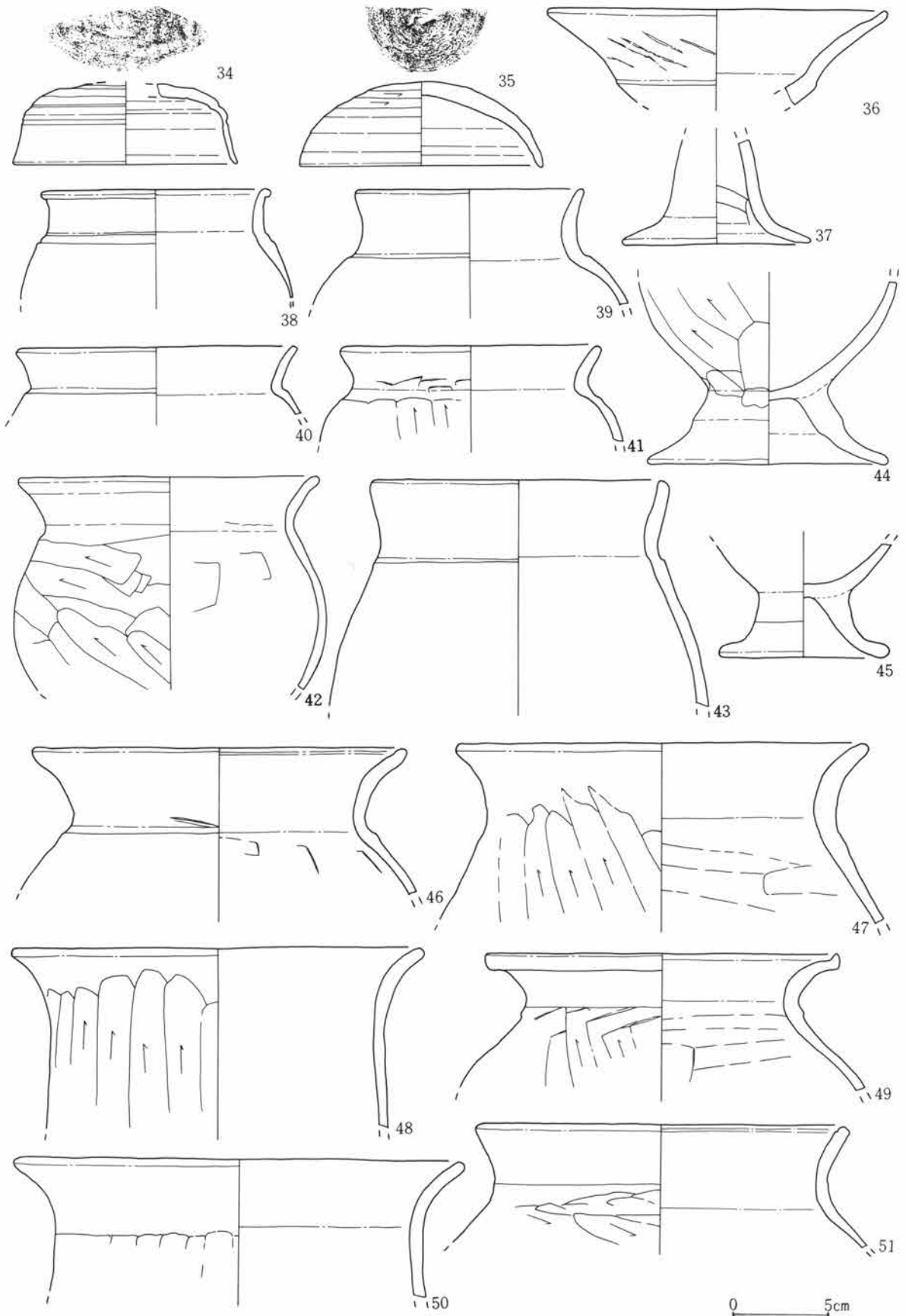
第213図 I区第90号住居跡出土遺物実測図（1）

第4章 検出された遺構・遺物

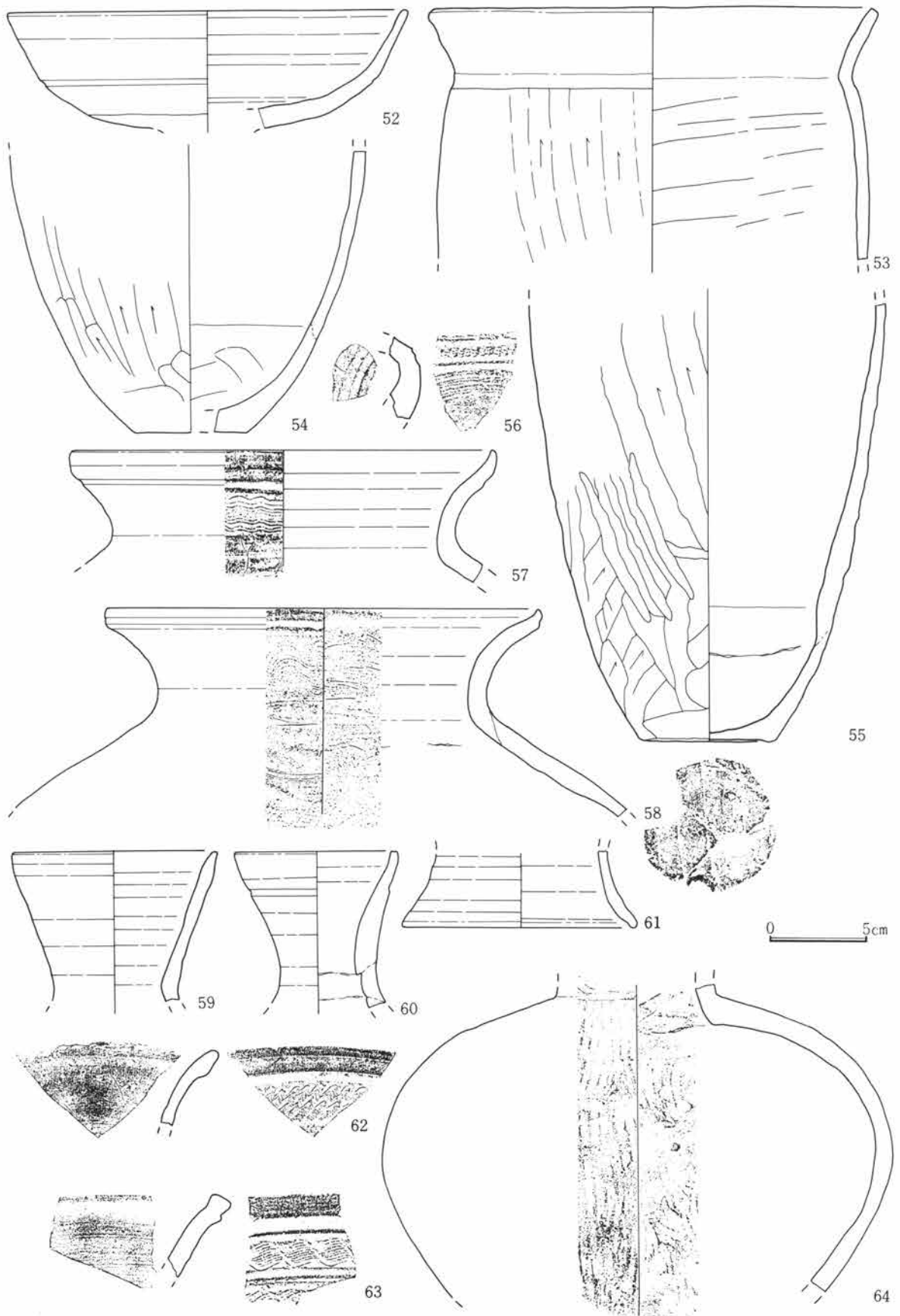


第214図 I区第90号住居跡出土遺物実測図(2)

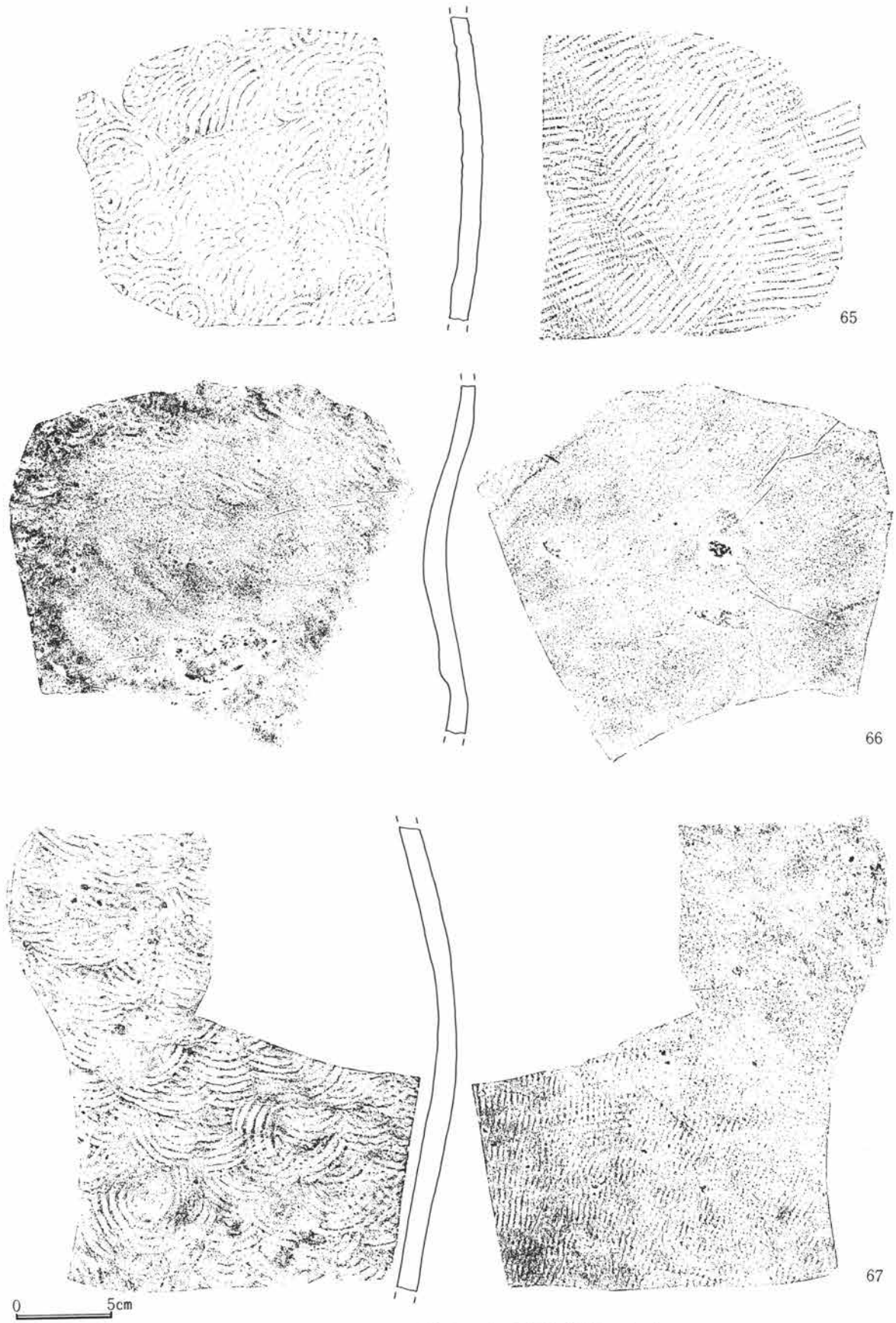
第2節 検出された遺構・遺物



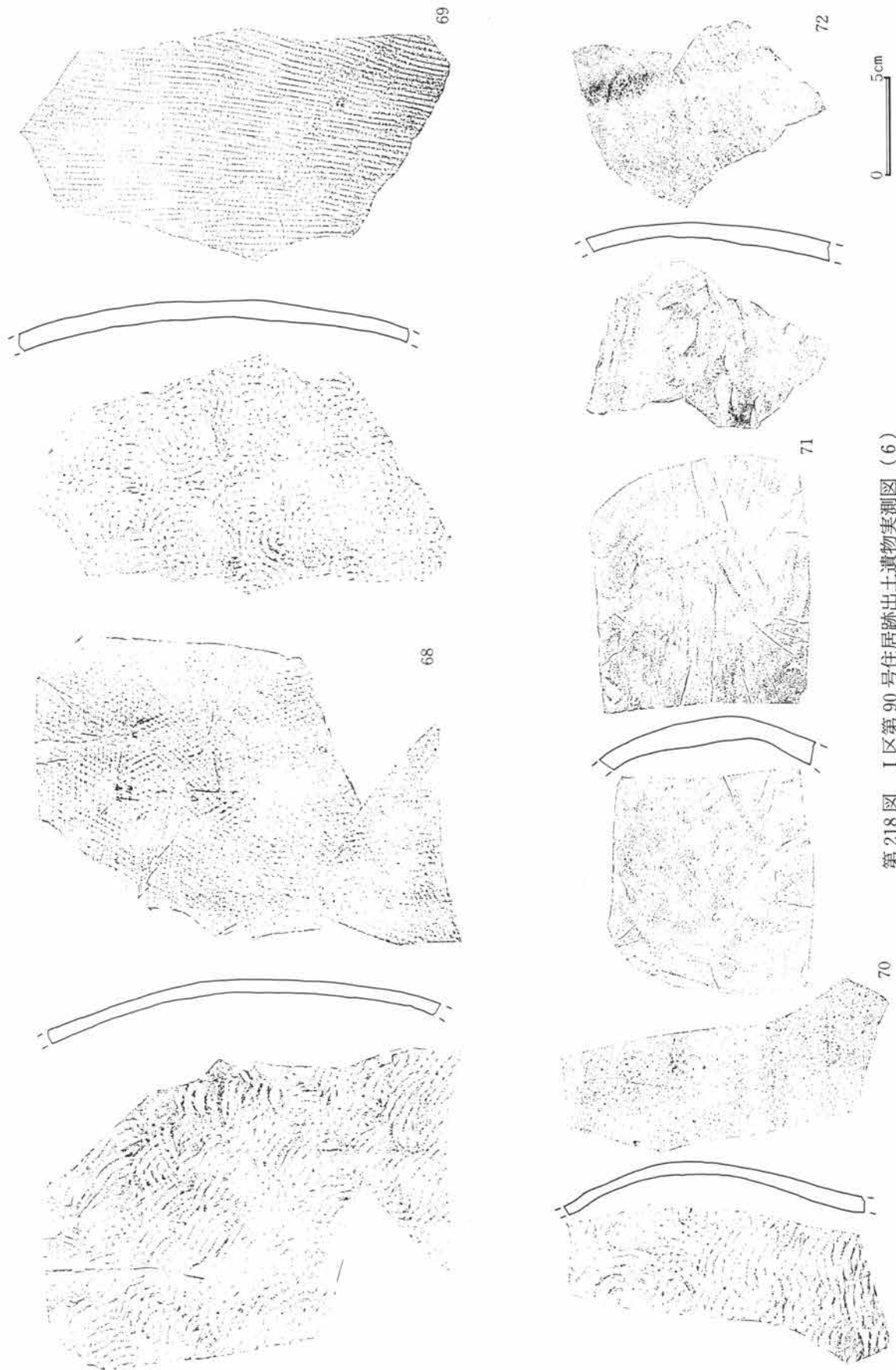
第215図 I区第90号住居跡出土遺物実測図(3)



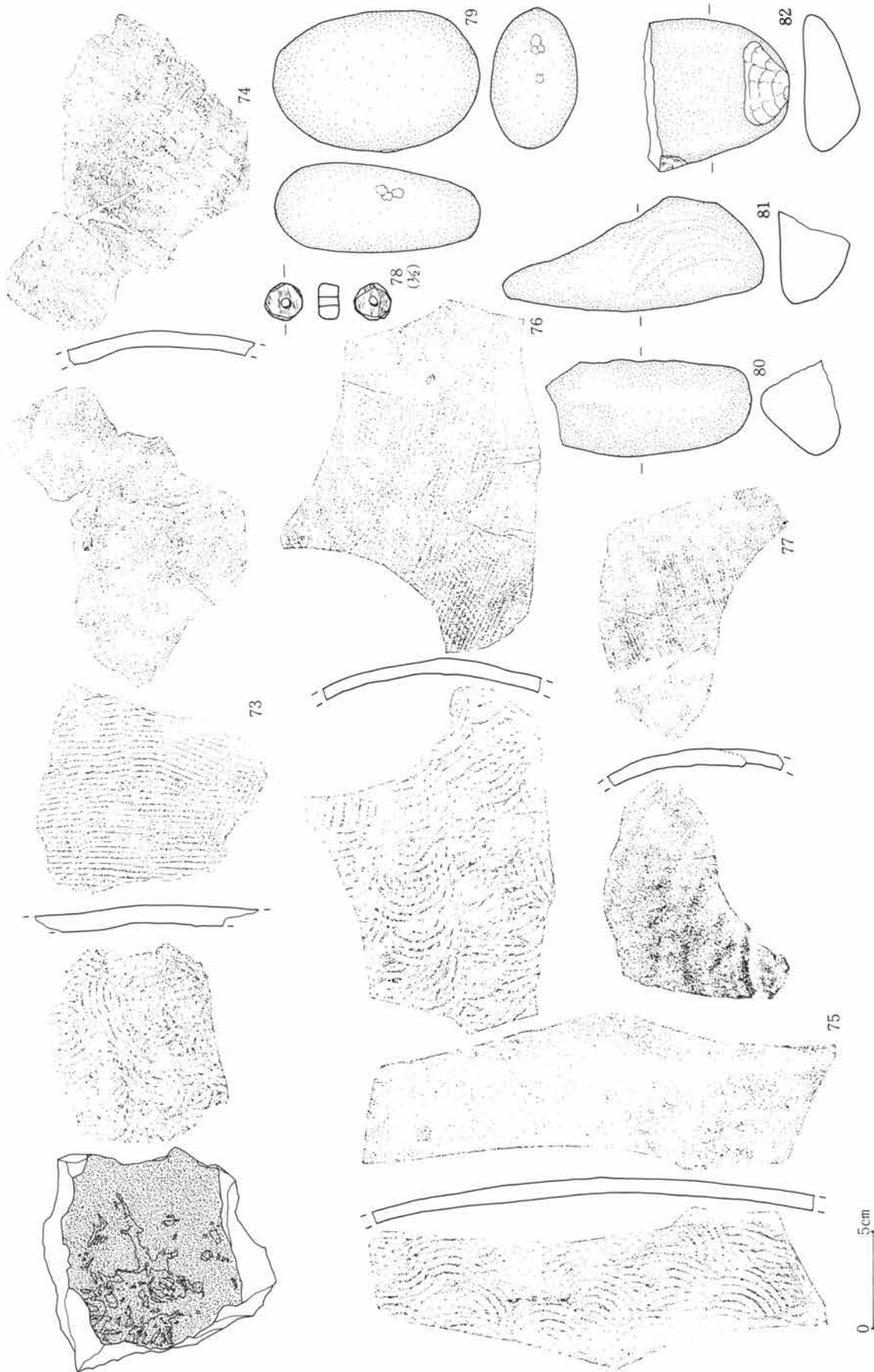
第216図 I区第90号住居跡出土遺物実測図(4)



第217図 I区第90号住居跡出土遺物実測図(5)



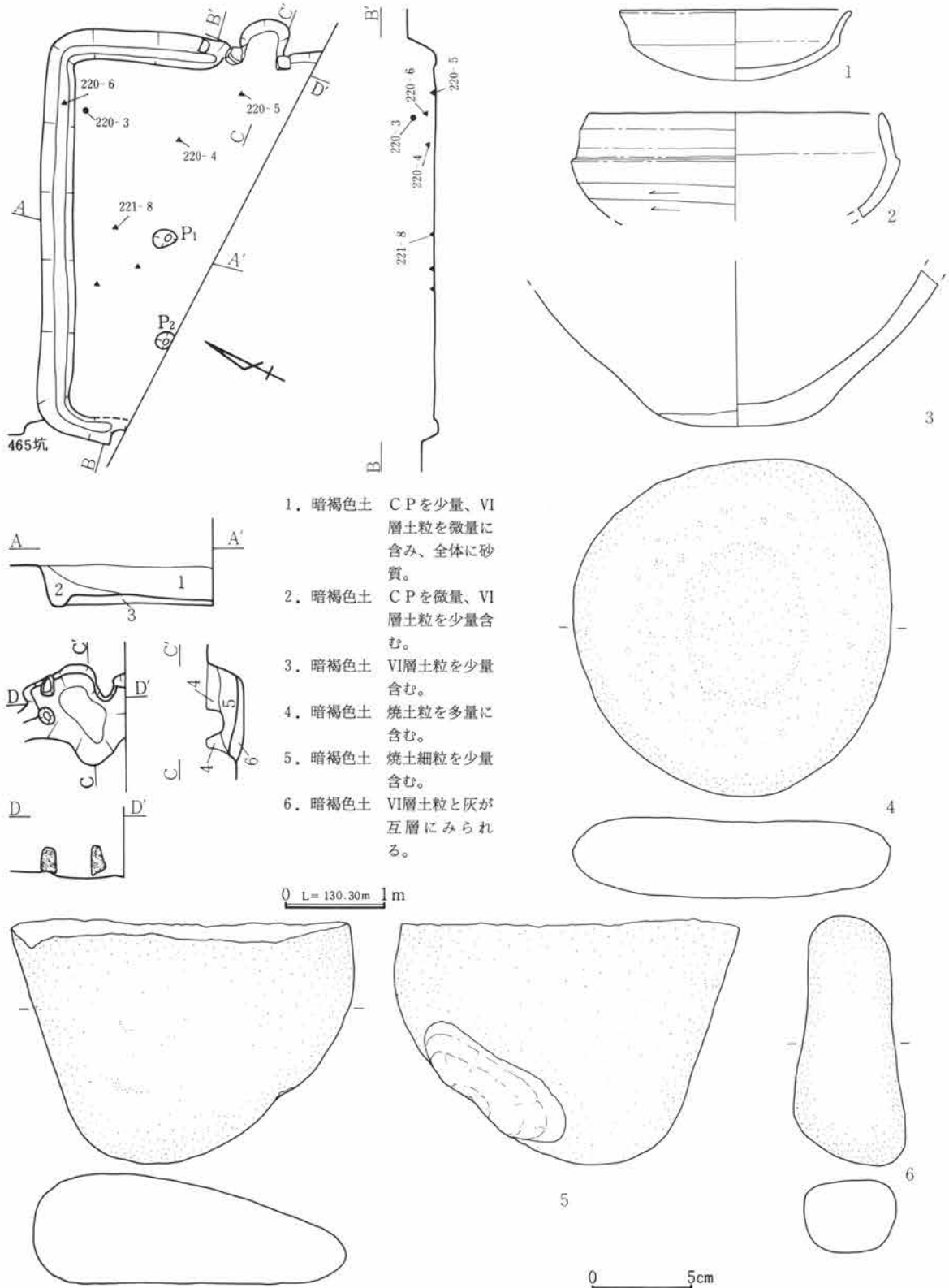
第218図 I区第90号住居跡出土遺物実測図(6)



第219図 I区第90号住居跡出土遺物実測図(7)

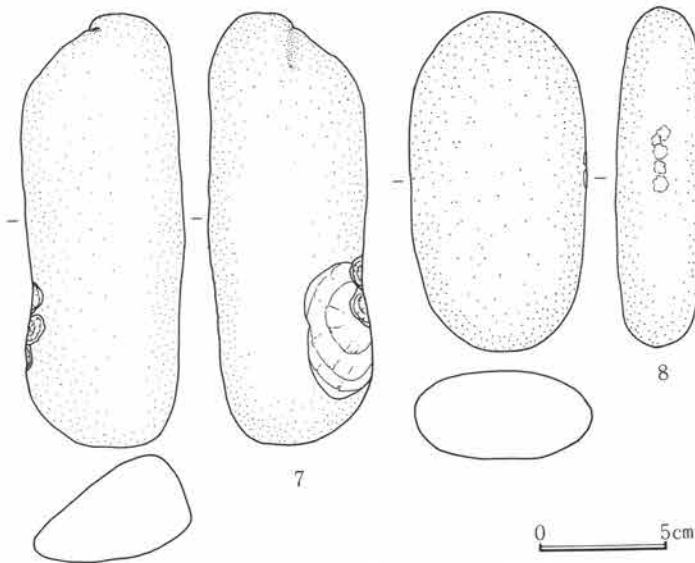
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第91号住居跡	位置	49・50-I-62~64グリッド内
平面形態	—	規模	4.00m× 一m
		主軸方位	東-23度-北
		残存深度	約20cm程



第220図 I区第91号住居跡・出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物

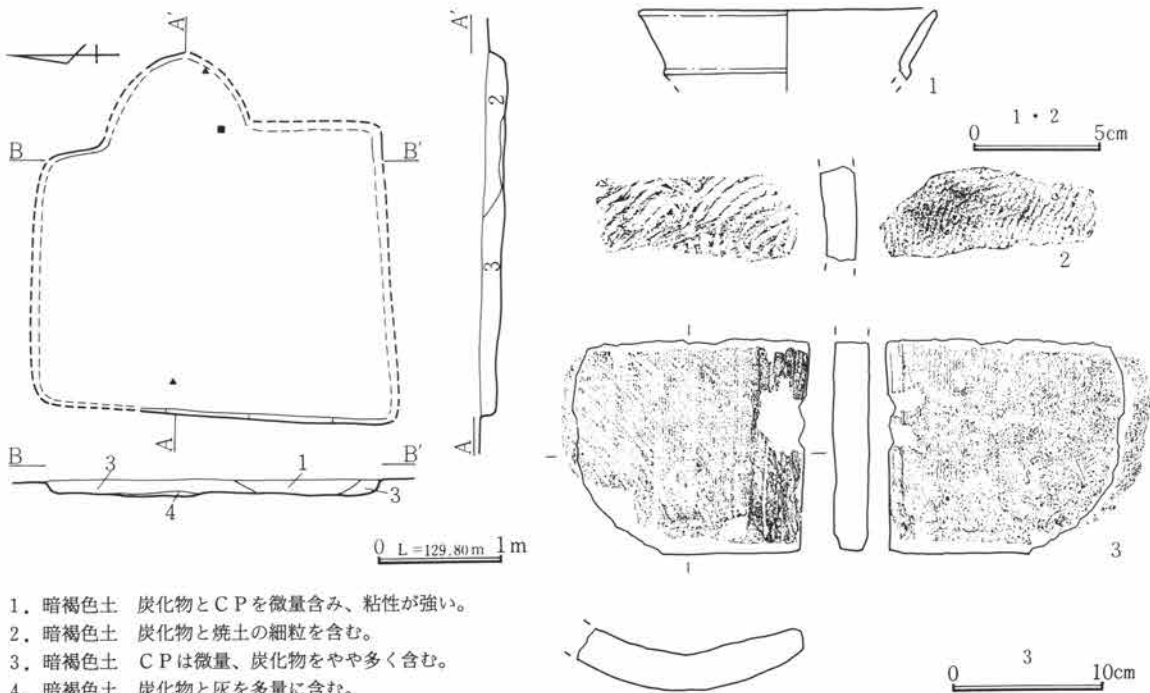


第221図 I区第91号住居跡出土遺物実測図(2)

(所見) 当住居跡は東西農道下の調査で検出したもので、確認面の違いによるものか南側では検出されなかった。したがって調査できたのは北側約半分である。床面には8cm程の貼床が施され、壁溝はこの貼床面から掘削されている。規模は、6~14cm、深さ4~10cmである。床面の精査によってP₁(径約24cm、深さ約21cm)・P₂(径約18cm、深さ約14cm)の2本のピットを検出したが、配置等から柱穴とは考えられない。カマドは北東壁で、両袖に角柱状の截石を据えた馬蹄形のタイプである。

遺構名称	I区第92号住居跡		位置	22・23-I-75・76グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.30m×2.68m	主軸方位	東-3度-南	残存深度	約12cm程

(所見) 当住居跡は第93・94・121号住居跡と重複しているが、遺構のタイプ等から当住居跡が最も新しい時期の遺構と考えられる。平面プランの確認は、第93・94号住居跡と同時にIV層土中で行ったが、当住居跡はこれらの遺構の覆土中に浅く掘り込まれていたために、ほとんどその平面を捉えることができなかった。カマドは東壁に設置されていたと考えられるが、貧弱なカマドで焼土等その痕跡をほとんど残していない。遺物についても、明瞭な形で出土の捉えられたのはわずかに自然礫だけであり、掲載した遺物は覆土中に当たると判断したものである。しかし、第222図1は第121号住居跡に属する可能性が強い。

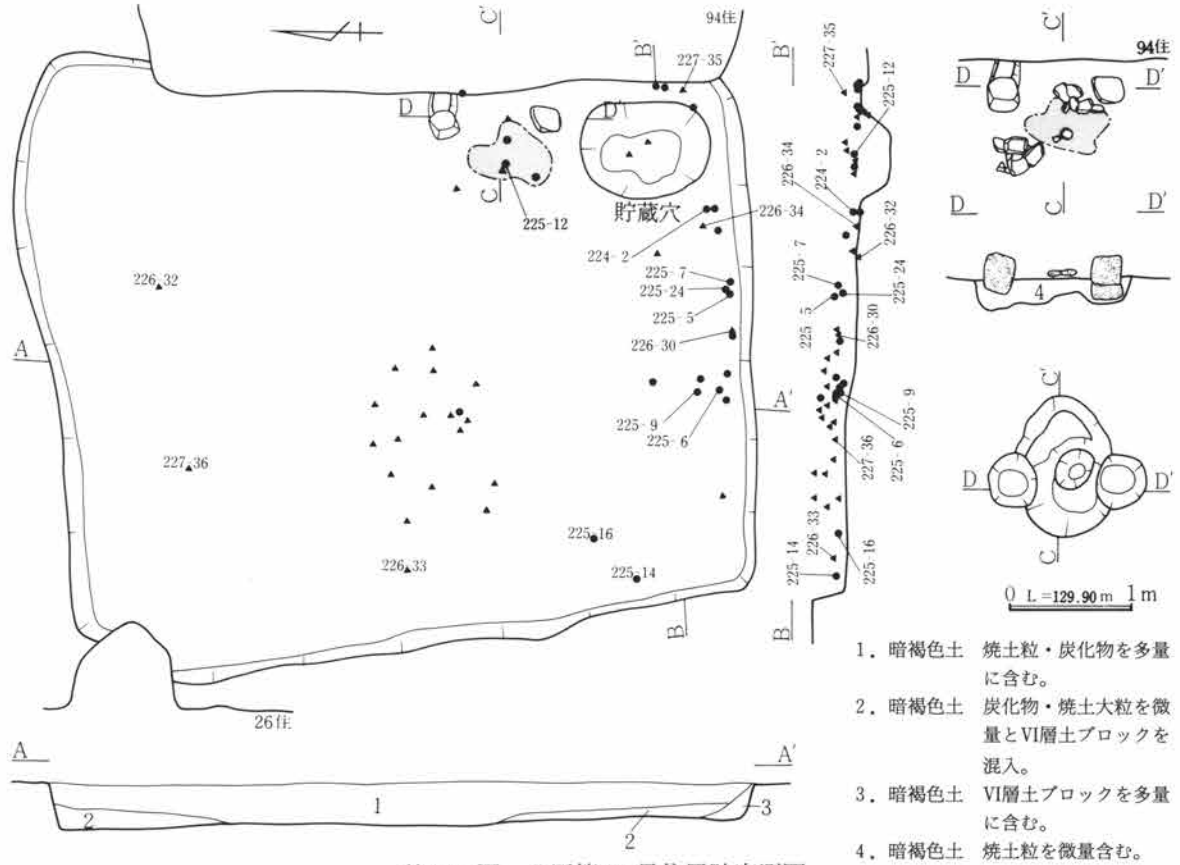


1. 暗褐色土 炭化物和CPを微量含み、粘性が強い。
2. 暗褐色土 炭化物和焼土の細粒を含む。
3. 暗褐色土 CPは微量、炭化物をやや多く含む。
4. 暗褐色土 炭化物和灰を多量に含む。

第222図 I区第92号住居跡・出土遺物実測図

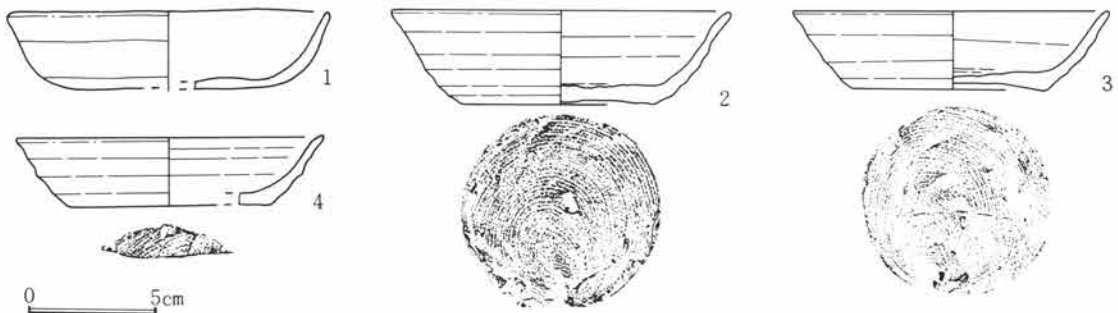
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第93号住居跡		位置	22~24-I-75~77グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	4.95m×5.67m	主軸方位	東-8度-北	残存深度	約32cm程



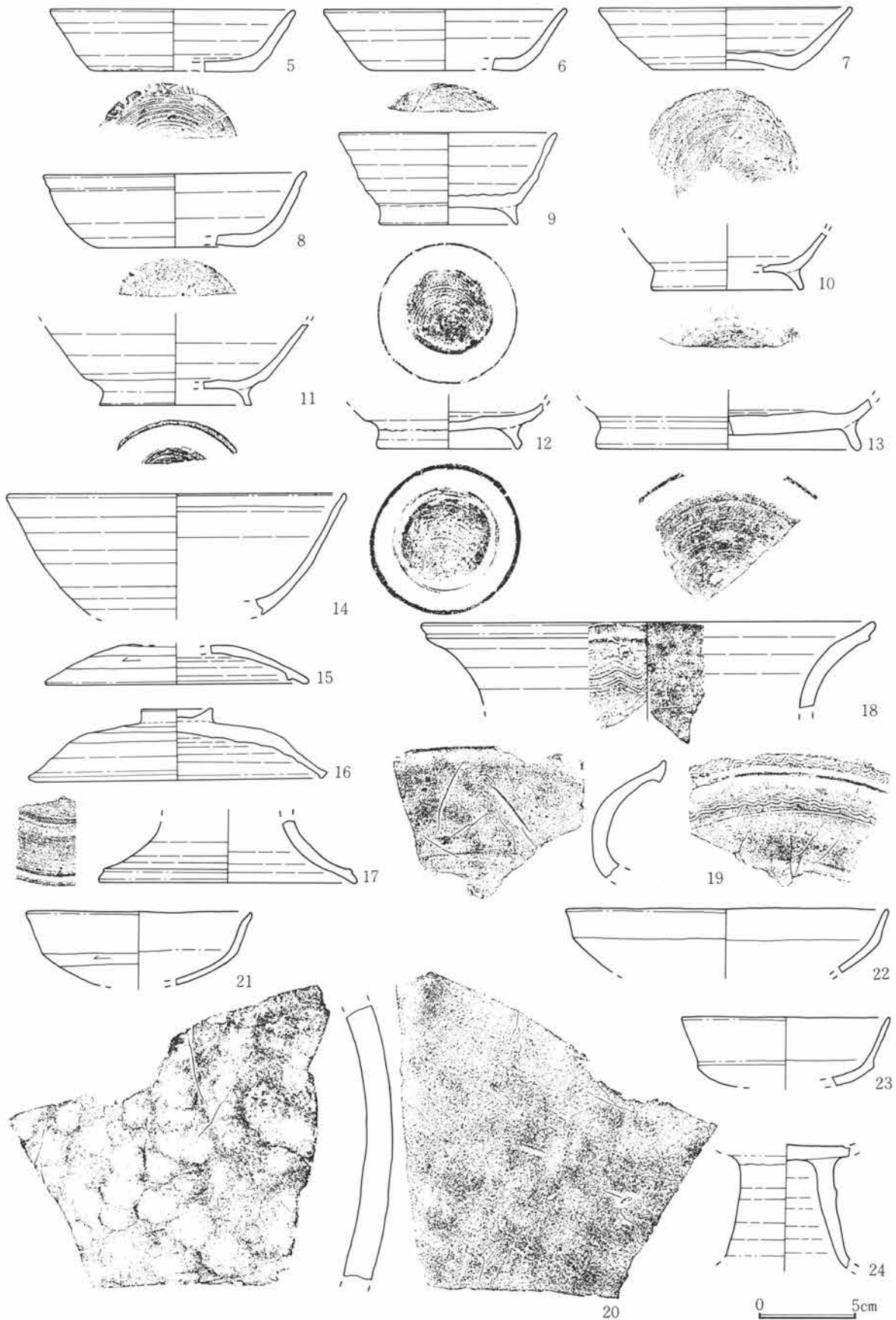
第223図 I区第93号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第26・92・94・121号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態や出土遺物の比較から第121号住居跡→当住居跡→第26・92・94号住居跡と考えられる。東壁の大部分とカマドは、第94号住居跡との重複によって失われている。床面は、他の遺構内に構築された部分が多く、明瞭に捉えることはできず、遺物の出土レベルで押えた。この段階で下の遺構の平面プランが捉えられたことから、当住居跡には掘り方はなかったものと考えられる。南東コーナー部に検出した約102×75cm、深さ約24cmの楕円形の掘り込みは貯蔵穴であろう。カマドは東壁の南寄りに位置しているが、第94号住居跡によって壊され主体部の形状は不明であるが、先端部に角柱状の截石を据えた袖が屋内に張り出すタイプであることはその残存状態から確かめられた。また、この残存した両袖の間からは灰面が検出されており、焚口の位置も特定可能である。



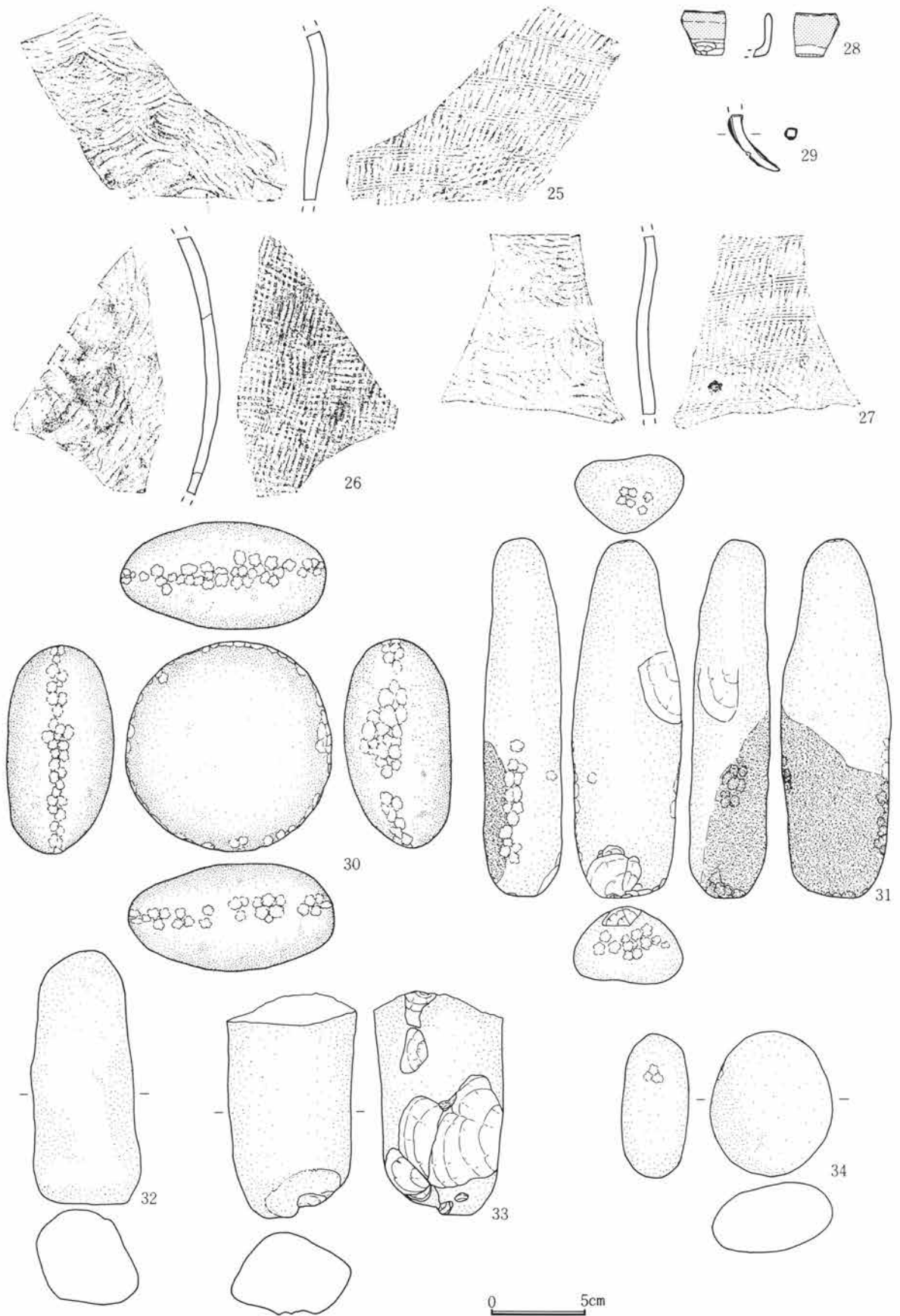
第224図 I区第93号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物

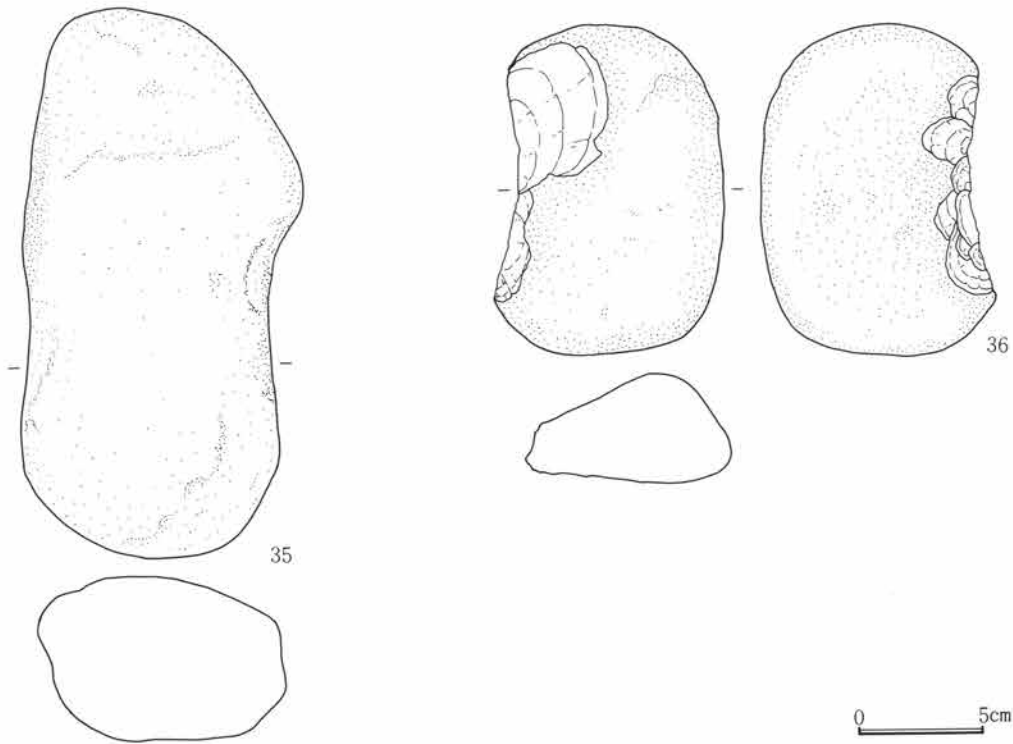


第225図 I区第93号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

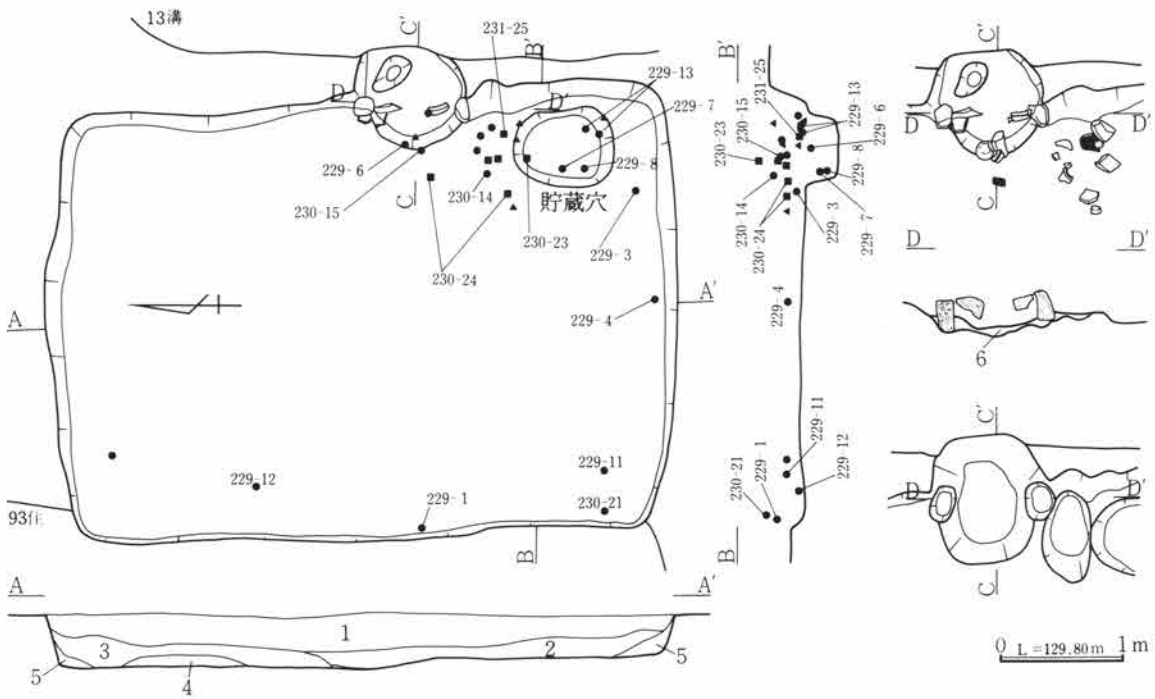


第226図 I区第93号住居跡出土遺物実測図(3)



第227図 I区第93号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	I区第94号住居跡	位置	21~24-I-73~75グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	3.47m×5.00m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約35cm程



1. 暗褐色土 CP・焼土ブロック・炭化物を多量に含む。
2. 暗褐色土 CPは少なく、焼土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 CPは少なく、VII層土を多量に含む。
4. 暗褐色土 焼土粒・CP共に含まず、しまりがある。
5. 暗褐色土 炭化物をわずかに含み、全体にざらついた感じ。
6. 暗褐色土 焼土粒・灰を微量、VII層土ブロックを多量に含む。

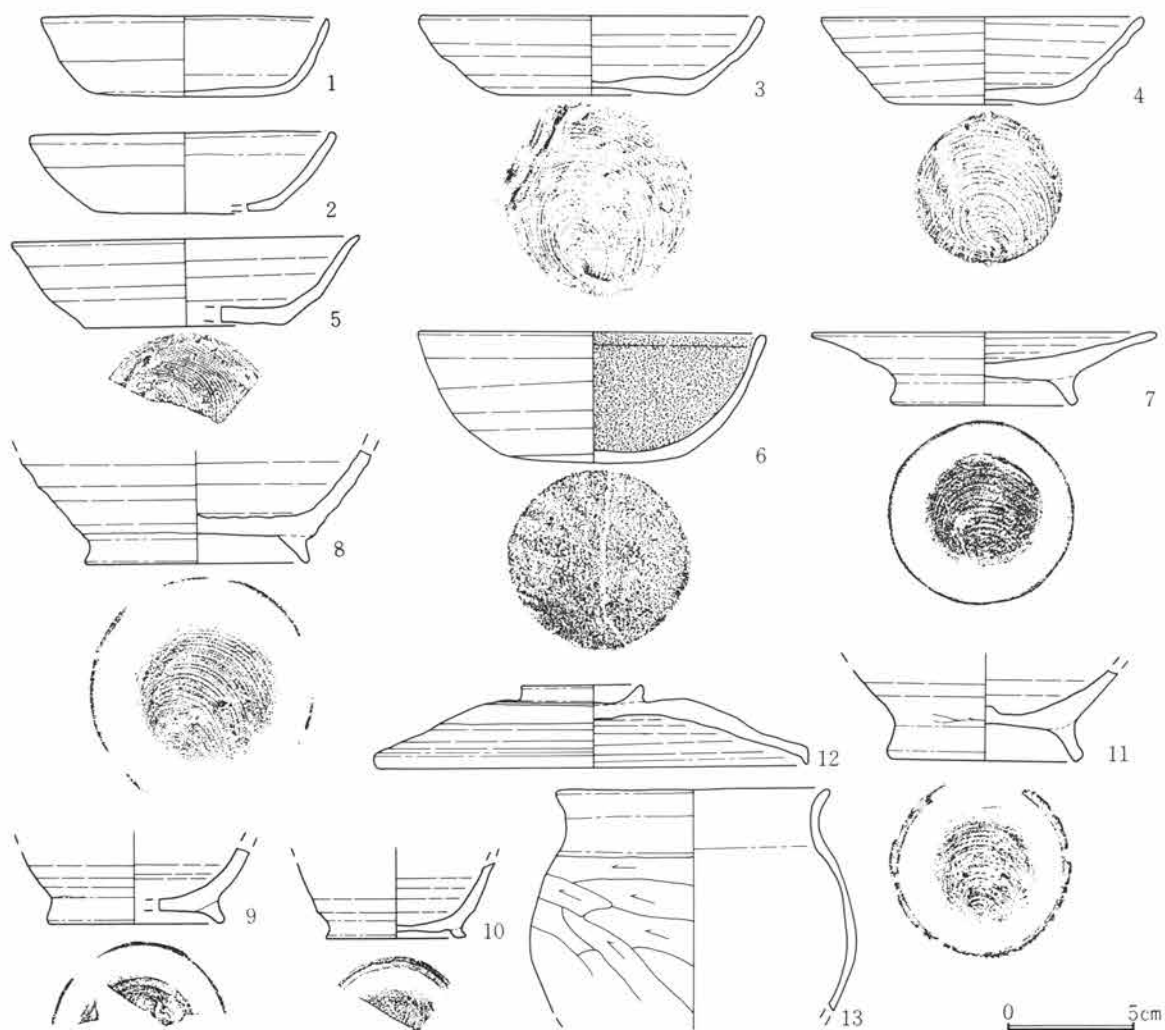
第228図 I区第94号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

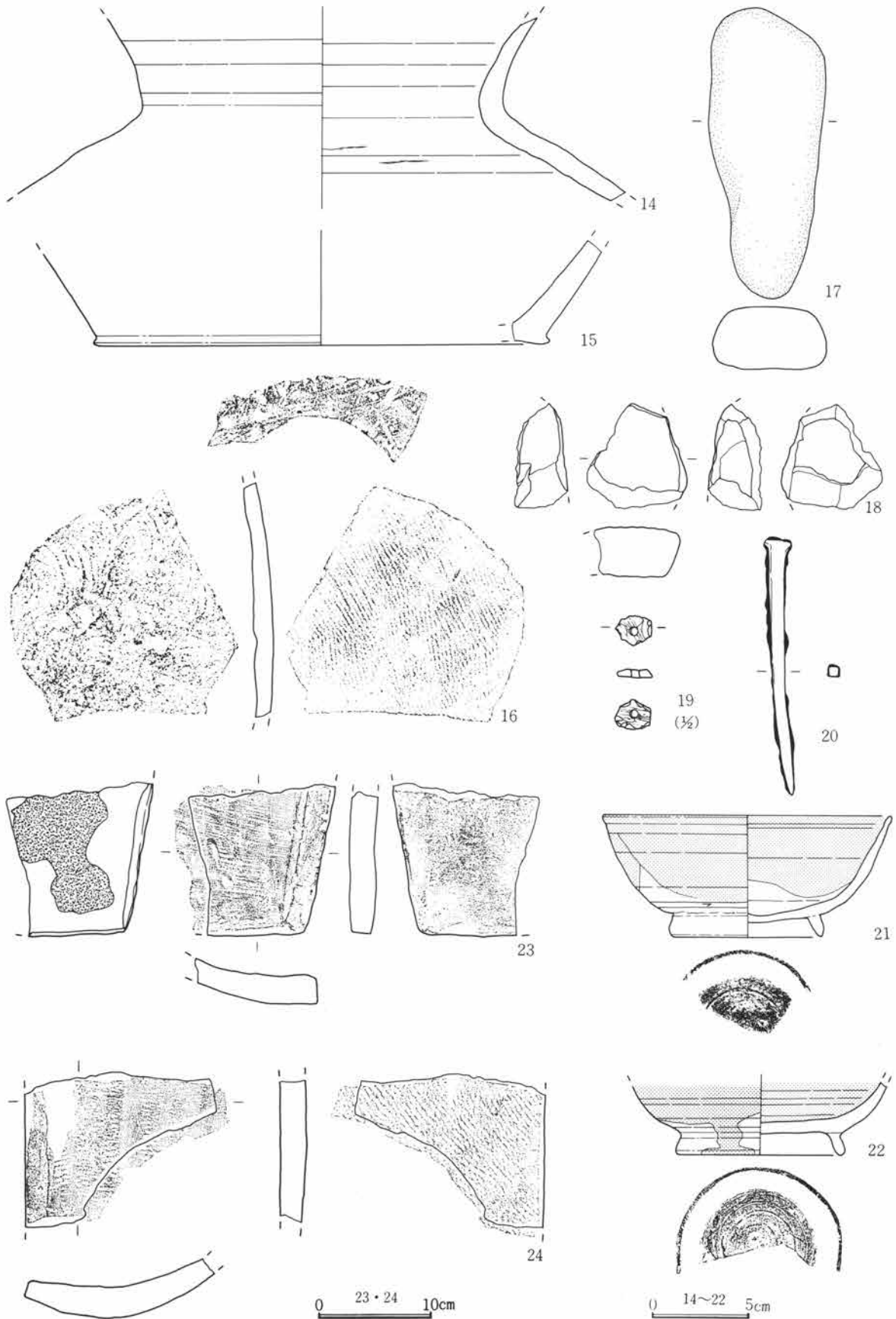
(所見) 当住居跡は第92・93・121・131号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第121・131号住居跡→第93号住居跡→当住居跡→第92号住居跡と考えられる。また、カマドの一部は後世の乱によって失っている。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、他の遺構との重複が多いため東側を除いて明瞭に捉えることはできなかった。壁の残存は浅く、わずかに崩落がみられるなどあまり良好ではない。床面は西側が第121号住居跡の覆土中に構築されているため、遺物の出土レベルから求めた部分が多いが、この段階で捉えた面において第121号住居跡のプランが確認できたことから、当住居跡には貼床は施されていないと考えられる。この床面の精査によって壁溝・柱穴は痕跡も検出することはできず、これらの施設は当初から掘削されなかったものであろう。貯蔵穴は南東コーナー部に検出した楕円形プランの掘り込みで、規模は約80×60cm、深さ約20cmである。

カマドは東壁のほぼ中央やや南寄りに設置されており、先端部は前述のように調査不可能であった。主軸方位は東-0°-北で、残存部の規模は燃烧部幅のみ計測可能で、約65cmである。壁との接合部には、袖構築材の礫が残存しており、袖が屋内に張り出さないタイプであることがわかる。また、燃烧部の北寄りには小ピットが検出されており、これを据え方として支脚が設置されていたものと考えられる。

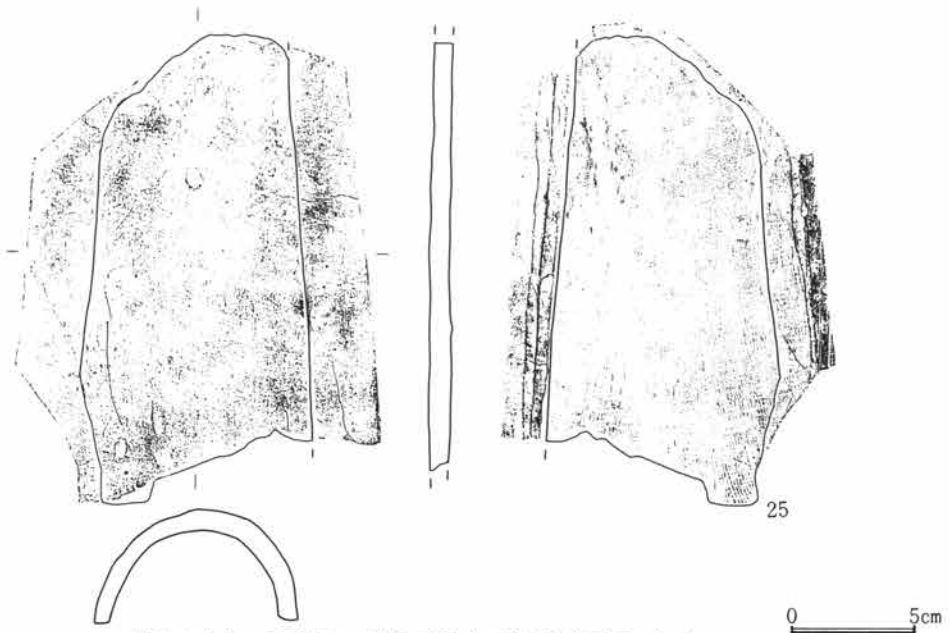
当住居跡の遺物として掲載した中には、第230図21・22の灰釉陶器塚のように主体を占める土器群と時期を異にする遺物がある。これらは出土位置からも第92号住居跡に属する遺物である可能性が高い。



第229図 I区第94号住居跡出土遺物実測図(1)

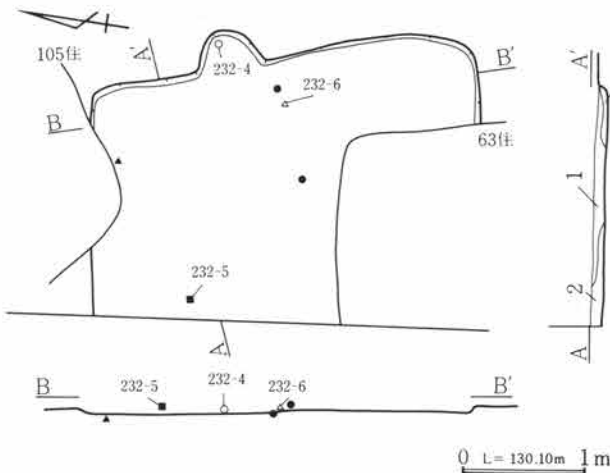


第230図 I区第94号住居跡出土遺物実測図(2)



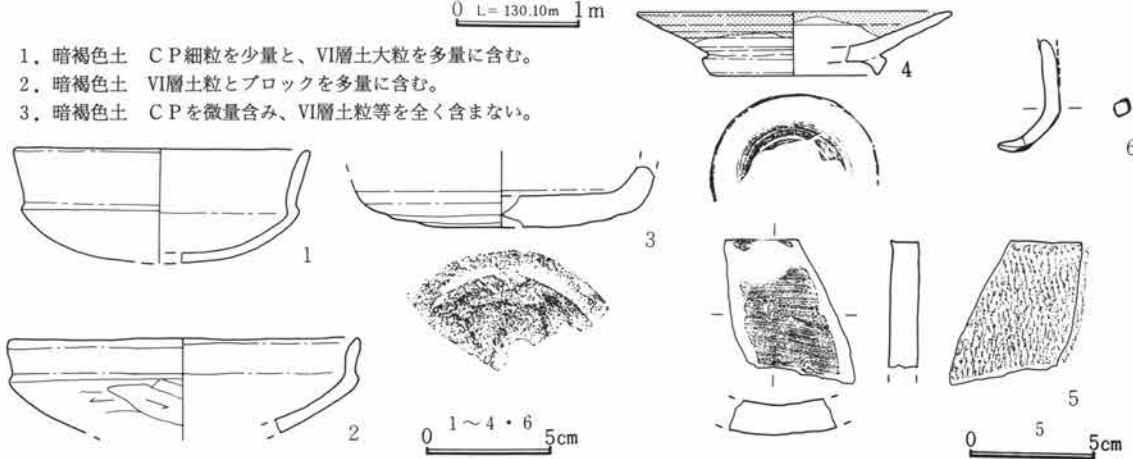
第231図 I区第94号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第95号住居跡	位置	12~14-I-80・81グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×3.09m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約8cm程



(所見) 当住居跡は第69・105・106号住居跡と重複するが、遺構の検出状態等から第105・106号住居跡→当住居跡→第69号住居跡と考えられる。遺構の残存は非常に悪く、西側は調査区外で未調査である。カマドは北東壁の北寄りに設置されているが、壁外への掘り方が捉えられたに過ぎず、袖等の構造については全く不明である。遺物には時期の異なるものがあり、重複する他遺構のものが含まれている。

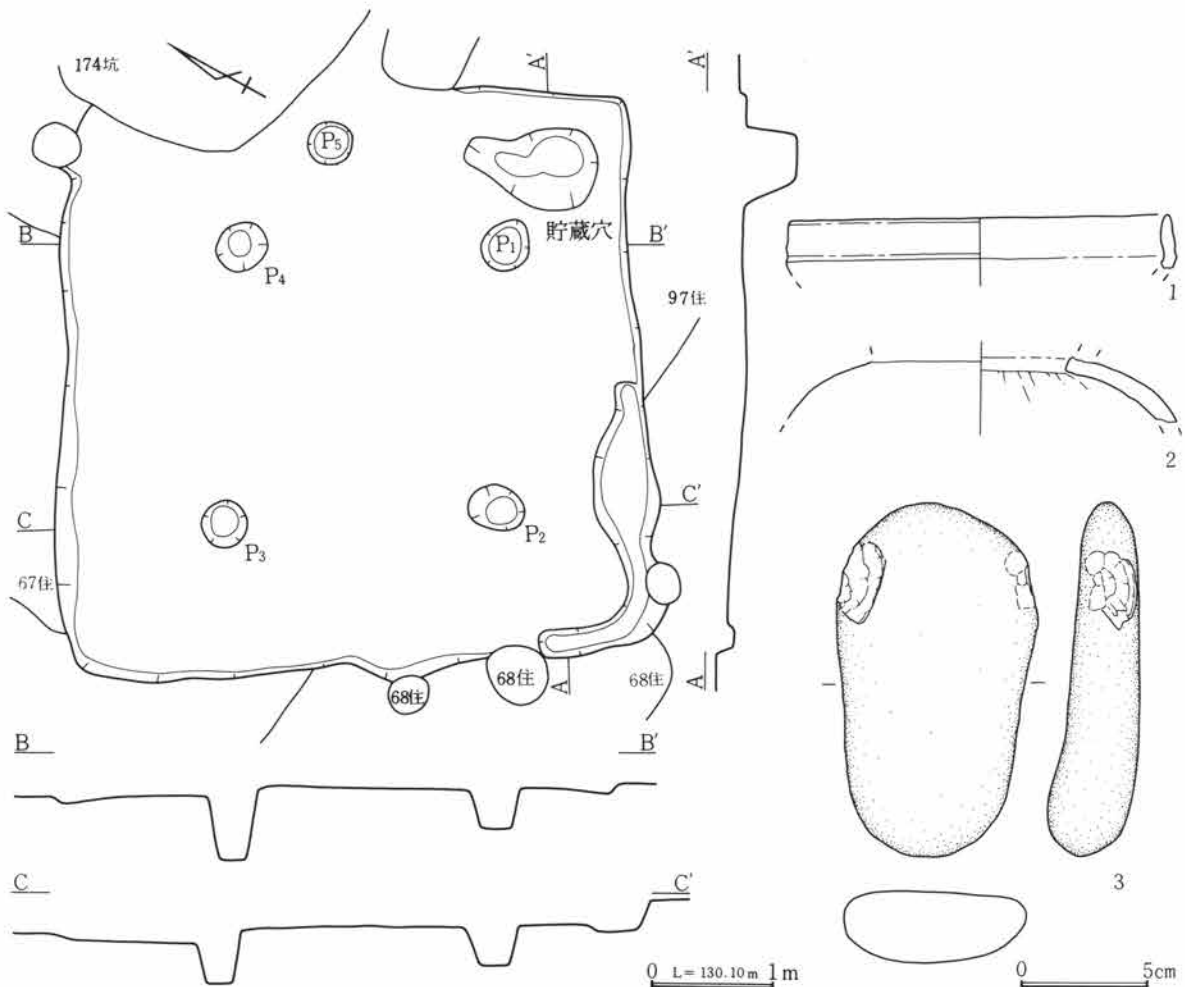
1. 暗褐色土 CP細粒を少量と、VI層土大粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 VI層土粒とブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土 CPを微量含み、VI層土粒等を全く含まない。



第232図 I区第95号住居跡・出土遺物実測図

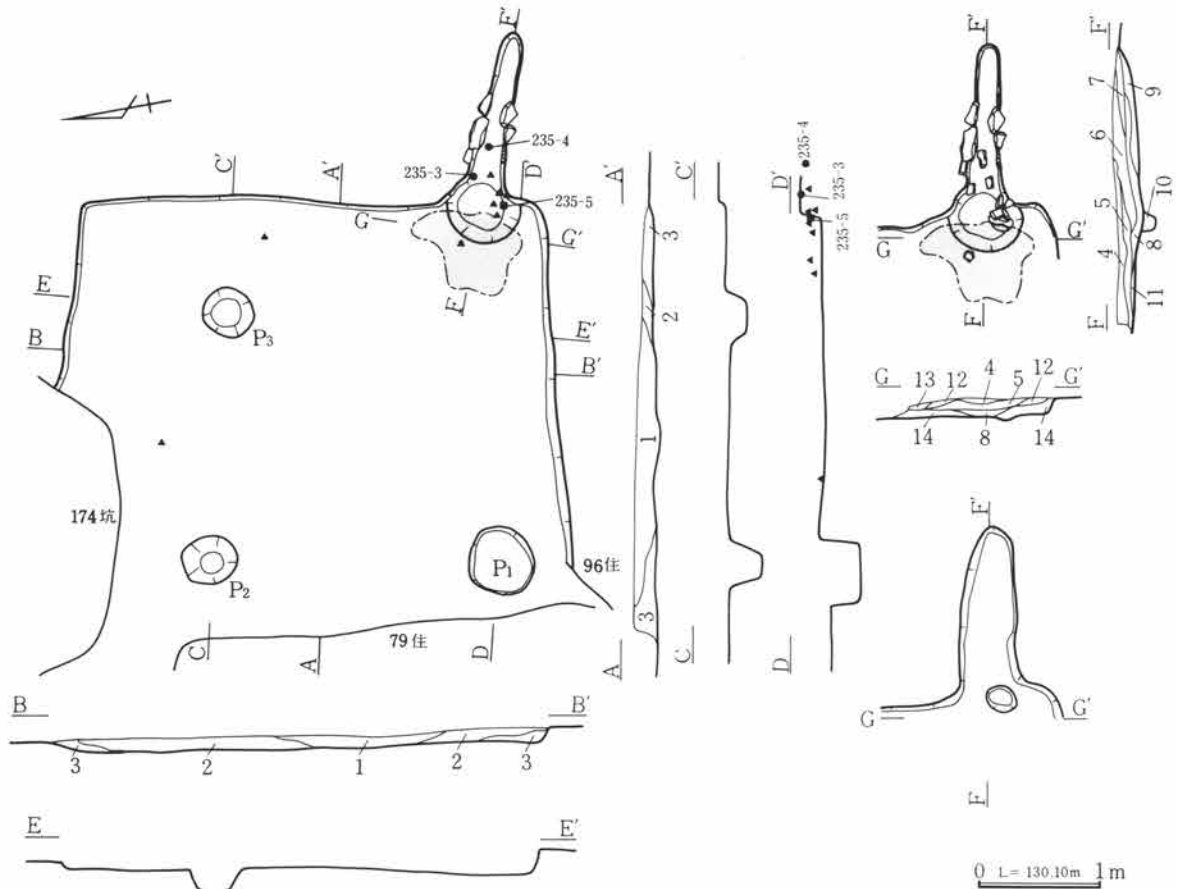
遺構名称	I区第96号住居跡		位置	6～9-I-76～79グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.50m×4.57m	主軸方位	東-30度-北	残存深度	約6cm程

(所見) 当住居跡は第67・68・79・97号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態から当住居跡が最も古い時期のものであろうと考えられる。平面プランの確認は黄褐色ローム質のVI層土中であるが、重複が多いため、他遺構の調査終了後に検出されたものである。したがって壁等の残存は浅く、状態も不良である。床面はVI層土中に構築されており、貼床は全く施されていない。この床面の精査によって、壁溝・柱穴・貯蔵穴を検出した。壁溝は南コーナー部にのみ検出されたもので、下幅約10～37cm、深さ約7cmである。その他の部分に壁溝の痕跡は認められないが、当遺構のタイプから類推すると壁溝は全周して掘削されていた可能性が高く、これが事実であるとする床面として捉えた面は実際の床面よりも下位であるかもしれない。柱穴はP₁～P₄(径約36～40cm、深さ約30～58cm、柱穴間距離P₁～P₂間約2.1m、P₂～P₃間約2.2m、P₃～P₄間約2.2m、P₄～P₁間約2.1m)の4本であり、北東壁近くから検出されたP₅(径約34cm、深さ約6cm)は、規模・位置から柱穴とは考えられない。したがって、前述の柱穴配列以外に新たな配列はなく、当住居跡において柱穴配列を変更を伴うような建て替えがなかったことがわかる。貯蔵穴は東コーナー部に検出した不整形の掘り込みと考えられる。規模は約106×65cm、深さ約40cmである。カマドは北東壁の中央部に設置されていたものと考えられるが、他遺構との重複によって痕跡も残存していない。



第233図 I区第96号住居跡・出土遺物実測図

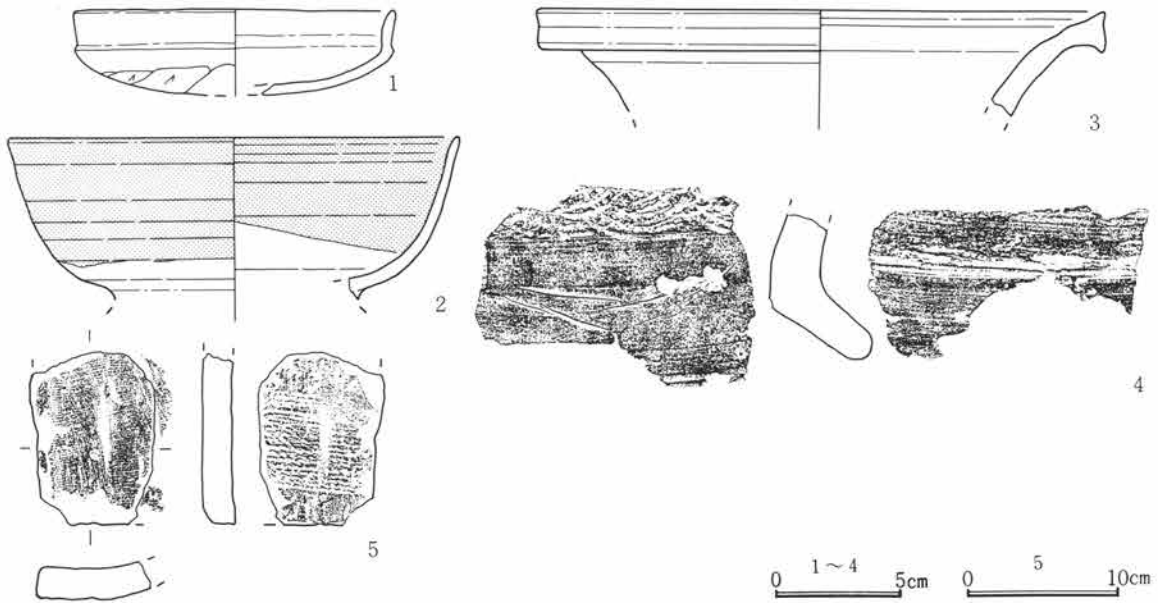
遺構名称	I区第97号住居跡	位置	6～9-I-75～77グリッド内				
平面形態	隅丸長方形?	規模	—m×3.41m	主軸方位	東-11度-南	残存深度	約10cm程



- | | |
|--|---|
| <p>1. 暗褐色土 CPを多量に含み、粘性が弱い。</p> <p>2. 暗褐色土 CPは1層とほぼ同量で、VI層土粒を少量含む。</p> <p>3. 暗褐色土 CPは1・2層より少量で、VI層土粒とブロックを少量含む。</p> <p>4. 暗褐色土 CPを少量・VI層土粒を微量含む。</p> <p>5. 暗褐色土 灰を多量に、VI層土粒を少量含む。</p> <p>6. 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む。</p> <p>7. 暗褐色土 焼土粒と灰を微量含む。</p> | <p>8. 暗褐色土 焼土粒を少量、灰を微量含む。</p> <p>9. 暗褐色土 焼土粒とブロックを多量に含む。</p> <p>10. 暗褐色土 焼土粒を全く含まず、VI層土粒全体の層。</p> <p>11. 暗褐色土 9層に類似する。</p> <p>12. 暗褐色土 焼土粒を微量含み、粘性が強い。</p> <p>13. 暗褐色土 焼土粒は12層よりさらに微量で、粘性も弱い。</p> <p>14. 暗褐色土 VI層土粒とブロックを多量に含む。</p> |
|--|---|

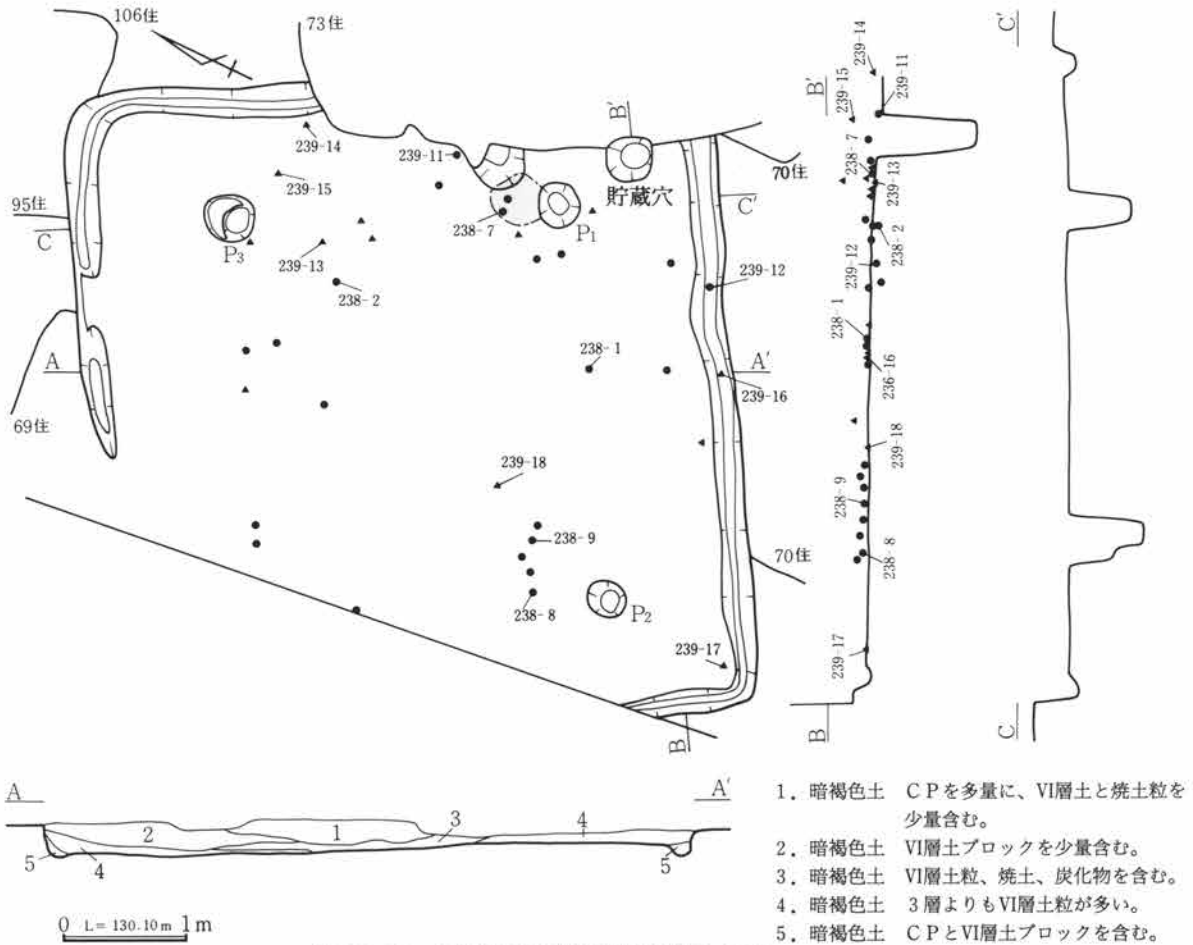
第234図 I区第97号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第79・96号住居跡と重複しているが、出土遺物の比較や住居のタイプ等から第79・96号住居跡→当住居跡と考えられる。平面プランの確認は黄褐色ローム質のVI層土中で行ったが、重複部分での新旧関係が捉えきれず、結果的には逆転した調査をしてしまった。したがって西壁等は検出することができなかった。床面はVI層土中に構築されており、貼床は全く施されていない。この床面の精査では、ピットを3本検出した。P₁(径約54cm、深さ約27cm)は、南西コーナー部にあたり、位置から貯蔵穴の可能性もある。また、P₂(径約38cm、深さ約27cm)とP₃(径約39cm、深さ約15cm)については北壁に平行する軸線上にあり柱穴の可能性もあるが、対応する2本が未検出である。カマドは南東コーナー部に設置された、いわゆるコーナーカマドタイプである。主軸方位は東-21°-南であり、残存部の規模は全長約157cm、燃焼部幅約60cm、煙道長約130cm、下幅約20cmである。屋内には燃焼部の円形の掘り方しか検出されず、袖の構造等については不明である。その他当カマドの特徴は、煙道側面に角柱状の截石を据えていることである。

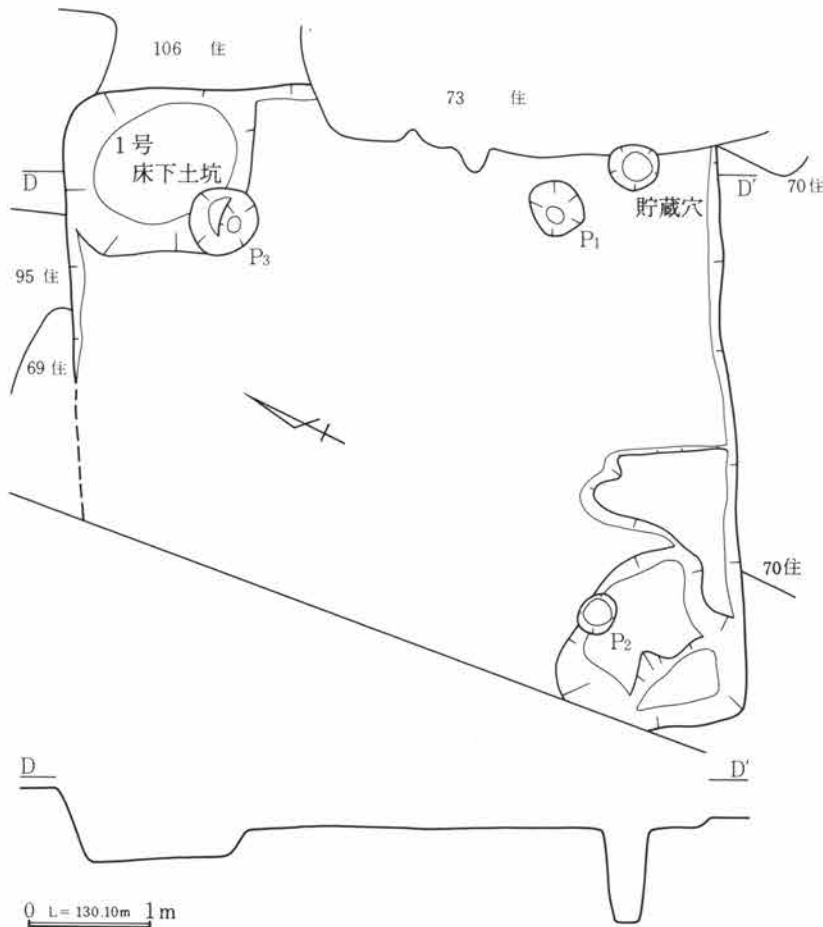


第235図 I区第97号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第98号住居跡	位置	10~13-I-79~81グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	5.07m×5.15m	主軸方位	東-28度-北
		残存深度	約23cm程		

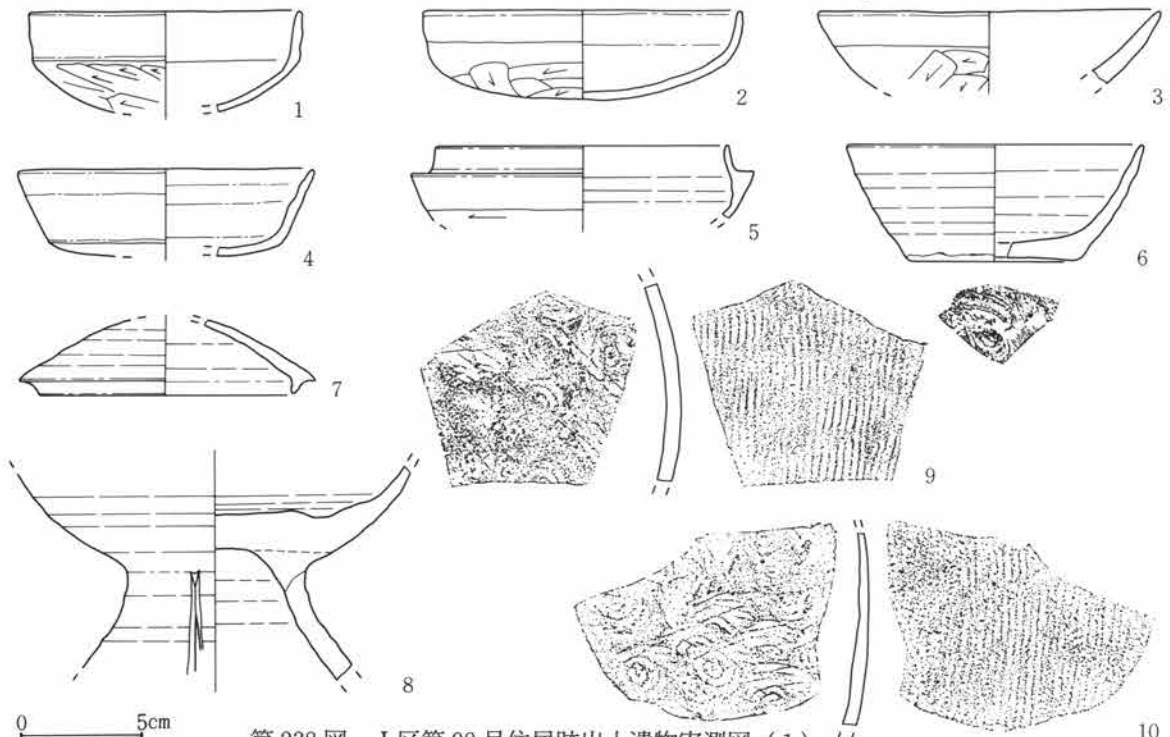


第236図 I区第98号住居跡実測図(1)

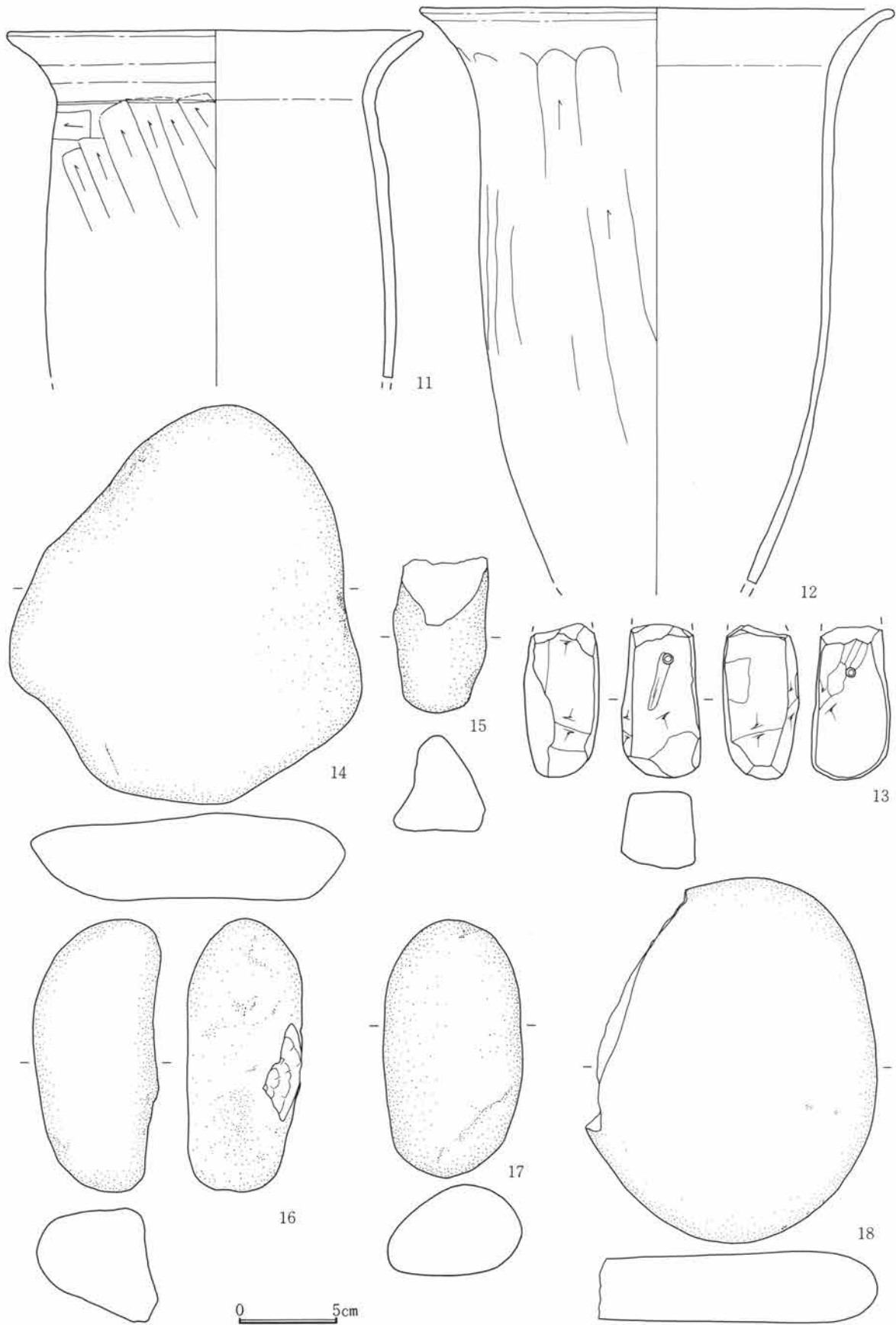


第237図 I区第98号住居跡実測図(2)

(所見) 当住居跡は第69・70・73・95・106号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態から第106号住居跡→当住居跡→第69・70・95・73号住居跡という新旧関係が想定できる。西側は調査区外にかかっており、未調査の部分がある。床面は全体にわずかに貼床が施されており、この床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴を検出した。壁溝は全周していたと思われ、下幅約5~14cm、深さ約4~10cmの規模を有している。柱穴はP₁~P₃(径約28~36cm、深さ約49~63cm、柱穴間距離P₁~P₂間約3.2m、P₃~P₁間約2.6m)の3本のみ検出した。貯蔵穴は東コーナー部に検出した円形のピット状のもので、径約35cm、深さ約79cmである。



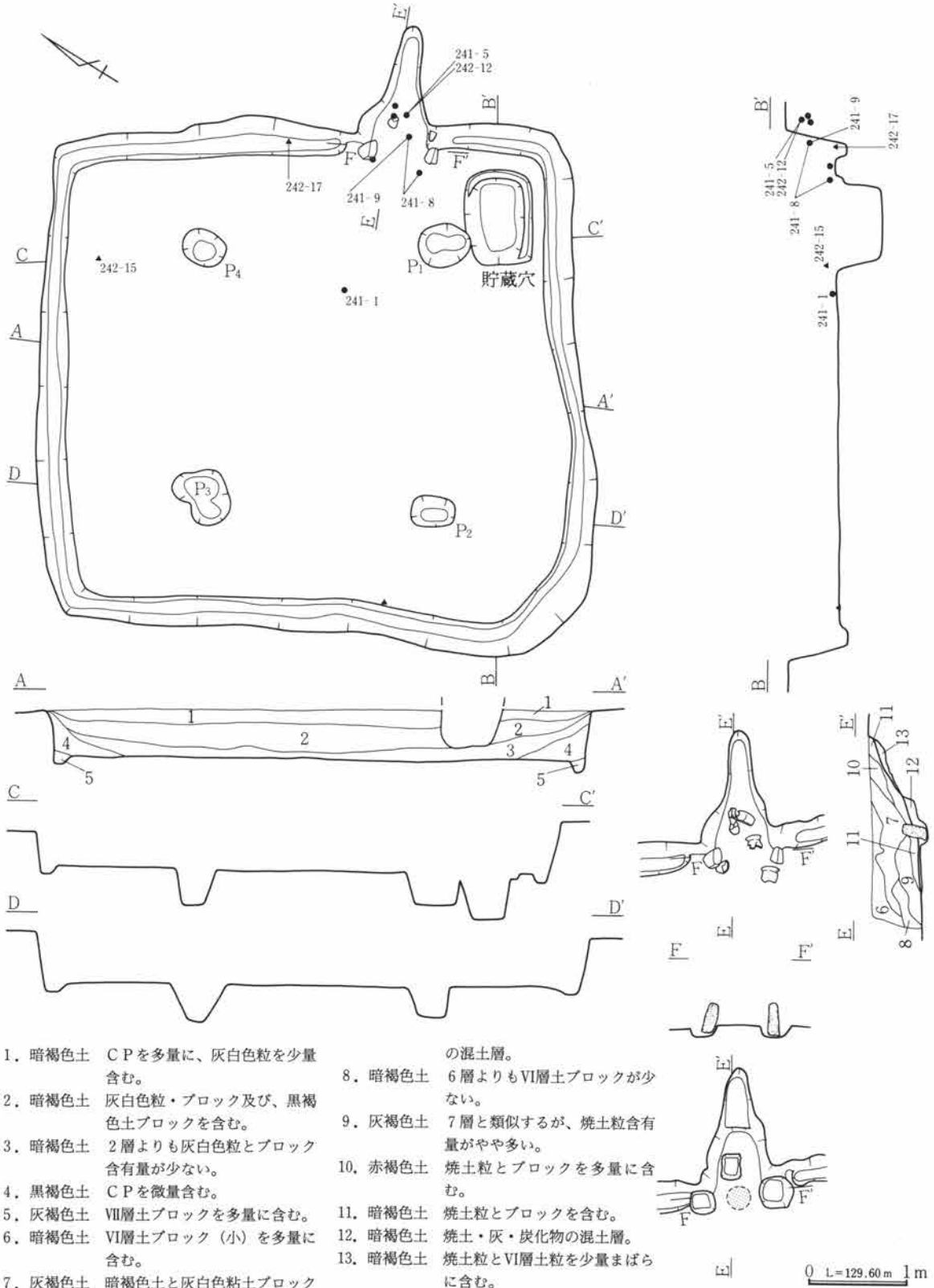
第238図 I区第98号住居跡出土遺物実測図(1)



第239図 I区第98号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

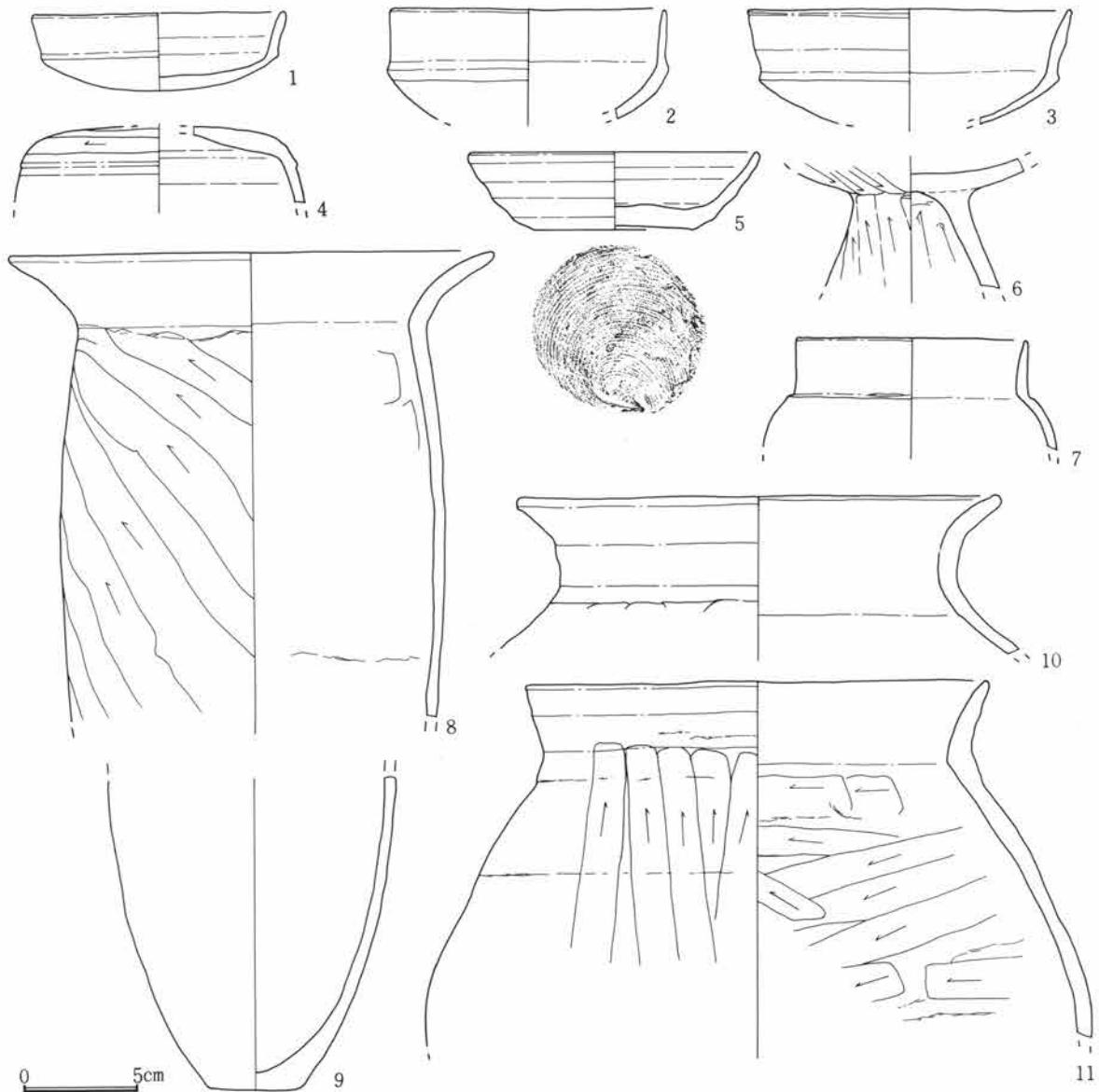
遺構名称	I区第100号住居跡		位置	23~26-I-65~68グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.95m×5.35m	主軸方位	東-25度-北	残存深度	約50cm程



- | | | |
|----------------------------------|-------------------------------|-------|
| 1. 暗褐色土 CPを多量に、灰白色粒を少量含む。 | 8. 暗褐色土 6層よりもVI層土ブロックが少ない。 | の混土層。 |
| 2. 暗褐色土 灰白色粒・ブロック及び、黒褐色土ブロックを含む。 | 9. 灰褐色土 7層と類似するが、焼土粒含有量がやや多い。 | |
| 3. 暗褐色土 2層よりも灰白色粒とブロック含有量が少ない。 | 10. 赤褐色土 焼土粒とブロックを多量に含む。 | |
| 4. 黒褐色土 CPを微量含む。 | 11. 暗褐色土 焼土粒とブロックを含む。 | |
| 5. 灰褐色土 VII層土ブロックを多量に含む。 | 12. 暗褐色土 焼土・灰・炭化物の混土層。 | |
| 6. 暗褐色土 VI層土ブロック(小)を多量に含む。 | 13. 暗褐色土 焼土粒とVI層土粒を少量まばらに含む。 | |
| 7. 灰褐色土 暗褐色土と灰白色粘土ブロック | | |

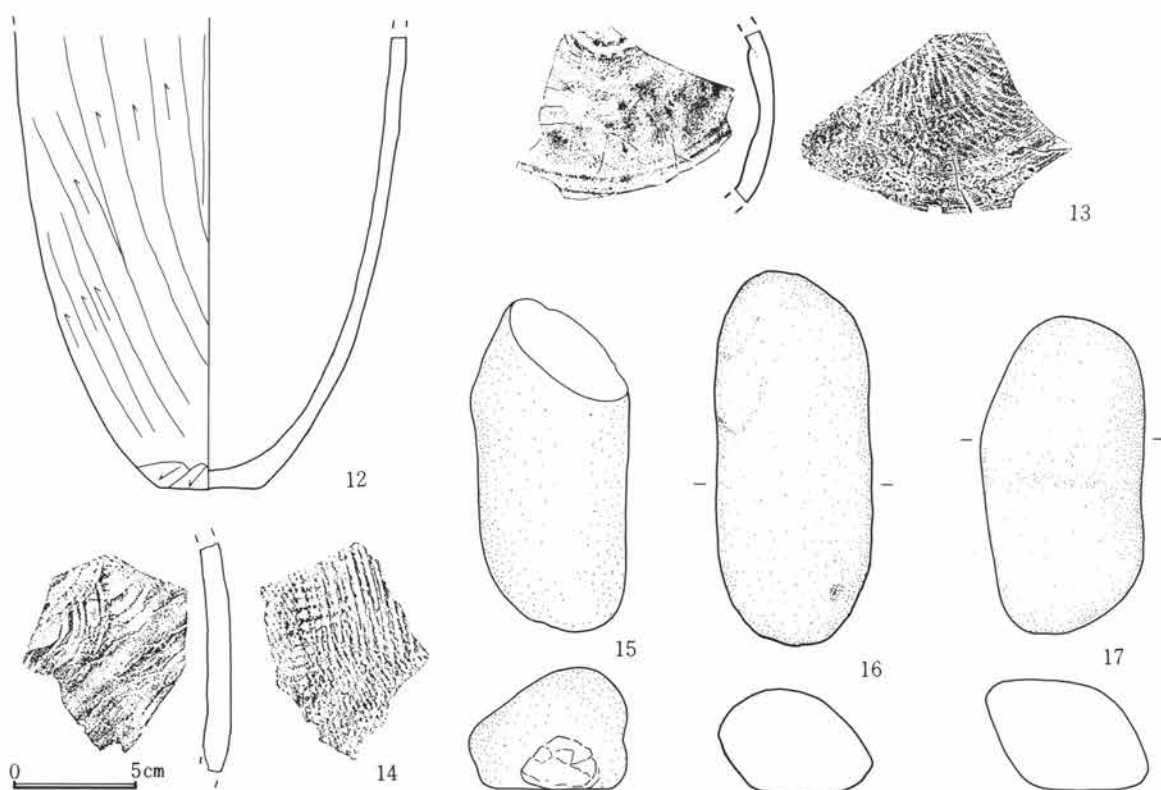
第240図 I区第100号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第119号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第119号住居跡→当住居跡と考えられる。当住居跡は、南コーナー部が張り出したようなプランを有しているが、崩落によるものではなく、当初からのものである。床面には貼床は全く施されておらず、VII層土中に直接構築されている。壁溝は、カマド部を除いて全周検出され、下幅約5~17cm、深さ約7~10cmの規模を有している。柱穴はP₁(約54×40cm、深さ約32cm)・P₂(約44×32cm、深さ約32cm)・P₃(約60×41cm、深さ約40cm)・P₄(約44×35cm、深さ約35cm)の4本で、柱穴間距離はP₁~P₂間約2.7m、P₂~P₃間約2.3m、P₃~P₄間約2.3m、P₄~P₁間約2.3mである。4本の柱穴には重複の可能性が濃厚で、柱穴配置をほとんど変更しない建て替えが想定できる。貯蔵穴は東コーナー部で長方形を呈し、規模は約92×68cm、深さ約45cmであり、部分的に中段がみられる。カマドは北東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-23°-北である。残存状態は良好で、袖が屋内に張り出さない凸字形平面を有している。規模は全長約135cm、燃烧部幅約53cm、煙道下幅約16cmである。袖は壁との接合部に方形の据え方を掘削し、そこに角柱状の截石を据えつけており、支脚は燃烧部中央北寄りに掘削した方形据え方内に、円錐台状に面取りした石製支脚が据え付けられていた。



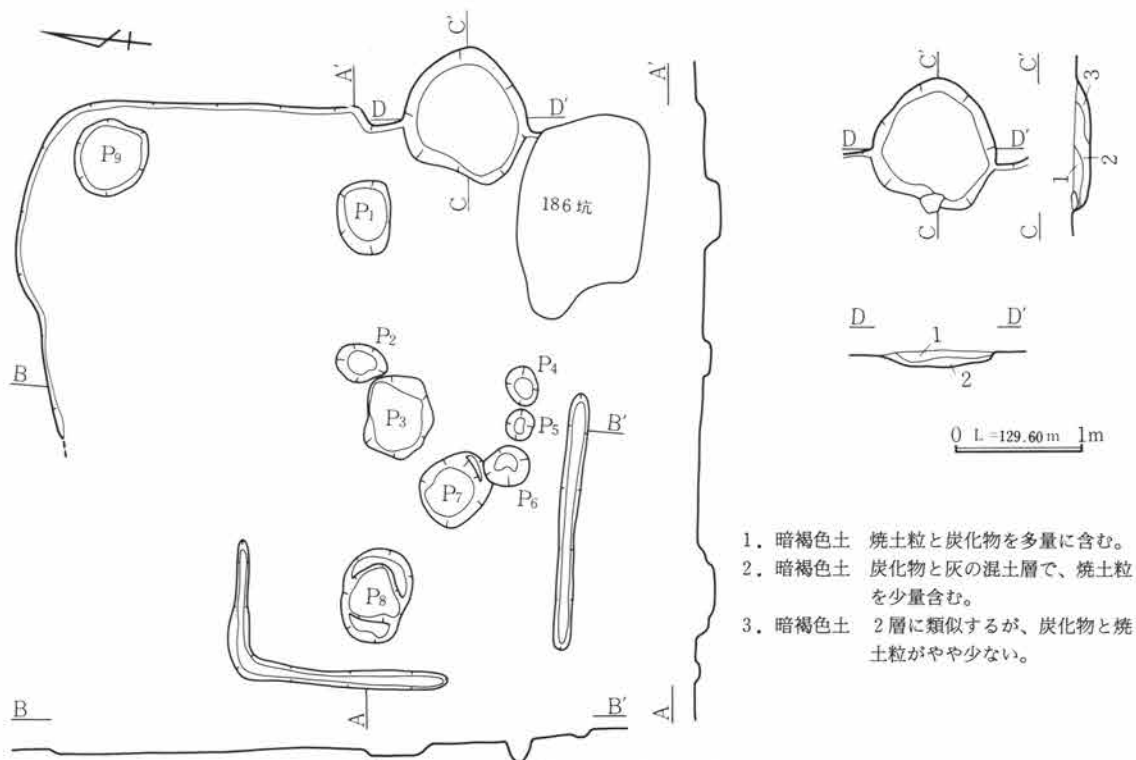
第241図 I区第100号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第242図 I区第100号住居跡出土遺物実測図(2)

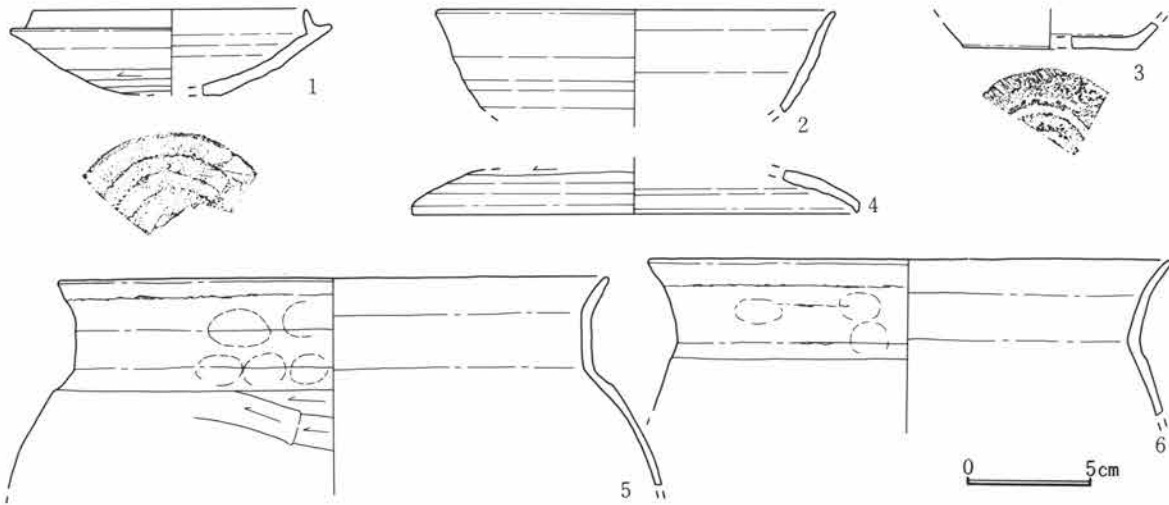
遺構名称	I区第101号住居跡	位置	26~28-I-63~65グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	4.53m×4.50m	主軸方位	東-6度-北	残存深度	約5cm程



第243図 I区第101号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第251号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態等から当住居跡→第251号住居跡と考えられる。当住居跡の確認面はVI層土まで下がっていたため、遺構の残存状態は極めて不良で、平面プランも全体は捉えられていない。壁はほとんど残存せず、床面は下幅約6cm、深さ3cm程の壁溝状の掘り込みが検出されたレベルで捉えた。この面では多くのピットが検出されているが、配置に規則性の捉えられるものはなく、柱穴を特定することはできない。

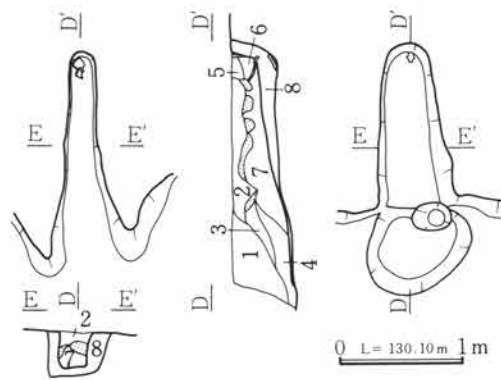
カマドは北東壁の南寄りに設置されていたが、他の部分同様に残存状態が悪い。袖等は痕跡も検出されていないため構造の詳細は不明である。検出した径約95cmの円形の浅い掘り込みは、掘り方に当たる部分であろう。



第244図 I区第101号住居跡出土遺物実測図

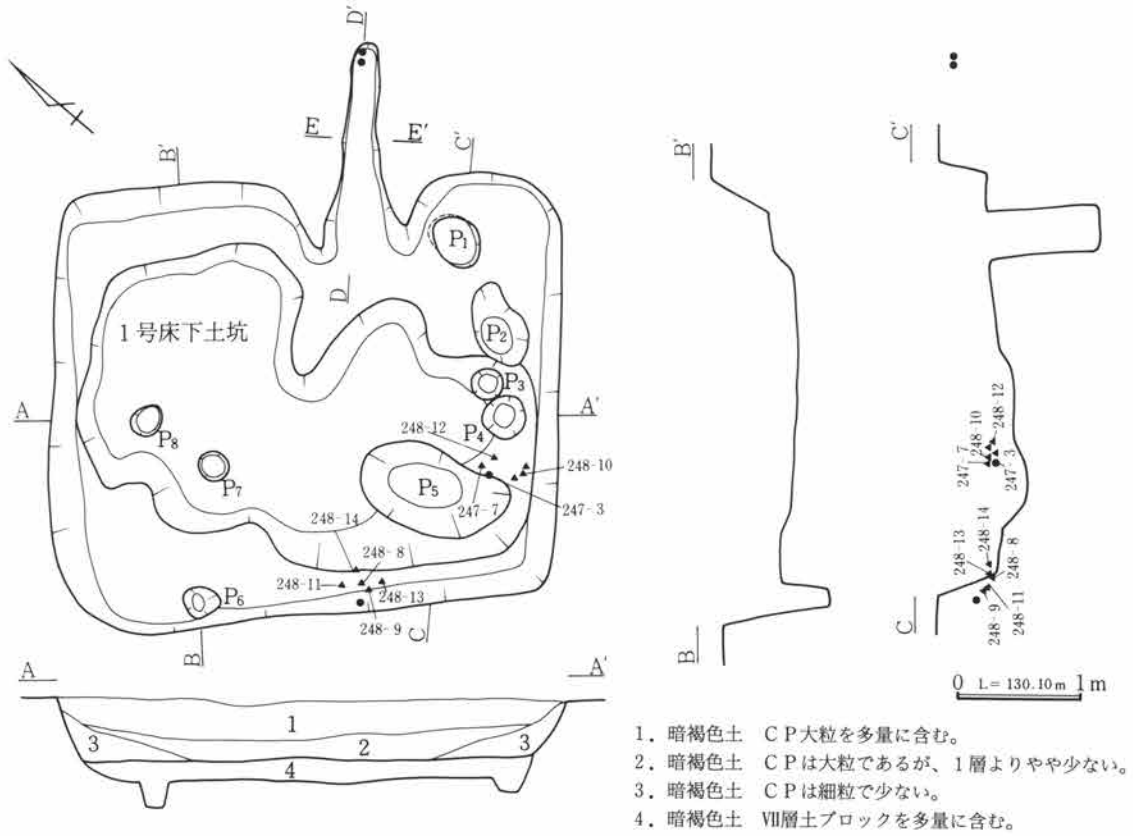
遺構名称	I区第102号住居跡		位置	43~46—I-60~62グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.47m×4.00m	主軸方位	東-38度-北	残存深度	約43cm程

(所見) 当住居跡は大半が南北農道下にかかっており、二次の調査で全体像を明らかにした。西側で第120号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態から第120号住居跡→当住居跡であろう。壁の傾斜は全体にやや緩く、崩落した可能性が高い。床面は全面にわたって20cm程の貼床が施されていた。調査は当初から掘り方面まで下げてしまったため、床面は断面でのみ捉えることができた。この断面の観察からは壁溝は確認されていない。この掘り方段階では床下土坑や多くのピットが検出されているが、いずれも配置に規則性はみられず、柱穴は掘削されなかったものと考えられる。カマドは北東壁の南寄りに設置されており、屋外に煙道が長く延びている。残存部の規模は全長約176cm、燃焼部幅約40cm、煙道下幅約18cmである。袖は両袖共に屋内に張り出しているが構築材は残存せず、掘り方でも痕跡は認められない。煙道部断面には天井部が崩落した焼土が連なって観察された。

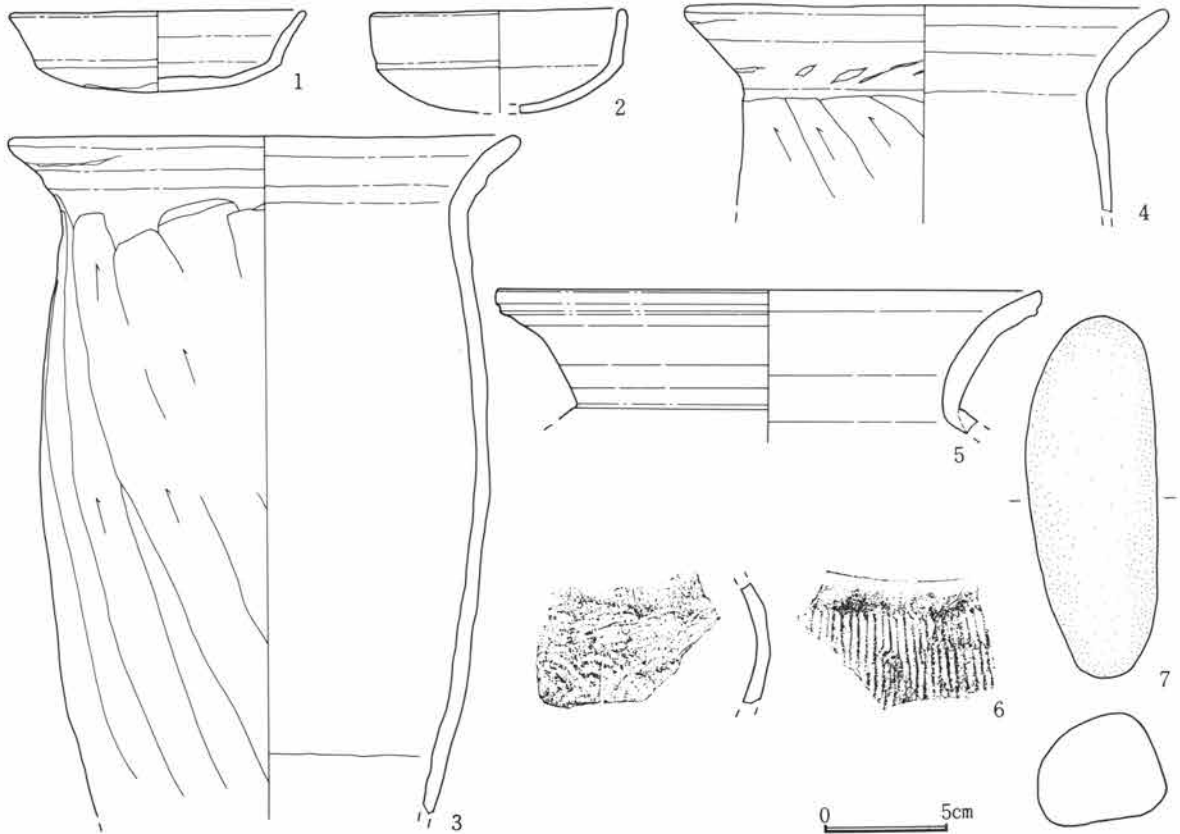


1. 暗褐色土 CPを多量に、焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 CP細粒と焼土細粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 CP細粒と焼土細粒を少量含む。
4. 暗褐色土 CPと焼土細粒とVI層土ブロックを含む。
5. 暗褐色土 CPを微量、焼土細粒を多量に含む。
6. 暗褐色土 CPを少量、焼土粒を多量に含む。
7. 暗褐色土 6層に類似。
8. 暗褐色土 焼土細粒と灰を多量に含む。

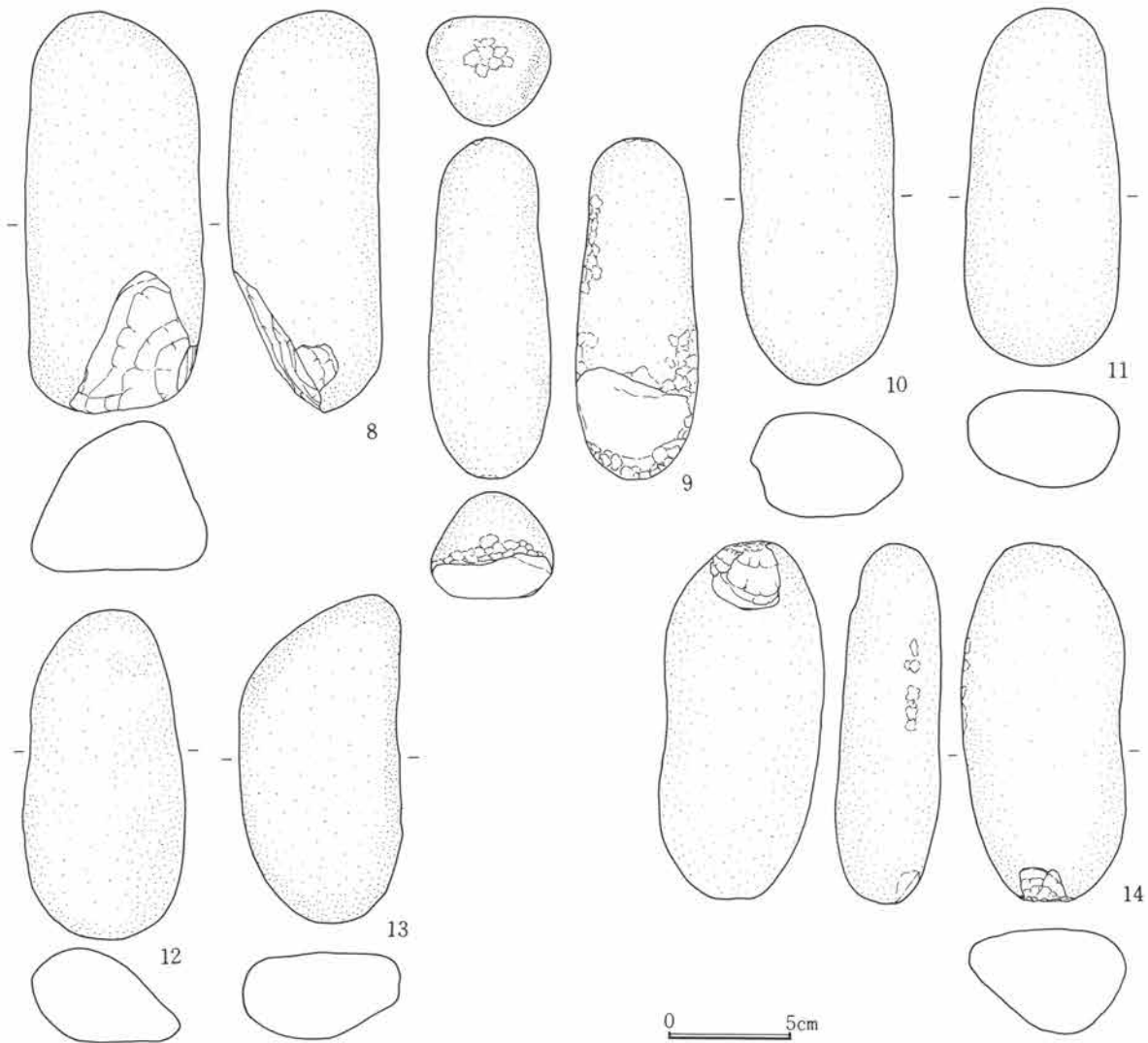
第245図 I区第102号住居跡実測図(1)



第246図 I区第102号住居跡実測図(2)



第247図 I区第102号住居跡出土遺物実測図(1)



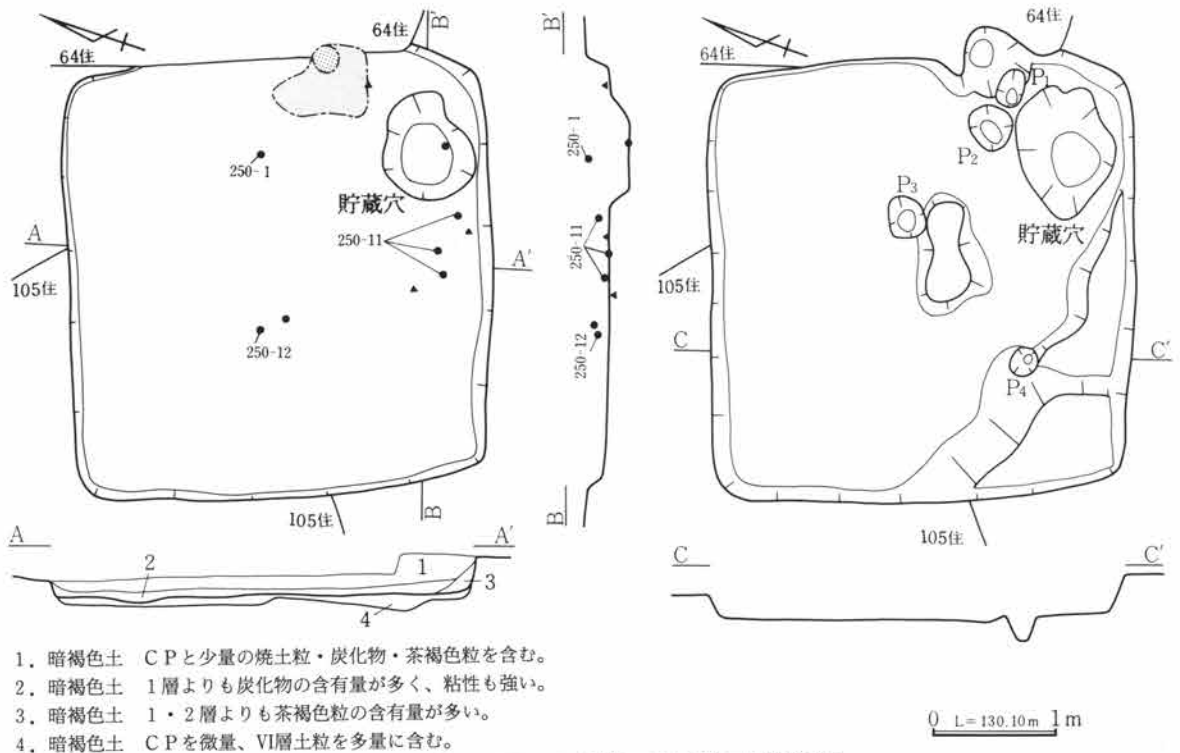
第248図 I区第102号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第103号住居跡		位置	14~16-I-79~81グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.48m×3.34m	主軸方位	東-21度-北	残存深度	約13cm程

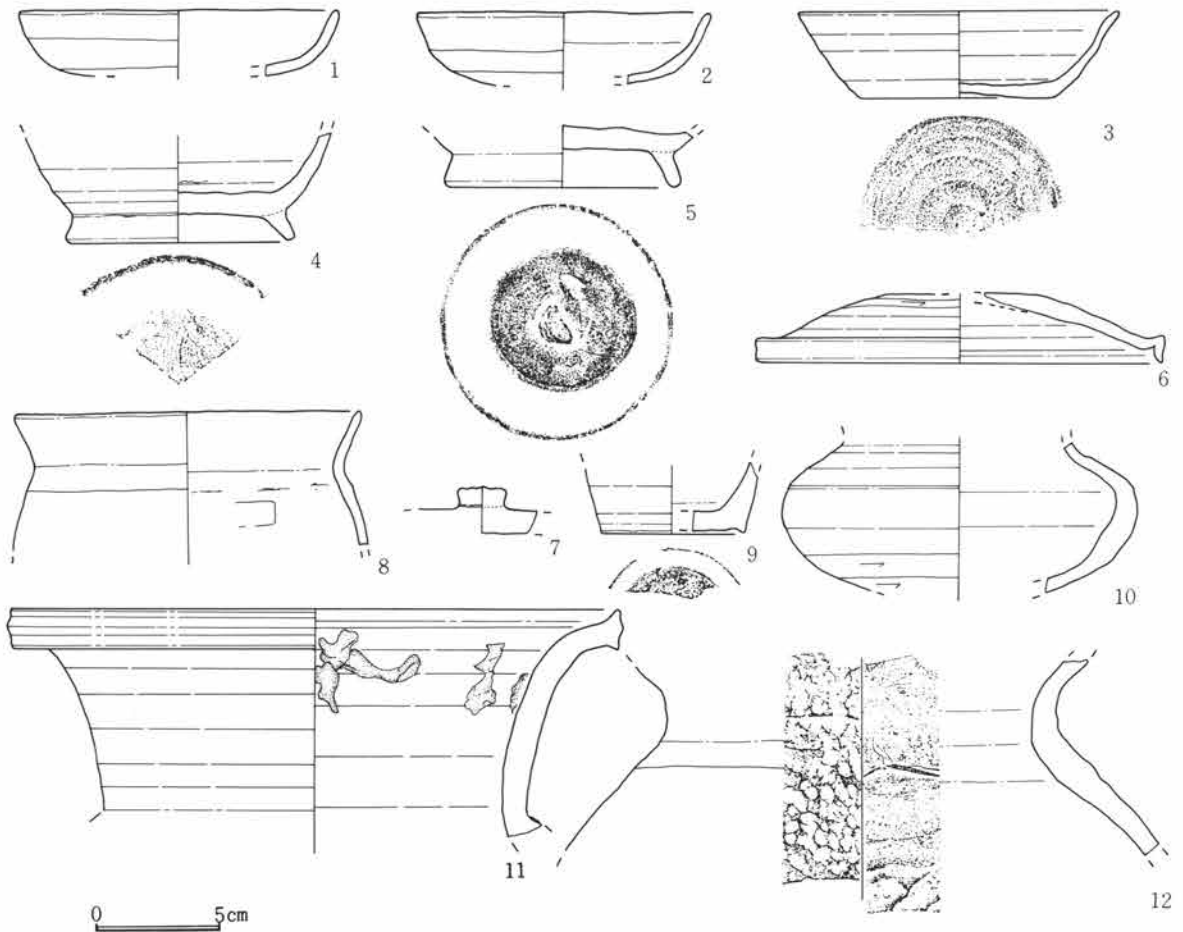
(所見) 当住居跡は第64・105号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第105号住居跡→当住居跡→第64号住居跡という新旧関係が考えられる。壁は全体に残存は浅く、北東壁及びカマドは第64号住居跡との重複によって壊されている。床面はほぼ全面に5cm程のVI層土粒主体の貼床が施されていた。この床面の精査では貯蔵穴が検出されたに過ぎず、壁溝・柱穴は確認されなかった。掘り方の調査において検出したいくつかのピットについては、配置や規模等に柱穴に認められるような規則性がなく、これらを柱穴とみることはできない。つまり、当住居跡においては柱穴は当初から掘削されなかったものと思われる。貯蔵穴は東コーナー部に検出した不整形の掘り込みで、規模は径約75cm、深さ約17cmであり、遺物の際立った出土はみられない。

カマドは北東壁の中央やや南寄りに設置されていたと考えられるが、前述のように他の遺構との重複によって壊されており、全体の構造は不明である。床面の調査では、径20cm程の範囲の焼土面とそれを囲むような灰面とを検出しており、この部分が燃焼部であったことがわかる。

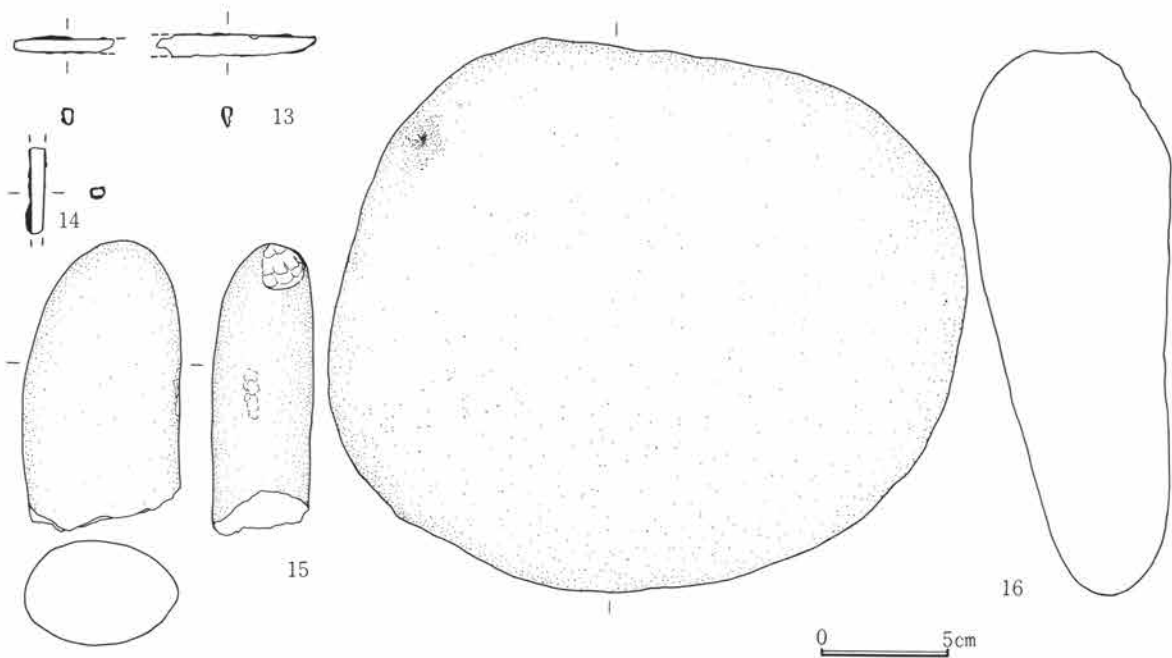
第4章 検出された遺構・遺物



第249図 I区第103号住居跡実測図



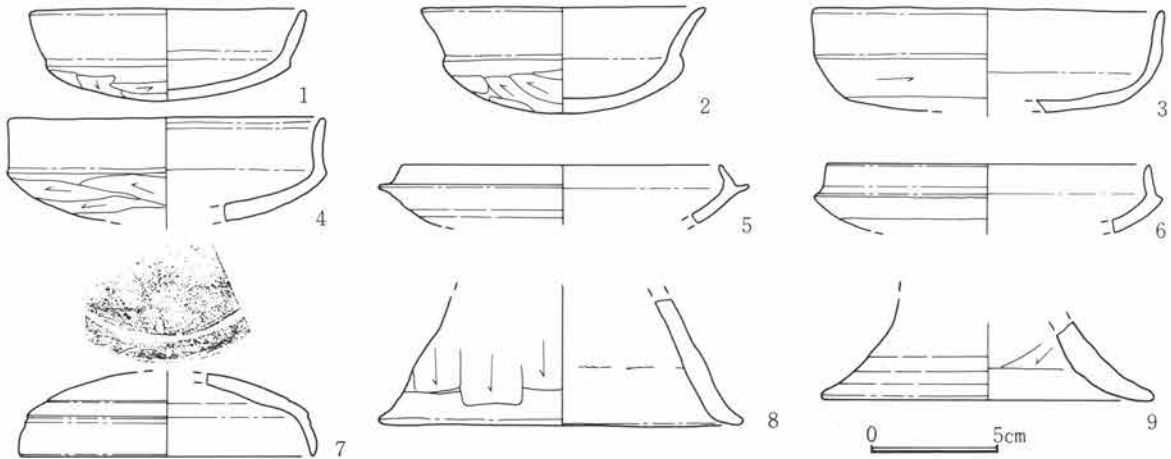
第250図 I区第103号住居跡出土遺物実測図(1)



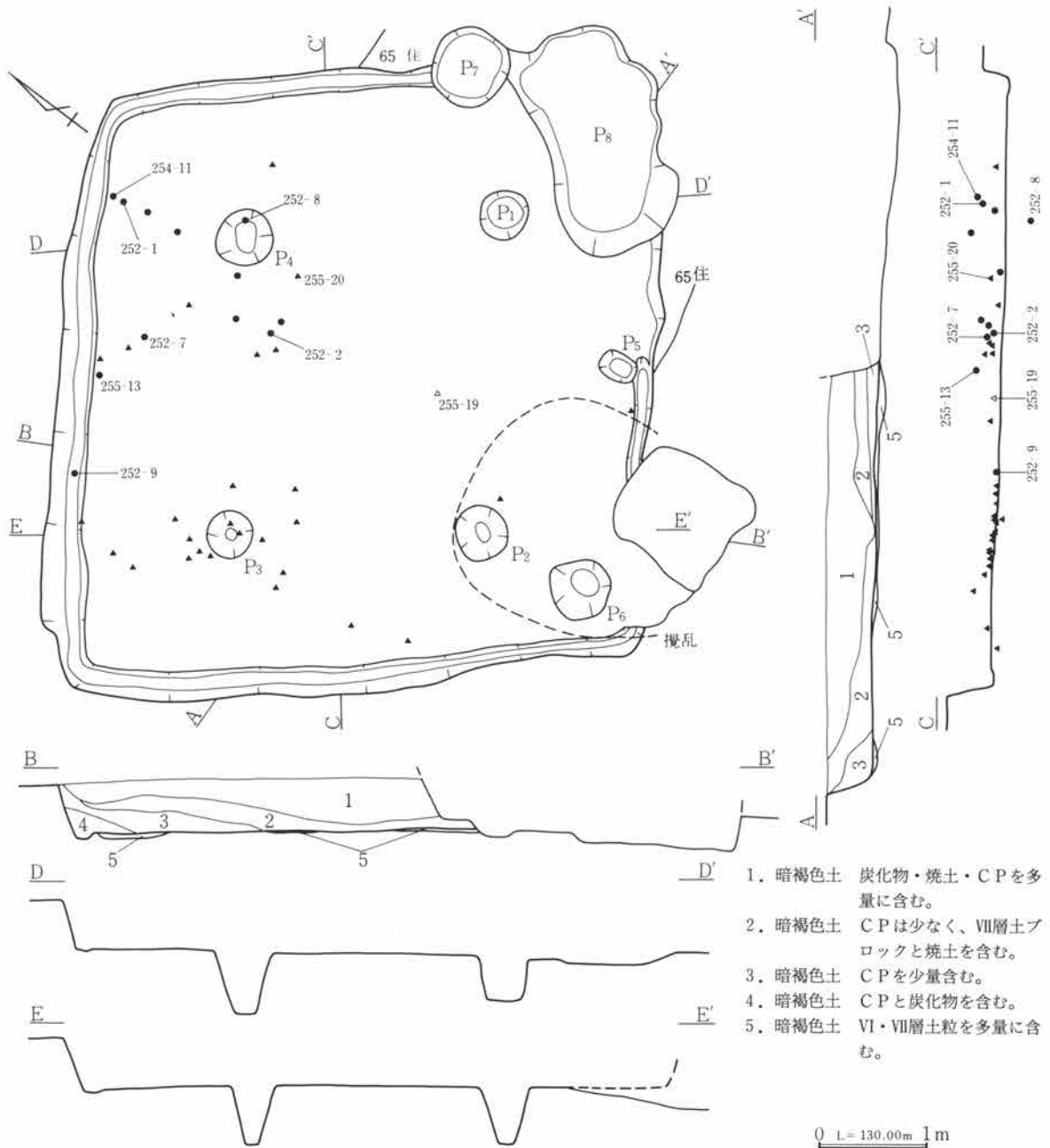
第251図 I区第103号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第104号住居跡	位置	13~16-I-74~78グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	5.55m×5.33m	主軸方位	東-40度-北	残存深度	約35cm程

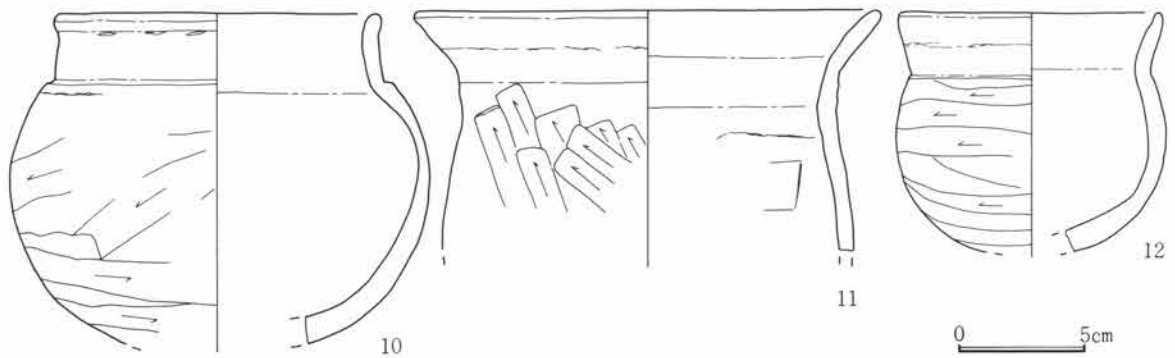
(所見) 当住居跡は第64~66・73号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。多くの遺構と重複しているが、当住居跡の掘り込みが比較的深かったことから、攪乱されている南壁を除いて他の部分は明瞭に捉えることができた。床面にはごくわずかに貼床が施されているが、床下土坑等の施設は検出されていない。この床面の精査では壁溝・柱穴及び5本のピットを検出した。壁溝は全周していたものと思われ、下幅約5~10cm、深さ約3~7cmの規模である。柱穴はP₁~P₄(径約43~50cm、深さ約42~63cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.8m、P₂~P₃間約2.3m、P₃~P₄間約2.7m、P₄~P₁間約2.3m)の4本である。この他、P₆(径約51cm、深さ約58cm)は、掘り方がしっかりしたピットであり、全体の位置関係から貯蔵穴である可能性が高い。これが事実であるとする、検出されていないカマドは南東壁の攪乱をうけている部分に設置されていたものと考えられる。



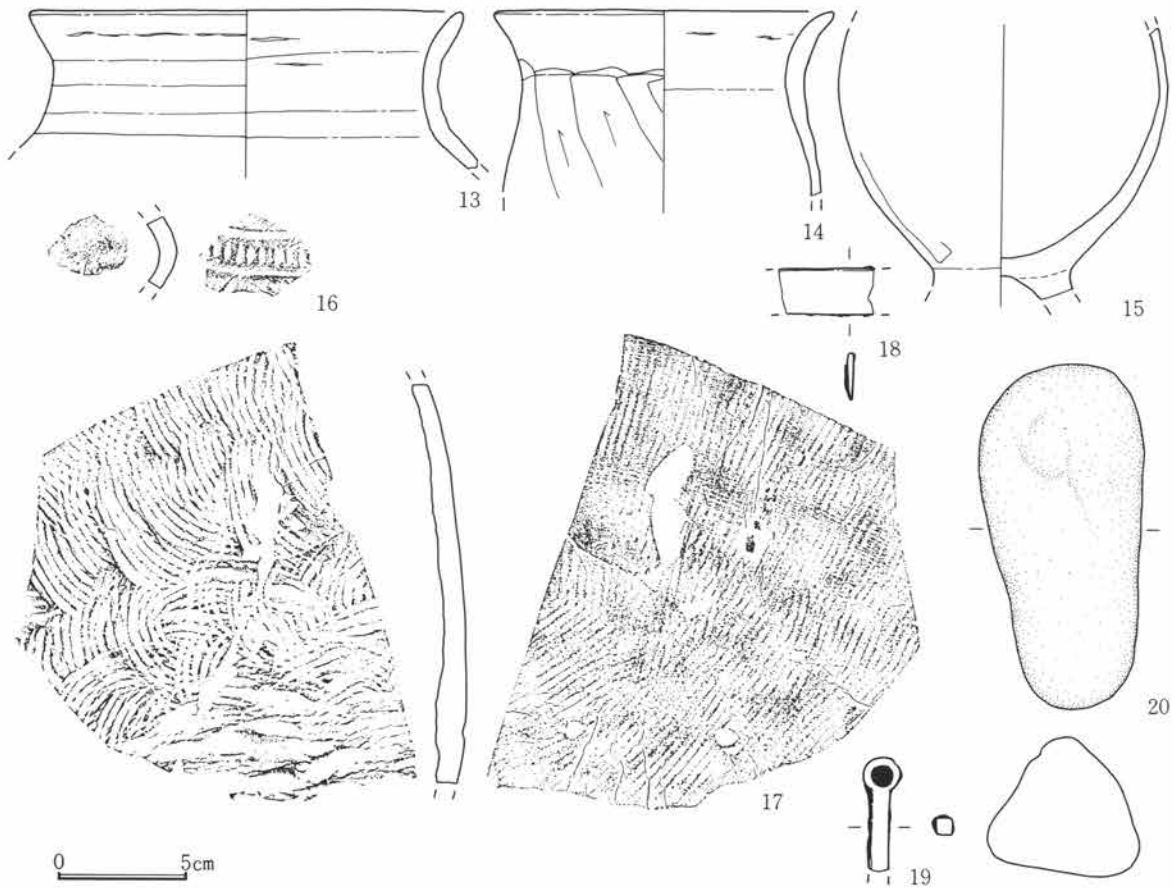
第252図 I区第104号住居跡出土遺物実測図(1)



第253図 I区第104号住居跡実測図



第254図 I区第104号住居跡出土遺物実測図(2)

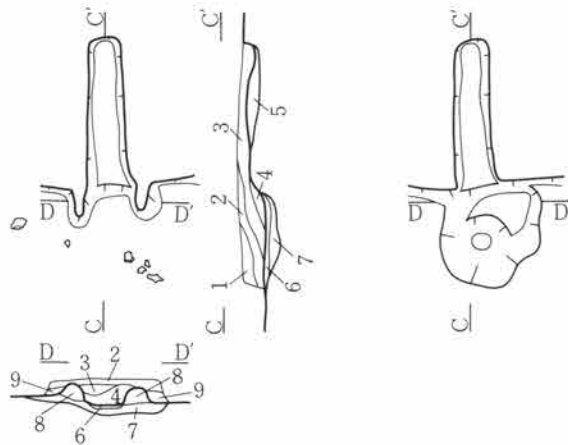
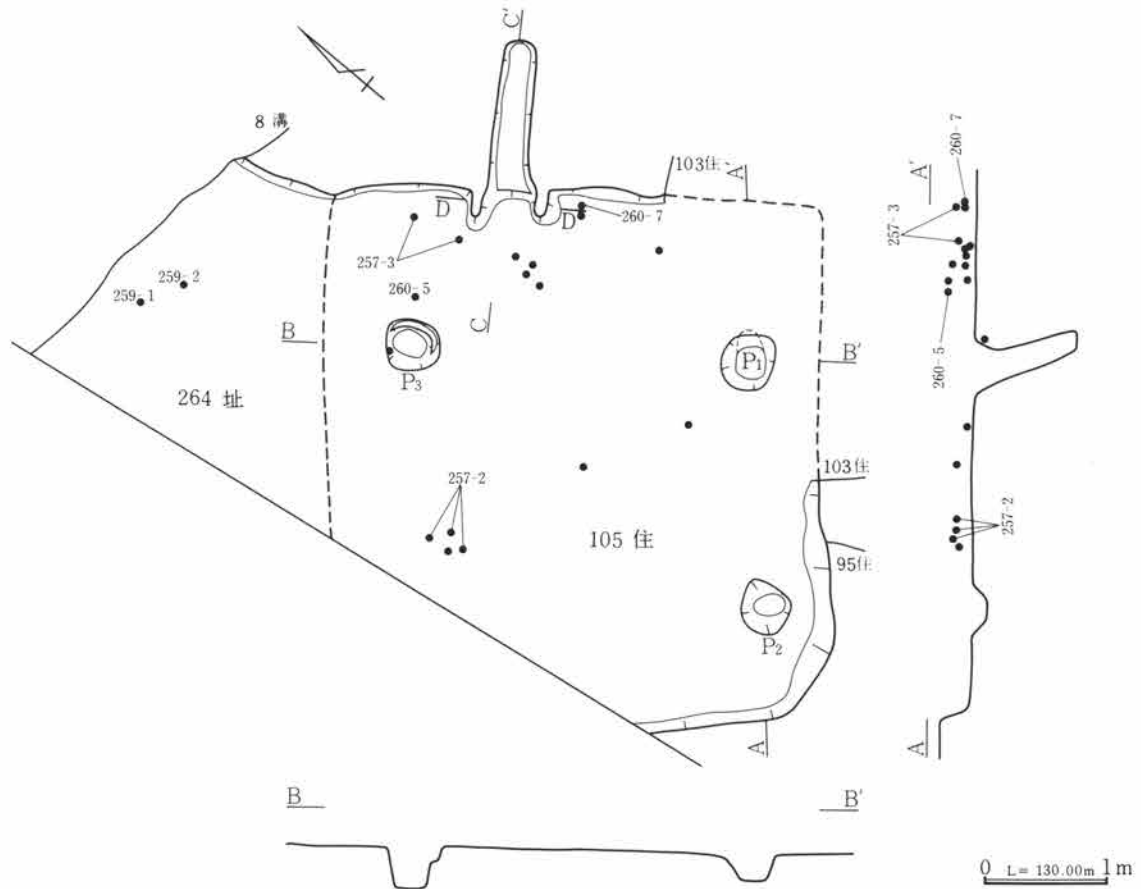


第255図 I区第104号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第105号住居跡		位置	14~16-I-80~82グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	4.20m×	—m	主軸方位	東-40度-北	残存深度	約20cm程
遺構名称	I区第264号址		位置	16~17-I-81・82グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×	—m	主軸方位	—	残存深度	約7cm程

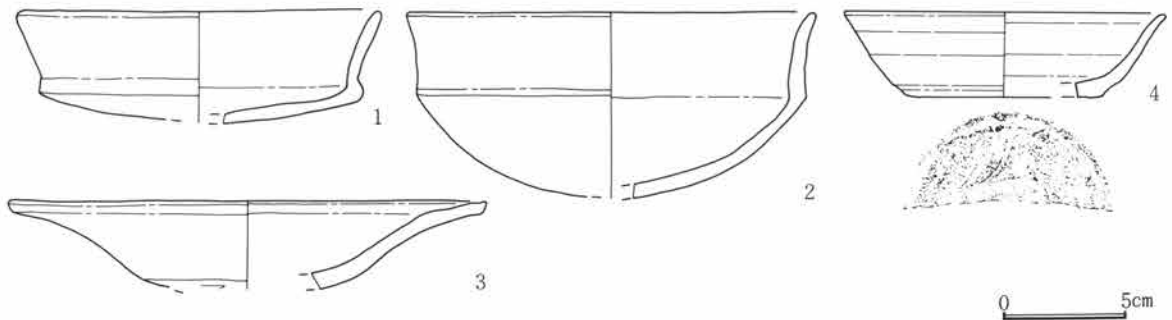
(所見) 第105号住居跡は第95・103号住居跡及び第264号址と重複しているが、遺構の検出状態や出土遺物の比較から当住居跡→第103号住居跡・第264号址であるのは確実であるが、第95号住居跡との関係は不明である。床面には全面にわたって貼床が施され、掘り方は複雑である。床面精査で検出した $P_1 \sim P_3$ は柱穴の配置にあるが、平面プランとややアンバランスでしかも規模的にもバラツキがあることから、柱穴の可能性は弱い。床面で確認することはできなかったが、実際の柱穴は掘り方の調査で検出した $P_4 \sim P_7$ (径約25~30cm、床面からの推定深さ約32~40cm、柱穴間距離 $P_4 \sim P_5$ 間約2.0m、 $P_5 \sim P_6$ 間約1.9m、 $P_6 \sim P_7$ 間約2.0m、 $P_7 \sim P_4$ 間約1.9m)と考えられる。 P_1 (径約44cm、深さ約80cm)は、 P_4 と接しているが他のピットと比較して際立って深く、しかも第89号住居跡等の貯蔵穴にみられたようにわずかに傾斜して掘削されていることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。カマドは北東壁の北寄りに設置されており、主軸方位は東-36°-北である。平面形は両袖が屋内に張り出す凸字形タイプと思われるが、袖の残存があまり良好ではない。残存部の規模は全長約145cm、燃焼部幅約30cm、煙道長約118cm、煙道下幅約19cmである。

第264号址は、北側を中世以降の第8号溝状遺構によって削平され全体形が不明である。

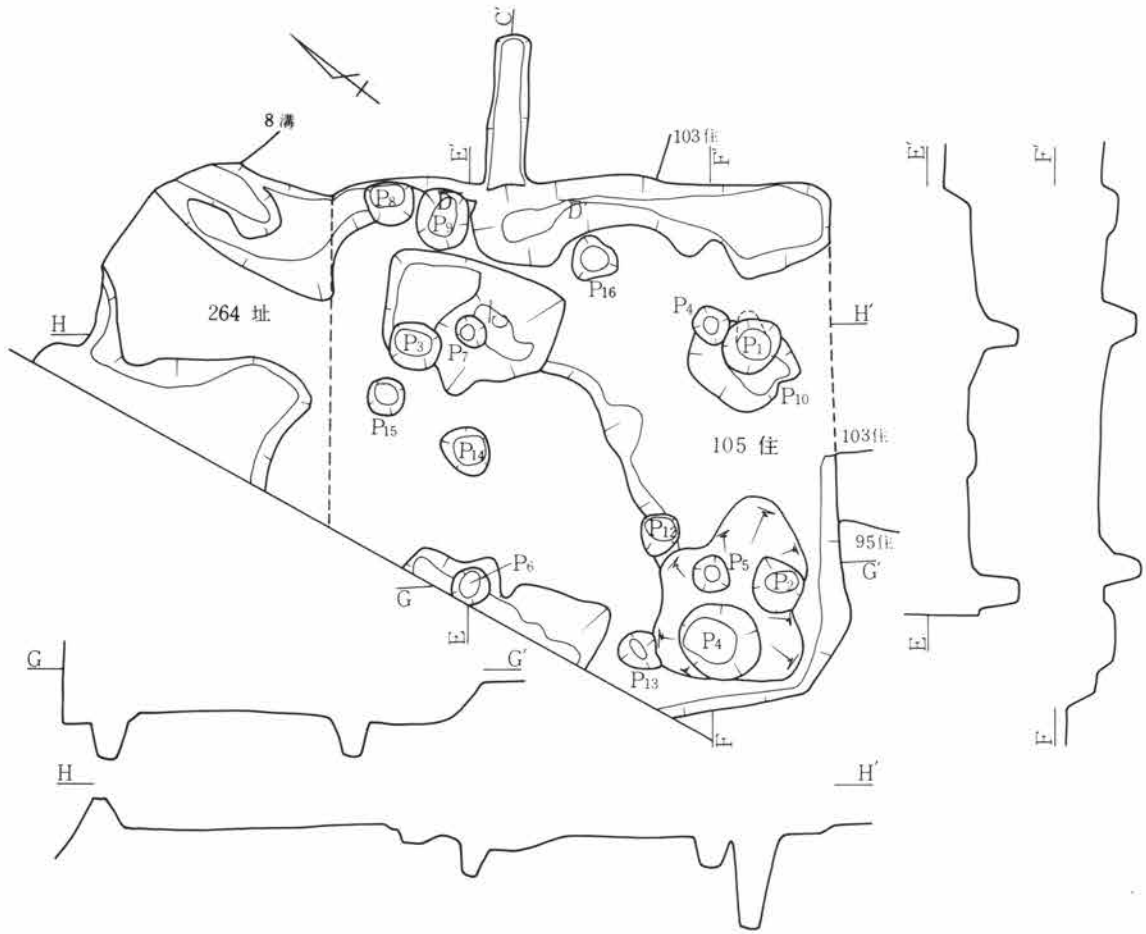


1. 暗褐色土 焼土と少量のCPを含み、よくしまっている。
2. 暗褐色土 CPを少量と、多量の焼土と灰及びVI層土ブロックを含み、粘性が比較的強い。
3. 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に、焼土・灰を少量含み、粘性が強くしまっている。
4. 暗褐色土 多量の焼土粒と灰を含み、粘性が弱い。
5. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。
6. 暗褐色土 灰と焼土粒を少量と、VI・VII層土ブロックを多量に含む。
7. 暗褐色土 灰・焼土ブロック・炭化物を少量と、VI層土ブロックを含む。
8. 暗褐色土 CPと焼土ブロック及びVII層土を少量含み、しまりが強い。
9. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックと、微量の灰・CPを含み、粘性が強い。

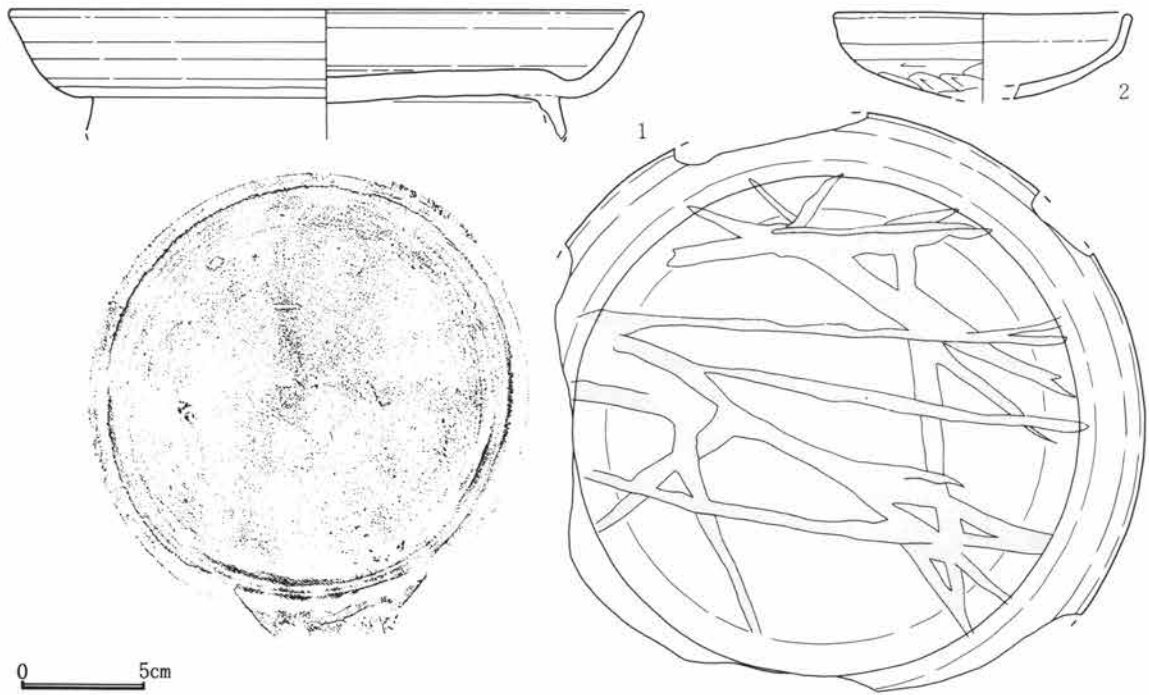
第256図 I区第105号住居跡・第264号址実測図(1)



第257図 I区第105号住居跡出土遺物実測図(1)

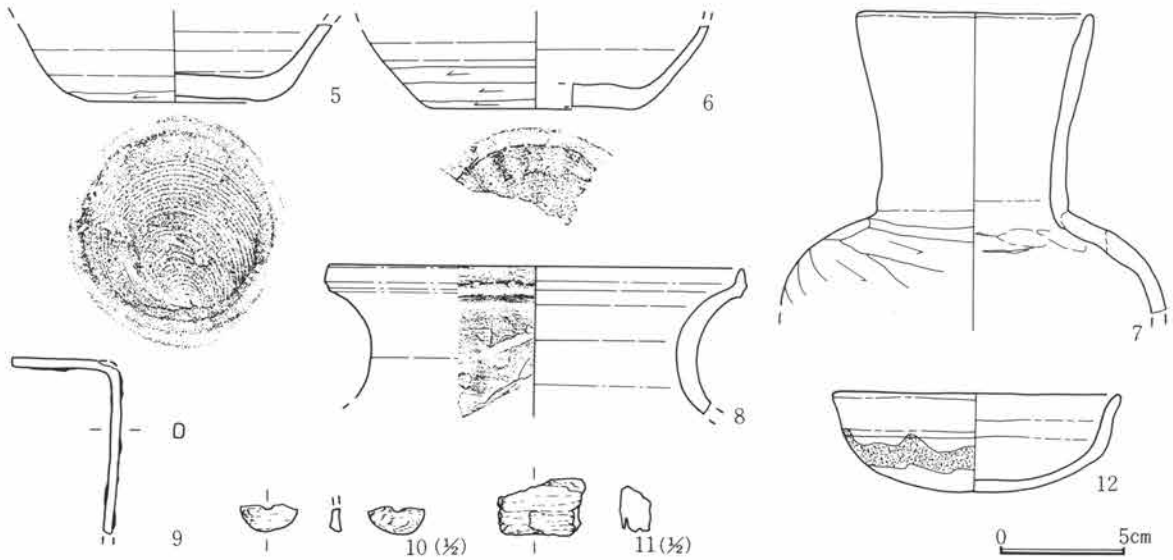


第258図 I区第105号住居跡・第264号址実測図(2)



第259図 I区第264号址出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

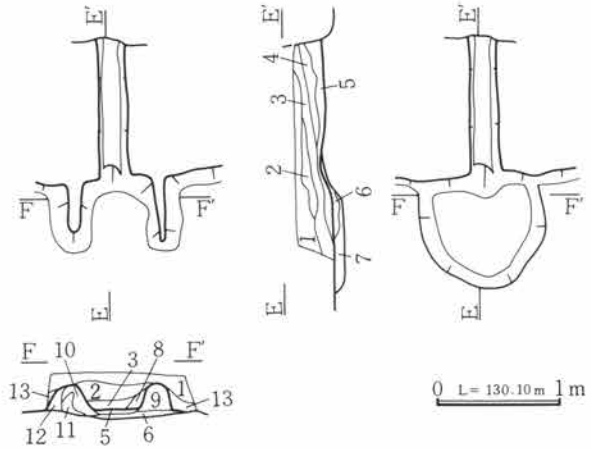


第260図 I区第105号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第106号住居跡	位置	10~14-I-78~81グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	5.57m×5.38m	主軸方位	北-24度-西	残存深度	約25cm程

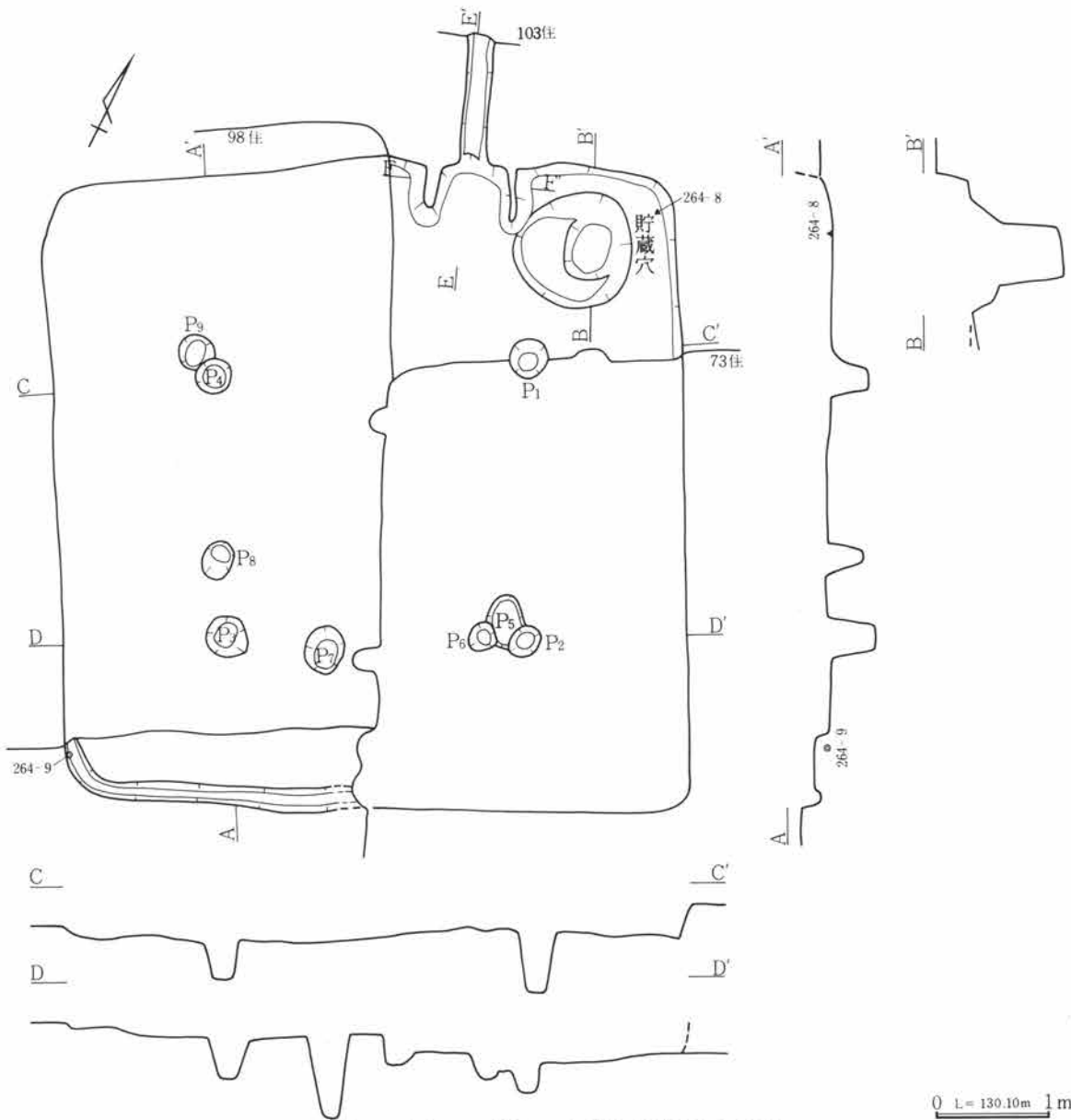
(所見) 当住居跡は第66・69・70・73・95・98号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態及び残存状態等から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。この重複によって当住居跡は南北コーナー付近が残存したに過ぎない。残存床面には貼床が認められるので、削平部分にも施されていたものと考えられる。この残存した床面の精査では、壁溝と貯蔵穴を検出し、第73・98号住居跡の掘り方からは柱穴及びピットを検出した。壁溝は南コーナー部にだけ検出したが、北コーナー付近の床面レベルは南コーナー付近よりも下がっており、本来は全周していたものであろう。残存部の壁溝規模は、下幅約5~7cm、深さ6cm程である。貯蔵穴は北コーナー部に検出した円形の土坑状の掘り込みで、径約95cm、深さ約84cmの規模を有している。柱穴はP₁~P₄(径約25~35cm、床面からの推定深さ約53~69cm、柱穴間距離 P₁~P₂間約2.4m、P₂~P₃間約2.6m、P₃~P₄間約2.2m、P₄~P₁間約2.7m)の4本である。

カマドは北西壁の北寄りに設置されており、主軸方位は北-24°-西である。平面形は両袖が屋内に張り出す凸字形を呈している。煙道先端は失っている

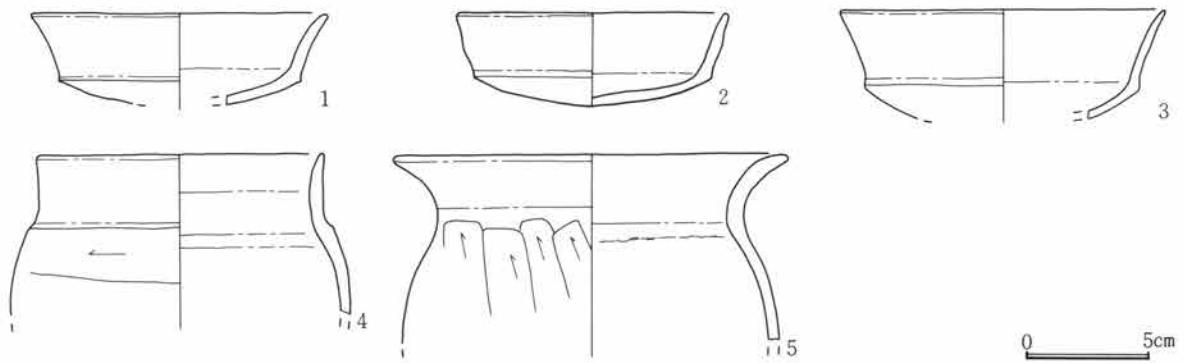


1. 暗褐色土 CPを多量に、焼土ブロック・VI層土粒・灰白色粘質土(VII層土?)ブロックを含む。
2. 暗褐色土 1層よりも焼土ブロックの含有量が少ない。
3. 暗褐色土 CPを少量・焼土ブロックを多量に含む他、VI層土粒・灰白色粘質土(VII層土?)ブロックを含む。
4. 暗褐色土 CPと少量の焼土粒とVI層土粒を含む。
5. 暗褐色土 灰を多量に、焼土粒・炭化物を少量含む。
6. 暗褐色土 灰と焼土粒と多量の灰白色粘質土(VII層土?)ブロックを含む。
7. 褐色土 褐色砂質土(VI層土?)ブロックと、焼土粒・CPを少量含む。
8. 暗褐色土 CPを多量に、焼土粒・灰を少量含む。
9. 灰白色粘質土(粘土?)
10. 灰白色粘質土
11. 褐色土 7層に類似。
12. 黄褐色土 VI層土主体。
13. 暗褐色土 CPと焼土粒を少量含む。

第261図 I区第106号住居跡実測図(1)



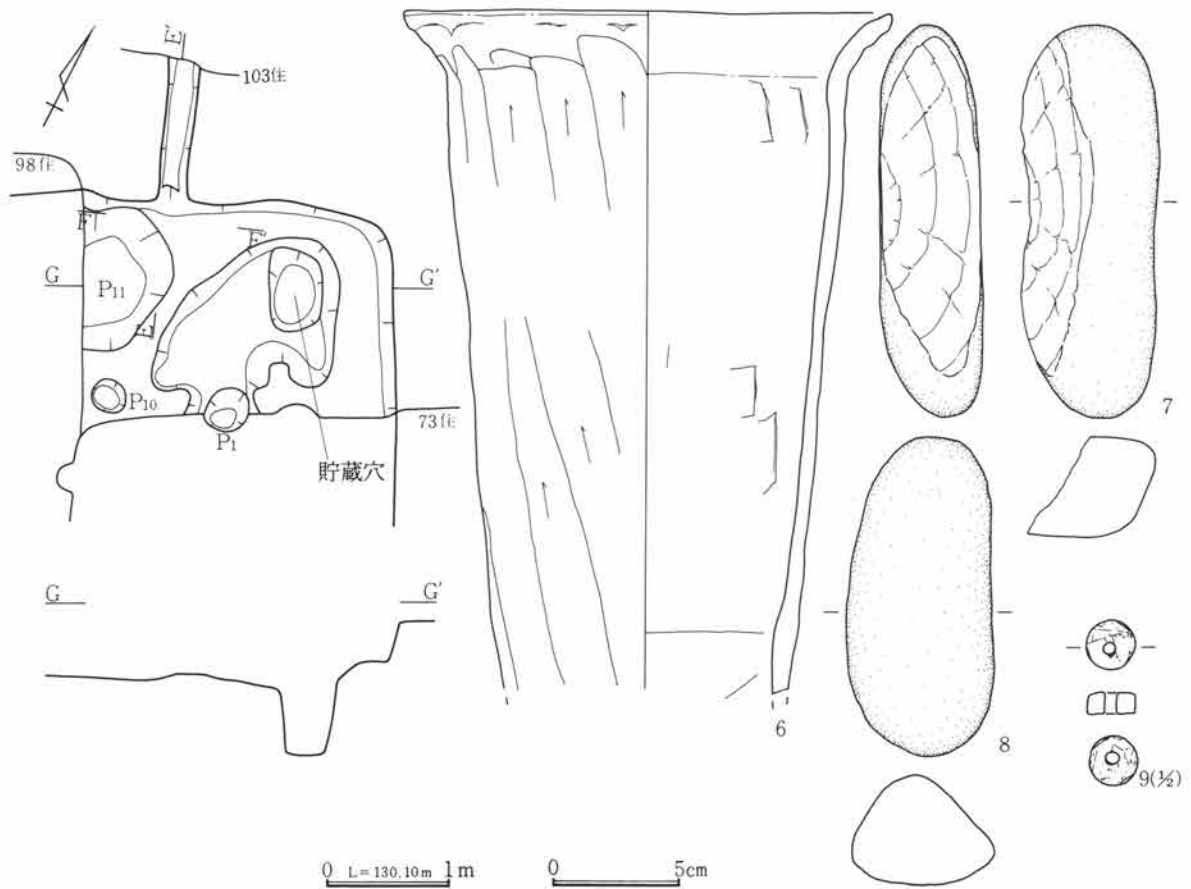
第262図 I区第106号住居跡実測図(2)



第263図 I区第106号住居跡出土遺物実測図(1)

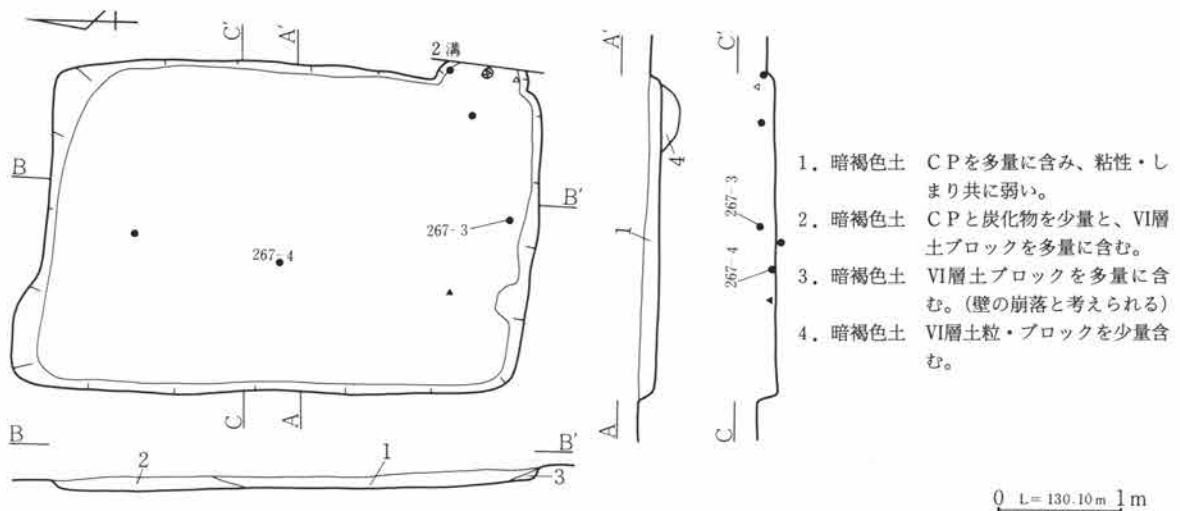
ため全長はわからないが、残存部の規模は燃焼部奥行き約50cm、燃焼部幅約48cm、煙道下幅約15cmである。両袖共に灰白色粘質土で構築されており、先端部に構築材を据えたような痕跡はみられない。

第4章 検出された遺構・遺物



第264図 I区第106号住居跡(3)・出土遺物実測図(2)

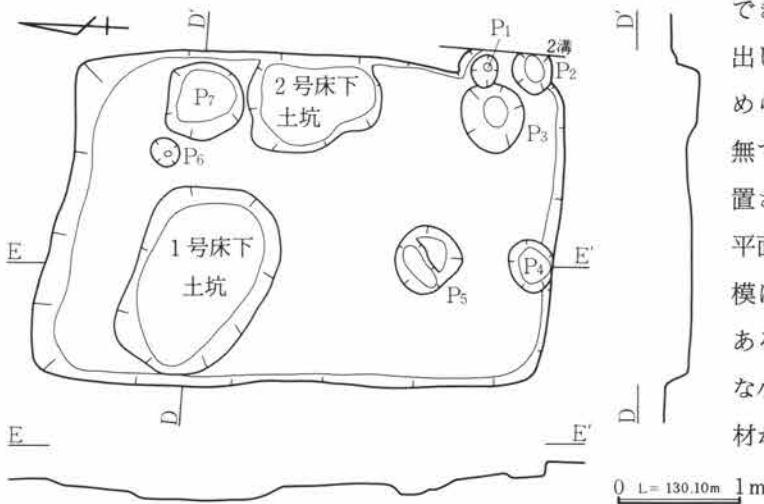
遺構名称	I区第107号住居跡	位置	2～4-I-74・75グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.60m×3.90m	主軸方位	東-4度-南	残存深度	約10cm程



第265図 I区第107号住居跡実測図(1)

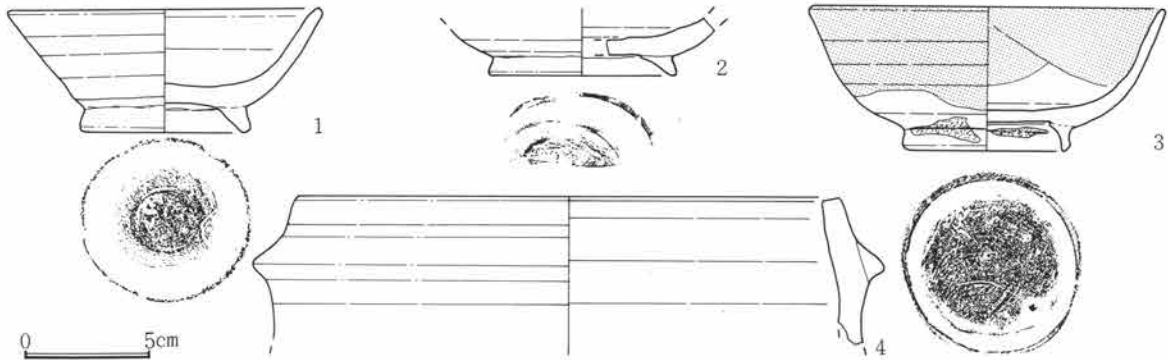
(所見) 当住居跡は当該期の遺構との重複はなく、カマドの一部が攪乱されていた他は全体を検出することができた。壁は北側に崩落によると思われる平面プランの崩れが認められる。床面はVI層土中に構築されており、全体にわずかな貼床が施されている。床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴いずれも検出することは

第2節 検出された遺構・遺物



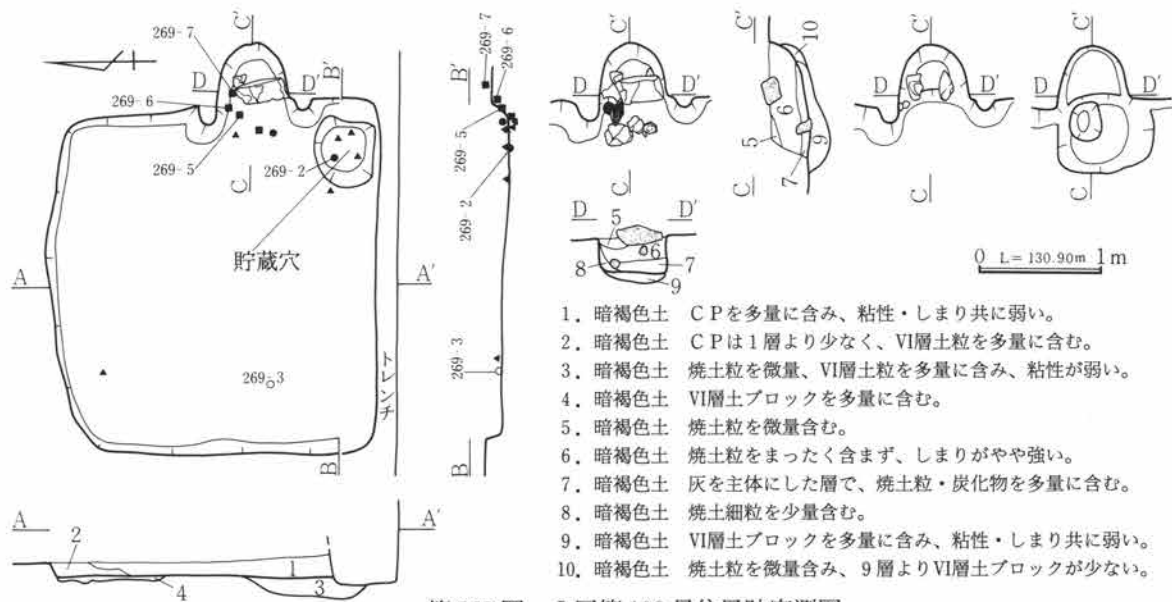
できなかった。掘り方の調査によって検出したピットや床下土坑には規則性は認められず、柱穴等に比定されるものは皆無である。カマドは東壁の南に偏って設置されており、袖の張り出さない馬蹄形平面を有していたものと考えられる。規模は燃烧部幅のみ計測可能で、約60cmである。カマドの掘り方では対となるような小ピットが検出されており、袖の構築材が据えられていた可能性がある。

第266図 I区第107号住居跡実測図(2)



第267図 I区第107号住居跡出土遺物実測図

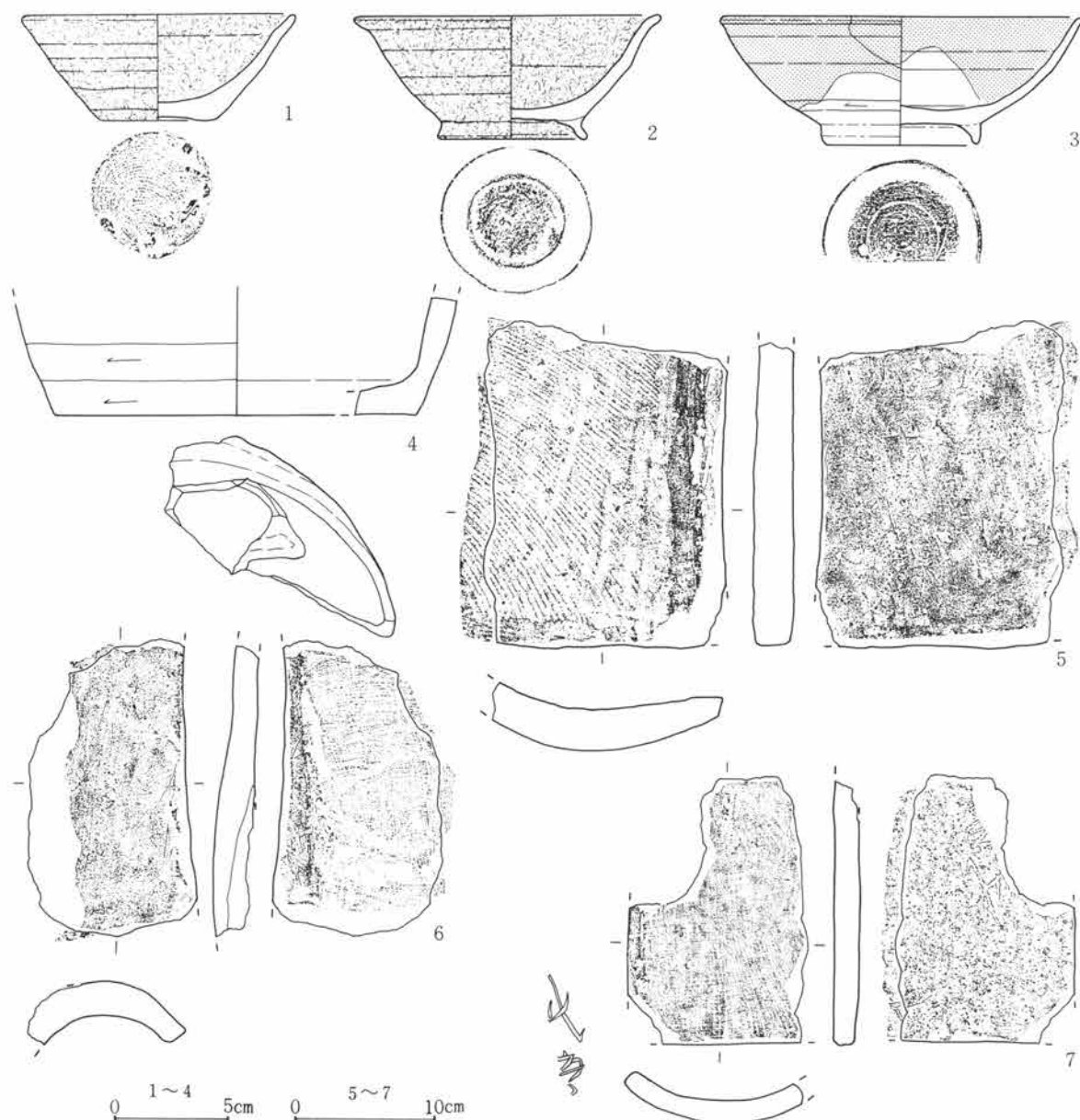
遺構名称	I区第108号住居跡	位置	1・2-I-76~78グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	2.72m×2.57m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約10cm程



1. 暗褐色土 CPを多量に含み、粘性・しまり共に弱い。
2. 暗褐色土 CPは1層より少なく、VI層土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 焼土粒を微量、VI層土粒を多量に含み、粘性が弱い。
4. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。
5. 暗褐色土 焼土粒を微量含む。
6. 暗褐色土 焼土粒をまったく含まず、しまりがやや強い。
7. 暗褐色土 灰を主体にした層で、焼土粒・炭化物を多量に含む。
8. 暗褐色土 焼土細粒を少量含む。
9. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含み、粘性・しまり共に弱い。
10. 暗褐色土 焼土粒を微量含み、9層よりVI層土ブロックが少ない。

第268図 I区第108号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

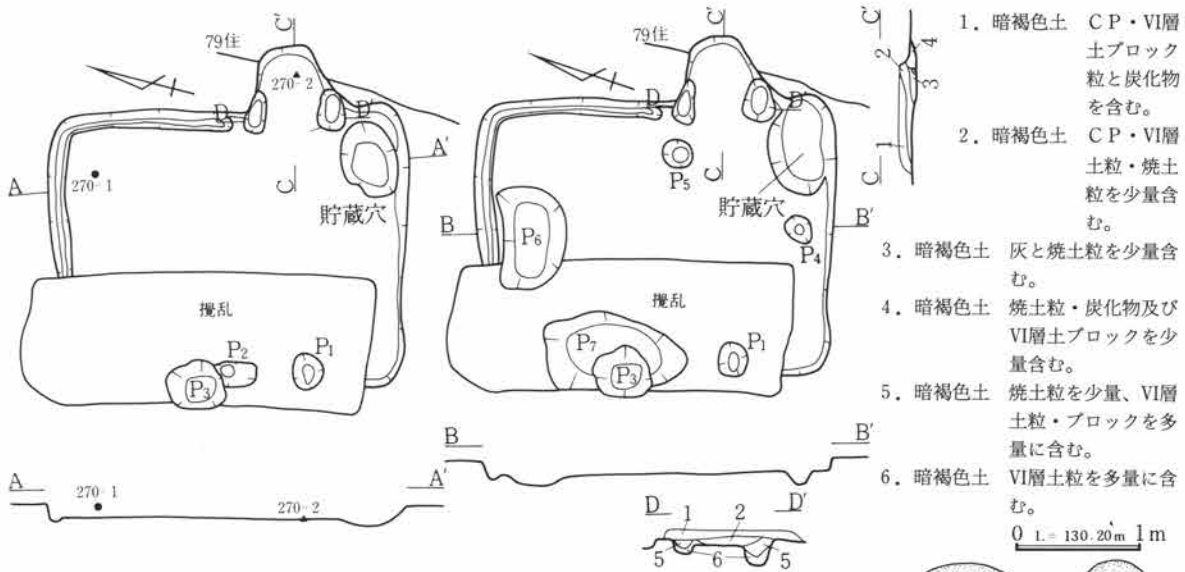


第269図 I区第108号住居跡出土遺物実測図

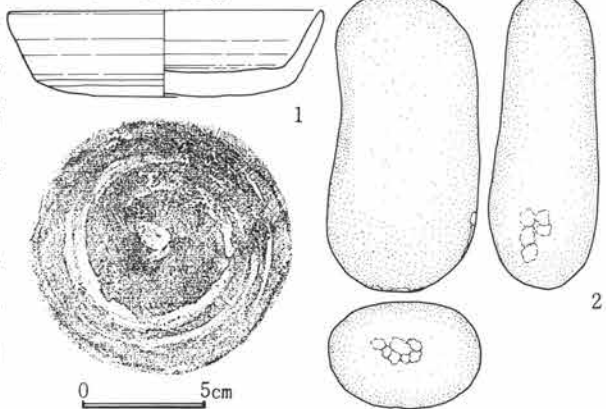
(所見) 当住居跡は南側が山王線の下にかかっており、南壁は検出することができなかった。平面プランの確認はVI層土中で行ったため、壁の残存はあまり良好でなかった。床面には部分的に貼床が施されていた。床面の精査によっては壁溝・柱穴は検出されず、南東コーナーに当たる付近から不整円形の貯蔵穴を検出した。この貯蔵穴は径約47cm、深さ約12cmの規模であり、底面から第269図2の須恵器壺と共に3個の大礫が出土している。カマドは東壁の南寄りの位置から検出されており、主軸方位は東-0°-北である。平面形は袖がわずかに屋内に張り出した砲弾形を呈し、残存部の規模は全長約70cm、燃烧部幅約50cmである。袖に構築材が用いられた痕跡はない。燃烧部奥には両壁に接するように礫を立て、その上に角柱状の截石を天井石として載せている。この部分が燃烧部と煙り出しとの境界であろうか。

遺構名称	I区第109号住居跡	位置	7~9-I-79~81グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.21m×2.79m	主軸方位	東-15度-北	残存深度	約10cm程

第2節 検出された遺構・遺物



(所見) 当住居跡は第79・113号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から第79号住居跡→当住居跡→第113号住居跡という関係と考えられる。床面の精査では、北コーナー付近に下幅約5cm、深さ約4cmの壁溝と、東コーナー部から約60×45cm、深さ約4cmの楕円形を呈する貯蔵穴を検出した。カマドは北東壁の南寄りに位置し、主軸方位は東-23°北である。規模は全長約70cm、燃烧部幅約50cmで、袖に当たる部分からは袖構築材の据え方と思われる小ピットが対になって検出されている。



第270図 I区第109号住居跡・出土遺物実測図

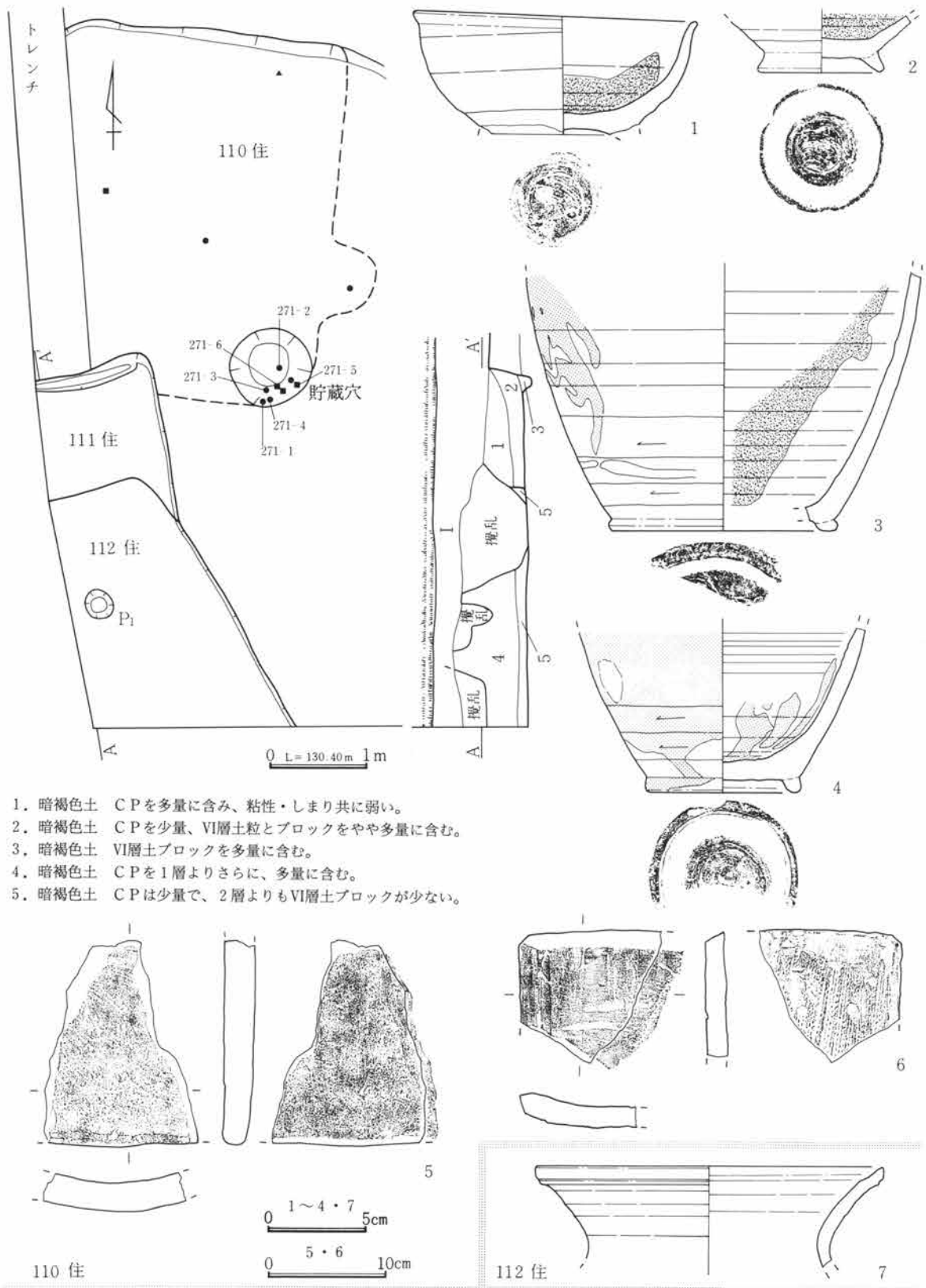
遺構名称	I区第110号住居跡	位置	2～4—I-79・80グリッド内		
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—
		残存深度	約13cm程		

遺構名称	I区第111号住居跡	位置	1・2—I-79・80グリッド内		
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—
		残存深度	約16cm程		

遺構名称	I区第112号住居跡	位置	0～2—I-79・80グリッド内		
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—
		残存深度	約8cm程		

(所見) 第110～112号住居跡は3軒共に重複しているが、遺構の検出状態等から第111号住居跡→第110号住居跡であるのは確実であるが、第111号住居跡と第112号住居跡との関係については、ちょうど重複部分が攪乱を受けているために判然としない。第110号住居跡は、遺構の確認面が低かったことによるものか非常に残存状態が悪く、北壁の一部と貯蔵穴だけが検出できた。貯蔵穴の規模は径約80cm、深さ約12cmで、比較的整形な円形を呈し、第271図1～4の遺物が出土している。カマドは残存していないが、前述のピットが貯蔵穴であるとすれば、すぐ北側に位置していたはずである。第111・112号住居跡は大半の部分が調査区外にかかっており、全体形を把握することは不可能である。第111号住居跡は北コーナー付近だけの検出で、一部北西壁

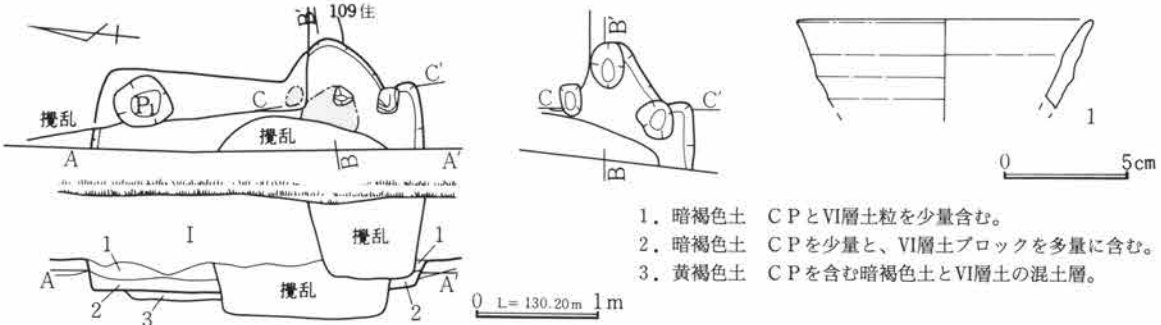
第4章 検出された遺構・遺物



第271図 I区第110・111・112号住居跡・出土遺物実測図

に沿って下幅約7cm、深さ約10cmの規模の壁溝を検出した。第112号住居跡は北東壁だけの検出で、床面で検出したP₁(径約30cm、深さ約30cm)は位置的に柱穴である可能性が高い。

遺構名称	I区第113号住居跡	位置	7・8—I-80・81グリッド内		
平面形態	—	規模	—m×2.60m	主軸方位	東-7度-北
		残存深度	約10cm程		

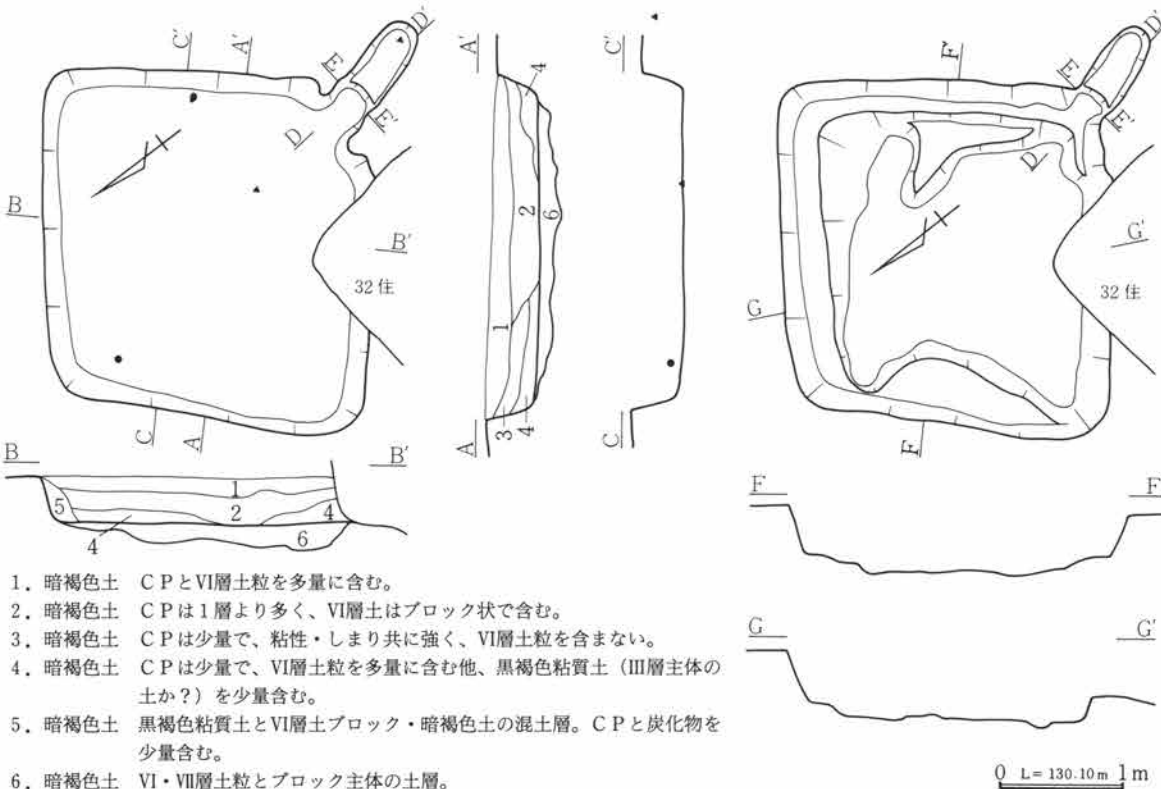


第272図 I区第113号住居跡・出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第109号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態から第109号住居跡→当住居跡と考えられる。遺構の大半は調査区外にかかっており、カマドを含む東壁部だけの検出である。また、土層断面からもわかるように中央部は広範囲に後世の攪乱を受けており、残存状態は非常に悪い。北東コーナー部に検出した径約38cm、深さ約30cmの円形のピットは、位置的に貯蔵穴と考えられる。

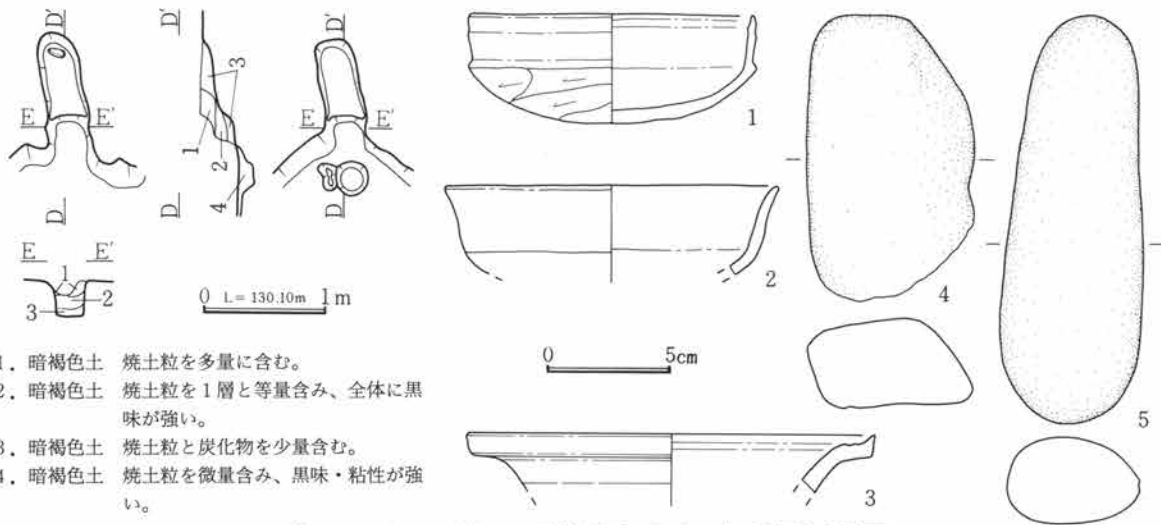
カマドは東壁の南寄りに偏って設置されており、主軸方位は東-13°-北である。袖の構築材は自然の礫で、右袖のみ残存していたが、左袖部にも据え方が検出された。また、支脚は燃焼部中央に検出した。

遺構名称	I区第114号住居跡	位置	29・30—I-77・78グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	2.70m×2.55m	主軸方位	東-42度-南
		残存深度	約37cm程		



第273図 I区第114号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

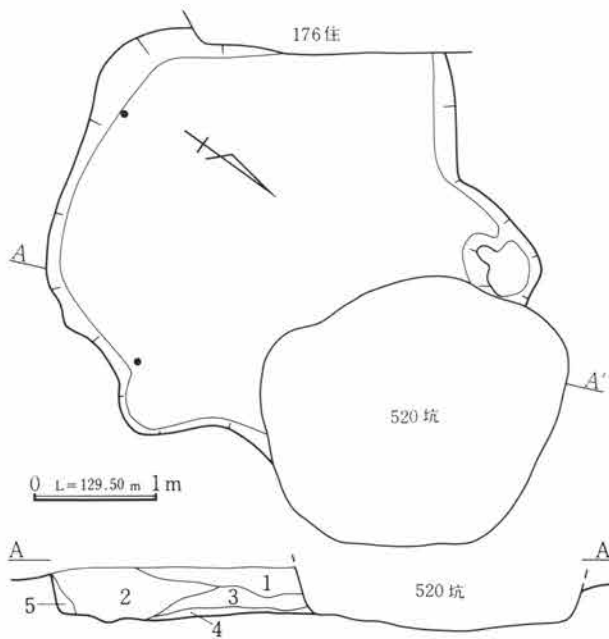


1. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 焼土粒を1層と等量含み、全体に黒味が強い。
3. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を少量含む。
4. 暗褐色土 焼土粒を微量含み、黒味・粘性が強い。

第274図 I区第114号住居跡(2)・出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第32号住居跡とわずかに重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡→第32号住居跡と考えられる。平面プランの確認はIV層土中でおこなったが、当住居跡覆土中には浅間C軽石とVI層土粒が多く含まれていたことから、容易に捉えることができた。壁は南西壁の一部を第32号住居跡との重複によって失っている他、全周を検出した。床面は全面にわたってVI・VII層土ブロックを主体とする貼床が施されていた。床面の精査や掘り方の調査によって壁溝・柱穴等は全く検出されなかった。掘り方の特徴は周囲を帯状に残し、内側を深く掘り窪めていることである。カマドは南コーナー部に設置されたいわゆるコーナーカマドであり、主軸方位は南-15°-東である。袖等が残存していないためどのようなタイプか不明であるが、残存部の規模は、燃焼部幅約24cm、煙道長約62cm、煙道下幅約24cmと、比較的貧弱な感じを受ける。

遺構名称	I区第115号址		位置	25・26-I-56~58グリッド内			
平面形態	不整形	規模	3.90m×3.18m	主軸方位	—	残存深度	約30cm程



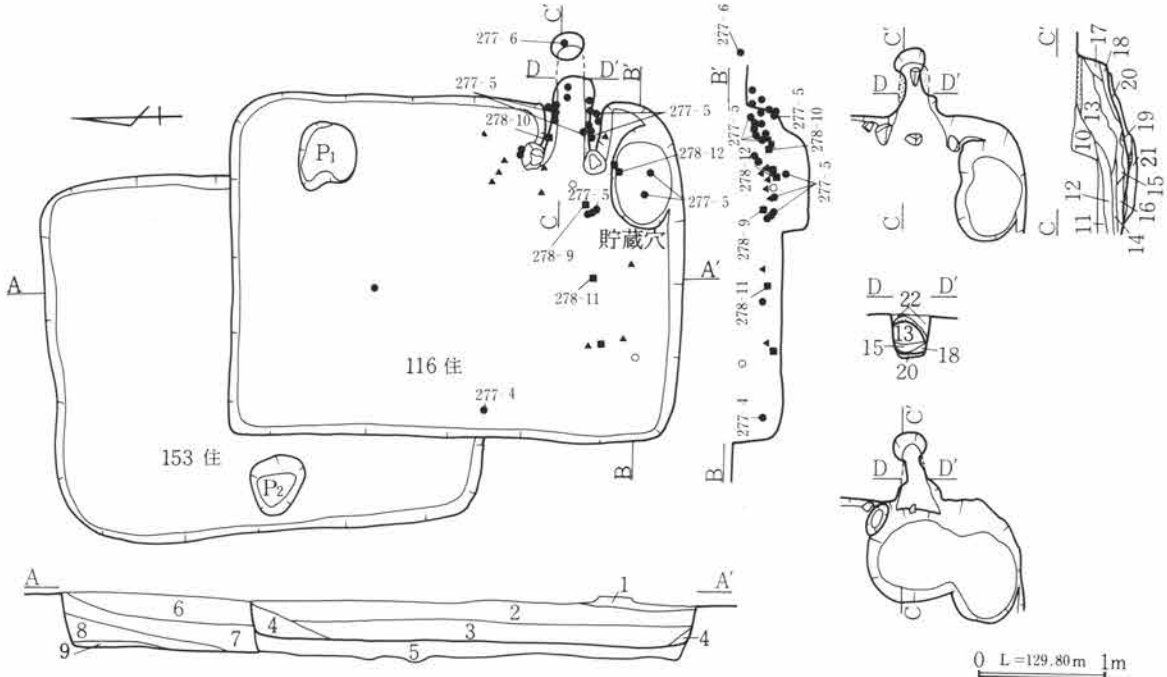
(所見) 当址は第166・167・176号住居跡及び第520号土坑と重複しているが、当址→第520号土坑であるのは確実であるが、その他の遺構との新旧関係は判然としない。平面プランは不整形であり、壁には崩落したと考えられるような部分が認められる。底面はVII層土中に当たり、ほぼ平坦に掘削されている。この底面の精査の結果、ピット等の掘り込みは全く検出されず、また、カマドのような住居跡と認定する要素が検出されていないことから、址として扱った。

1. 暗褐色土 CPと灰褐色土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 CPとVI層土粒・VII層土小ブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土 1層に類似し、炭化物を微量含む。
4. 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に含む。
5. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含み、粘性が強い。

第275図 I区第115号址実測図

遺構名称	I区第116号住居跡	位置	27~29-I-68~70グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	2.69m×3.58m	主軸方位	東-0度-北
				残存深度	約35cm程

遺構名称	I区第153号住居跡	位置	28~30-I-69・70グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	2.85m×3.39m	主軸方位	東-0度-北
				残存深度	約40cm程

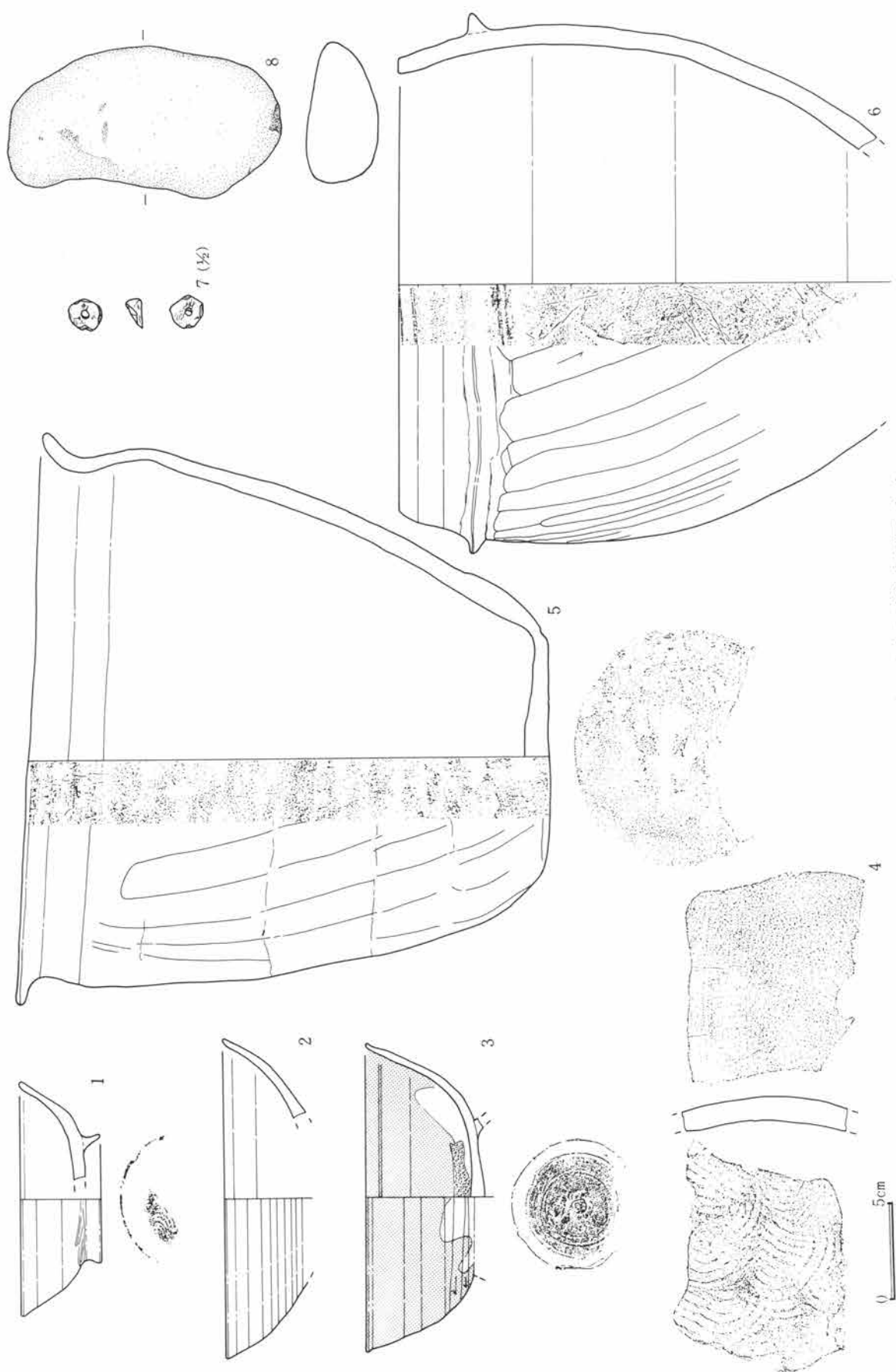


- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1. 暗褐色土 CPを多量に含む。 | 12. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を少量含む。 |
| 2. 暗褐色土 CPを多量に含み、1層よりも茶味が強い。 | 13. 暗褐色土 焼土粒を少量、まばらに含む。 |
| 3. 暗褐色土 CPを多量に含み、2層よりも茶味は弱い。 | 14. 暗褐色土 炭化物を多量に含む。 |
| 4. 暗褐色土 CPは他層よりも少量で、しまりが強い。 | 15. 暗褐色土 暗褐色土と焼土粒の混土層。 |
| 5. 暗褐色土 VI・VII層土粒とブロックを多量に含む。 | 16. 暗褐色土 灰と炭化物を多量に含み、全体にしまりが弱い。 |
| 6. 暗褐色土 CPを微量と、VII層土ブロックを多量に含む。 | 17. 暗褐色土 CPを微量含み、焼土粒・炭化物を全く含まない。 |
| 7. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックを多量に含む。 | 18. 暗褐色土 炭化物と焼土細粒を多量に含む。 |
| 8. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。 | 19. 暗褐色土 炭化物を主体とした暗褐色土との混土層。 |
| 9. 暗褐色土 VI層土ブロックを少量含む。 | 20. 暗褐色土 焼土粒を微量含み、しまりが弱い。 |
| 10. 暗褐色土 CPとVII層土粒を少量含む。 | 21. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量と、VI層土粒を少量含む。 |
| 11. 暗褐色土 VII層土粒を少量含む。 | 22. 暗褐色土 10層に類似。 |

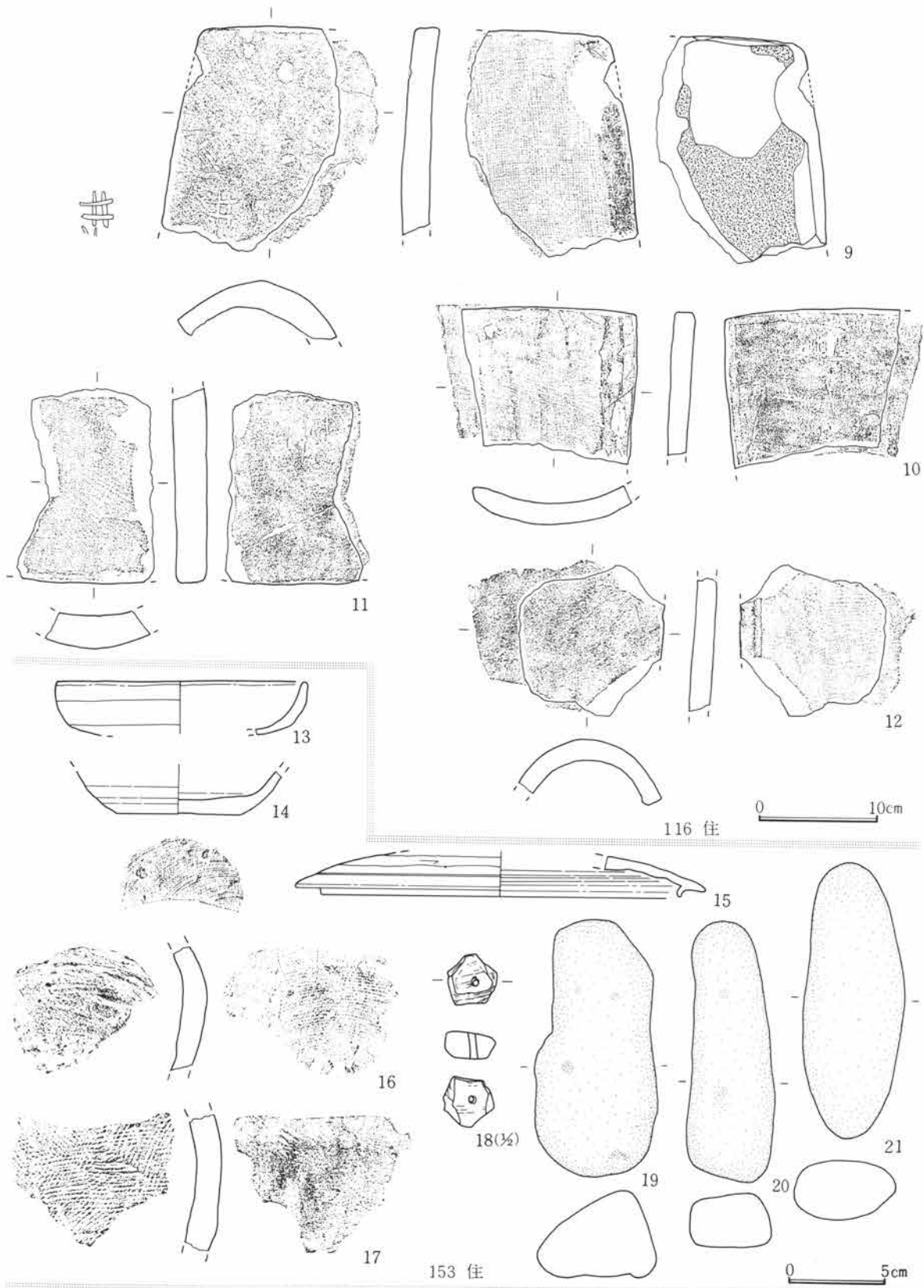
第276図 I区第116・153号住居跡実測図

(所見) 第116号住居跡は第153~155号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も新しい時期の遺構であると考えられる。当住居跡はプランの大半が他遺構の覆土中にかかっていたものの、比較的明瞭に平面プランを捉えることができた。壁に崩落の痕跡はみられず、床面はVI・VII層土ブロック主体の貼床が、全面にわたって10cm程の厚さで施されていた。この床面の精査ではピット(P₁)と貯蔵穴を検出した。P₁(約48×45cm、深さ約3cm)は不整形で掘り込みも曖昧であり、さらに対応するピットが検出されないことなどから柱穴とは考えられない。貯蔵穴は南東コーナー部に検出したもので、約80×55cm、深さ約20cmの規模を有する楕円形の掘り込みである。

カマドは東壁の南寄りに偏って設置されており、煙道の天井が残存していたなど状態は比較的良好である。主軸方位は東-0°-北であり、残存部の規模は全長約110cm、燃焼部幅約23cm、煙道下幅約20cm、煙り出し部径約21cmである。袖は、両袖共に先端部及び基部に礎を据え付けて構築されていた。煙道の天井部は焼土が



第277図 I区第116号住居跡出土遺物実測図(1)



第278図 I区第116号住居跡(2)・第153号住居跡出土遺物実測図

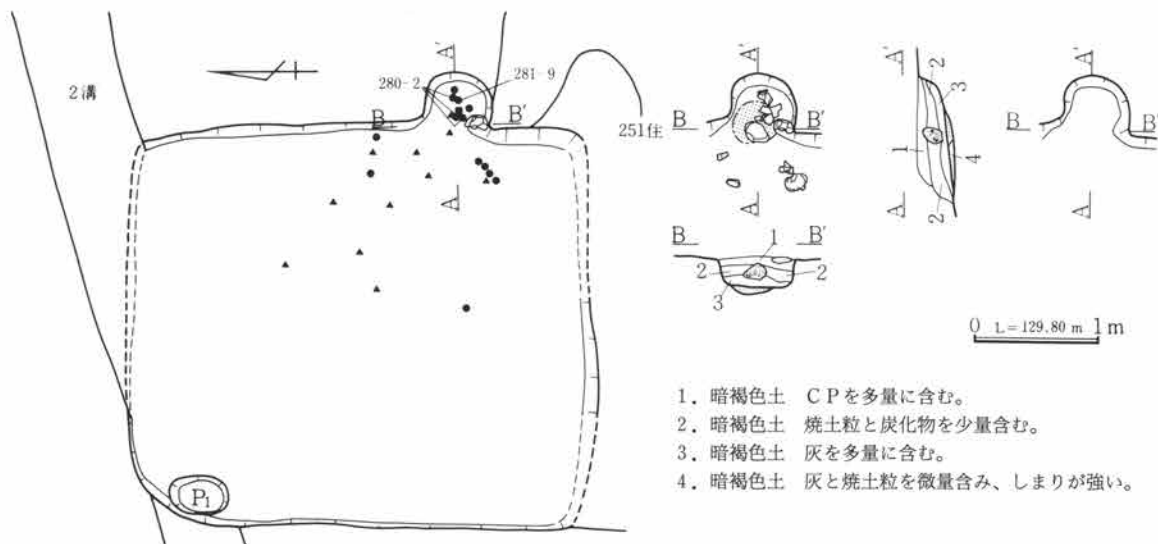
弧状に観察されており、崩落せずに残存したものであろう。燃烧部からは第277図5の土釜がまとめて出土しており、カマドに掛けられていた可能性がある。また、煙り出し部からは第277図6の羽釜破片が出土して

第4章 検出された遺構・遺物

いる。この遺物の出土状態は、故意に入れられた感じを受けるものであり、蓋としての機能があったのかもしれない。

第153号住居跡はカマドを含む南側約4mを第116号住居跡との重複で失っている。また、北側で第49号住居跡と重複しており、遺構の検出状態から当住居跡→第153号住居跡と考えられる。

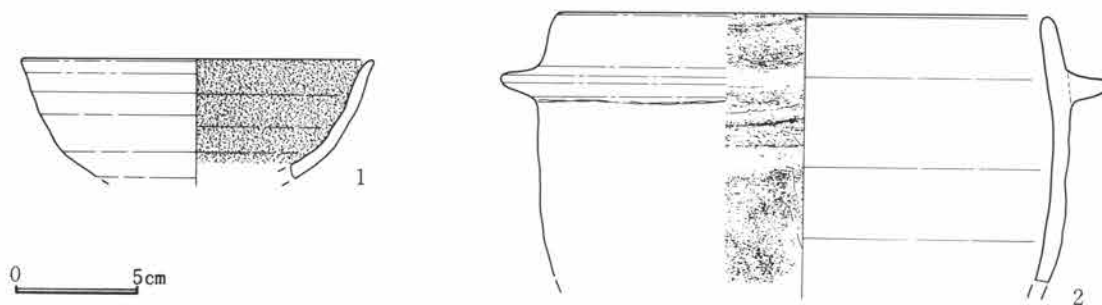
遺構名称	I区第117号住居跡	位置	26～29—I-61-63グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.17m×3.74m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約20cm程



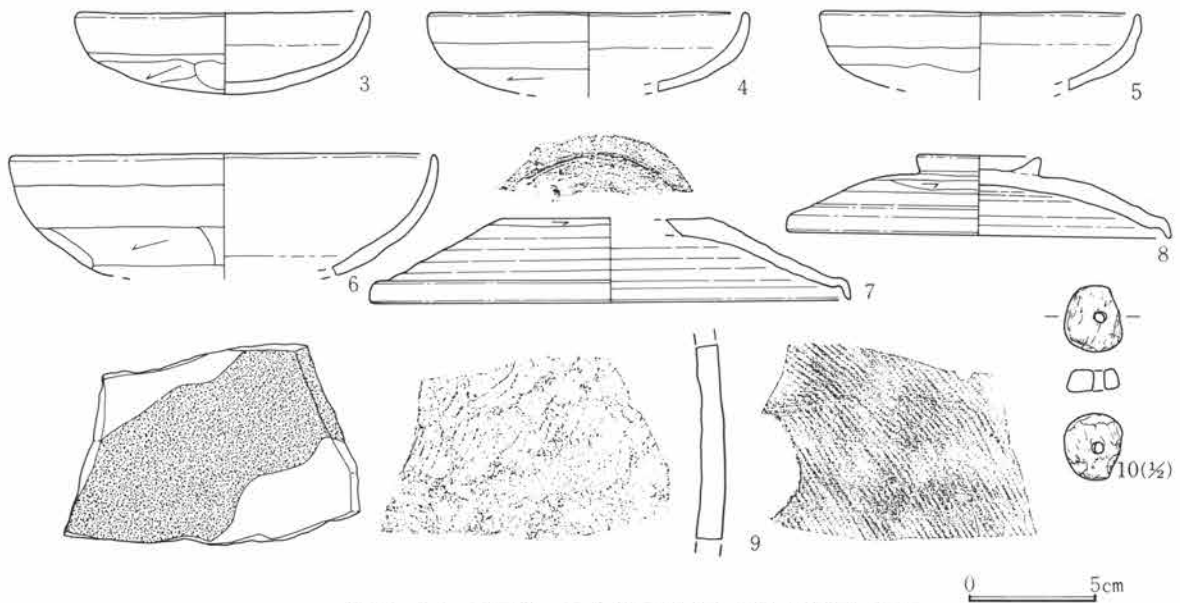
第279図 I区第117号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第239・251号住居跡と重複しているが、出土遺物の比較から第251号住居跡→当住居跡であるのはほぼ確実であるが、第239号住居跡との関係は判然としない。これらの重複については、当初調査では確認できず、農道下の調査によって判明したものであり、狭い範囲での確認であったため、壁の確認ができなかった部分がある。床面は曖昧であるが、想定した面において下位の遺構の平面プランが捉えられたことから、貼床は施されていないと思われる。この床面の精査では北西コーナー部に約48×30cm、深さ約3cmのごく浅いピット (P₁) を検出したに過ぎない。

カマドは東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-10°-南である。平面形は袖が屋内に張り出さない馬蹄形を呈している。残存部の規模は、全長約50cm、燃焼部幅約42cmである。袖は右袖のみ燃焼部に張り出すように残存しており、礫を構築材として使用していた。燃焼部中央からは礫が1個出土しているが、その下には焼土の面が検出されており、支脚とは考えられない。



第280図 I区第117号住居跡出土遺物実測図(1)

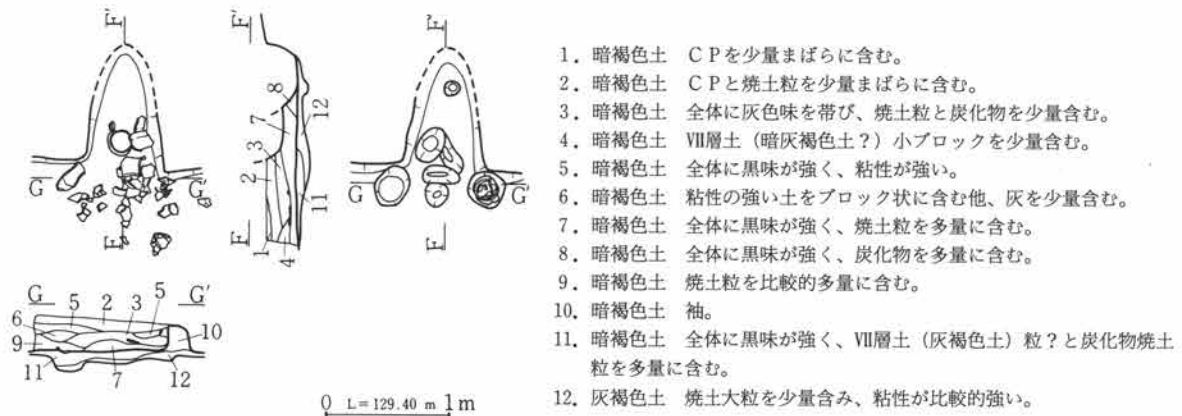


第281図 I区第117号住居跡出土遺物実測図(2)

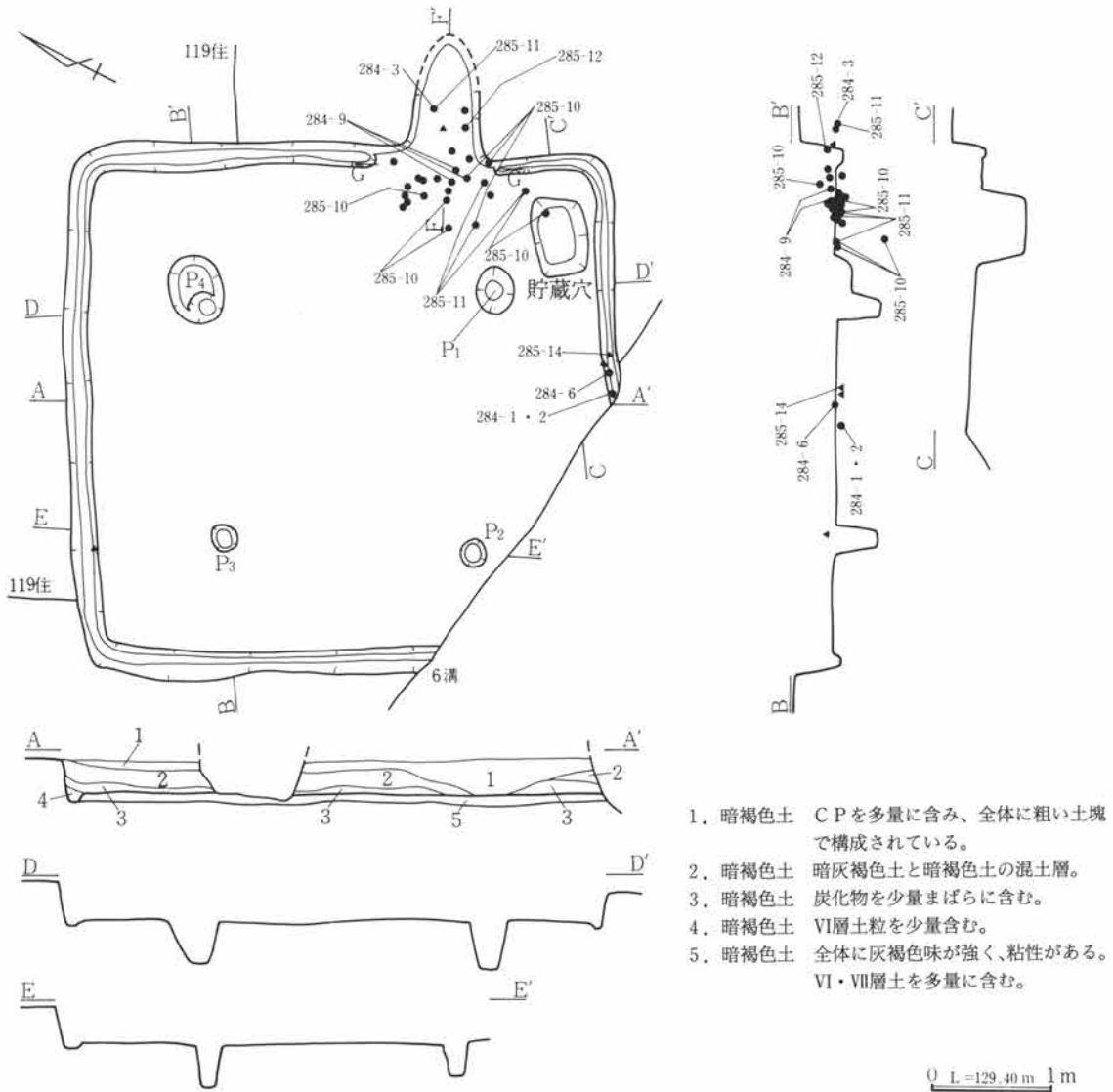
遺構名称	I区第118号住居跡		位置	20~22—I-65~68グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.28m×4.48m	主軸方位	東-23度-北	残存深度	約28cm程

(所見) 当住居跡は、南コーナー部を中世以降に属する第6号溝状遺構との重複によって失っている他、第119号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第119号住居跡→当住居跡と考えられる。平面プランの確認はIV層土中であり、覆土中の浅間C軽石含有量が多かったことから比較的明瞭に捉えることができた。床面にはほぼ全面にわたってVI・VII層土を主体とした貼床がほどこされていた。壁溝は、幅約5~8cm、深さ約5~7cmの規模を有しており、カマド部を除いて全周していたと考えられる。柱穴はP₁~P₄(径約23~42cm、深さ約34~39cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.1m、P₂~P₃間約2.0m、P₃~P₄間約1.9m、P₄~P₁間約2.3m)の4本であり、掘り方の調査によってもこの柱穴配列以外の柱穴は検出されていない。貯蔵穴は東コーナー部に位置している約62×44cm、深さ約38cmの長方形プランの掘り込みである。

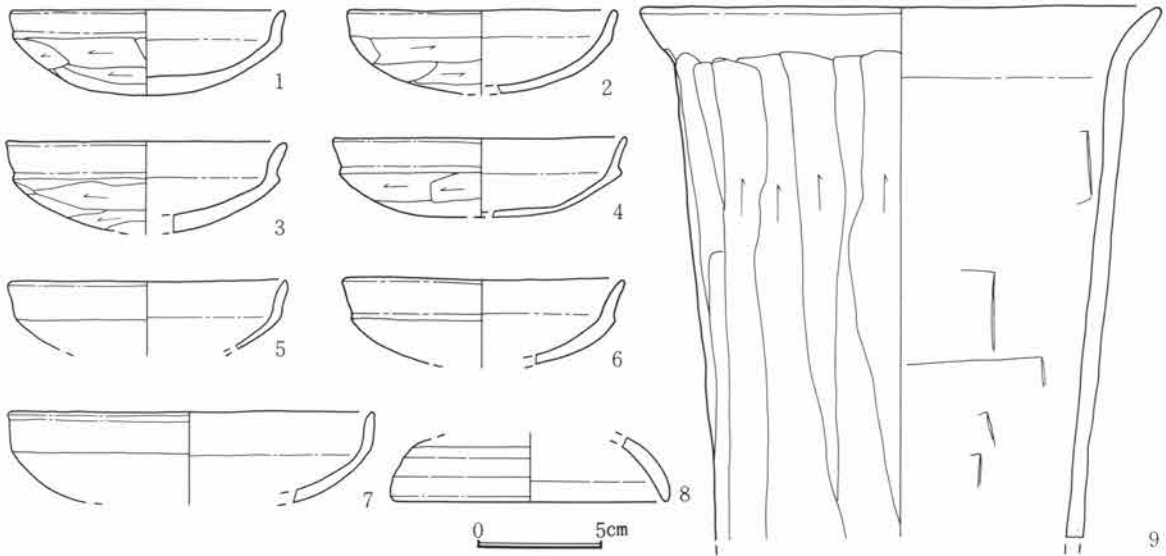
カマドは北東壁の南寄りに設置されており、主軸方位は東-23°-北である。煙道先端は乱されており全体の残存状態は不良である。袖は掘り方の段階で検出したもので、右袖部に第285図10の土師器甕が円形据え方内に逆位の状態で残存していた。左袖部にも据え方があり、右袖同様の構造と考えられる。



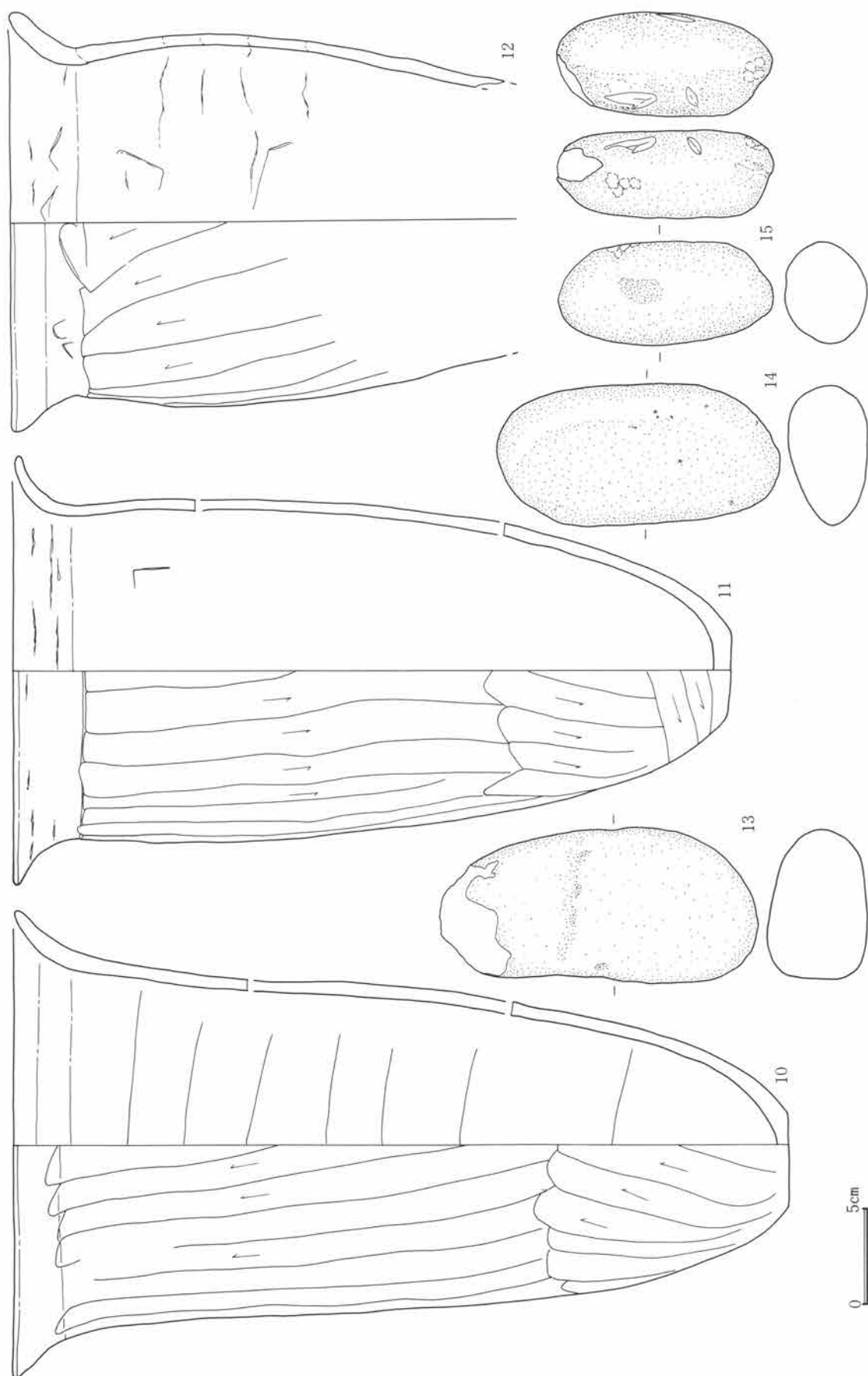
第282図 I区第118号住居跡実測図(1)



第283図 I区第118号住居跡実測図(2)

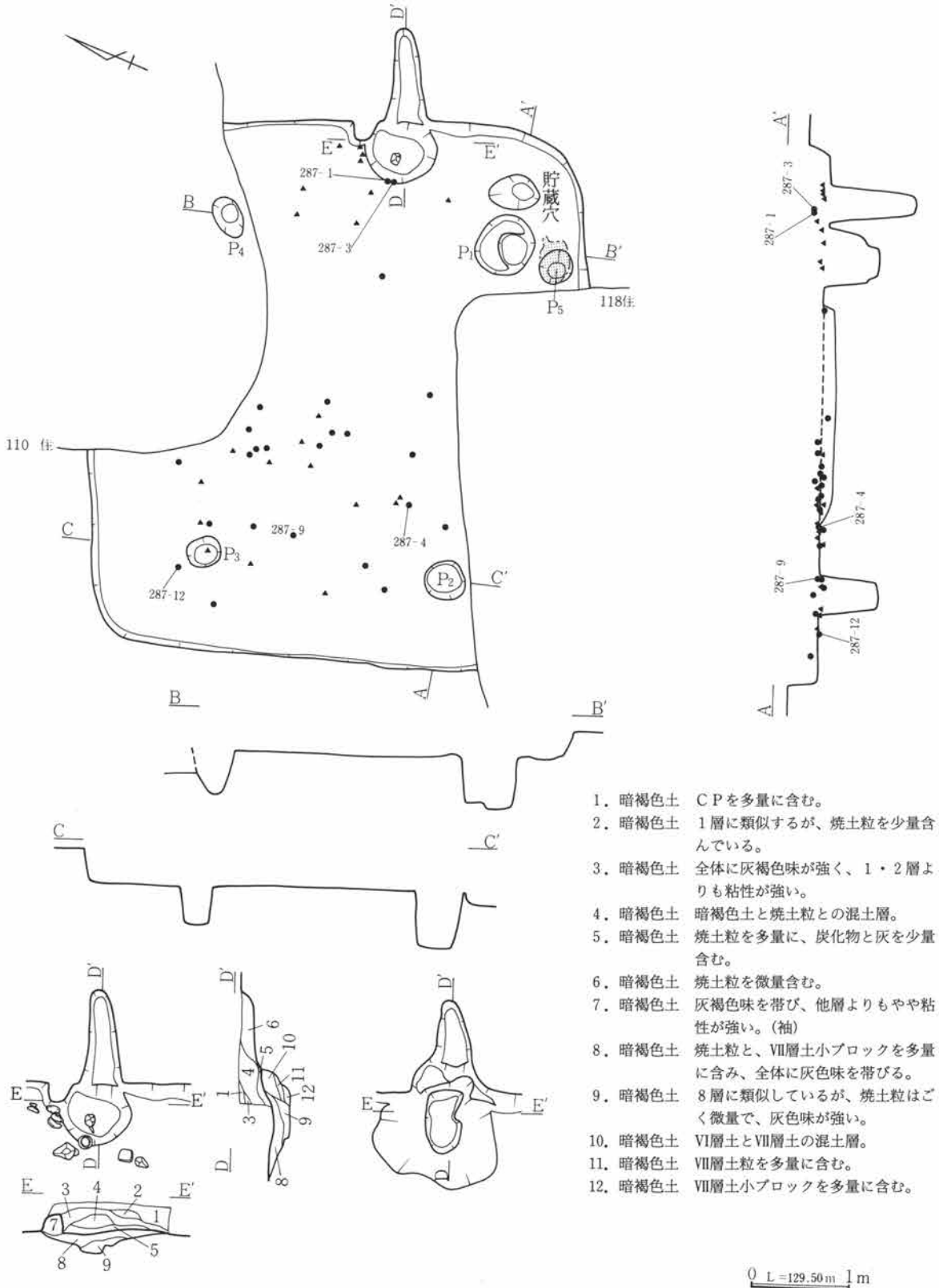


第284図 I区第118号住居跡出土遺物実測図(1)



第285図 I区第118号住居跡出土遺物実測図(2)

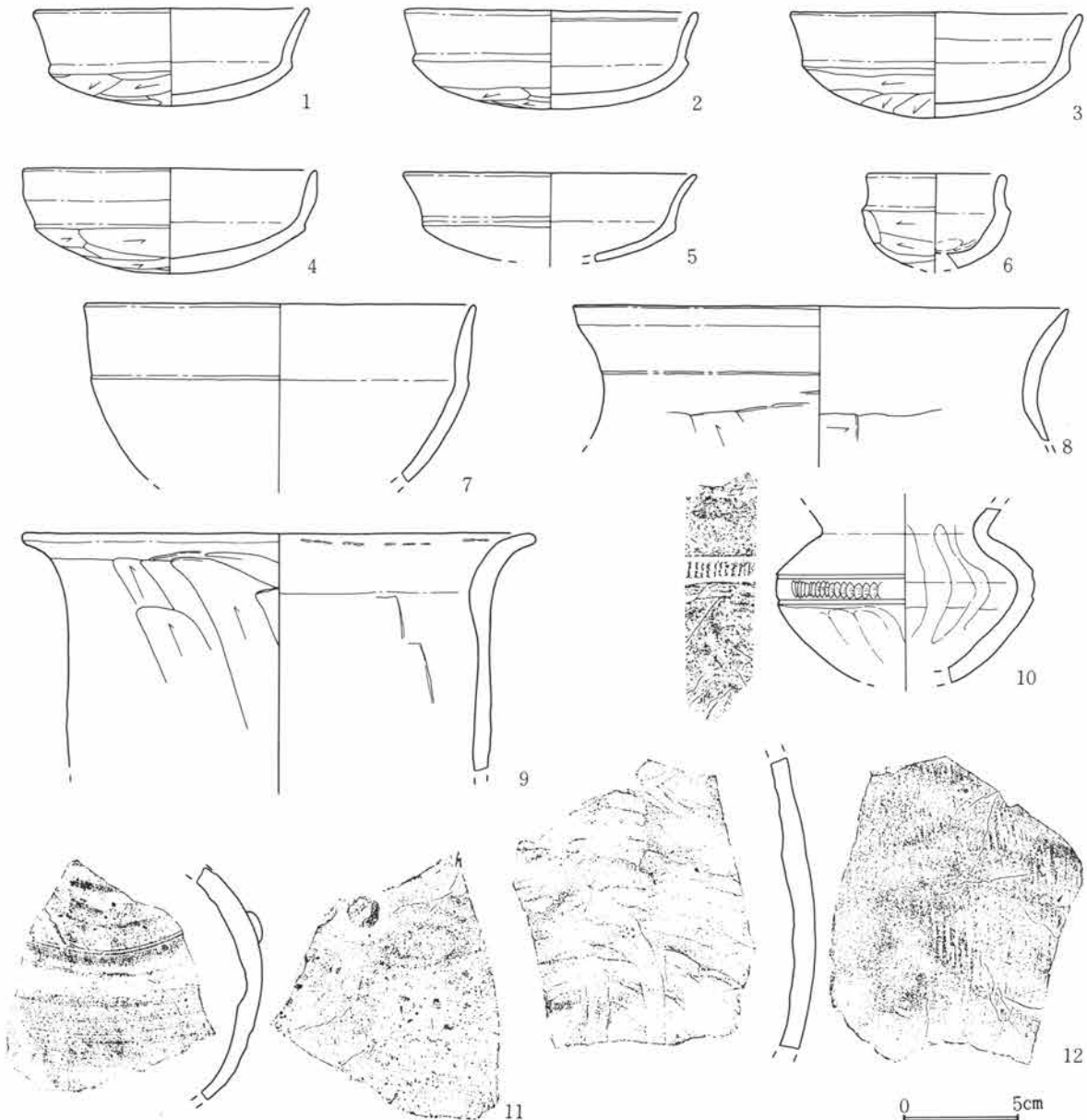
遺構名称	I区第119号住居跡		位置	21~23-I-65~68グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.32m×5.00m	主軸方位	東-20度-北	残存深度	約27cm程



第286図 I区第119号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第110・118号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態等から当住居跡が最も古い時期の遺構であろう。壁及び床面の一部は重複によって失われている。床面に貼床は施されておらず、VII層土を直接床面としている。この床面の精査で柱穴・貯蔵穴の他、ピットを1本検出した。柱穴はP₁～P₄(径約35～43cm、深さ約44～60cm、柱穴間距離P₁～P₂間約3.3m、P₂～P₃間約2.4m、P₃～P₄間約3.4m、P₄～P₁間約2.8m)の4本である。貯蔵穴は東コーナー部に検出した楕円形の掘り込みで、規模は約52×35cm、深さ約86cmである。柱穴(P₁)の南側に検出したP₅(径約34cm、深さ約7cm)の上面には焼土面が観察された。しかしこの場所で火を焚いたような状態ではなく、カマド等から運ばれたものである可能性が高い。

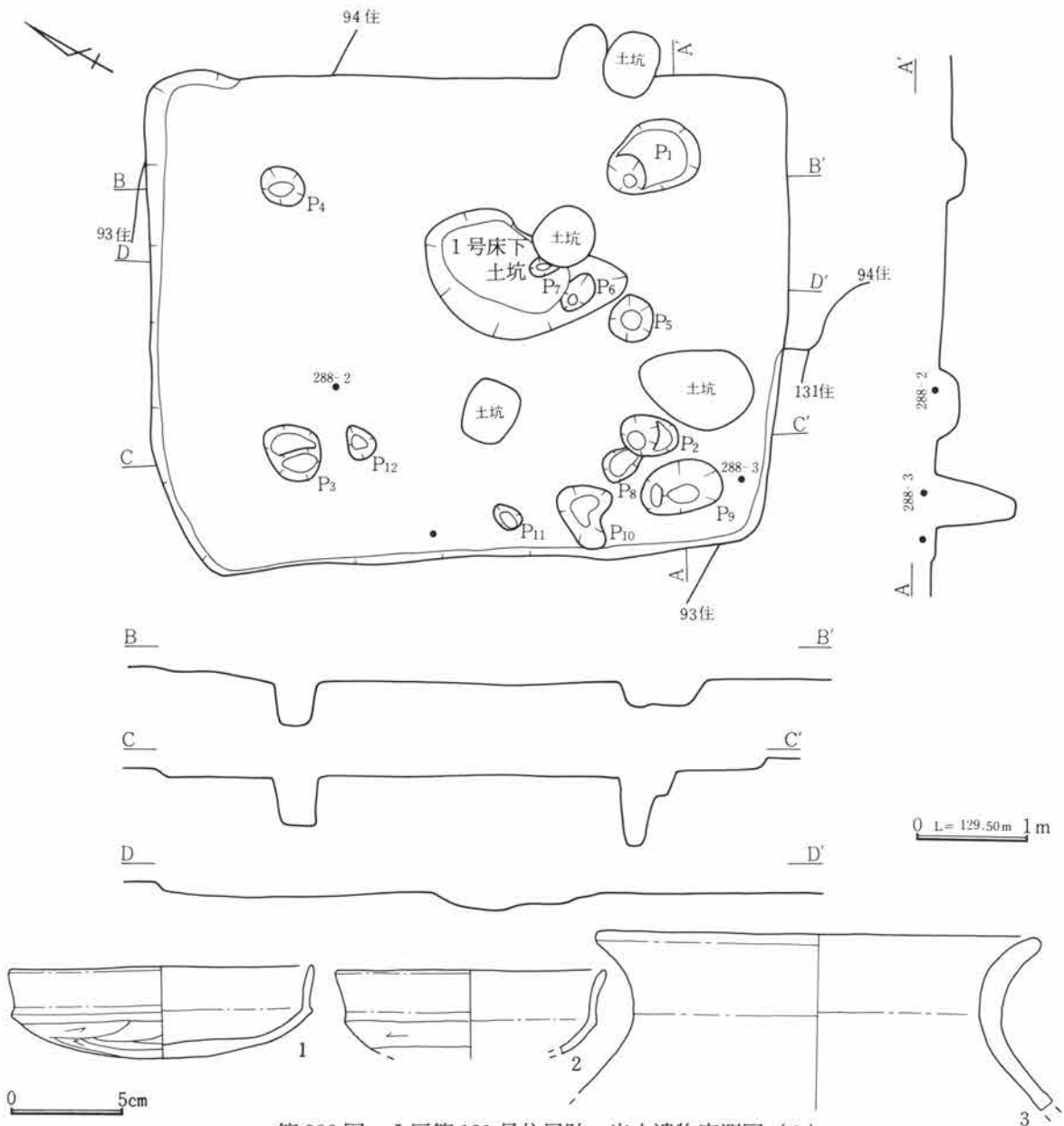
カマドは北東壁の中央やや南寄りに設置されており、主軸方位は東-25°-北である。検出時袖は左袖のみがわずかに残存していただけであるが、本来は両袖共に屋内に張り出した凸字形平面と考えられ、残存部の規模は、全長約155cm、燃焼部幅約70cm、煙道長約94cm、煙道下幅約17cmである。燃焼部は不整形形の掘り込みとして確認され、中央やや北寄りから面取りされた石製の支脚が検出された。



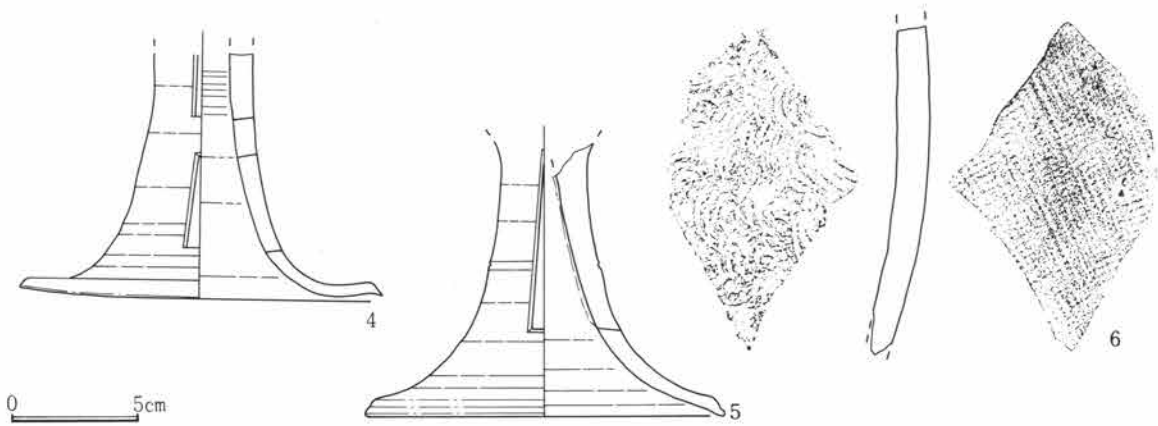
第287図 I区第119号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第121号住居跡	位置	21~25-I-74~77グリッド内				
平面形態	隅丸長方形?	規模	4.38m×5.52m	主軸方位	東-30度-北	残存深度	約5cm程

(所見) 当住居跡は、第92~94・131号住居跡と重複している。新旧関係は、遺構の検出状態及び残存状態等から当住居跡→第92~94号住居跡と考えられるが、第131号住居跡との関係は判然としない。遺構の残存状態は非常に悪く、床面は捉えることができなかった。掘り方はVII層土中に及んでおり、多くのピットと床下土坑を検出した。柱穴は規模と配置からP₁(径約30cm、深さ約27cm)・P₂(約50×35cm、深さ約58cm)・P₃(50×43cm、深さ約43cm)・P₄(径約34cm、深さ約38cm)の4本であり、柱穴間距離はP₁~P₂間約2.3m、P₂~P₃間約3.0m、P₃~P₄間約2.4m、P₄~P₁間約3.1mである。他のピットの中では南コーナー部に検出したP₉(約74×45cm、深さ約65cm)が、規模的に最も大型であり、位置的にみて貯蔵穴の可能性が高い。カマドは痕跡も検出されていないが、柱穴配置から類推して北東壁の南寄りに設置されたものであろう。



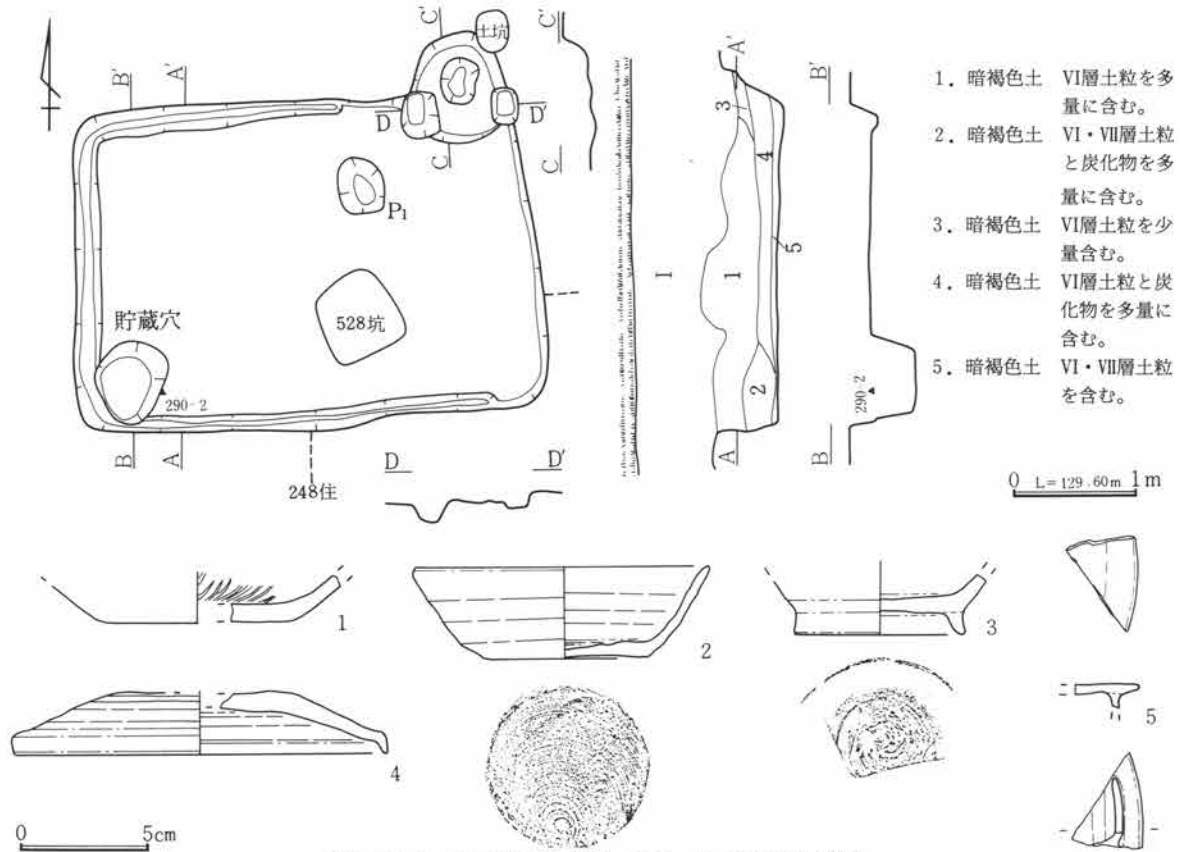
第288図 I区第121号住居跡・出土遺物実測図(1)



第289図 I区第121号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第122号住居跡	位置	24~26-I-61~63グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.60m×3.70m	主軸方位	北-0度-東	残存深度	約18cm程

(所見) 当住居跡は第123・248号住居跡と重複しているが、出土遺物の比較等から第123号住居跡→当住居跡→第248号住居跡と考えられる。東側が南北農道下であったため二次の調査で全体を明らかにした。床面の調査で西側に壁溝を検出したが全周せず、掘り方も明瞭でない。貯蔵穴は南西コーナー部の掘り込みと考えられ、約65×54cm、深さ約36cmの不整楕円形を呈している。カマドは主軸が北を向く特異なものであり、袖の張り出さない馬蹄形平面のタイプと考えられる。袖の構築材は残存していないが、壁に接する位置に袖の据え方が検出されている。また、燃烧部中央やや奥には支脚の据え方と考えられる小ピットが確認された。

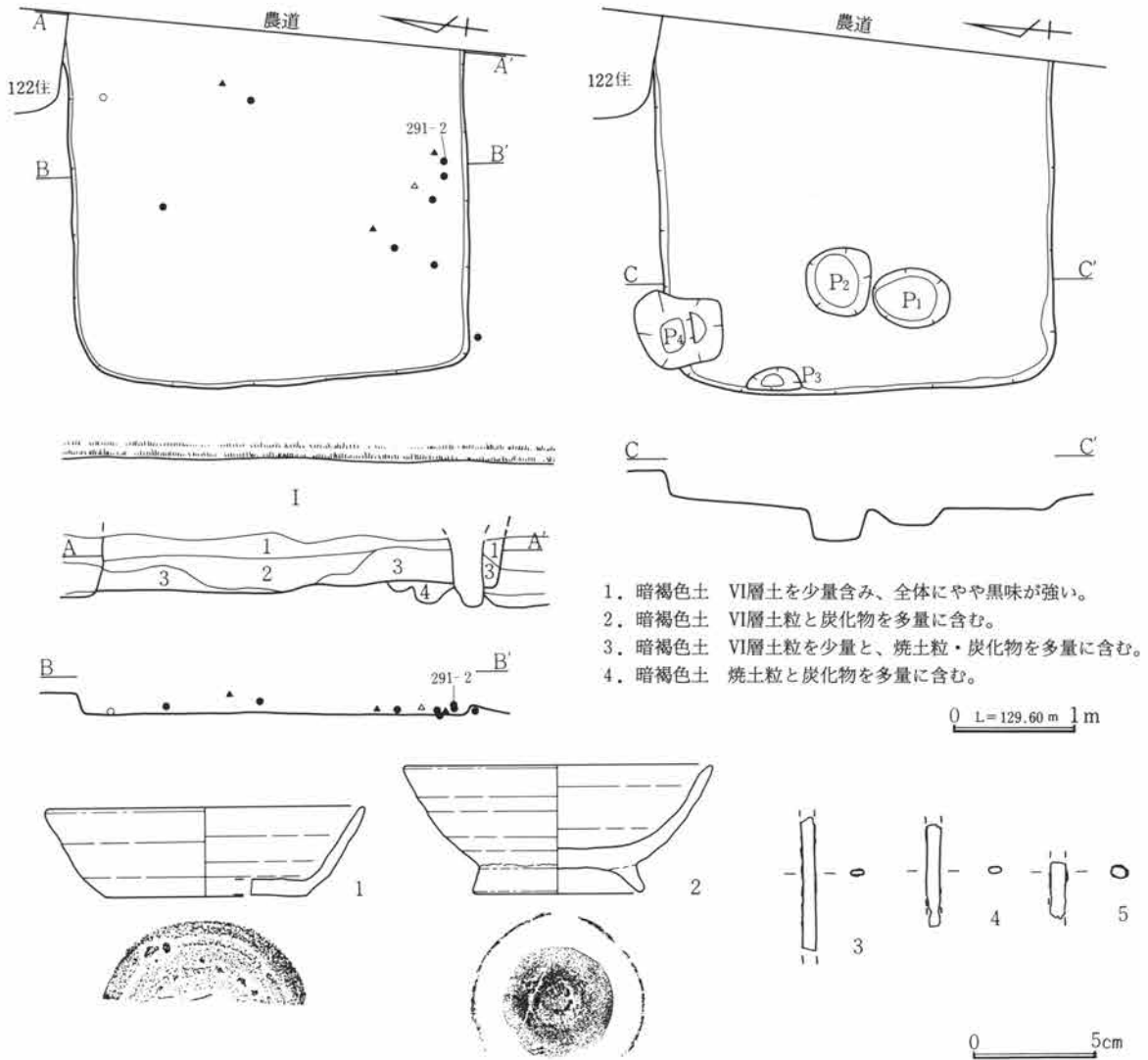


第290図 I区第122号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第123号住居跡		位置	23・24-I-62~64グリッド内			
平面形態	—	規模	—m×3.20m	主軸方位	東-4度-北	残存深度	約15cm程

(所見) 当住居跡は、第122号住居跡に北側の一部を削平されている他、農道面の土層断面の観察によれば南側で別な遺構と重複しているが、平面的には全く捉えることができなかった。また、当住居跡の東側は南北農道下にかかっており二次の調査を実施したが、遺構確認面が農道下では下がっていたためか、カマド等を検出することはできなかった。したがって検出できたのは先行調査した部分だけである。床面の調査では壁溝・柱穴等は検出されず、掘り方において検出したピットも柱穴には該当しない。



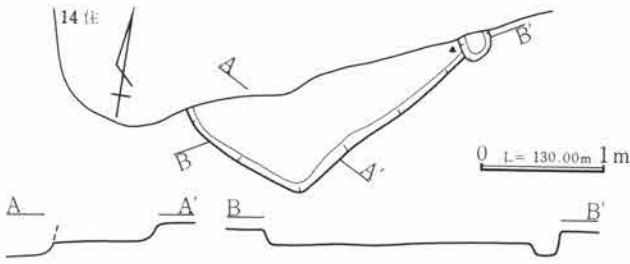
第291図 I区第123号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第124号住居跡		位置	44・45-I-65・66グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約13cm程

(所見) 当住居跡は第14号住居跡と重複しており、残存状態から当住居跡→第14号住居跡と考えられる。当住居跡の掘り込みが浅かったのに反して、第14号住居跡の掘り込みは深かったため当住居跡の大半は削平消失しており、遺構の残存したのはわずかに南コーナー部のみである。壁溝・柱穴・カマド等住居と判定するよ

第2節 検出された遺構・遺物

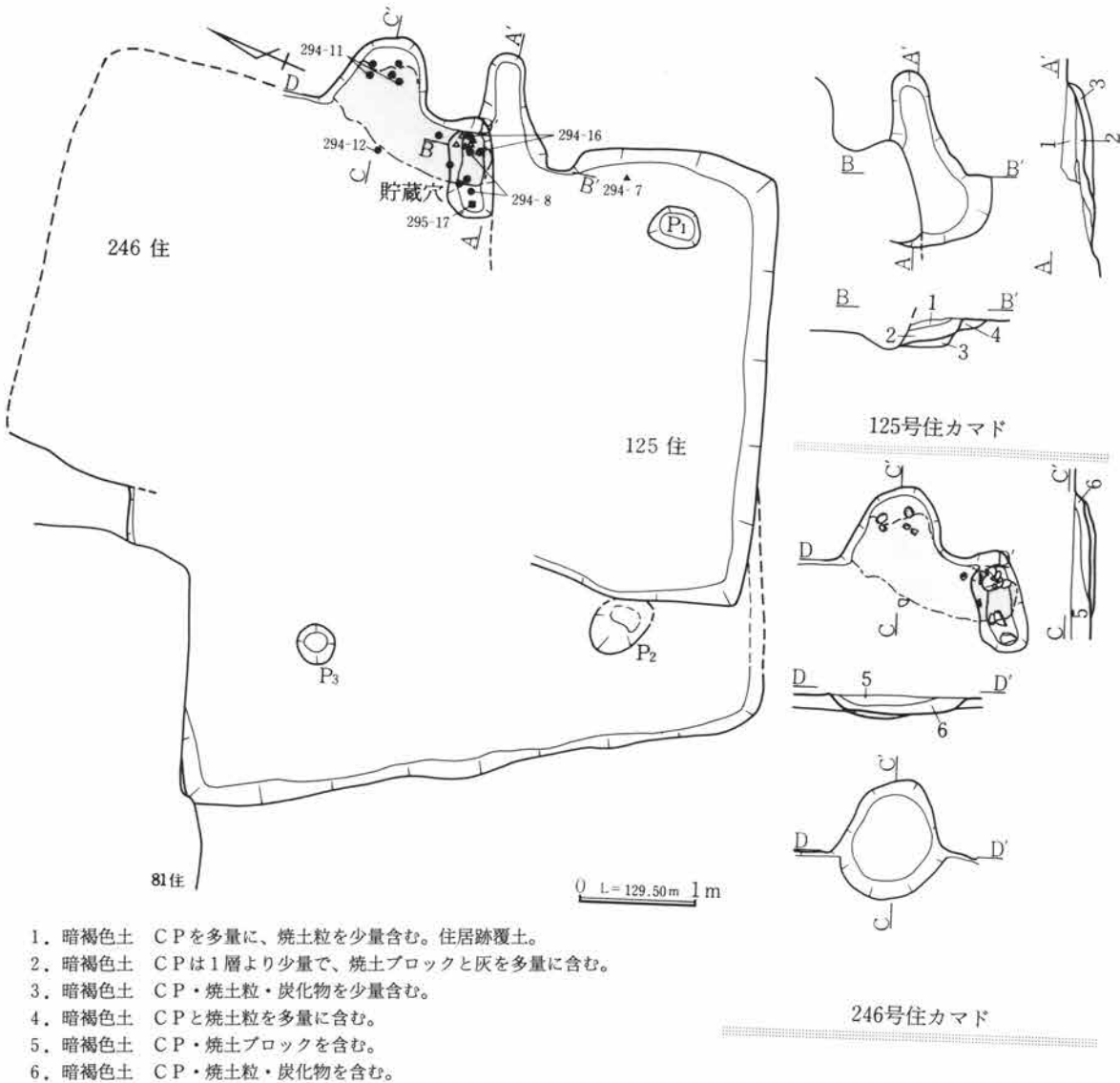
うな要素を全く欠いており、址として扱うべき内容である。しかし、残存した南コーナー部の状態は良好で、整形な平面プランを予見させるものであり、床面と思われる面は、VI層土中に平坦でしかもしっかりと構築されていることなどから、住居跡として扱った。



第292図 I区第124号住居跡実測図

遺構名称	I区第125号住居跡	位置	8~11-I-61~64グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	-m × -m	主軸方位	東-30度-北	残存深度	約28cm程

遺構名称	I区第246号住居跡	位置	10・11-I-61~63グリッド内				
平面形態	-	規模	-m × -m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約7cm程



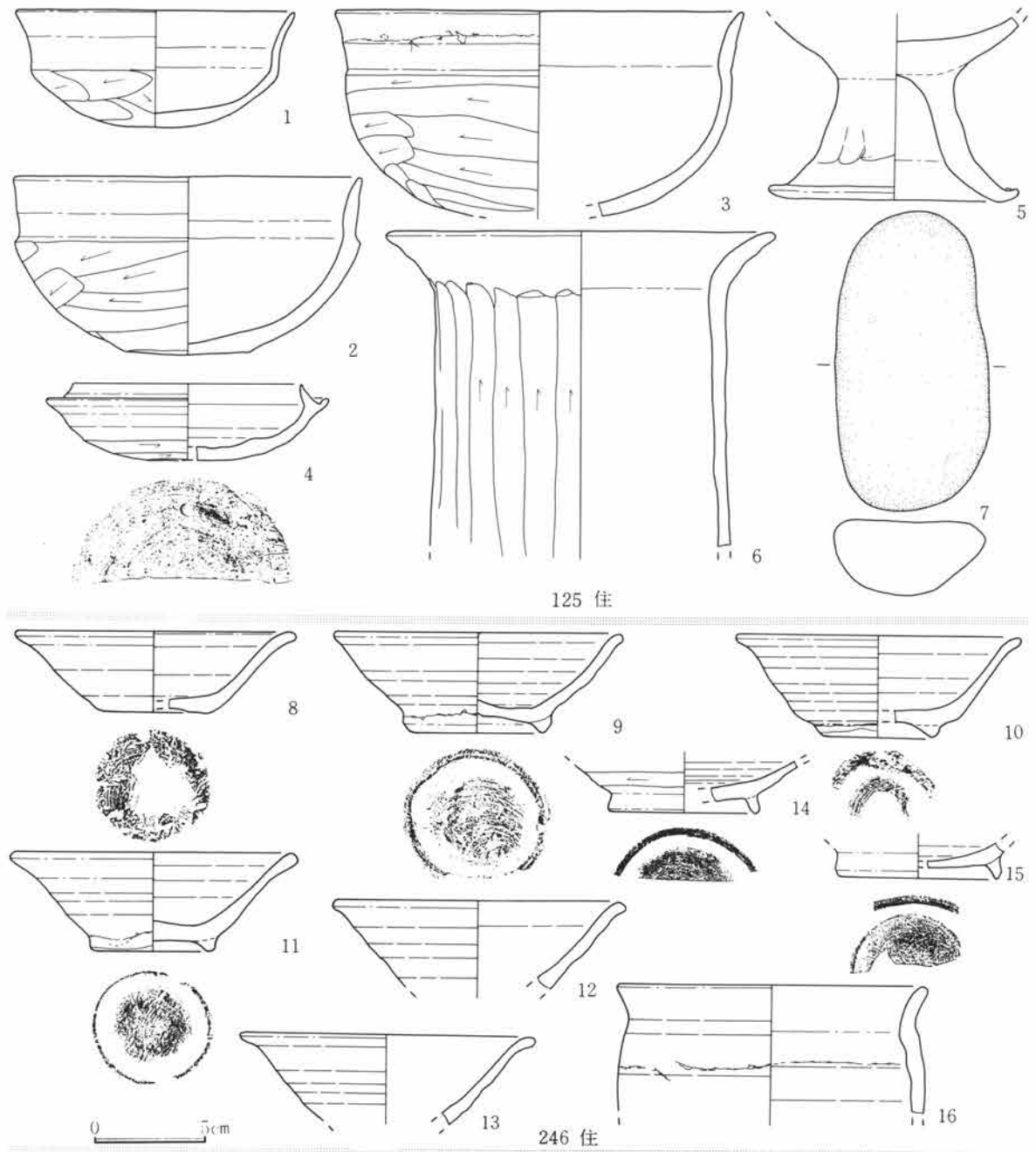
1. 暗褐色土 CPを多量に、焼土粒を少量含む。住居跡覆土。
2. 暗褐色土 CPは1層より少量で、焼土ブロックと灰を多量に含む。
3. 暗褐色土 CP・焼土粒・炭化物を少量含む。
4. 暗褐色土 CPと焼土粒を多量に含む。
5. 暗褐色土 CP・焼土ブロックを含む。
6. 暗褐色土 CP・焼土粒・炭化物を含む。

第293図 I区第125・246号住居跡実測図

第2節 検出された遺構・遺物

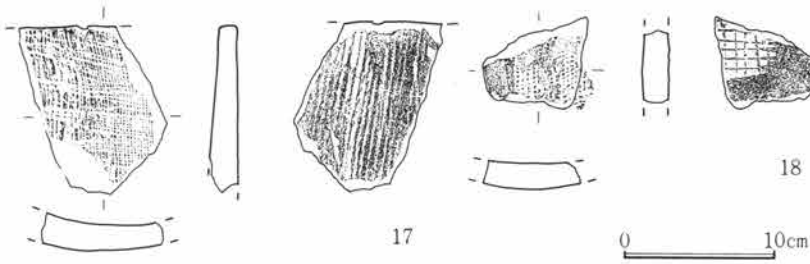
(所見) 第125号住居跡は第81・246号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や出土遺物の比較から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。北側は第246号住居跡によって乱されており、壁や床面を捉えることはできなかった。南東壁に関しては、南コーナー近くに別なコーナー部状のものが検出されており、他の遺構が更に重複している可能性があるが、平面的には確認することはできなかった。残存した床面ではピットを3本検出したが、柱穴であるか判然としなかった。カマドは北東壁の中央付近に痕跡が残存しており、主軸方位は東-22°-北である。袖等は残存していないが、形態的に判断して両袖の張り出す凸字形を呈するものであろう。

第246号住居跡は平面プランはほとんど検出できず、わずかにカマドと貯蔵穴を調査したものである。貯蔵穴は南東コーナー部に当たると思われ、約87×38cm、深さ約14cmの長楕円形を呈している。カマドは東壁の



第294図 I区第125・246号住居跡出土遺物実測図(1)

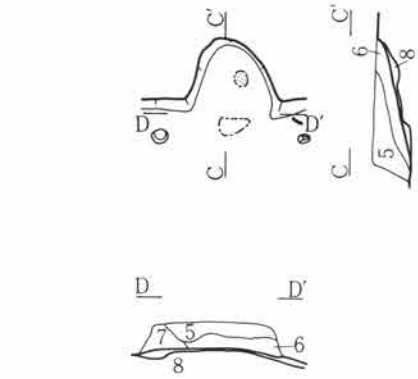
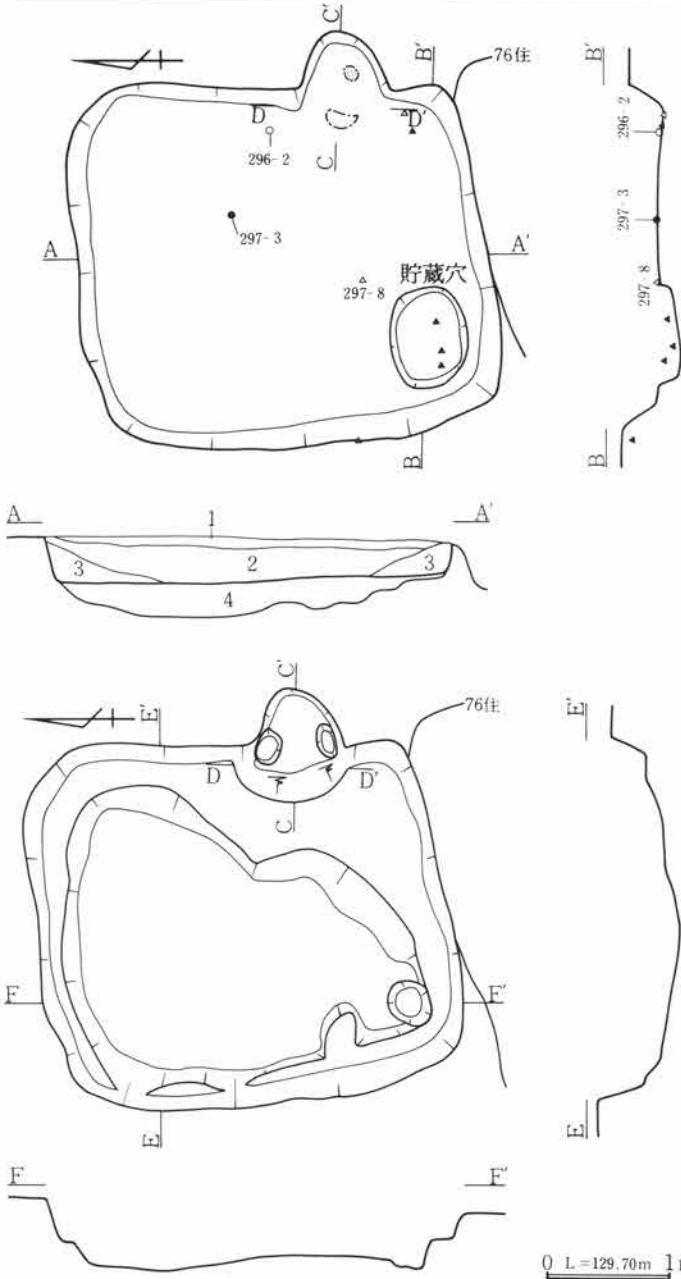
第2節 検出された遺構・遺物



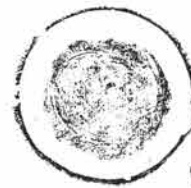
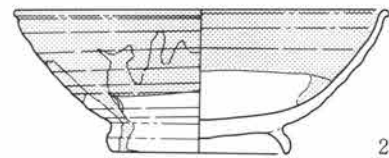
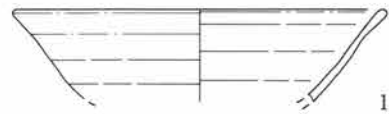
第295図 I区第246号住居跡出土遺物実測図(2)

南寄りに設置されており、平面形は砲弾状を呈している。主軸方位は東-0°-北であり、残存部の規模は全長約66cm、燃烧部幅約65cmである。燃烧部から貯蔵穴上面にかけては灰面が広がっていた。

遺構名称	I区第126号住居跡	位置	3~5-I-64・65グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	2.85m×3.25m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約25cm程

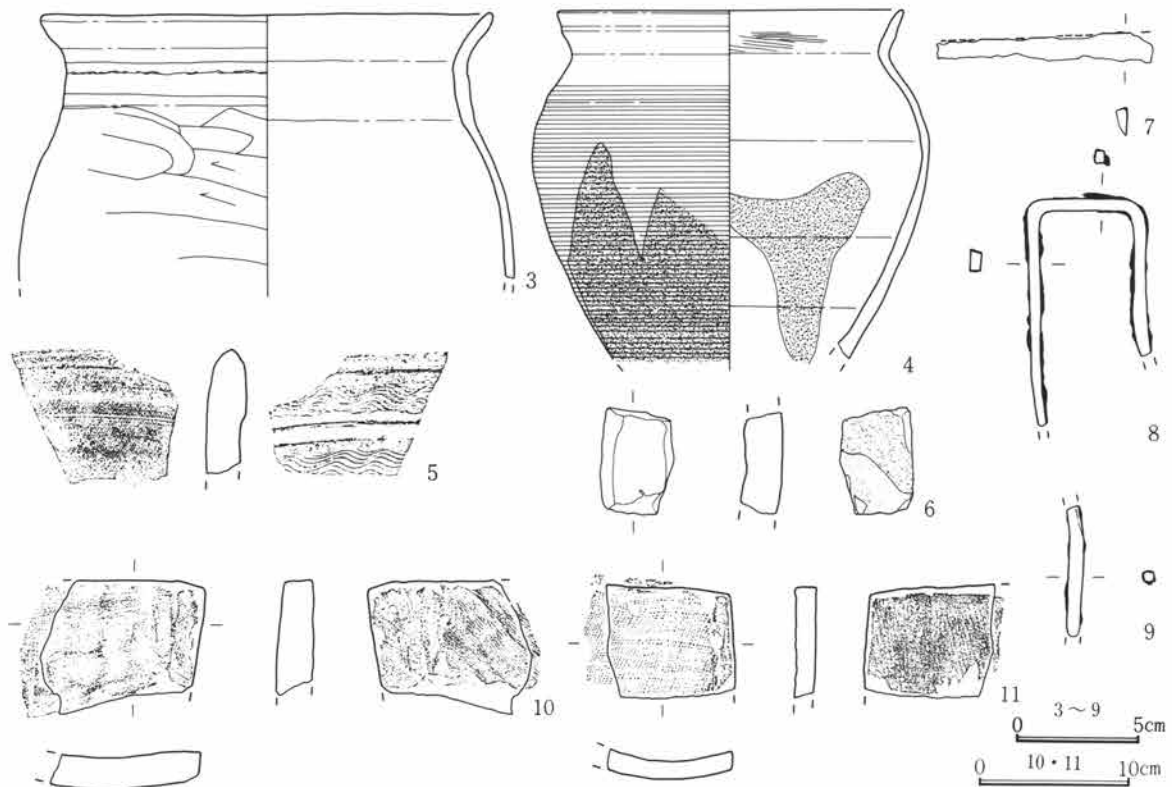


1. 暗褐色土 VI層土ブロックを微量含み、粘性が弱い。
2. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含み、粘性は1層同様に弱い。
3. 暗褐色土 VI層土粒を多量に、ブロックを少量含む。
4. 暗褐色土 VII層土粒とブロックを多量に含む。
5. 暗褐色土 3層に類似する。
6. 暗褐色土 VI層土粒とブロックは少量で、炭化物を微量含む。
7. 暗褐色土 5・6層よりもVI層土ブロックを多量に含む。
8. 暗褐色土 灰と炭化物を少量含み、VI層土粒を多量に含む。



第296図 I区第126号住居跡・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第297図 I区第126号住居跡出土遺物実測図(2)

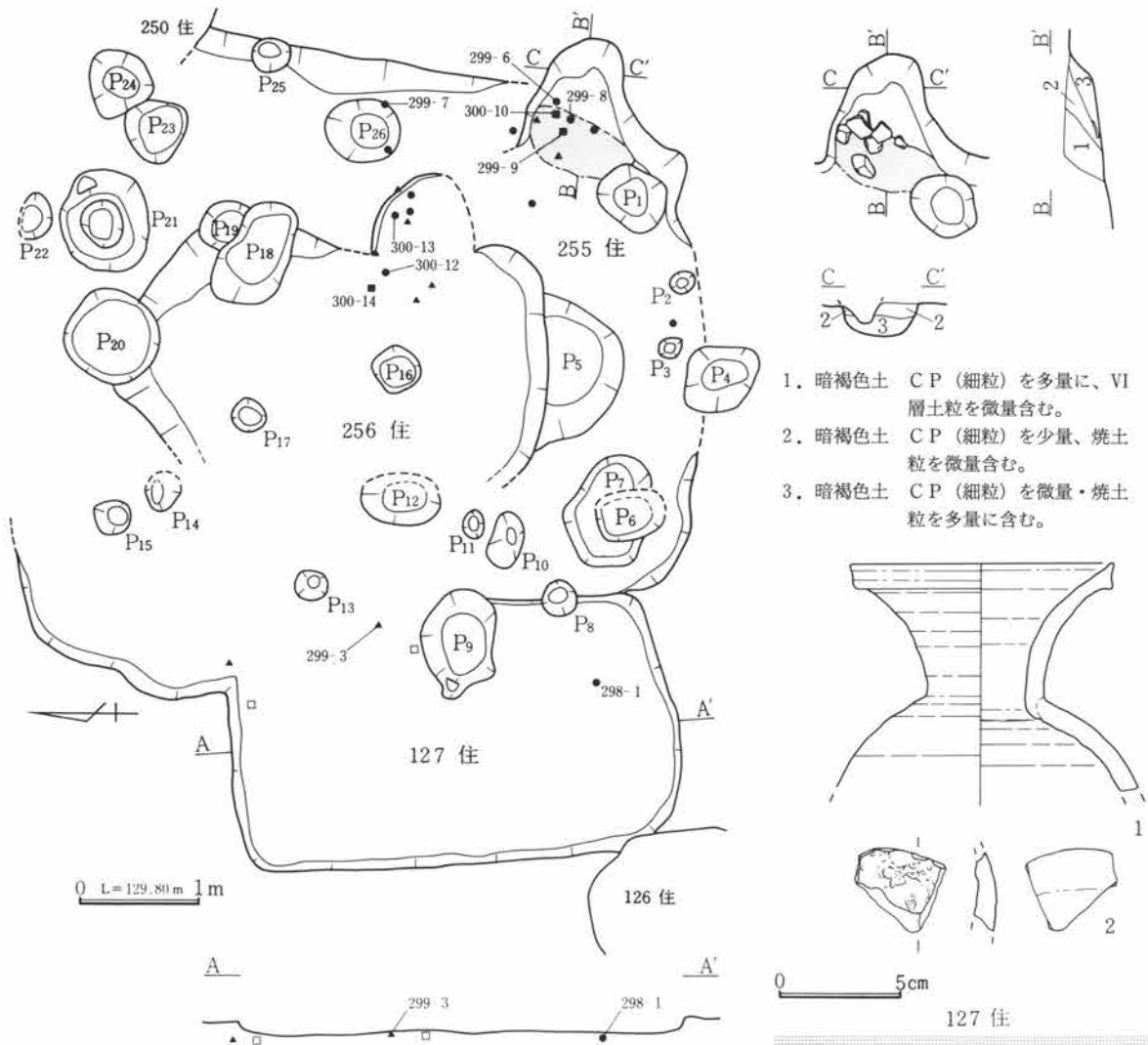
(所見) 当住居跡は第76号住居跡と重複しているが、出土遺物の比較等から第76号住居跡→当住居跡と考えられる。平面プランの確認はVI層土中で行った結果、覆土中にVI層土がブロック状に混入していたことから捉えられた。壁は全体に傾斜が緩い上に乱れており、崩落している可能性がある。床面は、中央で最大27cm程に及ぶVII層土ブロック主体の貼床が施されていた。この床面の精査で壁溝・柱穴は全く検出されず、わずかに南西コーナー部に貯蔵穴を検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は約80×63cm、深さ約10cmである。掘り方の調査では、住居北西側が特に深く掘り下げられていたことが確認された。

カマドは東壁の南寄りに設置されており、砲弾状の平面形を有し、主軸方位は東-0°-北である。残存部の規模は、全長約66cm、燃烧部幅約60cmで、燃烧部奥にわずかに焼土面が残存していた。袖は残存していなかったが、掘り方の調査で壁との接合部に対の小ピットが検出されたことから、この位置に構築材が据えられていたものと考えられる。この袖据え方間のやや屋内側床面には灰面が検出されており、この位置が焚口に当たるものと思われる。

遺構名称	I区第127号住居跡	位置	4～6-I-63～64グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×3.62m	主軸方位	東-15度-北	残存深度	約12cm程

遺構名称	I区第255号住居跡	位置	4～6-I-60～63グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×—m	主軸方位	東-13度-南	残存深度	約23cm程

遺構名称	I区第256号住居跡	位置	5・6-I-61～63グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×—m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約10cm程

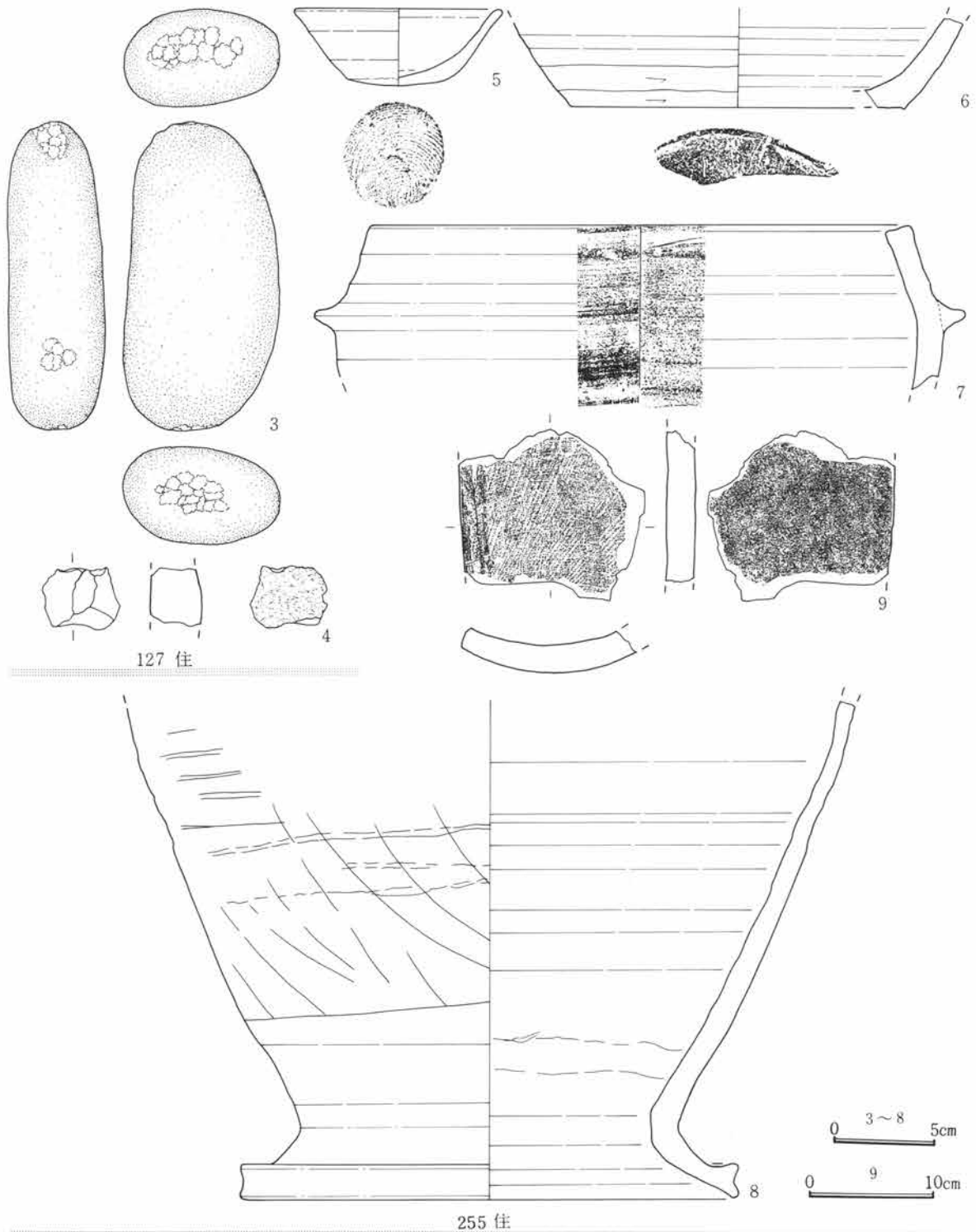


第298図 I区第127・255・256号住居跡・出土遺物実測図(1)

(所見) 第127・255・256号住居跡は重複しているが、第255・256号住居跡の大半が南北農道下にかかり、二次調査で全体を明らかにしたため、新旧関係が明確に捉えられていない。それぞれの出土遺物の比較を元に判断すると、第127号住居跡→第255号住居跡→第256号住居跡という関係が想定できる。

第127号住居跡は、重複によって東壁を失っており、カマドの痕跡も検出されていない。また、床面の精査によって壁溝・柱穴等も検出されていない。したがって、当遺構が住居跡であるという要素は少ないのであるが、平面プランがしっかりとしていることから住居跡として捉えた。出土遺物の中には、あまり一般的な住居からは出土しない埴塙(第298図2)と鞆の羽口(第299図4)の破片が含まれており、炉跡はないものの工場の可能性もある。

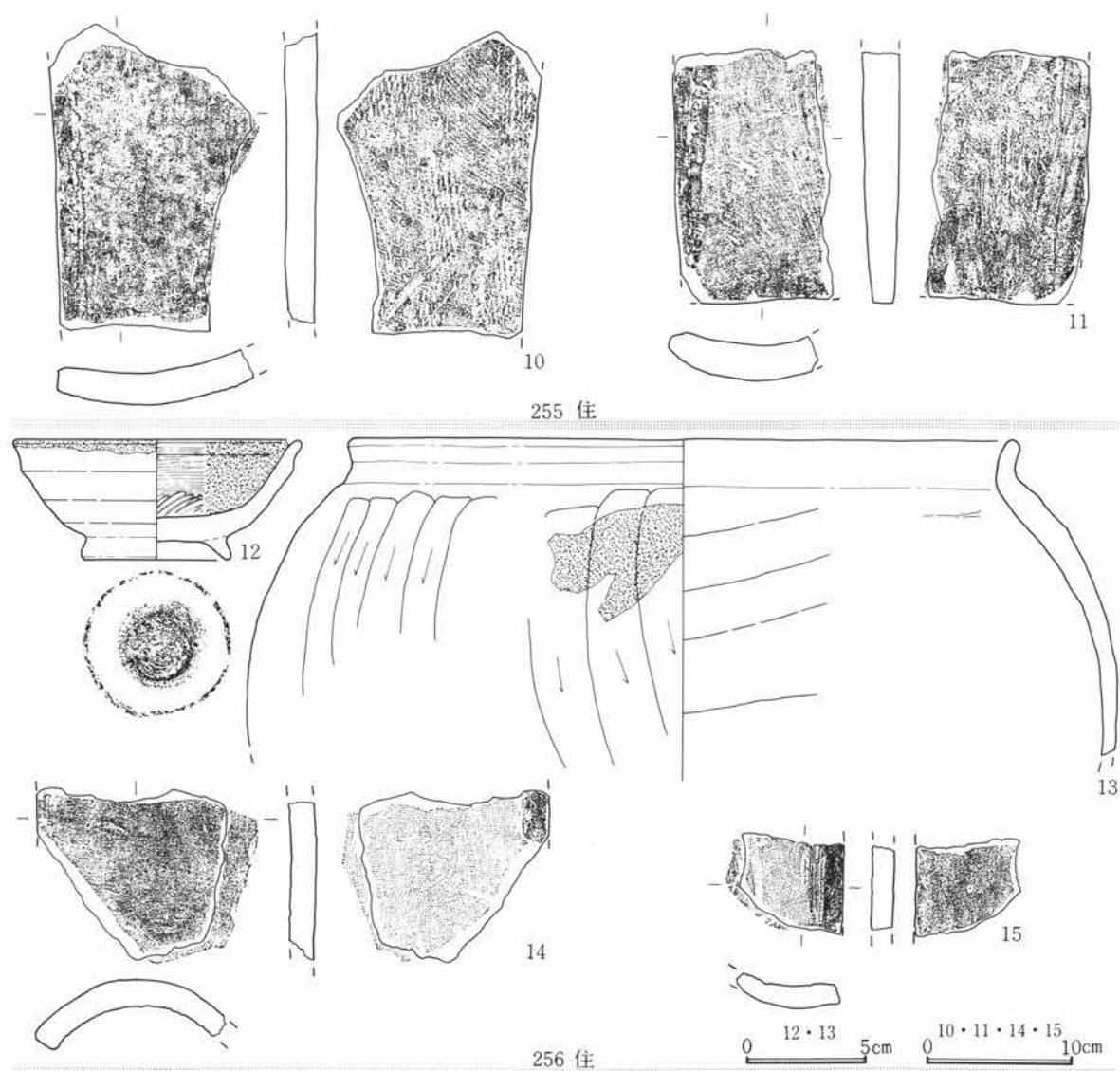
第255号住居跡は、南北農道下部分のプランは明瞭ではなく、先行調査した部分で検出した北西及び南西コーナーによって全体形が把握できるものである。床面は、確認面を下げすぎたため検出することができず、掘り方の段階を検出した。この掘り方の調査では大小様々なピットを確認しているが、配置・規模等に規則性の捉えられるものは皆無であり、柱穴を特定することはできなかった。カマドは東壁の南端に位置しているが、コーナー部との間には貯蔵穴とも考えられる楕円形ピットのP₁(約55×50cm、深さ約21cm)が検出されており、いわゆるコーナーカマドではない。平面形は砲弾状を呈すると考えられ、袖は屋内に張り出さな



第299図 I区第127・255・256号住居跡出土遺物実測図(2)

いタイプである。主軸方位は東 -14° 南であり、残存部の規模は全長約80cm、燃焼部幅約80cmである。燃焼部からP1にかけては灰面が広がっており、灰が掻き出されているものと思われる。

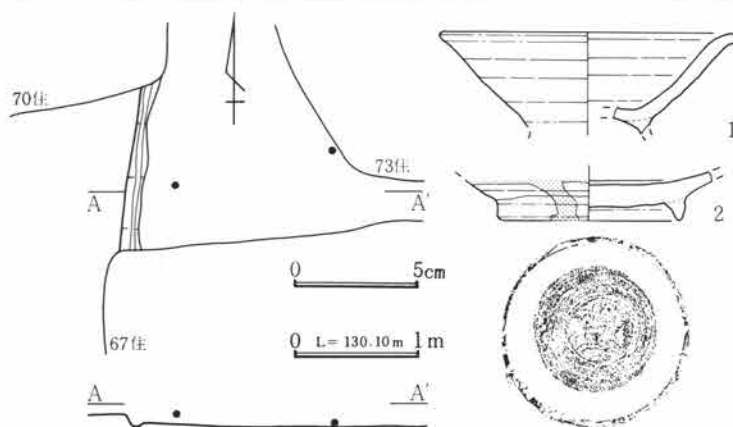
第256号住居跡は第255号住居跡の中央に掘り込まれていた。しかし、遺構の残存状態は悪く、平面プランも完全には捉えられていない。カマドは東壁の南寄りに設置されており、平面形は馬蹄形を呈するものと思われる、主軸方位は東 -0° 北である。残存部の規模は全長約70cmである。



第300図 I区第127・255・256号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第128号住居跡	位置	9・10-I-78・79グリッド内				
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約5cm程

(所見) 当住居跡は第67・70・73号住居跡等と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。検出したのは西壁のごく一部で、下幅約4～5cm、深さ4cm程の壁溝が認められる。床面に貼床の痕跡はなく、VI層土を直接床面としていた。掲載した遺物は覆土中からの出土であり、これらの遺物が当住居跡に伴うとすれば、前述の新旧関係との間に齟齬が出る。



第301図 I区第128号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第129号住居跡	位置	18~21-I-70~74グリッド内					
平面形態	隅丸方形?	規模	4.90m×	—m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	—

遺構名称	I区第130号住居跡	位置	18~21-I-70~74グリッド内					
平面形態	隅丸方形	規模	(5.40)m×	—m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約12cm程

遺構名称	I区第132号住居跡	位置	18~20-I-74・75グリッド内					
平面形態	—	規模	4.75m×	—m	主軸方位	東-16度-北	残存深度	約40cm程

遺構名称	I区第133号住居跡	位置	18~21-I-70~74グリッド内					
平面形態	—	規模	—m×	—m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約29cm程

遺構名称	I区第134号住居跡	位置	18~21-I-70~74グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	7.70m×7.40m	主軸方位	東-6度-北	残存深度	約23cm程

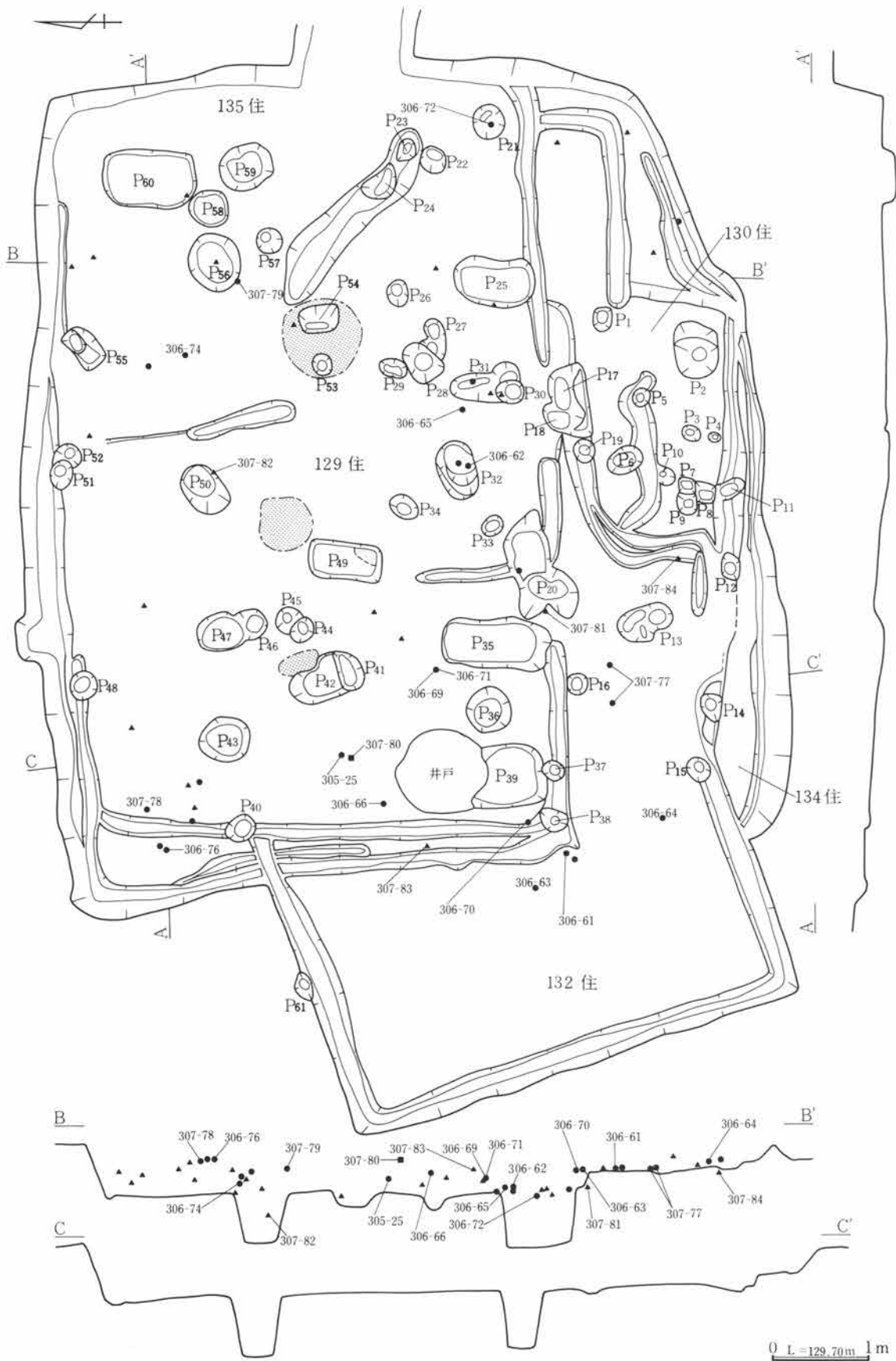
遺構名称	I区第135号住居跡	位置	18~21-I-70~74グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	(5.23)m×5.05m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約50cm程

(所見) 当住居群は、第131号住居跡と重複している他、中世以降の第6号溝状遺構によって中央部を東西に削平されている。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、各住居をこの段階で分離することはできず、覆土の断面観察をしながら全体を掘り下げた。しかし、最終的には個別住居を完全に捉えることはできず、全体を掘り方段階まで下げた状態で調査を終了した。また、この覆土の掘り下げの段階でカマドだけを検出した住居もあり、複雑な様相を呈している。したがってこれらの住居群の新旧関係については、それぞれに伴う遺物の比較と遺構の最終的残存状態を元に判断すると、第131号住居跡→第134号住居跡→第132号住居跡→第135号住居跡→第129号住居跡→第133号住居跡→第130号住居跡という関係が想定できる。

第129号住居跡は、P₃₅・P₃₇・P₃₈・P₄₀・P₄₈をつなぐように検出した壁溝によって、北・西・南それぞれの範囲を捉えることができるが、東側は判然としない。仮にP₅₃・P₅₄付近の焼土面が当住居跡のカマドの痕跡であるとする、東壁はこの辺りに存在したことになる。当住居跡の柱穴は、規模や配置からP₃₂(約46×40cm、深さ約49cm)・P₃₆(径約40cm、深さ約58cm)・P₄₃(径約45cm、深さ約62cm)・P₅₀(約54×37cm、深さ約46cm)の4本と考えられ、柱穴間距離はP₃₂~P₃₆間約2.5m、P₃₆~P₄₃間約2.7m、P₄₃~P₅₀間約2.6m、P₅₀~P₃₂間約2.6mである。貯蔵穴は該当する掘り込みがなく不明である。

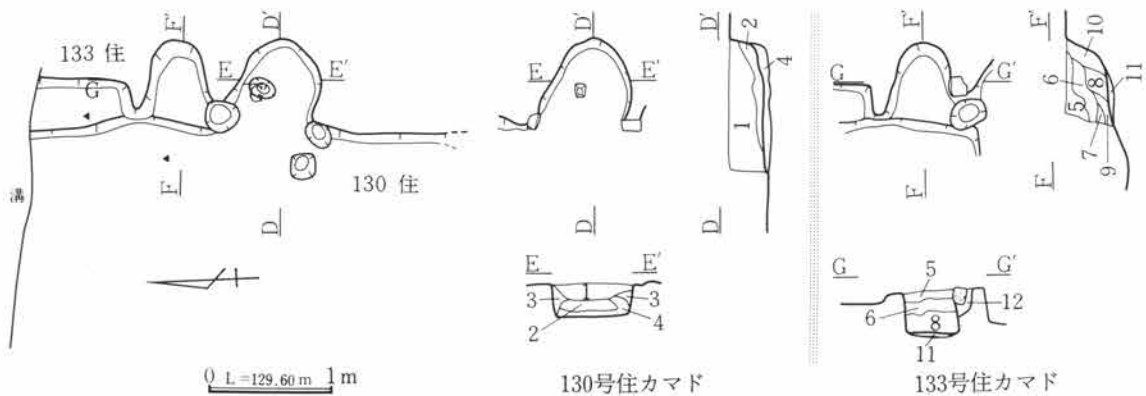
第130号住居跡は、カマドと南東コーナー付近だけを検出したもので、西側については判然としない。カマドは両袖共に屋内に張り出さない馬蹄形の平面を有し、残存部の規模は全長約70cm、燃烧部幅約56cmで、主軸方位は東-13°-北である。壁との接合部に袖構築材の残存はみられなかったが、円形の小ピットが検出されており、何らかの構築材が据えられていたことは確かである。また、燃烧部中央やや北寄りの位置に支脚が残存していた。壁溝・柱穴は不明であるが、残存した南東コーナー部に位置するP₂(径約45cm、深さ約11cm)が位置関係から貯蔵穴と判断される。

第132号住居跡は、西側部分だけを明確に検出したものであるが、残存部分に検出した下幅約6~20cm、深



第302図 I区第129・130・132~135号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



130号住

1. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量含む。
2. 赤褐色土 焼土粒と焼土ブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土 1層に類似するが、1層よりも焼土粒の含有量が多い。
4. 黒褐色土 焼土粒は微量で、灰を多量に含む。

133号住

5. 暗褐色土 C Pと焼土粒を少量含む。

6. 赤褐色土 焼土ブロックを主体とした暗褐色土との混土層。(天井の崩落?)

7. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・灰を少量含む。
8. 暗褐色土 灰を主体に、焼土粒・炭化物を含む。
9. 赤褐色土 焼土粒を多量に含む。6層よりもブロックは少ない。
10. 暗褐色土 焼土大粒と炭化物を少量含む。
11. 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、炭化物を微量含む。
12. 暗褐色土 C Pを少量含み、しまりが強い。

第303図 I区第130・133号住居跡実測図

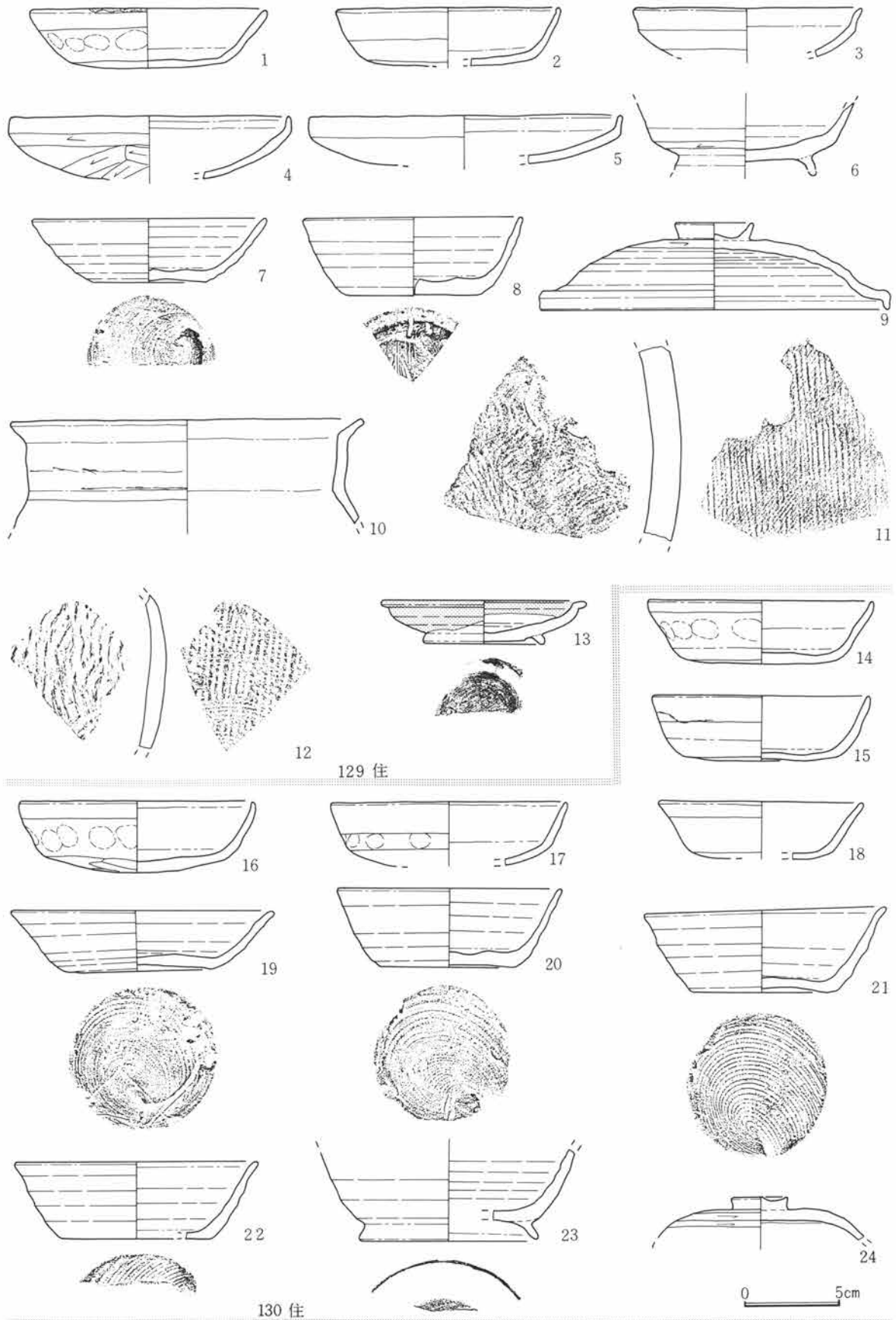
さ5cm程の壁溝は、P₁₅・P₁₄・P₁₂を結ぶラインで南東方向に張り出していた可能性が強い。つまり、当住居跡は第83号住居跡のように壁の中央部が強く張り出したタイプの住居と考えられる。当住居跡は西側の残存部には床面を捉えたが、貼床はみられず全面が直にVII層土を床面としていた。また、この床面の精査によって柱穴等は検出されておらず、当住居跡には当初から掘削されていなかったものと考えられる。

第133号住居跡は、第130号住居跡同様に覆土の掘り下げ段階にカマドのみを検出したものである。カマドの平面形は袖がわずかに屋内に張り出した砲弾状を呈しており、残存部の規模は全長約65cm、燃焼部幅約40cmで、主軸方位は東-0°-北である。カマドの前面は第130号住居跡との重複によって失われており、袖の構築材の有無等は不明である。また、燃焼部の調査によって支脚は据え方等の痕跡も含めて検出されていない。東壁の一部は検出されているが、北側が第6号溝状遺構によって削平されているため、全体が把握できなかった。

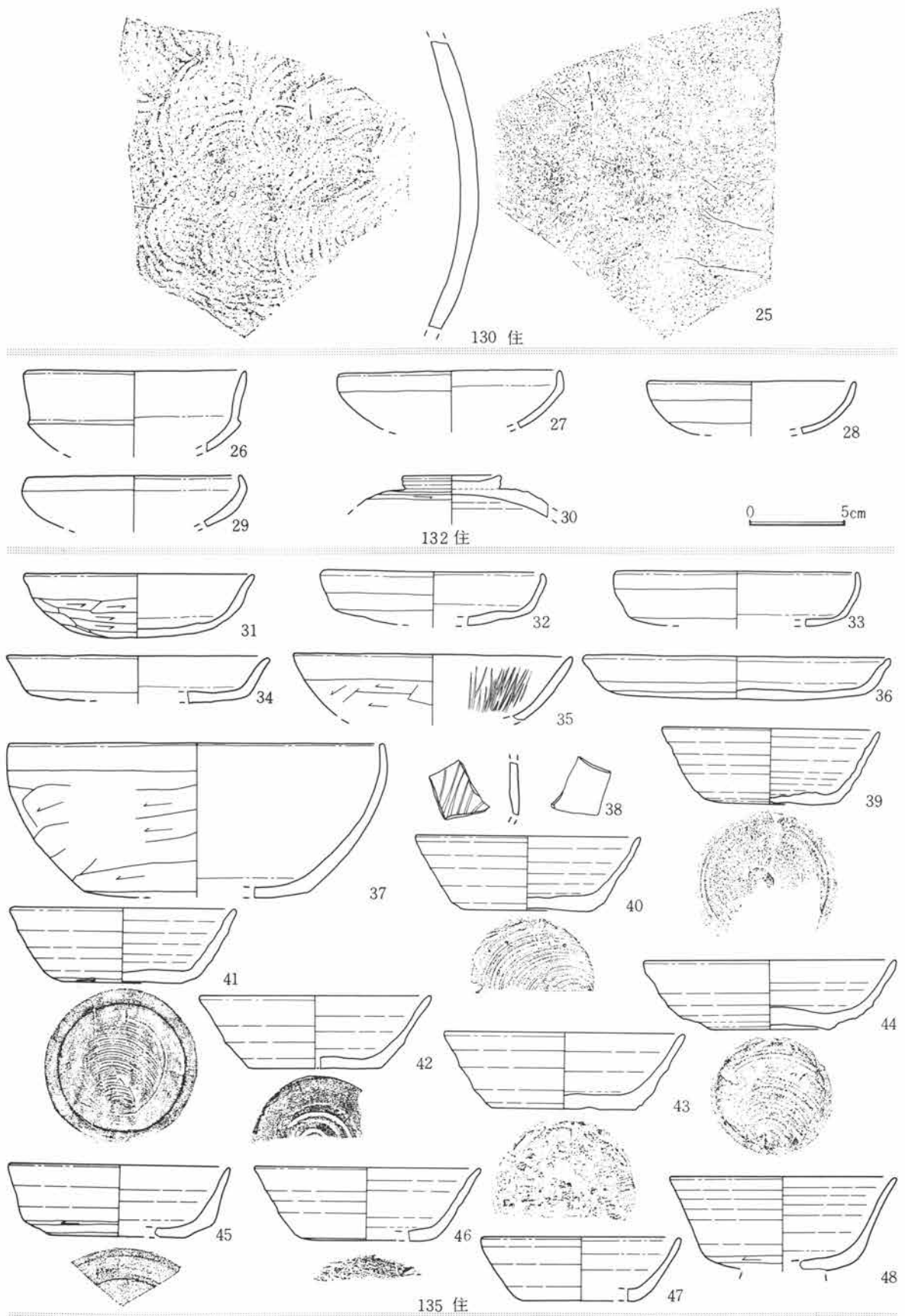
第134号住居跡は、住居群の外郭線から第132号住居跡のラインを除いたものが平面プランと考えられる。したがって南壁にやや張りを有し、西側が広がる不整の台形状を呈している。部分的に壁溝が認められることから本来は全周していたものと思われる。床面は検出することができず、掘り方の面まで下げられている。この面では多数のピットが検出されているが、規模や位置関係からP₂₅(約80×46cm、深さ約57cm)・P₃₅(約111×52cm、深さ約58cm)・P₄₇(径約40cm、深さ約49cm)・P₅₆(径約53cm、深さ約47cm)の4本と考えられ、柱穴間距離はP₂₅～P₃₅間約3.6m、P₃₅～P₄₇間約2.6m、P₄₇～P₅₆間約3.7m、P₅₆～P₂₅間約2.7mである。貯蔵穴は北東コーナー部に検出したP₆₀(約95×56cm、深さ約14cm)が該当するのではないだろうか。また、住居跡外周に沿って検出されているP₁₁・P₁₂・P₁₄・P₁₅・P₃₈・P₄₀・P₄₈・P₅₁・P₅₂・P₅₅等の小ピットは当住居跡に伴う補助柱穴として機能した可能性が強い。カマドは東壁の中央部に位置していたものと考えられるが、第6号溝状遺構との重複によって失われたものと思われる。

第135号住居跡は、第129号住居跡をそのまま東に平行移動させたような位置関係にある住居跡である。東と北の壁は第134号住居跡と共通するものと考えられ、南壁及び西壁はP₂₅に接するように東西方向に延びさらにP₃₃を回るように北に向きを変える壁溝に沿って存在したと思われる。

第2節 検出された遺構・遺物

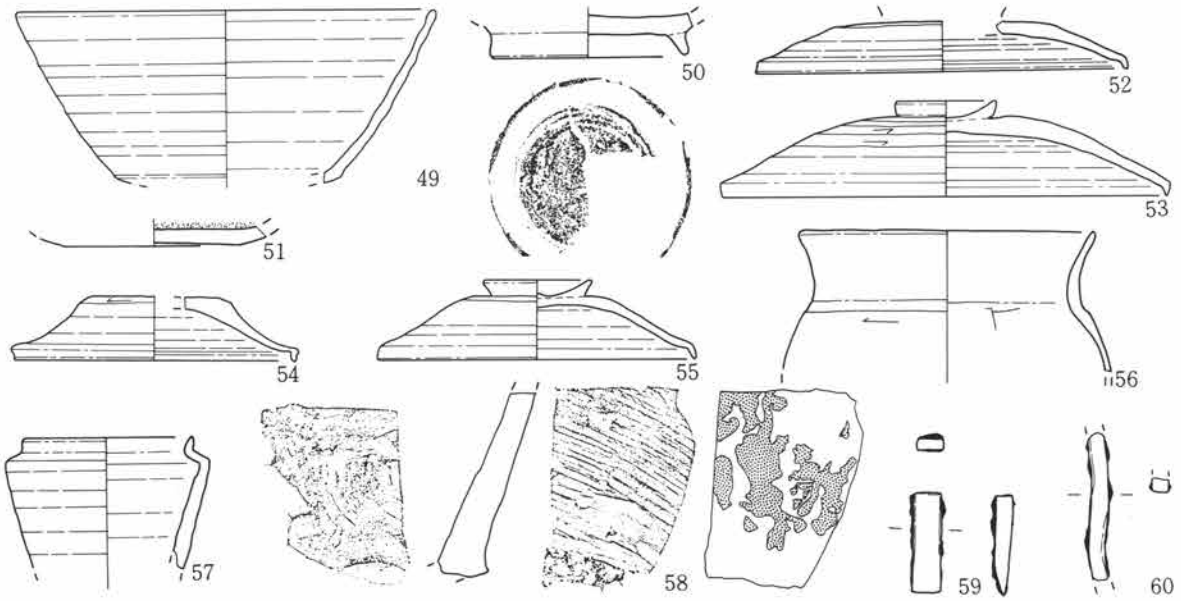


第304図 I区第129・130・132~135号住居跡出土遺物実測図(1)

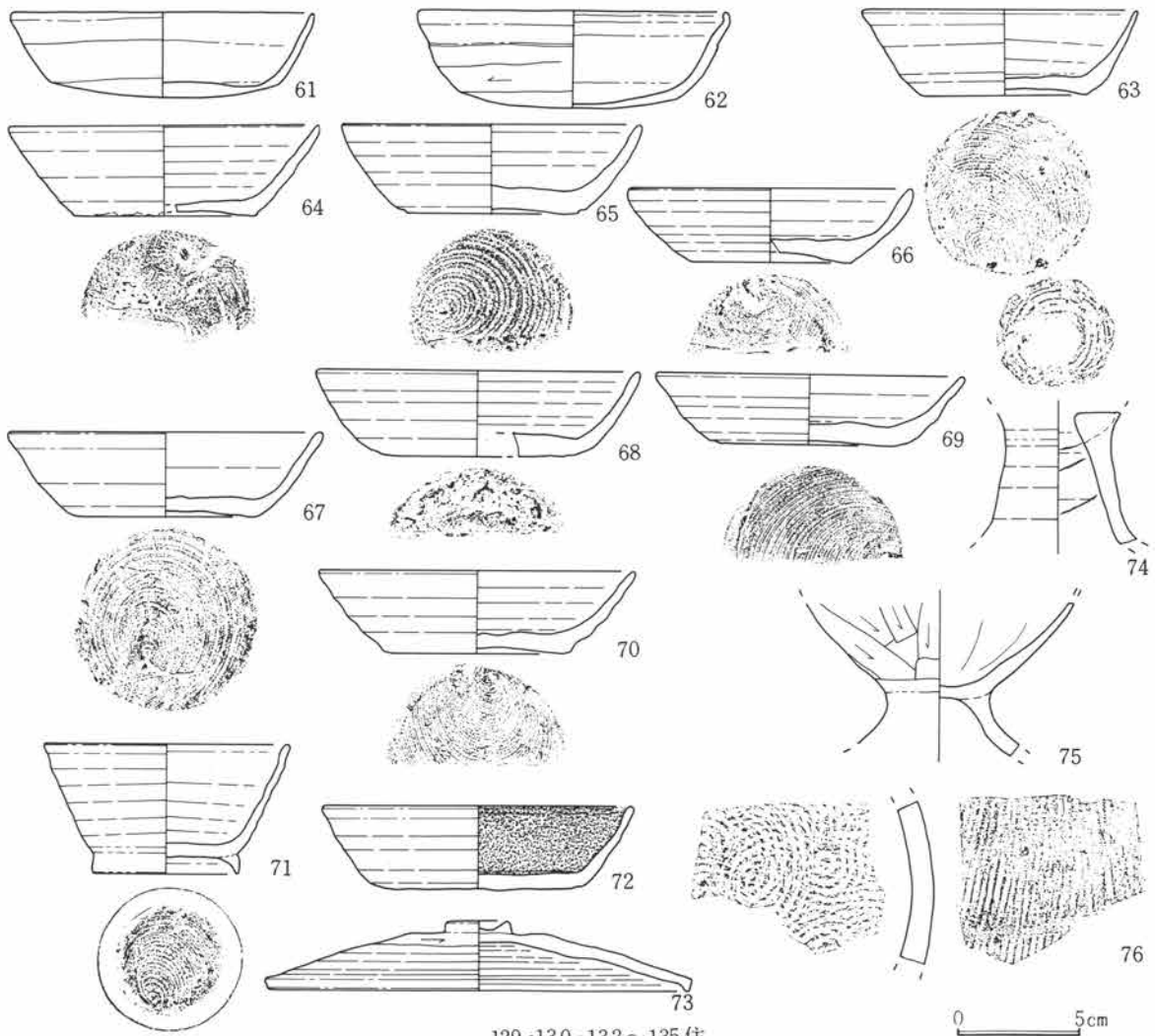


第305図 I区第129・130・132~135号住居跡出土遺物実測図(2)

第2節 検出された遺構・遺物



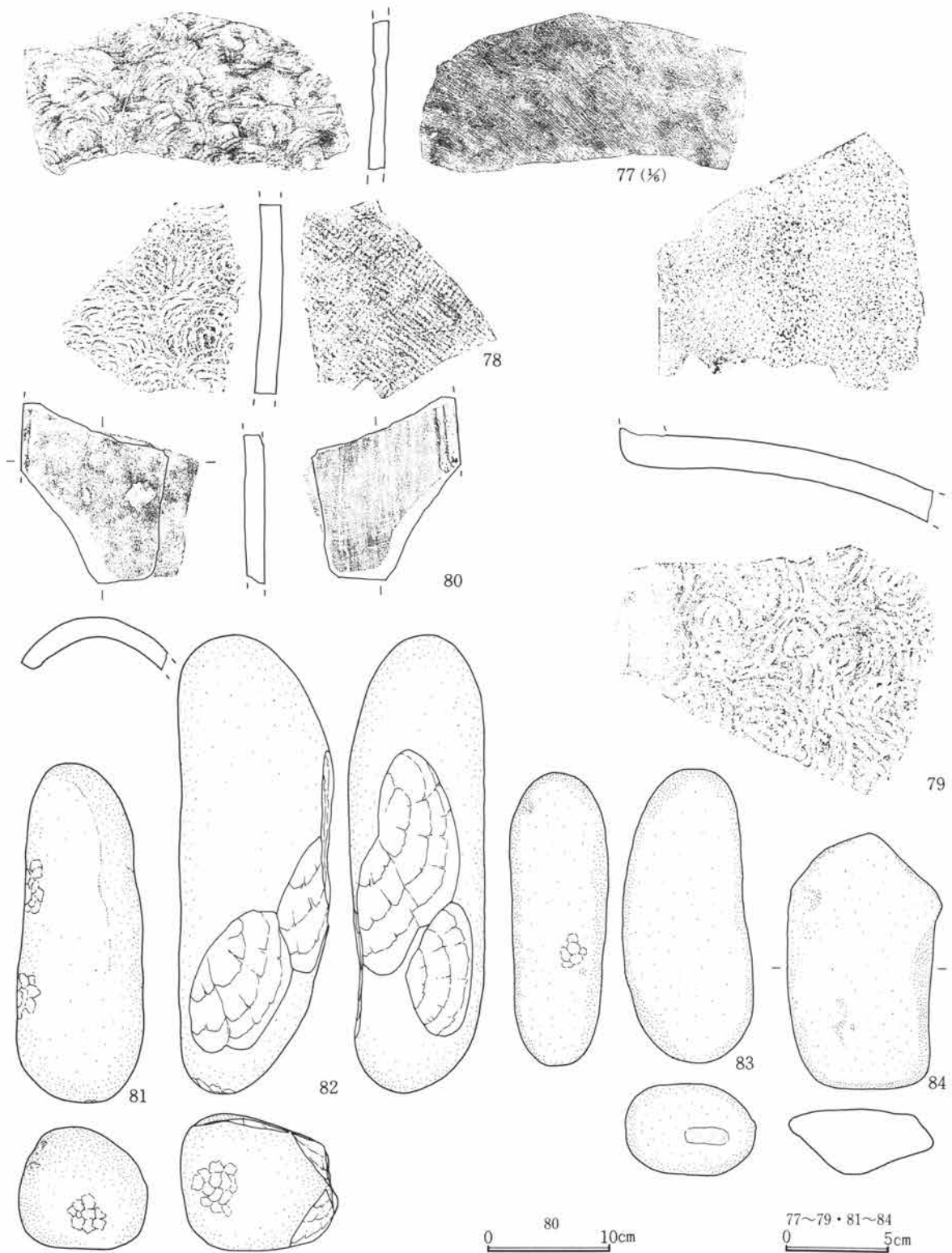
135 住



129・130・132～135 住

第306図 I区第129・130・132～135号住居跡出土遺物実測図(3)

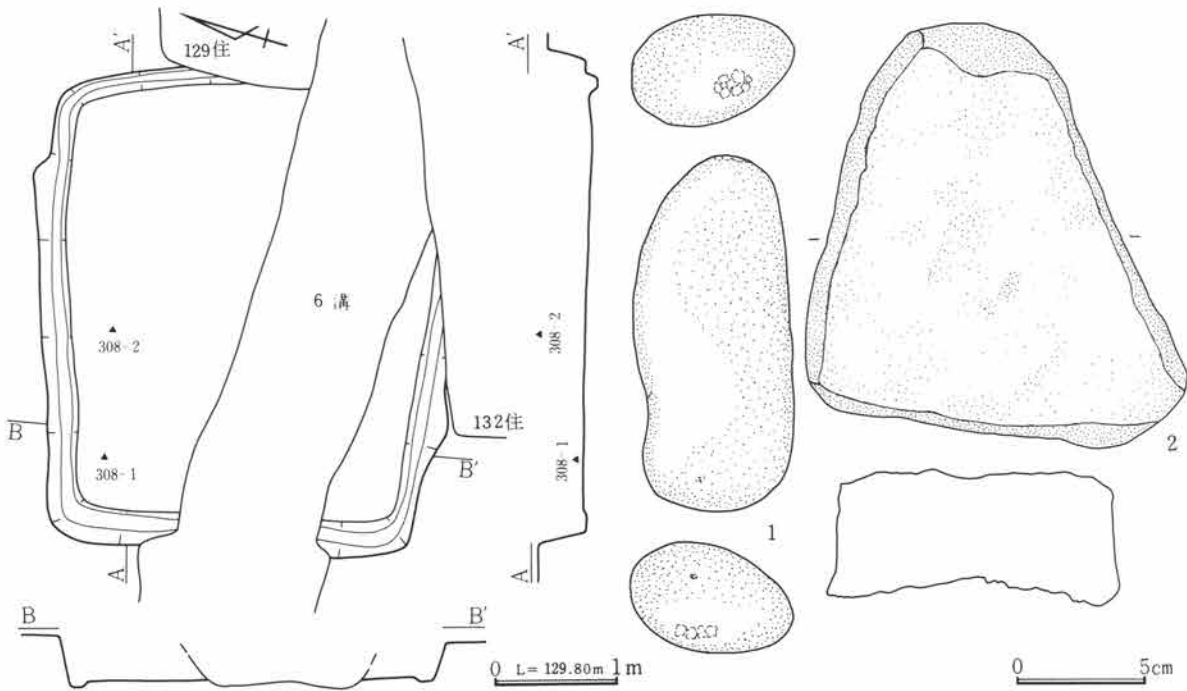
第4章 検出された遺構・遺物



129・130・132~135 住

第307図 I区第129・130・132~135号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	I区第131号住居跡	位置	20~22-I-74~76グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.74m×3.16m	主軸方位	東-10度-北	残存深度	約34cm程

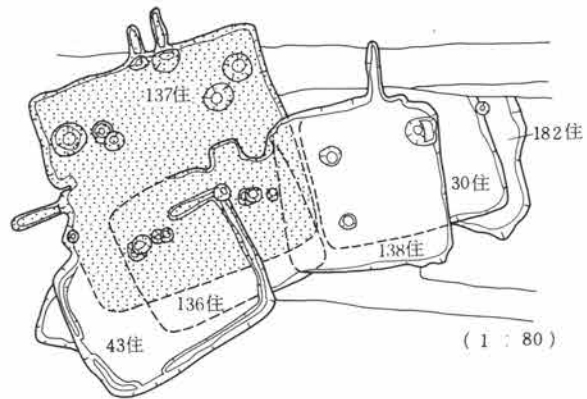


第308図 I区第131号住居跡・出土遺物実測図

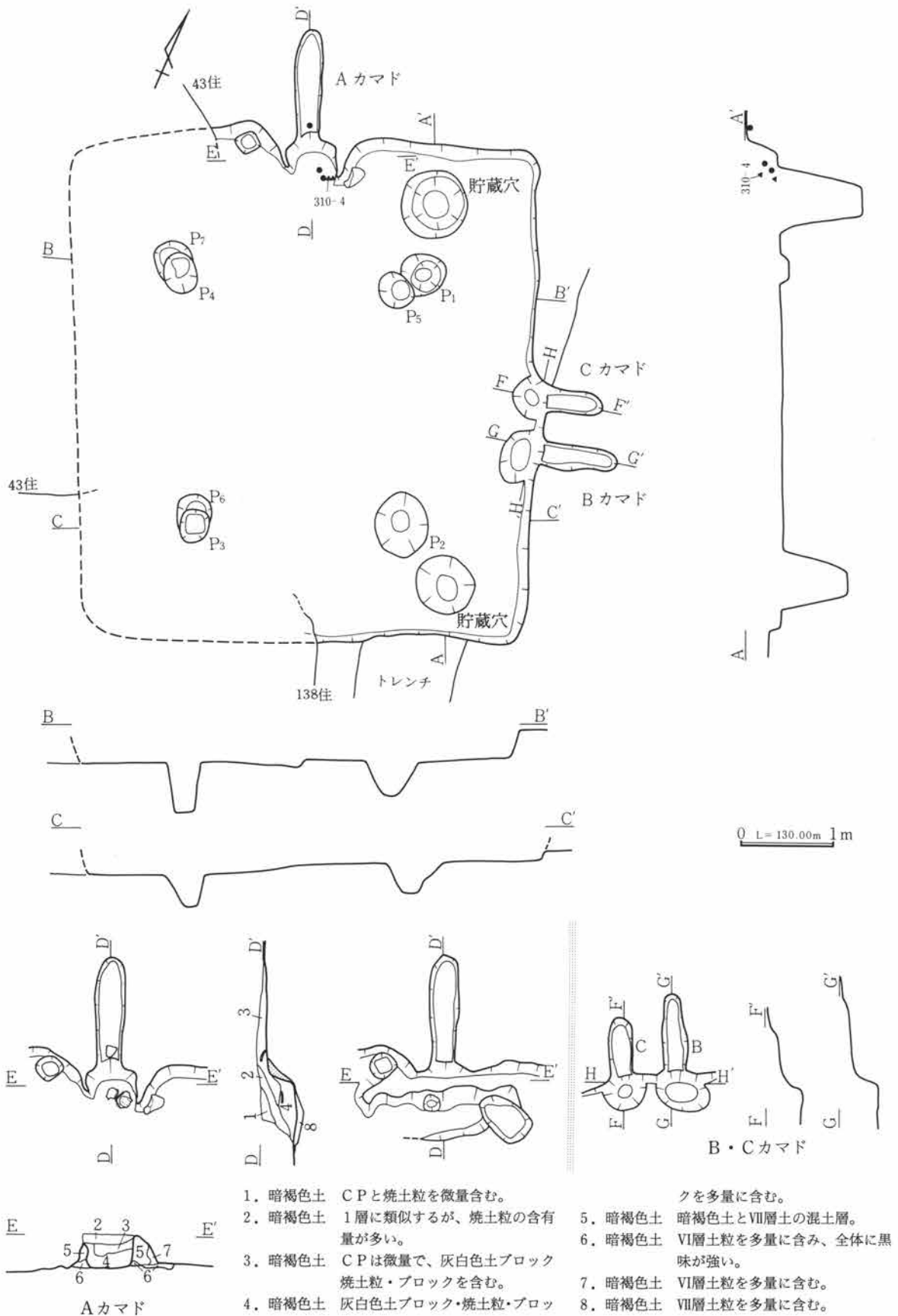
(所見) 当住居跡は第92・94・129・132号住居跡等と重複しているが、遺構の残存状態から当住居跡が最も古い時期のものであることは明らかである。中央部は第6号溝状遺構によって失っており、検出したのは壁・壁溝・床面である。壁溝は下幅約5～12cm、深さは5cm程の規模で全周しているものと考えられる。床面はVII層土を直に床面として使用している。カマドは第129号住居跡との重複によって失ったものであろう。

遺構名称	I区第137号住居跡		位置	35～39—I-72～75グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	5.17m×	—m	主軸方位	北-20度-西	残存深度	約30cm程

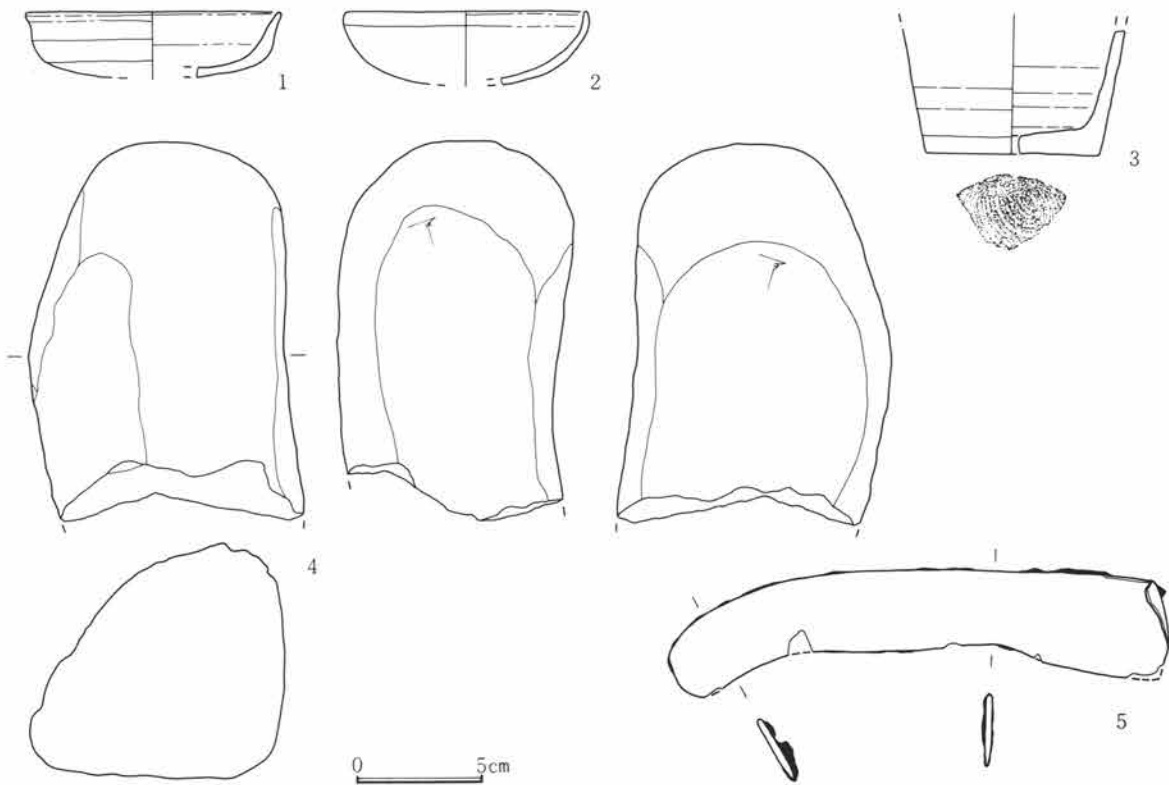
(所見) 当住居跡は第43・136号住居跡等と重複しているが、新旧関係については前述のとおりである。残存した壁には合計三基のカマド(A～C)を検出したが、残存状態からAカマドが最終使用のものであり、両袖が屋内に張り出した凸字形平面を有するタイプと考えられる。残存部の規模は全長約160cm、燃焼部幅約43cm、煙道長約105cm、下幅約24cmで、主軸方位は北-24°-西である。このカマドに伴う柱穴はP₁～P₄(径約35～55cm、深さ約32～66cm、柱穴間距離P₁～P₂間約2.5m、P₂～P₃間約2.2m、P₃～P₄間約2.6m、P₄～P₁間約2.5m)の4本である。また、貯蔵穴は北コーナー部に検出した径約68cm、深さ約87cmの掘り込みである。B・Cカマドは屋内側は壊されており、煙道のみ計測可能である。Bカマド(煙道長約76cm、下幅約17cm)・Cカマド(煙道長約57cm、下幅約16cm)で主軸方位は共に東-16°-北である。柱穴はP₅(径約34cm、深さ約34cm)・P₆(径約36cm、深さ約26cm)・P₇(径約40cm、深さ約18cm)にP₂を加えた配列であり、柱穴間距離に変更はない。この配列に伴う貯蔵穴は東コーナー部の径約61cm、深さ約69cmの掘り込みである。



第4章 検出された遺構・遺物



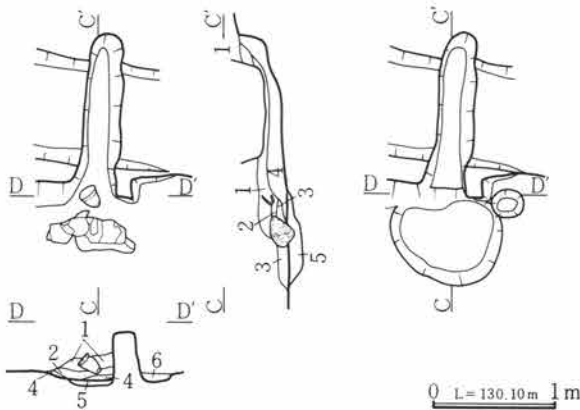
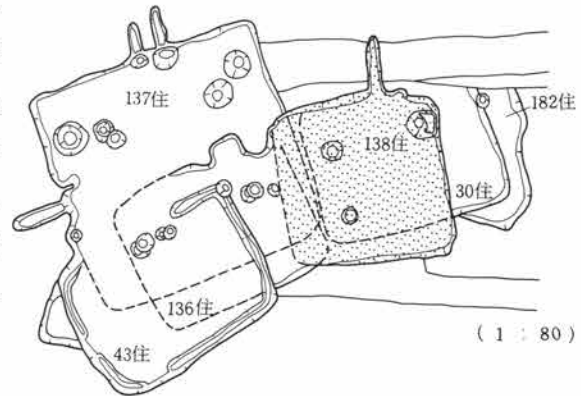
第309図 I区第137号住居跡実測図



第310図 I区第137号住居跡出土遺物実測図

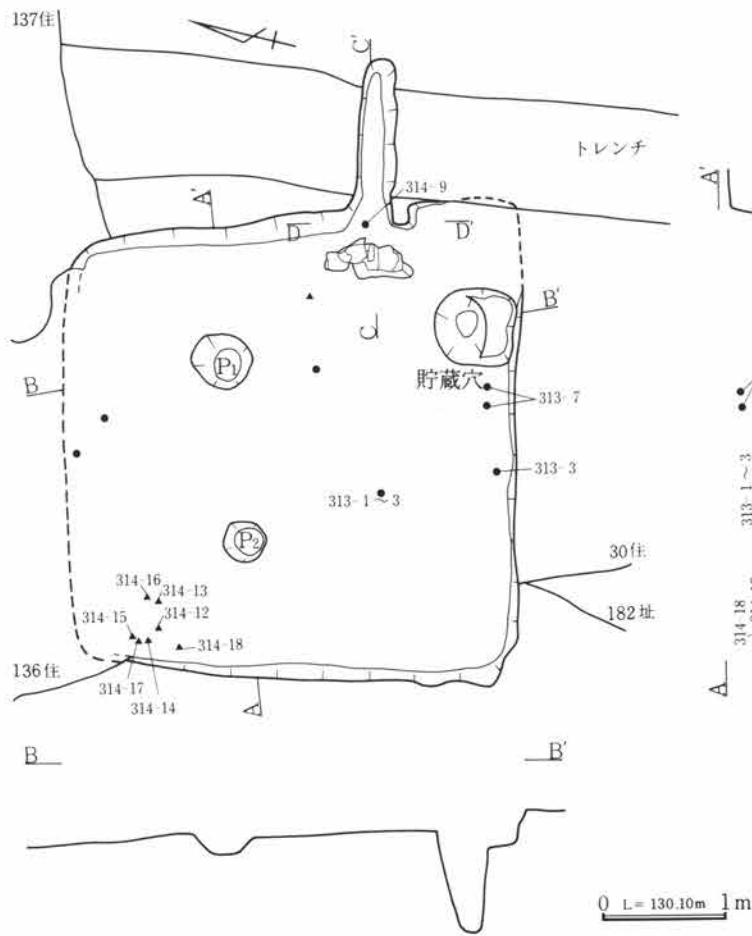
遺構名称	I区第138号住居跡	位置	34~36-I-72~75グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	3.67m×3.57m	主軸方位	東-10度-北	残存深度	約36cm程

(所見) 当住居跡は第30・136・137号住居跡等と重複しているが、新旧関係は前述のとおりである。壁の残存は悪く、壁溝は全く検出されていない。床面はVII層土を直に使用していたものと思われ、この床面の精査によってP₁(径約44cm、深さ約17cm)とP₂(径約30cm、深さ約12cm)と貯蔵穴を検出した。このP₁とP₂は配置に規則性が感じられるが、柱穴であるかは不明である。



1. 暗褐色土 全体にやや明るい暗褐色土層で、焼土粒を少量含み、やや粘性が強い。
2. 暗褐色土 焼土粒と褐色粘土質土粒を含む。
3. 暗褐色土 焼土粒と黒褐色粘質土ブロックを含む灰主体の層。
4. 暗褐色土 炭化物と焼土粒を少量まばらに含む。
5. 暗褐色土 混入物はごく少なく、全体に粗い粒子で構成されている。
6. 暗褐色土 炭化物を多量に含む。

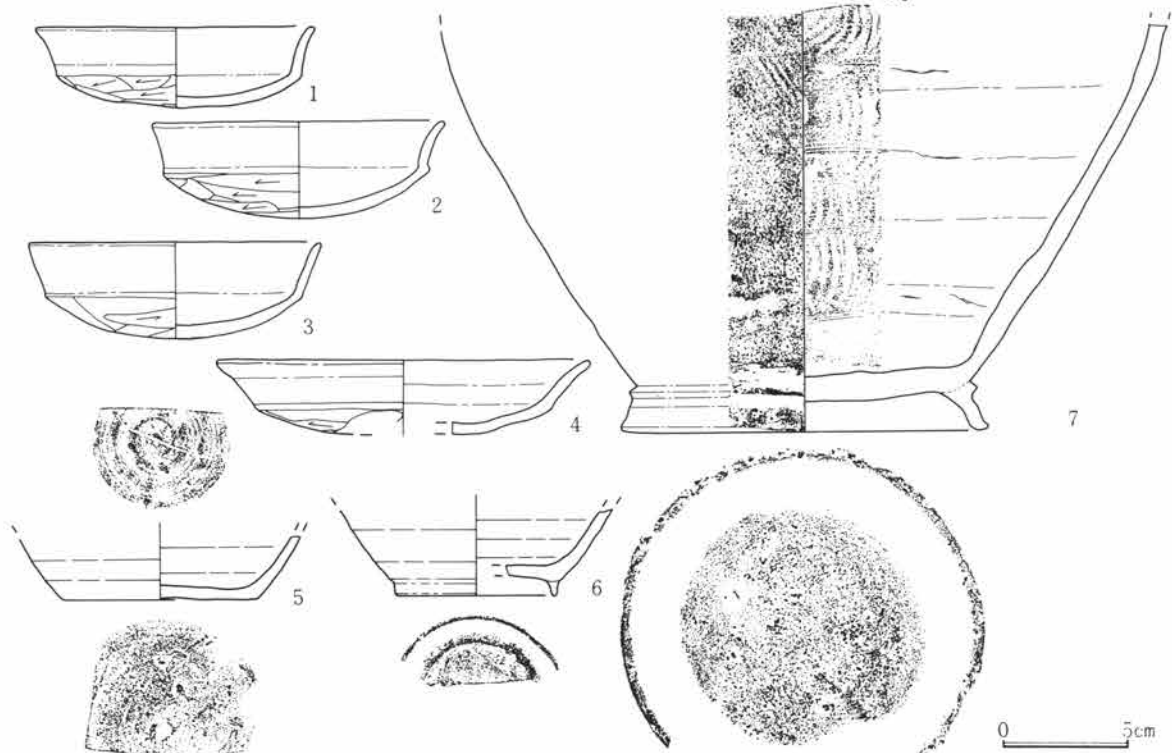
第311図 I区第138号住居跡実測図(1)



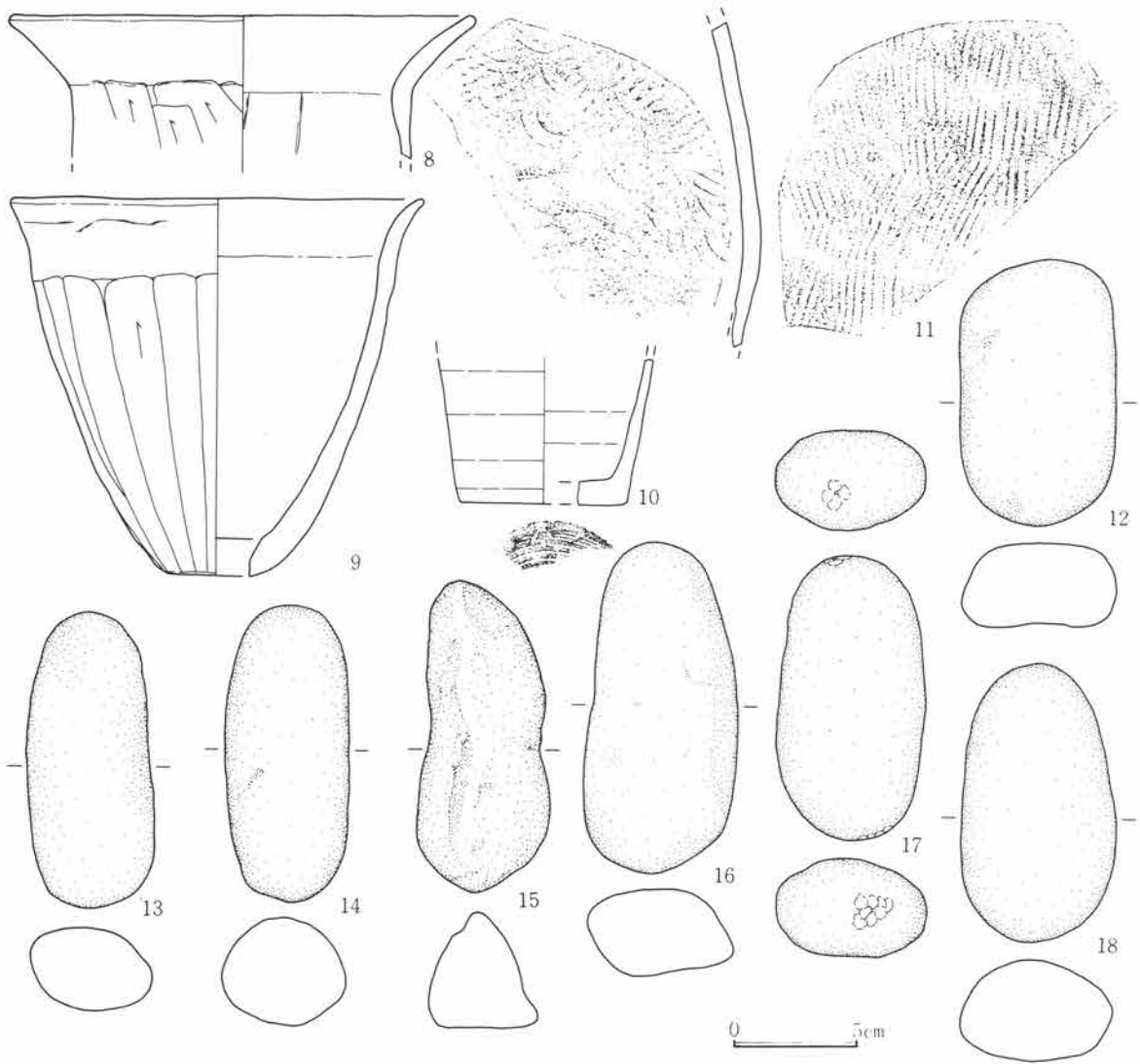
第312図 I区第138号住居跡実測図(2)

貯蔵穴は南壁の東寄りの位置に接して検出したもので、約60×65cm、深さ約14cmの隅丸方形の掘り込みの北寄りの位置を、さらに約58×40cm、深さ約65cmの楕円形に掘り込んでいる。

カマドは東壁の南寄りに設置されており、屋内に角柱状の截石が残存していることから、本来は両袖が張り出す凸字形の平面形を呈するものと考えられる。残存部の規模は煙道長約130cm、下幅約17cmで主軸方位は東-12°-北である。截石は袖の上に載せられて天井を構成していたものであろう。燃焼部に当たる位置からは第314図9の土師器甕が横倒しの状態で出土している他、礫の出土が特徴的である。



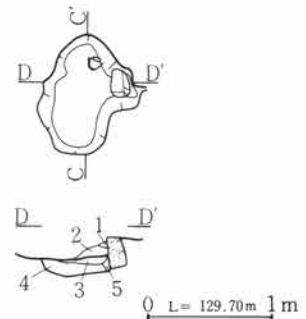
第313図 I区第138号住居跡出土遺物実測図(1)



第314図 I区第138号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第139号住居跡		位置	42~44-I-54・55グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.75m×3.37m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約15cm程

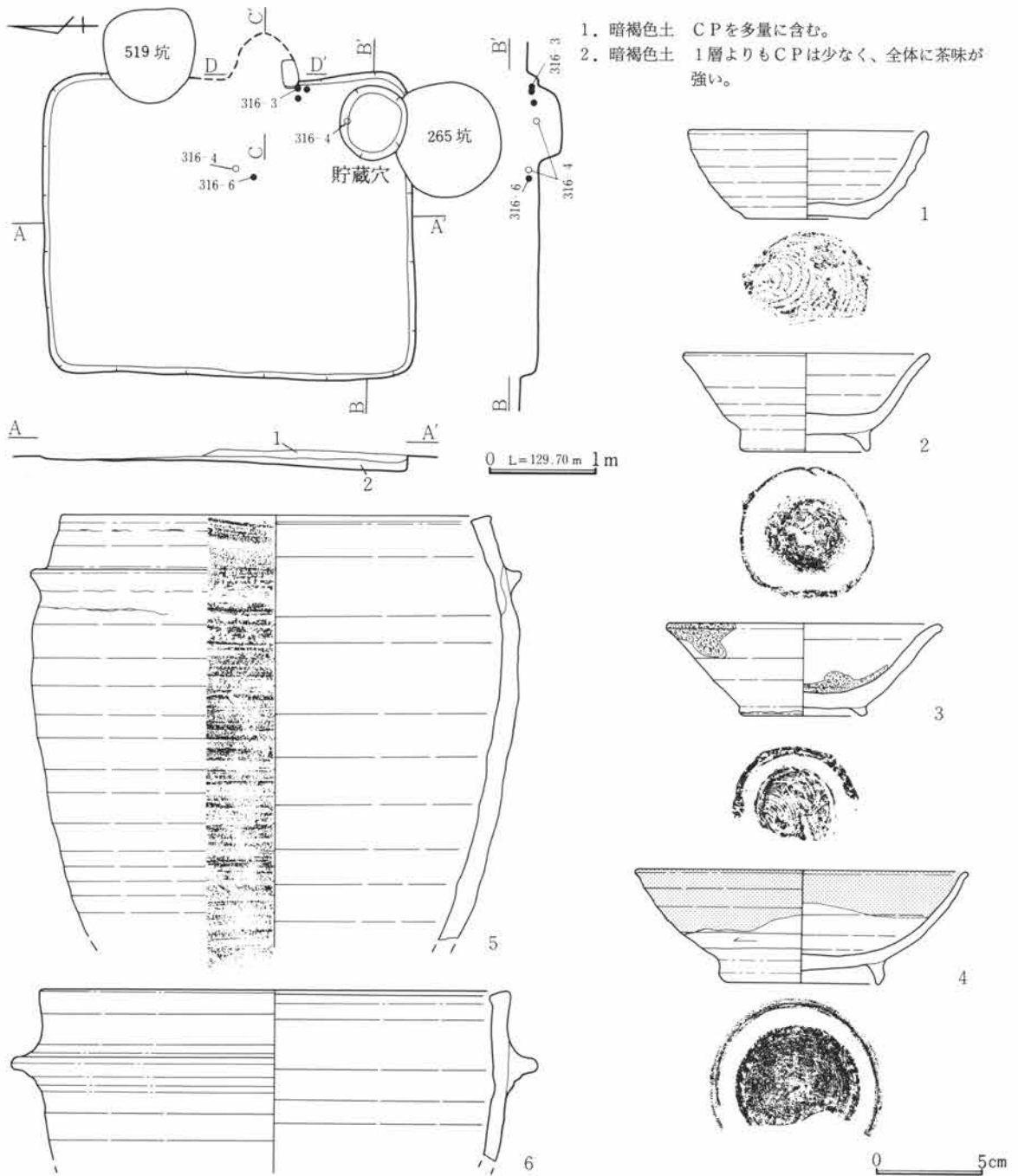
(所見) 当住居跡は第3号住居跡と重複している他、カマド部分を第1号土坑によって削平されている。第3号住居跡との新旧関係は、遺構の検出状態から当住居跡→第3号住居跡と考えられる。遺構の残存は悪く、壁はほとんど痕跡でしかない。他遺構と重複していない部分でみる限り、床面に貼床は認められない。この面の精査では壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴のみが検出された。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており、径約67cm、深さ約22cmの円形を呈している。カマドは東壁の中央部に設置されており、右袖だけが残存していた。構築材として角柱状の截石を据えており、本来は砲弾状の平面形を有していたものであろう。



1. 暗褐色土 VI層土と炭化物を微量含む。
2. 暗褐色土 炭化物と灰を多量に含む。
3. 暗褐色土 炭化物と灰と暗褐色土の混土層。
4. 暗褐色土 VII層土主体の層。
5. 暗褐色土 3層に類似するが灰色味が強い。

第315図 I区第139号住居跡実測図(1)

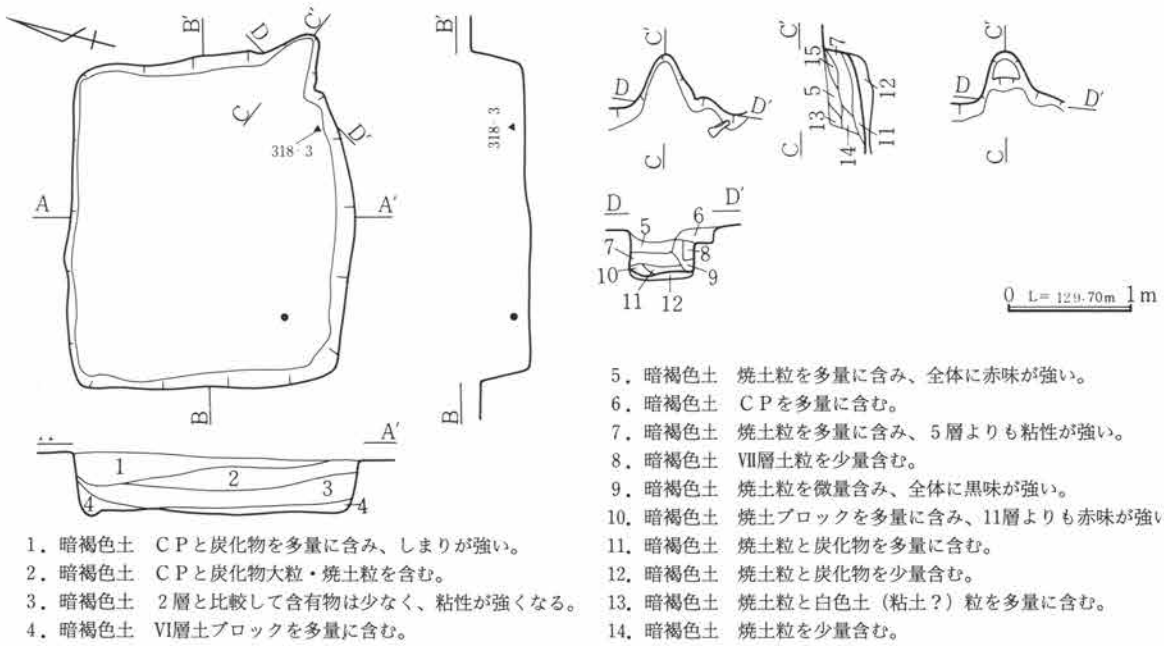
第4章 検出された遺構・遺物



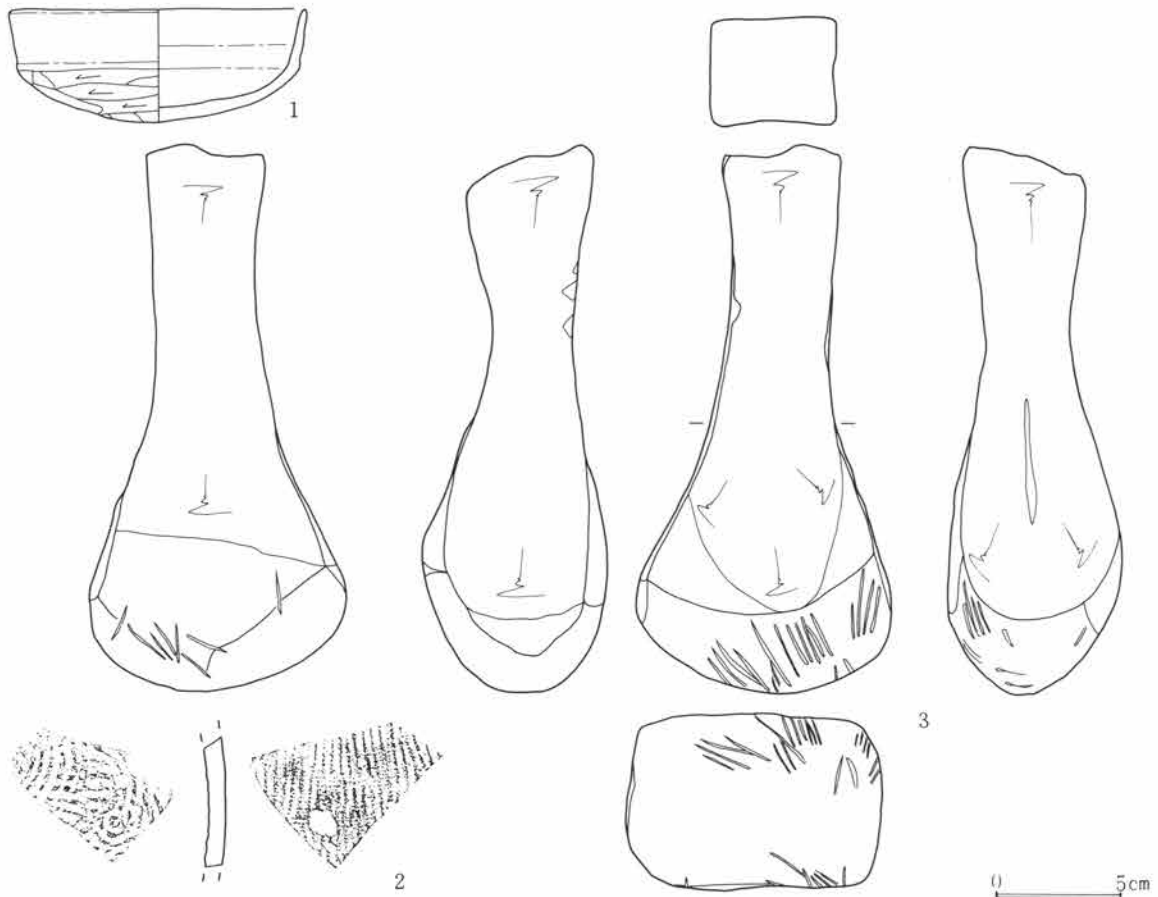
第316図 I区第139号住居跡(2)・出土遺物実測図

遺構名称	I区第140号住居跡	位置	40・41-I-54・55グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	2.64m×2.24m	主軸方位	東-12度-北	残存深度	約40cm程

(所見) 当住居跡は当該期の他遺構と重複しない少ない例である。壁の残存は良好で、床面に貼床はなく、VII層土を直に床面として使用していた。この床面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。カマドは東コーナー部に位置しており、残存部の規模は全長約48cm、燃焼部幅約37cmで、主軸方位は東-26°-南である。袖や支脚の痕跡はなく、全体に貧弱な印象のカマドである。



第317図 I区第140号住居跡実測図

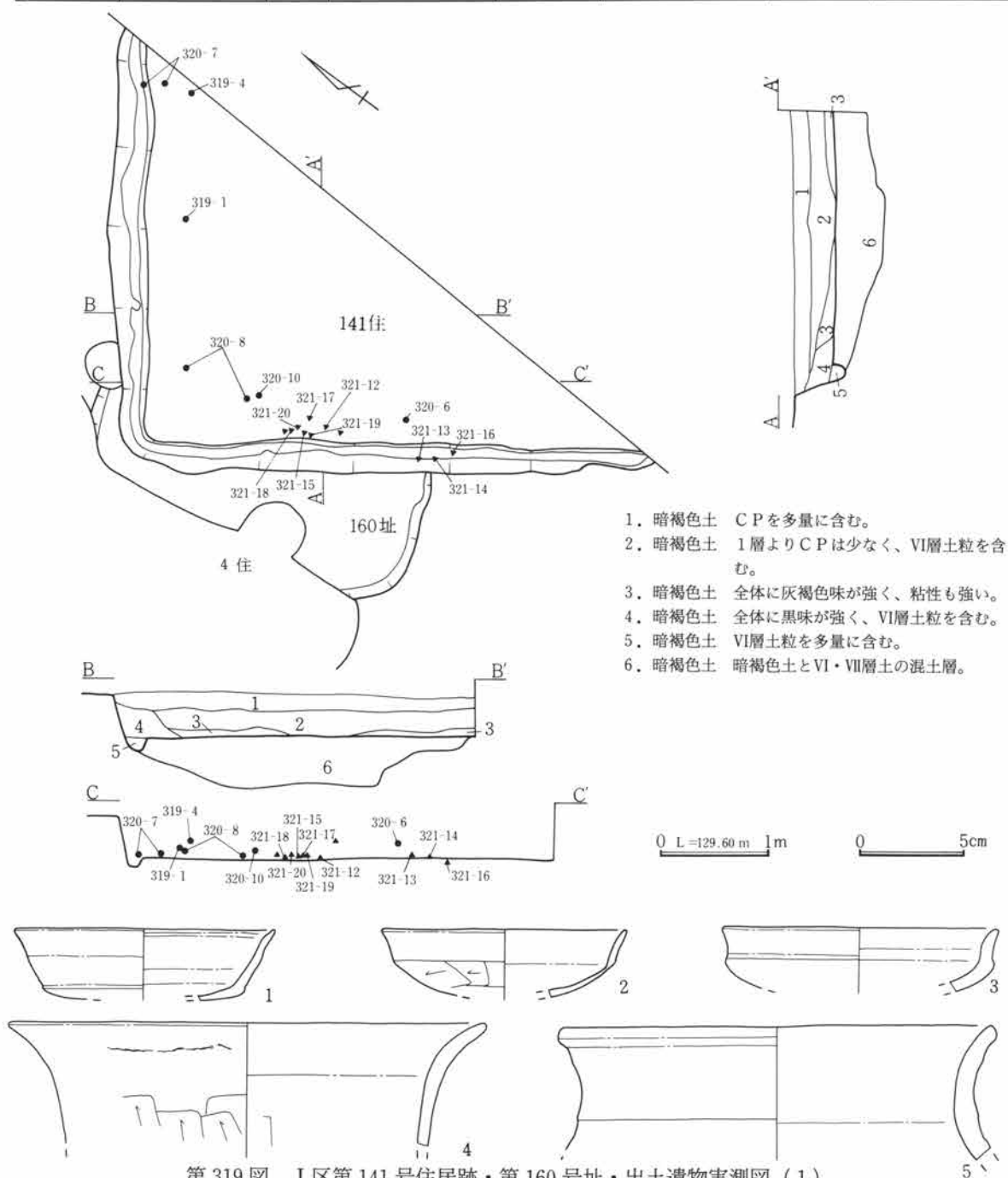


第318図 I区第140号住居跡出土遺物実測図

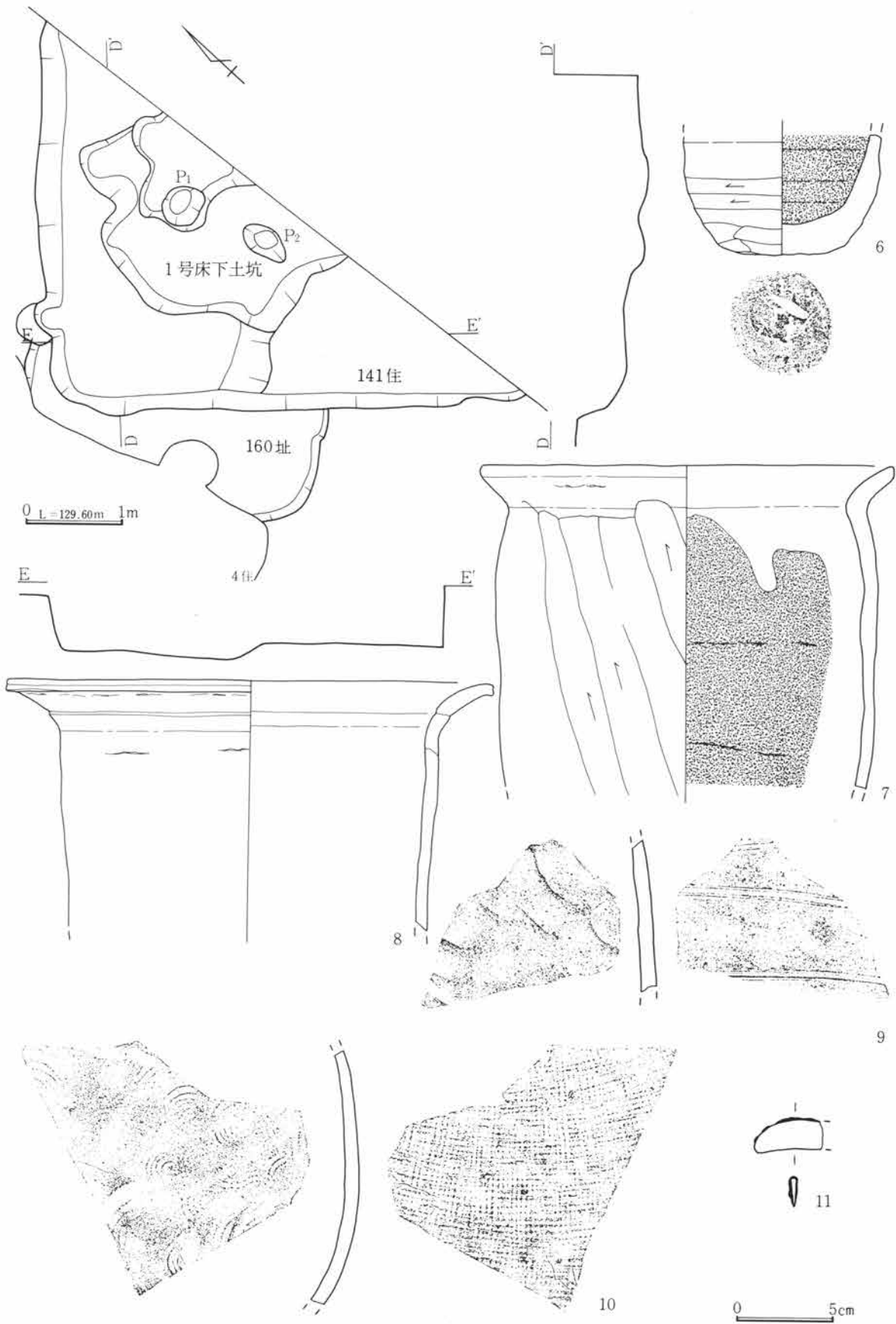
遺構名称	I区第141号住居跡	位置	36~39-I-51・52グリッド内				
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	東-42度-北	残存深度	約37cm程

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第160号址	位置	37-I-52グリッド内
平面形態	—	規模	—m× —m
		主軸方位	—
		残存深度	約16cm程

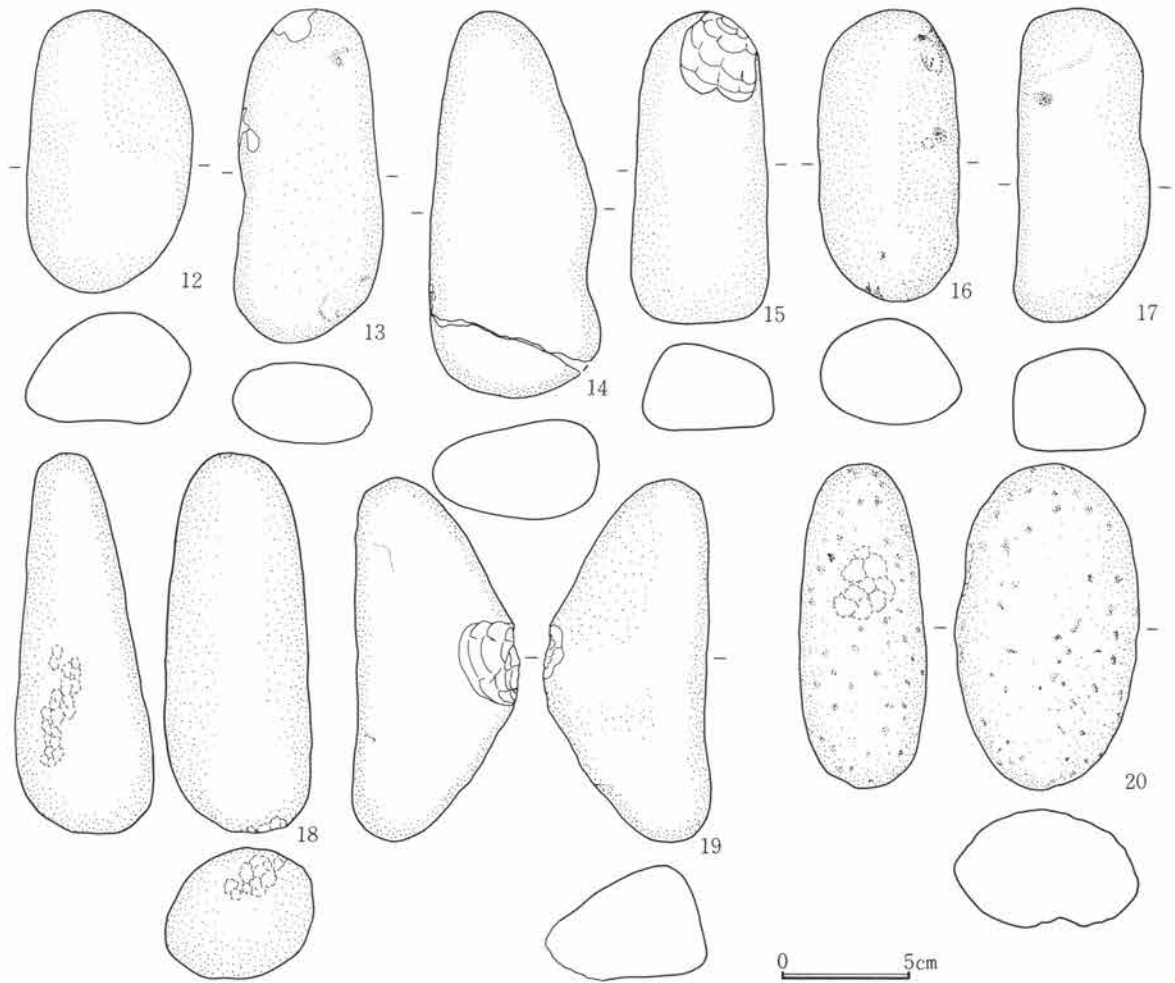


(所見) 第141号住居跡と第160号址は第4号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態等から第160号址→第141号住居跡→第4号住居跡と考えられる。第141号住居跡は大半が調査区外にあり、検出したのは西コーナー付近だけである。壁の残存は比較的良好で、床面はVI・VII層土と暗褐色土を主体とする30cm程の貼床が施されている。この床面の精査で検出したのは、下幅約5~18cm、深さ約10~12cmの規模の壁溝だけである。柱穴は住居跡の規模からみて掘削されているのは明らかであるが、調査区外に位置しているものであろう。第160号址は東西両側を重複によって失っているため、全体像が判然としない。



第320図 I区第141号住居跡・第160号址・出土遺物実測図(2)

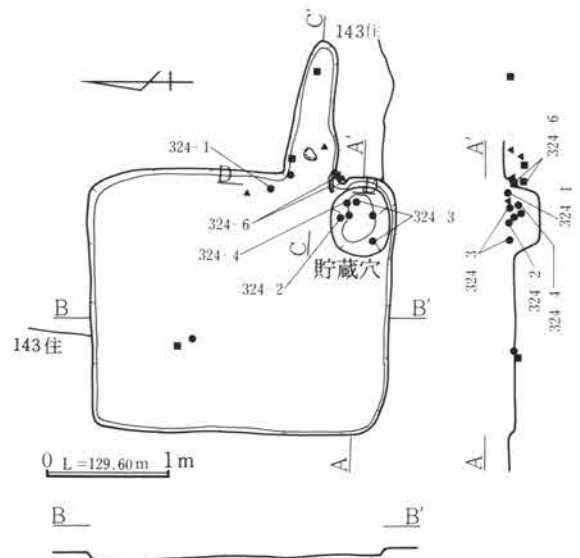
第4章 検出された遺構・遺物



第321図 I区第141号住居跡出土遺物実測図(3)

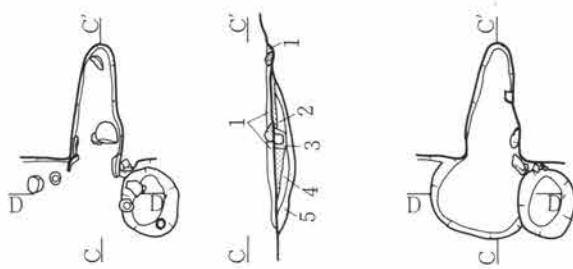
遺構名称	I区第142号住居跡		位置	31・32-I-58・59グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.06m×2.39m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約8cm程

(所見) 当住居跡は第143・175号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第175号住居跡→第143号住居跡→当住居跡と考えられる。遺構の掘り込みはごく浅かったため、遺構確認面からの残存はわずかである。床面に貼床は施されていないと思われる、この面の精査によって貯蔵穴だけが検出された。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており、径約47cm、深さ約20cmの円形であり、比較的多数の遺物が出土している。カマドは東壁の南寄りに設置されており、壁との接合部を袖としているタイプと考えられる。残存した部分の規模は全長約113cm、燃焼部幅約33cmで、主軸方位は東-0°-北である。瓦を袖として使用しており、袖から20cm程奥の中央に礫を支脚として据えていた。



第322図 I区第142号住居跡実測図(1)

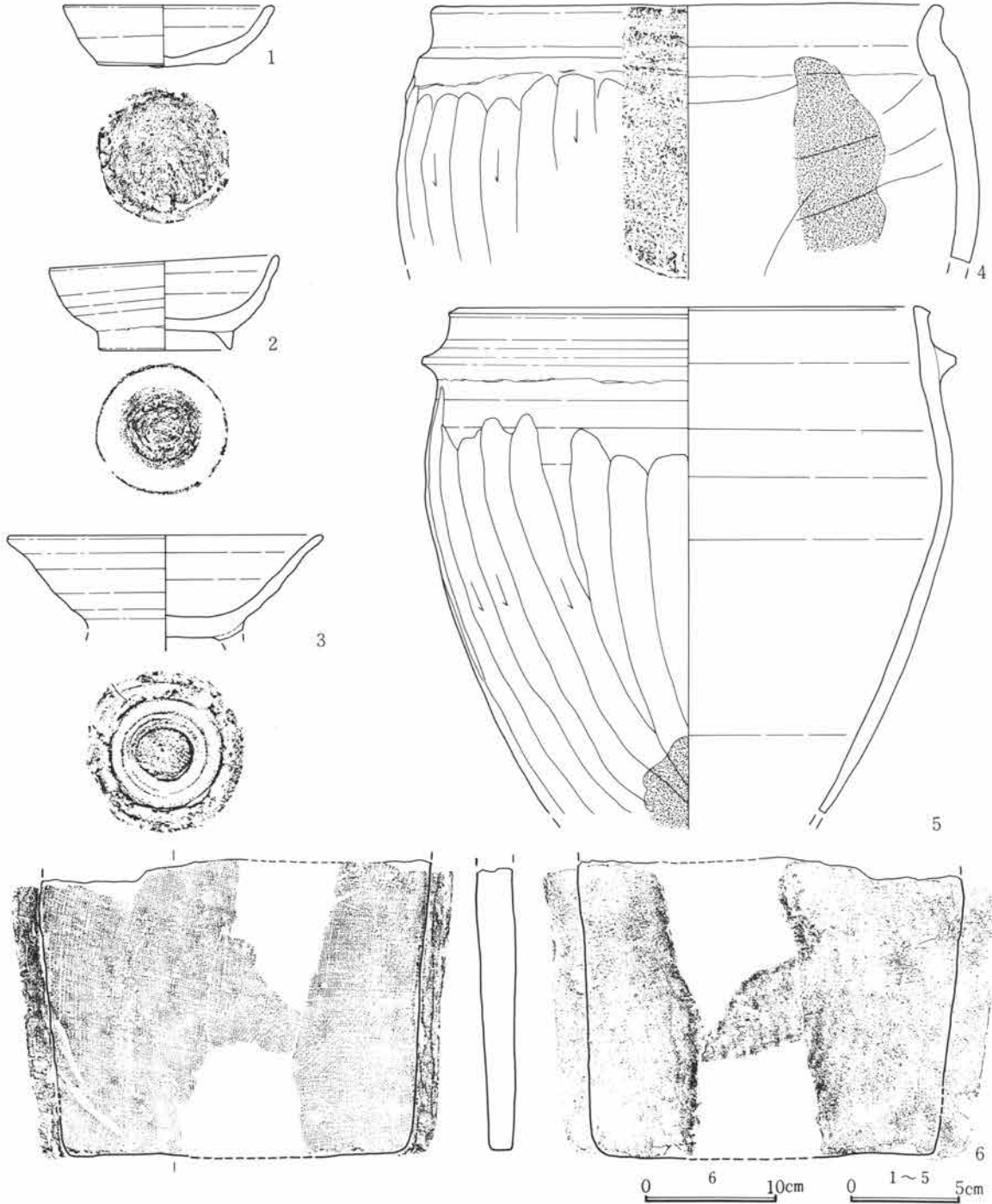
第2節 検出された遺構・遺物



1. 暗褐色土 全体に他層よりも灰褐色味が強い。
2. 暗褐色土 炭化物と焼土粒と暗褐色土の混土層。
3. 暗褐色土 炭化物と焼土粒の混土層。
4. 暗褐色土 1層に類似する層。
5. 暗褐色土 1・4層と類似するが、焼土粒を少量含む。

0 L=129.60m 1m

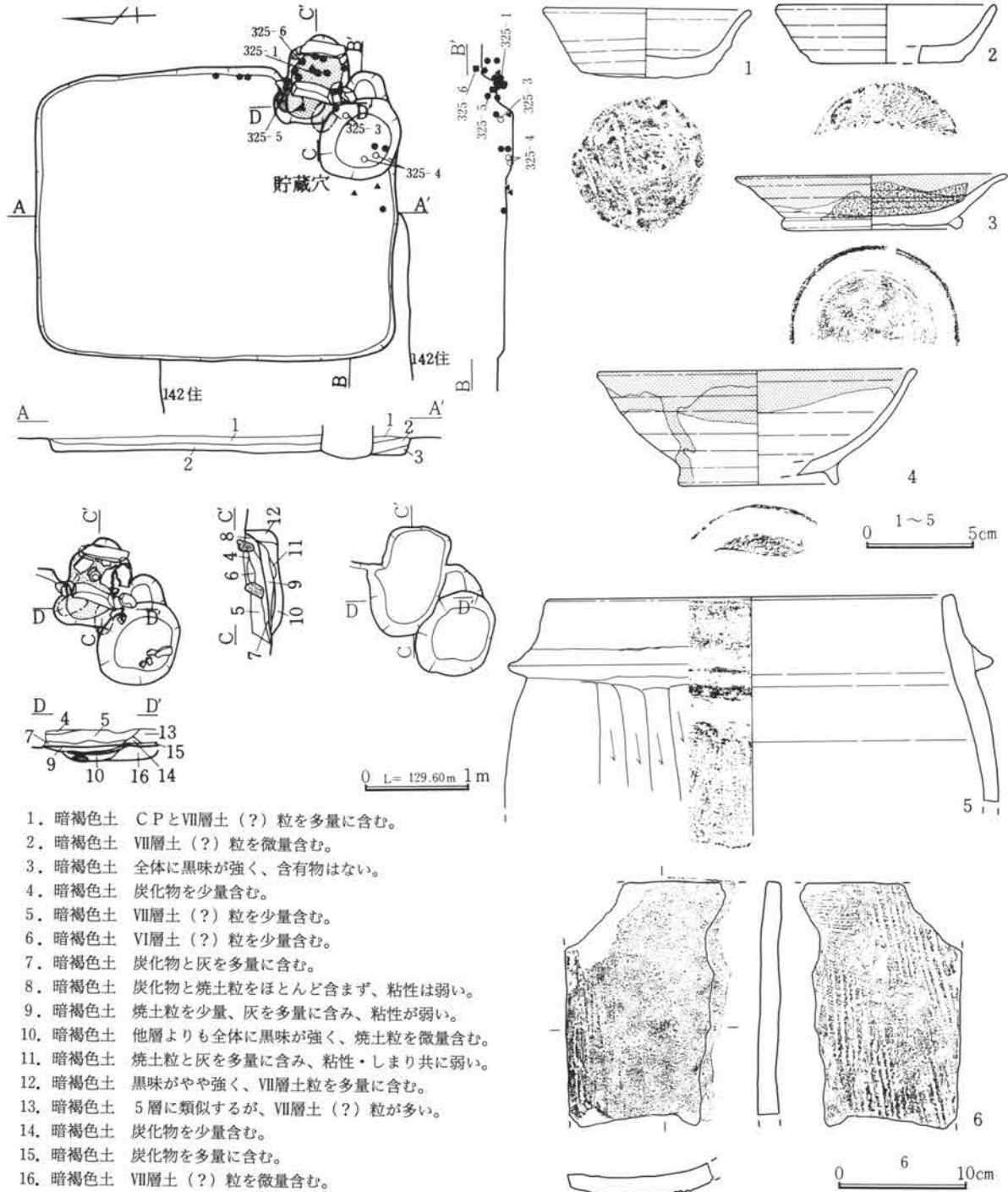
第323図 I区第142号住居跡実測図(2)



第324図 I区第142号住居跡出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第143号住居跡	位置	31・32-I-58・59グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	2.73m×3.38m
		主軸方位	東-3度-南
		残存深度	約15cm程



1. 暗褐色土 CPとVII層土(?)粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 VII層土(?)粒を微量含む。
3. 暗褐色土 全体に黒味が強く、含有物はない。
4. 暗褐色土 炭化物を少量含む。
5. 暗褐色土 VII層土(?)粒を少量含む。
6. 暗褐色土 VI層土(?)粒を少量含む。
7. 暗褐色土 炭化物と灰を多量に含む。
8. 暗褐色土 炭化物と焼土粒をほとんど含まず、粘性は弱い。
9. 暗褐色土 焼土粒を少量、灰を多量に含み、粘性が弱い。
10. 暗褐色土 他層よりも全体に黒味が強く、焼土粒を微量含む。
11. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含み、粘性・しまり共に弱い。
12. 暗褐色土 黒味がやや強く、VII層土粒を多量に含む。
13. 暗褐色土 5層に類似するが、VII層土(?)粒が多い。
14. 暗褐色土 炭化物を少量含む。
15. 暗褐色土 炭化物を多量に含む。
16. 暗褐色土 VII層土(?)粒を微量含む。

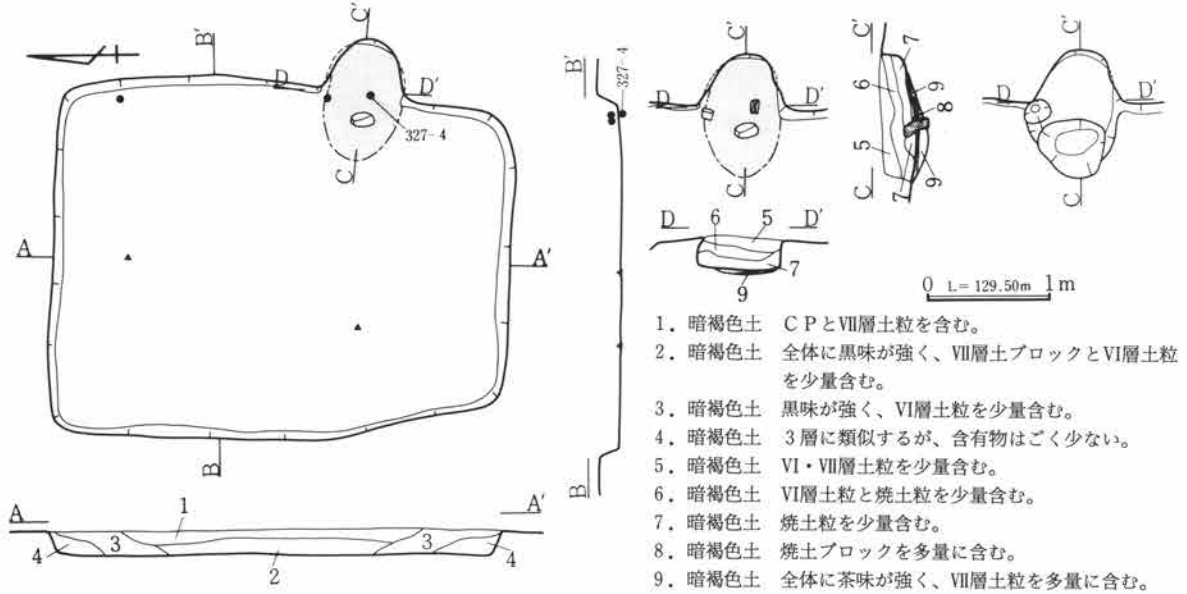
第325図 I区第143号住居跡・出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第142・175号住居跡等と重複しているが、新旧関係については前述のとおりである。当住居跡の掘り込みも浅かったものと思われ、遺構確認面からの残存はごくわずかである。床面は第142号住居跡同様貼床の施された痕跡はない。床面の精査で検出できたのは径約70cm、深さ約7cmの円形を呈する貯蔵穴だけである。カマドは東壁の南寄りに偏って設置されており、両袖が短く屋内に張り出した五角形状を呈す

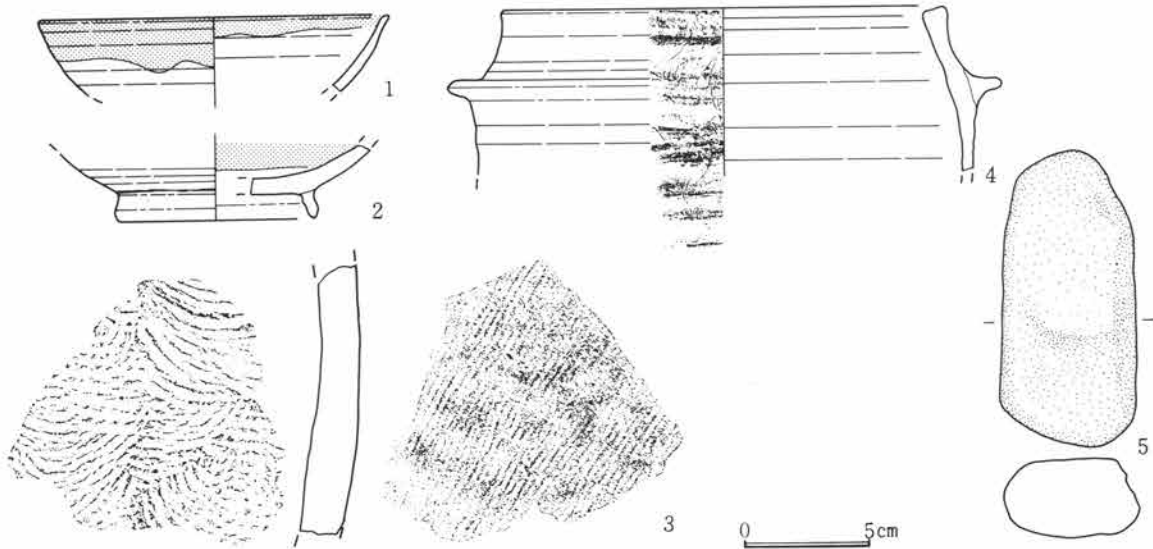
第2節 検出された遺構・遺物

るタイプである。残存部の規模は約60cm、燃焼部幅約46cmで、主軸方位は東-0°-北である。袖は両袖共に先端部に礫を据えており、この上に燃焼部から出土した礫が載せられていたものであろう。また、燃焼部奥壁に接するように礫が出土しているが、これは燃焼部と煙道とを区画していたものと考えられる。燃焼部は床面からわずかに掘り窪められているが、この窪は屋内側まで続いており、この部分が焚口であろう。

遺構名称	I区第147号住居跡	位置	33~35-I-53・54グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	2.85m×3.63m
		主軸方位	東-4度-南
		残存深度	約20cm程



第326図 I区第147号住居跡実測図



第327図 I区第147号住居跡・出土遺物実測図

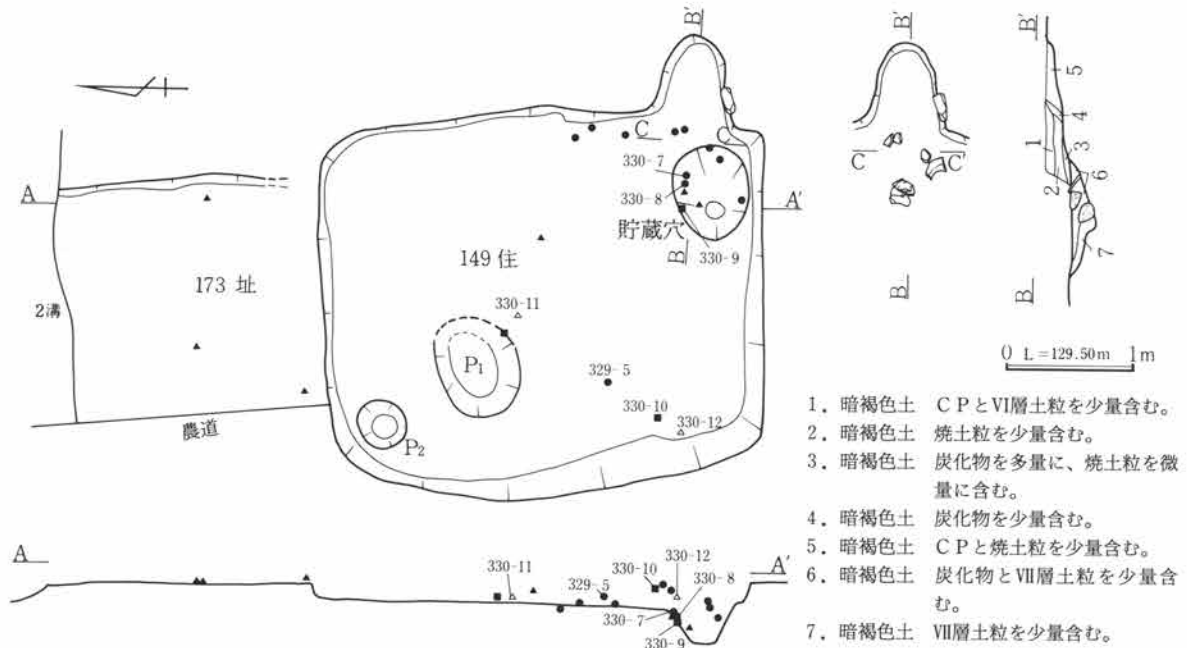
(所見) 当住居跡は第188号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第188号住居跡→当住居跡と考えられる。床面に貼床は全く施されておらず、この面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴のいずれも検出されなかった。カマドは東壁の南寄りに設置されており、半円形状の平面を有している。残存部の規模は全長約50cm、燃焼部幅約62cmで、主軸方位は東-0°-北である。燃焼部内から連続して屋内側に50cm程の範囲に灰

第4章 検出された遺構・遺物

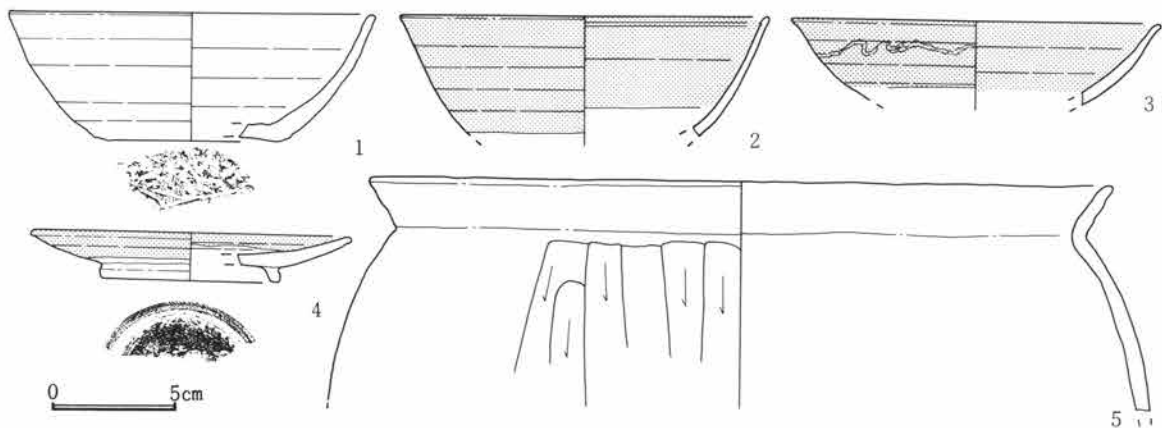
面がひろがっており、その灰面の中の屋内側に支脚と考えられる礫が立てられた状態で検出された。このような状況から判断して当カマドは、本来は両袖が屋内に張り出し、その間が燃焼部主体となるタイプであったものと思われる。

遺構名称	I区第149号住居跡	位置	26~28-I-58~60グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.10m×3.50m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約15cm程

遺構名称	I区第173号址	位置	28・29-I-59・60グリッド内				
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約8cm程



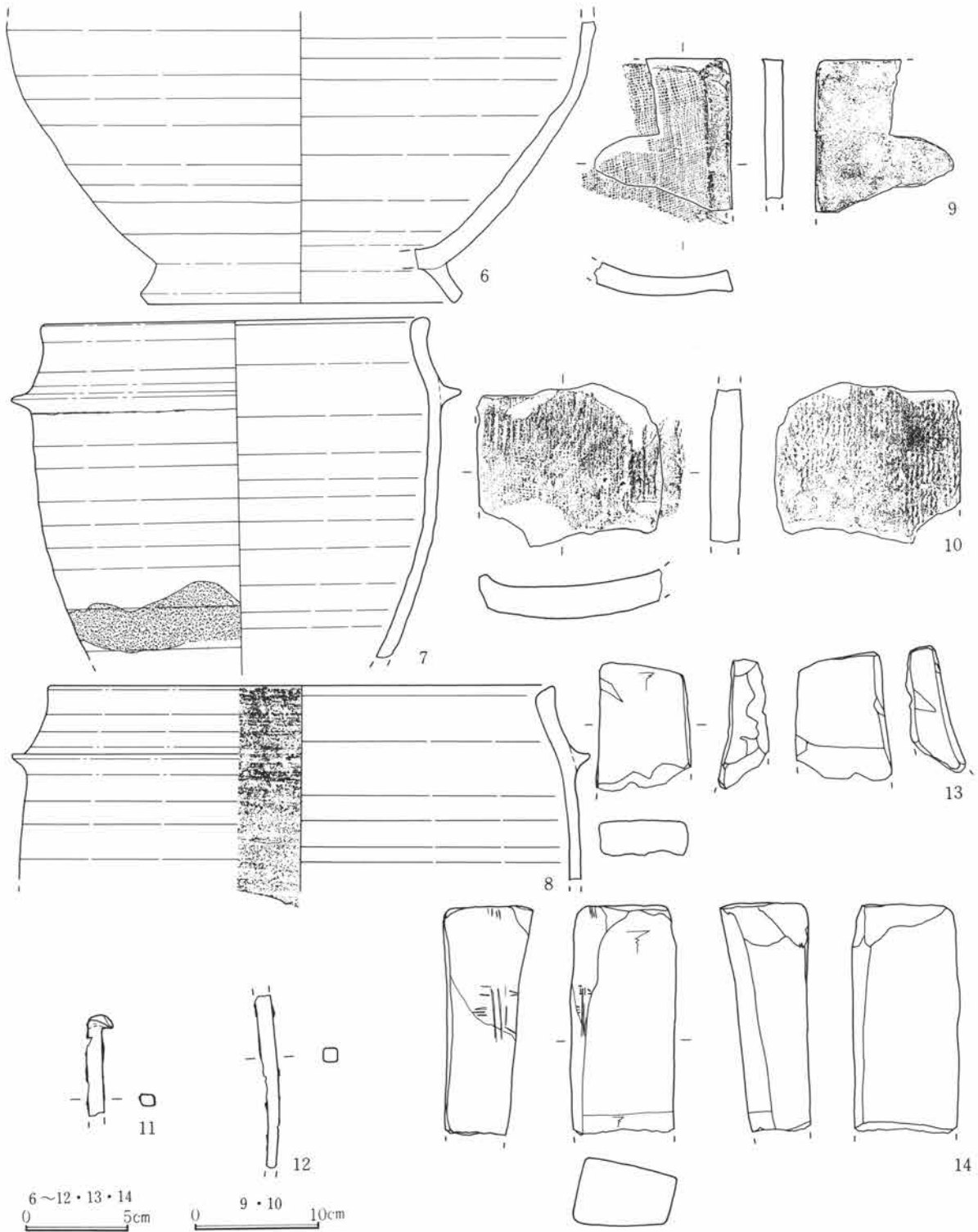
第328図 I区第149号住居跡・第173号址実測図



第329図 I区第149号住居跡出土遺物実測図(1)

(所見) 第149号住居跡と第173号址は第150号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態等から第173号址→第150号住居跡→第149号住居跡という新旧関係が想定できる。

第149号住居跡はIV層土中で確認したが、西壁にやや張りがあり傾斜が緩いことからこの部分に崩落が考えられる。床面に貼床が施された痕跡はないが、この段階で検出したP₁(径約64cm、深さ約24cm)とP₂(径約

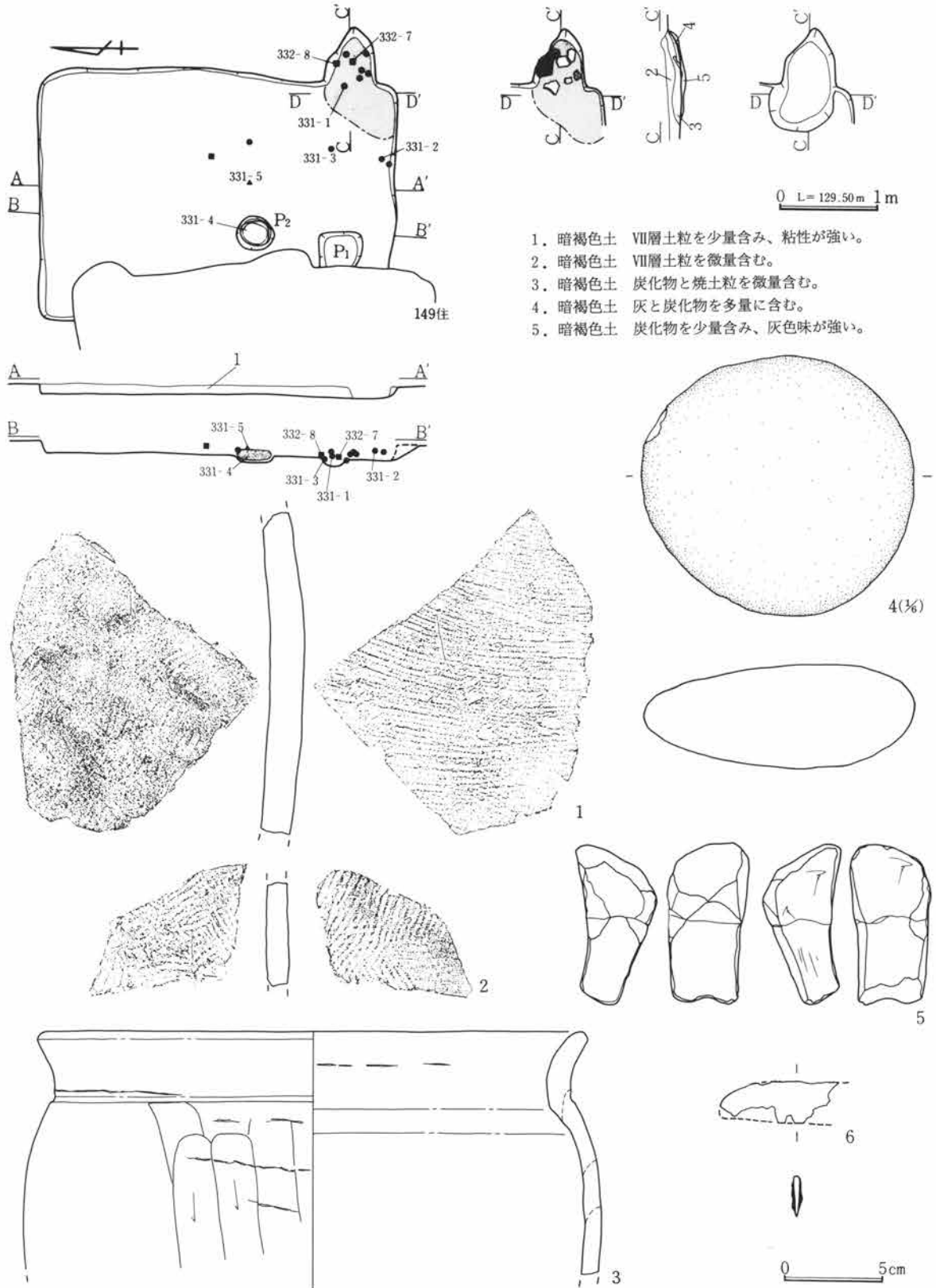


第330図 I区第149号住居跡出土遺物実測図(2)

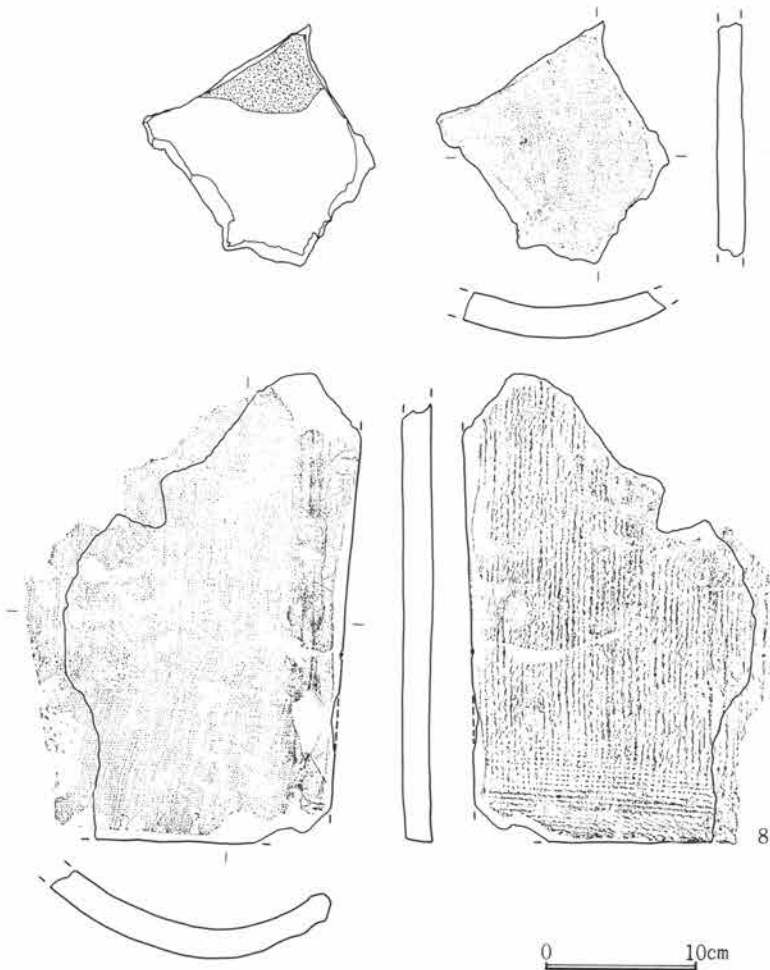
39cm、深さ約23cm)の2本のピットは配置から柱穴とは考えられず、掘り方段階に掘削されたものである可能性が強い。貯蔵穴は南東コーナー部のカマド正面に位置しており、約74×60cm、深さ約32cmの楕円形を呈している。カマドは東壁の南端に位置しており、袖の張り出さない砲弾状の平面形を有している。残存部の規模は全長約80cm、燃焼部幅約50cmで、主軸方位は東-0°-北である。右側壁には礫が残存しており、他の部分も同様の補強がされていたものと考えられる。第173号址は東壁のみの検出で性格不明である。

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第150号住居跡	位置	27・28-I-57~59グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	2.49m×3.56m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約10cm程



第331図 I区第150号住居跡・出土遺物実測図(1)



(所見) 当住居跡は第149号住居跡との重複によって西側を失っている。掘り込みが浅かったせいか確認面からの壁の残存はわずかである。床面に貼床の施された痕跡は認められず、この面の精査によってP₁とP₂の2本のピットを検出した。P₁は一边が約42cm、深さ約7cmの方形を呈するピットで、位置関係から貯蔵穴である可能性がある。P₂は径約35cmの円形で7cm程の深さを有している。この中からは第331図4の扁平な礫が据えられたような状態で出土している。台石として使用されたものであろうか。カマドは東壁の南端に位置しており、袖の張り出さない五

第332図 I区第150号住居跡出土遺物実測図(2)

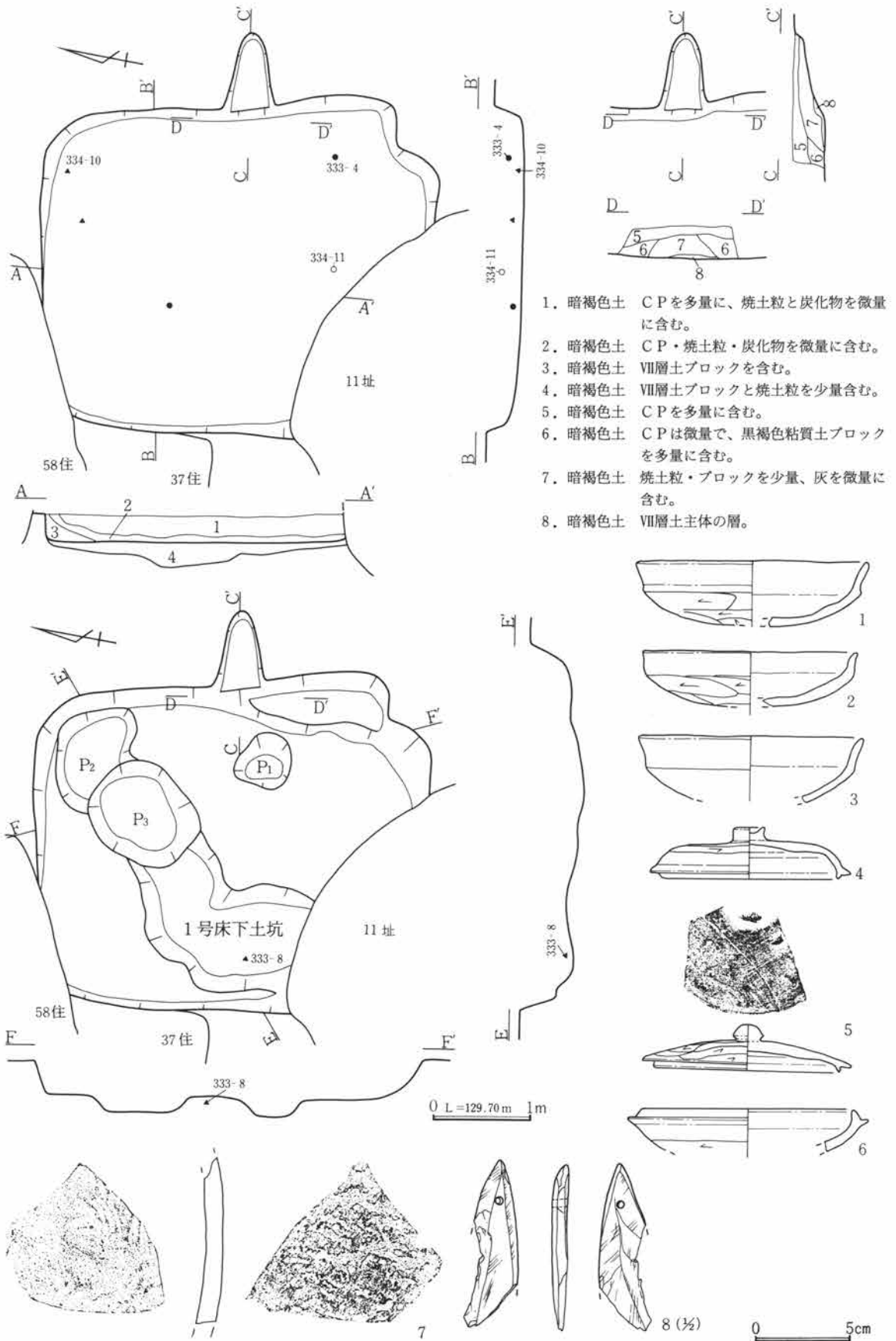
角形状の平面を有している。残存部の規模は全長約60cm、燃焼部幅約45cmで主軸方位は東-0°-北である。燃焼部から南東コーナー部にかけては灰面が広がっている。

遺構名称	I区第151号住居跡		位置	31~33-I-79~82グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.29m×4.10m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約27cm程

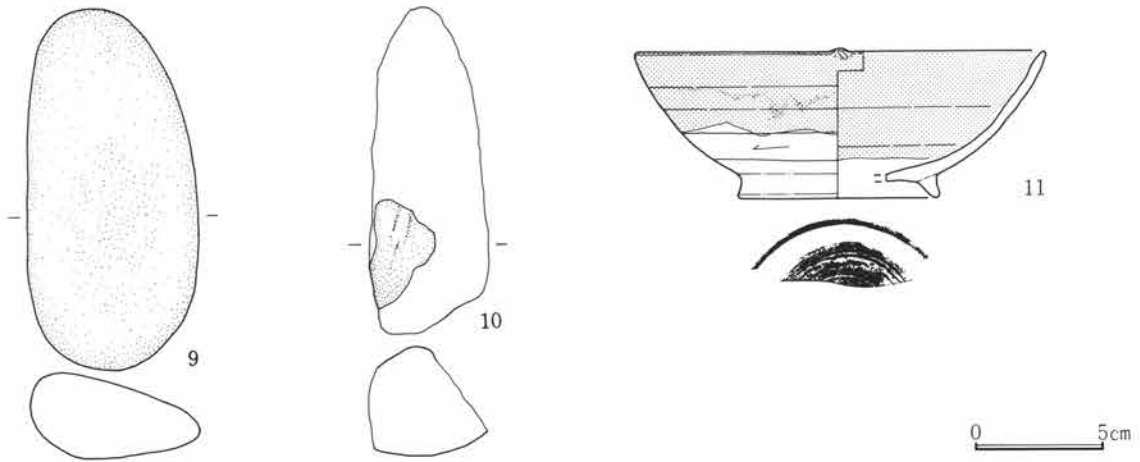
(所見) 当住居跡は第37・58号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や出土遺物の比較から第58号住居跡→当住居跡→第37号住居跡と考えられる。また、南西コーナー付近は中世以降の第11号址によって削平されて検出できなかった。壁は比較的良く残存しているが、特に南東コーナー付近では段があり、崩落等による形の崩れが予想される。床面は全体にVII層土ブロックを主体に焼土粒をわずかに含む貼床が施されており、掘り方ではP₁~P₃の3本のピットと1号床下土坑と命名した不整形の掘り込みを検出した。P₁は径約56cm、深さ約19cmの不整形、P₂は径約95cm、深さ約12cmの不整形、P₃は径約97cm、深さ約20cmの円形を呈している。1号床下土坑内からは第333図8の石製模造品が出土している。

カマドは東壁の中央に位置しており、壁から屋外に掘り込まれた煙道だけが検出された。屋内には袖が延びていたと思われるが、痕跡も含めて全く残存していない。検出した煙道の全長は約76cm、下幅約36cmで、主軸方位は東-0°-北である。出土遺物の第334図11に示した灰釉陶器壺は、覆土中から出土したものであるが、当住居跡の所属時期とは明らかに違っていることから土坑等の遺構が重複している可能性がある。

第4章 検出された遺構・遺物

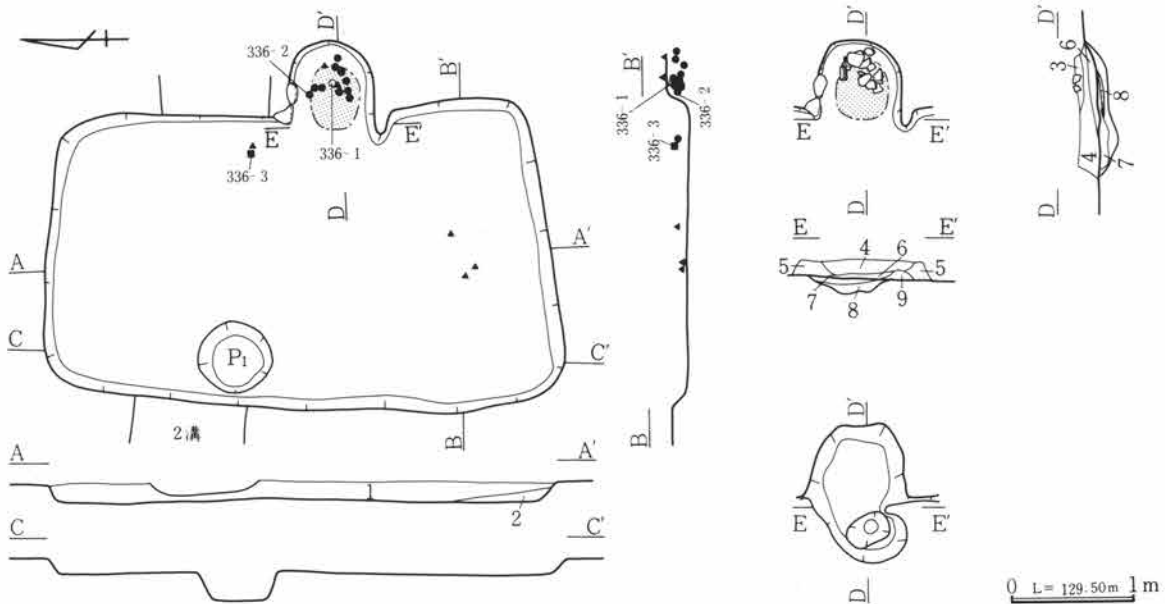


第 333 図 I 区第 151 号住居跡・出土遺物実測図 (1)



第334図 I区第151号住居跡出土遺物実測図(2)

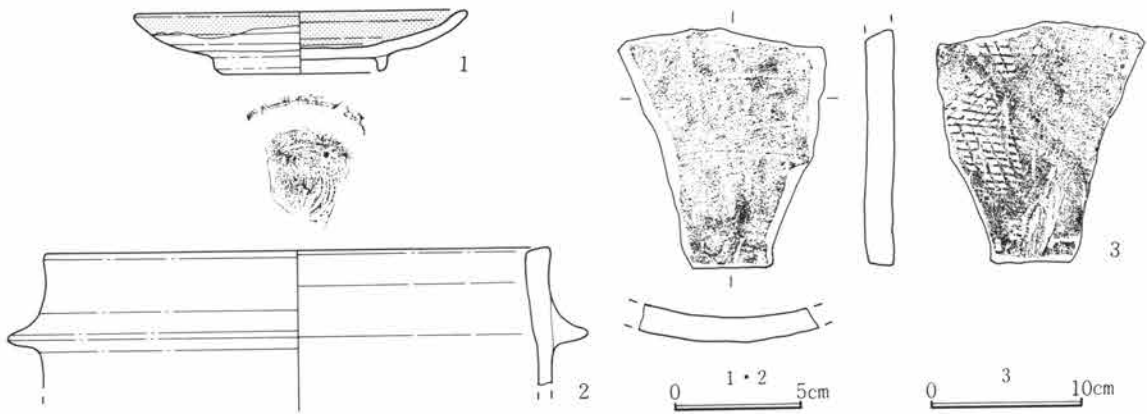
遺構名称	I区第152号住居跡	位置	28~30-I-52・53グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	2.27m×4.03m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約15cm程



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. 暗褐色土 VI・VII層土粒を多量に含む。 | 5. 暗褐色土 VI・VII層土粒を少量まばらに含む。 |
| 2. 暗褐色土 1層よりもVI層土粒の含有量が多い。 | 6. 暗褐色土 焼土小ブロックを少量含む。 |
| 3. 暗褐色土 焼土粒の含有量は少なく、他層よりも粒子が粗い。 | 7. 暗褐色土 焼土粒と小ブロックを多量に含む。 |
| 4. 暗褐色土 VI・VII層土粒を少量含む、1層に類似する。 | 8. 暗褐色土 焼土粒とCPを少量含む、他層よりも粘性が強い。 |

第335図 I区第152号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第199号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第199号住居跡→当住居跡と考えられる。平面プランは南北に長い隅丸長方形を呈し、他の住居跡とはやや違った雰囲気をも有するものである。床面に貼床は全く施されておらず、この面の精査によってP₁(径約56cm、深さ約24cm)を検出した他、壁溝・柱穴等は検出されなかった。カマドは東壁の中央やや南寄りに位置しており、袖がわずかに張り出した馬蹄形状の平面を有している。残存部の規模は、全長約80cm、燃焼部幅約56cmで、主軸方位は東-0°-北である。燃焼部の北側の壁には礫を補強材として使用していた。また、燃焼部中央には遺物が集中しており、下部には焼土面が検出されている。支脚は据え方を含めて検出されていない。



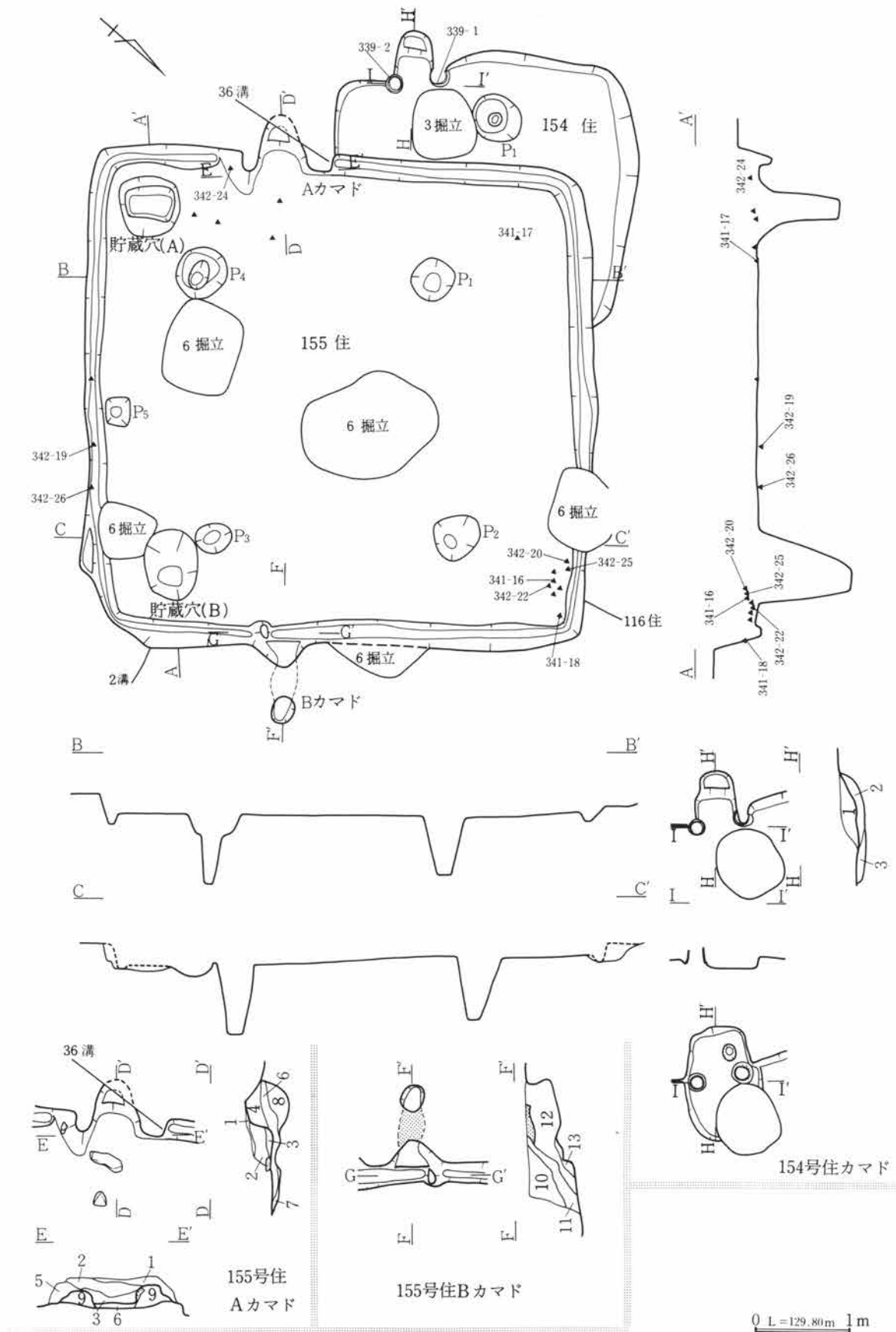
第336図 I区第152号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第154号住居跡		位置	26～28—I—69・70グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.65m×3.14m	主軸方位	西—40度—南	残存深度	約15cm程
遺構名称	I区第155号住居跡		位置	25～29—I—67～70グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.10m×5.30m	主軸方位	西—40度—南	残存深度	約23cm程

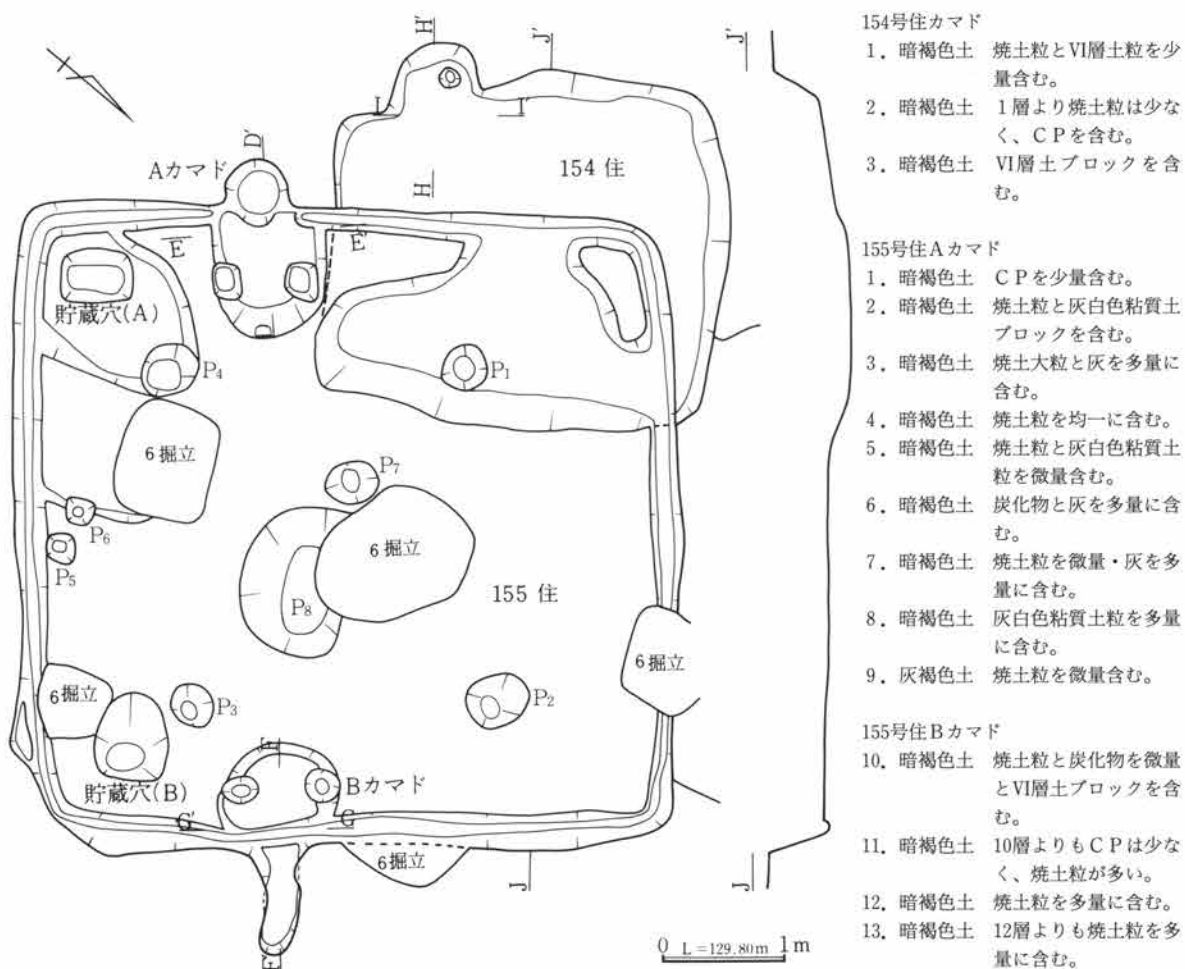
(所見) 第154・155号住居跡は第116・153号住居跡及び第3・6号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第154号住居跡→第155号住居跡→第153号住居跡→第116号住居跡という関係と、第154・155号住居跡→第3・6号掘立柱建物跡という関係が想定できる。

第154号住居跡は、第155号住居跡との重複によって東側を失っている他、第3号掘立柱建物跡の柱穴がカマド前面に位置している。床面はVII層土中に直に構築されており、カマド部分を除いてほとんど掘り方は認められない。床面の精査で壁溝・柱穴は検出されず、唯一残存部にP₁(径約47cm)を検出した。第155号住居跡の掘り方段階の調査で、ちょうど当該住居跡の外郭線に当たるような掘り方が検出されているが、重複していない部分の底面よりも明らかに深くなっており、偶然である可能性が強い。カマドは南西壁の南寄りに位置しており、壁との接合部に第339図1・2の土師器甕が逆位に据え付けられていた。残存部の規模は全長約65cm、燃烧部幅約35cm、燃烧部奥行き約38cmであり、一段上がって長さ約18cm、下幅約24cmの煙道が続いている。

第155号住居跡は、北東壁及び南西壁の南寄りの同一軸線上に会い向かいに2基のカマド(Aカマド・Bカマド)を有する住居跡であり、カマドの残存状態からAカマドが最終段階のカマドである。住居平面プランは北西壁の一部を第6号掘立柱建物跡によって壊されている以外、全周検出することができた。床面には全面にわたって薄い貼床がほどこされている。床面の精査では壁溝・柱穴・貯蔵穴・小ピットを検出した。壁溝は下幅約5～10cm、深さ約5～11cmの規模で、Bカマド部分にも巡らされていることから、Aカマドに伴う最終段階に掘削されたものであろう。柱穴はP₁～P₄(径約37～45cm、深さ約60～73cm、柱穴間距離P₁～P₂間約2.7m、P₂～P₃間約2.5m、P₃～P₄間約2.7m、P₄～P₁間約2.5m)の4本であり、掘り方段階でもこの柱穴配列以外に検出されていないことから、カマド等の変更の際に柱穴の移動はされなかったものであろう。貯蔵穴はAカマドに伴うものは南コーナー部に位置する約51×35cm、深さ約83cmの長方形を呈する掘り込みである。また、Bカマドに伴うものは東コーナー部に検出した約72×53cm、深さ約94cmの楕円形の掘り込みである。Aカマドは袖の張り出す凸字形の平面を有するタイプで、燃烧部幅のみ計測可能で、約40cmで

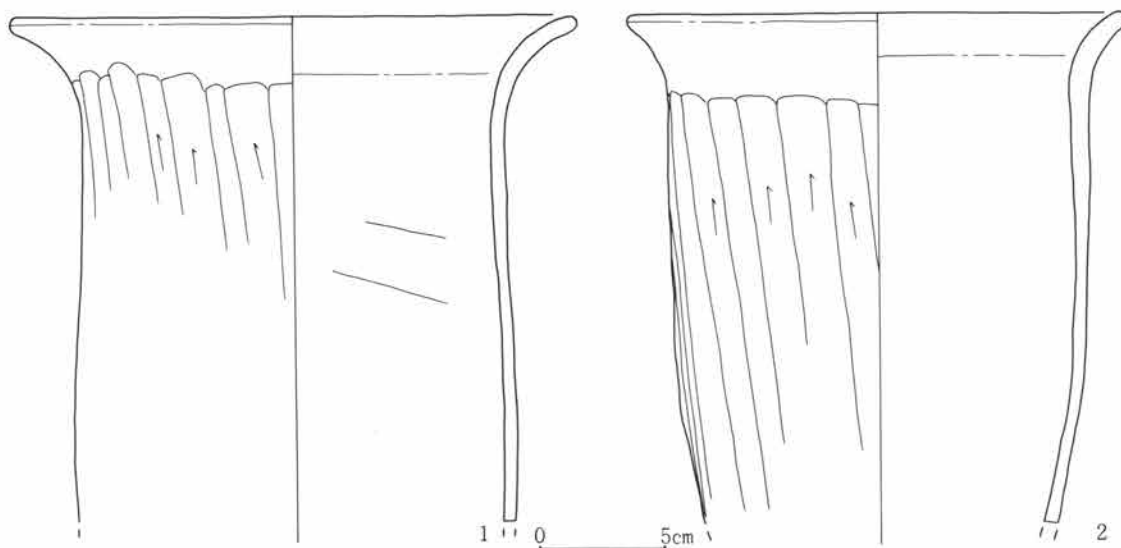


第337図 I区第154・155号住居跡実測図(1)



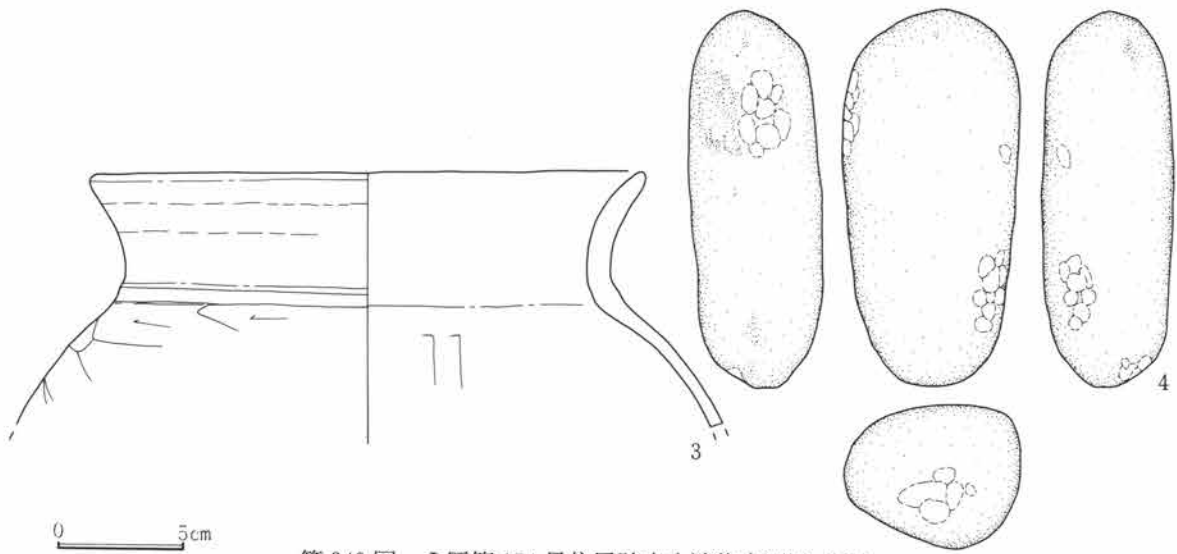
- 154号住カマド
1. 暗褐色土 焼土粒とVI層土粒を少量含む。
 2. 暗褐色土 1層より焼土粒は少なく、CPを含む。
 3. 暗褐色土 VI層土ブロックを含む。
- 155号住Aカマド
1. 暗褐色土 CPを少量含む。
 2. 暗褐色土 焼土粒と灰白色粘質土ブロックを含む。
 3. 暗褐色土 焼土大粒と灰を多量に含む。
 4. 暗褐色土 焼土粒を均一に含む。
 5. 暗褐色土 焼土粒と灰白色粘質土粒を微量含む。
 6. 暗褐色土 炭化物和灰を多量に含む。
 7. 暗褐色土 焼土粒を微量・灰を多量に含む。
 8. 暗褐色土 灰白色粘質土粒を多量に含む。
 9. 灰褐色土 焼土粒を微量含む。
- 155号住Bカマド
10. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量とVI層土ブロックを含む。
 11. 暗褐色土 10層よりもCPは少なく、焼土粒が多い。
 12. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
 13. 暗褐色土 12層よりも焼土粒を多量に含む。

第338図 I区第154・155号住居跡実測図(2)

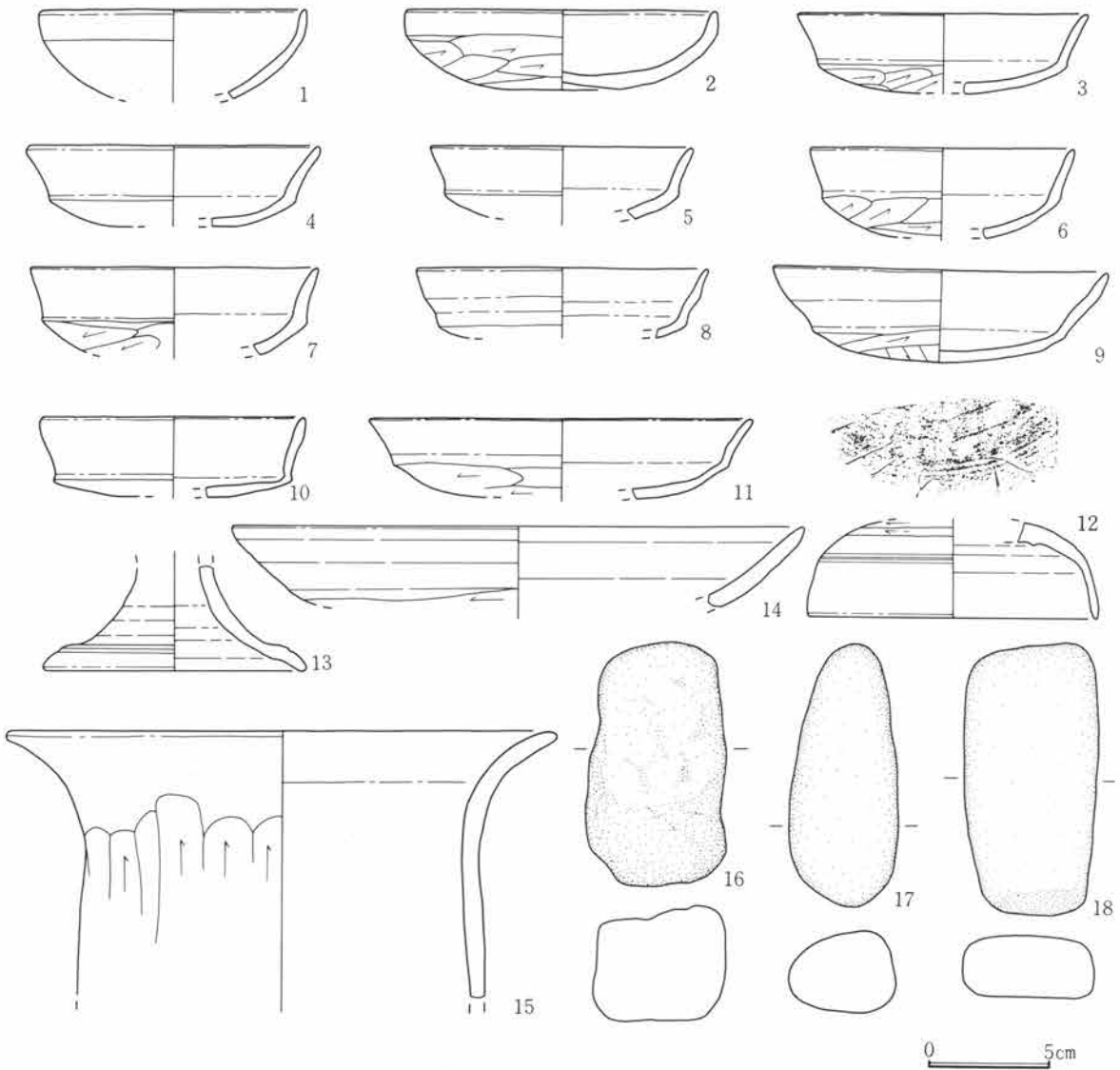


第339図 I区第154号住居跡出土遺物実測図(1)

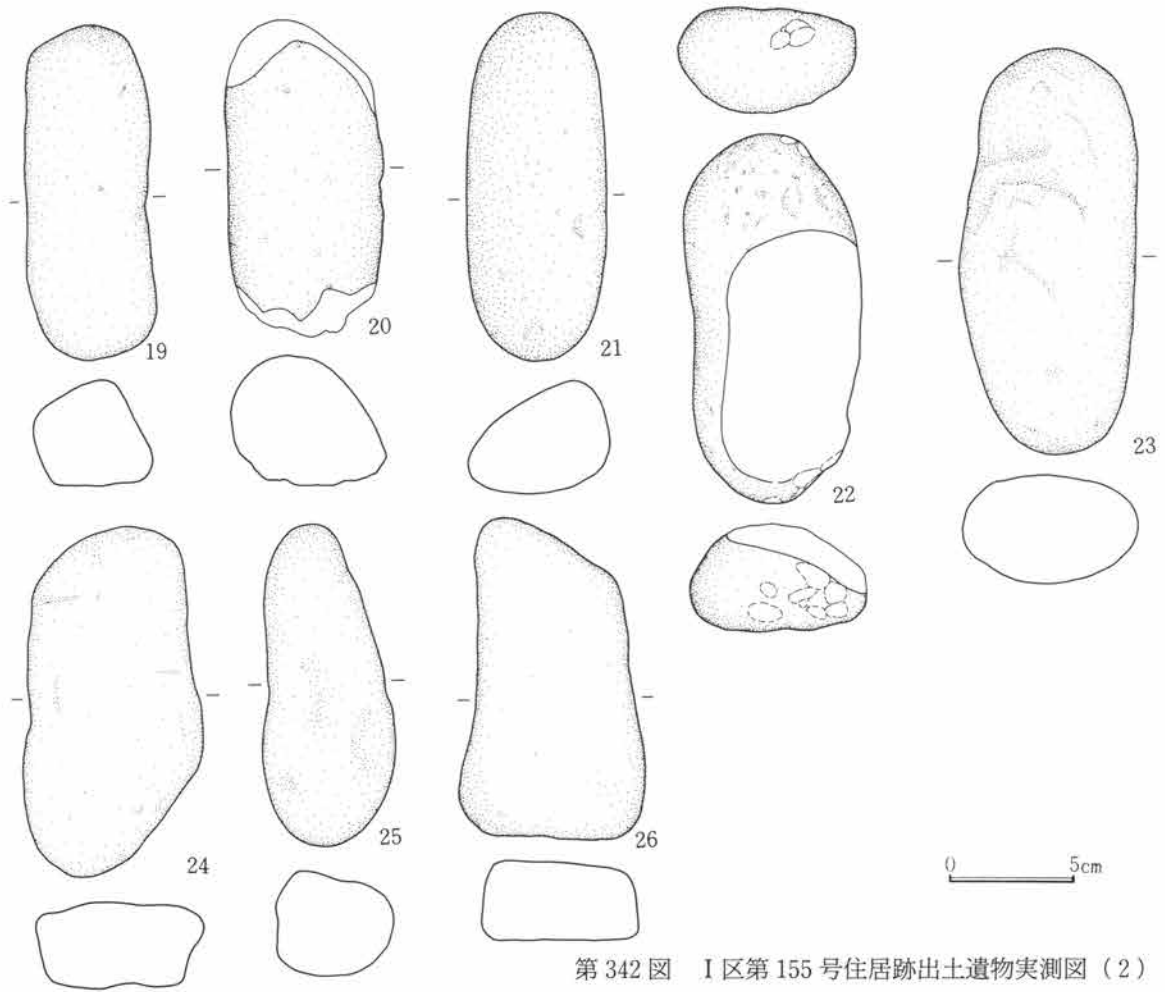
ある。Bカマドは煙道のみが残存で、屋外に長さ約85cm、下幅約32cmの規模でトンネル状に掘り込まれ、その先端に径約25cmの円形の煙り出しが開口されていた。この2基のカマドの主軸方位はAカマドが西-40°-南、Bカマドが東-40°-北であり、同一の軸線上に乗っている。



第340図 I区第154号住居跡出土遺物実測図(2)



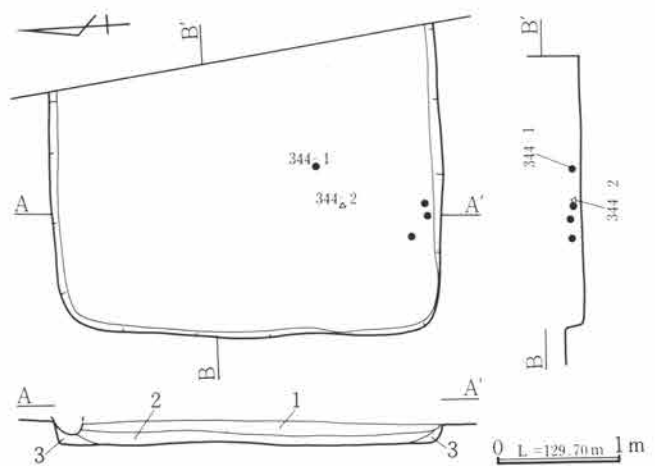
第341図 I区第155号住居跡出土遺物実測図(1)



第 342 図 I 区第 155 号住居跡出土遺物実測図 (2)

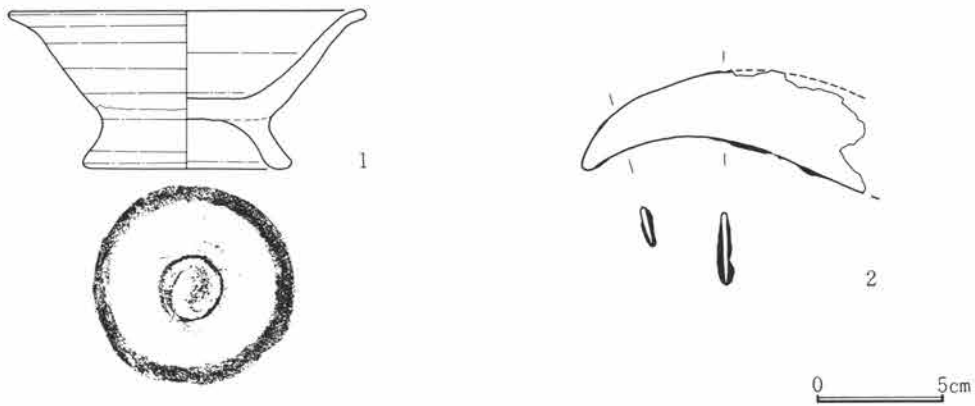
遺構名称	I 区第156号住居跡	位置	40・41-I-51・52グリッド内
平面形態	—	規模	—m×3.12m
		主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約18cm程

(所見) 当住居跡は東半が調査区外に位置しているため、カマドは未検出である。平面プランの確認は、IV層の下位で行っているが、当遺構の掘り込みが浅かったものと考えられ、確認面からの壁の残存はわずかである。検出した床面には貼床は全く施されておらず、VII層土を直に床面としていた。この床面の精査で壁溝・柱穴は検出されておらず、当初から掘削されなかったものであろう。貯蔵穴は検出部分には検出されていないが、未検出部分に存在する可能性は高い。出土遺物はごくわずかで、実測可能なものは図示した2点だけである。共に床面からわずかに浮いた状態で出土したものであるが、検出部分で他遺構との重複が考えられないことから当遺構に伴うものであろう。



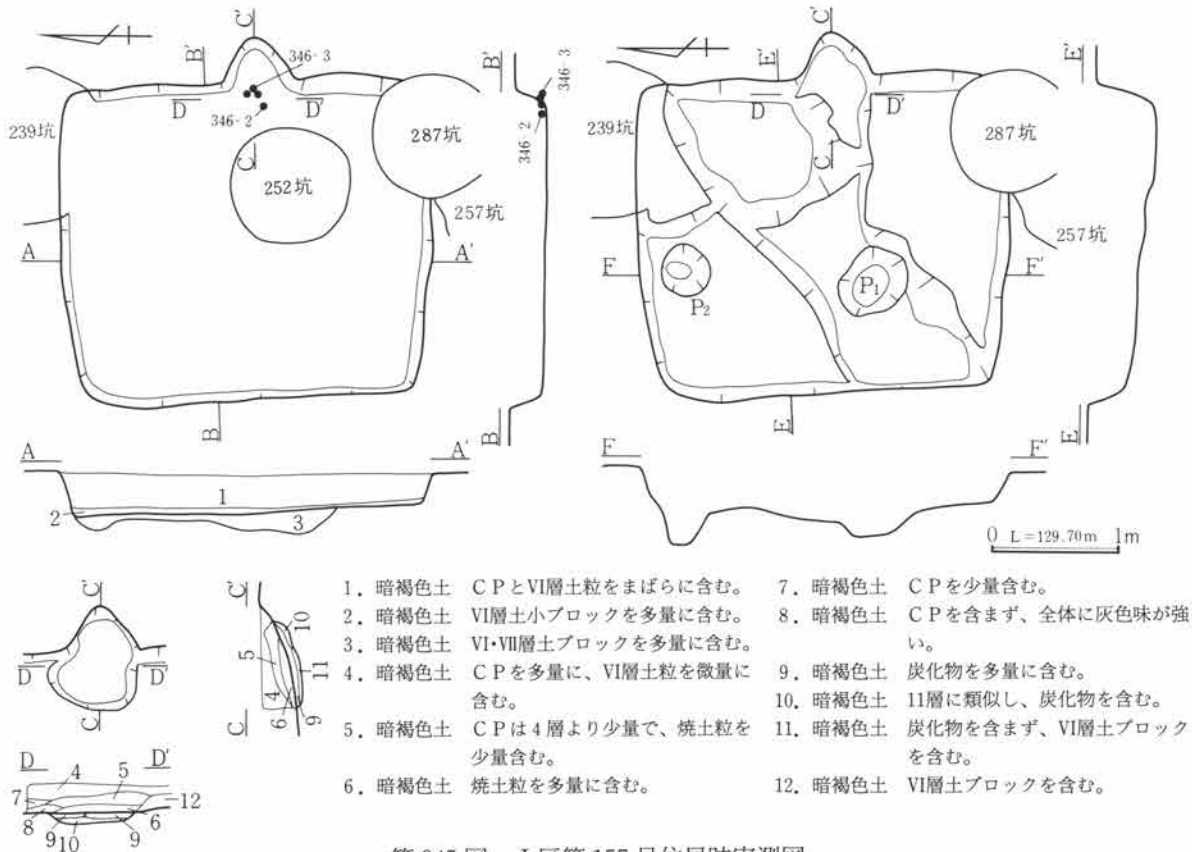
1. 暗褐色土 CPを多量にVI層土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 VI・VII層土粒を含む。
3. 暗褐色土 1・2層より含有物が全体に少なく、VII層土粒が多い。

第 343 図 I 区第 156 号住居跡実測図



第344図 I区第156号住居跡出土遺物実測図

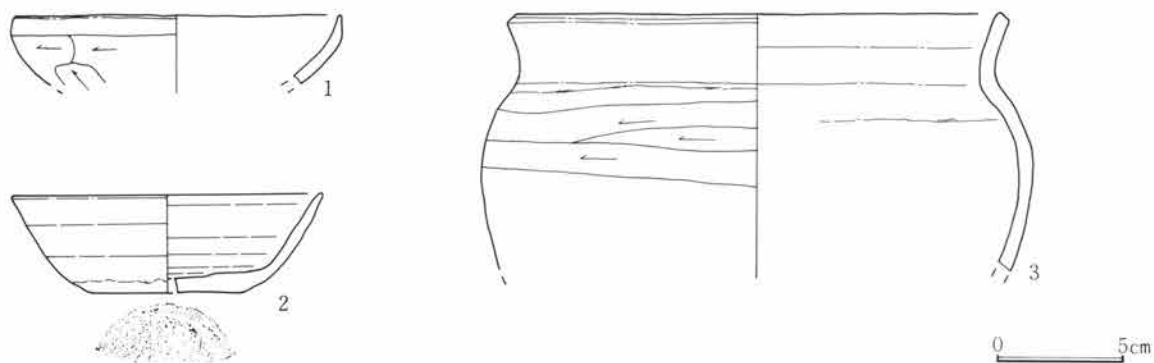
遺構名称	I区第157号住居跡	位置	39~41-I-56・57グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	2.52m×2.94m	主軸方位	東-0度-北
		残存深度	約25cm程		



第345図 I区第157号住居跡実測図

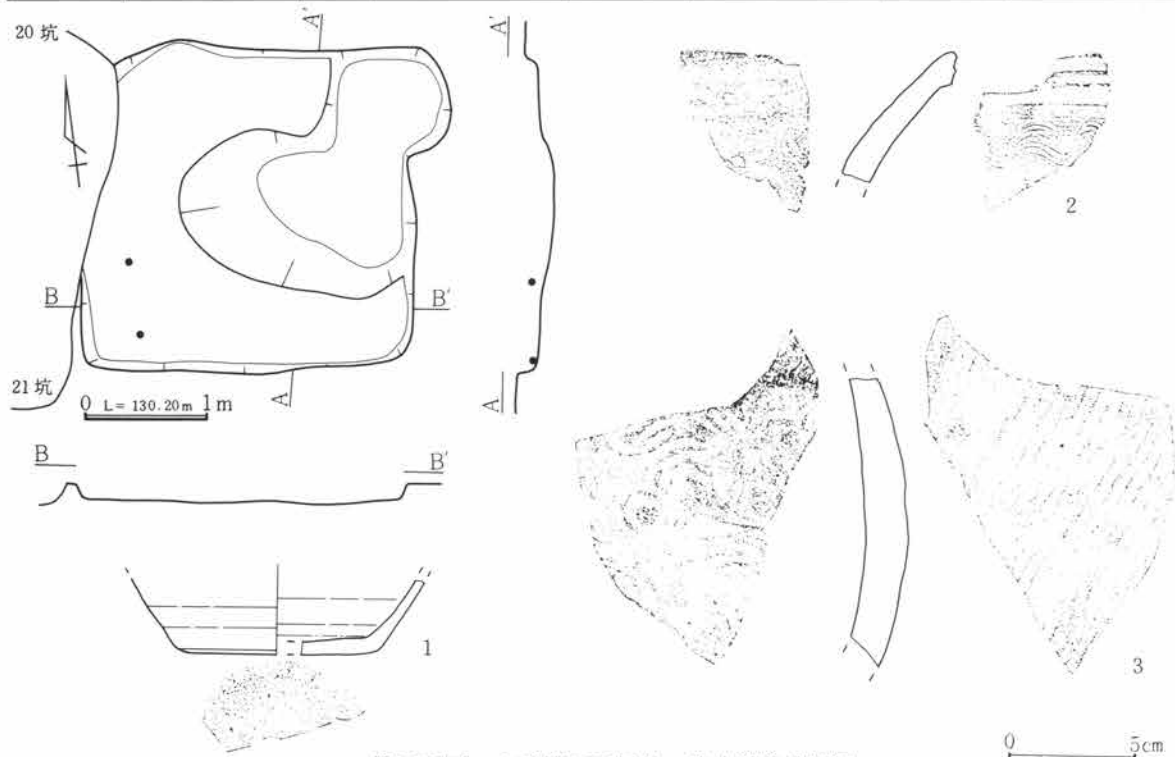
(所見) 当住居跡は第186号住居跡・第252・257・287号土坑と重複しており、遺構の検出状態等から第186号住居跡→当住居跡→第252・257・287号土坑と考えられる。また、北東コーナー部は中世以降の第239号土坑との重複によって失っている。床面はほぼ全面に貼床が施されており、この面の調査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。掘り方段階の調査でピットを2本(P₁・P₂)を検出したが、位置から柱穴とは考えられない。カマドは東壁の中央部に位置し、袖等は全く検出されておらず全体に貧弱な印象である。残存部の規模は全長約45cm、燃焼部幅約48cmで、主軸方位は東-0°-北である。

第4章 検出された遺構・遺物



第346図 I区第157号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第158号址	位置	35～37-I-76～78グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	2.64m×2.54m	主軸方位	東-6度-南	残存深度	約14cm程



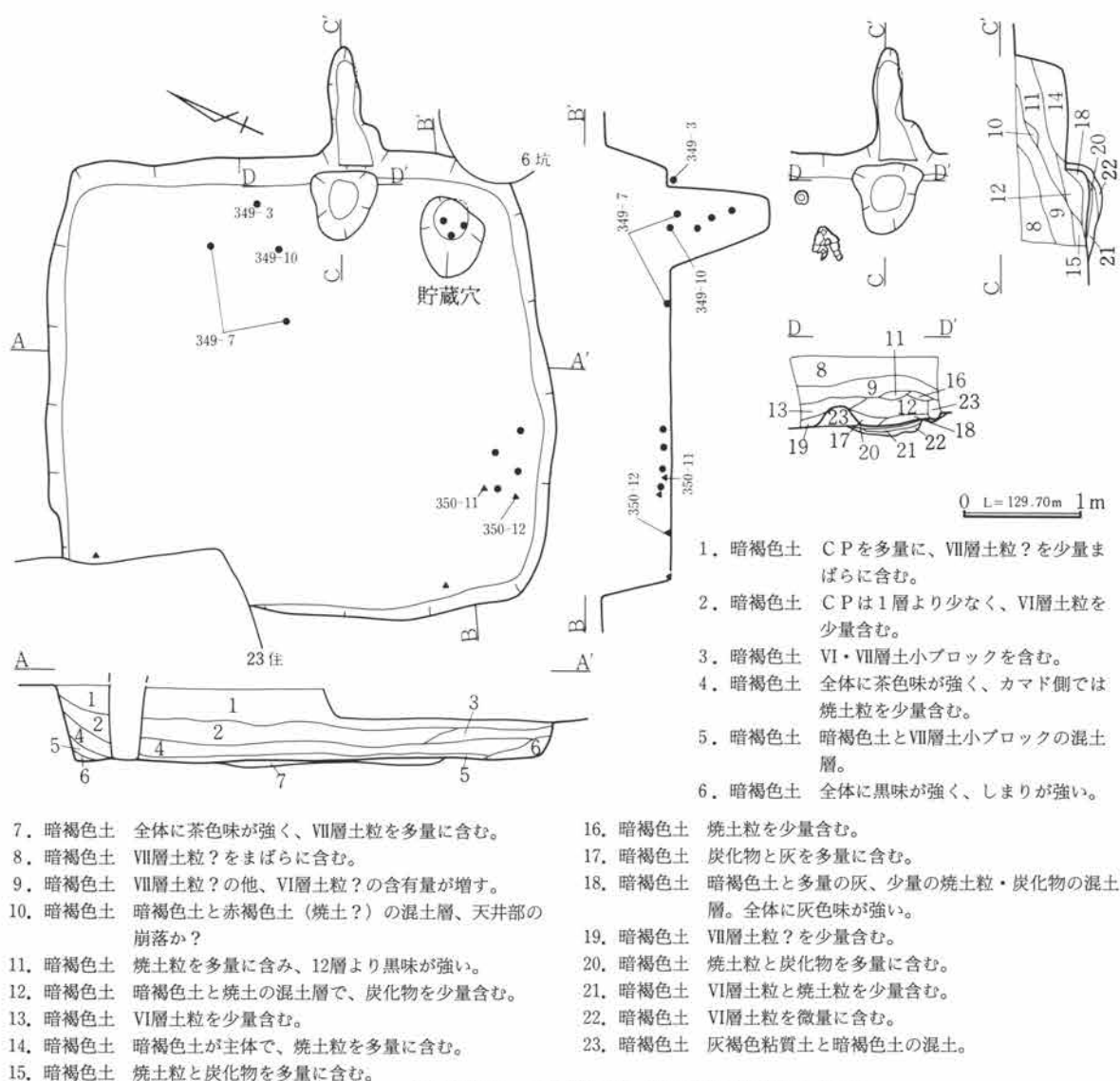
第347図 I区第158号址・出土遺物実測図

(所見) 当址は北東コーナー部が張り出した隅丸正方形の平面プランを有しており、住居である可能性が高いが、カマド・柱穴・貯蔵穴等の住居としての条件を検出することはできなかった。東側は土坑状の掘り込みがある。遺物はごくわずかで掲載したものが実測可能なものである。

遺構名称	I区第161号住居跡	位置	36～38-I-54～57グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	3.77m×4.20m	主軸方位	東-24度-北	残存深度	約50cm程

(所見) 当住居跡は第23・162号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態等から当住居跡→第23号住居跡と考えられるが、第162号住居跡との新旧関係は判然としない。遺構は深く掘り込まれており、壁等の残存状態は良好である。床面には部分的に貼床が施されていたが、第349図の掘り方段階の平面図からもわかるように、

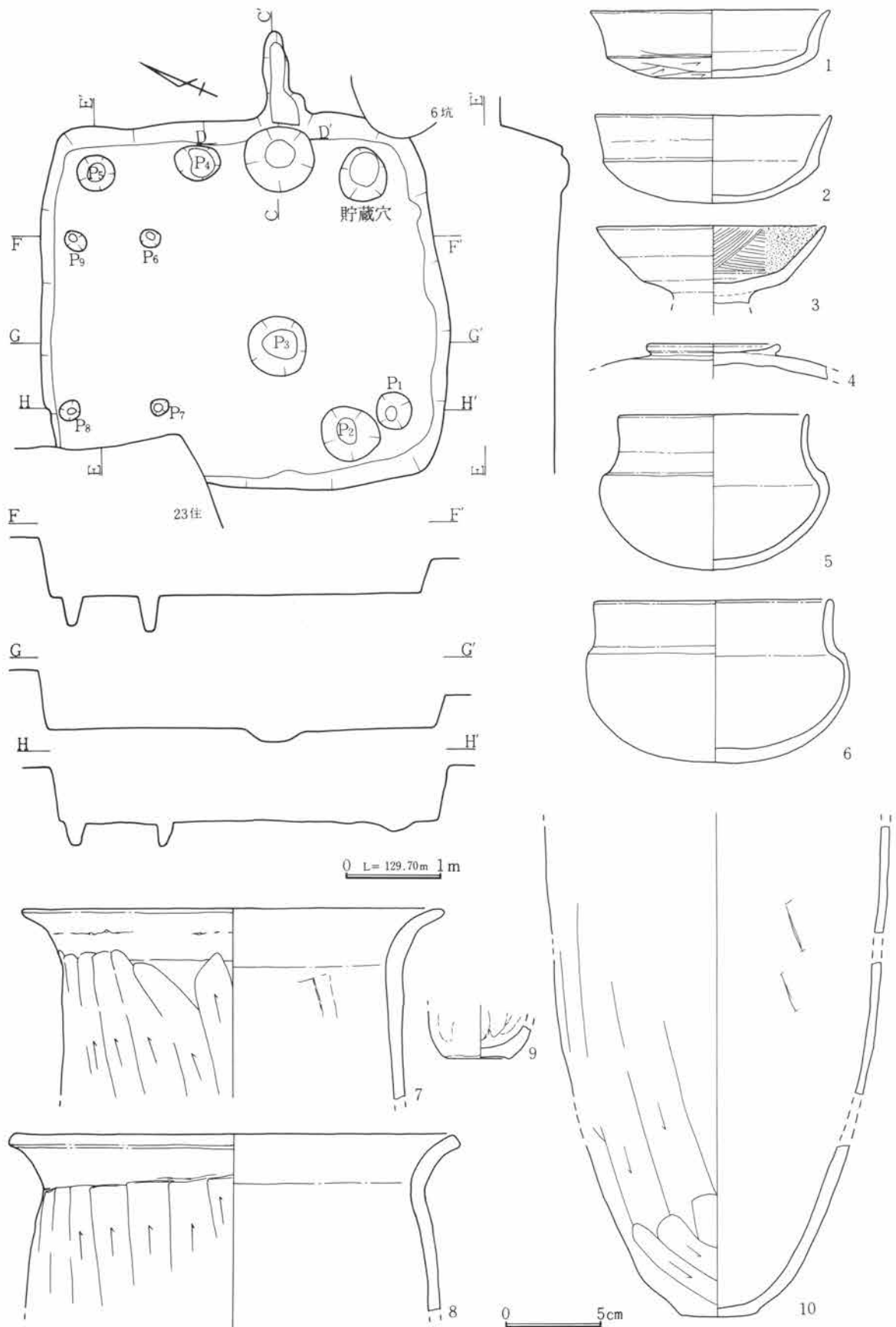
第2節 検出された遺構・遺物



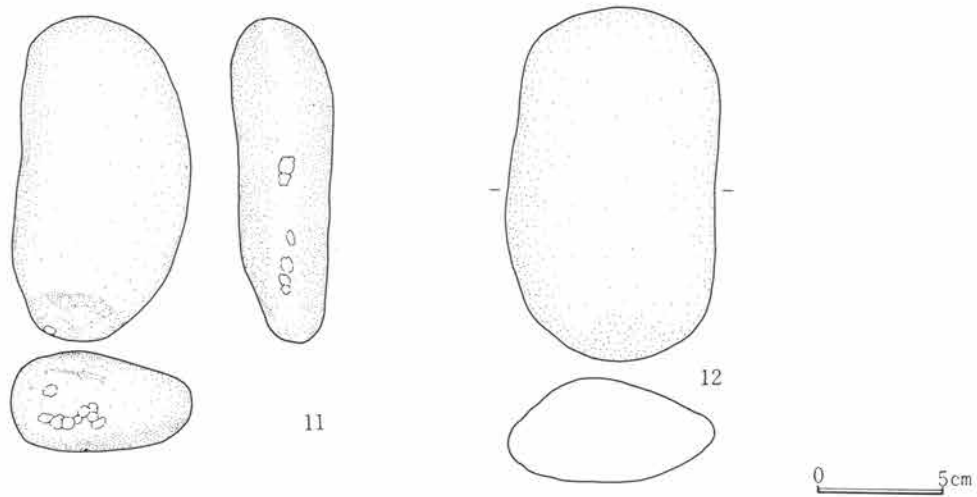
第348図 I区第161号住居跡実測図(1)

顕著な掘り込みがあるわけではなく総て薄いものである。床面の精査では壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴だけが東コーナー部から検出された。貯蔵穴は不整楕円形を呈し、規模は約66×53cm、深さ約84cmである。掘り方の調査では9本のピットを検出したが、比較的規模の大きなP₁~P₅(径約35~56cm、深さ約7~22cm)には配置・規模共に規則性が捉えられないので柱穴ではないであろう。これに対してP₆~P₉(径約19~24cm、深さ約24~36cm)の4本は、P₆~P₉間約0.8m、P₇~P₈間約0.9m、P₆~P₇間とP₈~P₉間が約1.8mと、4本が整形な長方形に配置されている。しかし、住居平面に対する位置関係は明らかに北西壁に偏っており、主柱穴ではあり得ない。

カマドは北東壁のやや南寄りに設置されているが、屋内側の残存状態はあまり良好ではない。規模は煙道のみ計測可能で、長さ約95cm、下幅約26cm、主軸方位は東-24°-北である。袖は断面観察でわずかに痕跡を検出したに過ぎないため、平面形状を完全に捉えることはできなかったが、煙道直下床面に検出した径約56cmの不整形の掘り込みが燃焼部と考えられることから、本来はこの掘り込みを挟むように両袖が屋内に張り出した凸字形平面を有していた可能性が高い。煙道は上記のような規模を有し、燃焼面から一段上がった位置からトンネル状に壁を掘り抜いていたものと思われる。

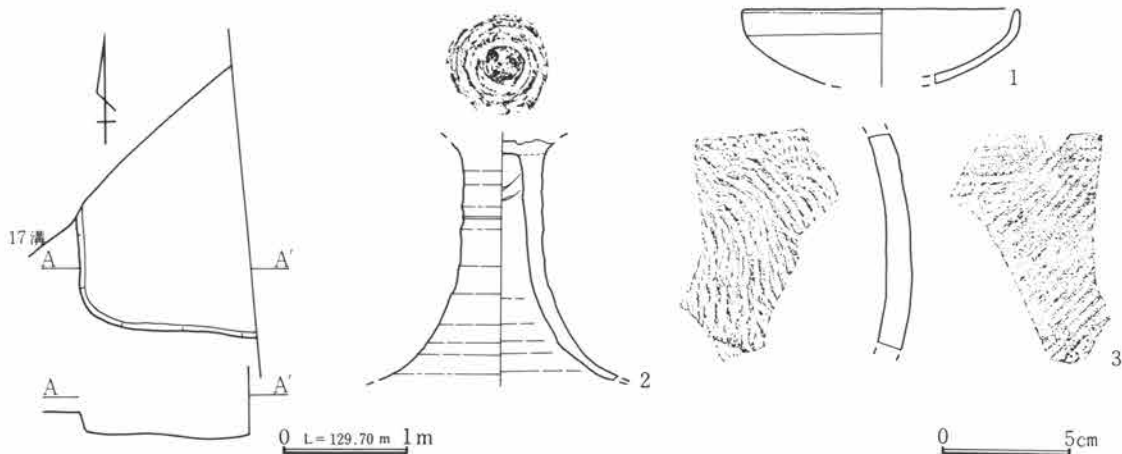


第349図 I区第161号住居跡(2)・出土遺物実測図(1)



第350図 I区第161号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第164号住居跡		位置	42・43-I-56・57グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約20cm程



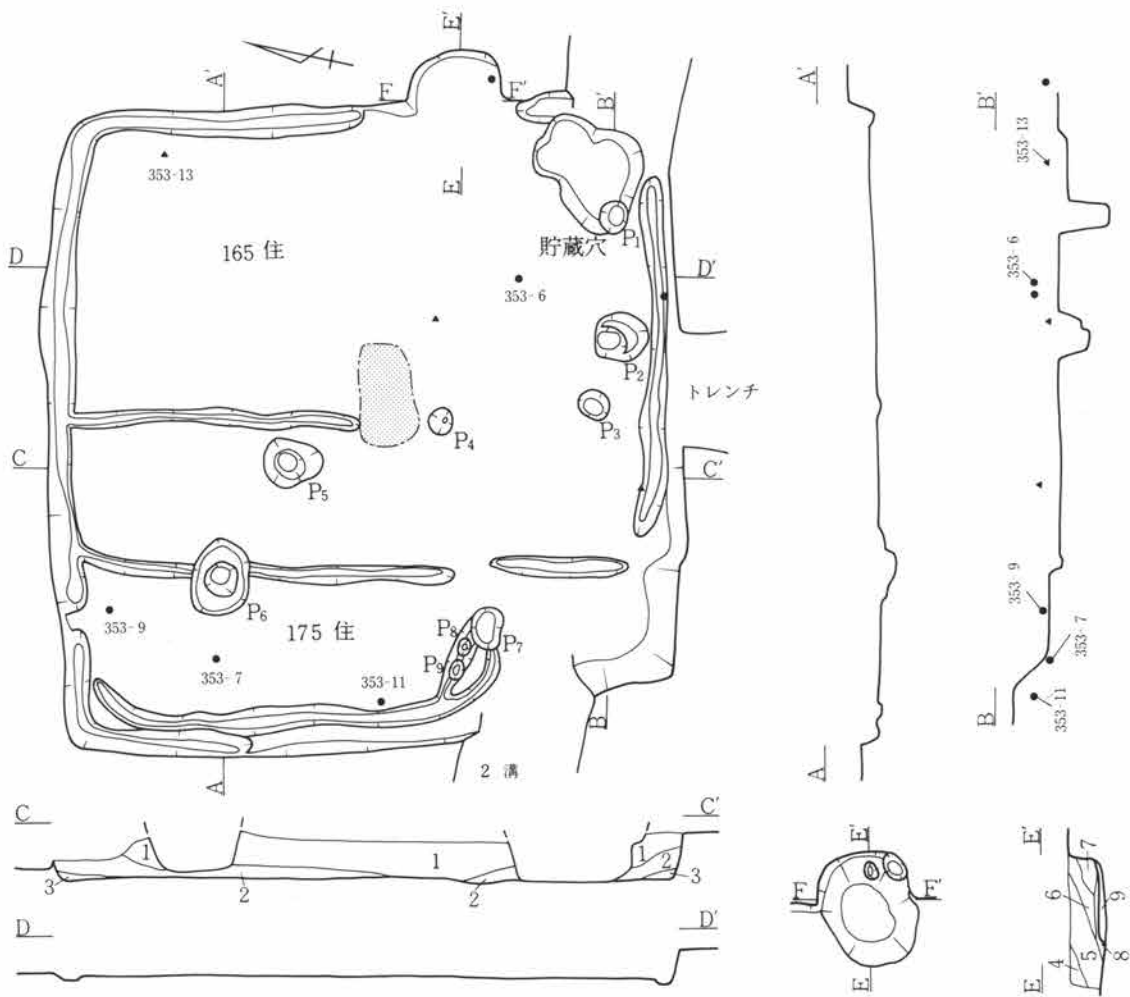
第351図 I区第164号住居跡・出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は大半が調査区外であり、北側は第17号溝状遺構との重複で不明となっているため、結果的に南西コーナー部だけを検出することができた。検出部床面に貼床はなく、この面の精査によって壁溝・柱穴等は検出されていない。住居としての条件は満たしていないが、壁等の状態から住居跡として扱った。

遺構名称	I区第165号住居跡		位置	29～32-I-56～58グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.75m×4.97m	主軸方位	東-10度-北	残存深度	約24cm程

遺構名称	I区第175号住居跡		位置	29～31-I-58・59グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.75m×3.43m	主軸方位	東-10度-北	残存深度	約16cm程

(所見) 第165・175号住居跡は第142・143・188号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態から第188号住居跡→第175号住居跡→第165号住居跡→第143号住居跡→第142号住居跡という新旧関係が想定できる。当両住居跡の床面はほぼ同一面であり、貼床は全く施されておらずVII層土を直に床面としている。こ



- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. 暗褐色土 CP・焼土粒・VI層土粒を含む。 | 6. 暗褐色土 焼土粒・ブロックを多量に含む。 |
| 2. 暗褐色土 1層よりもCPは少なく、粘性が強い。 | 7. 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む。 |
| 3. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。 | 8. 暗褐色土 焼土粒を少量、灰を多量に含む。 |
| 4. 暗褐色土 CP・焼土粒・炭化物を少量含む。 | 9. 暗褐色土 焼土粒を微量に含む。 |
| 5. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を含む。 | |

0 L= 130.60m 1m

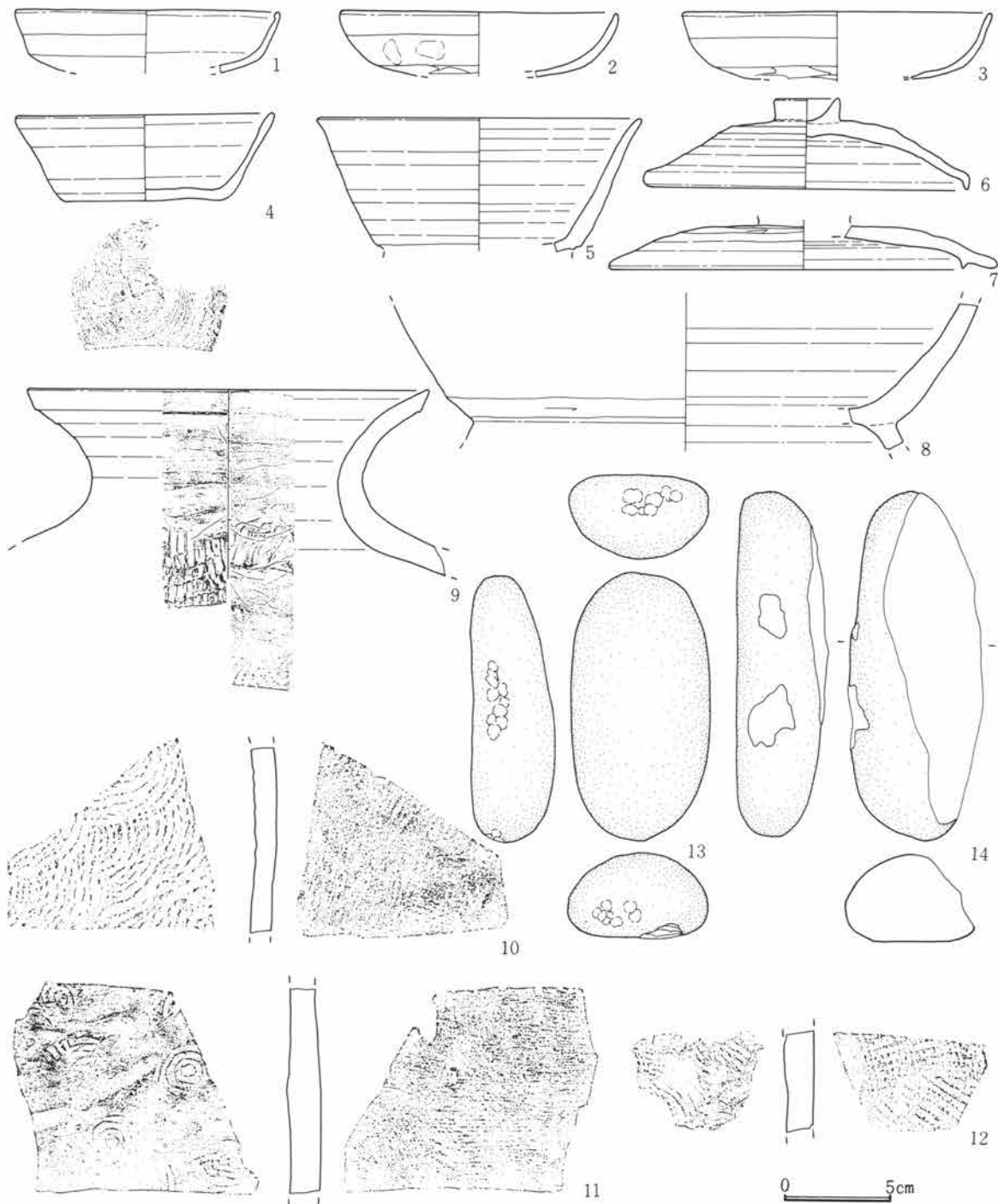
第352図 I区第165・175号住居跡実測図

の床面の精査では両住居跡の壁溝と第165号住居跡の貯蔵穴、及び第175号住居跡のカマドの痕跡を検出した。第165号住居跡の壁溝はカマド部分を除いて全周しており、規模は下幅約5～15cm、深さは5cm程度である。貯蔵穴は東コーナー部に位置しており、約104×73cm、深さ約12cmの規模を有する不整形の掘り込みである。南コーナーは第352図に示した高低差のある部分ではなく、P₉を通過するように掘削された壁溝と南東壁溝の交わる部分であろう。

第165号住居跡のカマドは北東壁の南寄りに位置しており、半円形を呈し、検出部の規模は全長約52cm、燃焼部幅約67cm、主軸方位は東-10°-北である。袖は残存していないが、屋内には張り出さないタイプである可能性が高い。

第175号住居跡は第165号住居跡の北西壁と共通する位置関係にあり、壁溝は南東壁とカマド部分を除いて巡らされている。カマドは北東壁の南寄りに設置されたものと考えられ、約80×40cmの長方形の焼土面が残存したに過ぎない。ピットはP₄～P₉までが当住居跡に伴うものと思われるが、位置的に柱穴や貯蔵穴とみられるものはない。

第2節 検出された遺構・遺物

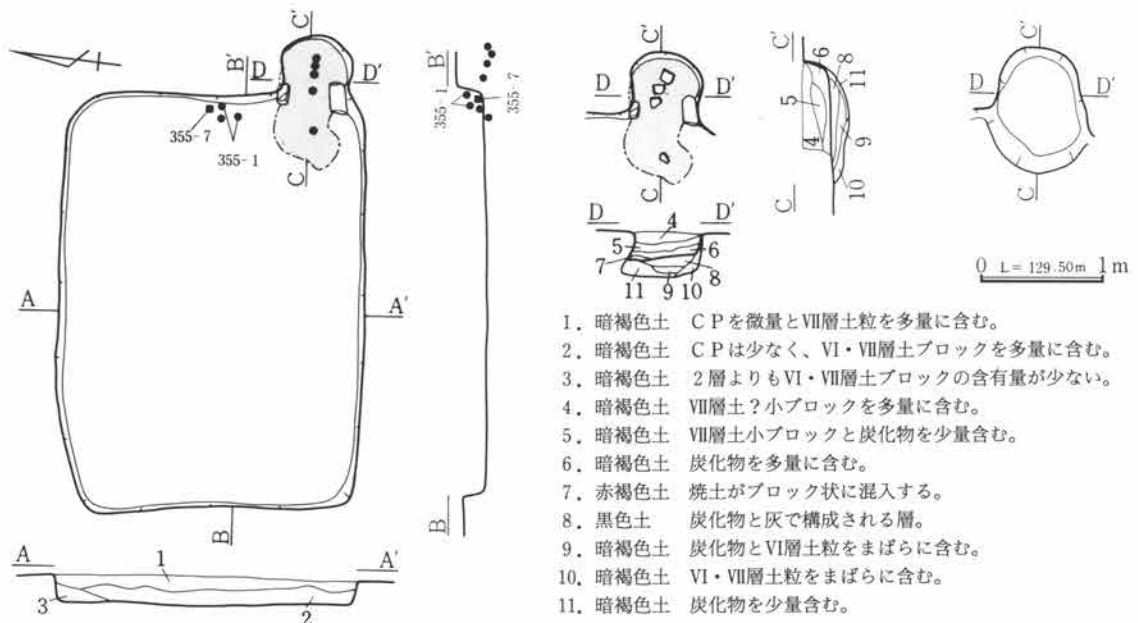


第353図 I区第166号住居跡出土遺物実測図

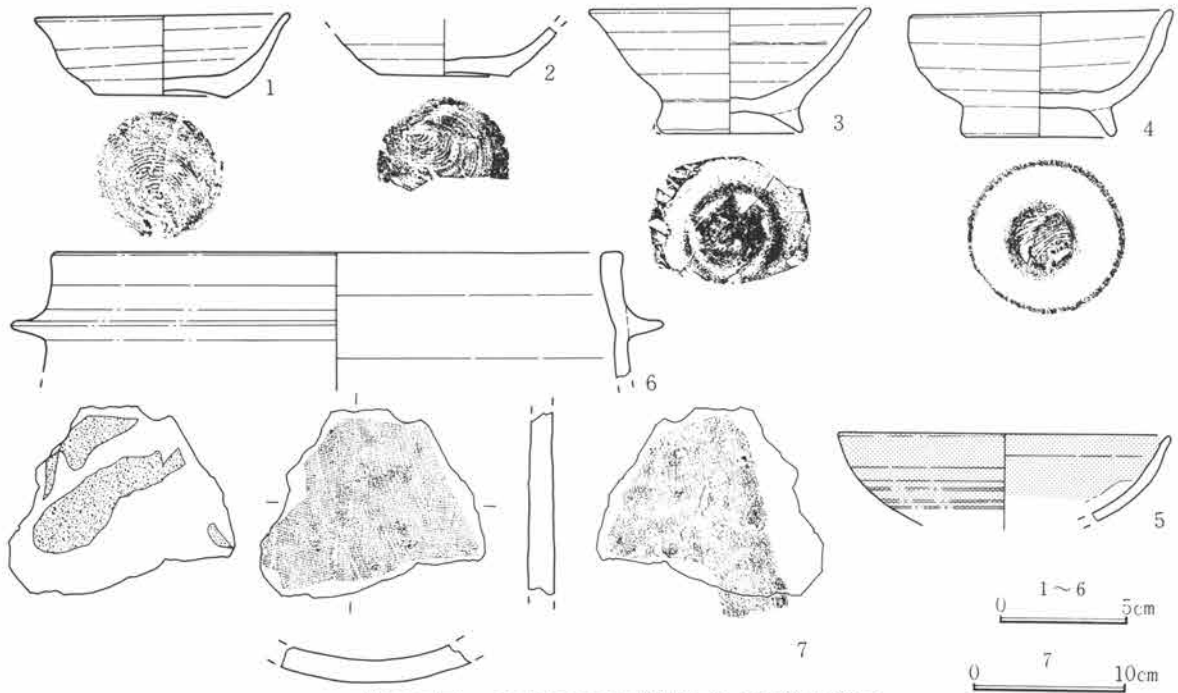
遺構名称	I区第166号住居跡	位置	25・26-I-57~59グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.25m×2.41m	主軸方位	東-4度-北	残存深度	約20cm程

(所見) 当住居跡は第176号住居跡・第215号址と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も新しい時期の遺構と考えられる。掘り込みは浅く、壁の残存状態はあまり良好ではない。床面は大半が他の遺構内に構築されているため判然としないが、北側部分はVII層土を直に床面としており貼床は施されなかつたものと思われる。この面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴のいずれも検出されなかった。

第4章 検出された遺構・遺物



第354図 I区第166号住居跡実測図

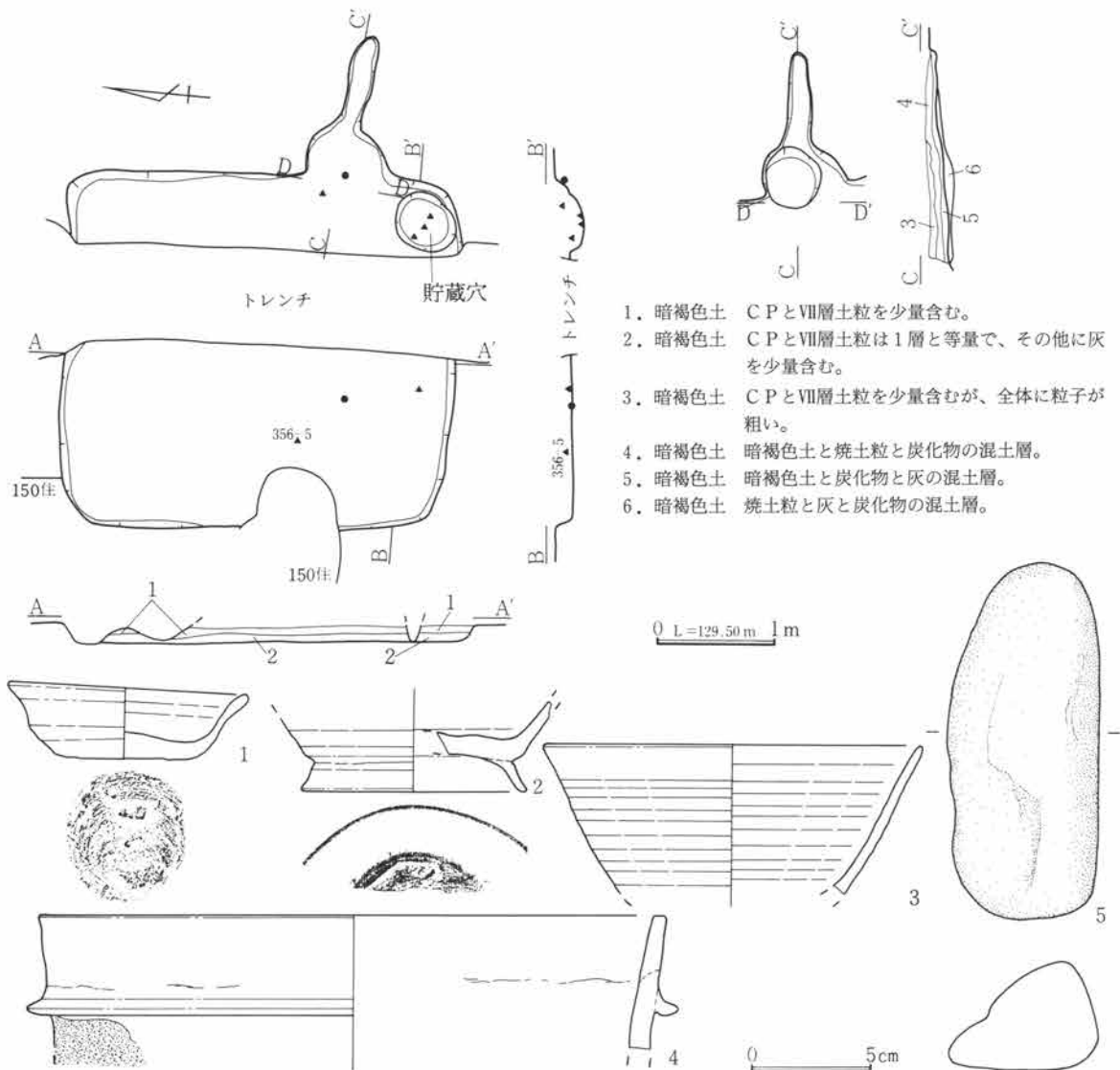


第355図 I区第166号住居跡出土遺物実測図

カマドは東壁の南に偏って設置されており、袖が屋内に張り出さない馬蹄形状の平面形をしている。検出部分の規模は、全長約60cm、燃焼部幅約51cmで、主軸方位は東-0°-北である。袖は両袖共に角柱状の截石を使用しており、壁との接合部に据えられていた。燃焼部から屋内に張り出すように灰面が広がっており、この面上から遺物がわずかに出土している。

遺構名称	I区第167号住居跡		位置	26~28-I-56~58グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.84m×3.24m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約13cm程

第2節 検出された遺構・遺物

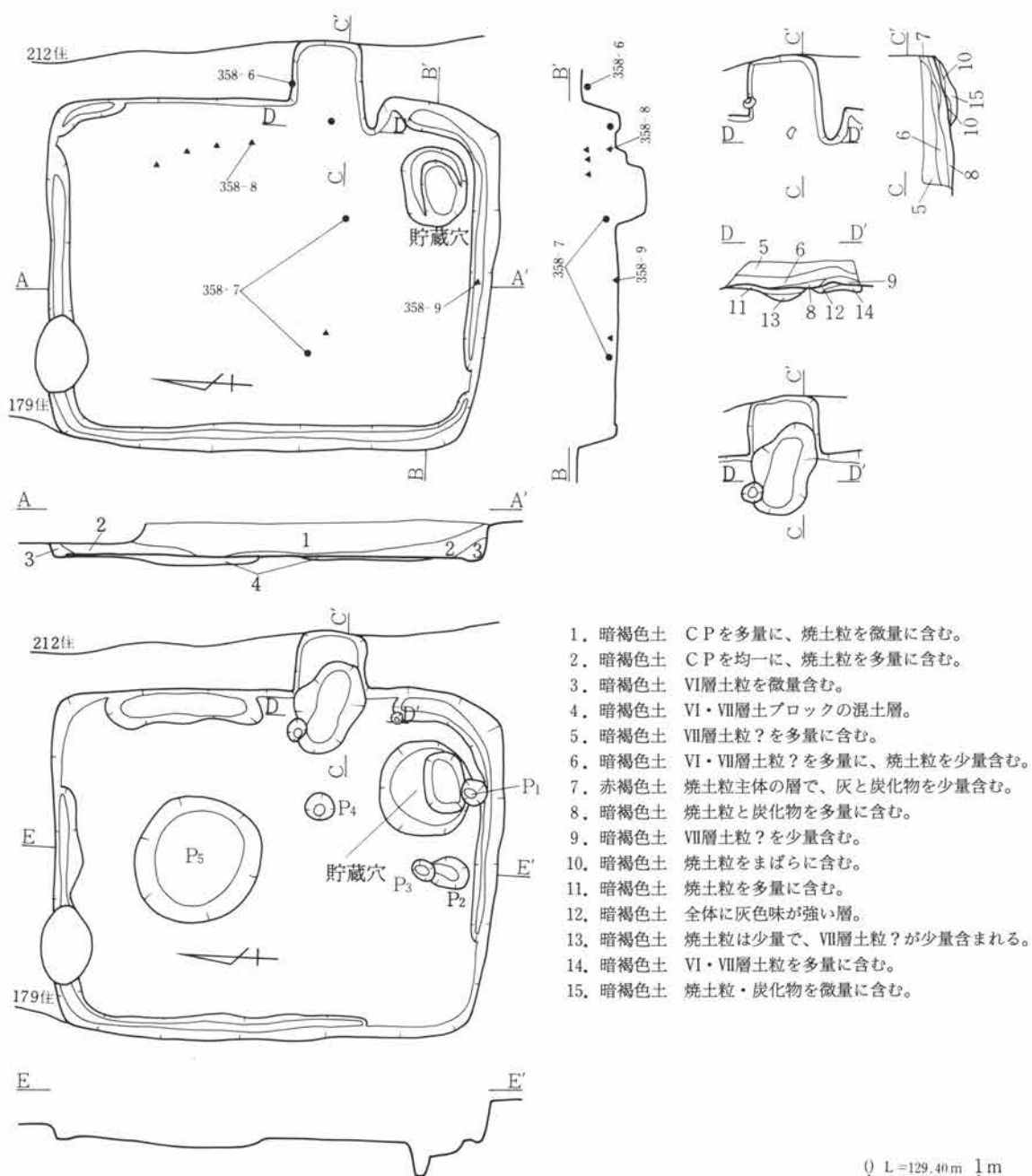


第356図 I区第167号住居跡・出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第150号住居跡と重複しているが、遺構の残存状況等から当住居跡→第150号住居跡であろう。遺構の掘り込みが浅いため確認面からの残存は不良である。床面に貼床が施された痕跡はなく、この面の精査によって壁溝・柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており、約55×44cm、深さ約12cmの楕円形を呈している。カマドは東壁の南寄りに設置されており、凸字形の平面を有している。検出部分の規模は全長約125cm、燃烧部幅約64cm、煙道長約80cm、下幅約17cmで、主軸方位は東-10°-南である。袖の構築材は検出されておらず、掘り方の調査でも据え方等の痕跡は認められなかった。

遺構名称	I区第168号住居跡	位置	30~32-I-50~52グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.09m×3.90m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約32cm程

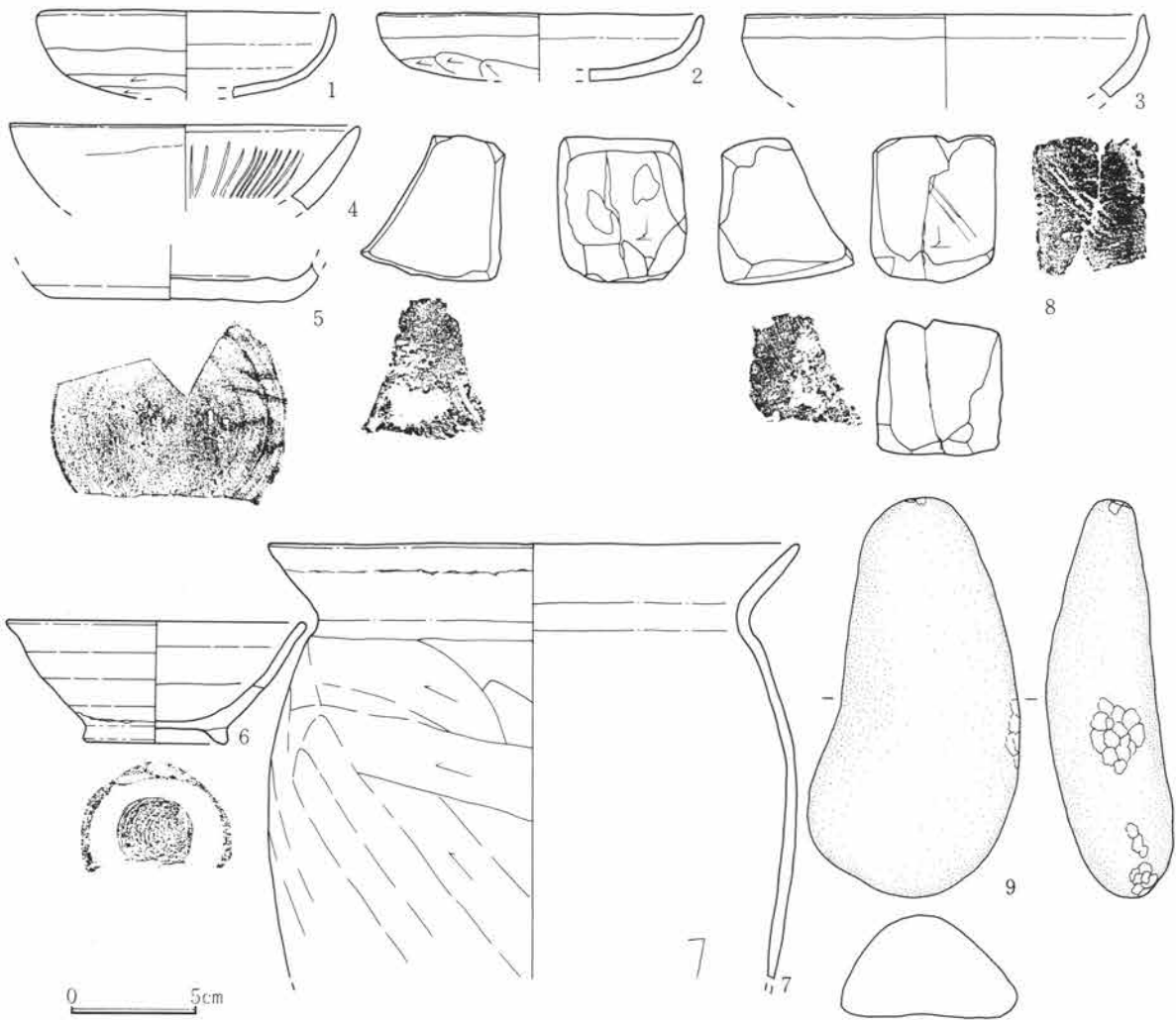
(所見) 当住居跡は第179号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡→第179号住居跡と考えられる。また、カマドの一部は調査区外にかかっており未調査の部分がある。平面プランの確認は、弥生時代の第212号住居跡の覆土内で行ったが、この住居跡の覆土がVII層土ブロックを主体とするものであったため、比較的容易に検出することができた。壁はほぼ全周良好な状態で残存しているが、南東コーナー付近は



第357図 I区第168号住居跡実測図

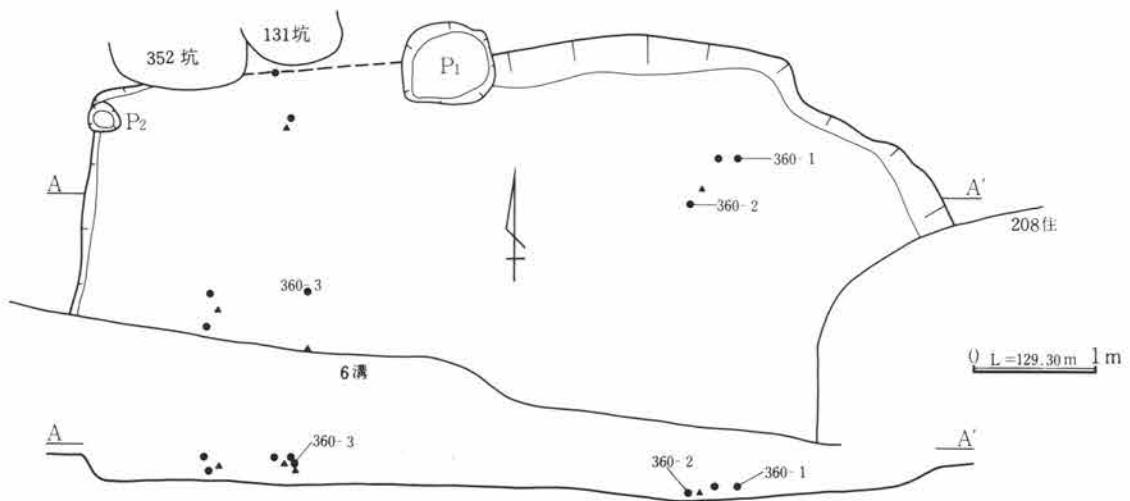
他の壁と比較してあきらかに緩い傾斜となっており、若干の崩落が想定できる。床面は部分的にVI・VII層土ブロックを主体とした貼床が施されていたものと思われる。この床面の精査では、壁溝と貯蔵穴を検出したが、柱穴は検出されなかった。掘り方の調査でもP₅(径約110cm、深さ約8cm)のような大型の円形ピットの他にいくつかの小ピットを検出しているが、いずれも規則的配置は認められないことから柱穴は当初から掘削されなかったものと判断した。壁溝は、床面精査の段階では東壁部に検出することはできなかったが、掘り方段階で検出されたので、ほぼ全周巡らされていたものであろう。壁溝の規模は、下幅約5~11cm、深さ約3~5cmである。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており約70×56cm、深さ約28cmの楕円形を呈している。

カマドは幅約55cmの燃焼部のみ検出したが、その形状から本来は凸字形平面を有するタイプと思われる。袖は、右袖がわずかに張り出して残存しているが、構築材は検出されていない。



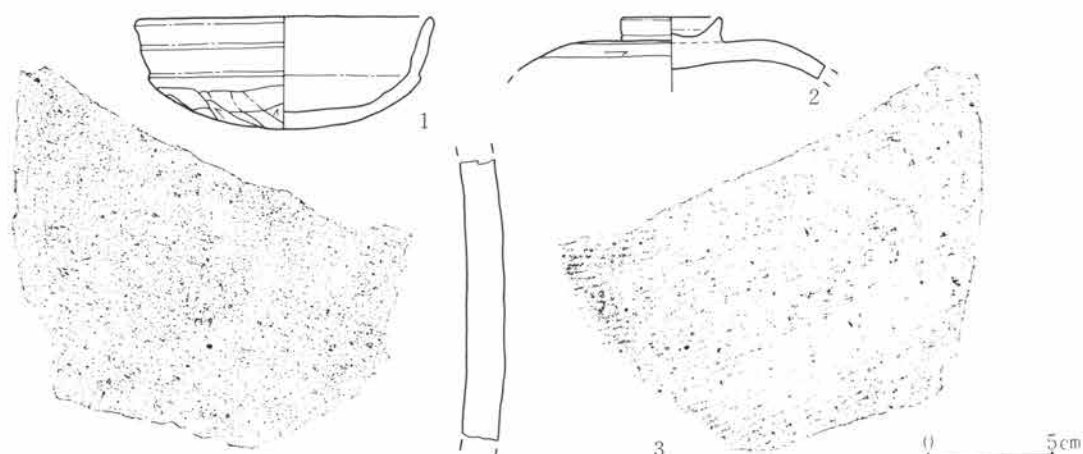
第358図 I区第168号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第171号址	位置	20・21-I-61~64グリッド内		
平面形態	—	規模	—m×6.75m	主軸方位	—
		残存深度	約18cm程		



第359図 I区第171号址実測図

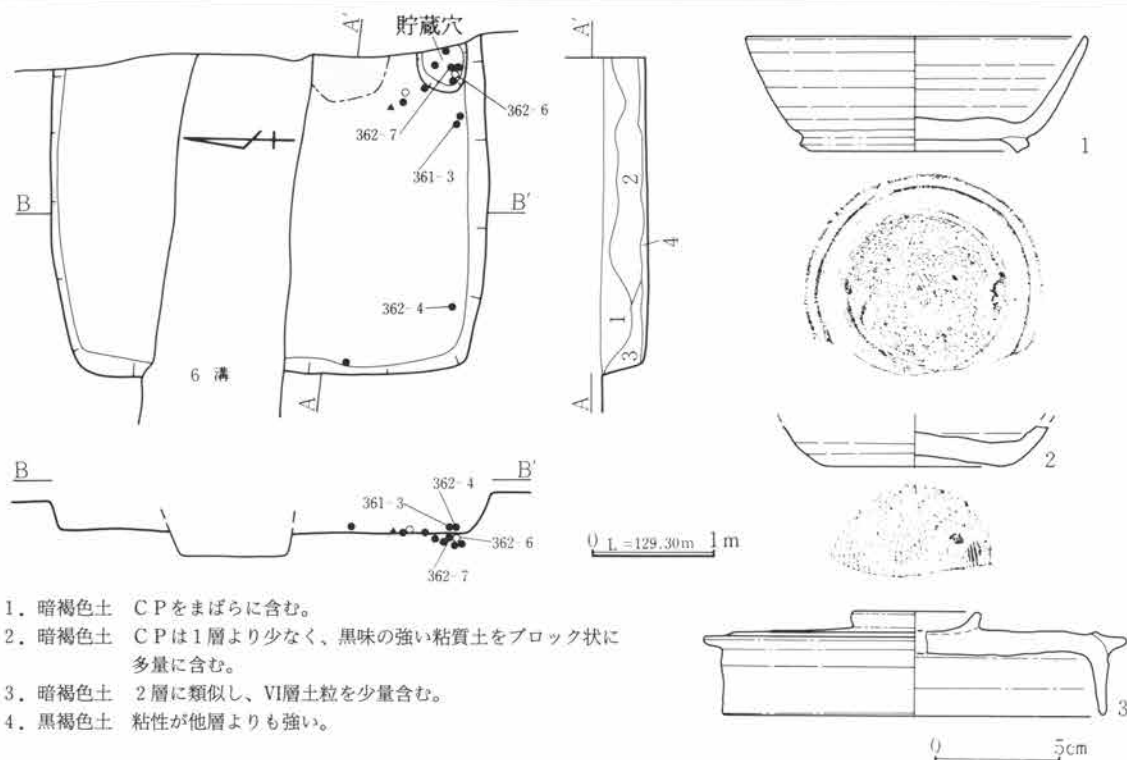
第4章 検出された遺構・遺物



第360図 I区第171号址出土遺物実測図

(所見) 当址は第208号住居跡によって東側を切られている他、南側の大半は中世以降の第6号溝状遺構によって削平されているため、全体形を捉えることができなかった。西側の壁は直線的であるのに対して、北から東壁は弧状であり、2基以上の遺構の重複である可能性もある。底面はほぼ平坦に構築されており、住居に伴うような施設を想定させるようなものは検出されていない。

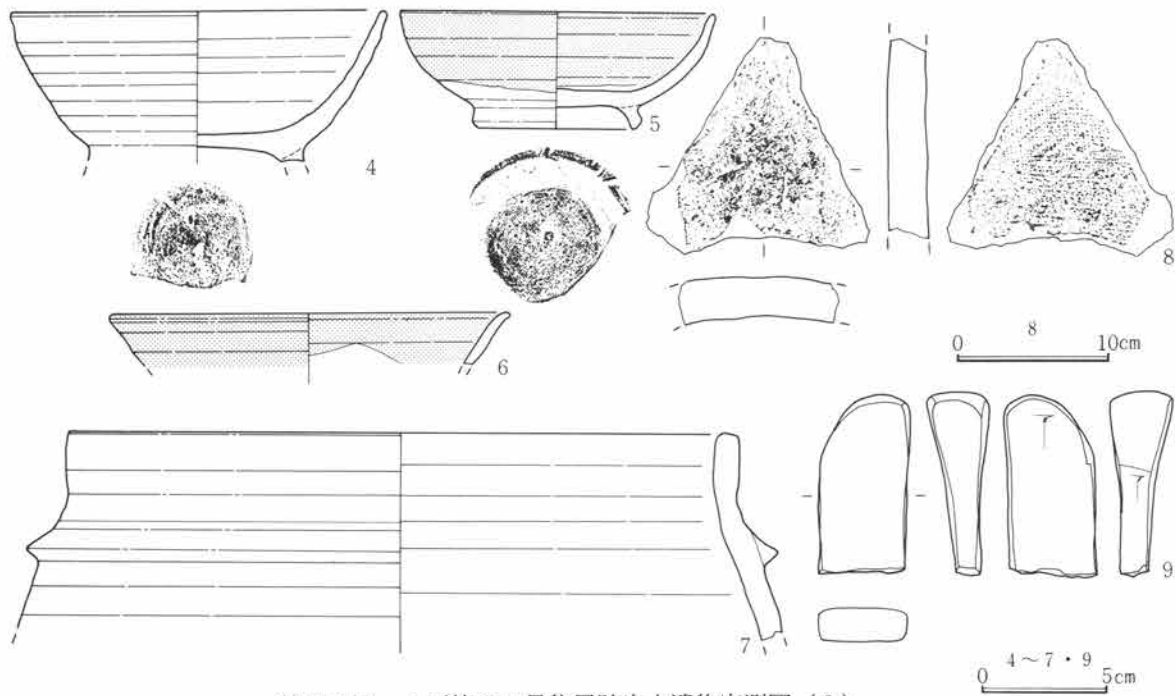
遺構名称	I区第174号住居跡	位置	16~18-I-49・50グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	1m×3.47m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約30cm程



1. 暗褐色土 CPをまばらに含む。
2. 暗褐色土 CPは1層より少なく、黒味の強い粘質土をブロック状に多量に含む。
3. 暗褐色土 2層に類似し、VI層土粒を少量含む。
4. 黒褐色土 粘性が他層よりも強い。

第361図 I区第174号住居跡・出土遺物実測図(1)

(所見) 当住居跡は当該期の遺構との重複はみられないが、カマドを含む東壁部が調査区外にかかっており、住居の主要部分は未調査な上、中央を南北に攪乱されており残存状態はあまり良好ではない。平面プランの確認はIV層土中であり、浅間C軽石の含有量で識別することができた。検出部分の壁の状態は良好で、覆土



第362図 I区第174号住居跡出土遺物実測図(2)

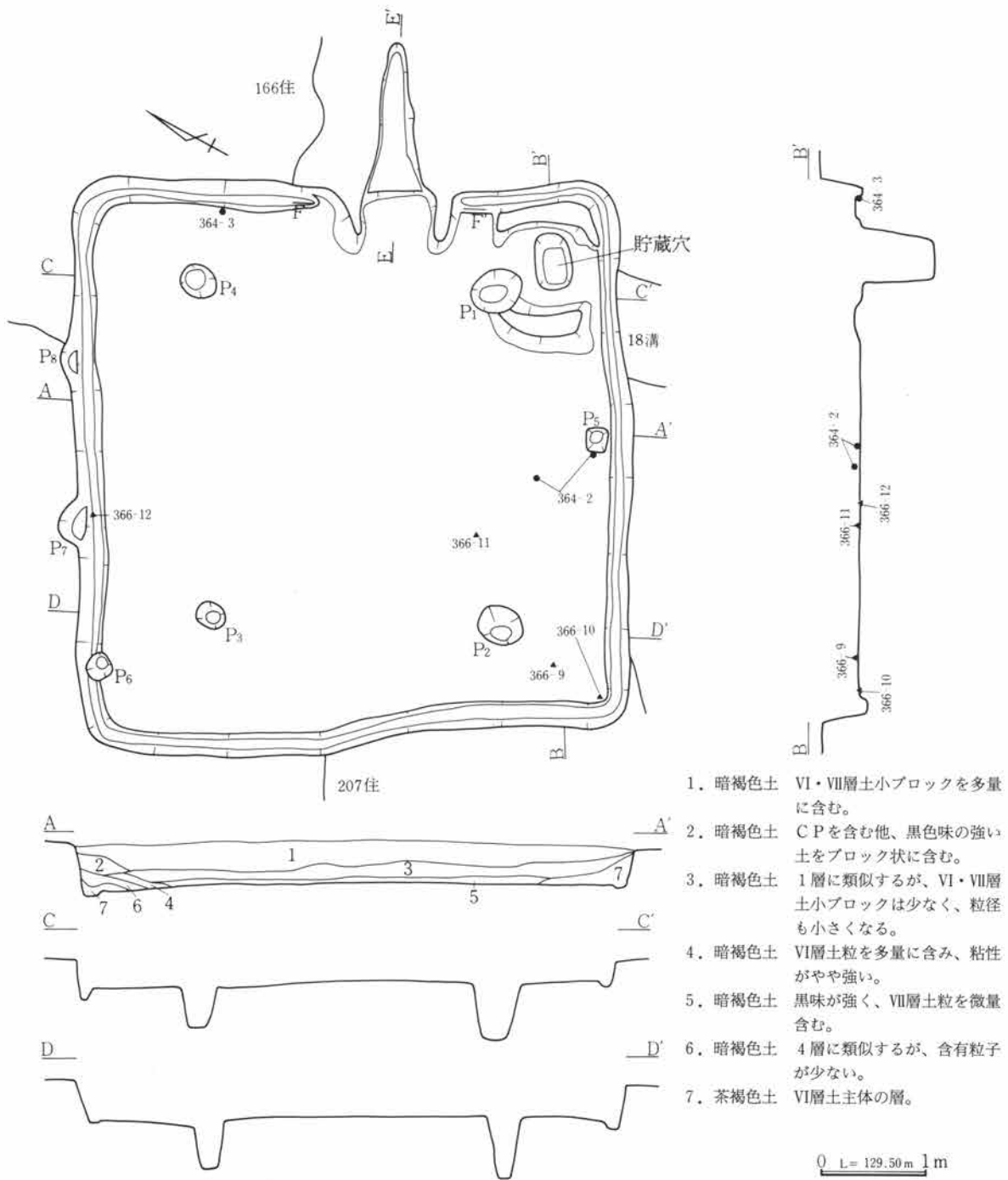
の堆積状態にも不自然な状態は観察されなかった。床面はVI層土中に直に構築されており、貼床の施された部分はみられない。この面の精査で壁溝・柱穴は検出されず、調査区際に貯蔵穴のみ検出することができた。貯蔵穴は南東コーナー部に当たると考えられ、径約40cm、深さ約14cmの円形を呈していたものと思われる。

カマドは東壁の南寄りに設置されていたものと考えられ、貯蔵穴北側に掻き出された灰面を検出した。

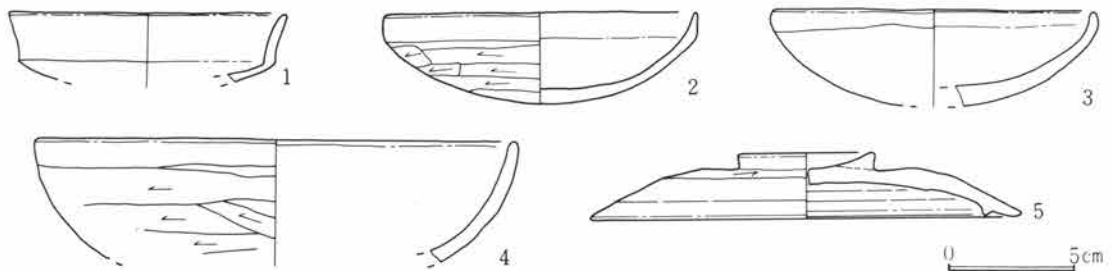
遺構名称	I区第176号住居跡		位置	22~26-I-57~61グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.35m×5.20m	主軸方位	東-27度-北	残存深度	約33cm程

(所見) 当住居跡は第166・207・248号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態から第207号住居跡→当住居跡→第166・248号住居跡と考えられる。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、IV・VII層土ブロックを多量に含む覆土であるため容易に検出することができた。床面は大半がVII層土中に直に構築されていたが、北コーナー部分のみ掘り窪められており貼床が施されていた。この床面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴が検出された。壁溝はカマド部分を除いて全周検出され、規模は下幅約5~13cm、深さ約4~9cmである。柱穴はP₁~P₄(径約25~40cm、深さ約38~58cm、柱穴間距離P₁~P₂間約3.2m、P₂~P₃間約2.7m、P₃~P₄間約3.1m、P₄~P₁間約2.8m)の4本であり、掘り方の段階でもこの柱穴配列以外の柱穴は検出されていない。貯蔵穴は東コーナー部に位置しており、約52×35cm、深さ約71cmの長方形を呈している。この貯蔵穴の周囲には5cm程度の周堤状の高まりが痕跡的に認められることから、本来は方形に囲まれていたものと思われる。これらの施設の他に南東壁中央に接するように検出した方形のP₅(約23×30cm、深さ約23cm)は、位置から判断して入口施設にかかわるものではないだろうか。

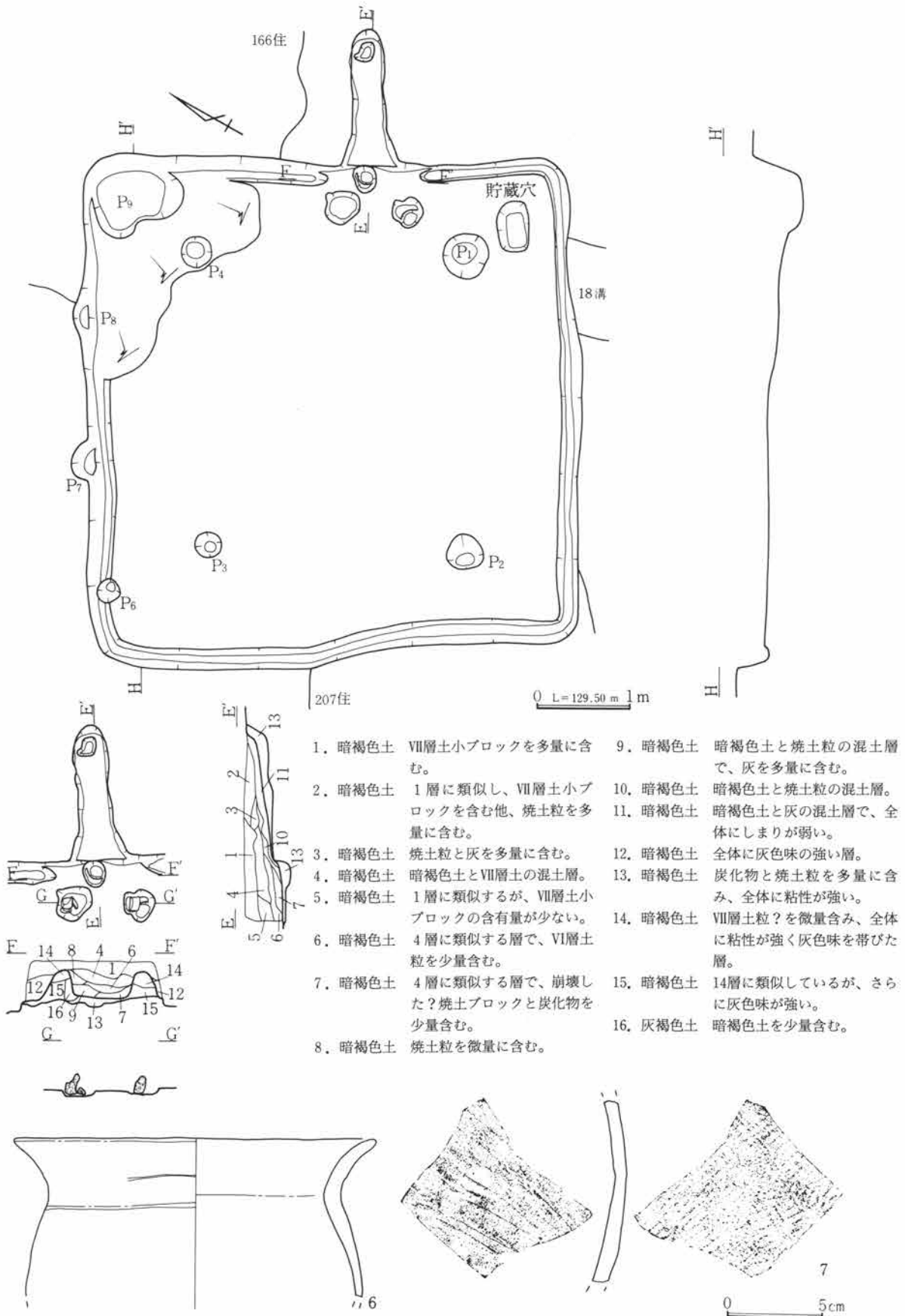
カマドは北東壁の中央やや南寄りに設置されており、袖が屋内に張り出した凸字形平面のタイプである。検出部の規模は、全長約200cm、燃焼部幅約60cm、燃焼部奥行き約55cm、煙道長約137cm、下幅約21cmで、主軸方位は東-27°-北である。掘り方の調査では袖の先端部に当たる位置から袖の構築材とその据え方を、また、左袖寄りの壁に接するように円形の支脚の据え方が検出されている。



第363図 I区第176号住居跡実測図(1)

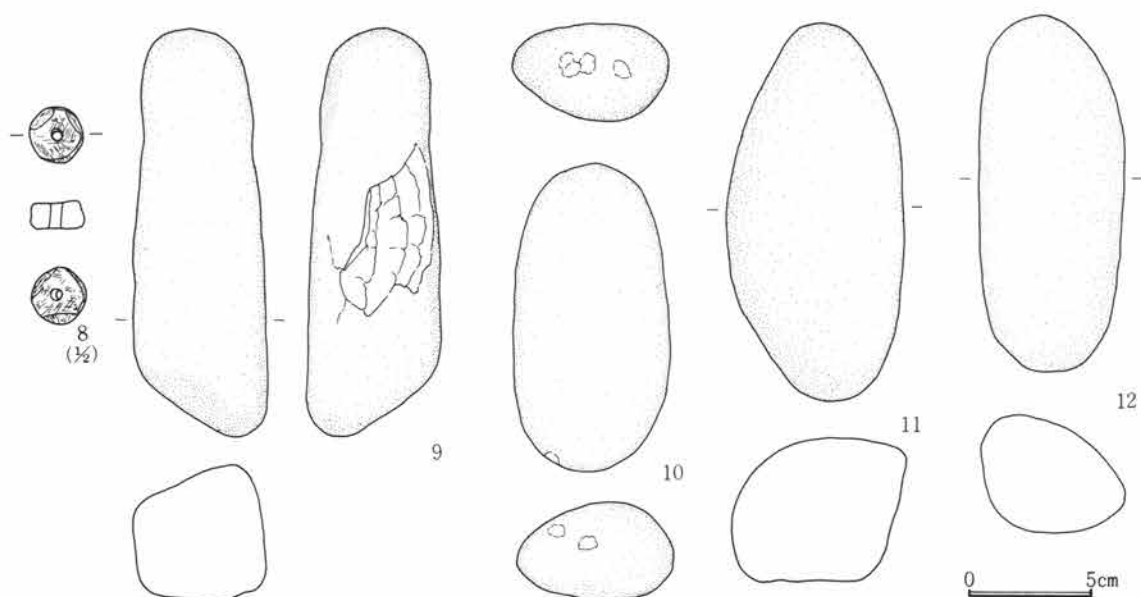


第364図 I区第176号住居跡出土遺物実測図(1)



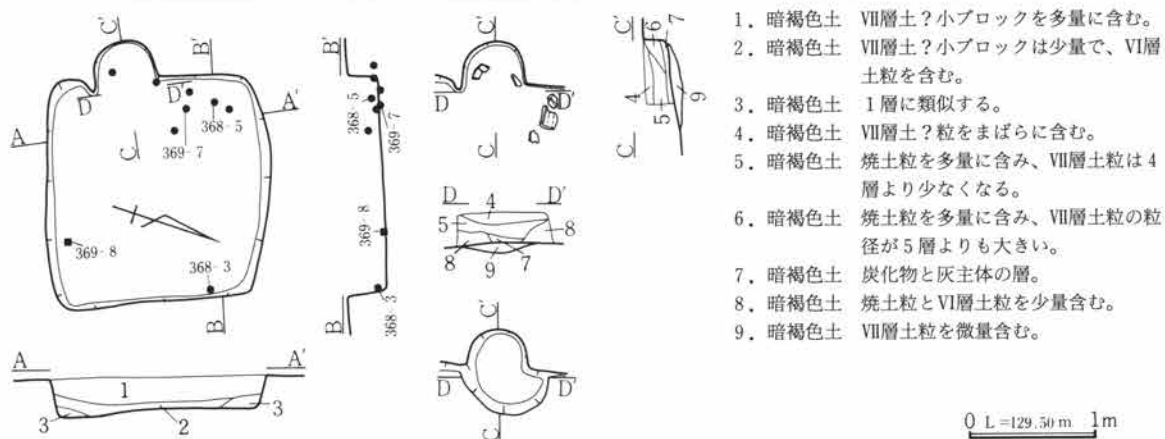
第365図 I区第176号住居跡(2)・出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

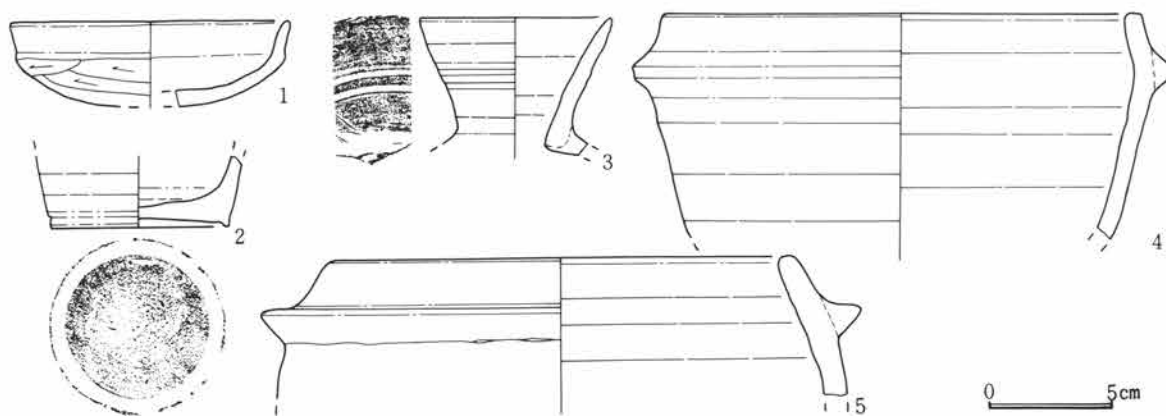


第366図 I区第176号住居跡出土遺物実測図(3)

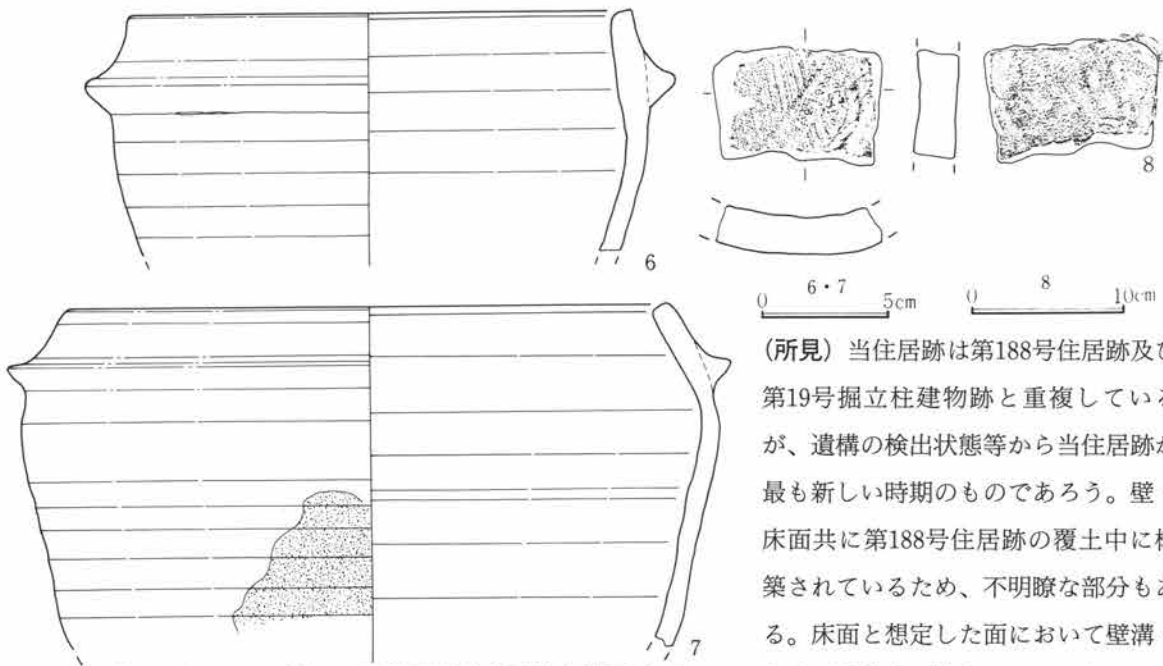
遺構名称	I区第177号住居跡	位置	33・34-I-56・57グリッド内
平面形態	隅丸方形	規模	1.75m×1.76m
		主軸方位	西-20度-南
		残存深度	約28cm程



第367図 I区第177号住居跡実測図



第368図 I区第177号住居跡出土遺物実測図(1)



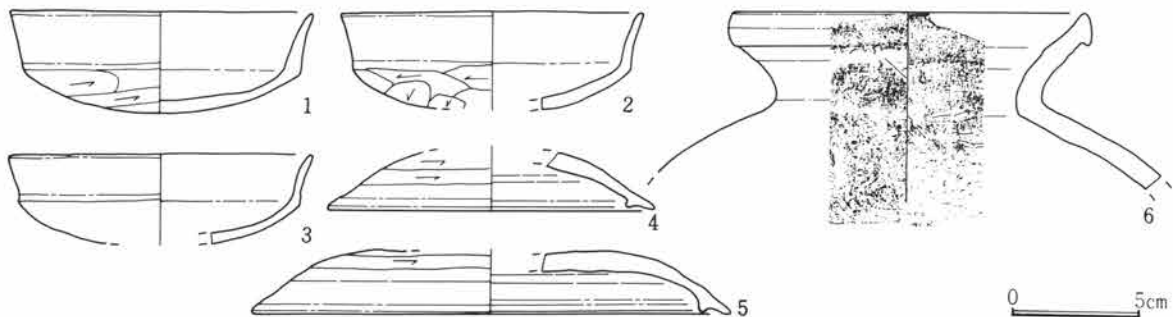
第369図 I区第177号住居跡出土遺物実測図(2)

(所見) 当住居跡は第188号住居跡及び第19号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も新しい時期のものであろう。壁・床面共に第188号住居跡の覆土中に構築されているため、不明瞭な部分もある。床面と想定した面において壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。カマドは南西壁の南寄りに設置されており、袖がわずかに張り出した半円状の平面を有している。検出部分の規模は全長約40cm、燃焼部幅約45cm、主軸方位は西-28°-南である。

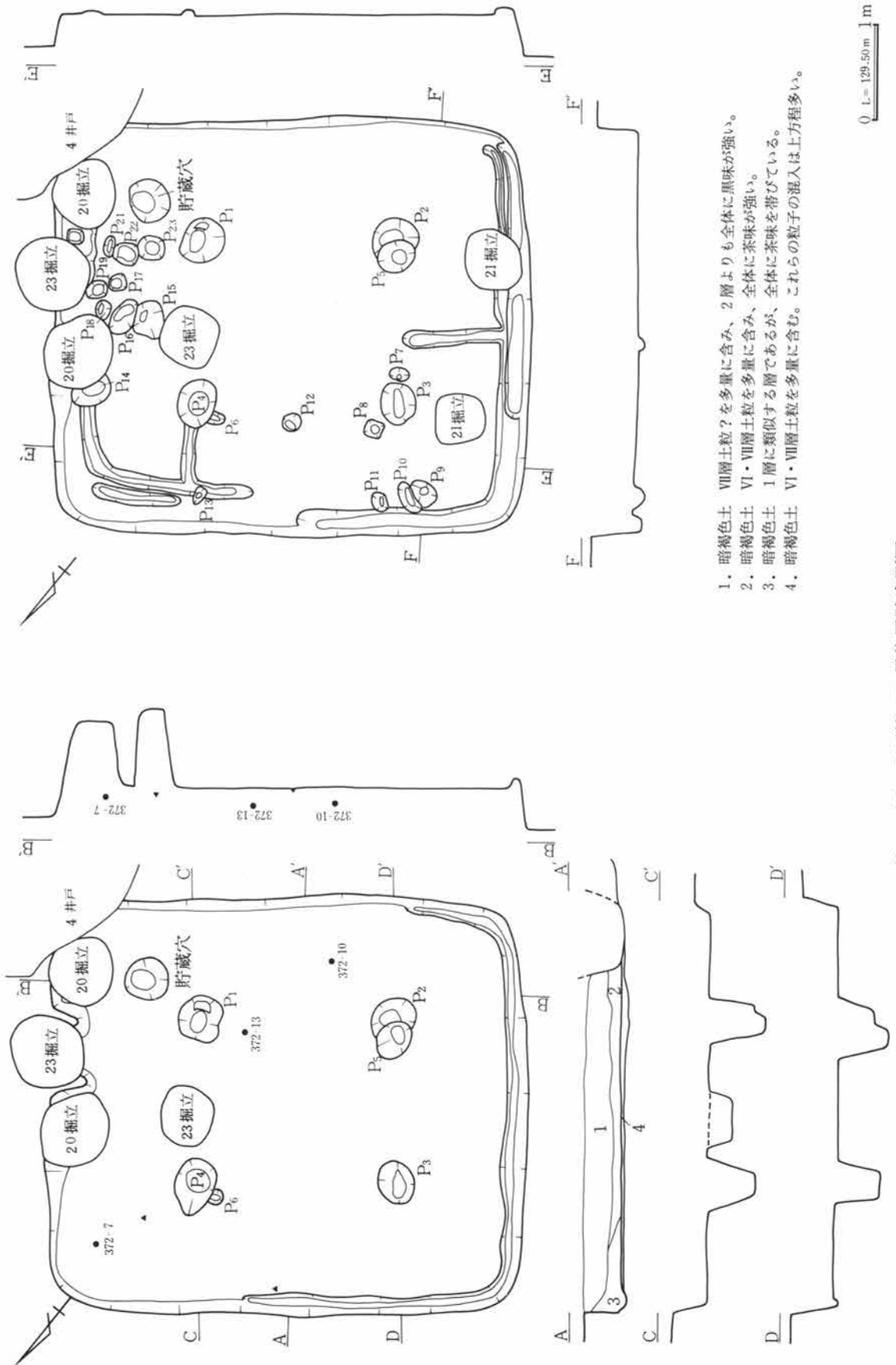
カマドは南西壁の南寄りに設置されており、袖がわずかに張り出した半円状の平面を有している。検出部分の規模は全長約40cm、燃焼部幅約45cm、主軸方位は西-28°-南である。

遺構名称	I区第178号住居跡		位置	25~28-I-53~55グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	4.80m×4.21m	主軸方位	東-37度-北	残存深度	約38cm程

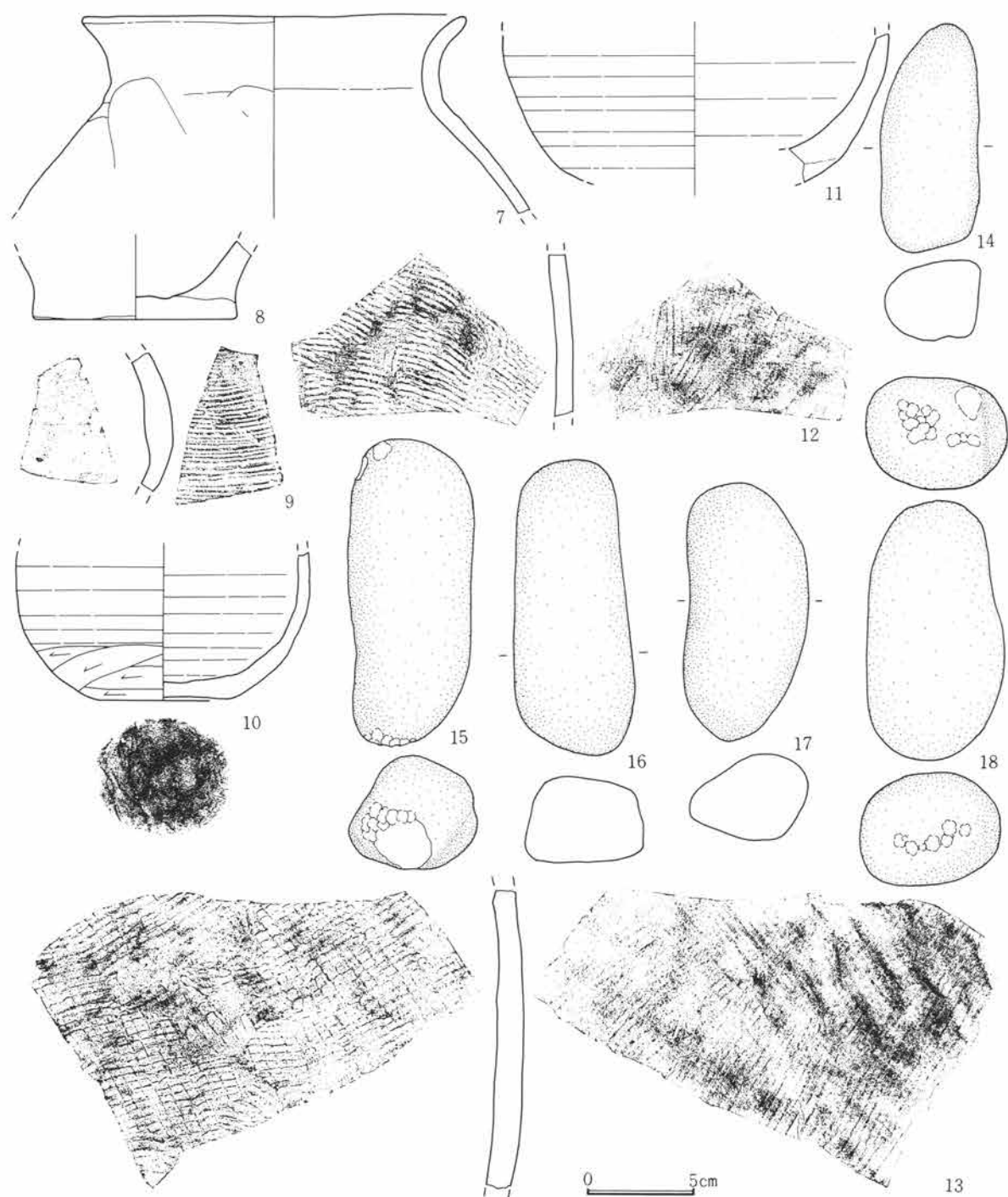
(所見) 当住居跡は第20・21・23号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。また、東コーナー部は第4号井戸跡によって失っている。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、覆土は全体に黒味が強く比較的容易に確認することができた。当住居跡の掘り込みは深く、壁の残存も良好である。床面は全体に薄い貼床が施されており、この面の精査によって壁溝・柱穴・貯蔵穴を検出した。壁溝は当初西半にのみ検出されたが、掘り方段階で北側部分にも掘削されていたことがわかった。また、北西及び南西壁溝からは屋内に間仕切状の溝が掘削されていた。柱穴はP₁~P₂(径約40~46cm、深さ約46~68cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.0m、P₂~P₃間約1.7m、P₃~P₄間約2.0m、P₄~P₁間約1.6m)の4本であるが、P₂とP₄には小ピットの重複があることから、建て替えの可能性もある。貯蔵穴は東コーナーの屋内寄りに位置しており、径約44cm、深さ約80cmの円形を呈している。カマドは北東壁の南寄りに設置されていたが、第20号掘立柱建物跡等との重複によって失っている。



第370図 I区第178号住居跡出土遺物実測図(1)



第371図 I区第178号住居跡実測図

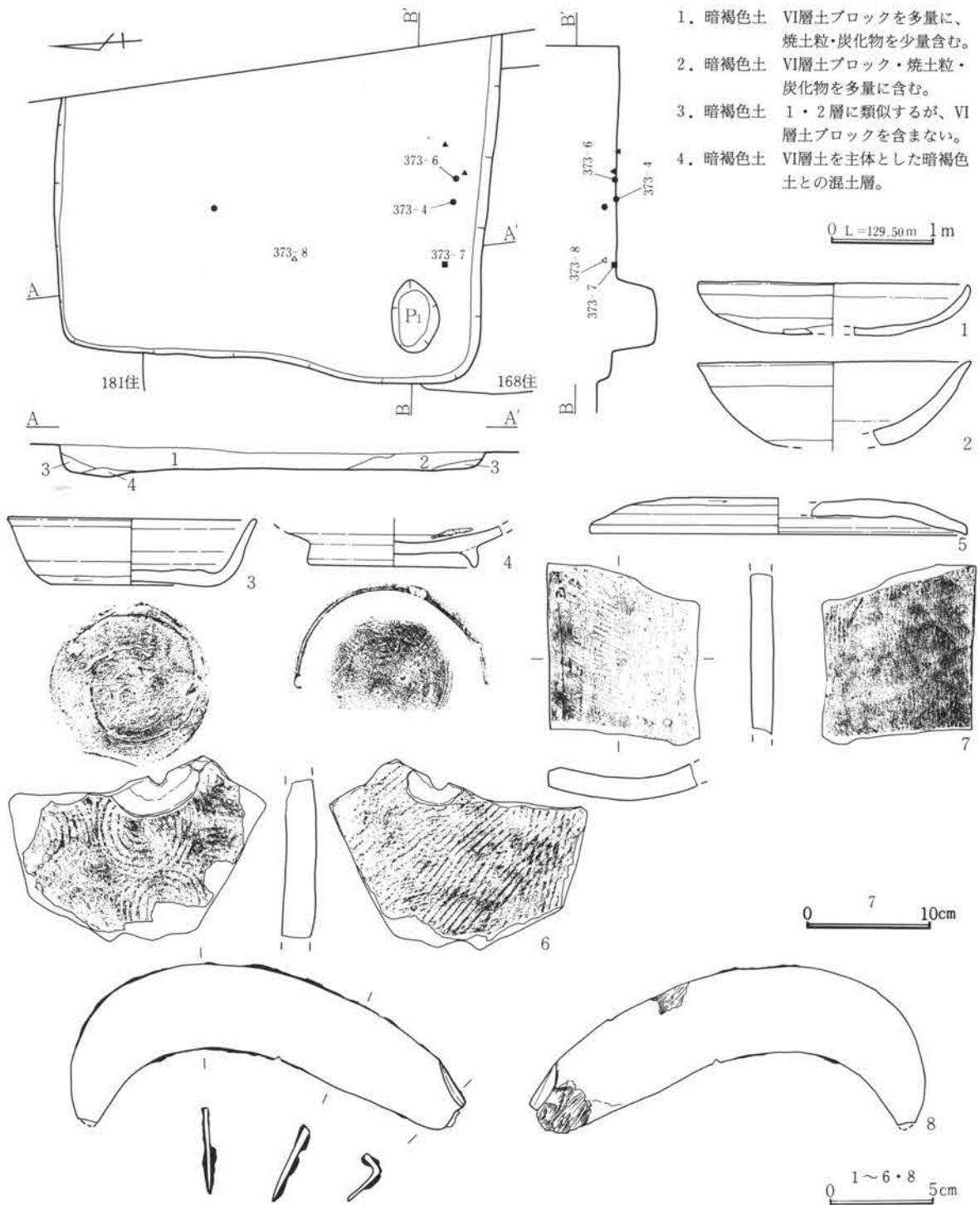


第372図 I区第178号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第179号住居跡	位置	32~34-I-50~52グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×4.13m	主軸方位	東-4度-南	残存深度	約13cm程

(所見) 当住居跡は第168・180・181号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も新しい時期の遺構と考えられる。カマドを含む住居の東半は、調査区外になるため未調査である。床面には貼床が施された痕跡はなく、この床面の精査によって壁溝・柱穴は検出されていない。唯一南西コーナー付近に検出した楕円形のP₁(約69×47cm、深さ約40cm)は、位置から貯蔵穴の可能性が強い。

第4章 検出された遺構・遺物

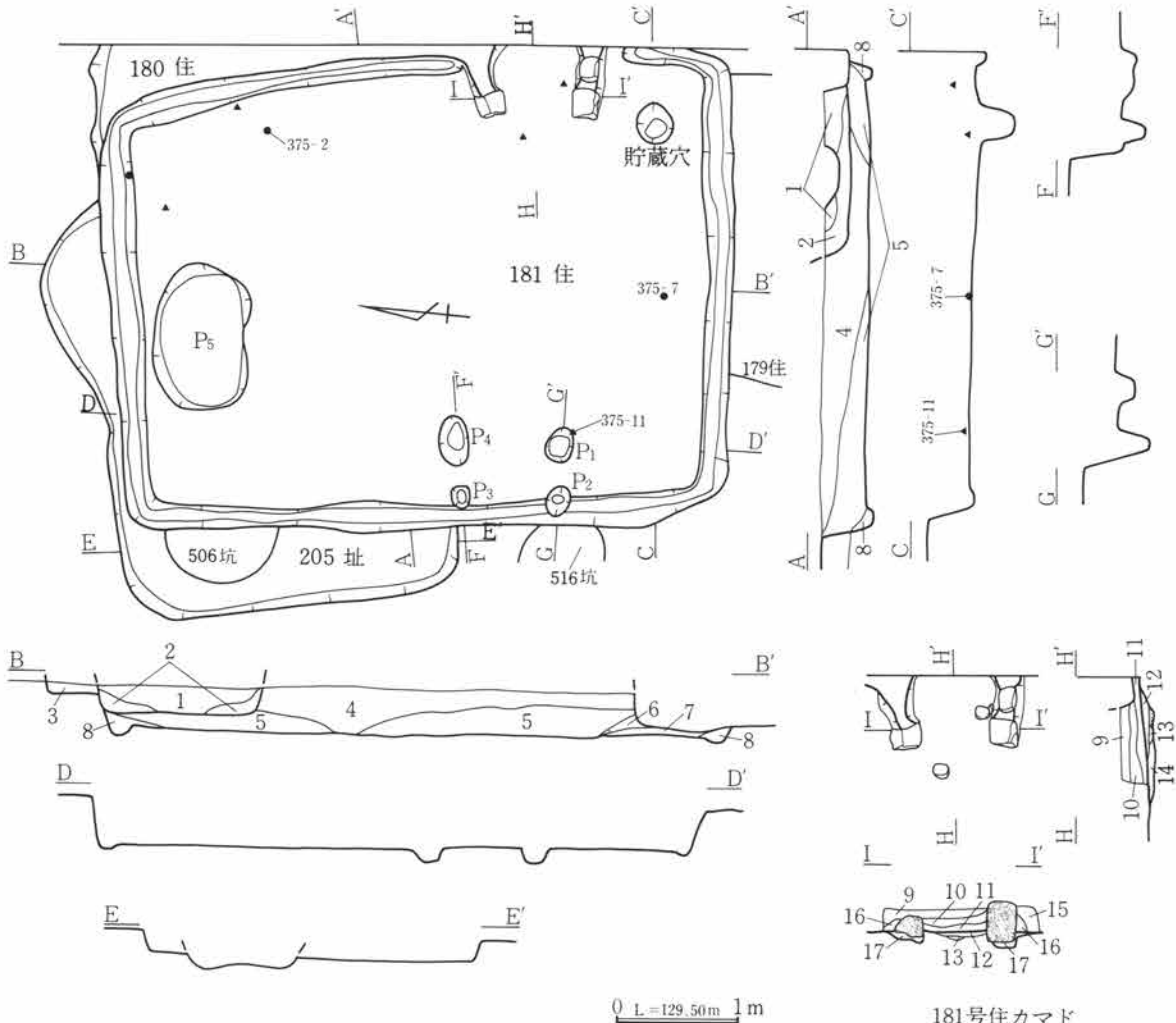


第373図 I区第179号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	I区第180号住居跡	位置	34~36-I-51・52グリッド内		
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—
		残存深度	約15cm程		

遺構名称	I区第181号住居跡	位置	33~36-I-51~53グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	3.74m×4.98m	主軸方位	東-8度-北
		残存深度	約34cm程		

遺構名称	I区第205号址		位置	34~36-I-51~53グリッド内			
平面形態	—	規模	—m×2.65m	主軸方位	—	残存深度	約18cm程



180号住

- 1. 暗褐色土 焼土粒VI層土粒を微量に含む。
- 2. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を多量に含む。

205号址

- 3. 暗褐色土 VI・VII層土粒を含む。

181号住

- 4. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量に含む。
- 5. 暗褐色土 CPを多量に、焼土粒と炭化物を微量に含む。
- 6. 暗褐色土 VI層土ブロックを含む他、焼土粒・炭化物を全く含まない。
- 7. 暗褐色土 6層に類似する。

0 1=129.50m 1m

181号住カマド

181号住カマド

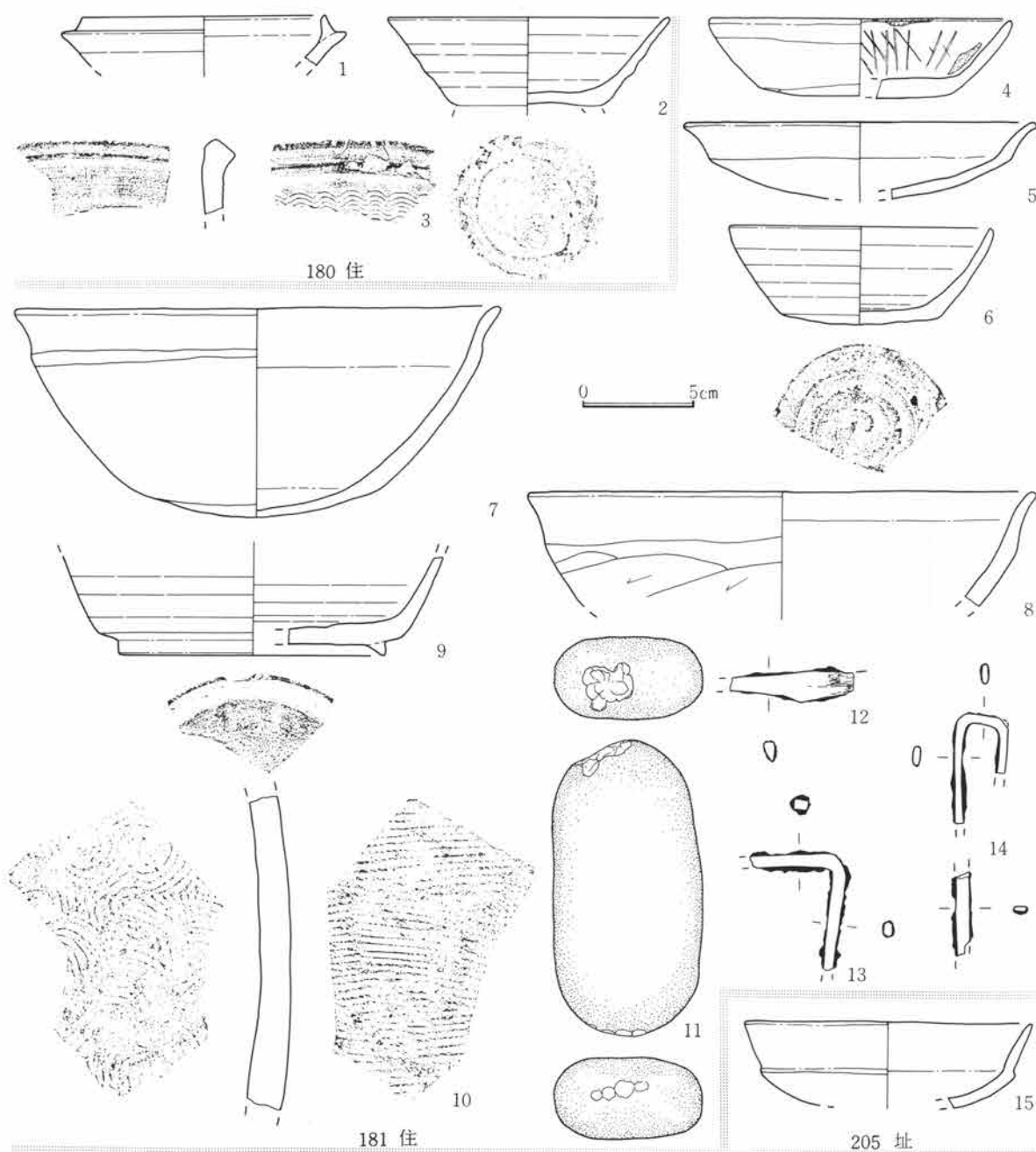
- 8. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。
- 9. 暗褐色土 CPと焼土粒を微量に含み、粘性は弱い。
- 10. 暗褐色土 9層よりもCPは少なく、焼土粒の含有量が多い。
- 11. 暗褐色土 焼土粒の含有量は10層よりも多く、炭化物を含む。
- 12. 暗褐色土 焼土粒を主体として炭化物と灰を多量に含む。
- 13. 暗褐色土 炭化物をブロック状に含む。
- 14. 暗褐色土 焼土粒をまばらに含む。
- 15. 暗褐色土 9層に類似するが、CPの含有量が多い。
- 16. 暗褐色土 15層に類似するが、焼土粒の含有量が少ない。
- 17. 暗褐色土 VI・VII層土粒を多量に含む。

第374図 I区第180・181号住居跡・第205号址実測図

(所見) 第180・181号住居跡及び第205号址は第179号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や覆土の土層観察から、第205号址→第181号住居跡→第180号住居跡→第179号住居跡という関係が想定できる。

第180号住居跡は、新旧関係が曖昧なまま第181号住居跡と同時に調査したため、壁・床面共にごくわずかな部分しか検出できず、柱穴・貯蔵穴についても不明である。壁溝・貼床に関しては、土層断面でみる限りにおいてはなかったものと考えられる。

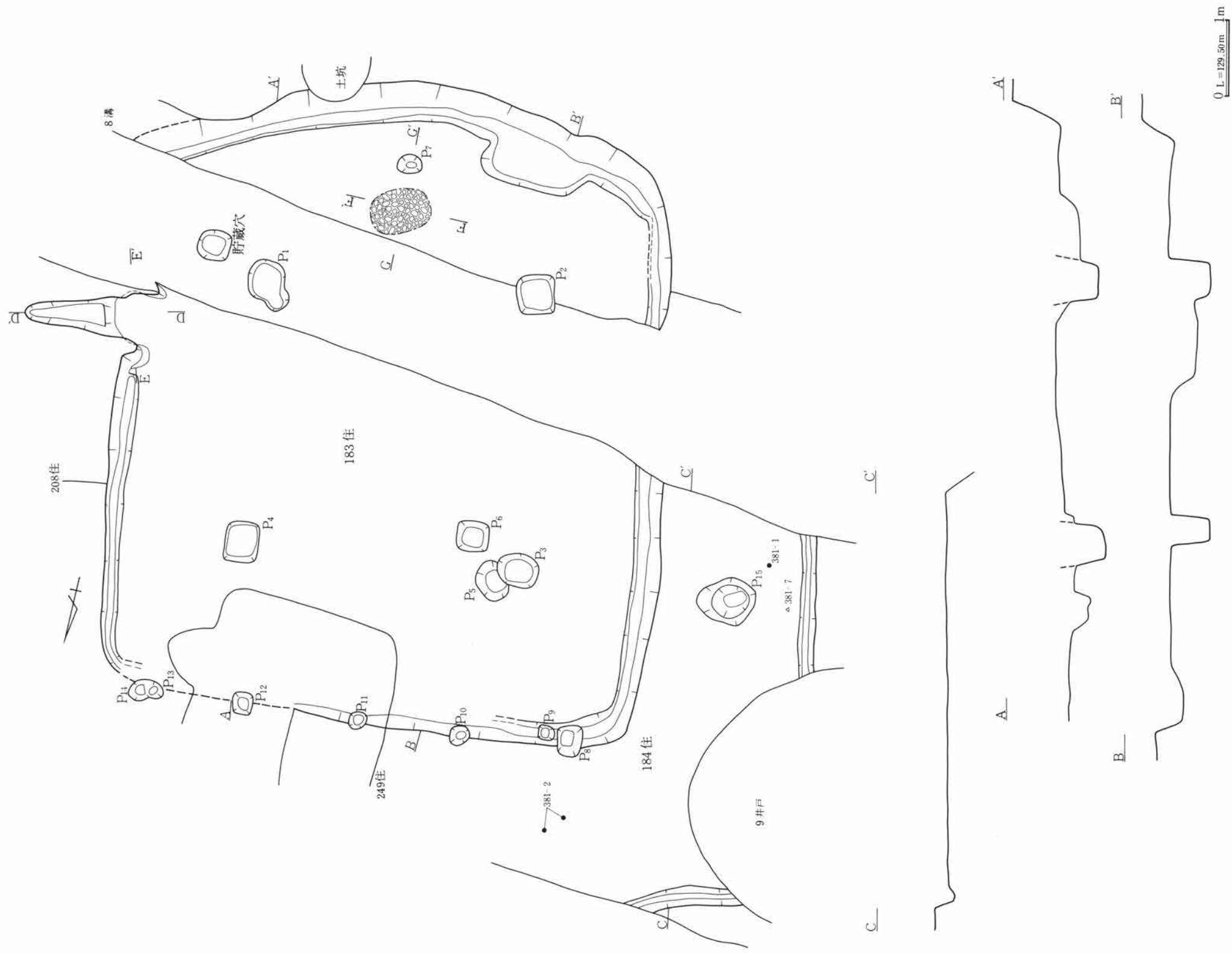
第4章 検出された遺構・遺物



第375図 I区第180・181号住居跡・第205号址出土遺物実測図

第181号住居跡は、遺構の掘り込みが深かったため最も残存状態が良好である。床面に貼床は全く施されておらず、この面の精査によって壁溝・貯蔵穴及び5本のピットを検出した。壁溝はカマド部分を除いて全周しており、規模は下幅約5～12cm、深さ約5～8cmである。貯蔵穴は南東コーナー部に検出した円形の掘り込みで、規模は径約30cm、深さ約27cmである。P₁～P₄は西壁に平行する長方形を構成しており、明らかに規則性をもって掘削されたものである。同様の例は第161号住居跡にもみられ、入口にかかわる施設を想定しておきたい。カマドは東壁の南寄りに設置されており、角柱状の截石を複数構築材として使用した袖が屋内に張り出しており、本来は凸字形平面を有するタイプであろう。規模は燃焼部幅のみ計測可能で、約66cmである。

第205号址は大半を第181号住居跡との重複によって失っており、整形の部分もあるが性格不明である。



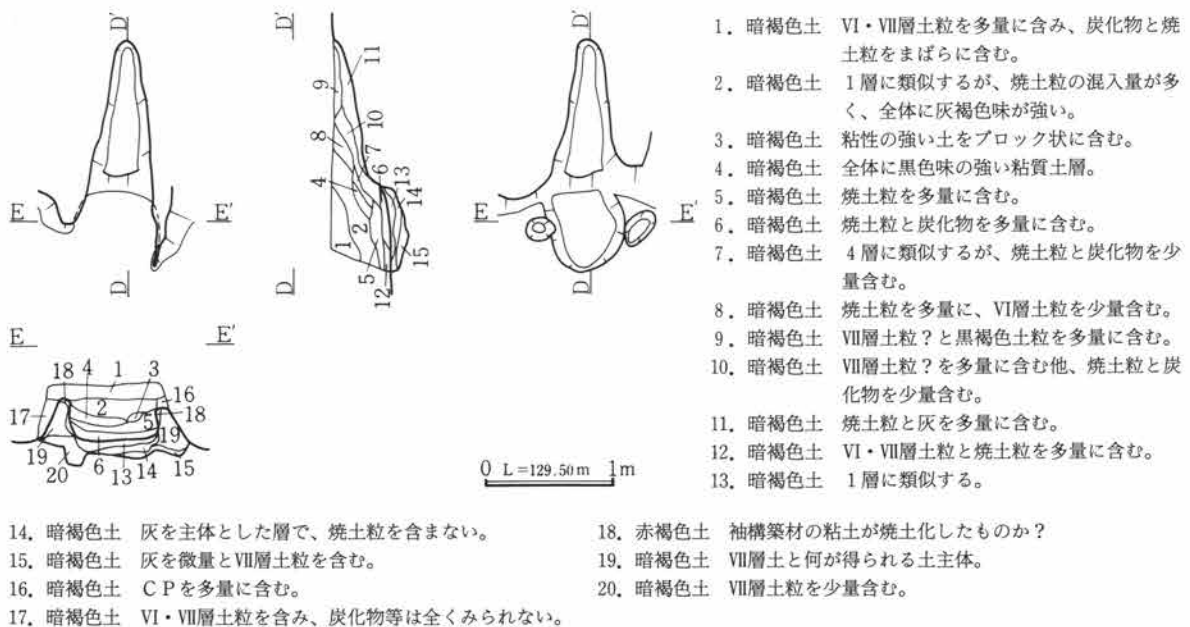
第376图 I区第183·184号住居迹实测图(1)

遺構名称	I区第183号住居跡		位置	14~18-I-59~63グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	7.32m×8.41m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約62cm程

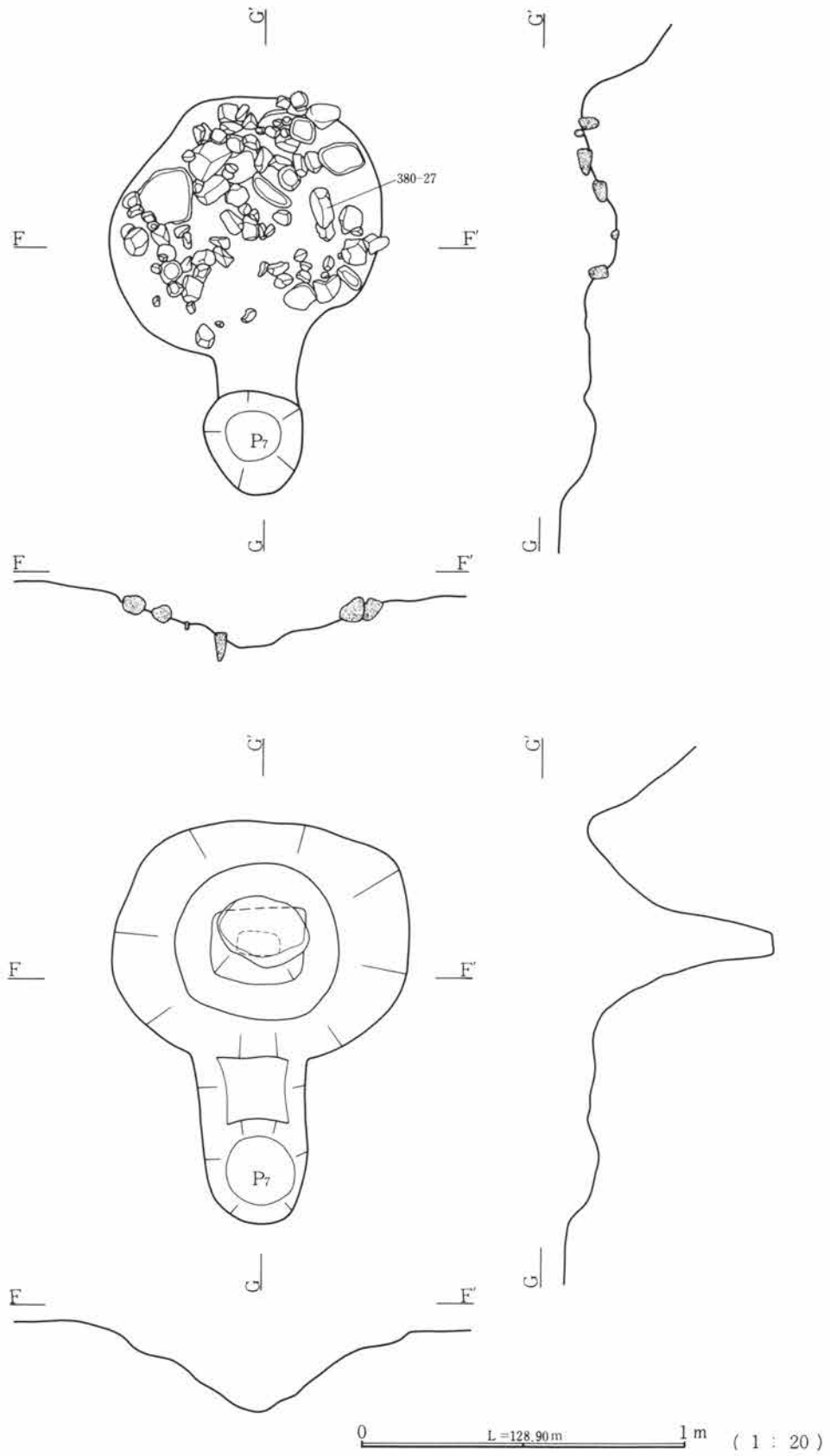
遺構名称	I区第184号住居跡		位置	16~19-I-63~64グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約17cm程

(所見) 第183・184号住居跡は第208・249号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第184号住居跡→第183号住居跡→第208・249号住居跡という新旧関係が想定できる。また、両住居跡は中世以降の第8号溝状遺構によって中央部を東西に削平されている。

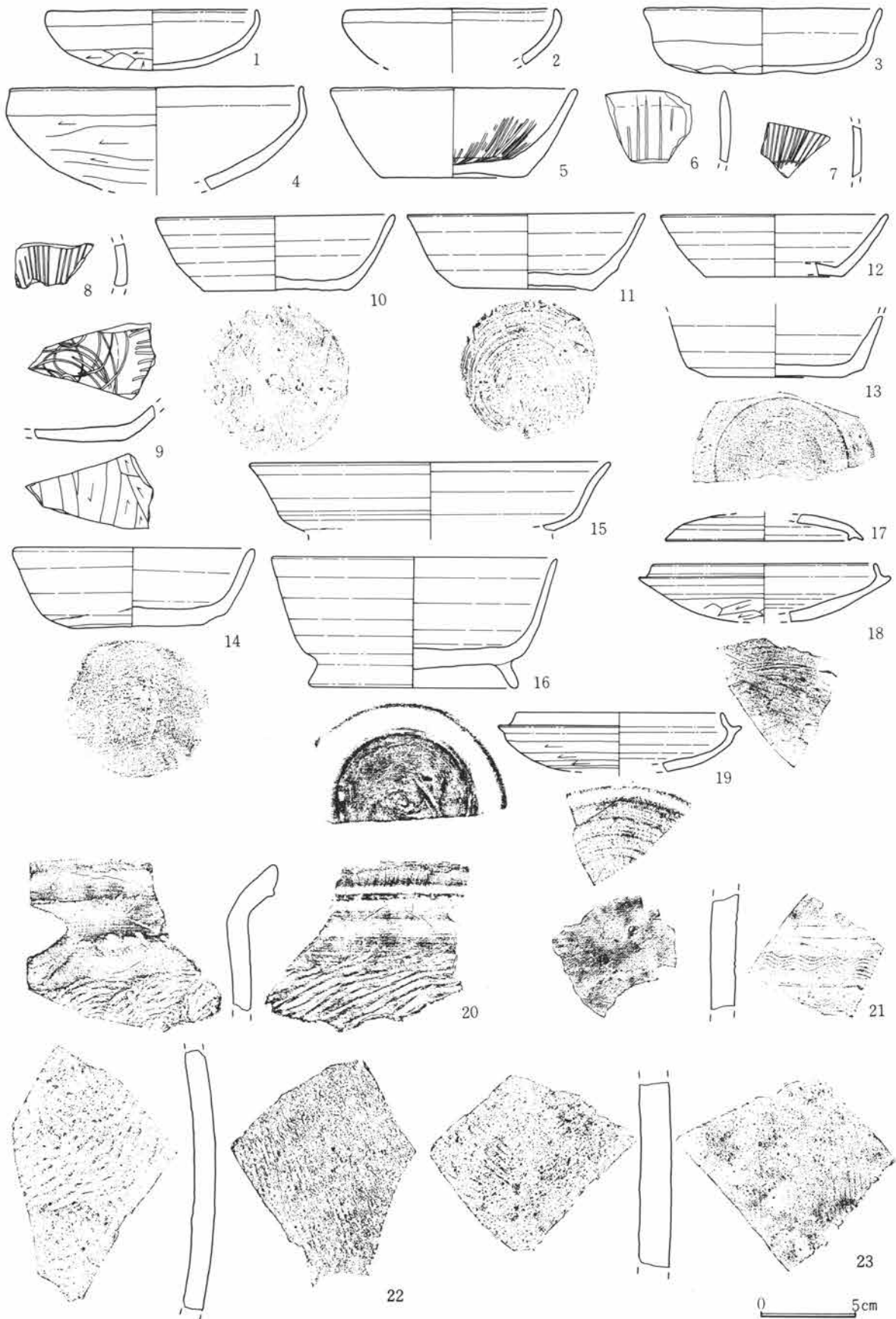
第183号住居跡は、第73・81~83号住居跡と同様に、南側の壁中央が張り出す特異な平面プランを有する住居跡である。当住居跡は東側が南北農道の下にかかっていたため、二次の調査によって全体を明らかにみしたものである。壁は第8号溝状遺構と第249号住居跡との重複部分を除いて検出することができた。床面はVII層土中に直に構築されており、貼床の施された部分は全く認められない。床面の精査では壁溝・柱穴・貯蔵穴の他に、北壁に沿った小ピット列と小礫を敷いた特異な施設を検出した。壁溝はカマド部分を除いて全周していたものと考えられ、規模は下幅約10~15cm、深さは6cm程である。柱穴は位置的にみればP₁(約54×47cm、床面からの推定の深さ約58cm)・P₂(約50×52cm、深さ約53cm)・P₃(約55×45cm、深さ約37cm)・P₄(約54×44cm、深さ約64cm)の4本と考えられ、それぞれの柱穴間距離はP₁~P₂間約3.6m、P₂~P₃間約3.6m、P₃~P₄間約3.7m、P₄~P₁間約3.5mとなり、ほぼ正方形を構成している。しかし、P₃は他のピットが方形を呈するのに対して楕円形であり深さも浅い。このP₃に対してやや東寄りに位置するP₆(約42×40cm、深さ約54cm)は、平面形は方形を呈し、規模的にも他の柱穴と同等である。このP₆を柱穴と仮定するとP₂~P₃間は約3.3m、P₃~P₄間は約3.0mである。北壁に沿った小ピット列は、約1.5m間隔で掘削されており、柱穴的機能を果していたものではないだろうか。また、このような小ピット列を壁面にもつ例は第82号住居跡にもあり、特異な平面プランを有する住居の特徴と考えられる。貯蔵穴は方形で南東コーナー部に位



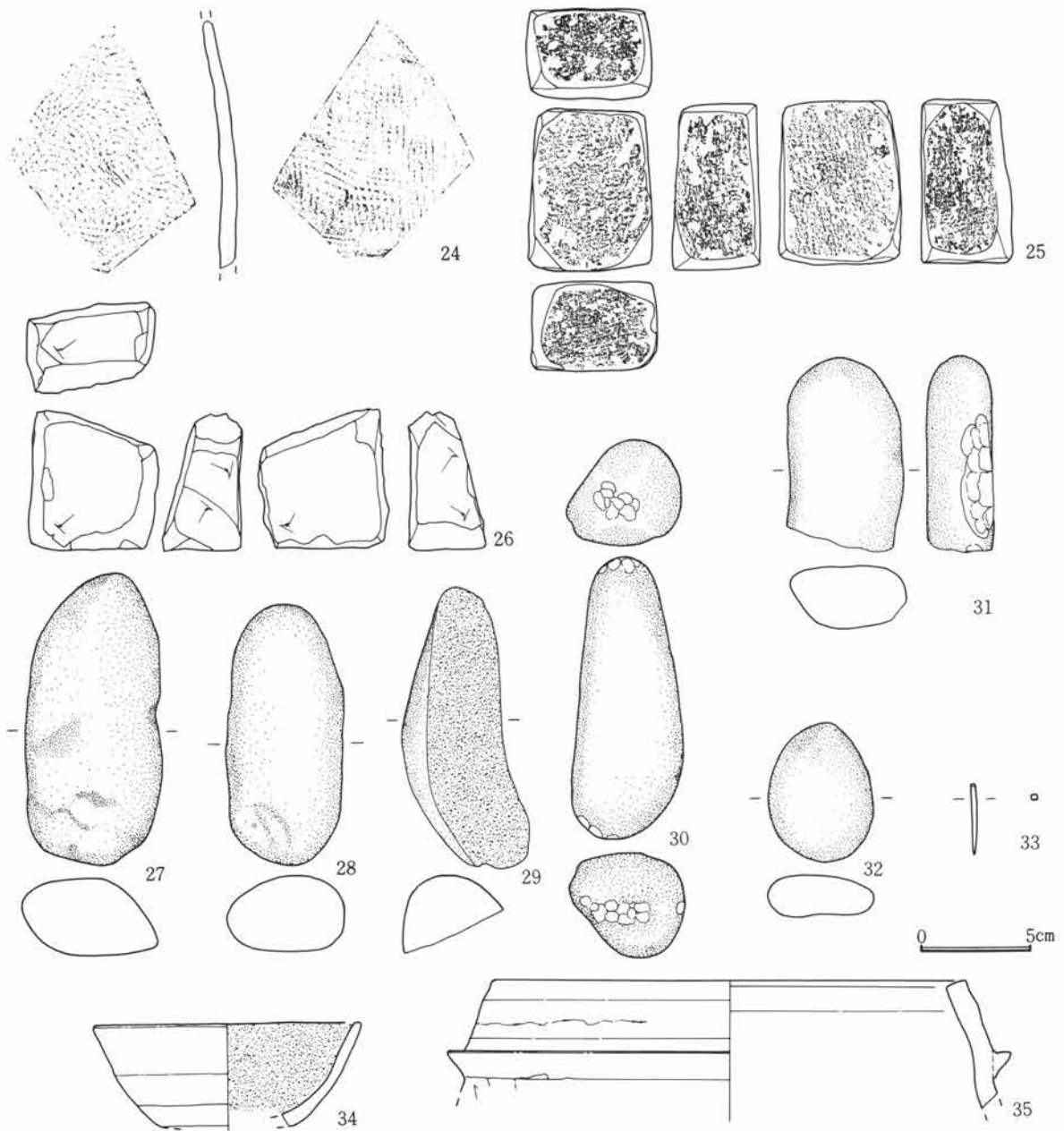
第377図 I区第183号住居跡実測図(2)



第378図 I区第183号住居跡実測図(3)



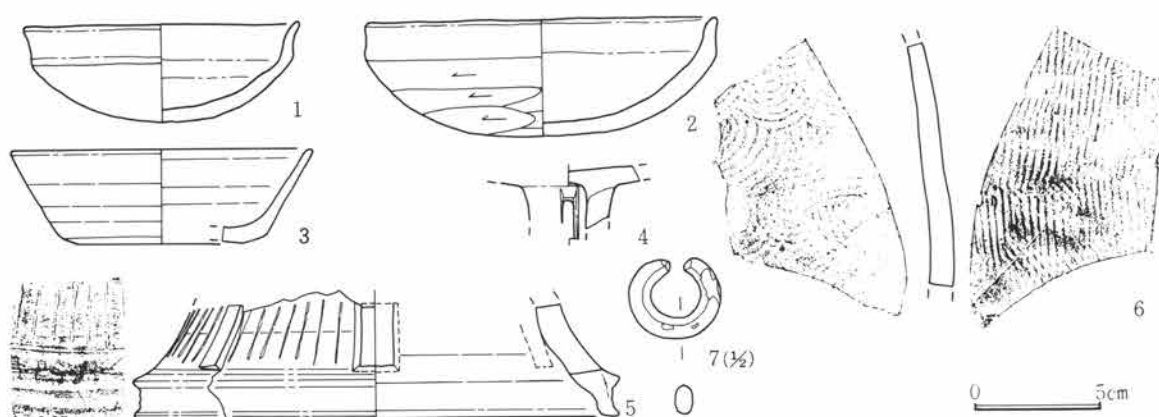
第379図 I区第183号住居跡出土遺物実測図(1)



第380図 I区第183号住居跡出土遺物実測図(2)

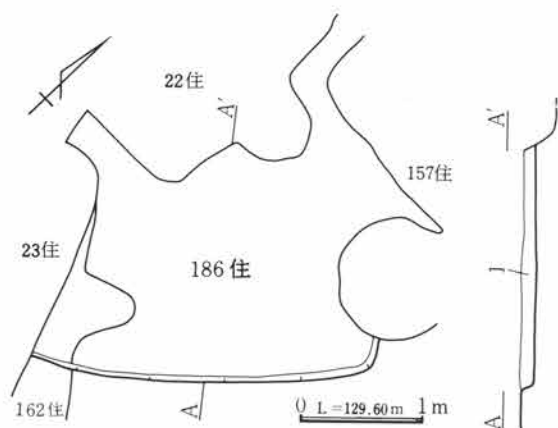
置するが、ちょうど第8号溝状遺構によって上半を削られており、残存したのは溝状遺構の底面以下の部分である。残存部の規模は約43×41cm、深さ約34cm(床面からの推定の深さ約63cm)である。礫敷の特異な施設は、張り出し部の内側に位置しており、約90×72cm、深さ約57cmの楕円形の掘り込みの中心に蓋をしたように大礫があり、その上面に小礫が敷き詰められたものである。また、この南側には小ピットが1本検出されており一連のものと考えられる。同様の例は他の住居跡において検出されていないが、張り出し部にピットをもつ例は第61・73号住居跡等にある。カマドは東壁の南寄りに設置されており、両袖の張り出す凸字形の平面を有するタイプである。検出部の規模は全長170cm、燃焼部幅約66cm、煙道長約105cm、下幅約25cmで、主軸方位は東 5° 北である。掘り方の調査で袖に当たる部分に小ピットが検出されていることから、構築材が据えられていたものと思われる。

第184号住居跡は、壁溝の一部とピットを1本検出したもので、他遺構との重複で全体像が判然としない。



第381図 I区第184号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第186号住居跡	位置	38・39-I-56~58グリッド内		
平面形態	—	規模	—m × —m	主軸方位	—
		残存深度	約11cm程		



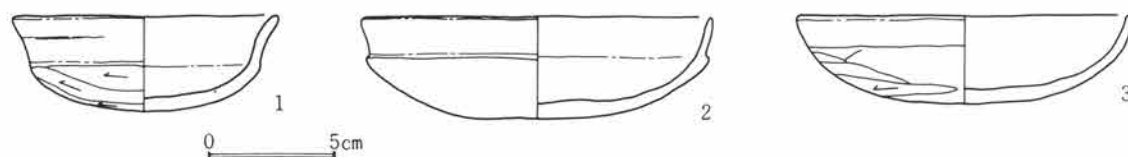
1. 暗褐色土 VI・VII層土粒を多量に含む。

第382図 I区第186号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第22・23・31・157・162号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態等から当住居跡が最も古い時期の遺構と思われるが、第23号住居跡との関係については第162号住居跡が介在しているため判然としない。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、当住居跡の掘り込みが浅いため、壁等の残存は不良である。残存した床面に貼床の施された痕跡は認められない。この床面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴のいずれも検出されていない。また、カマドは北東壁に設置されていたものと考えられるが、痕跡も検出することはできなかった。

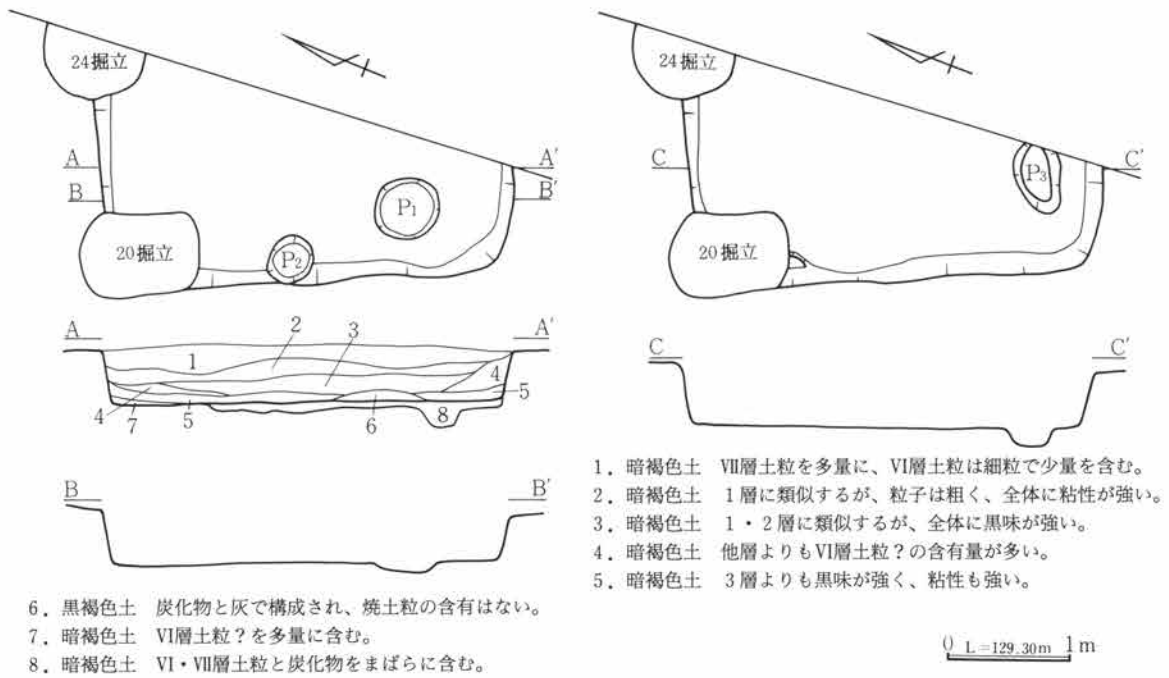
遺構名称	I区第187号住居跡	位置	25~27-I-50・51グリッド内		
平面形態	—	規模	—m × 3.29m	主軸方位	東-28度-北
		残存深度	約40cm程		

(所見) 当住居跡は第20・24号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡→第20・24号掘立柱建物跡という新旧関係である。また、当住居跡のカマドを含む東半は調査区外にかかっており未調査である。壁の残存は比較的良好で、掘り込みも深い。床面にはVI・VII層土を主体とした貼床が5cm程の厚さに施されていた。この床面の精査で壁溝は検出されず、2本のピット(P₁・P₂)のみが検出された。この2本のピットの配置・規模に規則性は認めがたく、柱穴とは考えられない。掘り方の調査において検出したP₂についても同様であり、当住居跡には柱穴が掘削されなかったものと考えられる。

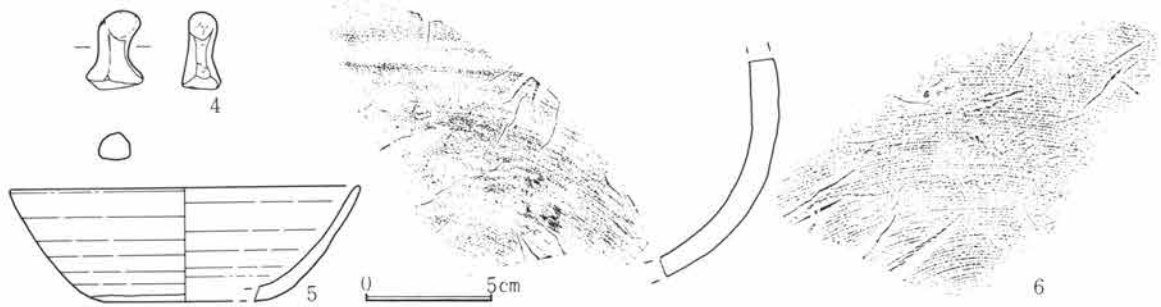


第383図 I区第187号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



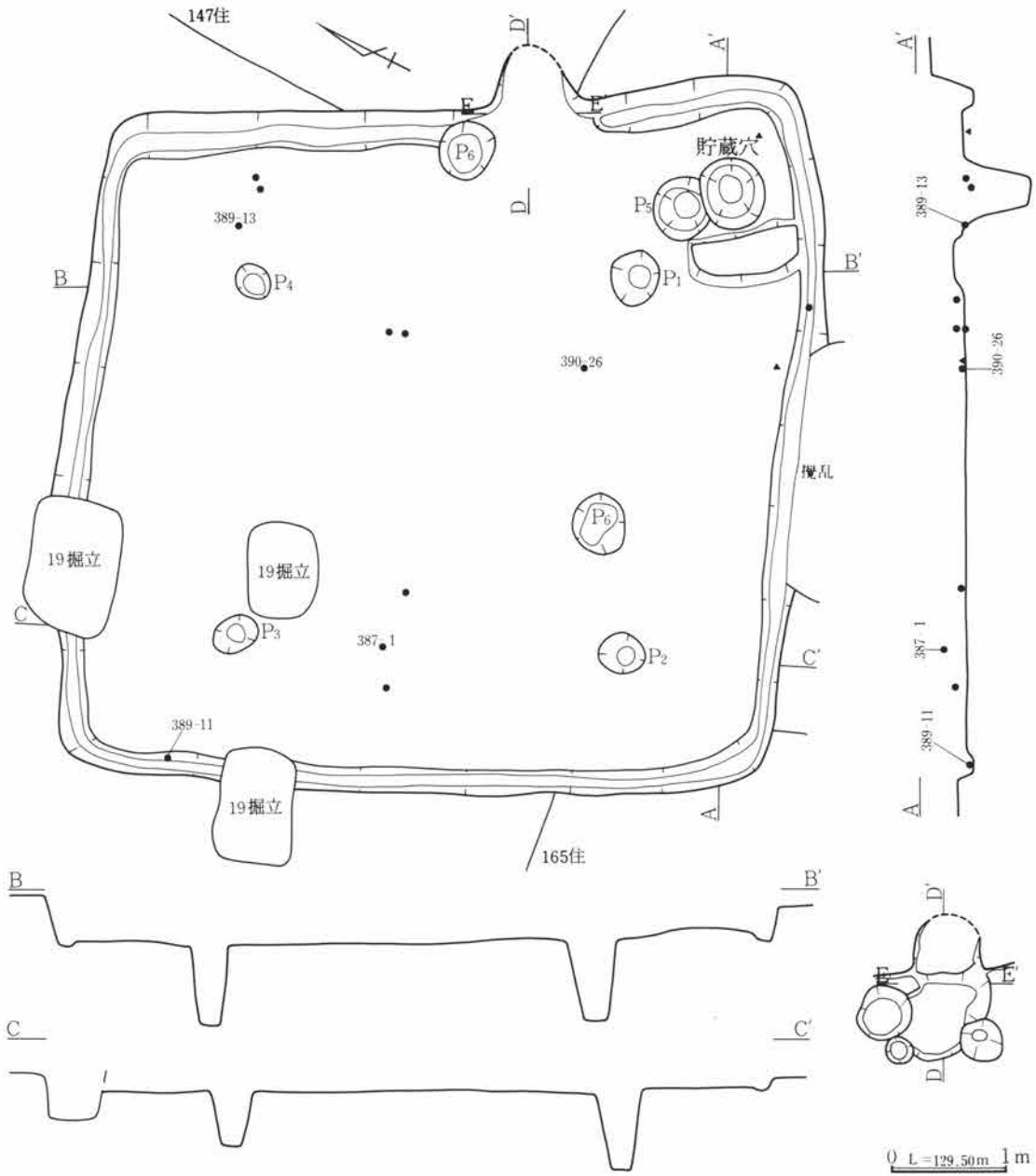
第384図 I区第187号住居跡実測図



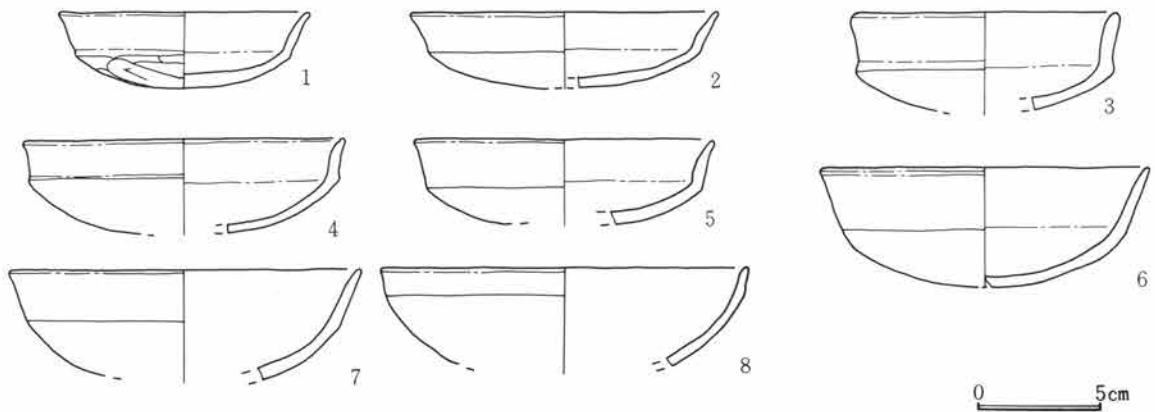
第385図 I区第187号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第188号住居跡		位置	31~34-I-54~57グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.80m×6.13m	主軸方位	東-24度-北	残存深度	約35cm程

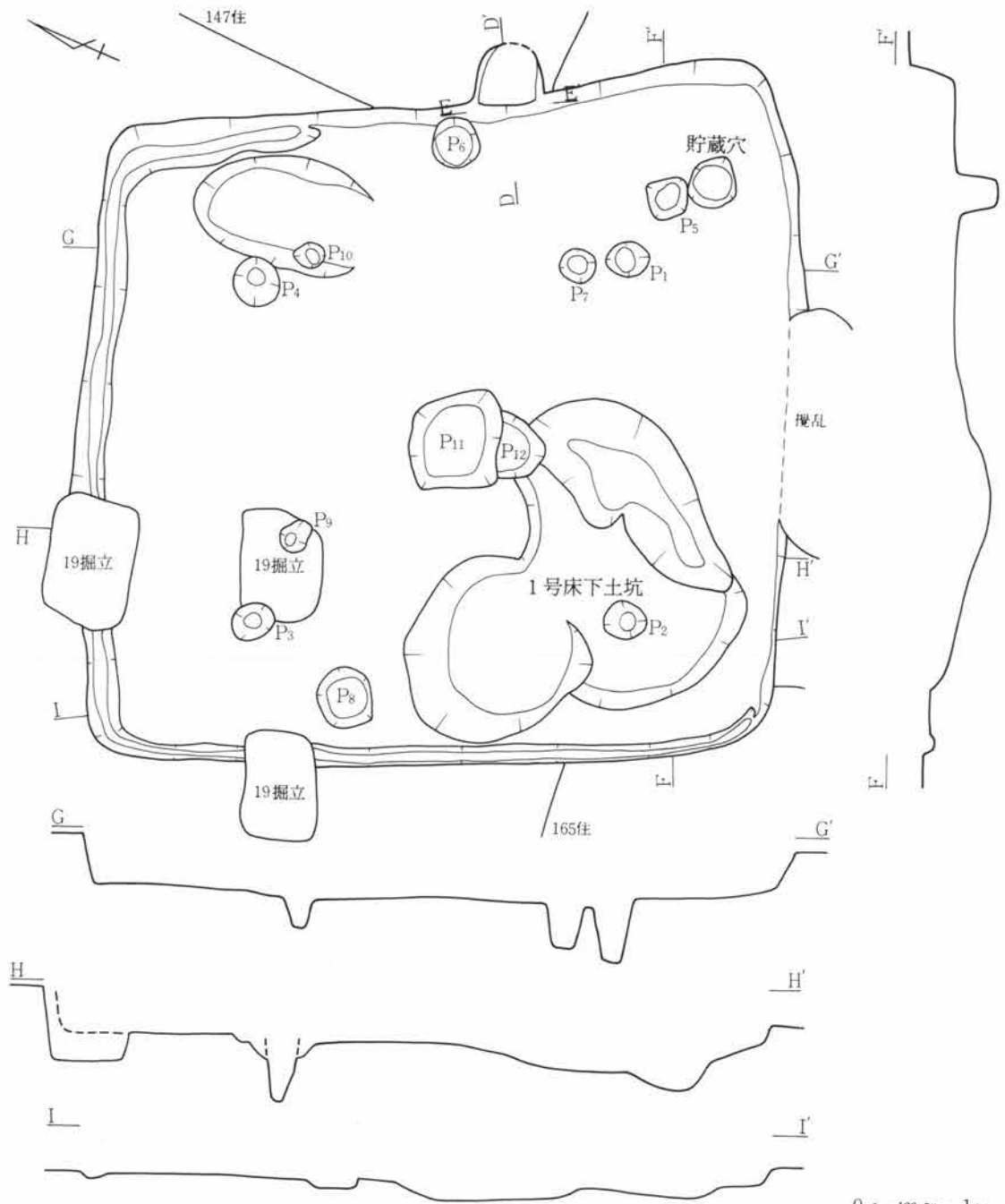
(所見) 当住居跡は第147・175・177・203・214号住居跡を始め、第19号掘立柱建物跡等と重複しているが、遺構の検出状態や出土遺物の比較から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。平面プランは東コーナー部がやや張り出した台形状を呈している。重複が多いため壁の残存は悪く、カマド部分も第147号住居跡との重複によって失っている。床面は全面に貼床が施されていたが、この面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴及びピットを検出した。壁溝はカマド部分を除いて全周しており、下幅約5~15cm、深さ約6~11cmの規模を有している。柱穴はP₁~P₄(径約30~46cm、深さ約50~69cm、柱穴間距離P₁~P₂間約3.2m、P₂~P₃間約3.3m、P₃~P₄間約3.0m、P₄~P₁間約3.3m)の4本であり、P₅は柱穴とは考えられない。貯蔵穴は円形で東コーナー部に位置しており、径約55cm、深さ約57cmの規模を有している。この貯蔵穴の西側には第176号住居跡と共通する4cm程の高さの堤状の高まりがみられる。また、貯蔵穴に接して検出したP₅(径約55cm、深さ約53cm)は貯蔵穴とほぼ同規模であり、貯蔵穴が掘り替えがなされたものであろう。カマドは北東壁の中央やや南寄りに設置されていたが、前述のようにほとんど残存しないため不明である。



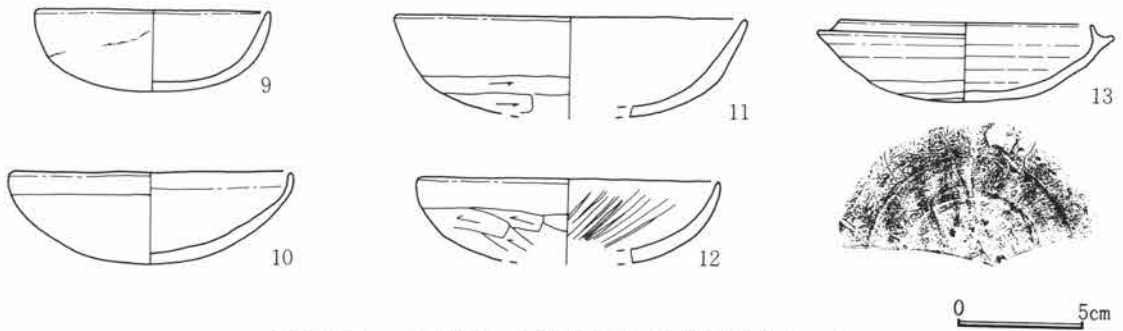
第386図 I区第188号住居跡実測図(1)



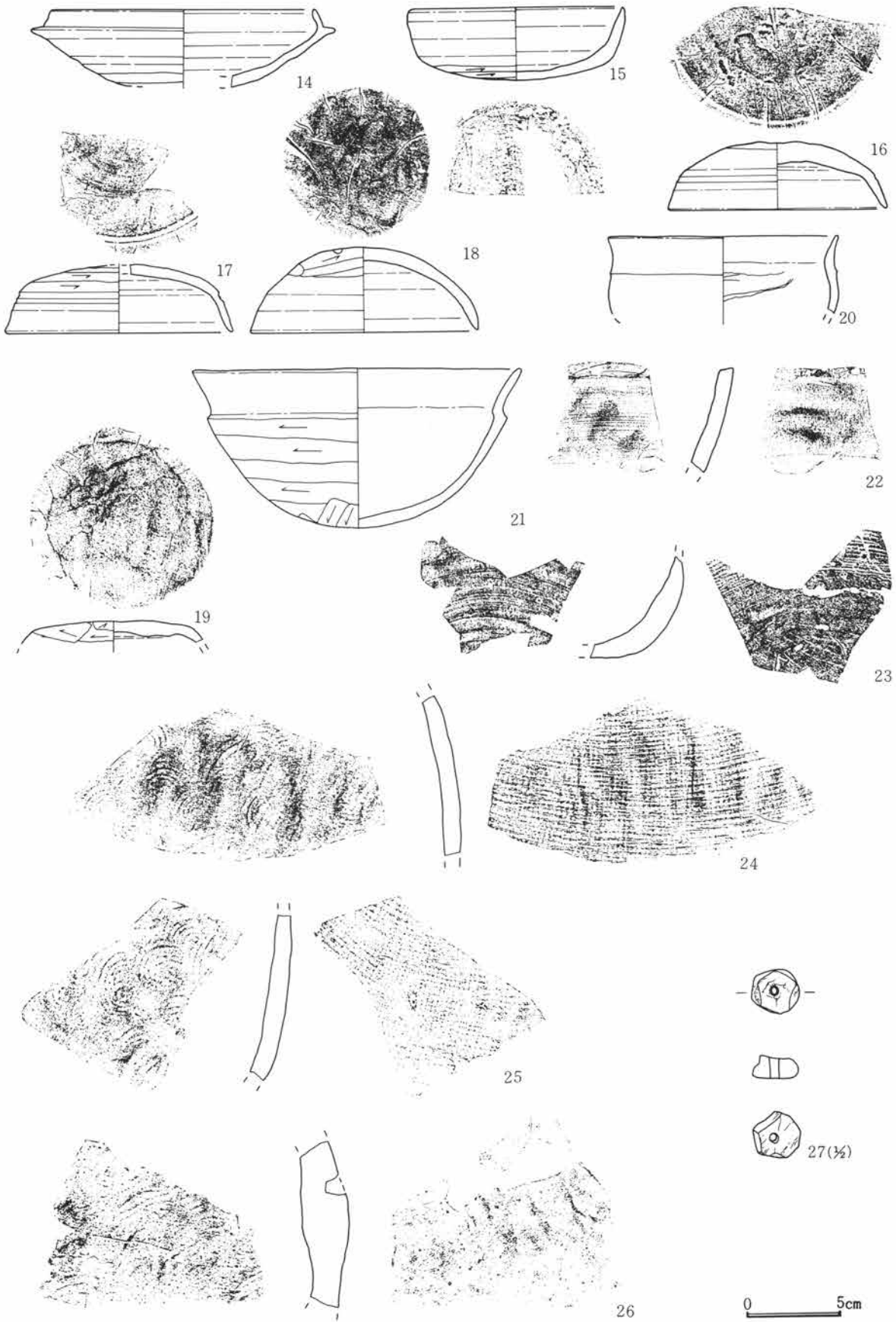
第387図 I区第188号住居跡出土遺物実測図(1)



第388図 I区第188号住居跡実測図(2)

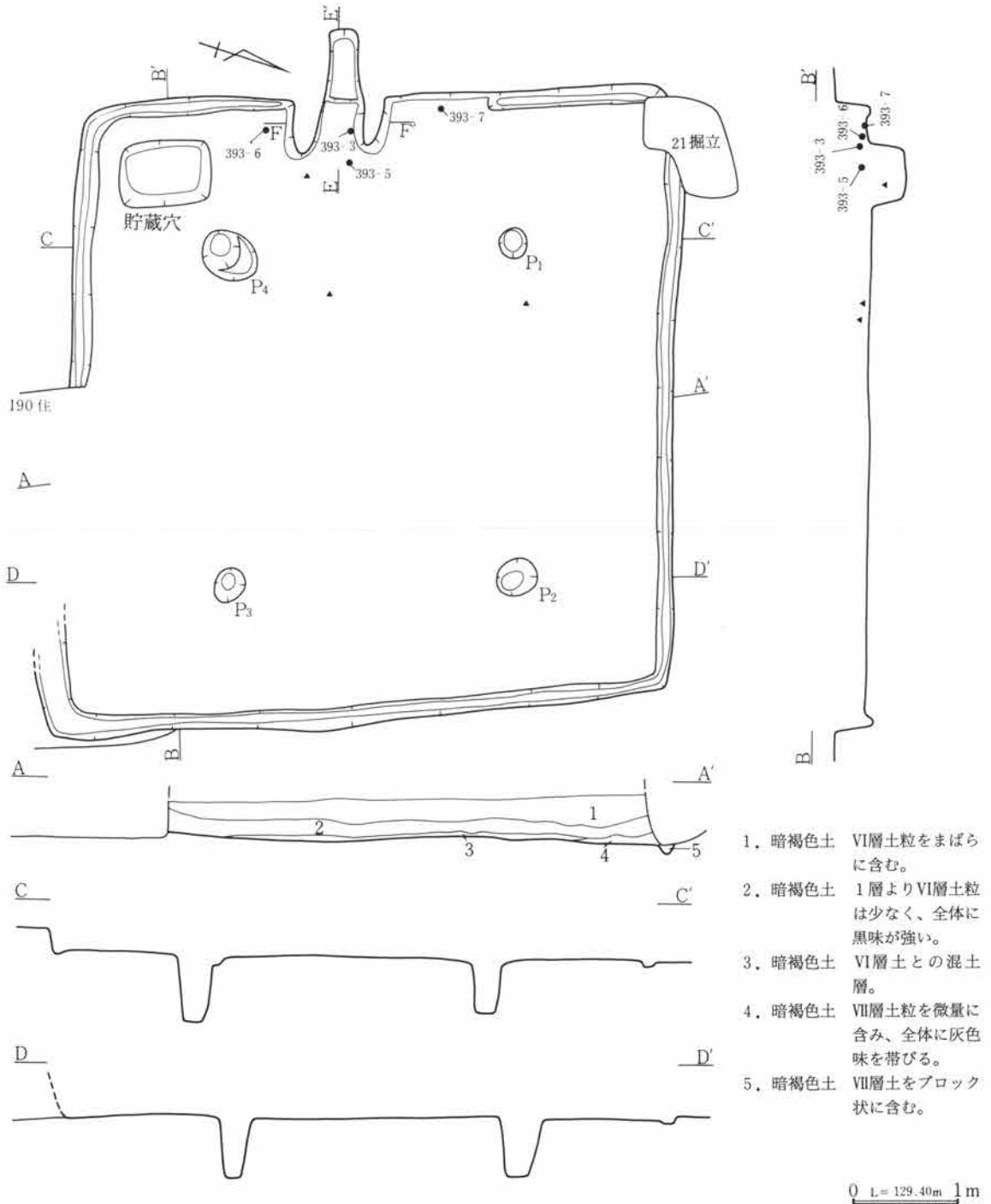


第389図 I区第188号住居跡出土遺物実測図(2)



第390図 I区第188号住居跡出土遺物実測図(3)

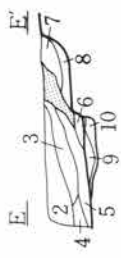
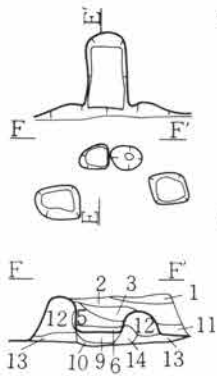
遺構名称	I区第189号住居跡		位置	21~25-I-51~55グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	5.74m×5.59m	主軸方位	西-20度-南	残存深度	約27cm程



第391図 I区第189号住居跡実測図(1)

(所見) 当住居跡は第190号住居跡・第21号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も古い時代の遺構と考えられる。東西壁は比較的残存状態が良好であったが、南北壁に関しては重複によってかなりの部分が失われており、壁溝によって位置の判明する場所もあった。床面はVII層土中に直に構築されており、貼床の施されている部分は認められない。柱穴はP₁~P₄(径約28~42cm、深さ約48~58cm、

第2節 検出された遺構・遺物



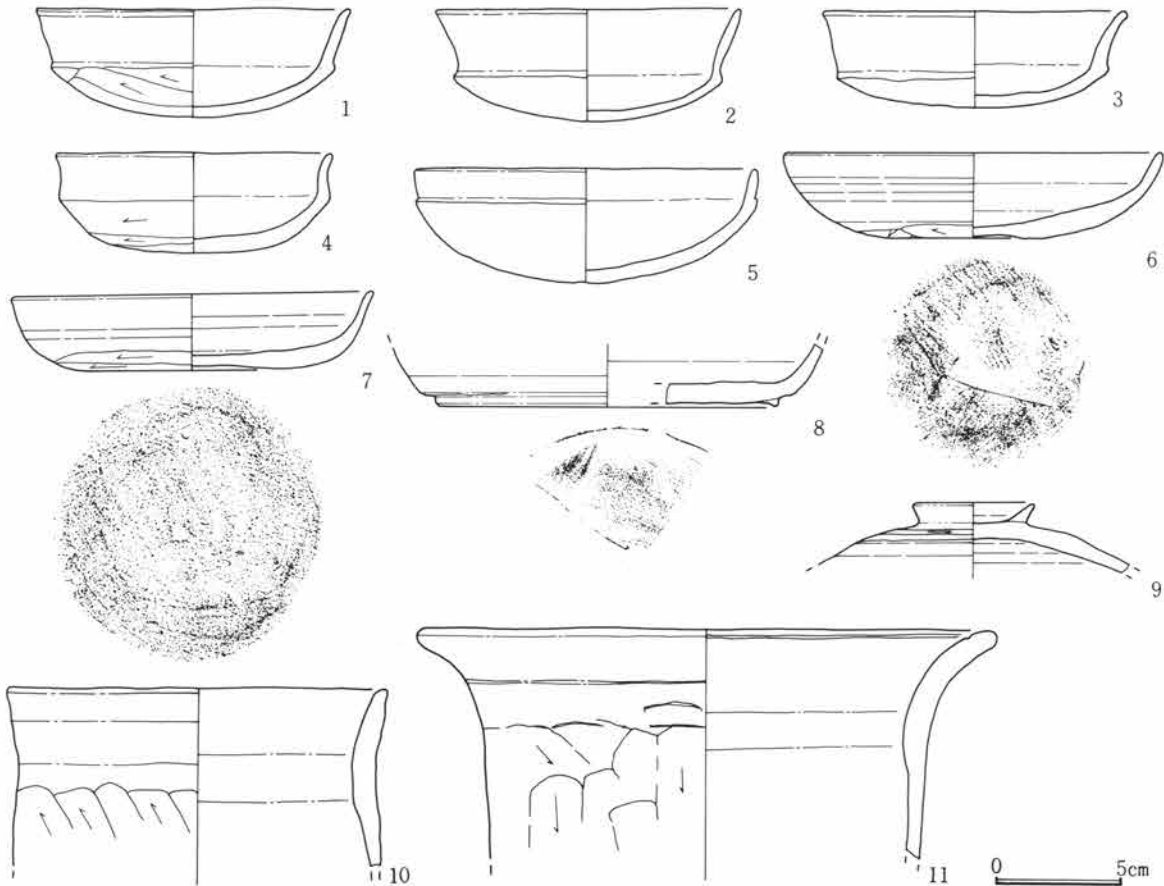
- | | | | |
|---------|-----------------------------|----------|------------------------|
| 1. 暗褐色土 | VII層土粒?を多量に含む。 | 8. 暗褐色土 | 暗褐色土・灰・炭化物の混土層。 |
| 2. 暗褐色土 | VI・VII層土?小ブロックを多量に含む。 | 9. 暗褐色土 | 暗褐色土と炭化物の混土層で焼土粒を少量含む。 |
| 3. 暗褐色土 | VI層土?小ブロックを多量に炭化物と焼土粒を少量含む。 | 10. 暗褐色土 | 炭化物を含む。 |
| 4. 暗褐色土 | VII層土?小ブロックを含む。 | 11. 暗褐色土 | VI層土粒?を少量含む。 |
| 5. 暗褐色土 | VII層土粒をまばらに含む他、焼土粒を下層に多く含む。 | 12. 暗褐色土 | 灰白色土粒と小ブロックを多量に含む。 |
| 6. 暗褐色土 | 5層に類似するが、焼土粒と灰を多量に含む。 | 13. 暗褐色土 | VI・VII層土粒?を多量に含む。 |
| 7. 暗褐色土 | 暗褐色土と灰の混土層。 | 14. 暗褐色土 | 炭化物と焼土粒の混土層。 |

0 L=129.40m 1m

第392図 I区第189号住居跡実測図(2)

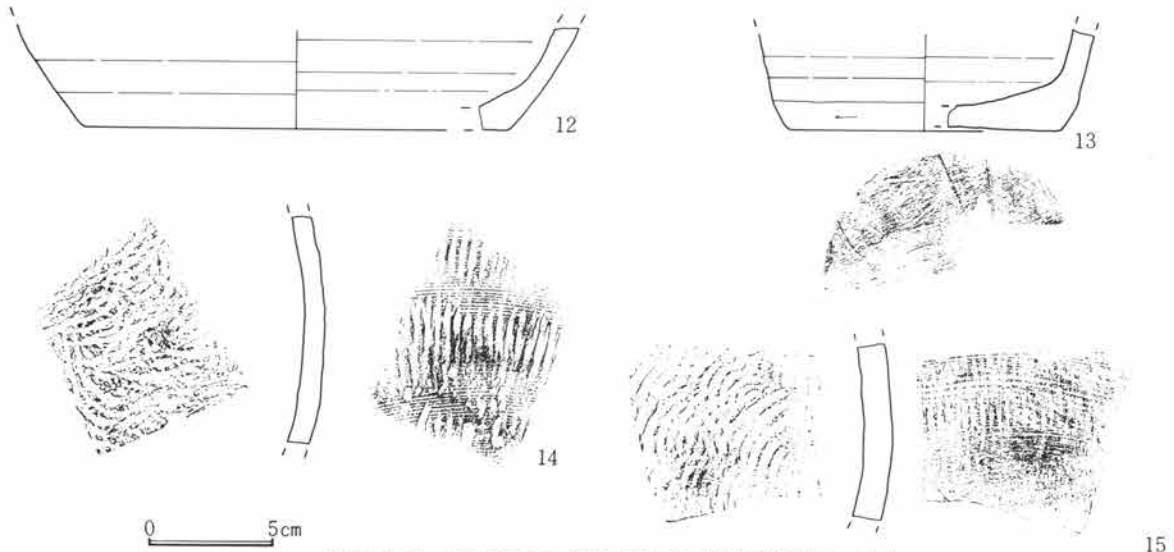
柱穴間距離 $P_1 \sim P_2$ 間約3.1m、 $P_2 \sim P_3$ 間約2.6m、 $P_3 \sim P_4$ 間約3.1m、 $P_4 \sim P_1$ 間約2.7m) の4本であり、他の柱穴配列は検出されていない。貯蔵穴は南コーナー部に位置しており長方形を呈し、規模は約85×62cm、深さ約30cmである。

カマドは南西壁の中央やや南寄りに設置されており、両袖が屋内に張り出すタイプである。残存部の規模は全長約115cm、燃焼部幅約32cm、煙道長約65cm、下幅約23cmで、主軸方位は西 -19° 南である。掘り方の調査では、袖の先端部に当たる位置から方形のピットが、さらに燃焼部中央からは2本の小ピットが検出された。袖の構築材は検出されていないが、この袖部のピットが構築材の据え方であるのは明らかである。また、燃焼部中央の小ピットは、支脚の据え方と考えられ、双脚の可能性はある。



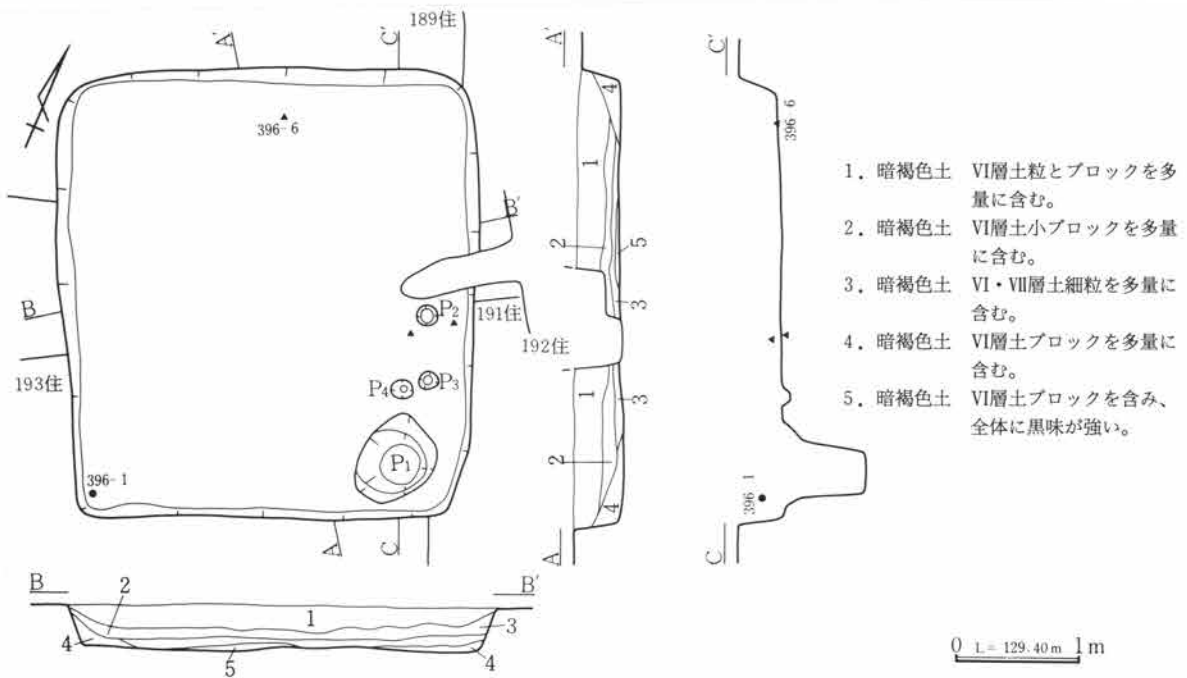
第393図 I区第189号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



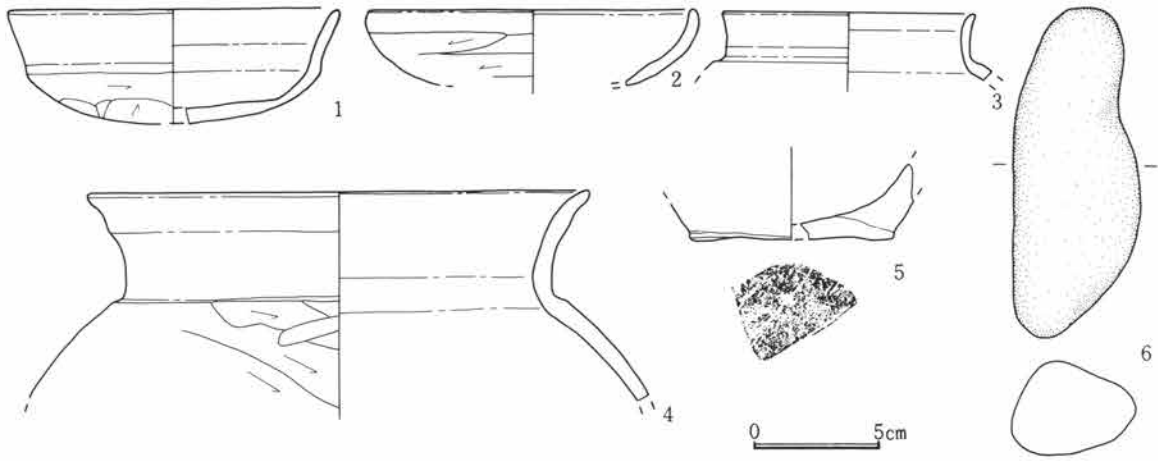
第394図 I区第189号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第190号住居跡	位置	21~23-I-51~53グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	3.28m×3.54m	主軸方位	東-22度-北	残存深度	約35cm程



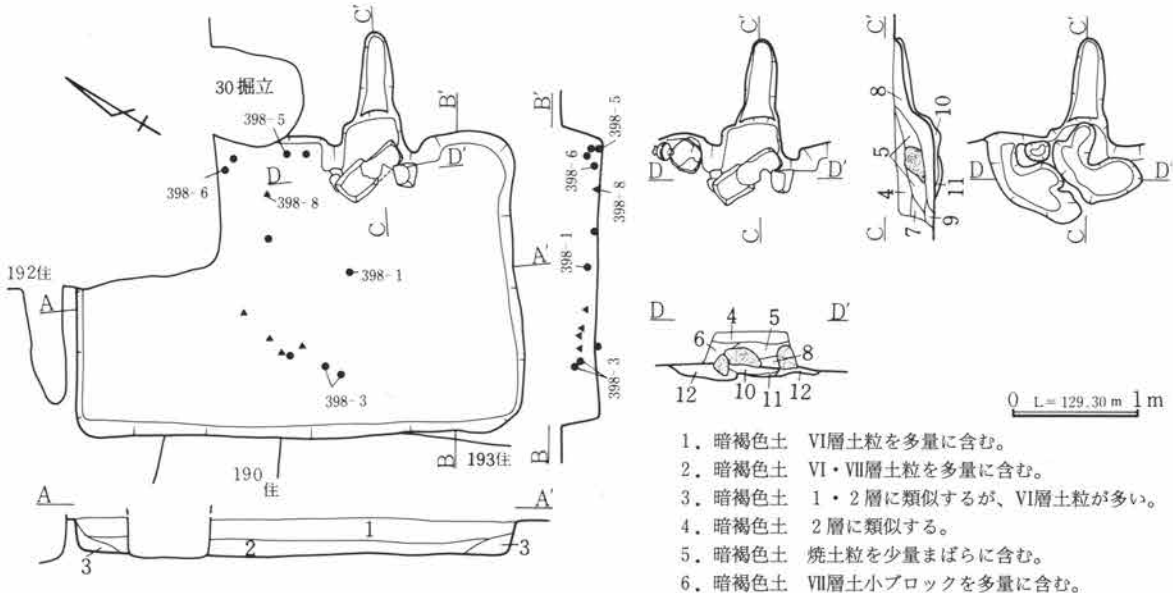
第395図 I区第190号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第189・191~193号住居跡及び第17号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第189・193号住居跡→当住居跡→第191・192号住居跡と考えられ、掘立柱建物跡との関係は判然としない。遺構の掘り込みが比較的深度であったため、壁等の残存状態は良好である。床面は大半が他遺構との重複部分に構築されているため明瞭ではないが、中央部でみれば限りVII層土を直に床面としており貼床は施されていないことがわかる。この面の精査で壁溝・柱穴は検出されておらず、貯蔵穴のみ検出された。貯蔵穴は東コーナー部で楕円形を呈し、規模は約74×58cm、深さ約64cmである。カマドは貯蔵穴との位置関係から北東壁に設置されていたものと考えられるが、第191・192号住居跡との重複によって失われたものであろう。



第396図 I区第190号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第191号住居跡	位置	20~22-I-49~51グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.38m×3.50m	主軸方位	東-28度-北	残存深度	約28cm程



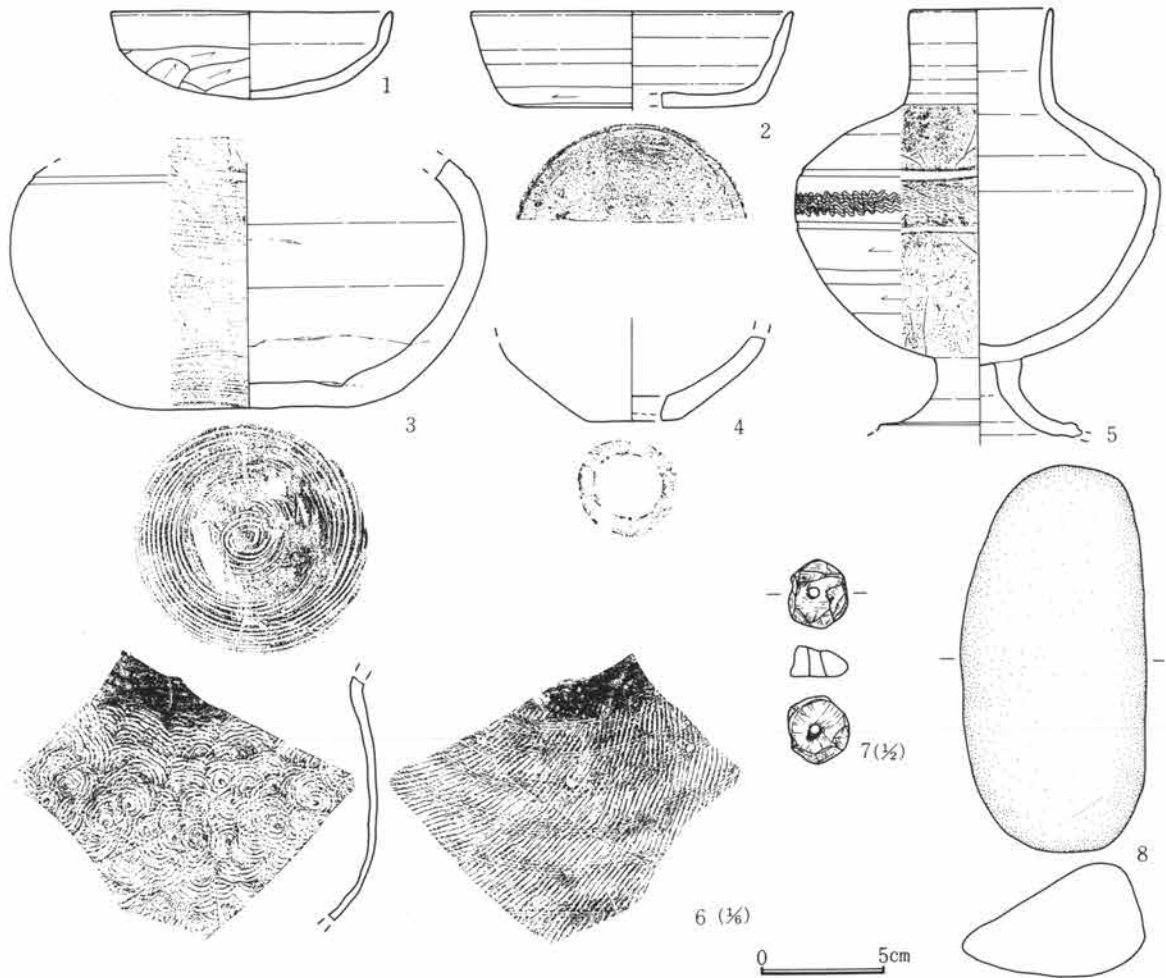
- 1. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。
- 2. 暗褐色土 VI・VII層土粒を多量に含む。
- 3. 暗褐色土 1・2層に類似するが、VI層土粒が多い。
- 4. 暗褐色土 2層に類似する。
- 5. 暗褐色土 焼土粒を少量まばらに含む。
- 6. 暗褐色土 VII層土小ブロックを多量に含む。
- 7. 暗褐色土 VII層土小ブロックを多量に含む。
- 8. 暗褐色土 VII層土粒・焼土粒・炭化物を多量に含む。
- 9. 暗褐色土 8層に類似し、焼土粒・炭化物の含有量が少ない。
- 10. 暗褐色土 灰と焼土粒を微量含む。
- 11. 暗褐色土 VI層土粒を微量に含む。
- 12. 暗褐色土 VI層土粒を少量含み、全体に灰色味が強い。

第397図 I区第191号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第190・192・193号住居跡及び第17号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態から第190・193号住居跡→当住居跡→第192号住居跡・第17号掘立柱建物跡と考えられる。北コーナー付近を第192号住居跡との重複によって失っている他、遺構の残存状態は良好である。床面に貼床は施されておらず、この面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。

カマドは北東壁の南寄りに設置されており、両袖が屋内に張り出した凸字形平面を有するタイプである。残存部の規模は、全長約108cm、燃焼部幅約42cm、煙道長約61cm、下幅約16cmで、主軸方位は東-29°-北である。袖の先端部には角柱状の載石が据えられており、燃焼部内にはこの袖石上に載せられていたと考えられる、57cm程の長さの載石が出土している。支脚は据え方等検出されていない。

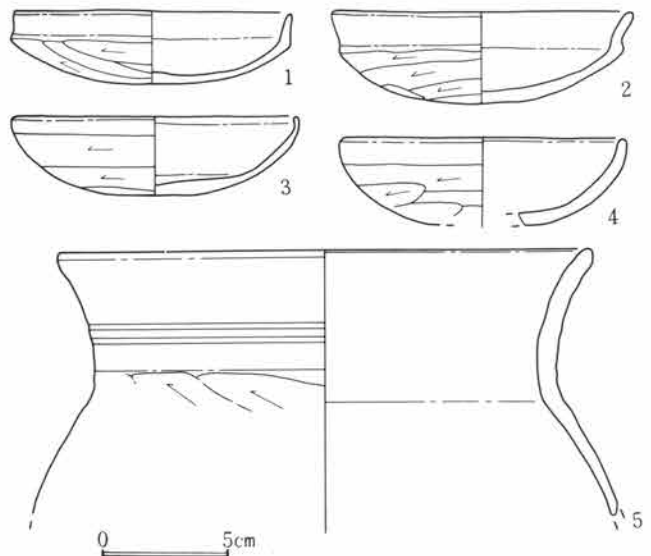
第4章 検出された遺構・遺物



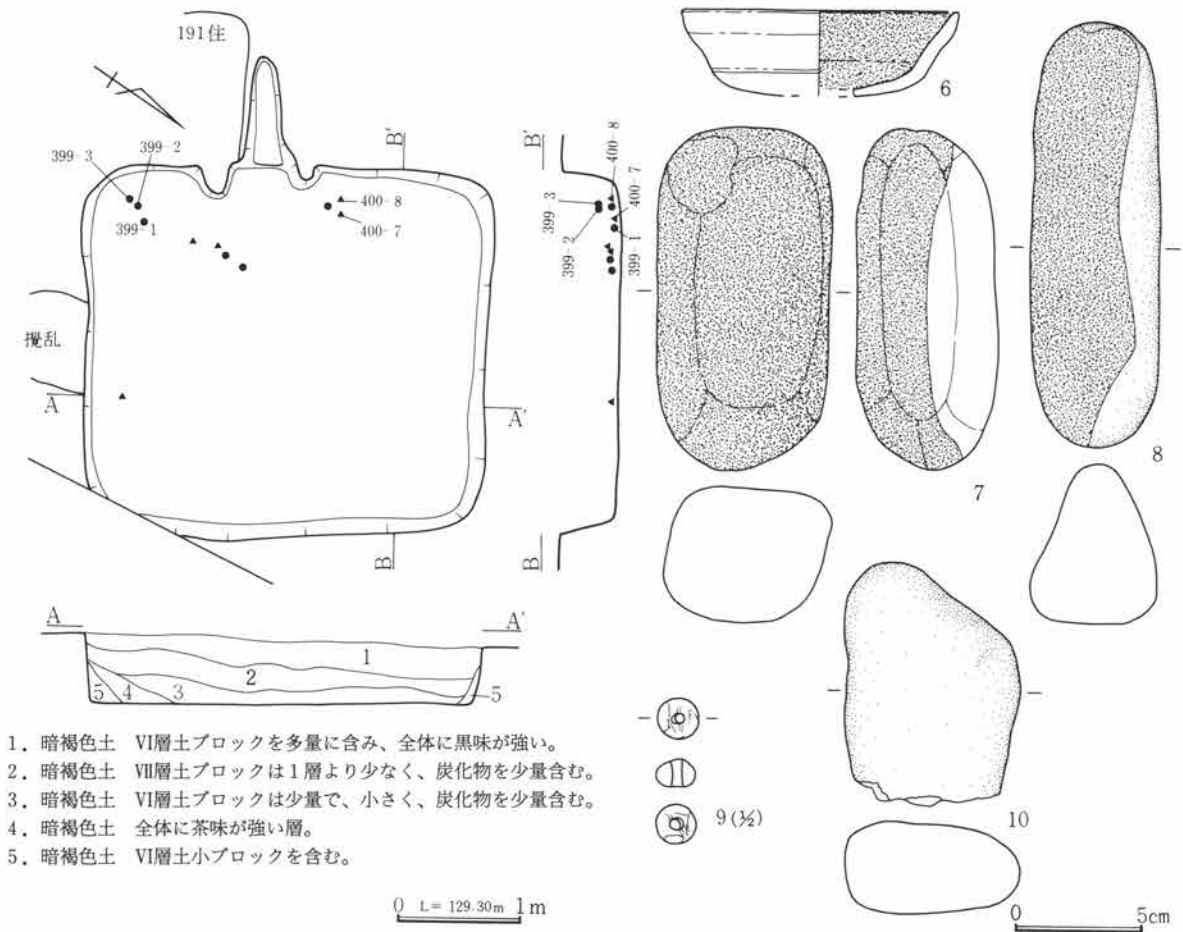
第398図 I区第191号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第192号住居跡	位置	22・23-I-49~51グリッド内
平面形態	隅丸方形	規模	2.90m×3.20m
		主軸方位	西-34度-南
		残存深度	約55cm程

(所見) 当住居跡は第190・191・213号住居跡・第235号址及び第17号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から住居及び址よりは当住居跡が新しく、第17号掘立柱建物跡はさらに新しい時期の遺構と考えられる。床面に貼床はほどこされておらず、この面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。カマドは南西壁の中央やや南寄りに設置されており、両袖が屋内に張り出した凸字形平面を有するタイプである。残存部の規模は、全長約115cm、燃烧部幅約45cm、煙道長約87cm、下幅約16cmで、主軸方位は西-34°-南である。袖に構築材は残存せず、据え方も検出されていない。



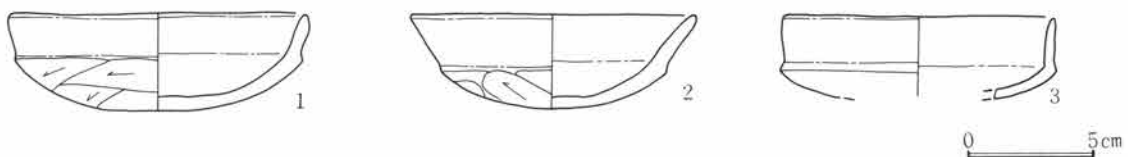
第399図 I区第192号住居跡出土遺物実測図(1)



第400図 I区第192号住居跡・出土遺物実測図(2)

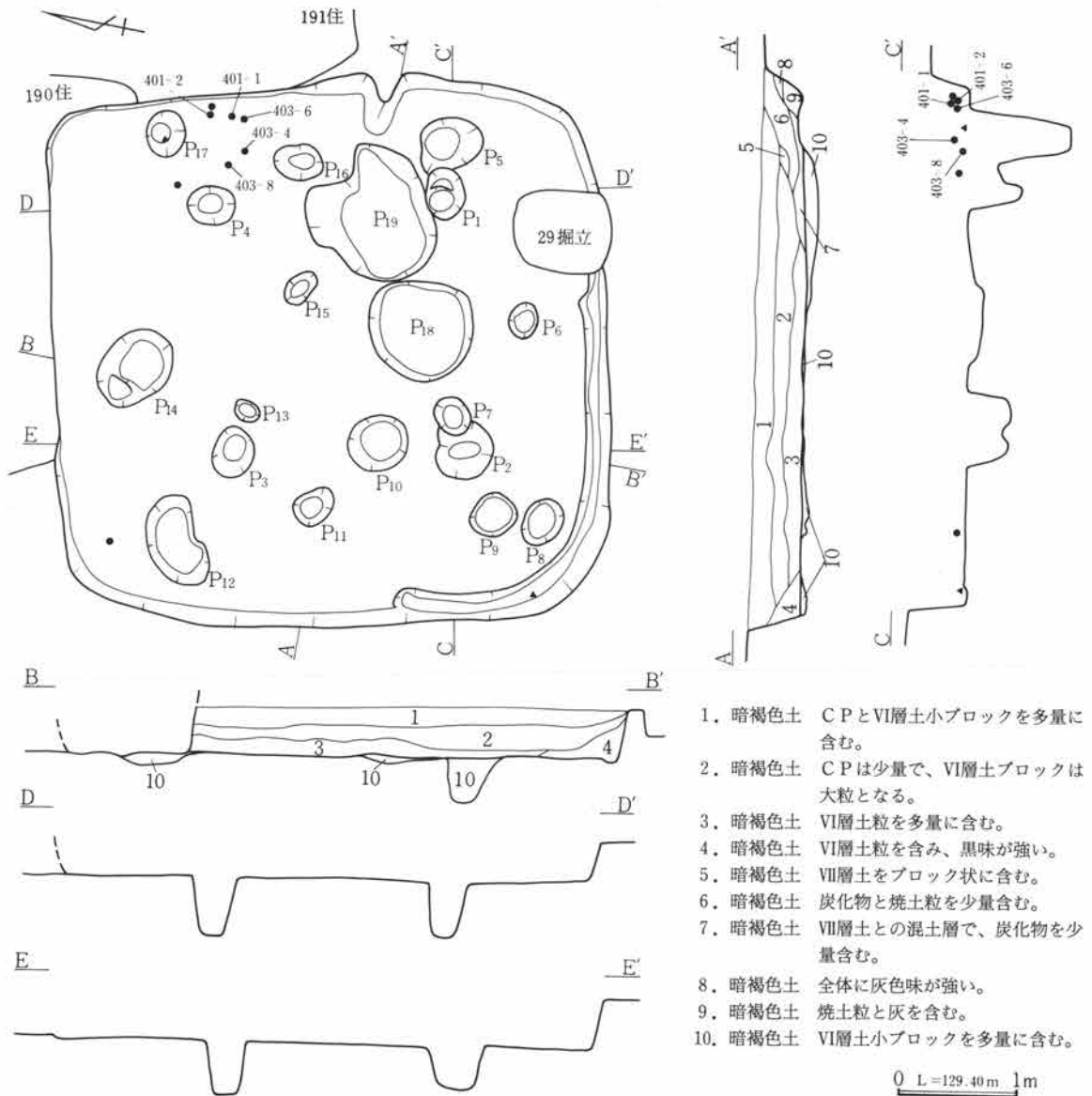
遺構名称	I区第193号住居跡		位置	19~21-I-51~53グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.54m×4.70m	主軸方位	東-12度-北	残存深度	約42cm程

(所見) 当住居跡は第190・191号住居跡及び第17号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。遺構の掘り込みは比較的深いのであるが残存状態は不良で、床面を捉えることはできなかった。したがって検出したのは掘り方面であり、このこひとによって当住居跡には貼床が施されていたことがわかる。壁溝は南コーナー付近にわずかに残存しており、下幅約5~12cm、深さは5cm程度の規模である。柱穴はP₁~P₄(径約34~48cm、深さ約31~49cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.2m、P₂~P₃間約1.9m、P₃~P₄間約2.1m、P₄~P₁間約2.0m)の4本である。その他多数の小ピットを検出しているが、この柱穴配列に替わるような配列は検出されていない。貯蔵穴は柱穴P₄と重複するような位置関係にあるP₅(径約45cm、深さ約88cm)が該当するものと考えられる。カマドは北東壁中央部に袖の痕跡と思われる張り出しが認められることから、この位置に設置されていたものと考えられる。

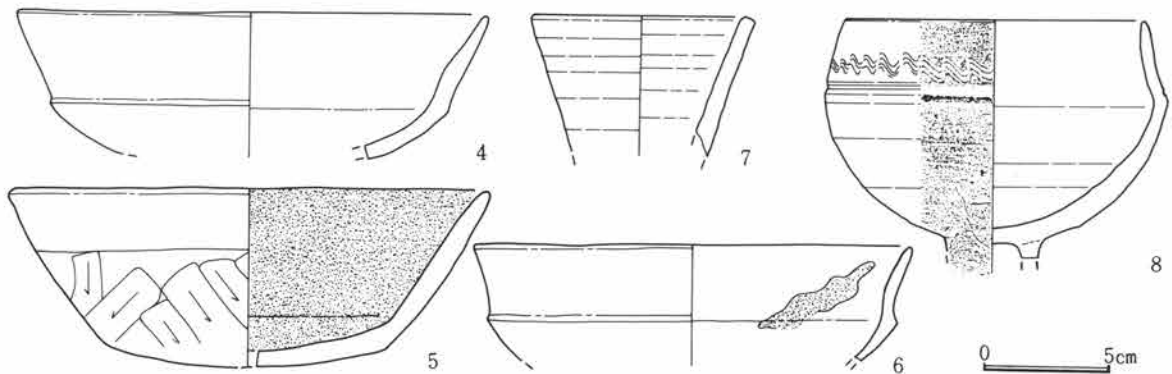


第401図 I区第193号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



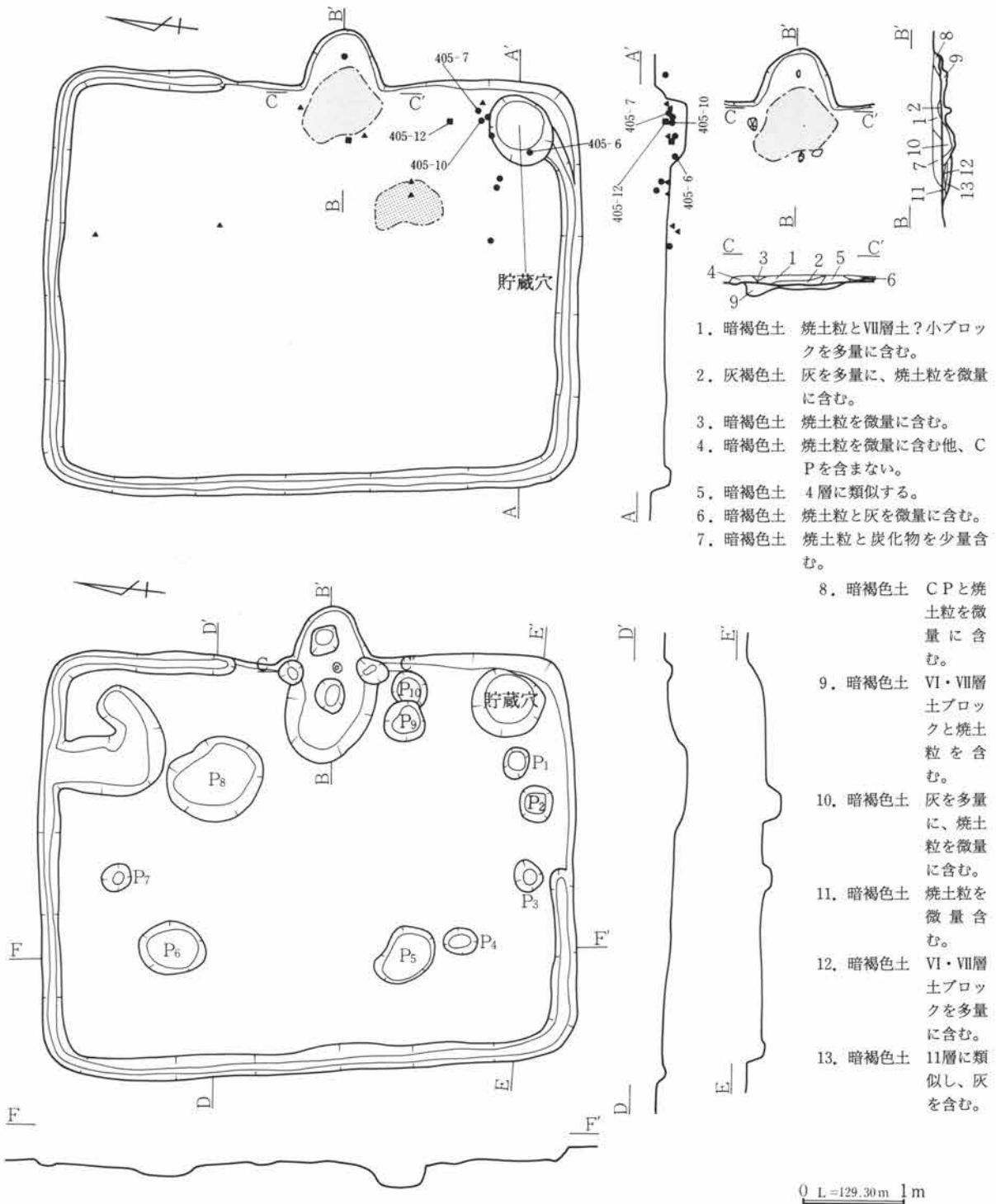
第402図 I区第193号住居跡実測図



第403図 I区第193号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第195号住居跡	位置	5～7-I-54～56グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	4.07m×5.13m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約11cm程

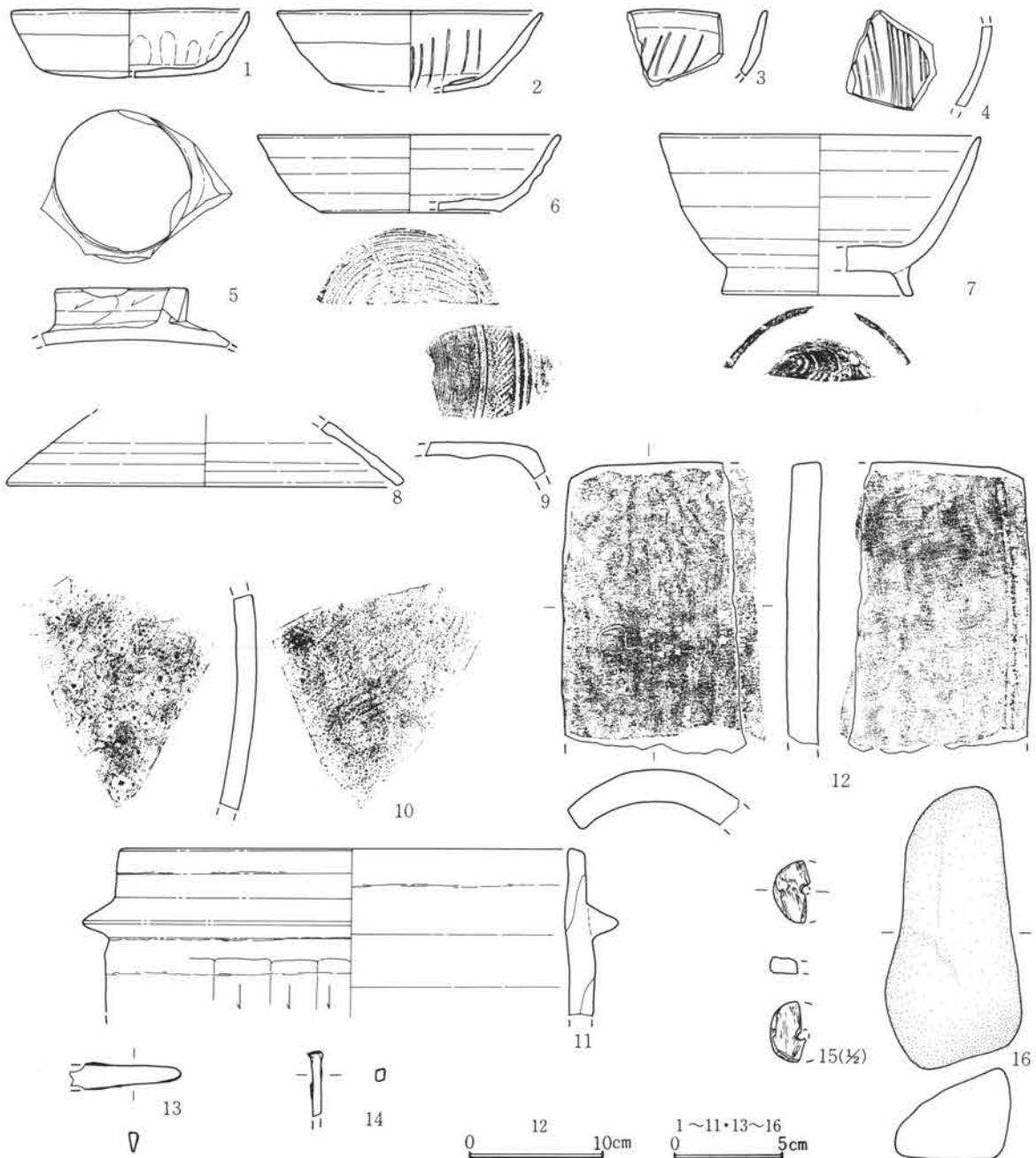
第2節 検出された遺構・遺物



第404図 I区第195号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第227号住居跡及び第27号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が新しい時期の遺構と考えられる。遺構の掘り込みは浅く、壁の残存は不良である。床面にはわずかに貼床が施されており、掘り方の調査ではいくつかのピットを検出している。床面の精査では柱穴は検出されず、壁溝と貯蔵穴を検出した。壁溝はほぼ全周し、下幅約5~10cm、下幅約5cmの規模を有している。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、規模は径約60cm、深さ約14cmである。カマドは東壁ほぼ中央で、半円形を呈しているが、掘り方で袖構築材や支脚の据え方を検出している。

第4章 検出された遺構・遺物

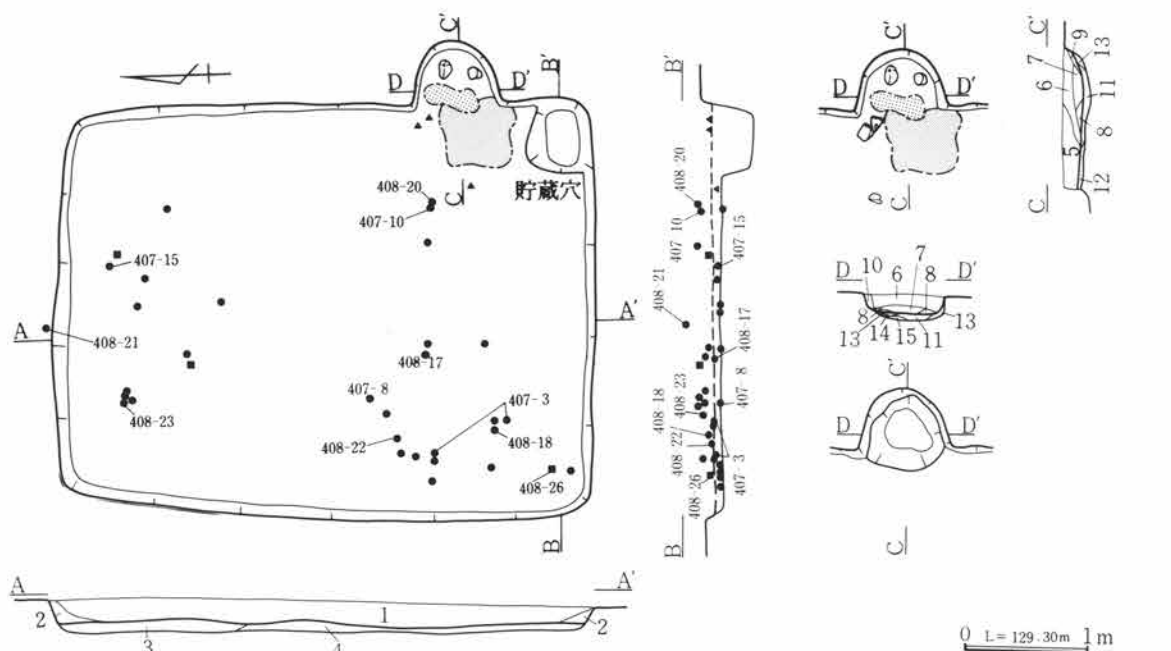


第405図 I区第195号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第196号住居跡	位置	11~14-I-53~55グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.30m×4.27m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約20cm程

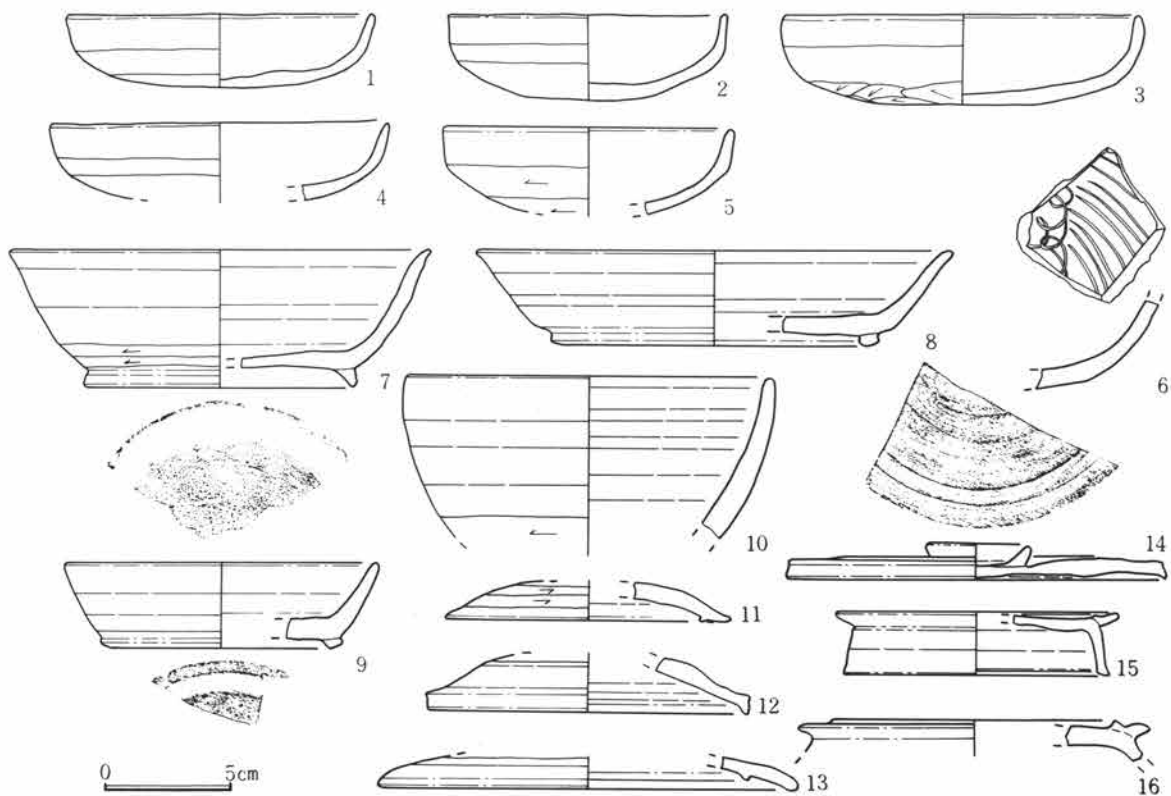
(所見) 当住居跡は第200号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が新しい時期の遺構と考えられる。壁は全周検出されたが、遺構の掘り込みが浅いため残存状態はあまり良好ではない。床面に貼床は認められず、床面の精査で壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東コーナー部に位置し、約60×53cm、深さ約24cmの楕円形を呈している。カマドは東壁の南寄りに設置されており、袖の張り出さない半円形状の平面を有している。検出部の規模は、全長約55cm、燃焼部幅約60cmで、主軸方位は東-0°-北である。燃焼部奥には支脚と考えられる礫が2個検出され、その屋内側に焼土と灰の面が認められた。

第2節 検出された遺構・遺物



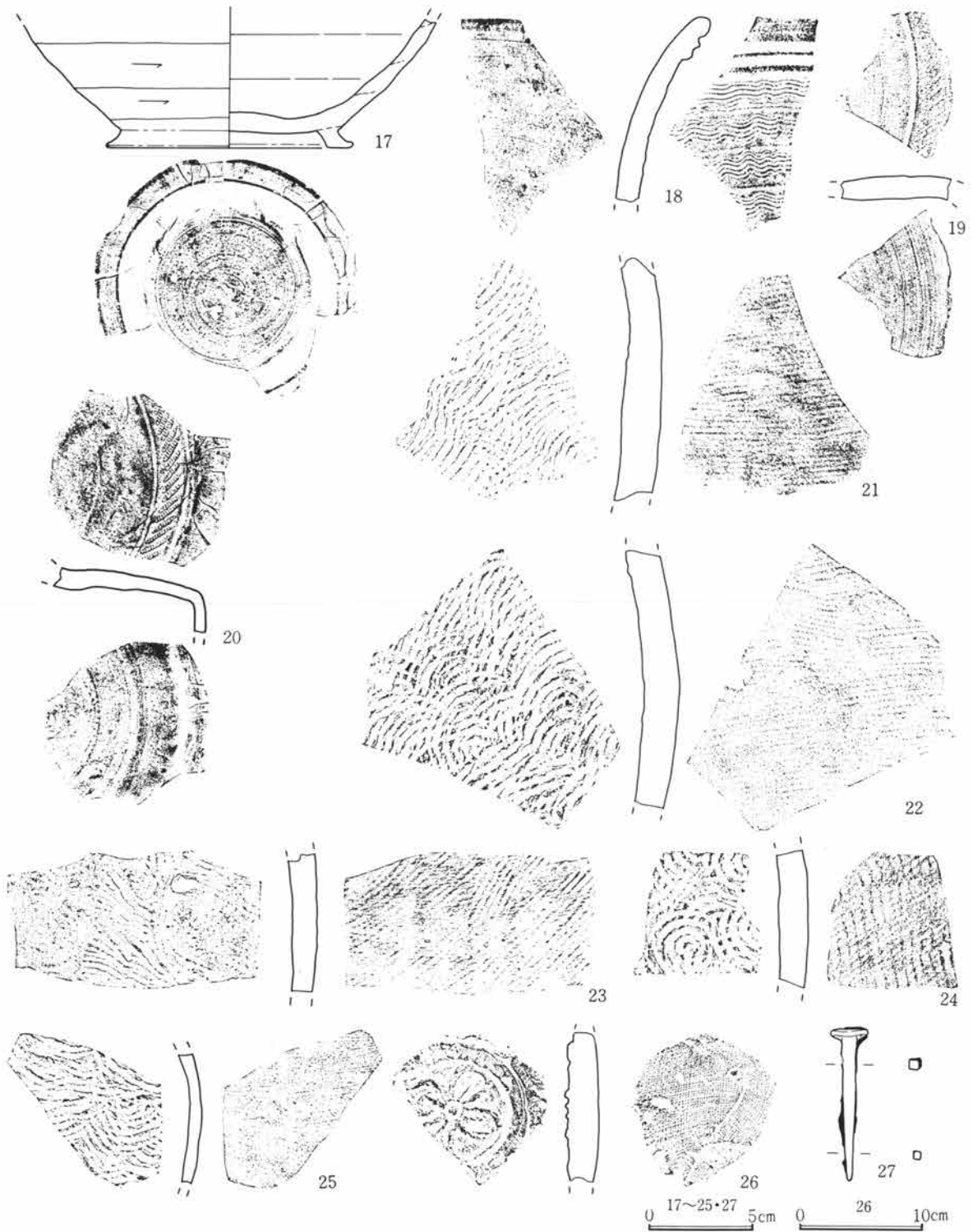
- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 暗褐色土 C Pと炭化物を多量に、焼土粒を少量に含む。 | 9. 黒色土 8層に類似する。 |
| 2. 暗褐色土 C Pと炭化物は1層よりも少ない。 | 10. 暗褐色土 C Pをやや多量に含み、焼土粒等を全く含まない。 |
| 3. 暗褐色土 1・2層よりも全体に粘性が強く、しまりがある。 | 11. 暗褐色土 焼土粒を微量に含み、やや粘性が強い。 |
| 4. 暗褐色土 VII層土主体の層（掘り過ぎの可能性有?） | 12. 暗褐色土 灰を多量に含む。 |
| 5. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量に含む。 | 13. 暗褐色土 10層と類似する。 |
| 6. 暗褐色土 焼土粒を比較的多量に含む。 | 14. 赤褐色土 焼土主体の層。 |
| 7. 暗褐色土 焼土粒とブロックを多量に含む。 | 15. 暗褐色土 10層と類似する。 |
| 8. 黒色土 灰主体の層で、焼土粒を微量含む。 | |

第406図 I区第196号住居跡実測図



第407図 I区第196号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

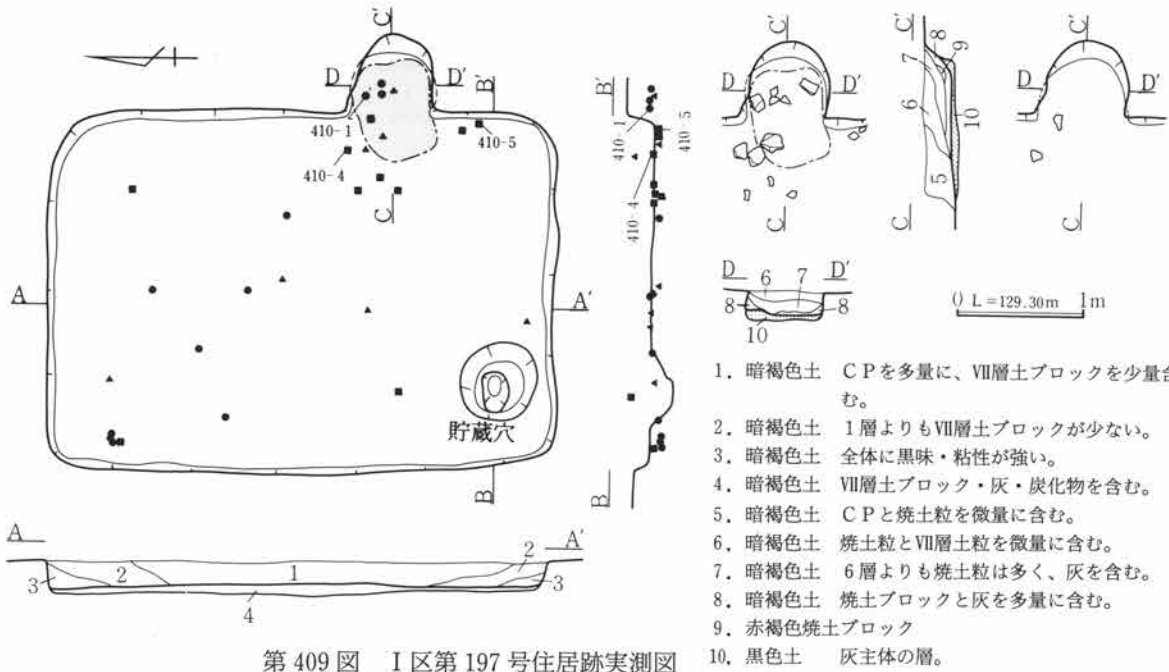


第408図 I区第196号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第197号住居跡	位置	5～7-I-51・52グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.88m×4.05m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約17cm程

(所見) 当住居跡は第216・219・226・227号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が最も新しい時期の遺構と考えられる。壁は全周検出され、床面には全体に5cm程度の厚さの貼床が施されていた。

第2節 検出された遺構・遺物



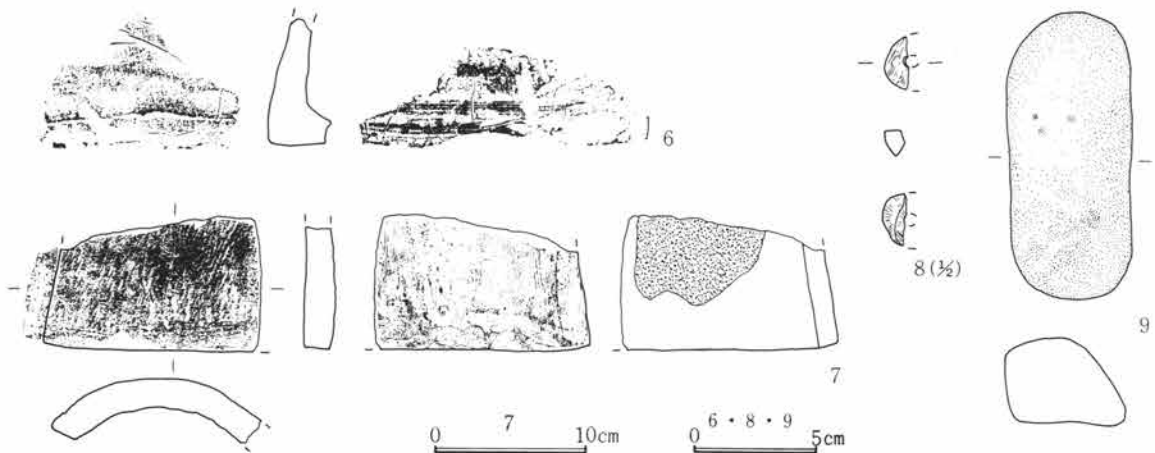
床面の精査によって壁溝・柱穴は検出されず、南西コーナー部に貯蔵穴を検出した。この貯蔵穴は円形を呈し、規模は径約62cm、深さ約20cmで、中央部は楕円形にさらに掘り込まれている。

カマドは東壁の南寄りに設置されており、袖の張り出さない馬蹄形状の平面を有するタイプである。検出部分の規模は、全長約68cm、燃焼部幅約67cmで、主軸方位は東 -0° 北である。燃焼部から屋内側にかけて広範囲に灰面が検出されている。掘り方の調査で袖石や支脚の据え方は検出されていない。



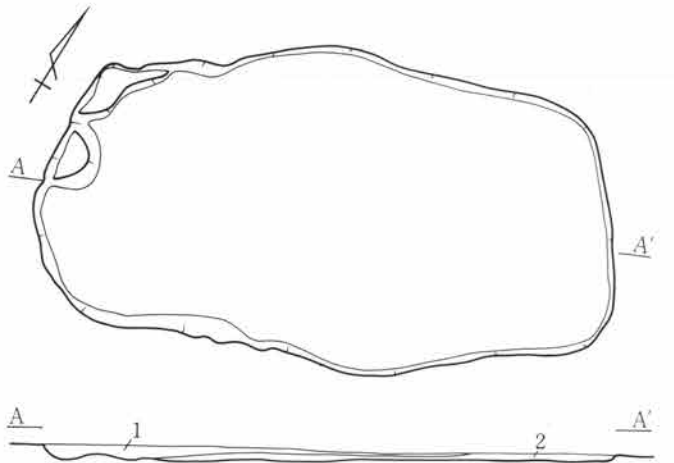
第410図 I区第197号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第 411 図 I 区第 197 号住居跡出土遺物実測図 (2)

遺構名称	I 区第198号址		位置	9～11—I—57～59グリッド内			
平面形態	不整形	規模	4.63m×2.53m	主軸方位	東—30度—北	残存深度	約8cm程



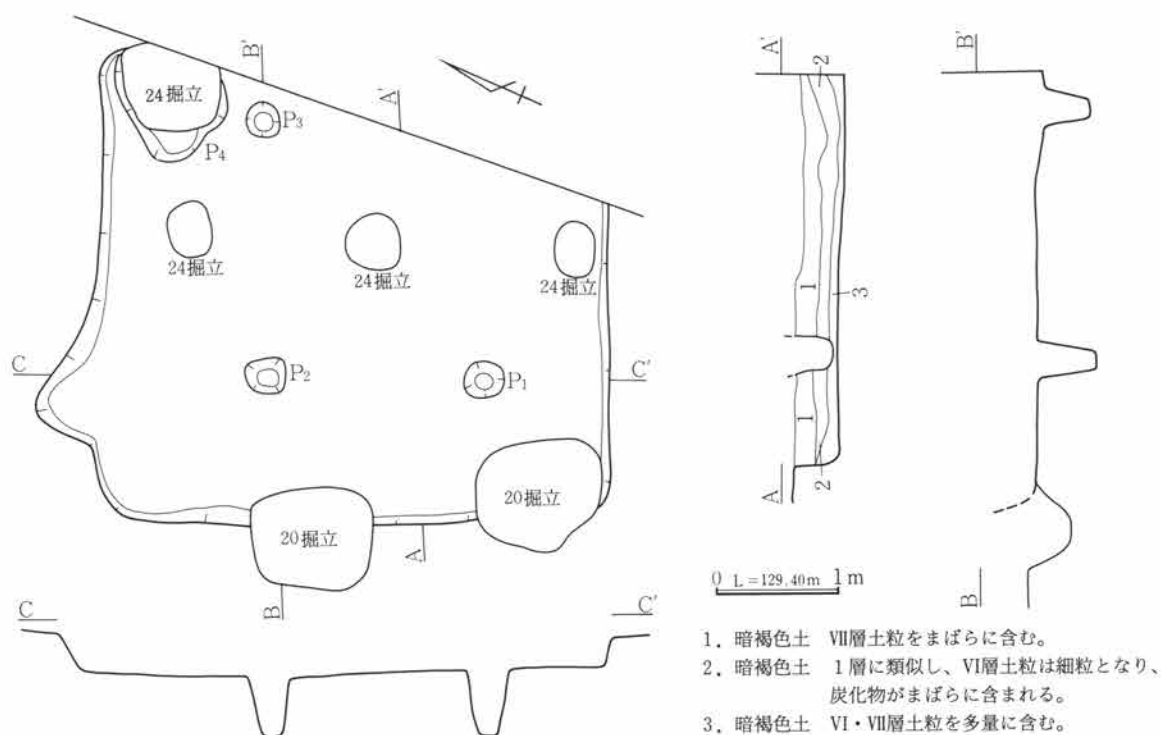
1. 暗褐色土 CPを多量に、炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックを多量に含む。

第 412 図 I 区第 198 号址実測図

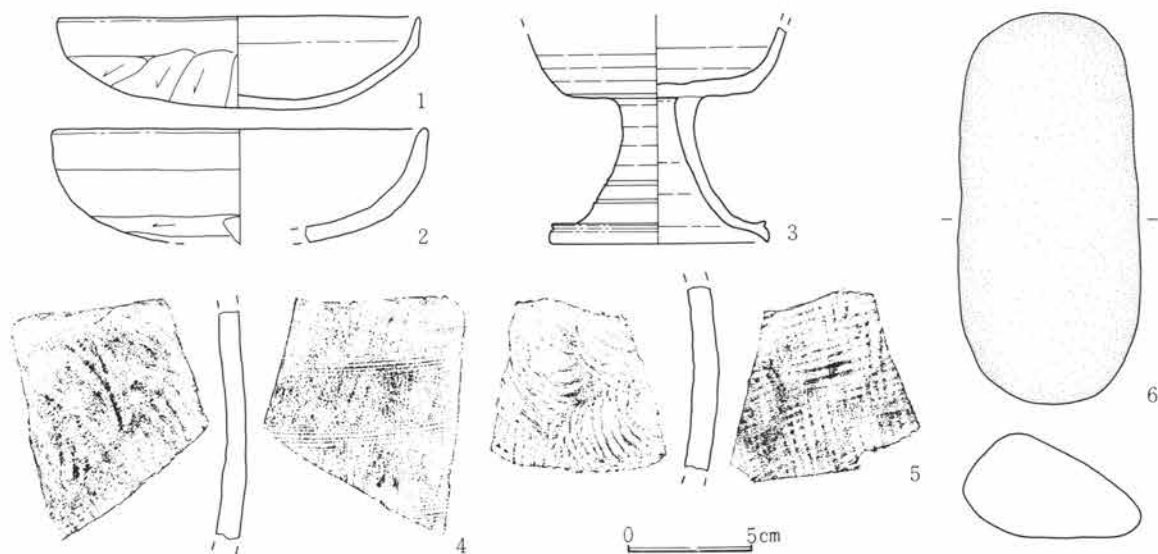
(所見) 当址はVI層土中で平面プランを検出したもので、楕円形に近い不整形を呈している。遺構の掘り込みが浅かったため、確認面からの残存は不良である。当遺構の覆土は、暗褐色土を主体としながら浅間C軽石・炭化物・VI・VII層土ブロックで構成されており、浅間B軽石は全く混入していないことから古代の遺構であることはほぼ確実であるが、伴う遺物が出土していないため詳細な所属時期を特定することはできない平面プランや付属する施設が一切認められないことから住居でないことは確実である。

遺構名称	I 区第199号住居跡		位置	27～30—I—50～52グリッド内			
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×4.06m	主軸方位	—	残存深度	約35cm程

(所見) 当住居跡は第152号住居跡及び第20・24号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態や出土遺物の比較等から当住居跡が最も古い時期の遺構と考えられる。また、当住居跡のカマドを含む東壁部は調査区外であり未調査である。南西壁の一部は掘立柱建物跡との重複によって失われており、その他の部分についても残存状態はあまり良好ではない。北西壁に認められる三角形の張り出しは、当初から掘削されたものの崩落によるものか判然としない。床面には貼床が施された痕跡は認められず、VII層土中に床面が直に構築されている。この面の精査では壁溝と貯蔵穴は検出されず、柱穴を3本検出した。柱穴はP₁～P₃(径約25～30cm、深さ約31～47cm、柱穴間距離P₁～P₂間約1.7m、P₂～P₃間約2.0m)であり、残りの1本は調査区外に位置している。P₄は位置的に貯蔵穴の可能性はあるが、重複しているため全体が不明である。



第413図 I区第199号住居跡実測図

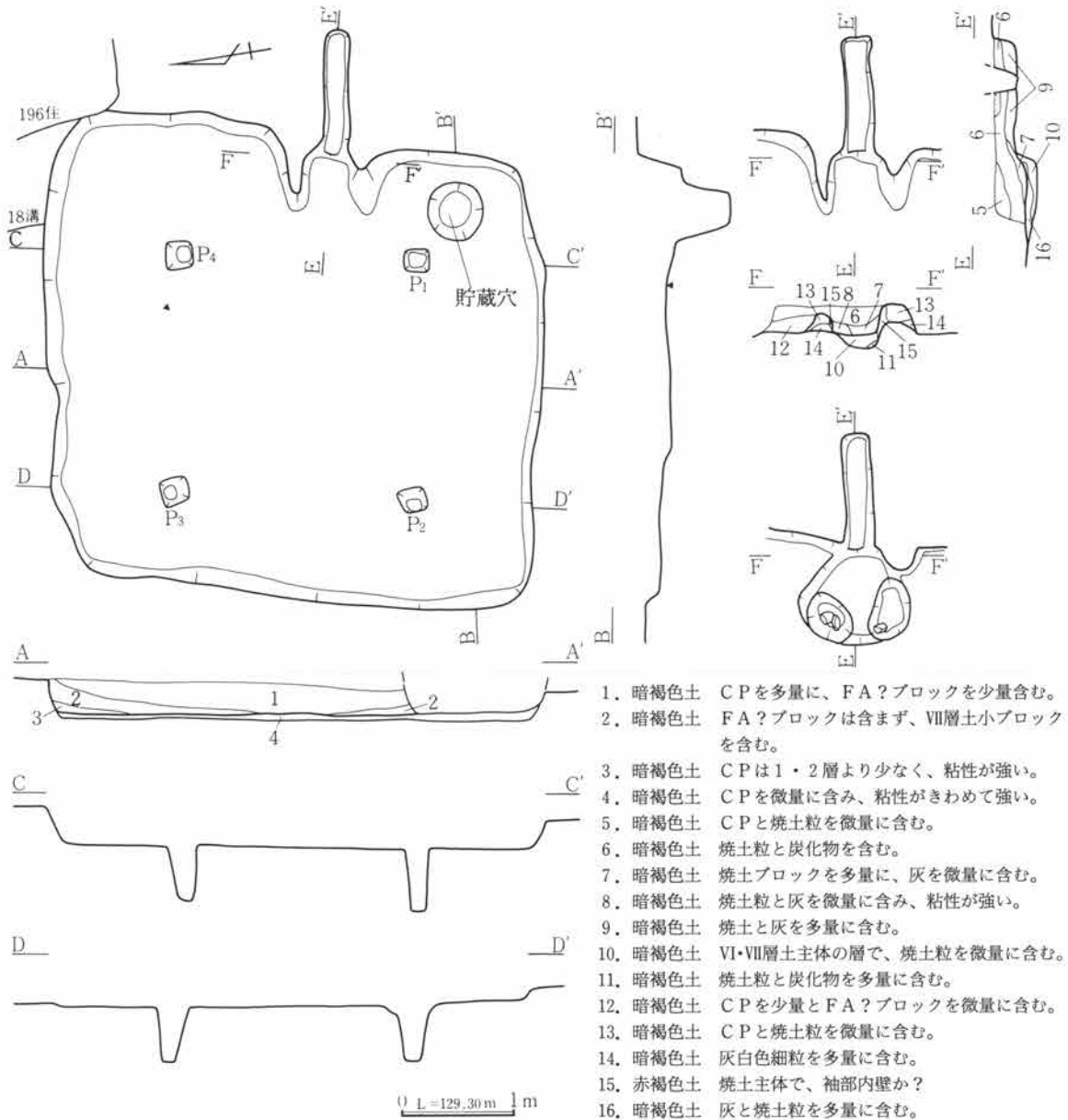


第414図 I区第199号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第200号住居跡	位置	10~12-I-54~57グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	3.98m×4.18m	主軸方位	東-10度-南	残存深度	約28cm程

(所見) 当住居跡は第196号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡→第196号住居跡と考えられる。平面プランの確認は基本的にはIV層土中で行ったが、覆土中には浅間C軽石を顕著に含んでいたため、比較的容易にプランを検出することができた。しかし、遺構確認面は西側にいくにしたがって下がっているため、遺構の残存状態は西側ほど不良である。壁は平面的にも不整な部分が多く、全体に崩落していることが考えられる。床面には全体に5cm程の厚さに浅間C軽石をわずかに含む暗褐色土を主体とした貼床が

第2節 検出された遺構・遺物

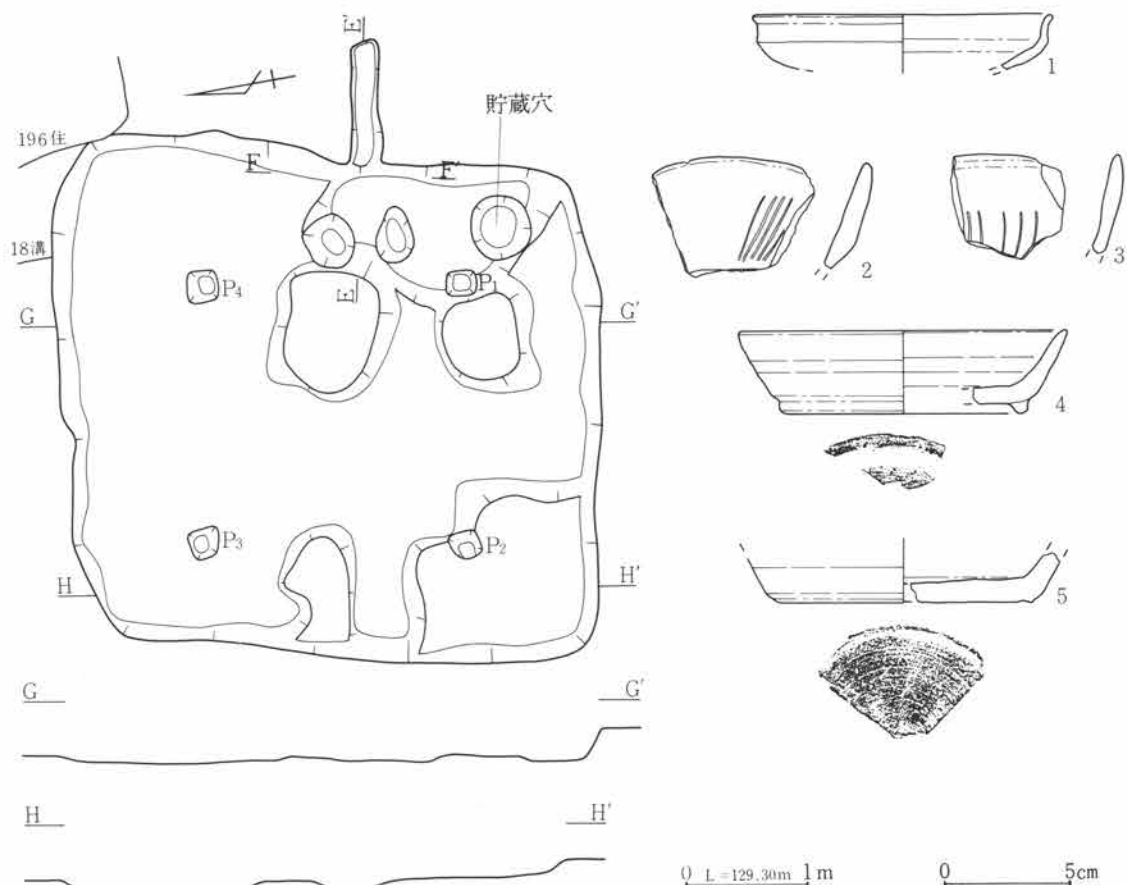


第415図 I区第200号住居跡実測図(1)

施されていた。この床面の精査によって壁溝は検出されず、柱穴と貯蔵穴が検出された。柱穴はいずれも方形の平面を有しているP₁~P₄の4本であり、各柱穴の規模は、P₁(約23×20cm、深さ約55cm)・P₂(約23×20cm、深さ約52cm)・P₃(約24×23cm、深さ約45cm)・P₄(約24×24cm、深さ約44cm)、柱穴間距離は、P₁~P₂間約2.1m、P₂~P₃間約2.1m、P₃~P₄間約2.0m、P₄~P₁間約2.0mである。掘り方の調査によってもこれらの柱穴に代わるようなピットは検出されていないことから、当住居跡においては柱穴配列を変更するような住居の建て替えは考えられない。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており、円形を呈している。規模は径約50cm、深さ約54cmである。

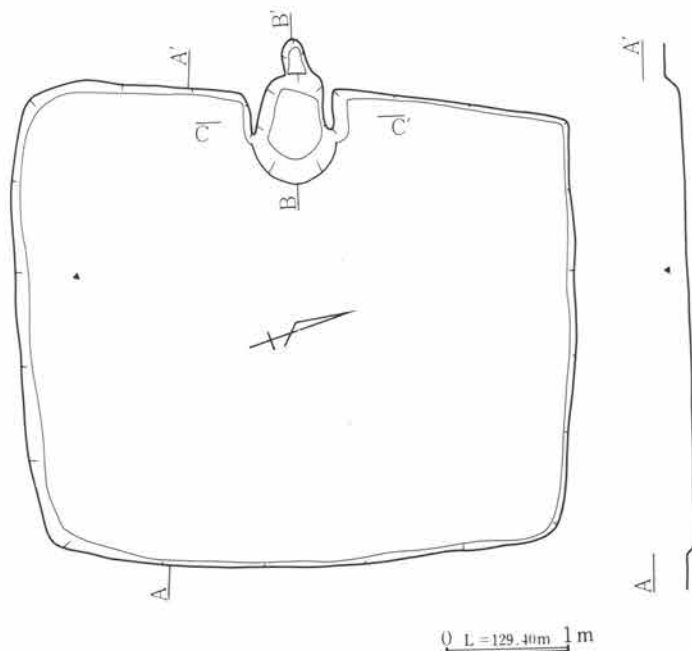
カマドは東壁の中央わずかに南寄りに設置されており、両袖が張り出した凸字形の平面を有している。検出部分の規模は、全長約156cm、燃焼部幅約45cm、奥行き約47cm、煙道長約105cm、下幅約14cmで、主軸方位は東-11°-南である。袖の先端部に構築材は残存していないが、掘り方の調査で袖に当たる位置から据え方と考えられる小ピットが検出されていることから、本来は袖石等が据えられていたものであろう。

第2節 検出された遺構・遺物



第416図 I区第200号住居跡(2)・出土遺物実測図

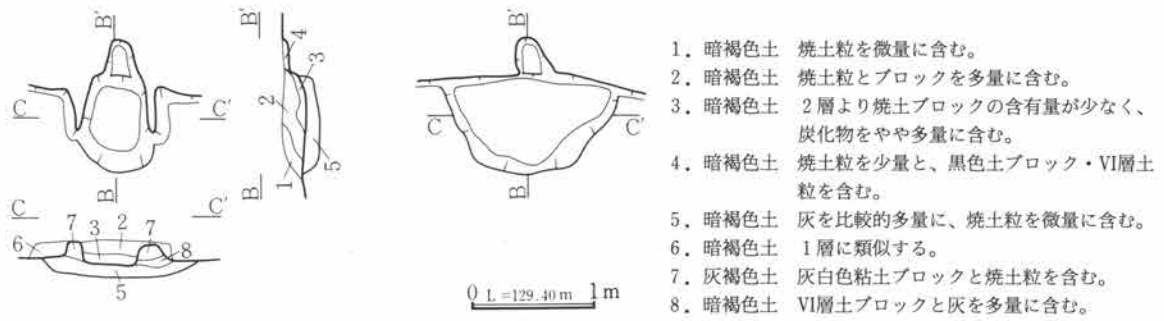
遺構名称	I区第201号住居跡	位置	6～8-I-57～59グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.76m×4.44m	主軸方位	西-20度-北	残存深度	約20cm程



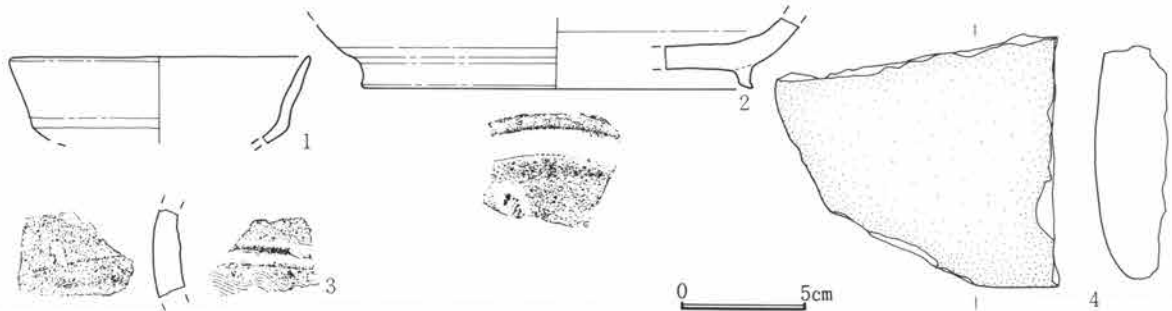
第417図 I区第201号住居跡実測図(1)

(所見) 当住居跡は第206号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡の方が新しい時期の遺構と考えられるが、出土遺物の比較からは判然としない。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、遺構の掘り込みが浅く、残存状態は不良である。床面に貼床は施されておらず、この面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴のいずれも検出されていない。カマドは北西壁の中央部に設置されており、両袖が張り出した凸字形の平面を有している。検出部分の規模は全長約72cm、燃烧部幅約40cm、奥行き約44cm、煙道長約30cm、下幅約15cmで、主軸方位は西-20°-北である。

第4章 検出された遺構・遺物

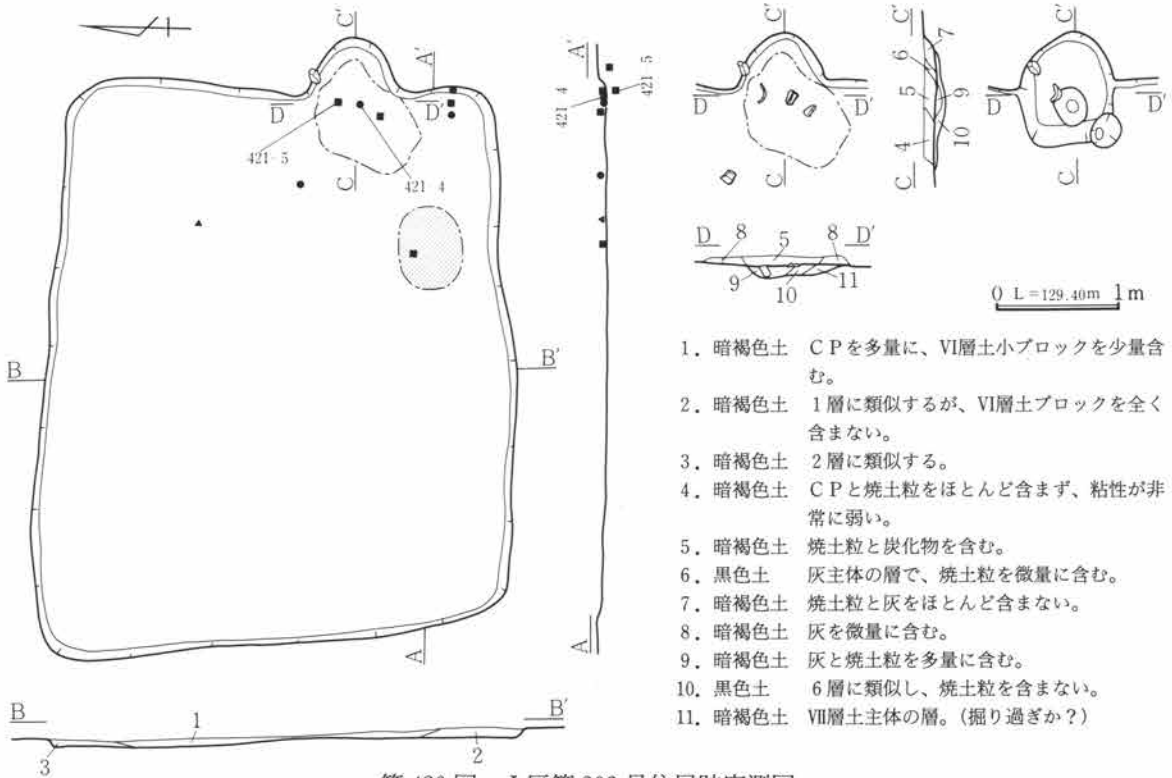


第 418 図 I 区第 201 号住居跡実測図 (2)

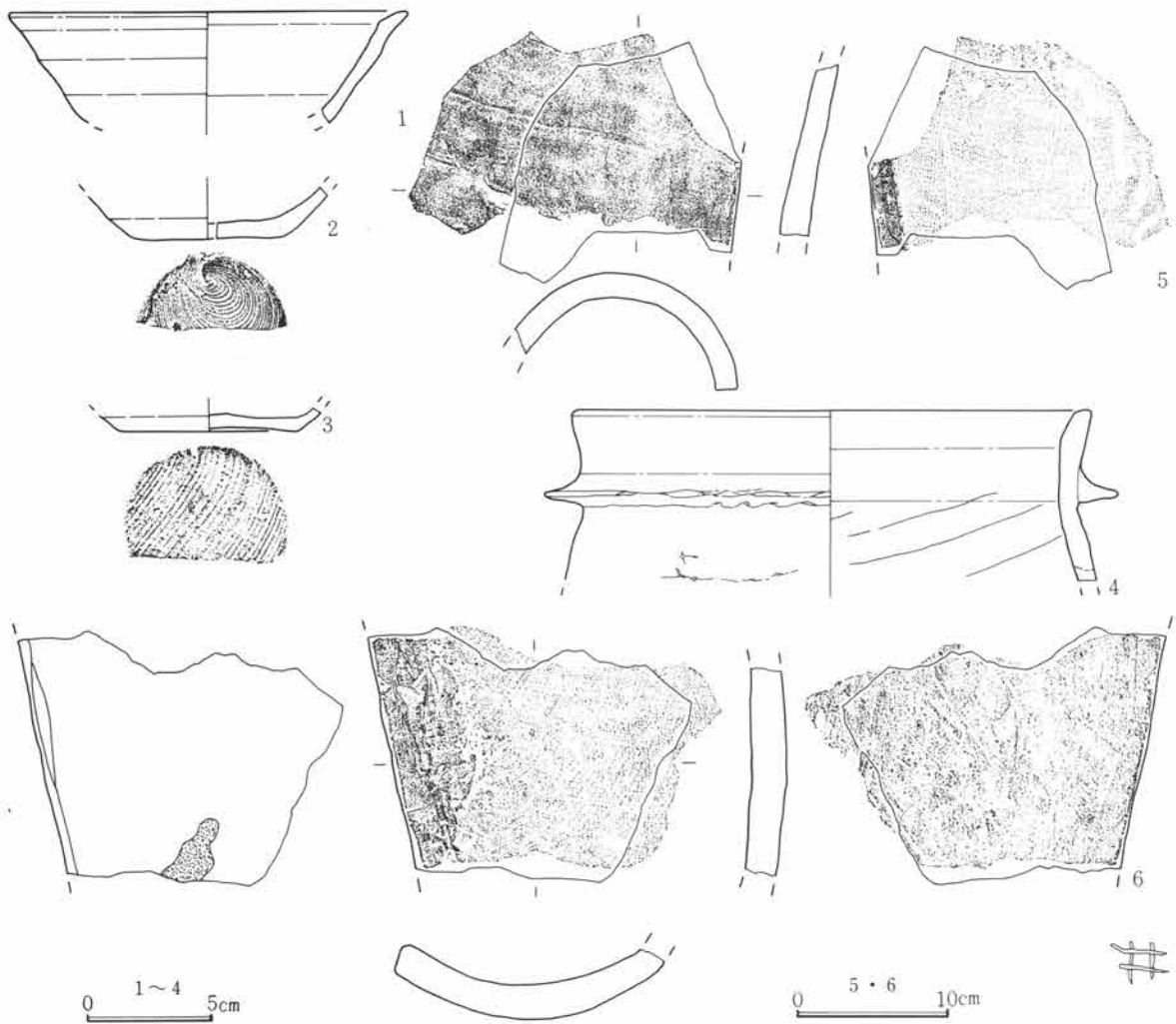


第 419 図 I 区第 201 号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I 区第202号住居跡	位置	1～3-I-54～56グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	4.45m×3.71m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約7cm程



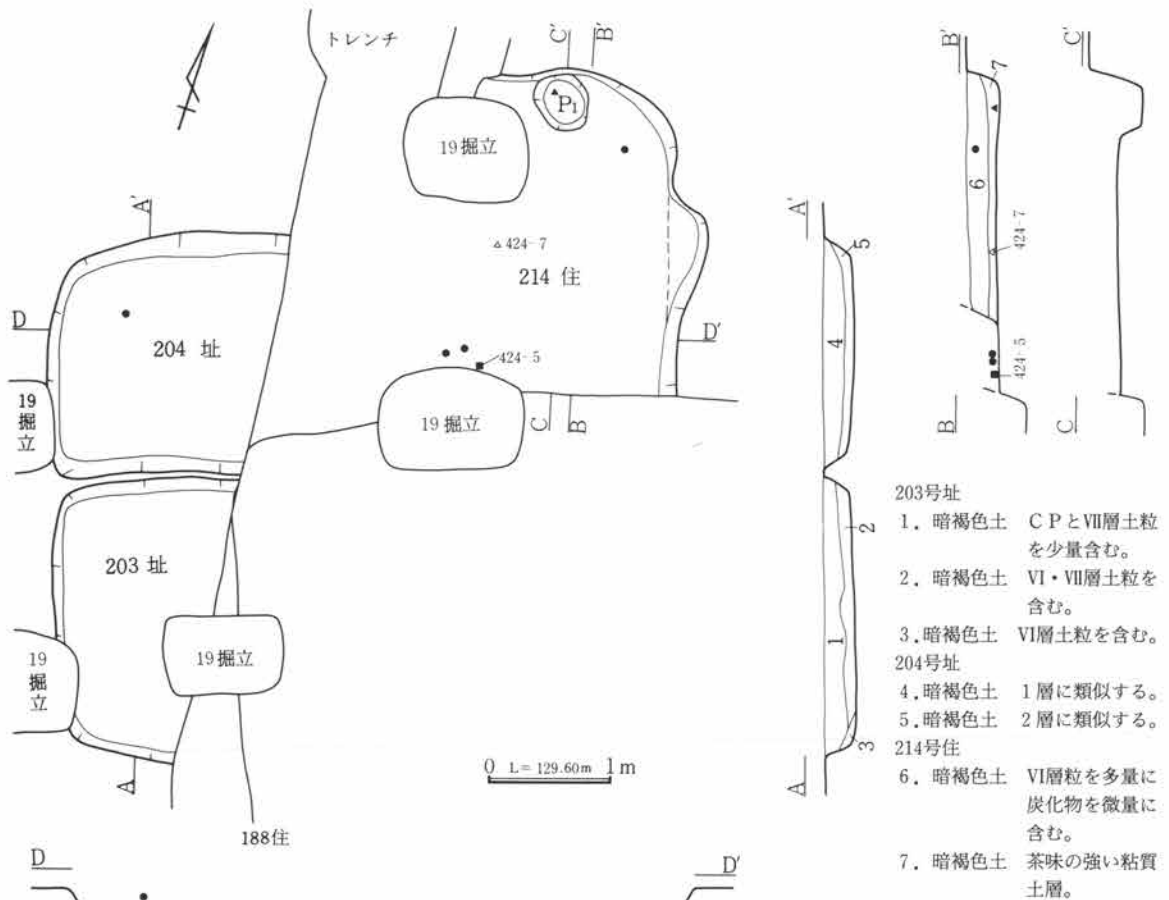
第 420 図 I 区第 202 号住居跡実測図



第 421 図 I 区第 202 号住居跡出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第209号住居跡及び第222号址と重複しているが、遺構の検出状態や出土遺物の比較から当住居跡が最も新しい時期の遺構と考えられる。遺構の掘り込みが浅いために、確認面からの残存は非常に悪い。床面に貼床は施されておらず、この面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴のいずれも検出されていない。カマドは東壁の南寄りに設置されており、袖が張り出していた可能性がある半円形の平面を有するタイプである。検出部分の規模は、全長約50cm、燃焼部幅約65cmで、主軸方位は東-0°-北である。袖の構築材は残存せず、掘り方の調査でも据え方等は検出されていない。

遺構名称	I 区第203号址	位置	32・33-I-57・58グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×2.26m	主軸方位	—	残存深度	約26cm程
遺構名称	I 区第204号址	位置	33・34-I-57・58グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×1.90m	主軸方位	—	残存深度	約23cm程
遺構名称	I 区第214号住居跡	位置	34・35-I-56~58グリッド内				
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約25cm程

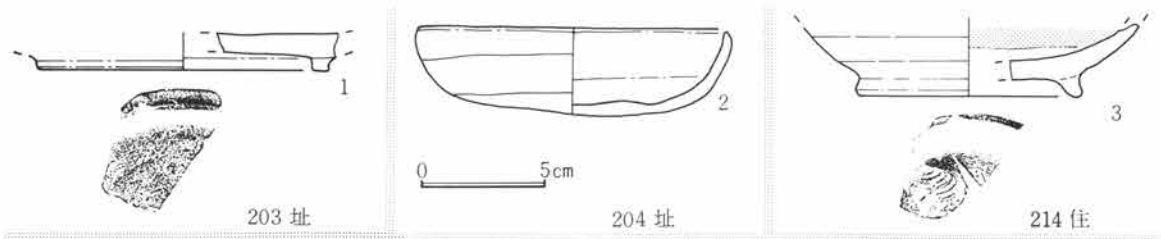


第422図 I区第203・204号址・第214号住居跡実測図

(所見) 第203・204号址と第214号住居跡は第188号住居跡及び第19号掘立柱建物跡と重複しているが、それぞれの重複部分を試掘トレンチによって破壊してしまい、遺構の検出状態等からの新旧関係が捉えられないため、出土遺物の比較をもとに判断すると第188号住居跡→第203・204号址→第214号住居跡という関係が想定できるが、第19号掘立柱建物跡との関係は不明である。

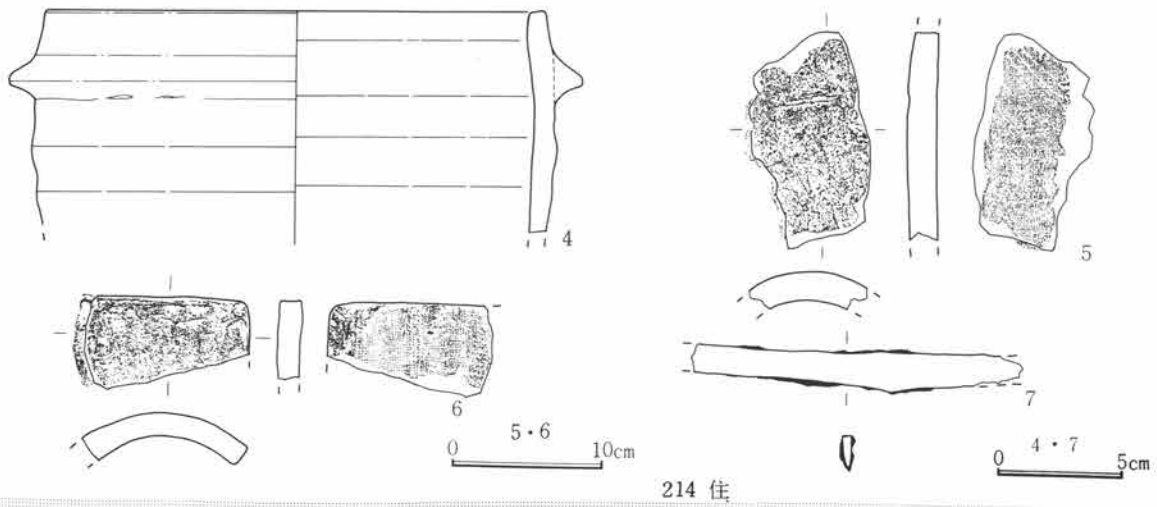
第203・204号址はどちらも長方形に近い平面形が想定される遺構であるが、両者は接するように平行しており、また、南西壁は同一線上に乗っていることなどから同一遺構である可能性が高い。しかし、第422図のA-A'断面からもわかるように独立したような掘り方を有していることも事実である。これらの条件から当遺構の性格を判断することはできないが、住居でないことは確実である。

第214号住居跡は、本来であれば第188号住居跡との重複部分は検出可能なはずであるが、第188号住居跡の確認段階では気付かなかった。当住居跡の床面に貼床は施されておらず、壁溝・柱穴もないことが予想される。唯一検出したP₁(径約40cm、深さ約18cm)は貯蔵穴であろうか。



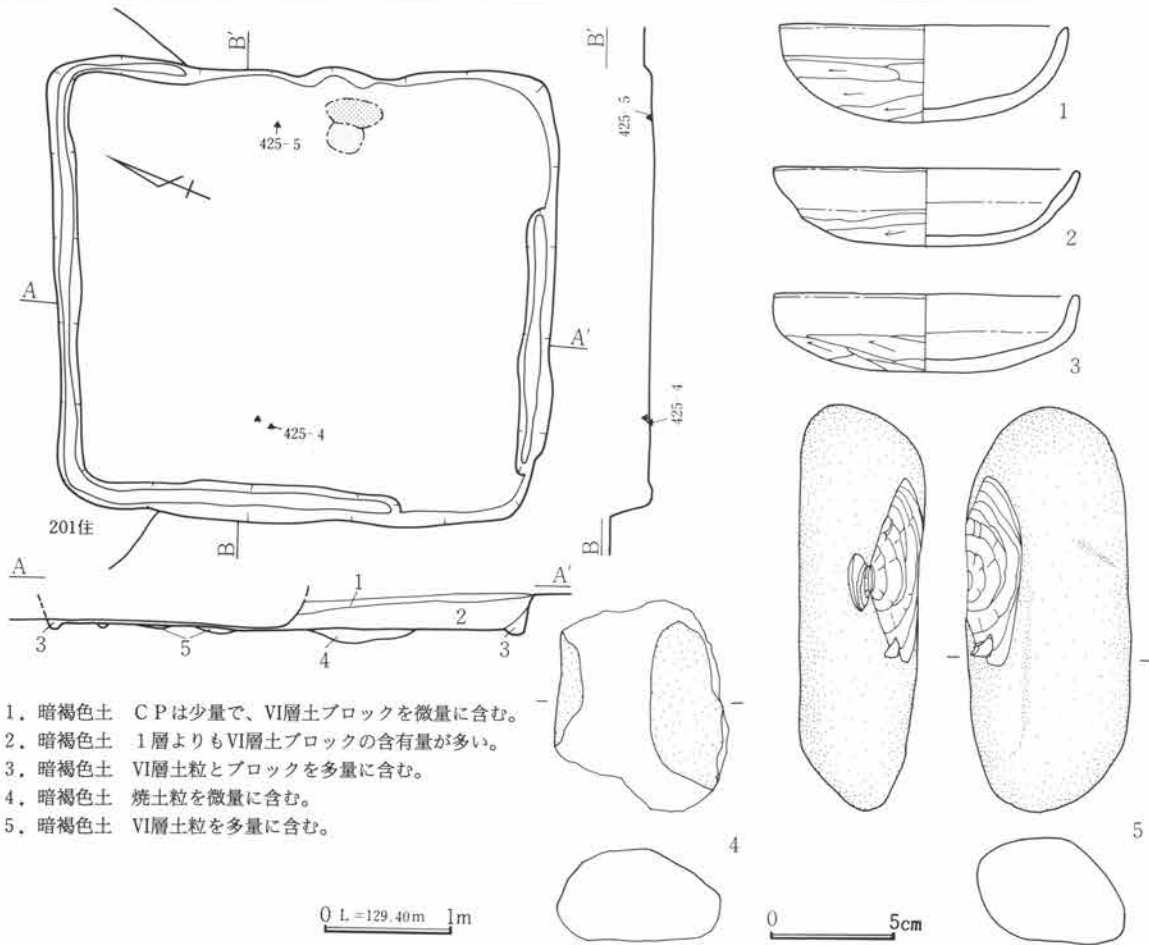
第423図 I区第203・204号址・第214号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



第424図 I区第203・204号址・第214号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第206号住居跡	位置	5~7-I-56~58グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	3.60m×3.98m	主軸方位	東-22度-北	残存深度	約28cm程

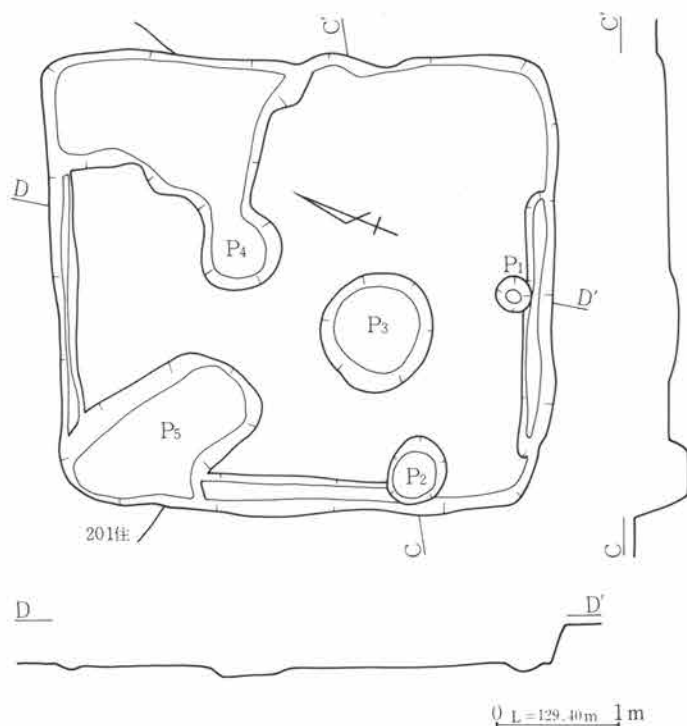


1. 暗褐色土 CPは少量で、VI層土ブロックを微量に含む。
2. 暗褐色土 1層よりもVI層土ブロックの含有量が多い。
3. 暗褐色土 VI層土粒とブロックを多量に含む。
4. 暗褐色土 焼土粒を微量に含む。
5. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。

第425図 I区第206号住居跡(1)・出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第206号住居跡と重複しているが、その新旧関係については前述のとおりである。壁の残存は重複していない南側においては良好である。床面は北及び西コーナー付近を主体に貼床が施されている。

第4章 検出された遺構・遺物



第426図 I区第206号住居跡実測図(2)

床面の精査では壁溝を検出したのみで、柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝はカマドから東コーナー付近及び南コーナー部には検出されていないが、本来は全周していたものであろう。検出部分の規模は、下幅約5~10cm、深さ約5cmである。掘り方の調査では円形のピットを検出したが、配置に規則性は認められない。カマドは北東壁の中央やや南寄りに設置されていたが、痕跡程度の残存である。焼土や灰面の検出位置から燃焼部は屋内側にあり、本来はこれを挟むように両袖が張り出していたものであろう。また、煙道の痕跡はないが、壁を掘り込んでいたことは確実に凸字形平面を有するタイプと考えられる。

遺構名称	I区第207号住居跡	位置	20~23-I-59~62グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	4.80m×4.93m	主軸方位	東-28度-北	残存深度	約35cm程

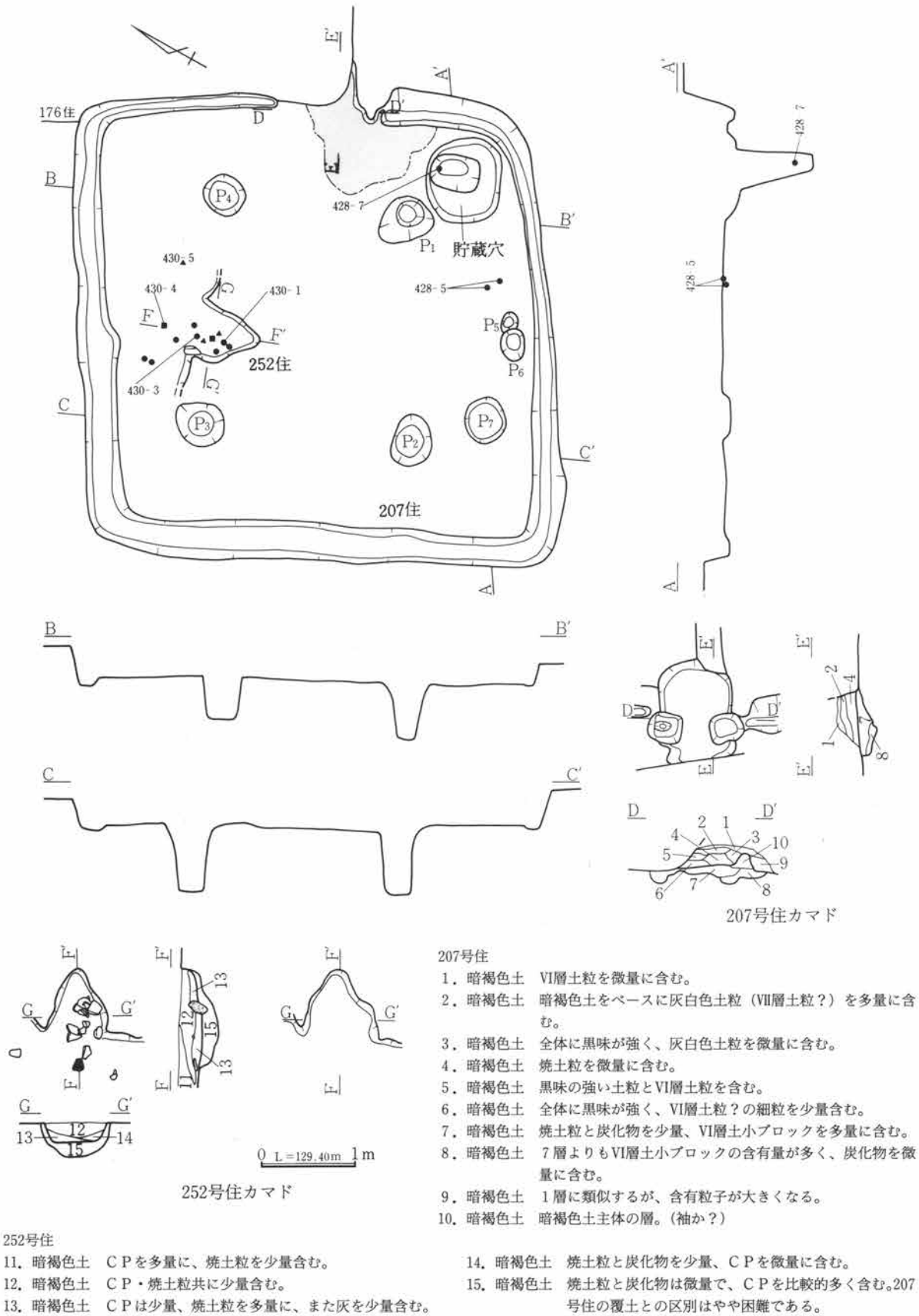
遺構名称	I区第252号住居跡	位置	22・23-I-61グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×—m	主軸方位	南-15度-東	残存深度	約20cm程

(所見) 第207・252号住居跡は第176・248号住居跡及び第228号址と重複しているが、遺構の検出状態等から第228号址→第207号住居跡→第176・252号住居跡と考えられる。

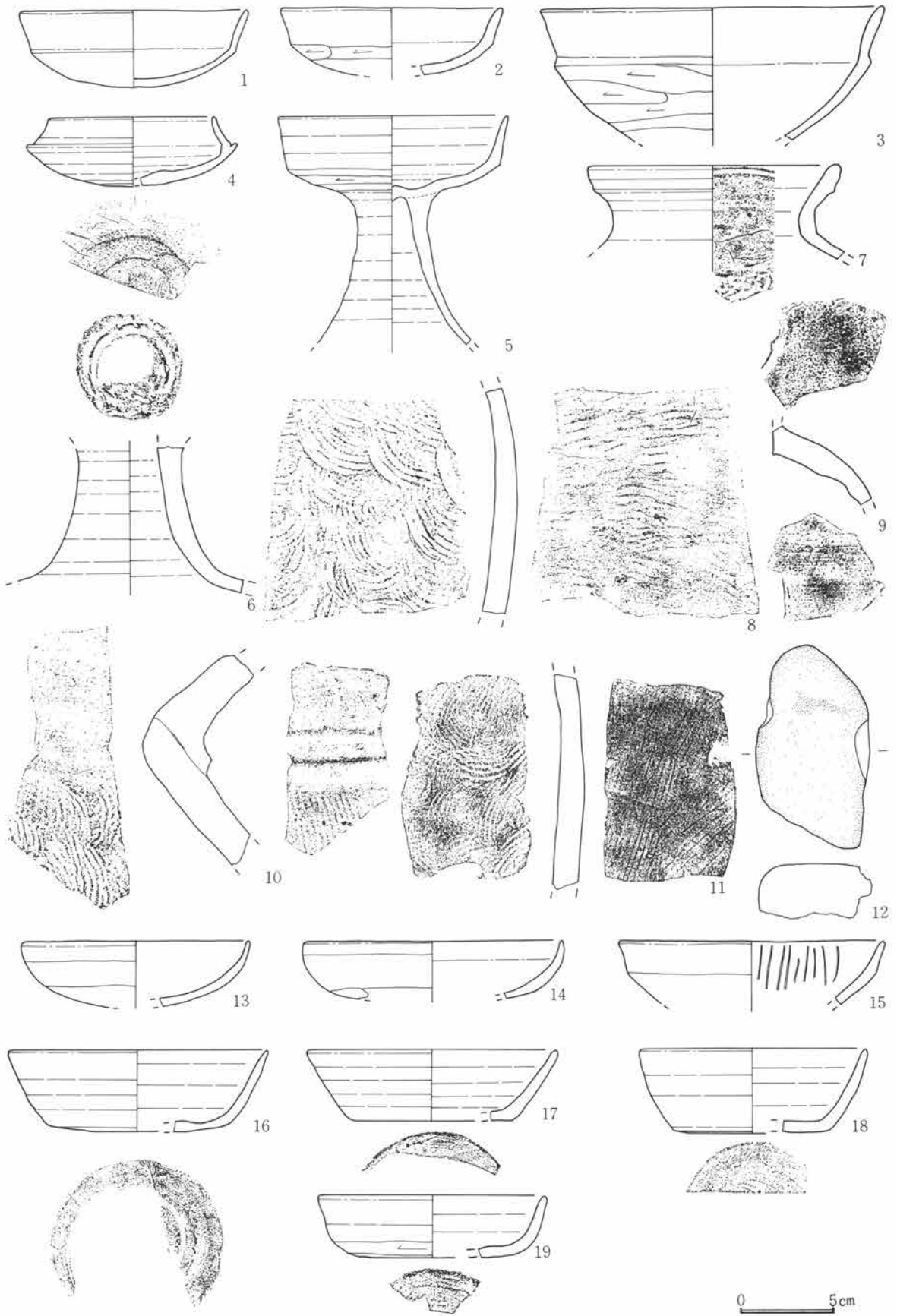
第207号住居跡はカマドの一部を第176号住居跡との重複によって失っている以外、比較的良好な残存状態を示している。床面はVII層土中に直に構築されており、貼床の施された痕跡は認められない。この面の精査で、壁溝・柱穴・貯蔵穴及び小ピットを3本検出した。壁溝はカマド部を除いて全周しており、下幅約8~25cm、深さ約5~10cmの規模を有している。柱穴はP₁(約57×46cm、深さ約52cm)・P₂(約53×40cm、深さ約66cm)・P₃(径約45cm、深さ約74cm)・P₄(径約41cm、深さ約43cm)の4本で、柱穴間距離はP₁~P₂間約2.3m、P₂~P₃間約2.2m、P₃~P₄間約2.4m、P₄~P₁間約1.9mである。貯蔵穴は東コーナー部に位置しており、径約77cm、深さ約12cmの円形の掘り込み底面から、さらに約50×37cm、深さ約76cmの長方形のピットが掘り込まれている。

カマドは北東壁の南寄りに設置されており、大半は重複によって失われている。掘り方の調査では約67cm幅の燃焼部及び一辺30cm程の方形を呈する袖構築材の据え方を検出した。

第252号住居跡は、第207号住居跡の覆土掘削時にカマドのみを検出したものである。調査したカマドの規模は全長約70cm、燃焼部幅約55cmで、燃焼部中央には礫を支脚として据えていた。また、右袖部に当たる位置から礫が出土しており、これを袖の構築材としていたものと思われる。

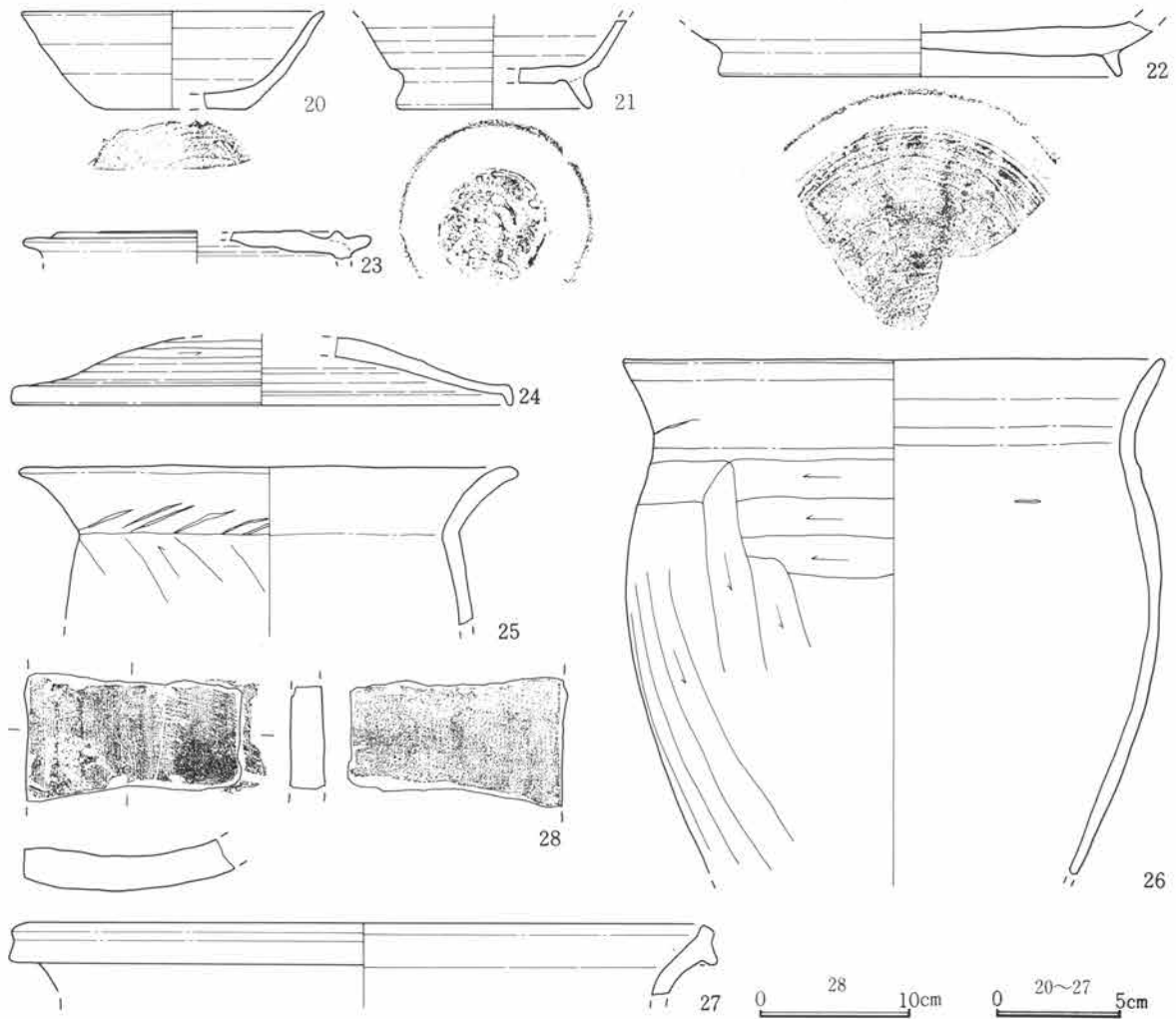


第 427 図 I 区第 207・252 号住居跡実測図

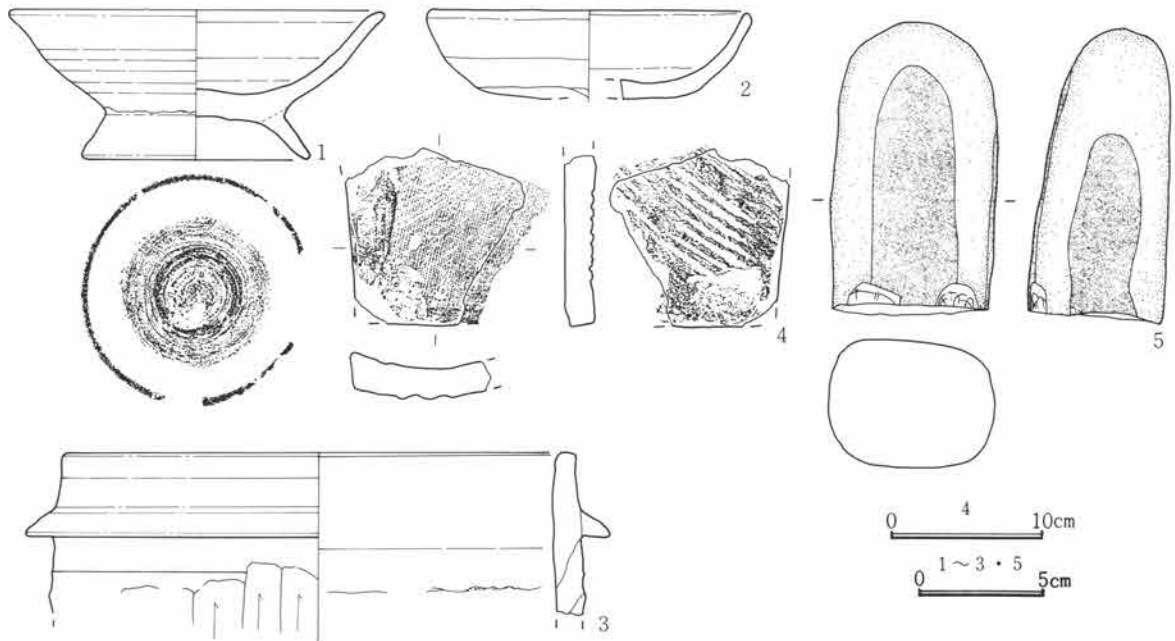


第428図 I区第207号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



第429図 I区第207号住居跡出土遺物実測図(2)



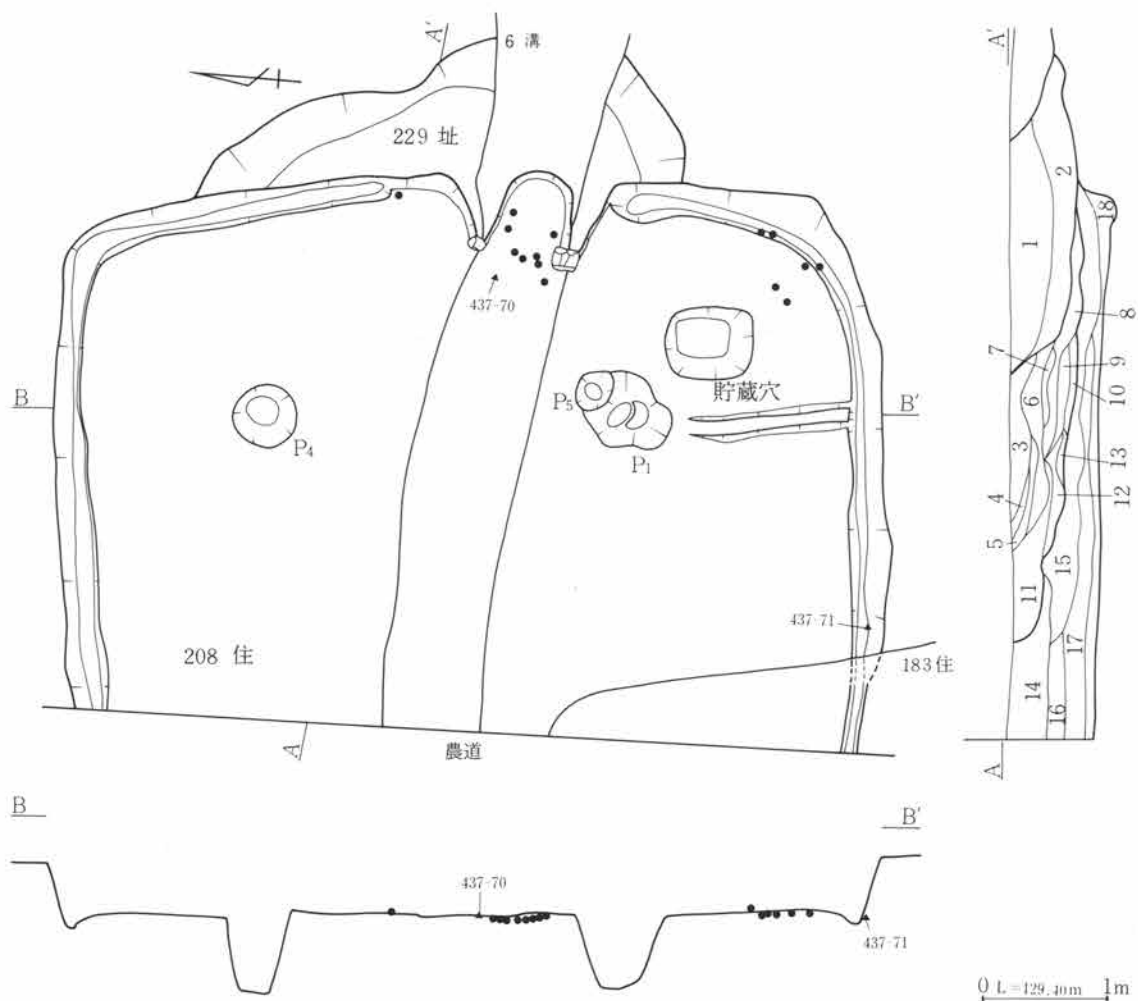
第430図 I区第252号住居跡出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	I区第208号住居跡		位置	17~20-I-58~61グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	6.62m×6.58m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約45cm程

遺構名称	I区第229号址		位置	18~20-I-57・58グリッド内			
平面形態	不整形	規模	—m×3.84m	主軸方位	—	残存深度	約52cm程

遺構名称	I区第249号住居跡		位置	17~19-I-60~62グリッド内			
平面形態	隅丸長方形?	規模	2.58m× —m	主軸方位	東-2度-南	残存深度	約15cm程



229号址

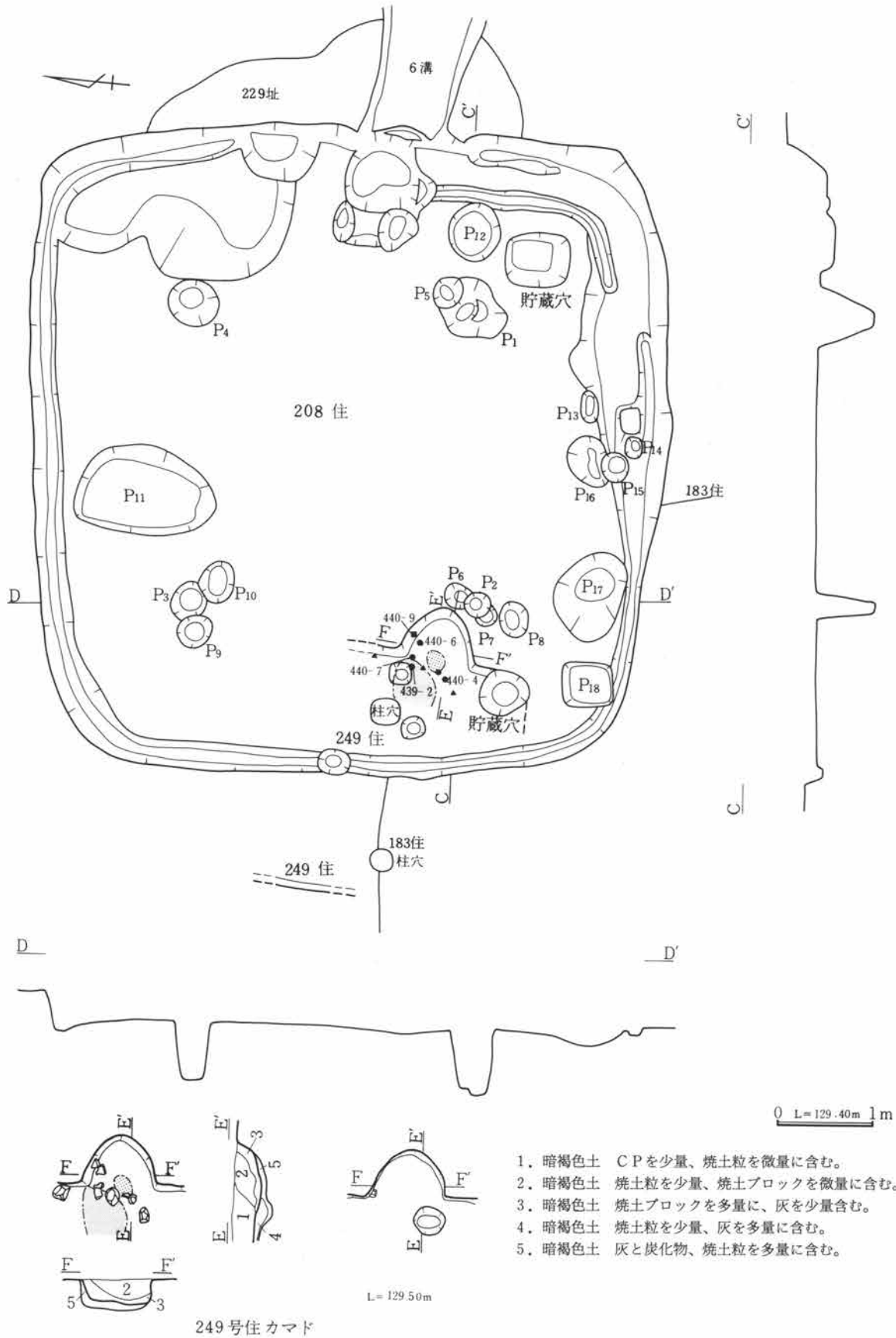
1. 暗褐色土 CPとVI・VII層土粒及び炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土 1層に類似するが、VI層土粒の含有量が少ない。
3. 暗褐色土 灰と炭化物を多量に含む。
4. 暗褐色土 焼土粒と炭化物及び、葉理状の灰を多量に含む。
5. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。
6. 暗褐色土 焼土ブロックと灰と暗褐色土の混土層。
7. 暗褐色土 6層土に類似し、焼土粒を多量に含む。
8. 黒褐色土 全体に粘性が強い。
9. 暗褐色土 VI層土粒を少量まばらに含む。

10. 黒褐色土 黒褐色土をベースにVI層土粒を少量まばらに含む。
11. 暗褐色土 4層に類似する。
12. 黒褐色土 8層に類似する。
13. 暗褐色土 10層に類似する。

208号住

14. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。
15. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を多量に含み、灰は砂状を呈する。
16. 暗褐色土 VI層土粒を少量含む。
17. 暗褐色土 CPとVI層土粒を多量に含む。
18. 暗褐色土 全体に茶味が強い層で、粘性がやや強い。

第431図 I区第208号住居跡・第229号址実測図



第432図 I区第208・249号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

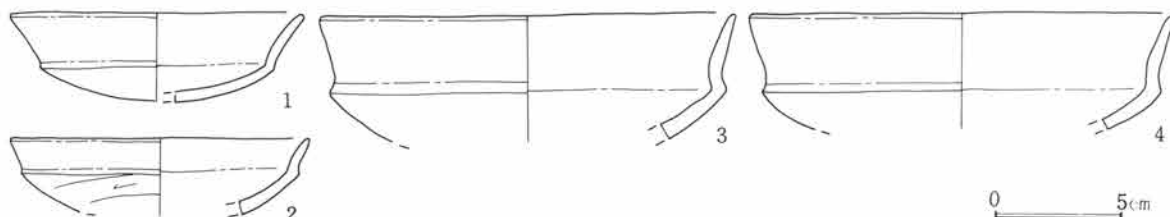
(所見) 第208・249号住居跡及び第229号址は第183号住居跡・第228号址と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態等から第183号住居跡・第228号址→第208号住居跡→第229号址→第249号住居跡という新旧関係が想定できる。また、これらの住居跡は中世以降の第6号溝状遺構によって中央部を削平されており、遺構の関係を把握しにくくしている。第431・432図に示した平面図に違いができてしまったことからわかるように、これらの遺構は一度の調査で明らかにしたものではなく、西側が南北農道下にかかっていたために二次の調査を行っている。第431図に示したのが先行調査で検出した第208号住居跡の東半と第229号址であり、第432図は農道部分の調査で明らかにした第208号住居跡の西半と第249号住居跡と先行調査部分と合成したものである。農道下で調査した部分については床面を捉えることができず、掘り方段階まで下げてしまっているため、敢えて第431図の第208号住居跡西半は省略している。

第208号住居跡は、カマド部分を第6号溝状遺構によって壊されている以外、ほぼ全体を検出することができた。一次調査と比較して二次調査の確認面が下がってしまったために西側の残存状態が悪い。平面プランは全体に張りの強い隅丸方形を呈している。一次調査の床面精査では東半部の壁溝・柱穴及び貯蔵穴を検出したが、全体を捉えた掘り方段階の図をもとに説明すると、壁溝はほぼカマド部分を除いて全周していたものと考えられ、下幅約6～12cm、深さ約4～7cmの規模を有している。南東コーナー部から南壁中央部にかけての壁溝は、掘り方段階で検出したものは内側に巡らされており、掘り替えまたは南壁中央に張りだしを有していた可能性もある。柱穴は一次調査で検出した2本に対応させて考えると、P₁(径約62cm、深さ約57cm)・P₂(径約26cm、深さ約59cm)・P₃(径約35cm、深さ約60cm)・P₄(径約48cm、深さ約66cm)であり、柱穴間距離はP₁～P₂間約3.0m、P₂～P₃間約2.9m、P₃～P₄間約3.1m、P₄～P₁間約2.8mである。P₁～P₃は他のピットと重複しており、これらのピットが柱穴であると仮定すると最低2回程度の柱穴配置の変更を伴う建て替えが行われた可能性がある。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており、長方形を呈している。規模は約69×56cm、深さ約103cmである。

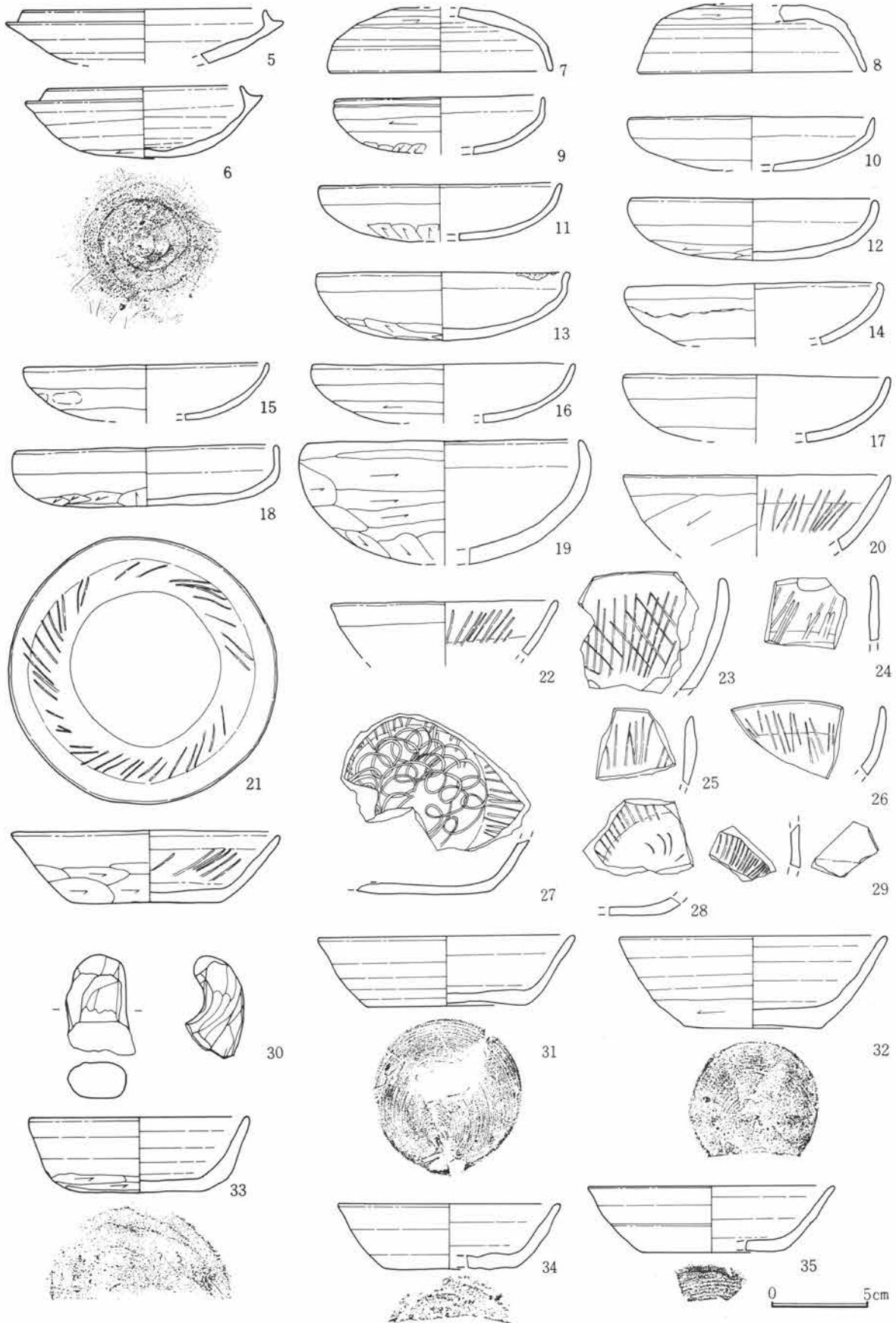
カマドは東壁中央わずかに南寄りに設置されているが、第6号溝状遺構との重複によって袖の痕跡と掘り方のみを検出した。袖は両袖共に屋内に張り出しており、先端部に角柱状の截石を構築材として据えていた。また、燃焼部の最下面が検出されており、袖と作り出す空間は幅約52cm、奥行き約65cmである。掘り方の調査では袖構築材の据え方のピットと燃焼部の掘り込みが検出された。

第229号址の平面プランは不整形を呈しており、カマド等の住居を決定づけるような要素の検出されていないことと考え併せて住居でないことは確実である。A-A'の土層断面からもわかるように複雑な堆積状態を示している上に、単一遺構ではない可能性もある。

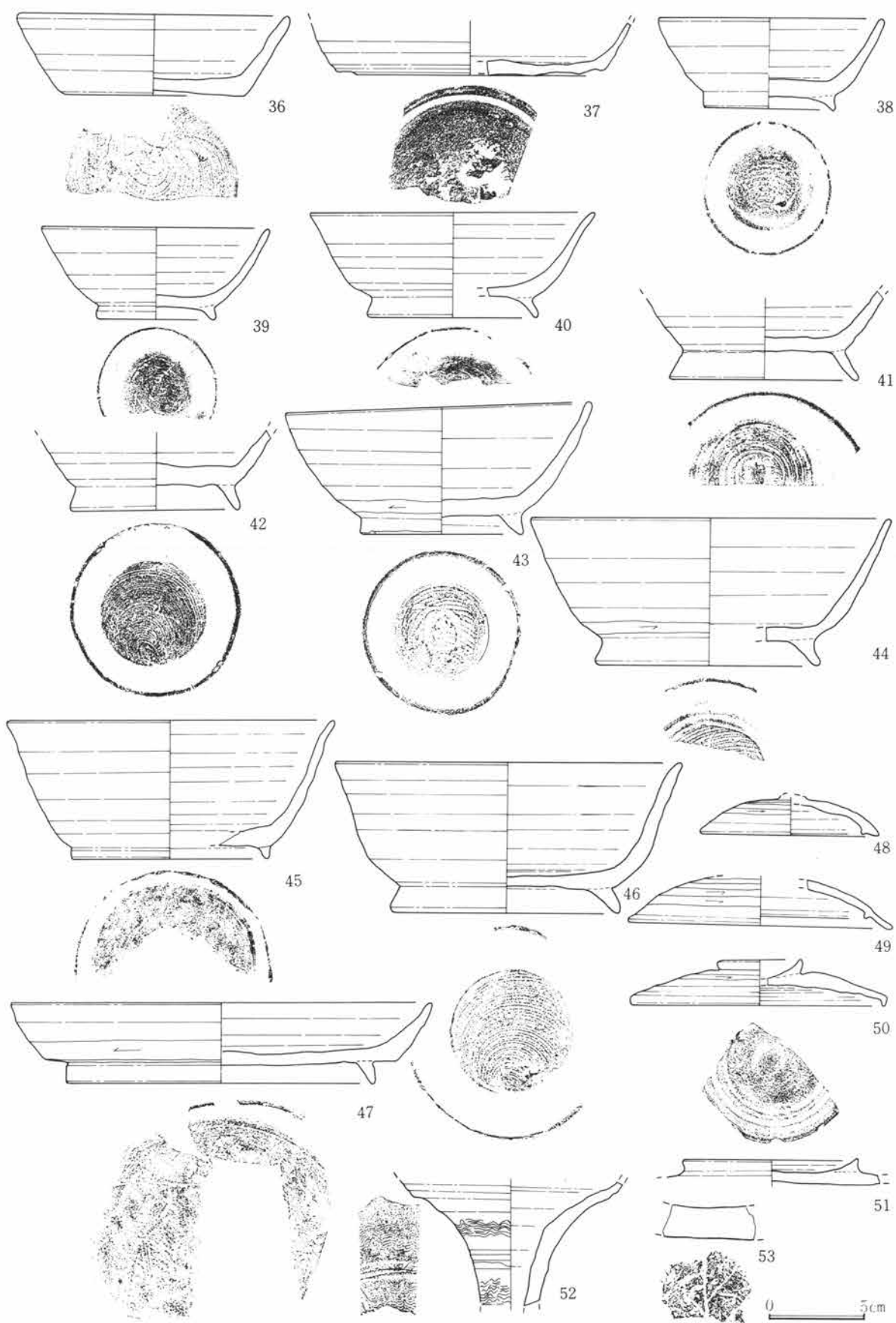
第249号住居跡は、第208号住居跡の覆土掘削途中でカマド部分だけを検出したものであり、その後西壁の一部を検出した。カマドは袖のみられない砲弾状の平面を有するタイプで、検出部分の規模は全長約60cm、燃焼部幅約63cm、主軸方位は東-2°-南である。燃焼部にはわずかであるが焼土面が認められ、その屋内側には灰面がある。このカマドの南側に検出した径約47cmの円形のピットは貯蔵穴と考えられる。



第433図 I区第208号住居跡出土遺物実測図(1)

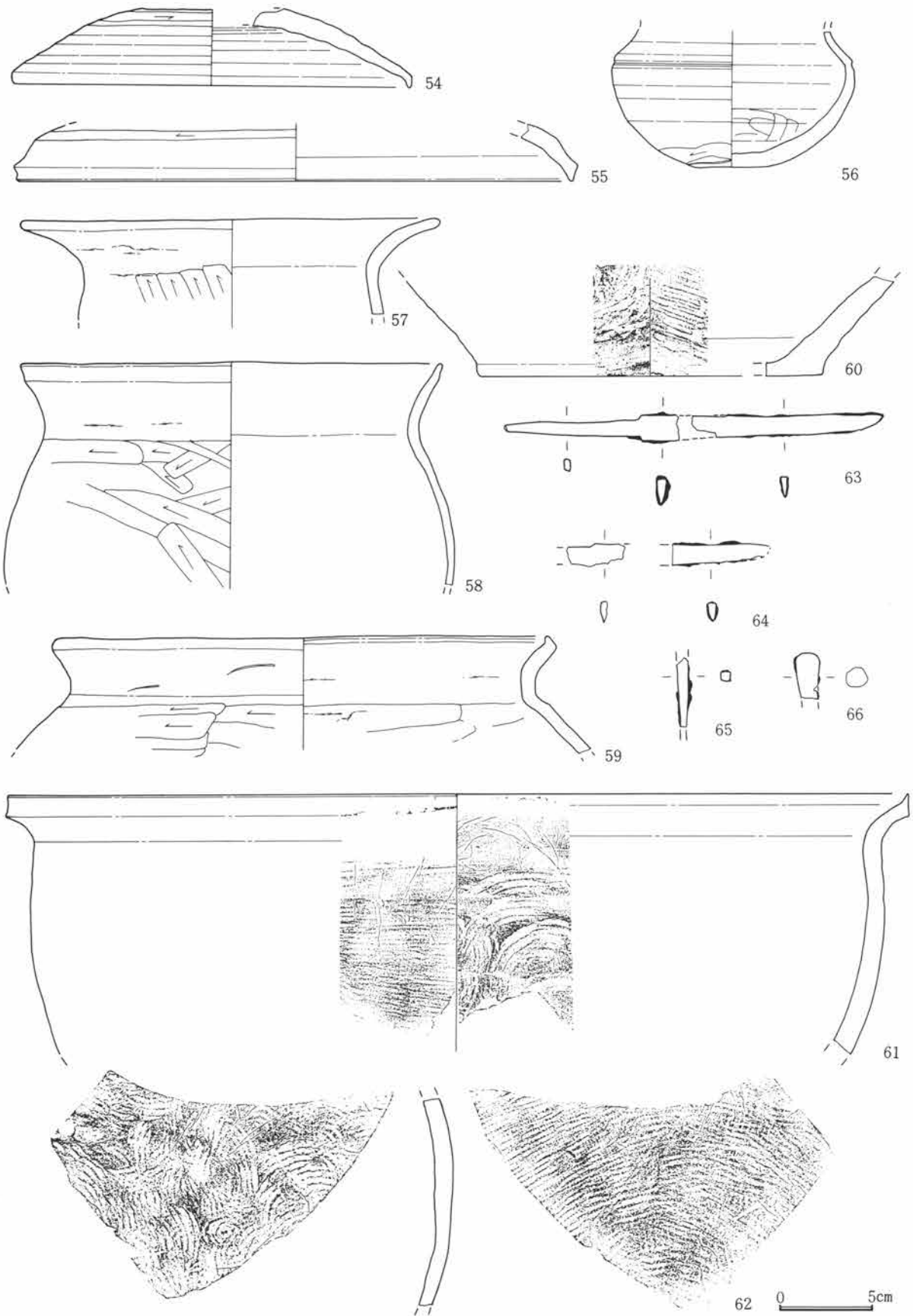


第434図 I区第208号住居跡出土遺物実測図(2)



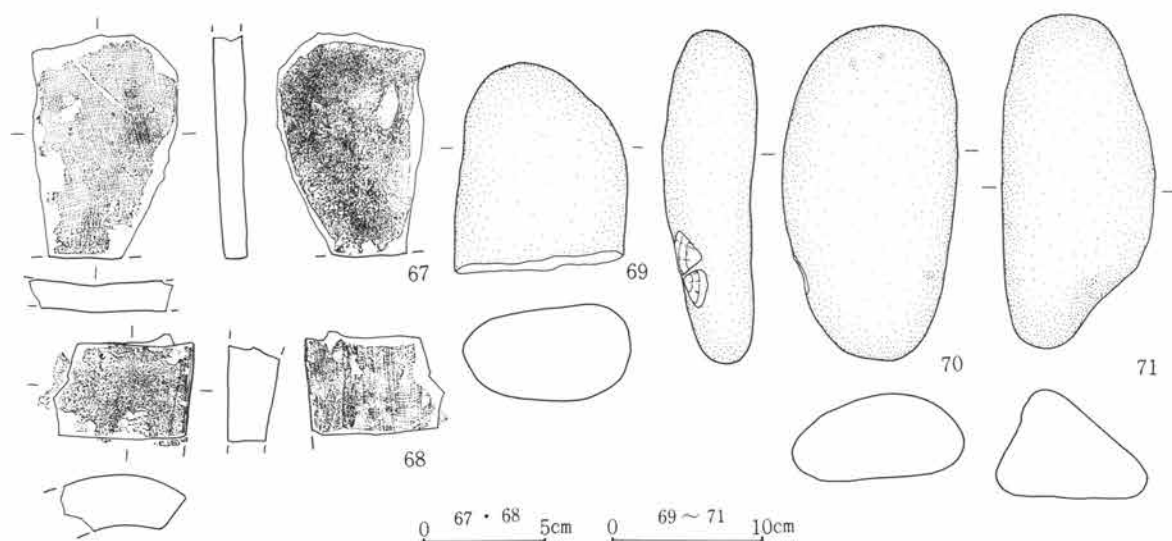
第435図 I区第208号住居跡出土遺物実測図(3)

第2節 検出された遺構・遺物

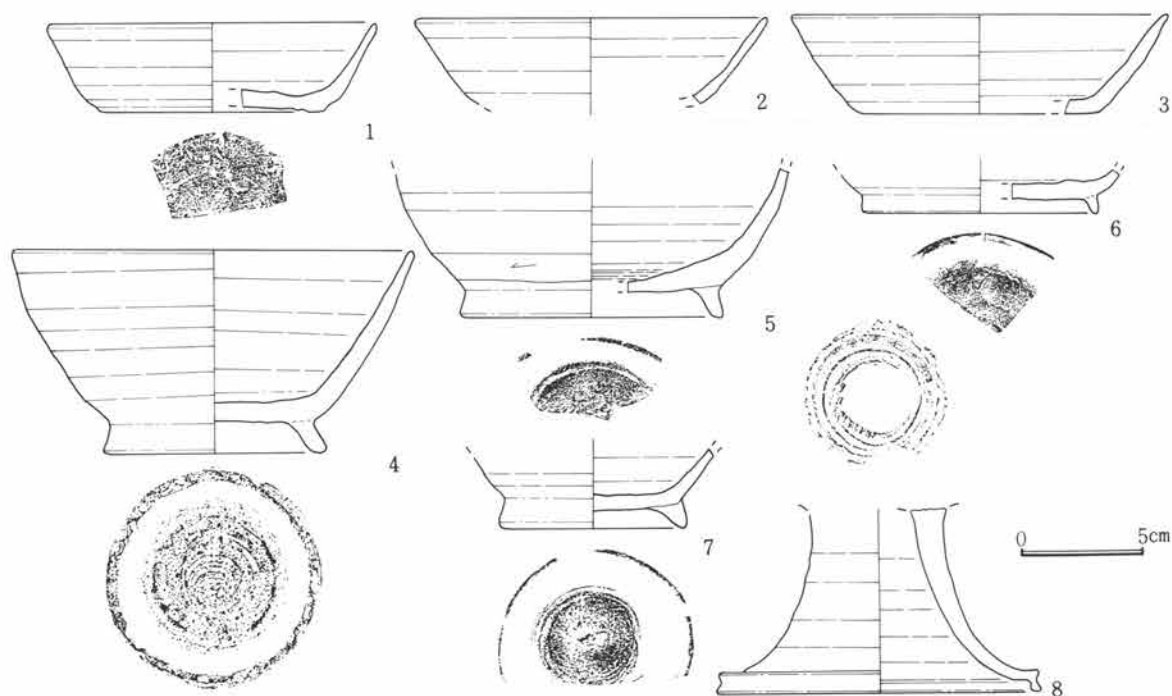


第436図 I区第208号住居跡出土遺物実測図(4)

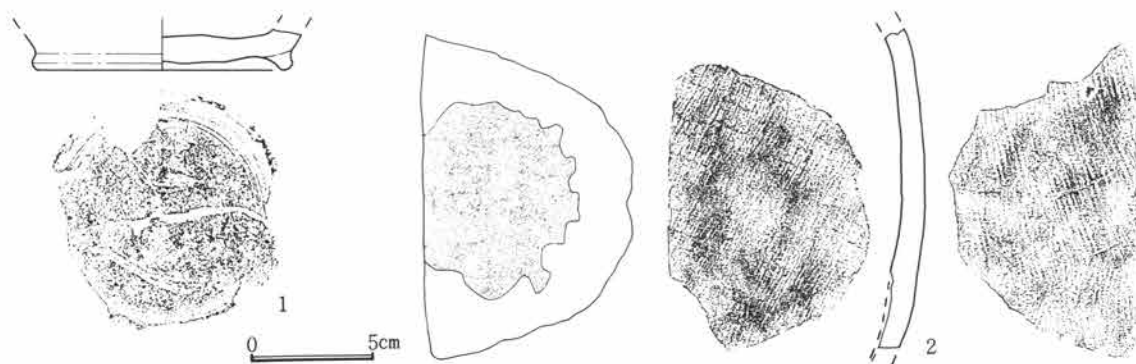
第4章 検出された遺構・遺物



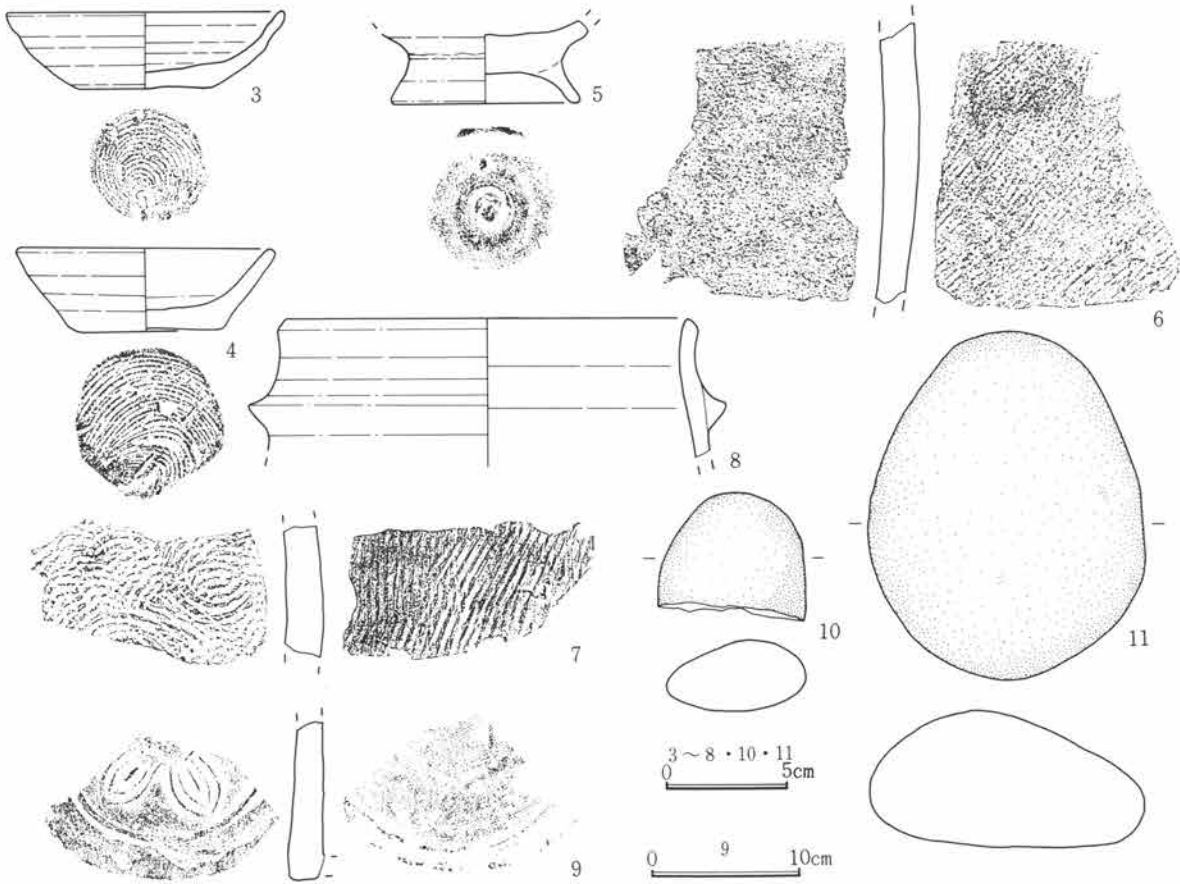
第437図 I区第208号住居跡出土遺物実測図(5)



第438図 I区第229号址出土遺物実測図



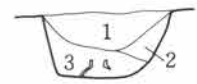
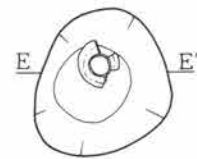
第439図 I区第249号住居跡出土遺物実測図(1)



第440図 I区第249号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第209号住居跡	位置	2～5-I-52～55グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.88m×3.54m	主軸方位	北-40度-東	残存深度	約31cm程

(所見) 当住居跡は第202号住居跡及び第222号址と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡→第202号住居跡であるのは明らかであるが、第222号址との関係は判然としない。壁は比較的良好に残存しており、床面には部分的にVI・VII層土ブロックを主体とした貼床が施されていた。この床面の精査で壁溝・柱穴は検出されず、東コーナー部に貯蔵穴のみを検出した。貯蔵穴は円形を呈し、径約52cm、深さ約26cmの規模を有している。この貯蔵穴底面には第444図11の土師器甕が口縁部を上にした状態で出土している。カマドは北東壁の南寄りに設置されており、両袖が張り出す砲弾状の平面形を有するタイプである。検出部の規模は、全長約67cm、燃烧部幅約45cmで、主軸方位は東-40°-北である。袖構築材の痕跡は認められないが、燃烧部中央の壁に接するように円形小ピットが検出されており、支脚が据えられていた可能性が高い。遺物は破片の状態で、床面上から多量に出土している。



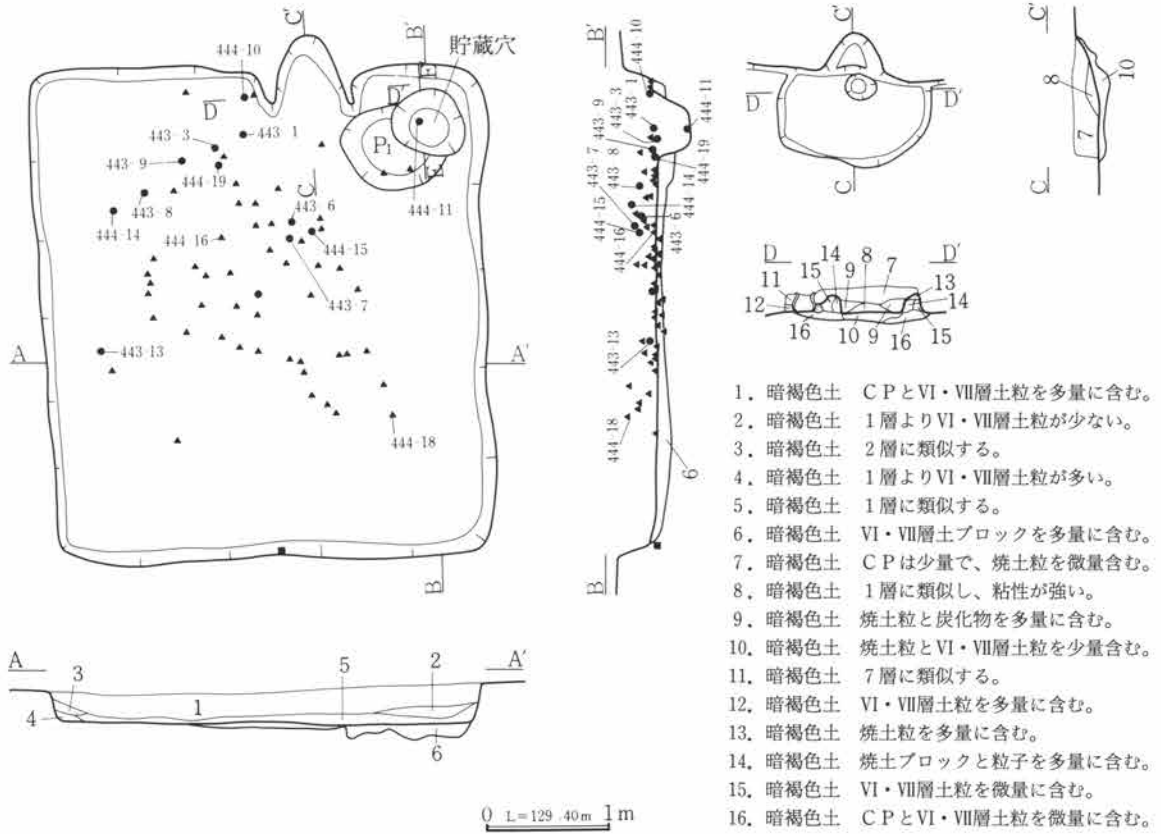
(1/30)

1. 暗褐色土 CPとVI・VII層土粒、ブロックを微量に含む。
2. 暗褐色土 1層よりもVI層土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 VI・VII層土粒は微量で、全体に粘性が強い。

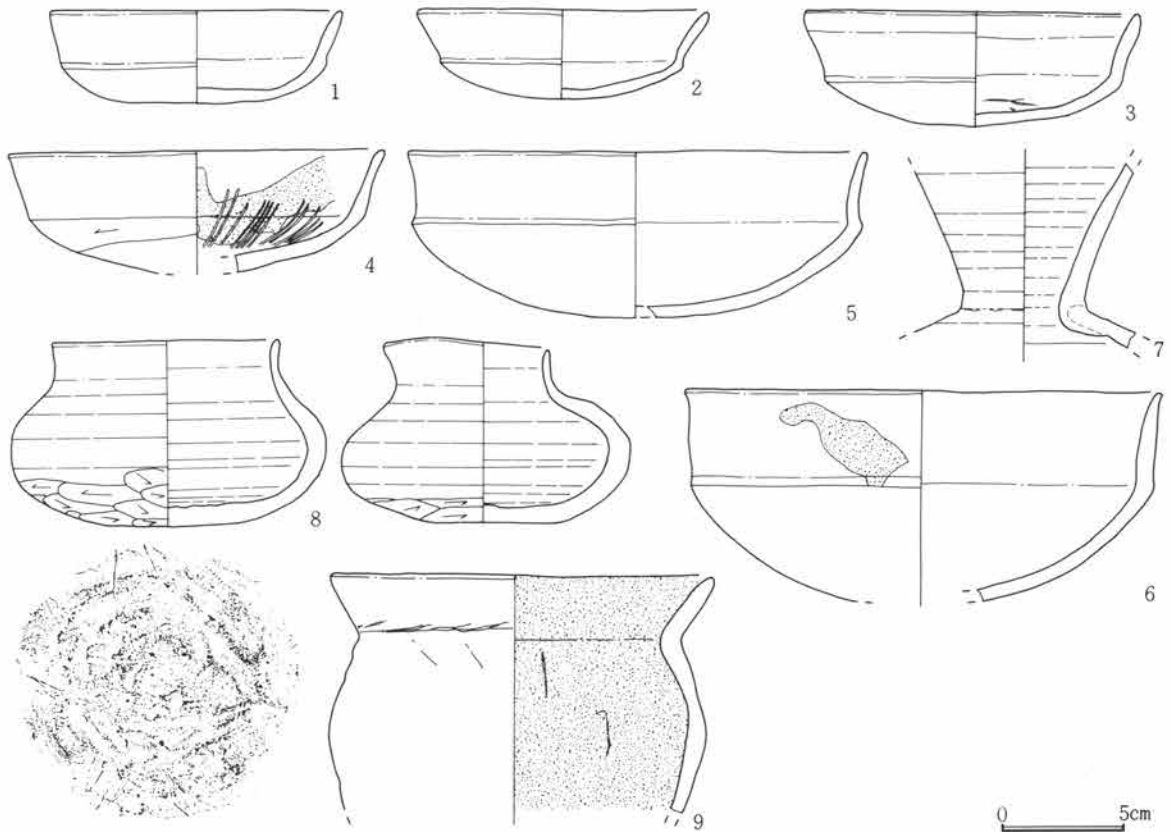
0 L=129.40m 1m

第441図 I区第209号住居跡実測図(1)

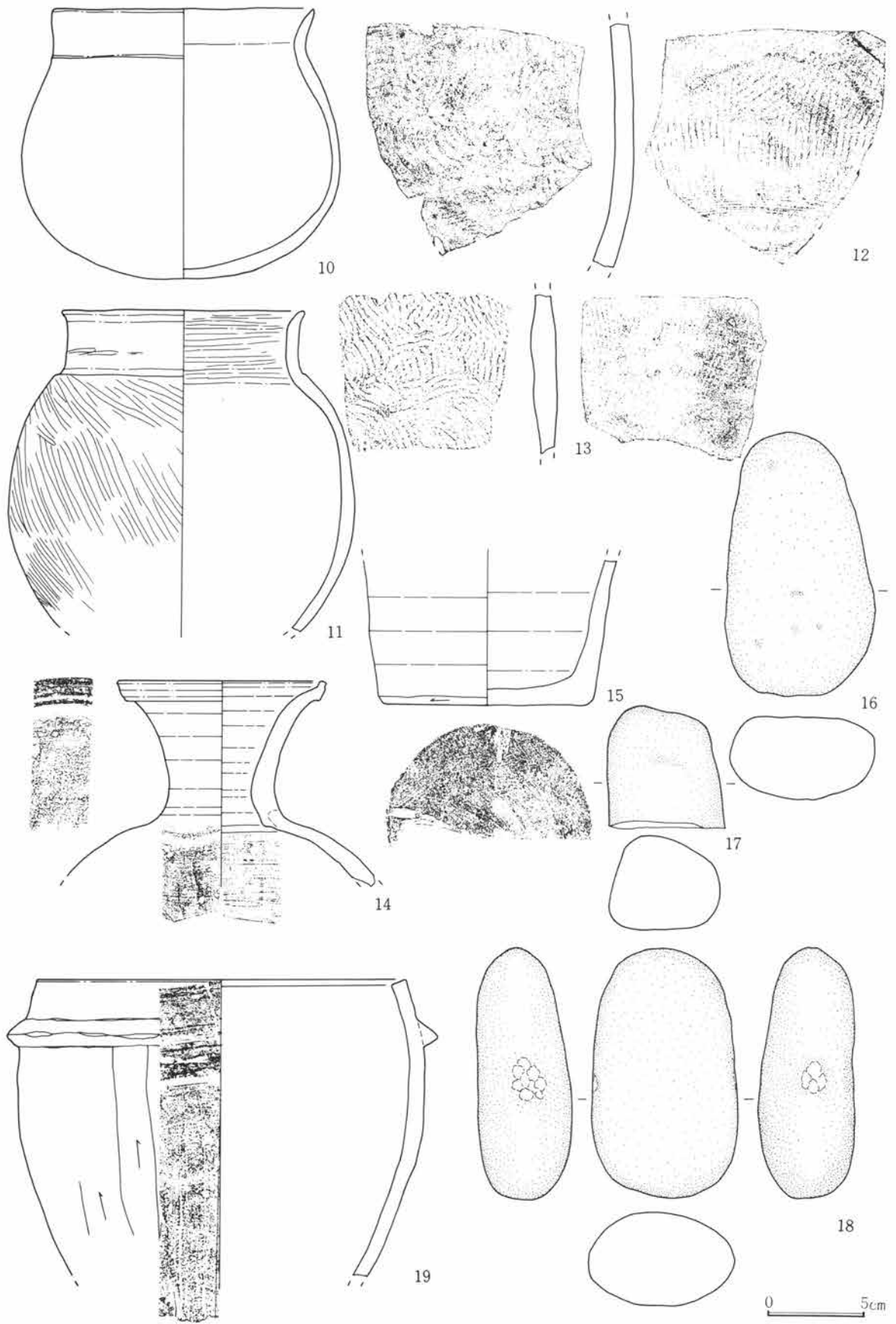
第4章 検出された遺構・遺物



第442図 I区第209号住居跡実測図(2)

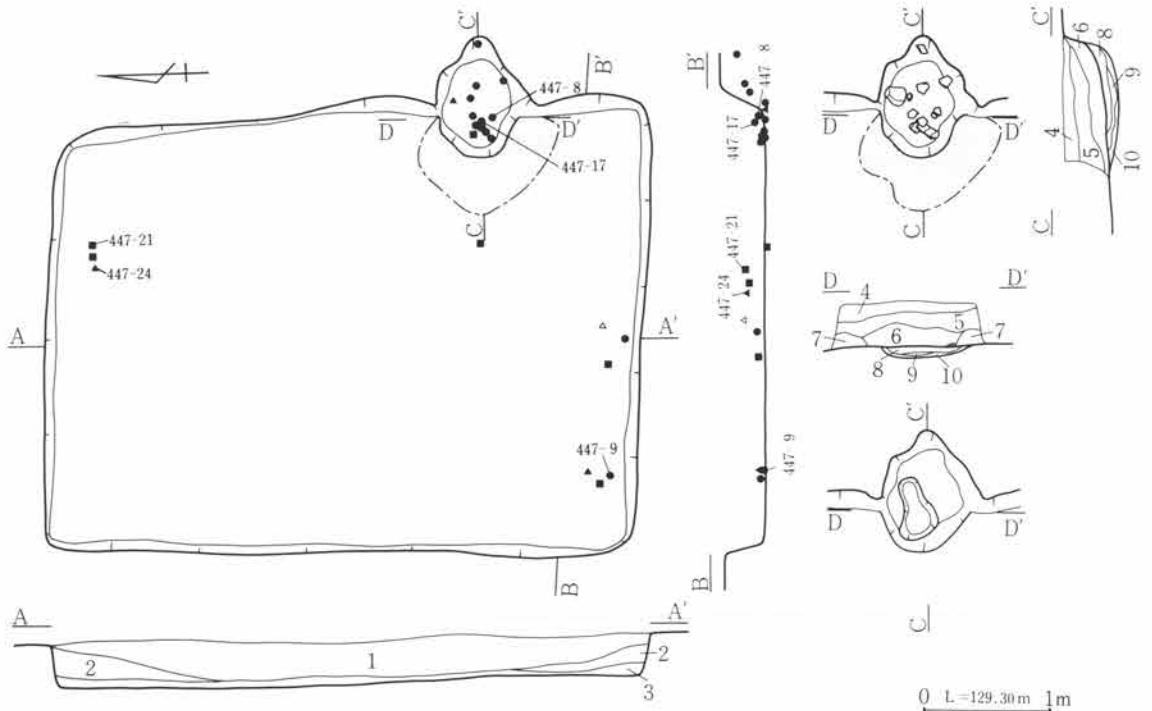


第443図 I区第209号住居跡出土遺物実測図(1)



第 444 図 I 区第 209 号住居跡出土遺物実測図 (2)

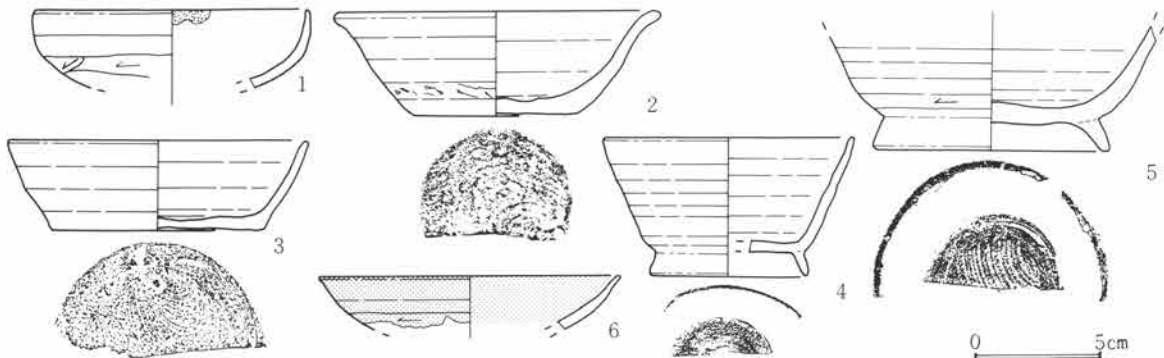
遺構名称	I区第210号住居跡	位置	7～9-I-49～51グリッド内
平面形態	隅丸長方形	規模	3.60m×4.75m
		主軸方位	東-4度-南
		残存深度	約30cm程



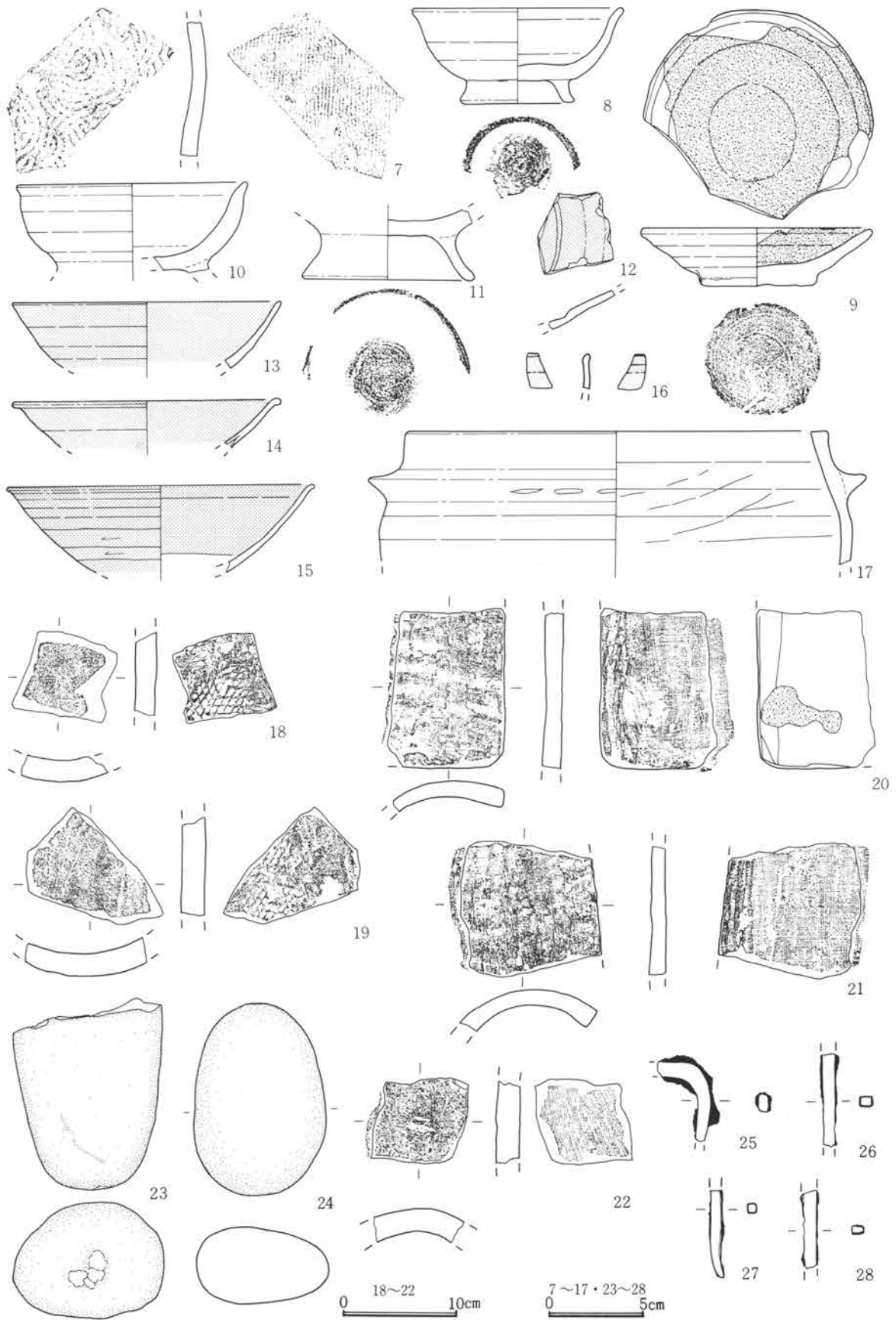
- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 暗褐色土 C Pを多量に、炭化物を少量含む。 | 6. 暗褐色土 焼土粒。ブロックを多量に、炭化物を微量含む。 |
| 2. 暗褐色土 1層よりもC P含有量は少なく、粘性が強い。 | 7. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量含み、粘性が強い。 |
| 3. 暗褐色土 2層よりも粘性がさらに強く、全体に黒味を帯びる。 | 8. 黒褐色土 灰主体の層。 |
| 4. 暗褐色土 C Pを多量に、焼土粒を微量に含む。 | 9. 黒褐色土 8層同様灰主体の層で、さらに黒味が強い。 |
| 5. 暗褐色土 4層よりも焼土粒の含有量が多い。 | 10. 暗褐色土 VI・VII層土粒とブロックを微量に含む。 |

第445図 I区第210号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第221号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第221号住居跡→当住居跡と考えられる。平面プランの確認面はIV層土まで下がっていたため、遺構の残存状態はあまり良好ではない。壁は全周検出され、壁の崩落はあまり顕著ではない。覆土の主体はIV層土を主体とする浅間C軽石を含む暗褐色土で、下層はVI層土のような浅間C軽石を含まない粘性の強い土が主体となっている。床面はVII層土に直に構築されており、貼床が施された痕跡はない。この面の精査で壁溝・柱穴・貯蔵穴のいずれも検出されておらず、当住居跡においては当初から掘削されなかったものと思われる。



第446図 I区第210号住居跡出土遺物実測図(1)

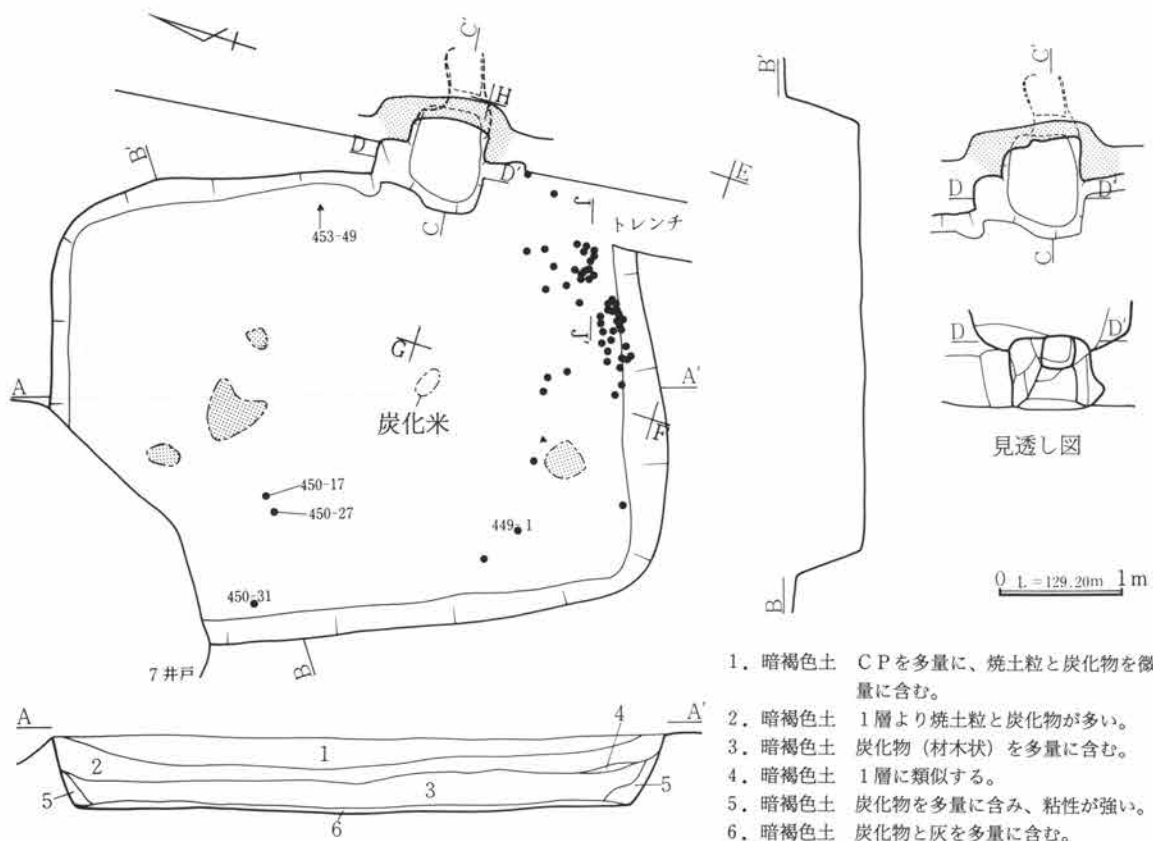


第447図 I区第210号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

カマドは東壁の南寄りに偏在して設置されており、袖の張り出さない凸字形の平面を有するタイプと考えられる。燃焼部の掘り込みを含めた検出部の規模は、全長約96cm、燃焼部幅約55cmである。燃焼部から屋内側の広範囲に灰面が検出されているが、焼土面は未検出である。袖構築材の据え方は検出されておらず、袖石等が用いられなかった可能性が強い。掘り方の調査では燃焼部中央やや左寄りの位置に支脚の据え方と思われるような不整楕円形の掘り込みを検出している。

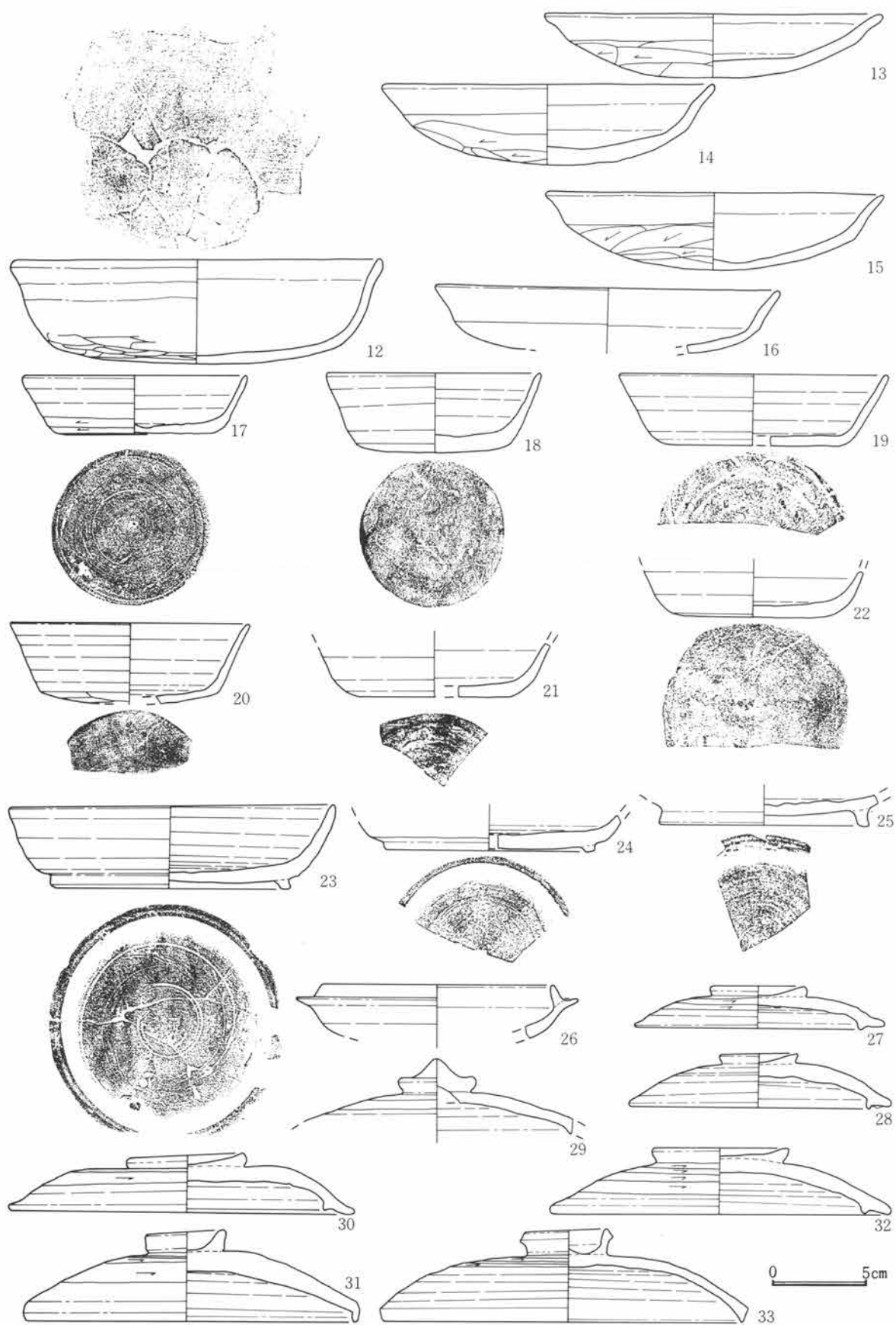
遺構名称	I区第211号住居跡	位置	11~13—I-49~51グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.62m×4.83m	主軸方位	東-22度-北	残存深度	約58cm程



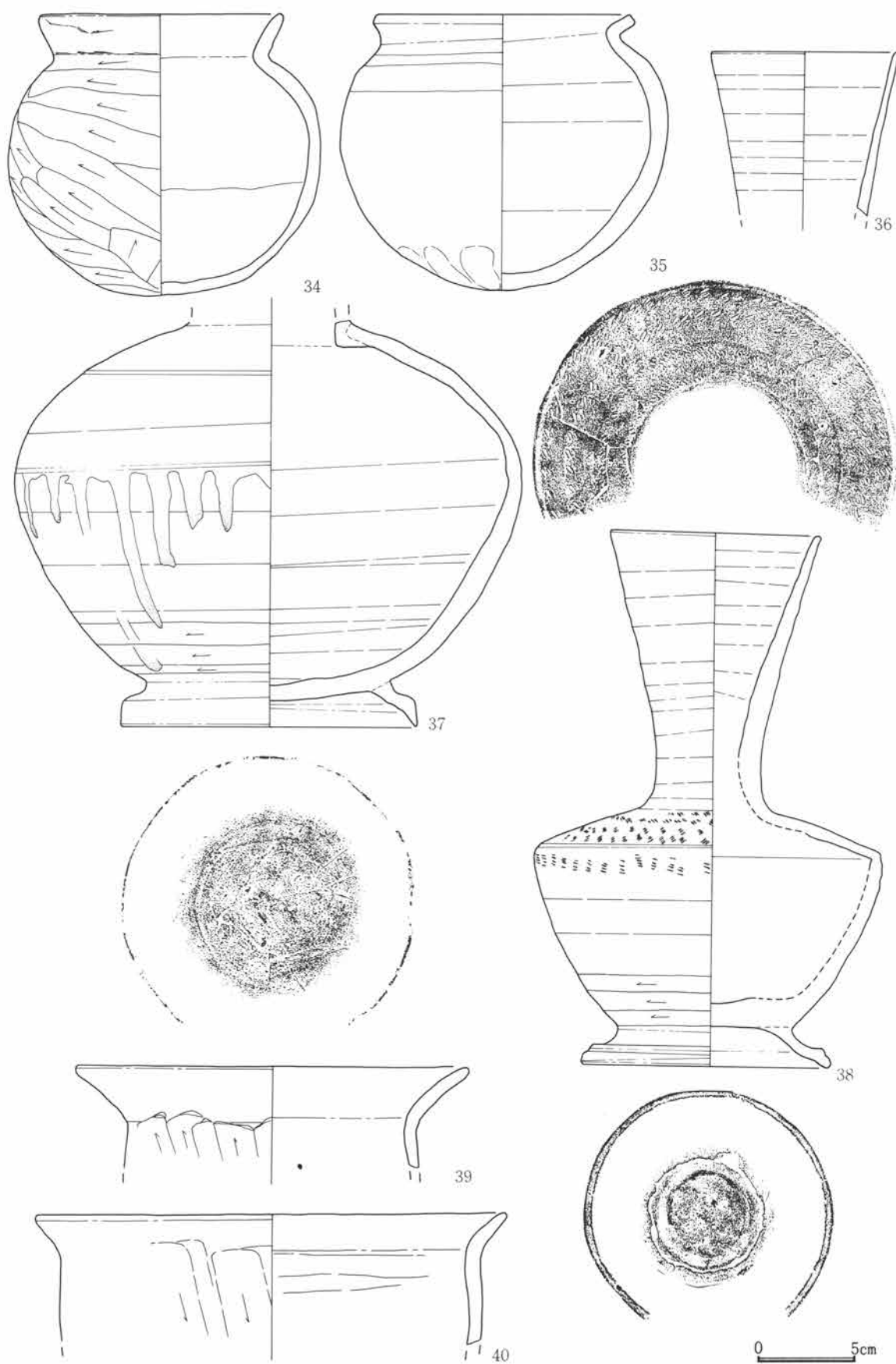
第448図 I区第211号住居跡実測図(1)

(所見) 当住居跡は北西コーナー部を中世以降の第7号井戸跡によって失っている他、カマドの一部は調査区外にかかっており、未調査の部分がある。平面プランの確認はVI層土中であり、遺構平面は明瞭に確認することができた。壁は粘性の強いVI・VII層土中に構築されているため、崩落もほとんど認められず残存状態は良好である。覆土は特に不自然な堆積状態を示していないが、中層から下層にかけて炭化物が他の遺構と比較しても以上に多く含有していた。床面はVII層土中に直に構築されており、貼床の痕跡は全く認められなかった。この床面の精査によって壁溝・柱穴は検出されておらず、当初から掘削されなかったものと考えられる。貯蔵穴も調査範囲内からは検出されていないが、設置されている可能性の高い東コーナー部は未検出であるため不明である。床面の数ヵ所には焼土面が検出されており、中央部からは第222図版に提示した炭化米が出土した。これらの状況と後述する遺物出土状態とカマドの残存状態等から、当住居跡はどの段階かは不明であるにしても焼失しているのは確実である。

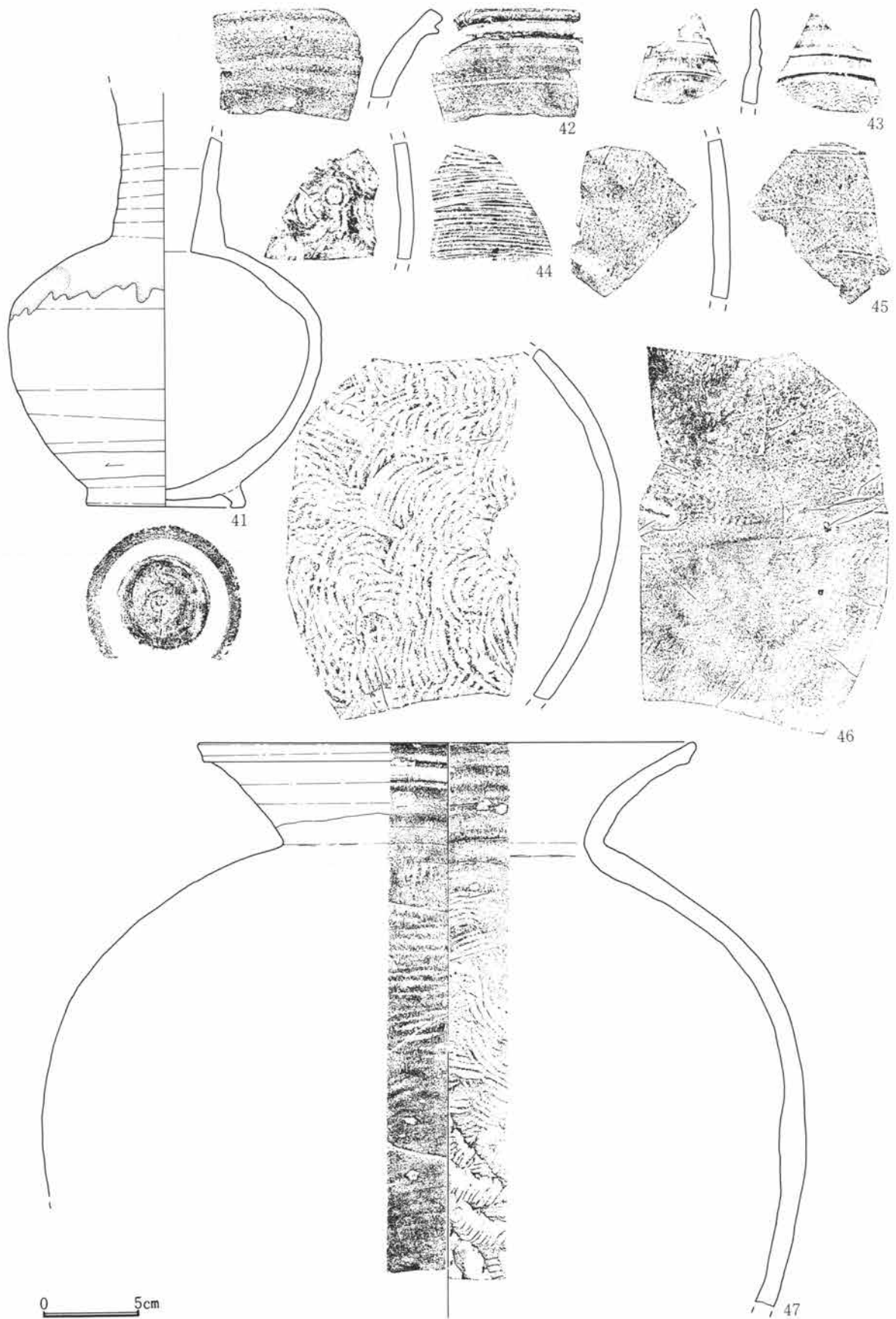
カマドは北東壁の南寄りに設置されており、燃焼部から煙道の一部までを検出調査した。袖は屋内に張り



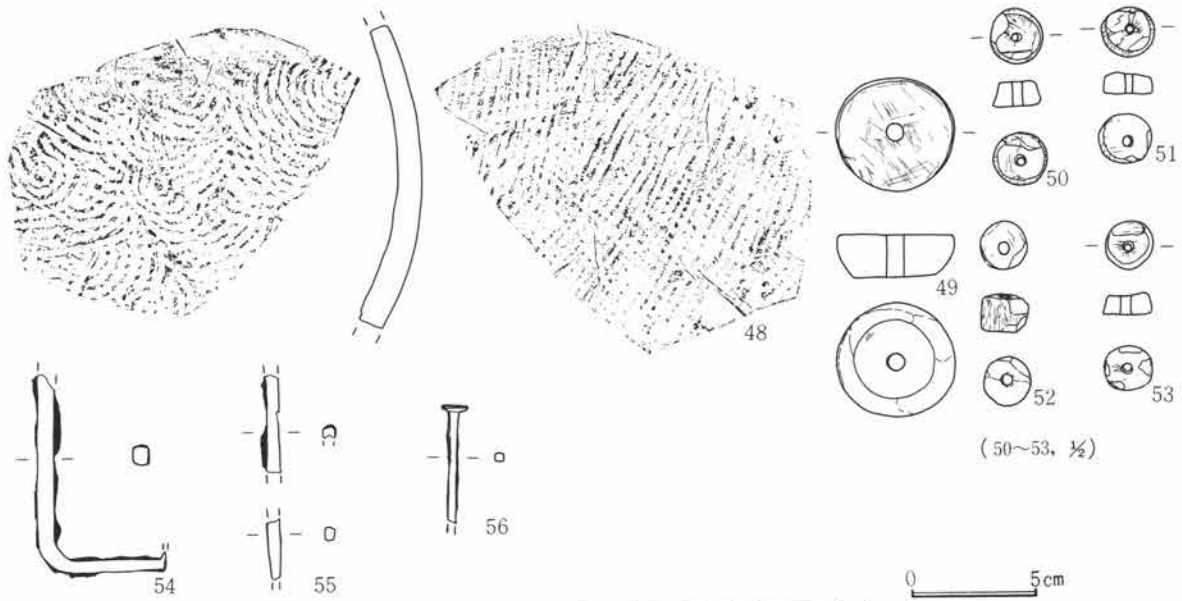
第450図 I区第211号住居跡出土遺物実測図(2)



第451図 I区第211号住居跡出土遺物実測図(3)



第452図 I区第211号住居跡出土遺物実測図(4)



第453図 I区第211号住居跡出土遺物実測図(5)

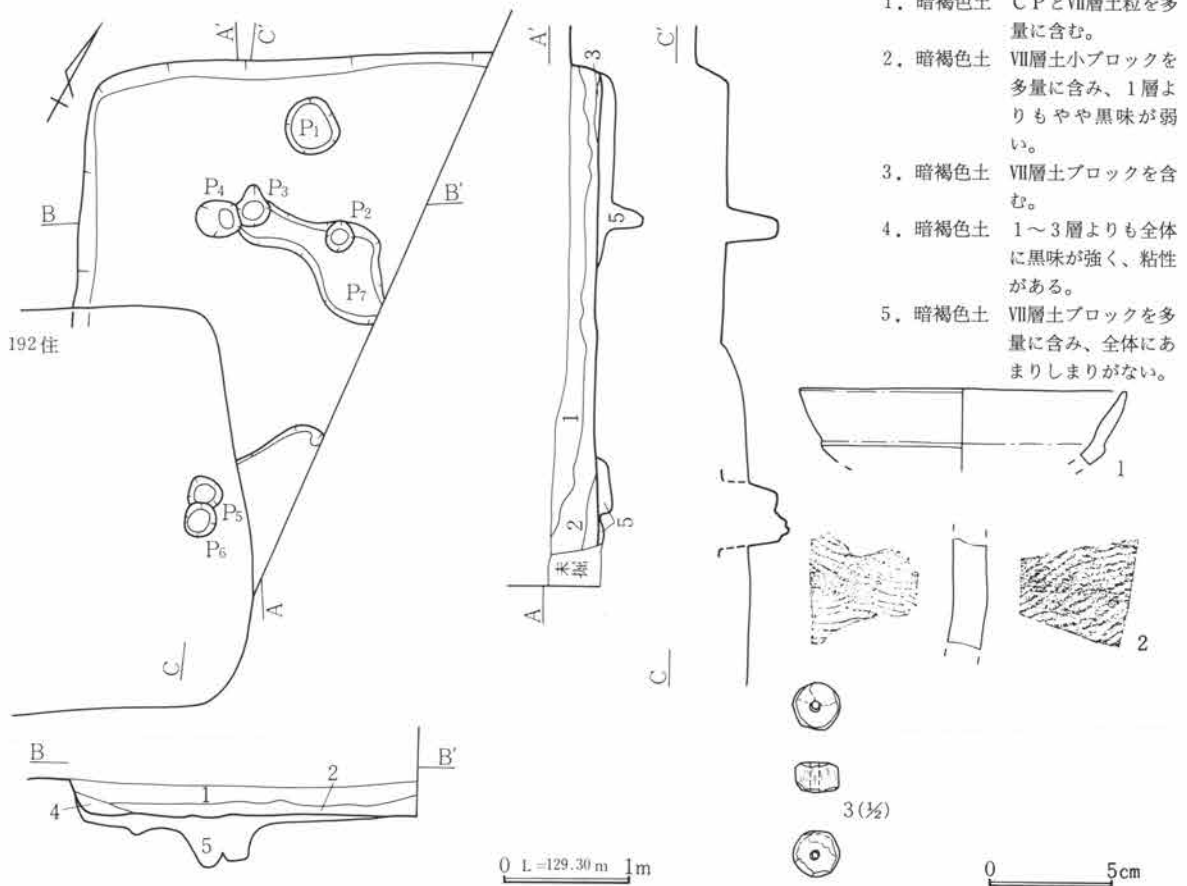
出していた痕跡は全く認められず、屋内に袖石等の構築材の残存もみられない。また、支脚に関しても設置されていた痕跡は認められなかった。燃焼部は方形に掘り窪められており、この部分に掘り方はみられない。燃焼部の天井部前面は焼土化して残存しており、この焼土は奥では曖昧になっていたことからカマド使用に伴うものではなく、住居の焼失に伴い焼土化したものと考えられる。燃焼部側壁には明瞭な構築時の面取りが残存しており、燃焼部底面は緩い傾斜で煙道へと続いている。この燃焼部天井や側壁は、IV～VII層をトンネル状に掘り抜いて構築したと思われる、煙道は第448図のカマド平面図に示した点線部分から傾斜が急激に上向きに転じており、この部分当たりから地上へと向かっているものであろう。

遺物は第449～453図に提示したように多器種にわたっており、完形での出土が多かったのが特徴である。特に第449図の平・断面図に示したように、南東壁に沿って土師器杯・須恵器杯・埴・蓋が数枚づつ重ねられたままで出土した他、その他の器種も集中していた。また、第450図12の土師器杯は畿内産の搬入品であり、熱を受けたためか剥落していた。これらの遺物出土状態は一見住居内での使用状態が、焼失を契機に保存されたものとも考えられるが、集中出土した遺物の中には接合しても完形に復元できないものも多く、廃棄された状態とみるのが妥当であろう。いずれにしても遺物の一括性は高く、後述する時期の問題とも合わせ、器種の組み合わせ等貴重な資料である。

遺構名称	I区第213号住居跡		位置	23～25—I-50・51グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約25cm程

(所見) 当住居跡は第192号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第192号住居跡と考えられる。また、カマドを含む住居跡東半は調査区外にかかっており未調査である。床面にはほぼ全面にわたって10cm程のVII層土ブロックを主体とした貼床が施されていた。この面の精査で壁溝や柱穴を検出することはできなかったが、掘り方の調査で7本のピットを検出した。これらのピットの中でP₃～P₆の4本のピットは位置や規模から柱穴と考えられるものである。規模はP₃(径約25cm、深さ約38cm)・P₄(径約30cm、深さ約42cm)・P₅(径約27cm、床面からの推定の深さ約47cm)・P₆(径約25cm、床面からの推定の深さ約57cm)であり、P₃とP₅(柱穴間距離約2.3m)及びP₄とP₆(柱穴間距離約2.4m)の2組の柱穴配列が考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物



第454図 I区第213号住居跡・出土遺物実測図

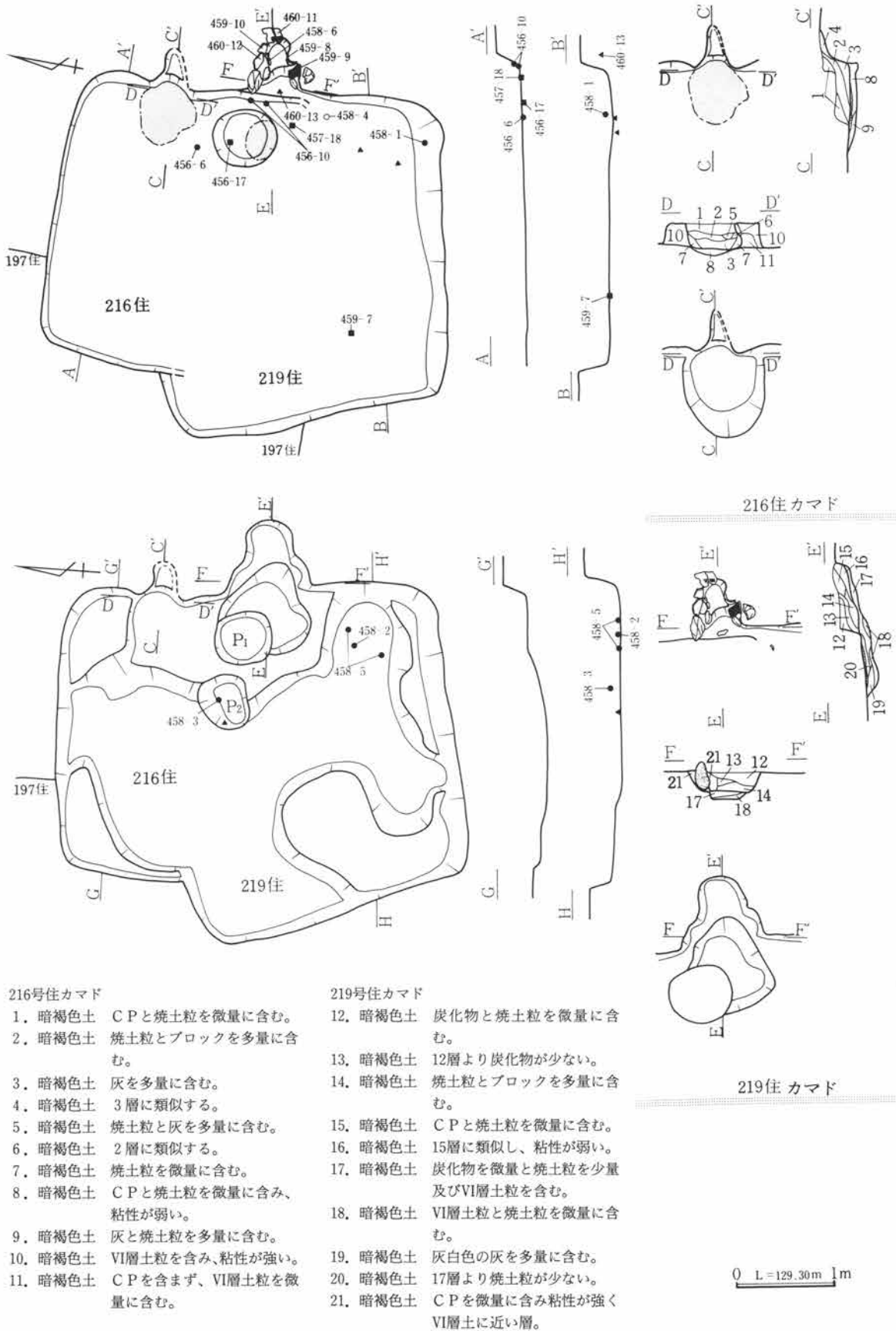
遺構名称	I区第216号住居跡		位置	5・6—I-50・51グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	2.93m×	—m	主軸方位	東—0度—北
					残存深度	約23cm程

遺構名称	I区第219号住居跡		位置	4～6—I-50～52グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.20m×2.95m	主軸方位	東—15度—北	残存深度	約30cm程

(所見) 第216・219号住居跡は第197・226号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態及び残存状態等から第226号住居跡→第219号住居跡→第216号住居跡→第197号住居跡という新旧関係が想定できる。

第216号住居跡は第219号住居跡と並行して調査したため住居南半を検出することができなかった。床面には全体に貼床が施されており、貼床面の精査で壁溝・柱穴は検出されなかった。この段階で第219号住居跡カマド前面に検出した径約60cm、深さ約15cmの円形の掘り込みは当住居跡の貯蔵穴と考えられる。カマドは東壁の中央やや北寄りに設置されており、袖等の残存のみられないやや貧弱な印象のものである。検出部分の規模は全長約50cmであり、主軸方位は東—0°—北である。掘り方の調査では燃烧部に5cm程の掘り込みが検出されており、床面で検出した灰面と合わせて袖の存在が示唆される。

第219号住居跡も床面に貼床が施されており、床面精査及び掘り方の調査において壁溝・柱穴・貯蔵穴を検出することはできなかった。カマドは北東壁中央に設置されており、袖構築材として石を、燃烧部両側及び煙道奥には瓦を使用していた。検出部分の規模は全長約68cm、燃烧部幅約40cm、煙道長約30cm、下幅約23cmで、主軸方位は東—15°—北である。



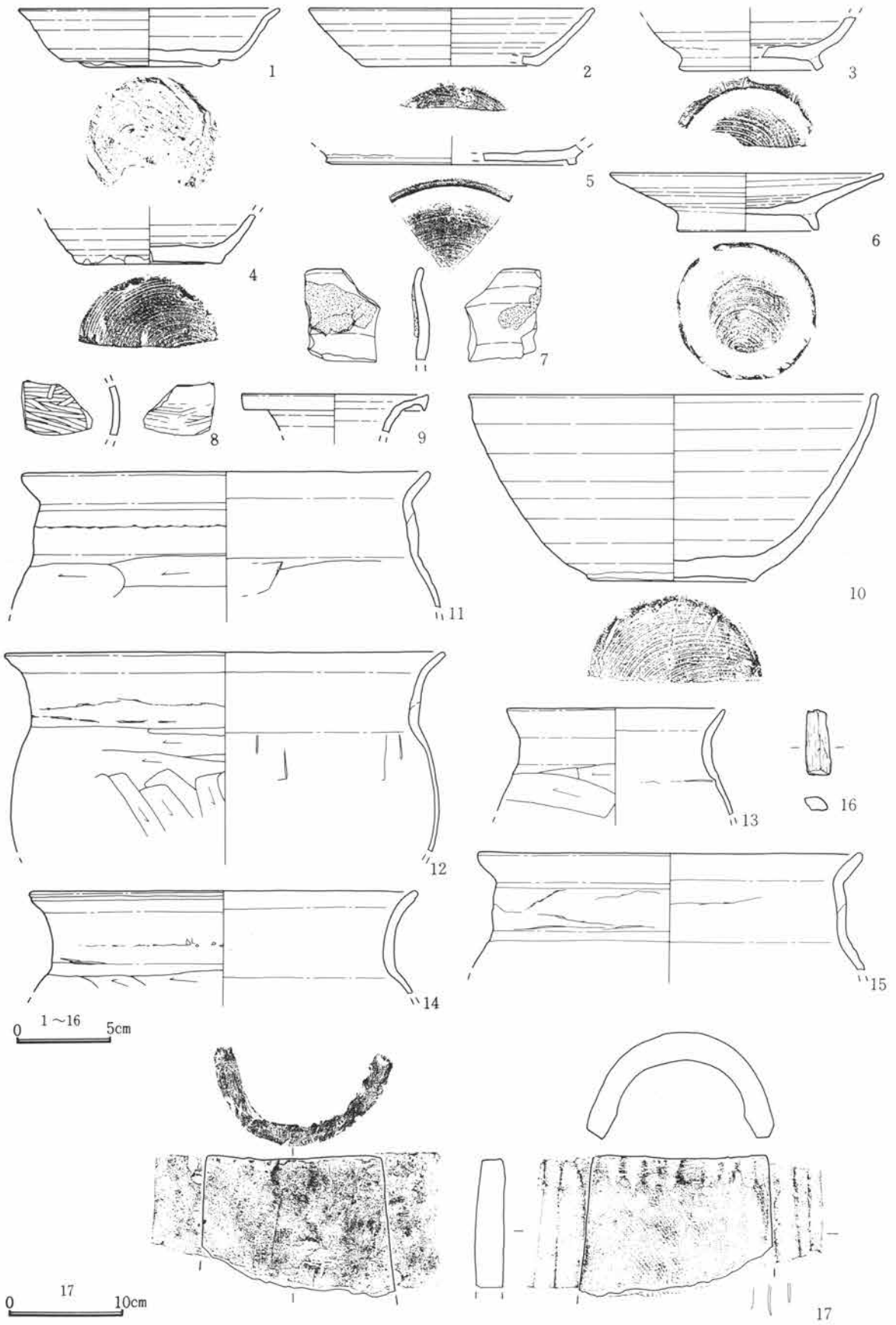
216号住カマド

1. 暗褐色土 C Pと焼土粒を微量に含む。
2. 暗褐色土 焼土粒とブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土 灰を多量に含む。
4. 暗褐色土 3層に類似する。
5. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。
6. 暗褐色土 2層に類似する。
7. 暗褐色土 焼土粒を微量に含む。
8. 暗褐色土 C Pと焼土粒を微量に含み、粘性が弱い。
9. 暗褐色土 灰と焼土粒を多量に含む。
10. 暗褐色土 VI層土粒を含み、粘性が強い。
11. 暗褐色土 C Pを含まず、VI層土粒を微量に含む。

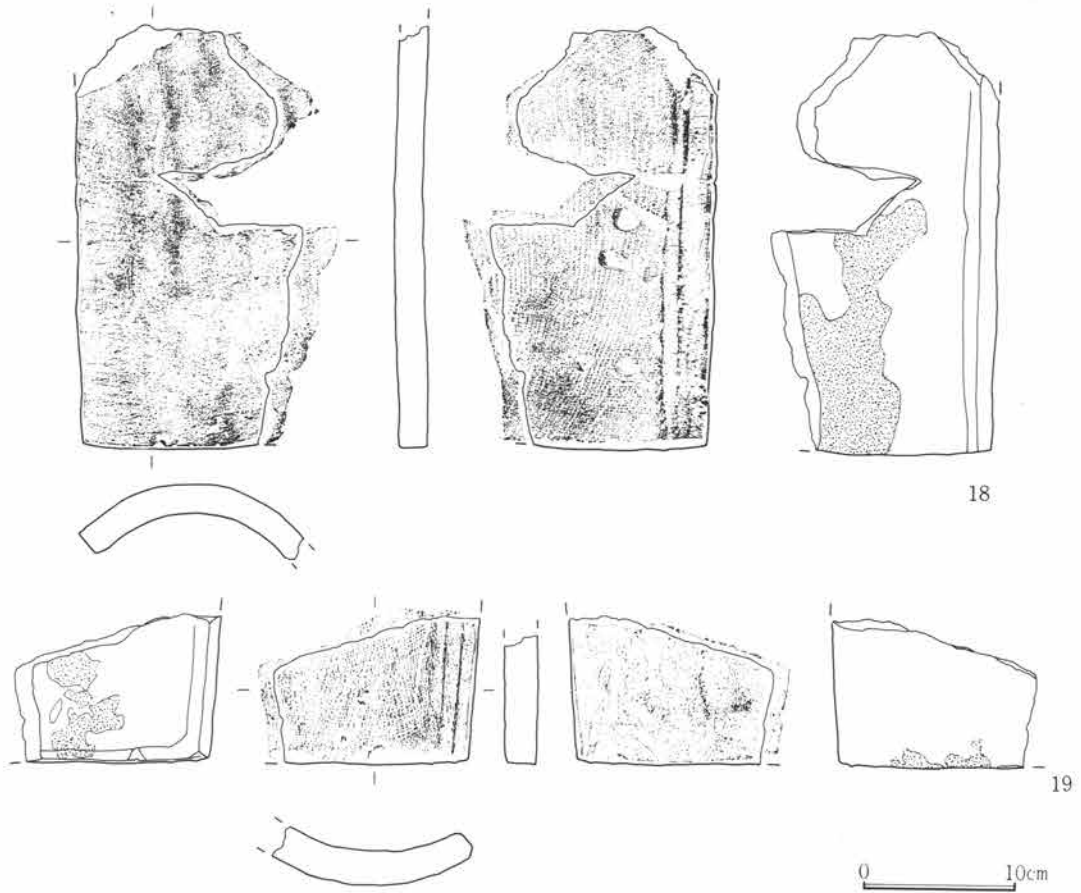
219号住カマド

12. 暗褐色土 炭化物和焼土粒を微量に含む。
13. 暗褐色土 12層より炭化物が少ない。
14. 暗褐色土 焼土粒とブロックを多量に含む。
15. 暗褐色土 C Pと焼土粒を微量に含む。
16. 暗褐色土 15層に類似し、粘性が弱い。
17. 暗褐色土 炭化物を微量と焼土粒を少量及びVI層土粒を含む。
18. 暗褐色土 VI層土粒と焼土粒を微量に含む。
19. 暗褐色土 灰白色の灰を多量に含む。
20. 暗褐色土 17層より焼土粒が少ない。
21. 暗褐色土 C Pを微量に含み粘性が強くVI層土に近い層。

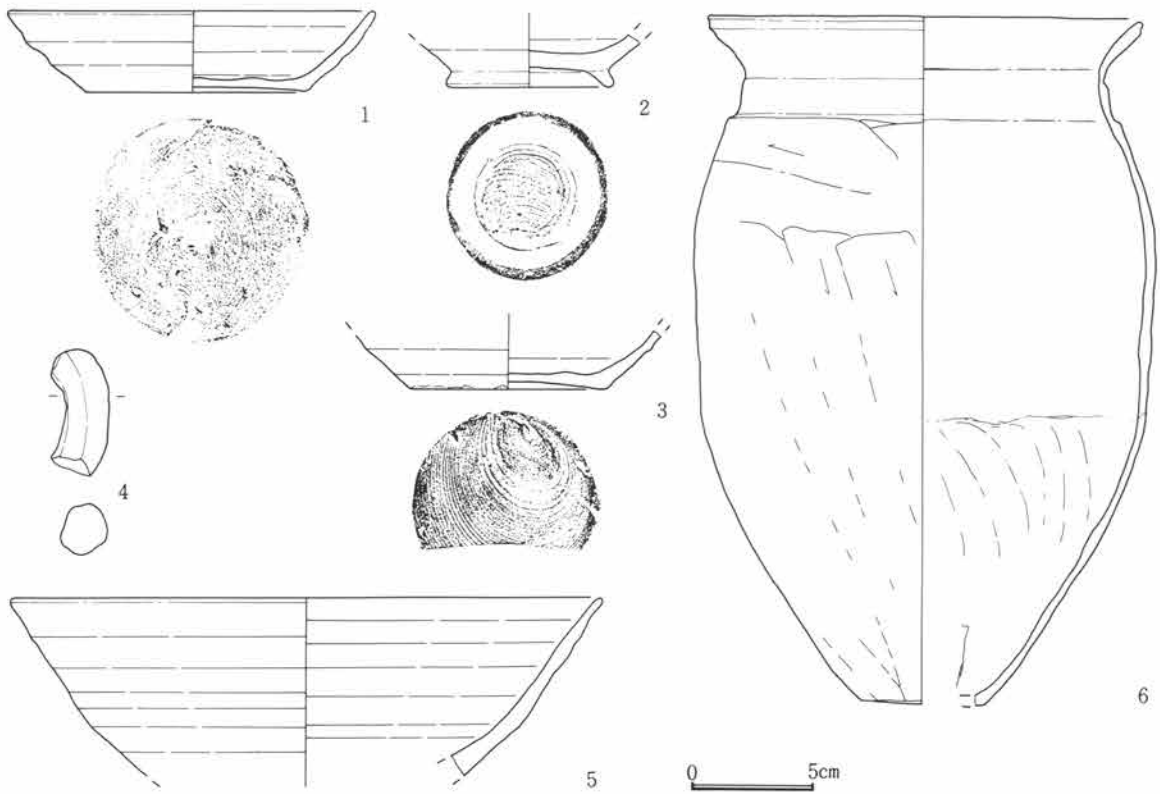
第455図 I区第216・219号住居跡実測図



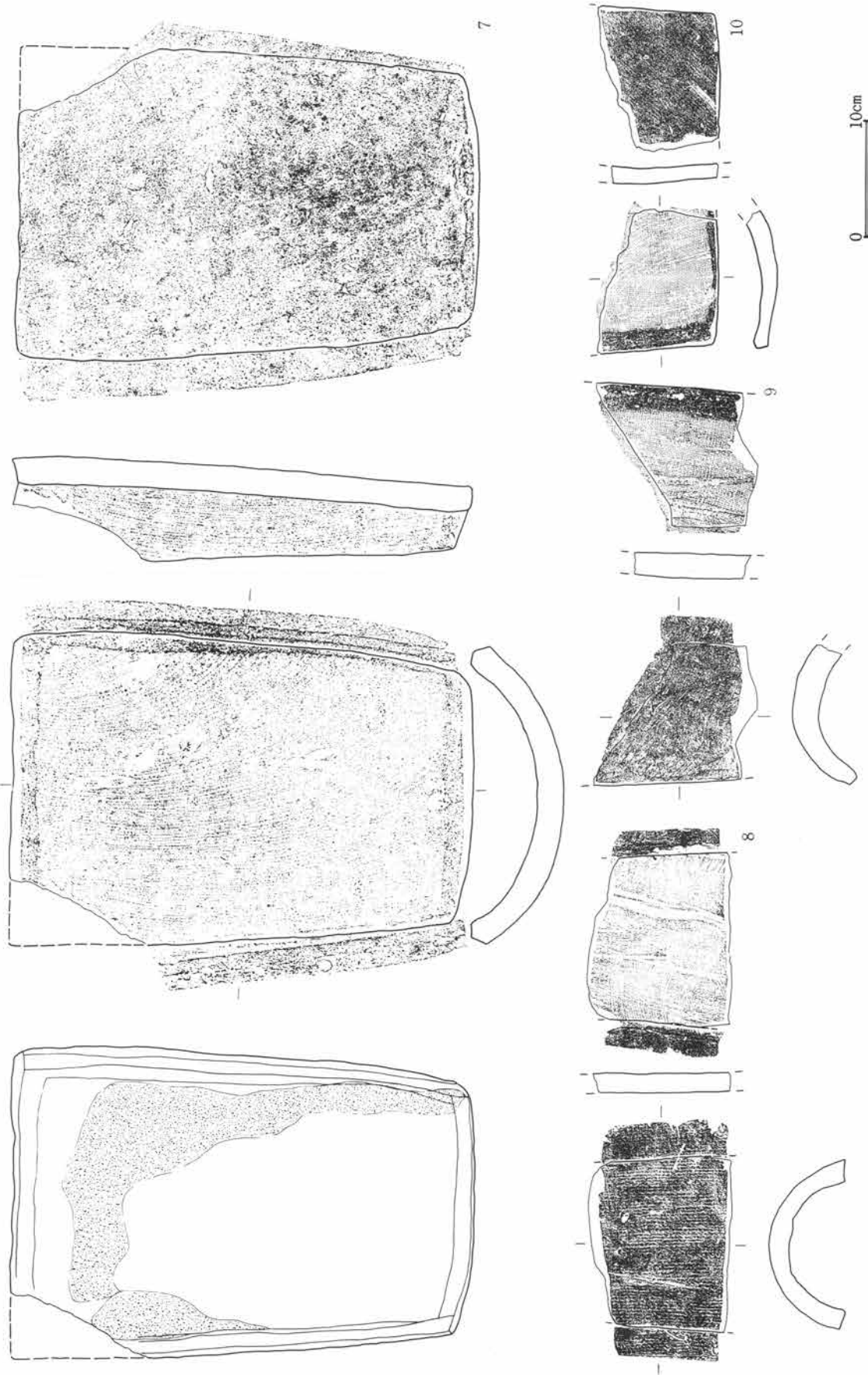
第456図 I区第216号住居跡出土遺物実測図(1)



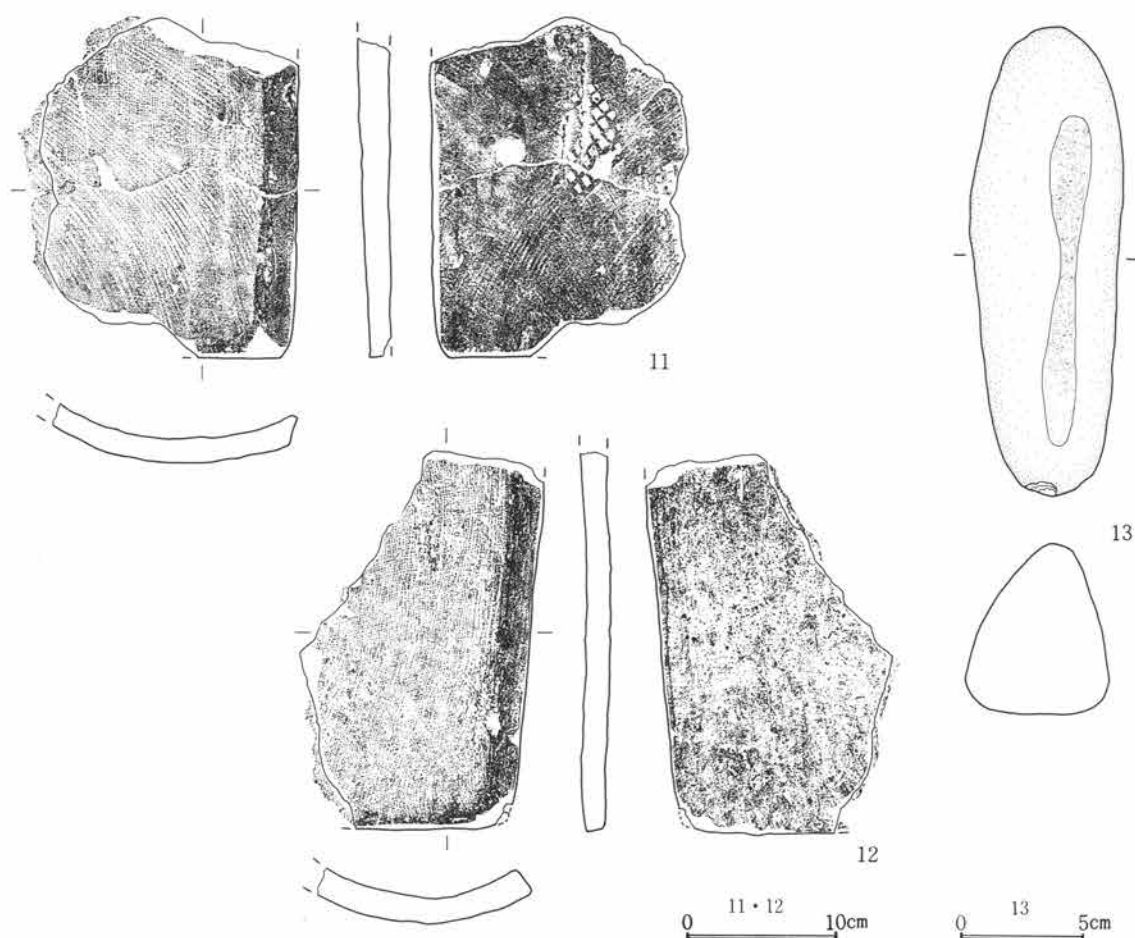
第457図 I区第216号住居跡出土遺物実測図(2)



第458図 I区第219号住居跡出土遺物実測図(1)



第459図 I区第219号住居跡出土遺物実測図(2)



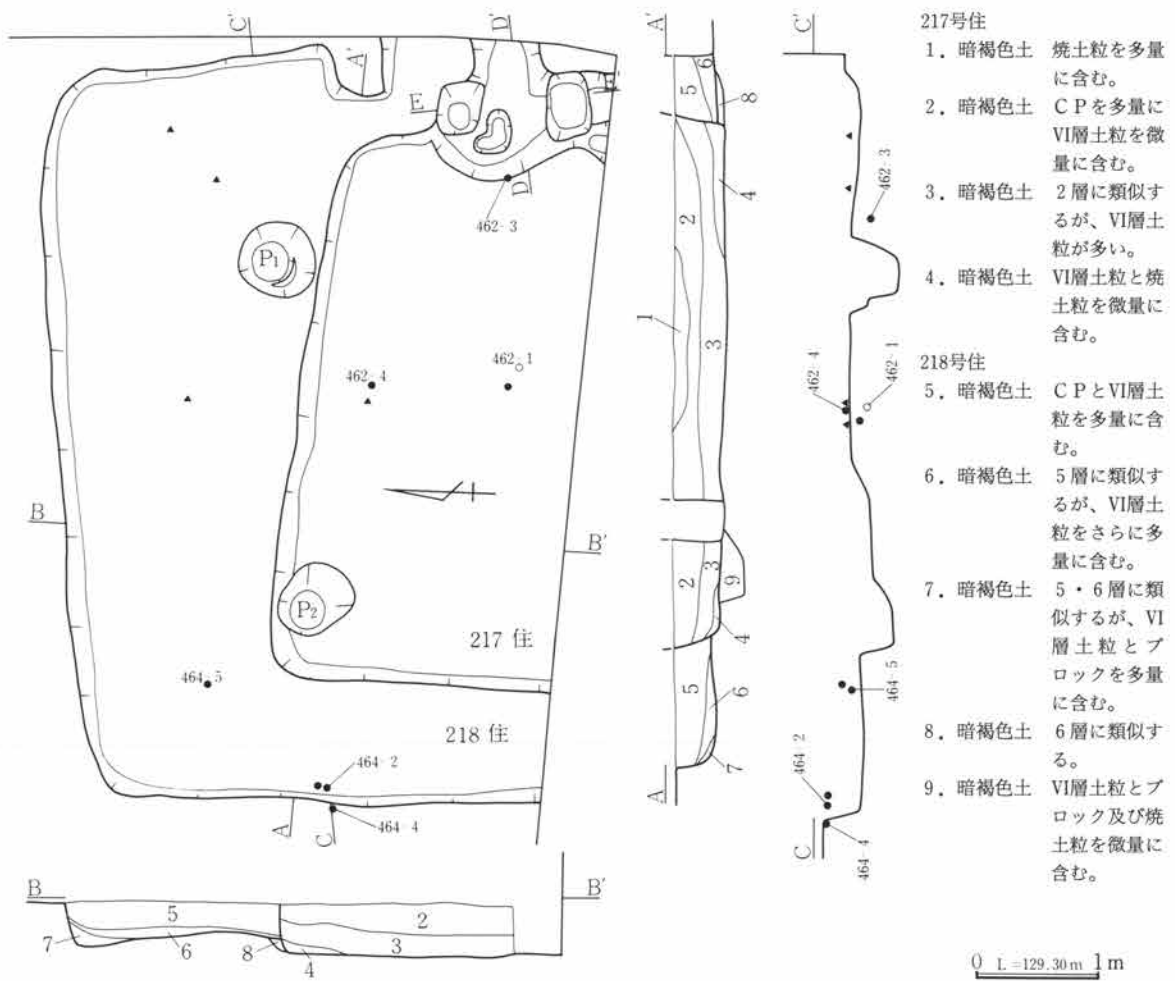
第460図 I区第219号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第217号住居跡	位置	0・1—I-49~51グリッド内					
平面形態	—	規模	4.33m×	—m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約40cm程

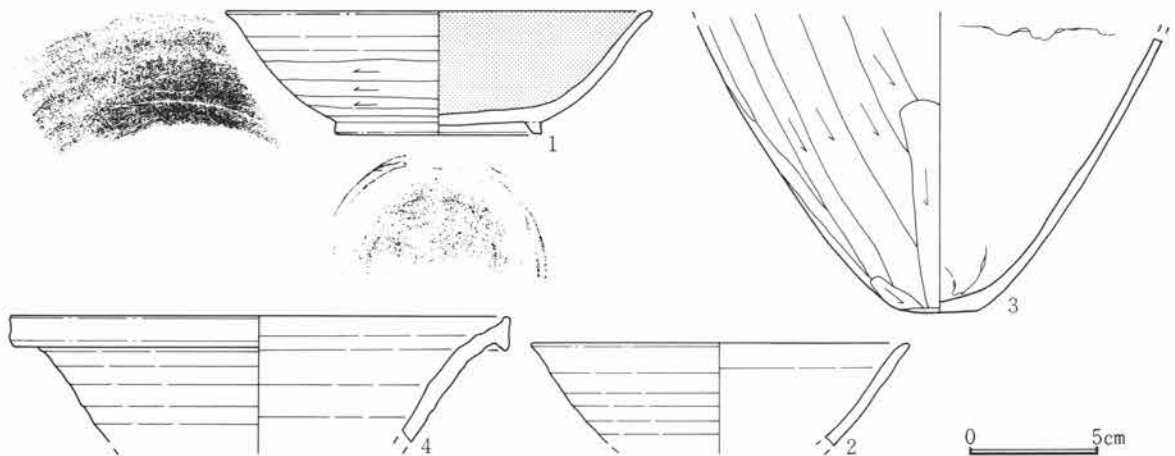
遺構名称	I区第218号住居跡	位置	0~2—I-49~51グリッド内					
平面形態	—	規模	5.85m×	—m	主軸方位	東-4度-北	残存深度	約30cm程

(所見) 第217・218号住居跡は第223号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第223号住居跡→第218号住居跡→第217号住居跡と考えられる。

第217号住居跡は第218号住居跡の覆土内に掘り込まれた住居であり、カマドの一部及び住居南半は調査区外にかかっており未調査である。壁は第218号住居跡の覆土中では明瞭に捉えることができなかったが、当住居跡の床面レベルが若干低かったことから第218号住居跡の床面下の部分について検出した。床面に貼床は施されておらず、掘り方の調査も含めて壁溝・柱穴は検出することはできなかった。カマドは東壁の北寄りに設置されており、煙道の一部は未調査である。検出部分の規模は燃烧部幅約55cm、煙道下幅約28cmで、主軸方位は東-3°-北である。袖構築材や支脚は残存していなかったが、掘り方の調査で燃烧部の掘り込みと、壁との接合部に方形を呈する袖構築材の据え方及び燃烧部中央やや左寄りに支脚据え方と思われる不整形の小ピットを検出した。当住居跡の出土遺物中第462図1に掲げた灰釉陶器塊はK-14段階の製品であり当住居跡の年代決定に重要な遺物であり、後に詳述したい。



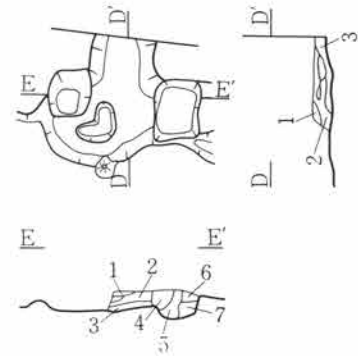
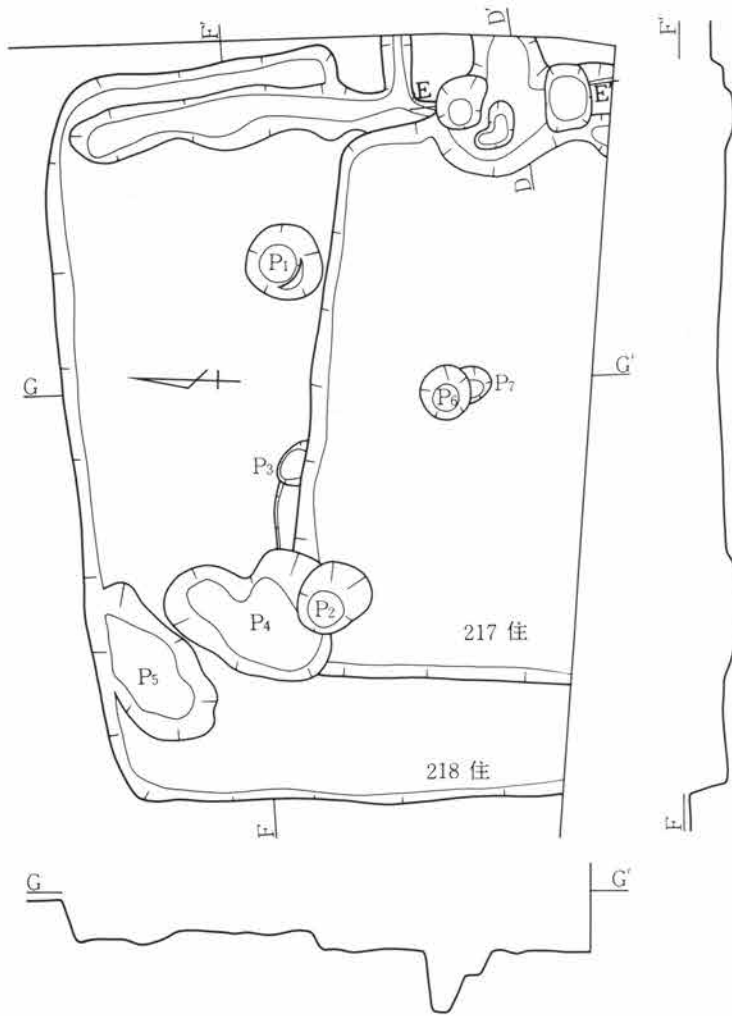
第461図 I区第217・218号住居跡実測図(1)



第462図 I区第217号住居跡出土遺物実測図

第218号住居跡もカマド及び住居南半が調査区外にかかっており、さらに第218号住居跡によって中央部を削平されており、検出調査した部分はわずかである。床面には全体にわずかに貼床が施されており、床面精査によって壁溝は検出されず、柱穴と考えられるP₁(径約60cm、深さ約34cm)・P₂(径約45cm、深さ約31cm)のみを検出した。P₁~P₂の柱穴間距離は約2.8mである。カマドは東壁に設置されていたものと考えられるが、ちょうど第217号住居跡と重複している上に、主体が調査区外であり不明である。

第2節 検出された遺構・遺物

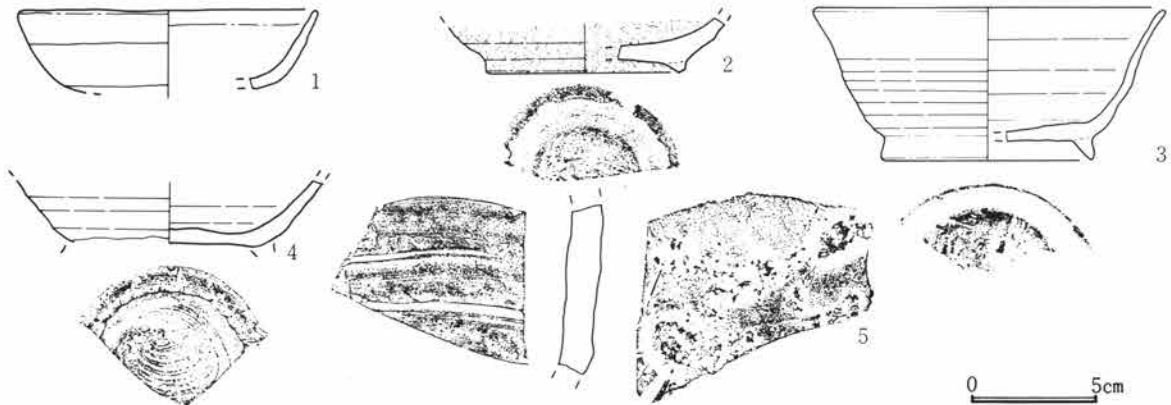


217号住カマド

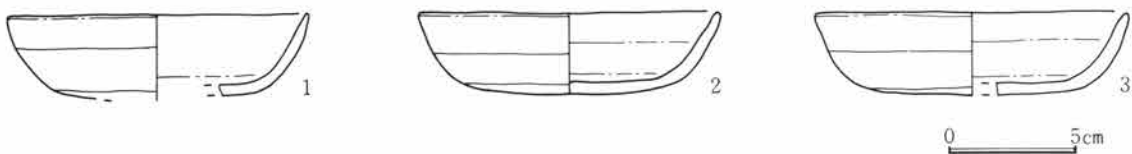
1. 暗褐色土 黒色の灰を多量に含む。
2. 暗褐色土 焼土細粒と炭化物を含む。
3. 暗褐色土 焼土粒と炭化物及び灰を多量に含む。
4. 暗褐色土 焼土粒を微量に含み、粘性が弱い。
5. 暗褐色土 炭化物とVI層土粒を微量に含む。
6. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量に含む。
7. 暗褐色土 VI層土粒とブロックを多量に含む。

217号住カマド

第463図 I区第217・218号住居跡実測図(2)

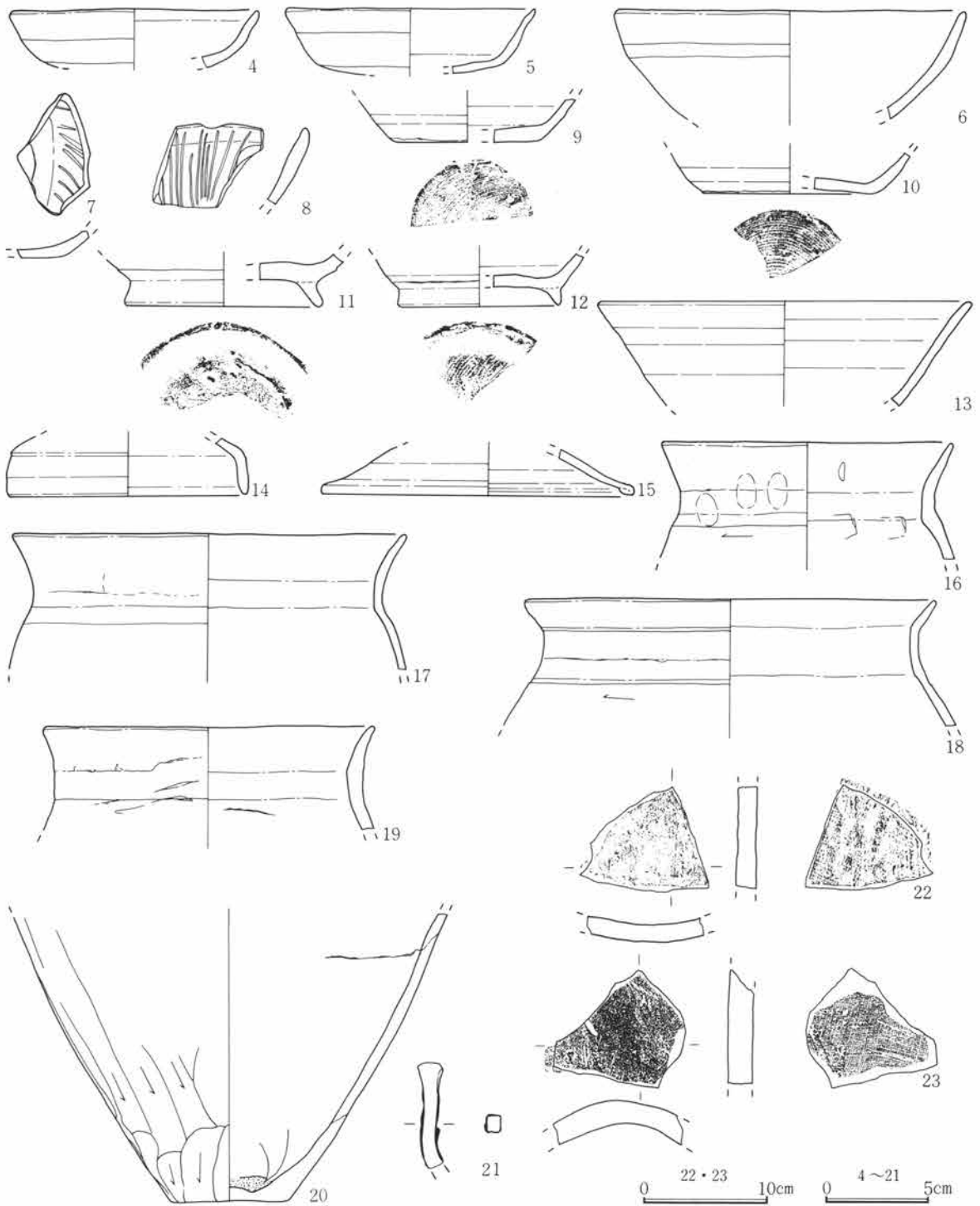


第464図 I区第218号住居跡出土遺物実測図



第465図 I区第217・218号住居跡出土遺物実測図(1)

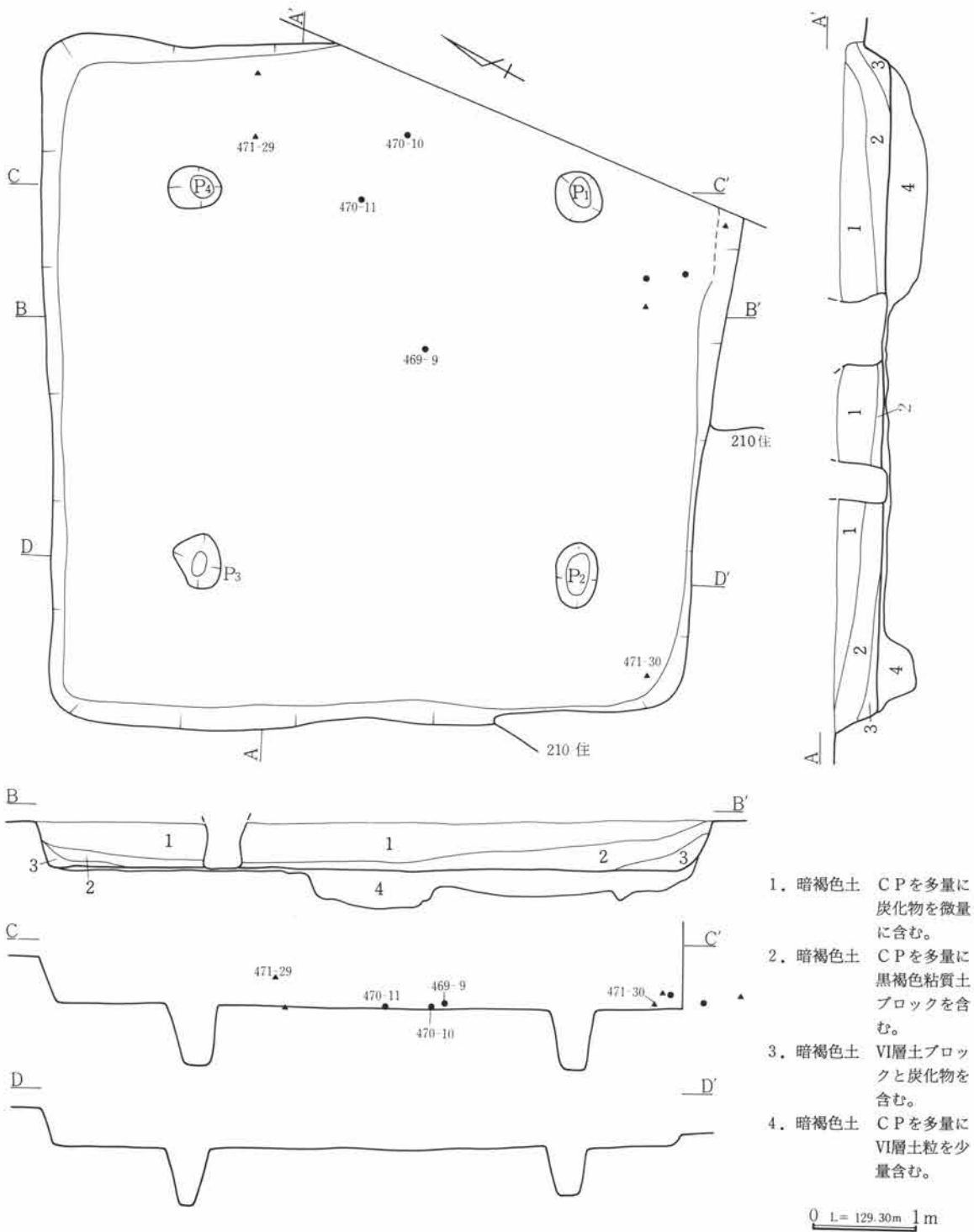
第4章 検出された遺構・遺物



第466図 I区第217・218号住居跡出土遺物実測図(2)

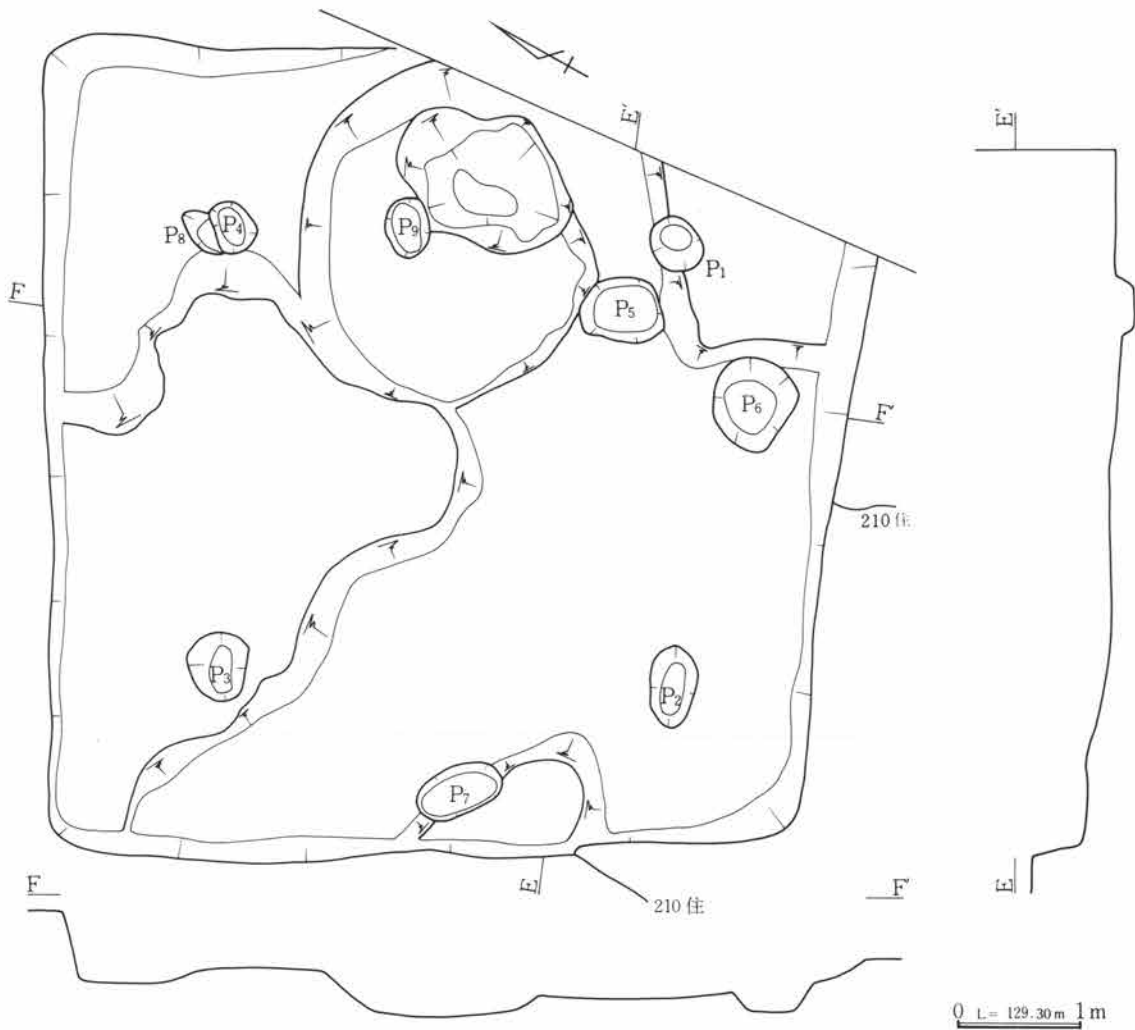
遺構名称	I区第211号住居跡		位置	7～11-I-48～52グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	6.40m×6.24m	主軸方位	東-27度-北	残存深度	約40cm程

(所見) 当住居跡は第210号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡が古い段階の遺構であるのは明らかである。また、第211号住居跡と北コーナー付近で接しているが、この前後関係については判断としない。カマド部分を含む東コーナー付近は、調査区外にかかっており未調査である。平面プランの確認

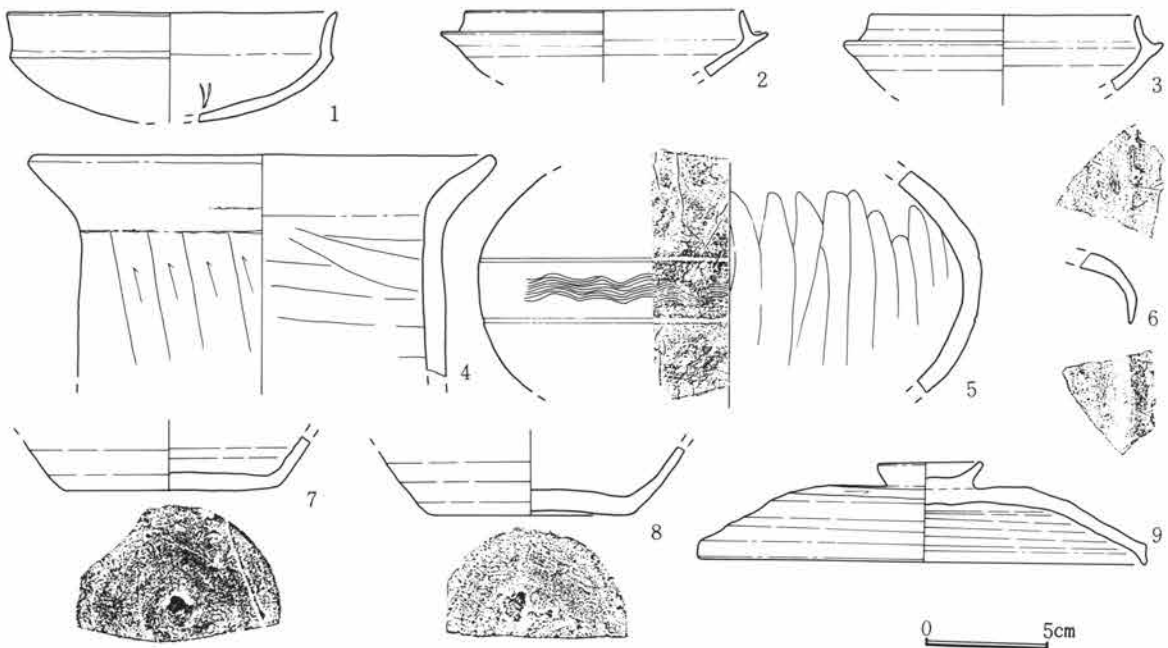


第467図 I区第221号住居跡実測図(1)

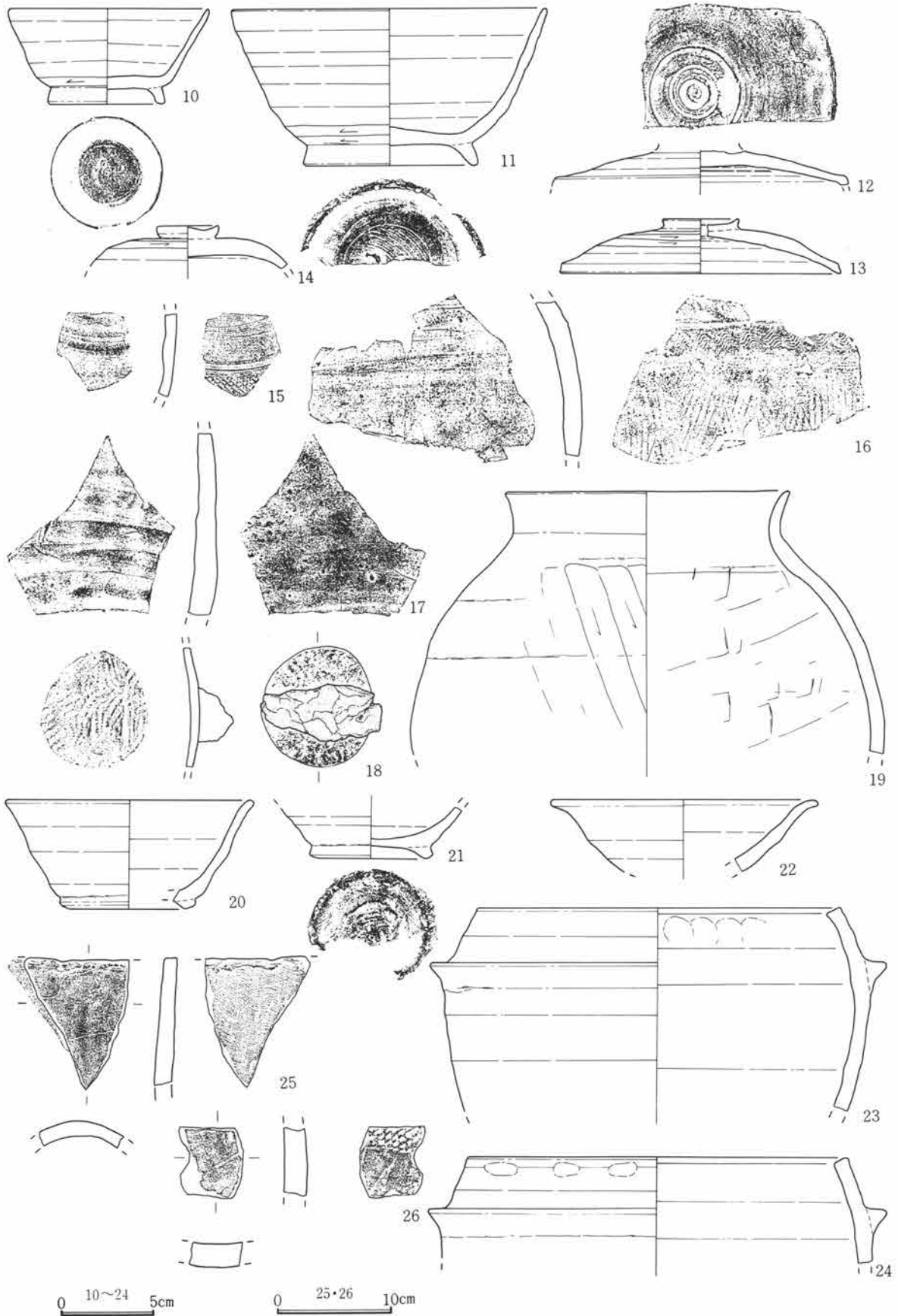
はVI層土中で行ったが、浅間C軽石を多量に含む覆土と確認面との違いは顕著で、プランは明瞭に捉えることができた。覆土は周辺部から埋没した状態を示しており、不自然な堆積状態とは思われない。壁は全体に良好な残存状態であるが、南東壁の傾斜がやや緩く、また、平面形も乱れていることからこの部分が崩落している可能性が高い。床面は、全面にわたって浅間C軽石を多量に含む暗褐色土とVI層土粒からなる貼床が施されていた。この床面の精査で壁溝は検出されず、P₁~P₄の4本の柱穴が検出された。柱穴の規模は、P₁(径約47cm、深さ約55cm)・P₂(約62×40cm、深さ約46cm)・P₃(約53×43cm、深さ約52cm)・P₄(約51×40



第468図 I区第221号住居跡実測図(2)

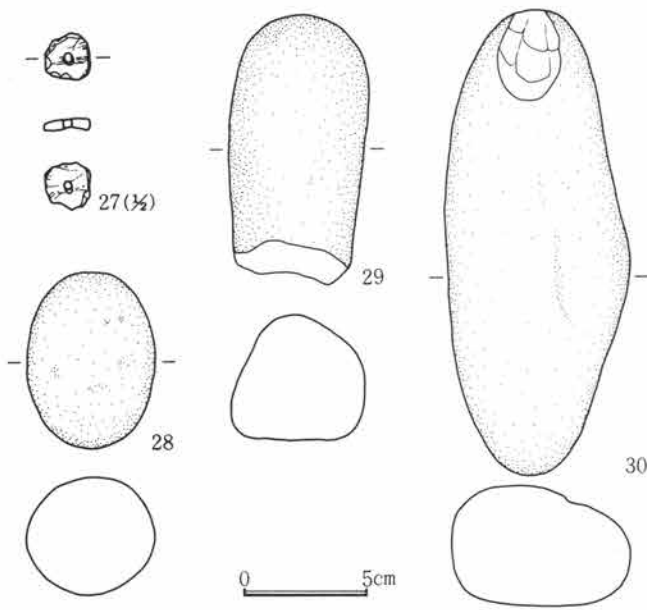


第469図 I区第221号住居跡出土遺物実測図(1)



第470図 I区第221号住居跡出土遺物実測図(2)

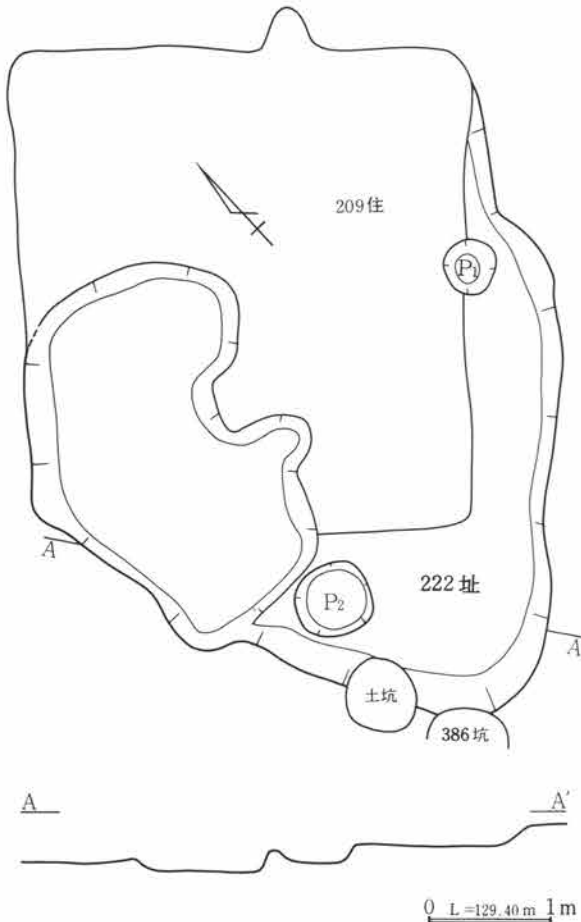
第4章 検出された遺構・遺物



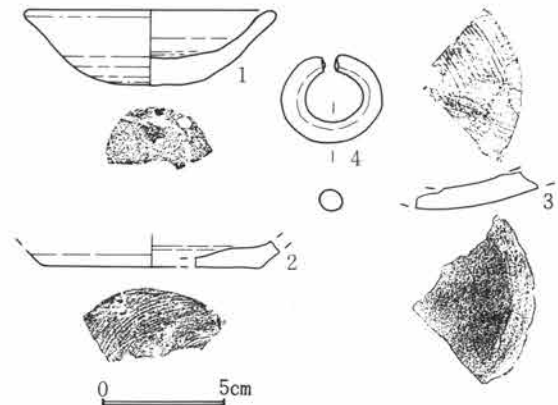
第471図 I区第221号住居跡出土遺物実測図(3)

cm、深さ約57cm)で、柱穴間距離はP₁~P₂間約3.6m、P₂~P₃間約3.6m、P₃~P₄間約3.5m、P₄~P₁間約3.6mである。掘り方の調査によって数本のピットを検出したが、前述の柱穴に代わるような配置のピットは検出されておらず、当住居跡においては柱穴位置の変更を伴うような建て替えが行われなかったことがわかる。貯蔵穴は未調査部分である東コーナー部に掘削されている可能性が高いが、不明である。第469~471図に掲載した出土遺物の中で、第470図20~26の遺物は当住居跡の主体を占める遺物と時期的に齟齬があり、重複する第210号住居跡に伴う遺物である可能性が高い。

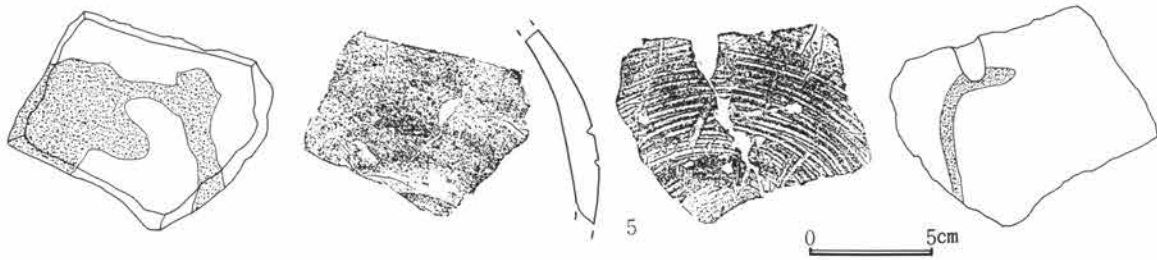
遺構名称	I区第222号址		位置	1~4-I-53~55グリッド内			
平面形態	不整形	規模	1m x 1m	主軸方位	—	残存深度	約13cm程



(所見) 当址は第202・209号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態及び残存状態等から当址が最も古い時期の遺構と考えられる。当址の平面プランは第209号住居跡との重複によって判然としないが、整形でないことは確実である。底面は第209号住居跡の床面よりもレベルが高く失われているが、東側に不整形で一段と深く掘り込まれた部分が検出されている。その他P₁(径約42cm、深さ約31cm)とP₂(径約57cm、深さ約15cm)の2本のピットを検出した。掲載した遺物の中で、第472図1の土師質の坏は、第202号住居跡の遺物の可能性がある。

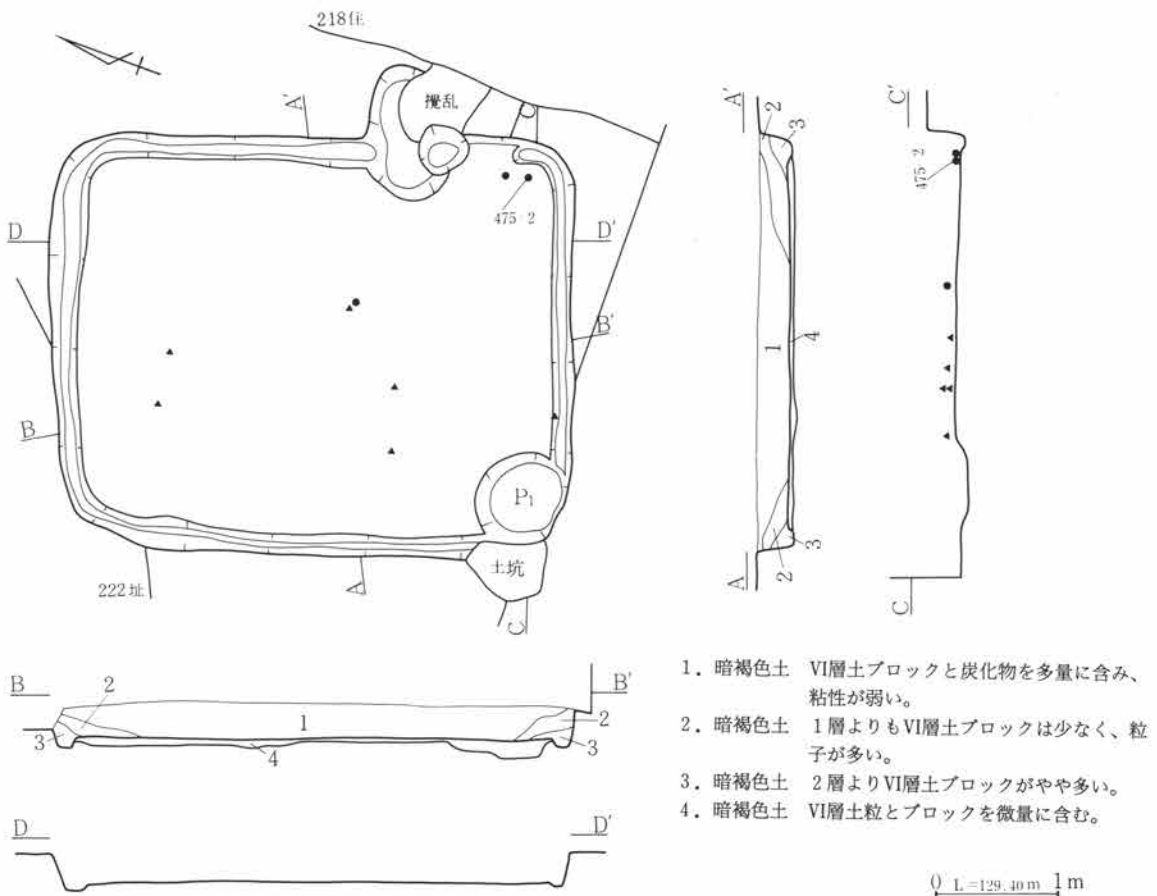


第472図 I区第222号址・出土遺物実測図(1)



第473図 I区第222号址出土遺物実測図(2)

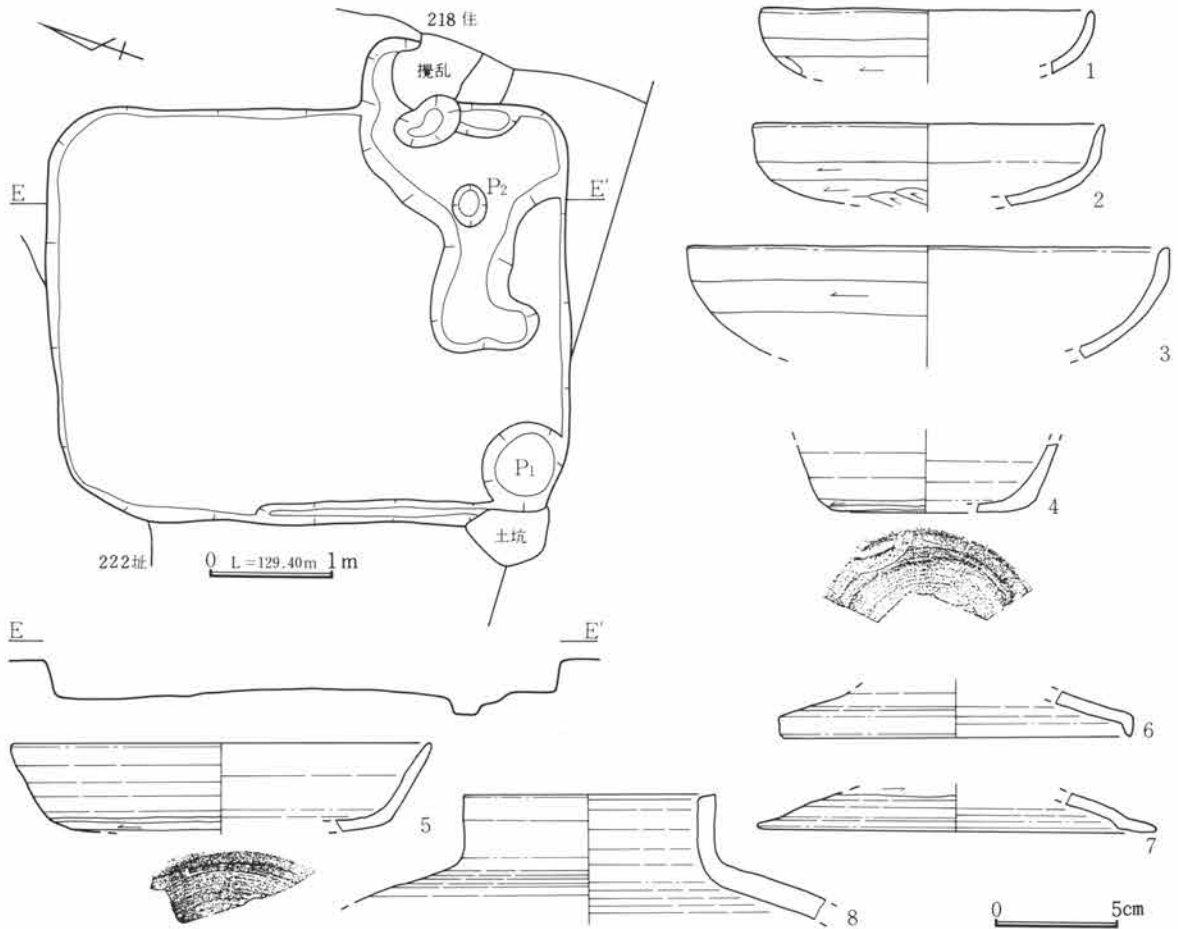
遺構名称	I区第223号住居跡	位置	0～3-I-51～53グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.30m×4.10m	主軸方位	東-18度-北	残存深度	約30cm程



第474図 I区第223号住居跡実測図(1)

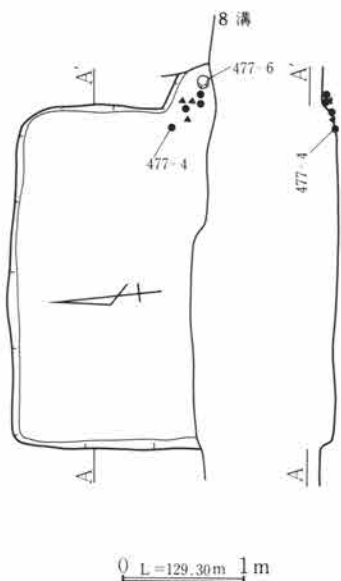
(所見) 当住居跡は第218号住居跡及び第222号址と重複しているが、出土遺物の比較から判断すると第222号址→当住居跡→第218号住居跡という関係と思われる。平面プランの確認はVI層土中で行った結果、覆土がVI層土ブロック主体に構成されていたため捉えにくかったが、炭化物が含まれていたため検出することができた。床面は全面に薄い貼床が施されており、床面の精査によって壁溝と貯蔵穴は検出することができたが、柱穴は掘り方段階においても未検出である。壁溝はカマド部分を除いて全周検出され、下幅約3～14cm、深さ約5cmの規模を有している。貯蔵穴は南コーナー部で円形を呈し、規模は径約65cm、深さ約10cmである。カマドは北東壁の南寄りに設置されており、袖構築材の据え方と思われる掘り込みが右袖部に検出されていることから、両袖の張り出さないタイプと思われるが、主体部分が攪乱されており判然としない。

第4章 検出された遺構・遺物

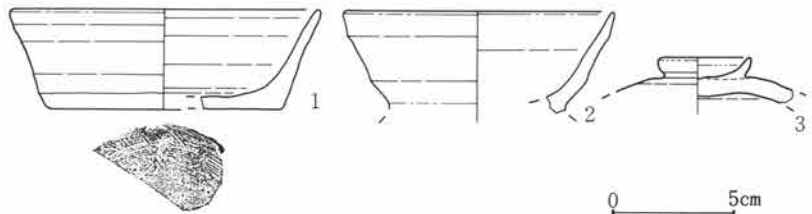


第475図 I区第223号住居跡(2)・出土遺物実測図

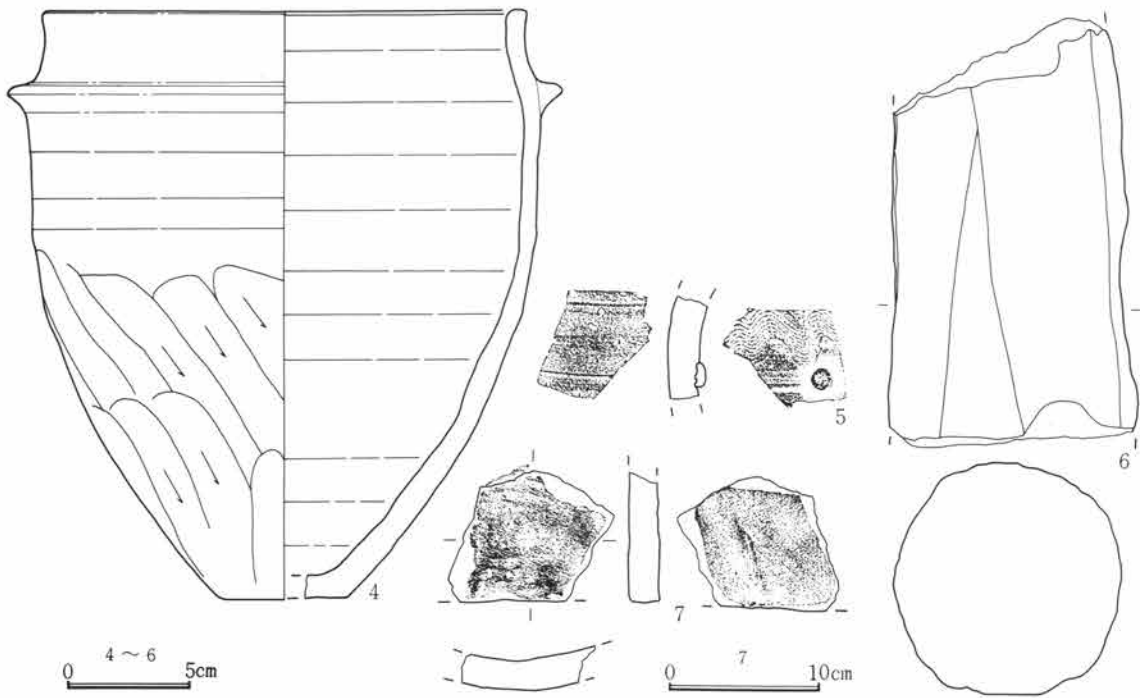
遺構名称	I区第224号住居跡	位置	15・16-I-53~55グリッド内					
平面形態	—	規模	2.70m×	—m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約15cm程



(所見) 当住居跡は第230号址と重複している他、住居南半は中世以降の第8号溝状遺構との重複によって消失している。当住居跡の掘り込みが浅かったために確認面からの残存はわずかで、壁の状態は不良である。床面はVI層土中に構築されており、貼床を施した部分は検出部分においては認められない。床面の精査で壁溝・柱穴は検出されておらず、貯蔵穴は消失した南東コーナー部にあったものであろう。カマドは東壁に設置されていたが、東側から南側にかけて攪乱されている。燃烧部中央には第477図6に示した支脚が据えられた状態で検出された。

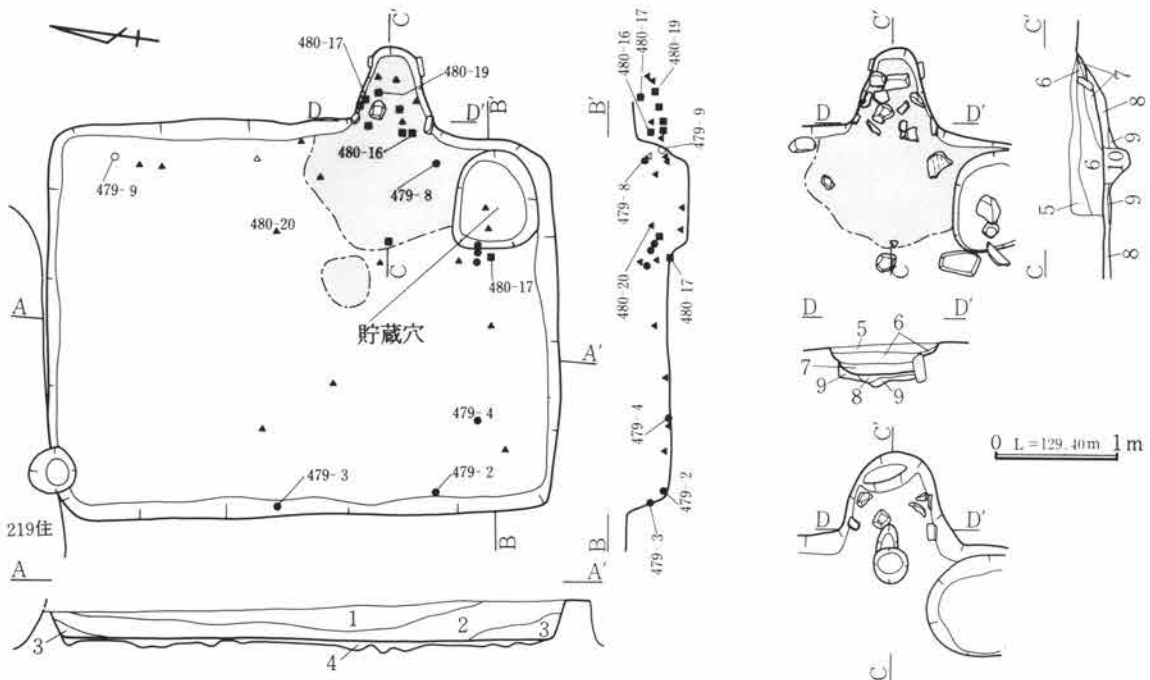


第476図 I区第224号住居跡・出土遺物実測図(1)



第477図 I区第224号住居跡出土遺物実測図(2)

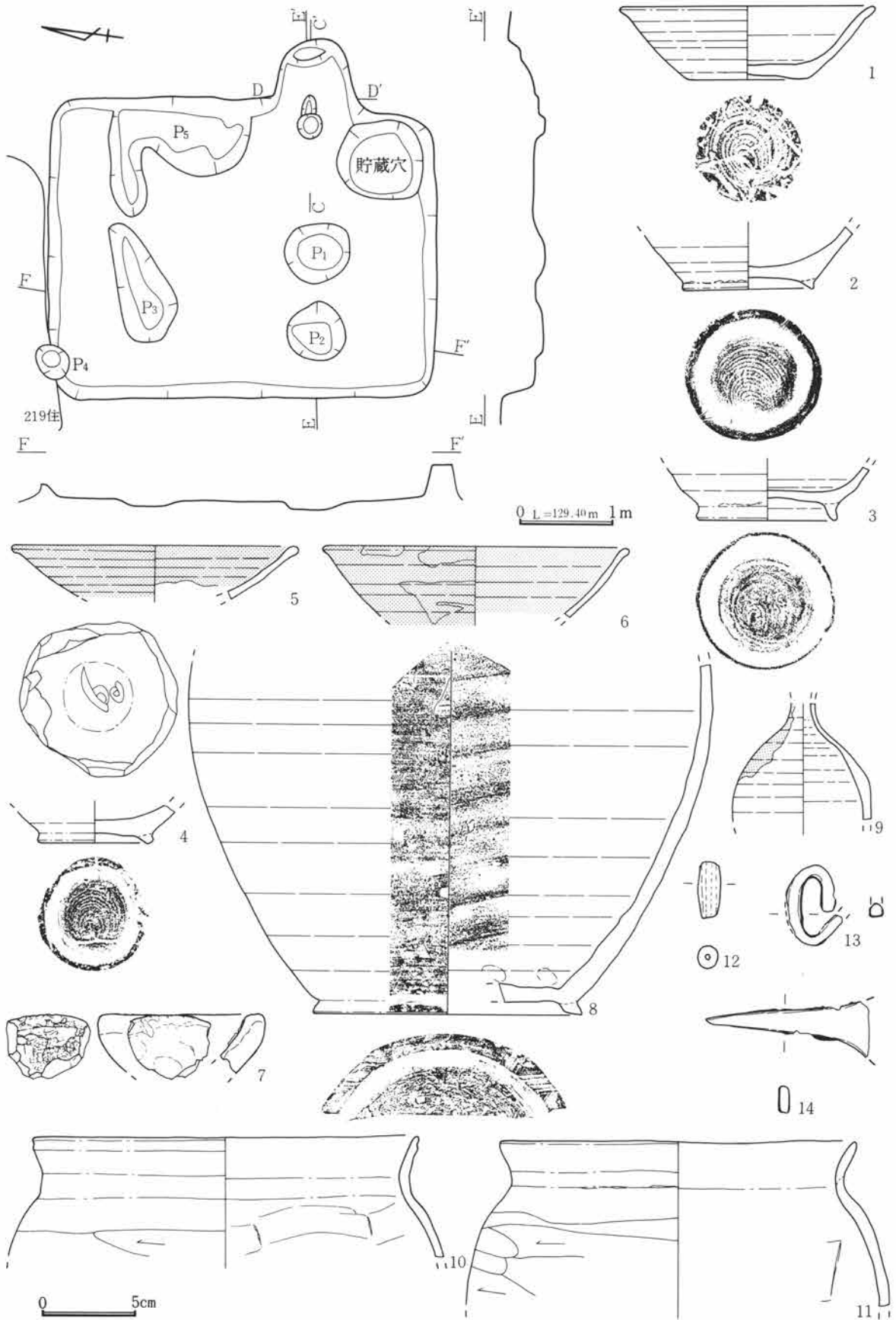
遺構名称	I区第225号住居跡	位置	2~4-I-49~51グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	3.12m×4.03m	主軸方位	東-7度-北
		残存深度	約30cm程		



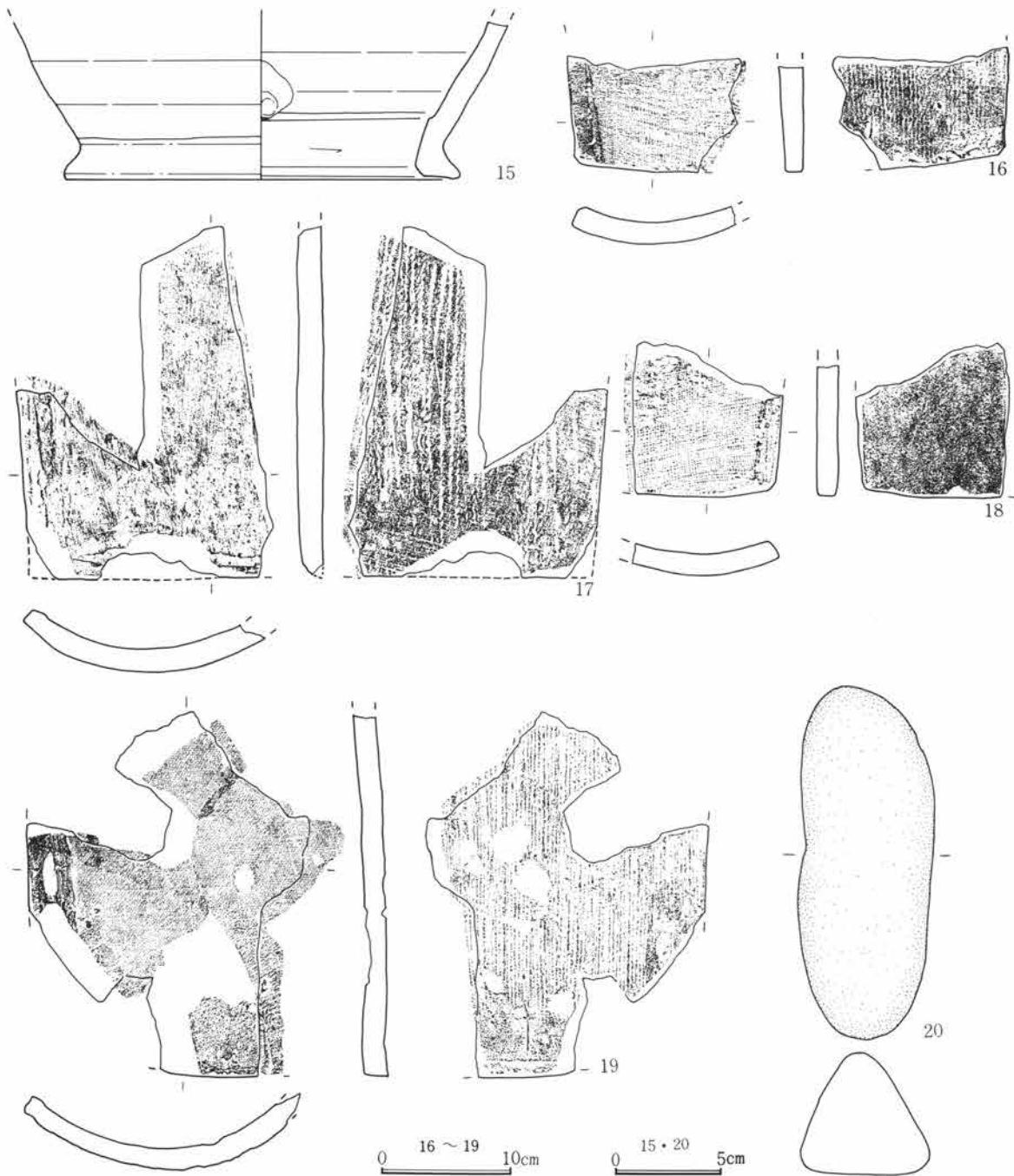
1. 暗褐色土 CPを多量に、焼土粒と炭化物を微量に含む。
2. 暗褐色土 CPを多量に含み、1層よりもやしまりが強い。
3. 暗褐色土 CPは少量で、VI層土粒とブロックを多量に含む。
4. 暗褐色土 VI層土粒とブロックを多量に含み、しまりが強い。
5. 暗褐色土 焼土粒を微量に含む。
6. 暗褐色土 灰と焼土細粒を微量に含む。
7. 暗褐色土 灰を多量に、焼土粒を微量に含む。
8. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。
9. 暗褐色土 灰を少量とVI層土粒を多量に含む。
10. 暗褐色土 灰と焼土粒を多量に、VI層土ブロックを微量含む。

第478図 I区第225号住居跡実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



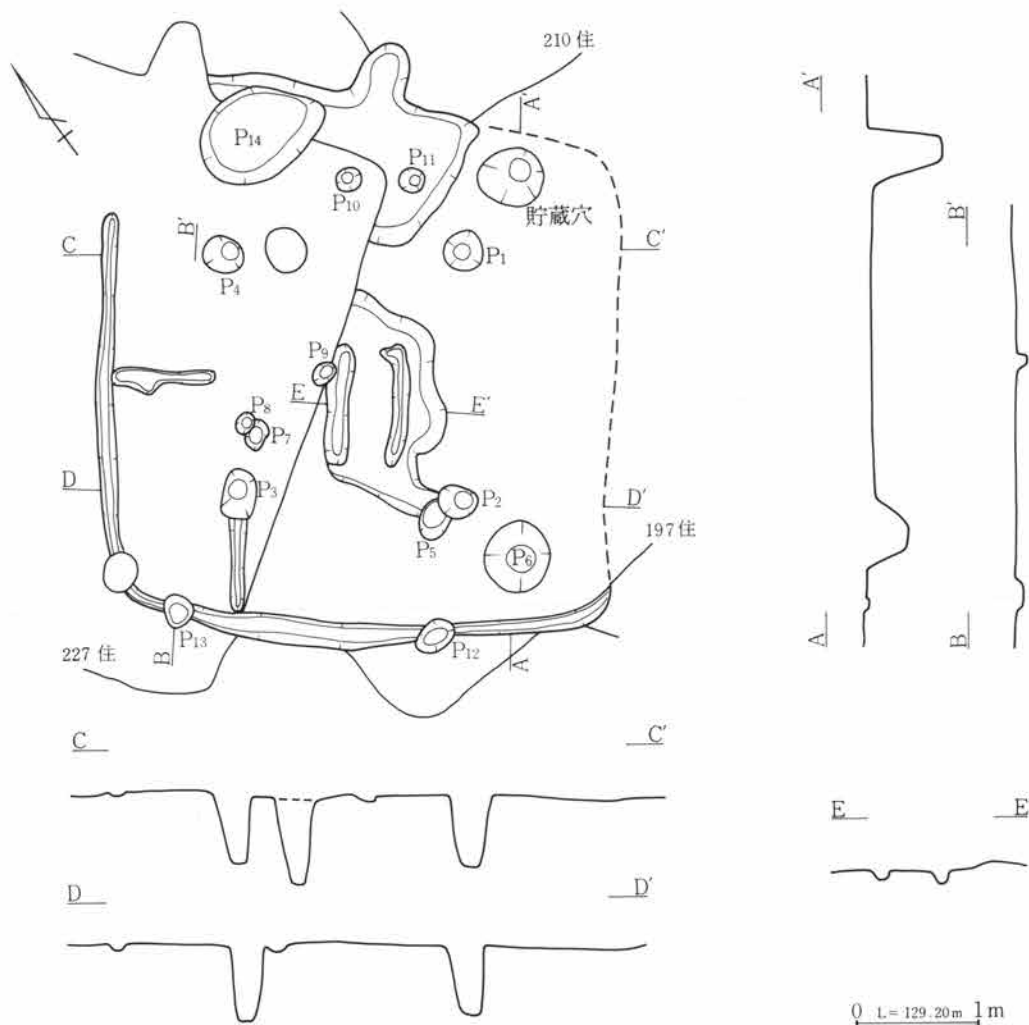
第479図 I区第225号住居跡(2)・出土遺物実測図(1)



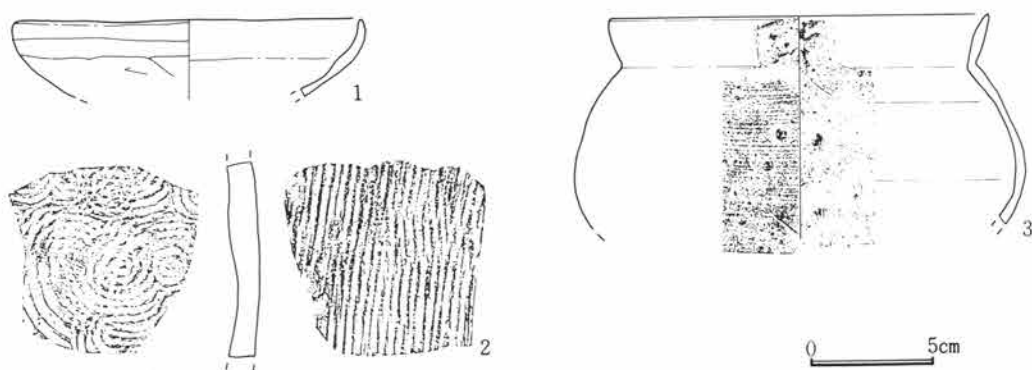
第480図 I区第225号住居跡出土遺物実測図(2)

(所見) 当住居跡はほぼ単独で検出した希な例であり、全体形を明瞭に捉えることができた。壁の残存は比較的良好であり、覆土の堆積状態にも不自然さは感じられなかった。床面には全体に薄いVI層土を主体とする貼床が施されていた。この床面の精査では貯蔵穴だけが検出され、壁溝・柱穴は掘り方の調査でも該当するものは検出されていない。貯蔵穴は南東コーナー部に検出した楕円形の掘り込みで、規模は約75×67cm、深さ約18cmである。カマドは東壁の南寄りに設置されており、両袖の張り出さない三角形の平面を有するタイプである。検出部分の規模は、全長約65cm、燃烧部幅約53cmで、主軸方位は東-6°-北である。袖及び燃烧部奥両側には角柱状の截石を据えており、燃烧部奥には截石の天井が設けられていたものと考えられる。支脚は面取りされた截石であり、燃烧部左寄りの位置に設置された状態で検出された。

遺構名称	I区第226号住居跡	位置	5～7-I-51～53グリッド内
平面形態	—	規模	4.35m×—m
		主軸方位	北-42度-東
		残存深度	約3cm程



第481図 I区第226号住居跡実測図

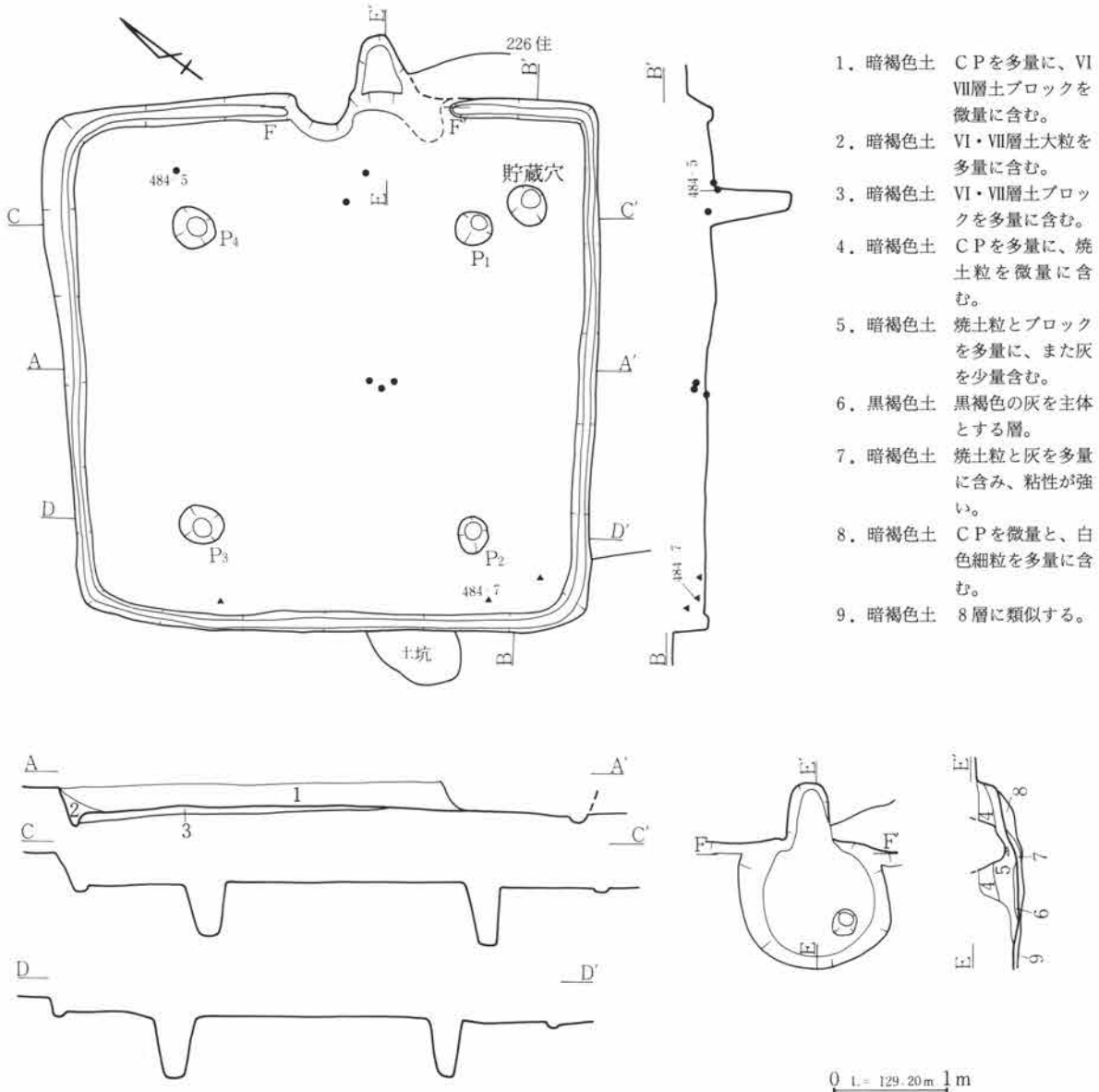


第482図 I区第226号住居跡出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第197・216・219・227号住居跡等と重複しているが、遺構の残存状態等から当住居跡が最も古い遺構と考えられる。遺構の検出がVII層上面であったため、残存は痕跡程度である。この面で検出できたのはカマド及び壁溝の痕跡、柱穴・貯蔵穴である。壁溝は西側部分のみ残存しており、規模は下幅約5～12

cm、深さ約5cmであり、北西及び南西壁溝から間仕切と思われる小規模な溝が認められる。柱穴はP₁～P₄(径約26～34cm、深さ約53～60cm、柱穴間距離P₁～P₂間約2.0m、P₂～P₃間約1.8m、P₃～P₄間約1.9m、P₄～P₁間約1.8m)の4本である。貯蔵穴は東コーナー部に検出したもので、径約47cm、深さ約52cmの規模を有している。カマドは痕跡程度で判然としないが、検出状態から双脚の支脚であった可能性がある。

遺構名称	I区第227号住居跡		位置	5～9-I-51～54グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	4.58m×4.58m	主軸方位	東-35度-北	残存深度	約27cm程

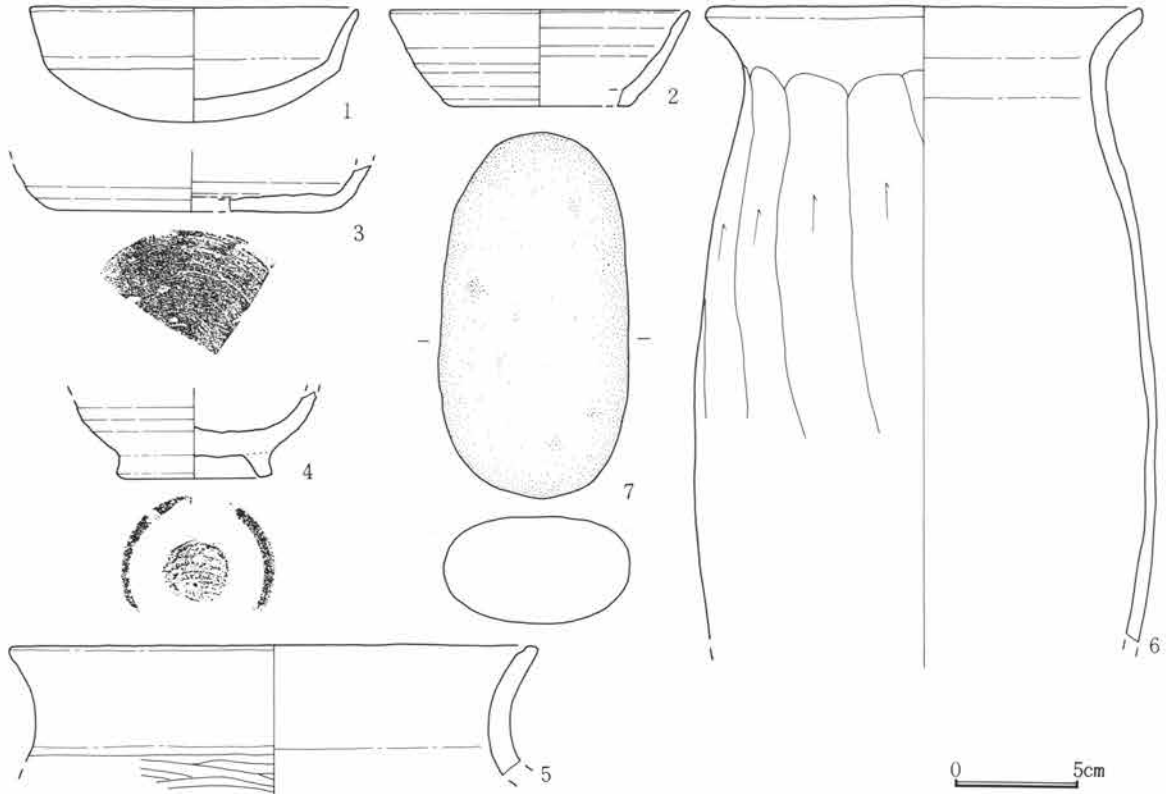


第483図 I区第227号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第195・197・226号住居跡等と重複しているが、遺構の検出状態等から第226号住居跡→当住居跡→第195・197号住居跡と考えられる。床面はほぼ全面にわたって薄い貼床が施されており、掘り方は平坦である。床面の調査では壁溝・柱穴・貯蔵穴を検出した。壁溝はカマド部分以外全周しており、下幅約3～8cm、深さ約5～10cmの規模を有している。柱穴はP₁～P₄(径約25～35cm、深さ約42～56cm、柱穴間距離P₁～P₂間約2.6m、P₂～P₃間約2.3m、P₃～P₄間約2.6m、P₄～P₁間約2.4m)の4本であり、この他に

第4章 検出された遺構・遺物

柱穴になりえるようなピットは検出されていない。貯蔵穴は東コーナー部に検出した円形の掘り込みで、径約33cm、深さ約60cmである。カマドは北東壁の中央やや南寄りに設置されており、右袖部分が攪乱されていた。検出部分の規模は煙道のみ計測可能で、長さ約50cm、下幅約32cmであり、主軸方位は東-35°-北である。袖構築材や支脚は残存しておらず、据え方の痕跡も認められなかった。



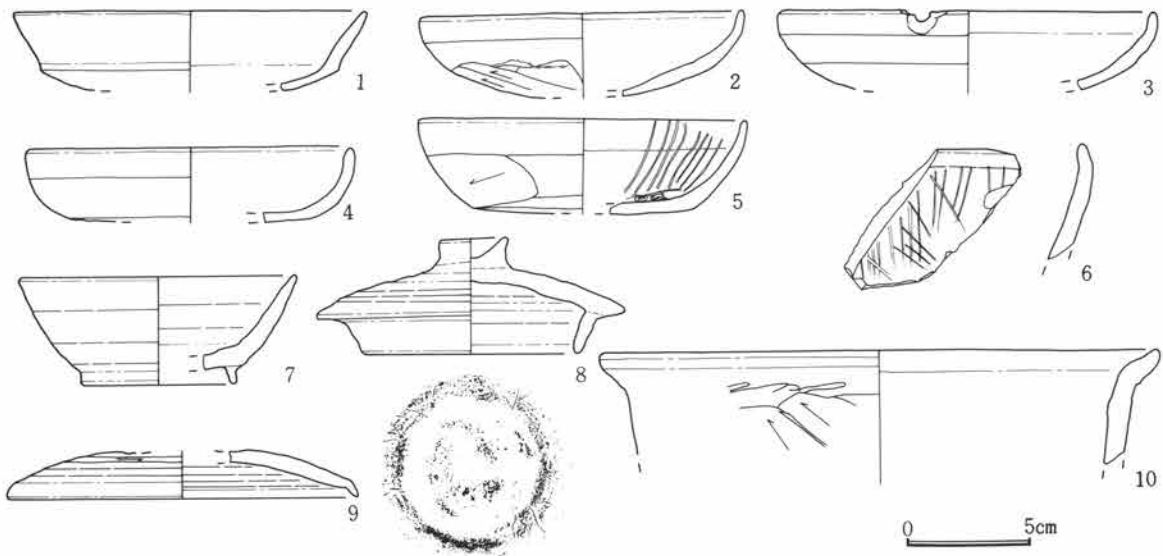
第484図 I区第227号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第228号址		位置	20・21-I-58~61グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約15cm程



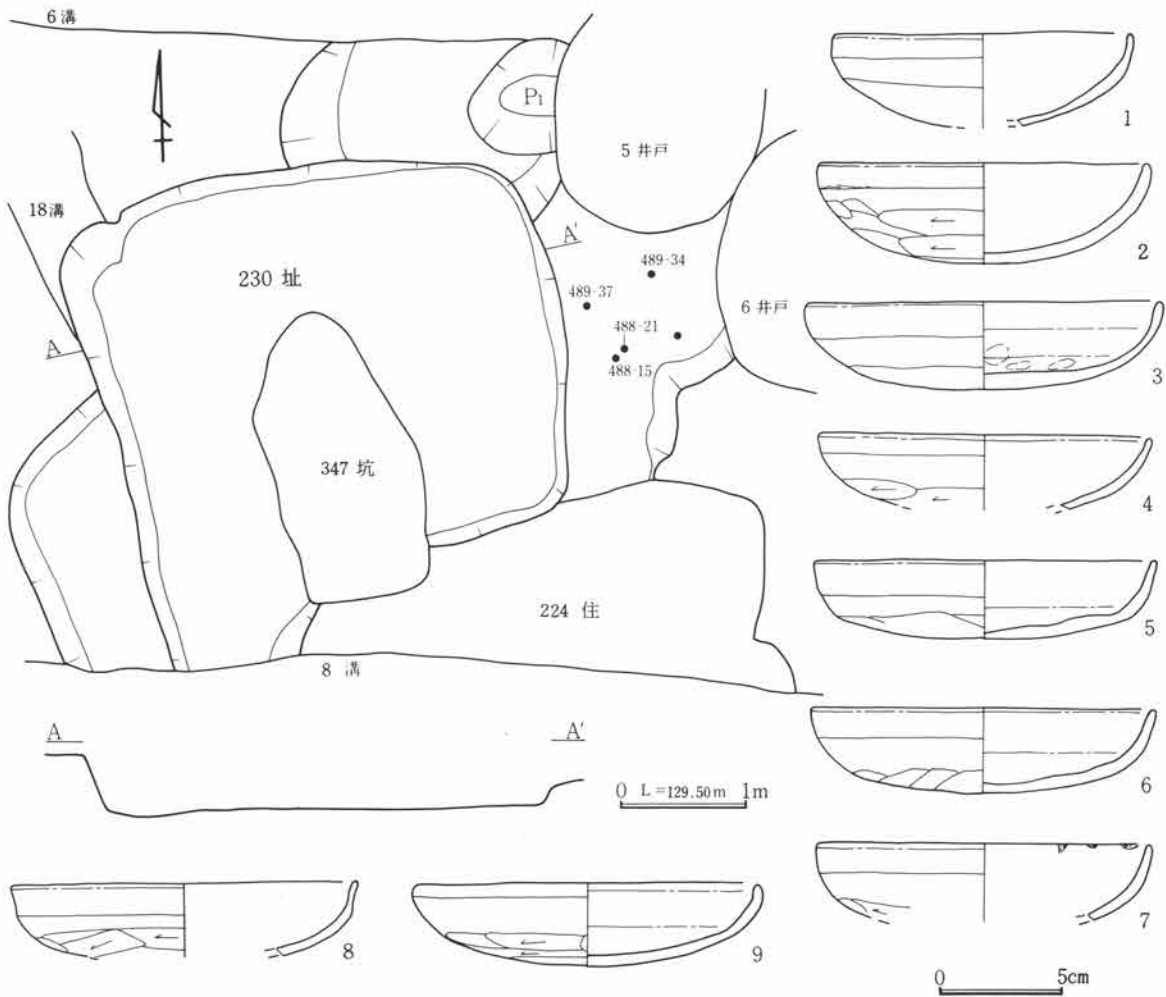
第485図 I区第228号址実測図

(所見) 当遺構は第207・208号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態等から当址が最も古い時期の遺構と考えられる。検出されたのは北東壁だけであり、平面形は判然としないものの方角等の整形とは考えられず、住居でない可能性が高い。出土遺物の中で注目されるのは暗文を施した土師器片が出土していることと、第486図8に示した須恵器の蓋である。暗文土師器片は重複している第207・208号住居跡の出土遺物とも共通するものであり、時期的にも接近しているのであろう。須恵器の蓋については内面のかえりが長く特異な器形であり、当遺跡の調査では他に類例が認められないものである。



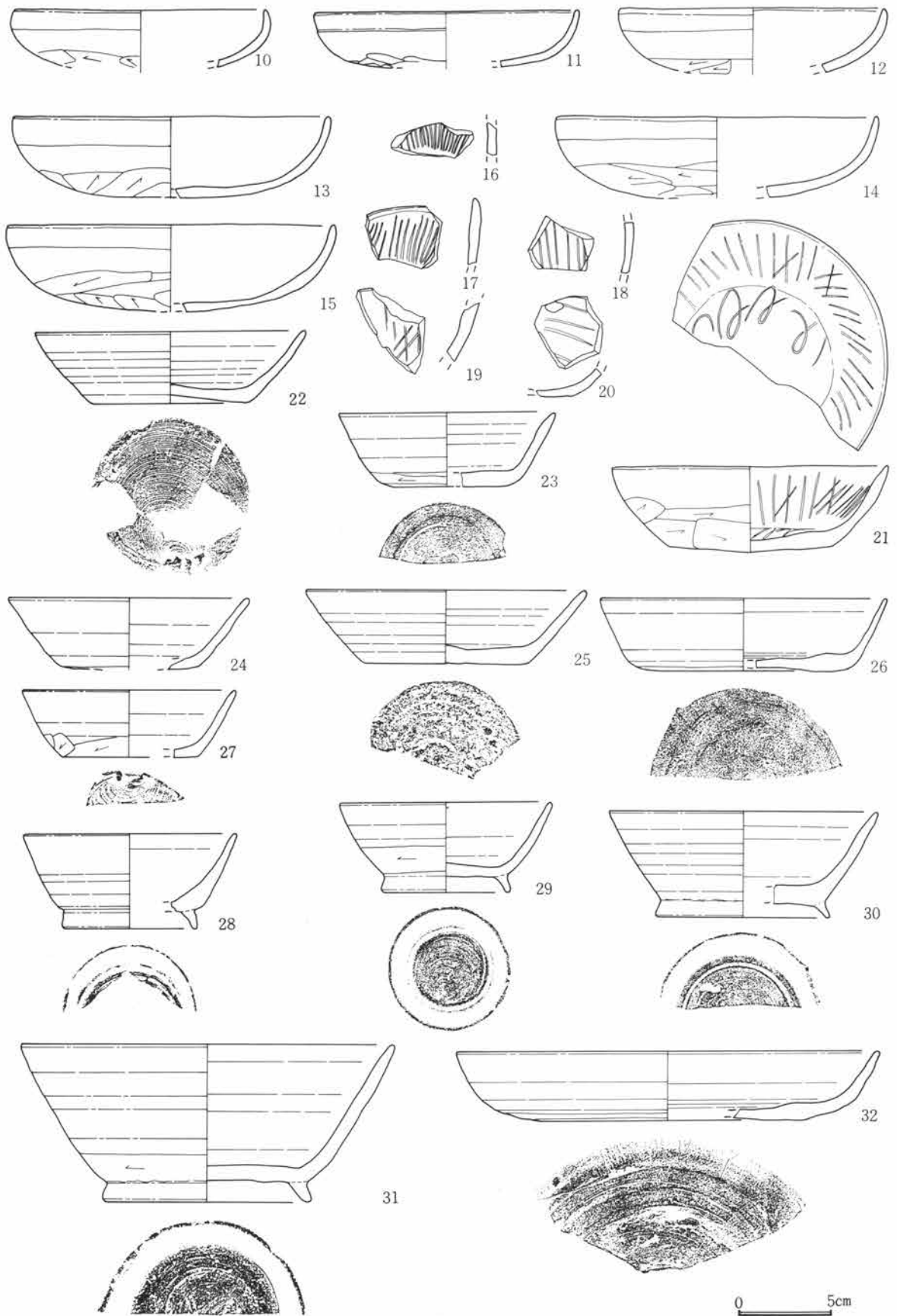
第486図 I区第228号址出土遺物実測図

遺構名称	I区第230号址	位置	15~17-I-54~56グリッド内		
平面形態	隅丸方形?	規模	-m × -m	主軸方位	-
		残存深度	約32cm程		

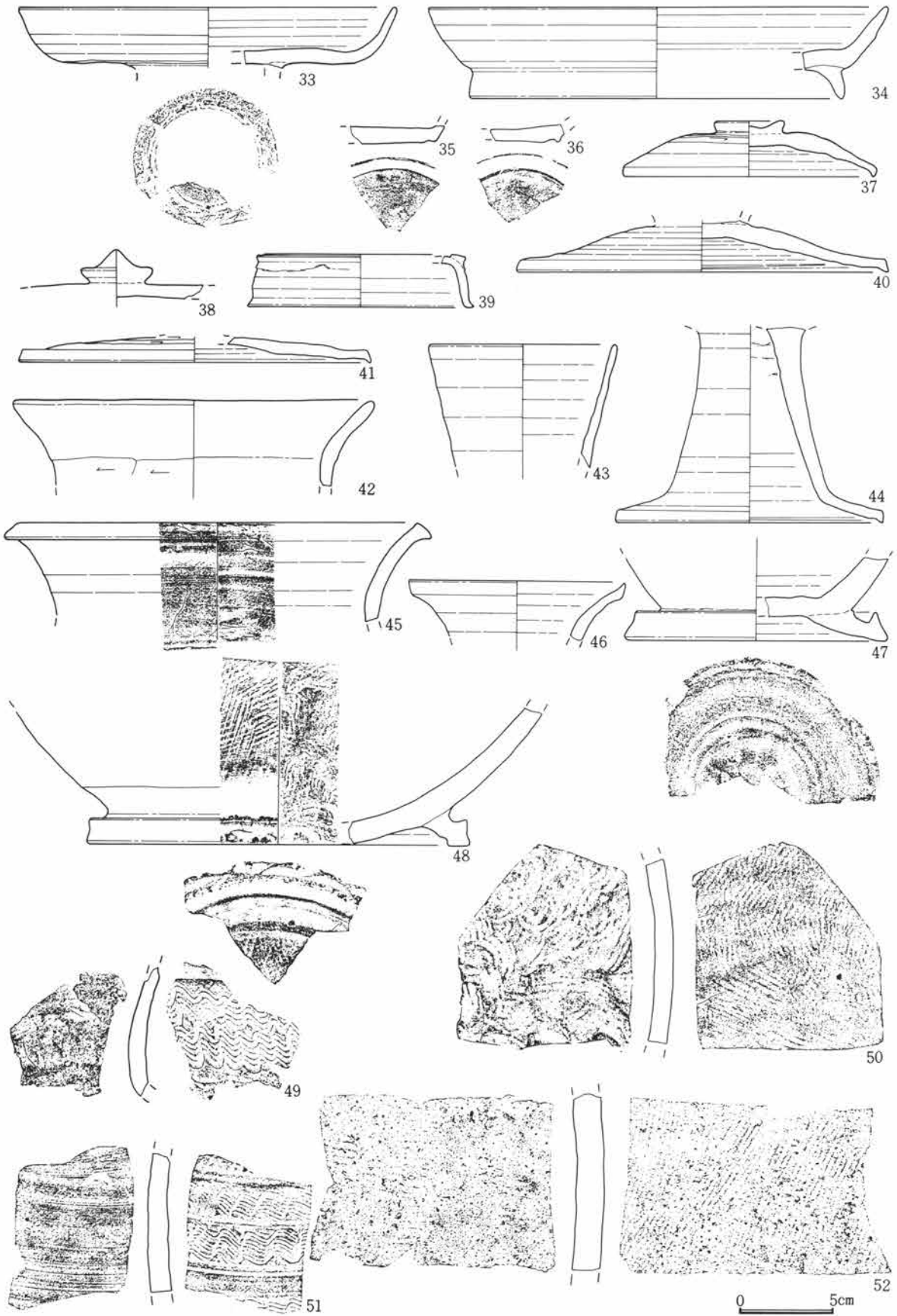


第487図 I区第230号址・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第488図 I区第230号址出土遺物実測図(2)



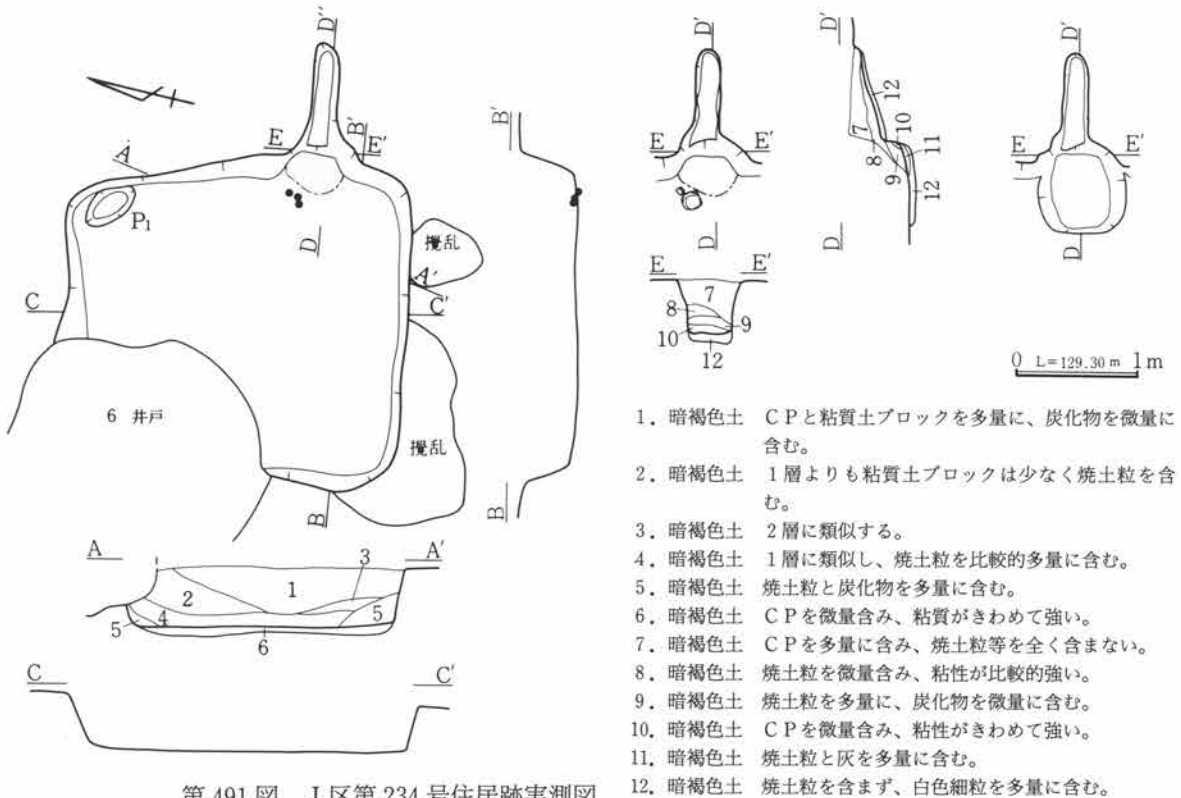
第489図 I区第230号址出土遺物実測図(3)



第490図 I区第230号址出土遺物実測図(4)

(所見) 当遺構は第224号住居跡及び第18号溝状遺構と重複しているが、遺構の検出状態や残存状態から当址→第224号住居跡・第18号溝状遺構と考えられる。また、北東側は中世以降の第5・6号井戸跡によって失われている。第487図に示した平面図からわかるように、当址は少なくとも方形状を呈する2基の遺構と不整形の1基の遺構が複合したものである可能性が高い。しかし、いずれの掘り込みも性格が特定できず、また、出土遺物に数時期にわたるような様相が認められないことなどから分離する意味もないため敢えて一つとして扱った。遺物は、狭い範囲にもかかわらず多量に出土している上に、多くの器種が認められることが特徴である。特に、在地産の暗文土師器坏や、平城I期の杯A Iと分類されている畿内産土師器杯(第488図16)が出土している他、須恵器の盤が出土していることなど、近接する第208号住居跡等に近い遺物構成が認められる。さらに遺物構成は重複する第18号溝状遺構とも共通しており、当址出土とした遺物の大半が本来は第18号溝状遺構に伴うものである可能性もある。

遺構名称	I区第234号住居跡	位置	16・17-I-51~53グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	2.50m×2.70m	主軸方位	東-11度-北	残存深度	約45cm程



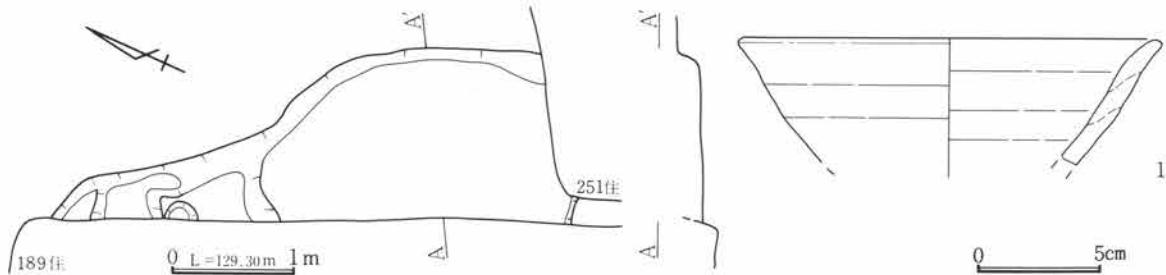
第491図 I区第234号住居跡実測図

1. 暗褐色土 CPと粘質土ブロックを多量に、炭化物を微量に含む。
2. 暗褐色土 1層よりも粘質土ブロックは少なく焼土粒を含む。
3. 暗褐色土 2層に類似する。
4. 暗褐色土 1層に類似し、焼土粒を比較的多量に含む。
5. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を多量に含む。
6. 暗褐色土 CPを微量含み、粘質がきわめて強い。
7. 暗褐色土 CPを多量に含み、焼土粒等を全く含まない。
8. 暗褐色土 焼土粒を微量含み、粘性が比較的強い。
9. 暗褐色土 焼土粒を多量に、炭化物を微量に含む。
10. 暗褐色土 CPを微量含み、粘性がきわめて強い。
11. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。
12. 暗褐色土 焼土粒を含まず、白色細粒を多量に含む。

(所見) 当住居跡は西コーナー部を中世以降の第6号井戸跡によって失っている他、近接する時期の遺構との重複は認められない。平面プランの確認はIV層土中で行ったが、遺構の掘り込みが非常に深く、壁等の残存も良好である。床面には全体に5cm程の貼床が施されていた。床面の精査によって壁溝・柱穴は検出されず、北コーナー部に検出した約45×26cm、深さ約14cmの楕円形を呈するピットについても貯蔵穴とは思われない。

カマドは北東壁の南寄りに設置されており、屋内部分の残存が極めて悪く、故意に壊されているものと思われる。検出部分の規模は、煙道長約80cm、下幅約14cmで、主軸方位は東-8°-北である。

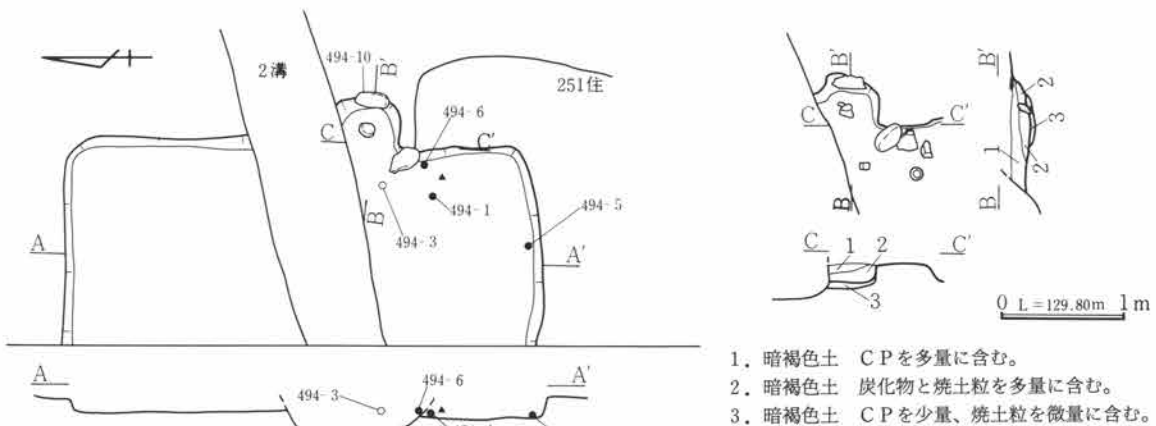
遺構名称	I区第235号址		位置	23~25-I-51・52グリッド内			
平面形態	不整形	規模	-m× -m	主軸方位	-	残存深度	約17cm程



第492図 I区第235号址・出土遺物実測図

(所見) 当址は第189・190・192号住居跡と重複しているが、遺構の残存状態からは当址が古い段階の遺構であるように判断される。しかし、出土遺物の比較をすると当址出土の遺物は重複する他遺構の遺物よりも明らかに新しい時期のものであり、調査段階に当遺構のプランを捉えきれなかったものであろう。検出されたのは北東壁だけであるが、緩い曲線を描いており住居のような整形を呈するとは考えられない。

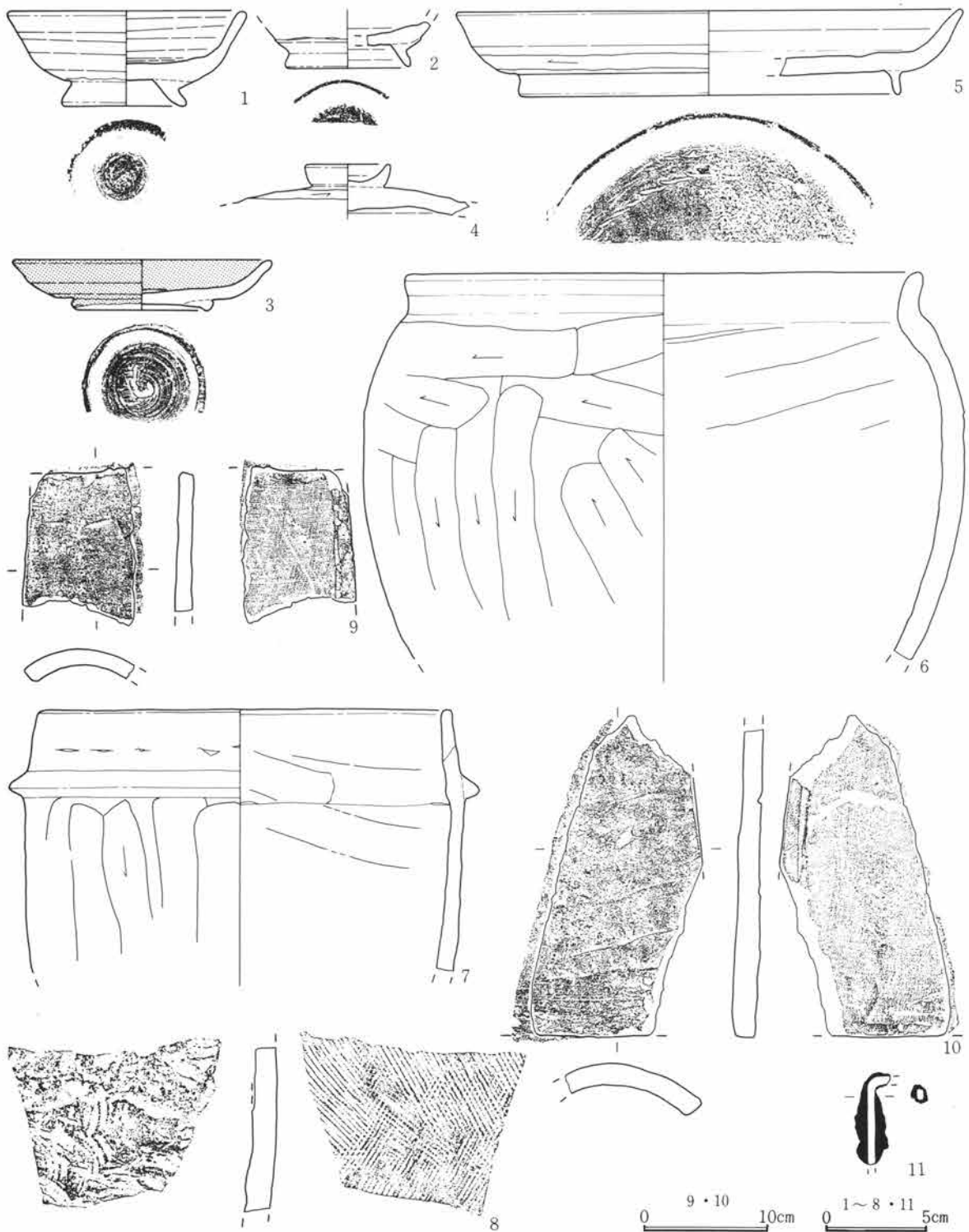
遺構名称	I区第239号住居跡		位置	28~30-I-62・63グリッド内			
平面形態	-	規模	-m× -m	主軸方位	-	残存深度	約11cm程



第493図 I区第239号住居跡実測図

1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 炭化物と焼土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 CPを少量、焼土粒を微量に含む。

(所見) 当住居跡は第117・251号住居跡と重複しているが、出土遺物の比較等から当住居跡が最も新しい時期の遺構と考えられる。掲載した出土遺物の中で第494図5等は第251号住居跡に伴う遺物と思われる。当住居跡は農道下の調査で検出したもので、確認面の差のためか西側部分では検出できなかった。カマドは東壁で袖石・支脚・奥壁に石を使用したもので、主軸方位は東-0°-北である。



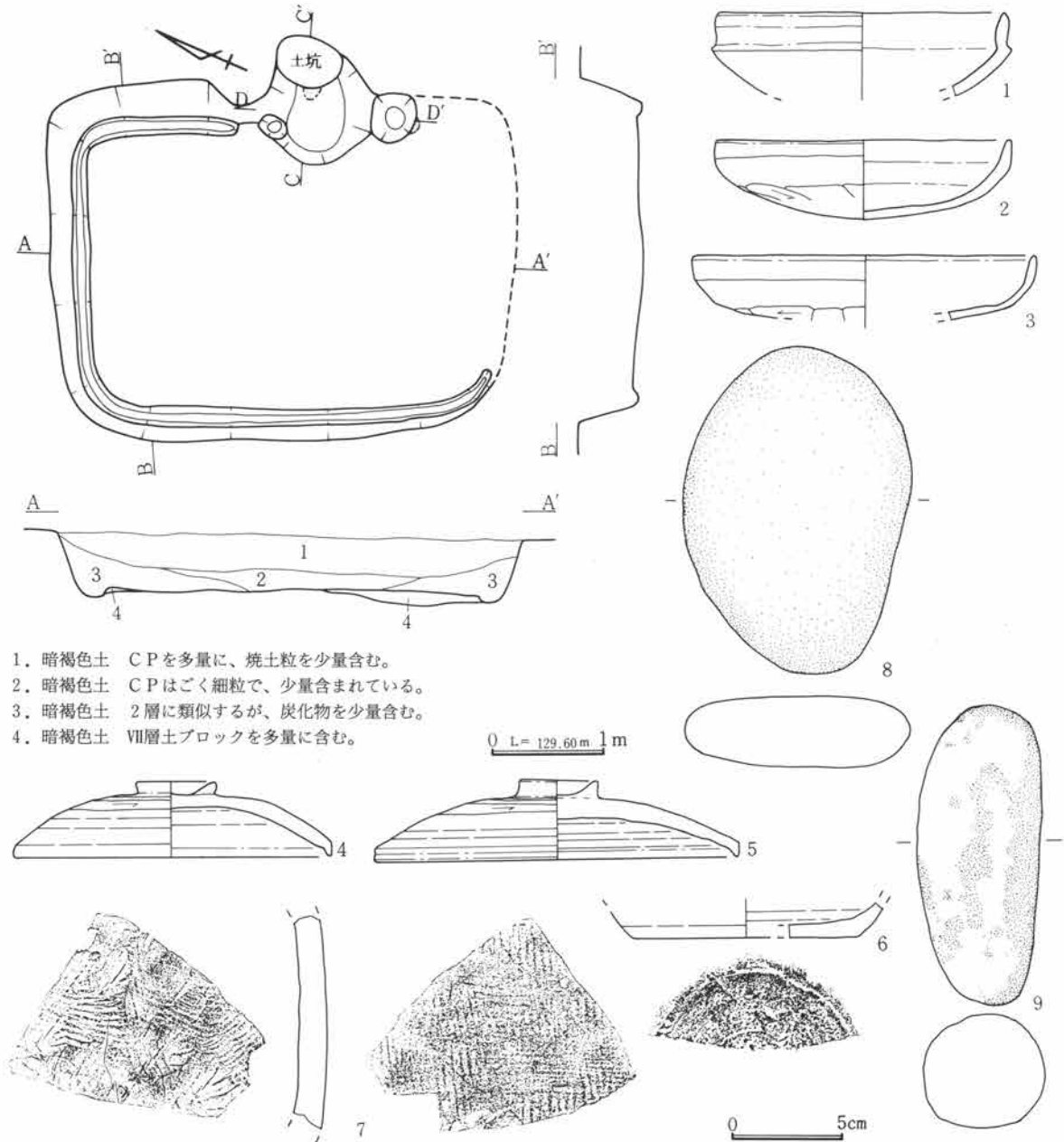
第494図 I区第239号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	I区第240号住居跡	位置	39~42-I-60~62グリッド内					
平面形態	隅丸長方形	規模	3.15m×	—m	主軸方位	東-24度-北	残存深度	約50cm程

(所見) 当住居跡は第34・40・245号住居跡と重複しているが、第34・40号住居跡→当住居跡である可能性が高く、第245号住居跡との関係は判然としない。南側部分は断面観察では壁の立ち上がりが確認されているが、

第2節 検出された遺構・遺物

農道下の狭い範囲の調査であったために、調査の際に失ってしまった。北側の残存は比較的良好で、床面の精査によって壁溝を検出した。床面には部分的に貼床が施されていたものと思われるが、あまり明瞭ではない。壁溝の規模は下幅約5~8cm、深さ約5~10cmである。カマドは東壁中央やや南寄りに設置されており、燃焼部奥にわずかに灰面を検出した他残存は不良で、主軸方位は東-27°-北である。

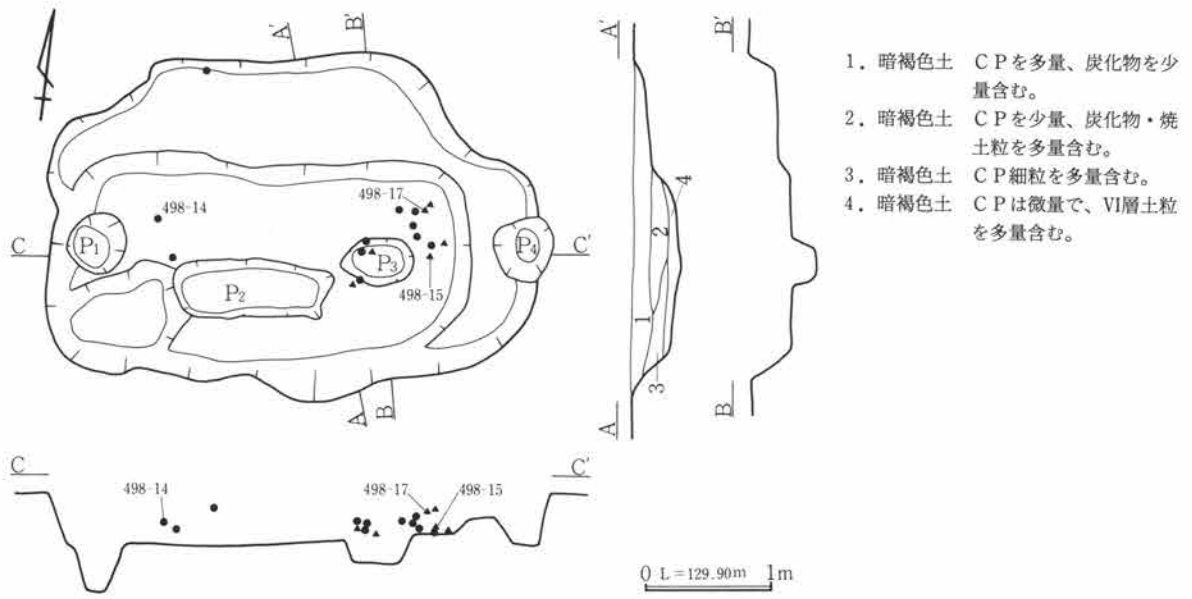


第495図 I区第240号住居跡・出土遺物実測図

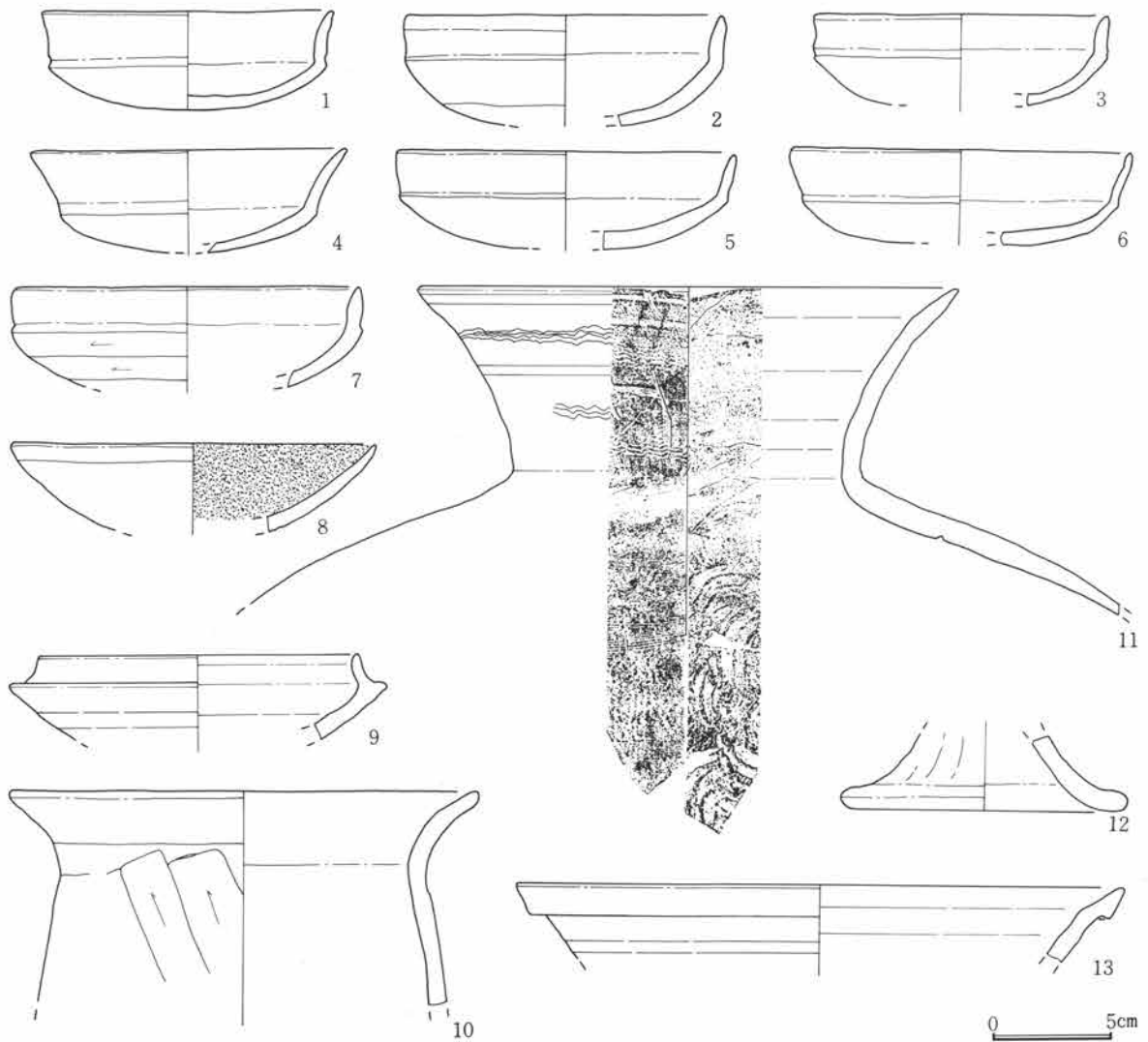
遺構名称	I区第241号址		位置	32~34-I-61・62グリッド内			
平面形態	不整形	規模	3.82m×2.70m	主軸方位	東-10度-北	残存深度	約33cm程

(所見) 当址は外形が不整形で内面に長方形の掘り込みを有し、さらに円形小ピット(P₁-径約46cm、深さ約38cm、P₂-径約36cm、深さ約25cm、P₃-径約49cm、深さ約20cm)が東西に並ぶ特異なものである。遺物の出土は比較的顕著であり、実測可能なものも多かった。規模的・形態的に住居とは考えられない。

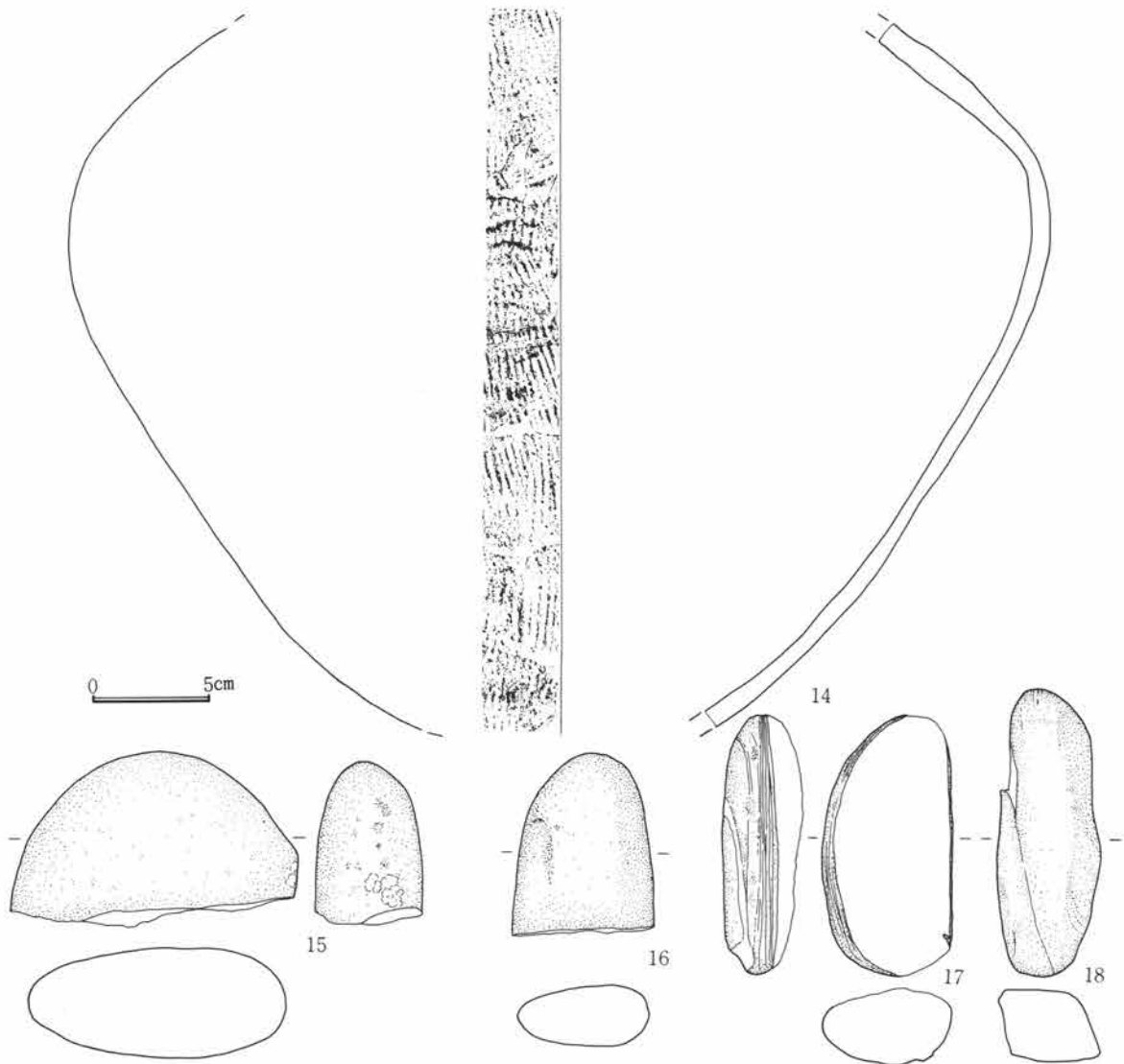
第4章 検出された遺構・遺物



第496図 I区第241号址実測図

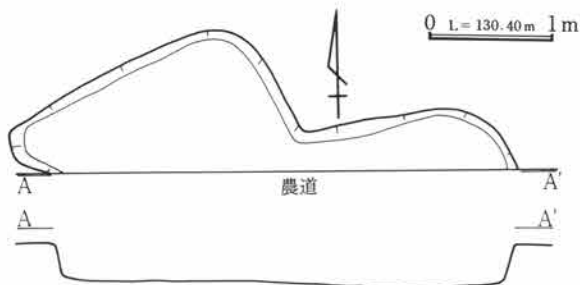


第497図 I区第241号址出土遺物実測図(1)



第498図 I区第241号址出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第243号址		位置	49・50-I-67~69グリッド内			
平面形態	不整形	規模	-m × -m	主軸方位	-	残存深度	約28cm程

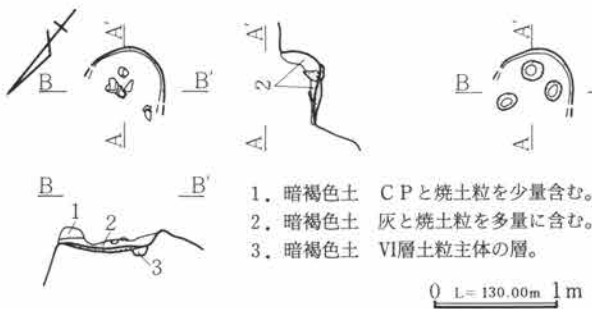


第499図 I区第243号址実測図

(所見) 当址は既報告部分であるJ区との間にあつた東西農道下の調査で検出したもので、I区の調査部分においては確認面の差によるものか南側部分を検出することができなかった。平面形は一見住居のような整形とも思われるが、西側部分に明らかに鋭角なコーナーを有しており、住居とは考えられない性格不明な遺構である。

遺構名称	I区第245号住居跡		位置	39~41-I-60・61グリッド内			
平面形態	-	規模	-m × -m	主軸方位	-	残存深度	約22cm程

第4章 検出された遺構・遺物



第500図 I区第245号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は農道下の調査で検出したもので、第22・25・240号住居跡と重複している。当住居跡の平面プランは全くといっていいほど検出されておらず、カマドの一部を検出したものである。このカマドが残存していたことから、当住居跡は第22・25号住居跡よりは新しい時期の遺構である可能性があるが、第240号住居跡との関係は判然としない。

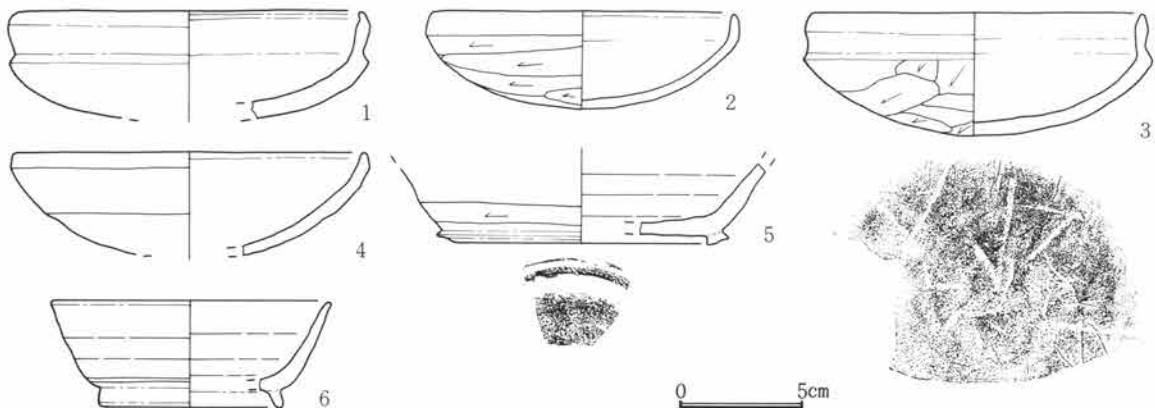
遺構名称	I区第247号住居跡		位置	48-I-1-J-71~74グリッド内			
平面形態	隅丸長方形	規模	4.66m×5.30m	主軸方位	東-39度-北	残存深度	約50cm程

遺構名称	I区第259号址		位置	49・50-I-70・71グリッド内			
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—	残存深度	約38cm程

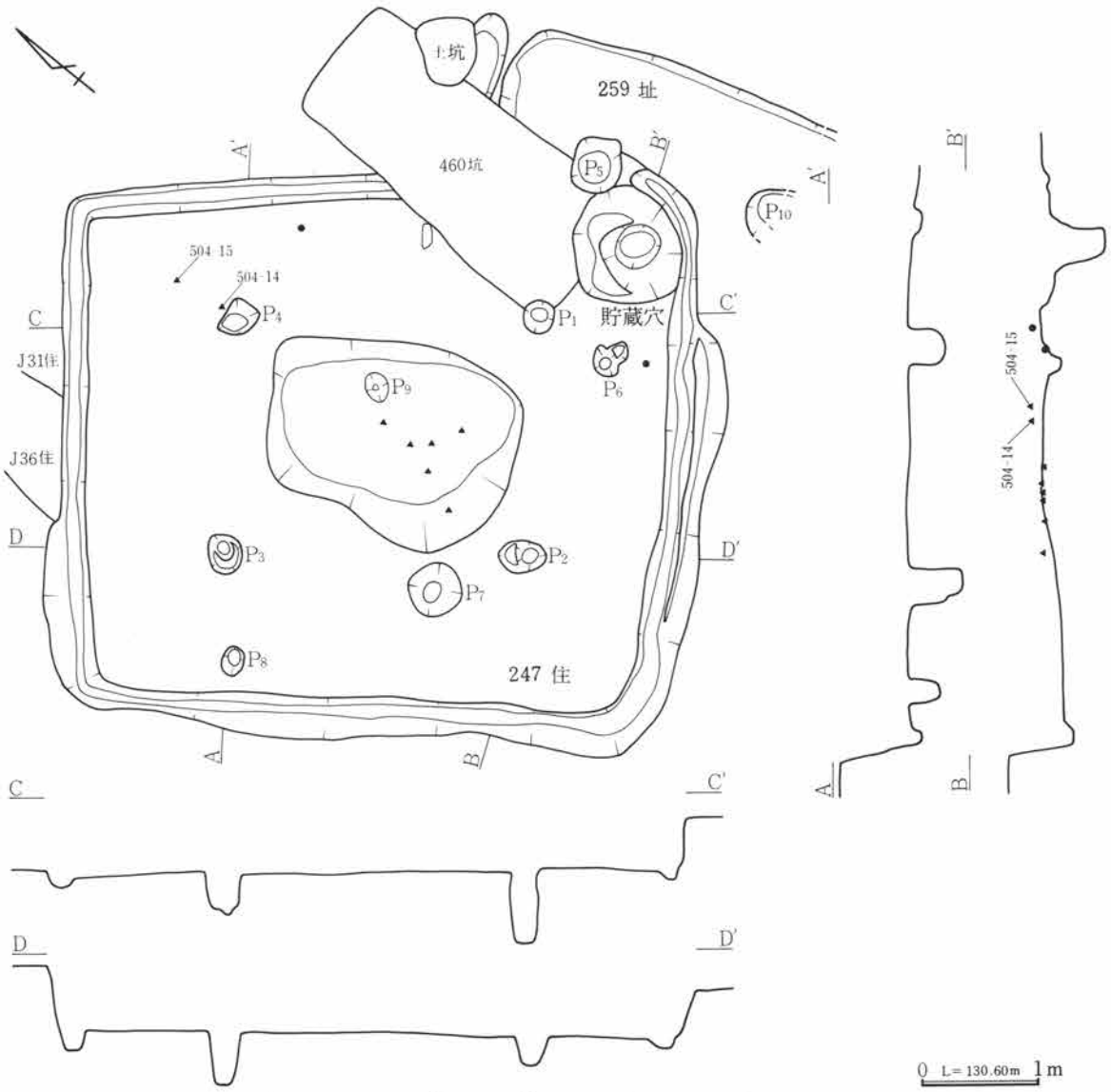
(所見) 第247号住居跡と第259号址は、北半がJ区との境である東西農道下にかかっており、二次の調査によって全体像を明らかにした。両遺構の新旧関係については、遺構の検出状態等から第259号址→第247号住居跡と考えられる。

第247号住居跡はカマド部分を除いてほぼ全体を検出することができた。しかし、東西農道下の確認面が深かったために、北半の壁は残存せず壁溝によって壁の位置が特定できた。床面はVII層土中に直に構築されているが、中央には約225×164cm、深さ約22cmの規模を有する土坑状の掘り方があり、この部分にだけ貼床施されていた。床面の精査では壁溝・柱穴・貯蔵穴及び数本の小ピットを検出した。壁溝は全周しており、下幅約6~20cm、深さ約7~15cmの規模である。柱穴はP₁~P₄(径約24~32cm、深さ約28~64cm、柱穴間距離P₁~P₂間約2.0m、P₂~P₃間約2.6m、P₃~P₄間約1.9m、P₄~P₁間約2.6m)の4本であり、他に検出されている小ピットについては配置に規則性は認められず、柱穴に代わるものとは考えられない。貯蔵穴は東コーナー部に位置しており、円形を呈している。規模は径約97cm、深さ約12cmの浅い掘り込みの中央から、さらに径約35cm、深さ約43cmの円形の掘り込みがなされたものである。カマド部分は後世の第460号土坑によって攪乱されており、わずかに煙道の先端部だけが検出されている。

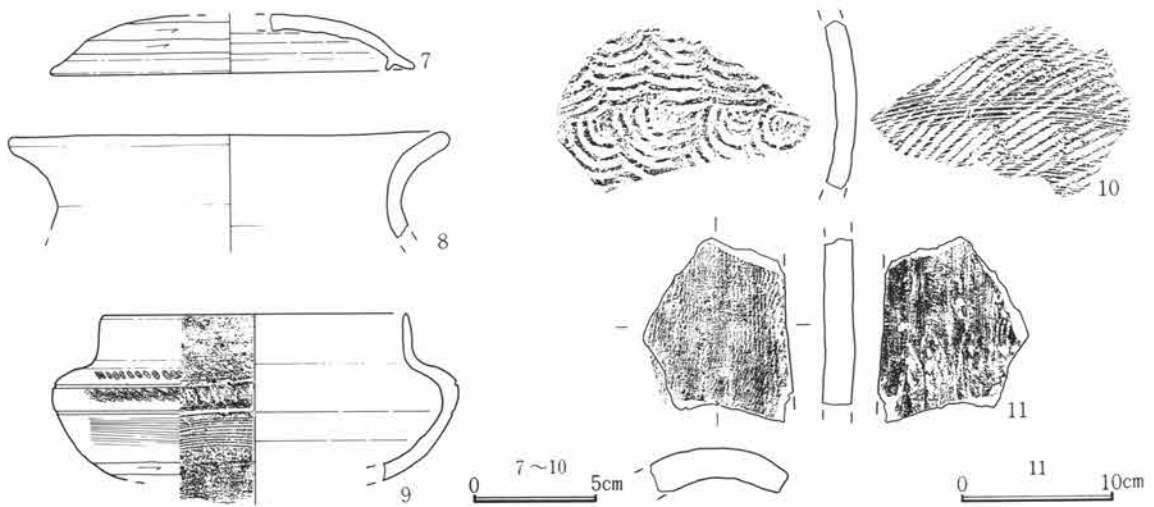
第259号址は整形なコーナー部だけが検出されたもので、住居である可能性もあるが、判然としない。



第501図 I区第247号住居跡出土遺物実測図(1)

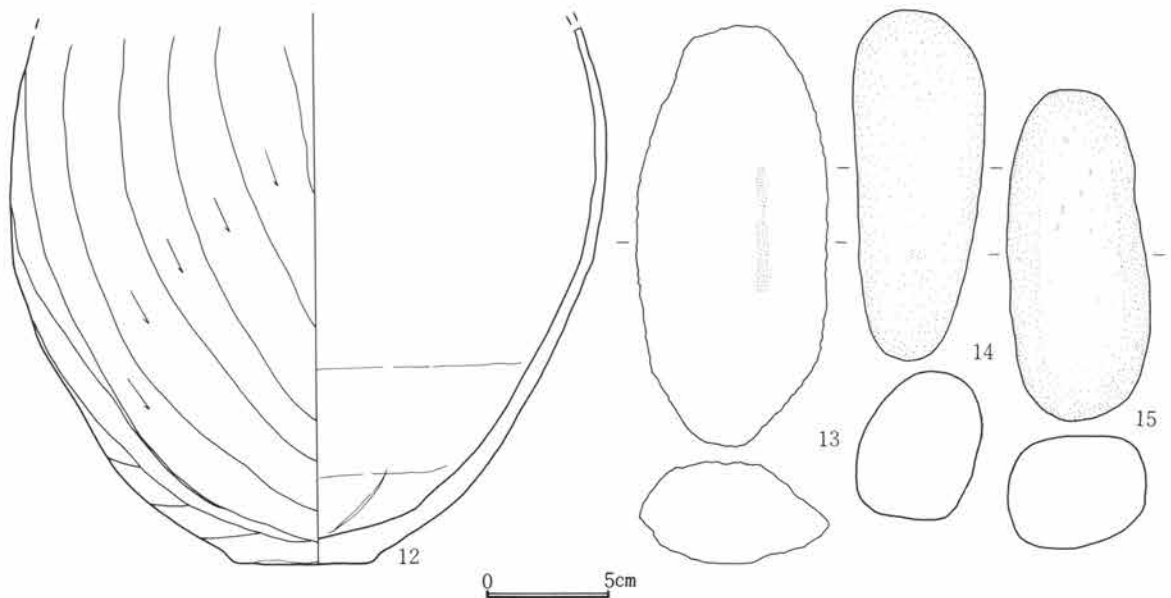


第502図 I区第247号住居跡・第259号址実測図



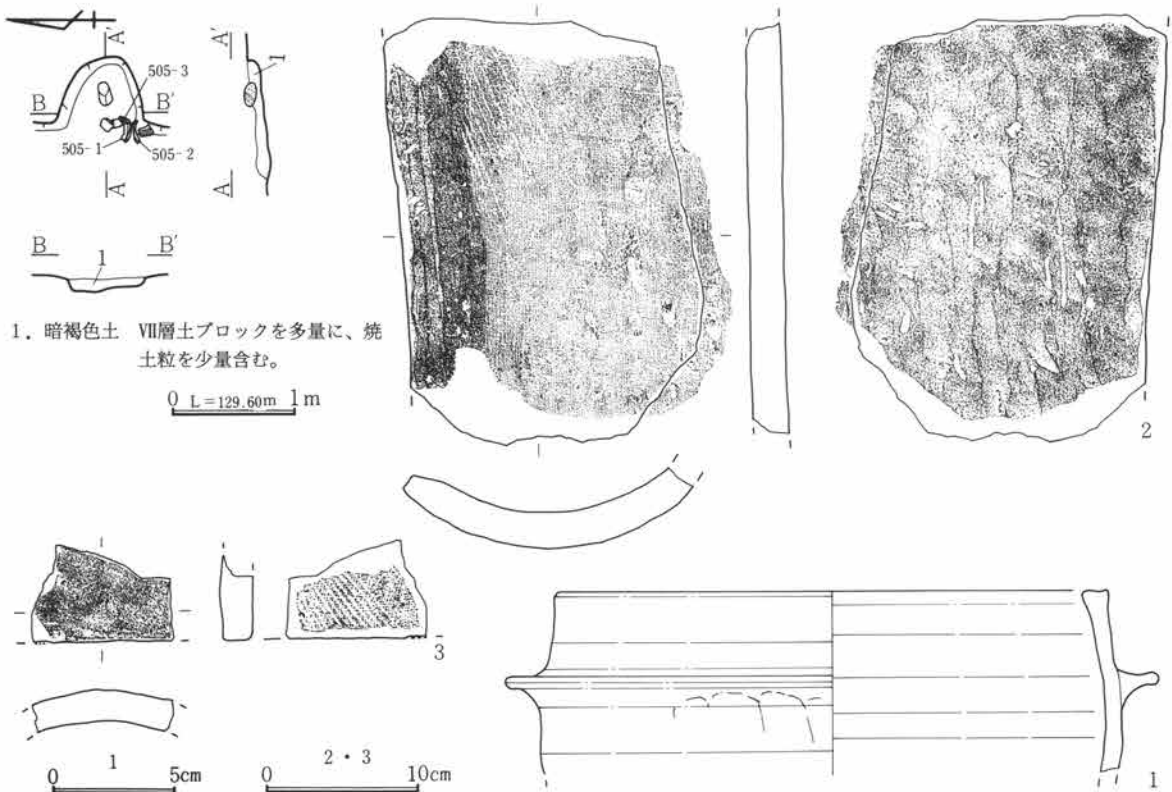
第503図 I区第247号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



第504図 I区第247号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	I区第248号住居跡	位置	23~25-I-60~62グリッド内				
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約10cm程

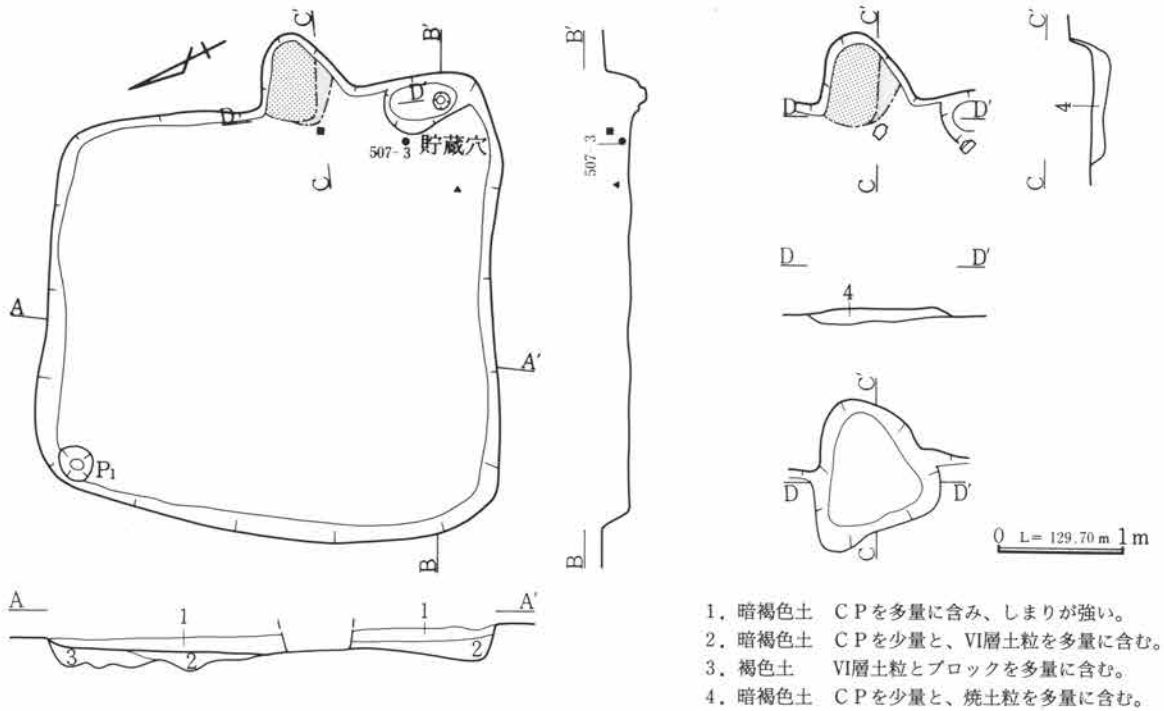


第505図 I区第248号住居跡・出土遺物実測図

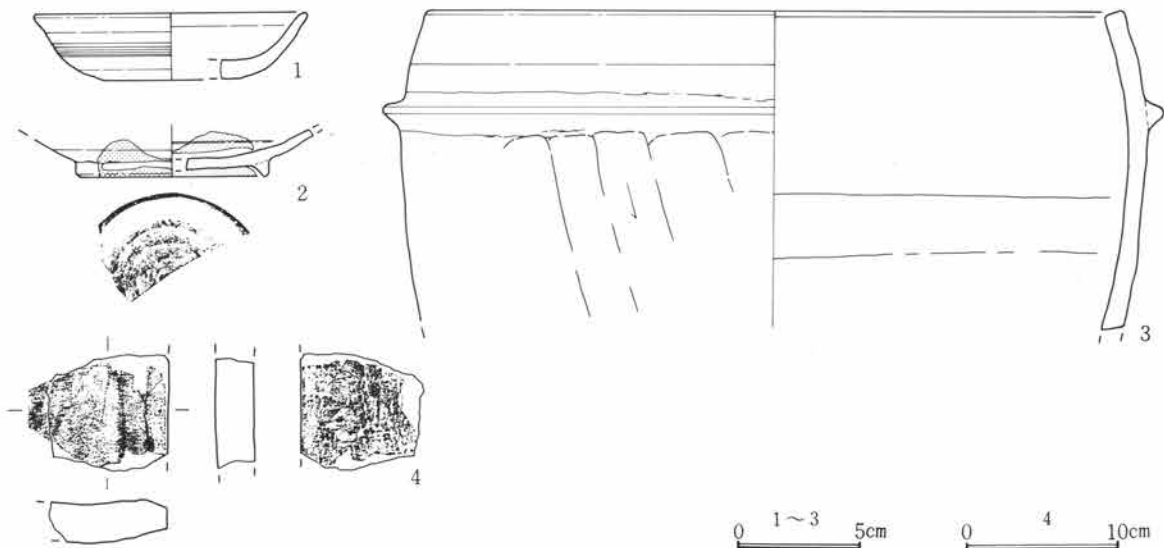
(所見) 当住居跡は第122・176・207号住居跡等と重複しているが、出土遺物の比較等から当住居跡が最も新しい時期の遺構と考えられる。南北農道下の調査で検出した遺構であるため、壁等の外形は全く不明で、カマドのみが第176号住居跡の調査にともなって検出された。このカマドは東壁に設置されていたもので、瓦を

構築材として使用した右袖だけが残存していたが、両袖共に屋内に張り出さない砲弾状の平面形を有するタイプであろう。検出部分の規模は全長約60cm、燃焼部幅約52cmで、主軸方位は東-0°-北である。燃焼部奥中央には礫を使用した支脚が残存していた。

遺構名称	I区第250号住居跡		位置	6～8-I-60～62グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.60m×3.58m	主軸方位	東-30度-南	残存深度	約20cm程



第506図 I区第250号住居跡実測図



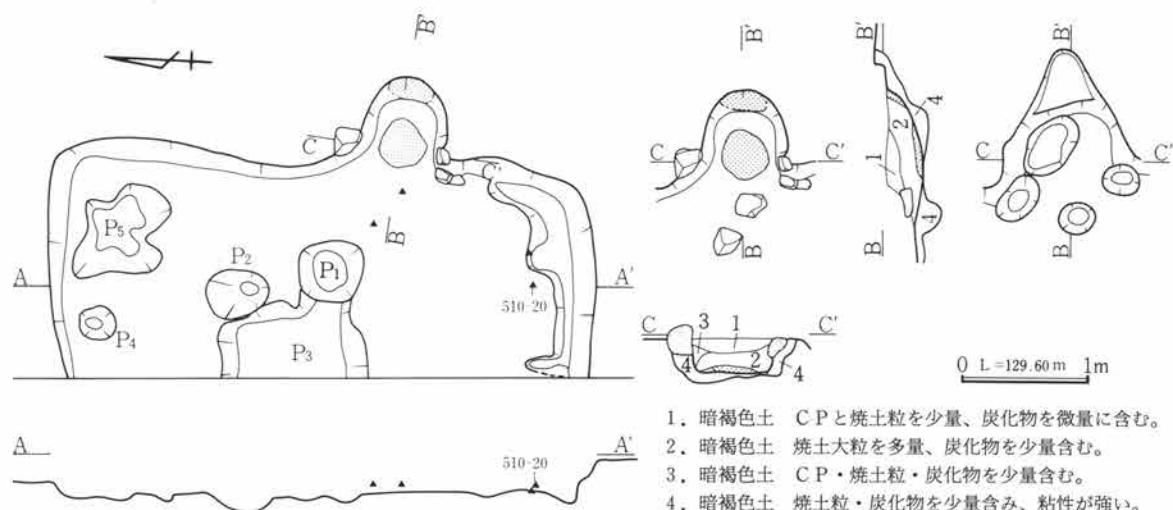
第507図 I区第250号住居跡出土遺物実測図

(所見) 当住居跡は第255号住居跡等と重複しているが、両遺構共に南北農道下の調査で明らかにしたもので、新旧関係は判然としない。当住居跡の平面プランはVI層土中で確認したもので、覆土上層に浅間C軽石を多量に含んでいたため明瞭に確認できたものの、残存状態はあまり良好ではない。南コーナー部は張り出して

第4章 検出された遺構・遺物

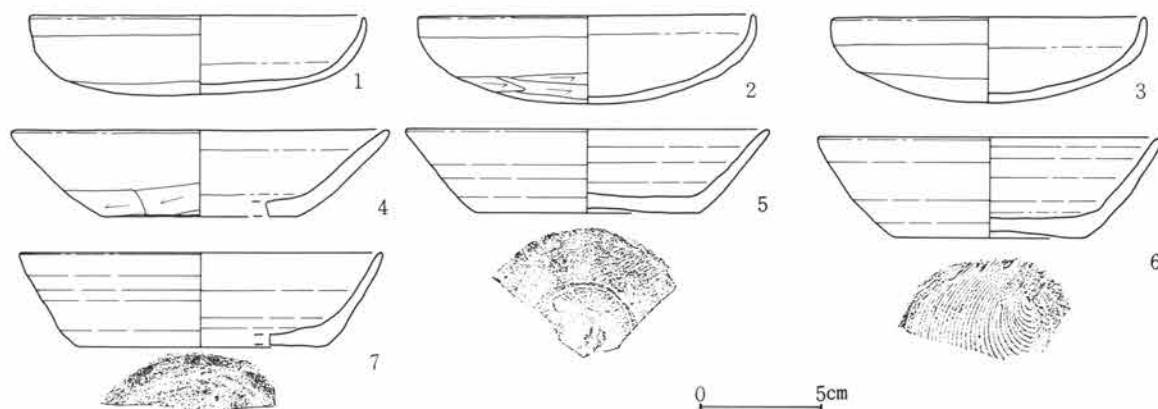
おり台形状に変形している。床面に貼床が施された痕跡はなく、この面の精査によって壁溝・柱穴は検出されず、わずかに貯蔵穴と小ピットを1本検出した。貯蔵穴は南コーナー部に検出した楕円形の掘り込みで、約78×45cm、深さ約6cmの規模であり、南寄りの位置に径12cm程の小ピットが掘られていた。北コーナー部に検出したP₁は、径約25cm、深さ約11cmである。カマドは南東壁の中央やや南寄りに設置されており、検出部分の規模は全長約60cm、燃烧部幅約65cmで、主軸方位は東-5°-南である。

遺構名称	I区第251号住居跡		位置	26~28-I-61~63グリッド内			
平面形態	—	規模	—m×2.35m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約20cm程

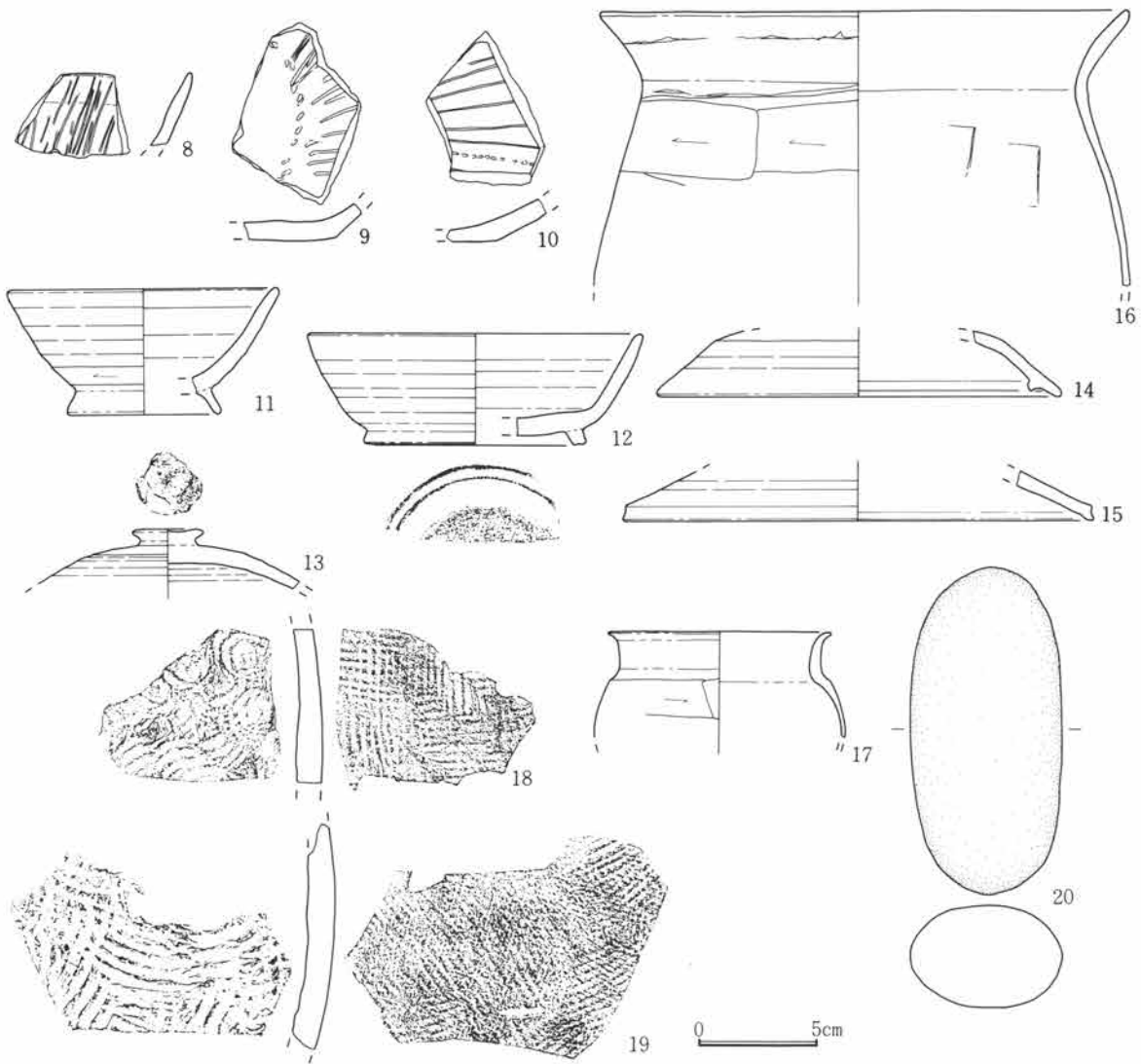


第508図 I区第251号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第117・239号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態や出土遺物の比較等から第117号住居跡→当住居跡→第239号住居跡と考えられる。当住居跡は南北農道下の調査で検出されたもので、西側の調査では確認面が深かったせいか全く検出されていない。また、調査は当初から床下まで下げてしまったため、床面は捉えることはできなかった。この掘り方の調査では南壁に沿って壁溝の痕跡と思われる溝を検出した他、ピットを5本検出した。P₁ (径約50cm、深さ約14cm)・P₂ (径約35cm、深さ約10cm)・P₄ (径約25cm、深さ約8cm)の3本は整形であるが、柱穴とは考えられない。カマドは東壁の南寄りに設置されており掘り方で確認した凸字形平面が本来の形であろう。検出部分の規模は全長約110cm、燃烧部幅約60cm、煙道長約41cm、下幅約42cmであり、主軸方位は東-0°-北である。

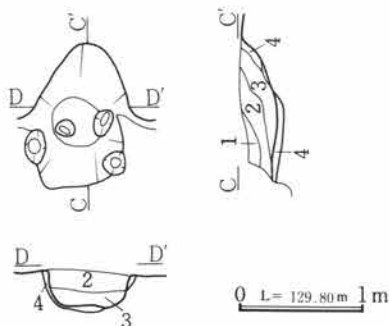


第509図 I区第251号住居跡出土遺物実測図(1)



第510図 I区第251号住居跡出土遺物実測図(2)

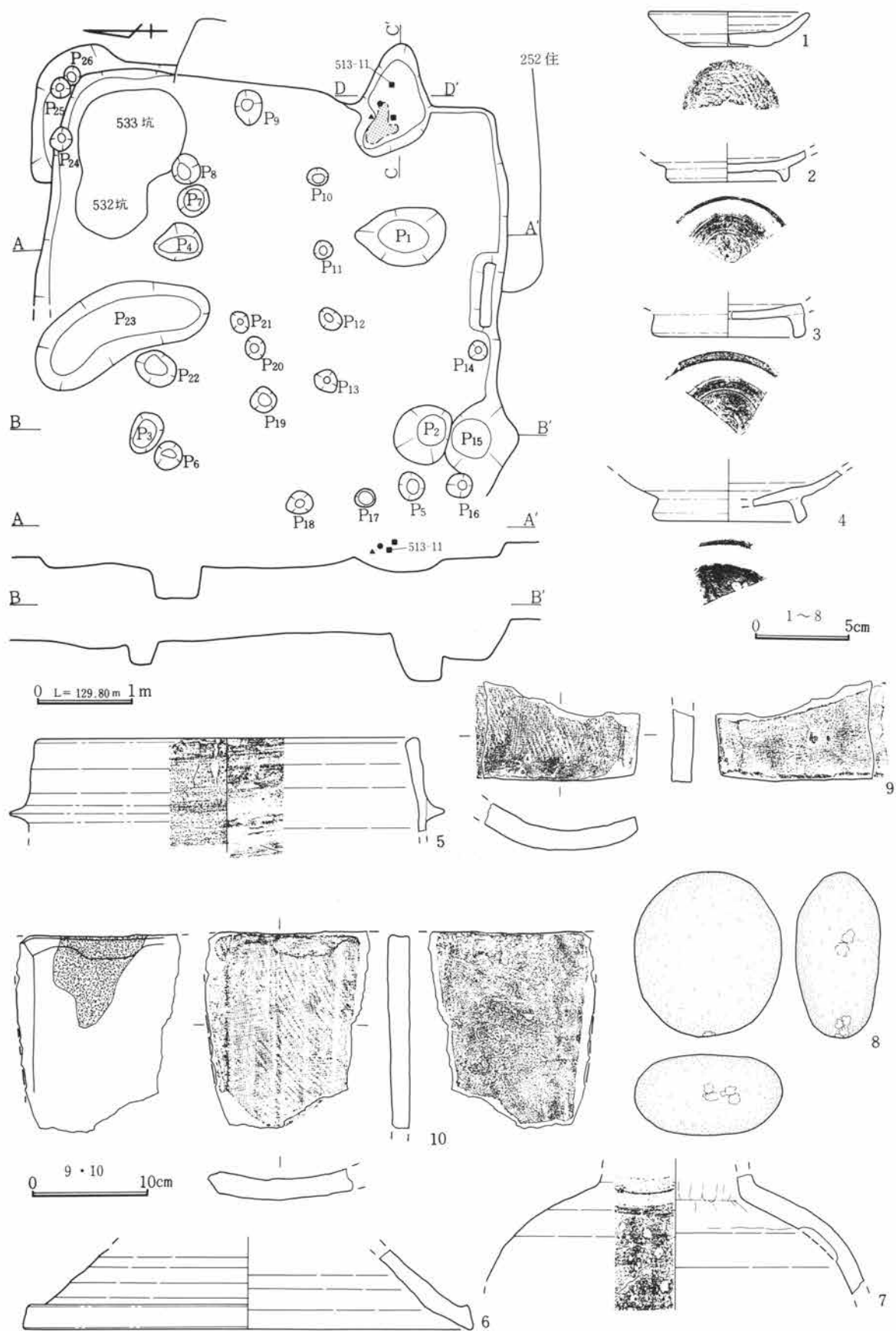
遺構名称	I区第253号住居跡	位置	2~4-I-61~63グリッド内				
平面形態	—	規模	—m×4.81m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約15cm程



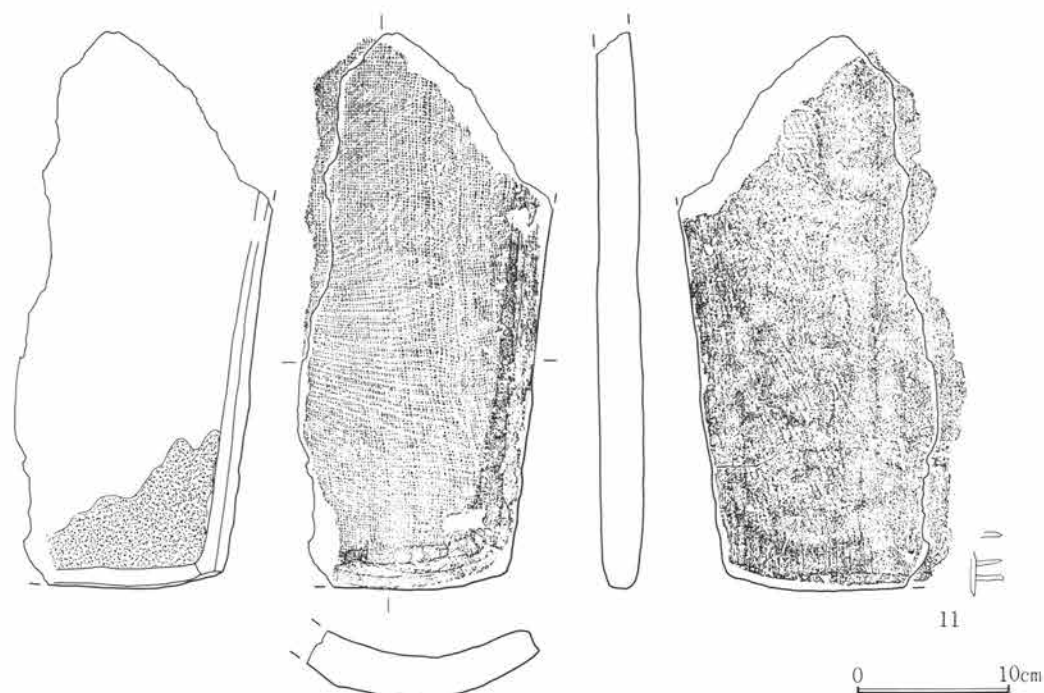
1. 暗褐色土 CPを少量含む。
2. 暗褐色土 焼土粒を多量に、灰を少量含む。
3. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。
4. 暗褐色土 CPを多量に、焼土粒を微量に含む。

(所見) 当住居跡は第254号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態から当住居跡→第254号住居跡と考えられる。南北農道下でカマドを含め痕跡的に検出した遺構であり、西側の調査では確認面の違いからか確認することができなかった。調査は当初から掘り方段階まで下げてしまったため、床面を捉えることはできなかった。掘り方面には多数の小ピットを検出したが、柱穴と考えられるものはなかった。貯蔵穴は南西コーナー部に当たると思われる位置に検出したP₁(径約62cm、深さ約49cm)であろう。カマドは東壁の南寄りに設置されており、袖・支脚等の残存はみられなかった。検出部分の規模は全長約115cm、燃焼

第511図 I区第253号住居跡実測図(1) 部幅約75cmで、主軸方位は東-0°-北である。

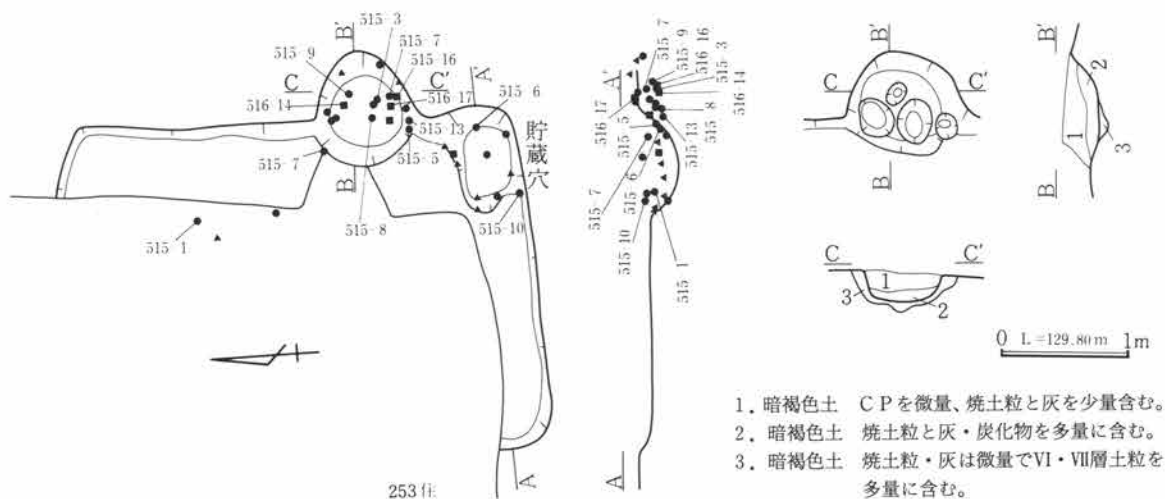


第512図 I区第253号住居跡(2)・出土遺物実測図(1)



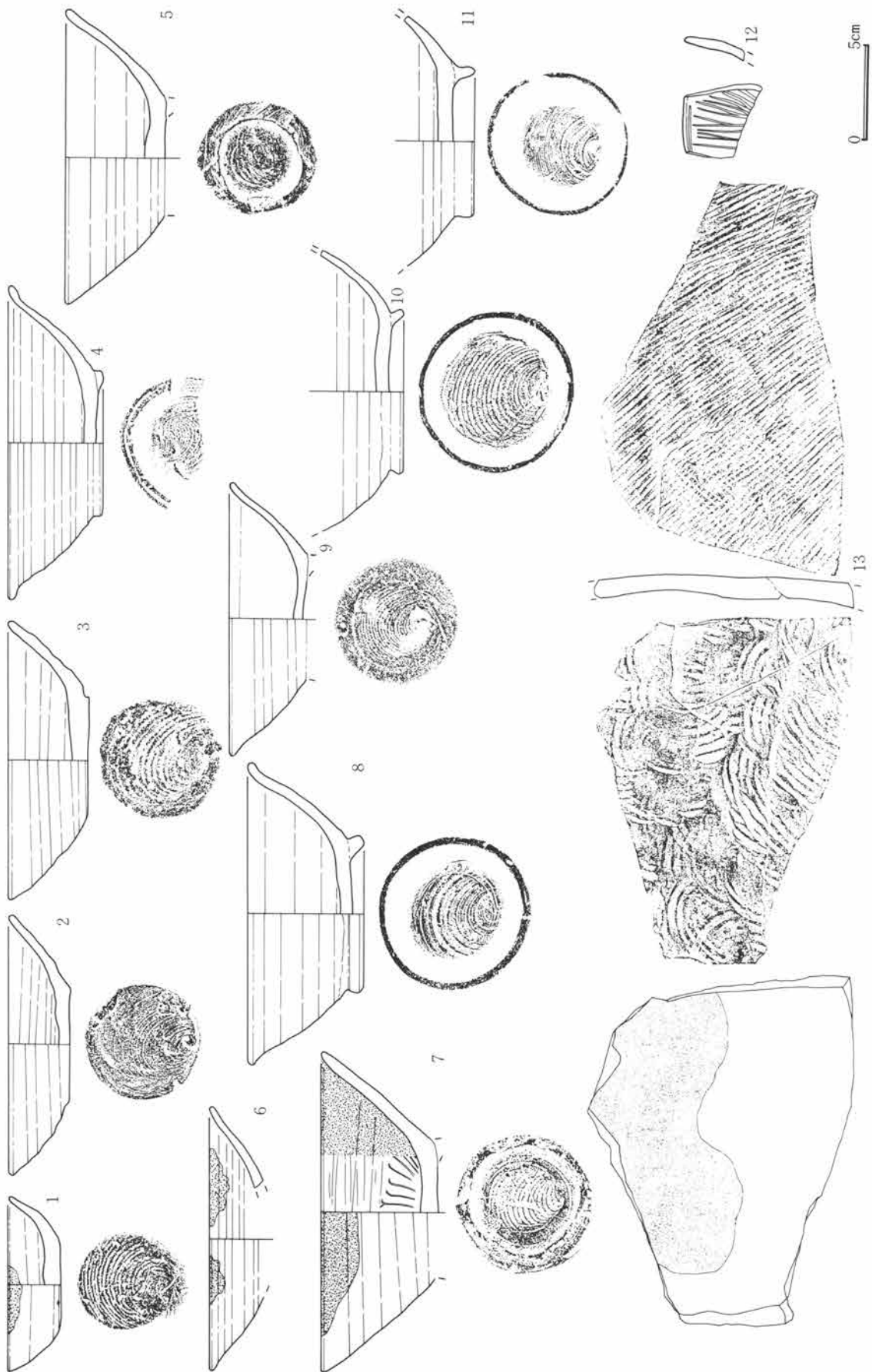
第 513 図 I 区第 253 号住居跡出土遺物実測図 (2)

遺構名称	I 区第254号住居跡	位置	2・3-I-60~62グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.71m×3.70m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約10cm程



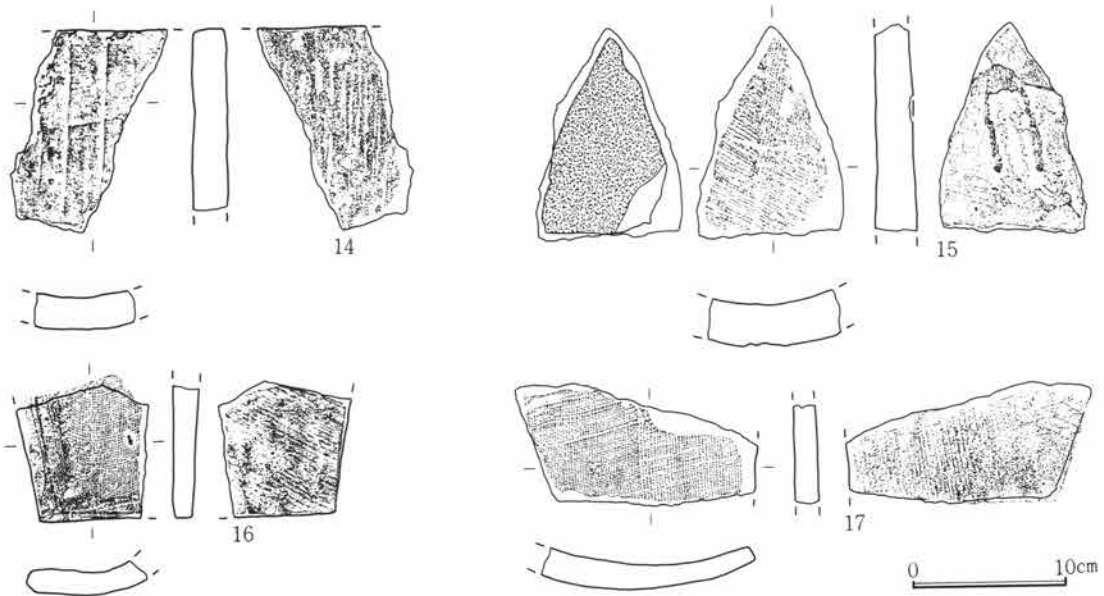
第 514 図 I 区第 254 号住居跡実測図

(所見) 当住居跡は第253号住居跡と重複しているが、新旧関係は前述の通りである。確認は南北農道下であり、残存状態は第253号住居跡との重複で大半が削平されており不良である。床面には貼床は施されており、VII層土を直に床面としていた。残存した床面の精査では壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴だけが検出された。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており、楕円形を呈している。規模は約84×50cm、深さ約24cmで、遺物出土が顕著であった。カマドは東壁の南寄りに設置されており、袖構築材等の残存はみられなかったが、両袖の張り出さない半円状の平面形を有するタイプと考えられる。燃烧部は若干掘り窪められており、この部分も含めて計測すると、全長約90cm、燃烧部幅約80cmで、主軸方位は東-0°-北である。



第515図 I区第254号住居跡出土遺物実測図(1)

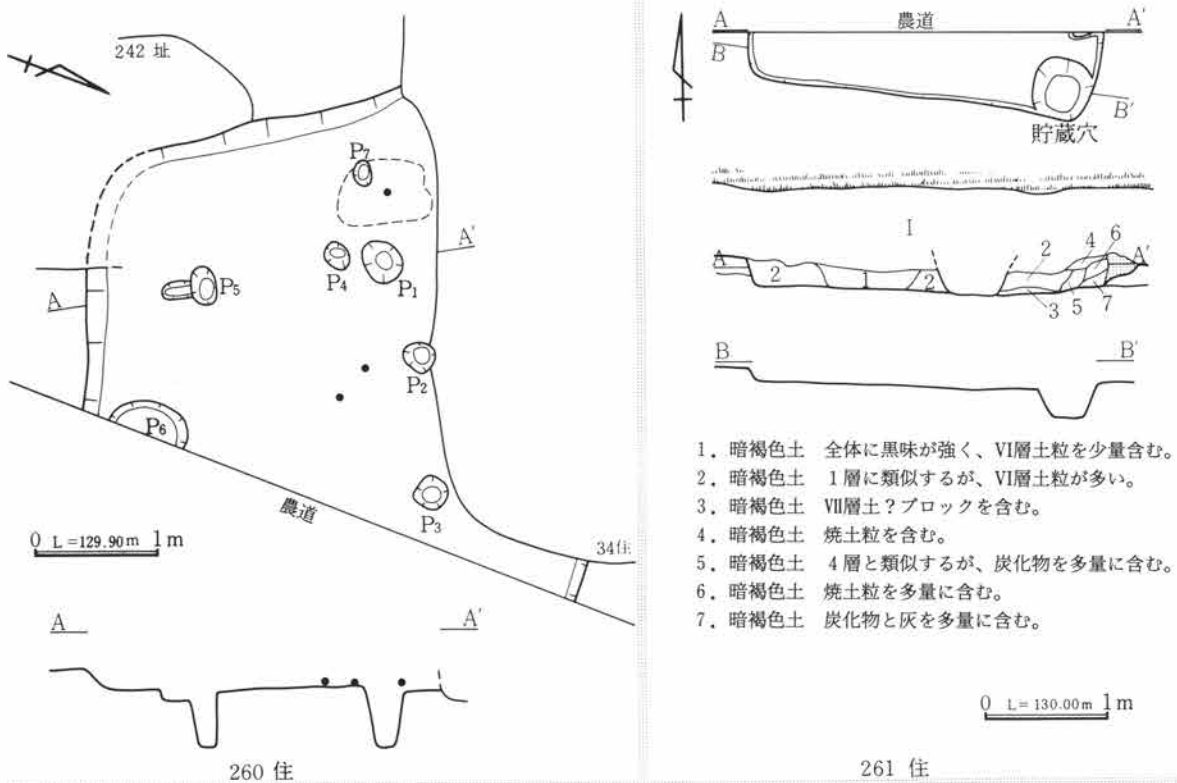
第2節 検出された遺構・遺物



第516図 I区第254号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	I区第260号住居跡	位置	34~36-I-60・61グリッド内		
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	—
		残存深度	約15cm程		

遺構名称	I区第261号住居跡	位置	49-I-64・65グリッド内		
平面形態	—	規模	2.80m× —m	主軸方位	東-4度-南
		残存深度	約10cm程		



第517図 I区第260・261号住居跡実測図

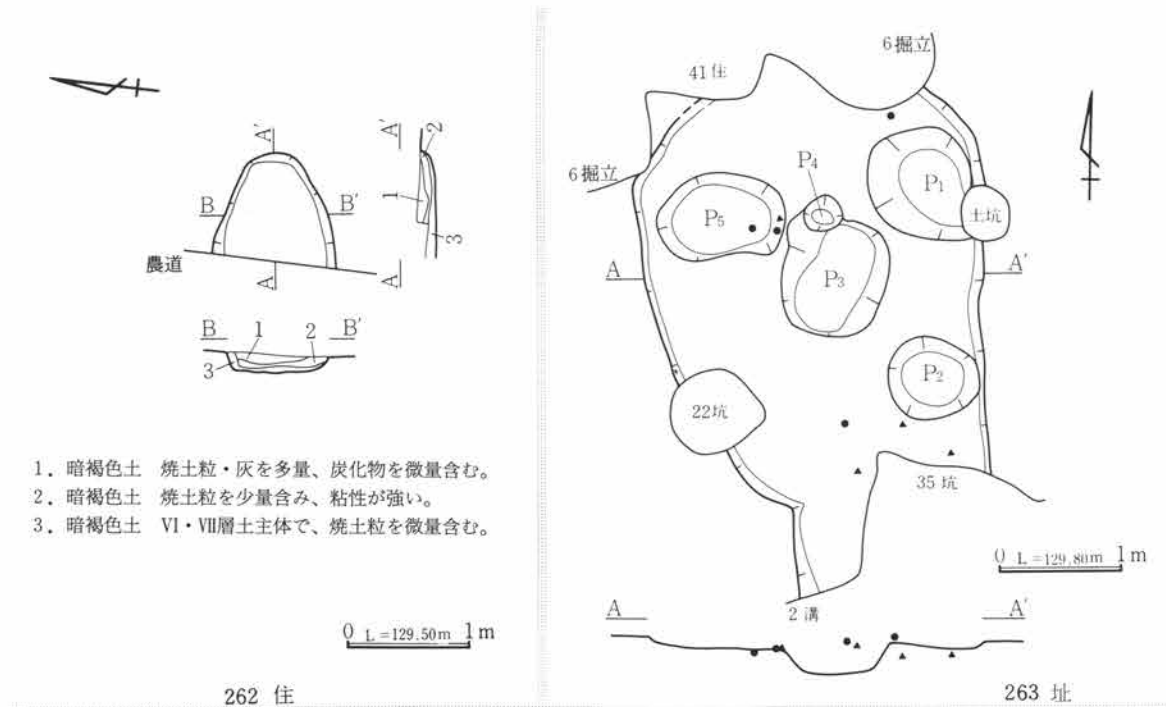
第4章 検出された遺構・遺物

(所見) 第260号住居跡は南北農道下の調査で検出したもので、第24・34号住居跡及び第28号溝状遺構と重複しているが、遺構の検出状態等から当住居跡→第24・34号住居跡であるのはほぼ確実であるが、第28号溝状遺構との関係は判然としない。確認されたのは南コーナー部を含む南西及び南東壁の一部である。床面の精査では壁溝は検出されず、検出された小ピットについても、柱穴の可能性は弱い。南西壁に近い位置から灰面が検出されており、付近にカマドの痕跡は確認されていないが、南西壁に設置されていた可能性もある。

第261号住居跡はI区の北端に南側の一部を検出したものである。J区とを区画する東西農道下にその主体部があるはずであるが、農道下からはカマドを含めて検出することはできなかった。壁の残存は浅くあまり良好な状態ではない。床面はVII層土中に直に構築されており、この面の精査で壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東コーナー部に位置しており、円形を呈している。規模は径約45cm、深さ約26cmである。この貯蔵穴北側の土層断面には焼土等を顕著に含む層があり、この位置にカマドがあったものと思われる。

遺構名称	I区第262号住居跡	位置	22・23-I-62グリッド内				
平面形態	—	規模	—m× —m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約8cm程

遺構名称	I区第263号址	位置	27~29-I-65・66グリッド内				
平面形態	不整形	規模	—m×2.63m	主軸方位	北-14度-西	残存深度	約7cm程

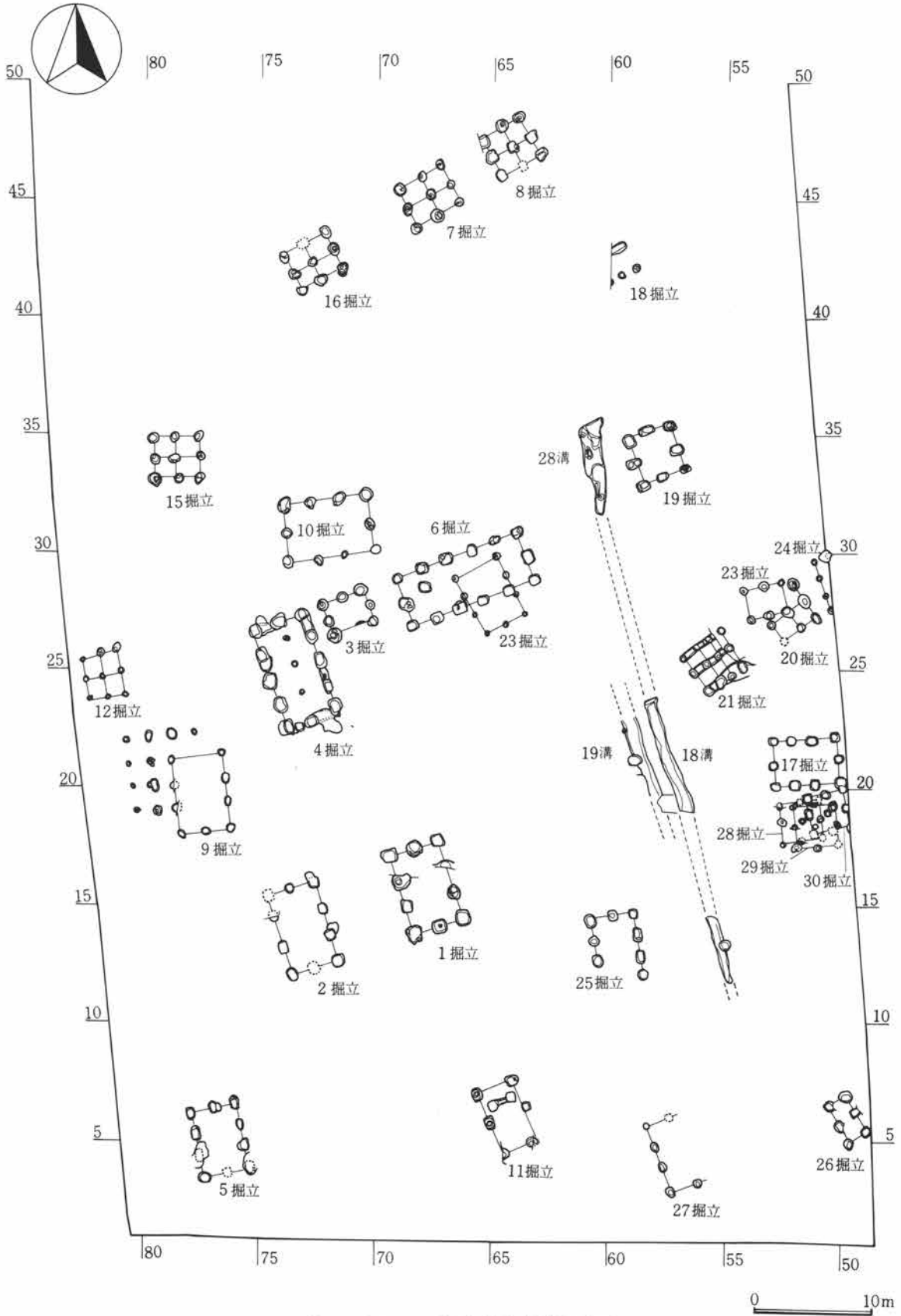


第518図 I区第262号住居跡・第263号址実測図

(所見) 第262号住居跡は、南北農道下の調査でカマドの先端部のみを検出したものである。当住居跡の主体部は西側の調査では痕跡も検出されておらず、当初は北側に位置している第123号住居跡のカマドとも考えたが、結果的には確認面の違いによって西側の調査では検出できなかったものと判断した。カマドの全体構造は不明であるが、形態的には袖の張り出さない砲弾状の平面形を有するタイプであろう。

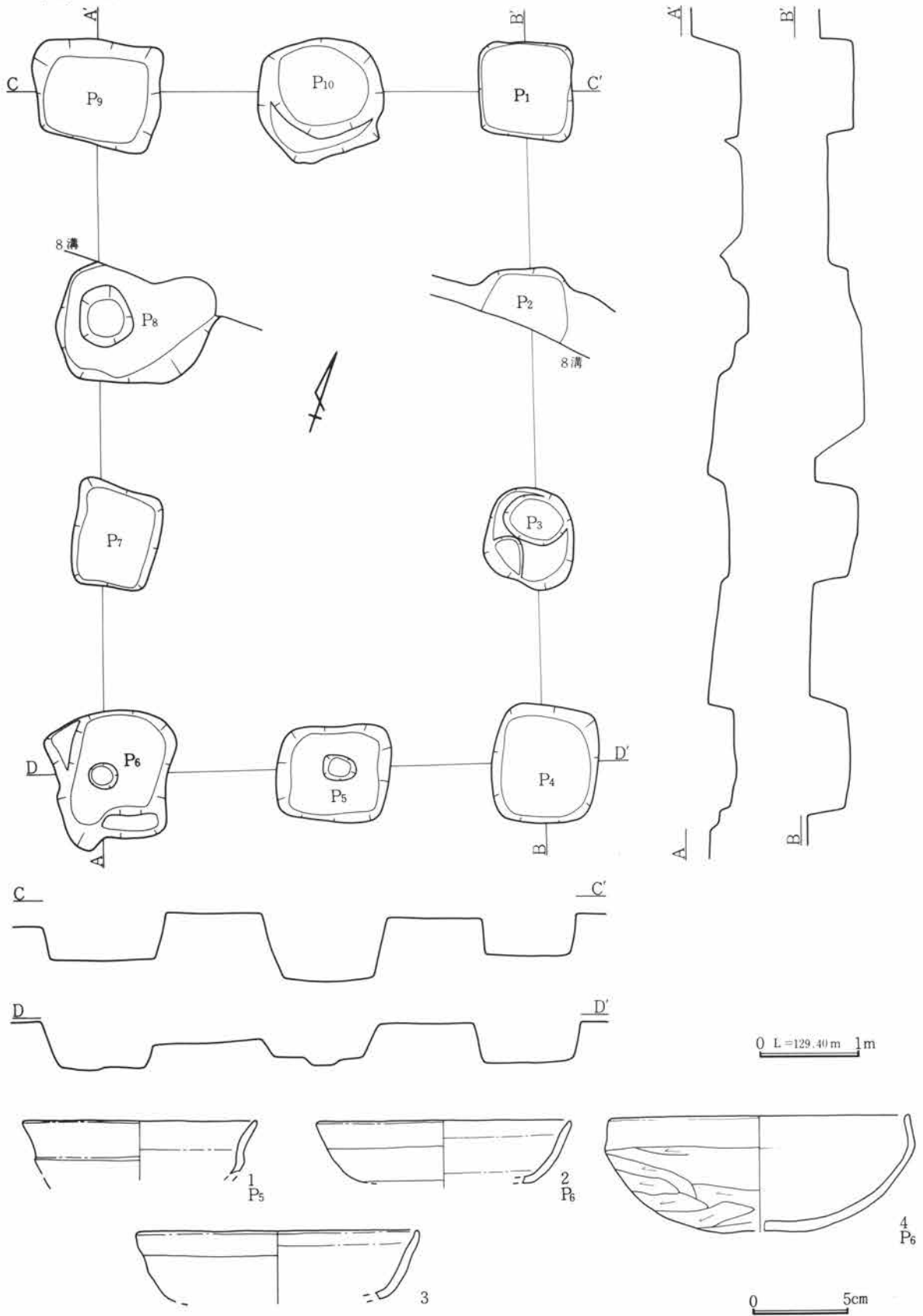
第263号址は第42・50・101号住居跡等と重複しているが、遺構の残存状態等からは当遺構が古い段階とみられるが、遺物の比較もできないため判然としない。底面は平坦で4ヵ所に掘り込みが検出された。

2. 掘立柱建物跡

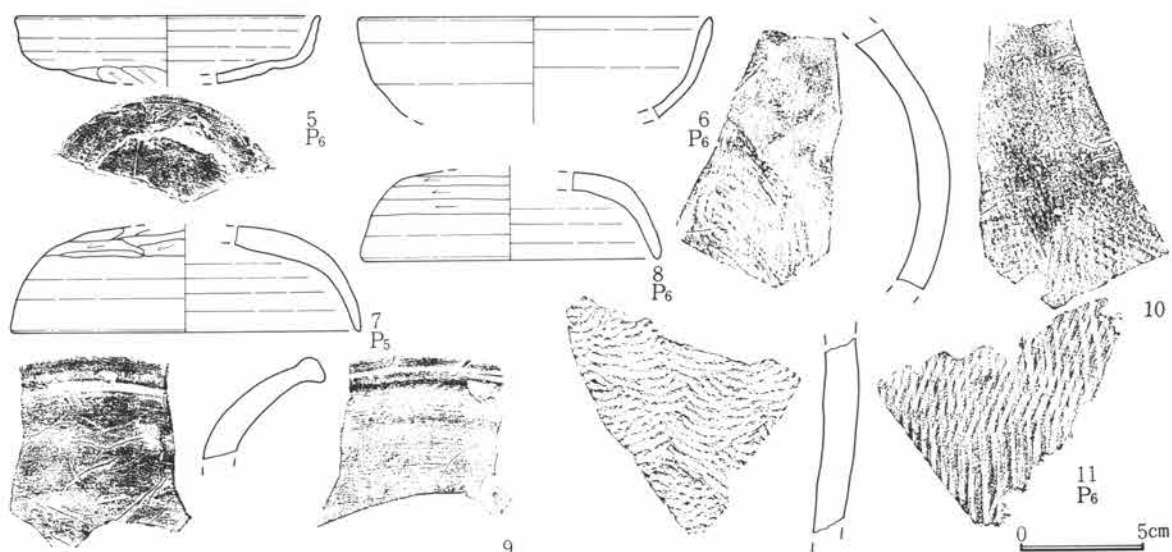


第 519 図 I 区掘立柱建物跡配置図

I区第1号掘立柱建物跡



第520図 I区第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

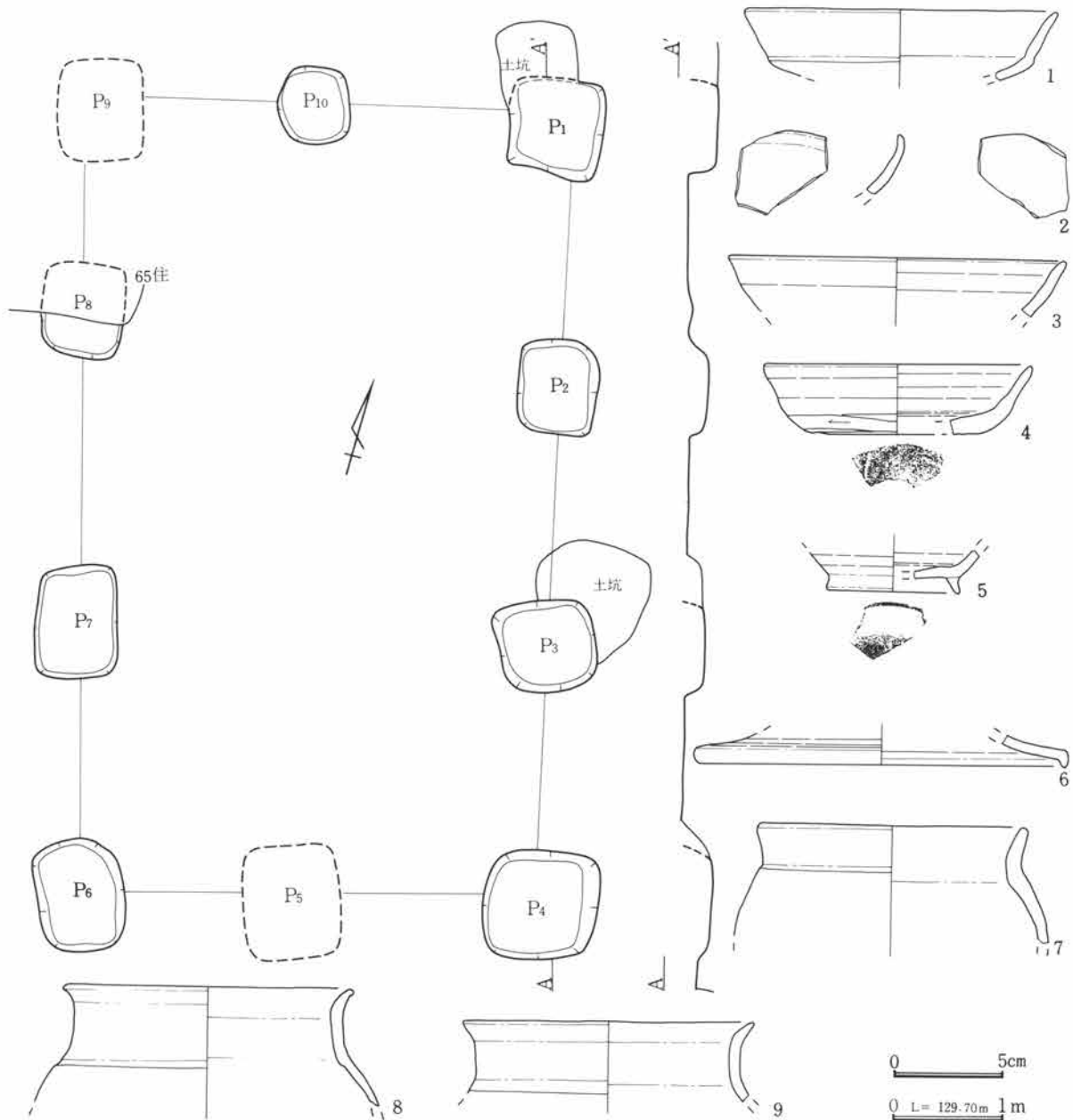


第521図 I区第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

(所見) 当掘立柱建物跡は第89号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態及び残存状態等から第89号住居跡→当掘立柱建物跡と考えられる。また、検出した柱穴の中で P_2 と P_8 の一部は、中世以降の第6号溝状遺構によって削られているが、当掘立柱建物跡に伴うと考えられる柱穴はすべて検出されている。柱穴は総数10本であり、3間×2間の建物と考えられる。建物の規模は、東西(梁)方向約15尺(4.42m)、南北(桁)方向約24尺(7.08m)で、これをほぼ8尺ずつの等間割りとしている。主軸方位は、桁の方向を基準として計測すると北 -18° 西である。柱穴の形状は、ほぼ長方形に箱状に掘られたものが大半をしめており、 P_3 ・ P_5 ・ P_6 ・ P_8 の4本にはほぼ中央に柱痕と考えられる円形の小ピットが確認された。各柱穴の規模は、 P_1 (約98×96cm、深さ約35cm)・ P_2 (深さ約20cm)・ P_3 (約102×92cm、深さ約42cm)・ P_4 (約121×106cm、深さ約40cm)・ P_5 (約115×95cm、深さ約35cm)・ P_6 (約128×106cm、深さ約46cm)・ P_7 (約107×90cm、深さ約20cm)・ P_8 (約120×142cm、深さ約15cm)・ P_9 (約110×132cm、深さ約50cm)・ P_{10} (約129×119cm、深さ約64cm)である。柱穴内から出土した遺物はごくわずかであるが、第520図2・3の土師器片はその他の遺物よりも明らかに新しい時期のものであり、当掘立柱建物跡の時期を示している可能性がある。

I区第2号掘立柱建物跡

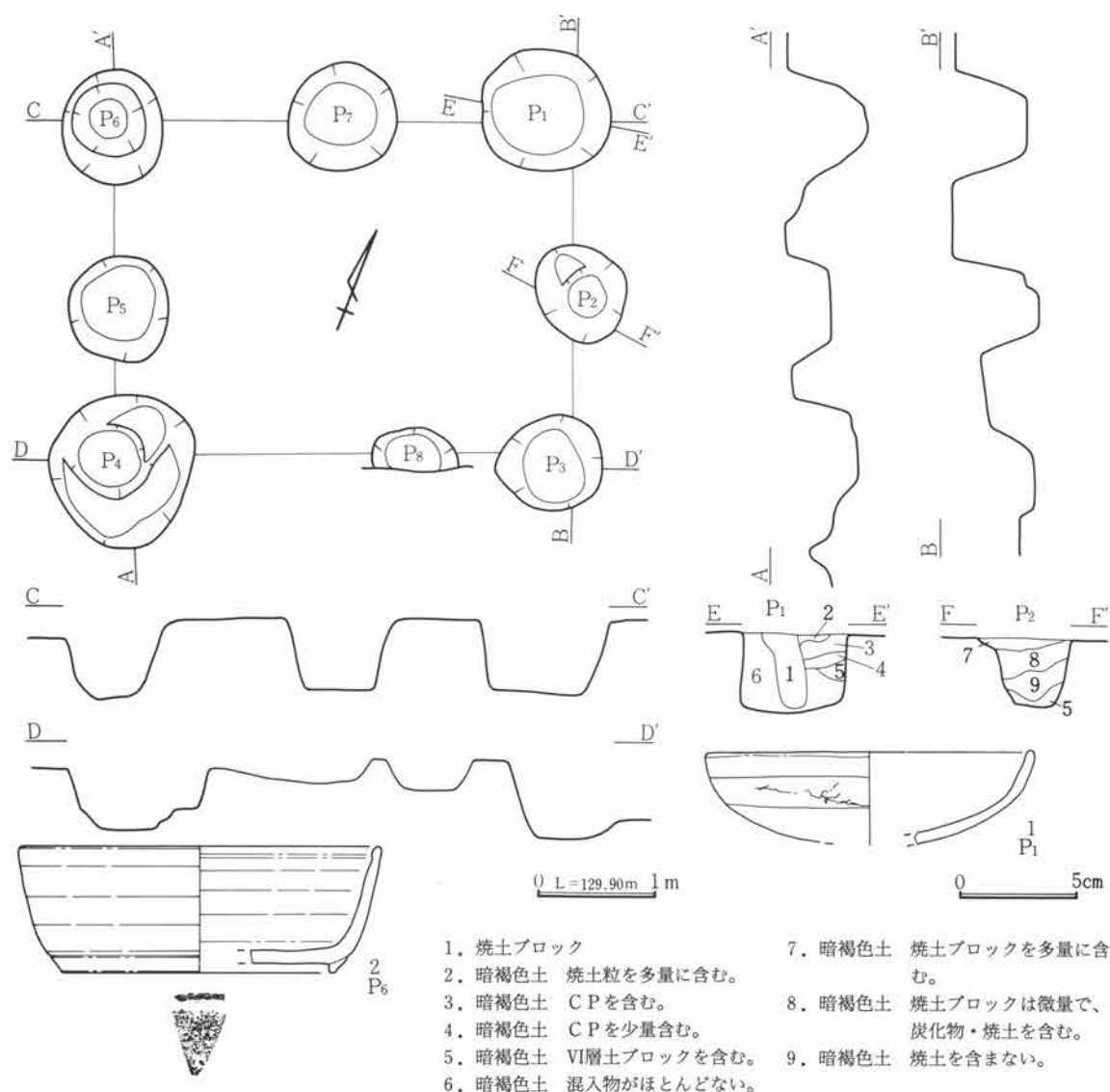
(所見) 当掘立柱建物跡は第65・104号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第104号住居跡→当掘立柱建物跡→第65号住居跡と考えられる。当掘立柱建物跡を検出した場所からは柱穴と思われるような方形の大型ピットを12本確認しており、当初は最大で3間×4間の総柱の建物を想定したが、図面上で配置等の検討をした結果、未検出の柱穴も含めて3間×2間の建物とするのが妥当と判断した。このことから当掘立柱建物跡には他の掘立柱建物跡が重複している可能性があるが、柱穴の組み合わせが判然としない。建物の規模は、東西(梁)方向約14尺(4.10m)、南北(桁)方向約24尺(7.00m)で、東西方向は7尺間割り、南北方向は8尺間割りしている。主軸方位は、桁の方向を基準として計測すると北 -16° 西である。柱穴の形状は正方形から長方形を呈しており、全体に確認面からの残存は不良である。各柱穴の規模は P_1 (約88×73cm、深さ約25cm)・ P_2 (約85×72cm、深さ約18cm)・ P_3 (約83×86cm、深さ約20cm)・ P_4 (約97×105cm、深さ約27cm)・ P_5 (約101×76cm、深さ約42cm)・ P_7 (約100×73cm、深さ約16cm)・ P_8 (約71cm、深さ約19cm)・ P_{10} (約64×70cm、深さ約16cm)である。柱穴内の出土遺物は比較的少量であり、一時期を示すような構成ではないが、第522図3～6等の土器に近い時期が想定できる。



第522図 I区第2号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

I区第3号掘立柱建物跡

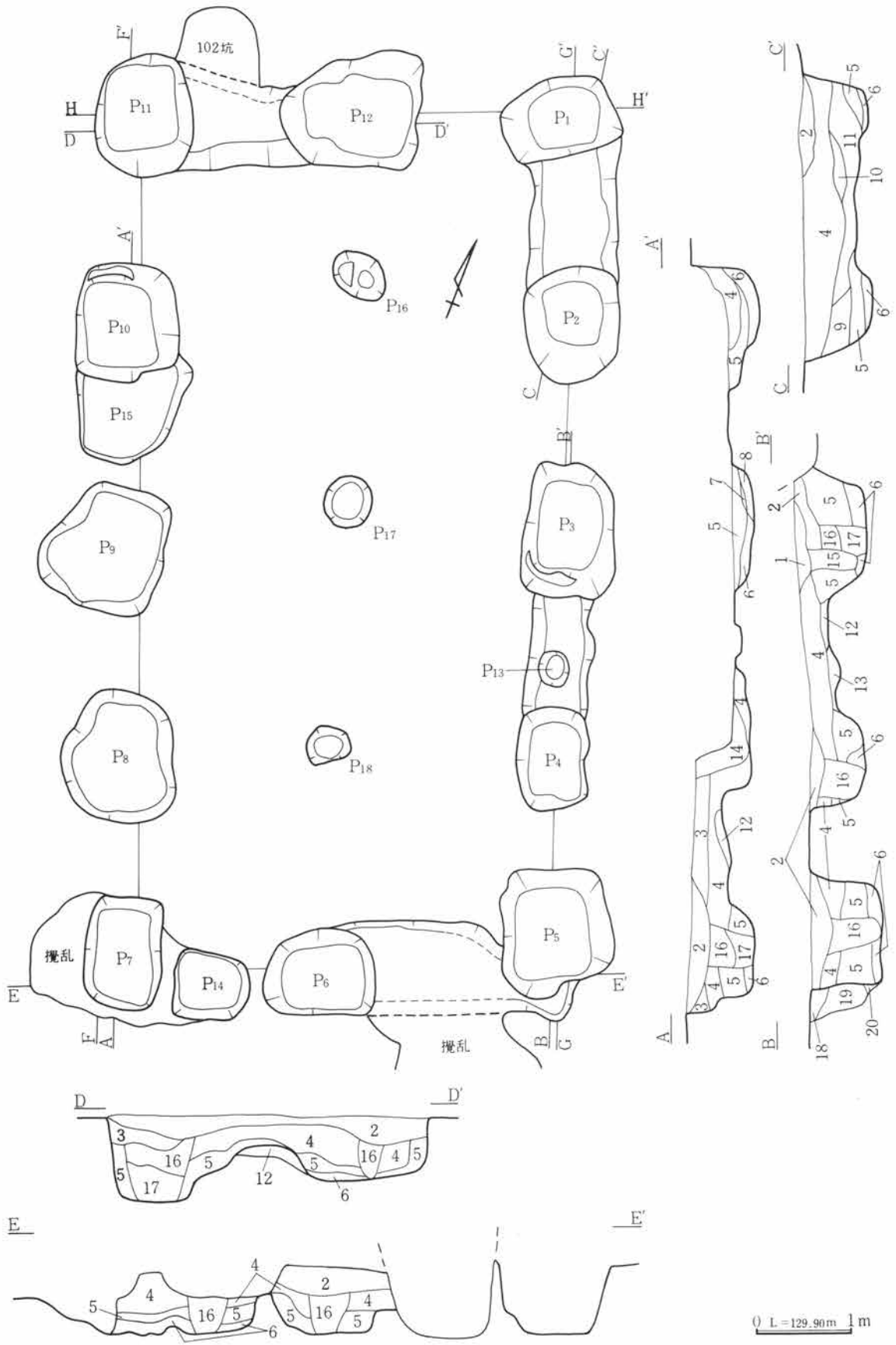
(所見) 当掘立柱建物跡は第154・155号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第154・155号住居跡→当掘立柱建物跡と考えられる。また、当掘立柱建物跡の位置する場所は中世以降の溝状遺構や土坑の集中によって削平を受けており、遺構の残存状態はあまり良好ではない。このような状況の中で検出した柱穴は7本であり、基本的には2間×2間の建物を想定した。P₃とP₄の間には他の柱穴と同規模のピットは検出されていないが、P₃から約4尺(1.20m)の位置に小規模なピットの痕跡が認められた。建物の規模は、東西(桁)方向約12尺(3.54m)とし、6尺(1.77m)2間としている。南北(梁)方向は、約10尺(2.95m)を5尺(1.48m)の2間割りとしている。主軸方位は、北-21°-西である。各柱穴の規模は、P₁(径約105cm、深さ約64cm)・P₂(径約72cm、深さ約70cm)・P₃(径約83cm、深さ約35cm)・P₄(径約120cm、深さ約51cm)・P₅(径約87cm、深さ約34cm)・P₆(径約92cm、深さ約65cm)・P₇(径約88cm、深さ約60cm)である。



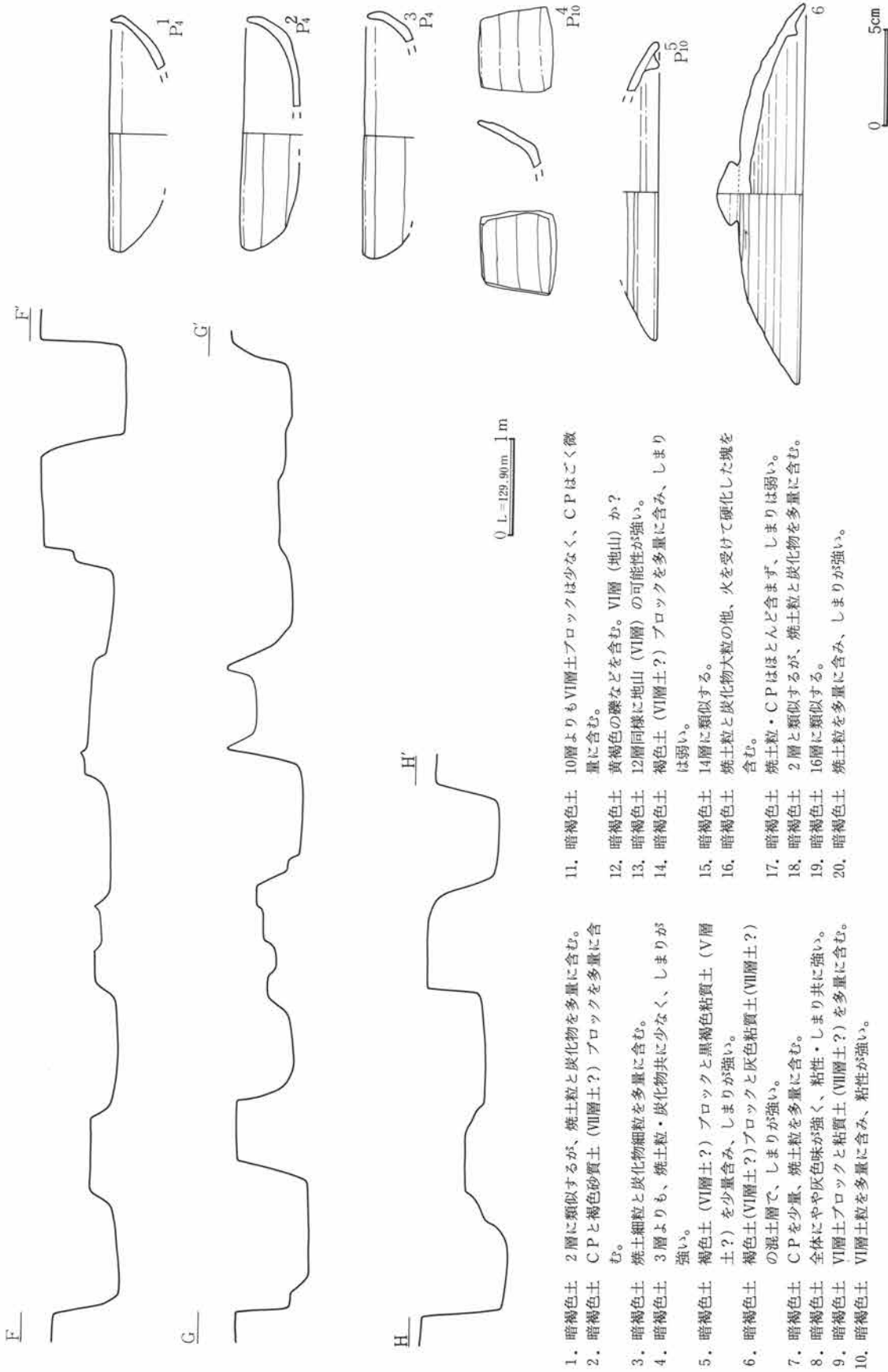
第523図 I区第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

I区第4号掘立柱建物跡

(所見) 当掘立柱建物跡は第94号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当掘立柱建物跡→第94号住居跡と考えられる。当掘立柱建物跡は4間×2間の総柱建物で、南北に棟をもつ細長い建物と推定できる。遺構全般に乱が多いが、各柱穴のピットは確認することができ、柱穴断面には柱痕と思われる土層が良く残り掘立柱の状況を十分に伝えている。柱痕の径は平均30cm程度の直径をもつものが多い。また、側筋の柱穴間には布掘状遺構が確認された。この布掘状遺構は当遺跡においては検出例が少なく、当掘立柱建物跡の他第21号掘立柱建物跡にのみ確認されている。総柱建物であるため床をもつ建物と考えられるが、柱穴形状をみると側筋は全般的に隅丸方形の平面を有する大規模な柱穴であるのに対し、中通りの柱穴は円形の小規模なものであることから、他の総柱建物の状況と比較しても、床束としてよりも棟持柱的な意味が強いように思われる。つまり、土間のまま利用された建物と推定するのが適当と思われる。規模は東西(梁)方向約15尺(4.43m)とし、約7.5尺(2.21m)の2間、南北(桁)方向は約28尺(8.26m)で、1間を約7尺(2.07m)とする4間割りとしている。主軸方位は、桁の方向を基準とすると北 -21° 西である。中通りの柱穴規模はP₁₆(径約42cm、深さ約31cm)・P₁₇(径約49cm、深さ約28cm)・P₁₈(径約44cm、深さ約53cm)である。



第524図 I区第4号掘立柱建物跡実測図

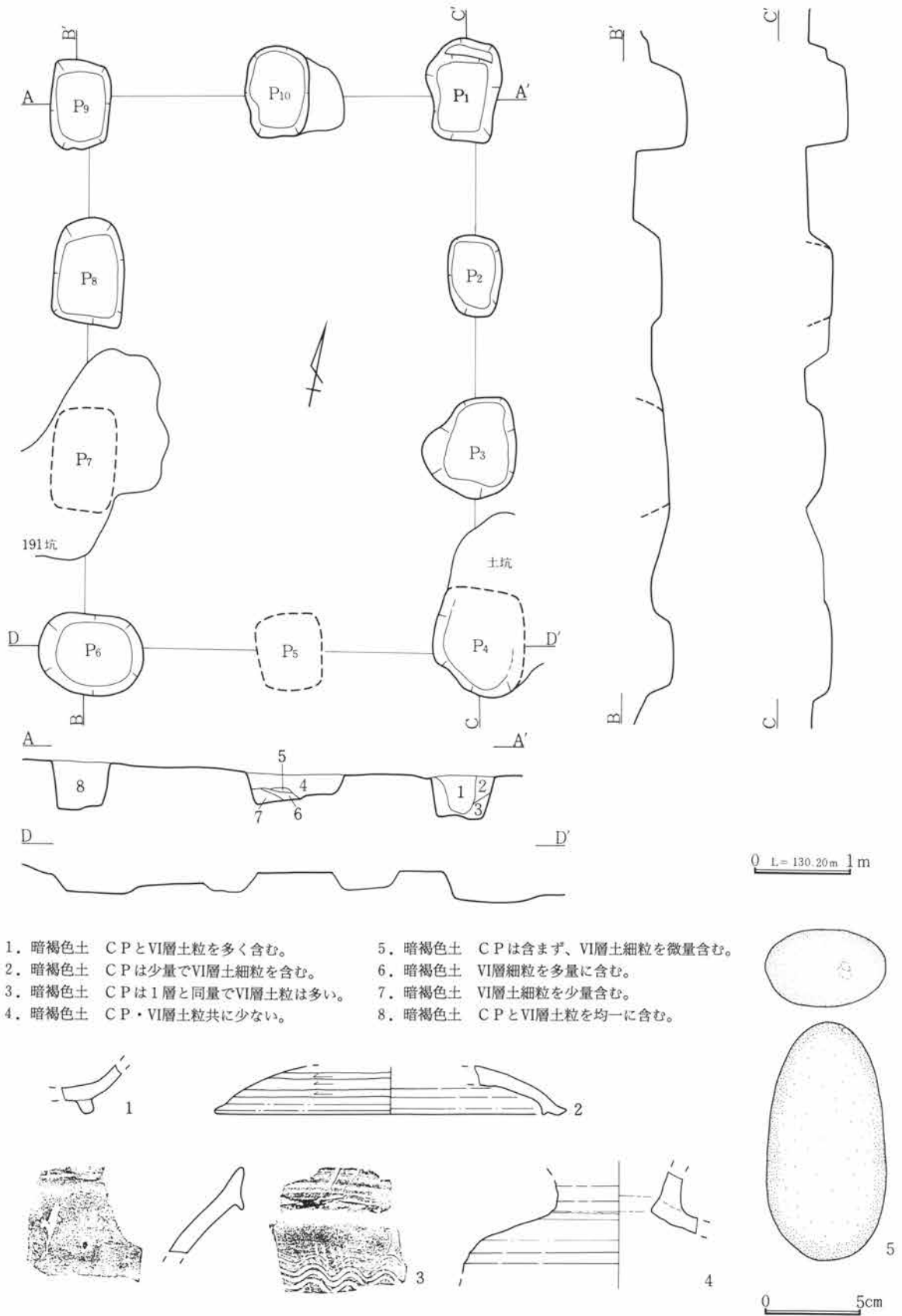


- | | |
|---|--|
| <p>1. 暗褐色土 2層に類似するが、焼土粒と炭化物を多量に含む。</p> <p>2. 暗褐色土 C Pと褐色砂質土 (VII層土?) プロックを多量に含む。</p> <p>3. 暗褐色土 焼土細粒と炭化物細粒を多量に含む。</p> <p>4. 暗褐色土 3層よりも、焼土粒・炭化物共に少なく、しまりが強い。</p> <p>5. 暗褐色土 褐色土 (VI層土?) プロックと黒褐色粘質土 (V層土?) を少量含み、しまりが強い。</p> <p>6. 暗褐色土 褐色土 (VI層土?) プロックと灰色粘質土 (VII層土?) の混土层で、しまりが強い。</p> <p>7. 暗褐色土 C Pを少量、焼土粒を多量に含む。</p> <p>8. 暗褐色土 全体にやや灰色味が強く、粘性・しまりに強い。</p> <p>9. 暗褐色土 VI層土プロックと粘質土 (VII層土?) を多量に含む。</p> <p>10. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含み、粘性が強い。</p> | <p>11. 暗褐色土 10層よりもVI層土プロックは少なく、C Pはごく微量に含む。</p> <p>12. 暗褐色土 黄褐色の礫などを含む。VI層 (地山) か?</p> <p>13. 暗褐色土 12層同様に地山 (VI層) の可能性が強い。</p> <p>14. 暗褐色土 褐色土 (VI層土?) プロックを多量に含み、しまりは弱い。</p> <p>15. 暗褐色土 14層に類似する。</p> <p>16. 暗褐色土 焼土粒と炭化物大粒の他、火を受けて硬化した塊を含む。</p> <p>17. 暗褐色土 焼土粒・C Pはほとんど含まず、しまりは弱い。</p> <p>18. 暗褐色土 2層と類似するが、焼土粒と炭化物を多量に含む。</p> <p>19. 暗褐色土 16層に類似する。</p> <p>20. 暗褐色土 焼土粒を多量に含み、しまりが強い。</p> |
|---|--|

第525図 I区第4号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

I区第5号掘立柱建物跡



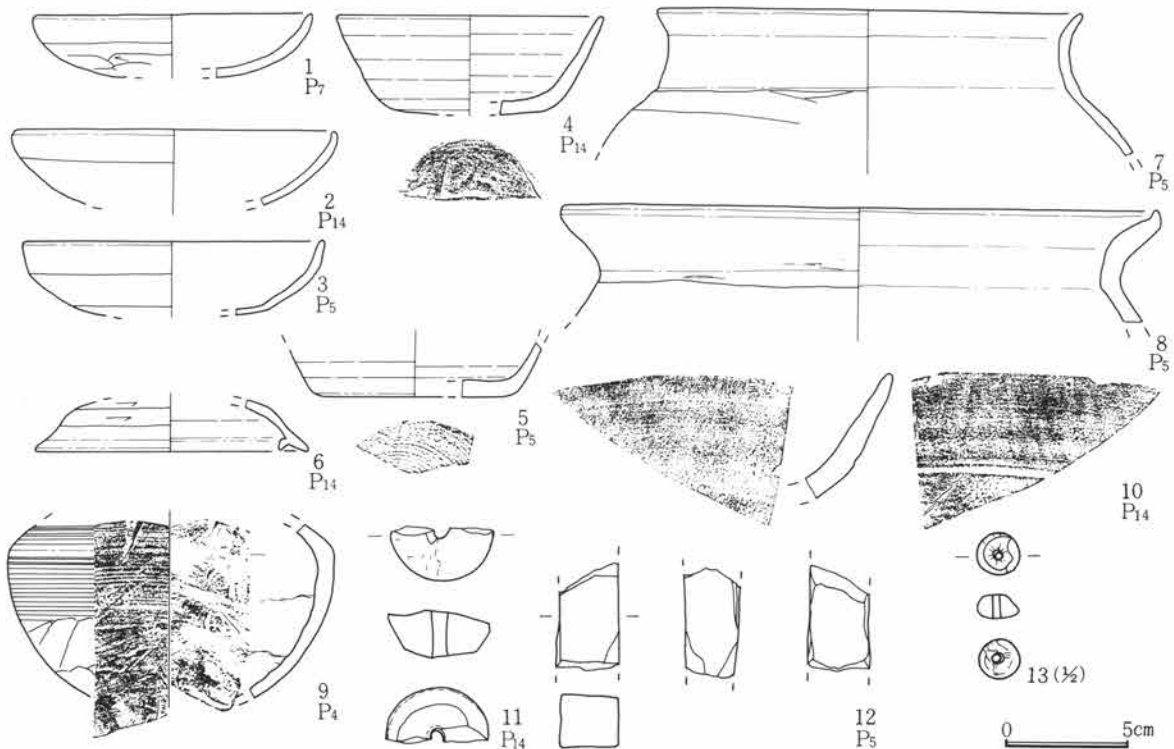
- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 暗褐色土 CPとVI層土粒を多く含む。 | 5. 暗褐色土 CPは含まず、VI層土細粒を微量含む。 |
| 2. 暗褐色土 CPは少量でVI層土細粒を含む。 | 6. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。 |
| 3. 暗褐色土 CPは1層と同量でVI層土粒は多い。 | 7. 暗褐色土 VI層土細粒を少量含む。 |
| 4. 暗褐色土 CP・VI層土粒共に少ない。 | 8. 暗褐色土 CPとVI層土粒を均一に含む。 |

第526図 I区第5号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

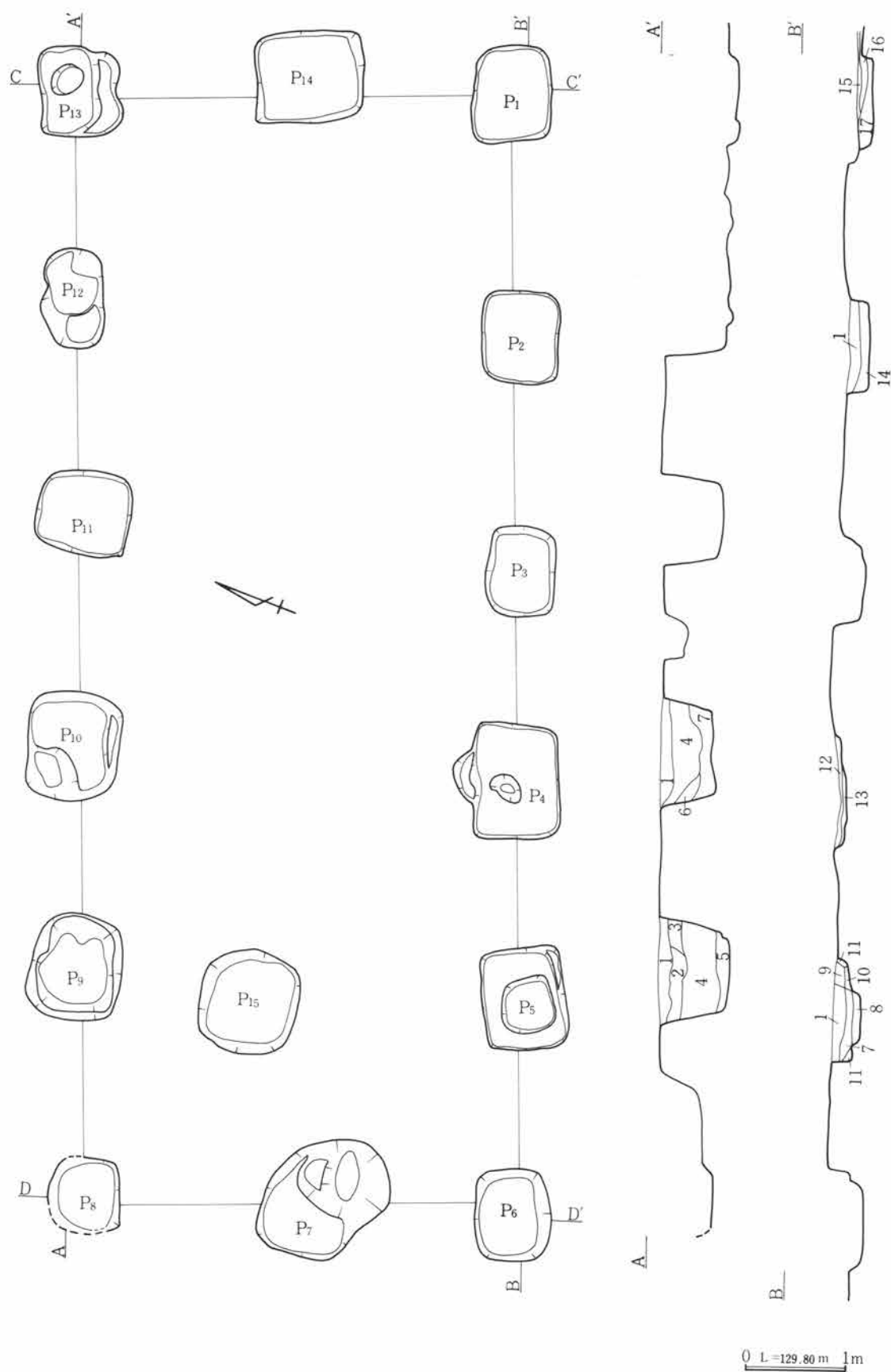
(所見) 当掘立柱建物跡は第107号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当掘立柱建物跡→第107号住居跡と考えられる。当掘立柱建物跡の確認は黄褐色ローム質のVI層土中で行ったため、本来であれば確認は容易なはずであるが、遺構の位置する場所は乱が多く、さらに建て替えた形跡も認められるため、建物の推定を困難にしている。調査の段階では16本の柱穴状のピットを検出したが、図面上の位置関係から3間×2間の建物と判断したが、前述のピットがすべて当掘立柱建物跡に帰属するとすれば、梁方向に5尺の庇をもつ建物も構成できる。各柱穴には建て替えによるものと思われる重複があるため、柱穴形状を捉えにくいものが多いが、ほぼ方形の平面を有すると考えられる。柱穴の深さは乱のため不明瞭であるが、P₁のように柱痕が確認できたものもある。建物の規模は、東西(桁)方向約14尺(4.13m)で約7尺(2.07m)に2つ間割りし、南北(梁)方向は約18尺(5.31m)で、ほぼ6尺(1.77m)に3つ間割りしている。主軸方位は、桁の方向を基準として計測すると北-16°-西である。

I区第6号掘立柱建物跡

(所見) 当掘立柱建物跡は、第63・116・154・155号住居跡等と重複しているが、遺構の検出状態及び残存状態等から第63・154・155号住居跡→当掘立柱建物跡→第116号住居跡と考えられる。当掘立柱建物跡の柱穴として検出したのは15本であり、当調査区中最大規模で東西方向を棟方向とする5間×2間の建物と考えられる。建物の規模は東西(桁)方向約38尺(11.21m)だが、柱間は東西両端及び中央をそれぞれ約8尺(2.36m)とし、中央間左右の2間を約7尺(2.07m)としている。南北(梁)方向は約16尺(4.72m)で、1間を約8尺(2.36m)とする2間としている。主軸方位は、梁の方向を基準として計測すると北-22°-西である。柱穴は全般的に方形の平面形状をもち、確認面からの深さは浅い。桁方向の柱間寸法を8尺及び7尺を交互に使っているのは非常に珍しい事例である。しかし、南側の柱間は東より2・3間目の柱間寸法を9尺、6尺としている。2間目を他よりも広くしているのは、意図的に広い開口部などを設けたためにこのような割り付けがなされたのではないだろうか。また、西側中通りには床束と思われる1本の柱穴が確認されている。

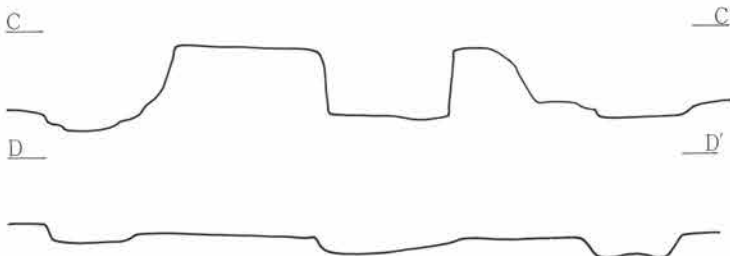


第 527 図 I 区第 6 号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第528図 I区第6号掘立柱建物跡実測図(1)

第2節 検出された遺構・遺物



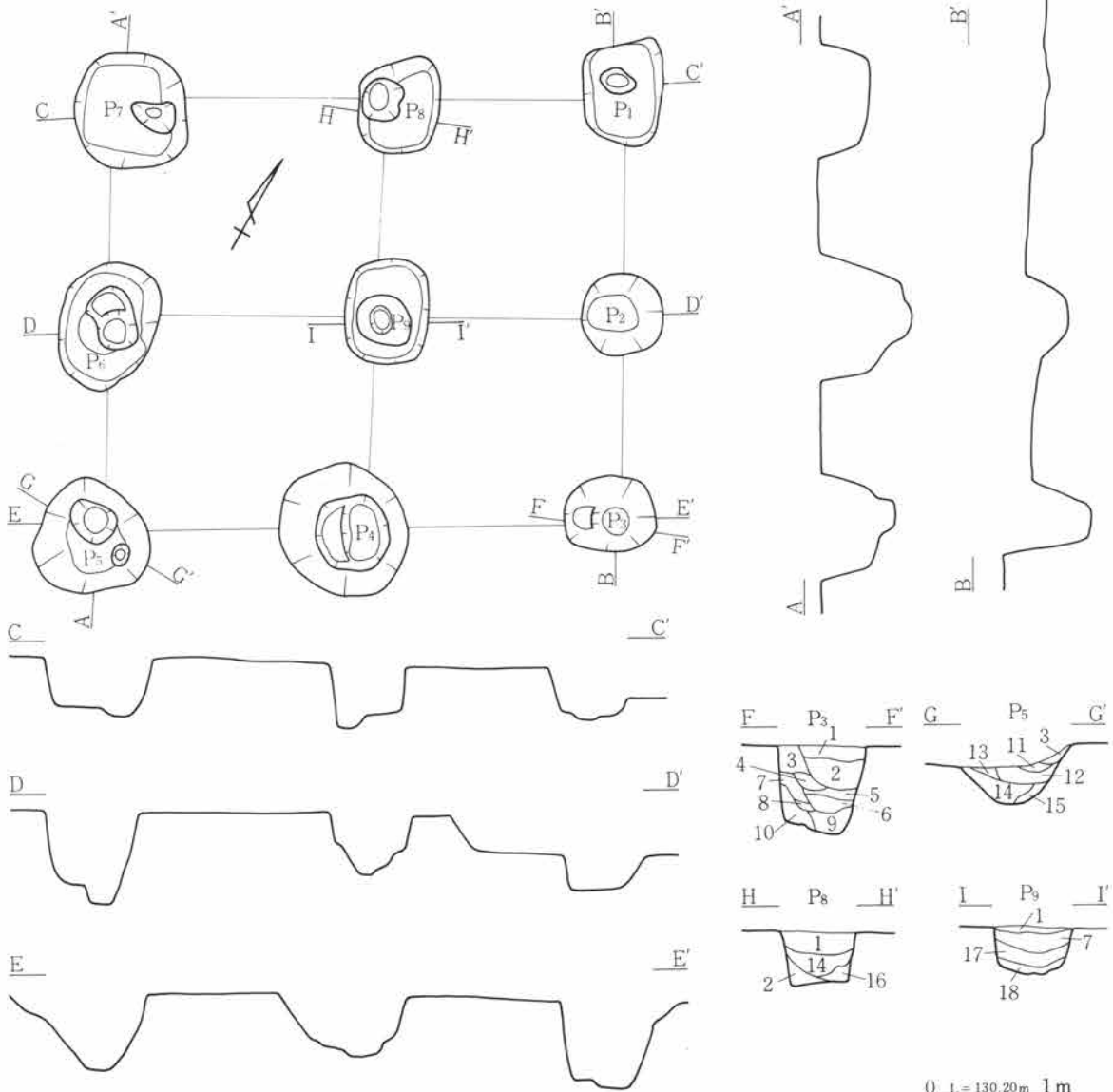
1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 CPを少量含む。
3. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。
4. 暗褐色土 VI層土粒を少量含む。
5. 暗褐色土 VI層土ブロックを含む。
6. 暗褐色土 VI層土ブロックを少量含む。
7. 暗褐色土 VII層土粒を少量含む。
8. 暗褐色土 混入物はほとんどない。
9. 暗褐色土 4層に類似。

10. 暗褐色土 VII層土小ブロックを多量に含む。
11. 暗褐色土 VII層土ブロック。
12. 暗褐色土 VI層土小ブロックとの混土。
13. 暗褐色土 VI層土との混土。
14. 暗褐色土 4層に類似し、粘性がある。
15. 暗褐色土 4層に類似。
16. 暗褐色土 12層に類似。
17. 暗褐色土 炭化物を少量含む。

第529図 I区第6号掘立柱建物跡実測図(2)

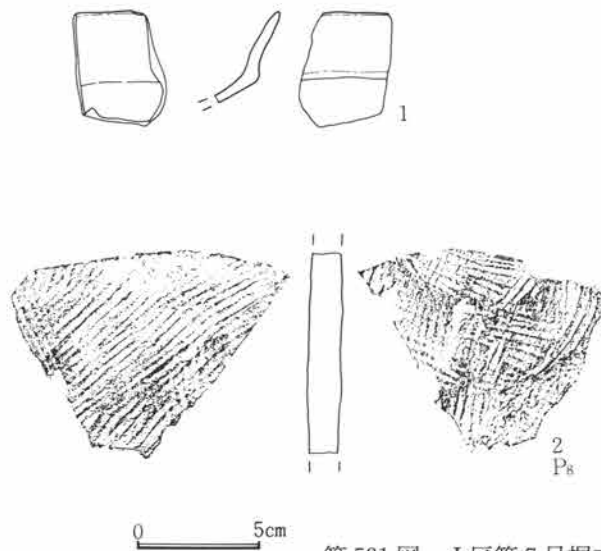
0 L = 129.80m 1m

I区第7号掘立柱建物跡



第530図 I区第7号掘立柱建物跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



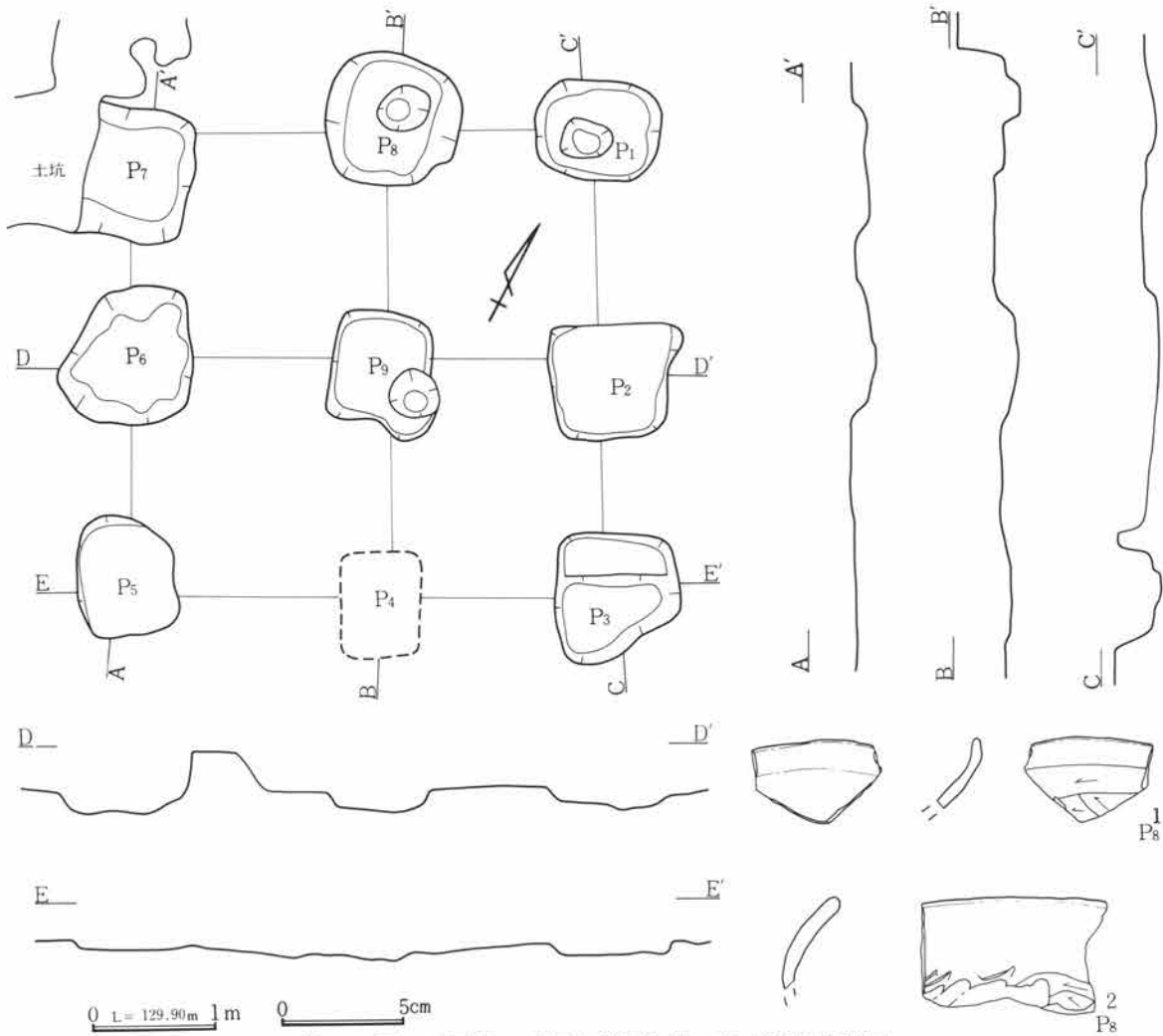
1. 暗褐色土 VI層土小ブロック、CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 VI層土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 CPを少量含む。
4. 暗褐色土 CPは含まない。
5. 暗褐色土 2層に類似。
6. 暗褐色土 4層に類似。
7. 暗褐色土 VI層土ブロックを少量含む。
8. 暗褐色土 2層に類似。
9. 暗褐色土 VI層土との混土。
10. 暗褐色土 4層に類似。
11. 暗褐色土 VI層土ブロック。
12. 暗褐色土 混入物はない。
13. 暗褐色土 VI層土を多量に含む。
14. 暗褐色土 VII層土粒を少量含む。
15. 暗褐色土 VI層土粒を少量含む。
16. 暗褐色土 14層に類似。
17. 暗褐色土 7層に類似。
18. 暗褐色土 砂質。

第531図 I区第7号掘立柱建物跡出土遺物実測図

(所見) 当掘立柱建物跡は第14号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第14号住居跡→当掘立柱建物跡と考えられる。当掘立柱建物跡の柱穴として検出したのは9本であり、2間×2間の総柱建物と考えられる。建物の規模は東西(桁)方向は約14尺(4.13m)とし、約7尺(2.07m)の2間としている。南北(梁)方向は約12尺(3.54m)で、1間を約6尺(1.77m)とする2間割りしている。当掘立柱建物跡においては、この南北方向と東西方向の軸線は直行しないのが特徴である。また、棟方向は東西方向で、梁の方向を基準として主軸方位を計測すると北-30°-西である。柱穴の平面は、確認面においては円形及び方形の平面形をもつ両方が存在している。しかし、P₄に観察できるように上面では円形状を呈しているが、下面に方形平面の痕跡を残すものがあることから、基本的には方形の掘り方を有していたものであろう。各柱穴の規模は、P₁(約87×65cm、深さ約44cm)・P₂(径約67cm、深さ約30cm)・P₃(約75×62cm、深さ約72cm)・P₄(径約110cm、深さ約50cm)・P₅(径約91cm、深さ約63cm)・P₆(約108×80cm、深さ約76cm)・P₇(約95×92cm、深さ約47cm)・P₈(約79×65cm、深さ約54cm)・P₉(約85×69cm、深さ約53cm)であり、ほとんどの柱穴は底面に円形の小ピット状掘り込みがある。

I区第8号掘立柱建物跡

(所見) 当掘立柱建物跡は第5・14号住居跡と重複しており、遺構の検出状態から判断すると第14号住居跡→当掘立柱建物跡→第5号住居跡であるが、第5号住居跡との関係はやや曖昧な部分もある。当掘立柱建物跡の柱穴として検出したのは欠損しているP₄を含めると9本であり、2間×2間の総柱建物と考えられる。建物の規模は、東西(桁)方向は約14尺(4.13m)とし、約7尺(2.07m)の2間としている。南北(梁)方向は約12尺(3.54m)で、1間を約6尺(1.77m)とする2間割りとしている。棟方向は東西方向で、梁の方向を基準として主軸方位を計測すると北-30°-西である。当掘立柱建物跡は位置的に第7号掘立柱建物跡の東側に隣接しており、また、ほぼ同一方向に軸線を設定していることから、一連の建物の可能性が高い。検出した柱穴は他の遺構等による乱によって必ずしも良好な状態ではないが、柱穴の大半がほぼ方形の平面形を有していたことがわかる。各柱穴の規模はP₁(約79×102cm、深さ約38cm)・P₂(約90×94cm、深さ約12cm)・P₃(約104×100cm、深さ約14cm)・P₄(深さ約4cm)・P₅(約110×106cm、深さ約19cm)・P₆(約107cm、深さ約13cm)・P₇(約109×107cm、深さ約49cm)・P₈(約86×80cm、深さ約19cm)であり、第7号掘立柱建物跡の柱穴同様に、底面に小ピット状の掘り込みを有する例がある。



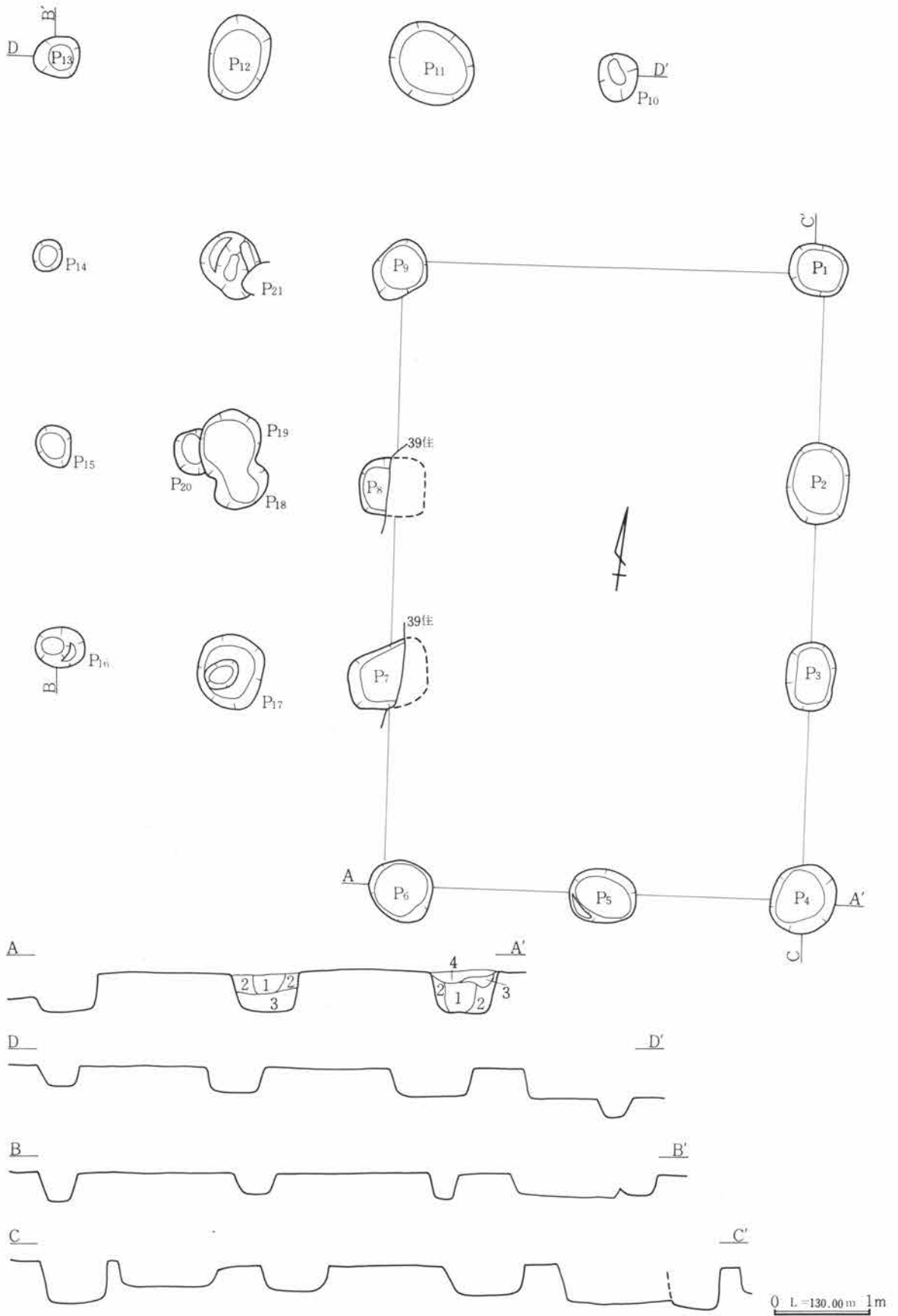
第532図 I区第8号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

I区第9号掘立柱建物跡

(所見) 当掘立柱建物跡は第39・77号住居跡と重複しており、遺構の検出状態等から当掘立柱建物跡→第39・77号住居跡と考えられる。調査当初においては規模の異なる21本程のピットを組み合わせて、4間×3間で西側に庇を有する総柱的な建物を想定したが、図面上で検討した結果すべてが一棟の建物とする根拠がないため、ピット配置及びそれぞれの規模の関係から棟を南北方向とする3間×2間の建物とするのが妥当と判断した。遺構の確認はIV層土中でおこなったが、柱穴充填土上層には浅間C軽石の他焼土粒が含まれていたことから、比較的良好に検出することができた。

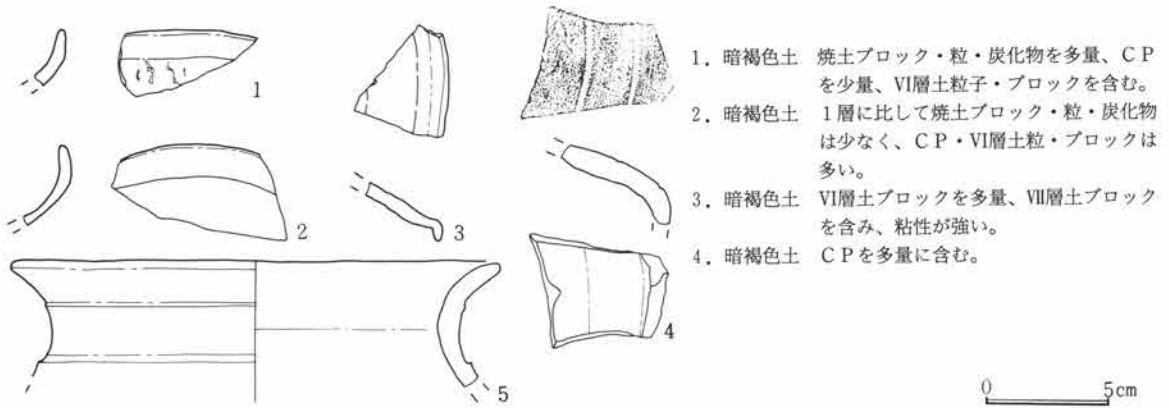
建物の規模は南北(桁)方向は約21尺(6.19m)であり、ほぼ7尺(2.07m)の3間割りしている。東西(梁)方向は約14尺(4.13m)で、約7尺(2.07m)に2間割りしている。主軸方位は、桁方向を基準として計測すると北 -5° 西である。北側のP₁とP₉間の柱穴は検出されていないが、第77号住居跡との重複によって失われたものと考えられる。柱穴は円形や方形状と様々であるが、全体の傾向としては方形を基本としており、P₄とP₅の断面には柱痕が観察されている。各柱穴の規模は、P₁(約53×60cm、深さ約45cm)・P₂(約85×64cm、深さ約31cm)・P₃(約71×52cm、深さ約26cm)・P₄(径約70cm、深さ約40cm)・P₅(約70×55cm、深さ約40cm)・P₆(径約65cm、深さ約37cm)・P₇(約63cm、深さ約33cm)・P₈(約58cm、深さ約27cm)・P₉(径約56cm、深さ約52cm)である。第533図には周辺から検出したピットをも図示した。

第4章 検出された遺構・遺物



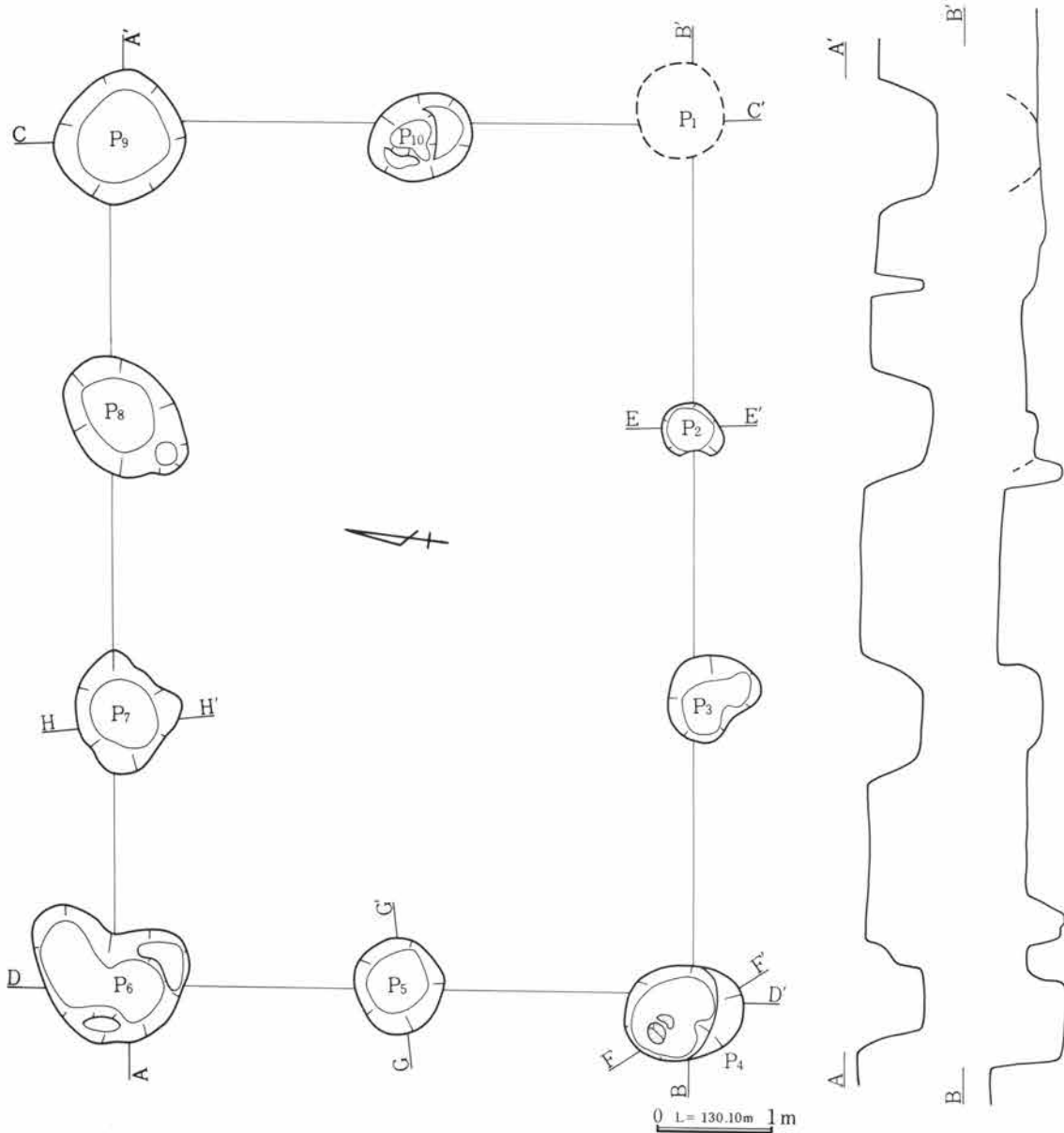
第533図 I区第9号掘立柱建物跡実測図

第2節 検出された遺構・遺物



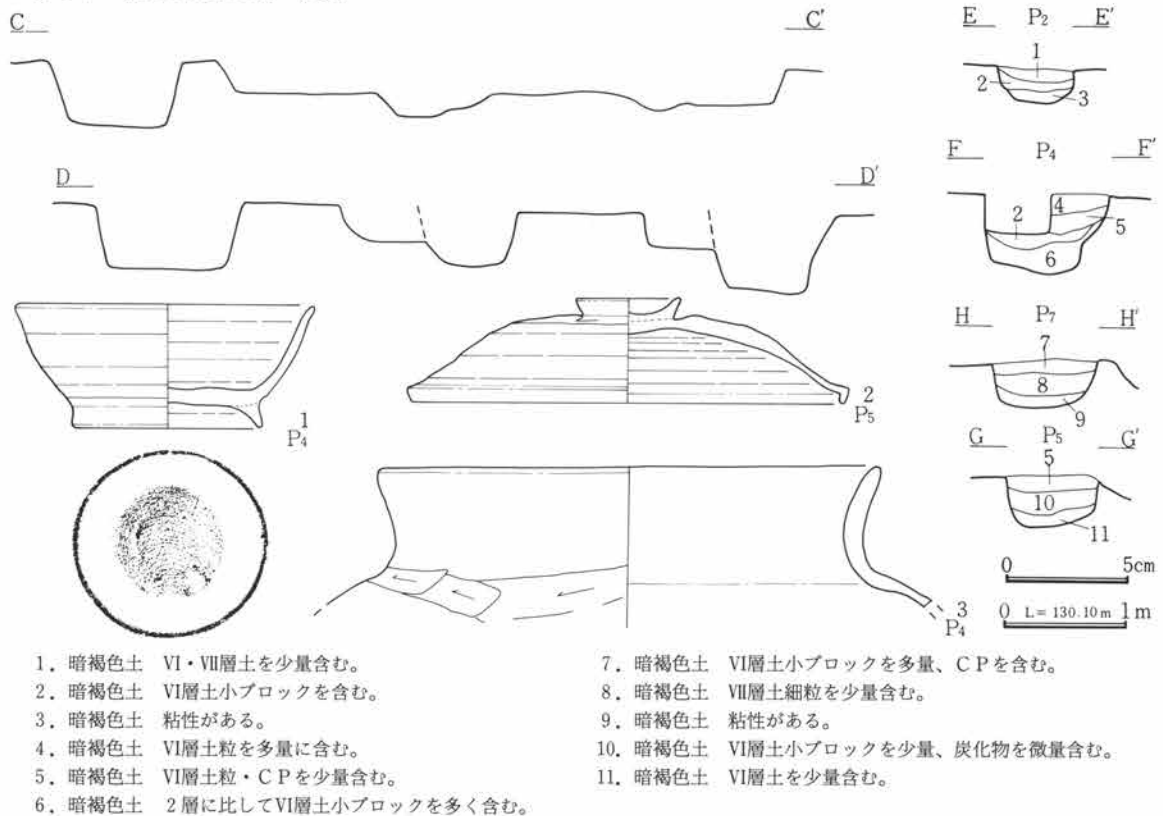
第534図 I区第9号掘立柱建物跡出土遺物実測図

I区第10号掘立柱建物跡



第535図 I区第10号掘立柱建物跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

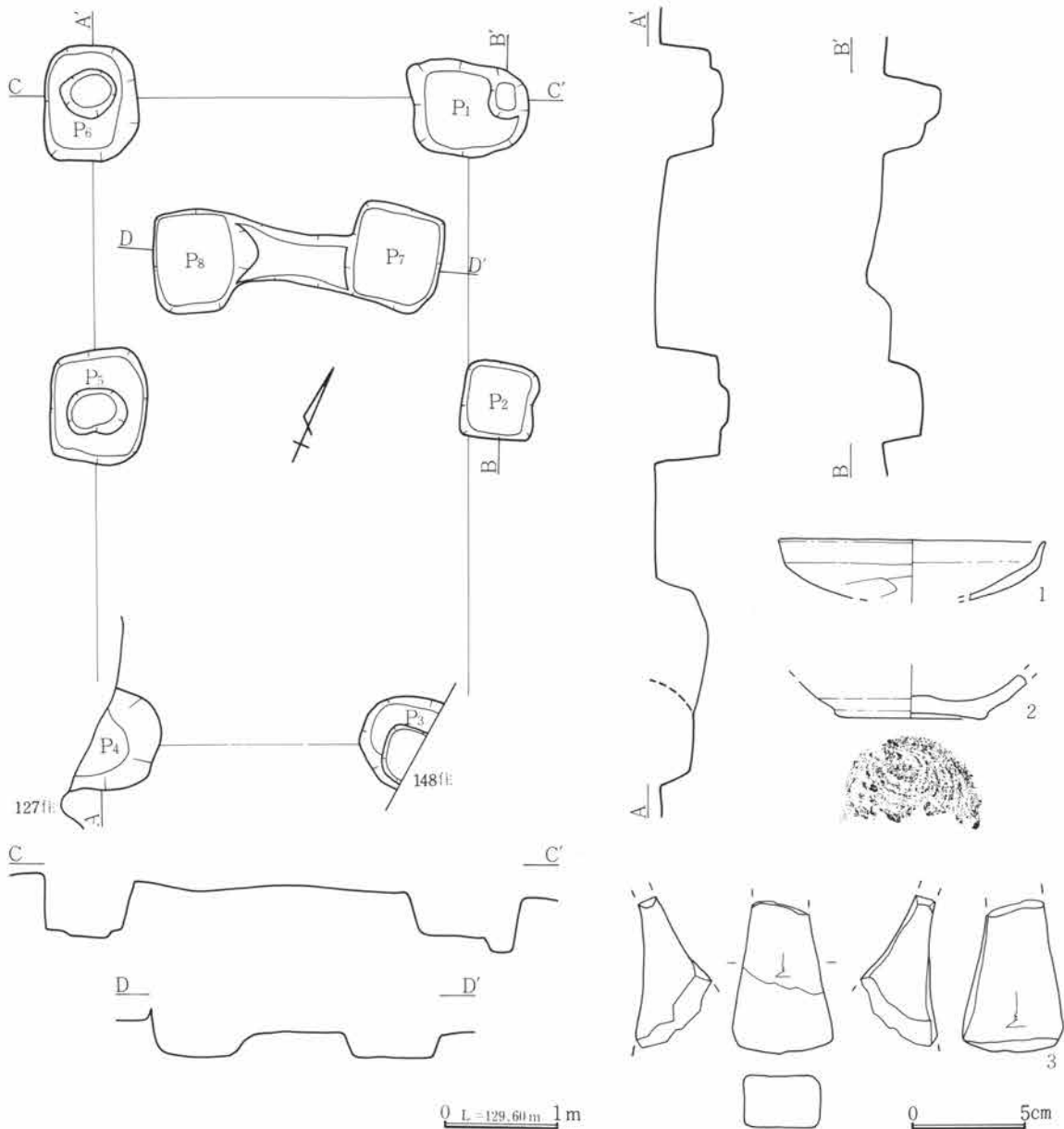


第536図 I区第10号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

(所見) 当掘立柱建物跡は第49号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当掘立柱建物跡→第49号住居跡と考えられる。当遺構の占地する場所は、多数の小ピットや土坑さらに中世以降の土坑が集中しており、掘立柱建物跡の柱穴を特定するのは困難であったが、柱穴規模や配置をもとに棟方向を東西方向にもつ3間×2間の建物を想定した。建物の規模は、東西(桁)方向約24尺(7.08m)とし、約8尺(2.36m)3間としている。南北(梁)方向は、約16尺(4.72m)で、1間を約8尺(2.36m)とする2つ間割りとしている。主軸方位は桁の方向を基準として計測すると北 8° 西である。柱穴の平面形はすべて円形を呈しており、P₄の底面中央から自然石が2個並んで出土した。この石は、底面からやや浮いた位置からの出土であるが、掘立柱の根石と考えられるものである。他の柱穴内から同様の石の出土はみられなかったが、各柱穴に根石が用いられていたことは十分推定できる。遺物は実測可能なものは第536図に掲載したものだけであるが、これらの遺物間には時期的な差があまり感じられないことから、当遺構の時期に近い時期のものであろう。

I区第1号掘立柱建物跡

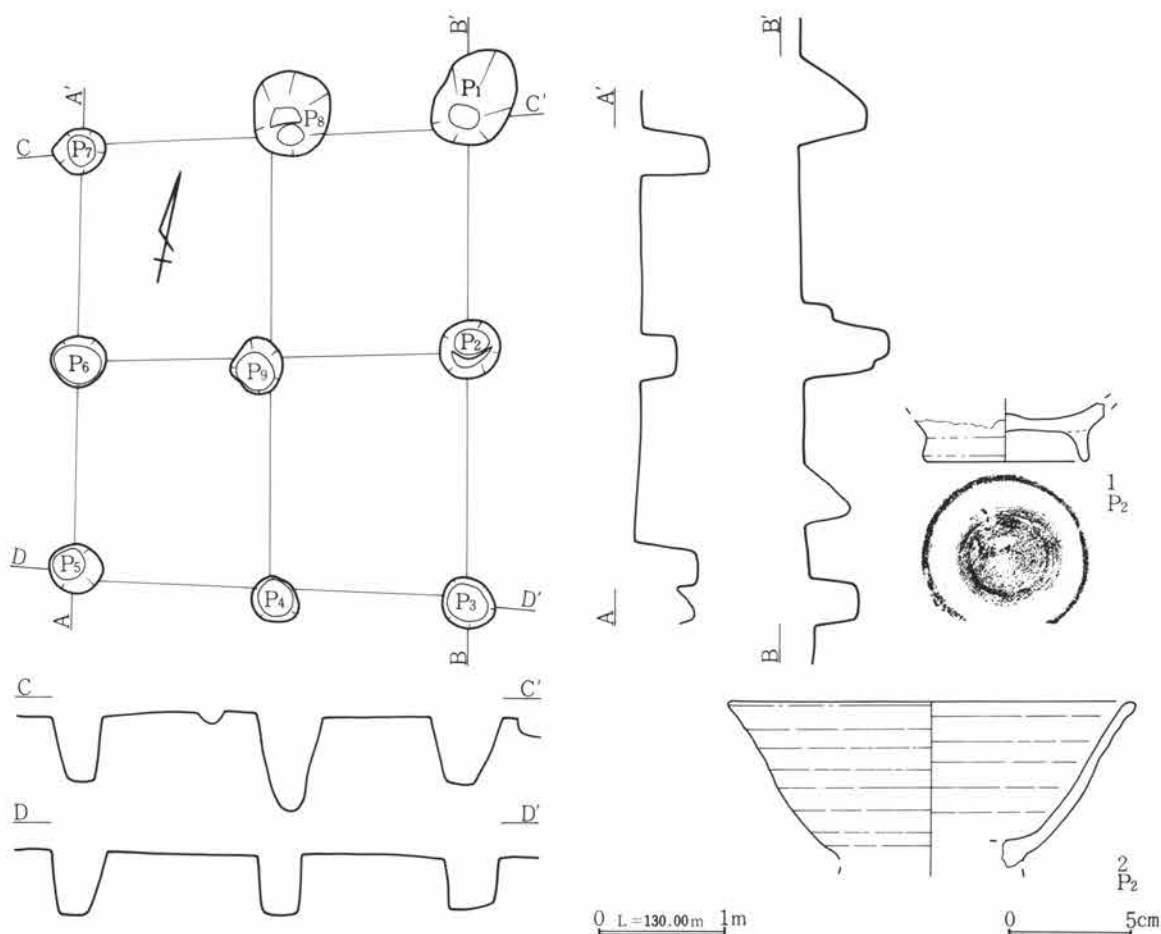
(所見) 当掘立柱建物跡は第127・255・256号住居跡と重複していたが、重複部分が南北農道下であったために、直接に関係を把握することはできなかった。そこで、出土遺物等の比較をもとにすると当掘立柱建物跡→第127・255・256号住居跡と思われる。柱穴の一部は南北農道下にかかっていたため二次の調査を実施した。西側の先行調査では、方形の平面形を有する8本のピットを検出した。検出部分の規模は東西(梁)方向約12尺(3.54m)の1間とし、南北(桁)方向は約18尺(5.31m)で、1間を約9尺(2.66m)とする2つ間割りとしている。ただし、柱穴のあり方等から南側にさらに9尺延び、3間27尺の桁行長さをもつ建物である可能性が高い。図示していないが農道下の調査では約5尺東側の位置に円形のピット列を検出しており、南北方向を棟方向とする片庇付建物の可能性もある。主軸方位は桁方向を基準として計測すると北 25° 西である。中通りには一部柱穴が検出されており、床をもつ建物とみて差し支えなからう。



第 537 図 I 区第 11 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

I 区第 12 号掘立柱建物跡

(所見) 当掘立柱建物跡は、他の遺構との重複はなく単独で存在している。当掘立柱建物跡の占地している場所には多数の小ピットや土坑が検出されており、調査段階では 1 棟の建物として捉えにくいものであった。そのため当掘立柱建物跡は柱穴の配置や規模をもとに図上で構成したものであるが、棟方向を南北方向とする 2 間×2 間の総柱建物を想定した。建物の規模は、東西(梁)方向は約 3.15m であり、これを天平尺で換算すると約 11 尺となり、曲尺で換算するとほぼ 10 尺にあたる。このことから当掘立柱建物跡においては曲尺を元に以下の柱間計測値を示していくことにする。この東西方向は約 5 尺 (1.52m) に 2 つ間割りしている。南北(桁)方向は、東側が約 13 尺 (3.94m)、西側は約 11 尺 (3.33m) でありかなり歪んでいるが、それぞれ 2 つ間割りされている。以上のように当掘立柱建物跡において曲尺が使用されていたとすると、遺構の時期が中世以降に属する可能性が高いが、柱穴充填土中には浅間 B 軽石は含まれていないと思われ、土質から判断する限り古代の遺構と思われるものであり、使用尺との間に齟齬が生じている。



第538図 I区第12号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

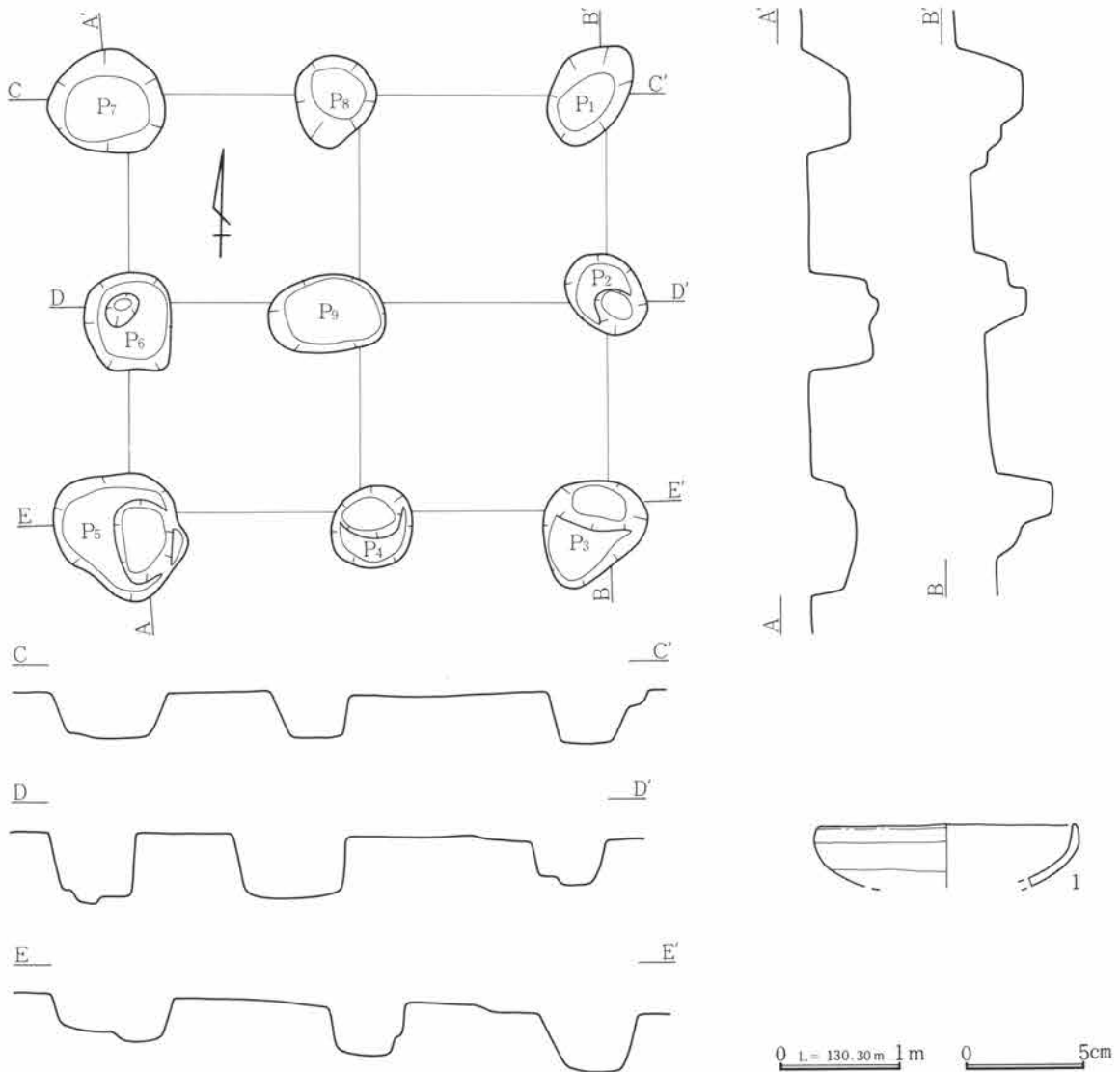
I区第15号掘立柱建物跡

(所見) 当掘立柱建物跡は第13号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当掘立柱建物跡→第13号住居跡と考えられる。遺構の確認はIV層土中で行ったが、柱穴充填土中の浅間C軽石含有量は顕著で、住居跡の覆土に近い様相を呈していることから比較的良好に確認することができた。

第13号住居跡の床面で確認した柱穴も含めて、当掘立柱建物跡に伴うと判断した柱穴はP₁～P₉の9本である。柱穴の配置から当掘立柱建物跡は東西方向に棟方向をもつ2間×2間の総柱建物を想定した。

建物の規模は、南北(梁)方向は約13尺(3.84m)とし、約6.5尺(1.92m)に2つ間割りしている。東西(桁)方向は約12尺(3.54m)で、約2尺(1.77m)の2つ間割りである。梁の方向を基準として主軸方位を計測すると北-5°-西である。

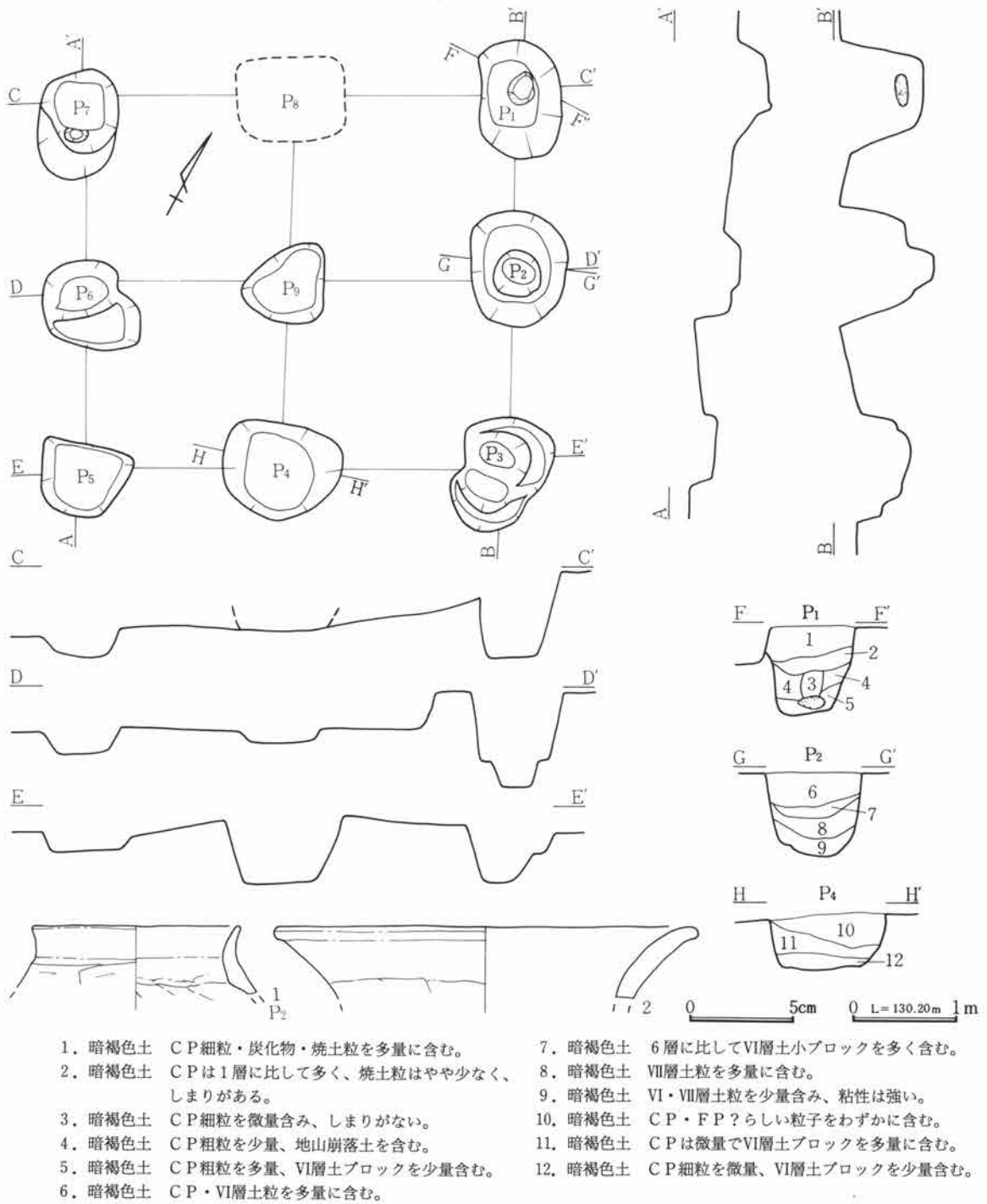
柱穴の平面形状は円形・楕円形・方形と様々であり、規模も一様とはいえない状況である。各柱穴の規模は、P₁(約91×62cm、深さ約56cm)・P₂(約74×58cm、深さ約44cm)・P₃(約97×78cm、深さ約47cm)・P₄(径約67cm、深さ約44cm)・P₅(約111×98cm、深さ約35cm)・P₆(約80×73cm、深さ約45cm)・P₇(約99×86cm、深さ約40cm)・P₈(径約67cm、深さ約42cm)・P₉(約97×63cm、深さ約55cm)である。この9本の柱穴の中で、P₂～P₆の5本の柱穴には、底面に円形または楕円形のピット状の掘り込みがなされている。同例は第1・3・6・7・8号掘立柱建物跡にも認められたものであり、柱の設置された場所を示しているものと思われる。柱穴内からの出土遺物は、小破片を含めてもごく微量であり、実測可能なものは第539図に示した土師器坏1点である。



第 539 図 I 区第 15 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

I 区第16号掘立柱建物跡

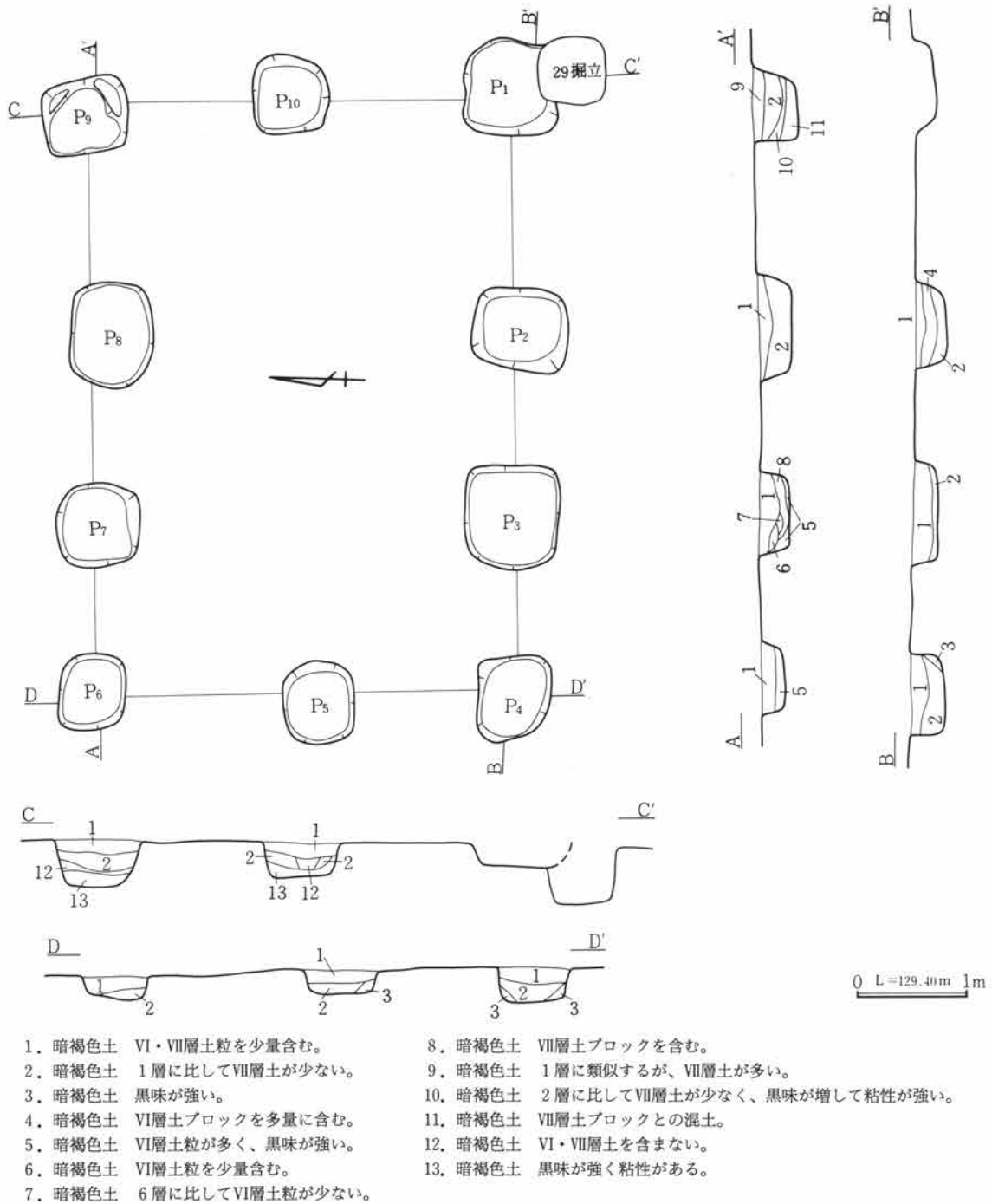
(所見) 当掘立柱建物跡は第16号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態からは当住居跡→第16号住居跡と考えられる。当掘立柱建物跡の柱穴と判断したものは9本で、2間×2間の総柱建物を想定した。建物の規模は、東西(桁)方向約14尺(4.13m)とし、約7尺(2.07m)の2間としている。南北(梁)方向は約12尺(3.54m)で、1間を約6尺(1.77m)とする2つ間割りとしている。東西方向を棟方向としており、梁方向を基準として主軸方位を計測すると北 30° 西である。当掘立柱建物跡は第7号掘立柱建物跡の西側に隣接して位置しており、第8号掘立柱建物跡と共に3棟の遺構はほぼ同一方向に軸線を設定していることから、同一時期の一連の建物である可能性が高い。柱穴は住居跡等の攪乱によって残存状態はあまり良好ではないが、柱穴形状が基本的には方形であったことは窺い知ることができる。各柱穴の規模は、P₁(約110×74cm、深さ約79cm)・P₂(約110×90cm、深さ約92cm)・P₃(約105×84cm、深さ約49cm)・P₄(約113×92cm、深さ約67cm)・P₅(約85×68cm、深さ約20cm)・P₆(約83×88cm、深さ約23cm)・P₇(約101×75cm、深さ約28cm)・P₉(約74×76cm、深さ約14cm)である。P₁からは根石と思われる礫が出土しており、本来は各柱穴底部に根石を敷き込んだ建物であったとみて良いであろう。



第540図 I区第16号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

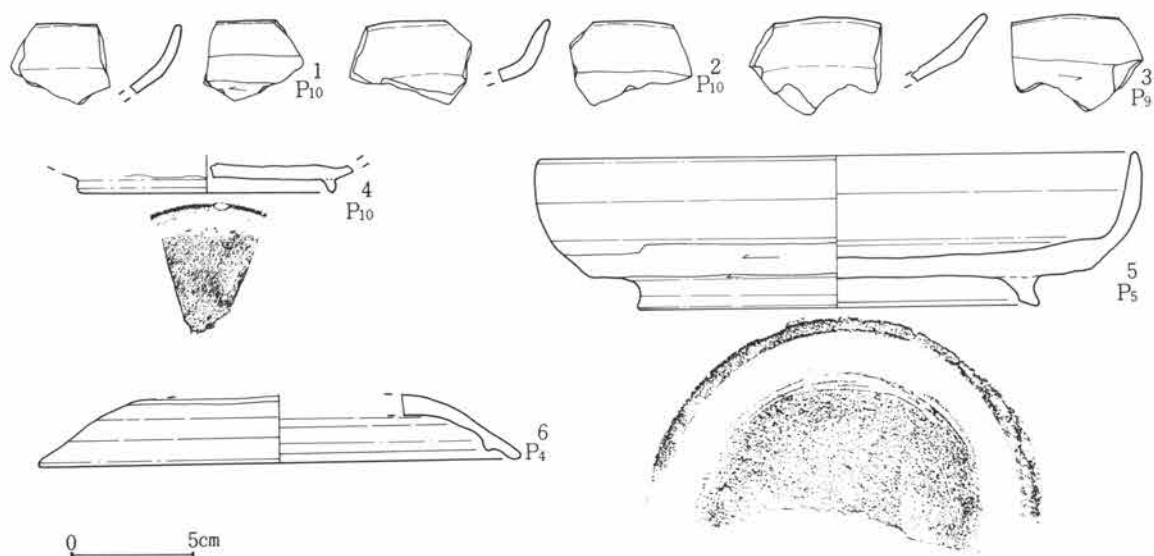
I区第17号掘立柱建物跡

(所見) 当掘立柱建物跡は第190・191・193号住居跡及び第29号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態及び遺構の残存状態等から第190・191・193号住居跡→当掘立柱建物跡→第29号掘立柱建物跡と考えられる。柱穴の確認はIV層土中で行ったが、住居重複部分も含めて比較的良好に検出することができた。その結果検出した柱穴は10本であり、東西方向に棟方向を持つ3間×2間の建物を想定した。建物の規模は、南北(梁)方向は約13尺(3.84m)であり、1間を約6.5尺(1.92m)としている。東西(桁)方向は約18尺(5.



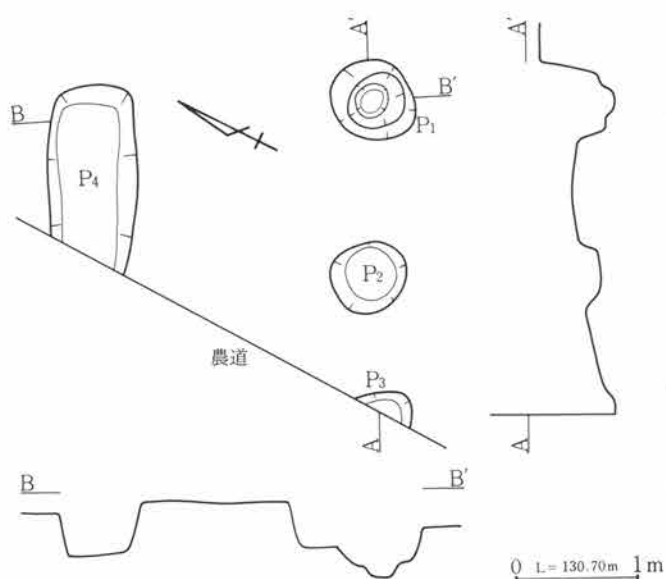
31m)とし、約6尺(1.77m)に3つ間割りしている。梁の方向を基準として主軸方位を計測すると北-6°-西である。柱穴はすべて方形の平面形を呈しており、各柱穴の規模はP₁(約88×87cm、深さ約17cm)・P₂(約75×88cm、深さ約28cm)・P₃(約95×87cm、深さ約24cm)・P₄(約77×68cm、深さ約32cm)・P₅(約66×76cm、深さ約22cm)・P₆(約71×62cm、深さ約22cm)・P₇(約75×78cm、深さ約28cm)・P₈(約95×75cm、深さ約32cm)・P₉(約67×77cm、深さ約41cm)・P₁₀(約70×71cm、深さ約31cm)である。柱穴の充填土層は、大半が水平の堆積であり、P₁₀にわずかに柱痕と思われるような堆積状態が観察された。柱穴内の出土遺物はわずかで、実測できたのは第540図に掲載したものだけである。

第4章 検出された遺構・遺物



第542図 I区第17号掘立柱建物跡出土遺物実測図

I区第18号掘立柱建物跡

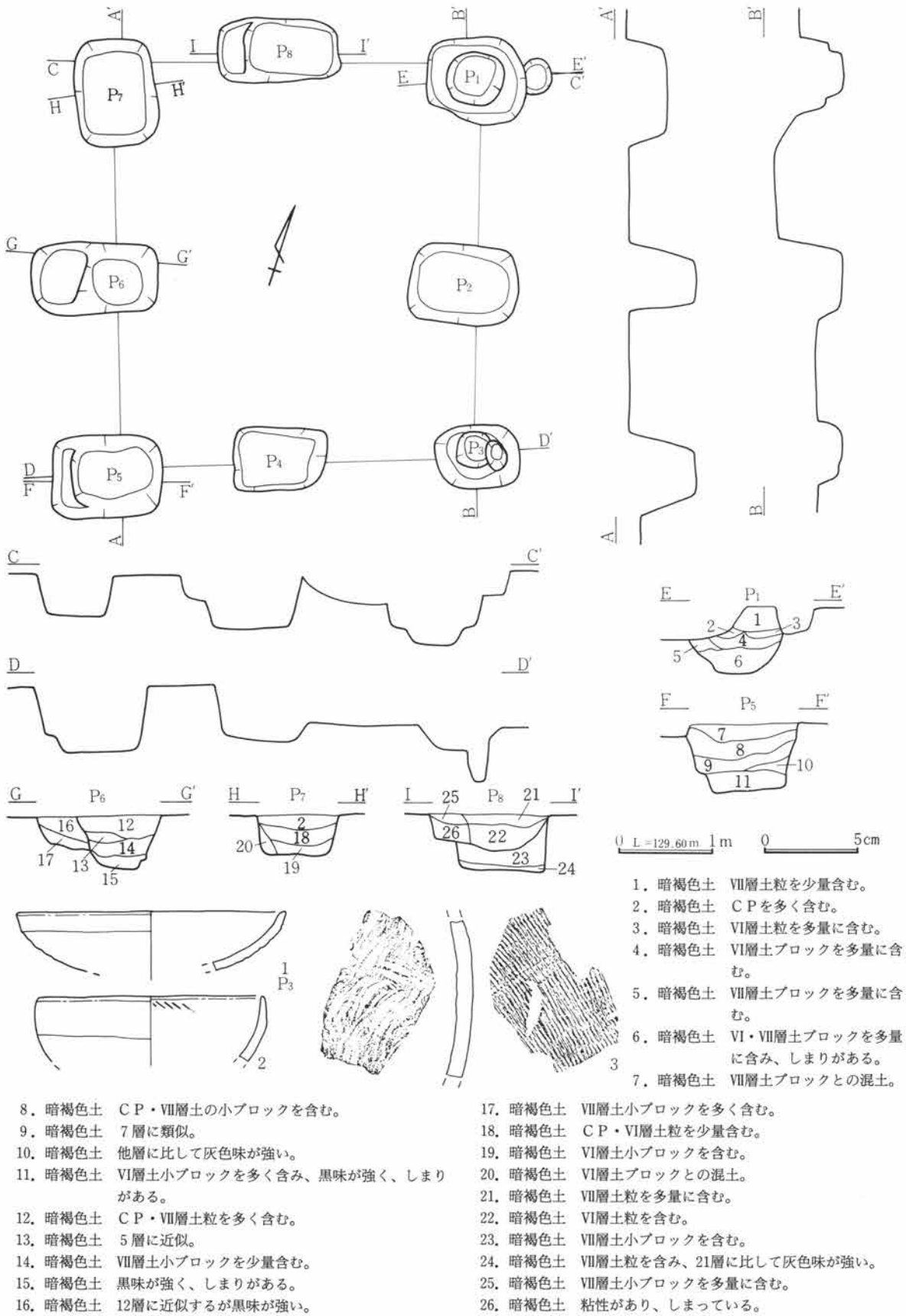


第543図 I区第18号掘立柱建物跡実測図

(所見) 当掘立柱建物跡は第25号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第25号住居跡→当掘立柱建物跡と考えられる。遺構の西半は南北農道下にかかっていたために二次調査を実施したが、農道下の調査では確認面が下がっていたためか柱穴を検出することができなかった。したがって当掘立柱建物跡の柱穴として検出したのは4本であり、この柱穴からは建物全体を推定することはできなかった。南側に並んでいる3本の柱穴についてのみ計測するとP₁～P₂間が約5尺(1.48m)、P₂～P₃間が約4尺(1.18m)と不揃いである。また、北側の柱穴は布握り状を呈するものとも考えられる。南北方向を主軸として計測すると北-30°-西である。

I区第19号掘立柱建物跡

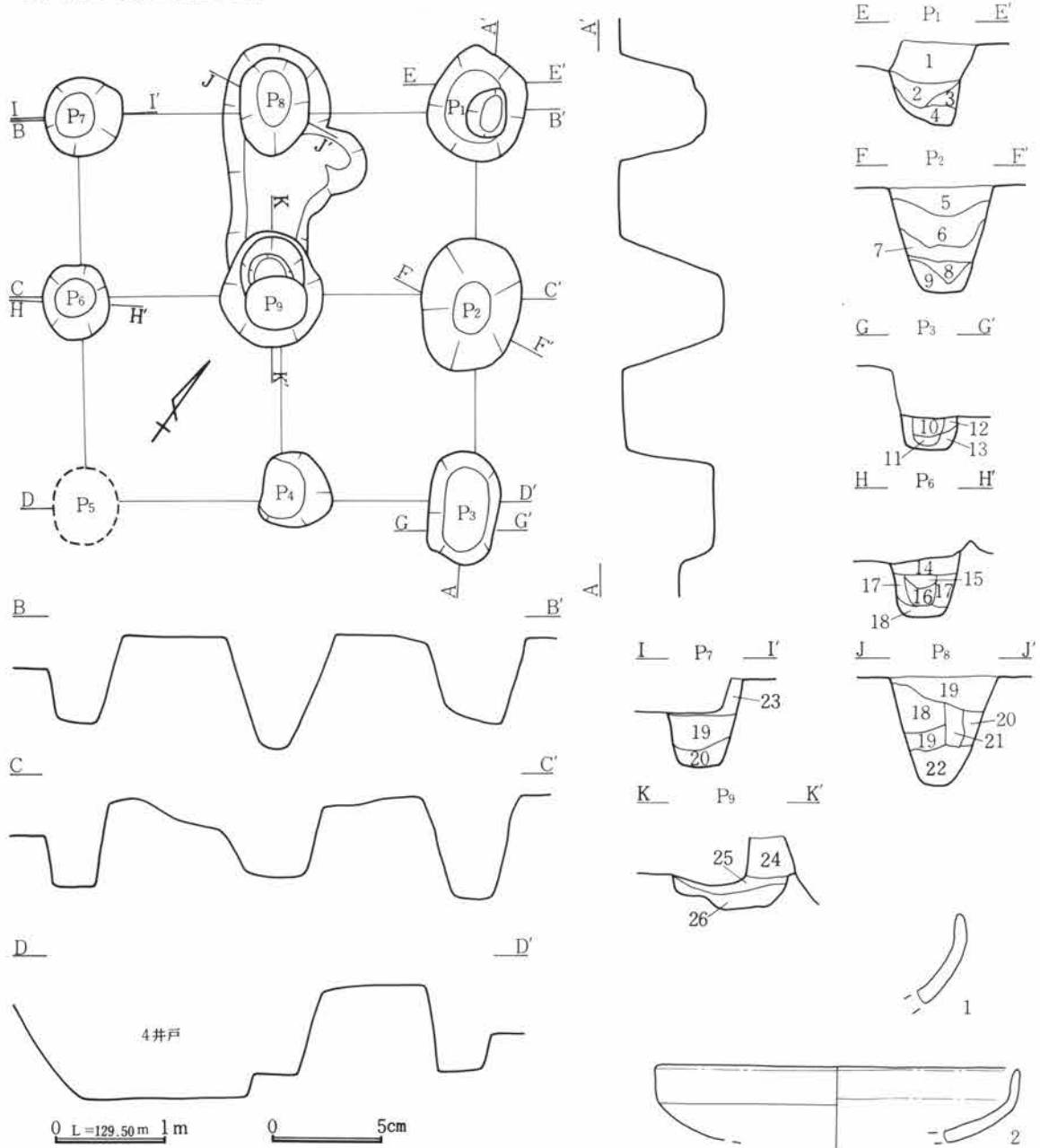
(所見) 当掘立柱建物跡は第177・188号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第188号住居跡→当掘立柱建物跡→第177号住居跡と考えられる。柱穴の確認はIV層土中であり、住居跡の重複部分も含めて明瞭に検出することができた。当掘立柱建物跡の柱穴として検出したのはP₁～P₈までの8本であり、東西方向に棟方向の想定される2間×2間の建物と考えられる。建物の規模は南北(梁)方向は約13尺(3.84m)で、約6.5尺(1.92m)に2つ間割りしている。東西(桁)方向は約13尺(3.84m)で、南北方向同様約6.5尺(1.92m)に2つ間割りしている。主軸方位は梁の方向を基準に計測すると北-21°-西である。柱穴はすべて方形の平面形で、各柱穴の規模はP₁(約90×102cm、深さ約61cm)・P₂(約83×114cm、深さ約66cm)・P₃(約65×87cm、深さ約25cm)・P₄(約96×64cm、深さ約56cm)・P₅(約115×85cm、深さ約66cm)・P₆(約70×132cm、深さ約68cm)・P₇(約111×84cm、深さ約42cm)・P₈(約125×63cm、深さ約53cm)である。



第544図 I区第19号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

I区第20号掘立柱建物跡

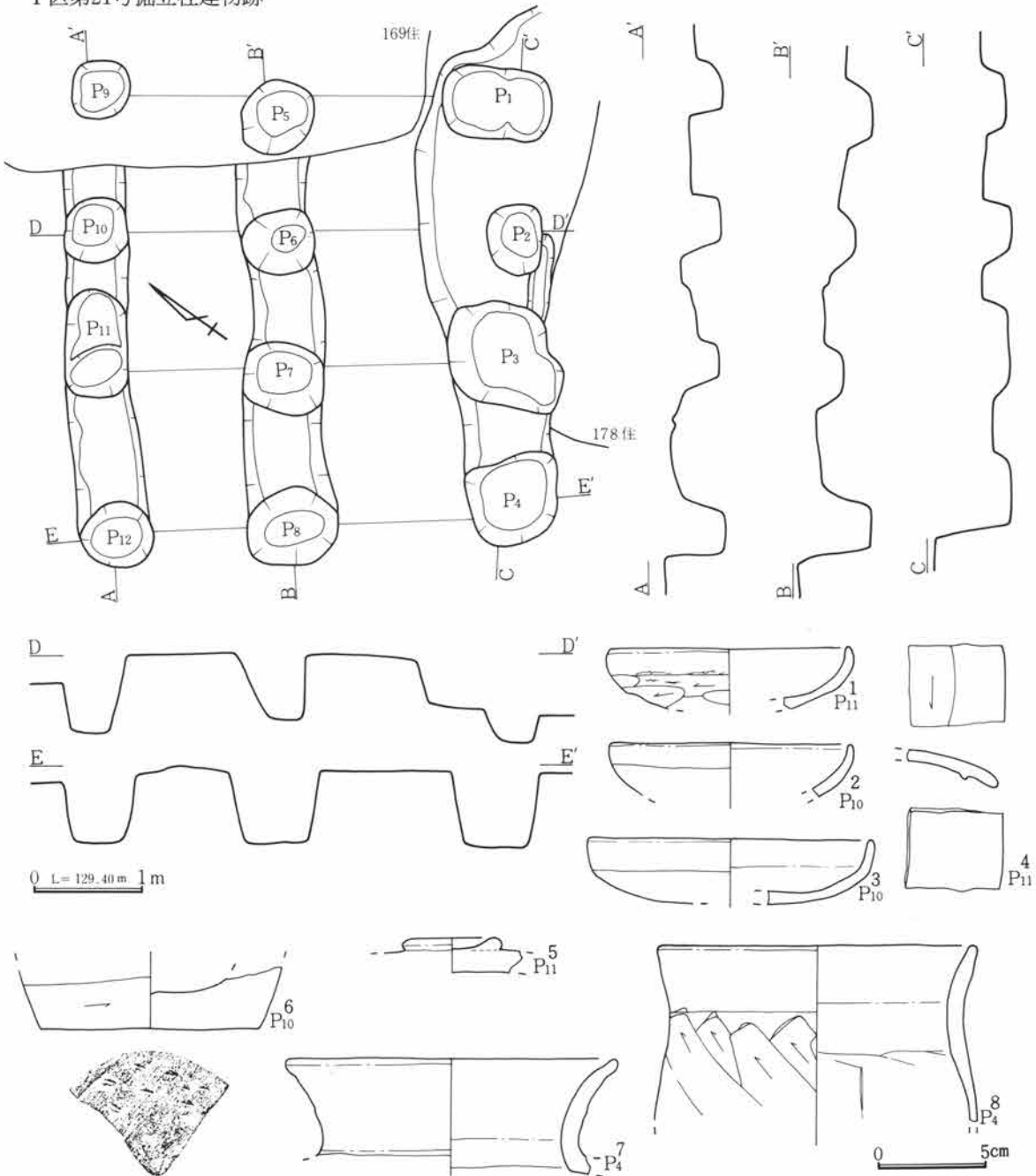


- | | |
|---|---|
| <p>1. 暗褐色土 VII層土粒を多量に含む。</p> <p>2. 暗褐色土 VII層土を少量含む。</p> <p>3. 暗褐色土 VI層土小ブロックを含む。</p> <p>4. 暗褐色土 VI・VII層土小ブロックを含み、黒味が強くし
まりあり。</p> <p>5. 暗褐色土 VII層土小ブロックを多量に含む。</p> <p>6. 暗褐色土 5層に比してブロックが細かい。</p> <p>7. 暗褐色土 VII層土を少量含む。</p> <p>8. 暗褐色土 VII層土ブロックを含む。</p> <p>9. 暗褐色土 黒味が強く、しまりがある。</p> <p>10. 暗褐色土 VI・VII層土小ブロックを多量に含む。</p> <p>11. 暗褐色土 VII層土小ブロックを少量含む。</p> <p>12. 暗褐色土 VI層土粒を少量含む。</p> <p>13. 暗褐色土 12層に比してVI層土が少なく、黒味が強い。</p> | <p>14. 暗褐色土 VII層土粒を多量に、CPを少量含む。</p> <p>15. 暗褐色土 VI・VII層土粒を多量に含む。</p> <p>16. 暗褐色土 15層に比してVI・VII層土粒が少ない。</p> <p>17. 暗褐色土 VII層土粒を多量に含む。</p> <p>18. 暗褐色土 混入物は少なく黒味が強い。</p> <p>19. 暗褐色土 VII層土小ブロックを多量に含む。</p> <p>20. 暗褐色土 19層に近似するが、黒味が強くなる。</p> <p>21. 暗褐色土 VII層土細粒を少量含む。</p> <p>22. 暗褐色土 21層に類似するが、黒味が強い。</p> <p>23. 暗褐色土 他層に比して茶色味をおびる。</p> <p>24. 暗褐色土 VII層土小ブロック・細粒を多量に含む。</p> <p>25. 暗褐色土 VII層土ブロックとの混土。</p> <p>26. 暗褐色土 25層に類似するが、しまりが強い。</p> |
|---|---|

第545図 I区第20号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

(所見) 当掘立柱建物跡は第178・187・199号住居跡・第4号井戸跡及び第23号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の検出状態等から第178・187・199号住居跡→当掘立柱建物跡→第4号井戸跡と考えられ、第23号掘立柱建物跡との関係は判然としない。重複で失っている柱穴を含めて当掘立柱建物跡に伴う柱穴は9本であり、棟方向を東西方向とする2間×2間の総柱建物が想定できる。建物の規模は、南北(梁)及び東西(桁)方向共に約12尺(3.54m)で、約6尺(1.77m)に2つ間割りしている。主軸方位は梁の方向を基準に計測すると北 -35° 西である。柱穴は円形または楕円形で、各柱穴の規模はP₁(約102×84cm、深さ約78cm)・P₂(約115×88cm、深さ約92cm)・P₃(約99×62cm、深さ約78cm)・P₄(径約60cm、深さ約69cm)・P₇(径約71cm、深さ約78cm)・P₈(約60×85cm、深さ約102cm)・P₉(約101×90cm、深さ約61cm)である。

I区第21号掘立柱建物跡

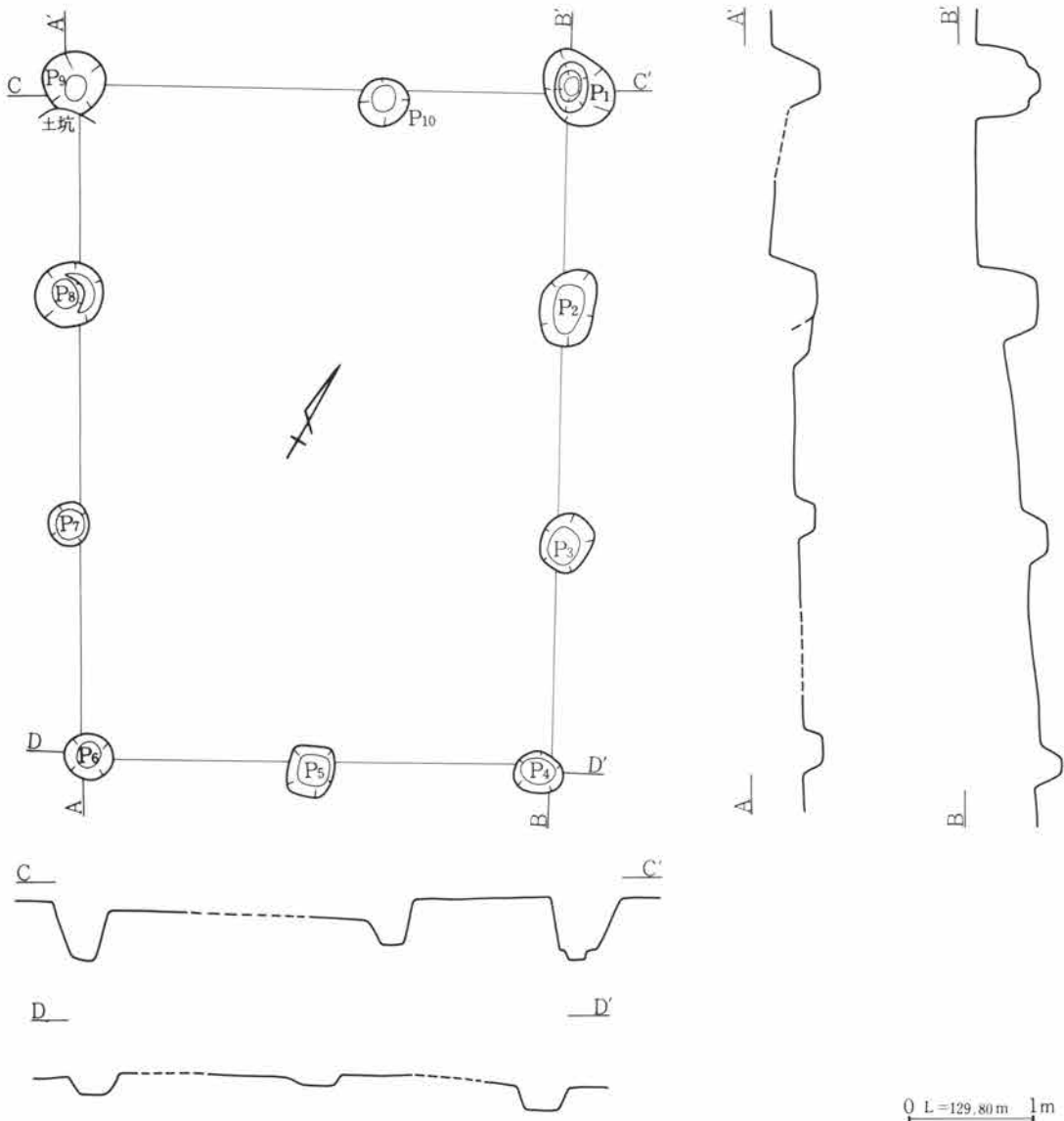


第546図 I区第21号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

(所見) 当掘立柱建物跡は第178号住居跡と重複しているが、遺構の検出状況からは当掘立柱建物跡→第178号住居跡という関係が想定されるが、出土遺物の比較からは逆の関係である。当掘立柱建物跡の最大の特徴は、東西方向に3列の布掘がみられる点である。この布掘内からは12本の柱穴が検出されており、主軸が北-36°-西に触れた東西方向に棟方向をもつ3間×2間の総柱建物が想定できる。建物の規模は、南北(梁)方向は約12尺(3.54m)で、約6尺(1.77m)に2つ間割りし、東西(桁)方向は約12尺(3.54m)で、約4尺(1.18m)に3つ間割りしている。東西に掘削された布掘は、上幅約70cm、下幅約50cm、深さ約25cmである。柱穴の平面形は円形から楕円形のものも認められるが、基本的には方形を呈している。各柱穴の規模は、P₁(約62×98cm、深さ約21cm)・P₂(約62×51cm、深さ約25cm)・P₃(約95×90cm、約24cm)・P₄(約75×80cm、深さ約68cm)・P₅(径約65cm、深さ約25cm)・P₆(約56×64cm、深さ約30cm)・P₇(約62×71cm、深さ約26cm)・P₈(約70×82cm、深さ約67cm)・P₉(約51×52cm、深さ約30cm)・P₁₀(約57×55cm、深さ約38cm)・P₁₁(約45×57cm、深さ約45cm)・P₁₂(径約60cm、深さ約55cm)である。

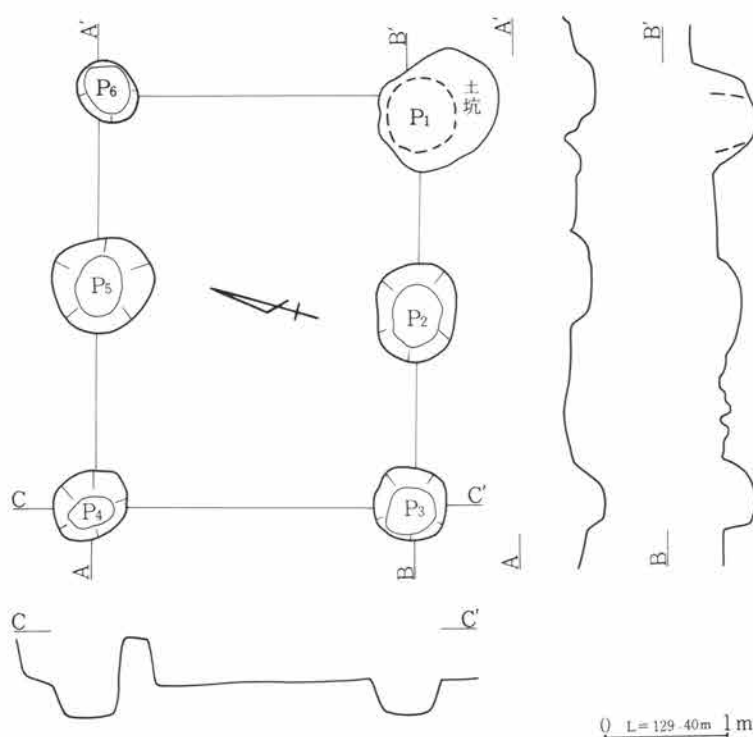
I区第22号掘立柱建物跡



第547図 I区第22号掘立柱建物跡実測図

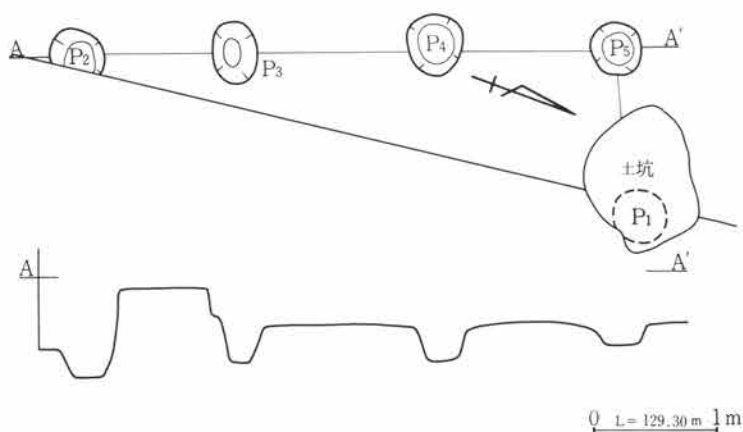
(所見) 当掘立柱建物跡は第101号住居跡及び第6号掘立柱建物跡と重複しているが、第6号掘立柱建物跡→当掘立柱建物跡であろうと思われるが、柱穴が直接には重複していないため不明で、第101号住居跡との関係も判然としない。検出した柱穴は10本であり、南北方向に棟方向をもつ3間×2間の建物が想定できる。柱穴の状態等から当掘立柱建物跡については曲尺で計測すると、建物の規模は、南北(桁)方向が約18尺(5.45m)で、約6尺(1.82m)に3つ間割りし、東西(梁)方向は約12尺(3.64m)とし、約6尺(1.82m)に2つ間割りしている。主軸方位は桁方向を基準に計測すると北 -27° 西である。柱穴の充填土中に浅間B軽石が混入していたという観察記録がないが、使用尺からは中世以降の建物である可能性が高い。柱穴は大半が円形で、規模は径約34~55cm、深さ約9~52cmである。

I区第23号掘立柱建物跡



第548図 I区第23号掘立柱建物跡実測図

I区第24号掘立柱建物跡

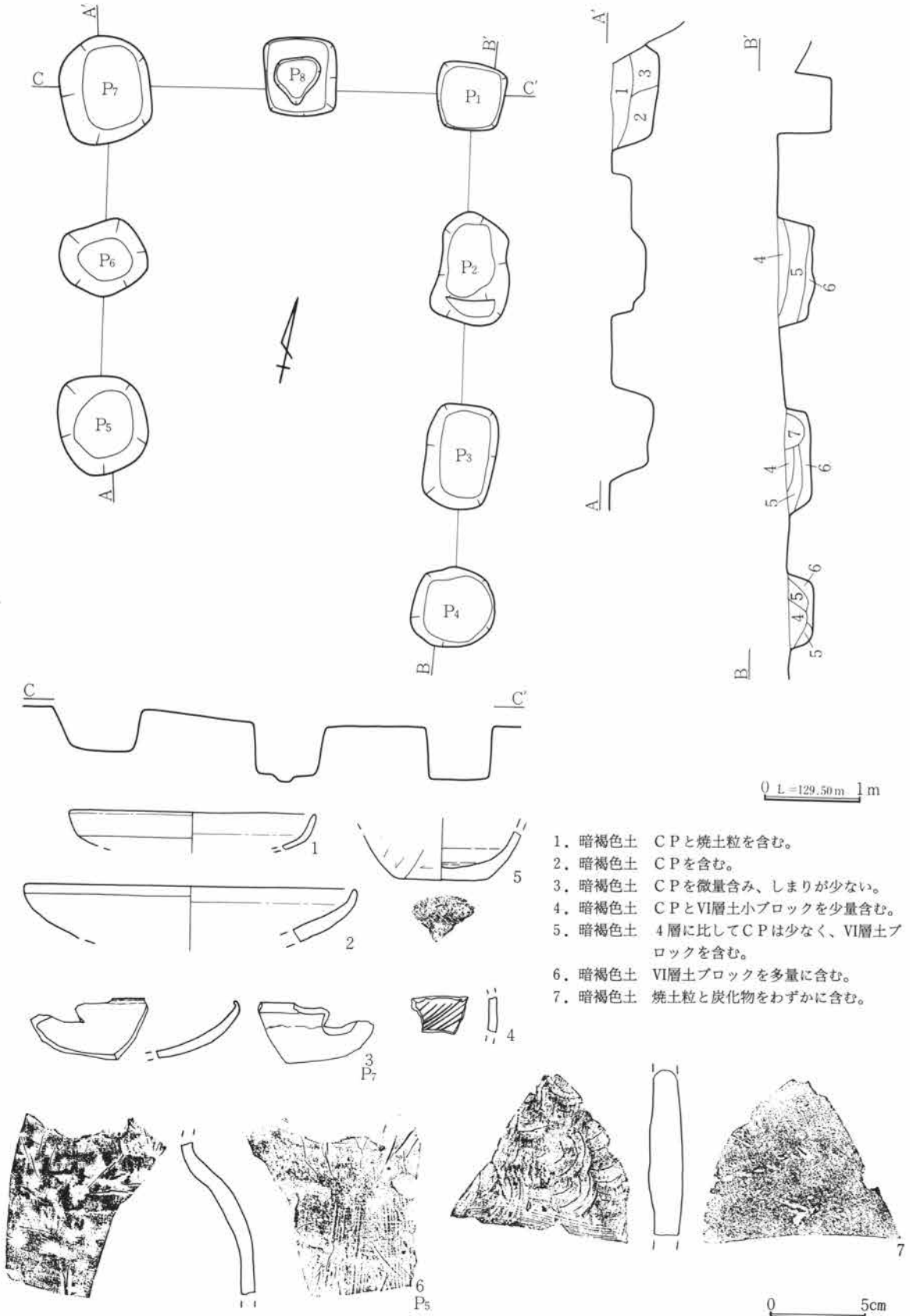


第549図 I区第24号掘立柱建物跡実測図

(所見) 当掘立柱建物跡は第152・178号住居跡及び第20号掘立柱建物跡と重複している。遺構の検出状態等から第178号住居跡→当掘立柱建物跡→第152号住居跡という関係は捉えられるが、第20号掘立柱建物跡との関係は判然としない。検出した柱穴は6本で、未検出の柱穴が想定できないことから東西方向に棟方向をもつ2間×1間の建物が考えられる。建物の規模は、南北(梁)方向は約9尺(2.66m)で、東西(桁)方向は約11尺(3.25m)で、約5.5尺(1.62m)に2間割りしている。主軸方位は梁方向を基準に計測すると北 -15° 西である。柱穴の平面形はすべて円形を呈している。

(所見) 当掘立柱建物跡は西側の柱穴列のみを検出したもので、第187・199号住居跡と重複しているが、調査段階で新旧関係を判断することはできなかった。柱穴は円形の小規模なもので、曲尺を使用していると考えられ、中世以降の建物の可能性が高い。当掘立柱建物跡は南北方向に棟方向をもつ3間×2間の建物と思われ、南北(桁)方向は約14尺(4.24m)で、ほぼ5尺(1.52m)に3つ間割りしている。

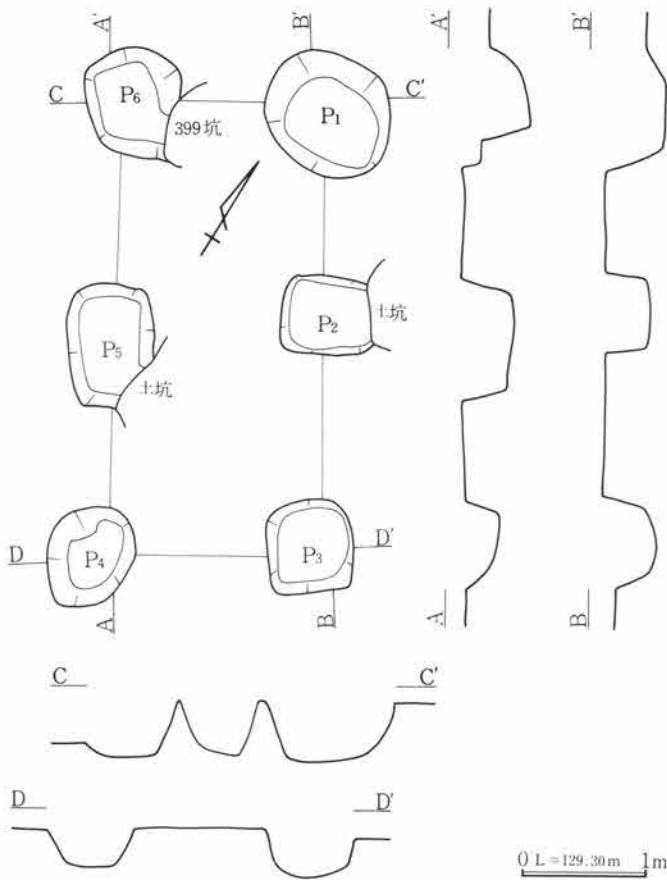
I区第25号掘立柱建物跡



第550図 I区第25号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

(所見) 当掘立柱建物跡は、西側が南北農道下にかかっていたため二次の調査で全体を明らかにしたが、結果的には南側の柱穴の一部が検出できなかった。柱穴として検出したものは8本であるが、柱穴配置からみて欠落した2本の柱穴があったことは明らかであり、南北方向に棟方向をもつ3間×2間の建物と考えられる。建物の規模は、南北(桁)方向は約18尺(5.31m)で、約6尺(1.77m)に3つ間割りしている。東西(梁)方向は約12尺(3.54m)で、柱間を約6尺(1.77m)で2つ間割りしている。主軸方位は桁方向を基準として計測すると北-10°-西である。柱穴は円形の平面形のものもあるが、基本的には方形の掘り方である。各柱穴の規模は、P₁(約68×69cm、深さ約56cm)・P₂(約114×77cm、深さ約38cm)・P₃(約107×72cm、深さ約26cm)・P₄(約80×86cm、深さ約26cm)・P₅(約99×89cm、深さ約41cm)・P₆(約72×84cm、深さ約37cm)・P₇(約107×89cm、深さ約44cm)・P₈(約72×79cm、深さ約60cm)である。

I区第26号掘立柱建物跡

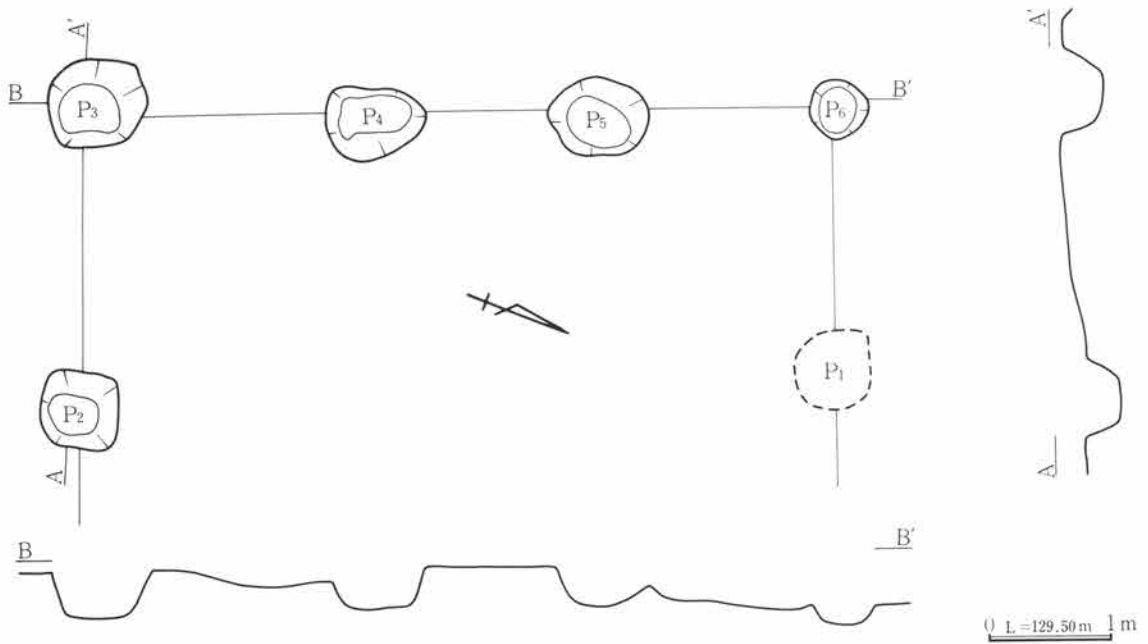


第551図 I区第26号掘立柱建物跡実測図

(所見) 当掘立柱建物跡は第216・219・225号住居跡と重複しているが、遺構の検出状態等から当掘立柱建物跡が古い段階の遺構と考えられる。東側は調査区外であり、検出したのは西側の6本の柱穴列である。柱穴配置から、南北方向に棟方向をもつ2間×2間の総柱建物が想定できる。建物の規模は、南北(桁)方向は約12尺(3.54m)で、約6尺(1.77m)に2つ間割りしており、東西(梁)方向は柱間が約6尺(1.77m)であることから、南北方向と同じ12尺であったろうと思われる。主軸方位は桁方向を基準とすると北-31°-西である。柱穴は基本的には方形の平面形を有し、規模はP₁(約91×103cm、深さ約47cm)・P₂(約63cm、深さ約36cm)・P₃(約74×69cm、深さ約45cm)・P₄(約70×78cm、深さ約26cm)・P₅(約98×69cm、深さ約42cm)・P₆(約87×76cm、深さ約56cm)である。

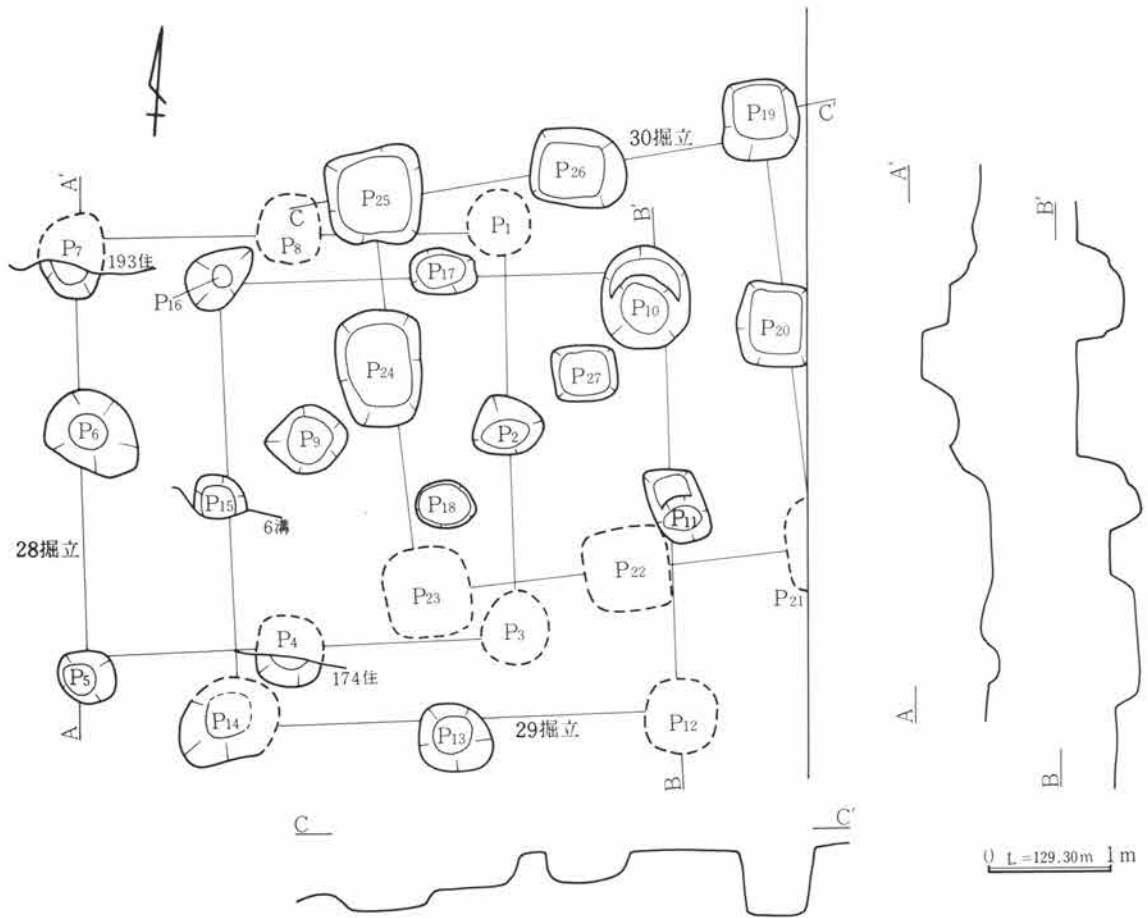
I区第27号掘立柱建物跡

(所見) 当掘立柱建物跡は第195・202・206号住居跡と重複しているが、検出状態から新旧関係を判断することはできなかった。当掘立柱建物跡の柱穴として検出したのは5本であり、配置から南北方向に棟方向をもつ3間×2間の建物が想定される。使用尺は曲尺と考えられるため、時期的には中世以降の建物である可能性が高い。建物の規模は南北(桁)方向は約19尺(5.76m)で、約6尺、6尺、7尺という間割りをしている。東西(梁)方向は1間のみ計測可能で、約7.5尺(2.27m)である。主軸方位は北-22°-西である。柱穴はほぼ楕円形を呈し、規模は、P₂(約59×52cm、深さ約30cm)・P₃(約79×70cm、深さ約37cm)・P₄(約78×58cm、深さ約32cm)・P₅(約78×62cm、深さ約30cm)・P₆(径約45cm、深さ約16cm)である。

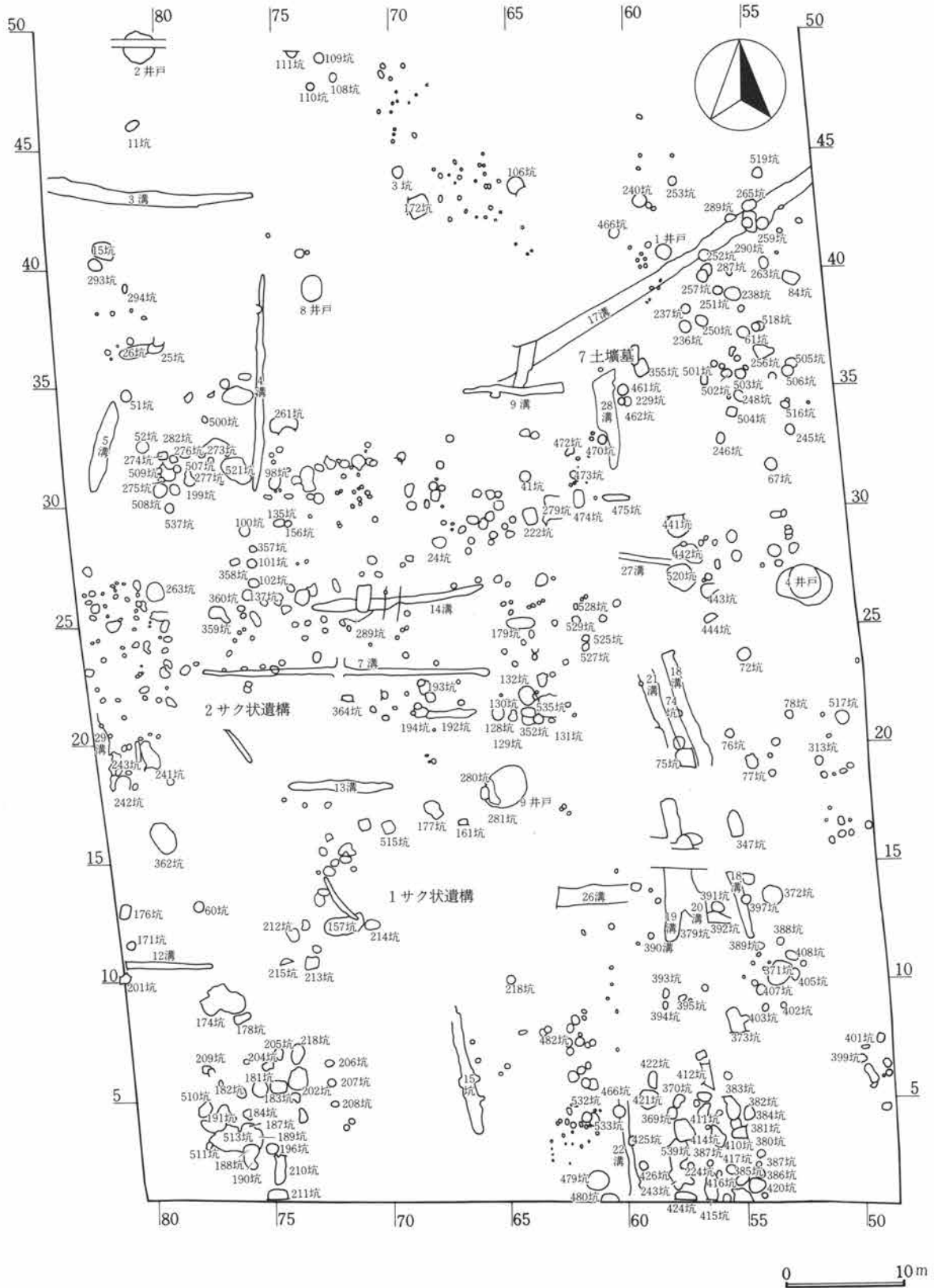


第552図 I区第27号掘立柱建物跡実測図

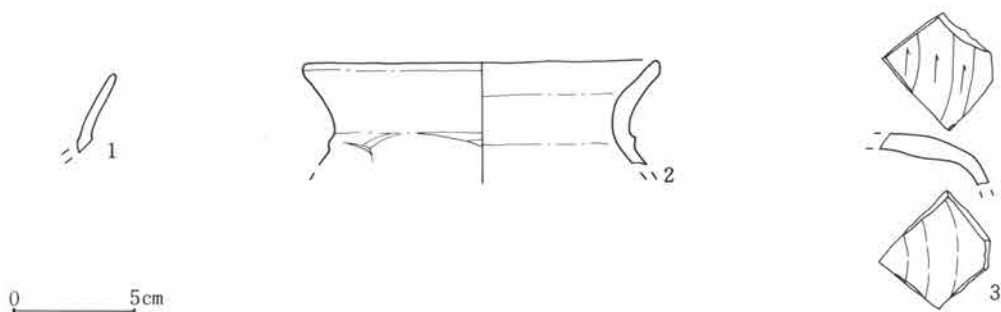
I区第28・29・30号掘立柱建物跡



第553図 I区第28・29・30号掘立柱建物跡実測図



第554図 I区土坑・井戸跡・溝状遺構配置図



第 555 図 I 区第 28 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

(所見) 第28・29・30号掘立柱建物跡は互いに重複する他に、第174・191・193号住居跡と重複している。遺構の検出状態から掘立柱建物跡の新旧関係を求めることはできず、また、住居跡との重複関係についても第193号住居跡→第30号掘立柱建物跡の関係は捉えられるが、その他については判然としない。

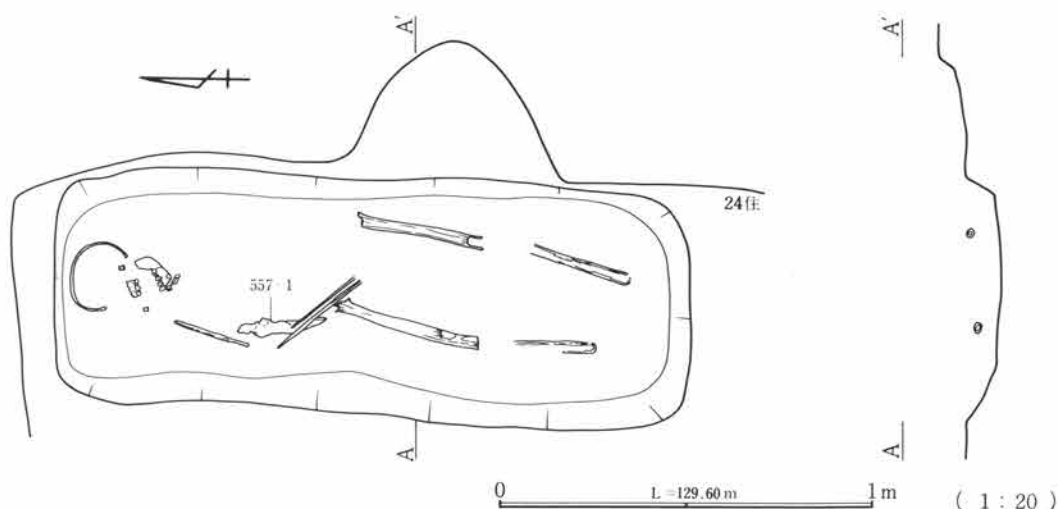
第28号掘立柱建物跡に伴う柱穴としたのは6本であり、配置から東西方向に棟方向をもつ2間×2間の総柱建物が想定できる。建物の規模は南北(梁)方向は約12尺(3.54m)で、西側については約5尺と7尺に間割りしている。南北(桁)方向は約12尺(3.54m)で、約6尺(1.77m)に2つ間割りしている。主軸方位は梁方向を基準とすると、北 -6° 西である。

第29号掘立柱建物跡に伴う柱穴は8本であるが、柱穴の配置から東西方向に棟方向をもつ2間×2間の総柱建物が想定できる。建物の規模は南北(梁)方向・東西(桁)方向共に約12尺(3.54m)で、約6尺(1.77m)に均等割りしている。主軸方位は梁方向を基準とすると、北 -7° 西である。

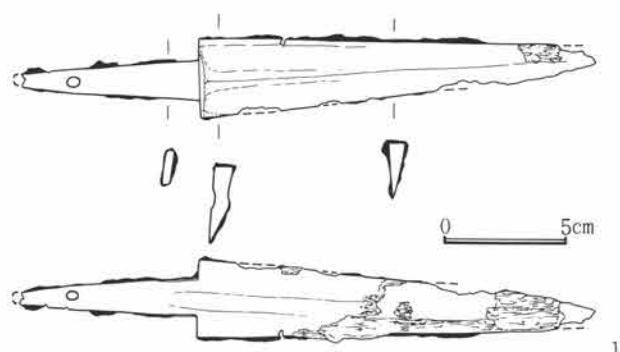
第30号掘立柱建物跡に伴う柱穴は6本であるが、柱穴の配置から第28・29号掘立柱建物跡同様に東西方向に棟方向をもつ2間×2間の総柱建物と考えられる。建物の規模は、南北(梁)方向・東西(桁)方向共に約10尺(2.95m)で、約5尺(1.46m)に2つ間割りしている。主軸方位は梁方向を基準とすると北 -12° 西である。柱穴は方形で、第28・29号掘立柱建物跡のものよりも規模が大きく掘り方もしっかりとしている。このことから当掘立柱建物跡が3棟の建物の中では時期的に先行する可能性が高い。

3. 土 墳 墓

I 区第 7 号土墳墓



第 556 図 I 区第 7 号土墳墓実測図



第557図 I区第7号土壌墓出土遺物実測図

(所見) 当土壌墓は第24号住居跡と重複しており、遺構の検出状態から第24号住居跡→当土壌墓という新旧関係が捉えられる。充填していた土には浅間B軽石は確認されておらず、古代の遺構である可能性が高い。土壌墓の平面形状は長方形で、規模は約169×65cm、深さ約10cmである。長軸方向を基準として主軸方位を計測すると北-0°-西である。人骨の残存状態はあまり良好ではないが、頭蓋骨・顎及び上下の歯、さら

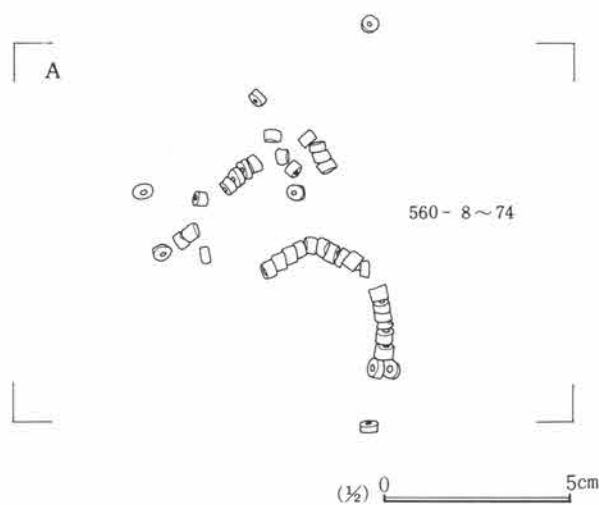
りに腕の一部と両足の骨が残存していたことから、顔を西に向けて伸展の状態で埋葬されていた。また、残存した骨の頭蓋骨から足先までの長さは、ほぼ土坑の長軸と一致していることから土坑が被葬者の身長に合わせて掘削されていることがわかる。副葬遺物は右脇から出土した大刀子(第557図1)だけである。

4. 祭祀遺構

I区第1号祭祀遺構(355号土坑)

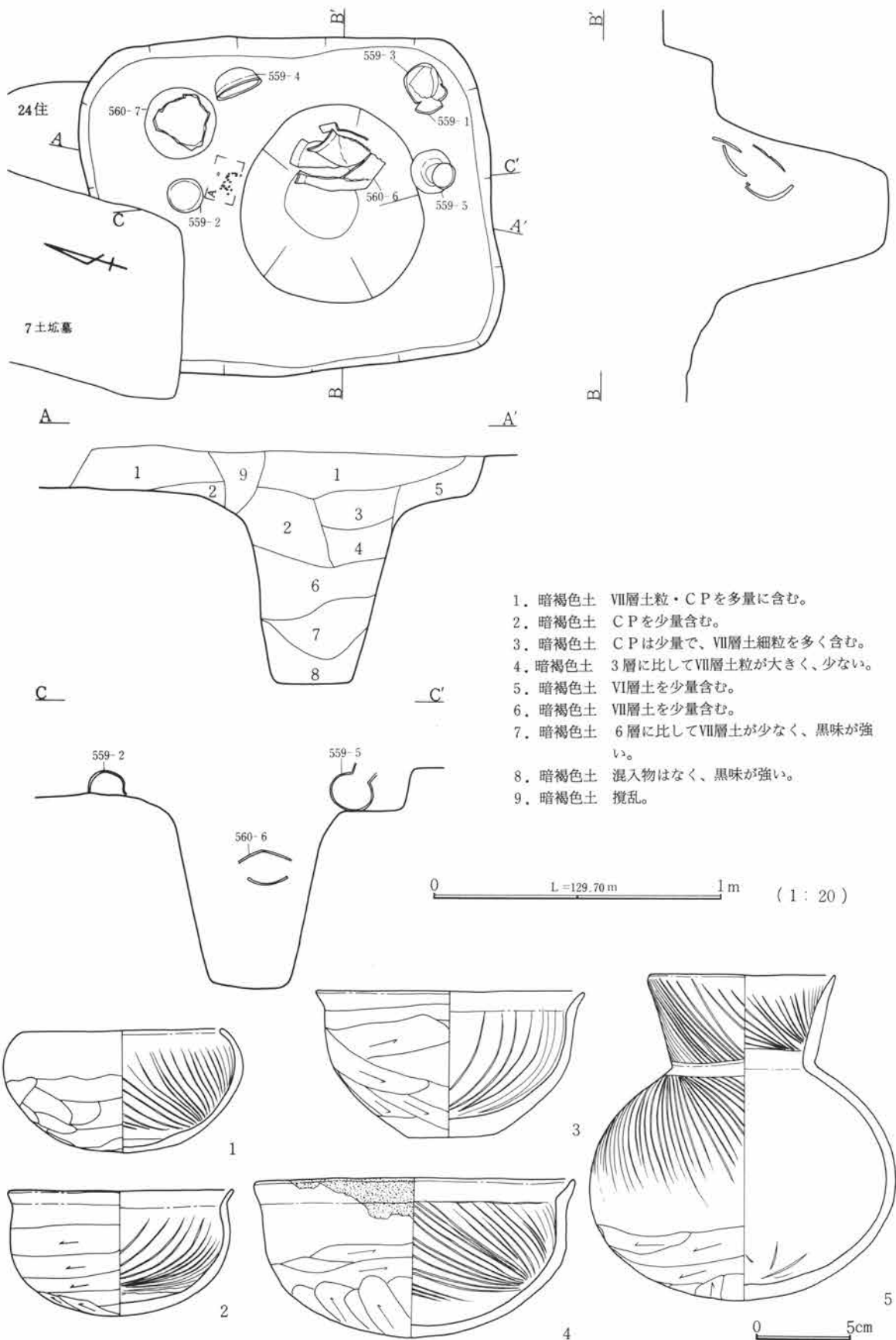
(所見) 当祭祀遺構は第24号住居跡及び第7号土壌墓と重複している。遺構の検出状態等からこの3遺構の新旧関係をみると、当祭祀遺構→第24号住居跡→第7号土壌墓という関係が捉えられる。当遺構を祭祀遺構と位置付けた条件は、後述する遺物の出土状況及び同時期の住居跡が当調査区からは検出されておらず、特異な存在であることによる。遺構の確認は第24号住居跡の床面で行ったもので、平面プランは明瞭に捉えることができた。遺構の主体をなすのは隅丸長方形を呈する土坑で、規模は約140×116cm、深さ約18cmで、長軸方位が北-20°-西に振れている。この土坑中央やや南寄りの位置には、さらに径約73cm、深さ60cmの円形のピットが掘り込まれた2段の構成となっている。土坑及びピットの埋没は連続しており、両者が一連の遺構であることは確実である。

遺物は、第559図に示したようにほとんどが完形でしかも置かれたような状態で出土している。出土遺物の構成は埴4点・甕1点・甑1点・埴1点・白玉67点であり、白玉を除いていずれも住居跡等から普遍的に出土する生活遺物である。第560図8~74に示した白玉の出土状態は、第558図に示したように一連となってピット北側底面から出土しており、糸状のものでつながれた状態で置かれていたことは確実である。これらの白玉は総て滑石製で大きさ(径・重さ)が揃っており、一括して製作されたものと思われる。その他、第560図6の土師器甕の出土状態からは、この甕が出土位置に埋設されたものではなく、本来はピット付近に置かれていたものが縁から転がり落ちた状況が窺える。つまり、土坑及びピットは土器設置後も開口していたことを示しており、土器は露呈した状態が想定できる。



第558図 I区第1号祭祀遺構微細図

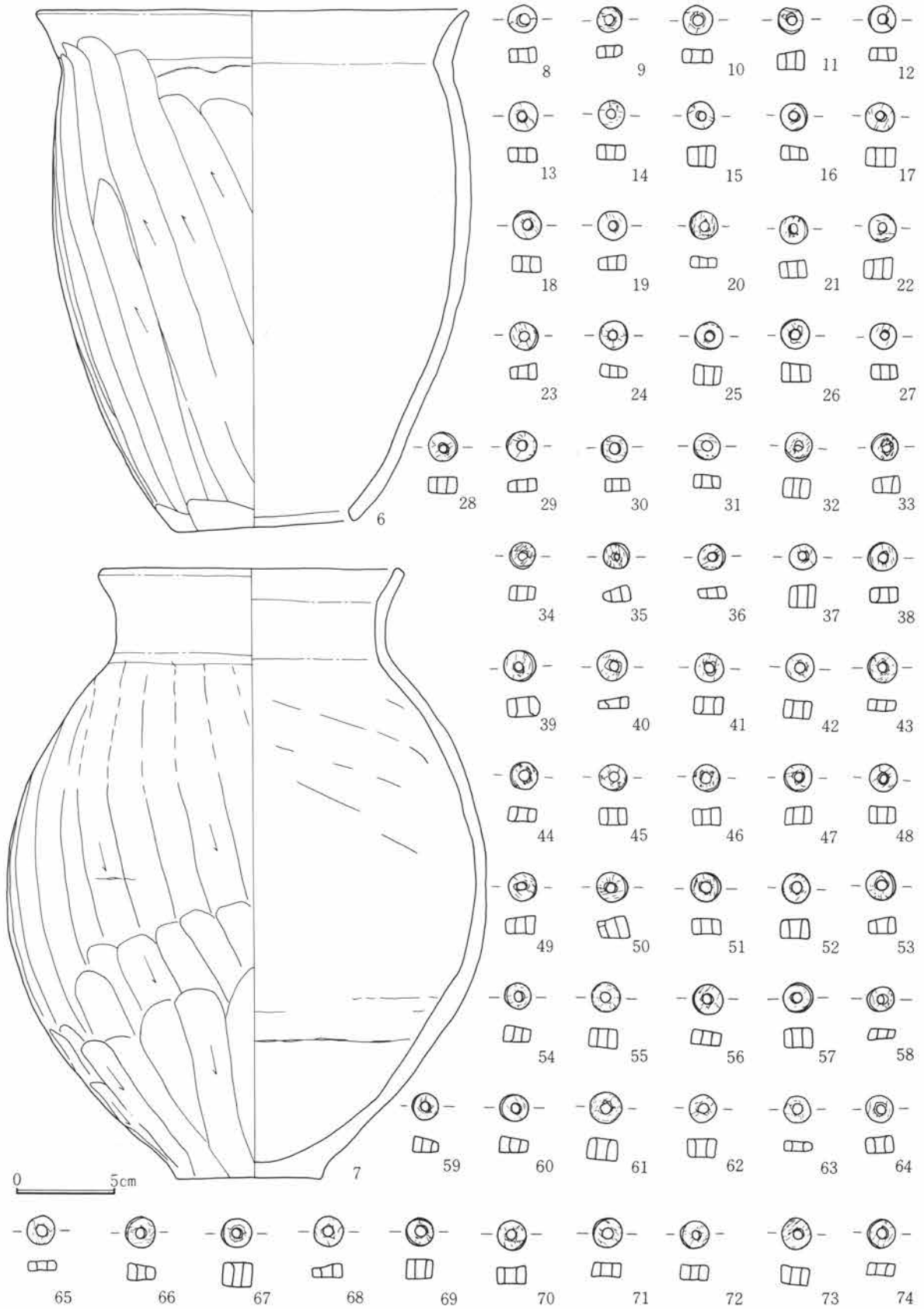
第4章 検出された遺構・遺物



1. 暗褐色土 VII層土粒・CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 CPを少量含む。
3. 暗褐色土 CPは少量で、VII層土細粒を多く含む。
4. 暗褐色土 3層に比してVII層土粒が大きく、少ない。
5. 暗褐色土 VI層土を少量含む。
6. 暗褐色土 VII層土を少量含む。
7. 暗褐色土 6層に比してVII層土が少なく、黒味が強い。
8. 暗褐色土 混入物はなく、黒味が強い。
9. 暗褐色土 攪乱。

第559図 I区第1号祭祀遺構・遺物実測図(1)

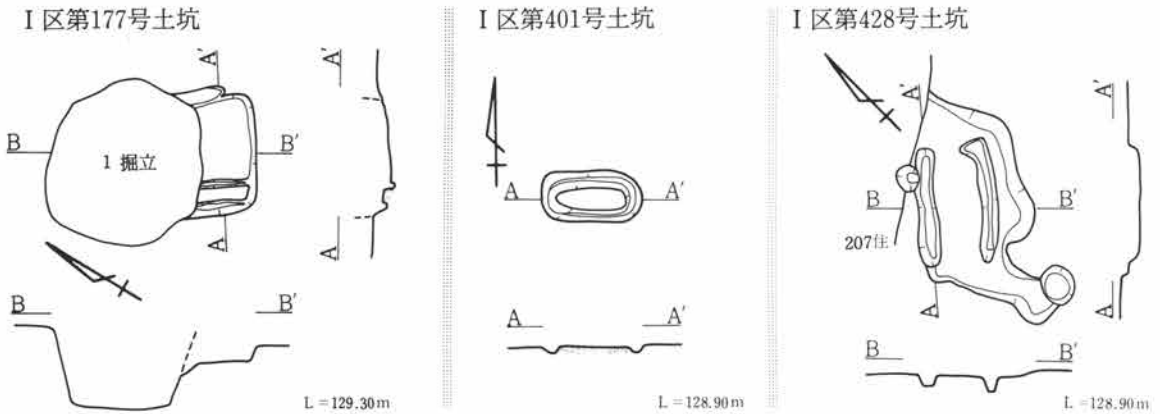
第2節 検出された遺構・遺物



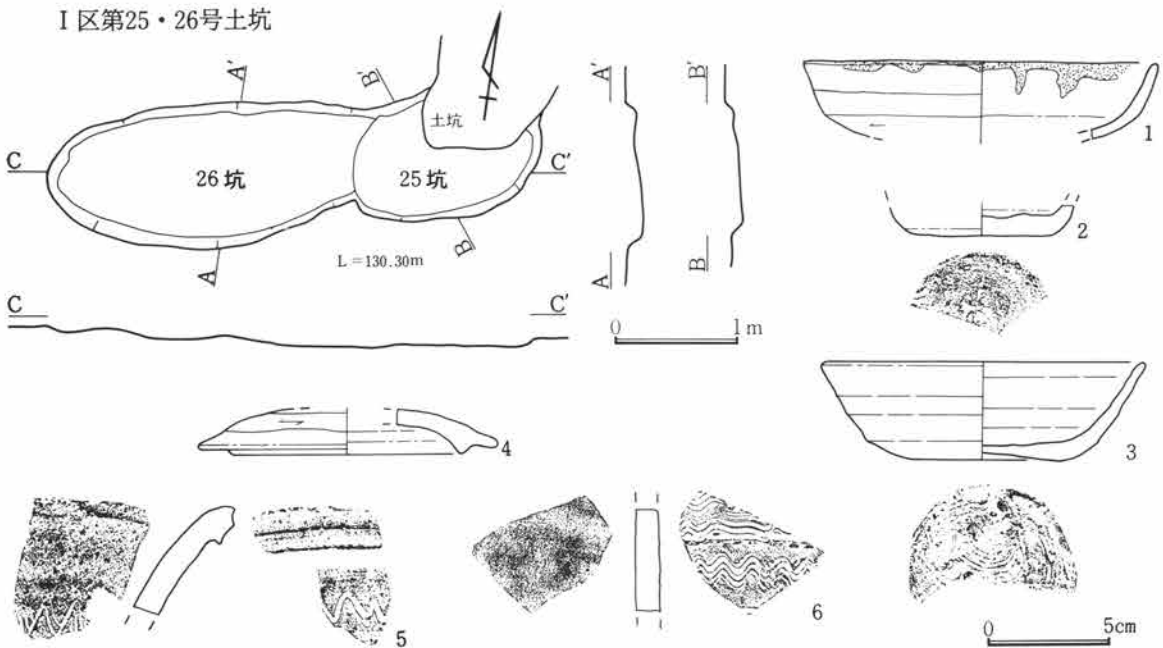
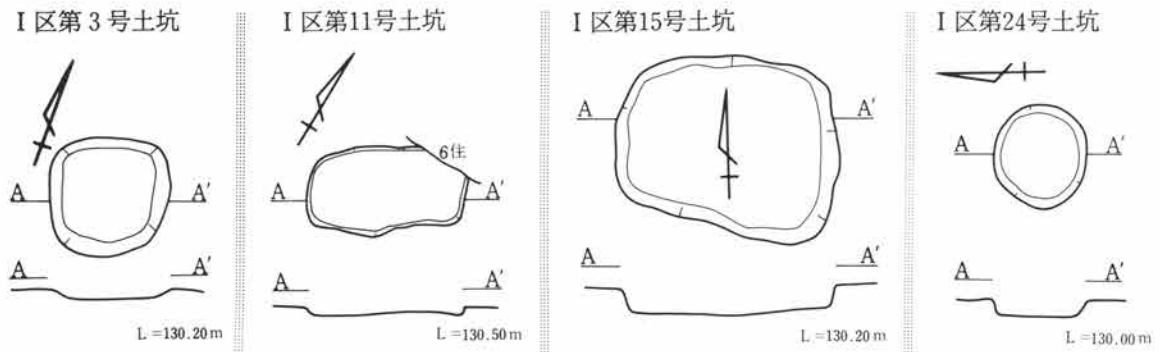
(8~74 1/2)

第560図 I区第1号祭祀遺構遺物実測図(2)

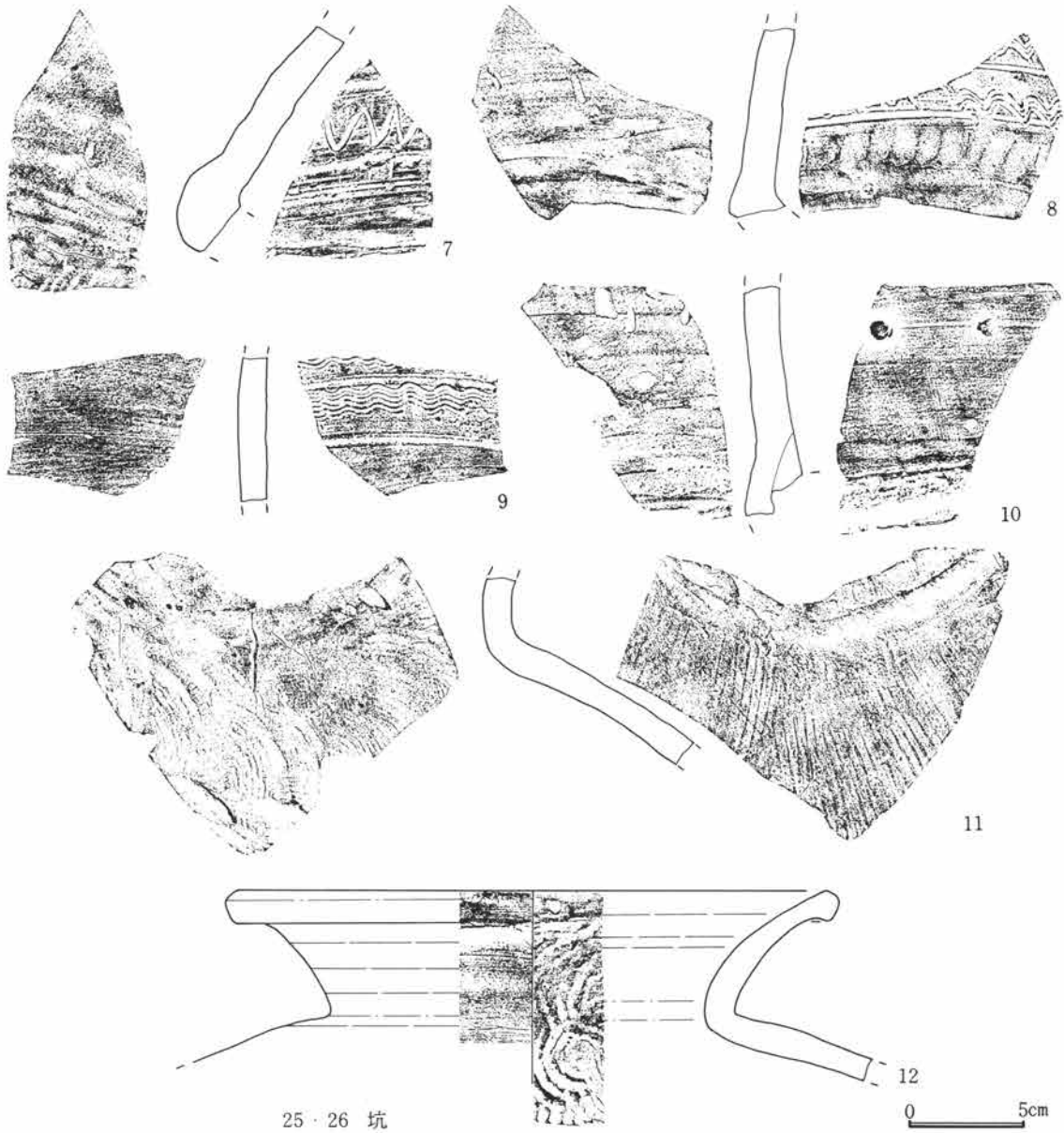
5. 土 坑



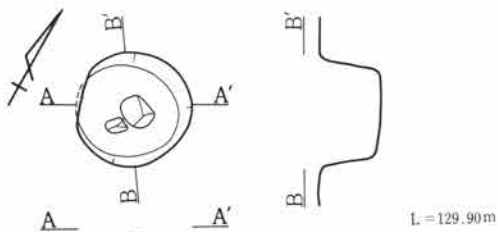
(所見) 第177・401・428号土坑として掲載したものは、本来土坑として扱うべき性格のものではなく、生産遺構である。これらの遺構はカマドの袖石等の部材を切り出した痕跡と考えられるものである。いずれも砂岩質の地山面から細い溝状に掘り下げ、溝で区画した部分を切り出そうとしたものである。ただ当調査区で検出した遺構に関しては、部材の切り出しに成功してはならず、途中で放棄された状態である。同様の遺構は鳥羽遺跡に多数検出されている。



第561図 I区土坑・出土遺物実測図(1)

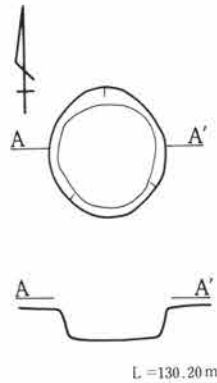


I 区第41号土坑

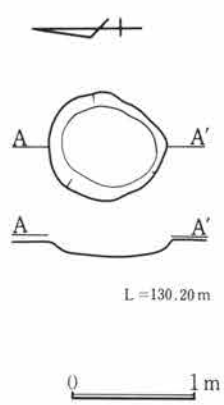


1. 暗褐色土 砂質。
2. 暗褐色土 CPを少量含む。
3. 暗褐色土 2層に比して黒味が強い。
4. 暗褐色土 VI層土小ブロックを少量含む。
5. 黒色土ブロック

I 区第51号土坑



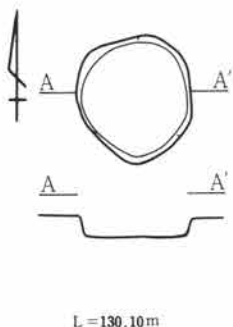
I 区第52号土坑



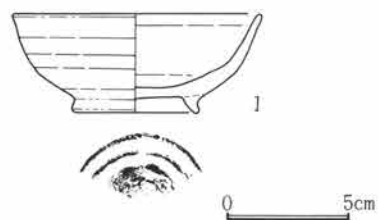
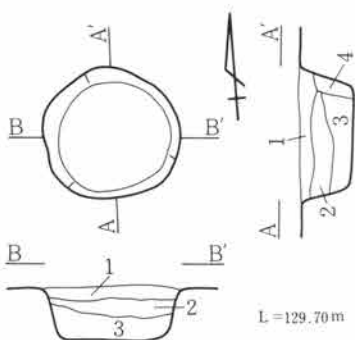
第 562 図 I 区土坑・出土遺物実測図 (2)

第4章 検出された遺構・遺物

I区第60号土坑

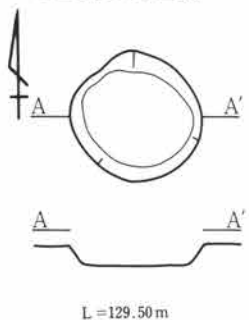


I区第61号土坑

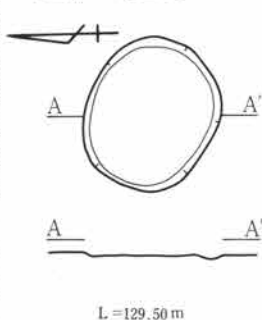


1. 暗褐色土 VI層土を多量に含む。
2. 暗褐色土 VI層土を少量含む。
3. 暗褐色土 VI層土小ブロックを少量含む。
4. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。

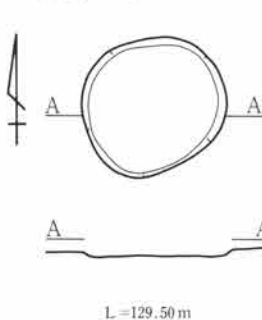
I区第67号土坑



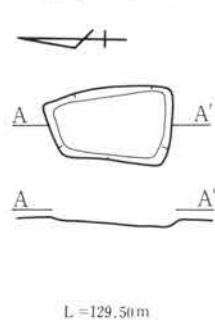
I区第69号土坑



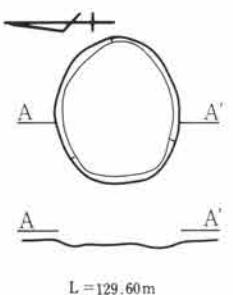
I区第72号土坑



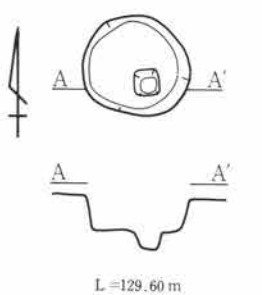
I区第74号土坑



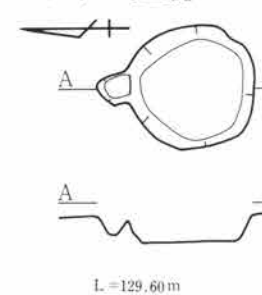
I区第75号土坑



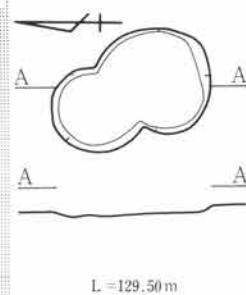
I区第76号土坑



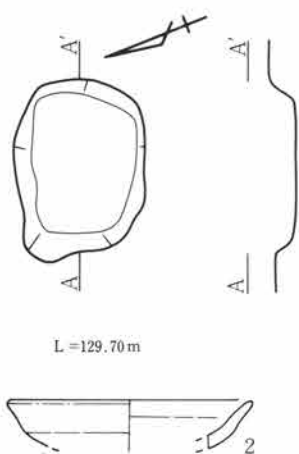
I区第77号土坑



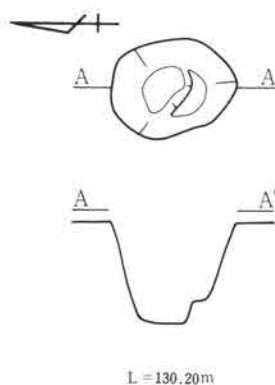
I区第78号土坑



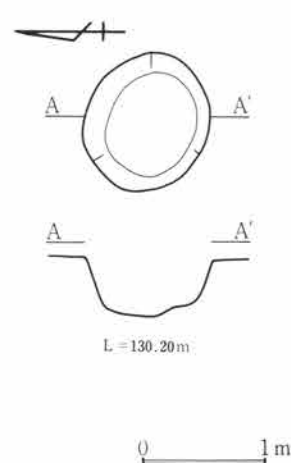
I区第84号土坑



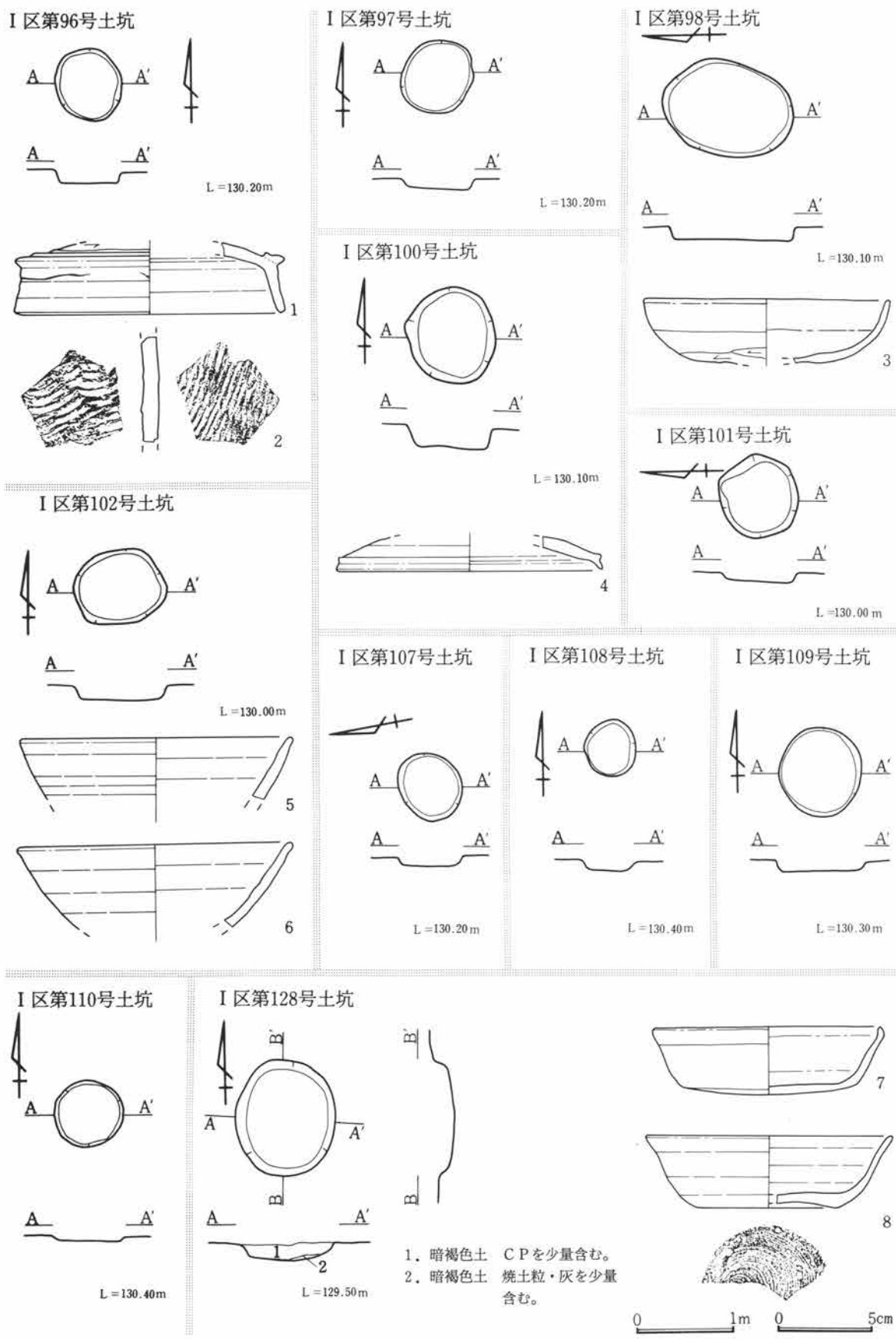
I区第91号土坑



I区第92号土坑



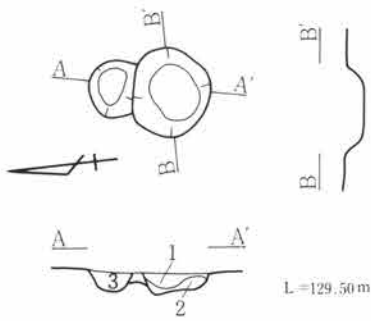
第563図 I区土坑・出土遺物実測図(3)



第564図 I区土坑・出土遺物実測図(4)

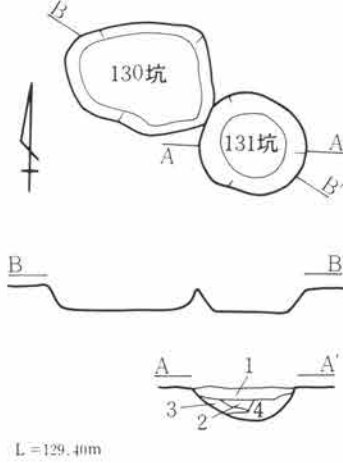
第4章 検出された遺構・遺物

I区第129号土坑



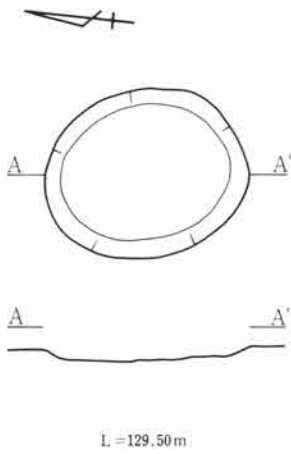
1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 CPを微量含み、黒味が増し粘性強い。
3. 暗褐色土 CP・焼土粒を少量含む。

I区第130・131号土坑

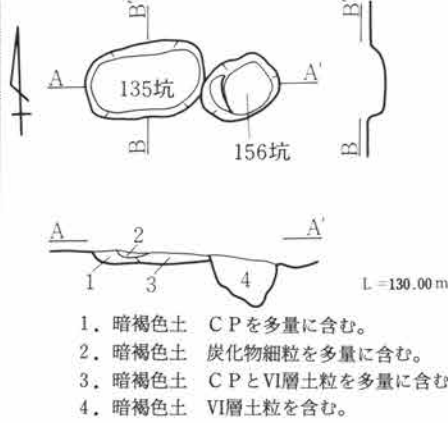


1. 暗褐色土 CP・焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 灰を少量含む。
4. 暗褐色土 CPを含まず、黒味が強く、やや粘性あり。

I区第132号土坑

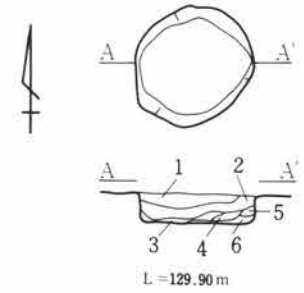


I区第135・156号土坑



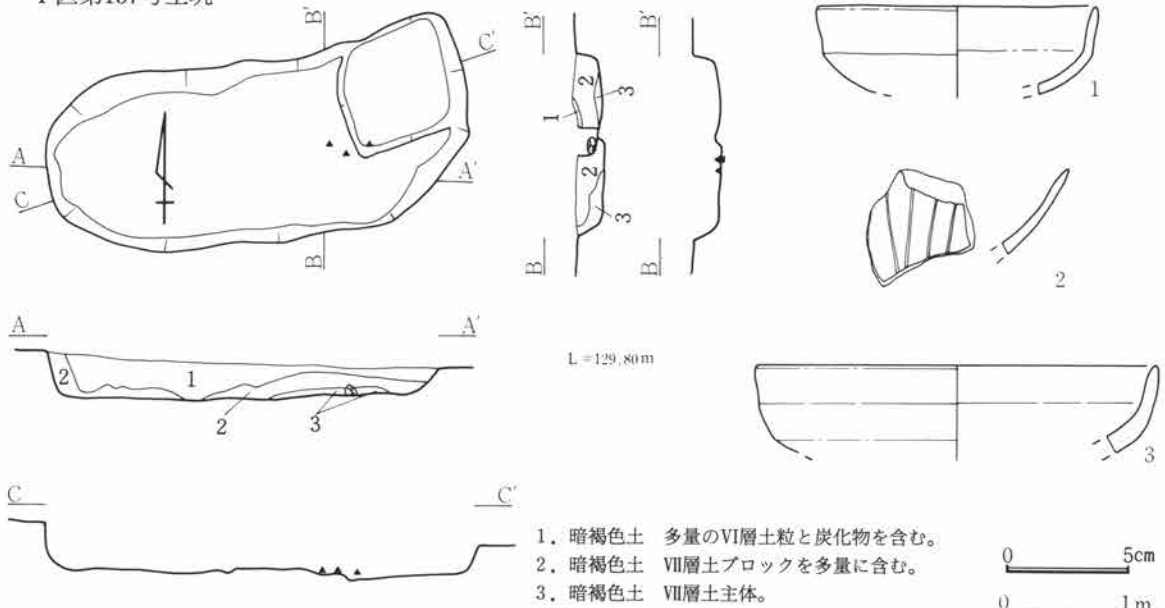
1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 炭化物細粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 CPとVI層土粒を多量に含む。
4. 暗褐色土 VI層土粒を含む。

I区第137号土坑



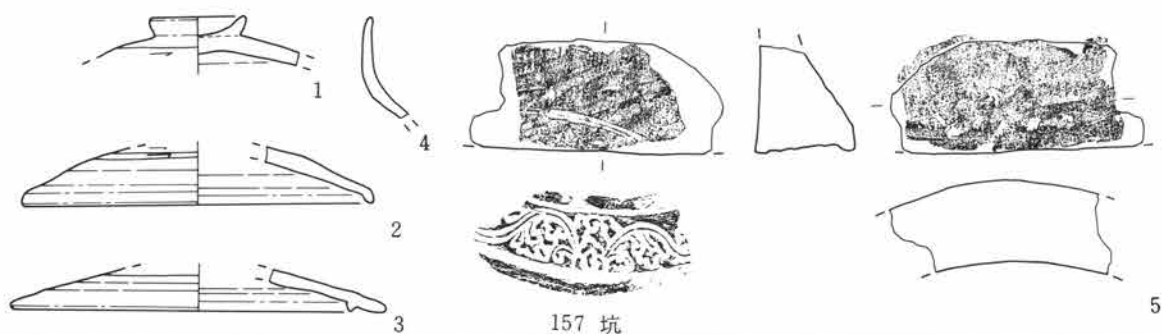
1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 炭化物を含み、1層に比してしまりがあがる。
3. 暗褐色土 焼土ブロックを含み、しまりがあがる。
4. 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物を少量含む。
5. 暗褐色土 焼土ブロックは少量で、炭化物・灰を多量に含む。
6. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
7. 暗褐色土 焼土・炭化物は含まず、粘性がある。

I区第157号土坑



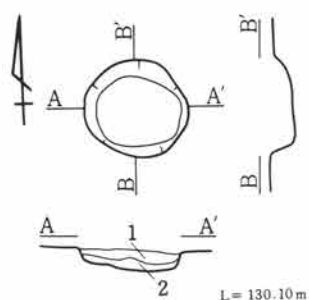
1. 暗褐色土 多量のVI層土粒と炭化物を含む。
2. 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土 VII層土主体。

第565図 I区土坑・出土遺物実測図(5)



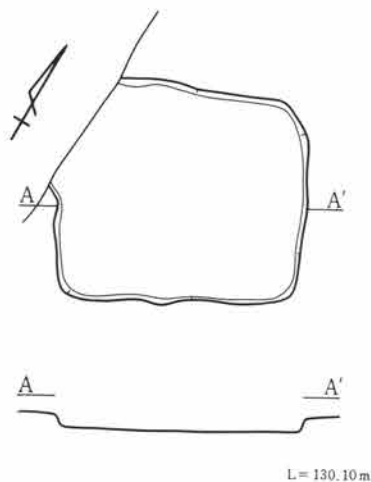
157 坑

I 区第171号土坑

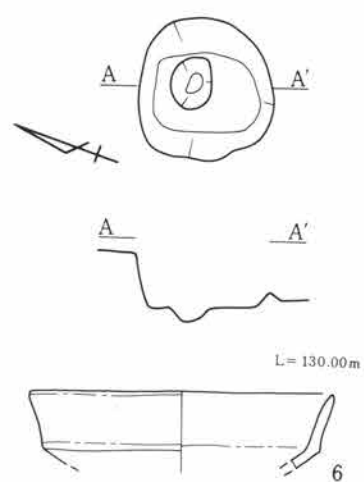


1. 暗褐色土 礫を多量、VI層土粒を少量含み、粘性が弱い。
2. 暗褐色土 礫は少量で、VI層土粒ブロックを多量に含み褐色が強い。

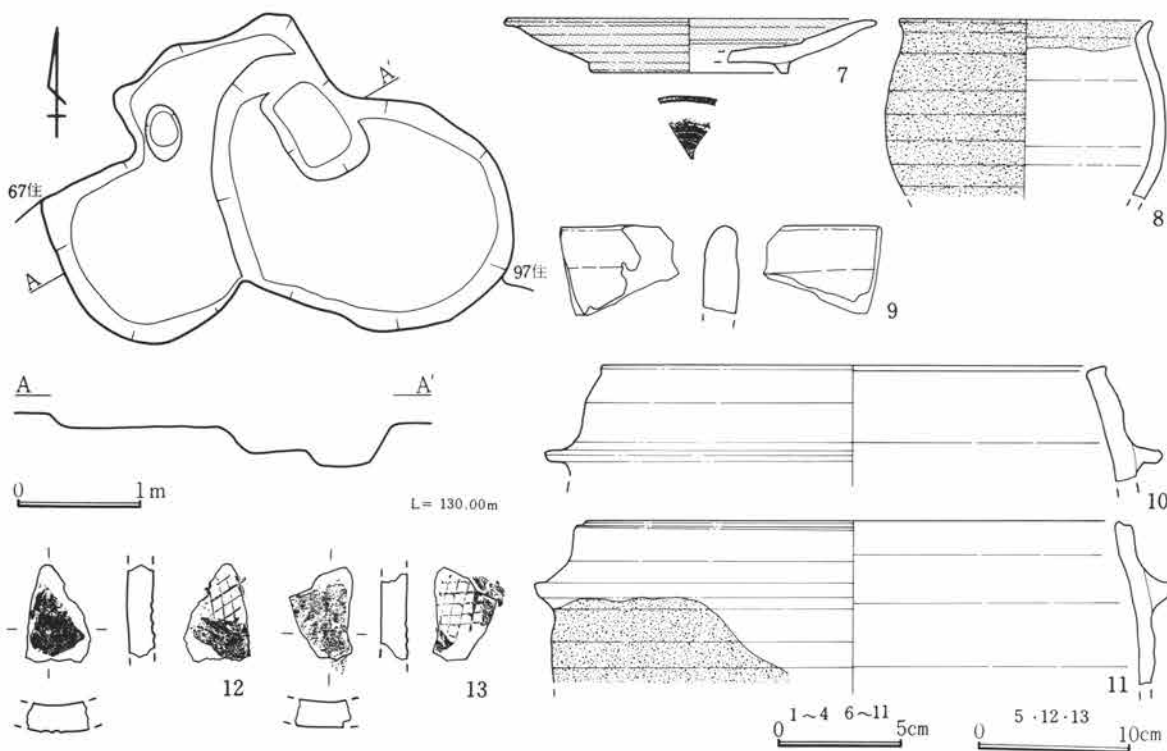
I 区第172号土坑



I 区第173号土坑



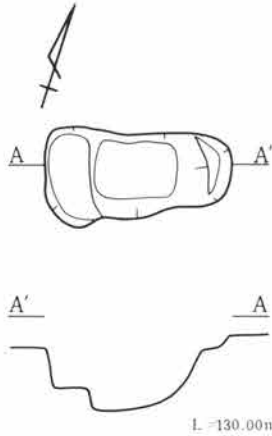
I 区第174号土坑



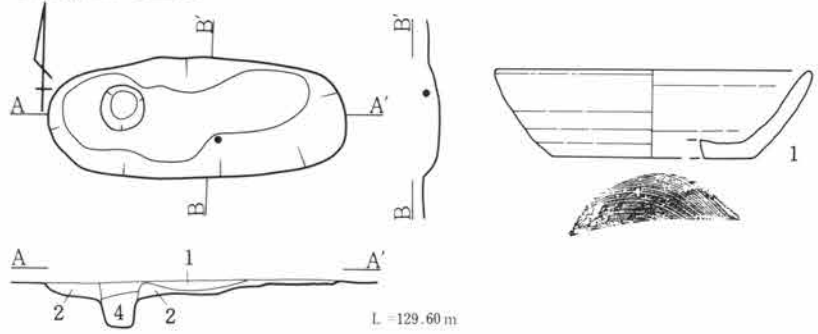
第566図 I区土坑・出土遺物実測図(6)

第4章 検出された遺構・遺物

I区第178号土坑

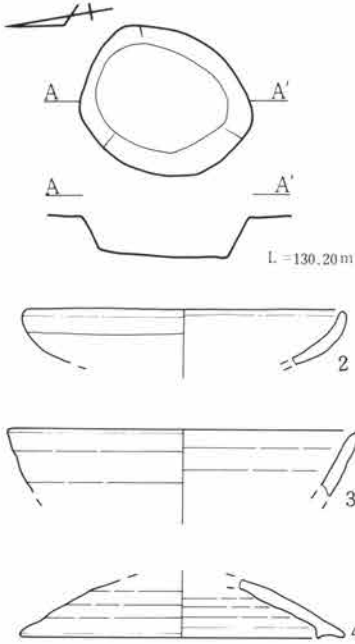


I区第179号土坑

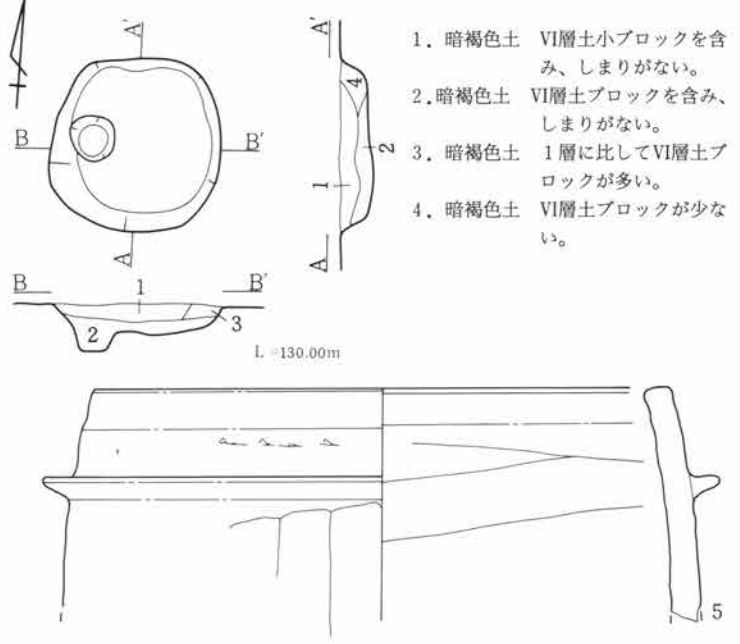


1. 暗褐色土 CP・焼土粒を少量含み、粘性・しまり共に弱い。
2. 暗褐色土 CPは1層と等量で、焼土粒は少なく、炭化物を微量含み、粘性は強い。
3. 暗褐色土 VI層土粒を少量含み、粘性は1・2層の間。
4. 暗褐色土 VI層土粒・ブロックを多量に含む。

I区第180号土坑

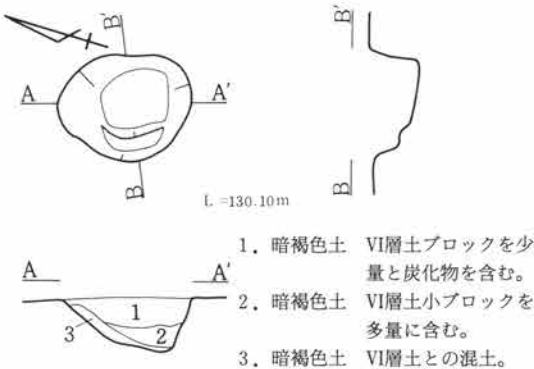


I区第181号土坑



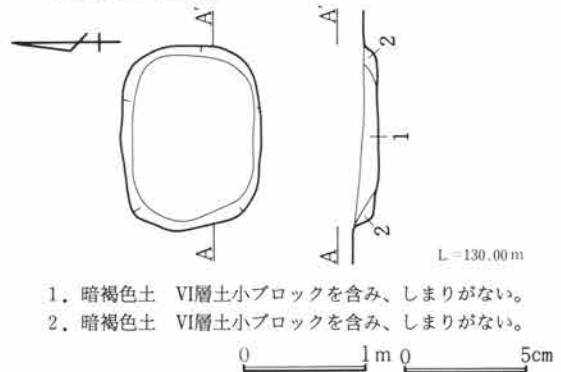
1. 暗褐色土 VI層土小ブロックを含み、しまりがない。
2. 暗褐色土 VI層土ブロックを含み、しまりがない。
3. 暗褐色土 1層に比してVI層土ブロックが多い。
4. 暗褐色土 VI層土ブロックが少ない。

I区第182号土坑



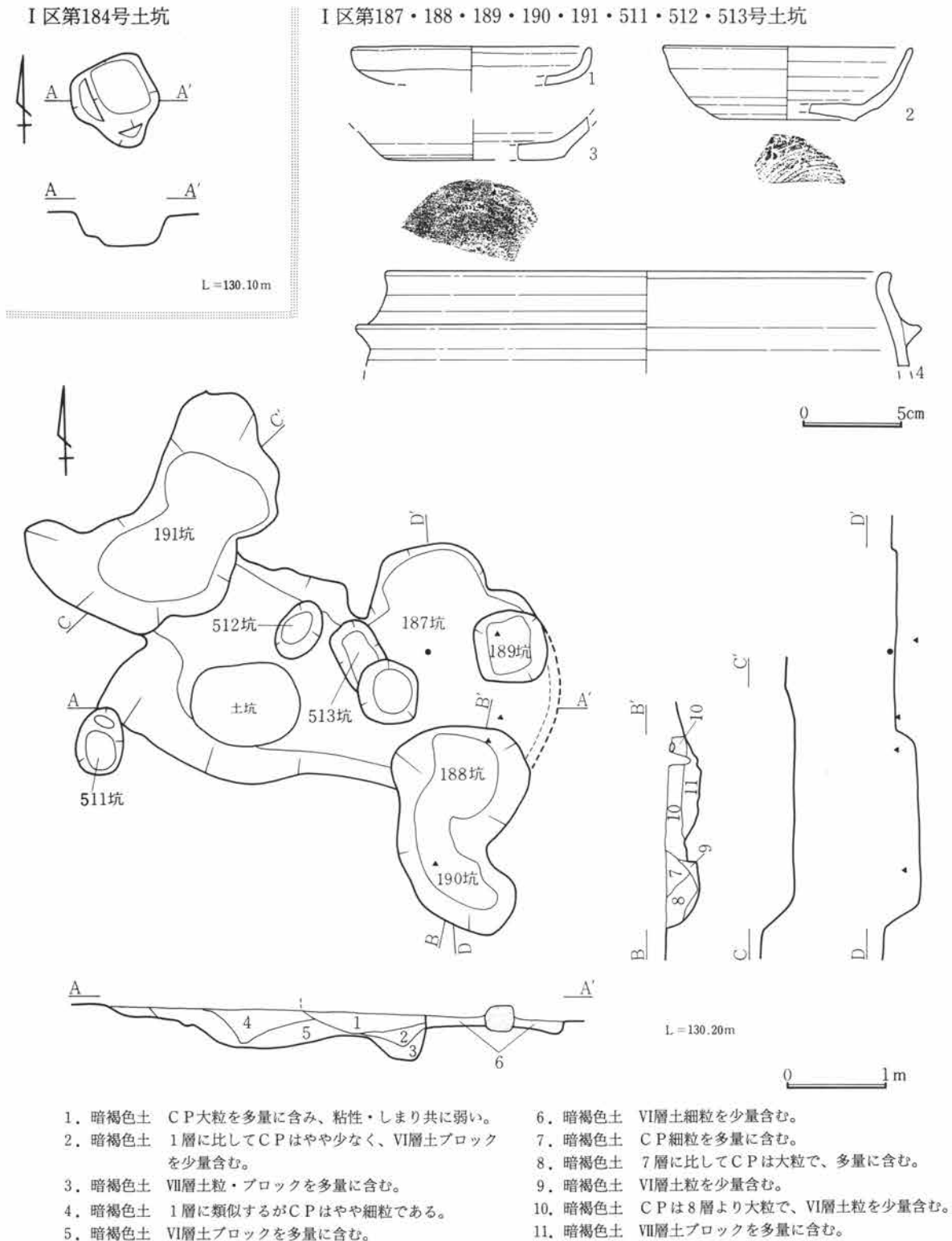
1. 暗褐色土 VI層土ブロックを少量と炭化物を含む。
2. 暗褐色土 VI層土小ブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土 VI層土との混土。

I区第183号土坑



1. 暗褐色土 VI層土小ブロックを含み、しまりがない。
2. 暗褐色土 VI層土小ブロックを含み、しまりがない。

第567図 I区土坑・出土遺物実測図(7)

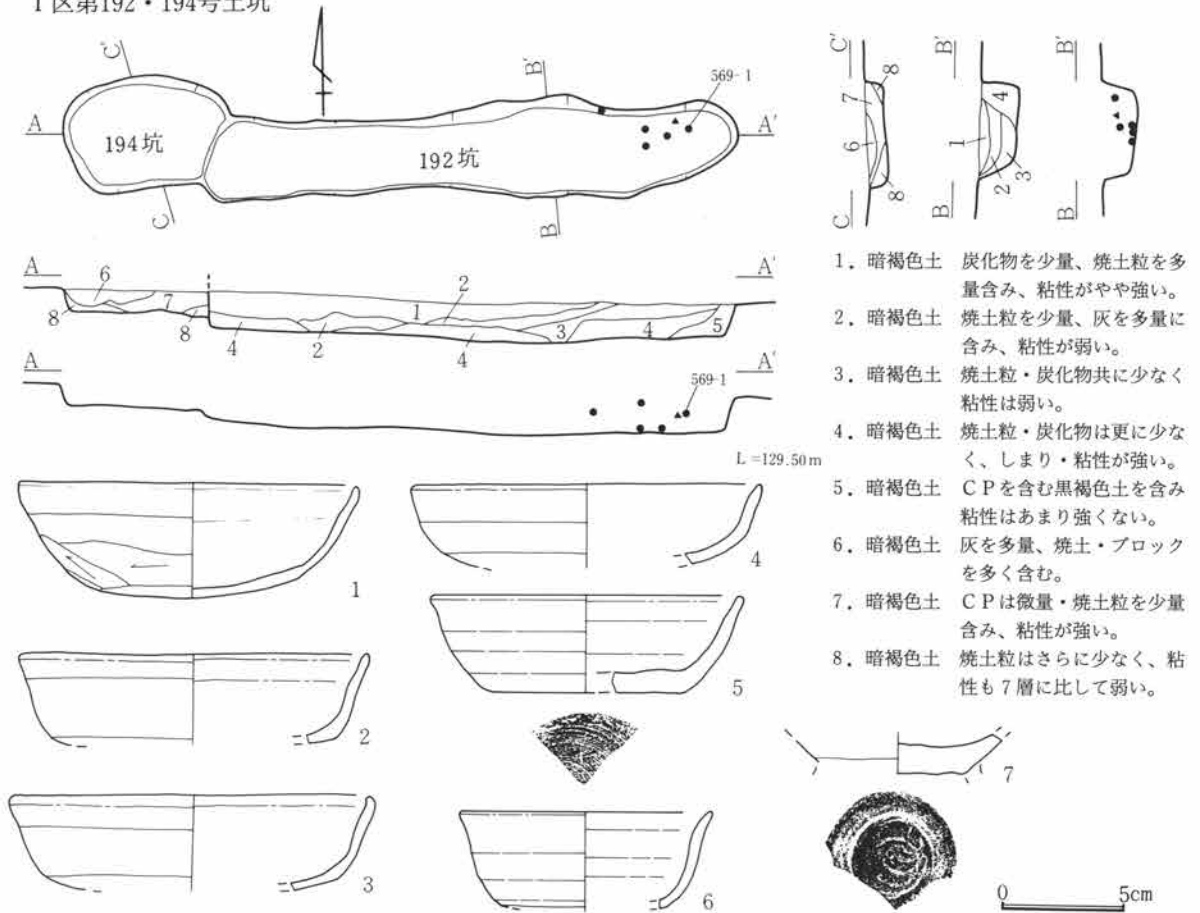


第568図 I区土坑・出土遺物実測図(8)

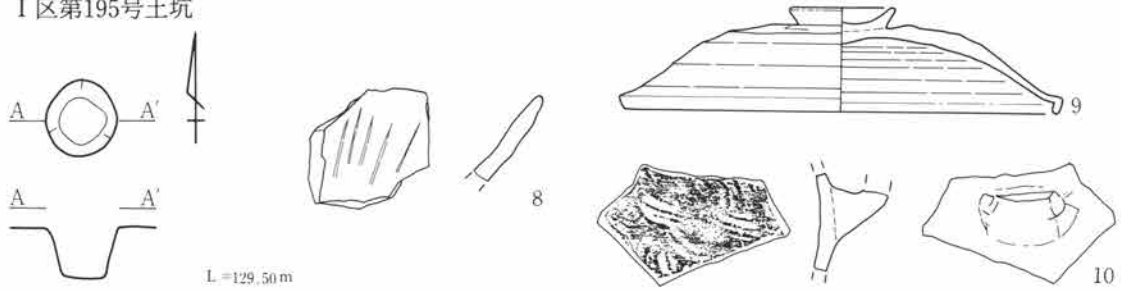
ここに掲載した土坑は、遺物の出土が顕著である場合や平面形等が比較的良好に捉えられるものについて個別に抽出したもので、それ以外の土坑については付図にまとめて掲載した。また、規模等の計測値については本文後半に一覧表化した。個別遺構についての記述はほとんど行っていないが、必要なものについては表の後半にまとめて記述した。

第4章 検出された遺構・遺物

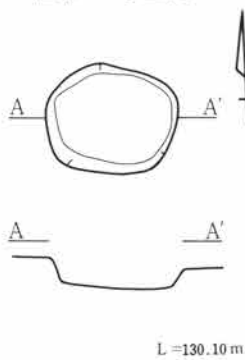
I区第192・194号土坑



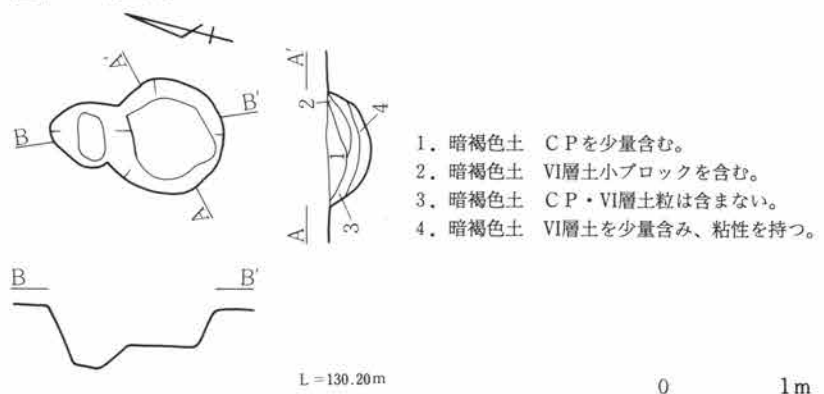
I区第195号土坑



I区第196号土坑

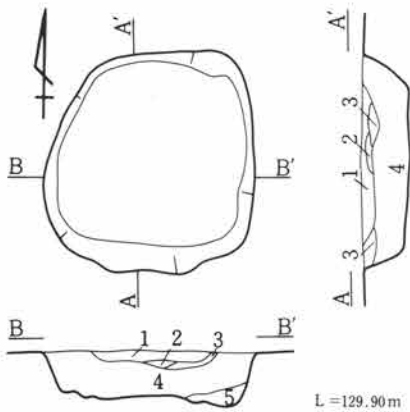


I区第199号土坑



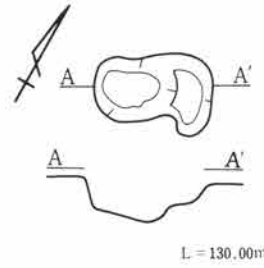
第569図 I区土坑・出土遺物実測図(9)

I区第202号土坑

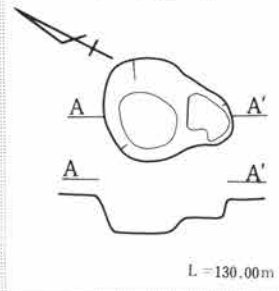


1. 暗褐色土 CP・焼土粒・灰を含む。
2. 暗褐色土 CPは微量で、灰との混土。
3. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
4. 暗褐色土 焼土粒を微量、炭化物・VII層土ブロックを含む。
5. 暗褐色土 4層に類似するが、焼土・灰を含まない。

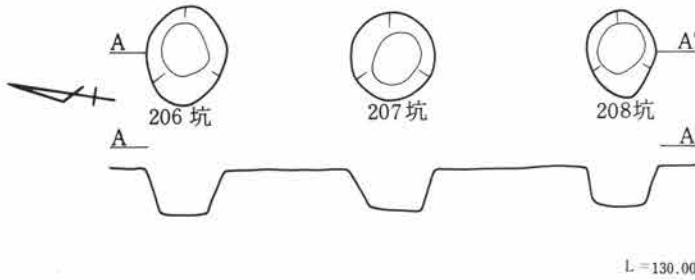
I区第204号土坑



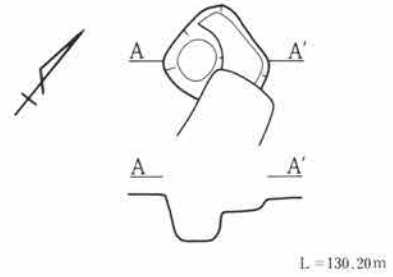
I区第205号土坑



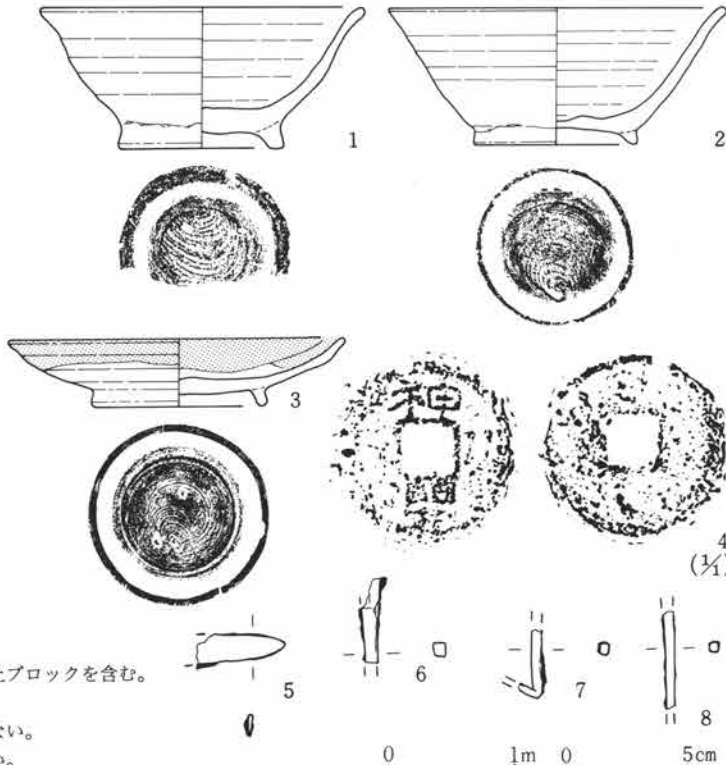
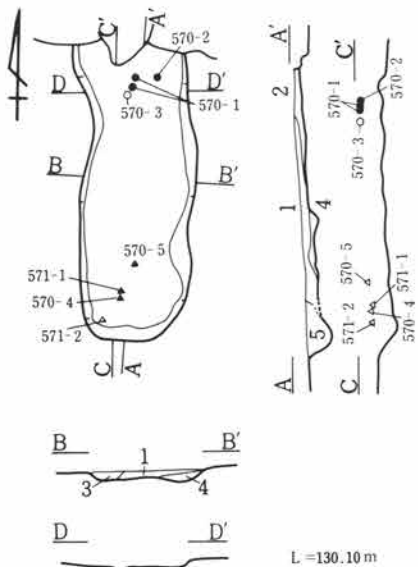
I区第206・207・208号土坑



I区第209号土坑

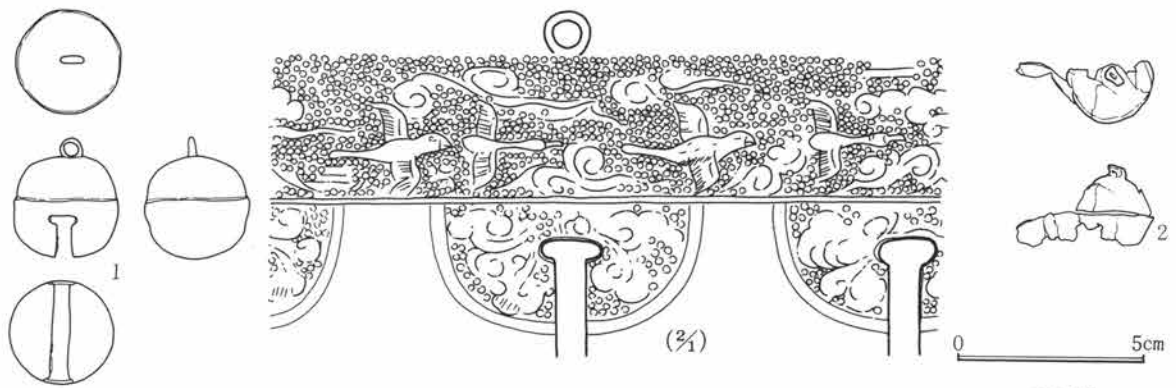


I区第210号土坑



1. 暗褐色土 CPを多量に含み、しまりが無い。
2. 暗褐色土 CPは1層に比して少なく、VI層土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 CP・VI層土粒を少量含む。
4. 暗褐色土 CPを微量含み、VI層土粒は含まない。
5. 暗褐色土 CPを含み、ざらつき、黒味が強い。

第570図 I区土坑・出土遺物実測図(10)



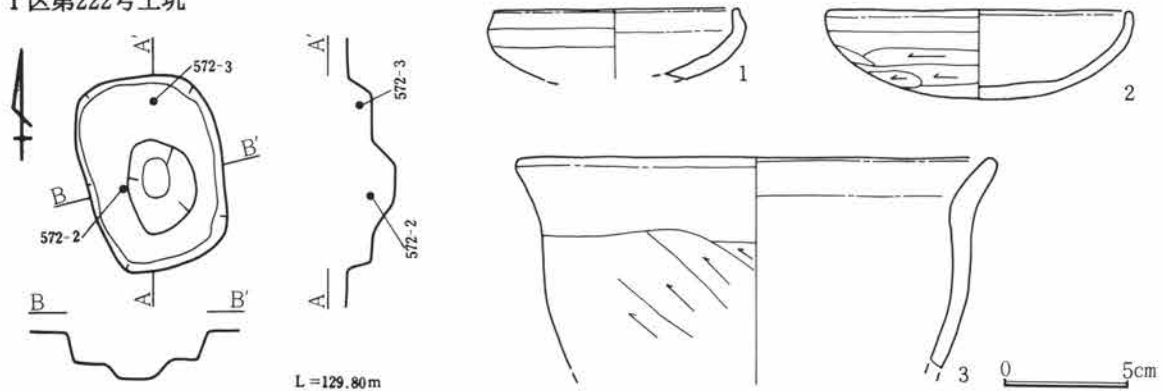
第571図 I区土坑・出土遺物実測図(11)

210 坑

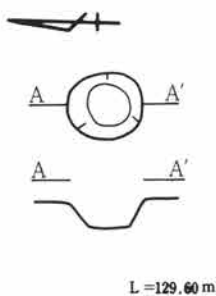
(所見) 当土坑は北側が攪乱され失われているが、南北に長軸をもつ楕円形を呈すると考えられる。遺構の確認は黄褐色を呈するローム質のVI層土中であり、浅間C軽石を多量に含む暗褐色土を主体とする覆土は容易に確認することができた。遺構確認面が低かったために残存状態は不良であるが、底面付近から特異な遺物出土がみられた。

出土した遺物は、須恵器埴2点・灰釉陶器皿1点・銭(神功開寶)1点・青銅製鈴2点・刀子1点・釘3点である。第570図1～3は北側に集中して出土しており、第570図4・5及び第571図1・2の金属製遺物は南寄りに集中しており、中間からの遺物出土は認められない。須恵器と灰釉陶器の組み合わせ及び出土状態は、上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)に報告したG区第7号土墳墓のあり方に類似している。また、出土土器の年代観と合わない神功開寶の存在や、表面に鳥等の毛彫りを施した鈴の出土等、祭祀的な色彩が強く感じられるが、一方でG区第7号土墳墓との類似点を考慮すると土墳墓の可能性が高い。

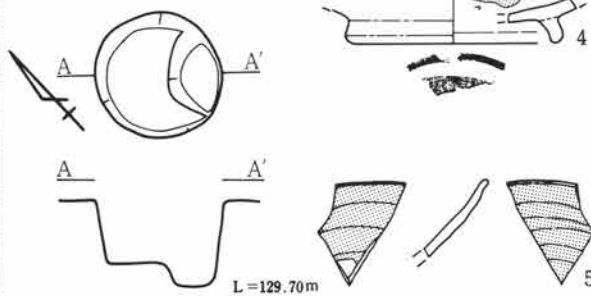
I区第222号土坑



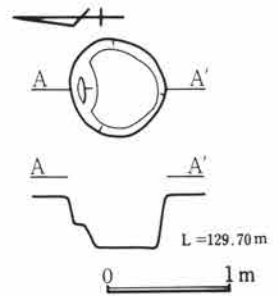
I区第224号土坑



I区第236号土坑



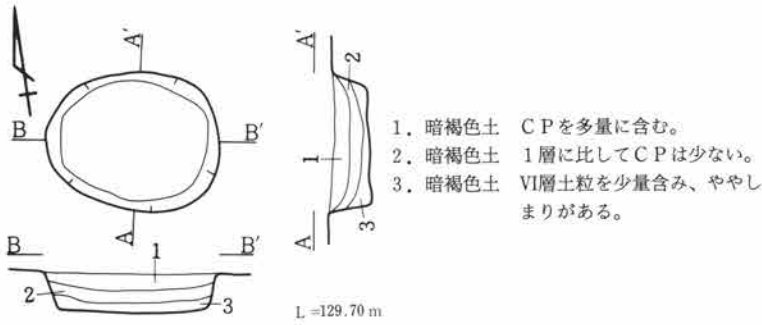
I区第237号土坑



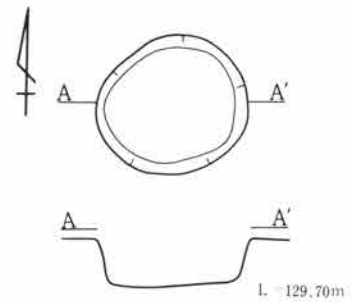
第572図 I区土坑・出土遺物実測図(12)

第2節 検出された遺構・遺物

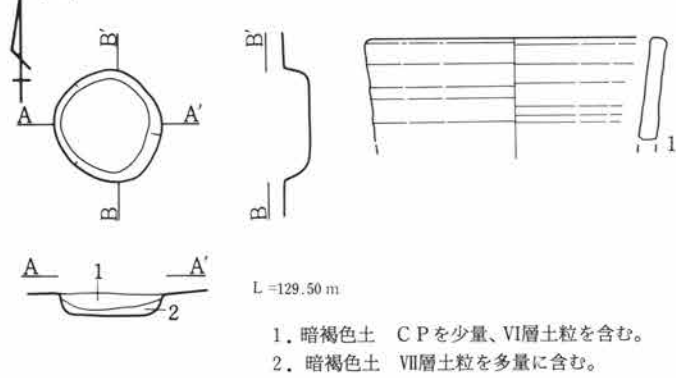
I区第238号土坑



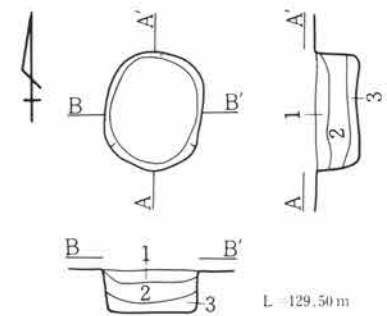
I区第240号土坑



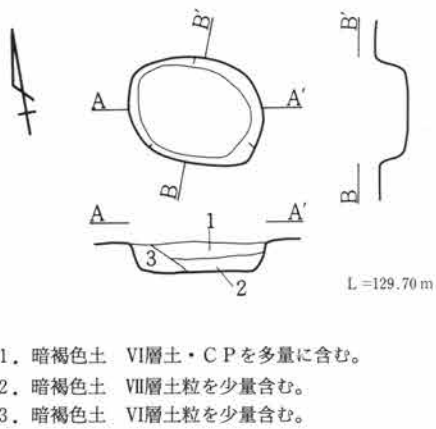
I区第245号土坑



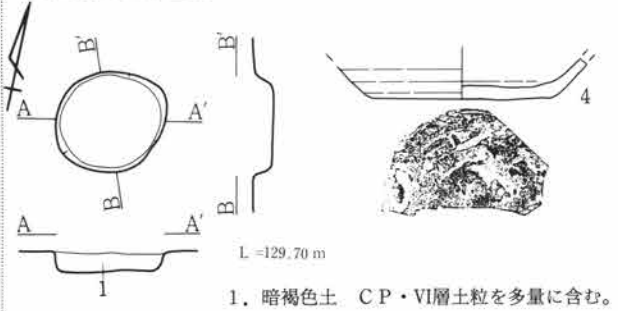
I区第246号土坑



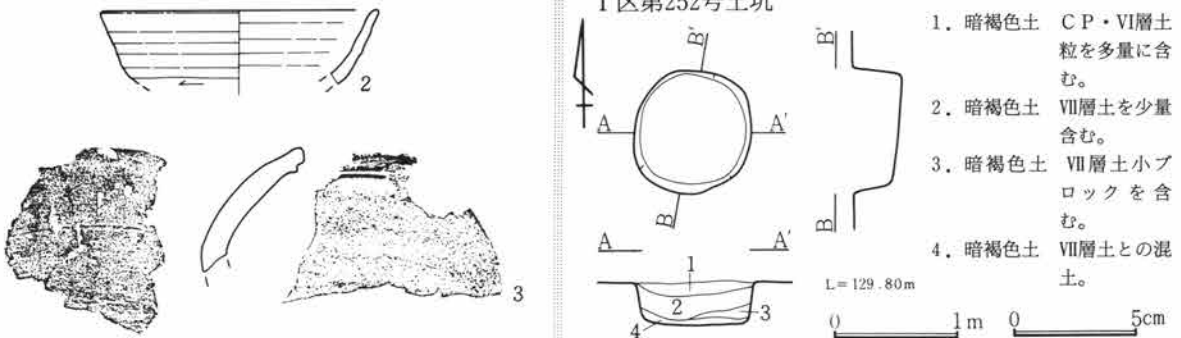
I区第250号土坑



I区第251号土坑



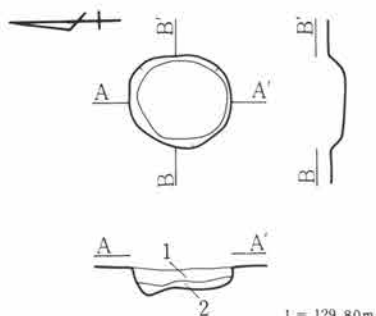
I区第252号土坑



第573図 I区土坑・出土遺物実測図(13)

第4章 検出された遺構・遺物

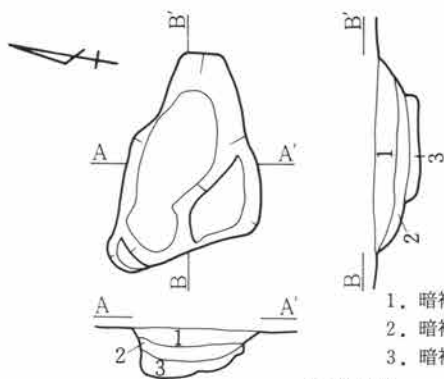
I区第253号土坑



1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。

L = 129.80m

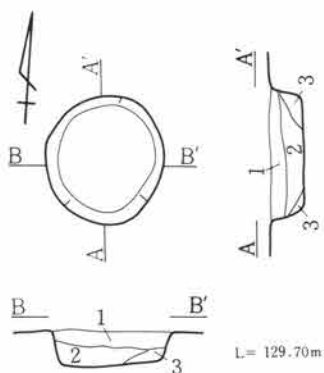
I区第256号土坑



1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 VII層土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 混入物はなく、茶味が強い。

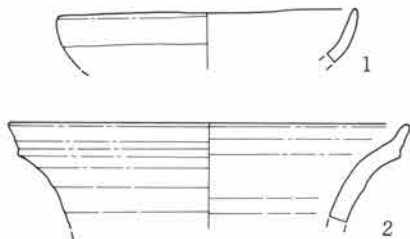
L = 129.60m

I区第257号土坑

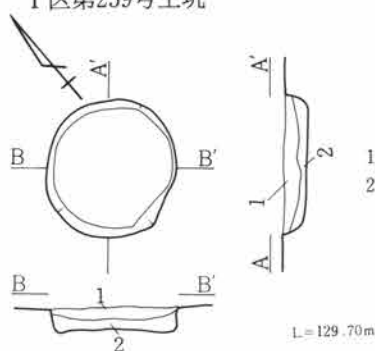


1. 暗褐色土 CP・VII層土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 VII層土を少量含む。
3. 暗褐色土 VI層土を含む。

L = 129.70m

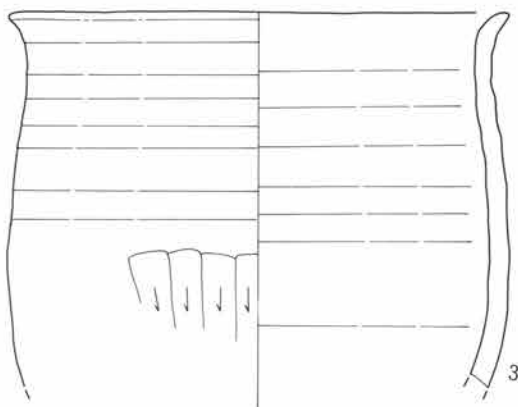


I区第259号土坑

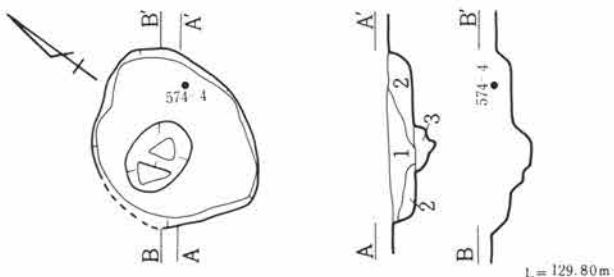


1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 VI層土を多量に含む。

L = 129.70m

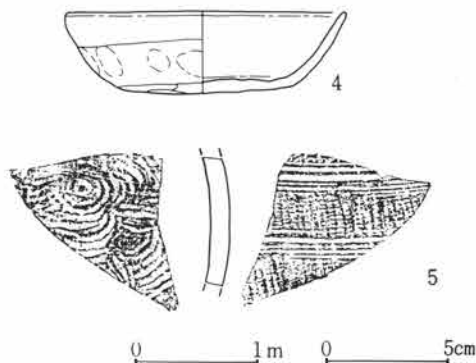


I区第260号土坑



1. 暗褐色土 CPを多量、焼土粒を少量と炭化物を含む。
2. 暗褐色土 CPは1層に類似するが、焼土粒は微量である。
3. 暗褐色土 CP・炭化物・焼土粒を含み、粘性が強い。

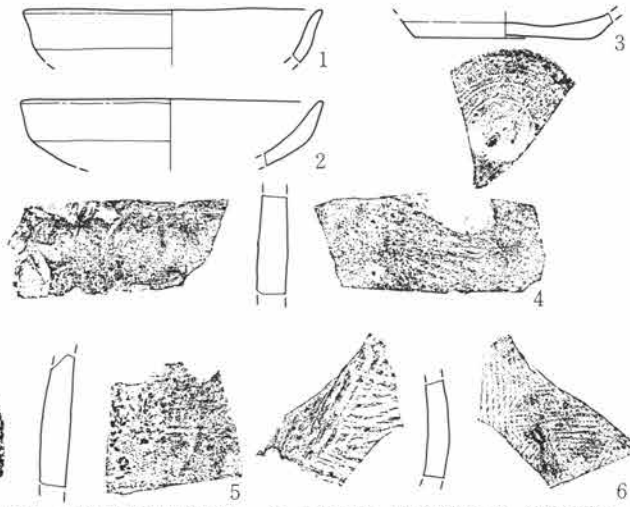
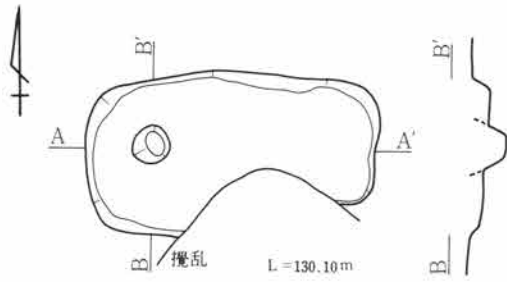
L = 129.80m



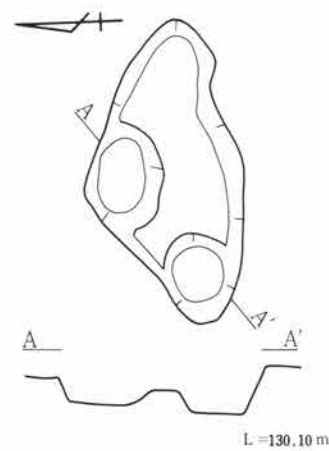
0 1m 0 5cm

第574図 I区土坑・出土遺物実測図(14)

I区第261号土坑



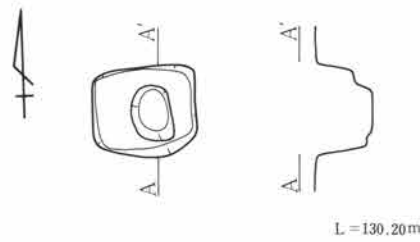
I区第273号土坑



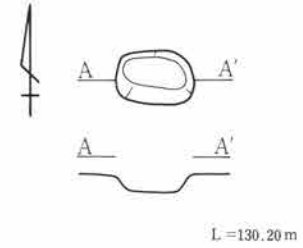
1. 暗褐色土 CPを少量、VI層土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 CP細粒・VI層土粒を少量含む。

3. 暗褐色土 CPは含まず、粘性が強い。
4. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。

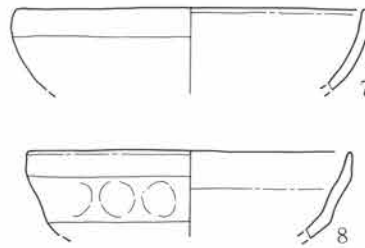
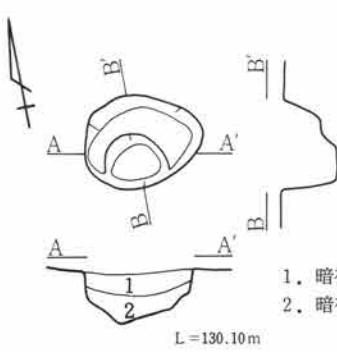
I区第274号土坑



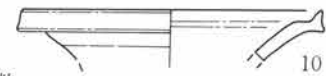
I区第275号土坑



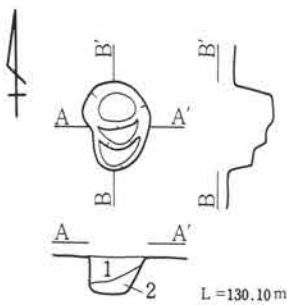
I区第276号土坑



1. 暗褐色土 CPを多量、炭化物細粒を微量含む。
2. 暗褐色土 CPは1層に比して少なく、炭化物はやや多く、粘性が強い。

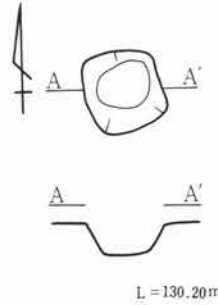


I区第277号土坑

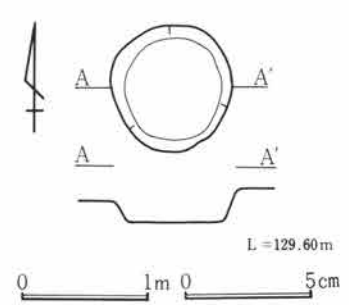


1. 暗褐色土 CPを多量、炭化物を微量含む。
2. 暗褐色土 CPを含まず粘性が強い。

I区第282号土坑



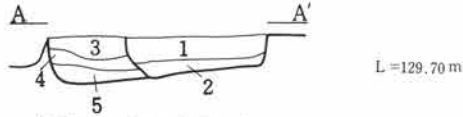
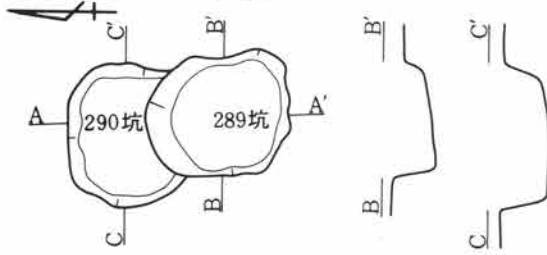
I区第287号土坑



第575図 I区土坑・出土遺物実測図(15)

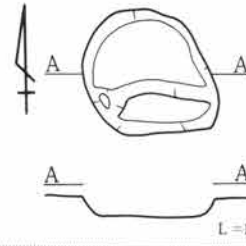
第4章 検出された遺構・遺物

I区第289・290号土坑

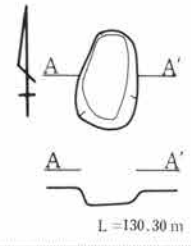


1. 暗褐色土 CPを多量に含む。
2. 暗褐色土 CPは1層に比して少なく、やや茶色味も増す。
3. 暗褐色土 1層に類似。
4. 暗褐色土 2層に類似。
5. 暗褐色土 CPは含まず、茶色味が強くなる。

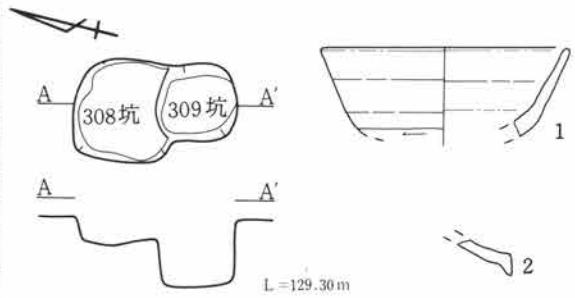
I区第293号土坑



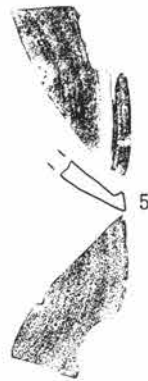
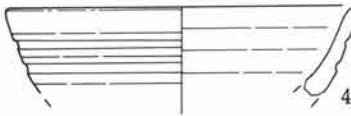
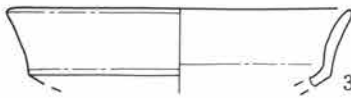
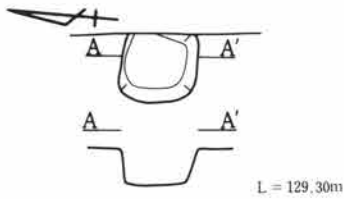
I区第294号土坑



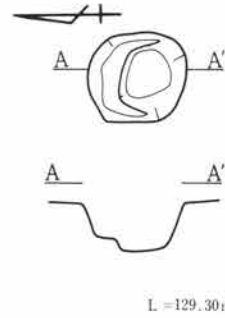
I区第308・309号土坑



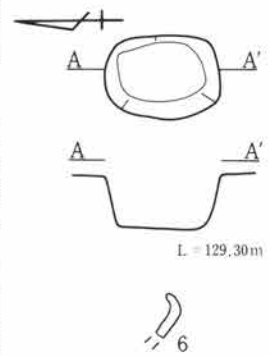
I区第310号土坑



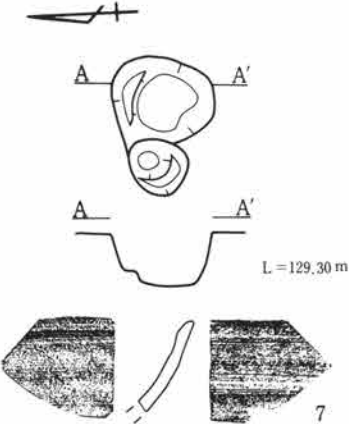
I区第311号土坑



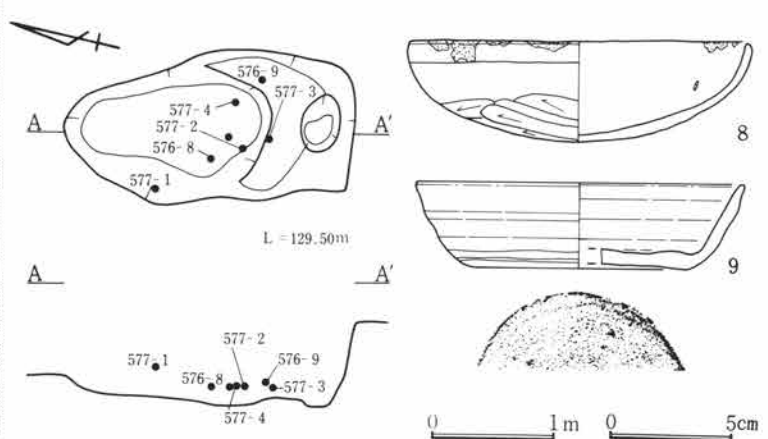
I区第312号土坑



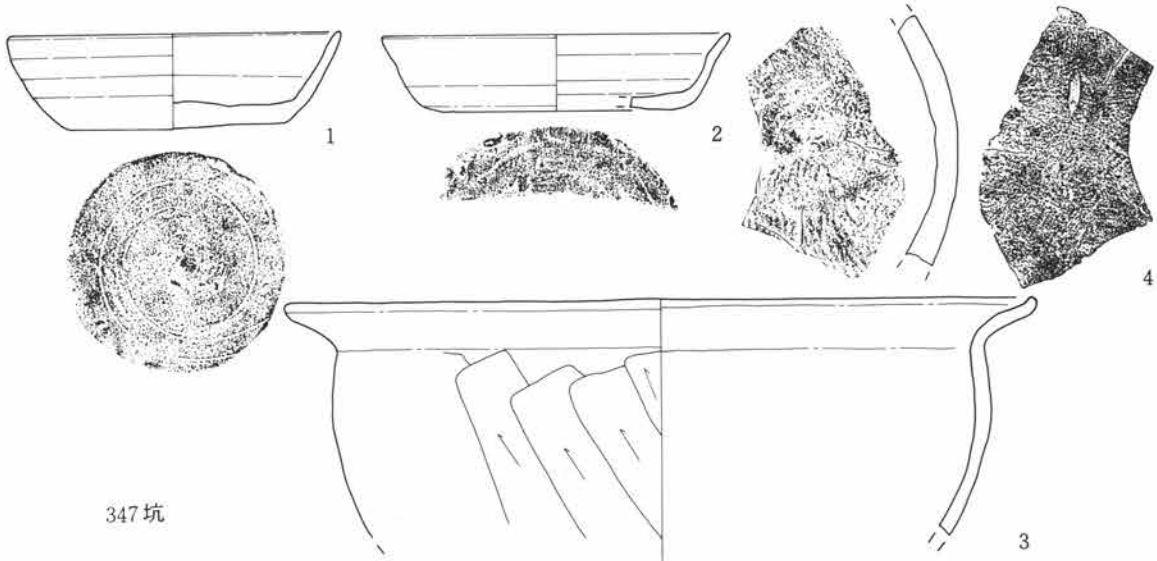
I区第313号土坑



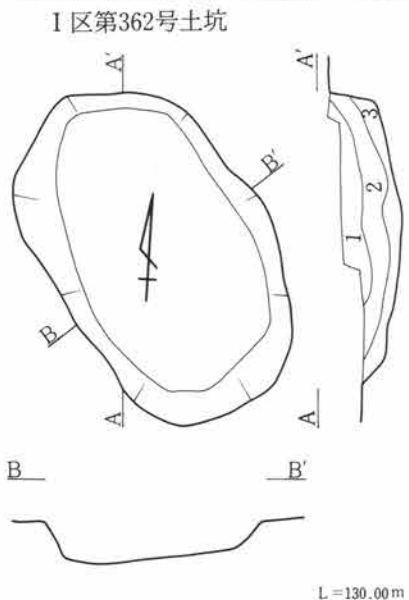
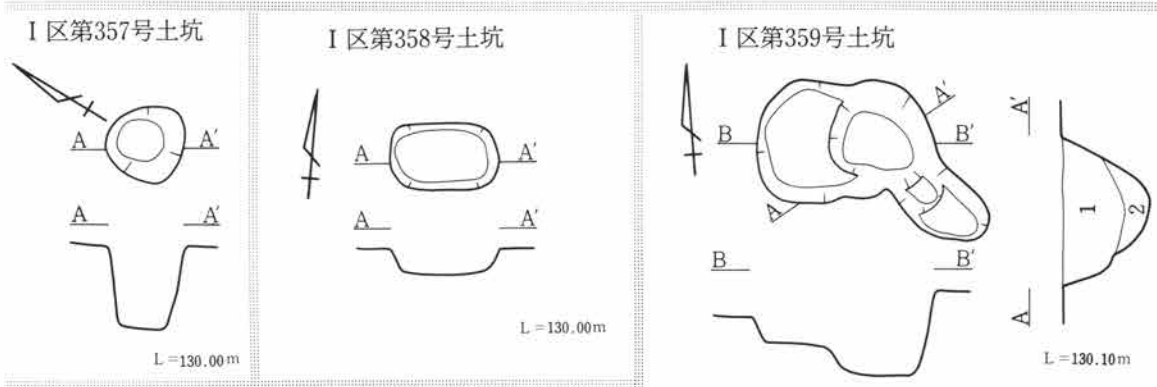
I区第347号土坑



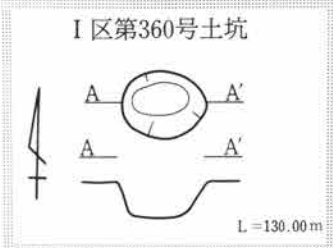
第576図 I区土坑・出土遺物実測図(16)



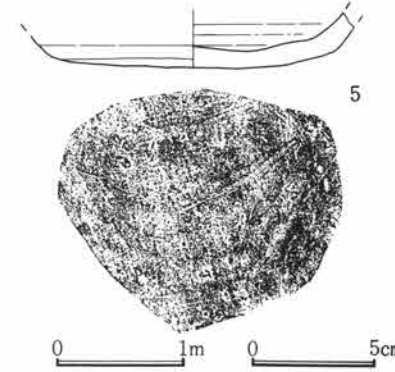
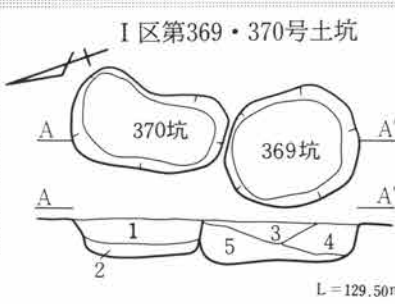
347坑



1. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 VI層土粒は1層に比して少ない。
3. 暗褐色土 VI層土大ブロックを少量含む。

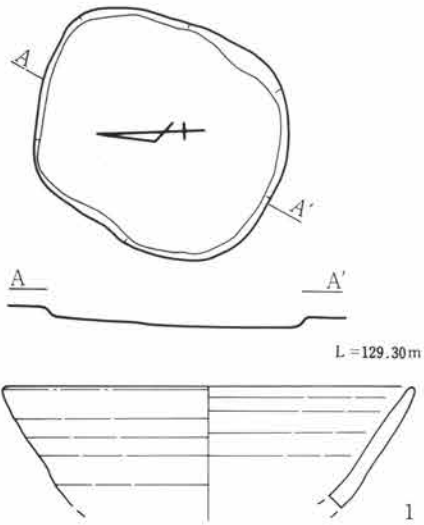


1. 暗褐色土 FP?を少量、VI層土小ブロックを含む。
2. 暗褐色土 1層に比してVI層土ブロックが多く、粘性も強い。
3. 暗褐色土 CPを少量含み、VI層土ブロックは含まない。
4. 暗褐色土 3層に比してVI層土ブロックが多く、粒子も含む。
5. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。

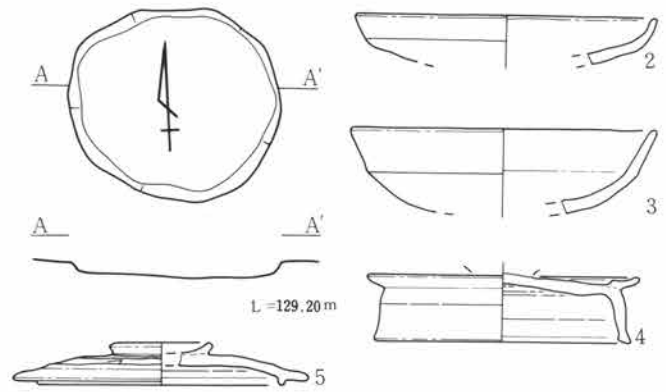


第577図 I区土坑・出土遺物実測図(17)

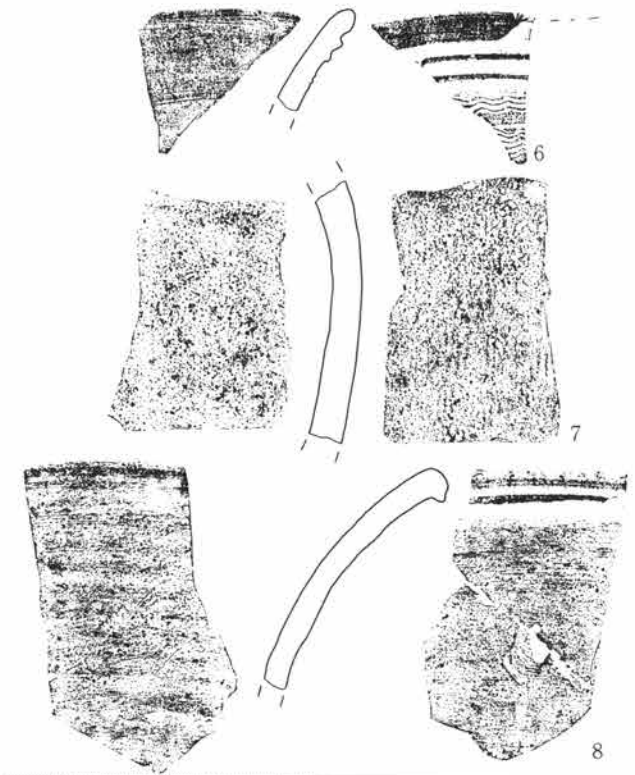
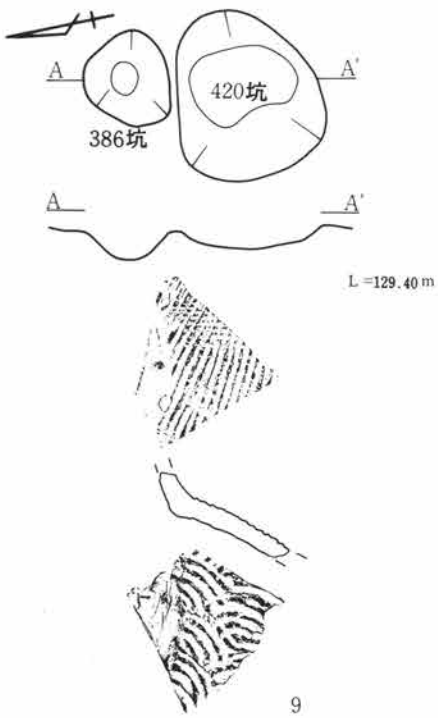
I区第371号土坑



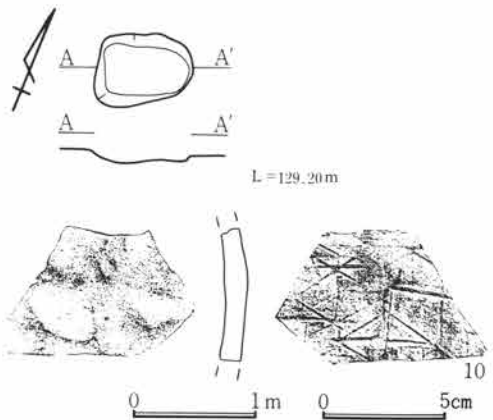
I区第372号土坑



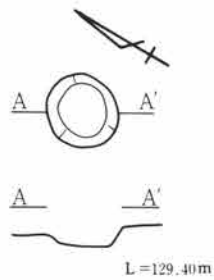
I区第386・420号土坑



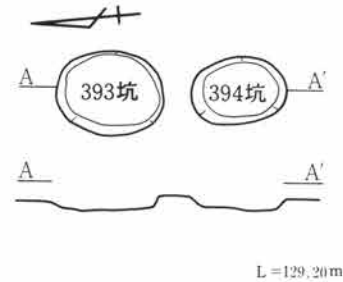
I区第395号土坑



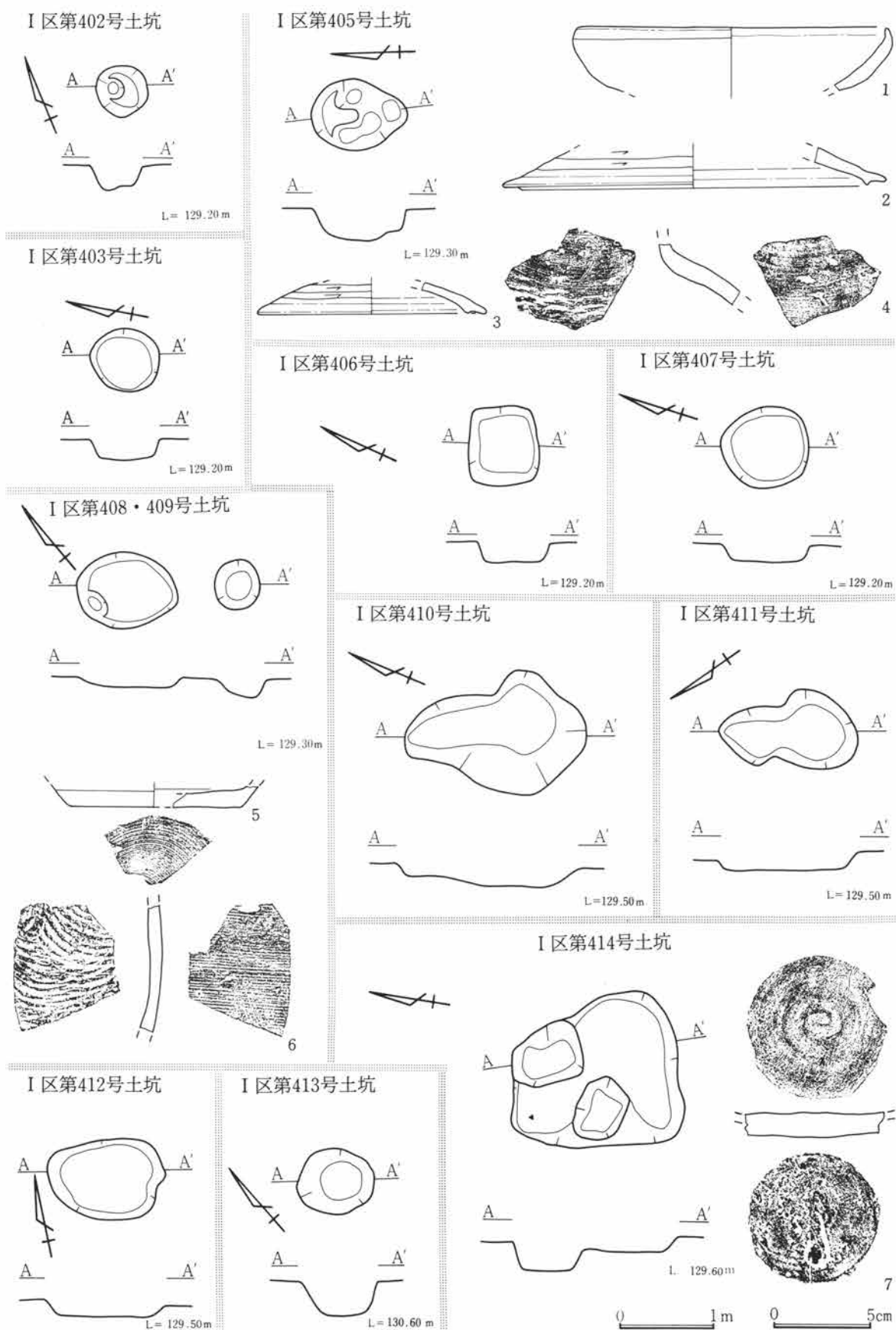
I区第387号土坑



I区第393・394号土坑

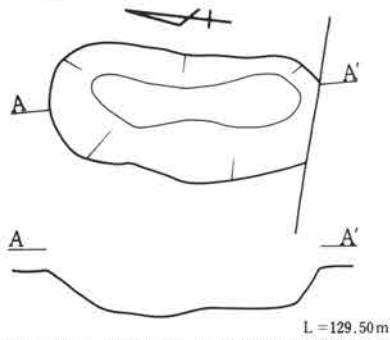


第578図 I区土坑・出土遺物実測図 (18)

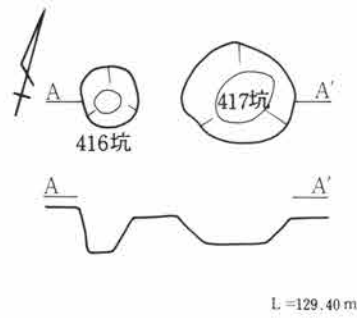


第579図 I区土坑・出土遺物実測図(19)

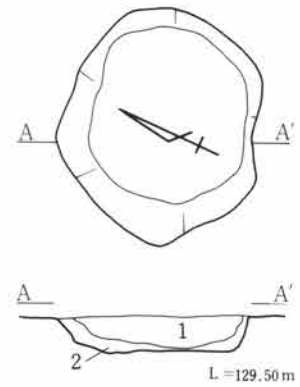
I区第415号土坑



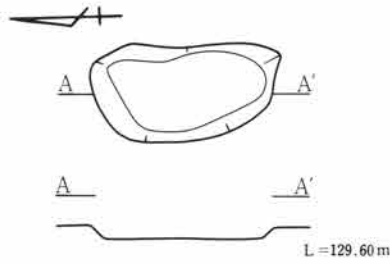
I区第416・417号土坑



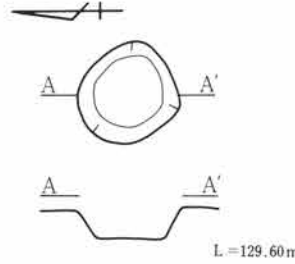
I区第421号土坑



I区第422号土坑

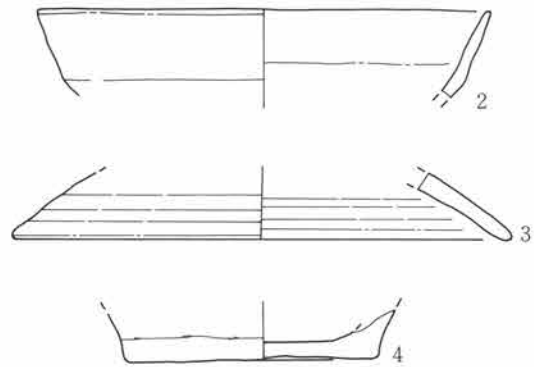
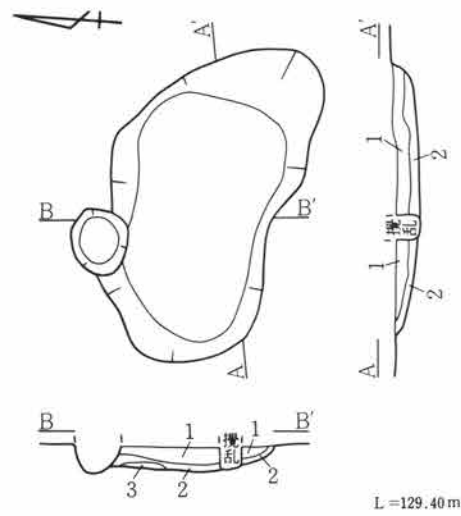


I区第426号土坑



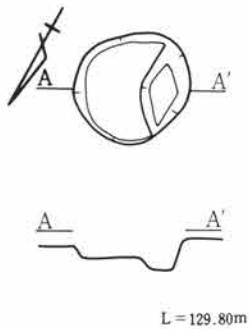
1. 暗褐色土 CPを多量・VI層土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 CPは少量で、VI層土ブロックを多量に含む。

I区第442号土坑

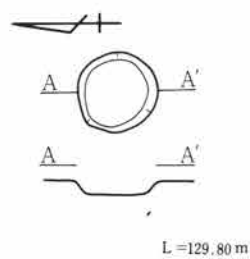


1. 暗褐色土 CPを少量含む。
2. 暗褐色土 VII層土細粒を少量含む。
3. 暗褐色土 VII層土粒を含み、粘性も増す。

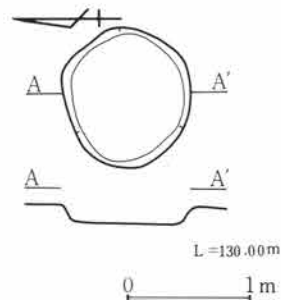
I区第461号土坑



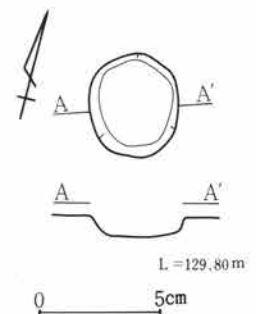
I区第462号土坑



I区第466号土坑

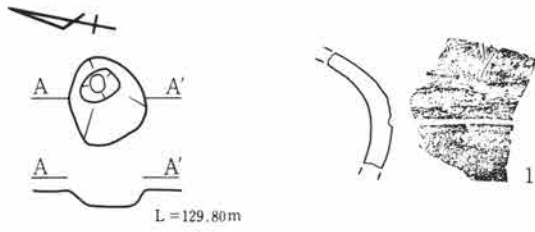


I区第470号土坑

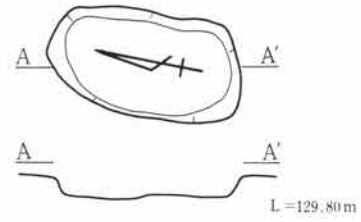


第580図 I区土坑・出土遺物実測図(20)

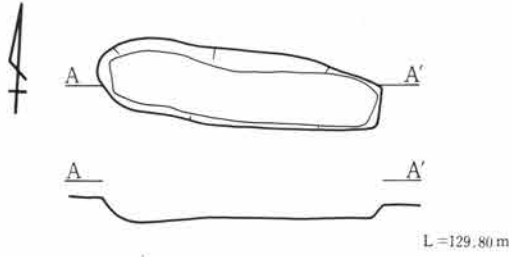
I区第473号土坑



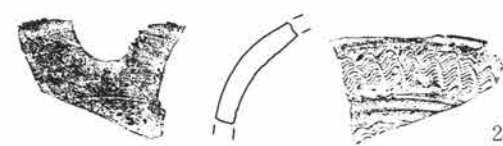
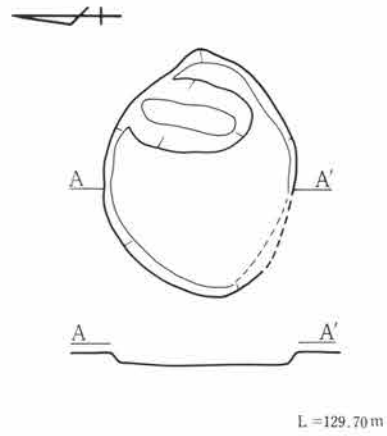
I区第474号土坑



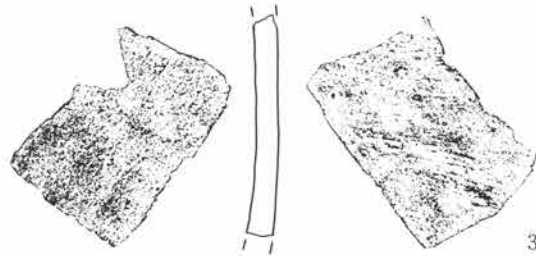
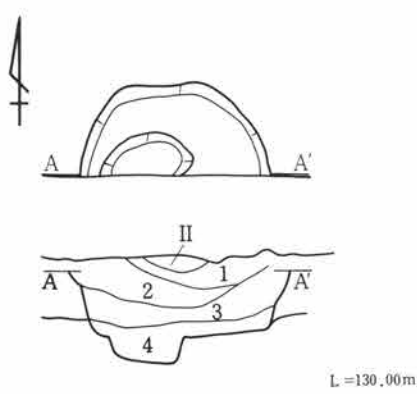
I区第475号土坑



I区第479号土坑

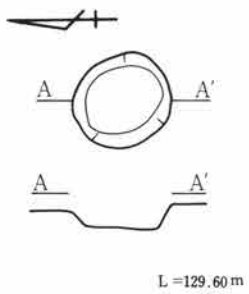


I区第480号土坑

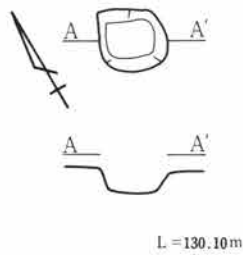


1. 暗褐色土 CPを多量・VI層土ブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 CP・VI層土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 CP・VI層土ブロックは2層に比して少ない。
4. 暗褐色土 CPを微量、VI層土ブロックを少量、VI層土粒を多量に含む。

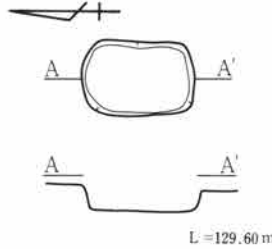
I区第482号土坑



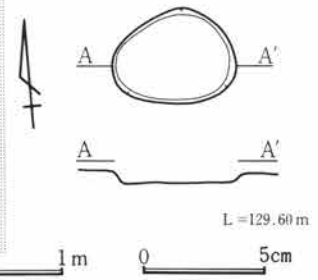
I区第500号土坑



I区第501号土坑



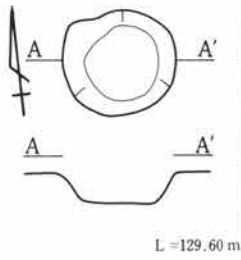
I区第502号土坑



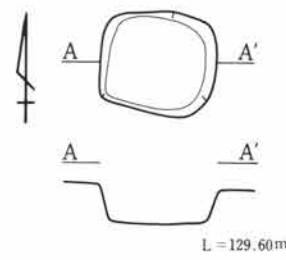
第581図 I区土坑・出土遺物実測図(21)

第4章 検出された遺構・遺物

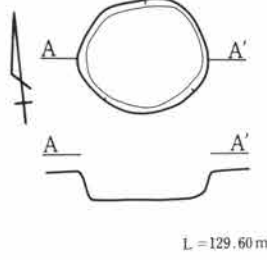
I区第503号土坑



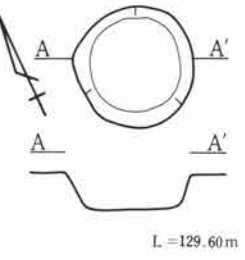
I区第504号土坑



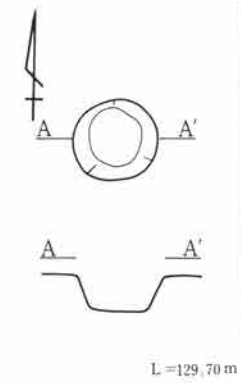
I区第505号土坑



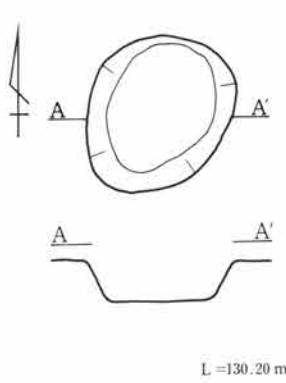
I区第506号土坑



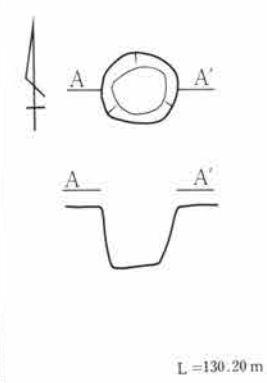
I区第507号土坑



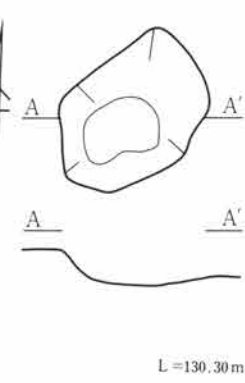
I区第508号土坑



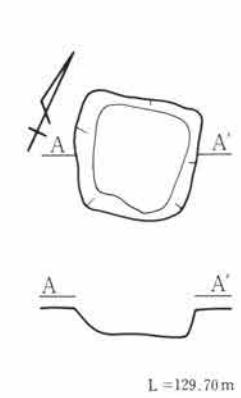
I区第509号土坑



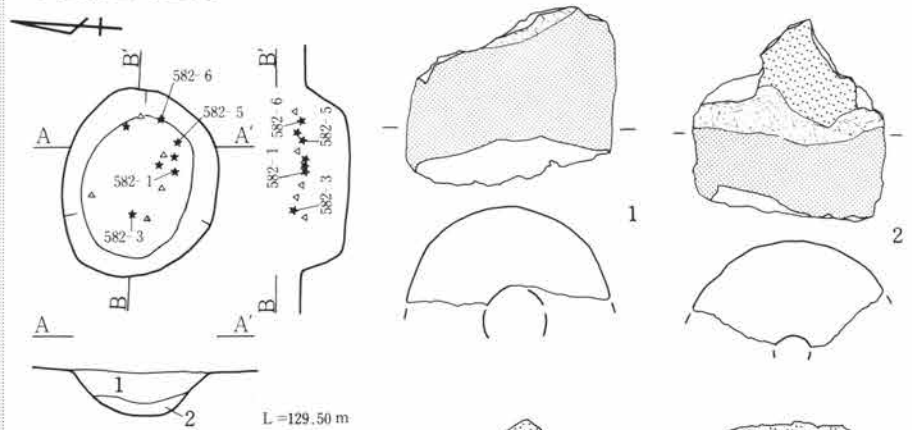
I区第510号土坑



I区第515号土坑

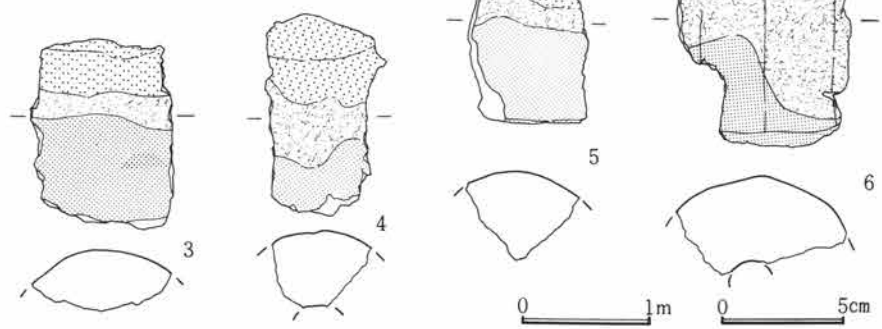
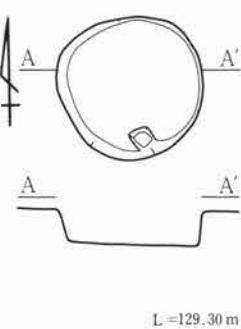


I区第516号土坑



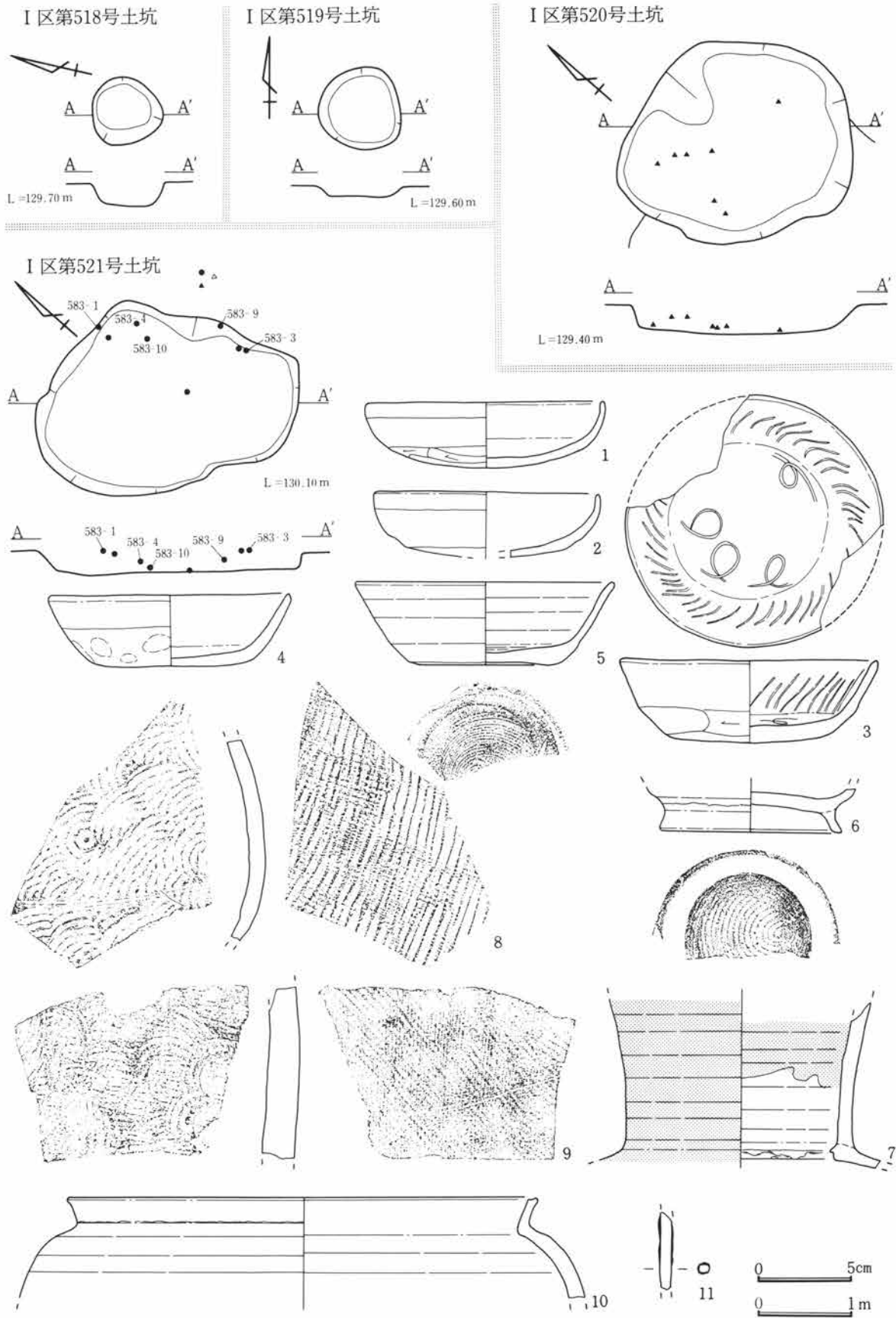
1. 暗褐色土 焼土・炭化物・スラグ・羽口片を多量に含む。
2. 暗褐色土 焼土粒を少量とVI層土を含む。

I区第517号土坑



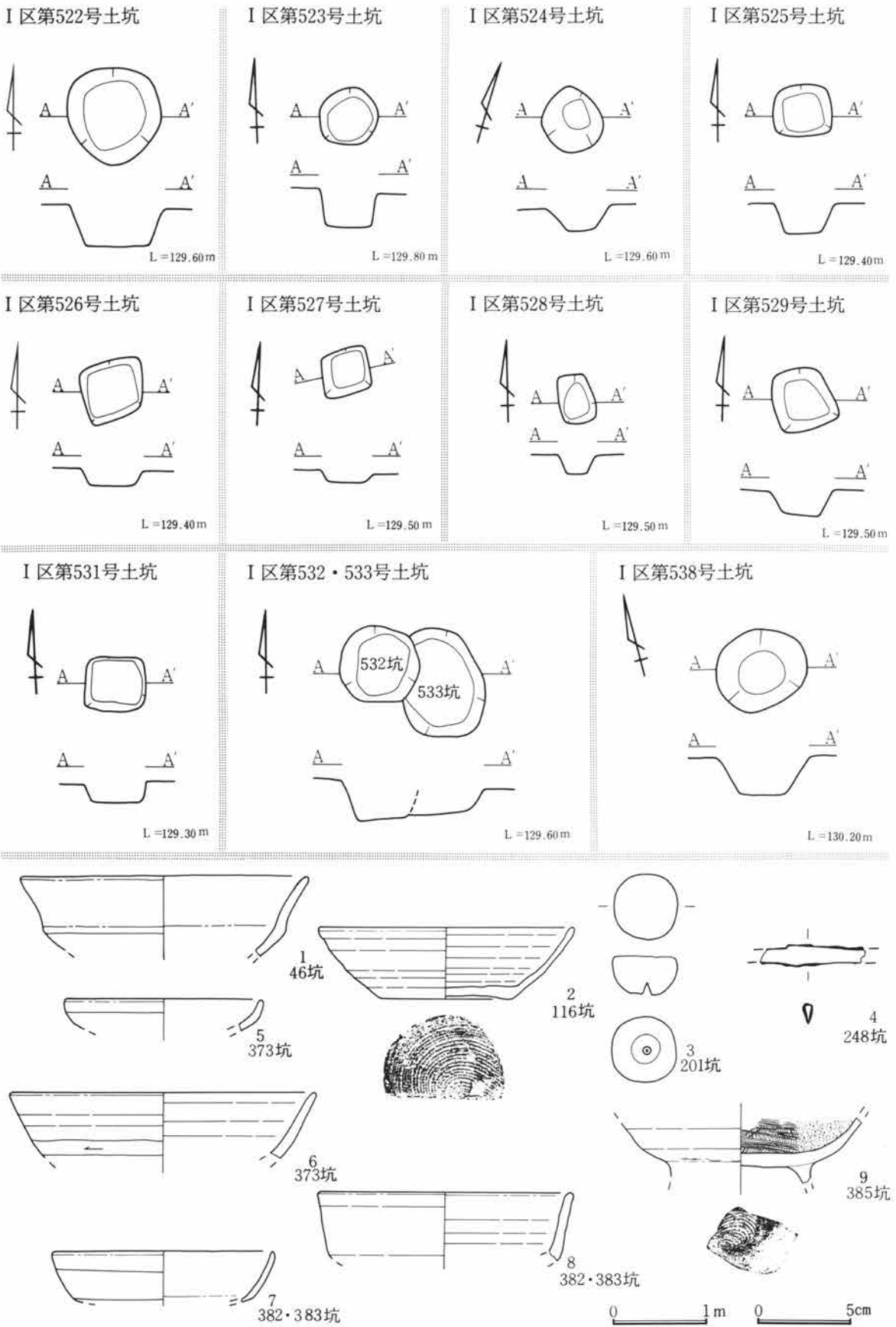
第582図 I区土坑・出土遺物実測図(22)

第2節 検出された遺構・遺物



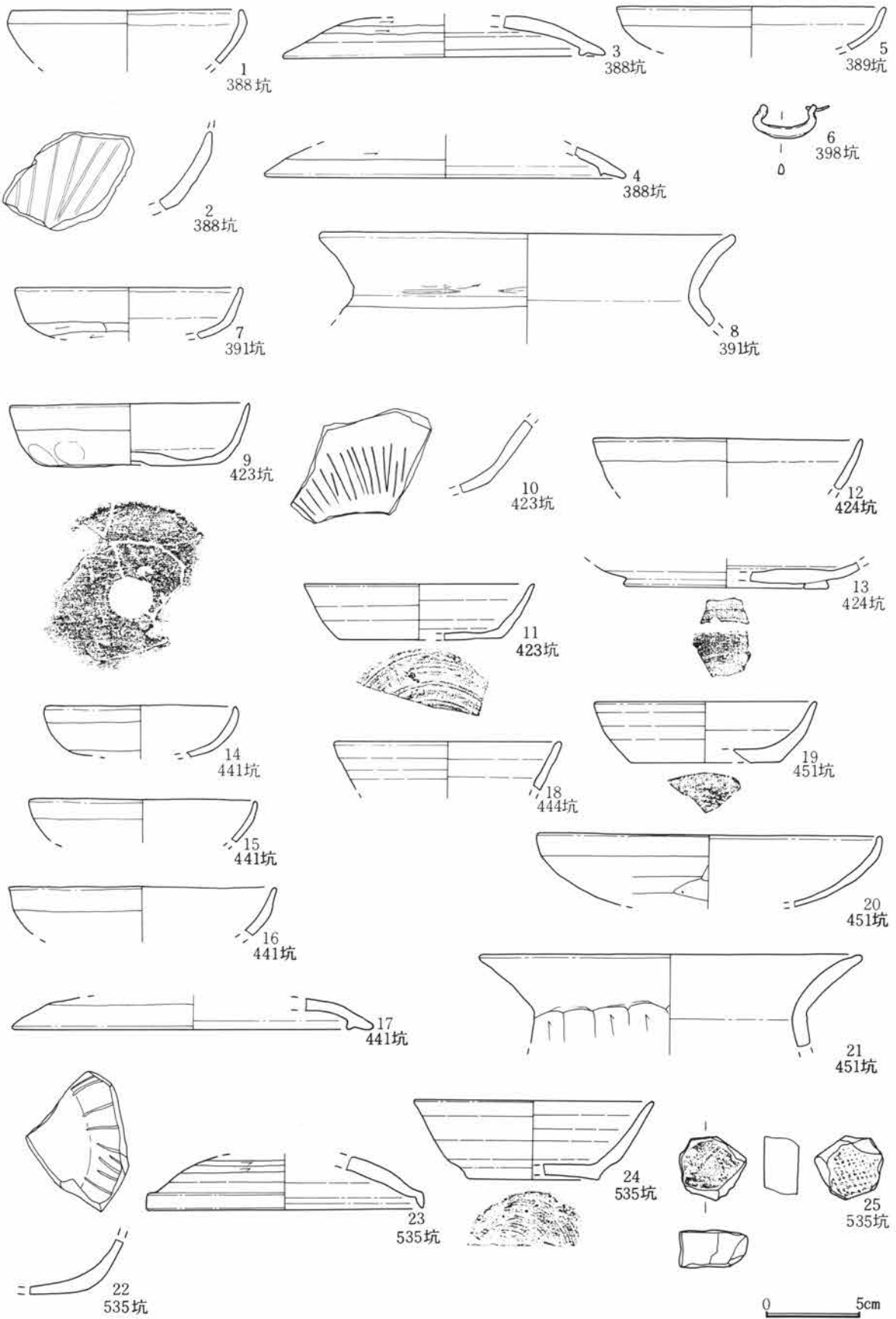
第 583 図 I 区土坑・出土遺物実測図 (23)

第4章 検出された遺構・遺物



第584図 I区土坑・出土遺物実測図(24)

第2節 検出された遺構・遺物



第585図 I区土坑出土遺物実測図(25)

第4章 検出された遺構・遺物

I区土坑一覧表

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模(m)			備考
				長	幅	深度	
I区第3号土坑	43・44-I-69	隅丸方形	北-17°-西	0.97	0.95	0.13	
I区第11号土坑	45・46-I-80・81	隅丸長方形	北-34°-西	1.23	0.68	0.08	
I区第15号土坑	40・41-I-81・82	隅丸長方形	西-2°-北	1.80	1.43	0.20	
I区第24号土坑	29・30-I-68・69	円形	——	0.82	0.80	0.15	
I区第25号土坑	36-I-79・80	楕円形	北-10°-西	1.47	1.03	0.10	26坑と重複
I区第26号土坑	36-I-80・81	楕円形	北-10°-西	(2.50)	1.13	0.11	25坑と重複
I区第41号土坑	31-I-64	円形	——	0.90	0.90	0.52	
I区第46号土坑	27・28-I-71	円形	——	0.82	0.80	0.30	
I区第51号土坑	34-I-80・81	円形	——	1.30	0.95	0.26	
I区第52号土坑	32-I-80	円形	——	0.95	0.90	0.15	
I区第60号土坑	12・13-I-78	円形	——	1.00	0.90	0.15	
I区第61号土坑	36・37-I-54・55	円形	——	1.05	1.08	0.43	
I区第67号土坑	31・32-I-53・54	円形	——	1.05	1.05	0.18	
I区第69号土坑	38・39-I-55	円形	——	1.20	1.10	0.07	
I区第72号土坑	23-I-54	円形	——	1.15	1.13	0.05	
I区第74号土坑	20・21-I-60	隅丸長方形	北-0°	1.05	0.65	0.07	
I区第75号土坑	21-I-58・59	楕円形	東-0°	1.15	1.00	0.10	
I区第76号土坑	20-I-55	円形	——	0.85	0.80	0.42	
I区第77号土坑	18・19-I-54	円形	——	1.25	1.00	0.20	
I区第78号土坑	20・21-I-52・53	円形?	北-34°-西	1.32	0.90	0.07	
I区第84号土坑	39-I-52・53	隅丸長方形	北-20°-東	1.40	1.05	0.20	
I区第91号土坑	44-I-68・69	円形	北-8°-東	0.98	0.75	0.80	
I区第92号土坑	44-I-67	楕円形	東-14°-南	1.10	0.10	0.47	
I区第96号土坑	33・34-I-79	円形	——	0.75	0.70	0.17	
I区第97号土坑	33・34-I-79	円形	——	0.75	0.75	0.12	
I区第98号土坑	30・31-I-74・75	楕円形	北-7°-東	1.35	1.00	0.15	
I区第100号土坑	28・29-I-76	円形	——	1.00	0.97	0.25	
I区第101号土坑	27-I-75・76	円形	——	0.90	0.82	0.12	
I区第102号土坑	26・27-I-75・76	楕円形	東-13°-北	0.92	0.75	0.18	
I区第106号土坑	43-I-64	円形	——	1.35	1.35	0.23	
I区第107号土坑	33・34-I-78	円形	——	0.70	0.68	0.12	
I区第108号土坑	47・48-I-72	円形	——	0.57	0.55	0.12	
I区第109号土坑	48・49-I-72・73	円形	——	0.92	0.87	0.12	
I区第110号土坑	47-I-73	円形	——	0.67	0.65	0.07	
I区第111号土坑	48・49-I-73・74	円形?	——	0.95	——	0.13	
I区第114号土坑	01・02-I-65	楕円形	北-0°	1.73	1.30	0.32	
I区第116号土坑	21-I-77	不整形	——	——	1.15	0.17	
I区第128号土坑	21-I-65	楕円形	——	1.20	1.00	0.28	
I区第129号土坑	20・21-I-64・65	円形	——	0.95	0.65	0.17	
I区第130号土坑	21-I-63・64	不整形	西-31°-北	1.20	0.90	0.20	
I区第131号土坑	21・22-I-63	円形	——	0.85	0.82	0.20	
I区第132号土坑	21・22-I-63・64	楕円形	北-15°-西	1.60	1.35	0.12	
I区第135号土坑	29-I-74	隅丸長方形	東-10°-北	0.95	0.60	0.11	
I区第137号土坑	26-I-75・76	円形	——	0.97	0.95	0.20	
I区第156号土坑	29-I-74	楕円形	東-12°-北	0.62	0.45	0.35	
I区第157号土坑	11・12-I-71・72	隅丸長方形	北-15°-西	3.43	1.48	0.33	
I区第161号土坑	16-I-66・67	不整形	北-15°-西	——	0.75	0.27	
I区第171号土坑	11-I-80・81	円形	——	0.83	0.80	0.17	
I区第172号土坑	42・43-I-68・69	隅丸方形	東-24°-北	1.98	1.67	0.10	
I区第173号土坑	44・45-I-67	隅丸方形	東-16°-北	1.15	1.10	0.52	
I区第174号土坑	08・09-I-76~78	不整形	東-12°-北	2.60	2.40	0.46	
I区第176号土坑	12・13-I-81	隅丸方形?	北-6°-東	1.20	1.00	0.23	
I区第177号土坑	16・17-I-67・68	隅丸正方形?	——	——	0.95	0.12	
I区第178号土坑	08-I-66	不整形	東-17°-北	1.48	0.63	0.53	
I区第179号土坑	24・25-I-63~65	不整形	西-3°-北	2.40	0.97	0.38	
I区第180号土坑	30・31-I-79・80	楕円形	北-27°-東	1.35	1.12	0.35	
I区第181号土坑	05-I-75・76	楕円形	北-0°	1.38	1.35	0.35	
I区第182号土坑	05-I-76	円形	——	1.05	0.85	0.45	
I区第183号土坑	05-I-74・75	隅丸長方形	西-7°-北	1.45	1.12	0.15	

第2節 検出された遺構・遺物

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模(m)			備考
				長	幅	深度	
I区第184号土坑	04-I-75・76	隅丸方形	北-22°-西	0.90	0.85	0.30	
I区第187号土坑	03・04-I-75~78	不整形	西-7°-北	(4.10)	1.93	0.47	
I区第188号土坑	02・03-I-75・76	不整形	北-7°-西	—	1.25	0.30	
I区第189号土坑	03-I-75・76	隅丸方形	北-12°-西	0.70	0.70	0.10	
I区第190号土坑	02・03-I-75・76	不整形	北-7°-西	—	0.75	0.32	
I区第191号土坑	03・04-I-77・78	不整形	北-32°-東	2.60	1.15	2.80	
I区第192号土坑	21-I-66~68	隅丸長方形	西-2°-北	2.18	0.55	0.27	194坑と重複
I区第194号土坑	21-I-68・69	楕円形?	西-2°-北	1.23	0.90	0.17	192坑と重複
I区第195号土坑	21-I-66・67	円形	—	0.60	0.60	0.42	
I区第196号土坑	02・03-I-75	楕円形	西-0°	1.00	0.85	0.20	
I区第199号土坑	30・31-I-78	円形	—	0.95	0.95	0.30	ピットと重複
I区第201号土坑	09・10-I-81	不整形	東-31°-北	—	0.73	0.23	
I区第202号土坑	05・06-I-73・74	隅丸方形	北-1°-東	1.75	1.65	0.40	
I区第204号土坑	06-I-75	不整形	西-30°-南	0.98	0.50	0.33	
I区第205号土坑	06・07-I-74・75	不整形	北-30°-西	1.00	0.80	0.31	
I区第206号土坑	06-I-72・73	円形	—	0.80	0.65	0.38	
I区第207号土坑	05-I-72	円形	—	0.70	0.65	0.35	
I区第208号土坑	04・05-I-72	円形	—	0.70	0.55	0.37	
I区第209号土坑	06-I-77・78	隅丸方形?	西-7°-北	0.80	0.65	0.48	
I区第210号土坑	01・02-I-74・75	隅丸長方形	北-0°	(2.30)	0.88	0.10	
I区第211号土坑	00-I-74・75	楕円形?	西-8°-北	1.65	—	0.40	
I区第218号土坑	05・06-I-73・74	楕円形	北-2°-西	1.70	1.10	0.33	
I区第222号土坑	29-I-63・64	隅丸長方形	北-13°-西	1.55	1.12	0.40	
I区第224号土坑	02-I-57	円形	—	0.60	0.55	0.23	
I区第236号土坑	37-I-57	円形	—	1.00	0.98	0.67	
I区第237号土坑	38-I-57	円形	—	0.77	0.75	0.42	
I区第238号土坑	38・39-I-55	楕円形	西-17°-北	1.37	1.10	0.30	
I区第240号土坑	42・43-I-58・59	円形	—	1.20	1.13	0.35	
I区第245号土坑	02・03-I-51・52	円形	—	0.90	0.85	0.21	
I区第246号土坑	32・33-I-54・55	楕円形	—	0.95	0.80	0.35	
I区第248号土坑	34-I-55	楕円形?	西-26°-北	—	0.87	0.20	
I区第250号土坑	37-I-56	楕円形	西-25°-北	1.10	0.85	0.23	
I区第251号土坑	38・39-I-55・56	円形	—	0.88	0.80	0.15	
I区第252号土坑	40-I-56	円形	—	0.98	0.95	0.35	
I区第253号土坑	43-I-57・58	円形	—	0.80	0.70	0.23	
I区第256号土坑	37-I-53・54	不整形	西-15°-北	1.85	0.75	0.40	
I区第257号土坑	39-I-56	円形	—	1.00	0.95	0.27	
I区第259号土坑	41・42-I-53・54	円形	—	1.10	1.05	0.20	
I区第260号土坑	25・26-I-73・74	不整形	北-40°-東	1.43	1.20	0.40	
I区第261号土坑	33-I-73~75	隅丸長方形	西-2°-北	2.30	1.22	0.17	
I区第265号土坑	42-I-54	楕円形	西-0°	1.15	0.90	0.18	
I区第273号土坑	33-I-76・77	不整形	東-3°-北	2.43	1.30	0.34	
I区第274号土坑	32-I-79	隅丸方形	西-7°-北	0.80	0.75	0.42	
I区第275号土坑	31-I-79	楕円形	西-4°-北	0.60	0.42	0.13	
I区第276号土坑	32-I-78	楕円形	西-4°-北	0.95	0.80	0.45	
I区第277号土坑	31・32-I-77	楕円形	北-0°	0.70	0.50	0.30	
I区第279号土坑	29・30-I-64・65	不整形	—	—	—	0.15	
I区第280号土坑	17・18-I-65・66	不整形	北-0°	1.08	0.67	0.53	281坑と重複
I区第281号土坑	17・18-I-65	不整形	北-15°-西	2.50	—	0.90	280坑と重複
I区第282号土坑	31・32-I-79	隅丸方形	北-21°-西	0.67	0.65	2.70	
I区第287号土坑	39・40-I-56	円形	—	1.00	0.98	0.22	
I区第289号土坑	41-I-54	円形	—	1.17	0.93	0.30	290坑と重複
I区第290号土坑	41・42-I-54	円形	—	—	1.10	0.38	289坑と重複
I区第292号土坑	39-I-80	隅丸長方形?	北-8°-東	—	1.30	0.20	
I区第293号土坑	40-I-82	楕円形	北-30°-西	1.10	0.95	0.17	
I区第294号土坑	39-I-81	楕円形	北-8°-東	0.75	0.50	0.15	
I区第298号土坑	35・36-I-59	隅丸長方形	北-0°	16.8	0.63	0.13	7号土壙墓
I区第308号土坑	19・20-I-49・50	楕円形	北-27°-西	0.85	0.68	0.22	309坑と重複
I区第309号土坑	19・20-I-49・50	楕円形	北-27°-西	0.65	0.63	0.50	308坑と重複
I区第310号土坑	19-I-49・50	隅丸方形	東-3°-北	0.53	0.60	0.25	

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模(m)			備考
				長	幅	深度	
I区第311号土坑	19-I-50	円形	北-0°	0.80	0.70	0.40	
I区第312号土坑	18・19-I-51	楕円形	北-0°	0.92	0.67	0.43	
I区第313号土坑	18・19-I-51・52	円形	東-3°-北	1.12	0.83	0.43	ピットと重複
I区第347号土坑	15~17-I-55	不整形	北-12°-西	2.33	1.20	0.1~0.72	
I区第352号土坑	20・21-I-63	隅丸長方形	北-11°-西	1.60	1.17	0.28	
I区第355号土坑	35・36-I-58・59	隅丸方形	北-20°-西	1.40	1.13	0.70	1号祭祀跡
I区第357号土坑	28-I-75・76	円形	——	0.60	0.60	0.65	
I区第358号土坑	27-I-76	隅丸長方形	北-12°-西	0.85	0.50	0.22	
I区第359号土坑	25-I-76・77	不整形	北-4°-東	1.45	0.95	0.70	
I区第360号土坑	25-I-76	楕円形	西-0°	0.58	0.53	0.28	
I区第362号土坑	15・16-I-79・80	楕円形	北-38°-西	2.78	1.70	0.55	
I区第364号土坑	21・22-I-71・72	隅丸正方形?	西-0°	0.93	——	0.27	
I区第369号土坑	04・05-I-57・58	円形	北-27°-東	1.03	0.97	0.33	
I区第370号土坑	04・05-I-57・58	隅丸長方形	北-30°-東	1.25	0.60	0.32	
I区第371号土坑	09・10-I-53・54	楕円形	北-15°-東	2.05	1.85	0.13	
I区第372号土坑	13-I-53・54	楕円形	西-3°-南	1.68	1.50	0.13	
I区第373号土坑	07・08-I-54・55	隅丸長方形	北-21°-西	——	1.67	0.12	
I区第380号土坑	03-I-55	隅丸長方形	北-10°-東	——	0.95	0.15	209住と重複
I区第381号土坑	03・04-I-55	隅丸方形	西-12°-南	——	0.90	0.20	380坑と重複
I区第382号土坑	04-I-55	不整形	北-22°-西	——	1.17	0.25	重複
I区第383号土坑	04・05-I-55	不整形	北-22°-西	——	0.78	0.13	
I区第384号土坑	04-I-54・55	不整形	北-0°	——	0.90	0.30	
I区第385号土坑	01・02-I-54・55	不整形	西-28°-北	1.43	0.83	3.20	
I区第386号土坑	01・02-I-55	楕円形	東-0°	0.77	0.70	0.22	
I区第387号土坑	02-I-54・55	円形	——	0.58	0.58	1.50	
I区第388号土坑	06・07-I-56~58	隅丸長方形?	東-26°-北	——	0.60	0.16	
I区第389号土坑	06・07-I-56・57	不整形	北-10°-西	2.20	0.60	0.17	195住・206住と重複
I区第391号土坑	12・13-I-55・56	不整形	東-12°-南	1.12	0.80	0.30	
I区第392号土坑	12-I-55・56	不整形	——	——	——	0.43	200住・20溝と重複
I区第393号土坑	09-I-58	楕円形	北-2°-西	0.86	0.67	0.12	
I区第394号土坑	08・09-I-58	楕円形	北-2°-西	0.75	0.53	0.10	
I区第395号土坑	09-I-57	隅丸長方形	西-30°-南	0.77	0.55	0.13	
I区第397号土坑	13-I-54・55	円形?	——	0.70	——	0.28	196住・18溝と重複
I区第398号土坑	06-I-50	不整形	西-33°-南	0.90	0.70	0.10	
I区第399号土坑	06-I-50	不整形	西-33°-南	0.82	0.72	0.50	
I区第400号土坑	06・07-I-49・50	不整形	西-33°-南	1.10	0.85	0.45	
I区第401号土坑	07-I-49・50	長方形	西-0°	0.80	0.42	0.08	
I区第402号土坑	08・09-I-53	円形	——	0.55	0.53	0.20	
I区第403号土坑	08・09-I-54	円形	——	0.75	0.75	0.22	
I区第405号土坑	09・10-I-52・53	楕円形	北-0°	1.00	0.75	0.33	
I区第406号土坑	10-I-54	隅丸正方形	東-22°-北	0.80	0.73	0.22	
I区第407号土坑	09-I-54	円形	——	0.95	0.93	0.18	
I区第408号土坑	10・11-I-52・53	楕円形	北-32°-東	1.05	0.78	0.12	
I区第409号土坑	10-I-52	円形	——	0.53	0.50	0.22	
I区第410号土坑	02・03-I-55・56	不整形	北-24°-西	1.90	1.25	0.17	
I区第411号土坑	04-I-56・57	不整形	北-38°-東	1.45	0.80	0.18	
I区第412号土坑	04・05-I-56・57	楕円形	西-7°-北	1.20	0.85	0.18	
I区第413号土坑	02・03-I-57	円形	——	0.80	0.73	0.38	
I区第414号土坑	03・04-I-57・58	不整形	北-9°-西	1.73	1.55	0.30	
I区第415号土坑	00・01-I-56	楕円形	北-2°-東	2.13	1.05	0.37	
I区第416号土坑	01・02-I-56	円形	——	0.50	0.48	0.35	
I区第417号土坑	01・02-I-55	円形	——	0.90	0.80	0.22	
I区第418号土坑	00・01-I-55・56	円形?	北-0°	0.80	0.65	0.45	
I区第419号土坑	00・01-I-54・55	不整形	西-3°-北	1.50	1.20	0.43	
I区第420号土坑	01-I-54	楕円形	東-0°	1.35	1.08	0.15	
I区第421号土坑	04・05-I-58・59	楕円形	北-27°-西	1.90	1.60	0.27	
I区第422号土坑	05・06-I-58・59	隅丸長方形	北-13°-西	1.50	0.75	1.20	
I区第423号土坑	02・03-I-57・58	不整形	北-7°-東	2.35	2.04	0.28	
I区第424号土坑	00・01-I-57・58	隅丸長方形?	西-0°	1.85	——	0.53	
I区第425号土坑	03-I-59	不整形	北-25°-東	0.85	——	0.27	

第2節 検出された遺構・遺物

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模(m)			備考
				長	幅	深度	
I区第426号土坑	02-I-59	円形	——	0.83	0.83	0.25	
I区第428号土坑	05・06-I-51・52	不整形	北-19°-東	1.93	1.00	0.10	226住内
I区第441号土坑	28・29-I-57・58	不整形?	——	2.00	1.90	2.60	
I区第442号土坑	27・28-I-56・57	隅丸長方形	東-8°-南	2.70	1.40	0.20	
I区第443号土坑	26-I-56	円形?	——	1.27	1.27	0.30	
I区第444号土坑	25-I-56	円形?	——	1.10	——	0.30	
I区第451号土坑	15・16-I-57・58	不整形	西-0°	2.10	——	0.55	
I区第461号土坑	34・35-I-59・60	円形	——	0.85	0.85	0.22	
I区第462号土坑	34-I-59・60	円形	——	0.65	0.65	1.10	
I区第466号土坑	41-I-60	円形	——	1.10	0.98	0.18	
I区第470号土坑	33-I-61・62	円形	——	0.80	0.72	0.15	
I区第472号土坑	32-I-62	不整形	——	0.95	0.87	0.22	
I区第473号土坑	31-I-61・62	楕円形	北-11°-西	0.70	0.62	0.15	
I区第474号土坑	30-I-61・62	隅丸長方形	北-5°-東	1.55	0.80	0.18	
I区第475号土坑	30-I-59・60	隅丸長方形	東-3°-北	2.27	0.60	0.13	
I区第479号土坑	01-I-60・61	楕円形	東-0°	1.96	1.52	0.12	
I区第480号土坑	00・01-I-60・61	円形?	——	1.53	——	0.87	
I区第482号土坑	08-I-62	円形	——	0.78	0.75	0.18	
I区第483号土坑	11-I-60・61	隅丸長方形?	東-6°-北	——	0.70	0.35	
I区第500号土坑	33-I-77・78	隅丸方形	西-35°-北	0.55	0.50	0.18	
I区第501号土坑	34・35-I-56・57	隅丸長方形	北-0°	0.90	0.58	0.18	
I区第502号土坑	35-I-55	楕円形	西-7°-南	0.95	0.77	0.08	
I区第503号土坑	35-I-54・55	円形	——	0.93	0.83	0.25	
I区第504号土坑	33・34-I-55	隅丸方形	北-8°-東	0.95	0.82	0.30	
I区第505号土坑	35・36-I-53・54	円形	西-5°-北	1.05	0.90	0.23	
I区第506号土坑	35-I-52・53	円形	——	0.95	0.95	0.27	
I区第507号土坑	31・32-I-78・79	円形	——	0.65	0.65	0.28	
I区第509号土坑	32-I-79	円形	——	0.60	0.60	0.50	
I区第510号土坑	04・05-I-77・78	不整形	北-25°-東	1.37	1.05	0.20	
I区第511号土坑	03-I-77・78	不整形	北-0°	0.65	0.48	——	187坑と重複
I区第512号土坑	03-I-77・78	楕円形	北-35°-東	0.60	0.43	——	
I区第513号土坑	03-I-76	隅丸長方形	北-35°-西	——	0.48	——	
I区第514号土坑	03-I-76	円形	——	0.63	0.60	——	
I区第515号土坑	17-I-70・71	隅丸方形	北-21°-西	0.98	0.95	0.22	
I区第516号土坑	34-I-53	楕円形	西-3°-北	0.75	0.61	0.17	
I区第517号土坑	20・21-I-50・51	円形	——	1.15	1.13	0.25	
I区第518号土坑	37-I-54	円形	——	0.75	0.70	0.23	
I区第519号土坑	43・44-I-54	円形	——	0.85	0.85	0.13	
I区第520号土坑	26・27-I-57・58	不整形	北-8°-東	2.45	2.10	0.32	
I区第521号土坑	31・32-I-75~77	不整形	北-33°-東	2.85	2.00	0.20	
I区第522号土坑	12-I-60	円形	——	1.03	1.00	0.45	
I区第523号土坑	65-I-60	円形	——	0.60	0.60	0.37	
I区第524号土坑	25-I-60・61	楕円形	——	0.65	0.65	0.23	
I区第525号土坑	24-I-61	隅丸方形	西-0°	0.60	0.60	0.30	
I区第526号土坑	23・24-I-61	隅丸方形	北-24°-西	0.65	0.60	0.20	
I区第527号土坑	23-I-62	隅丸方形	西-13°-南	0.50	0.48	0.15	
I区第528号土坑	25-I-62	隅丸長方形	北-6°-西	0.52	0.40	0.20	
I区第529号土坑	24・25-I-61・62	隅丸方形	北-21°-西	0.67	0.60	0.28	
I区第530号土坑	21・22-I-50	隅丸長方形	北-12°-西	——	0.70	0.22	
I区第531号土坑	19-I-50	隅丸方形	西-0°	0.65	0.55	0.20	
I区第532号土坑	03・04-I-62・63	円形	北-0°	0.80	0.80	0.43	533坑と重複
I区第533号土坑	03・04-I-62・63	楕円形	北-12°-西	1.15	0.88	0.25	532坑と重複
I区第534号土坑	18・19-I-57	不整形	——	——	1.60	0.03	
I区第535号土坑	21・22-I-63	不整形	——	(2.00)	(1.55)	0.35	
I区第536号土坑	32・33-I-67・68	不整形	——	——	1.75	0.98	
I区第537号土坑	29・30-I-79	楕円形	東-0°	0.85	0.75	0.46	
I区第538号土坑	34-I-79	円形	——	0.95	0.85	0.40	
I区第539号土坑	01・02-I-57・58	不整形	——	1.85	1.62	0.25	

第4章 検出された遺構・遺物

第61・157・347・372・516・521号土坑

第61号土坑 当土坑は平面形が整った円形を呈し、掘り方もしっかりとしている。出土遺物は第563図1に示した小型の緑釉陶器碗が1点だけであるが、他の土坑から緑釉陶器を出土した例はなく、遺物のもつ性格からしても特異な存在である。

第157号土坑 当土坑は不整楕円形を呈する土坑で、第556図5に示した特徴的な瓦を出土した。共伴した土器類と同時期であると仮定すると、明らかに国分寺の時期より古い時期になりその本来の所属等問題が出てくることになる。また、東側にみられる方形の掘り込みは第2号掘立柱建物跡のすぐ南側に当たっており、この掘立柱建物跡の柱穴になる可能性もある。この掘立柱建物跡との関係があるとすれば第565図2に示した暗文土師器坏の位置付けも理解しやすい。

第347号土坑 当土坑は比較的良好な残存状態の遺物を出土したことで特徴的である。土坑の平面形は不整形で底面は平坦ではない。遺物はこの底面からはすべて浮いた状態で出土している。また、当土坑の長軸方向はやや西寄りに位置している第18号溝状遺構と一致しており、遺物のもつ年代観にも齟齬がないことなどから、この溝状遺構と密接に関係する遺構である可能性が高い。

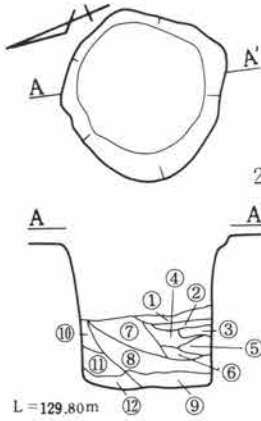
第372号土坑 当土坑は上記第347号土坑の南に位置している比較的整った円形の土坑である。出土遺物は少ないが時期的には第347号土坑と同時期かやや古く位置付けられるものであり、当土坑も第18号溝状遺構に関係する遺構の可能性が大である。

第516号土坑 当土坑は韃の羽口の破片だけを出土した特徴的な土坑である。出土した羽口はお互いに接合関係をもっていないので、幾つかの個体を壊した状態で廃棄したものであるのは明らかである。土坑内部が直接に熱を受けた形跡はなく、当土坑が鍛冶遺構の一部であったという証拠もない。周辺の住居跡に鍛冶を想定させるようなものはないが、東側調査区外に関連遺構が存在する可能性がある。

第521号土坑 当土坑は西側の住居跡が構築されていない空間を埋めるように検出した土坑群の一つである。平面形は不整形で長軸方位等に特徴は見いだせないが、遺物の出土が顕著である。特に第583図3に示した暗文土師器坏は、当調査区で主体的に検出されている暗文土師器坏よりは新しい時期のものである。

6. 井戸跡

遺構名称	I区第1号井戸跡		位置	40・41—I—59グリッド内			平面形状	円形
規模(m)	地上径1.28	底径1.03	最細径	—	最大径	—	深度1.18	涌水位(m) 夏期 —・冬期 —
アグリ部最大径(m)	夏期 —・冬期 —		涌水層		—		耐水層	—

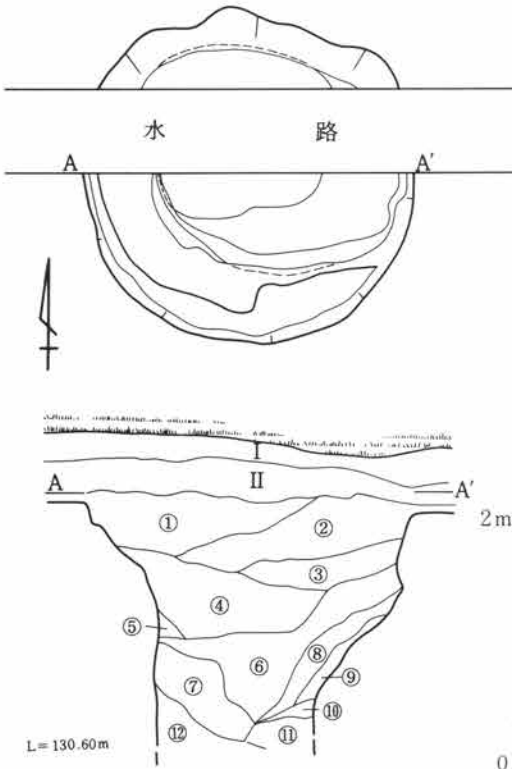


- ①. 暗褐色土 灰褐色地山ブロック・粒子を含み、粘性は比較的強くしまりも良い。
- ②. 暗褐色土 1層に比して地山ブロックが小さく少量で、粘性は強い。
- ③. 暗褐色土 2層に類似するが、砂質土ブロックを含む。
- ④. 褐色土 2層と多量の砂質土ブロックとの混土。
- ⑤. 暗褐色土 2層よりやや柔らかかで、砂質の灰褐色土ブロックを含む。
- ⑥. 褐色土 4層に類似するが、砂質土が多い。
- ⑦. 暗褐色土 ブロック状の暗褐色砂質土と灰褐色砂質土との混土。
- ⑧. 黒褐色土 黒味の強い砂に暗褐色砂質土ブロックを含む。
- ⑨. 暗褐色土 7層に類似する。
- ⑩. 灰褐色土 灰褐色砂質土の単一層。
- ⑪. 暗褐色土 灰褐色砂質土と黒味の強い砂の混土。
- ⑫. 暗褐色土 灰褐色砂質土の中に暗褐色粘質土ブロックを若干含む。

(所見) 当遺構は井戸として扱っているが、確認面からの深さはわずかに1.18mしかなく、断面の観察からも湧水の痕跡も検出されていないことから、井戸として機能した可能性は低い。充填土下層は複雑な埋没過程を示しており、人為的に埋められたものである。

第586図 I区第1号井戸跡実測図

遺構名称	I区第2号井戸跡		位置	49—I～0—J—79～81グリッド内			平面形状	円形
規模(m)	地上径2.70	底径 —	最細径	—	最大径	—	深度 —	涌水位(m) 夏期 —・冬期 —
アグリ部最大径(m)	夏期 —・冬期 —		涌水層		—		耐水層	—

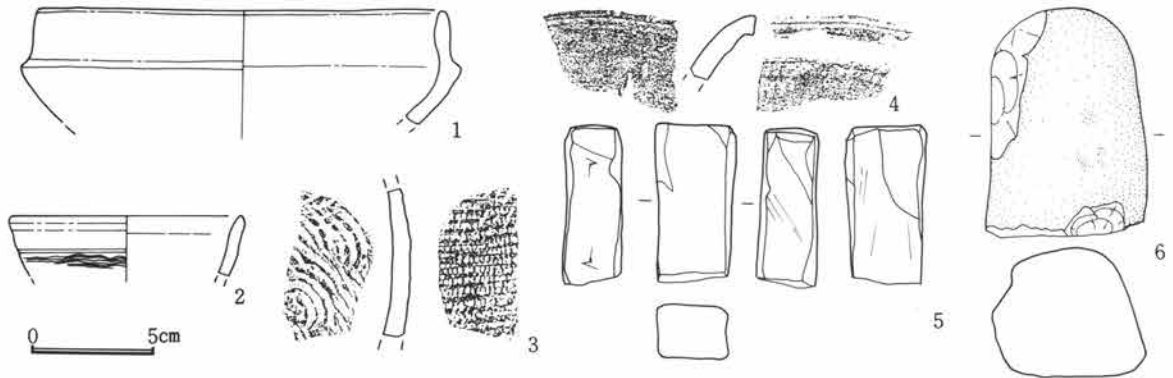


- ①. 暗褐色土 細粒で混入物をほとんど含まない。
- ②. 暗褐色土 1層に比してやや大粒の粒子をまばらに含む。
- ③. 暗褐色土 1・2層に類似し、土層は均一であるが、若干黒味が強い。
- ④. 暗褐色土 3層に類似しているが、粘性がやや強い。
- ⑤. 暗褐色土 若干の灰褐色粘質土の崩落が見られる。
- ⑥. 暗褐色土 4層以上に粘性が強く、砂粒が増える。
- ⑦. 暗褐色土 灰褐色粘質土をブロックで若干含み、粘性が強い。
- ⑧. 暗褐色土 灰褐色粘質土ブロックと暗褐色土ブロックの混土。
- ⑨. 褐色土 灰褐色土ブロックを多量に含み、しまりが弱い。
- ⑩. 褐色土 灰褐色土ブロックが主体。
- ⑪. 灰褐色土 地山と同様の砂質土。
- ⑫. 暗褐色土 暗褐色土ブロックと砂質土の混土。

(所見) 当井戸跡は、東西農道に伴う水路が中央にかかっており、この水路が撤去できなかったために上半部の調査しか実施できなかった。開口部はロート状を呈しており、確認面から1m程の深さで安定した径に移行している。充填土の堆積状態は周辺からの埋没を示しているだけで、人為的なものであるか否かは判断できない。調査は遺物出土の顕著な層まで達していないため、時期の推定はできないが、充填土中に浅間B軽石は含まれていないので、中世まで下ることはない。

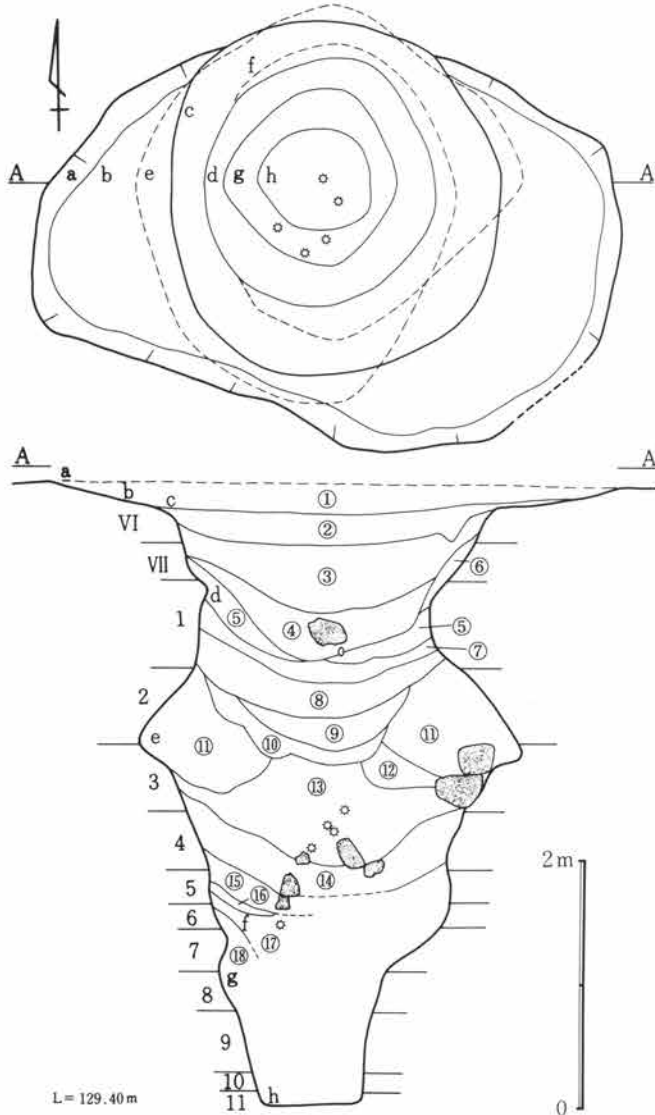
第587図 I区第2号井戸跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



第 588 図 I 区第 2 号井戸跡出土遺物実測図

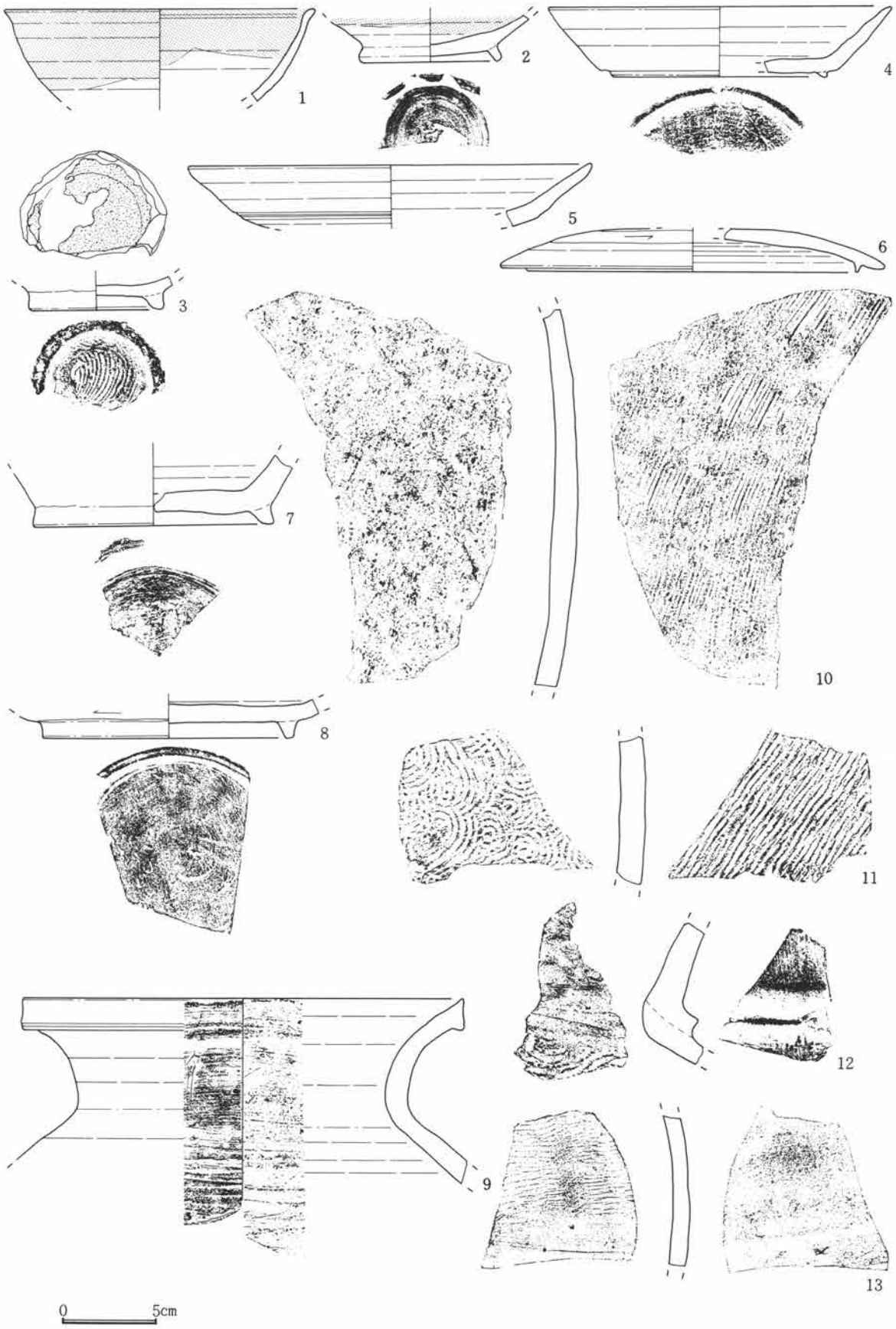
遺構名称	I 区第 4 号井戸跡		位置	25~27-I-51~53グリッド内			平面形状	楕円形
規模(m)	地上径2.75	底径0.85	最細径	—	最大径3.05	深度4.76	涌水位(m)	夏期2.80・冬期1.30
アグリ部最大径 (m)	夏期 3.05・冬期 1.95		涌水層	3・7層		耐水層	4・8層	



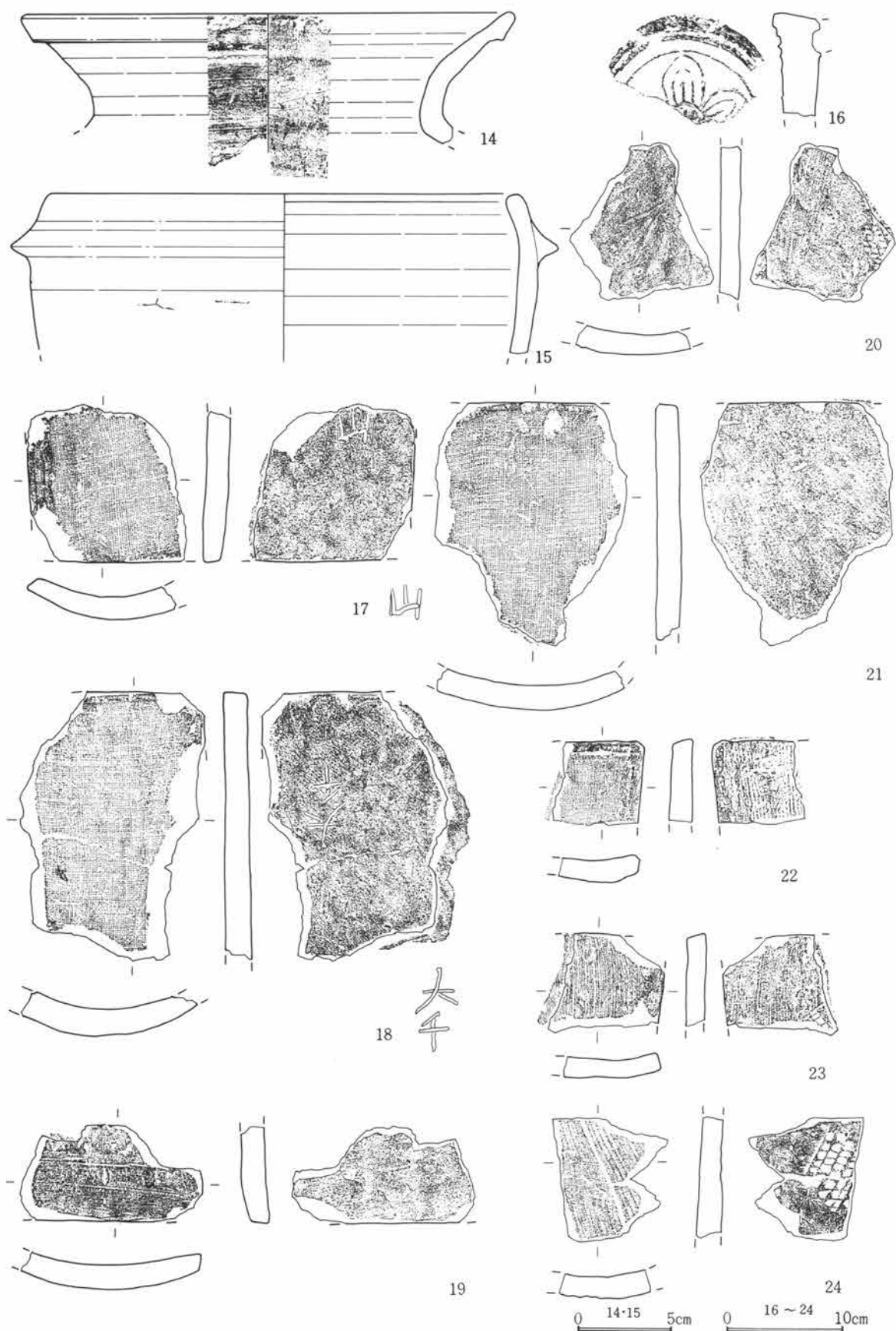
- ①. 暗褐色土 全体に粗い粒子からなる砂質土。
- ②. 暗褐色土 粘質土でC Pをまばらに含む。
- ③. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックは少量で、赤褐色の鉄分小ブロックをまばらに含む。
- ④. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックは少量で、粗いブロックのかたまりはない。
- ⑤. 灰褐色土 灰色味があり、混入物が多い。
- ⑥. 灰褐色土 ⑤層より混入物が少ない。
- ⑦. 暗褐色土 黄褐色粘質土小ブロックを縞状に含み、灰褐色土小ブロックを含む。
- ⑧. 暗褐色土 黄褐色粘質土が⑦層に比して少ない。
- ⑨. 暗褐色土 ⑧層に近似し、黄褐色の不整形ブロックを縞状に含む。
- ⑩. 暗褐色土 ⑧層に比して混入物が更に少ない。
- ⑪. 褐色土 地山の砂質が崩壊したもので、暗褐色土を含む。
- ⑫. 褐色土 ⑪層を種に⑩層を含む。
- ⑬. 暗褐色土 砂を多量に含むが、粘性がある。
- ⑭. 暗褐色土 黄褐色の粘質土を含む。
- ⑮. 暗褐色土 黒味が強い。
- ⑯. 黒褐色土 粘性が強い。
- ⑰. 暗褐色土 ⑭層より粘性・黒味を増す。
- ⑱. 暗褐色土 黄褐色粘質土小ブロックを少量含む。

1. 暗褐色粗細砂互層 (粗粒軽石混じり・固結)
2. 暗灰色粗細砂互層 (固結)
3. 褐～暗灰色粗細砂・シルト互層
4. ブラックバンド
5. 暗灰色シルト
6. 暗灰色粗粒軽石層
7. 明灰色シルト
8. 褐色シルト
9. 暗灰色シルト
10. 褐色シルト
11. 青灰色細砂 (固結)

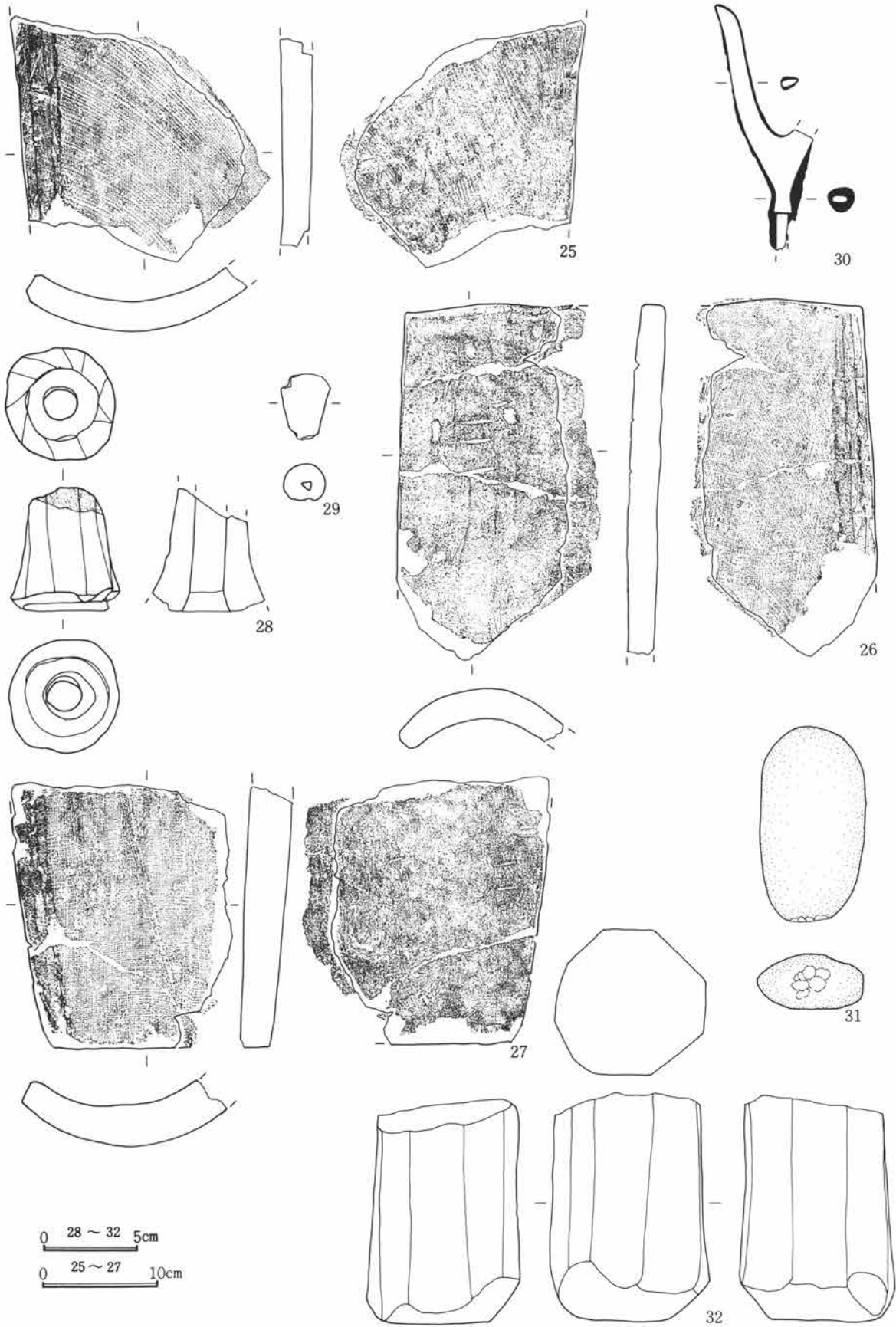
第 589 図 I 区第 4 号井戸跡実測図



第590図 I区第4号井戸跡出土遺物実測図(1)



第591図 I区第4号井戸跡出土遺物実測図(2)

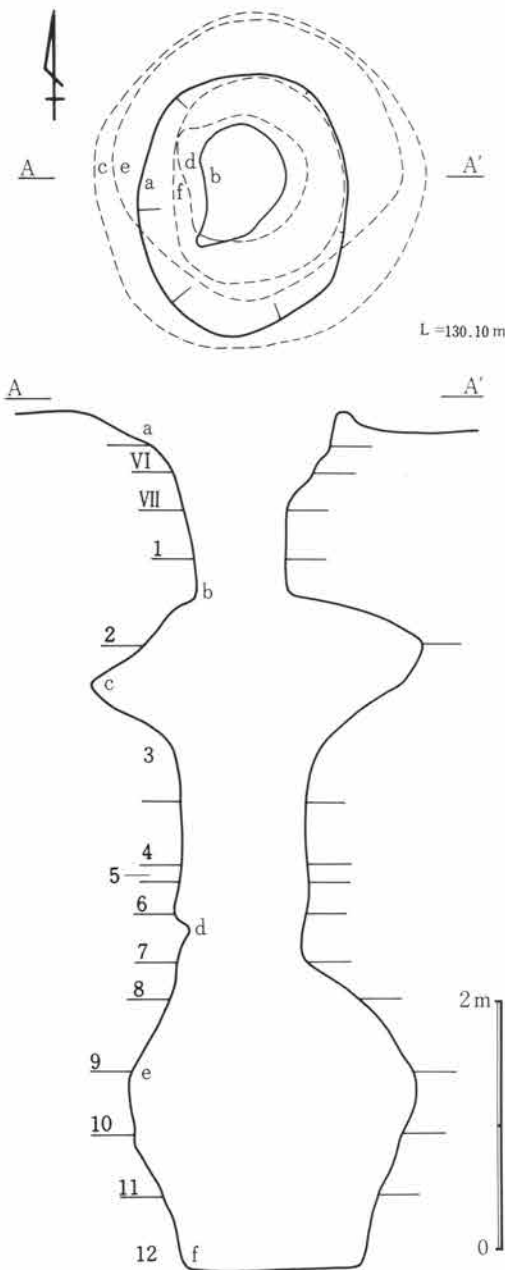


第592図 I区第4号井戸跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物

(所見) 当井戸跡は、円筒形地山井筒の掘り方と考えられ、確認面から-3.8m程に最大のアグリ部があり、それ以下は比較的安定している。充填土の埋没状態は、確認面から-4.0m程までは礫や地山のブロック及び瓦や須恵器の破片等の遺物が集中しており、人為的埋没が想定できる。これよりさらに下位は黒色粘質土（ヘドロ?）や暗灰色を呈する砂質土が堆積しており、自然埋没の層と考えられる。当井戸跡で特筆されるのは-2.6m~-3.9mの範囲から馬骨が頭骨だけでも4頭分出土したことである。これまでの調査でも井戸内から馬骨が出土する類例は多く、井戸廃棄に伴い何らかの行為が行われていることが想定される。

遺構名称	I区第8号井戸跡		位置 38・39-I-72・73グリッド内				平面形状	楕円形
規模(m)	地上径2.07	底径1.35	最細径0.90	最大径2.65	深度6.78	涌水位(m)	夏期4.93・冬期1.58	
アグリ部最大径(m)		夏期 2.65・冬期 2.26		涌水層	3・10層	耐水層	4・11層	

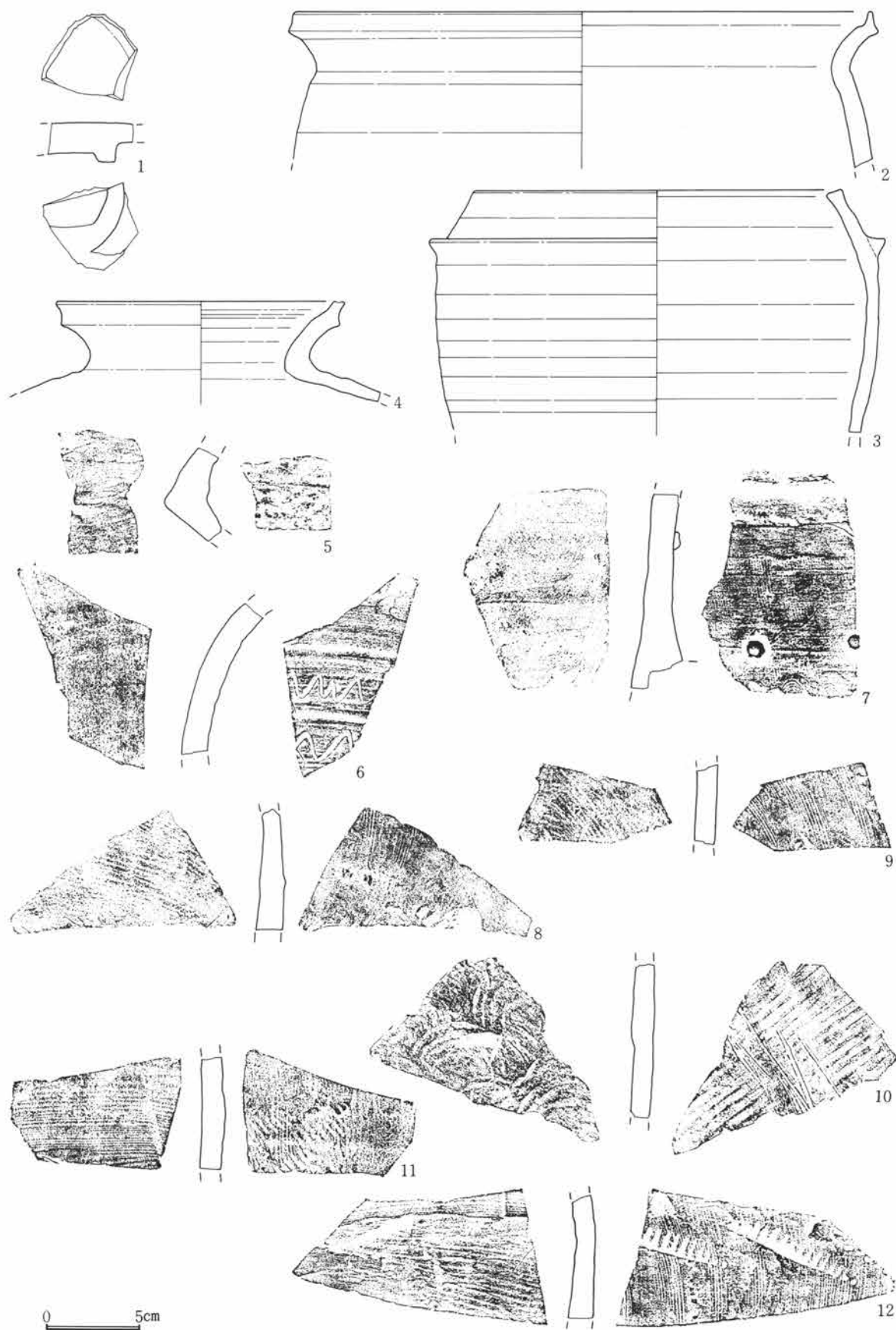


(所見) 当井戸跡は、円筒形地山井筒の掘り方と考えられ、確認面から-1.5m~-2.7m程の位置に最大のアグリ部がみられ、さらに-4.5m~-6.5m程の位置にもアグリ部がみられる。上部のアグリ部は、しみ出す程度の水に地山の粗い砂質土が影響されて形成されたものと考えられ、下部のアグリは生活必要水の影響で形成されたものであろう。

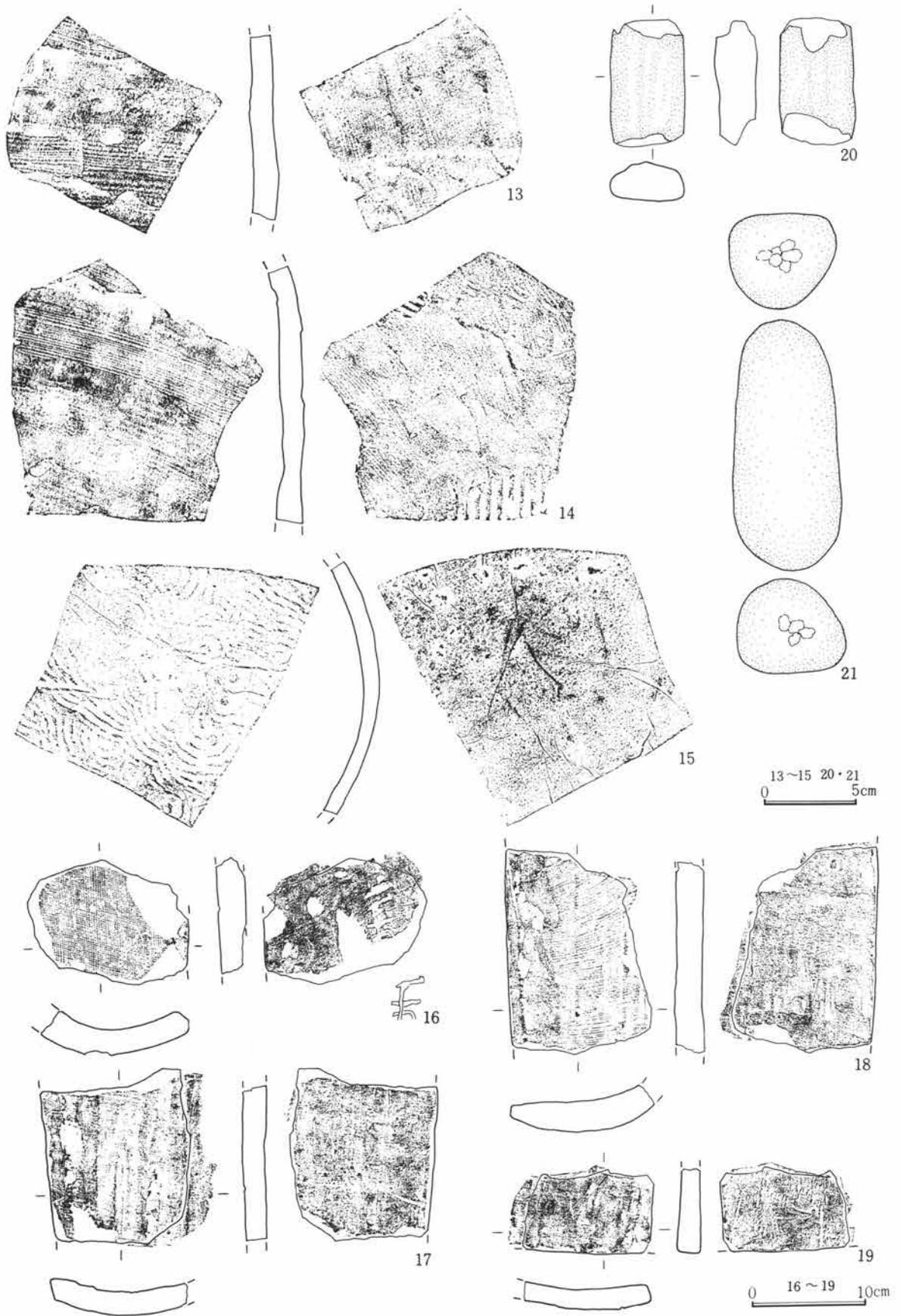
充填土の埋没状態は、確認面から-2.5m程度までは浅間B軽石を多量に含む暗褐色土で、遺物の出土はほとんど認められない層であり、堆積状態から自然埋没したものと思われる。-2.5m~-4.0mの範囲には径が10~30m程の礫が多量に入っている他、馬骨を含め瓦や須恵器破片が多く出土しており、人為的に埋められているのは明らかである。さらに-4.0m~-5.7mの範囲は地山のブロックを多量に含む暗褐色砂質土であり、この部分も人為的な埋没が想定できる。-5.7m~-7.0mまでは、上位に黒色粘質土（ヘドロ?）が、下位には粗い暗灰色砂質土が堆積しており、井戸使用段階における水性堆積と考えられる。遺物中には中世の遺物も含まれているが、これらは最上層の出土と考えられるものである。

1. 赤褐色粗細砂（固結）
2. 暗灰色粗細砂
3. 灰褐色粗細砂・シルト互層
4. ブラックバンド
5. 灰色細砂
6. 灰褐色粗粒軽石
7. 灰青色シルト
8. 褐灰色粗細砂（固結）
9. 灰褐色シルト
10. 青灰色シルト
11. 灰褐色シルト
12. 青灰色細砂（固結）

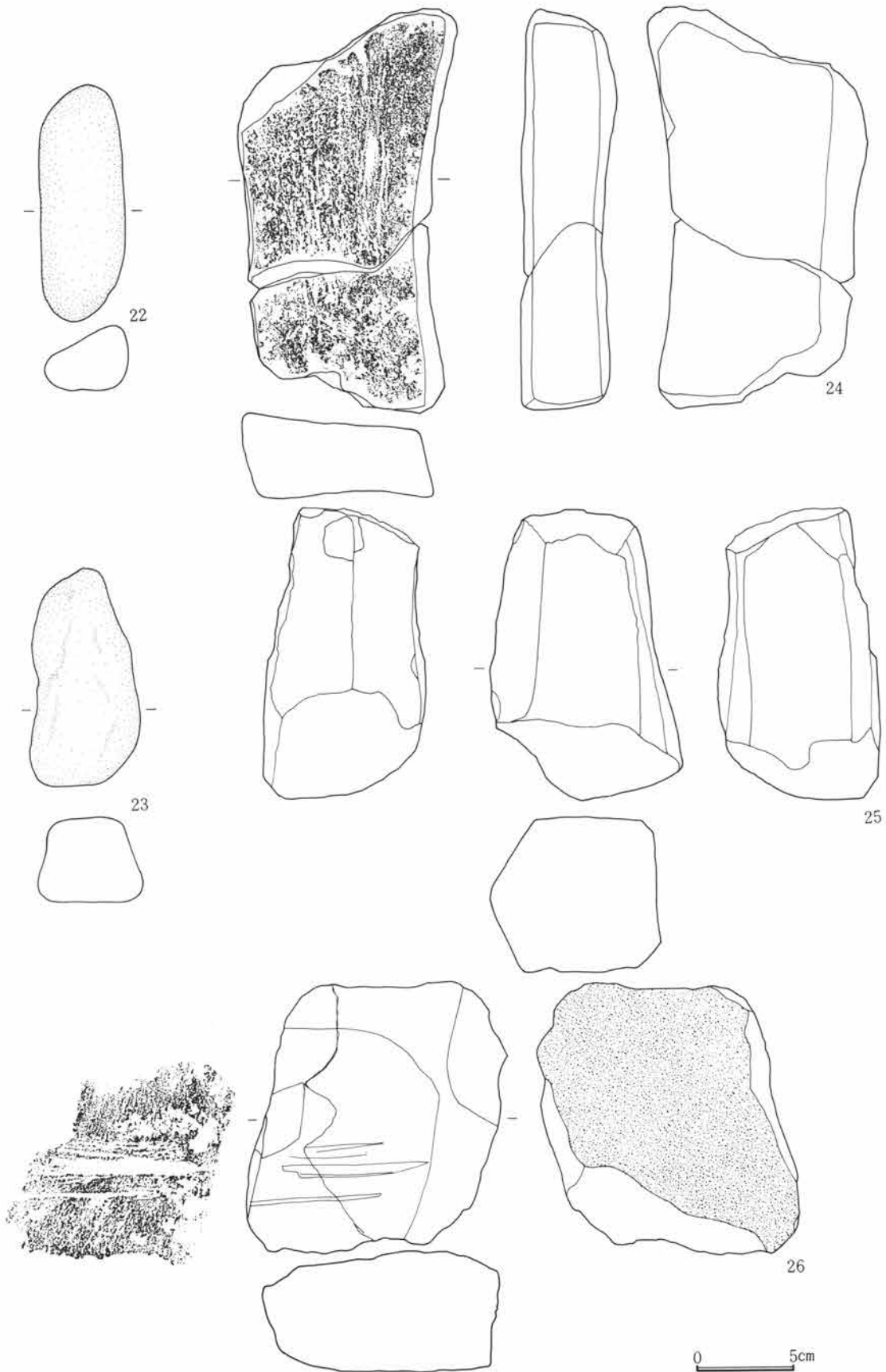
第593図 I区第8号井戸跡実測図



第594図 I区第8号井戸跡出土遺物実測図(1)

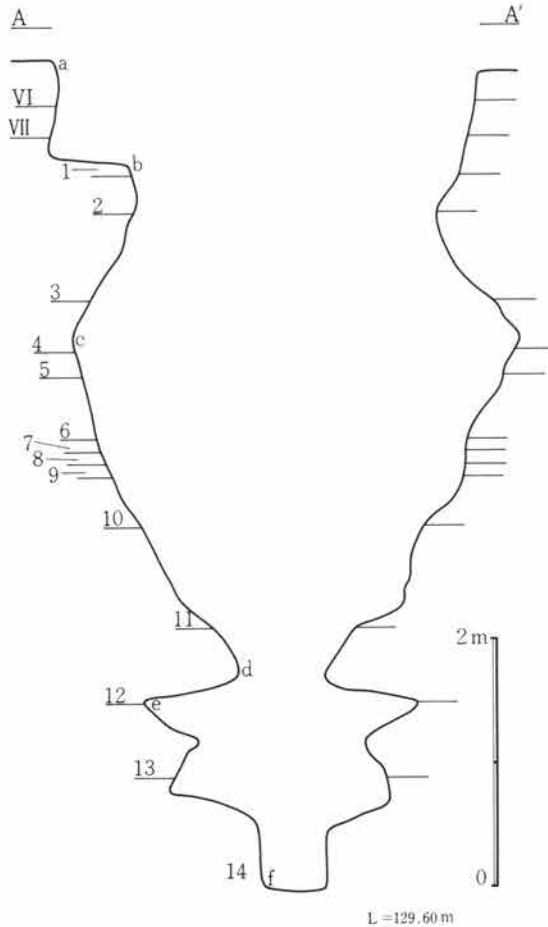
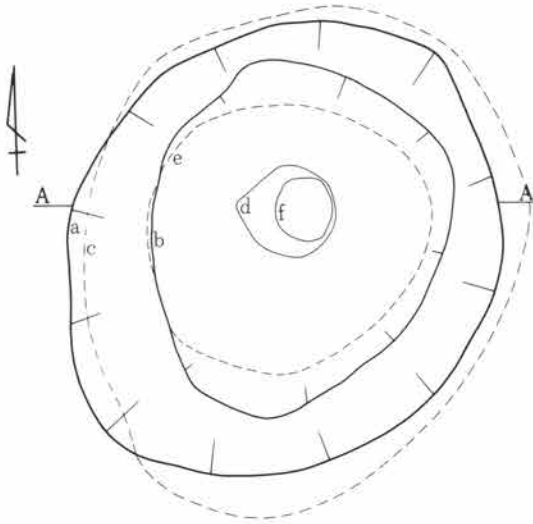


第595図 I区第8号井戸跡出土遺物実測図(2)



第 596 図 I 区第 8 号井戸跡出土遺物実測図 (3)

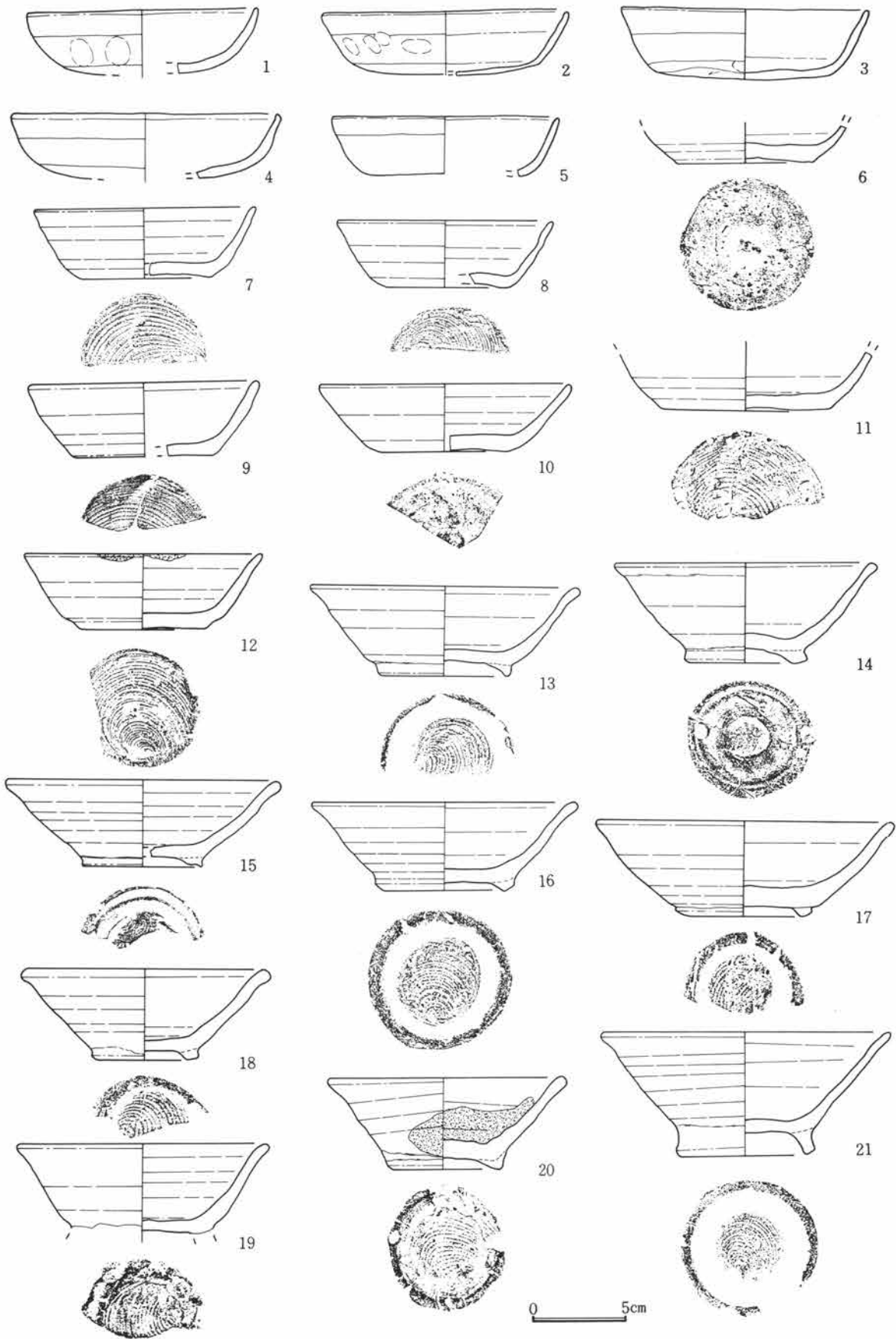
遺構名称	I区第9号井戸跡		位置	17～19—I—64・65グリッド内			平面形状	円形
規模(m)	地上径3.42	底径0.50	最細径0.70	最大径3.60	深度6.55	涌水位(m)	夏期4.44・冬期1.50	
アグリ部最大径(m)	夏期 3.60・冬期 2.15		涌水層	4・13層		耐水層	5・14層	



(所見) 当井戸跡は、上部はスリバチ、下部は円筒形地山井筒の掘り方がなされていると考えられるが、長期の開口によるものか、アグリ部が棚落ちして井筒部分の周囲が大きくなり、後に掘り増した可能性がある。充填土は、大きく5層に分層が可能である。最上層は確認面から-1.5m程の深さまでの層で、浅間B軽石と考えられる暗褐色の砂質土層であり、第2層は-3.5m程までの約2mの厚さの部分であり、この層中には径約10～50cmの礫が多量に含まれている。この層は礫の出土状況からも人為的に埋め戻された層であるのは明らかである。第3層目は-5m程までの約1.5mの厚さの層で、ブロック状の地山土で構成されていることから前述の棚落ちによる堆積土であろう。第4・5層は第8号井戸跡等の最下層に認められたヘドロと思われる黒色粘質土及び粗い砂質土であり、自然堆積と考えられるものである。遺物は礫の多数出土した第2層中から土師器杯や須恵器碗をはじめ灰釉陶器皿さらに文字瓦等が多数出土している。遺物の中で特筆されるものには、調査時においても湧水の認められた-5.4m程の深さから木製の鉢が出土したことであるが、調査後の保存が悪く実測掲載はできなかった。また、遺物中に交じって馬骨が比較的多数検出されている。

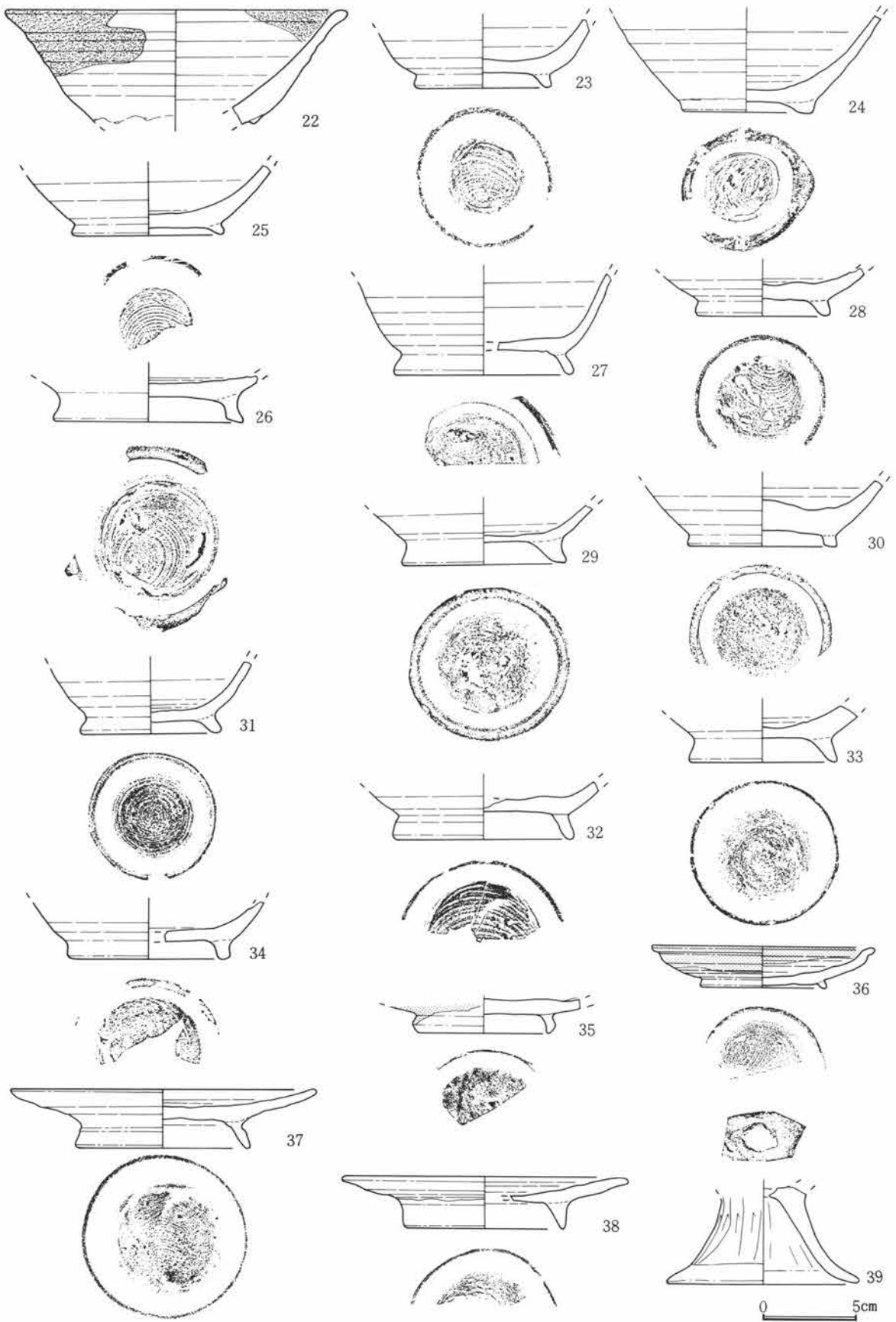
1. 褐色火山灰
2. 褐灰色細砂・シルト
3. 灰褐色細砂
4. 褐灰色シルト・細砂
5. 褐灰色シルト
6. ブラックバンド
7. 褐色細砂
8. 軽石
9. 灰色シルト
10. 青灰色細砂
11. 褐灰色火山灰砂(小礫混)
12. 暗灰色シルト
13. 褐灰色シルト
14. 青灰色粗砂・細砂

第597図 I区第9号井戸跡実測図



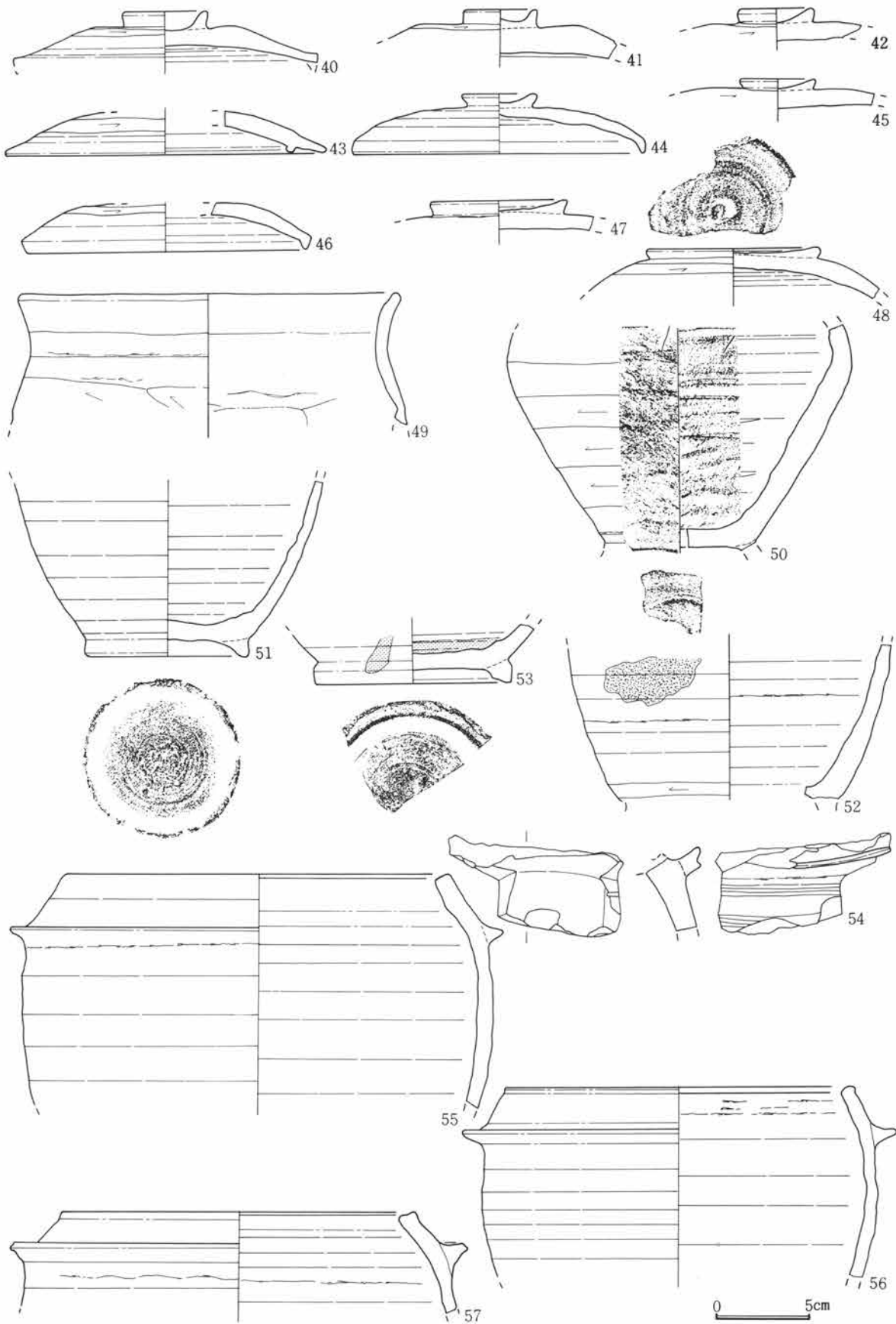
第598図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

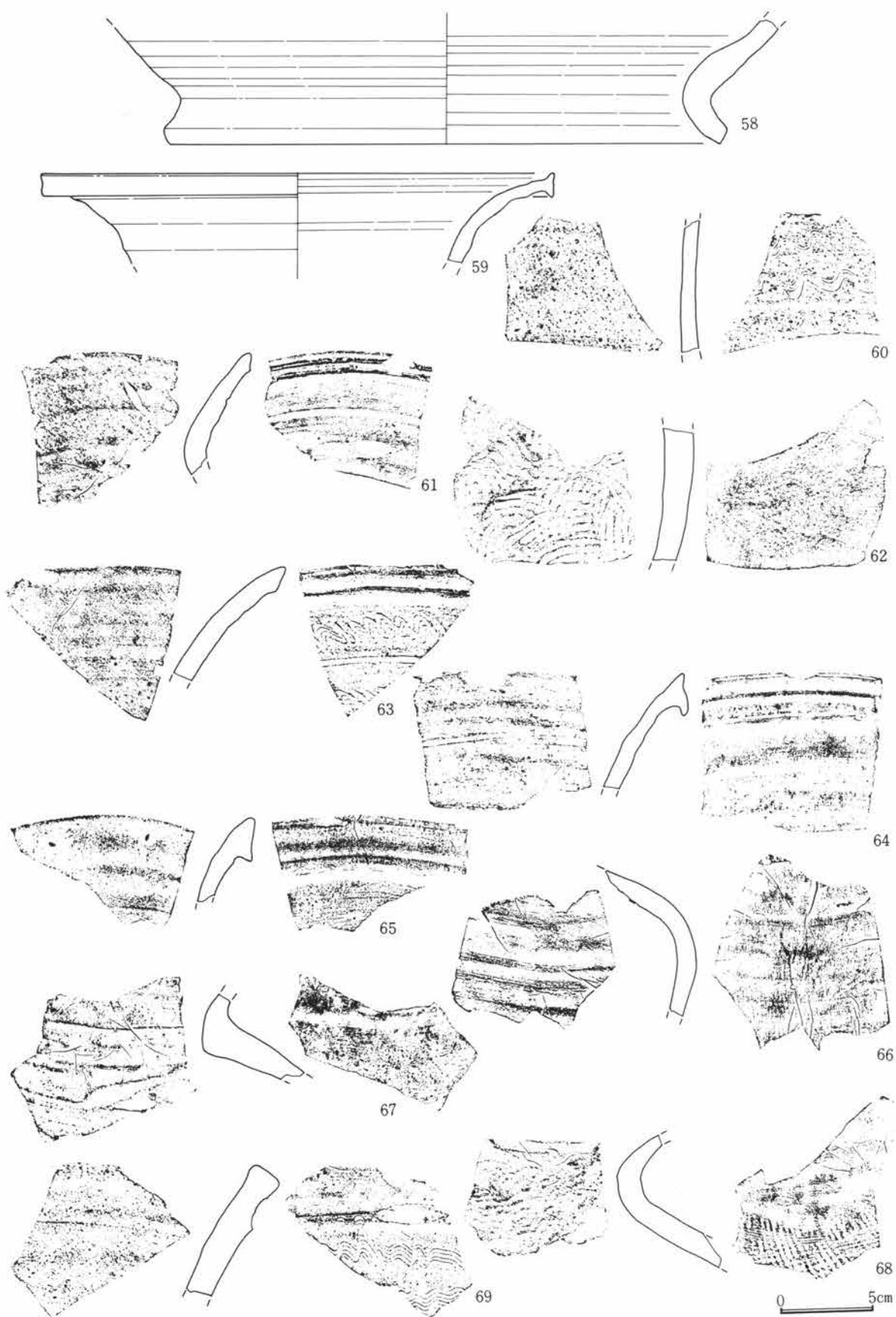


第599図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(2)

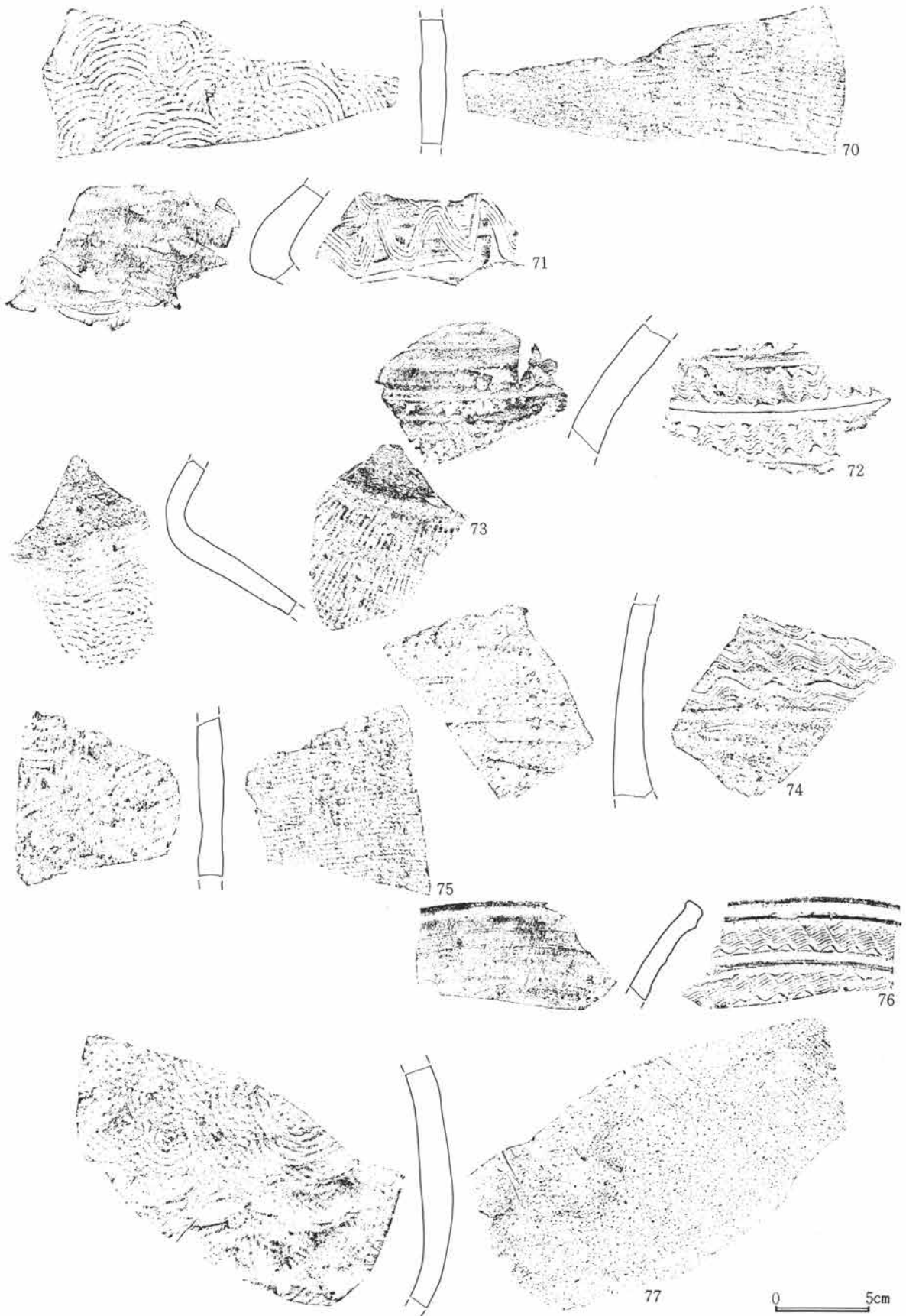
第2節 検出された遺構・遺物



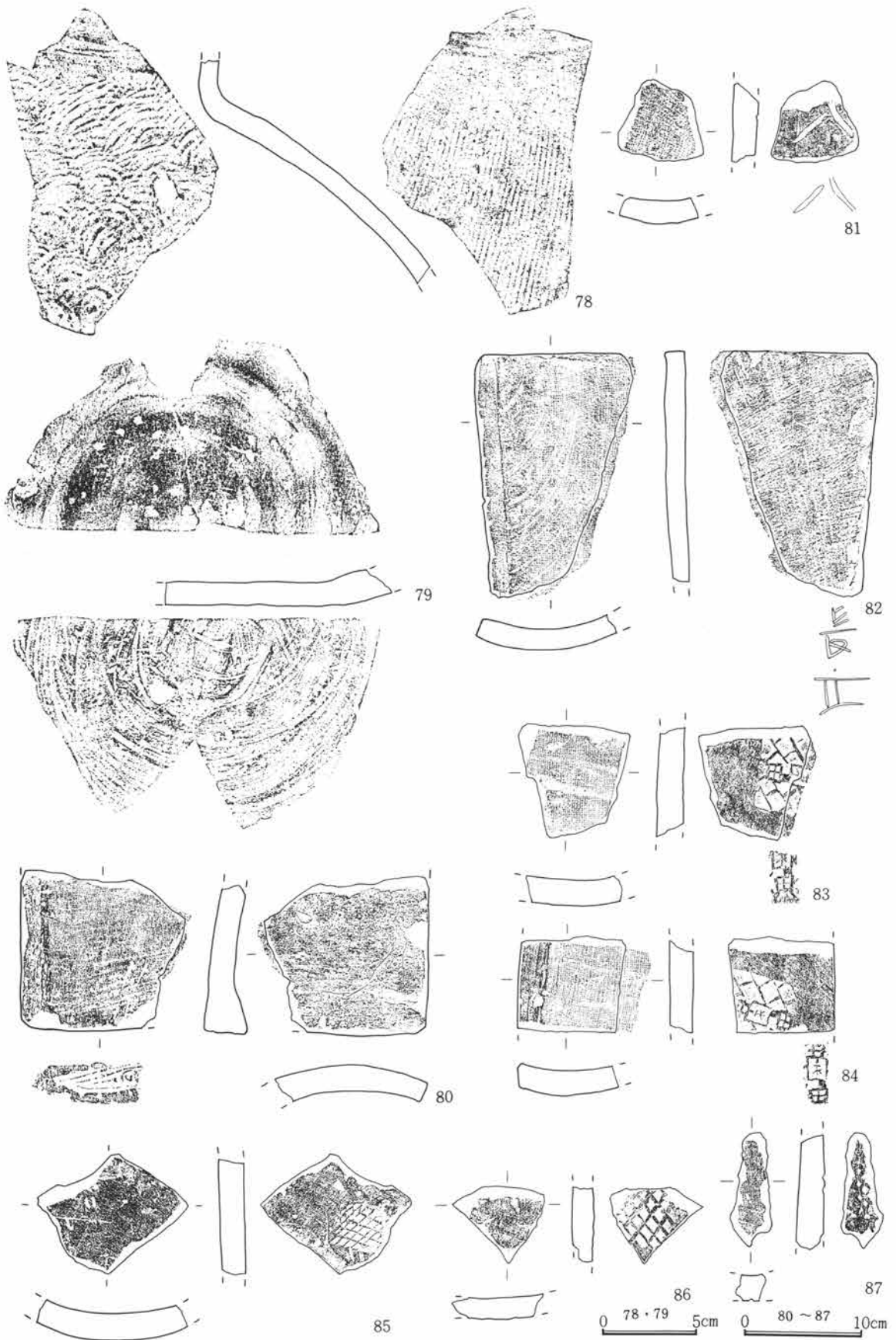
第600図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(3)



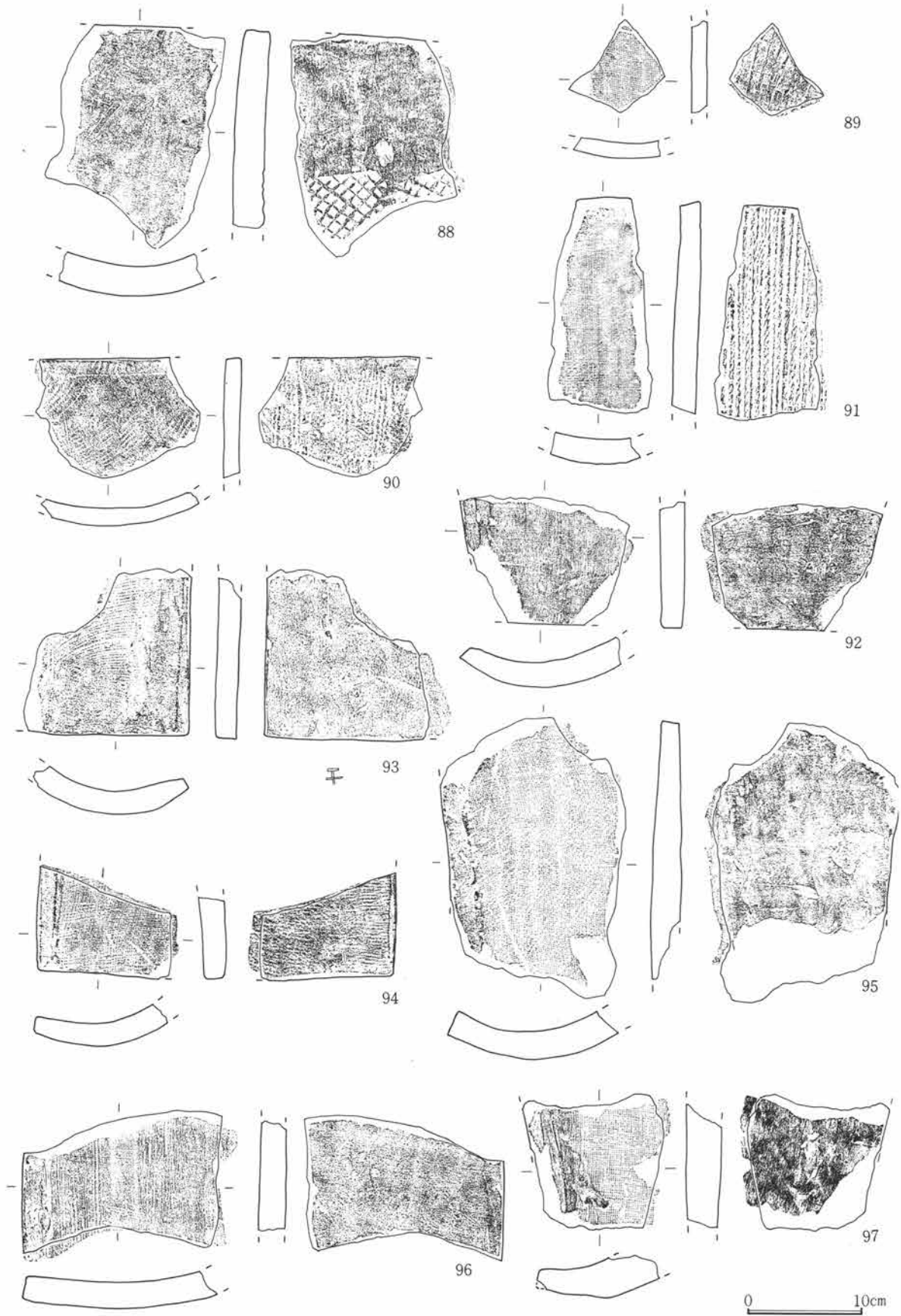
第601図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(4)



第602図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(5)

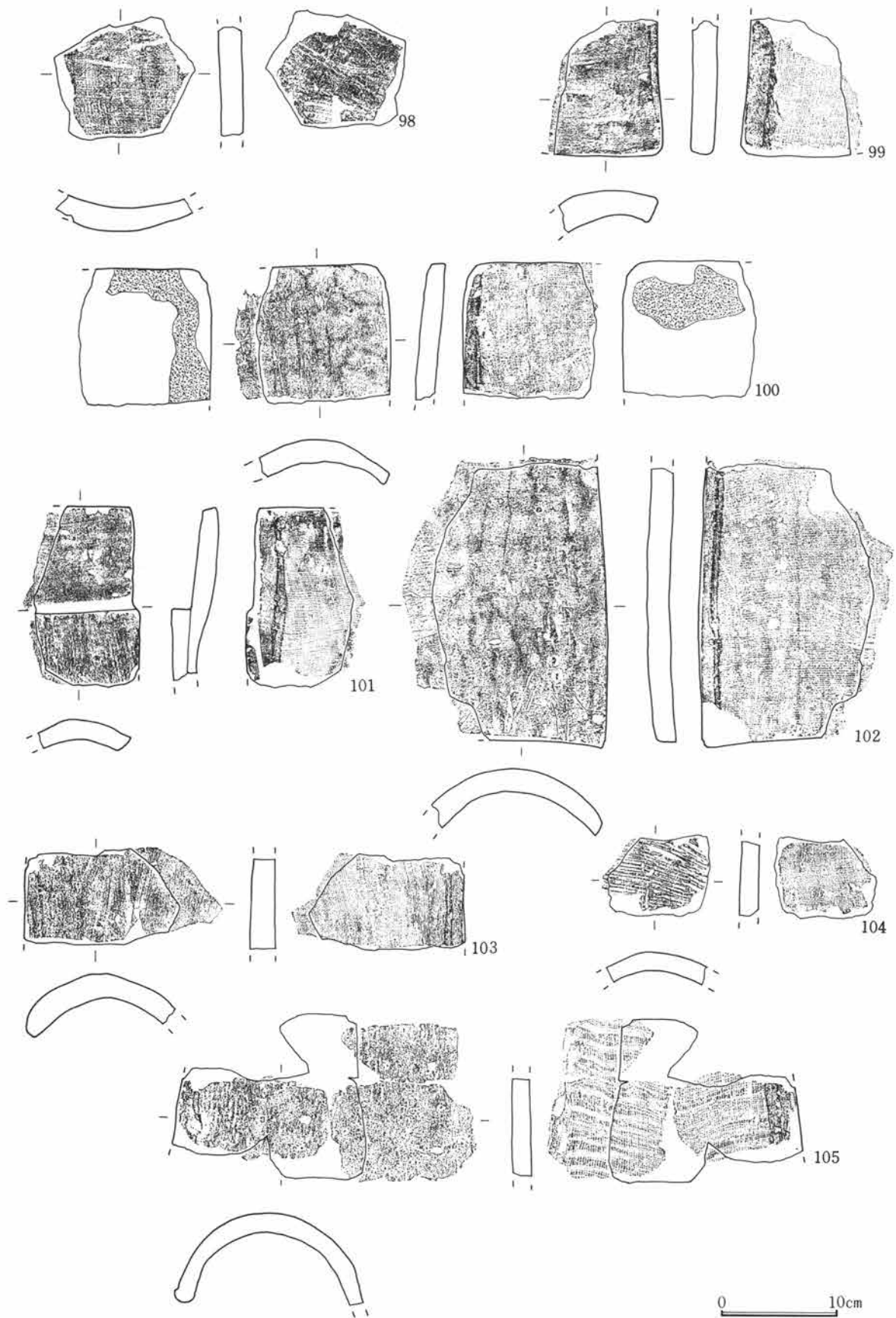


第603図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(6)

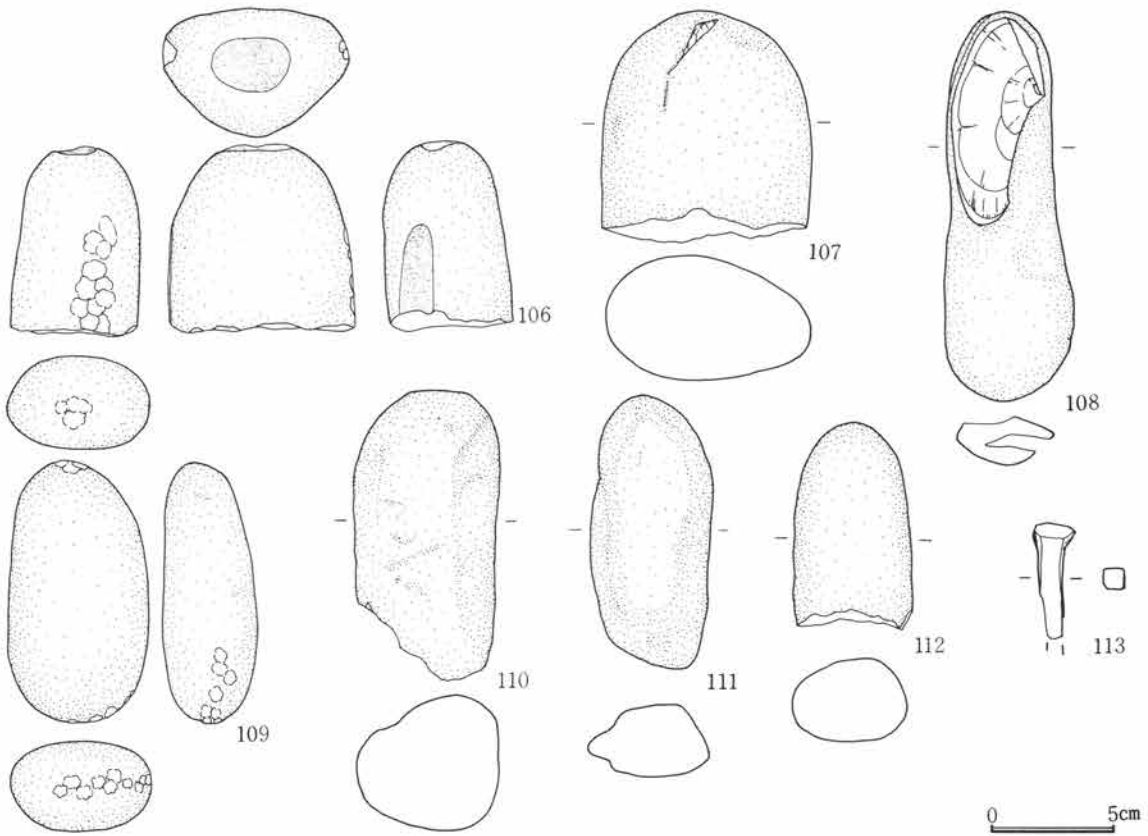


第604図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(7)

第4章 検出された遺構・遺物



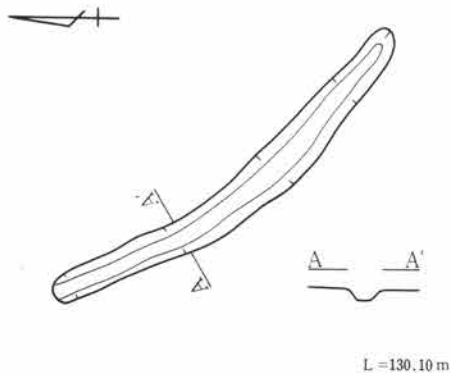
第605図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(8)



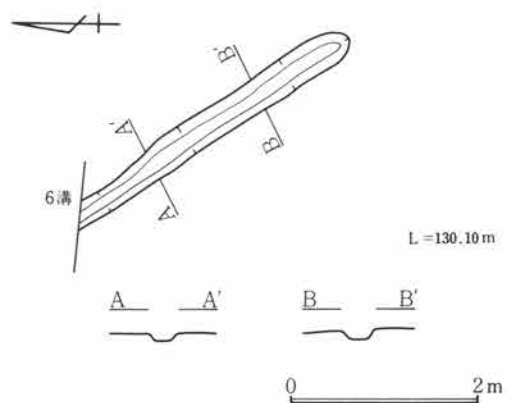
第606図 I区第9号井戸跡出土遺物実測図(9)

7. サク状遺構

I区第1号サク状遺構



I区第2号サク状遺構

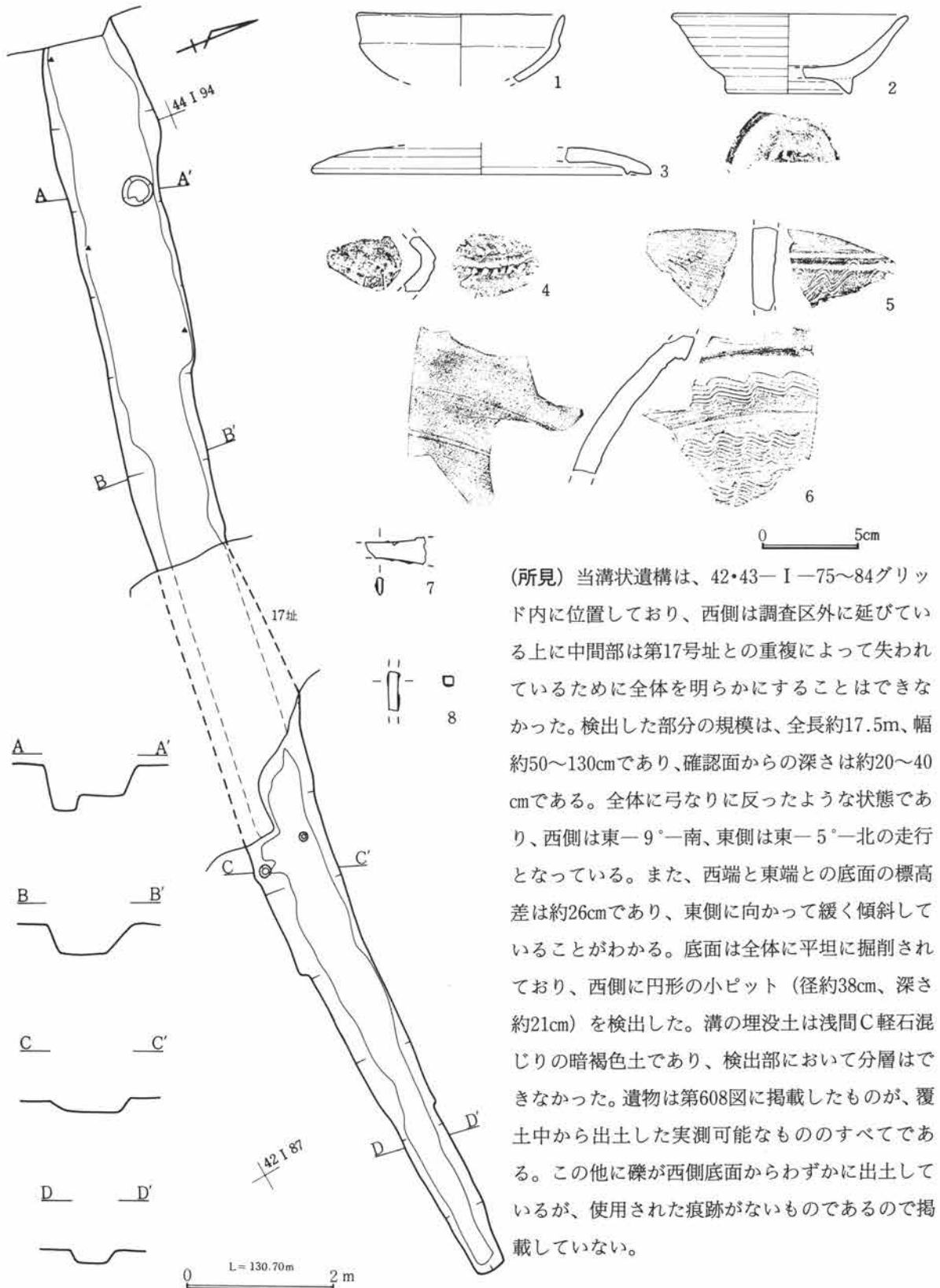


第607図 I区第1・2号サク状遺構実測図

(所見) 第1・2号サク状遺構は、それぞれ一条の検出であるが、充填土中にFAと考えられるようなブロックが混入していたことから、G区で検出されたサク状遺構と同様の遺構と判断したものである。第1号サク状遺構は全長約4.6m、幅約33~48cm、深さ約10cm、第2号サク状遺構は、全長約3.5m、幅約23~36cm、深さ約5~10cmの規模であり、北側はそれぞれ中世以降の第6号及び第8号溝状遺構との重複によって失われている。この2ヵ所に検出したサク状遺構は第544図の配置からわかるように、走行方向が一致している上に連続するような位置関係にあることから、一連の遺構である可能性が高い。

8. 溝状遺構

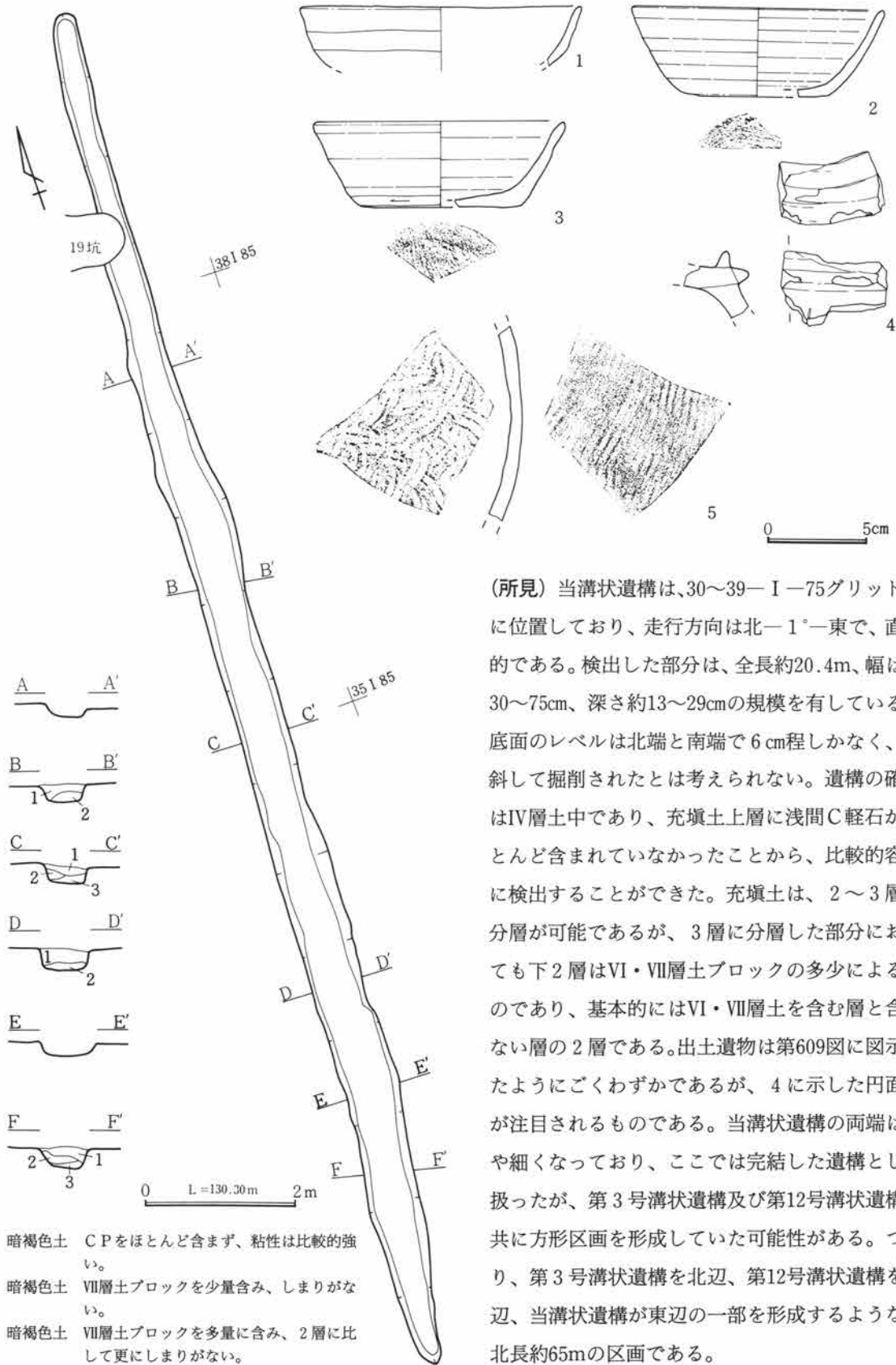
I区第3号溝状遺構



(所見) 当溝状遺構は、42・43—I-75~84グリッド内に位置しており、西側は調査区外に延びている上に中間部は第17号址との重複によって失われているために全体を明らかにすることはできなかった。検出した部分の規模は、全長約17.5m、幅約50~130cmであり、確認面からの深さは約20~40cmである。全体に弓なりに反ったような状態であり、西側は東-9°-南、東側は東-5°-北の走行となっている。また、西端と東端との底面の標高差は約26cmであり、東側に向かって緩く傾斜していることがわかる。底面は全体に平坦に掘削されており、西側に円形の小ピット(径約38cm、深さ約21cm)を検出した。溝の埋没土は浅間C軽石混じりの暗褐色土であり、検出部において分層はできなかった。遺物は第608図に掲載したものが、覆土中から出土した実測可能なものすべてである。この他に礫が西側底面からわずかに出土しているが、使用された痕跡がないものであるため掲載していない。

第608図 I区第3号溝状遺構・出土遺物実測図

I区第4号溝状遺構

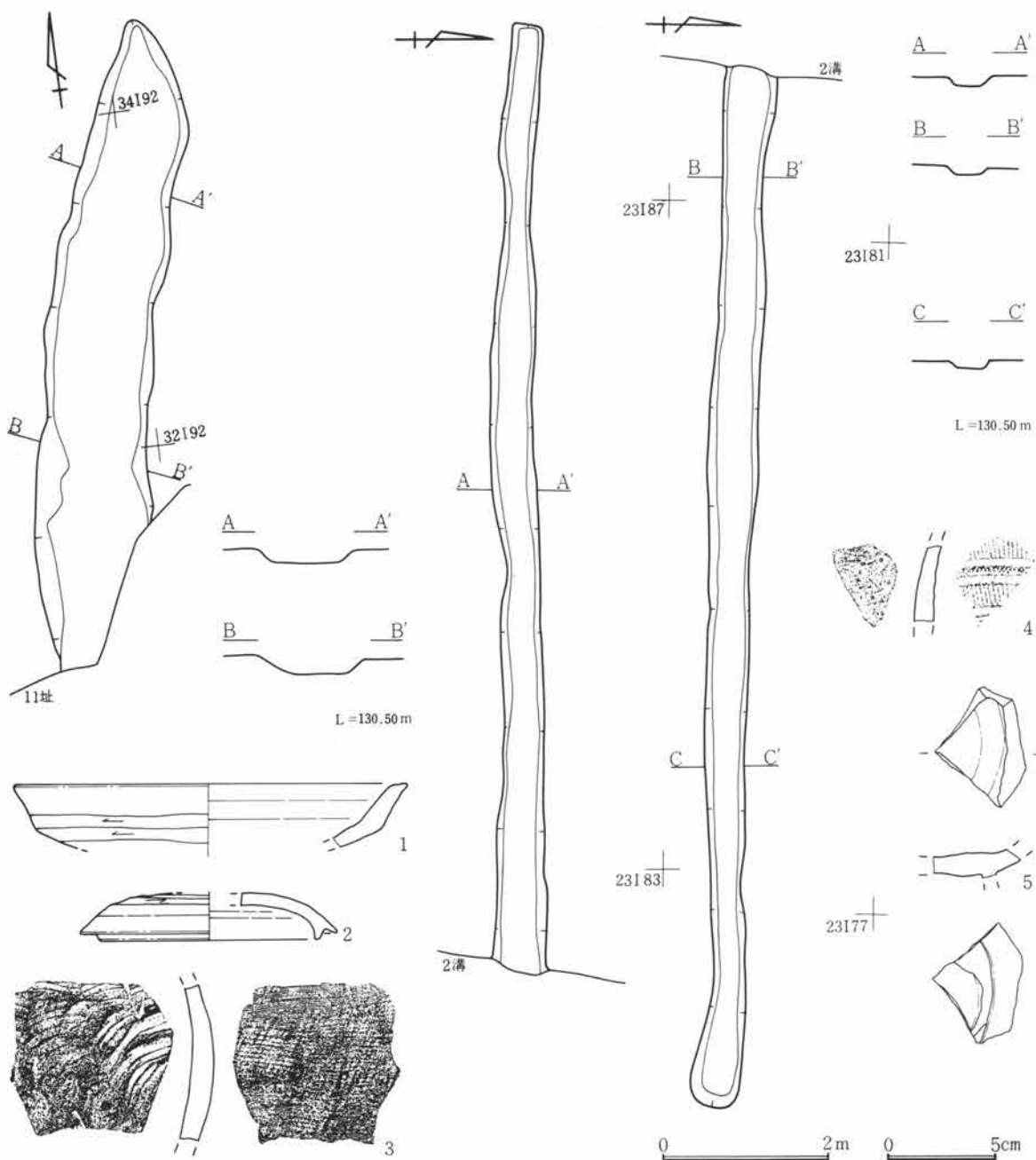


(所見) 当溝状遺構は、30～39—I-75グリッド内に位置しており、走行方向は北 1° 東で、直線的である。検出した部分は、全長約20.4m、幅は約30～75cm、深さ約13～29cmの規模を有している。底面のレベルは北端と南端で6cm程しかなく、傾斜して掘削されたとは考えられない。遺構の確認はIV層土中であり、充填土上層に浅間C軽石がほとんど含まれていなかったことから、比較的容易に検出することができた。充填土は、2～3層に分層が可能であるが、3層に分層した部分においても下2層はVI・VII層土ブロックの多少によるものであり、基本的にはVI・VII層土を含む層と含まない層の2層である。出土遺物は第609図に図示したようにごくわずかであるが、4に示した円面硯が注目されるものである。当溝状遺構の両端はやや細くなっており、ここでは完結した遺構として扱ったが、第3号溝状遺構及び第12号溝状遺構と共に方形区画を形成していた可能性がある。つまり、第3号溝状遺構を北辺、第12号溝状遺構を南辺、当溝状遺構が東辺の一部を形成するような南北長約65mの区画である。

第609図 I区第4号溝状遺構・出土遺物実測図

I区第5号溝状遺構

I区第7号溝状遺構



第610図 I区第5・7号溝状遺構・出土遺物実測図

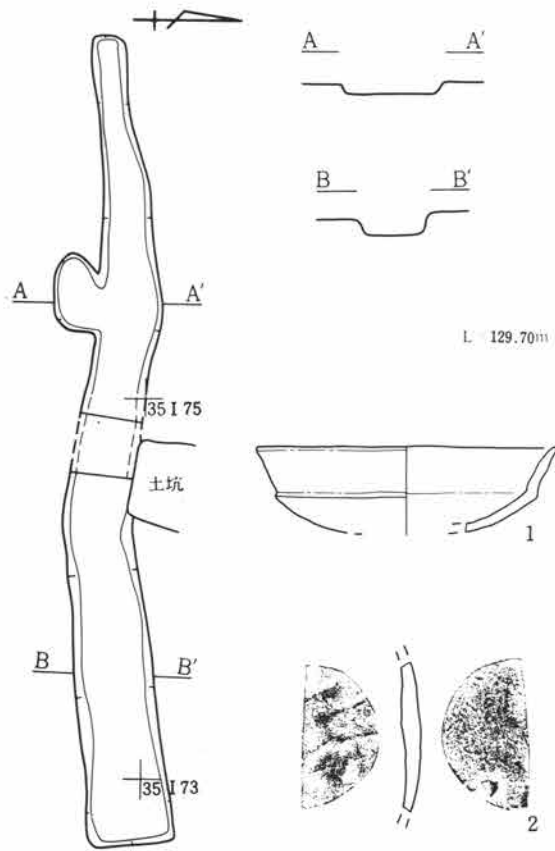
I区第5号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、30・34—I-81・82グリッド内に位置しており、南側は中世以降の第11号址との重複によって失われている。検出した部分は全長約7.8m、幅約113~140cm、深さ約12~19cmの規模を有し、南北で底面レベルの差はほとんど認められない。走行方向は北から15°程東に振れている。

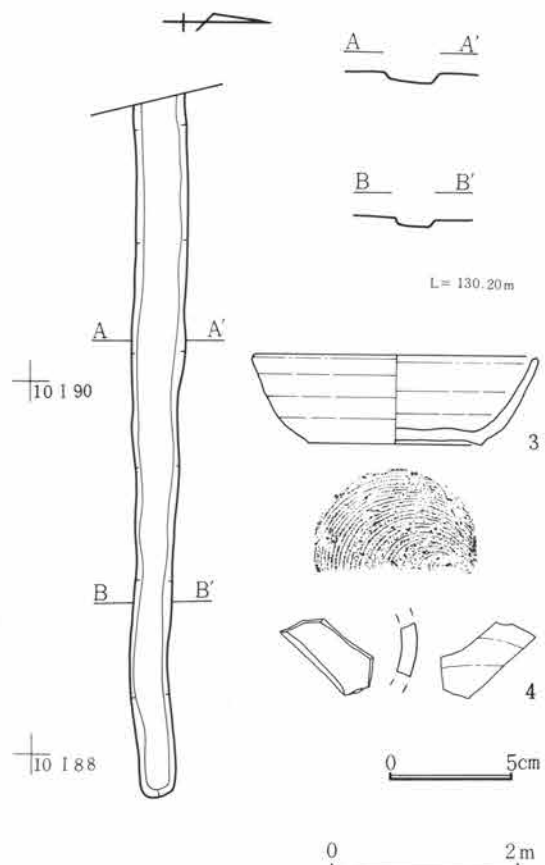
I区第7号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、22・23—I-65~78グリッド内に位置しており、中央を中世以降の第2号溝状遺構によって切られている。検出した部分は全長約24.3m、幅約40~60cm、深さ約3~9cmの規模であり、西端と東端との底面のレベル差は28cm程である。走行方向はほぼ東西方向であり、直線的に掘削されている。

I区第9号溝状遺構



I区第12号溝状遺構



第611図 I区第9・12号溝状遺構・出土遺物実測図

I区第9号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、34・35—I—62~66グリッド内に位置している。東側は南北農道下にかかっていたために二次の調査を実施したが、農道下では検出することができなかった。検出した部分の規模は全長約8.65m、幅約35~90cm、深さ約10~20cmである。走行方向はほぼ東西であり、西端と東端の底面のレベル差は10cm程であり、特に顕著な傾斜は認められない。

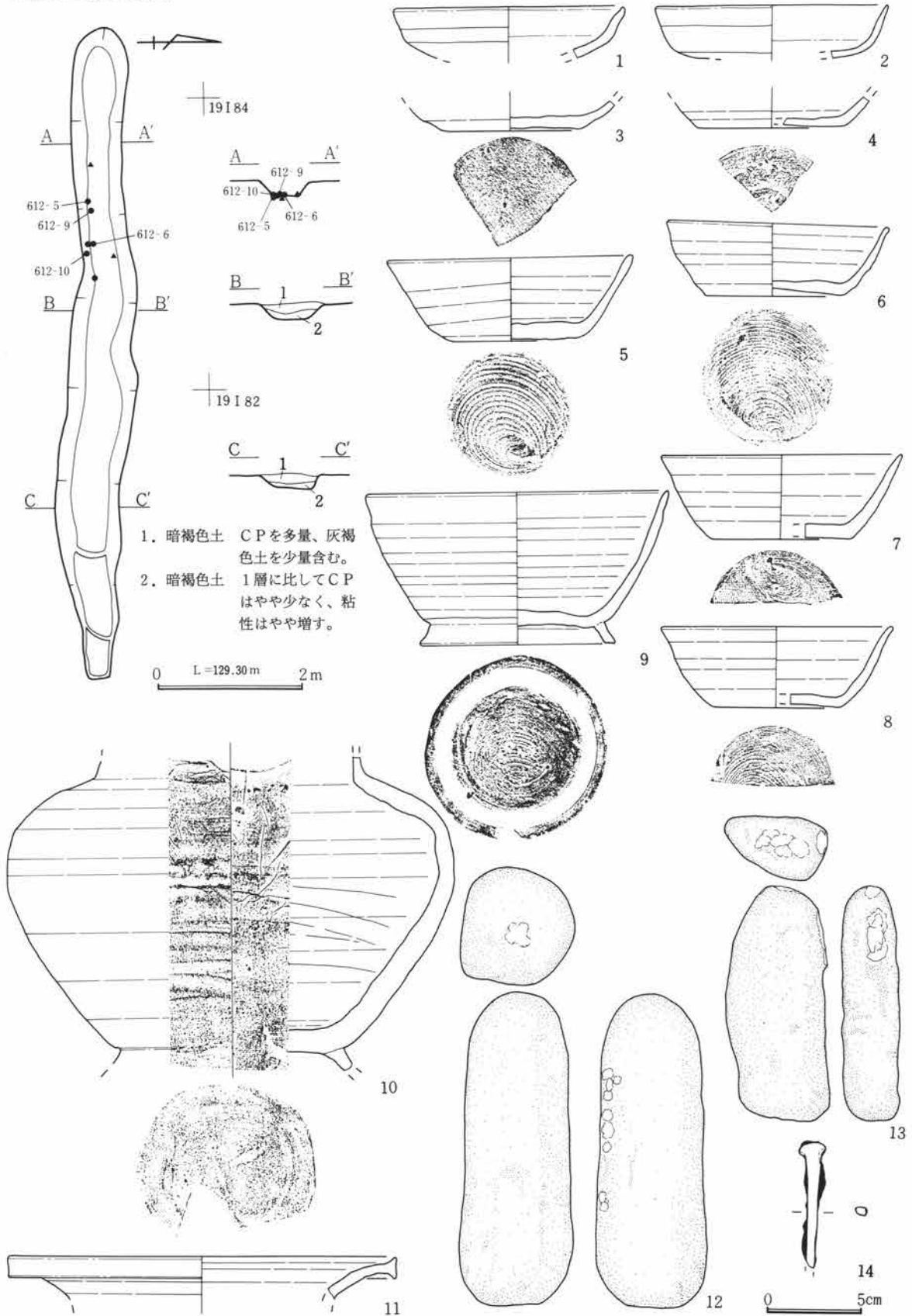
I区第12号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、10—I—77~81グリッド内に位置しており、西側は調査区外にかかっており全体は不明である。検出部分の規模は全長約7.5m、幅約37~60cm、深さ約7~16cmで、走行方向はほぼ東西である。底面レベルは東西部分で18cm程であり強い傾斜はみられない。第4号溝状遺構でも述べたように方形区画の南辺を形成していると思われる。

I区第13号溝状遺構

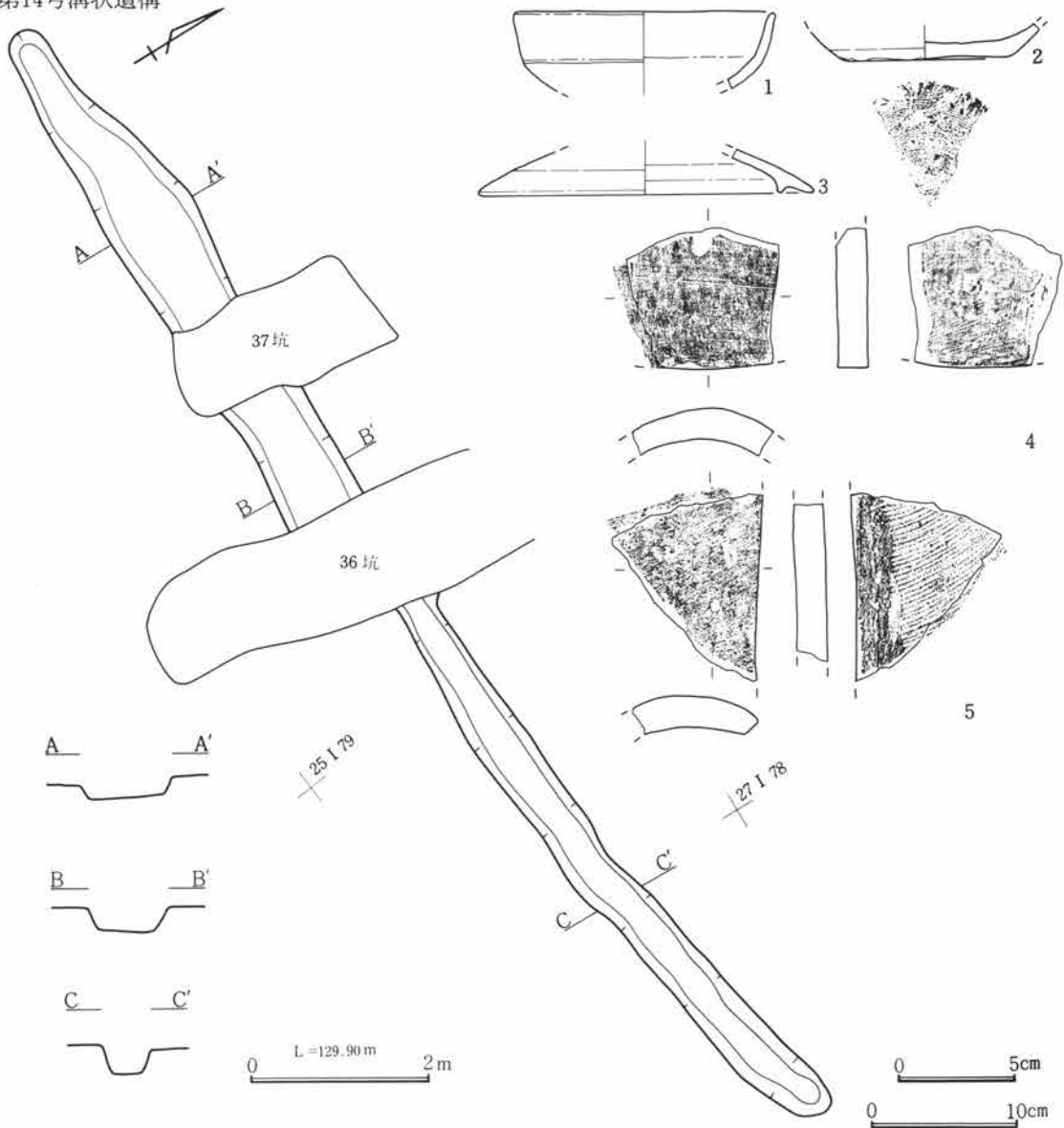
(所見) 当溝状遺構は、18—I—70~74グリッド内に位置している。検出した部分の規模は全長約8.87m、幅約35~97cm、深さ約3~20cmで、東側よりも西側がやや低く掘削されている。走行方向はほぼ東西方向で、位置的にも第7号溝状遺構と平行する関係にある。充填土は浅間C軽石の含有量の多少によって上下2層に分層が可能である。出土遺物は第612図に掲載したように、西寄りの底面付近から復元可能な遺物が比較的多く出土している。出土量は後述する第18号溝状遺構について多く、これらの遺物の年代観から、当溝状遺構は第18号溝状遺構よりも新しい時期に属するものであることは明らかである。

I区第13号溝状遺構



第612図 I区第13号溝状遺構・出土遺物実測図

I区第14号溝状遺構



第613図 I区第14号溝状遺構・出土遺物実測図

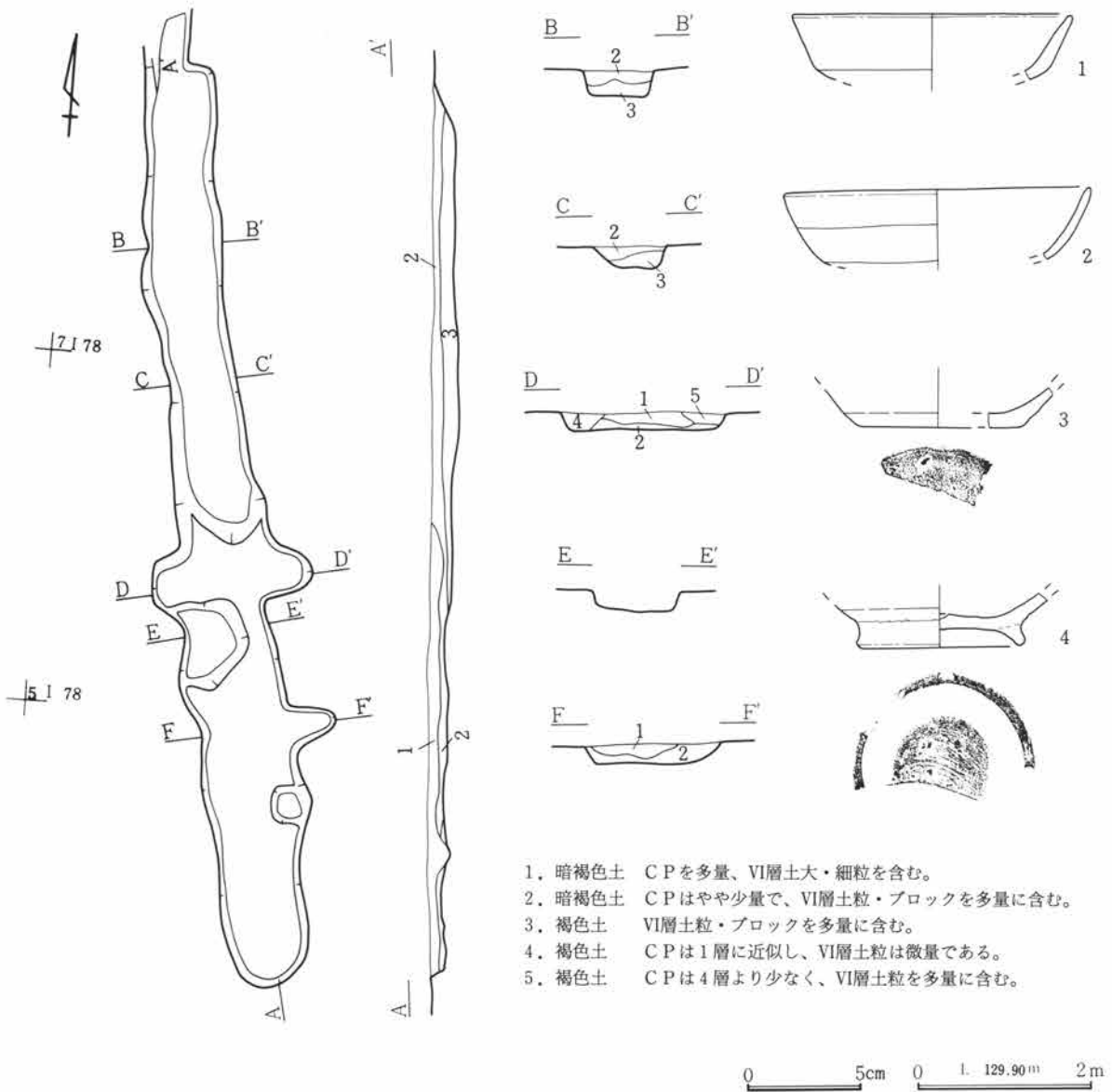
I区第14号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、25・26—I-66~73グリッド内に位置しており、中央部は中世以降の第36・37号土坑との重複によって失われている。検出した部分の規模は、全長約15.05m、幅約41~104cm、深さ約20~35cmである。底面レベルは西側よりも東側が20cm程低く掘削されており、走行方向は東-7°-北である。出土遺物は、第613図に示したようにごくわずかであるが、時期差のある遺物が交じっている。

I区第15号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、3~8—I-66・67グリッド内に位置しており、北側は第82号住居跡と重複している。出土遺物から判断する限り当溝状遺構が新しい時期に属すると考えられるが、第82号住居跡の覆土内において当溝状遺構のプランを検出することはできなかった。検出部分の規模は、全長約11.3m、幅約80~115cm、深さ約17~25cmである。走行方向は北-12°-西であり、北端と南端の底面レベルは南側が27cm程低く掘削されている。中央部の平面上の凹凸はピットとの重複によるものと思われる。

I区第15号溝状遺構



第614図 I区第15号溝状遺構・出土遺物実測図

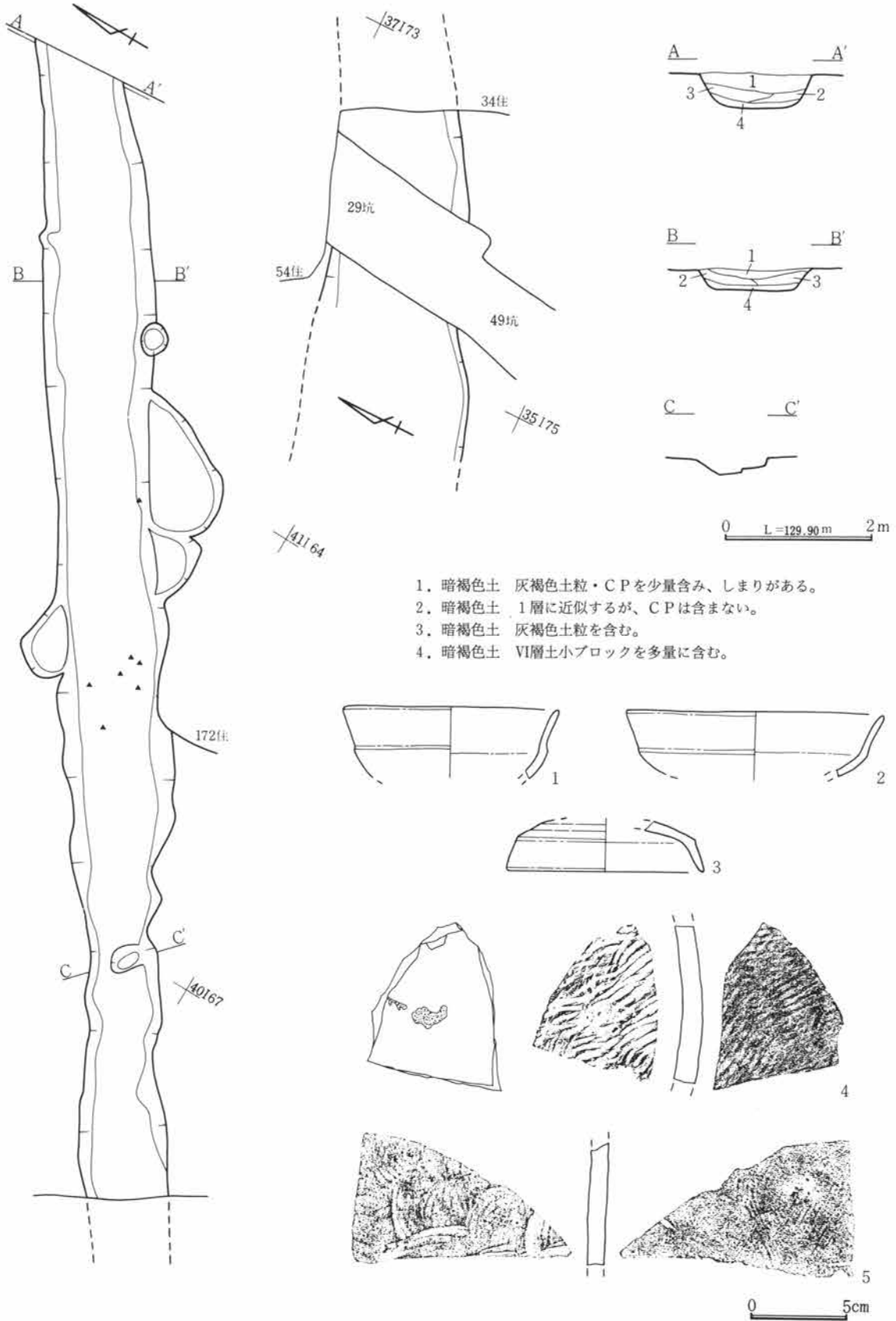
I区第17号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、39～44—I—52～58グリッド内に位置しており、東側は調査区外に延び、西側は南北農道部分で曖昧になっている。検出部分の規模は全長約15.8m、幅約92～155cm、深さ約16～48cmである。走行方向は東-33°-北である。

I区第18号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、11～23—I—54～58グリッド内に位置しており、中央部は中世以降の第6・8号溝状遺構との重複によって失われている他、第230号址と重複している。検出部分の規模は全長約25.0m、幅約76～110cm、深さ約30～39cmである。走行方向は北-20°-西であり、第21号溝状遺構と平行する関係にある。図示したように暗文土師器を始めとした遺物出土が顕著であり、第230号址の出土遺物の主たるものは当溝状遺構に伴う可能性が高い。遺構の性格は、掘立柱建物の区画であろうと考えている。

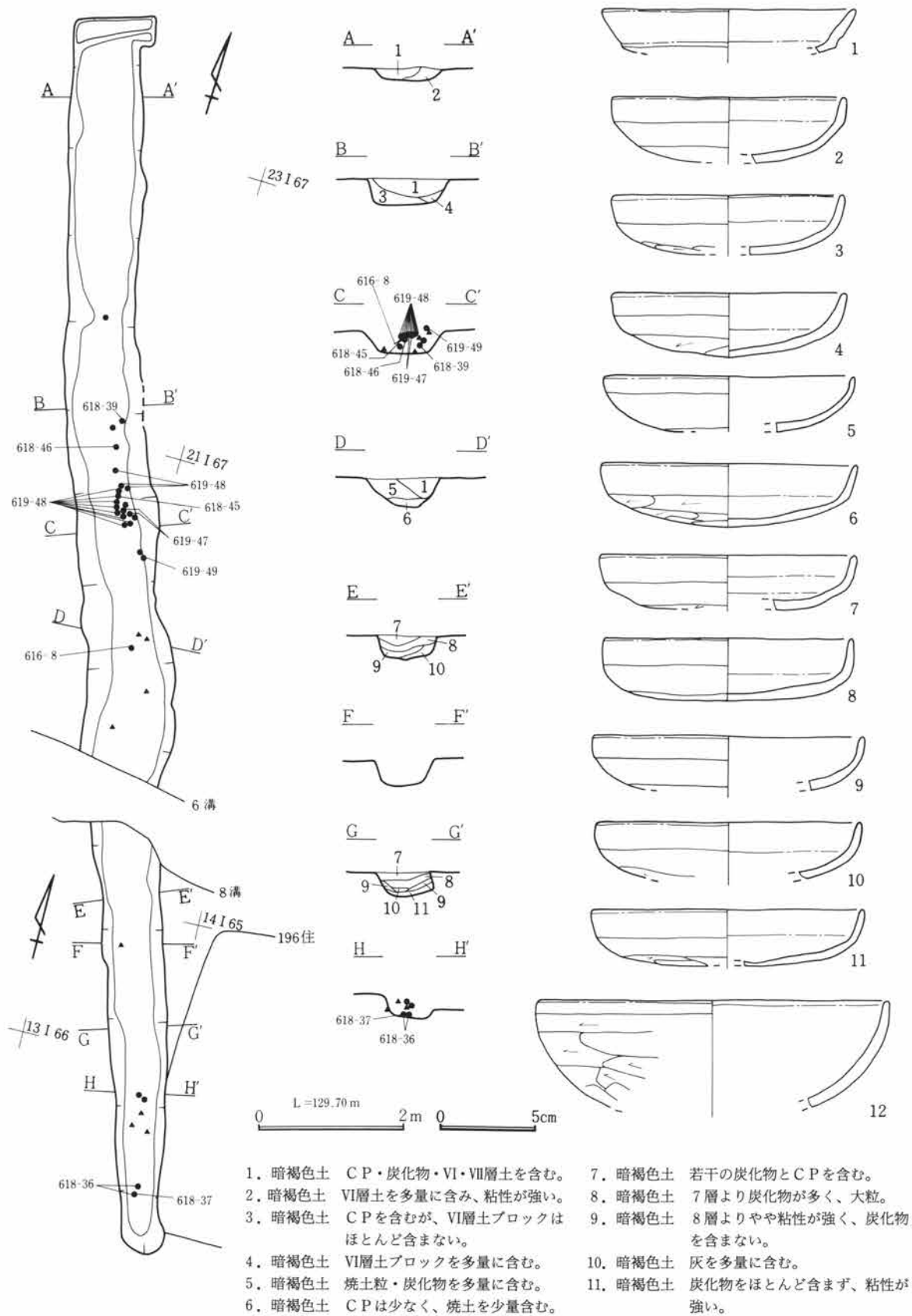
I区第17号溝状遺構



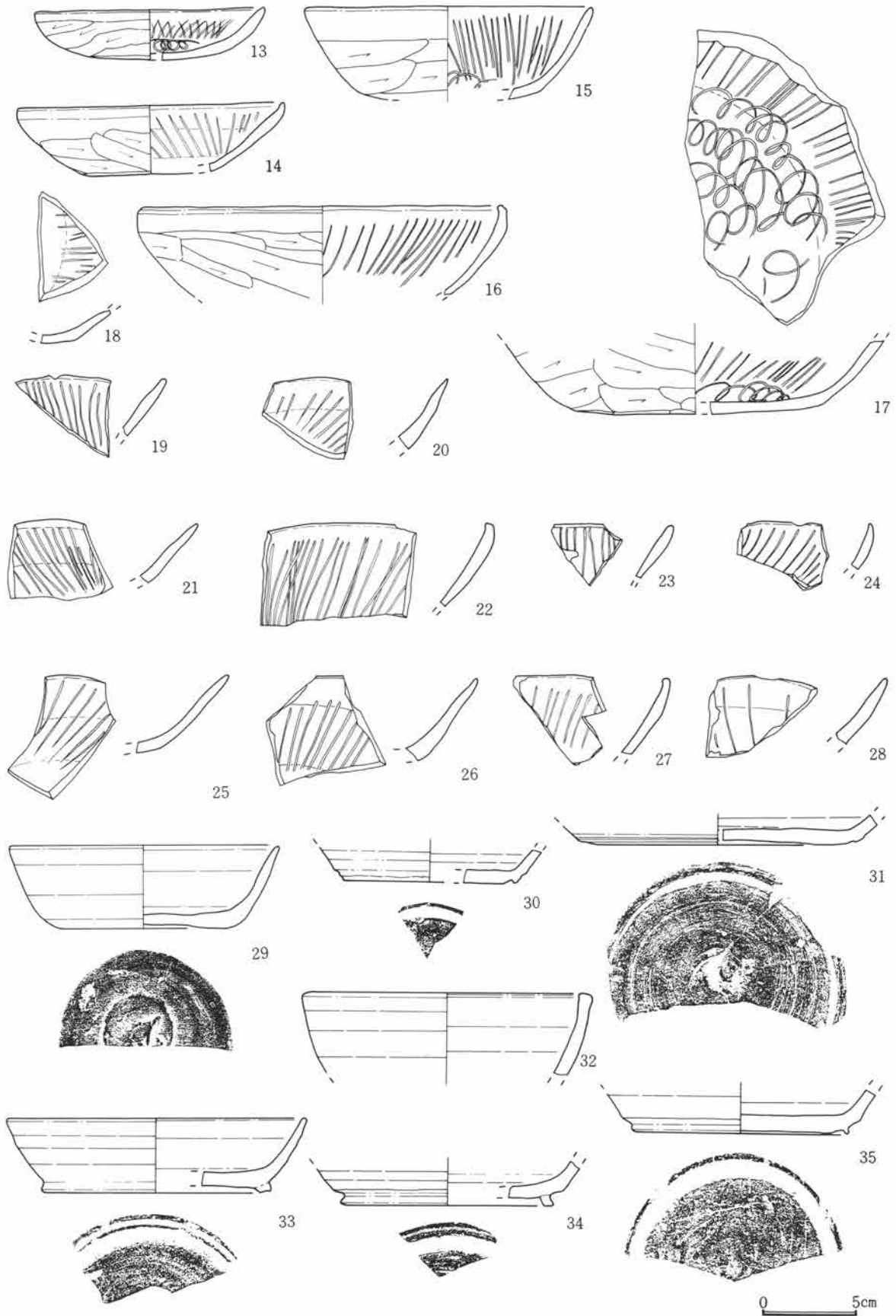
1. 暗褐色土 灰褐色土粒・CPを少量含み、しまりがある。
2. 暗褐色土 1層に近似するが、CPは含まない。
3. 暗褐色土 灰褐色土粒を含む。
4. 暗褐色土 VI層土小ブロックを多量に含む。

第615図 I区第17号溝状遺構・出土遺物実測図

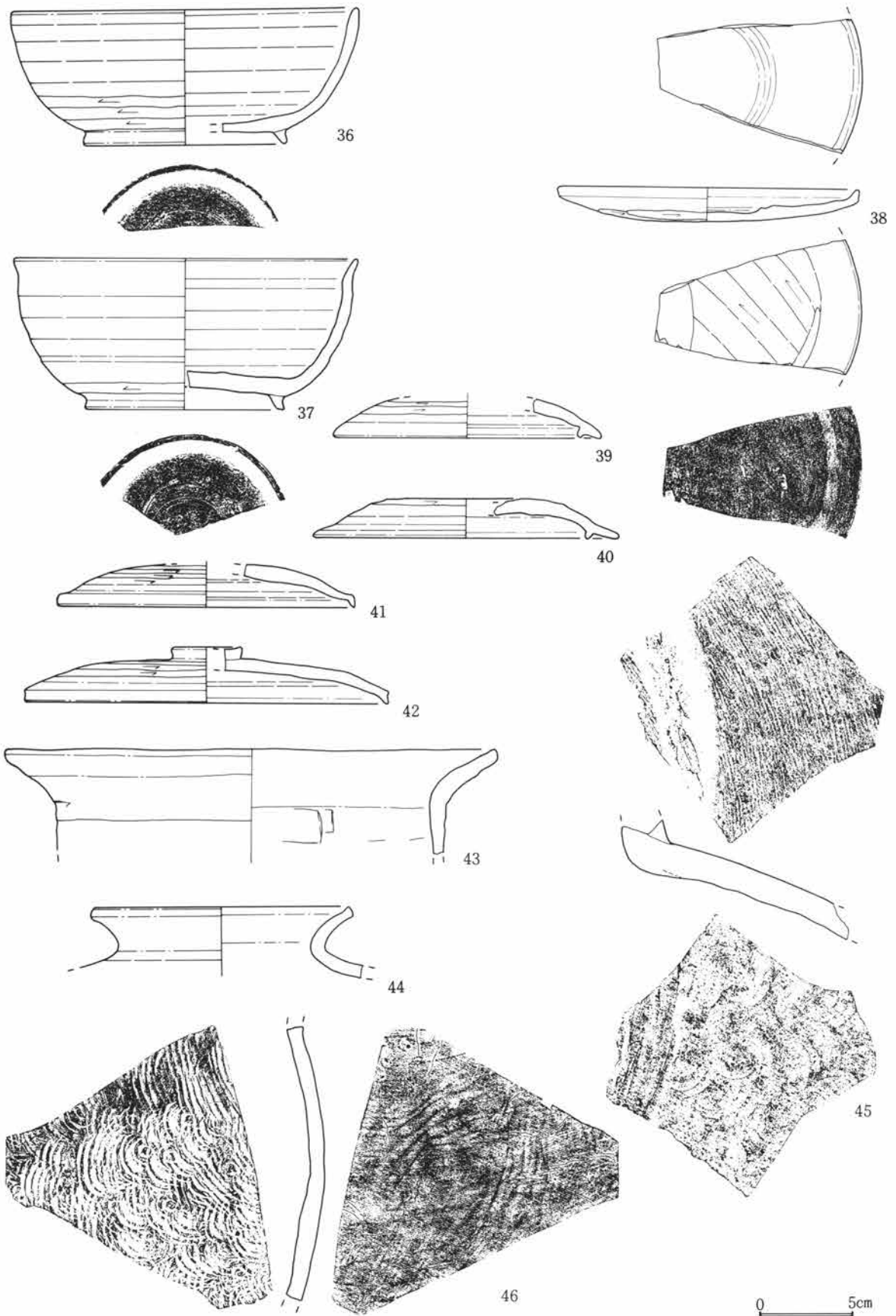
I区第18号溝状遺構



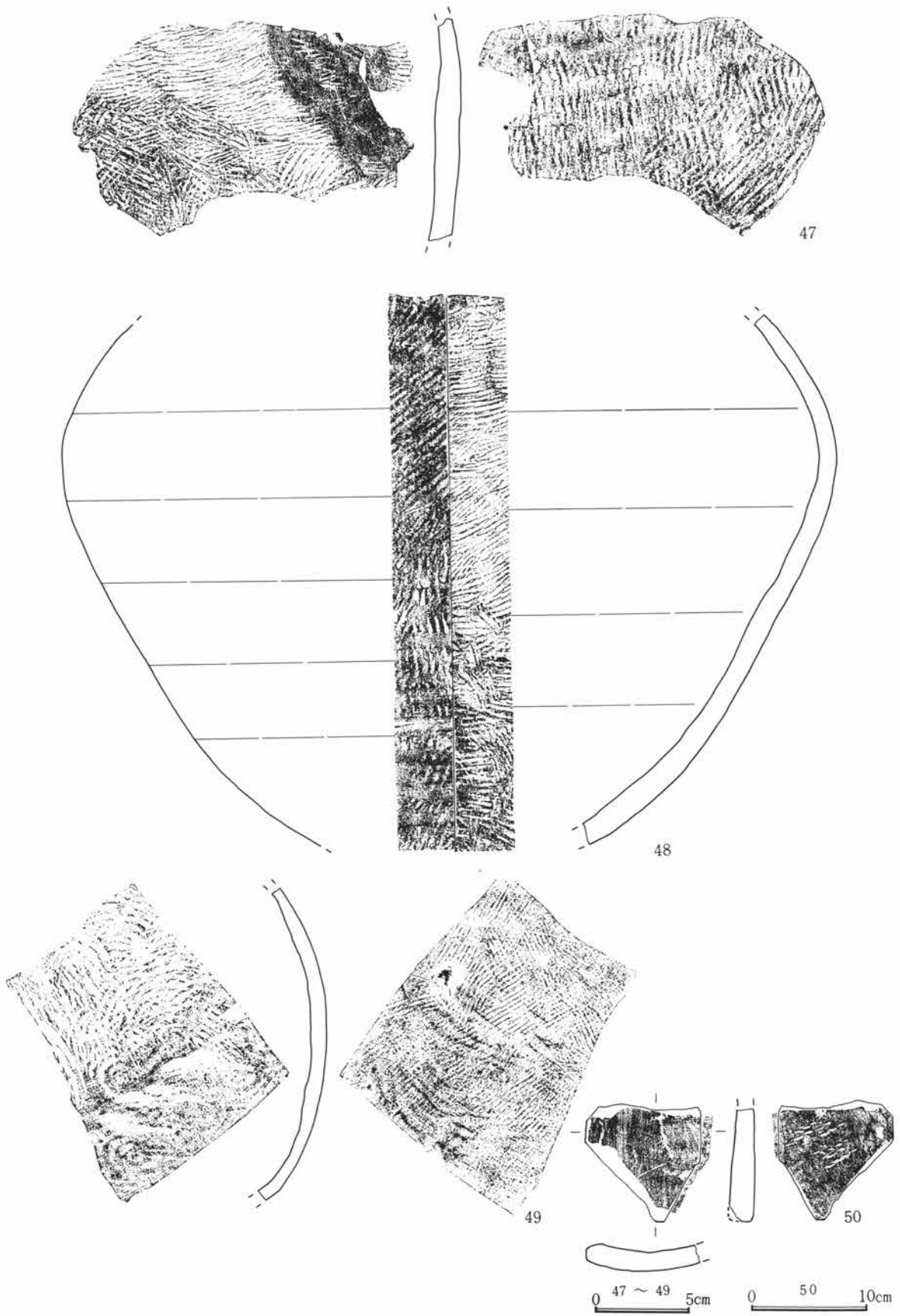
第616図 I区第18号溝状遺構・出土遺物実測図(1)



第 617 図 I 区第 18 号溝状遺構出土遺物実測図 (2)

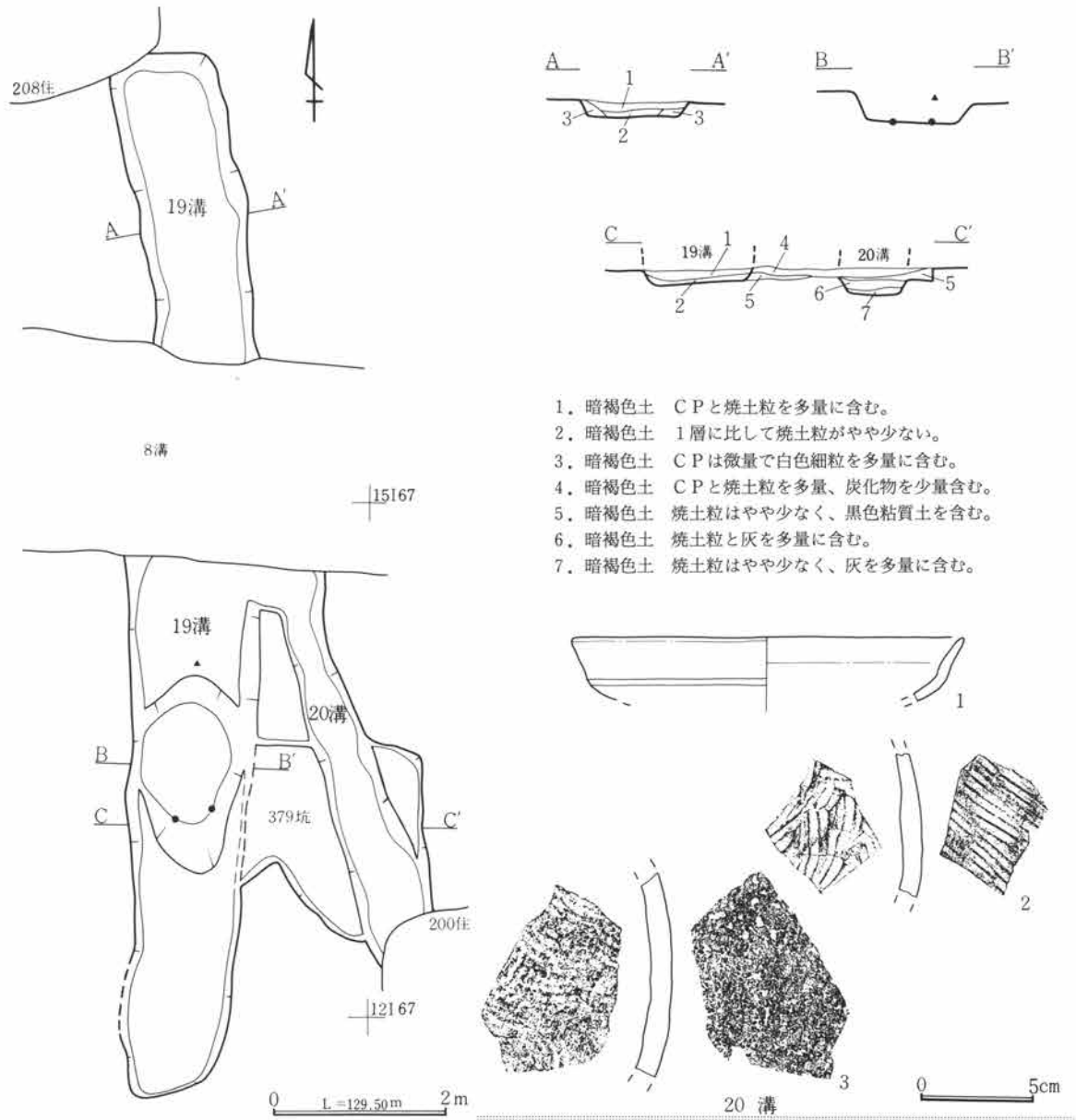


第 618 図 I 区第 18 号溝状遺構出土遺物実測図 (3)



第619図 I区第18号溝状遺構出土遺物実測図(4)

I区第19・20号溝状遺構



第620図 I区第19・20号溝状遺構・出土遺物実測図

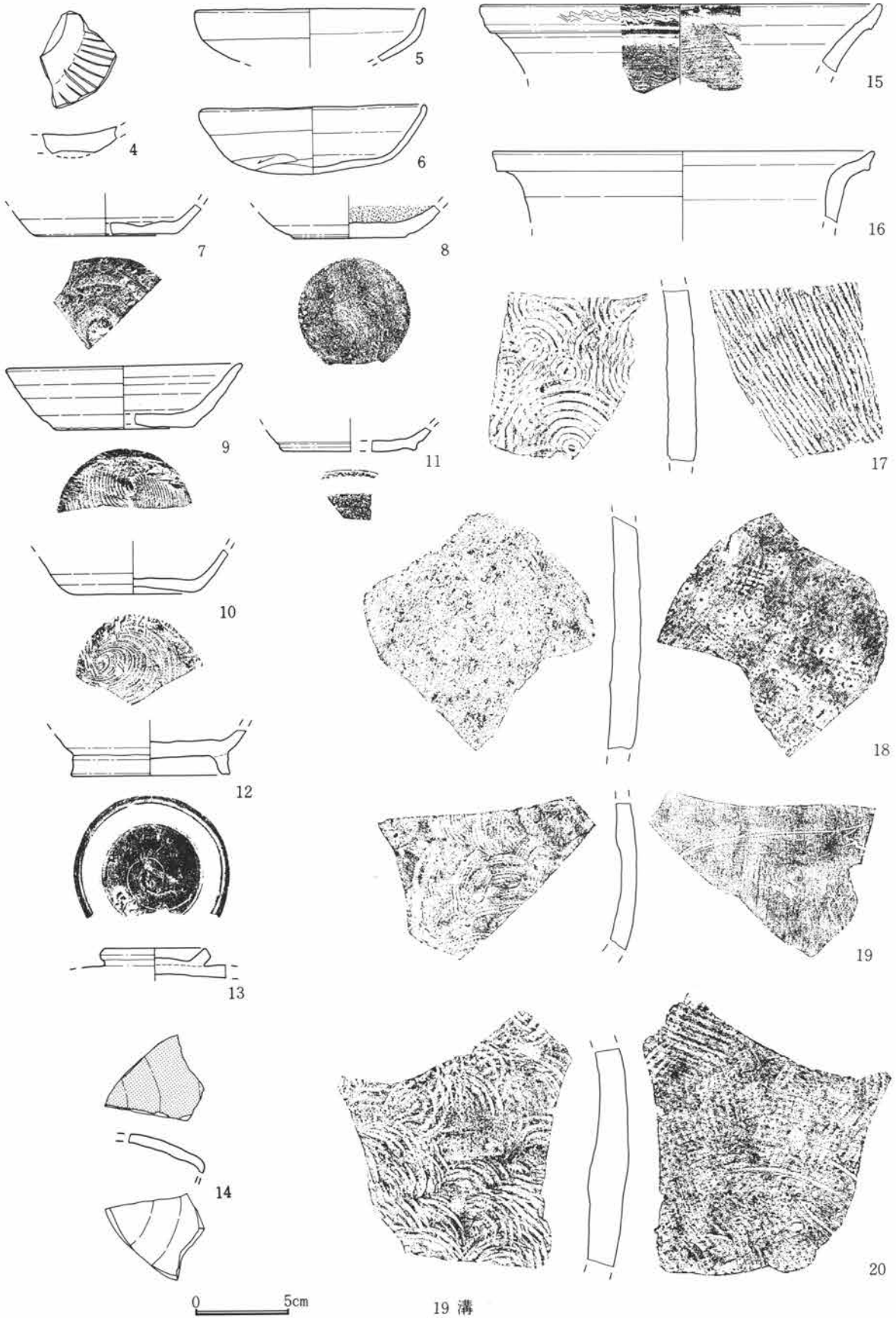
I区第19号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、11~22-I-57・58グリッド内に位置しており、中央部は中世以降の第8号溝状遺構との重複で失われている。また、中央部で第20号溝状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。検出部の規模は、全長約11.9m、幅約115~150cm、深さ約9~25cmであり、走行方向はほぼ南北方向である。南北の底面にレベル差はなく、南寄りの底面には約230×120cm、深さ約12cmの楕円形の掘り込みがみられる。

I区第20号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、12~14-I-56・57グリッド内に位置しており、第8号溝状遺構と第200号住居跡との重複によって南北部分は不明である。検出部の規模は、全長約4.95m、幅約43~80cm、深さ約14~29cmである。走行方向は北-17°-西で、底面レベルは南側がやや低い傾向がある。重複している第19号溝状遺構との新旧関係は上記のように判然としない。

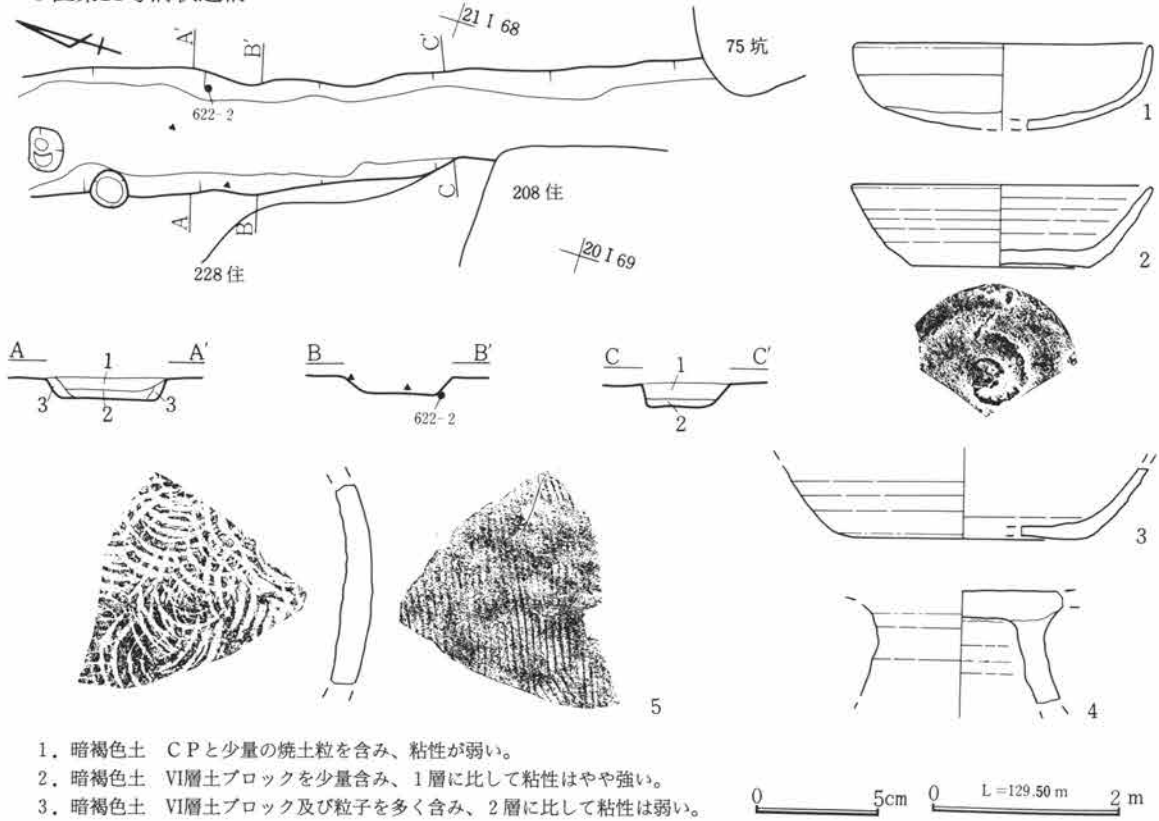
第2節 検出された遺構・遺物



19 溝
第621図 I区第19号溝状遺構出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

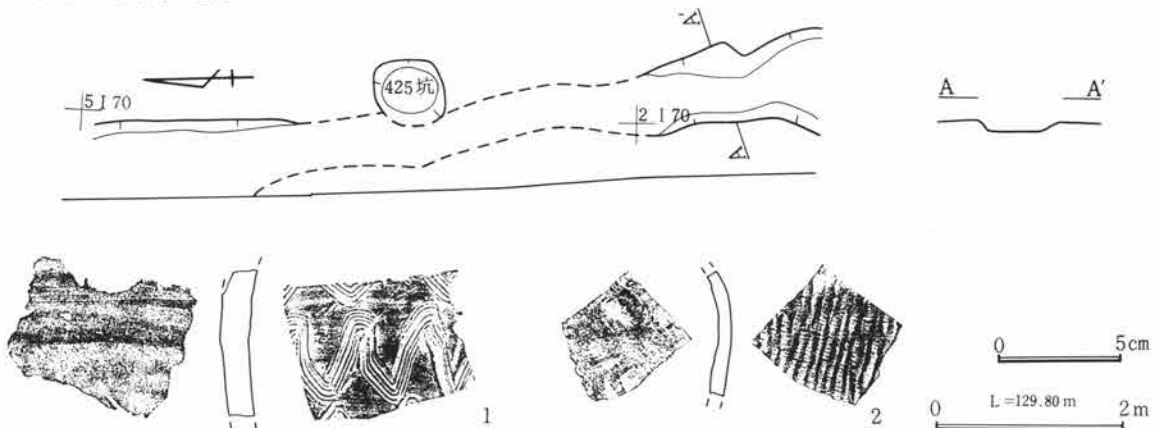
I区第21号溝状遺構



第622図 I区第21号溝状遺構・出土遺物実測図

(所見) 当溝状遺構は、19～23-I-57～59グリッド内に位置しており、第176号住居跡や第229号址との重複によって南北へのつながりが不明となっている。検出部の規模は全長約7.65m、幅約102～130cm、深さ約12～33cmである。走行方向は北-21°-西であり、第18号溝状遺構と平行している。規模的にも第18号溝状遺構とは類似しており、同じ性格の遺構であるのは明らかである。

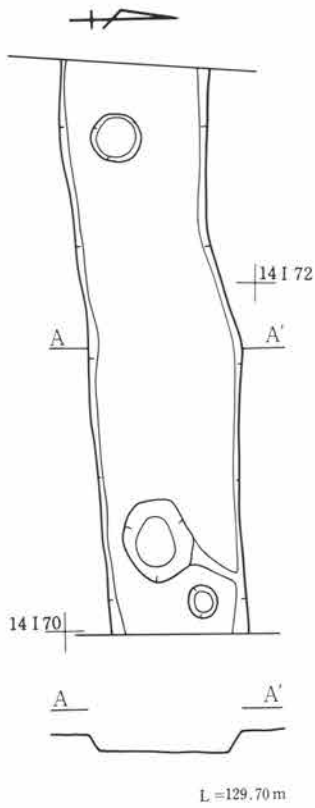
I区第22号溝状遺構



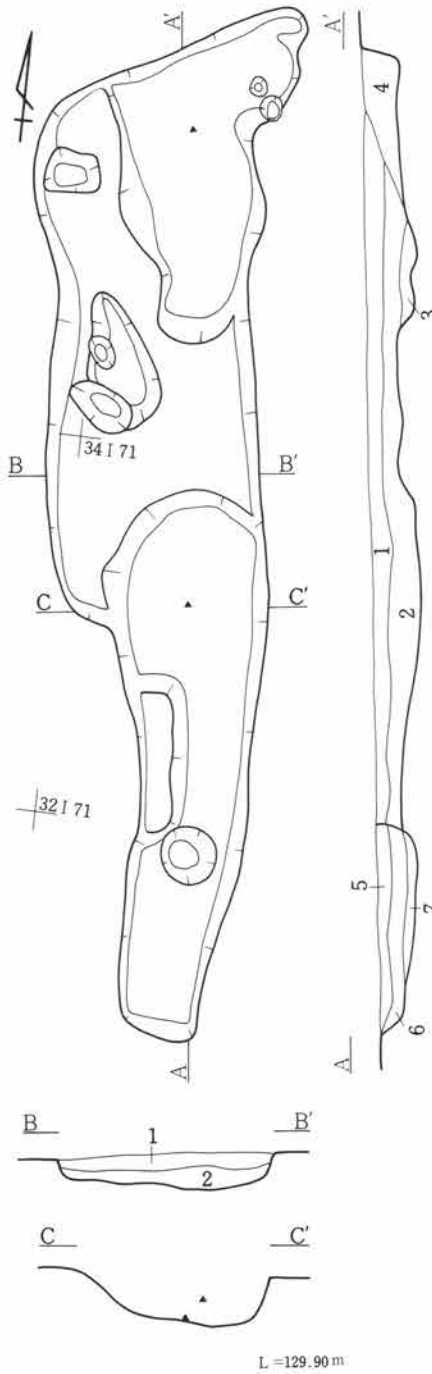
第623図 I区第22号溝状遺構・出土遺物実測図

(所見) 当溝状遺構は、1～4-I-59・60グリッド内に位置しており、南側は調査区外で調査不能であった他、北側及び中央部が判然としない。検出部の規模は全長約7.9m、幅約67cm、深さ約28cmである。走行方向は北-10°-西である。

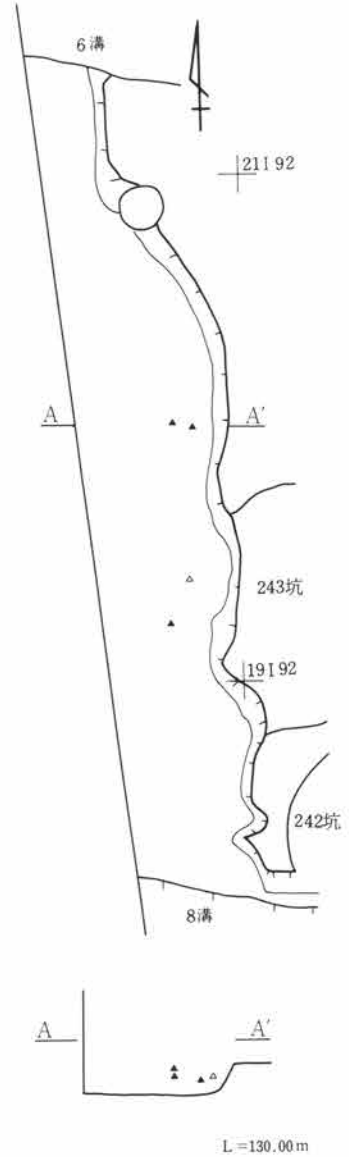
I区第26号溝状遺構



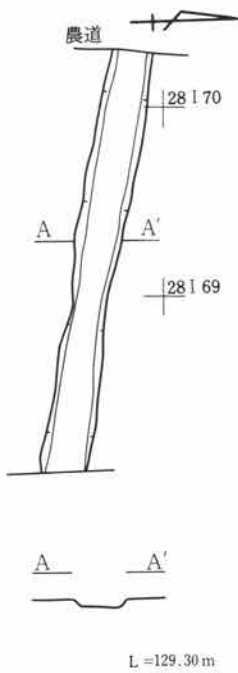
I区第28号溝状遺構



I区第29号溝状遺構



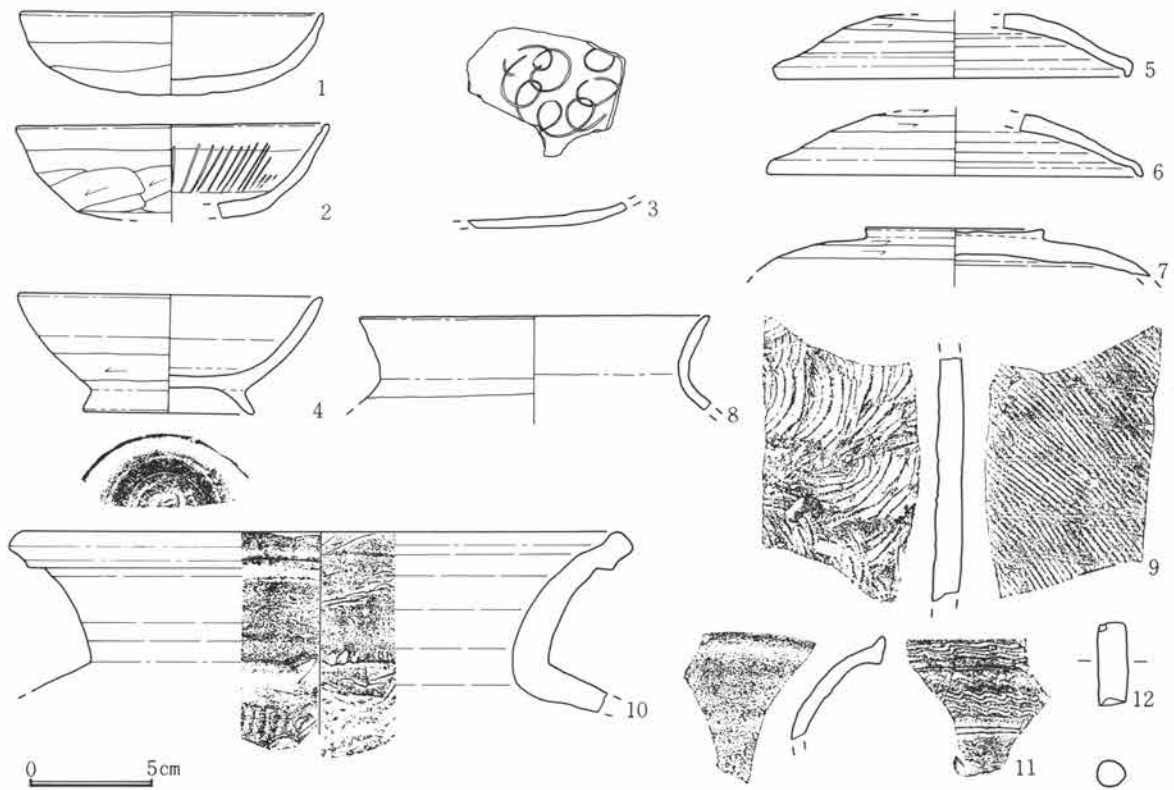
I区第27号溝状遺構



1. 暗褐色土 CP細粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 CPと焼土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 CPは微量で粘質土を多量含む。
4. 暗褐色土 CPを多量含む。
5. 暗褐色土 CPを多量、VI層土粒を多量含む。
6. 暗褐色土 CPは微量で粘質土ブロックを多量含む。
7. 暗褐色土 灰褐色粘質土。

0 2m

第624図 I区第26・27・28・29号溝状遺構実測図



第 625 図 I 区第 28 号溝状遺構出土遺物実測図

I 区第26号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、南北農道下の調査で検出したもので、13-I-60~63グリッド内に位置している。本来であれば東西方向に延びていたはずであるが、確認面の差によるものか検出されなかった。検出部の規模は全長約6.0m、幅約152cm、深さ約10cmで、走行方向はほぼ東西方向である。

I 区第27号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、27-I-58~60グリッド内に位置しており、西側は南北農道部分にかかっているが、農道下の調査では検出することができなかった。検出部の規模は全長約4.6m、幅約51cm、深さ約10cmである。走行方向は東-9°-南である。

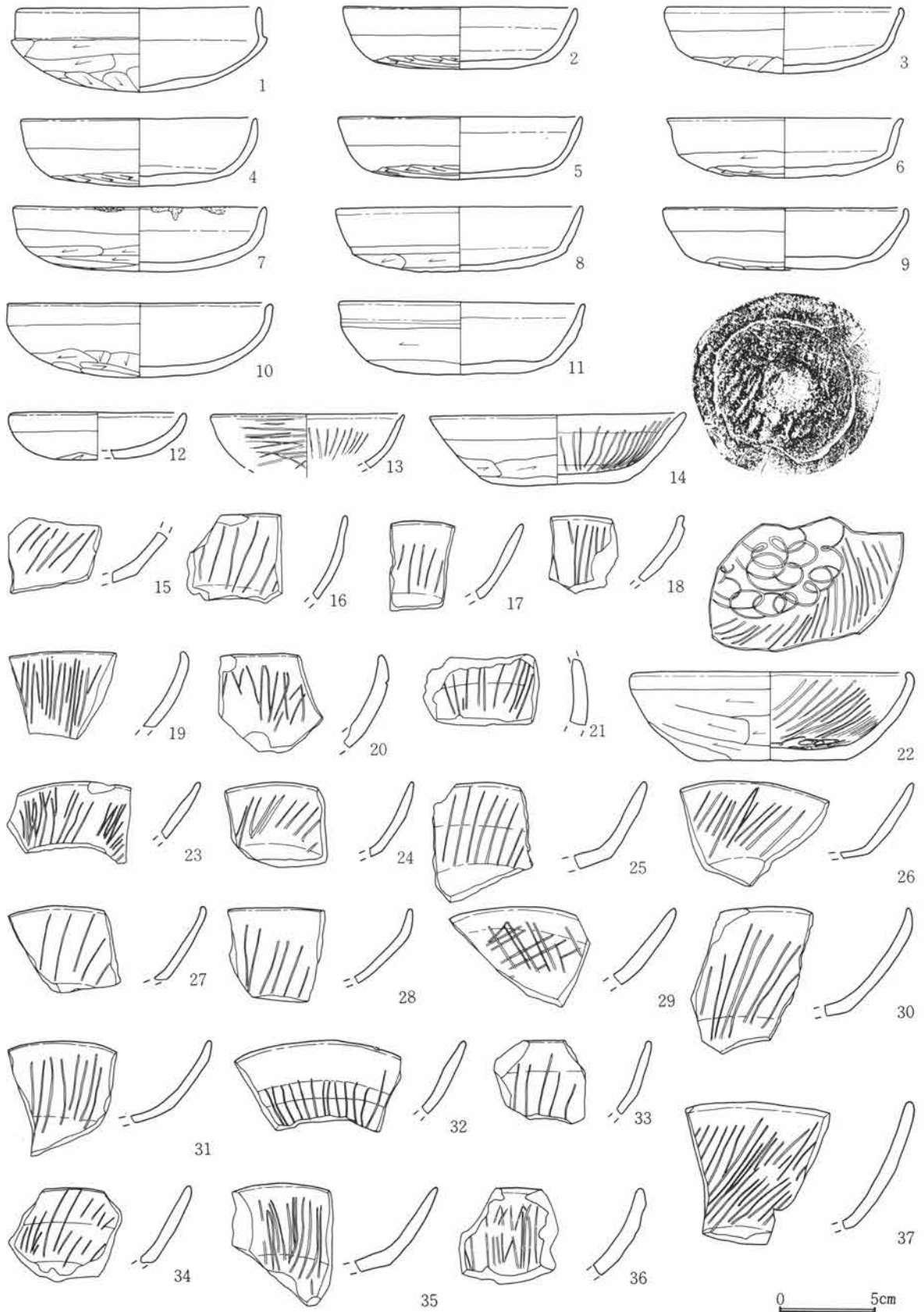
I 区第28号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は31~35-I-60・61グリッド内に位置しており、調査段階においては特異な形態をしていることから第242号址としていたものを名称変更したものである。当遺構を溝状遺構として扱ったのは、第544図からも明らかのように第18号溝状遺構の延長上に位置している上に、第625図に提示した出土遺物も第18号溝状遺構との関連が想定できることによっている。つまり、当溝状遺構は第18号溝状遺構と一連の遺構の可能性が高い。検出部の規模は、全長約8.5m、幅約70~168cm、深さ約20~38cm、走行方向は北-10°-西である。特異な形態をしているのはセクション図からもわかるように土坑等と重複していることによる。

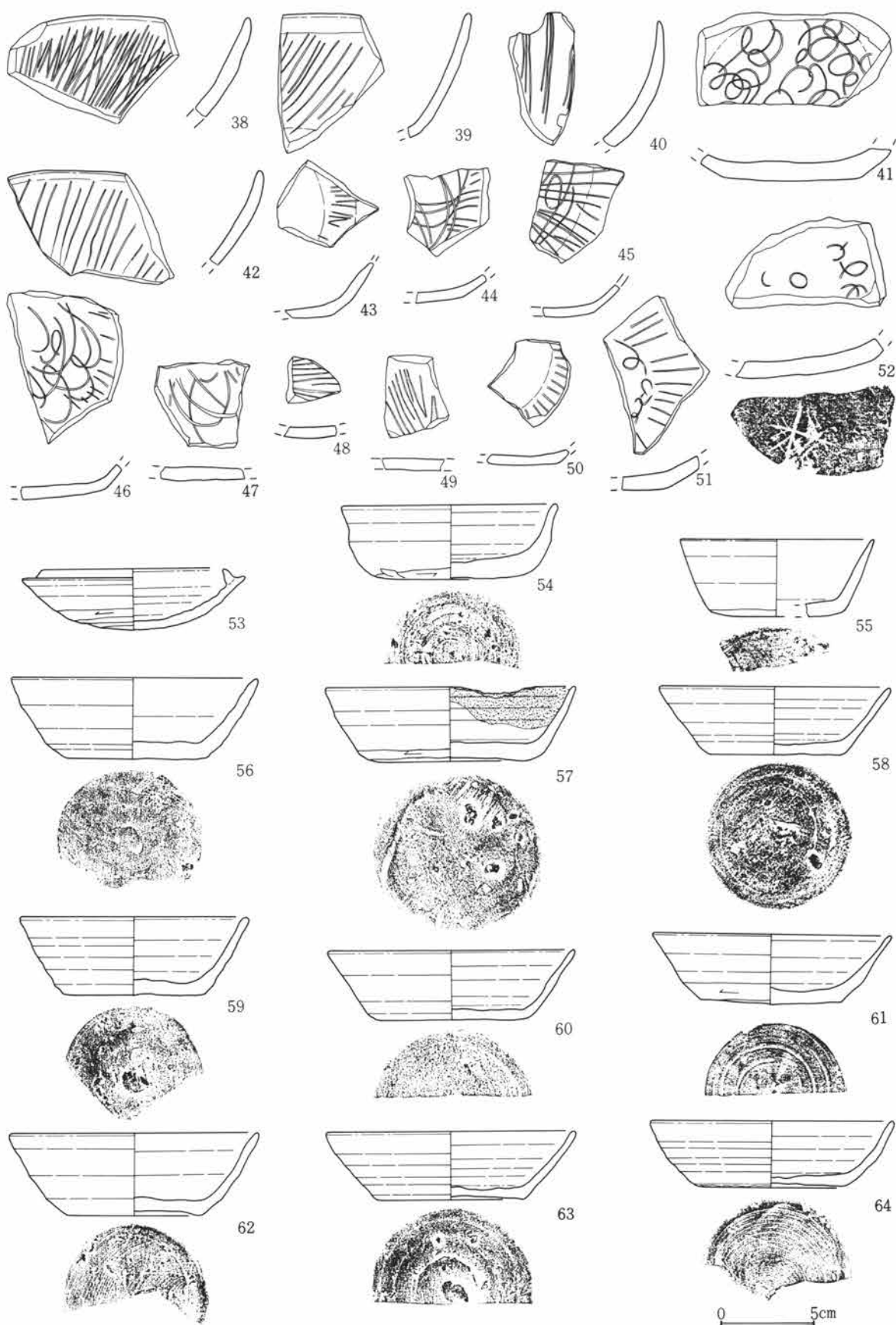
I 区第29号溝状遺構

(所見) 当溝状遺構は、18~21-I-91・92グリッド内に位置している。遺構西側は調査区外にかかっているために判然としない上に、南北部分は中世以降の第6・8号溝状遺構との重複によって失われている。検出した東側についても土坑やピットとの重複によって複雑な線を形成している。

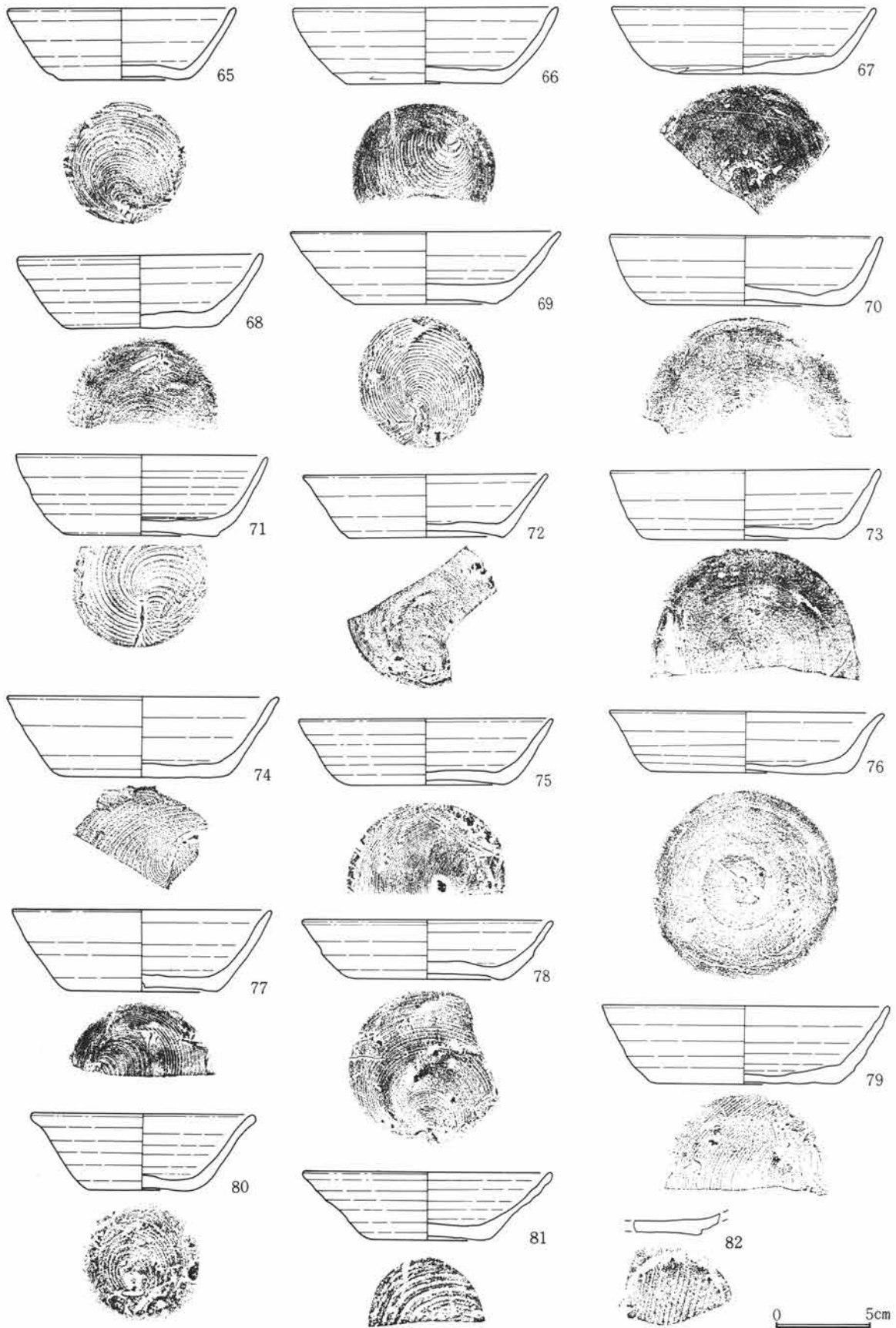
9. 遺構外出土遺物



第 626 図 I 区遺構外出土遺物 (1)

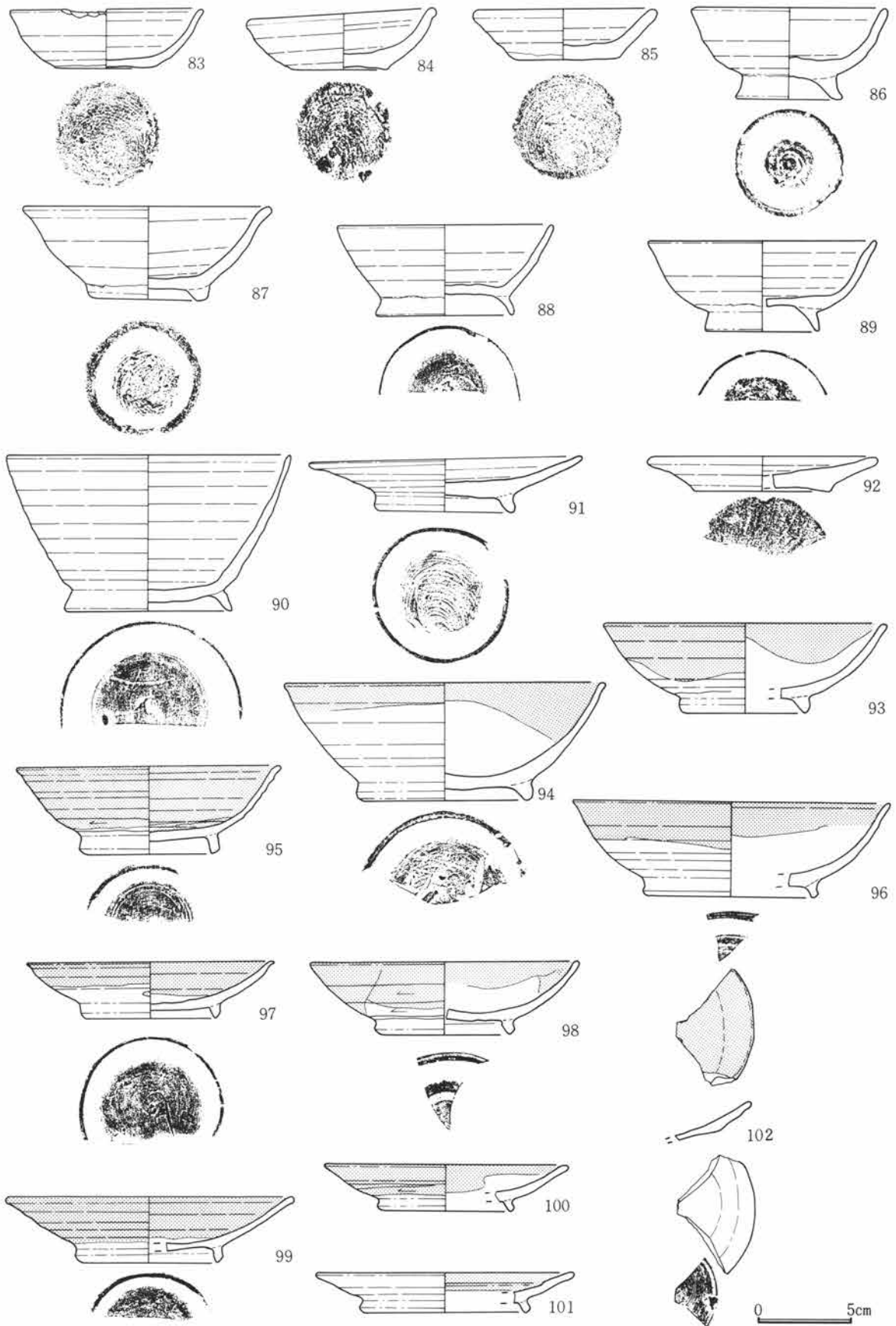


第 627 図 I 区遺構外出土遺物 (2)



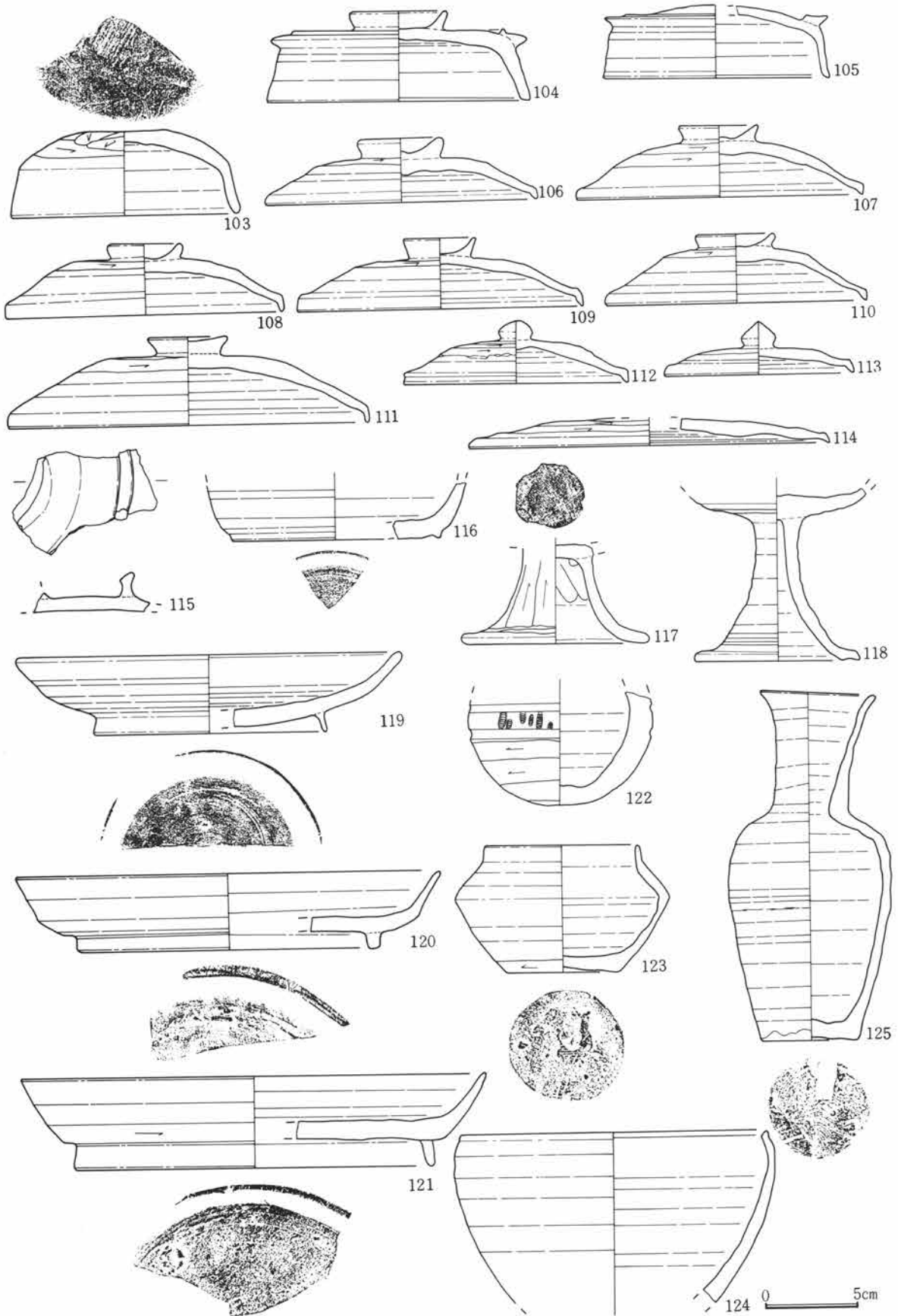
第 628 図 I 区遺構外出土遺物 (3)

第4章 検出された遺構・遺物

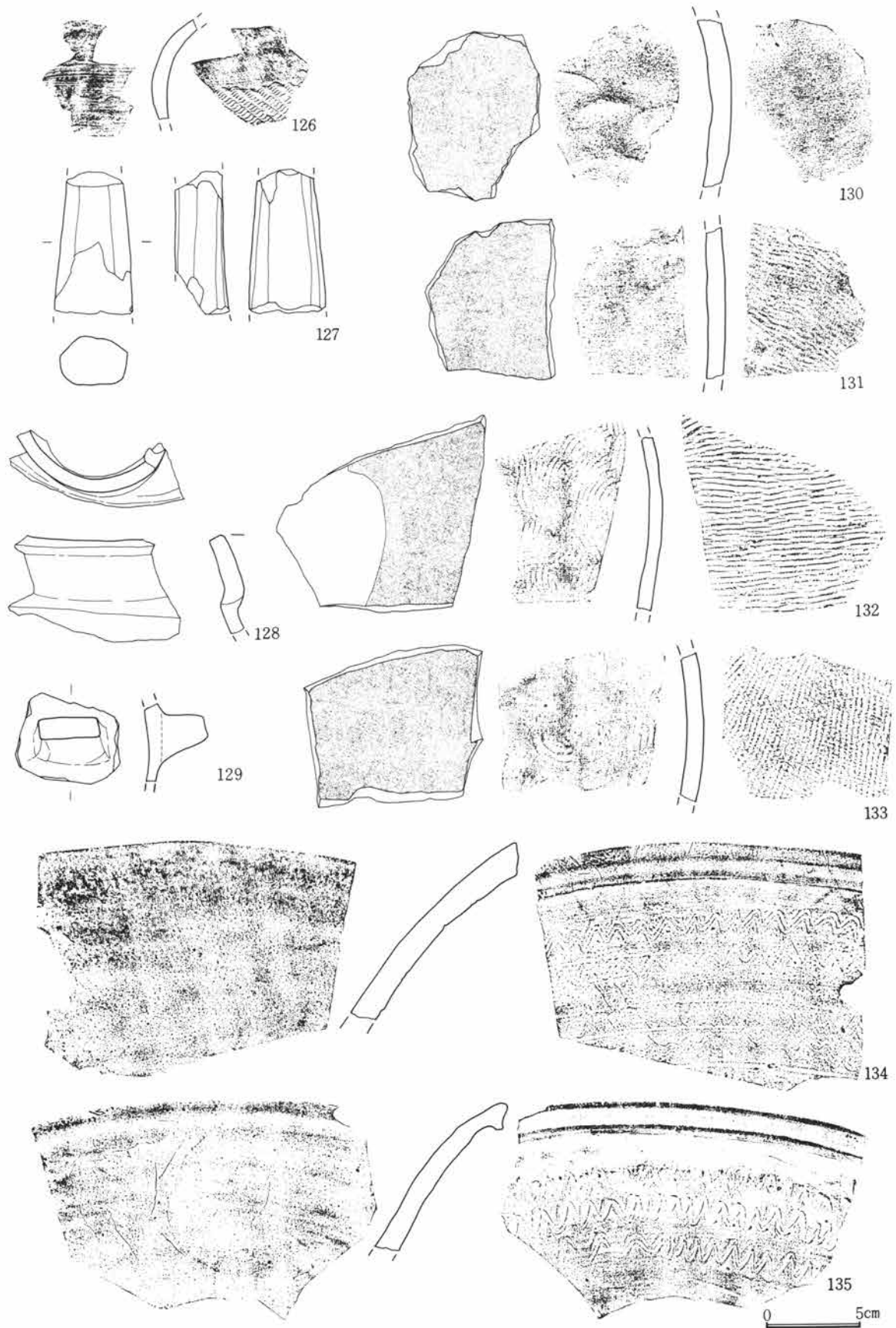


第629図 I区遺構外出土遺物(4)

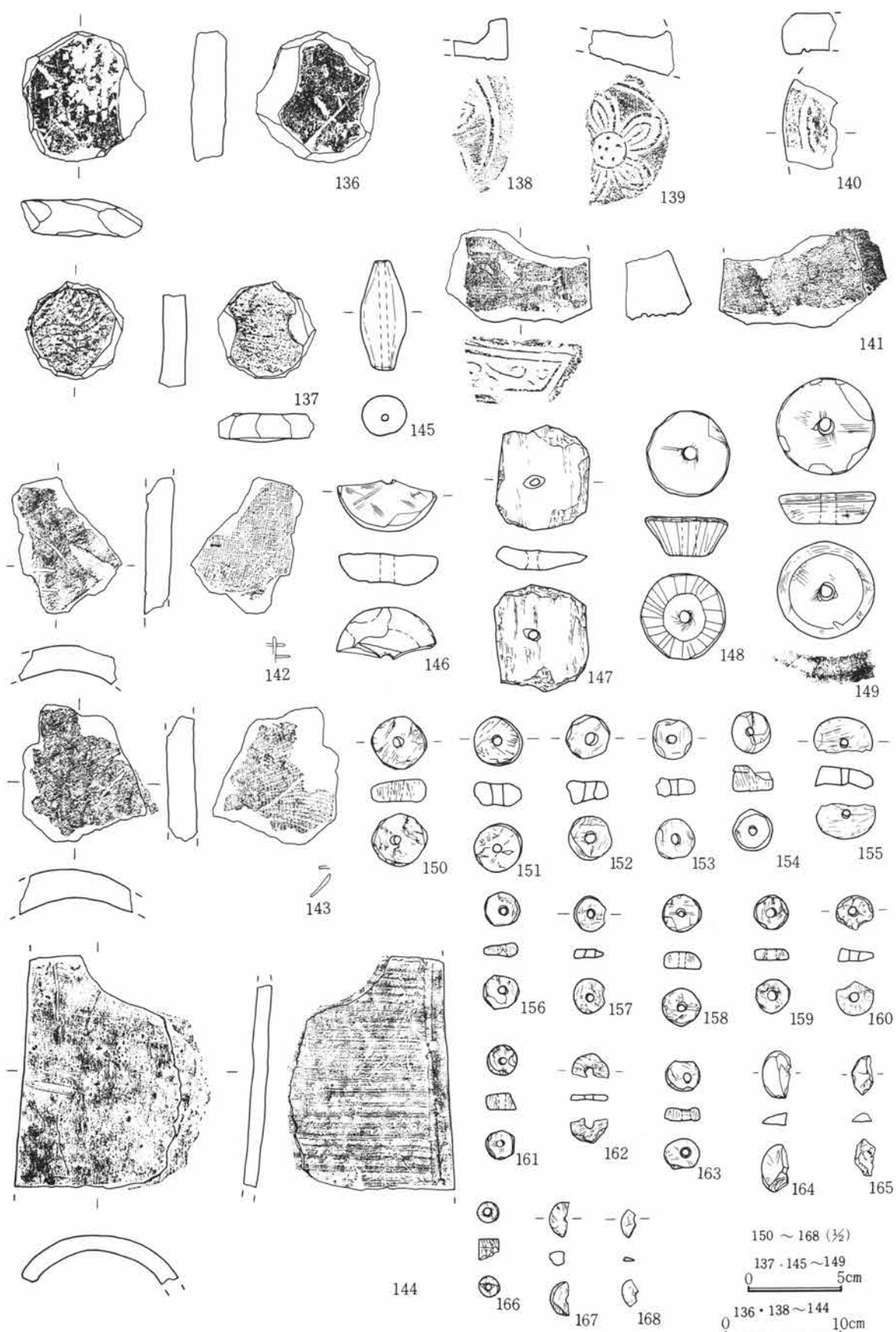
第2節 検出された遺構・遺物



第630図 I区遺構外出土遺物(5)

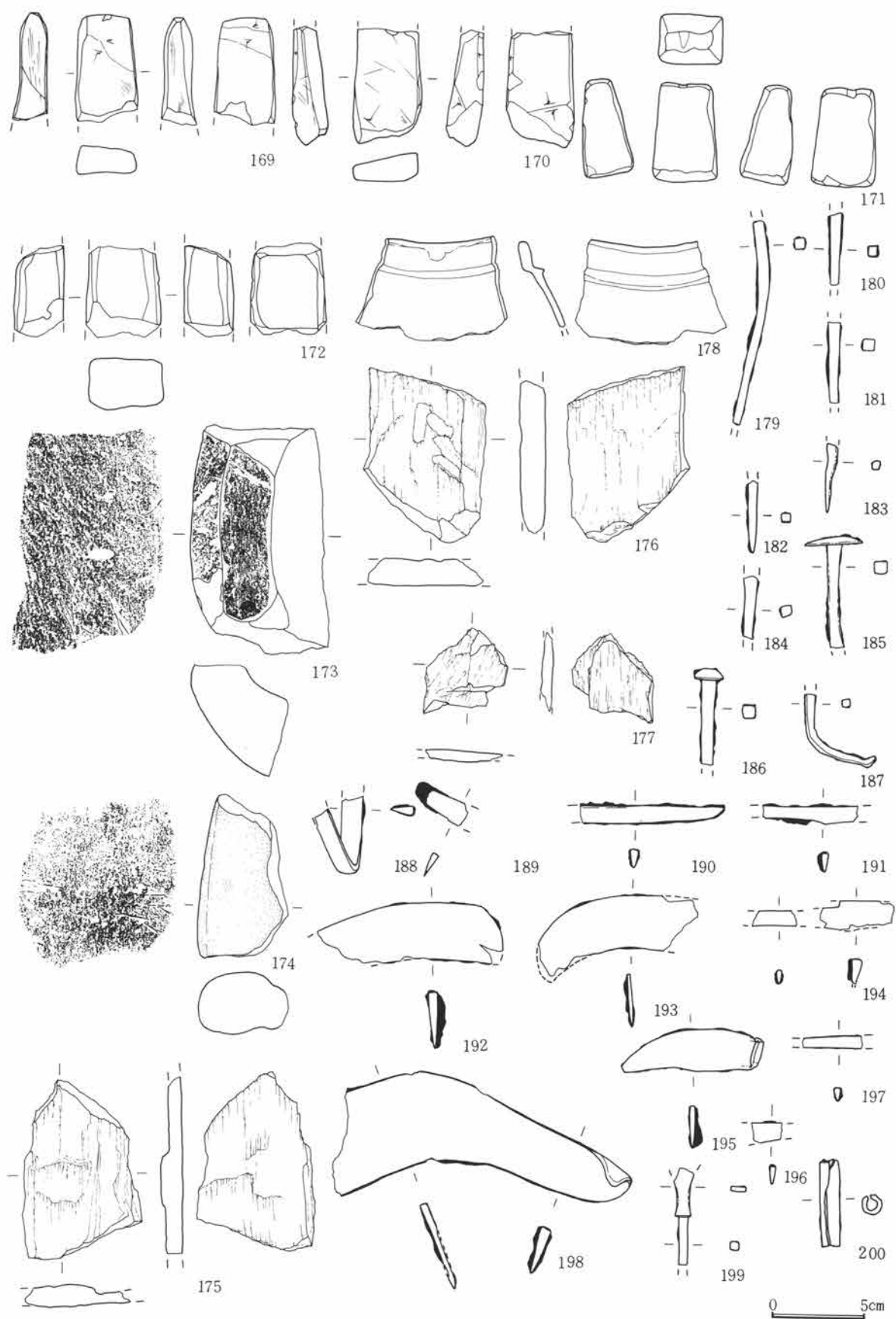


第 631 図 I 区遺構外出土遺物 (6)



第 632 図 I 区遺構外出土遺物 (7)

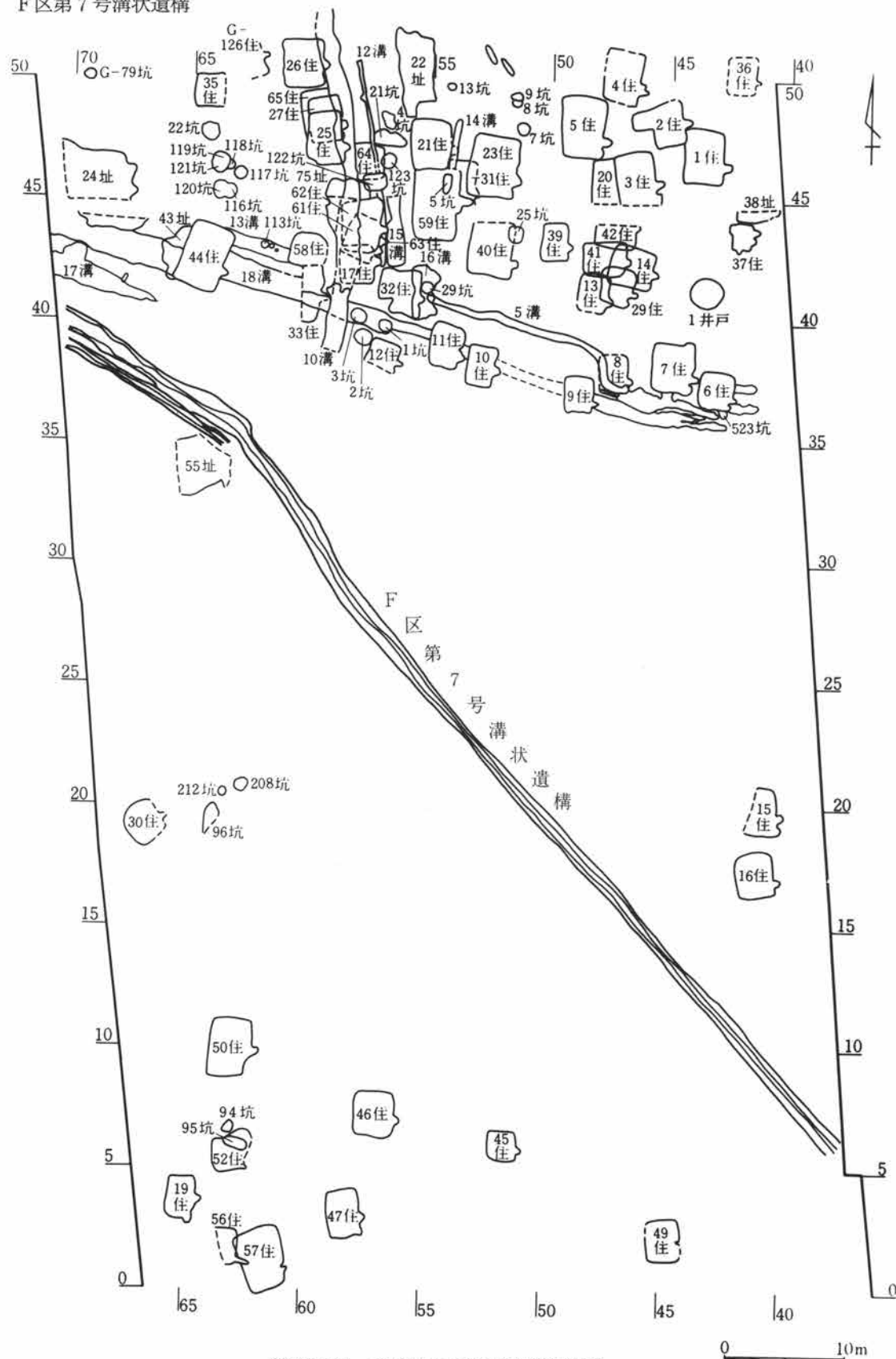
第4章 検出された遺構・遺物



第 633 図 I 区遺構外出土遺物 (8)

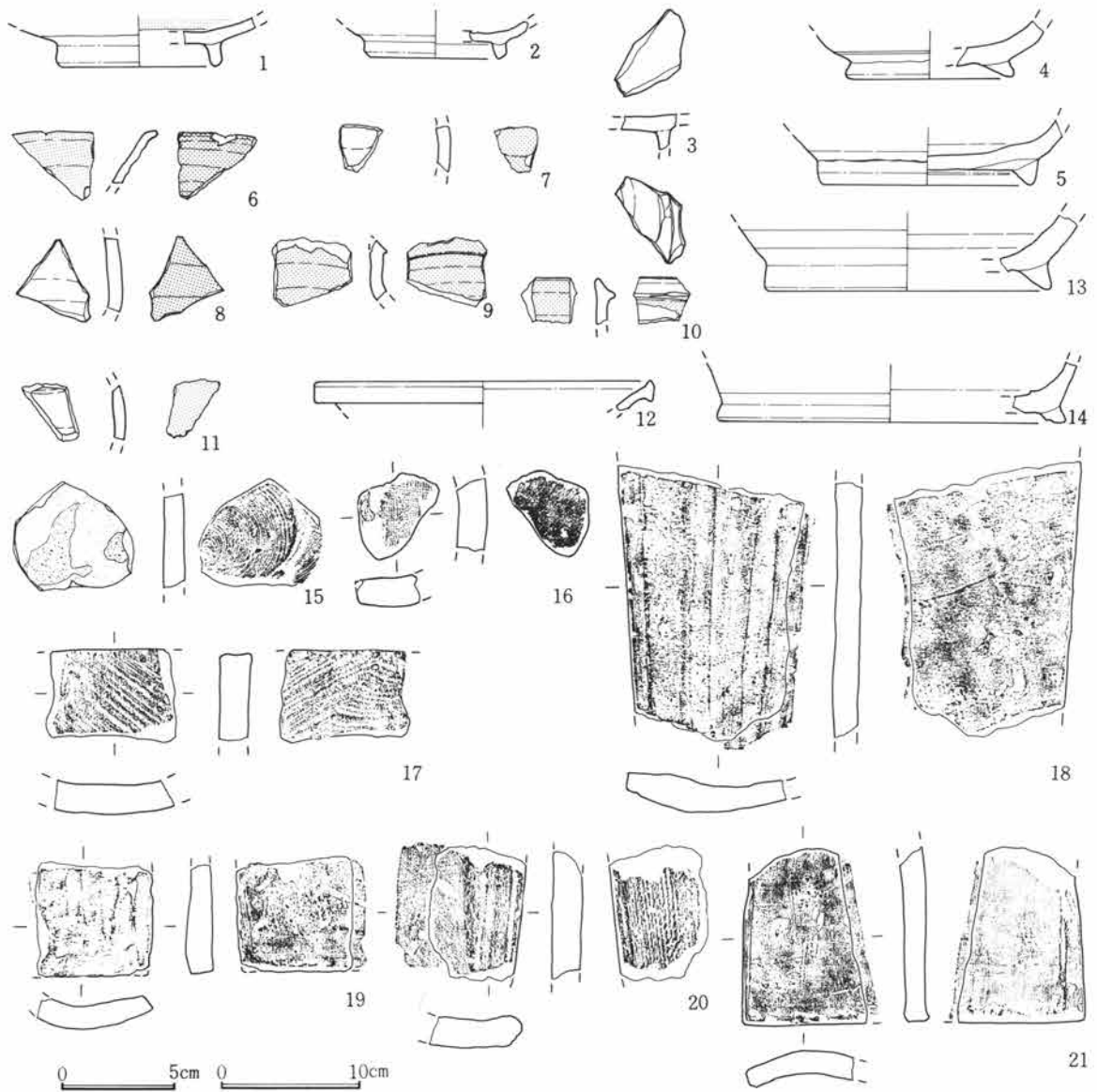
10. 追 補

F区第7号溝状遺構



第634図 F区第7号溝状遺構実測図

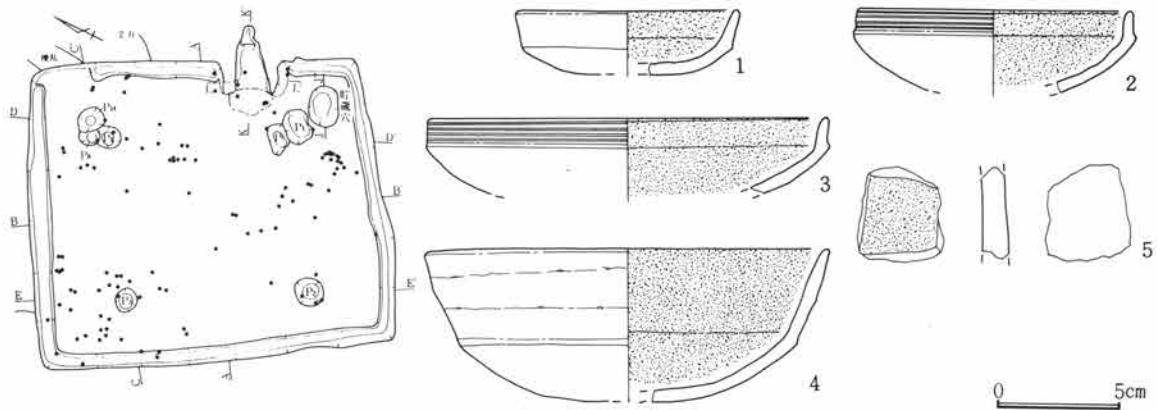
第4章 検出された遺構・遺物



第 635 図 F区第7号溝状遺構出土遺物実測図

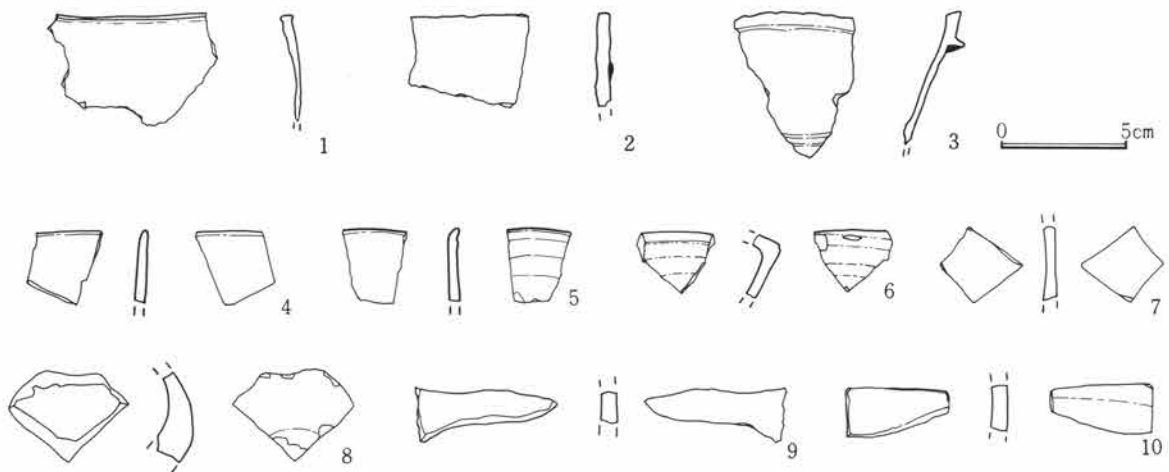
当溝状遺構は、本来であれば『上野国分僧寺・尼寺中間地域（2）』に掲載されるべき遺構であったが、掲載漏れしたためにここに報告したい。F区は、第634図に示したように北半部に住居跡等の遺構が集中し、中央部には広範囲に古代の遺構の空白部が広がっている。そしてこの遺構空白部には中世以降の溝状遺構や掘立柱建物跡等が分布している。当溝状遺構は、この遺構空白部分を西から東に斜めに横切っている。検出部の規模は全長約95m、幅約75～165cmである。中世遺構の溝状遺構と数カ所で重複し、失われている部分もあるが、比較的良好的な状態で残存した遺構である。当遺構の特徴は、先の図からもわかるように、西側から約☆m付近を境に走行方向が東-33°-南から東-45°-南へと変換していること、及び底面に小礫や粗い砂が堅く締まった状態で検出されていることである。走行方向の変換が何を意味しているかは不明であるが、変換点の前後において遺構は直線的に延びており、また、その両側に顕著な遺構分布が認められないことなどから単に区画を意図したものと考えるには考えにくい。底面の状態や小礫中から出土した遺物がすべて小片でしかも周辺が摩滅した状態であったことなどから考えると、水を通すような溝の第1義的な機能を有していた可能性が高い。

J区第1号住居跡



第636図 J区第1号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡については既に「上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）」に報告したものであるが、報告後に第636図に掲載したような特徴的な遺物がみつかったので再録したい。1～5はすべて模倣坏と呼ばれている形態の土師器坏であるが、内面を丁寧に篋磨きした後で黒色処理したものである。当遺跡周辺の地域においては内面黒色処理するという伝統は顕著ではなく、また、仮に黒色処理される場合においても内面を丁寧に篋磨きされたものはほとんど認められない。そうした状況から考えるとこれらの土師器坏は当地域に本来供給されていた地域とは異なる地域からの供給が考えられるのである。胎土は白色に近いものであり、最も可能性のある地域は利根・沼田地域ではないかと考えている。



第637図 I区遺構外追補

第5章 まとめ

第1節 検出遺構について

第1項 北側調査区（F～J区）の集落変遷について

これまで北側調査区については『上野国分僧寺・尼寺中間地域』報告書(2)～(4)にわたって掲載してきたが、当報告書に掲載したI区の報告をもって完了する。そこでこの北側調査区全体の古墳時代から平安時代までの竪穴住居跡を対象として、その分布の変遷について概観してみたい。北側調査区では、F区約57軒、G区約109軒、H区約153軒、I区約236軒、J区約46軒の総数約601軒の竪穴住居跡が検出されているが、この多数の竪穴住居跡は、出土遺物の年代観から6世紀代から11世紀代までの約600年間にわたって構築されたものであることがわかってきた。しかし、これらの竪穴住居跡すべてを現在の趨勢である四半世紀の段階に比定することは無理があったために、時期設定に当たっては1世紀を1単位とした。したがって、北側調査区においては6世紀代・7世紀代・8世紀代・9世紀代・10世紀代・11世紀代の6段階を設定することができる。それを図示したのが第638・639図であるが、塗り潰された四角は住居跡、丸は並行して存在したと考えられる井戸跡を表している。以下にはこれらの図をもとに各段階毎に気付いた点について記述し、さらに総体としての動きについて触れることにしたい。

6世紀代 当段階に入ると判断した竪穴住居跡は約51軒であり、井戸跡は1基も検出されていない。分布はH～J区の範囲に限られ、I区北半からJ区西寄りにかけて広がるI群と、I区南半寄りに主体的に分布するII群、及びこのII群と未分化ながらH区中央東寄りに位置するIII群の3つの群を捉えることができる。また、各群の占める範囲は、I群及びII・III群として捉えた場合、北西から南東方向の斜めの帯状を呈していることがわかる。この段階で竪穴住居跡の全く構築されていないF・G区は、FAブロックの混入するサク状遺構がわずかながら検出されていることから、生産の場であったものと思われる。

7世紀代 当段階とした竪穴住居跡は約91軒であり、6世紀代に捉えたI・II群はそれぞれ軒数が増加し、分布範囲が拡大することによってI・II群は分離が不明瞭になっている。また、前段階で未分化だったIII群は、II群から明瞭に分離しているのであるが、全体としてみた場合6世紀代に捉えた斜方向帯状分布は踏襲されている。当段階に位置付けられる井戸跡は、I群中央西寄りに1基、II群南寄り西端に1基の2基が検出されている。この段階においてもF・G区の大半は竪穴住居跡の空白域であり、前代から継続して生産の場として利用されていた可能性が高い。

8世紀代 当段階とした竪穴住居跡は約93軒であり、7世紀代以前の段階には住居構築のみられなかったF・G区への拡大現象が特徴である。前代に形成されたI・II群はやや構成軒数を減らしながらも継続しており、大型住居跡や掘立柱建物跡が多く含まれている等、他の群に対して優位性が窺える。前段階に完全に分離したIII群は、数を増して西寄りに分布範囲が変化拡大している。F・G区の住居分布は、まだ前段階から継続するI～III群に比較すると希薄ではあるが、G区南半とF区南半にIV・V群の2群を捉えることができる。当段階に至って成立するI～V群の占める範囲には、東西方向の帯状を呈する傾向が窺え、7世紀以前の段階とは異質である。井戸跡は、前段階にII群中に構築された井戸が継続機能していたと考えられる他、I群中央東寄りに1基が新たに構築されている。

9世紀代 当段階に位置付けた竪穴住居跡は約71軒であり、7・8世紀代の90軒程の住居数よりは減少し

ている。住居跡の分布は、8世紀代に形成されたI～V群を継承しているが、前段階において主体的な住居分布の認められたI・II群は住居数が減少し、代わりにIII・IV群に主体的分布が移っている。また、各群の群間に捉えられる住居空白部及び住居跡の東西方向の帯状分布傾向は、当該段階においてより顕在化している。井戸跡は、I群中に8世紀代に構築された1基は継続し、II群中央に新たに1基が構築されている。

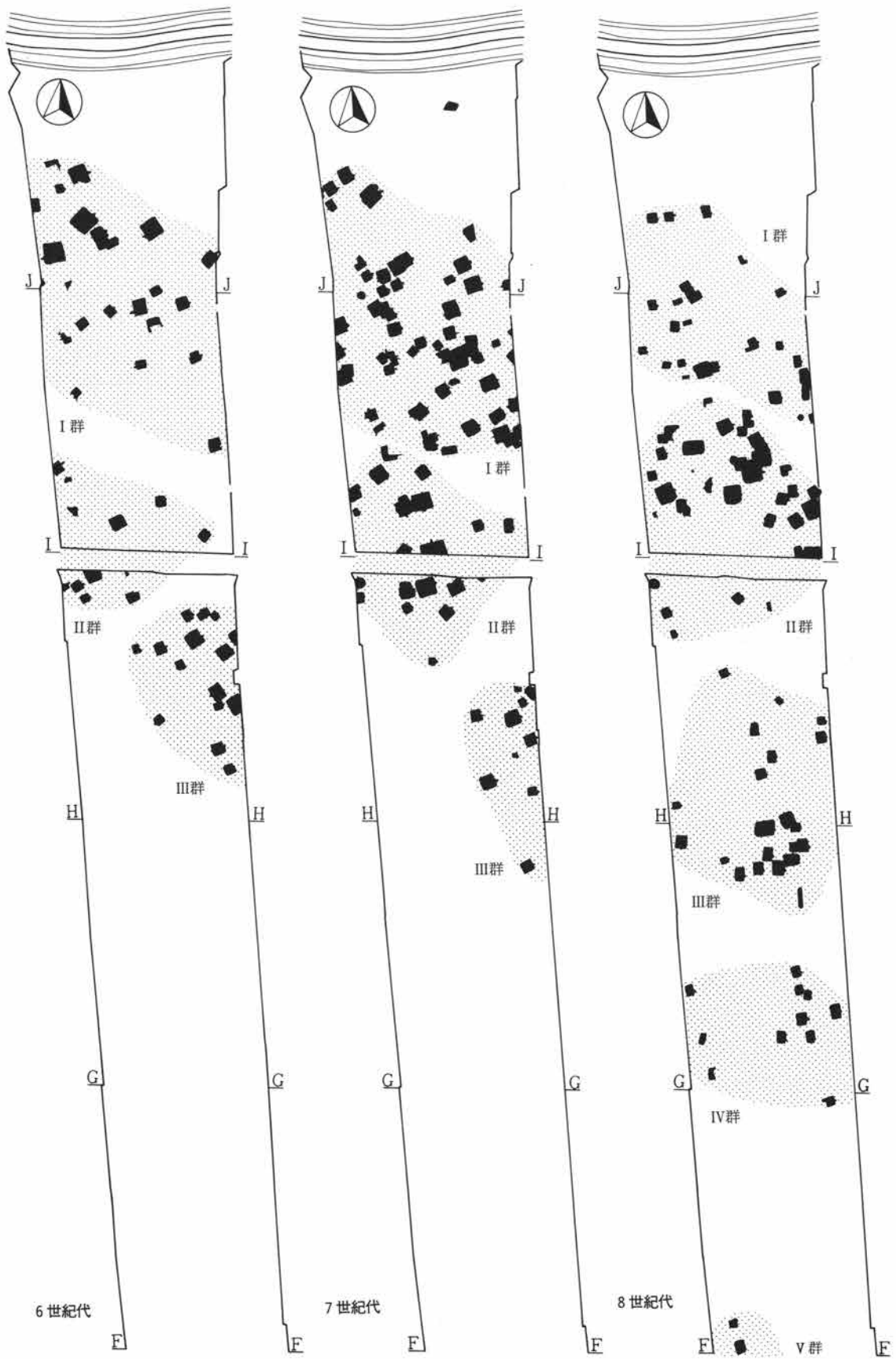
10世紀代 当該段階に位置付けた竪穴住居跡は約148軒であり、他の段階と比較すると圧倒的に多い軒数である。これは本来9世紀代または11世紀代とすべき住居跡の一部を当該段階に含めた可能性を考慮したとしても多い数であり、当該段階が最も住居構築の盛んな段階であったものと思われる。I～V群はそれぞれ軒数を増しながら継続しており、I・II群は共に拡大することによって境界が不明瞭になっている他、特にIV群の拡大が著しい。また、V群は当該段階においてもわずかな構成軒数であるが、この群は主体が南側調査区であるD区にあると考えられる。当該段階に位置付けた井戸跡は、I群の南寄りに2基、II群の南寄りに1基、III群の南寄りに1基、IV群の西寄りに1基及び南東寄りに1基の6基が検出されている。

11世紀代 当該段階に位置付けた竪穴住居跡はわずかに約25軒である。最も伝統的ともみられるI・II群に住居分布が多く、前段階に主体的であったIII・IV群にはそれぞれ1軒程度の住居跡しか認められない。11世紀代の住居跡が10世紀代の住居跡から十分に分離できていない可能性はあるものの、10世紀代との落差は顕著である。当該段階の井戸跡はIV群の西寄りに検出されたものが前段階から継続した可能性が高い。

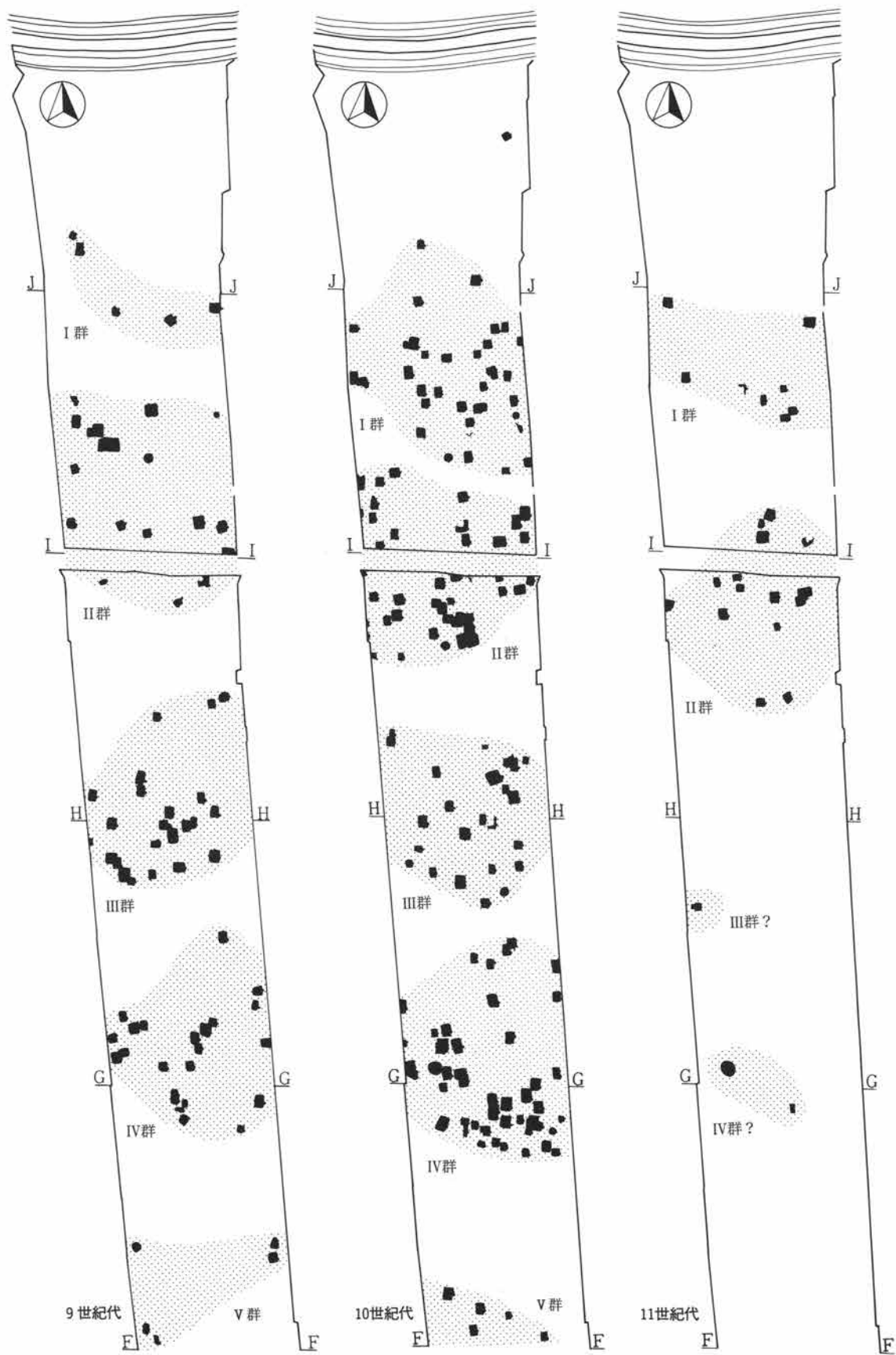
以上のように、北側調査区においては6世紀代に台地縁辺寄りの地域主体に住居構築が開始され、それが8世紀代に至って台地中央部への集落拡大を完成させていると共に、9世紀代以降に継続する住居跡群が確立している。また、この8世紀代を境にして各住居跡群の占める範囲は、斜め方向の帯状から横方向の帯状へと変化する傾向が窺える。さらに、各群を構成する住居跡軒数は、6世紀代から8世紀代までは増加傾向があり、9世紀代に減少し、10世紀代をピークとして11世紀代には急激に減少しているのである。以上のような傾向から、北側調査区における集落の展開には、I～Vの5群が成立し、しかも群の分布傾向に変化の捉えられる8世紀代と、6世紀代から8世紀代までの住居増加傾向が一転して減少する9世紀代の2つの画期が捉えられる。第1の画期における新興的群の成立は、それまで生産域であったと考えられる地域が居住域へと変化しているのであり、生産性の飛躍的拡大や生産地域の変更が行われていない限り、それまでの生活基盤を崩す結果を引き起こしているはずである。こうした形の集落拡大は、自然な人口増加等の内的要因によるものとは考えられず、^{註(1)}外的な要因によって集落の編成替え等が行われた結果の現れではないかと考えている。また、斜方向帯状分布から横方向帯状分布への変化は、後述する各段階の住居主軸方位の変化に対応する現象であろうが、その主軸方位を変化させた要因と、土地利用を変化させた要因とは共通する可能性が高いのである。第2の画期とした9世紀代における群の構成住居数の一時的減少傾向は、各群毎に眺めると伝統的I・II群が減少傾向が顕著であるのに対して、新興的III・IV群はやや増加しているのであり、各群に平均的に認められるものでないことがわかる。つまり、群の縮小しているのは、伝統的I・II群についてだけなのである。この伝統的I・II群は、8世紀代までは大型住居や掘立柱建物跡群が構築されていることなどから、新興的群に対して優位性を保持していた可能性が高いのであるが、9世紀段階においては優位性を捉え得る存在とは考えられないことから、南側に展開する新興的群と等質の群へと変質していったことが、住居軒数の減少という形に現れているのではないだろうか。

註

(1) ここでは、8世紀代に律令制が強化された時期とされていることと、直接的に関係していると考えている。



第638図 北側集落変遷(1)



第639図 北側集落変遷(2)

第2項 竪穴住居跡について

1 重複関係について

I区は、約6,000㎡の面積の中に竪穴住居跡だけで約236軒が検出されており、多くの重複が認められる。その重複関係について示したのが第640図であり、竪穴住居跡間に記した矢印が新旧関係を表している。この新旧関係の把握に際しては、遺構確認や断面観察等の調査段階における所見をもとに、出土遺物の時期から検証をする方法を取った。そのために調査時の新旧関係所見と出土遺物による新旧関係との間に齟齬の生じているものもあるが、曖昧な部分については調査時の所見を優先している。また、以下の文章において住居跡について年代を当てて記述する部分があるが、それは『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』において設定した段階を年代に置き換えたものであり、当遺跡整理担当の統一見解に基づくものでないことを先にお断りしておきたい。

第640図を一見してわかるように、住居跡は調査区内にいくつもの固まりとして検出されている。これらの固まり的重复は、各時期の住居跡が総体として作り上げたものではあるが、その重複のパターンは、近い時期の住居跡が重複する場合と、時間的隔たりのある住居跡が重複する場合とを主体として、両者が組み合わさって形成されている。そうした中で近い時期の住居跡が重複する例では、第81～83号住居跡の重複例が最も顕著な例である。この3軒の重複の場合は、第82・83号住居跡が7世紀代後半、第81号住居跡が8世紀前半に位置付けられる住居跡であるが、3軒共南壁に弱い張り出しを有する同型式の大型住居であり、床面レベルもほぼ一致している。遺構の検出状態から、この3軒の住居跡は第83号住居跡→第82号住居跡→第81号住居跡という順序で西から東へ順次構築されたことがわかる。

以上のような状況は、3軒の住居跡が相互に無関係のままに構築されたのではなく、比較的短時間の内に一連の建て替えが行われたと判断できるのではないだろうか。したがって、近い時期の住居跡同士が東西または南北方向の線的重複をしているような場合は、前例同様に一連の建て替えが行われた可能性があろう。また、近い時期の住居跡同士が重複する例は、第253号住居跡と第254号住居跡や、第255号住居跡と第256号住居跡の重複例のように、10世紀代以降の住居跡同士の重複例もわずかに認められるが、当調査区においては8世紀代以前の住居跡に圧倒的に多いのである。

次に、時間的隔たりのある住居跡間の重複する場合とは、第85号住居跡と第86号住居跡の重複のように、8世紀代以前の住居跡に10世紀代以降の住居跡が重複するような例である。この例では、前代の住居跡の時期と次代の住居跡の時期との間には、一般的に住居存続期間として認識されている時間をはるかに越えるような経過時間があり、また、第58号住居跡と第37号住居跡との重複のように、床面レベルに差があることが多く、前代の住居覆土中に次代の住居床面が構築されていることなどから、前例のような有機的関係をもった建て替えとは理解できない。さらに、このような時間的隔たりをもった重複で最も多いのは、8世紀代以前の住居跡または住居跡群と10世紀代以降の住居跡の重複する例であることも指摘できることである。

以上のような重複関係から捉えられる傾向をもとに当調査区の住居構築上の特徴を抽出すると、8世紀代以前の時期においては、一軒の住居が伝統的に一定のエリアを占めるかのように、建て替えが繰り返えされた可能性が高いのに対して、その伝統が9世紀代に継続することなく、10世紀代以降になって先の伝統を払拭したかのように再度の住居構築が開始されたとみることはできないだろうか。つまり、9世紀代(または8世紀後半代)に集落の編成替えが行われている可能性があることを意味している。

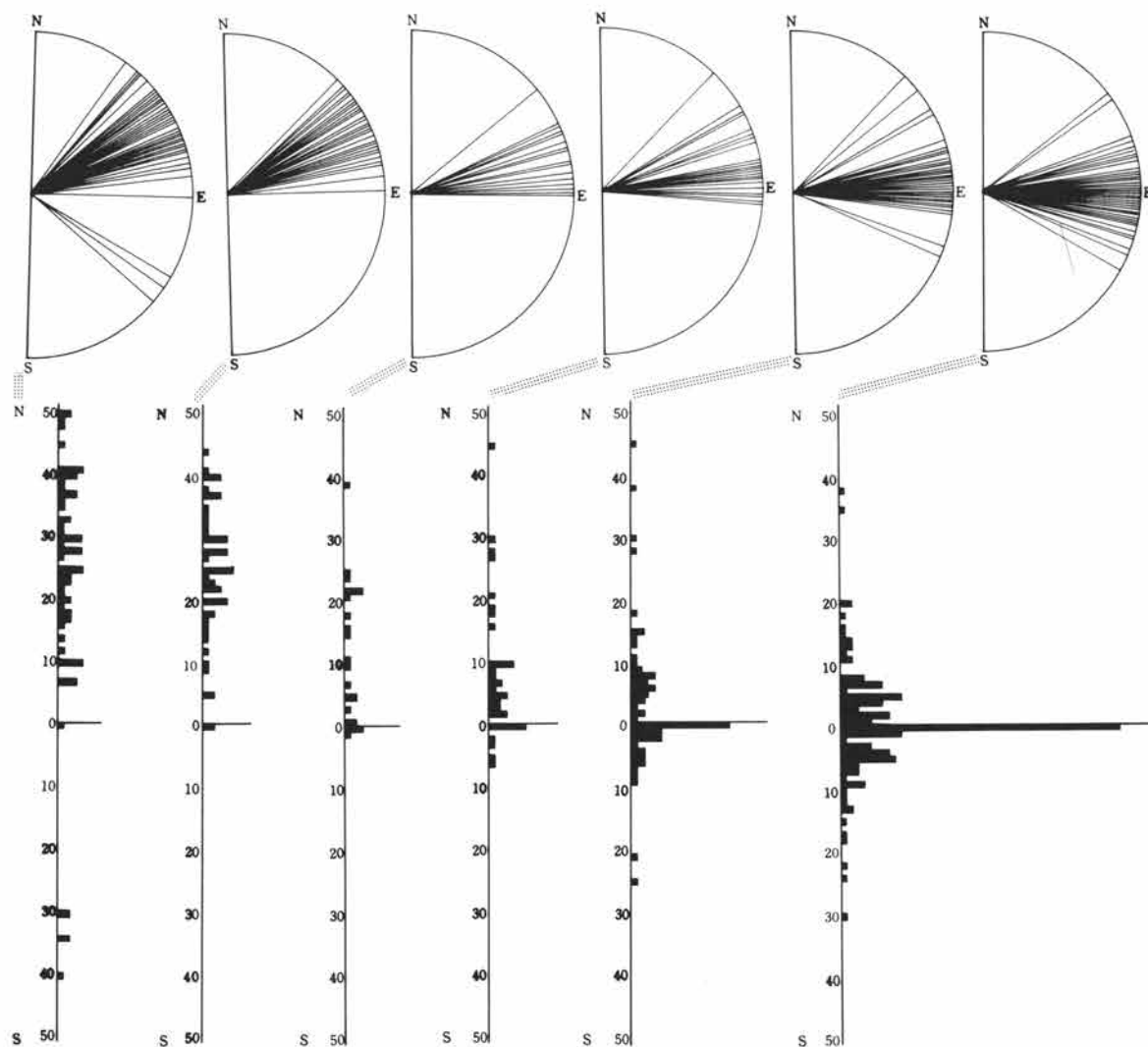


第640図 竪穴住居跡重複関係

2 主軸方位について

竪穴住居跡の主軸方位に関しては、既に『上野国分僧寺・尼寺中間地域（2）』において、F・G・H区の資料をもとにした段階毎のグラフを掲載した。そこではほぼ半世紀ピッチで作成したが、資料的制約のためにほとんど傾向を捉えるに至らなかった。また、木津博明は『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』において、住居の「構築基準辺」から主軸方位を求める方法を用い、B・C・D区の住居跡について主軸方位の傾向を提示し、上野国分僧寺の指向方向に一致する点等について述べた。

今回は第641図に示したように、主軸を東からの振れ角として表し、段階設定を7世紀前半以前・7世紀後半・8世紀前半・8世紀後半・9世紀代・10世紀以降というように作為性を持たせることによって、各段階の傾向とその変化を顕在化することができたので、再度主軸方位について記述したい。ここで示した主軸は、「構築基準辺」から求めたものではなく、基本的にカマドの設置された壁の垂線方向を東からの振れ角として計測したものである。例外的に検出されているカマドが西側に設置されている住居跡については、東からの角度に読み替えを行っている。各段階の傾向について簡単に記述すると以下ようになる。



第641図 竪穴住居跡主軸方位

7世紀前半以前 0°北～50°北及び30°南～40°南とかなり主軸方位にバラつきがみられるが、10°北・25°北・28°北・30°北・41°北の5カ所に出現頻度のピークがあり、全体の約48%が25°北～41°北の範囲に入っている。

7世紀後半 主軸方位の振角範囲は、0°北～44°北であり、7世紀前半以前の段階と同様にバラつきがみられる。出現頻度のピークは20°北・25°北・28°北・30°北の4カ所で、この20°北～30°北の範囲に全体の約47%が入っている。

8世紀前半 主軸方位の振角範囲は、39°北の例が1例ある他は、ほぼ0°北～25°北の範囲にある。出現頻度のピークは0°北と22°北の2カ所にあり、中間への分布が希薄である。これは他の段階のグラフが弱いながらもピラミッド状の分布を示すのと異質である。このような傾向は、7世紀後半段階と、後述する8世紀後半段階の中間の状態を示しているとも理解できるが、本来8世紀後半にすべき住居跡をもこの段階として扱ってしまった可能性もある。

8世紀後半 主軸方位の振角範囲は、6°南～10°北に主体があり、0°北を出現頻度のピークとして10°北までの範囲に全体の約68%が入っている。8世紀前半段階に現れた0°付近の主軸方位を有する住居跡は、この段階には主体的位置を占めている。また、当段階になって主軸が南方向に振れる住居跡があることも特徴として上げることができる。

9世紀代 主軸方位の振角範囲は、9°南～11°北に主体があり、0°北を最大のピークとして2°南のわずかに2°の狭い範囲に全体の約37%が入っていることになる。これは8世紀後半段階に顕在化した0°付近への主軸指向がほぼ固定化されたものと考えられる。

10世紀代以降 主軸方位の振角範囲は、5°南～5°北に主体があり、0°北を圧倒的ピークとしてピラミッド状の出現頻度を示している。さらに1°南～2°北の3°の範囲に全体の約43%が集中している。この傾向は9世紀代にも捉えられたものである。

以上の各段階に捉えられた傾向は、第641図下段の棒グラフに良く表現されているものと思われる。つまり、各段階の出現頻度のピークは、ほぼ左端（7世紀前半以前）から右端（10世紀代以降）に向かって、上位（北への大振角）から中位（0°北）への変化が捉えられるはずである。しかし、こうした傾向は単に漸移的变化としてのみ理解できるものではない。それは、7世紀代から8世紀前半代までの変化は、漸移的とも考えられそうであるが、8世紀後半段階に捉えられる0°北へと収束する傾向は、9世紀以降に継続されているのは確実であると同時に、検出住居跡の増加に伴って、より顕在化している。したがって主軸方位は、漸移的な変化段階から、8世紀後半段階を境にして固定化する段階へと変化するものと考えられる。この変換する時期は、ほぼ国分寺造営の時期とオーバーラップしており、こうした国を上げた一大事業と無関係の事象とは考えられないことである。こうした住居跡の主軸方位と国分寺との関連については、上述のように『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』の中で、既に木津が指摘した^註ことである。

註
木津博明「3. 住居の指向方向」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』本文編（2） 1990

第5章 ま と め

3 弧状の張り出しを持つ住居について

はじめに

今回報告区である I 区では、南東壁が弧状に張り出す竪穴住居が数軒、他に H 区に 1 軒、また南側調査区の A 区にも 1 軒類似の形態を示す住居がある。方形の張り出しを持つ住居は他にも良く見られるが、それらの住居とはまた異なる機能を持つと考えられるので分析を試みたい。今回取り扱うのは I 区 61・73・81・82・83・183 住の 6 軒に、隣接する H 区 123 住（第 3 分冊掲載）、南の A 区 120 住（第 6 分冊掲載）を加えた 8 軒である。この他に I 区には同様の形態を示すと思われる 132・134 住があるが、重複が激しく全体の形を捕えるのが困難なため一応省いた。この他に近接する下東西遺跡の S J 27 住も本遺跡と同様な張り出しを持つので参考例として加える。

年代について

張り出しを持つ住居として初めて現れるのは H 区 123 住で、出土土器から 7 世紀前半と推定される。最も新しいと思われるのが I 区 183 住で 8 世紀の前半と推定され、これらの住居は約 1 世紀に渡ってこの地域に展開したと考えられる。A 区 120 住は 7 世紀中～後半、I 区 81・82 住の新旧関係は切り合いから 82→81 住となる。I 区 73 住は I 区 81 住とほぼ同時期で I 区 183 住にはやや先行すると思われる。このように見て行くと同時期に何軒も立ち並ぶという可能性は少ない。県内で既に報告された中で管見に触れる限りではこの他には上記の下東西 S J 27 と芳賀東部団地の H 359 住くらいで、群馬町で発掘中の例があるが、時期的には国分寺中間地域の張り出しを持つ住居と同年代に属すると考えられる。

形態分類（第 642 図）

これらの住居は、南東壁に張り出しを持ち、張り出し部は床面と同レベルで突出し、周溝も連続して巡る点は共通しているがその張り出しの形状はそれぞれ異なる。これらの住居の有する特色と張り出しの形態によって次のように分類を行った。

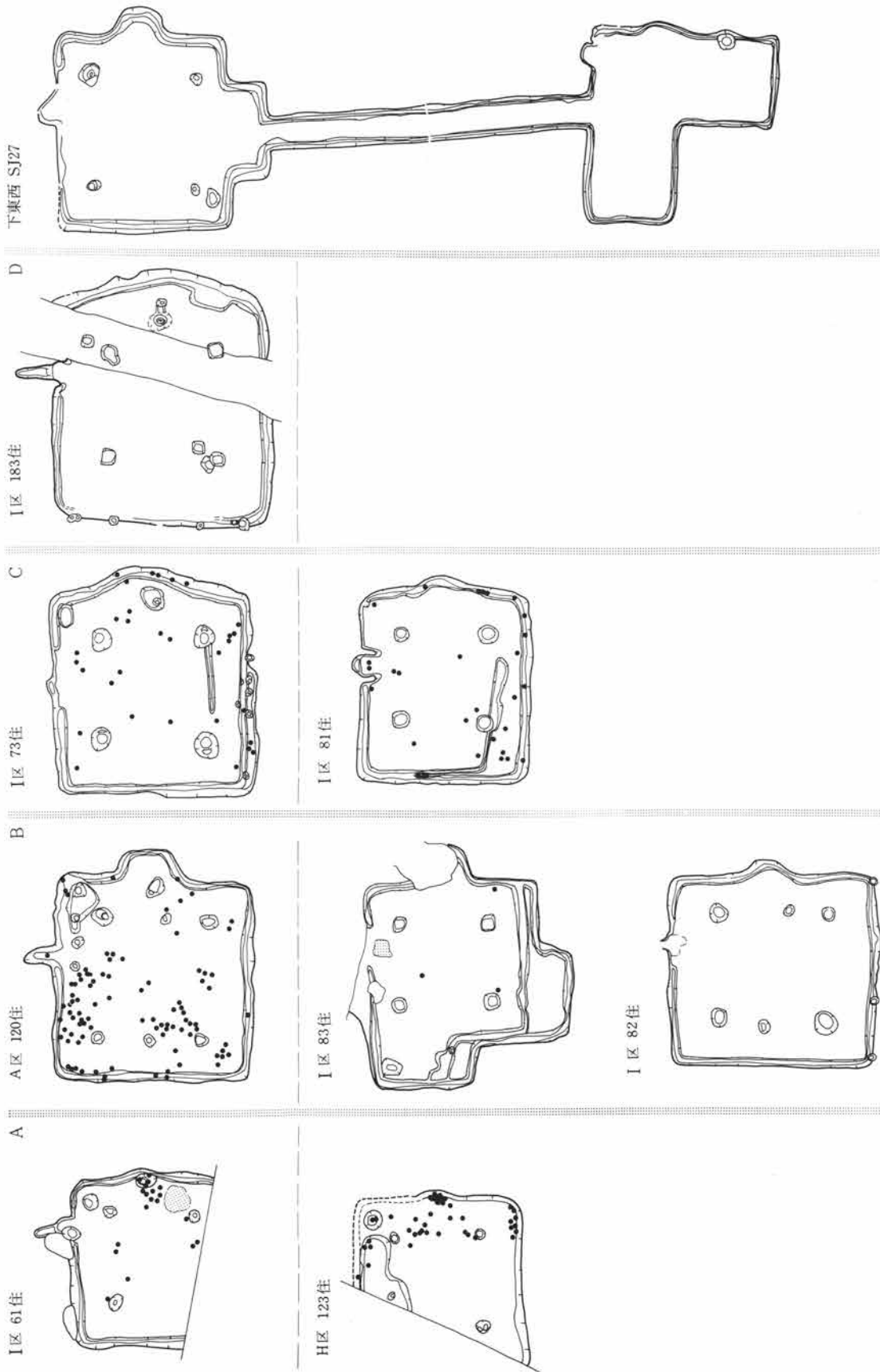
- A. 張り出しを持つ壁は直線的で、張り出し部は小さく僅かに突出するのみである。
- B. 張り出しを持つ壁は直線的だが A よりも張り出し部分が大きく突出する。
- C. 張り出しを持つ壁と張り出し部は弧状にやや突出する。
- D. 壁全体が弧状に大きく突出する。

またそれぞれの中で張り出し部にピットを持つものと持たないものに分けられる。

張り出し部の機能について

次にこの張り出し部がどのような機能を果していたか考えて見たい。第一に、A のように張り出し部は他の住居に比べ小規模で土器が集中して出土するという特色を持つ場合から考えられるのは、収納スペースとしての可能性である。貯蔵穴の位置がカマド横に固定する以前は、カマド対面などに貯蔵穴と考えられるピットを伴った張り出しを持つ住居が存在し、県内では伊勢崎東流通団地遺跡、東京都中田遺跡など多くの遺跡で検出例がある。これらの住居のピットの掘り方はしっかりしたもので、張り出しの大きさもピットとほとんど一致し、このピットを設ける目的の張り出しであることは明確である。しかし、弧状の張り出しを持つ住居では総ての住居の張り出しにピットを持つとは限らず、遺物が集中した出土例は限られている。I 区 61 住・H 区 123 住の場合も完形土器は希で、破片が雑然とした状態で出土することや張り出し部に存在するピットが貯蔵穴と考えるには小さく浅いことなどから考えると、収納スペースとしての可能性は薄い。

第二に、上記のように遺物が集中して出土する場合はこの他に祭祀空間としての可能性も考えられる。特に I 区 61 住は張り出し部にピットを持ち、焼土を含んだ土で充填された土坑もすぐ脇に存在し何らかの行為



第642図 張り出しを持つ竪穴住居跡分類

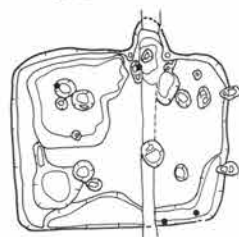
第5章 ま と め

が行われた可能性を窺わせる。しかし、他の住居では張り出し部に遺物が集中して出土する傾向は見られず、I区61住・H区123住の2軒についても祭祀に係わる特殊な遺物の出土はないことなどから考えると、固定された祭祀空間として限定するには疑問が残る。

第三に、方形の張り出しを持つ住居は多くの例があり居住空間の拡大が目的と考えられるが、弧状の張り出しを持つ住居の場合も形式が異なるが同様な目的を持っているとも考えられる。しかし、これを単なる居住空間の拡張と見るとこの張り出しによって得られる面積は小さく、特にI区61・H区123住などはゼロに等しい。またI区83住のように別にその目的に添った方形の張り出しを持つことから否定される。

第四に、この他に考えられるのは出入口としての可能性である。柿沼幹夫氏は下田・諏訪の報告の中でカマド・貯蔵穴・入口の三者を直結させて土間の概念の成立を述べているように、出入口はカマドの対面の他にカマドを持つ壁と接する壁に設けられることも考えられる。右の図に見られるようにJ区5住はカマド正面、G区47住はカマド横に出入口施設と考えられるピットをもつ例がある。通風・採光などを考慮すれば南東壁は出入口を設ける為の好条件を備えている。I区82住・A区120住は柱穴を4本以上有するが、張り出し部前に位置する一本については柱穴間距離を変えて張り出し部正面からずらしている。これは明らかに出入口としての機能を意識し、障害とならないように行われたものではないだろうか。下東西遺跡のS J 27もカマド対面に廊下状の張り出しを設けて2つの住居をつないでいることから、通路以外に出入口を考えると北西壁よりも張り出し部分が適切と思われる。このように張り出し部の果していた機能について幾つかの可能性を検討して来たが、出入口とする可能性が一番高いと考えられる。

G区 47住



J区 5住



第643図 出入口を持つ住居

壁面に沿った柱穴列について

I区73住は北西コーナー部、I区82住は西壁、I区183住は北壁に壁に沿って柱穴列を持っている。主柱穴とは柱穴規模も異なり、壁を掘り込んで設けられ床面下の深度は浅い。張り出しを持つ住居は他の住居が20^{註(1)}m²以下のものが過半数を占める中で33~62m²と大形住居である。これらのことから壁の補強のためと考えられるが、柱穴が設けられる壁に限られる事から何らかの付属施設に伴うものの可能性もある。しかし、このように出入口の為に壁一面に柱穴列を設ける必要性はないと思われる。

張り出し部のピットについて

形態分類の所で述べたように弧状の張り出しを持つ住居はピットを持つものと持たないものに分けられる。このピットはどのような役割を果していたのだろうか。特にI区183住のピットは開口部が大きく底部が小さなロート状を呈し、礫で蓋をした上に更に小礫を敷き詰めるといった特異な状態を示している。平城京では掘立柱建物跡から出土した壺が水野正好氏によって文献等から胞衣壺ではないかと考えられている。近年まで民俗例で出入口下などに胎盤を埋納する習慣があったことも木下忠氏の著書に詳しく述べられている。^{註(2)}年代は大きく隔たるが縄文時代の住居の出入口部等に埋甕が多く存在することは広く知られているが、I区183住のピットは土器を伴わないにても縄文時代の屋内埋甕の様相を想起させるのではないだろうか。埋甕の用途については幼児埋葬説、住居の新築・立て替え時の儀礼に用いる施設等諸説が存在する。木下氏は胎盤埋納説を提唱されたが、最近の分析技術の発達により胎盤埋納の可能性を裏付ける報告が田篠遺跡でな

されている。同年代の他の住居に普遍的に見られる訳ではなく数件の例だけでその可能性を指摘することは困難だが、I区183住のように細長く深い土坑を掘り蓋石をするような状態は何らかの呪術的なものを示していると思われる。その上に小礫を敷き詰め攪乱を受けない状態にあったのであるから、時間を経て分解する有機質のものが埋納されていた可能性は考慮の余地がある。他のI区61・73住の場合はI区183住のピットに比べ浅く小さく特異な状態は示さないが、同様の可能性はあると思われる。今後I区183住と同様な例が検出された場合には、埋土の残留脂肪分析を行う必要があるだろう。このように張り出し部に存在するピットが直接出入口の構造に伴うものではないが、出入口にかかわる祭祀的な意味を持つものであるとすれば、I区61住・H区123住の様に土器が集中して出土する場合も住居廃棄の際に何らかの祭祀を行った可能性を考慮できる。このように張り出し部にピットが存在しても出入口との考えに矛盾は来さないと思われる。

下東西S J 27との関係

下東西遺跡のS J 27は国分寺中間地域と同じ張り出しを持つ上に2棟の住居を通路で結ぶという特異な形態を示している。隣接して掘立柱建物があり、溝と柵列が周辺を囲んでいるが、これについて神谷佳明氏は官衙的な遺構ではないかとの考えを示した。これらは主軸方位と出土土器から同時期と推定され、国分寺中間地域の場合も国分寺や国府に近い重要な地域で下東西遺跡とも近く掘立柱建物が数多く存在し、出土遺物から年代的にも類似することから、この張り出しを持つ住居は下東西遺跡の場合と同様、掘立柱建物と関係を持つ特殊なものではないかと考えた。出土遺物から見ると年代的にはほぼ一致し同年代で、主軸方位により分離した掘立柱建物群と張り出しを持つ竪穴住居の主軸方位には若干のずれがみられるものの、掘立柱建物群の周囲に位置し、暗文土器を出土する溝もあり、国分寺中間地域の場合も下東西遺跡と同様に掘立柱建物と竪穴住居は密接な関係を持つと言える。

まとめ

弧状の張り出しを持つ住居かなり年代的に限られ、各地に普遍的に流行した住居形式と考えるには同時存在することが少なく、他の住居に比べて大形であることなどかなり特殊なものであることは確実である。しかし、出入口部と考えるとなぜ突出させる必要性があったのか、上屋構造はどうなっていたのか等依然不明な点が多い。ここで地理的には大きく隔たり年代的にも逆上るが、宮崎県西都原古墳で竪穴住居の形態を示す家形埴輪が出土しているが、この上屋の入り口に近い構造を示した可能性を指摘しておきたい。I区83住は特にこれに近い形態を示すと思われる。他の張り出しを持つ住居も出入口部分と考えられる正面部を突出させることによって他の住居に比べ何らかの特殊性を持たせることを意図して行われたのではないだろうか。

註

- (1) I区で面積計測が可能な住居153軒中20㎡以下が112軒を占め、30㎡以上の大形住居は15軒でその内張り出しを持つ住居が5軒である。特にI区183住は計測可能な住居の中では最大である。
- (2) 木下 忠氏の著書によると胎盤を埋納する際に用いる容器は焼物だけではなく桶・曲物・わら製品等多岐に渡り用いられていたことが、民族例や江戸時代の文献から述べられている。
- (3) 国分寺中間地域ではG区2号埋設土器・H区59住の住居内の埋設土器（第2分冊掲載）など住居出入口部分だけではなく胎盤埋納の習慣を行っていた可能性を考慮できる施設がある。

脱稿後、埼玉県坂戸市【塚の越遺跡】で同様な張り出しを持つ住居が検出されていることを知った。S J 27・S J 41・S J 57の3軒で、それぞれ本遺跡のA区120住・I区73住・I区82住に良く似た形態を示している。年代的にはやや先行する感はあるものの大きな齟齬はないと思われる。これによってかなりの地域的広がりをもって展開する住居形態であることが明確になったので今後の課題としたい。

第5章 まとめ

4 特異な貯蔵穴について

貯蔵穴の名称については昭和30年代後半頃から一般的に用いられてきているが、その機能・定義については明確にされているとは言えない。由来については縄文時代の屋外貯蔵穴によると思われるが、そのような根拠を示す良好な検出例は見られない。近ごろは貯蔵穴の名称・機能について疑問を投げかけた意見も見られる。また、発掘例の増加に伴い残存状態の良い報告例も増加しているので本遺跡における特異な貯蔵穴例を報告しておきたい。

貯蔵穴の周囲に粘土を貼ったもの

I区42住・J区28住

両住居例は共にコーナー部壁際を除く貯蔵穴周囲に粘土を貼っている。

土器を埋設したもの

I区71住・H区18住

I区71住は口縁部と底部の欠損した土師器甕を貯蔵穴中央底部に置いた状態である。H区18住は須恵甕の口縁部を貯蔵穴上部に埋め込んでいる。

周堤状の施設をもつもの

I区176・188・208住・H区26住・H区120住

I区188・208住は貯蔵穴手前一方のみ、I区176住は貯蔵穴手前と対する壁際の二方向、H区26・120住は貯蔵穴を囲むようにL字状に周堤状の施設を持つ。

二段の掘り込みをもつもの

H区79住

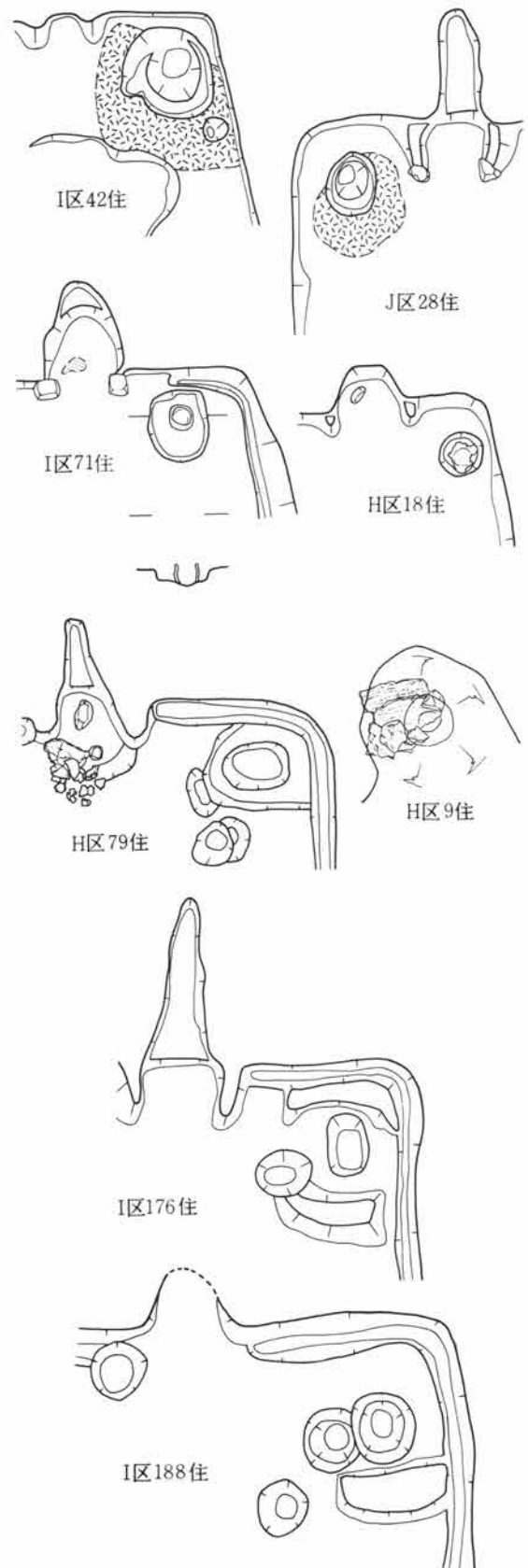
H区79住は貯蔵穴周囲を一段掘り下げテラス状にしている。

瓦などを蓋のように乗せたもの

H区9住

このような例は南側調査区にも見られ、完形の瓦が整然と並べられている。H区9住の場合は住居中央にやや寄り、通常の貯蔵穴位置とは異なる。

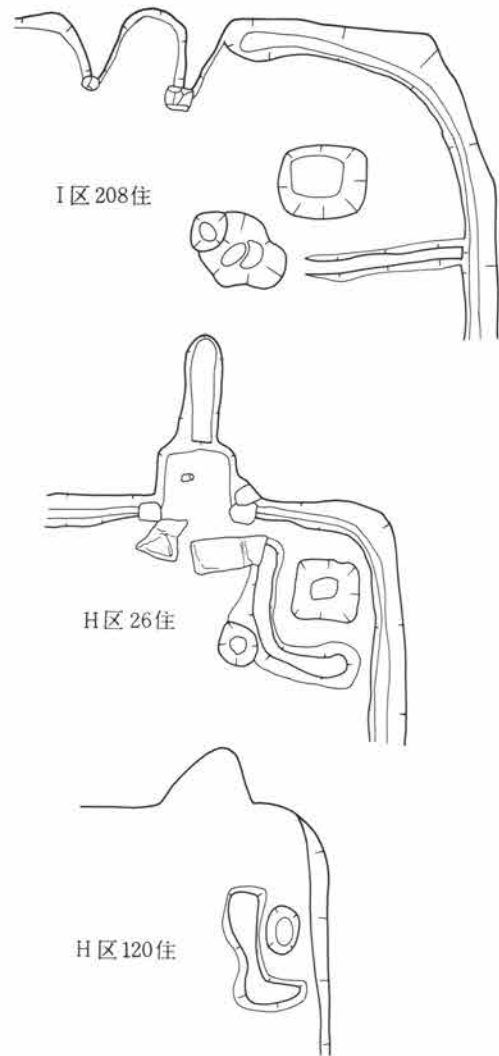
このように様々なタイプの貯蔵穴が検出されているが、遺物出土などによって内部の使用状態が明らかになるような例はなかった。しかし、構造については他の検出例から窺い知ることができるものもある。千葉県上の台遺跡では三方を木枠で囲み、その上に四枚の



第644図 特異な貯蔵穴(1)

板を架けた貯蔵穴が検出されている。また埼玉県城北遺跡では貯蔵穴上に棒状の木を並べたものが検出されている。このような例から考えると周堤を持つものやテラスを持つもの等は蓋状施設を持つ可能性が考えられる。土器を埋設したもので特にH区18住のように甕の口縁部を埋設したものは、開口部の縁が崩れないように補強したと考えられ、内部は埋められた状態ではなく空間として機能していたのではないだろうか。H区9住は瓦と石で蓋をしたような状態だが、上記の例とは異なり密閉された状態で開口して使用することを意識していないように思われる。粘土を貼った貯蔵穴については土器を埋設したものと同様に開口部の崩落を防ぐためとも考えられる。しかし、貯蔵穴の祭祀的な可能性を考慮する意見に沿って考えると、他の場所と区別するためと言う意味を持つてくる。周堤状の施設を持つ貯蔵穴の場合も同様の意味を持つ可能性が考えられる。

上記のような特徴を持たない一般的貯蔵穴でも形状は方形・円形と様々で、深度も十センチから1メートル近い物まで存在する。このように貯蔵穴はカマドが作られるようになってからはカマド脇に設けられるということで共通するが、その機能についてはすべて同じものだったと考えるには疑問が残る。今後貯蔵穴に関しては年代・埋没状態・深度・形状など細部に亙って検討することが必要と思われる。



第645図 特異な貯蔵穴(2)

参 考 文 献

千葉市教育委員会 『千葉・上ノ台遺跡』 1981
 木下 忠 「埋甕といわゆる貯蔵穴について」『埋甕』 雄山閣考古学選書18 1981
 島田孝雄 「貯蔵穴に付属する礫床について」『市内遺跡II』 太田市教育委員会 1985
 群馬県教育委員会・姉群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域』 1987・1988・1990
 木津博明 「傍甕坑(ぼうそうこう)」『上野国分僧寺・尼寺中間地域』 1988
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 『10年のあゆみ』 1990

第3項 I区検出の掘立柱建物跡について

1 建物の構造について

石井 榮一

はじめに

本稿は、上野国分僧寺・尼寺中間地域中、I区において発掘された7世紀後半から9世紀と思われる掘立柱遺構をもとに建築学的考察を行ったものである。

考察の方法であるが、I区から検出された遺構中、掘立柱建物跡と思われる遺構をそれぞれ個別に分析した。分析内容は建物全体の規模、各方向の柱間寸法の割り出し、建物の方位、柱穴の状況などについて精査し、上屋構造や各遺構の特徴、全体の配置形式などを推定した。

また今回の考察では、建設当時に使用された尺度の検討も行った。遺構建設推定年代が7世紀後半から8世紀代にかけてであり、使用された尺度は唐尺^{註(1)}と思われる。唐尺は、1尺あたり29.5cm～29.7cmの長さがあるが、本遺構では各掘立柱の寸法を検討した結果29.5cmを1尺とする尺度とした。

なお、各遺構の詳細は379～408頁の個別報告に詳しく記されている。よって本稿では代表的な掘立柱建物跡の上屋構造とその特徴のみを記載することにした。また、上屋構造の特徴を検討するために、3期に分類された建物群別に記述する事とし、その内最も特徴が認められる第II期について主に述べる事とした。

掘立柱建物遺構の概要

I区検出の掘立柱建物跡は1号から30号までで、13・14・18号を除く28棟の建物跡を精査した。そのうち、数棟の建物跡は発掘対象地域境であったため、不完全な検証となった。その他、中世の遺構と思われる建物跡が3棟推定されたため、本報告の対象外とした。

24棟の掘立柱建物跡の概要は、規模が2間×1間が2棟、2間×2間が11棟、3間×1間が1棟、3間×2間が6棟、4間×2間が2棟、4間×3間が1棟、5間×2間が1棟確認された。また建物形式別には、側柱建物9棟、総柱建物14棟に分類する事ができ、その内庇が付くと思われる建物跡は6棟存在していたことが判明した。

次に掘立柱建物跡の配置を見ると、第648図に見られるように近似の軸線を持っていたり、意図的と思われる配置形態、建築年代の類似などから、3期の分類が推定できた。なお3期の分類及び各建築年代についての詳細は、事項の「掘立柱建物跡群の位置付けについて」に詳しい。

そのほか、布掘状の掘り込みを持つ建物跡や、井戸が2ヶ所、溝などが検出され、I区の全貌を検討する上では重要な遺構も検出されている。

第I期の掘立柱建物跡の特徴

第I期の建物群は7号及び8号、16号(第646図)、20号、21号、26号が該当し、全て総柱建物であることが判明した。軸線を30～35度の範囲内に持ち、規模は2間四方であるが、柱間寸法にはそれぞれ違いが見られる。北側の3棟は桁方向7尺、梁方向6尺の柱間寸法であるのに対し、20、26号は両方向6尺となっている。ただし、21号は全長は同一でありながら、東西方向のみ3割りの4尺間としている。また、16号掘立柱跡のP₁からは根石が検出されている。本遺構での根石検出例^{註(2)}は少ないが、この様に残存している状況からすれば、他の柱穴にも使用されていたことは十分推定できる。

次にそれぞれの建築年代であるが、北側の3棟は6世紀後半から7世紀中間までであるのに対し、残る3棟は21号が7世紀後期以前、他は9世紀を下限としている。これらの遺構の上屋を想定すると、やはり高床

倉庫群と見るのが妥当であろう。

第II期の掘立柱建物跡の特徴

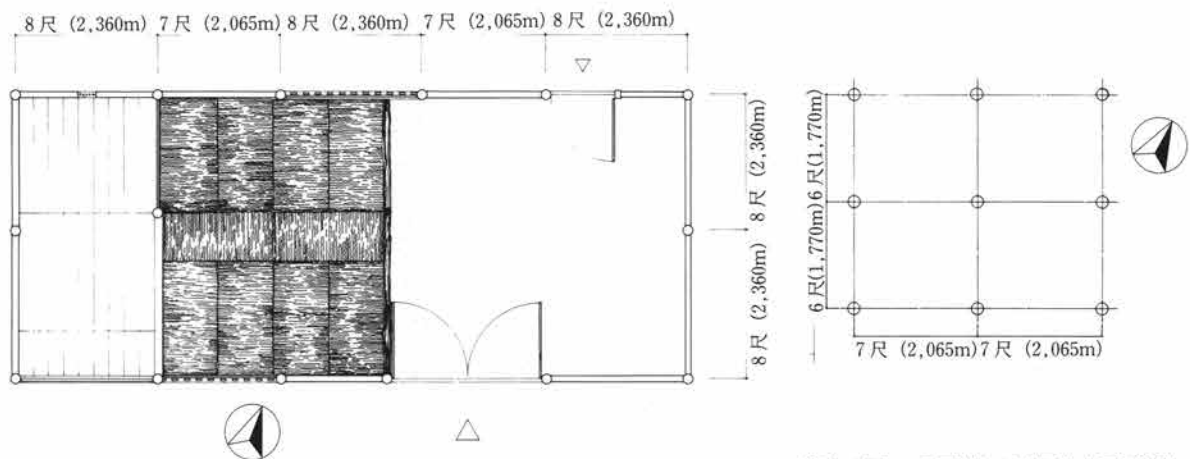
1号及び2号掘立柱建物跡は、南北に桁方向を持ち東西に並んで検出されている。両棟の隣棟間隔は、おおよそ14尺(413cm)ある。建物跡の特徴は、1号が側柱建物で3×2間、主軸は西に18度振れている。一方、2号は身舎部が4×2間の総柱建物で、東側に10尺(295cm)の片庇を持つと推定できる。建築年代は1号が8世紀以降、2号は7世紀末以降9世紀の間と推定され、時間的重なりは十分想定できる。しかし、建物の形式から比較しても両者の構造はあまりにも食い違い、かつ2号は片庇付総柱建物であり、隣棟間隔が狭すぎることから同時期の存在は困難と思われる。よって、建築年代から推定する限り2号が先行して建てられたことになる。

3号及び4号、6号は建物の規模はそれぞれ違っているが、いずれも北側の外壁線を同一柱芯状に設定された建物跡である。建物規模及び概要は、3号は東西に棟方向を持つ2×2間の側柱建物で、主軸は西に21度振れている。ただ、南側中通りの柱穴位置が、東側P₃に寄った位置に確認されている。つまり6尺2間の柱間寸法が、8尺と4尺の割付となっているのである。3号は他の4号、6号などとの位置関係から見て、南側に解放面を持つ構造と見る事ができる。とすれば、8尺の柱間は開口部と見るのが妥当であろう。

4号は南北に棟方向を持つ4×2間の総柱建物で、主軸は西に21度振れている。西側を除く側柱筋の柱穴間には布掘が確認された。この布掘状遺構は、本調査区では検出例が少なく、他に21号掘立柱のみである。布掘状遺構については、新保遺跡^{註6)}と同様の布掘状遺構が検出され、側柱・総柱建物いずれの遺構からも検出されている。残念ながら現状では布掘の意味は確認されていない。

また総柱建物であるため、床を持つ建物と考えられるが、柱穴の形状を見ると側筋は全般的に隅丸方形であるのに対し、中通りは円形で他の側柱筋の柱穴と比べ小さい。この柱穴は広束として想定できるが、その場合他の柱穴とは形状に差が見られないのが一般的である。とすれば、中通りは広束だけではなく、棟を支えるような構造柱と見ることもでき、土間のまま利用した建物と推定する事もできる。

6号掘立柱跡は東西に長く棟方向を持ち、主軸は22度西に振れている。5×2間の側柱建物であるが、他の掘立柱遺構と比べ特徴がある。まず、内部の西側より2列目中央近くにP₁₅が検出されている。P₁₅の役割であるが、梁方向の柱間位置からは若干北側に寄っている。とすれば、棟通りの筋からははずれることであり、棟を支えるような構造柱が立っていたとは考えにくい。むしろ間仕切り或は、床束のピットであったと見る



第647図 I区第6号掘立柱建物跡 復元平面図

第646図 I区第16号掘立柱建物跡 平面図

第5章 ま と め

べきであろう。しいて復元するならば第647図の様に、西側1間を床張りと考え、床束の痕跡と推定したい。

次に桁方向の柱間の割付が非常にめずらしく、8尺と7尺の柱間寸法が交互に配され、さらに南側のP₂とP₃間は9尺、P₃とP₄間は6尺の柱間とし、この間だけ柱間寸法の割付を変化させている。つまり、8尺と7尺の柱間寸法の割付を崩さず、1尺だけ西にP₃をずらしているのである。この間の柱間寸法を広くしたのは、開口部つまり出入り口の様なものをこの部分に設けたいためではないかと推定できるのである。

以上6号掘立跡の上屋構造を復元すると、西側1間を床張りとし、他は土間であったと見ることができる。土間のうち、板床寄りには土座の様な空間の存在も十分推定できる。これら床束と開口部の存在が、当遺構が人の生活するような建物であったと想定させるのである。

その他、同じ第II期と推定できる掘立柱建物跡としては、11号、19号があげられる。

11号掘立跡は、1号掘立跡から42尺(14.9m)ほど南にさがった位置に、南北に棟方向を持って位置している。軸線は25度西に振れており、側柱建物で東西に庇が付く。妻側柱間寸法は12尺(3.54m)で庇は5尺である。中央通りに柱穴が確認されていることから、床を持つ建物と見て良いであろう。

19号掘立跡は、2間×2間の側柱建物で、建て替えの痕跡が残っている。南北に棟方向を持ち、軸線は西に21度振れている。

以上、各掘立柱建物跡は第II期の配置形式にまとめられ、いずれも軸線は10～22度の範囲内としている。建築年代は3号は7世紀後半、4号は8世紀末以前、6号は8～9世紀、5・11号は10世紀中まで、19号は9世紀と、いずれも8世紀には上屋は存在していたことになる。

建物を復元検討すると、6号を中心とした3号及び4号の掘立跡、さらに南に各掘立跡が位置する。特に6号建物跡は、前述したように生活空間を持った建物として復元することができる。6号を住居とするなら、3号は小規模な建物であることから生活領域に結びついた付属屋として、また4号は納屋などに想定できる。

その他1号及び2号は、並列に遺構が確認されているが、建物の隣棟間隔が少なすぎ、また建物も側柱建物と、片庇付総柱建築とでは機能が違う。年代的には同一時期ではあるが、時間差があったと考えるのが妥当であろう。2号の片庇付総柱建物は、形式的に見ても格式のある建物としての位置づけがなされよう。

第III期の掘立柱建物跡の特徴

第III期の掘立柱建物群は5号及び9号、10号、15号、17号、28号、29号が該当する。5号、17号を除きいずれも総柱建物で、軸線は5～8度の範囲内に存在している。規模的にも2×3間が主で、5号、17号以外は高床倉庫と見て良いであろう。17号掘立跡は側柱建物であることから、物置或いは納屋の類いが想定できる。また、5号掘立跡は攪乱が入っているが建て替えの形跡が見られる。

I区検出の掘立柱建物跡の特長

以上、I区において検出された掘立柱建物跡は、当初にも述べたが、28棟確認できた。そのうち、今回の考察対象外とした中世期と思われる遺構を省き、24棟の掘立柱建物跡を対象とした。個別報告に詳細な分析が記されているが、その内建物規模及び構造からみて身舎梁行きを2間とする建物が24棟確認された。構造的には、棟の線を中心に前後を当間とする典型的構造形式が用いられた上屋構造である。さらに2号や11号にみられる庇を張りだした遺構も確認できている。また、復元した建物の機能にも関係なく、2間の梁間をもつ建物のみとなっている。奈良国立文化財研究所の宮本長次郎氏も、奈良時代には身舎梁間2間が一般化する傾向にあると述べられており、本遺構群はまさにその好例といえよう。

註

- (1) 奈良時代の尺度については、奈良国立文化財研究所編『平城京 長屋王邸と木簡』（吉川弘文館刊）にも詳しい。
 (2) 『新保遺跡Ⅲ・蛭沢遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
 (3) 註(2) 根石検出例としては、ほぼ同時期の遺構である新保遺跡に良好な例が見られる。
 (4) 『三ツ寺Ⅰ遺跡』 群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

2 掘立柱建物跡群の位置付けについて

I区で検出した掘立柱建物跡は総数28棟であるが、この中で使用尺と柱穴規模等から中世以降の建物跡と判断したものを除くと、24棟が平安時代以前に属することになる。これらの掘立柱建物跡群は、南北のH・J区への広がり^{註(1)}はほとんど認められないが、遺構の検出状況から東西方向（特に東側）に広がっているのは明らかである。検出した掘立柱建物跡群はその一部と考えられるため、全体像を描くことは難しいのであるが、他調査区に比べて掘立柱建物跡の分布が際立っているため、建物配置や所属時期、及び竪穴住居跡との関係などについて気付いた点について簡単にまとめておきたい。

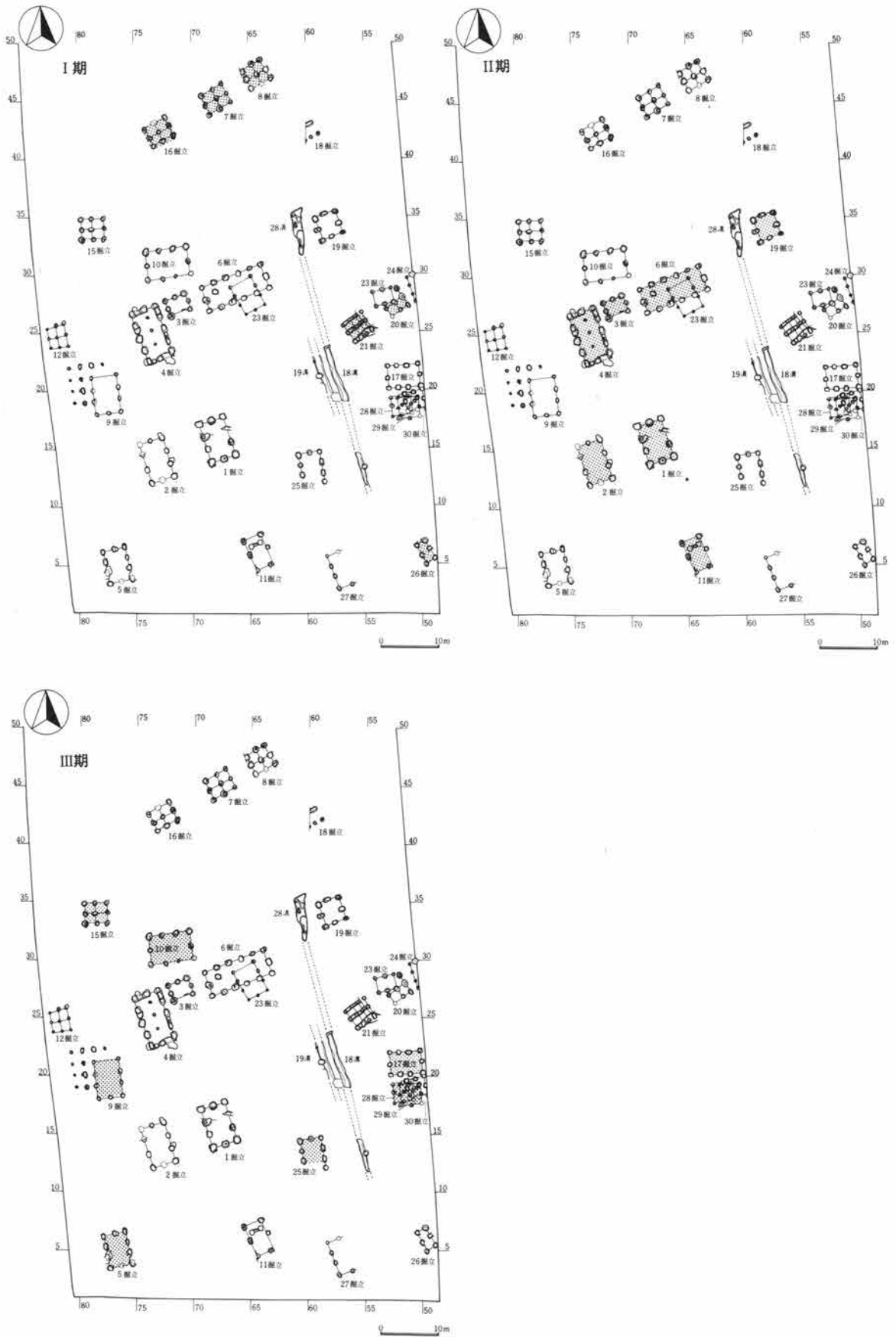
掘立柱建物跡の段階区分と配置

I区から検出された24棟の掘立柱建物跡群が、一時期に同時存在したものでないことは想像に難くない。しかし、併存した掘立柱建物跡を捉える積極的な根拠は、見いだすことができなかった。そこで本稿では、建物の真北からの振角を主軸方位として捉え、この主軸方位のまとまりを群として捉える方法をとった結果、北 $30^{\circ}\sim 35^{\circ}$ —西・北 $16^{\circ}\sim 25^{\circ}$ —西・北 $5^{\circ}\sim 10^{\circ}$ —西の3つの群を捉えることができた。ここではこれらの群が時間的前後関係をもつという仮定のもとに、I～III群と表示して第648図を作成した。以下にはこの図をもとに各群の特徴を抽出・検討していく。

I群は、第7・8・16・20・21・26号掘立柱建物跡の6棟の建物が該当する。建物は、第21号掘立柱建物跡が布掘りを持つ3間×2間で、その他はすべて2間×2間の、ほぼ同一規格の総柱建物と考えられる。柱穴の平面形は長方形を呈するものが多く、長辺の規模は約75～100cmと比較的大きい。遺構の配置は、第7・8・16号掘立柱建物跡と、第20・21号掘立柱建物跡の2列のほぼ平行する建物列は明瞭に捉えられるが、さらに、南側から第26号掘立柱建物跡が検出されているので、少なくとも3列（北列・中列・南列）の建物列があったことが推定できる。また、これらの建物列は上記のような平行の関係を有するだけでなく、第8号掘立柱建物跡と第20号掘立柱建物跡の東西辺がほぼ一致し、第16号掘立柱建物跡の東辺と第26号掘立柱建物跡の西辺が一致するというように、南北間の縦の関係も認められそうである。つまり、このI群の掘立柱建物跡は、計画的に配置されている可能性が高いのである。

II群は、第1～4・6・11・19号掘立柱建物跡の7棟の建物が該当し、南東方向に開口した明瞭な「く」字状（コ字状？）の配置が捉えられることから、計画的な建物配置が行われたことは明らかである。各建物は、第3・4・6号掘立柱建物跡の3棟北辺と第19号掘立柱建物跡の南辺が一致し、第4号掘立柱建物跡の東辺と第1・11号掘立柱建物跡の西辺がほぼ一致し、さらに、若干の段階差は想定できるものの第1・2号掘立柱建物跡は平行するというように、辺のいずれかに関係を持っていることがわかる。「く」字状に配置された建物の中で、片庇の想定される第2号掘立柱建物跡、及び5間×2間（第6号掘立柱建物跡）と4間×2間（第4号掘立柱建物跡）の2棟と、間に挟まれるように構築された2間×2間の建物の3棟などが、規模及び位置から判断して、II群の建物群の主体的部分（中心部分）を構成する建物であろう。柱穴の平面形は長方形を呈し、規模もI群と大差ないものであり、建物の規模やバラエティからみて掘立柱建物の最も充

第5章 まとめ



第648図 掘立柱建物跡変遷図

実した群である。

III群は、第5・9・10・15・17・25・28・29号掘立柱建物跡の8棟の建物が該当する。建物の規模は、3間×2間の建物を主体として2間×2間の総柱建物もみられる。建物の配置は、I・II群の建物に認められたような、直接に建物相互を関連付けるような計画性を捉えることはできなかったが、第5・9・25号掘立柱建物跡が南北に棟方向であるのに対して、それらに直交するように第10号掘立柱建物跡が構築されており、漠然とした形ではあるが、計画的な配置を想定することができる部分もある。また、当群の掘立柱建物跡には、柱穴平面形と規模がI・II群に近い建物（第5・17・25号掘立柱建物跡）と、柱穴平面形が円形基調で規模がやや小さな建物（第9・10・15・28・29号掘立柱建物跡）の2種類がみらる。これは、第17・28・29号掘立柱建物跡のように、群内に同時存在が不可能な程接近した例や重複例があることなどから、複数の段階を1群にまとめてしまっている可能性は否定できない。

掘立柱建物跡群の時期

各掘立柱建物跡群の所属時期については、柱穴内などの出土遺物からの想定には限界があったために、^{註(2)} 竪穴住居跡との重複関係からの推定を試みた。

I群の掘立柱建物跡の中で時期の想定可能な竪穴住居跡と重複している例は、第16・20・21・26号掘立柱建物跡の4棟である。その重複関係は、第16号住居跡（7世紀後半）→第16号掘立柱建物跡、第178号住居跡（7世紀後半）→第20・21号掘立柱建物跡、第199号住居跡（7世紀後半）→第20号掘立柱建物跡、第26号掘立柱建物跡→第219号住居跡（9世紀前半）・第216号住居跡（9世紀後半）・第225号住居跡（10世紀前半）という結果であり、I群の掘立柱建物跡は、7世紀後半以降～9世紀前半以前の範囲に構築されたものと思われる。

II群は、第1～4・6号掘立柱建物跡に時期の特定できる竪穴住居跡との重複が認められ、その重複関係は、第89号住居跡（7世紀後半）→第1号掘立柱建物跡、第2号掘立柱建物跡→第80号址（8世紀後半）・第65号住居跡（10世紀前半）、第155号住居跡（7世紀後半）→第3号掘立柱建物跡、第4号掘立柱建物跡→第94号住居跡（9世紀前半）、第63・155号住居跡（7世紀後半）→第6号住居跡という結果である。したがってII群の掘立柱建物跡についても、7世紀後半以降～9世紀前半以前の範囲に構築されたことがわかる。

III群は、第5・9・17号掘立柱建物跡に時期の特定できる竪穴住居跡との重複が認められ、その重複関係は、第5号掘立柱建物跡→第107号住居跡（10世紀後半）、第9号掘立柱建物跡→第77号住居跡（8世紀後半）、第190・192号住居跡（7世紀後半）→第17号掘立柱建物跡という結果である。この関係からIII群の掘立柱建物跡は7世紀後半以降～8世紀後半以前の範囲に構築されたものと思われる。

以上のようにI～III群の掘立柱建物跡群の構築時期は、7世紀後半以降、8世紀後半または9世紀前半までの時期に収まる可能性が高いのである。しかし、各群相互の前後関係までを捉えるには至らなかったため、群の分離基準とした主軸方位について、竪穴住居跡で捉えた傾向との比較を試みた。その結果、I群の掘立柱建物跡の主軸方位幅の北 -30° ～ 35° —西という範囲は、7世紀代に特徴的な主軸方位であり、II群の主軸方位幅の北 -16° ～ 25° —西という範囲は、7世紀後半から8世紀前半の特徴と考えられる。また、III群の主軸方位幅の北 -5° ～ 10° —西という範囲は、8世紀後半以降の特徴とみることができる。そこでこれらの結果を竪穴住居跡との重複関係から捉えた時期の範囲内に置き換えて考えると、I群が7世紀後半に、II群が8世紀前半に、III群が8世紀後半の時期にそれぞれ属する可能性が高いのである。つまり、3群の掘立柱建物跡群は、I群→II群→III群という順序で構築されたものと考えられるのである。

第5章 まとめ

掘立柱建物跡の展開過程

I～III群として捉えた掘立柱建物跡は、上述のような前後関係をもつにもかかわらず、占有する遺跡内の範囲にはほとんど変化が認められない。また、各群間の重複がほとんど認められないことなどから、各群が相互に関連を持たずに独自に構築されたとは考えにくい面がある。つまり、I～III群は継続的に構築された一連の建物群として捉えられるものであり、少なくとも各群の構築された時期を画期として3段階の展開過程が想定できるのである。そこで、各段階を「期」に置き換えて、構成する建物を想定しながらその展開過程について述べて行きたい。

I期は、当調査区には7世紀前半以前の掘立柱建物跡の存在が確認されていないので、I群とした掘立柱建物跡だけで構成されていたと考えられる。このI群の掘立柱建物跡はすべて総柱形式であるので高床倉庫が想定されている。つまり、I期の段階は倉庫建物だけが存在しており、居住形態の掘立柱建物が含まれていないのが特徴である。

II期は、I・II群の掘立柱建物跡相互の配置から、両群の掘立柱建物跡が併存した段階と考えられる。つまり、II群の規則的な建物配置とその構築場所は、I群の存在を前提にしていた可能性が高く、II群の掘立柱建物跡はI群の掘立柱建物跡の存続期間内に建て増し的に構築されたものと考えられるのである。それは、I群とII群を構成する掘立柱建物跡の柱穴規模と柱穴形状がほぼ共通していることや、I群の掘立柱建物跡が倉庫建物と考えられるのに対して、II群の掘立柱建物跡には床張りや庇を持つ居住主体の建物が想定され、I・II群の掘立柱建物の機能が相互補完的な関係にあったことなどから想定することができる。この仮定が成り立つとすれば、II期は掘立柱建物跡群として棟数・建物規模等すべての面で最も充実し、完成した段階と捉えることができる。

III期は、III群の建物配置がII群及びI群の整然とした建物配置を完全に意識しているとは考えられないことから、I・II群の建物すべてが存続していたことを前提とした構築とは考えられない。つまり、II期の建物の一部が存続した可能性は否定できないものの、建て替えを主体に群が再構成されているものと思われる。III群の掘立柱建物跡には総柱形式とそれ以外の形式の建物が共存しており、棟数や建物規模等の面で明らかに貧弱化しているものの、II期段階の構成に代わるだけの要素は有していると思われる。

このIII期以降は、中世に至るまで当調査区に掘立柱建物跡が構築された痕跡は^{註(3)}なく、一連の掘立柱建物跡群としては終焉を迎えている。

以上のように、I区検出の掘立柱建物跡群は、7世紀後半以降8世紀後半までの間に、成立期（I期）・完成期（II期）・衰退期（III期）と捉え得るような展開過程をみせているのである。

竪穴住居跡との関係

竪穴住居跡と掘立柱建物跡の遺構配置図を重ねるとわかるように、竪穴住居跡の遺構配置に認められる数カ所の空白部には掘立柱建物跡が位置している場合が多い。これは竪穴住居跡の構築場所が、掘立柱建物跡に規制されているからであり、掘立柱建物跡と竪穴住居跡が併存していたことを示している。ここでは、当該期すべての竪穴住居跡についてその併存の可能性について検証できないため、下東西遺跡で掘立柱建物跡との同時存在が指摘されている張り出しを持つ特異な竪穴住居跡が、^{註(4)}当調査区でも数棟検出されているので、この竪穴住居跡との併存の可能性について検討をしてみたい。

この特異な形態の竪穴住居跡は、同時期の竪穴住居跡に比べるとやや大型の印象を受ける住居であり、本章第2項2でも指摘したように3段階程度の構築段階が想定されるものの、配置に規則性が捉えられる。掘

立柱建物跡群の検出されている付近では、I区に6軒とH区に1軒の7軒が検出されており、出土遺物から7世紀前半から8世紀前半までの時期が想定されるので、少なくとも7世紀後半から8世紀前半までの間は掘立柱建物跡と併存していたと考えられる。そこで各竪穴住居跡と掘立柱建物跡の段階との対応関係をみると、I期に先行する段階に第61・83号住居跡及びH区第123号住居跡、I期の段階に第82号住居跡、II期の段階に第73・81・183号住居跡がそれぞれ対応するものと考えられる。I期の掘立柱建物跡と第82号住居跡との間に配置上の特徴を捉えることはできなかったが、II期との対応を想定した第73・183号住居跡の2軒は、第1・2号掘立柱建物跡を一定の距離を置いて挟み込むように位置しており、掘立柱建物跡群間の関係と同様に、掘立柱建物跡を意識した配置であることは明らかである。したがって、少なくとも掘立柱建物跡群の最も充実するII期の段階は、この群が掘立柱建物跡だけで構成されているのではなく、その配置の内部に特異な形態の竪穴住居跡を構成要素に取り込んで一単位の施設を構成していたものと考えられる。

掘立柱建物跡群の性格

I区検出の掘立柱建物跡群は、これまでみてきたように7世紀後半に構築が開始され8世紀前半の時期を規模・構成のピークとして、8世紀後半以降の時期まで存続していた。また、そのピークの時期には、底を持つ居住建物を含む掘立柱建物群が、東側に開口するように「く」字状に配置され、その東側に倉庫建物が整然と並び、さらにその建物構成の内部に竪穴住居跡をも含んでいた姿が浮かんできた。これは、一単位の施設と考えても差し支えないものと考えられるが、その施設の性格について直接判断できるような資料は得られていない。そこで、いくつかの可能性について消去法的に検討してみることにしたい。

第1に想定されるのは、遺構占地場所からくる国分寺関連の施設としての可能性である。掘立柱建物跡群は、国分僧寺と尼寺の中間地域のちょうど北側に位置しており、意図された位置関係ともみられるのであるが、掘立柱建物跡群は、少なくとも国分寺造営の詔勅の出される以前から計画的に構築が開始されており、造営の時期には既に規模が縮小している可能性が想定されることから否定的である。

第2に、類似する遺構組み合わせの検出された下東西遺跡で指摘された、郡衙としての可能性である。^{註(6)} 神谷佳明氏は、下東西遺跡検出の遺構の検討を通して、山中敏史氏の提示されている郡衙としての条件の中で5項目程度が該当し、6項目程の不足要素があるとしている。^{註(7)} この下東西遺跡で該当するとした5項目を当遺跡についてみると、外部区画が明瞭でない点で不足しているが、逆に不足要素として上げた6項目の中では、建物配置が比較的明瞭である点と倉庫建物を備えている点、及び広範囲に及ぶ平坦地に立地している点などにおいて条件を満たしているとみることができる。しかし、下東西遺跡で郡衙としての結論を出し得なかったと同様に、これらの条件の過不足だけで、当遺跡の性格を決定するには至らないと思う。まして下東西遺跡が郡衙であると仮定すると、ほぼ同時期に至近の位置に郡衙が並立されることは考えにくいので、当遺跡が郡衙の遺構である可能性は益々低くなるのである。

以上のように官的要素が低いとすると、考え得るのは神谷氏が下東西遺跡の次案とした有力豪族の館としての可能性である。新井 仁氏は、奈良・平安時代の集落内にみられる掘立柱建物跡の成立について、居住形態としての掘立柱建物跡の存在は、同一集落内における格差の現れであり、その居住者として上位階層の存在を想定している。^{註(9)} 当遺跡の掘立柱建物跡群は、集落変遷の上に捉えられた最も伝統的に住居構築の行われた場所に占地しており、また、掘立柱建物の構築される以前の段階から有力者の存在を想定させるような遺物の出土が継続して認められる場所であるので、氏の見解を肯定するような要素を十分に持ち合わせているものと考えられる。したがって、本稿で検討してきた掘立柱建物跡群は、在地有力者の「館」的性格を有

第5章 ま と め

していたとみるのが妥当性があると考えているのであるが、何故7世紀後半段階になって階層差が掘立柱建物として具現化するのかが等不明な点も多い。ただ、新保遺跡・下東西遺跡・当遺跡等の例からもわかるように、7世紀代後半から8世紀初頭段階の時期に、県内では掘立柱建物跡を主体とする施設が揃って構築されているのは示唆的ではないだろうか。

註

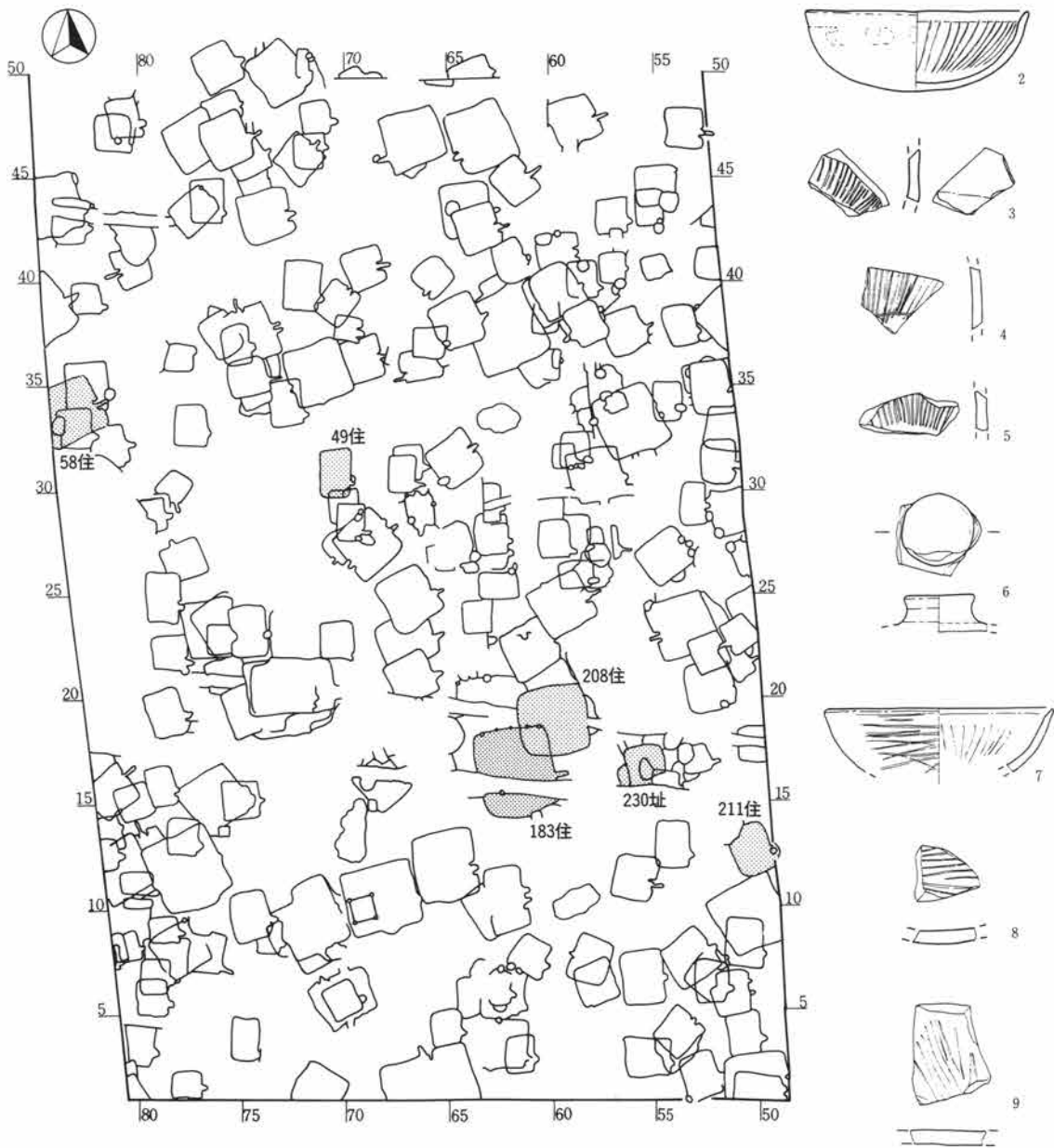
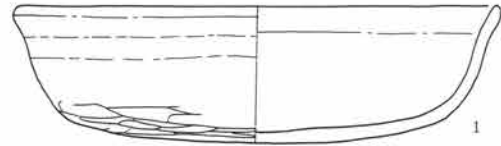
- (1) H区ではI区との境に当たる山王線に一部かかって、I区検出の掘立柱建物跡群と関連する可能性のある棟方向を東西に持つ3間×2間の掘立柱建物跡が一棟(H区第4号掘立柱建物跡)検出されている。また、さらに南側には棟方向(主軸方位)を東西に持つ掘立柱建物跡が3棟検出されているが、本稿で扱っている掘立柱建物跡群の一部を成すものとしては距離が離れている。また、J区からは北寄りの位置から南北に棟方向を持つ3間×2間の総柱建物が1棟(J区第1号掘立柱建物跡)検出されている。『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』1988 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』1990 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (2) 竪穴住居跡の時期決定については、出土遺物の年代観によった。また、その年代観については、桜岡の「第1項 土器の分類と時期設定」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』1987 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団を元にした。
- (3) I区にはIII期以降の掘立柱建物の構築は認められないが、註(1)でも述べたようにH区の中央部に主軸方位から見てIII期と同段階もしくは新しい段階に位置付けられそうな掘立柱建物跡が検出されている。
- (4) 下東西遺跡検出の張り出しを持つ竪穴住居跡は、2軒が廊下状の遺構で東西に連結された特異なものである。SD46・59と呼ばれる溝によって区画された内部にあり、庇を有する掘立柱建物跡棚列と小規模な区画溝を挟んで正面に位置している。神谷佳明「歴史時代(古代)の遺構について」『下東西遺跡』1987 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (5) 聖武天皇によって国分寺造営の詔勅が出されるのは739年を初例としているので、この詔勅に即応したと仮定すれば、当遺跡の掘立柱建物跡群に想定したII期の存続期間内とみることも可能ではあるが、通常国分寺の造営はこれに遅れる時期が想定されているので、必然的に当遺跡の掘立柱建物跡群のIII期に対応することになる。
- (6) 註(4)の文献
- (7) 註(4)の文献の中で、神谷氏は山中氏の指摘した郡衙の条件に該当する要素としてa. 土塁・柵列をもった区画溝の存在。b. 孫廂をもった大型掘立柱建物の存在と、建物方向の規則性。c. 供膳形態の土器の多さと、暗文土器の多さ。d. 円面硯の出土と朱墨の痕跡。e. 遺跡の歴史的環境を上げ、不足要素としてa. 建物配列が不鮮明。b. 倉庫施設が未検出。c. 瓦葺き建物が存在しない。d. 遺跡の立地条件。e. 墨書土器の出土が無い。f. 竪穴住居の存在を上げている。
- (8) I区では明瞭に捉えることはできなかったが、時期や位置関係等から第18・19・28号溝状遺構が区画の痕跡である可能性がある。
- (9) 新井 仁「群馬県における奈良・平安時代の集落について」『群馬の考古学』1988
- (10) I区からは、II期の段階にほぼ想定できる竪穴住居跡や区画溝と考えられる遺構から、県内でもあまり出土していない畿内産土師器が9点出土し、また、I区の北側のJ区からは県内でも最古段階の畿内産土師器が出土している。

第2節 出土遺物について

第1項 畿内産暗文土師器について

1 I区の出土状況について

畿内産暗文土師器については、これまで荒砥天ノ宮遺跡・下東西遺跡・国分境遺跡で出土例が報告されており、当遺跡でもC区第81号住居跡・H区第105号住居跡・J区第14号住居跡の出土例については、既に『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)・(4)』において報告した。当報告区であ



第649図 I区出土畿内産暗文土器

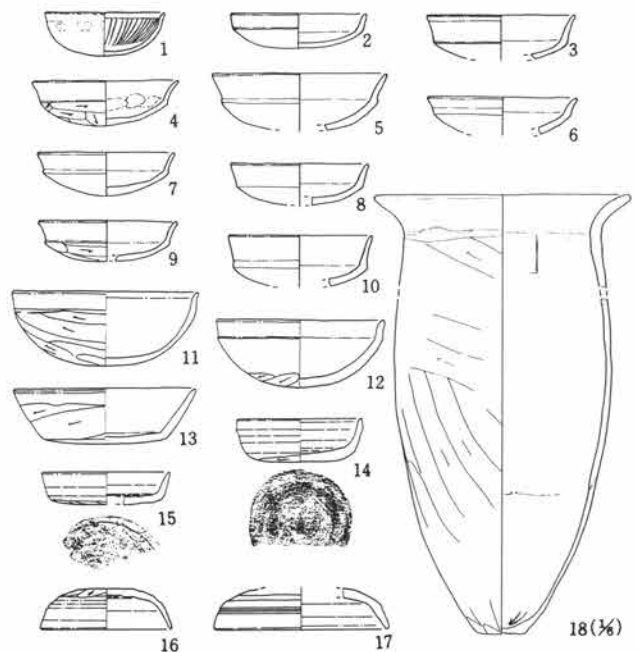
第5章 ま と め

るI区においては住居跡に伴って6点、遺構の特定ができないもの3点が出土しているのでまとめておきたい。第649図に示したのが出土遺構とその遺物である。1は第211号住居跡から出土した平城II期の杯A I、2は第58号住居跡から出土した飛鳥III期の杯C IIIであるが、この2点に関しては共伴遺物の時期の問題も含めて後述したい。3は、第208号住居跡出土の平城I期の杯A Iである。4は、第183号住居跡から出土したものであり、器種・時期を特定することはできなかったが、当住居跡の共伴遺物の構成は第208号住居跡に類似していることから、平城I期段階の可能性が高いと考えている。5は、第230号址出土の平城I期の杯Aである。当遺構は在地産暗文土師器を顕著に出土している第18号溝状遺構と重複しており、本来は溝状遺構に伴う可能性が高い。6は第49号住居跡出土の平城I期の蓋摘であるが、第49号住居跡の出土遺物の主体は、時期的に平城I期より下るのは明らかである。7と8は遺構確認段階にグリッドで取り上げたものであり、全体図の中に位置付けてみたが、所属遺構を特定することはできなかった。7は飛鳥III期の杯C III、8は杯Cと考えられるが、所属時期は不明である。9は表土の掘削時に出土した平城I期の高杯であり、7・8同様に遺構を特定することはできなかった。

以上のように、I区出土の畿内産暗文土師器は、杯C(III)・杯A(I)・蓋・高杯の4器種で、飛鳥段階では杯Cが、平城段階では杯Aがそれぞれ主体を占めている。時期は、ほぼ飛鳥III期と平城I期の2時期が主体で、これにJ区第14号住居跡出土資料を加えると、当遺跡においては飛鳥I~II期、飛鳥III期、平城I期、平城II期の4期にわたって継続的とも思われるような搬入がされていたことがわかる。これらの遺物を出土した遺構は大半が竪穴住居跡であるが、第58・211号住居跡の例を除いて小片の出土であり、これらの住居跡において使用されていたものであるか疑問もある。しかし、特に平城段階の資料を出土した第183・208号住居跡は、大型でしかも一遺構からあまり多く出土することの少ない在地産暗文土師器を比較的多く出土しているなど、他の同時期の住居跡と比較して優位とも感じられる要素があることから、逆にこれらの畿内産暗文土師器を持つにふさわしい住居とみることができる。

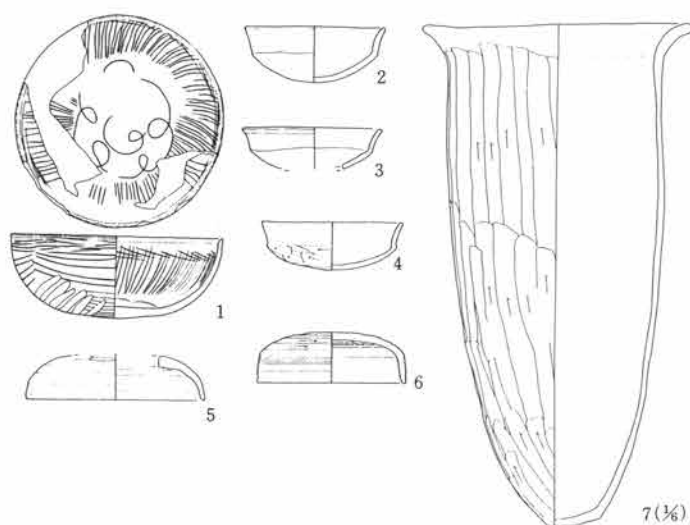
2 I区第58号住居跡出土遺物の年代的 position 付けについて

上述したように、第58号住居跡からは比較的良好な出土状態を示す畿内産暗文土師器が1点出土している。ここではこの畿内産暗文土師器の年代観をもとに、当住居跡出土遺物の所属年代の検討を試みたい。第650図1に示したのがここで問題とする畿内産暗文土師器で、飛鳥III期に属する杯C IIIである。共伴している在地産土師器の主体は、いわゆる「模倣杯」と呼ばれる一群であり、これに14・15のような平底化した須恵器杯、及び16・17のような須恵器蓋杯の蓋が伴っている。須恵器杯と蓋は組み合わせとなるタイプではないが、どちらもTK217と考えられるものである。これらの遺物と以前に年代的検討を加えた第651図に示したJ区第14号住居跡出土遺物とを比較すると、第650図1の畿内産土



第650図 I区第58号住居跡出土遺物

師器は飛鳥Ⅰ～Ⅱ期の杯であり、明らかな型式差が認められる。また、第14号住居跡の須恵器はほぼTK209～217に比定されるものであり、ここにも型式差が認められそうである。さらに、土師器杯はどちらもいわゆる「模倣杯」で構成されているが、第58号住居跡の2や6は明らかに退化形態を示しており、土師器杯の中にも新たな要素が加わっていることがわかる。



第651図 J区第14号住居跡出土遺物

以上のように第58号住居跡の出土遺物は、J区第14号住居跡出土遺物よりも新しい時期の遺物であることは確実であり、遺

物間の型式差は1型式程度であることから、第58号住居跡出土遺物は、第14号住居跡出土遺物の次段階に位置付けられる。第14号住居跡出土遺物は、諸説いずれに従ったとしてもほぼ7世紀第2四半期に位置付けられるので、必然的に第58号住居跡出土遺物には7世紀第3四半期という年代観が求められるが、この結果は、当住居跡から出土した畿内産暗文土師器杯が飛鳥Ⅲ期に比定され、この飛鳥Ⅲ期はほぼ7世紀第3四半期に位置付けられていることと良く符合している。

3 I区第211号住居跡出土遺物の年代的位置付けについて

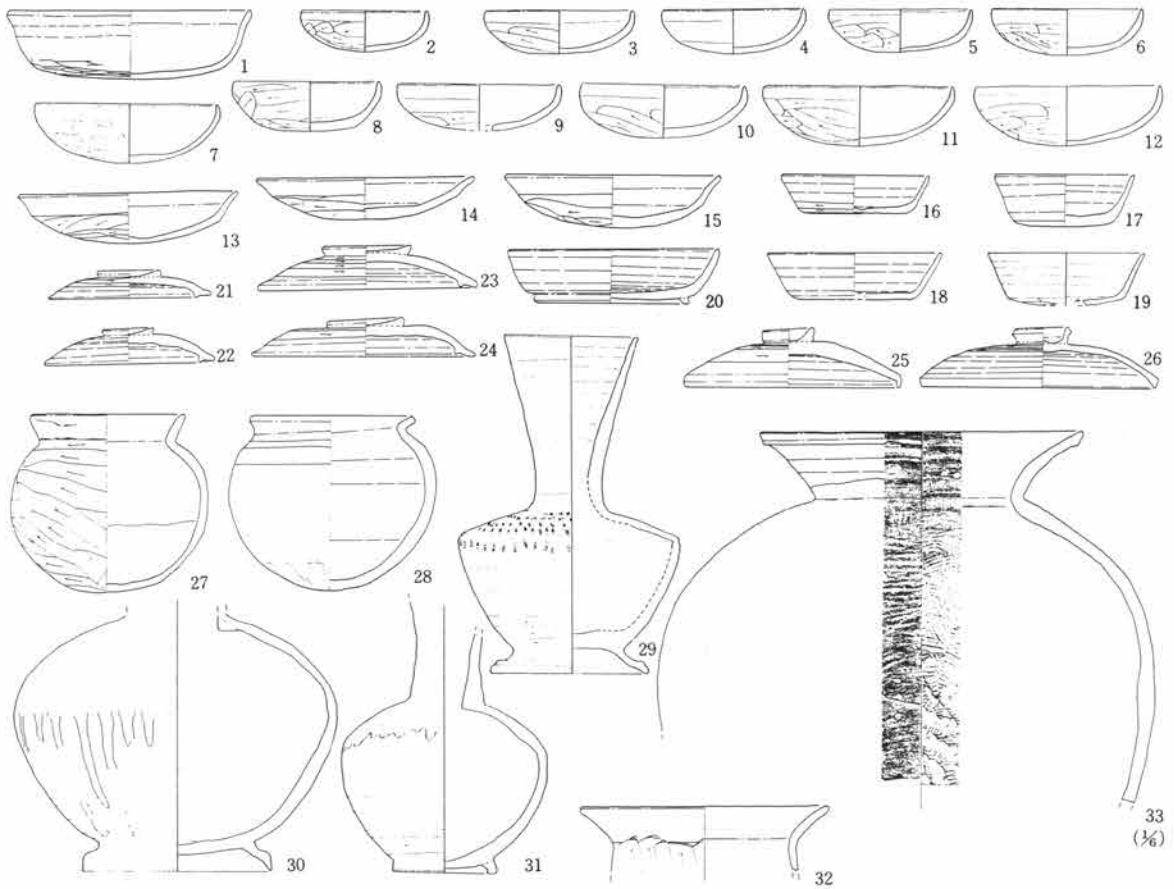
第211号住居跡は、完形土器を多量に出土しており、その出土遺物中に第652図1に示した平城Ⅱ期の畿内産土師器杯AⅠ^{註(1)}が含まれている。これらの遺物は、第449図に示した様に一定範囲から良好な状況で出土しており、また、他遺構の遺物が混じるような重複も認められないことなどから、極めて一括性の高いものである。したがって畿内産土師器が一段階以上遅れて搬入されていないという前提に立てば、第211号住居跡共伴遺物^{註(2)}は、畿内産土師器の有している年代観を共有することが可能となる。そこで以前に検討を加え、平城Ⅰ期の畿内産暗文土師器杯AⅠの共伴をもって7世紀末を含む8世紀第1四半期に位置付けた、荒砥天ノ宮遺跡^{註(3)}(文献1)B区6号住居跡出土遺物との比較を通してその妥当性を検証してみたい。第652・653図に示したように、両遺構の一括遺物の中では特に土師器杯と須恵器蓋に比較的顕著な相違が認められる。それは、土師器杯は荒砥天ノ宮遺跡B区6号住居跡のものが、口縁部が「く」字状に内傾するタイプが主体を占め、わずかに短く直立するタイプが認められるのに対して、第211号住居跡の土師器杯は両者の比率が逆転している。須恵器蓋は、B区6号住居跡のものが小振りで、ボタン状摘と内面かえりを有しているのに対して、第211号住居跡では摘は環状を呈し、比較的大振り^{註(4)}で内面かえりのないタイプが加わっているという点である。この2器種間に捉えられる相違は、B区6号住居跡出土遺物→第211号住居跡出土遺物という段階的前後関係があることを示しているのは明らかである。また、須恵器蓋の形態及び法量の変化が比較的顕著なのに対して、土師器杯や土師器甕における変化は四半世紀を越えるような段階の欠落は考えにくいことから、連続する段階として捉えて差し支えないものと思われる。つまり、畿内産土師器間に捉えられた段階差は、両遺構の共伴遺物間にも同様に捉えられるのである。この他に平城Ⅰ期の畿内産土師器を出土している当遺跡I区第183・208号住居跡^{註(4)}や下東西遺跡SD46・59等の共伴遺物^{註(4)}をみても、上記2遺構出土遺物の中間の様相を示しており、上記結果と大きな齟齬はみられない。したがって第211号住居跡出土遺物に平城Ⅱ期の年代観を当て

第5章 ま と め

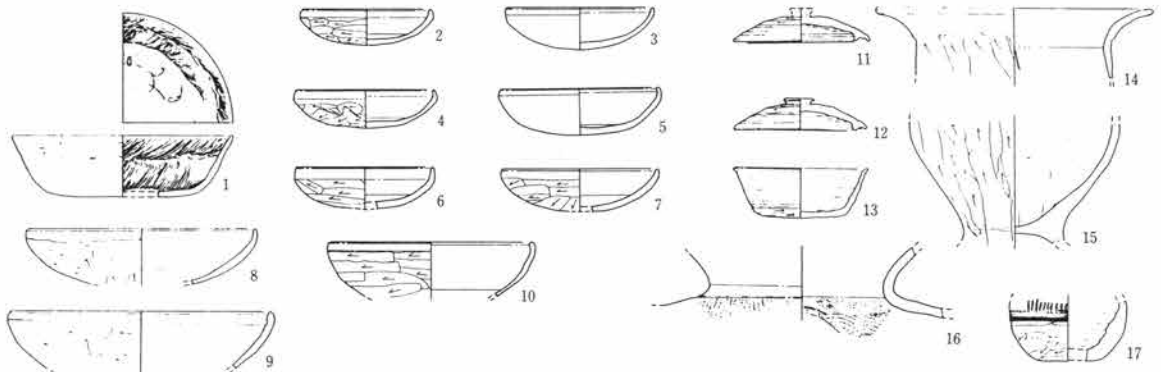
ることに妥当性があるものと考えられる。平城II期は、神亀5（728）年や天平元（729）年の紀年銘木簡との共伴が知られており（文献2）、これらを定点としてみると第211号住居跡出土遺物は、ほぼ8世紀第2四半期に位置付けられるのではないだろうか。

註

- (1) 畿内産土師器の位置付けについては、奈良県立橿原考古学研究所の林部 均氏に実見していただいて判断をしていただいた。
- (2) 「上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）」において、J区第14号住居跡から出土した飛鳥I～II期の畿内産暗文土師器杯C Iをもとに共伴遺物の年代的検討をしたが、他地域で生産された須恵器がほとんど時間差なく搬入されているとされるのと同様に、食器として機能したはずの畿内産土師器も時間差なく搬入された可能性が高い。
- (3) 註(2)文献において位置付けた。
- (4) 下東西遺跡のS D46・59は、掘立柱建物跡及び連結された特異な竪穴住居跡等を区画している溝で、覆土中から多量の土器を出土した。その中に平城I期と考えられる杯・鉢・把手付椀・壺等実測可能なもので9点の畿内産土師器が含まれていた。



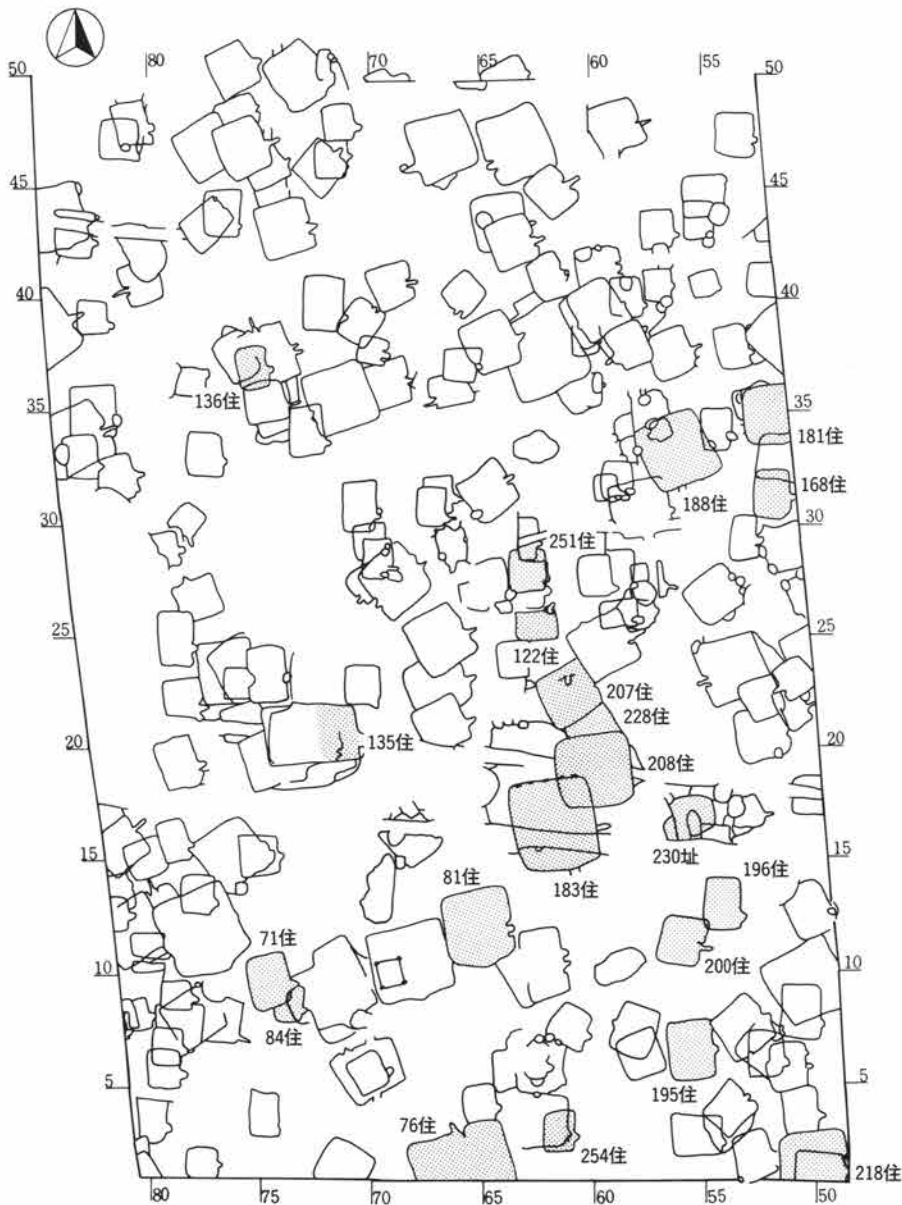
第652図 I区第211号住居跡出土遺物



第653図 荒砥天宮遺跡B区第6号住居跡出土遺物

第2項 在地産暗文土師器の出土状況について

当調査区において在地産暗文土師器を出土した住居跡は、第654図に示した第71・76・81・84・122・135・136・168・181・183・188・195・196・200・207・208・218・228・251・254号住居跡及び第230号址であり、南東半に偏った分布状態を示している。他の遺構では第157・388・423・521・535号土坑及び第18・19・28号溝状遺構から出土している。住居跡出土の暗文土師器はほとんどが坏形態であり、2個体以上出土した例が半数以上にのぼっている。坏の形態には2タイプがあるが、第188号住居跡の例を除いて、すべて平底ぎみの底部と比較的直線的な体部を特徴とするタイプである。このタイプは、畿内産暗文土師器杯Aを模倣したと考えられるものであるが、畿内産暗文土師器杯Aの群馬県への搬入例をみると、前述の第1項でも述べたとおり平城I期段階の製品が最古であり、杯A模倣の在地産暗文土師器を出土した住居跡がほとんど8世紀代に属していることと良く対応している。これに対して、第188号住居跡から出土した暗文土師器坏は、丸底で

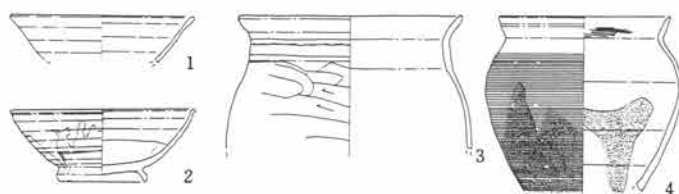


第654図 I区在地産暗文土器出土遺構

内湾ぎみの体部を特徴としており、畿内産暗文土師器杯Cを模倣したタイプと考えられる。この杯C模倣のタイプは、北側調査区全体をみても3例しかみられないが、出土遺構の時期をみると7世紀後半～8世紀前半であり、杯A模倣タイプより先行する傾向が窺える。これは、群馬県における畿内産暗文土師器杯Cの搬入例をみると、最古の例が当遺跡J区第14号住居跡で出土した飛鳥I～II期の杯C Iであり、新しい段階のものでも飛鳥III期頃の製品であることと対応している。つまり2タイプの坏の出土傾向は、搬入された畿内産暗文土師器の影響を直接受けていることがわかる。

第3項 I区第126号住居跡出土遺物について

ここで問題としたいのは、第655図4の体部にカキ目を有するロクロ使用酸化焰焼成甕（いわゆる「ロクロ甕」）の系譜と年代的
位置付けについてである。4のロクロ甕は
覆土中から出土したものであるが、2/3ほ

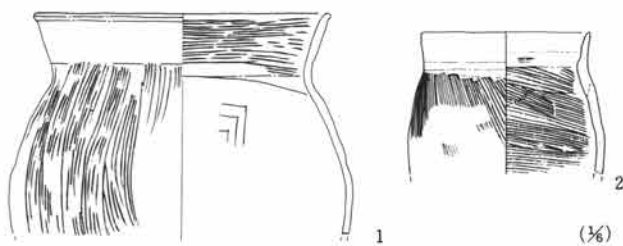


第655図 I区第126号住居跡出土遺物

どが残存しておりほぼ全体形を把握することができる。器形的特徴は、胴部上位の強い張りりと、頸部の屈曲、及び受け口状を呈する口縁部形態である。また、整形の特徴は、胴部全面にカキ目が施されていることである。これまで群馬県内で多く検出されてきたロクロ甕は、胴部全面にロクロ整形痕を残すタイプと、胴部上半にロクロ整形痕を残し、下半に斜位の篋削りを施すタイプの2種が主体であり、例外的に胴部に平行叩きの施された製品がみられた。これらのロクロ甕については以前に検討を加え、主体を占めるタイプは9世紀後半頃に中部地域からの系譜で成立し、胴部に叩きを施したタイプは新潟県地域との関係で例外的に生産された可能性を指摘した。ここで扱うロクロ甕は、このいずれのタイプにも属さないものであるが、整形上の特徴からみるかぎり、長野県の下神遺跡S B 111や北方遺跡S B 4などに共通する器形・整形をもつものがみられることから、こうした地域との関係が想定できる。ただ胎土分析は実施していないため、在地で生産されたものであるか、搬入されたものかの判断はできない。年代的には第126号住居跡出土遺物が一括性の高い遺物であるので、共伴する灰釉陶器に想定される年代が共有できるものと考えられる。2の灰釉陶器は、器形や施釉技法から光が丘1号窯式段階の製品であるのは確実であることから、9世紀後半頃が想定できる。これは下神遺跡や北方遺跡の上記遺物に想定している時期と齟齬がみられない。

第4項 刷毛を施した土師器甕について

第59号住居跡及び第86号住居跡から、内外面に刷毛整形を施した異質な土師器甕が出土しているので、資料紹介の意味で再度記述しておく。第656図に示したのがここで問題とする土師器甕であるが、1は大型で胴部の張りが強く、刷毛は胴部外面が縦位、内面は口縁部に横位に施されているだけであり、内外面共に粗く撫で消されているのが特徴である。2は小型で、胴部の張りはあまり強くなく、胴部外面が斜位、内面は横位、口縁部内面は横位に施した後に撫で消されたものと思われる。1の共伴遺物は、第137・138図に掲載したように土師器坏はいわゆる模倣坏だけで構成されており、球胴の土師器甕及び長脚の土師器高坏などが見られる。また、2の共伴遺物は第206図に示したようにいわゆる模倣坏である。これらの共伴遺物から、この土師器甕が6世紀代の土器であることが想定できる。当遺跡の所在する地域においては、6世紀代の土師器甕に刷毛整形を施すという例はほとんどみることができず、器面整形には撫でや磨きが通例である。群馬県内で刷毛整形を施す土師器甕は、6世紀代に限ってみれば師遺跡や荒砥洗橋遺跡等に類例がある。当遺跡で出土した2点の甕の胎土は、粘りの強そうなものであり、師遺跡の存在する利根・沼田地域の土師器の様相に近い感じを受ける。今後の分析を待たなければ結論は出せないが、そうした地域からの搬入品である可能性が大である。

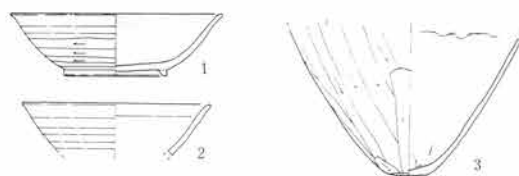


第656図 刷毛を施した土師器甕

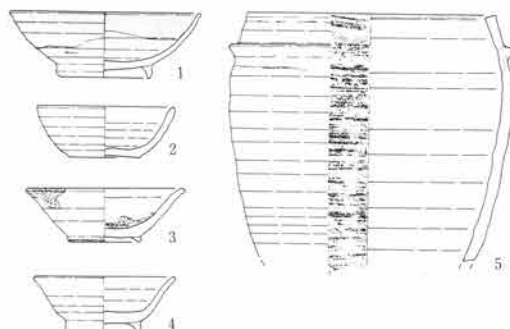
第5項 I区第217号住居跡出土の灰釉陶器について

当遺跡の灰釉陶器の出土傾向は、光ヶ丘1号窯式段階以降の東濃の製品が主体を占める傾向が強く、猿投の製品の搬入はほとんど認められない。しかし、I区第217号住居跡から第657図1に示したような黒笹14号窯式段階の壺が出土しているので、その製品について紹介すると共に、共伴遺物について第657・658図をもとに検討をしておきたい。

1の器形・整形等の特徴は、「体部下半に張りをも有し、口縁部は外反する。高台は典型的な角高台で、底部回転糸切り後の付高台である。体部下半は回転篋削りが施されている。施釉は内面だけで厚く刷毛掛けされている。」というものであり、この製品が黒笹14号窯式段階の猿投の製品であることは確実である。この壺の出土位置は、第217号住居跡の中央床面であり、重複する第218号住居跡に伴うものでない



第657図 I区第217号住居跡出土遺物

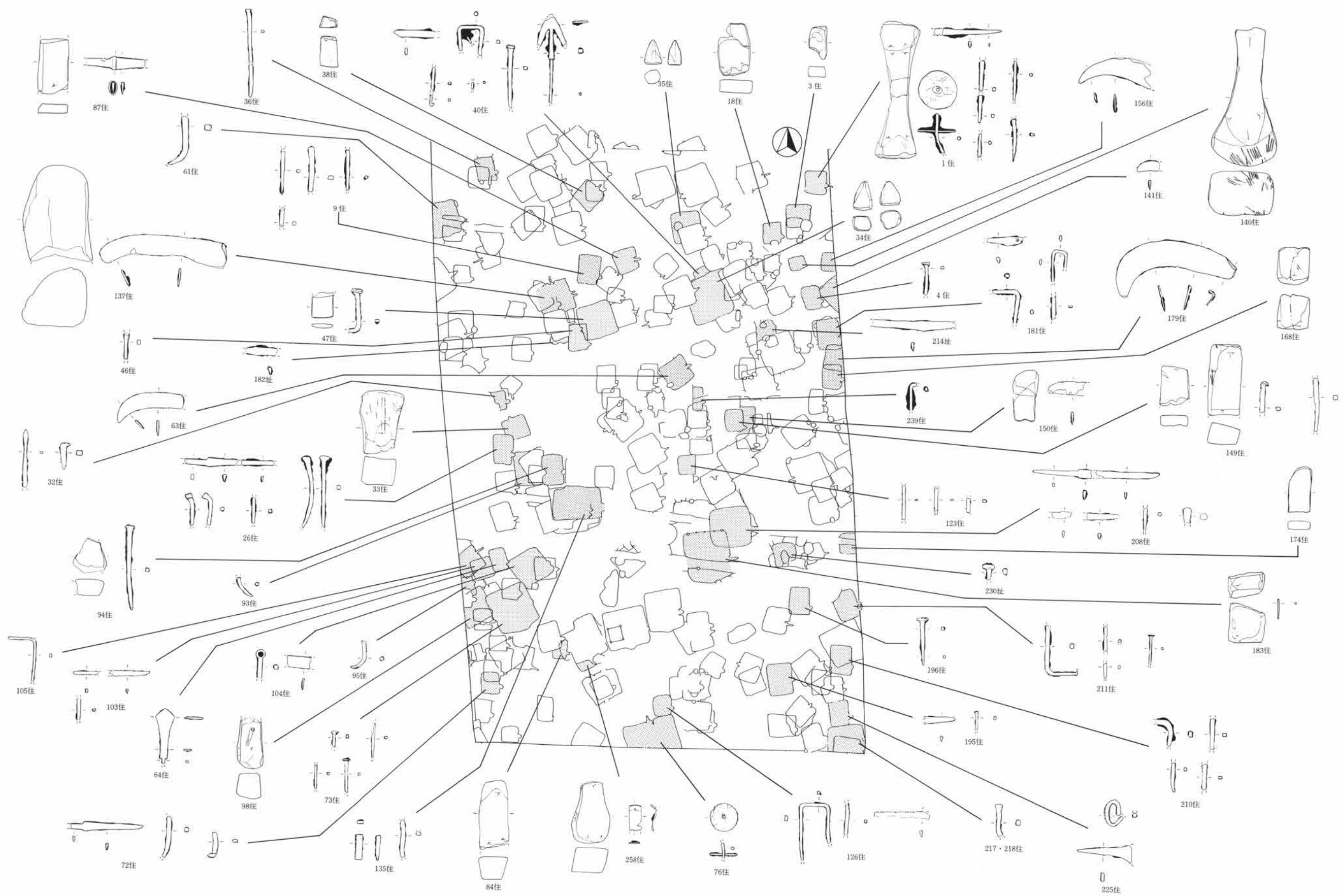


第658図 I区第13号住居跡出土遺物

は明らかである。また、第657図3は土師器甕の底部であるが、この遺物はカマド部分から出土しており、両者が一括性の高い遺物であることを示している。しかし、この土師器甕は、口縁部形態が不明で、在地の編年上に位置付けることができない。そのため重複する第218号住居跡との所属判別をしなかった遺物中（第465・466図）から、本来第217号住居跡に所属すべき遺物を敢えて抽出すると、両住居跡の重複関係から、新しい様相の遺物が必然的に第217号住居跡の遺物とみることができ。特に土師器甕についてみると、第466図16～19の中では18の甕が完成された「コ」字状口縁を有しており、新しい様相として捉えることができる。つまり黒笹14号窯式段階の製品は、在地の土師器甕では典型的な「コ」字状口縁のタイプと共伴する可能性が強いのである。前掲の第655図は第126号住居跡出土遺物であるが、その中に灰釉陶器壺が共伴している。この壺は、器形・施釉技法等から光ヶ丘1号窯式段階の製品であることは確実である。ここで共伴する土師器甕は、第466図18同様「コ」字状口縁であるが、やや口縁部から頸部にかけて厚手になっており、第217号住居跡に所属するとした土師器甕よりは後出的要素の強いものである。さらに、第658図に示したのは第139号住居跡出土遺物であるが、ここでは土師器甕との共伴はみられず、大原2号窯式段階の製品と羽釜が共伴している。以上のことを要約すると、完成期の「コ」字状口縁の土師器甕と黒笹14号窯式、衰退期の「コ」字状口縁土師器甕と光ヶ丘1号窯式、羽釜と大原2号窯式という模式的関係が成立する可能性がある。仮にこのような関係が成立するとすれば、第217号住居跡出土遺物は、「上野国分僧寺・尼寺中間地域（2）」において行った段階設定のVI期（後半）に位置付けることができることになる。VI期は、松井田町愛宕山4号住居跡出土の須恵器坏類似の遺物が共伴することなどから9世紀前半を想定しておいた。したがって四半世紀の年代観に置き換えると必然的に9世紀第2四半期頃にあたることになる。これは、前川 要氏が黒笹14号窯式段階を9世紀第1四半期から第2四半期の時期を想定されたことと矛盾していない。

第6項 鉄器の出土状況について

当調査区における鉄器及び鉄器の存在を予測させる砥石を出土した住居跡は、第659図に示したように第1・3・4・9・18・26・32・33・34・35・36・38・40・46・47・61・63・64・72・73・76・84・87・93・94・95・98・103・104・105・123・126・135・137・140・141・149・150・156・168・174・179・181・183・195・196・208・210・211・217・218・225・258号住居跡及び第182・214・230号址であるが、当遺跡の土壌は火山性の土が主体で構成されていることから、検出したものがすべてでないことは想像に難くない。また、鉄製品を出土した遺構の時期は、ほとんどが8世紀以降と考えられるものであり、6・7世紀代と考えられる住居跡からの出土はほとんど認められない。このような傾向が鉄製品の普及状態を示すのか、経過年数の多少による残存状況を示すのかについて、現状では判断することはできない。出土した鉄器の種類は、刀子・紡錘車・釘・鎌・鍬・鋳?の他、棒状を呈する不明の製品が多数みられる。これらの中で最も多数出土しているのは釘である。これらの釘は、すべて頭を扁平に潰した角釘で、必ずと言って良いほど直角に近く曲がっているか破損している。このような残存状態は、出土した釘が住居の中で使用されていたことを示すものである。釘は完形であればかなり長いものが大半であることから、上屋の部材をとめるために使用された可能性が最も高い。刀子は、第1・26・40・72・87・103・104・126・181・195・208号住居跡及び第182号址から出土しており、鎌は第63・137・141・150・156・179号住居跡から出土している。全体の検出住居跡からみると少ない軒数であるが、この2種類の鉄器は生活上に特に必要なものであり、検出住居の時期にもよると思われるが、本来は大半の住居に普遍的に存在したはずである。それは、刀子や鎌の出土はみられないにもかかわらず、砥石が出土している住居跡（第3・18・33・34・35・38・84・94・98・140・149・168・174・183・258号住居跡）があることから窺うことができる。紡錘車は、紡輪に軸がついた状態で、第1・76号住居跡の2軒から出土している他には検出されていないが、この紡錘車の軸断面は正方形であることから、不明の棒状鉄とした中に軸の破片が含まれている可能性がある。鍬は、第32・40・64号住居跡の3軒から出土している。3例とも異形のものであり、茎の部分が欠損している。第32号住居跡の鍬は、カマド燃焼部先端の底面から出土し、第40・64号住居跡では覆土中から出土している。当遺跡でこれまでに報告した中では、H区第67号住居跡の覆土中から2点出土した以外、B区第3・83・85号住居跡、C区第1・21・43・50・81号住居跡、D区第26号住居跡、H区第146号住居跡から1点ずつ出土している。出土状態の良好な例は皆無であるが、1軒の住居跡から1点だけが出土する例が圧倒的に多く、また、I区第32号住居跡のようにカマド内から出土する例のあることは、鍬が鍬本来の用途で使用されていたとは考えられない。つまり、祭祀的色彩が濃厚なのではないだろうか。鋳は、第135号住居跡から1点だけ出土している。これまでの報告例では、C区第153号住居跡及びG区第62号住居跡からそれぞれ1点ずつが出土している。特にG区62号住居跡は付属施設や出土遺物から鍛冶址であるのは明らかであり、そこから出土した資料は鉄斧として報告したものであるが、見直すと鋳である可能性が強く、その必然性もある。しかし、第135号住居跡及びC区第153号住居跡には、鍛冶址としての条件はない。これらの他に、釘に良く似た形状で、頭が環状を呈する製品が第104号住居跡から1点出土している。この類例は、B区第16号住居跡・F区第23号住居跡・G区第62号住居跡・H区第20号住居跡から出土している。環状部分の存在から釘として使用されたとは考えられないが、先端は尖っていることから、打ち込まれて使用されたのは確実である。また、棒状を呈する製品についても、曲がっている例が多い傾向が捉えられるものの、どの状態が完形の状態であるのかの判断もつかず、まして何に使用されたかは全く不明である。



第659图 I区鉄器出土状况

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第127集
上野国分僧寺・《本文編》
尼寺中間地域(7) 一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第38集一

平成4年2月24日印刷

平成4年2月28日発行

編集／（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社
